群書類從

第拾五輯

東京
續群書類從完成會

群書類従第十五輯目次

和歌部 家集

群書類從第十五輯目次終

ふはの關あしみの駒に敎へゆく聲はかりこそ霞まさりけれ

伊勢に侍けるころむつきの四五日の程よもの山邊かすみわたりたるをみてよめる

都へといそきて春は過にしをいかなる霞立とまるらむ

田上なる所に侍ける頃みやこの方より何事かいかに霞わたりて心ほそくあはれなる事どもあらんと人の申たりけるかへりことにいひつかはしける

花さかぬみ山隱れは霞めとも數ならぬ身のはるかとそみる

伊勢の國に侍ける比むつきのはつねの日ねいみといひて家をいてゝ野にいきてひねもすにゐくらしてかやをかりてこかひするおりにえひらといふなる物にすなるをそのついてにことのもとなれは松をなをさりにひきてかへるとてよめる

春たては初子のいみにたひゐして袖の下なる小松をそひく

別當實行の六條の家にて哥合せられけるに子日のころをよめる

春日山麓のをのに子日してかことをかみにまかせてそみる

むつきのはつねの日身のあやしさをおもひつゝけてよめる

なに事をまつ身共なきあやしさに初子はくれと引人もなし

百首歌の中に子日の心をよめる

祝ひつゝけふしも松を引つれははつ子そ春のはしめ也ける

雪中子日といへる心をよめる

子日してよはひをのへに雪ふれは二葉の松も花さきに鳥

百首の哥の中に若菜をよめる

千載 春日野の雪を若菜につみそへてけふさへ袖のしほれぬる哉

むつきの七日中宮亮仲實かもとへなゝくさのなつかはすとてよめる

岡見河む月に映るゑこの畦をつみしなへてもそこの御爲そ

返し　仲實朝臣

心さし深きみたにゝつみためていしみゆすりて洗ふね芹そ

屛風の繪に雪ふりたる野へにわかなつみたるかたたかける所をよめる

春日野の雪のむら消かきわけて誰ためつめるわかなゝる覽

人のもとよりわかなをゝくりて侍けるかへりことによめる

類ひなき心ひろさをかたみにてなけの情をつみてける哉

七日卯杖にあたりたりける日常陸守經(常イ)衆かもとよりわかなにそへてをくりける哥

老らくの腰ふたへなる身なれとも卯杖をつきて若菜をそ摘

返し

鳩のゐる杖に縋りて摘みけれはそのしるしさへ賴もしき哉

人のもとへわかなにそへてつかはしける

君かため夜こしにつめる七草のなつなの花をみて忍ひませ

人のもとよりわかなをゝくりけるをみてよめる

いか許り嬉しからまし身につめる年を若菜と思はましかは

伊勢に侍けるとしむつきの一日卯日にあたりけれはみうちに卯杖なとたてまつるをみてよめる

けふそしるこえくる山の嶮しさに年もう杖をつくにや有覽

はつうの日よめる

あさましやはつ卯の杖のつく〳〵と思へは年の積りぬる哉

おなし心をよみて人のかりつかはしける

とへかしなけふの卯杖に縋られてよによろほへる老の姿を

伊勢に侍けるころいつきの宮にてあをむまひくを見てよめる

ひく駒の松の緑の色なれは千とせをすくす庭かとそみる

むつきの十五日にあかつきかゆの見ゆるを見て人々哥よまむなといふを聞てなとかよまさらん兼盛か集にもある心地こそすれとてよめる

初春のもち月にもるかゆなれはなへてならすはあかき成覧

山家春雪といへる事をよめる

山里はつもれる雪のいつしかと消るそ春のしるし成ける

雪はふれともつもらさりけるを見てよめる

いかにせん花待ほとの淡雪はまなくふれともつもらさり覧

百首哥中に殘雪をよめる

立かへる春のしるしはかすみしくをはつせ山の雪のむら消

餘寒の心をよめる

（次郎）衣手のうすきや冬の關ならん我身はいとゝしみこほりつゝ

いつしかの杜の鶯といへる事をよめる

鶯は春待つけていつしかの杜のたまゝにこゑならす也

鶯告春

（新勅）春そとは霞にしるし鶯は花のあたり（りかイ）をそことつけなん

鶯のこゝろをよめる

いとゝしく聲なつかしき鶯ははねもや梅の香にかほる（にほふイ）らん

山家鶯といへる心をよめる

（新後）鶯のきなかさりせは山さとにたれとか春の日をくらさまし

百首哥中にうくひすをよめる

かすならぬ身を鶯とおもへともなくをは人の忍はさりけり

山家鶯といふ事をよめる

雪消ぬ谷かくれなる鶯のなにをしるへに春をしるらん

おなし心を殿下にてよめる

山里はつれ／＼になくうくひすの聲より外に友なかりけり

皇后宮に人々まいりて歌つかまつりけるに雨中鶯といへる事をよめる

（金葉）春雨はふりしむれとも鶯のこゑはしほれぬ物にそ有ける

東北院の花さかりなりと聞て人々あまたくして見にまかりたりけるに梅花もさかりにておもしろかりけるに鶯のをとつれてすきかたかりければたちとまりて侍けるに人々はすきにければよめる

かくはかりすけなき梅を鶯のいかにしてかはかさにぬふ覽

梅花夜薫

（千載）梅の香はをのか垣根をあくかれてまやのあたり（本集）に隙求む覽

梅花遠薫

（新古）心あらはとはまし物をむめの花たか里よりか匂ひきつると（らん集）

大殿より哥繪とおほしく書たる繪をこれ歌によみなしてたてまつれと仰ありけれは屋のつまに女おとこにあひたるまへに梅花風にしたかひて男のなをしのうへにちりかゝりたるにおさなきちこむかひゐて散かかりたる花をひろひとるかたある所をよめる

梅花ちる木のもとに風ふけはかさねぬさきに袖そかほれる

百首哥中に梅花の心をよめる

梅の花色をは闇にかこへともかはもれてくる物にそ有ける

皇后宮亮顯國朝臣家に梅花落水といへる事をよめる

散積る花こそいはによとむとも香は流れてやせにかほる覽

二條師俊忠のもとより雪の朝にをくりたりける

千載 咲そむる梅のたちえに降雪はかさなる數をとへと社おもへ

返し

千載 梅かえに心もゆきてかさなるをしらてや人のとへといふ覽

紅梅をよめる

次郎 くれなゐの梅かえに鳴鶯はこゑの色さへことにそ有ける

梅花風にかほるをよめる

かきこしに吹くる風のにほひにて花のありかを空に知かな

月照梅花

色にこそ影をもそへめ梅の花かをさへ月のもてはやすかな

柳隨風

いつかたへ吹とも風の見えぬ哉なひく柳のさためなけれは

法成寺の花さかりと聞て人々あまたくして見ありきけるに柳の木のもとにゐて侍けるに人々は花のもとにあそはれけれは柳の木にかきつけて侍ける

青柳のいとしもなしと思へはやわれより外にくる人もなき

百首哥中に柳をよめる

もかり舟はつゝしめなは心せよ河そひ柳かせになみよる

二月

いまたさかさる花といへる事をよめる

次郎 めくむよりけしきとなる花なれは衆ても枝のなつかしき哉

賀陽院殿の哥合に櫻をよめる

金葉 山櫻さきそめしより久かたの雲井にみゆる瀧のしら糸

修理大夫顯季卿六條の家にて櫻の哥十首人々によませ侍けるによめる

三輪の山すきまを分て尋れは花こそ春のしるしなりけれ

嵐やは霞もつらし散そむるはなをそ風にたちへたてまし

櫻はなちる木のもとに風ふけは水のほかにも浪はたちけり

しからみに風し障らは花のちるあたりの空にかけまし物を

風をいたみまつらの山にちる花やふりけん袖の名殘なる覽

しら雲のみねこす風にたゝよふとおもへは谷に花そ散ける

おしとたにいはれさり鳧櫻はなちるをみるまの心まとひに

芹摘しとをもいはしさかりなる花の夕はへみける身なれは

けさみれはきそちの櫻咲に鳧風のはふりにすきまあらすな

惜みかね我も散なはこん世にも花にむつるゝ虫とならはや

遠見櫻花

神山にまゆふのぬさをひきかけてさらすや花の盛成らむ

中宮の御堂の八重櫻をおりて修理大夫顯季のもとにつかはすとて

ぬひめなく八重かさなれる花みれは春も梢にきくは咲けり

返し　修理大夫

きくといへはやへやは咲ぬ櫻花おりたかへても思ひける哉

殿下にて雨中櫻といへる心をよめる

雨ふらは枝にさゝせよ櫻花おのかみかさの山にはあらすや

中宮亮仲實花見にまかりけると聞てつかはしける

うき身をは花みる人もいとひけりこゝろは春の風ならね共

齋院にて花下忘歸といへることを

吾妻路のおいその杜の花ならはかへらんとを忘れましやは

深山櫻といふ事をよめる

山櫻谷ふところにこかくれて風そよめにて花もとむなり

遠山櫻といふ事をよめる

雪きえぬふしのけふりと見えつるは霞にまかふ櫻なりけり

尋花日暮

暮れはてぬ歸さは遲れ山櫻たかためにきてまとふとかしる

北山の邊にまかりて花見ありきてやう／＼暮ぬる程に木のもとにてさけなとたへけるついてにかはらけ取てよめる

我こゝろ花の梢に旅ゐして身の行衞をも知しとすらん

堀川院御時鳥羽殿の花見の御幸に池上花といへる事をつかうまつれる

淚たてる櫻のみかは池にさへ花のみふねをうかへてそみる

中宮の御堂の八重櫻さかりなりと聞て亮仲實なとくしてまいりてみれはまことに心もこと葉もめてたさに人々哥よみけれはよめる

八重櫻見るにけかるゝ身の程を思ひもしらすたつねくる哉

色みれは櫻なれともかさなれるけしきはやへの山ふきの花

をされてやもひもそするとてあたりの木ともをきりはらはせ給を見てよめる

もきたつる梢をみれはいとゝしくあたりをはらふ八重櫻哉

やへ櫻ちらす風そと思ふよりつらきなからもなつかしき哉

身のほとを何おもふらんやへさける花見る程の心うつしに

花見にまかりけるを聞て修理大夫顯季のもとよりをくられて侍ける

春風にあらぬ身なれと櫻はなたつぬる人にいとはれにけり

返し

君か身は花にかへしとみる物をかせならすとも思ひける哉

堀河院の御時花山といふ所の花さかりにて面白かなりときこしめして女房たちを見せにつかはしけるにくしてまかるへきよしおほせ有けるにいたはることありてえまいらぬよし申させたりけれは猶ためらひてまつうちまてまいれとおほせことありと藏人のつけけれはためらひてうちまて參りたるを御らんして馬つかさの御馬をめしにつかはして速にいけとおほせ有けれは宣旨そむきかたさにまかりてよめる

むかしより心有ける山なれは風も櫻をもてはやすかな

又人にかはりてよめる

梢には名殘もあらし山さくらおちてはかへる人しなけれは

澗庭花といへる事をよめる

妹背山谷ふところにおひたちて木々のはくゝむ花を社みれ

二條師俊忠のかつらの山里にて櫻柳交枝といへる事をよめる

あすもこんしたり櫻の枝ほそみ柳のいとにむすほゝれけり

深山櫻といふ事をよめる

風たにもかよはさりける山なれはちらてや花の春を過らむ

花色留人

人はさそいはねとゝまる櫻はなおしむ梢に名殘あらせよ

堀川院の御時賀陽院殿におはしましける比中宮の御方の女房たちを花してかさりたるふねに乘させ給てあそはせ給けるにまいりて池のみきはにさふらふを御らんして俊頼さふらふめりふねよりさりぬへからんことといひかけよなとおほせ事有けれはみふねよりたまはりたりける哥

君か代のはるかにゝほふ櫻花梢にかけて千とせみえける

故源中納言おまへにさふらひてその岸なからつかま

つれとせめられけれはつかうまつれる

いへはけに花のみふねと見えつるは君か千年をつめる也鳧

修理大夫のかつらの山さとにまかりたりけるに庭の花おもしろくさきたるもとに人々居なみてあそひけるにあるしかはらけとりて

今年よりちとせの春を頼む哉花のゆかりにとはると思へは

返し

人しれす思ふ心はある物を花のゆかりといはれぬるかな

風おこりて心地れいならす覺えける頃花の散を見て

あけくれは風に煩ふ身なれともちるをは花の上とこそみれ

大貳長實の亭にて哥合せんとしけるによめる

花か共けふそおほめく雪ならは梢にのみはふらしと思へは

花をよめる

次郎 風ふけは梢もいその心地して花のしらゆふなみそこえける

尋花越山

はなみんと思ふ心にひかされてすかる／＼もかきのほる哉

攝政殿下にて人々に十首哥よませ給けるに櫻をよめる

遠近に花咲ぬれは鶯のゐるそなれの松に見そまかへける

大裏にて南殿のさくらをみてよめる

九重にたちかさなりて春かすみ風になみせそ花のにほひを

おもふ事ありける頃大貳長實卿のもとへつかはしける

山蔭にやせさらほへるいぬ櫻おひはなたれてひく人もなし

返し　大貳

春のゝちは君かなけきに花さきて思ひひらくるおりも有南

權僧正永縁か花林院にて哥合し侍けるに敎縁にかはりてよめる

誰か又あかすみるらんさほ山のかすみにもれてにほふ櫻を

曉尋花

かすみもや花のありかを尋ぬらんよをさへこめて棚引に鳧

見山花

さほ山に花咲ぬれは白妙のあまの羽衣ぬきかけてみゆ

大貳長實卿の白河の宿所にて花下旅宿といふ事をよめる

やさしやな苔のしとねにちりそむる花を衣に重ねてそぬる

花をよめる

咲はちる花をときはの物とみて心しつかによをすくさはや

越山見花

白妙の花の梢にめをかけていそしのみねをおりそわつらふ

堀河院御時中宮の御方にて風靜花香といふこゝろを

金葉 梢にはふくともみえて櫻はなかほるそ風のしるし成ける

顯仲の君の八條の家にて人々十首哥よみけるに櫻をよめる

をのれかつ散をや雪と思ふらんみのしろ衣花もきてけり

落花滿庭といへる事をよめる

詞 はく人もなき古里の庭の面は花ちりてこそみるへかりけれ

大貳長實卿白河の花見にとてさそはれけれはまかりてよめる

詞 しら河のこすゑの空をみわたせは松こそ花のたえま也けり（春のこずゑを集）

花をおしむといへる事を

同 櫻花たをれとちらぬものならは梢に人のゝこさましやは

落花隨風

跡たえてけはしき谷のいはのうへに花こきおろす春の山風

夜思落花

春の夜の闇にし風の吹さらは見ぬまに花をちらさましやは

對花厭風

青柳の糸もて風をゆひとめて花のありかへやらしとそ思ふ

池上落花

梢より風にもまるゝ花なれはちりても池の浪そおりける

土御門前齋院にて水上落花といふ事をよめる

かせふけは散ぬる花も水のおもにうつれる枝に又咲にけり

尋山花

高砂のおのへのさくらきてみれは時しも風のもてさはく哉

かは堂の櫻さかりなりと聞て人々あまた参りて惜落花といふことをよめる

われよりも櫻そ花をおしむへき枝をし忍ふ人しなけれは

雲居にて花下述懐の心をよめる

厭ひても猶もいとはんさかりなる花に風ふくこの世也けり

花下日暮

櫻はなをのかもろさのゆふはへに心をさへもちらしつる哉

落花留客

たちかへる心そつらきさくらはな散をは見しと思ひし物を

白川の花見にまかりたりけるにことの外に散をみて隆源阿闍梨に申かけゝる

詞　身にかへて惜にとまる花ならはけふや我世の限りならまし

花漸少

はかくれはしはしもすまへ櫻花つゐには風のねにかへす共

花下述懐

櫻はな散かふほとはなみかけて洗ふ小嶋のひさきとそみる

圓宗寺の邊にまかりて冒雨見花といふことをよめる

散花のしつくにぬるゝ袖なれは乾くもおしき物にそ有ける

左京大夫經忠のもとにして山花隨風といへることをよめる

山嵐のみねこすくれに散花を空行く（なみイ）もと思ひけるかな

大貳長實卿白川にて殘花誰家といふことをよめる

覺束なたかふる里の花なれはふく風にさへしられさるらん

堀川院御時きさいの宮の御方にてかたをわかちて花をおりにつかはして御前のいつみにたてならへて哥よませ給けるによめる

吹風をいとひてのみもすくすかな花みぬ年の春しなけれは

又人にかはりて

九重にうつさゝりせは山さくらひとりや苫の上にちらまし

水邊落花といへる事を圓融院に人々まかりてよみけるに

花のちる下行水のそこみれは影にはなみそ風となりける

雲林院の花のもとにて人々哥よみけるによめる

散花を風にまかせてみる時そよはうき物とおもひしらるゝ

攝政殿下にて十首哥よませ侍けるに櫻をよめる

心ともちりける物をさくら花なにぬれ衣を風にきせけん

おなし殿下にて探題の哥よませ給ひけるに櫻をとりてよめる

續古今　こゝろあらは風もや人を恨ましおるは櫻のおしからぬかは

ならの歌合に敎緣にかはりてよめる

よしの山花咲ぬれは谷川のなみはたかねの物にそ有ける
散花をさそふとみつる春風のうはの空にもすてゝける哉

三月

三月三日人のかりいひつかはしける
君か爲彌生になれはよつまさへあへのいちゝにはゝこ摘也
三月三日の心をよめる
たれもみなけさは櫻をうちすてゝもゝを尋てすくす成けり
同日もゝさくらさきあひたるをみてよめる
櫻にも枝さし交すもゝなれは空さへけさはさかやもひせり
はるかに桃花を見やりてよめる
（次郎）誰か又みて忍ふ覽山かつのそのふのもゝのはなのよそめを
百首哥中にかへるかりの心をよめる
（千載）春くれはたのむの雁もいまはとてかへる雲路に思ひたつ也
かへる雁の心をよめる
あちきなや小山田をこそかへしつれ雁金さへも思ひたつ哉
思ふとかなふ身ならはかりかねの返る雲路に關すへましを
百首哥中に早蕨をよめる
春くれはおる人もなき早蕨はいつかほとろとならむとす覽
同百首中に春駒を
とりつなけたまたよこのゝ放れ駒躑躅の岡（かけたにイ）にあせみさく（花イ）也
春駒をよめる
春駒はあさかの沼にあさりしてかつみの浦はふみしたく也
攝政殿下にて十首哥よませ給けるに春駒をよめる
春の野におはなあしけの見えつるは引違へたる心地社すれ
百首哥中にすみれをよめる
わきも子か花の袂をかたみにてつめるすみれを（そ）心してみよ（ことなるイ）
殿下にて雨中のすみれをよめる
たれとみて忍ひかはせんつれ〳〵とこし雨ふりて菫咲野を（にイ）
百首哥中にかきつはたを
にほとりのすたくみぬまの杜若ひとへたつへきわか心かは

苗代

秋かりし室のをしねを思ひ出て春そたなゐに種もかしける
たなかみの山里にてたかのみねといふ所をよめる
今こそはきゝもあはすれ雉子なく遠の高根はたかの峯かも
雉子をよめる
（次郎）いとゝしくをのかありかへやる稲をこゝに有とや鳥の鳴覽
屛風の繪に春山里に人々なかめてゐたるに野にたかかりする所をよめる
雉子なくすたのに君かくちすへて朝ふますす覽いさ行てみん
百首哥中に欵冬をよめる
風吹はなみをりかけてかへりけり岸にはうへし山吹のはな
家綱かもとよりはまくりをゝこすとてやまふきを上にかさして書付て侍ける
山吹をかさしにさせは蛤を井手のあたりの物とみるかな
返し
心さしやへ山吹と思ふよりはまくりかへしあはれとそ見る
水邊のやまふきを
みなそこにしつめる枝のしつくにはぬる共おらむ山吹の花
伏見の山里にておなし心をよめる
をる波のうしろめたさにめもかれす立ゐふしみる山吹の花
修理大夫顯季の六條の家にて欵冬藏橋といへることをよめる

山吹をおるとや人の思ふらんはしたとるとてわくるま袖を
堀川院御時に肥後かもとによきやまふきありときこしめしてめしたりけれはまいらすとて花にむすひつけたりける
千載 九重にやへ山吹を移してはいてのかはつのこゝろをそくむ
山吹の名殘をこひてけさよりはたれとか井てのかはつ鳴覽
故源中納言國信の坊城の堂に中宮亮仲實か住ける頃人々まかりてあそひけるに池のみきはの山ふきさかりにておもしろかりけれは人々哥よみけるによめる
山吹の汀もすまに咲ぬれはあらふさなみもいとなかりけり
左京大夫經忠の八條の家にてやまふきをよめる
あかすのみ思ふ心のかさなれはいくへともなし山ふきの花
百首哥中に藤花をよめる
春來ては心の松にかゝりつるふちのはつ花咲そめにけり
堀川院御時御前にて雨中藤花といへる事をよめる
雨ふると藤のうら葉に袖ふれて花にしほるゝ我身と思はん
二條關白殿にて池邊藤花といへる事をよめる
藤の花みきはにゝほふ池水はふかむらさきに涙そたちける
觀音寺の藤の花のもとにて晩見藤花といへることをよめる
紫にいくしほそめて藤のはなゆふひさかき（かさきイ）のはひをさす覽
殿下にて十首哥よませ給ひけるに
かすか山さかゆくふちにいとゝしく鶯なきつ春の明ほの
屛風の繪に藤さきたる家に老人たちたる（り歟）所を
はふ〳〵もくるとたへし梅かえに藤したるける宿とみつれは

修理大夫顯季觀音寺のふちの花さかりなりと聞て見にまかりけるにさそはれけれはまかりてよめる
吹風にふちえのうらを見わたせはなみは梢の物にそ有ける
なしの花さかりなりけるをみてよめる
新古 櫻あさのおふのうらなみ立かへり見れ共あかぬ山なしの花
加賀守顯輔のもとにて關路花殘といへる事をよめる
さもこそはなこその關のかたからめ櫻をさへも止めける哉
三月盡花色春深といへる事をよめる
かそふれは春も梢に成にけり花とゝもにや散まかふらん
やよひのつこもりに鶯のなくを聞て
見るまゝにうらなみかけて鶯よ人のとゝめぬ春ならなくに
三月晦日時房かもとにあるきたかはてまてにしわたりにあるきてあそはむといひつかはしたりけれとうちのさはりにこめられてえまからさりける程にくれにけれはかれよりをくり侍ける
立かへり春思ふたにあるものを君をさへけふ待くらしつ（けイ）る
はしかきにさとをはかれすとかけり
返し
暮てゆく春をおもふもこぬ人を待にもまさるゆかぬ心は
おくにあまのをふねもとかけり
栖霞寺の羅漢供へまいりてかへさに旅中春暮といへる事をよめる
わかれゆく彌生の空に暮はれてしらぬ人にもまとふけふ哉
三月の晦日人々哥よみけるに
とゝまらむと社春の雖からめ行衞をたにもしらせましかは
人許にて三月晦日の心を

春こそはかきりもあらめみよしのに霞は殘れかたみ共みん
百首哥中に三月の晦日の心をよめる
我宿を厭ふかとこそ思ひつれ野へにもけふそ春はくれける
殿下にて三月晦日のこゝろを
金葉 歸る春卯月のいみにさしこめてしはしみあれの程迄も見む

散木奇歌集第二

夏部　四月

百首哥中に衣かへの心をよめる
夏衣たちきるけふのしらかさねしらしな人に裏もなしとは
ならの歌合に人にかはりて餘花の心をよめる
暮にける春のほかにもちらすてふなをさへ花の殘しける哉
櫻たに散のこらはといひしかと花見てしもそ春は戀しき
餘花隨風
いとゝしくみる空そなき櫻花わかれし春のかたみと思へは
百首哥中に卯花をよめる
卯花も神の胙解きてけりとふさもたはにゆふかけてみゆ
源中將の八條の家に哥合しけるに卯花をよめる
雪の色をぬすみてさける卯花はさしてや人にうたかはる覽
殿下にて卯花をよめる
卯花の身のしらかとも見ゆる哉賤かかきねもとしよりに皃
卯花作墻
卯花の垣根なりけり山かつのは月にさらすけふとみつれは
卯花隔隣
うの花のかきねはかりそ諸友にかよふ心のへたてなけれは
浦卯花
卯花の頃ほひなれや磯の浦にたつしき波のおるかと思へは
左京大夫經忠の六條家にてよめる
卯花の盛になれはしらとりのさきさか山のしほりとそみる
卯花をよめる
卯花よいてとく／＼しかけしまの浪もさこそは岩をこえしか
遠見卯花
卯花のよそめなりけり遠近にいつかは浪のゐせきこえける
卯花留客
卯花のさかりならすは山里にくる人をになかゐせましや
卯花をよめる
卯花はいはこす浪にかほれ共おるてはぬれぬ物にそ有ける
卯花誰家
何かとふ己か垣根の卯花をみぬにてしりぬものゝふそとは
百首哥中にあふひを
けふくれはしとろにみゆる山賤のおとろの髮も葵かけたり
桂の枝にかけて人のかりつかはしける
人しれすあふひを待としらせはや桂の枝のおりもよからは
百首哥中に橘をよめる
橘のきのまろとのにかほるかはとはぬになのる物にそ有ける
人のもとよりたちはなを送とて
限りなく思ふ心をしらするははなたちはなのにほひ也けり
返し
いとゝしく花たちはなそ懷かしき心さしける匂ひと思へは
初聞郭公
時鳥は山のすそを尋ねつゝまた里なれぬはつねをそきく

ならの哥合に人にかはりて郭公をよめる
時鳥初音は空にとまらねとあかぬなこりになかめつる哉
垣根郭公
数ならぬ我とはなしにほとゝきすよをうの花の垣根にそ鳴
郭公をよめる
みそのふにむきの秋かせそよめきて山郭公忍ひなくなり
郭公未遍
時鳥つきわかしとやおく山のこぬれかくれに聲ならすらん

五月

夜聞郭公
明はまつちらさておらんほとゝきすはな立はなの枝に鳴也
伊勢に侍けるとき五月一日郭公のいたくなきけれは
かひの君のもとよりいひ送りて侍ける
郭公けふは五月といひかほにしたりかほなる聲そ聞ゆる
返し
ほとゝきすをのか五月の空ならは所もわかすしたり顔なれ
殿下にて郭公の哥人々によませ給けるに
はしめなきみのはしめより郭公あかてもよゝを過しける哉
なかす共なきつといはん時鳥人わらはれにならしと思へは
郭公こゝろ待つけてきく程や人に我身のうらやまるらん
しとみ山風はおろせと時鳥聲はこもらぬ物にそ有ける
ほとゝきす待しわたらは八橋のくもての数に聲をきかはや
ほのめかすうきたの杜の時鳥思ひしつみてあかしつるかな
時鳥なかぬなけきの杜にきていとゝも聲をほゝめつる哉
垣根にはもすのはやにへたてゝ兇しての田長に忍ひ兼つゝ
郭公のうたとてよめる
なけかしなたむけの山の時鳥あをはのぬさもとりあへぬ迄
夜深聞郭公
ほとゝきす己かね覺の初聲にまつ人さへそおとろかれぬる
郭公留客
たかために旅ねをすれと郭公又ともなかてさよふかすらむ
關路郭公
時しもあれなにあふ坂の杉かえに山ほとゝきす關かたむ也
山里にて郭公を聞てよめる
ほとゝきす主怪しとてよかれすな山の景色も空はかはらし
曉郭公
もろともに今そ鳴なるほとゝきす八聲の鳥は己かつまかは
百首哥中に郭公を
五月こは信太の杜のほとゝきす木つたふちえの数をになけ
待郭公
時鳥まつらさよひめたちゐしてひれふる里に聲なおしみそ
毎夜待郭公
時鳥まつにしるしのあらはれてねぬよの数に聲を聞はや
賀陽院殿の哥合に時鳥を
待兼てぬるよもあらは時鳥きかぬためしの名をやたゝまし
大貳長實卿の家に哥合せんとしけるに郭公をよめる
未遂
時鳥あつさのそまのそま人にこゝろうちそへてみや木引なり
山中郭公
時鳥をのかね山のしゐしはにかへりうてはや訪つれもせぬ
郭公驚眠
またすてふ我名も[はイ]たてしほとゝきす鳴おこしつと人に語るな

郭公をよめる
ときつ鳥なかね雲井にとゝろきてほしの林はうつもれぬ覽
雨中郭公
これきかむこせのさ山の杉か上に雨もしのゝにくきら鳴也
鳥羽殿にておなし心を
柴の庵にあまやとりせよ郭公かよふかきねもおなし梢そ
待郭公
歎かしなふな木の山のほとゝきす月のてしほに浦傳ひして
堀河院の御時二間にて殿上のおのことも哥つかまつりけるによめる
ほとゝきす鳴ねにかけしうつらねは鏡の山もかひなかり覺
船中郭公
追風にもとるもた（おなイ）ゆしほとゝきすいさたかさこの松の梢に
修理大夫顯季の六條の家にて連夜待郭公
ほとゝきす待夜の數は重なれと聲はつもらぬ物にそ有ける
皇后宮權大夫師時の八條の家にて歌合しけるに郭公をよめる
ほとゝきすなかゝそいろの鶯にまれになくてふをな習ひそ
雲居寺にて未飽郭公といへる事を人々あまたまかりてよめるに
（千載）さしもなそ思ひそめけん時鳥雪のみ山のゝりの末かは
八條入道の泉の家にまかりて十首哥人々よみけるに
（金葉）待かねて尋さりせは郭公たれとかやまのかひになかまし
又人にかはりて
朝ねかみゆふのみ山の時鳥はやうちとけねおもひみたれて
故大殿の北政所より歌繪をたまはりてこれに哥よみあはせてたてまつれと有ければにはにへといふものすゑたる所に鶴むかひてたてり空に郭公なくを女なかめてゐたるをよめる
ほとゝきすなく一聲をしるへにて心を空にあくからしつる
堀河院御時中宮の御方にて人に物申けるにほとゝきすのほのかに聞えければ女のよめる
君と我をかたらへは郭公しのひねすると人やきくらむ
返し
今夜さはねにあらはれぬ時鳥かたらふ事のしるしと思はん
五月はかりに人のもとにまかりて夜もすからものかたりしけるに郭公のなかぬ事なと申ければ女のよめる
夏の夜は山ほとゝきす待かねてゆふつけ鳥のなきぬへき哉
返し
人はいさわれはよひよりあふ坂の夕つけ鳥のねをのみそ鳴
郭公催戀
いとゝしく袖のしほるゝ郭公なくねや戀のしるへなるらん
終夜待郭公
あけぬなりつゐにはなのれ時鳥待にはなかぬ物としらるな
修理大夫顯季の八條の家にて郭公まつといへるこゝろを
我身をも恨みつる哉時鳥またすはなかぬなけきせましや
大貳長實卿白川の家にて郭公をよめる
（續古）をとせぬは待人からかほとゝきす誰おしへ劔數ならぬ身を
（同）時鳥鳴うれしさをつゝめとも袖には聲もとまらさりけり
左京大夫經忠の八條の家にてよめる

ほとゝきす聲待かねてゆふけとふ道のうらにもとよき物を

ならの歌合に人にかはりて郭公不乏といふ事を

今こそはふたむら山の郭公聲をりはへてあやになくなれ

待郭公

なきをくれこちこせ山の郭公きなせの里のまつのたえまに

殿下にて晩聞郭公といへるをよめる

みくまのゝはまゆふかけて時鳥鳴音かさねよいくへなり共

暮山郭公

暮にけり聲おさめてよほとゝきす己か小倉の山にあらすや

閑中郭公

なきつとも誰にかいはん時鳥かけより外に人しなけれは

晩聞郭公

ほとゝきす末の松山風ふけはなみこすくれにたちゐ鳴なり

曉聞郭公

明にけり月みる空のほとゝきすたえすも物をおもはする哉

修理大夫顯季卿のもとよりひさしうをとつれすとて

さみたれのころをくられたりける

五月雨の空をなかめてすくせともたえてをとせぬ郭公かな

かへし

時鳥なけきのもりにあかすして君かまつをは過にける哉

毎夜待郭公

時鳥よころ心をつくさせてけふそかすかにほのめかしつる

をとはの山の時鳥をよめる

ほとゝきす音羽の山になきつとはまつあふ坂の人にかた覽

左京大夫經忠の八條の家にてかはつをよめる

おくろさきぬたのねぬなはふみしたきひもゆふましに蛙鳴也

中宮の御堂にて人々歌よみけるに蛙をよめる

あさりせし水のみさひにとちられて菱の浮葉にかはつ鳴也

百首哥中に早苗を

初苗にうすのたまゝを取そへていくし待らん年つくりえに

十首歌中に早苗を

流れつるけこのみわもり數そひてさやたの早苗取もやられす

おなしさなへをよめる

早苗取たこのも裾のひたすらにおり立渡る身をいかにせん

けさたにもよをこめてとれ芹河や竹田の早苗ふし立ちに鳬

五月五日春宮大夫公實のもとよりあるきたかはてあれものへいかんにくせんと有けれとはきにれいならぬを有てえまかるましき事なと申けるついてによめる

ありくへき方社なけれ柴の庵に更てかもきの歷しなるれは

左京大夫經忠の八條の家にあやめをよめる

岩の上に生るみぬまのあやめ草つめるみこしや萬代のため

殿下にて五月五日の心をつかうまつれる

なかきねも花の袂にかほる也けふやまゆみのひおり成らん

仁憲法眼の妹の許よりくすたまをゝくるとてよめる

菖蒲草君か淀のゝねならねとゝこめつらにも思へかしなと

返し

嬉しさのねをさへけさはかくる哉何のあやめもしらぬ袂に

五月五日の心をよめる

あやめひくみぬまをみれは唐國にけふや鏡のかけを增らん

あやめにいはひの心をそへて

み垣もる衛士の玉えにおりたちてひけは菖蒲のねも遙か也

百首哥中にあやめをよめる
我宿は軒のしのふし繁けれはふける菖蒲もみえぬけふ哉
あさかの沼のあやめといへるをよめる
菖蒲かるあさかの沼に風ふけはをちの旅人袖かほるなり
あやめ草かけ水底になみよりてあさかの沼も深みとりなる
五月五日男女のもとになかきねをこせたりければ女
にかはりてよめる
袂にはかりにもかけし人心みぬまにひけるあやめと思へは
皇后宮權大夫師時八條の家にて哥合しけるに五月雨
の心をよめる
五月雨は降からをのゝ忘水をしひたすらのぬまえとそみる
五月雨の心をよめる
さみたれはもりこし水も岩こえて庭もぬまえのそこと成鳧
百首哥中に五月雨
おほつかないつかはるへきわひ人のおもふ心は五月雨の空
五月雨はなつかしかりし水の音の夥しくもなりまさる哉
別當實行家哥合に五月雨心をよめる
雲はれぬ五月きぬらしたま衣むつかしき迄あましめりせり
源中納言雅定の家にて五月雨の心をよめる
五月雨の晴せぬ頃（程イ）は引さらす瀧のしらぬのいくのそふらん
おなし心をよめる
さみたれは軒のしつくのつく／＼と降つむ物は日數成けり
五月雨のころを
五月雨は河そひ柳みかくれてそこのたまもと成にけるかな
降初し日をかそふれはみつかさの久しくなりぬ五月雨の空
堀河院御時中宮御方にて閏五月郭公といへる事をよ
める
やよやまたきなけ御空の時鳥さつきたに社をきかへりけれ
大貳長實の白河の宿所にて五月盡日郭公歸山といへ
る事をよめる
時鳥ふたむら山を尋みんいりあやの聲やけふはまさると
おなし心をよめる
尋ぬともかひやなからん時鳥跡を五月のつこもりにして
百首哥中にほたるをよめる
（千載）あはれにもみさほにもゆる螢哉聲たてつへき此世と思ふに
山家曉螢といへる事を
山里はさはへのほたるとひかひて音には鳥の初音をそきく
蘆のやのひまほの／＼としらむ迄もえあかしてもゆく螢哉
ほたるをよめる
遠近のよ川にたけるかゝり火とおもへは澤のほたる也けり
百首哥中にともしをよめる
ともしするは山の原に立鹿のめもみせぬよを恨みてそふる
ともしに戀の心をよすといへる事をよめる
逢事はともしの鹿の今宵しもめをみせつれ（るイ）はくるにや（いか）有覽

六月

皇后宮權大夫師時の八條の家にて水風晩涼といへる
事をよめる
風吹ははすのうき葉に玉こえて涼しく成ぬ日くらしのこゑ
夏日越關
夏くれは行かふ人をあふさかの關はしみつに任せてそ見る
月前逐涼
しはつ山楢のわか葉にもる月の影さゆる迄よはふけぬらし

月前自秋涼
衣手もやゝはたさむし夏の夜の月のひかりは秋の空かは
夏夜短
春宮大夫公實の許にて對水待月といへる心を
夏の夜はにはかにてらすいなつまの光の間にも明ぬへら也
宇路のふけとのにてよめる
山のはをたまえの水にうつしもて月をも波のしたに待かな
別當實行の家の哥合に夏月をよめる
山里のこやのえひらにもる月の影にもまゆのすちはみえ鳧
殿下にて夏夜の月をよめる
ひかりをはさしかはしてや鏡山みねよりなつの月はいつ覽
紫陽花の花のよひらにもる月を影もさなからおる身共かな
夏虫をよめる
燈火にいる夏虫のはかなさを身にたとへてもあかしつる哉
堀河院御時に二間にてかなまりをうちならさせ給て
そのひゝきのうちに雨中瞿麥といへる事をよませお
はしけるにつかふまつれる
古は塵をたにこそいとひけれ雨にしほる(れイ)ゝなてしこの花
なてしこをよめる
なてしこの花みる程の心にて彌陀のみくにを願はましかは
雲居寺の聖人のもとにて瞿麥帶露といへる事をよめ
る
朝露のおきゐる庭のとこにしきたかしきしまのやまと瞿麥
やまとなてしこをよめる
けさは又いさみにゆかんさゆりはに枝差かはすやまと瞿麥
晩風如秋
夕されは玉まく葛のうら風をはかへる秋とおもひけるかな
春宮大夫公實ひくちの前齋院にて哥よまれけるに竹
風如秋といへる事をよめる
秋來ぬと竹の園生になのらせてしのゝをふゝき人はかる也
避暑といへる事をよめる
水はよしあたりはしみよ吹過く風さへさゆる玉の井の里
左京大夫經忠八條の家にて泉爲友といへることを
辰の市のうるまの清水涼しさにけふはかひある心地社すれ
泉邊納涼といへる事をよめる
ひさきおふる山片蔭のいしゐつゝふみならしても進む頃哉
六月はかり世のたへかたき事を申つゝけてよめる
世中のあつかはしさをあけかけはきなる泉におもむきぬへし
水邊納涼といへる事を
せく手には涼しき事もよとみけり水をとのみも思ひける哉
泉をよめる
いしゐつゝ隙もる水にたはふれてつてにも夏を開わたる哉
百首哥中に泉をよめる
さらし井のこのしたかけに行ふれは衣手さむし蟬はなけ共
氷室をよめる
すへらきのみとの末しきえせねはけふも氷室におものたつ也
おなし心をよめる
さえこほるとを氷室に殘しをきていつこへ冬の立かくれ劔
夏の日も思ひの外にさえゆけはひむろそ冬のかたみ成ける
皇后宮權大夫師時の八條の家の歌合に野風を
(千載)しほみてはの嶋か崎のさゆり葉に波こす風の吹ぬ日そなき
樹陰風來

ひさかりはあそひてゆかむ影もよしまのゝ萩原風立にけり
　蟬をよめる
石はしるたきのよとみにうちそへて木とに蟬の聲きこゆ也
　せみのからを見てよめる
空蟬のいてからくてもすくす哉いかて此世に跡をとめまし
　人々まうてきて哥よみけるに蟬をよめる
女郎花なまめきたてるすかたをやうつくしよしと蟬の鳴覽
　二條關白殿にて雨後野草といへる事をよめる
（金葉）此里も夕立しけり淺茅生に露のすからぬ草の葉もなし
　右兵衛督伊通卿家にて雲隔遠望といへることを
（新勅）とをちには夕立すらし久かたのあまのかく山雲かくれゆく
　百首哥中にかやりひをよめる
世中をあくたにくゆるかやり火の思ひむせひてすくす頃哉
　左京大夫經忠の家にて蚊遣火をよめる
山かつのかを厭ひけるすくもひに心をさへもそへてやる哉
　おなし心をよめる
かやり火の煙になるゝこもすたれ物むつかしき我こゝろ哉
くる人もなき山里はかやり火のくゆる烟そ友となりける
　くゐなをよめる
柴の庵たゝく水雞に夢さめてたかならはしにおきてとふ覽
心からたけたの里にふしそめて幾夜くゐなにはかられぬ覽
　修理大夫顯季の六條の家にて曉水雞といへるとを
誰しかも水雞ならては叩くへきくろとのみとのひま白む迄
くゐなにもたゝはかられよ槇の戸を誠に叩くおりも社あれ
夏くれは幾夜水雞にはかられて竹のあみ戸をあけてとふ覽
　山里にて夕かほを見てよめる
山かつのすとかたけかき枝もせに夕顔なれりすかみ〳〵に
　六月廿日頃に秋節になるひ攝政殿よりくたしつかは
　したりける哥
（金葉）水無月のてるひの影はさしなから風のみ秋のけしきなる哉
　御返事かしこまりて參らせさりけれとしきりにめし
　けれは二日はかり有てまいらせける
をのつからはき女郎花咲そめて野へもや秋の氣色成らん
　夏草をよめる
日さかりは垣根かくれへなみよりて誰を戀草もえたてる覽
　鵜川をよめる
（次郎）篝火のほ影にみれはますらおは秋いとなくあゆこくむらし
もかり舟おとすう船の水馴棹さしてもいかにはやきなる覽
丈夫はう河のせゝに鮎とるとひくしらなはのたえすも有哉
　別當實行の哥合にうかはをよめる
となせより下すう舟のみなれ棹ゐくひをとなふ心してとれ
　水風如秋
さはへなる螢も風にはかられてけふを秋とや鴈につくらん
　旅中螢
あらち山螢の影をしるへにてたとるはたにのこすゐ也けり
　蓮花をよめる
玉水をはすのわか葉にまきこめてこほすや花の光なるらん
　百首哥中にはすをよめる
雨ふれははすのたちはにゐるたまのたえすこほるゝ我涙哉
　夏風といへる事をよめる
玉かしはすゐこす風にはかられてまたきに鹿や聲たてつ覽
　こかけといへる事をよめる

（次郎）秋もまたたちこぬさきに衣手の杜のしたひはほのめきに覺

野望草滋

むさし野の薦のおきふを分ゆけは葉末より社空はみえけれ

みな月ばらへをよめる

身のうさを思ひなこしの祓して世になからへん祈をそする

百首哥中にみな月はらへをよめる

さはへなる淺茅を刈に人なして厭ひし身をもなつるけふ哉

散木奇歌集第三

秋部　七月

百首哥中に秋たつ日をよめる

千年ふるみそきは昨日せしか共今朝はうき世に秋立にけり

夕風といへる事をよめる

秋來ては忍ひなあへそと思へはや風をとつれて暮かゝる覽

晩風告秋

夕まくれ戀しき風に驚ろけは荻のはそよく秋にはあらすや

のこりのあつさといへる事を

秋きては風ひやかなる暮もあり暑さしめらんむつかしの世や

秋たちていくかもあらぬに風ひやかにものこゝろほ
そくおほえけれはよめる

（千載）秋風や涙もよほすつまならんをとつれしより袖のかはかぬ

百首歌中に荻をよめる

（詞）荻のはを草の枕にむすはすはよそにや風の音をきかまし

風底荻聲といへることを

おきの葉の軒のあまりに音つれて人の心をかきみたるらん

逐夜風凉

軒ちかき荻のうは風聞そめていく夜か人に忍はれぬらむ

人のもとにて七月七日をよめる

彦星のみけしのあやをいそくとや機をる虫の今宵しもなく

修理大夫顯季の六條の家にて七夕をよめる

七夕はひまなく袖につくすみをけふやあふせに薄すつらん

みふに侍ける頃人々まうてきて歌よみけるに七夕の
こゝろを

たなはたの天のたまゆる今宵さへ流れやすらんあかぬ涙に

七月七日孝清かかつらの山里にて帥中納言基綱をは
しめて哥よまれけるに

一夜にはいそあひみける七夕をしらてや人の恨みそめけん

おなし心をよめる

とりにとも木にとも昔契しはこよひなほしのあふせ思へは

おいぬれは七夕つめにとよせて鳥も渡らぬみつわをそくむ

（千載）たなはたの天の河原のいは枕かはしもあへすあけぬ此夜は

昔よりいかに契りてたなはたのひとやりならぬ物おもふ覽

織女恨曉

たなはたの逢夜は空そ恨めしき明すはあかぬ名殘せましや

百首哥中に七夕のこゝろを

たなはたのかへる袂のしつくには天の河浪たちやそふらん

織女朝

たなはたは雨のをしてのやへ霧に道ふみまとへ又や歸ると

八日人のもとへつかはしける

逢見てはたちもはなれぬ心をそ七夕つめにかすへかりける

八月

百首哥中に野をよめる

千載 さま〳〵に心そとまる宮城野の花のいろ〳〵虫のこゑ〳〵

晩見野花

暮ぬとも花のあたりにやとりして秋の野守と人にいはれん

野花留客

千載 秋くれは宿にとまるを旅ねにて野へこそ常のすみか也けれ

百首哥中にかるかやをよめる

朝夕になてつゝおふす刈萱をしかへて君かみまくさにしつ

大殿哥繪の中に秋の野におとこ箏をまへにをきてかるかやをかりたる所にこといふものを二をきたる所をよめる

とにかくに亂れてみゆる刈萱は物思ふことのしるし也けり

百首哥中に露をよめる

をみなへしあさをく露をおひにして結ふ秋やしほれしぬ覽

野花隨風

かくはかりはけしき野への秋風におれしとすまふ女郎花哉

をみなへしをよめる

みよしのゝかたちのをのゝ女郎花たはれて露に心をかるな

霧隔女郎花

女郎花うちたれかみを夕霧にかくれて誰としほれふすらん

雨中女郎花

心から誰にたはれてをみなへし雨にうたれて袖しほるらむ

女郎花をよめる

をみなへしあかぬ餘に袖ふれて花の名おると人にみえける(ぬイ)

左京大夫經忠八條の家にて女郎花をよめる

しかも社しからみにくれ女郎花はきのあたりは心してさけ

丹波前司季(重イ)房の家にて人々秋の花をよみけるに女郎花をよめる

咲そむる萩たちかくせ女郎花しのゝをすゝきめもそきたなき

草花隱水

秋萩をたれみなかみにこきすてゝいはこす涙の色をそむ覽

中納言俊忠の許にて草花露重といへる事を

秋萩も露のしからみかけてけりいくしほ庭をそめかへす覽

四條宮の扇あはせに人にかはりて

露をおもみいとゝたはなる萩かえに心をさへもかくるけふ哉

秋情寄萩

秋萩を心にかけてをかさきのおほみあしちをなつみてそ行

百首哥中に萩をよめる

秋はきの末葉の露になつさひてさまにもおはぬすか衣きつ

基俊の君の堀河の家にて人々哥よみけるに草花露深といへる事をよめる

あたし野の萩の末こす秋風にこほるゝ露や玉川の水

殿下にて野風といへる事をよめる

夕されは萩女郎花なひかしてやさしのゝへの風の景色や

同殿下にて水邊萩をよめる

風吹けは萩のはいゐに波越てえもいはぬまのみはきをそみる

萩花靡風

をく露にしほるゝたにもある物をたはなるはきに秋風そ吹

琳賢法師の大原の房にまかりて萩女郎花おもしろかりけるを人々よみけれは(こ歟)

山里はすとかたけかきさきはやす萩女郎花こきませてけり

堀川院の御時殿上の人々秋花をさくりてよませ給けるに薄をとりてつかうまつれる

（金葉）うつら鳴まのゝ入江の濱風におはななみよる秋のゆふ暮

田上の薄かせになみよりてをみなへしめつらしくたてりけれはたちとまりてよめる

さしこえて薄は外にまねけとも女郎花をそたをりにもくる

をのにて薄をよめる

かきわけてまねく袖にはむつるれといふこともなき花薄かな

百首哥中に薄をよめる

花薄まそほのいとをくり（よりイ）かけて絶すも人をまねきつるかな

殿上（下イ）にて哥繪に秋野に女ともあまたあそひけるに薄の風になひく所をよめる

まねけともうれしけもなしはな薄風にしたかふ心と思へは

観音寺にて雨中草花といへる事をよめる

まくまのに雨そほふりて木隱のつかやにたてるおにの醜草

蘭をよめる

さゝかにのいかにかゝれる藤袴たれを主とて人のかるらむ

百首哥中に蘭をよめる

そめかけてまかきにさほす蘭またきもとりのふみちらす哉

きり〳〵すをよめる

蛬斯をのかゝきねに夜もすから鳴音身にしむ秋は來にけり

家の蓬にきり〳〵すの鳴をきゝてよめる

蛬斯わかよもきふにおひたちてなとや主に音をなかすらん

百首歌中にすゝむしを

かすならてふりぬることを鈴虫となきかはしても明しつる哉

松むしを

夕されは野へもや物を思ふらん松むしなきて露しめり兒

虫爲夜友

秋のよを誰と共にかあかすらん虫の音きかぬ人にとはゝや

百首哥中に虫をよめる

よはりゆく虫の聲にや山里は暮ぬる秋のほとをしるらん

たなかみにて長月のつこもりかたに虫の聲々よはり行をきゝてよめる

霜さゆるおとろのゆかのきり〳〵す心ほそくも鳴よはる哉

四條の宮の扇合にはつかりをよめる

初雁は雲井のよそにすきぬれと聲は心にとまる成けり

百首哥中に雁を

雁金も羽しほるらんま菅おふるいなさ細江にあまつゝみせよ

旅雁鳴雲

初雁のなきつる空のうき雲をとりの跡ともおもひけるかな

殿下にて旅雁といへる事をよめる

限り有て急きたちぬる庵のうちにたれを賴むの雁したふ覽

田上にてたのかりたる跡より雁の鳴てたつをみて

秋の田のほくとも雁の見ゆる哉誰おほそらにかきちらす覽

露草のさきたるに風の吹けるを見て

いかはかりあたにちるらん秋風のはけしき野への露草の花

殿下にて庭露といへる事をよめる

庭もせにさきすさひたるつき草の花にかゝれる露のしら玉

百首哥中にあさかほをよめる

朝かほの花のすかたをみつるより暮を待へき心地こそせね

露草葉珠といふ事を

草の葉にしはしもとまる玉ならは何をか露に置ならへまし

田上の山里にてくはの木に露のをきたをみて
露にさへしほるゝくはの枝みれはこきたてられし我身成鳧
やとりたる家にこもをしつらひにしてかけたりける
を風の吹ならしけるをきゝてよめる
柴の庵にはこものかこひそよめきてすとをる物は嵐也けり
風のはけしさに屋のいたくなるを聞て
槇〔柴イ〕の戸をみ山おろしに叩かれてとふにつけてもぬるゝ袖哉
田上にて山田の方にしかおとろかすをとにめをさま
してよめる
さよふけて山田のひたのこゑきけは鹿ならぬ身も驚かれ鳧
鹿の聲を聞て俊重かよめる
山里につまよふ鹿の聲きけはわれも都のかたそ戀しき
これを聞て和し侍ける
われもしか都の方の戀しさは聲ふりたてゝなかぬはかりそ
又田に鹿のなくを聞てよめる
秋の田のあせふみしたき鳴鹿はいなむしろをやしき忍らん
百首歌中に鹿をよめる
夜もすから待かね山になく鹿はおほろけにやは聲をたつ覽
田上にてしかのこゑのはるかに聞えけれは
妻こふる鹿のと聲におとろけはかすかにも身の成にける哉
夜深聞鹿
木のはちる峯の嵐に夢さめて涙もよふす鹿のこゑかな
旅宿鹿
草枕このはかた敷ねさめにはしかの聲さへさひしかりけり
殿下にておなし心をよめる
けふこゝに草の枕をむすはすはたれとか鹿の妻をこひまし

野亭聞鹿
さを鹿の鳴ねは野へに聞ゆれとなみたは床の物にそ有ける
鹿をよめる
園原やふせやに忍ふ小男鹿も帚木をさへ見えすとやなく
殿下にて鹿を所の名に寄てよませさせ給けるによめ
る
よと共にすむはつまきの山なれはなかてや鹿の秋をすく覽
鹿の聲嵐にたくふといへる事をよめる
みむろ山鹿の鳴音にうちそへて嵐ふくなり秋の夕くれ
四條の宮の扇合に
此頃はみふねの山にたつ鹿の聲をほにあけて鳴ぬ日そなき
鹿をよめる
さかりなるこ萩か原の夕露に鹿鳴ころとたれにかたらむ
殿下にて原上鹿といへる事をよめる
秋くれはしめちか原に咲そむる萩のはひえにすかる鳴なり
障子の繪にまふしといふ事書たる所をよめる
まふしさすさつをの笛の聲そともしらてや鹿の鳴かはす覽
河内守經國かのくにゝ面白所有と申けれは師(師賢)殿
忍ひておはしけるにあまの河といふ所にてさい中將
の七夕つめにとよめる所なりとて舟をとゞめて河の
ほとりにおりゐてあそはせ給けるにかはらけとりて
おの〳〵哥よませ給ひけるによめる
千鳥なくあまの河邊にたつ霧は雲こ〔と歟〕そみゆる秋の夕くれ
霧の朝にあさひさしてやう〳〵きえけるを見てよめ
る
旭さすをかはの霧のむらきえてたけからぬ身に世をそ恨る

右兵衛督伊通のもとにて秋霧隔水といへる事をよめる
音羽河きりの外なるたきならはいはもる玉の數はみてまし
田上にて霧のたちふたかりてせゝのをとはかりしけれはよめる
旅人はきりをわけてやとほらまし河せの浪の音せさりせは
同所にてとふ人もなき旅のすみかに霧降ふたかりていふせかりけるにみやこの人うらめしかりけれは
とへかしな霧間を分てかみ山のこしけきたちの下の朽葉を
四條の宮の扇合に霧をよめる
春日野にたつ朝霧も君かため松のちとせをこむる也けり
殿下にて田家霧といへる事をよめる
山里は晴せぬ霧のいふせさにをたのをくろにうつらなく也
障子の繪に駒迎したる所を
道すからゆきあふさかの旅人に駒のたちとをとひつゝそ行
百首哥中に駒迎をよめる
走井のかけひのきりはたなひけとのとかにすくる望月の駒
もちつきのこまをよめる
望月の駒のけつけを逢坂のすきまのかけにあはせてそみる
田上にて船にのりてやしまといふ所に霧のいふせかりけるをみてよめる
河霧の煙とみえてたつなへになみわけかへるむろの八嶋に
百首哥中に擣衣をよめる
松風のをとたに秋はさひしきに衣うつなりたま川のさと
擣衣のこゝろを
秋かせの音につけてそうちまさる衣は萩のうはゝならねと

擣衣驚眠
ころもうつきぬたのをとに夢覺てさそともなくぬるゝ袖哉
田家秋興
山田もるきその伏屋に風吹はあせ傳ひしてうつゝをとなふ
八月はかりにくれかゝりける程に風のけしきなともあはれにおほえけれはよめる
草の葉にかせ音つれて夜とゝもに涙すゝむる秋のそらかな
田上にてたかるをみてよめる
浮身には山田のをしねをしこめて世をひたすらに恨みつる哉
秋の田をよめる
山里はいていこのへるたもとこに風そよめきて袖しほる也
いねのたふれたるをみて
覺束なたか袖のこにひき重ねほうしこのいねかへし初けん
船にのりてあそひけるに神山のわたりにて夕つく夜をみてよめる
曇なきゆふつく夜をもみつるかなこや神山のしるしなる覽
白川にて水上月といへる事をよめる
白河のよとみにやとる月みれはなひく玉藻そくもと也ける（ぬイ）
四條の宮の扇合に
君か代を空にしりてや久かたのあまてる月もかけをそふ覽
詠　月
木葉ちる秋にしなれは照月もあはれをかけにそふる也けり
田家待月
はやく出て門田にやとれ秋の月はのほる露の數や見ゆると
大貳長實の八條の家にて水上月といへる事をよめる
あすもこむのちの玉川萩こえて色なる波に月やとりけり

おなじ心をよめる
わきかへるいはまの水にすむ月は涙に砕けぬつらゝ也けり
八月十五夜遍照寺にて翫月といふ事をよめる
空もそら月もよころの月なれとこよひになれはひかりそ也
殿下にて八月十五夜の心をよめる
ひきわくる駒そいはゆる望月のみまきのはらや戀しかる覽
あかしにまかりて月のあかゝりける夜涙のたつを見
てよめる
秋の夜は月もあかしのうら風になみの花さへ咲そひにけり
水上月
こかくれて波のをりしく谷河のみなむしろにも月はすみ覺
翫明月といへる事をよめる
あまの河いはこす波やあらふらんきよくもすめる月の影哉
高陽院の哥合に月を
山のはに雲の衣をぬきすてゝひとりも月のたち(ずみイ)のほるかな
月のあかゝりける夜肥後君か許にまかりてよめる
あくかるゝ心の空に通はすはたれとか月のにしへゆかまし
前齋宮にまいりて人々物申けるに萩の露に月のやと
りておもしろく見えけれは
秋萩のしたはに月のやとらすはあけてや露の數をしらまし
殿下にて月秋友といへる事をよめる
思ひくまなくても年をへぬるかな物いひかはせ秋の夜の月
津の國にしほゆあみにまかりて月のもりいりたるを
見て
あしのやのあれまをわけてもる月を涙の床に宿してそみる
下臈にこえられてなけき侍ける頃月のあかゝりける
夜周防内侍のもとにまかりて物かたりしてことの次
のありけるに奏せよとおほしくて
いとゝしく心つくしの秋しまれ世を恨みても月をみるかな
あかき月をみてよめる
わか賴む草のねをはむねすみそと思へは月のうらめしき哉
翫明月
吹風にあたりの空をはらはせてひとりもあゆふ秋の月かな
別當實行の許にて月前思遠といへる事を
今宵もや主をもとはてかへりけんみちの空には月のすむ(やイ)覽
月あはれたる家をてらす
ねやの上のひまを數へてもる月は空よりもけに隈もなき哉
重服に侍けるとしの秋月のねたりける所にもりきた
りけるをみてよめる
月影は物思ふ宿のあれまよりそとふ(た)らひにもるかとそみる
人の歌合せんとてこひけれは
きの國のふきあけの濱に照月はさはく眞砂の數をみよとや
閏九月ありけるとしの八月十五夜春宮大夫公實のも
とよりをくられて侍ける
秋はまたのこりおほかる年なれと今宵の月の名社おしけれ
かへし
つもれはといふそのはも有物をなをさへ人のおしみける哉

九月

九月十三夜於前武衞泉亭詠閑見月副隔一夜戀和哥幷
小序
にしの宮のうち。月のかつらのひんかし。いくらもさらさる
程に。さもやさしきすみかあり。わきかへるいつみの水らき

よく。たてたるいはもかとあるさまに見ゆ。梢もなひやかに。くさむらもよしはみて。あるしのおさ〳〵しさもあらはれ。くる人の心こゝろも見えぬへけれは。なさけあるものは。よとゝもにともなひ。さまたけなきものは。いさ(さイ無)なふをも見えす。いなは風になみよりて。秋のはな色をつくせり。夕のむしのこゑをとなへて。朝の露袖をぬらす。こゝにやまとをはにたへなるともから。薄のおはなにまねかれ。よふこ鳥の聲につきて。そのかすあつまり給へ。ころなりけふなり。たゝにてやはあかし給はんとて。しつかに月をみるといふをに。戀の心をそへて。おの〳〵たてまつり給ふ。うれしきかなや。けふのまとゐのやともしみゝにそいむれてゐたる事を。心をかはしまの松のほつえとをゝにさかへたるけしきなれは。抑(縕イ)あはれむかし。すへらきやすみをしろしめして。こゝのへにまし〳〵し時。よもしつかに。民もやすらけく。雨のあし。風の音。みな御心になんまかせ給へりし。あまのみそらには。たなひけるくもゝなく。政の庭には。みやをまもる神。ちからをあはせ給ふあまりに。糸と竹とのこゑたえす。はちのをと。つめひゝき。時としてをとなはすといふをなし。春のあしたには。春の鶯の囀を盡し。秋のゆふくれには。あき風のたのしひをふかせ。花のもとには。さくら人をうたひ。月の前にては。たかさこのしらへをとゝのへ。あそはせ給ひしをは。あさゆふの御いとなみとなむみえし。この事にたつさはれる人をは。そのむしろにめして。もてはやさせ給ひ。そのすちをこのみならはさりける人をは。ふみの道につけ。歌のかたによせて。またすさめ給はさりき。しかある御時に。雲の上人とりそへられて。たまのうてなになれさふらひしころ。これらのみをのりをうけ給りし時。肝にとをり。むねにとゝまりて。涙の雨とふらす。としよりは。つかさくらゐはひきく。面のしはゝたかし。かしらのかみはうつろひゆけとも。心はかはらさりけるものなれは。見るもの聞事につけて。あくかれうせぬるにや。たきのなかれにひかされぬれは。池のみきはにやたゝよふらん。あらしのをとにたくひぬれは。よもの山へにやまとひぬらむ。さゝかにのいかにしてかは。はつ鴈のかきつらぬへき。よろつにはゝかりのせきの。かたくなはしき身のありさまとはおもひ。なからのはしのひさしきなにもやのこらむと。はつかしの杜のはつかしく。をの葉ことにしほめるけしきなれは。あまのたくなはくりかへし。うけひかぬ人もややあると。まくまののおそろしけなれと。むかしのつたへやまのかひなくて。やみの夜のにしきの心ちすれは。こよひのとはすかたりをして。あすのあさけりをはかへりみさらんかも。そのをはにいはく。

すみのほる心や空をはらふらん雲のちりゐぬ秋のよの月

幾歳にきまさて人のなりぬらんと思へはいなや昨日計りか

九月十三夜大井河にまかりて船にのりてきよたき河のわたりまてのほりてかへさに頭弁のむめつにてあかき月を翫といへる事を人々よみけるによめる

紅葉ちる清(ヅイ)たき川に船てして名になかれたる月をこそみれ

大貳長實の家にて歌合せんとしけるによめる

誰か又心の空に雲はれてえもいはぬ夜の月をみるらん

殿下にて五首のうたよませ給けるにたにそこの月といへる事をよめる

てる月の旅ねのとこやしもといふかつらき山の谷のかは水（かけのイ）

月前懐往事

ありし世をむかしかたりになしはてゝ（なからイ）傾く月を友とみる哉

百首哥中に苔をよめる

むくらふのけかしき藪の苔の上にあたら月をも宿しつる哉

顯仲の公の八條の家にて人々十首歌よみけるに月をよめる

まそてもてのこへる空の淸き上に磨ける月を澄せてそみる

又人にかはりてよめる

いさ今宵行ゑしられし月みては遊ふこてにそ歸らさりける

明月如晝

くまもなき月の光にはかられておほをそとりも晝となく也

あかしにて月をみてよめる

あま小船とまふきかへす浦風に獨りあかしの月をこそみれ

漢舞明月

はれぬれは殘れるくまもなかりけり空こそ月の光なりけれ

神祇伯顯仲のもとにて九月十三夜人々哥よみけるに

たちいか南今宵の月の隈なきをみるへき程の我身ならねは

殿上おりたりけるころ月をみてよめる

てる月をみる空そなき雲の上にことへたてたる我身と思へは

月前落葉

嵐をやはもりの神もたゝるらん月にもみちの手向しつれは

別當實行家の哥合に月をよめる

軒端よりもりくる月をわきもこか玉もの裾に宿してそみる

雲居寺にて月前述懐といへる事をよめる

さよ更てくもらぬ空にすむ月はたちかくれなき我身成けり

殿下にて野徑月といへる事を

おほつかな心は月にあくかれていかていくのゝ里をすく覽

月まことにくまなくておもしろかりけれは東三條殿の池のみはしのうへにて夜もすからあかさせ給て歌よませ給けるにつかうまつれる

てる月の影にもあそふいとあらは今宵の空に見えまし物を

百首哥中に月をよめる

こからしの雲吹はらふたかねよりさえても月のすみ登る哉

修理大夫顯季の六條の家にて九月十三夜月といへることをよめる

村雲や月のくまをはのこふらんはれゆくたひにてり増る哉

ならの歌合に人にかはりてよめる

吳織ふたむら山をきてみれはめもあやにこそ月はすみけれ

月前遠情

いつもにははれぬ八雲にとちられて今宵の月や朧なるらん

月あかゝりける夜前中宮に詣て人にもの申けるにむかしの事なと申いたして女

中々におほ宮人のかけみれはむかしこひしき夜半の月哉

返し

君はさは月みてのみや思ひ出るわか面影ははなれぬものを

月前落葉

月影のかゝらさりせは紅葉はをちると計りや音にきかまし

田上に侍けるころ九月十三夜つねの年よりも空はれておもしろかりけるにしかの聲さへあはれなりけれは

いかにせん今宵の月に妻こふる鹿の音をさへそへてきく哉

殿下にて詠山月といへる事をつかふまつれる
こよひしもをはすて山の月をみて心のかきりつくしつる哉
田上にて月のあかゝりける夜むかし帥殿のおはしましゝおりの事なとおもひ出てよめる
いにしへの面影をさへさしそへて忍ひかたくもすめる月哉
月の前のいりえにうつりて魚のあそふもかくれなくみえけれは
濁なきみのもに月の宿らすはいかてあさちの數をしらまし
月のいらんとするをみてよめる
月みれはすくなみかみそ恨めしき西には山を作らさりせは
月の夜いかにも空にたなひける雲なかりけれは
月の行あたりはいはしおほかたの空にも雲のなき世成けり
九月十三夜殿下にてよめる
續古 おほつかないかなる昔さえそめて今宵の月の名を殘しけむ
おなし心を人のもとにてよめる
昔よりなそなか月のこよひしもくもらぬものと空もしり劔
秋の山の月をみるといへる事をよめる
さほかはにちる紅葉はをてにさへて三笠の山の月を社みれ
田上にてかはのほとりにたちなみたる柳の木にそまむきといふものをかけたるか月夜にこくらく見えけれはよめる
河柳さしも覺えぬすかたかなそはゝさみつゝ月みたてれと（にイ）
なか月のはつかあまりの月のあかつき方にほそくかすかに見えけれはよめる
たちのほる有明の月を人しれす心ほそさの友とみるかな
九月九日菊してかほなてよと人の申けれはよめる
ちりこにて洞める顔の花なれはなつとも菊の驗しあらめや
菊帶霜
きくこそは契も有てさきそめし霜さへいかてけふをしる覽
田上に侍ける頃九月九日にもなりにけれはとのもとと菊もとめてすきけるついてによめる
竹の葉に浮へる菊をかたふけて我のみしつむ嘆きをそする
歌繪に菊のさかりなるを女のみたる所をよめる
菊の上に心をゝきてみつるかな我身は秋のしもならねとも
修理大夫顯季の六條の家にて殘菊留秋といへる事をよめる
惜まれて花ふく秋も移ろへる菊をはえこそみすてさりけれ
百首哥中に菊をよめる
忘れては雪にまかへる白菊をよな〳〵霜のをきかへてける
菊花映霜
やへをける霜のしたなる白菊は葉をさへ花とおもひける哉
左京大夫經忠の許にて殘菊薫衣といへる事を
うつろへる色をは霜のへたつれと香は我袖の物にそ有ける
殘菊帶霜
はつ霜のをき殘したるしら菊を露やぬすみにうつろはす覽
ふしみにてつねよりも物心ほそかりけれはよめる
なにとなく物そかなしきすかはらやふしみの里の秋の夕暮
秋の夜のなかき心をよめる
秋のよの鳥の初ねはつれもなき人まちし夜の心地こそすれ
柿の木の枝のほそきにみのなりたりけるに風のいたく吹ておちぬはかりにゆるきけるをみてよめる
心してこのみもおらんゆふされはよをうみかきに嵐吹也

蓼といふ草にもみちのしたりけれはよめる
蓼のはも紅葉しぬれはよそめには唐錦とそみえまかひける
十首哥中にもみちを
もみち葉をみくらの山に初霜は朝とあけてやおきそめつ覽
又人にかはりてよめる
雲はれぬあさまのたけも秋くれは烟をわけて紅葉しにけり
田上にてはした山をみてよめる
をく霜やそめはつす覽もみち葉の叢濃にみゆるはした山哉
源中納言雅定の家の哥合に紅葉をよめる
もみち葉をきてみる人の數多あれは主も定めぬ衣ての杜
田上のみなみの山にて椎ひろひけるついてにもみち
を折てきたりけるをみてよめる
椎をのみこのみ拾ふにもみち葉を明らさまにも誰折りつ覽
百首歌中に田家をよめる
秋の田にもみち散〔し百〕ける山里をことをろかにおもひける哉
障子の繪にあれたる山さとに紅葉隙なくちりたる所
をよめる
故郷はちるもみち葉にうつもれて軒のしのふに秋風そふく
殿下にて五首の哥よませ給けるに水邊紅葉といへる
事をよめる
もみち葉の影たにちらぬ物ならはたれか汀を立はなれまし
秋の暮にきり〳〵すのなくを聞てよめる
鳴かへせ秋にをくるゝきり〳〵すくれなは聲の弱る物かは
つれ〳〵に立出てあそひけるにかれ野に女郎花のた
たひともとのこりたるをみてよめる
たれかはなかれ野を忍ふ女郎花をのれもしたへ秋の暮をは
河のむかひにむしの聲々きこゆるくれかたに今いく
よかは聞へきなと思ひてよめる
をちかたに虫も聲々おしむ也すきゆく秋に船てせさすは
秋もつゐにくれ宮この人もかへりぬれはとゝめかね
てよめる
何かさも花ふく秋にかはりゐる冬はみゆきをもたぬ物かは
九月盡
草の葉にはかなくきゆる露をしも形見にをきて秋のゆく覽
百首歌中に九月盡を
暮て行あきしお花の末ならはたおりてもたんたちや止ると
雲居寺にておなし心をよめる
あけぬとも尙秋風はをとつれて野への景色よ面かはりすな

散木奇歌集第四

冬部　十月

百首哥中に初冬の心を
（千載）いかはかり秋の名殘を眺めましけさは木のはに時雨降すは
時雨をよめる
（同）木葉のみちるかと思ひし時雨には淚もたえぬ物にそ有ける
田上のむかひの山つねよりももみちおもしろかりけ
る夕くれによめる
しくるれは夕くれなゐの花衣たかそめかけしをちの高ねそ
都のかたより人まうてきて歌よみけるに旅宿時雨と
いへるとを

とへかしな都戀しきたひのいほにしくれもりそふ草の枕を
はしの紅葉をみてよめる
いため山痛しやはしも時雨れは木々のまねして色變りゆく
はした山のやう〳〵色つくをみてよめる
時雨するはしたの山のもみち葉の色つく程のなに社有けれ
時雨染紅葉といへる事を
ふりちらす時雨にたへて鏡山影みるはかりもみちしにけり
殿下にて時雨のこゝろを
覺束ないかに時雨るゝ空なれはうらこの山を形見なせなる
田上にてさゝふの山にのほりてあそひけるにまゆみ
のもみちを見てよめる
もゝつてのいそしのさゝふ時雨してそつ彦眞弓紅葉しに㒵
おほしの山の時雨をよめる
いかはかり涙のしくれ色なれは嘆きおほしの山をそむらむ
雨後落葉
詞 名殘なくしくれの空ははれぬれとまた降物は（木葉イ）もみち也けり
田上にはへりけるほと俊重も侍けるかのほりてのち
みやこよりをくりて侍ける
紅葉せしお山の里の戀しさに時雨てのみもあけくらすかな
かへし
もみちする梢にさへそ怨みつるちらて待へき心地ならねは
たつたの山をよめる
都にて誰にかたらん紅葉ちるたつたの山の峯のけしきを
百首哥中に紅葉をよめる
立田河しからみかけて神なひのみ室の山のもみちをそみる
殿下にてちる紅葉をよませ給けるによめる

雲のゐるふしのなるさは風こして清見か關に錦をりかく
四條の宮の扇合に紅葉を
金葉 音羽山もみちゝるらしあふさかの關のをかはに錦をりかく
山家落葉
荒はてゝむねまはらなる山里はちる紅葉はを床にこそしけ
大井川逍遙に水上落葉といへる事をよめる
風ふけはとなせにおとすいかたしのあさの衣に錦をりかく
小野山家にて旅宿落葉を
吹まよふ嵐とゝもにたひねするなみたの床に木葉もる也
水上落葉
水上にもみちゝるらし神なひのいはせのさ波紅にたつ
山家落葉
山里は芝のかこひのひまをあらみいりくる物はこのは也㒵
ちろもみちを
はけしさのみ山嵐はてもなきにいかて木のはをこき散す覽
落葉隨風
木枯の烈しきうれにおり〳〵てけふしも脆き紅葉をそみる
深山落葉
新古 ひくるれはあふ人もなしまさきちる峯の嵐の音はかりして
左京大夫經忠の八條の家にて嵐送山葉といふ事を
もる山の嵐のつてにもみち葉をたれおもはすにみて忍ふ覽
柞をよめる
はくゝみし梢さひしくなりぬ也はゝその杜の散ゆくみれは
いく田の杜のまへをすくとてよめる
こきもとれみても忍はん夕されは生田の杜にこのはちる也
終夜聞落葉

獨りぬるふせやのひまのしらむまて荻のかれはに木葉散也

大井河遙道に人にかはりてよめる

となせよりなかす錦は大ゐ河いかたにつめるこのは成けり

神無月の十日頃田上より都へのほるとて紅葉のめてたかりしよし都の人にかたりちらさんなと申けれはよめる

嵐とや都の人はおもふへきもみちの色をかたりちらさは

閑嵐述懷

吹まよふ嵐のをとやわひ人のなみたの玉のをとはなるらん

ひつち田をよめる

よしさらは生るひつちのかしけつゝ物にもならて霜枯ねとや

田上に侍ける頃後重かくたらむなと申けれとみえさりけれはいひつかはしける

たれにまた思ひしらせん君まつとたゝすむにはの木枯の聲

いしらのせにあしろうつと聞て

ひをも世を過難しとや思ふらんいしらのせにも網代うつ也

百首哥中にあしろをよめる

東のまに積る網代のこの葉にてひをへてよらん程をしる哉

あしろにひをのおほくよるをみてよめる

網代木のいかちもすまに寄るひをはかきやる方も無身成鳧

都の人まうてきて落葉浮水といへる事をよめる

三年まて人もすさめぬにしき木とみれは網代のこのは也鳧

故帥殿田上におはしましたりしにくしまうされたる人々哥よまれけるに月照網代といへるをよめる

あしろには月の光もある物をなにますらおのかゝりたく覽

落葉滿網代

み山には嵐ふくらしあしろ木にかきあへぬまて紅葉積れり

十一月

山里にすみさひしくてとふ人もなきにつけても誰ともなくうらめしさによめる

都にはわすられにける身なれとも寒さはかりは尋ねきに鳧

野行幸

次郎 紫の御かりはゆゝしましろなるくちのはかひに雪散ほひて

人々十首哥よみけるにたかゝりをよめる

金 はし鷹をとりかふさはに影みれは我身も共にとや返りけり

又人にかはりて

御狩するまのゝ萩原こゐにしてはふしに鷹のふやかはる覽

左京大夫經忠の八條の家にて鷹狩をよめる

日をへつゝ狩り暮しても歸る哉はとにかはりし人も有世に

皇后宮亮顯國の君の家にて鷹狩の心をよめる

夕まくれ羽もつかれにたつ鳥を草とる鷹にまかせてそみる

おなし心をよめる

夕間暮やまかたつきて立鳥のはをとにたかをあはせつる哉

百首哥中に鷹狩を

日影さす豐のあかりの御狩すと交野の小野に今日も暮しつ

野徑寒草

道すから枯野にたてるかほかはなふりわけ髮も霜をきに鳧

ふけ井のうらの千鳥をよめる

沖つかせふけゐの浦のけはしさになころとゝもに千鳥立也

しほみては磯こす浪にあらはれてふけ井のうらに千鳥鳴也

千鳥をよめる

難波潟あまのいさりにたつ千鳥幾たひ磯をひるかへす覽

鹽釜の烟にまかふ濱千鳥をのかはかひをなれぬとやなく

百首哥中に千鳥を

あなし吹をしまかいその濱千鳥いはうつ（こずイ）なみに立さはく也

百首哥中にあしをよめる

難波潟つなてになひく蘆のほのうらやましくも立なをる哉

田上に侍ける（よめる）にかりそめのすみかとはいひなからあ
やしきにつけておほえける

（金）あし火たくまやの住家は世中をあくかれそむるかとて成皃

百首哥中に神樂をよめる

からかみに袖ふる程は殿守のともの宮つこみひしろくたけ

五節といへる事をよめる

（次郎）日影さすをみのあかひもうち解て立まふ人（袖イ）をもてはやす哉

新院の御時臨時の祭の陪從したりけるに御物忌にあ
たりたりけれは地下の人も藏人とまちにはへりける
に雪ふりておもひいつることともありてかへりにか
きつけ侍ける

山たかみ雪ふりぬれは跡たえてみし雲井ともおほえさり皃

十二月

百首哥中にうつみ火をよめる

いかにせむ灰のしたなる埋火の埋もれてのみ消えぬへき哉

山家嵐をよめる

嵐のみたえぬみ山にすむ民はいくへかけゝるとふのつか波

あられをよめる

（太郎）荒はてゝむねもくもらぬ宿なれは霰ならてはもる人もなし

いなうけし霰なれとも程ふれはさもあらぬ人の袖ぬらし皃

みそれをよめる

（次郎）霙にはゝなたの袂かへる共わかとをつまをふれすはやまし（みてこそゆかめ百）

大殿哥繪に女のおもひをもちてゐたるに水鳥のまへ
にある所を

身をつめはしたやすからぬ水鳥の心のうちをおもひ社やれ

月光映氷

池水にかよひて影のすみぬれは氷を月のつまとみるかな

殿下にて冬夜月を

霜のうへに光さしそふ月影をこの身なからもなかめつる哉

依月不忘秋

（ふゆイ）はらの池のあしまに宿る月影はわかれし秋のかたみなり皃

月のあかゝりける夜うちわたりよりさとの月はいか
ゝと人のたつねたりけれは

蓬たにしもかれにける宿なれとこよひの月はとこめつら也

衾をよめる

百首哥中にすみかまを

（次郎）君こはと埴生のこやの床の上にあさてこ衾引きてこそをれ

すみかまの煙ならねと世中を心ほそくもおもひたつかな

さえてたへかたかりける朝に伯のもとにあはちのす
み尋ましたりけれはをくるとて

炭かまの烟たえたる時にしもやくとこふ社わりなかりけれ

かへし

炭かまの口あけつれはいはす共ひをへてもまたおこす計そ

山家冬閑

跡たえてさひしきやとの冬の夜は山した風にとまらさり皃

百首哥中に水鳥を

しほれ蘆のふしはか下に漁りする鴨の浮世を流れてそふる

おなし心をよめる
次郎 をし鴨のかつくいはまの薄氷けさやうはけのとち（にイ）かさぬ覽
氷閉水鳥
夜をさむみむすふ氷や水鳥のかつく岩間のせきとなるらん
氷閉水
せきりせしまのゝなからは氷ゐていくひに波の聲絶にけり
眞野池氷といへる心を
まのゝ池に氷しぬれは蘆まなるはしも尋ねて嶋つたひしつ
氷閉河水といへる心を
飛鳥川ふちは氷にとちられていかてかせにもなり變るへき
池氷といへる事を
夜もすからまのゝかやはらさえ〳〵て池の汀も氷しにけり
氷をよめる
つらゝゐてまもる岩間のせきなれはよをへて堅く成増る覽
氷滿池上といへるを
けふよりはみはらの池につらゝゐてあちのむら鳥隙求む覽
殿下にて初雪を
いそのかみ昔の跡も初雪のふりしきぬれはめつらしきかな
おなしこゝろを
次郎 めつらしき花の都の初雪をこゝのへにさへふらせてそみる
百首歌中に雪をよめる
むは玉の黒かみ山に雪ふれはなもうつもるゝ物にそ有ける
山雪をよめる
年ふれとふしの高根をみぬ人や雪をあたなるものといふ覽
高陽院殿哥合に雪をよめる
千載 雪ふれはたにのかけはしうつもれて梢そ冬の山路なりける

加賀守有國よりことしは雪つもりて人もかよはれね
はとしかへりてなんのほるへきと申たりけれはいひ
つかはしける
冬はさはこしちの雪をなかめつゝ春は都の花をきてみよ
かへし　家道朝臣
春としもわかれぬものを都には心をとめてこしちとをしれ
大貳長實卿の家にて歌合せむとしけるによめる未逢
雲かゝるたかねも雪にうつもれて烟そふしのしるし也ける
殿下（のイ）にて雪中遠情といへる事をつかうまつれ（れイ）る
煤たれるまやのあしよりもる雪やみしゝほこしのひにも有南
賴仲か長をかの家に故帥殿おはしまして一夜とゝま
らせ給て山家冬夜といへる事をよませ給けるによめ
る
ひとりぬる宿は吹雪に埋もれていはのかけみち跡たえに鳧
田上の山里にてふしたる所に雪の積りきたるをみて
よめる
柴の庵のねやのあれまにもる雪は我かりそめのうはき也鳧
山雪をよめる
けさはしもあをねか峯に雪つみて苔のさ莚しきかへつらん
冬夜の月をよめる
みかさ山積れる雪をかき分てさし出る月の光をそみる
雪のあした女のかりつかはしける
いかてもと思ふ心は積れともゆきならぬ身は人もすさめす
十首哥中に雪をよめる
雪きえぬふしのたかねは夜とゝもにたつ烟にも煤けさり鳧
又人にかはりて

衣手のさえゆくまゝに神なひのみむろの山に雪はふりつゝ

雪興歳深

山里は積れる雪のふかさにやくれ行年のほとをしるらむ

丹波前司季房の家にて雪中待友といへる事をよめる

こぬもうしいきゝはまたし山里に積れる雪は友ならぬかは

ならの哥合に人にかはりて

雪ふれは青葉の山もみかくれて常盤の名をやけさはおる覽

雪朝眺望

眺めやる箱根の山をたかためにあくれは雪のふりおほふ覽

雪の朝に修理大夫顯季の許よりをくられて侍りける

哥

雪ふりてふまゝくおしき庭の面は尋ねぬ人もうれしかり兒

かへし

我心ゆきけの空にかよふ共しらさりけりなあとしなけれは

行路雪

雪を重み垂るみさの枝なれはさはる小笠にしつれおつ也

山路雪

春きなは思ひもかけしあらち山雪おれしつゝみちまとひ兒

雪埋寒草

いとゝしくしとろにみゆる刈萱のうれもとろはに降る白雪

歳暮述懐

物思ふ年は我身に積らすはまたみとりことといはましものを

佛名をよめる

みよのしのみな唱へつるしるしには罪もや今宵殘らさる覽

歳中立春

かすそふとなけくもしらぬ年のうちに急きたちぬる春霞哉

おなし心をよめる

淡雪もまたふる年にたなひけはころまとはせる霞とそ見る

百首歌中に除夜を

とたまの覺束なさにをかみすとこすゑなからも年をこす哉

晦日よめる

ゆく年も今宵はかりに成にけりはてなき物はわか身なり兒

歳暮の歌とてよめる

さらぴする室の八嶋のとこひに身のなりはてん程をしる哉

程もなきひとよ計りを隔にてけふをもこそといはむとす覽

散木奇歌集第五

祝部

堀川院御時に立春の朝に御前にて今日の心をよめと

宣旨有けれはつかまつれる

君かためみたらし河を若水に結ふや千世のはしめなるらん

百首歌中に祝の心をよめる

君か代は松のうは葉にをく露のつもりてよもの海となる迄

高陽院殿の哥合に祝の心をよめる

おちたきつやそうち河の早きせに岩こす波は千世の數かも

鳥羽殿にて松契遐年といへる心をよめる

誰か爲と岩根の松はいはね共景色はみよのしるしとそ見る

歌合によめる

龜山のいはかき沼にゐるたつは久しきみよのしるし成けり

治部卿通俊の八條の家にて水石契久といへる心を

そま河を誰そのかみにせき染てたえぬ岩間の瀧となしけん
中納言雅定の家の哥合に
たむけ草しけきたまえのそなれ松よに久しきも君か爲とそ
修理大夫顯季のひつめの山里にて松久友といへるこゝろをよめる
君もしか松もふたはの昔より久しくも世を過にけるかな
堀河院御時中宮はしめて堀河の內裏にまいらせ給て松契遐年といへる事をよませたまひけるによめる
雲のゐる松のうは葉の木高さに空にそ君かほとはしらるゝ
郁芳門院の根合にあやめをよめる
君か代をいはぬにひける菖蒲草ねとにみえぬはるか也とは
みふに侍ける頃人々まうてきて五首の哥よみけるに祝の心をよめる
君か代はち船のよするおほわたに立さゝ浪の數もしられす
二條關白殿にて松陰浮水といへる心をよめる
石はしる瀧のそとものそなれ松かけをならへて幾世經ぬ覽
堀河院御時所衆ともの哥よみけるに行遠にかはりて松樹契久といへる事をよめる
くらゐ山久しき松のかけにゐて賴む身さへも年をふるかな
中宮の近衞の御堂にわたらせ給て松久緣なりといへる事をよませ給けるによめる
松影のうつれる宿の池なれは水のみとりも千世やすむへき
祝の歌とてよめる
君か代をくちにまかせて祝ひつる言葉もおちす年積りませ
堀川院御時御前にて人々祝の心をつかうまつりしによめる
千年ともみよをはわかし數鳴や大和しまねし動きなけれは
新院より御扇を給て歌かきまいらすへきよし仰ありけれはつかうまつりける
いつくしきすへらはしかも御寶の群に群ても千世をふる哉
春宮大夫公實の許にて祝の心をよめる
かすか山いはねにおふる榊葉はいく萬代のしるし成らん
攝政殿下の中將と申ける時東三條殿にて池上鶴といへる事を人にかはりてよめる
あしたつのきゐるいはねの池なれは波もや千世の數に立覽
又おなし心を
池にさす松のはひえにゐるたつを波のおるとも思ひける哉
伊勢の齋宮に侍ける頃宇田といふかたにあけほのにしきのはねかくをとのしけるを聞てよめる
曙にうたのくろよりたつ鴫のはねかくをとや萬代のかす
祝のこゝろを
祝ひをきし思のとくしめの内にひき廻してもみゆるみよ
水かきにしろのとをゆふとりしてゝ遊ふも君か萬代のため
君か代はおほはつせちのもゝえつき百え乍らも榮へます哉
松契遐年
神代より久しかれとや動きなきいはねに松のたねをまき劔
春宮大夫公實の鳥羽殿の宿所にてあそはされける夜月おもしろかりけるにかはらけとりて哥よめとせめられけれはよめる
くもりなき君か千とせに盃の光をさへもさしそふるかな
中納言雅定の家にて鶴契遐年といへることをよめる
松影のいはのたむけにすくひするたつの落葉にみよを知哉

堀河院御時竹契遐年といへることをよめる
うれしやなみよなか橋のかはたけもそよと答へて風渡る也
人のもとにて祝のこゝろを
君かへんやを萬代の數とりてあまのみ空にをきたらはさん
大貳長實卿の白川のとの亼所(宿所イ)にて歌合せられ
けるになてしこにいはひの心をよせてよめる
君か代の例にひかんかすか野のいしのたけにも花さきに鳧(はさきけりイ)
祝のうたとて
月にたに扇をこそはたとへけれ君をはちよの竹によそへん
殿下にて祝の心を
春日山さかへし藤の末なれは君もうらはのうちとけて見ゆ
小野大僧都證觀白河の房にわたりていはひのこゝろ
をよめる
藍よりもあをくそめなす色もあれは千年の宿に萬代をませ
伊勢齋宮に侍ころいしなとりの石あはせといふ事せ
させ給けるにちいさき草子のいしなとりの石のおほ
きさなるをつくりて十の石にひとつゝかき侍ける(にイ)
曇りなくとよさかのほる旭には君そつかへん萬代までも
ときはなる竹の都の石なれは嬉しきふしを數へてそしる
君か代に御裳濯河をきてみれはもろゆたけにそ涙も立ける
君か住くした河にやみたれたる神の心もうちとけぬらん
大淀の濱(にイ)のまさこを君か世の數にとれとや涙もよすらむ
君か代は千年にひとつとる石のとをこにならん程を社まて(おもふイ)
ゆるきなき大内山の石なれは千年とるともおちしとそ見る
ふえかはの石なとりつと見えつるはねに萬代を吹流せとや
君か代に神もかたよる石なれはうちまくよりそ數は積れる
君かためゆたのをわけて拾ひつる千引の石に誰かあふへき

別離

百首哥中に別をよめる
忘るなよ歸る山路に跡たえてひかすは雪のふりつもるとも
帥中納言基綱のくたり給けるにをくりにまかりて河
尻にてかはらけとりてよめる
行末にいきの松原なかりせはなにゝ命をかけてまたまし
修理大夫行宗和せられたりしかともわすれにけり
彼中納言つくしにてかくれ給にけりと聞て修理大夫
のうへのむかへにくたらるゝと聞てつかはしける
戀しさに都へ靡く植木あらは手折りてきませ形見ともみん
むかしはしたしかりし人のよのありかたさに人につ
きてはるかなるほとになん思ひたつといはせて侍け
ればまかりてわかれおしみつるついてによめる
あたにゆゝ水の心にさそはれてなをうき草と人にかたらむ
あつまのかたへまかりける人のをくりしてあふさか
の關よりかへるとてよめる
なにしかも猶頼みけんあふ坂の關にてしもそ人はわかるゝ
高階經般か相模守にてくたり侍けるに父經成かもと
へつかはしける
都をは心にかけてあつまちのさやの中山けふやこゆらん
おとこにさそはれてとをき所へまかりける人の程は
くもゐにと申たりければ
人はいさ我は忘れし秋の野にむしのなく〳〵契りしことを
五節の頃とかたらひて侍ける人のはてゝまか出ける
夜扇にかきつけて給はせける

けふよりは誰も夢路に人見えはあかす別るゝ我としらなむ
みちの國へまかりける人にわかれおしみてよめる
行末にあふくま河のなかりせはけふの別をいきてせましや
はしめて伊勢へくたると聞て修理大夫顯季のもとよりむまのはなむけすとてをみなへしにつけてをくられて侍ける
今年よりかさしはしむる女郎花千よの秋をは君かまにく
かへし
をみなへしうれしき涙おちそひて露けかるへき旅の道かな
加賀守顯輔のくにへくたりけるにつかはしける
悦ひをくはへにいそく旅なれは思へとえこそ止めさりけれ
かへし　　加賀守
悦ひをくはへにいそく旅なれと心は君にとゝめてそゆく
物へまかりけるにあまり夜ふかくいてゝ露けかりけれはよめる
夜をこめて朝たつをのゝ草しけみしほるゝ袖は露の玉水
百首哥中に曉の心を
明ぬなりしはしまきれよかり衣たつねむ程に猶なつさはむ
別の心をよめる
まゐのくまはなつ日くれは別る共賤のみなはにあはさらめやは
常陸守經兼かくたり侍りけるにさうそくてうしてつかはしける帶にむすひつけて侍ける
なそもかく別れそめ劔常陸なるかしまの帶の恨めしのよや
かへし　　經兼
別とも思ひわするな千早振かしまのおひのなかはたえせし
中宮亮仲實熊野へまいりけるにつかはしける
雲のゐるみこしいはかみ越えむ日はそふる心にかゝれとそ思ふ
なるをなる所にしほゆあみにまかるとて人のもとにまかりてわかれをおしみてよめる
あすよりも戀しくならは鳴尾なる松のねをに思ひをこさん
とをき所に思ひたちける人の秋風ふかはといひたりけれはつかはしける
秋迄もいかゝは待たん飛鳥井の水はくむ迄なれる身なれは
あふみのいかこといふ所へまかりける人の許へつかはしける
いはゝやなしらてや人の急く覽いかこの浦はみるめなし共
伊勢の國へ事のえん有てまかりけるに大貳長實の白河のとのゐ所にて人々餞せられけるによめる
わかるなといふに先たつ涙こそまとはん後のしるへ也けれ

羇旅部

肥後君と修理大夫行宗といひかたらふ中にてつねに哥よみかはすと聞けるに津の國にしほゆあみにまかりてかの國より彼大夫のもとに
草枕さゝかきうすきあしの屋はところせきまて袖そ露けき
とよみてをくりたりけるをみて此哥の心にてはたゝのかたらひにてはあらさりけりと見えけれはよみてつかはしける
かへし　　肥後君
さゝかきの薄き蘆屋の露けさにしほれに皃とみえもする哉
蘆の屋にしほれもふさすかりにても露に心を何にをくらん
右兵衛督伊通の家にて六首哥よみけるに羇中曉思といへる事をよめる

いとゝしく旅ねの床の露けさにしきの羽かき泪そふなり

修理大夫顯季のなきさの院にて旅宿郭公といへる事をよめる

郭公たひねのとこに忍ふともしらてやうはの空に鳴らむ

熊野に詣けるによとにて船にのりてくたりけるにとりかひといへる所にて舟のゐてくたらさりけるに日くれにけれは

をきへなき高瀨の舟をさし据てとりかひにても暮しつる哉

又の日船よりをりてあゆみけるに雨のふりけれはみのかさきるとてよめる

うちきるに身の飾とはみえねとも雨のあしとは覺さりけり

みわの山をよめる

三輪山杉のしほりを導にてたつきもしらぬかけちをそゆく

清見關

あなし吹清見か關のかたけれは泪とゝもにもたちかへる哉

筑紫へくたりけるにたかとみといふ所にてみさこのいをとりけるをみてよめる

夕まくれたかとみつれは荒磯の波間をわくるみさこ成ける

攝津國なりける所にまかりてのほりけるにおとこのあやめかるをみてよめる

眺めやる心もともにさみたれて空はれぬまに菖蒲をそかる

伊勢へまかりけるみちにてあのといふ所にてあまの家にとまりてよめる

いせのあまの苫屋の床のかち枕あらふさ泪にめを覺しつる

つくしよりのほりけるにはかたといふ所に日ころ侍けるに箱崎の神主のりしけと香椎の神主よりもちとまてきてともにうれふる事有て互に論しゐたるをきゝて此事いかにもいはんにしたかふへくはさためんと申せはともかくもいはんにしたかはんと申けるをきゝてよめる

はこ崎の松はまことの緣にてかしゐの方もつみはさこえす

興してをの〳〵たちにけるとぞ。

あかまといふ所にて日ころになりにける程に春もくれて四月になりけれはよめる

風をいたみ春もやけさは舟出して思はぬかたに泊りしつ覽

龜のくひといへる所をいてゝまかるとてよめる

たつのゐる龜のくひよりこきいてゝ心ほそくも眺めつる哉

うしまとゝいふ所にてくゐなのたゝくをとのしけるを聞てよめる

うしまとをたゝくくゐなのをとす也波打あけて誰かとふ覽

むさけのせとゝいふ所にてよめる

賴もしやむさけのせとをいる程は立しら泪もよらしとそ思ふ

ふちとゝいふ所にとまらむとしけるにをひ風ふきなとす日もたかしとてよらてすきけれはよめる

定なき空の景色にをひ風をまつにふちとをかけてさりぬる

かはねしまを見てよめる

むかし人いかなるかはねさらされて此嶋にしもなを殘し劔

哥の嶋といふ所にて女のうたをうたひてものこひけるに明意阿闍梨の船に經よむをとのしけるを聞てよめる

うたの嶋のきの下にはをとつれて舟には法の聲そ聞ゆる

高砂にて風いたく吹けれはおきにひきこはなといへ

るものゝたちけるをみて
ひさこ花さける氣色によそなから底の心を汲みてしるかな
明石の浦にとまりて夜もすからなかめあかしけれは
月まことによふくるまゝにくまもなく晴わたりて面
白かりけれは山のはちかく成て心ほそかりけれはよ
める
おしめとも明石の浦にてる月の思ひくまなくかたふきに鳬
一のすにことなく入てよろこふ程にとゐといふもの
のまうてきて酒なと心さして侍けるを人々いそきの
みけるにことの外にすかりけれはのみさして侍ける
を見てよめる
いりぬるを悦ひ顔にのむましや一のす酒をとゐこともなく
みてくらしまといふ所をすくとてよめる
夕かけてみてくらしまを過行はその川上にたむけてそさす
百首哥中に旅の心をよめる
しなか鳥ゐなのは山に旅ねしてよはの干潟にめを覺しつる（つゝイ）
海路の心をよめる
もとめ塚おまへにかゝる柴船のきたけに成ぬよる瀉をなみ
閑をよめる
いとゝしく都こひしき夕されは（くれにイ）涙のせきもるすまのうら風
田上に侍ける頃八月はかりに風のけしきなとつねよ
りも身にしみてよめる
草の葉に風をとつれて夜とゝもに泪すゝむる秋のそらかな

散木奇歌集第六

悲歎部

帥大納言(經信)つくしにてかくれ給にけれは夢なとの
心地してあさましさにかゝる事は世のつねの事そか
しなとおもひなくさむれとこれは旅の空にてものお
そろしさもそひ人の心もかはりたるやうにてわか身
もたひらかにとりつかん事もありかたかりぬへきや
うに覺てほけすくる程にをのつから涙の障に覺えけ
る事をわさとにはあらねとかきをきたる中にきぬの
色なとかへける次によめる
すみ染の衣を袖にかさぬれはめもともにきる物にそ有ける
ことかきりありてとかくのこともせんとて有にしめ
しのやうなるものをきせけれはおほえける
しめしには涙にぬるゝ藤衣しほるさへこそかはらさりけれ
一わさのことはてゝかへりけるにすいたのゆのむかひ
に有けれはたちよりてあみんとはなけれともあしな
とすゝきけるついてによめる
悲しさの涙もともにわきかへるゆゝしき事をあみて社くれ
なに事をかはすへきとて經をのみ書ておほえける
涙をは硯の水にせきれつゝ胸をやくともかくみのりかな
事はてゝ僧ともをのゝゝゆきわかれけれはいよいよ
かなしさそふ心地してよめる
あすよりは袖の雫やひまもある涙もけふははてときかはや
はかなくすきにけれはさりとてやはとてのほりける
になにこともおほえさりけれは馬にまかせてまかる
とてよめる
今はとてかへる心はまとへとも馬こそ道はたとらさりけれ

はかたにはべりける唐人とものあまたまうてきてと
ふらひけるによめる
たらちねに別ぬる身は唐人のこととふさへも此世にはにぬ
かゝるほとにはるも暮にけれはうくひすのこゑとも
耳にとまりてよめる
鶯も春まとはして今朝よりはおなしとまりに聲をくるなり
あしつをいてゝかねのみさきといふ所をすきけるに
やう／＼つくしをはなれぬることなと心ほそきにつ
ゝみもあへられぬ心ちして
をとに聞かねのみさきはつきもせすなく聲ひゝく渡り也鳬
あしやといふ所にてひは法師のひはをひきけるをほ
のかにきゝてむかしを思ひいてらるゝ事有て
流れくる程の雫にひはのををとをひきあはせてもぬるゝ袖哉
はまにあみの見ゆるをみてよめる
吹迷ふ風もとまらぬあみのめにいかて涙の浮ふなるらん
雨ふりけれはとまといふ物をふくをみてよめる
わか袖にとまひきかけよ舟人よ涙の雨のところせき身そ
夜もすからおもひつゝけてよめる
筑紫船怨を積みて戻るには蘆屋にねてもしらねをそみる
もしの關過るにせきやに人のみえさりけれはよめる
ゆき過る心はもしの關屋よりとゝめぬさへそかき亂りける
あかまといふ所にて
君こふとをさふる袖はあかまにて海にしられぬ涙そ立ける
ひくしまといふ所のあまともくたりにもまうてきて
ものとも心さして侍けるかこのたひもまうてきてた
ひといふ魚をとりいてゝ侍けるを見てよめる
たつ涙のひく島にすむ蜑たにもまたゝひらかに有ける物を
むへといふとまりにてさきの木にゐてなきけれはと
ころからにや身にしみてよめる
鳥の音も涙もよほす心ちしてむへこそ袖はかはかさりけれ
くちなしといふ所にて
くちなしの泊ときけは身に泌ていひもやられぬ物を社思へ
むろつみといふ所をいてゝかまとゝいふとまりを過
てまかるとてよめる
むろつみやかまとを過る船なれは物を思ひにこかれてそ行
しらいしのすをすくるとてよめる
とへかしな沖の白石しらすとも物思ふねのなきこかるゝを
ともといふ所に泊りけるをまた日たかしさりぬへか
らん泊あらはすきはやなといへとも船ともみなとゝ
まりにけれはいかゝはせんとてとゝまりてよめる
舟ともはともにとまれとわひ人のなけく心はすきぬる物を
にはかにこち吹とてこしまといふ所にとゝまりてく
たりにはこちはよかりしものをなと思ひてそれさへ
ことたかひたる心地してよめる
思へともこちたき旅の涙かなはしめこしまは歎きやはせし
みやましりといふ所にとゝまりて船人山にまかりて
木これなといひけるを聞てよめる
尋てもみやましりをそさそふへきなけきこころには道惑ふ也
きにはといふ泊にて雨のふりけるにちかき程によき
とまりあらはすきはやといひけるをきゝてすきけれ
はよめる
をやみせぬ涙の雨はかゝれ共きにはとまらぬ物にそ有ける

きにはをいてゝまかるにをひ風立てはしるによめる
おふ船のほにあけて物を思ふには走る〳〵そ袖はぬれける
はしりけるに風ゆふはりてほはしらおれなとしてさ
はきけるを見てよめる
けふも又よをうみ渡る帆柱のおれぬる船の身をいかにせん
むろにまかりて日のあれけれは日來ありてよめる
淺ましやむろはうきつときゝしかと沈みぬる身の泊也けり
船よりおりてたゝすみけるにちかき程にしけること
く見えてくきぬきなとあたらしくしたるはかのあり
けれはよめる
うきことはまた有けりな朝夕にたれすみ染の袖ぬらすらん
鏡を船のみすにかけて人のゐたりけるにをのつから
かけうつりたりけるを見て
なけはなく涙も袖もうつりけり影には聲そきこえさりける
小夜ふけて郭公の聲の聞えけれは
わか心なき慰めよほとゝきすさてもや袖のかはかぬとみん
れいならぬ人のふねにあるかくるしかるときゝてそ
ひ船にのせうつすをきゝて
いとおしやまたうき事をそひ舟にうつし心もなくなりに鳬
むろには日ころとゝまりてたま〳〵いてゝこき行程
になころなをたかしとてこきもとるを見て
なころには漕き戻りけり哀れわか別れ「レイ」の道にこちもふか南
又の日高砂にまかりて船よりおりてはまにこゝろな
くさめけるになにきこゆる松はいつれそとたつねけ
れはかれて久しくなりぬといふを聞て
高砂の松にをくれてたつなみのかへるけしきそ我身成ける

風たちてあかしのうらに日ころに成て浪の音たえす
つく〳〵とおもひつゝけてよめる
藤衣袖はあかしの浦なれやかへるなみたそ時そともなき
くたりさまにあはちのゐしまを面白と聞置たる所也
かゝる次にみんとておはしましたりけるにかしこに
守爲隆かかりやなとつくりて御まうけなとしけるに
二三日計あそはせ給ひし事なと思ひ出て袖のしつく
ひまなきまゝによめる
思ひきやゐしまみしよの曙にけふの明石の袖（濡イ）のけしきを
すまの關といふ所にて千鳥の鳴を聞てよめる
日くるれは須磨のもしほ火立のほる空もなきさに千鳥鳴也
わたのみさきにて都鳥のあまたみえけれはよめる
名にしおはゝしらしなわたの都鳥心盡しのかたはそことも
おまへといふ所にて風吹なとすなころと申ものたつ
といひさはくを聞てその神にみてくらたてまつると
てかきつけゝる
さのみやは人の歎きを白波のたつはお前のしわさとそみる
あかしを過ていくたの杜をすくとて
しなはやと思ひ明石の浦を出ていくたの杜をよそに社みれ
なるをゝ過てはへりけるに松の見えけれはよめる
羨ましなるをにたてる松ならは浪かけぬ間もあらまし物を
かしまを過けるにあそひとものあまたまうてきて（詠）
うたひけれともかゝる思ひをかうふりてのほれはえ
あそはぬよしなと申ていさゝかものなと心さしてつ
かはしたりけれはまたよるまうてきてきこえかゝり
けれはよめる

かしまへは遊ひしにやとつきぬ覺戲れにても思ひかけぬを
　江口にてしろといふあそひのむすめのとゝをくして
　これ又おさなきものなれはあはれにせよなと申けれ
　は物語なとしてはるかにをくりてこよひはとゝめは
　とまりけに申けれと猶おりふしあしとてかへしつか
　はしける次によめる
止めよとしろくいへとも折節のあしわけにても過しつる哉
　みしまへといふ所にてあけほのに岸の上にあやしき
　物をはしらにあをき竹をしてさゝけたりけるをみて
　よめる
岸の上をさよなとみれは味氣なく竹のふしめに流れぬる哉
　この道になからといふ所聞ゆるはすきぬるかと人の
　たつぬれは船人のなからはくまかはのかたになんは
　へるといふをきゝて
涙のみ大河しりのかたなれはよもなからへは床しとそ思ふ
　まてといふ所にてしはしとゝまりてつなてのものと
　もに物くはせけるにきしの家ともより人々あまたき
　てみれはよめる
思ひきやうかりしゝほを過しきてけふ迄人にみえん物とは
　あまの河といふ所にてむかしあそはせ給し事のおも
　ひいてられてよめる
戀しさにあはれ昔の面影をあまの河せにやとしてそみる
　山さき近くなりてそのたひなはの海といふさいはら
　をうたひてのほらせ給ひし事の思ひ出られてよめる
人しれぬ涙そ下る今すこしのほれといひしわたりと思へは
　山さきの山里にて左大弁まいりあひてそのおりのこ
　とゝもなく〳〵とひなとしてくれかたにをかれたり
　ける琵琶なとをしのこひ笛のはこなるふえのこひて
　をきけるついてに
くり返しいとゝ竹とも心あらはうかりし節をとはまし物を
　水おちといふ所をすくるとてよめる
きしかたを思ひ出れは水おちをわかめの外の物とやは見る
　淀のわたりに付て車にのりうつりて日來の船にさへ
　わかれぬるかなしさによめる
涙もやよとむと思へはあやにくに關たにあへぬわたり成覽
　五月五日にあたりたりけれはみつのゝ菖蒲とりにや
　りてたもとにかけなとしけるついてによめる
ひきかくるみつの御まきの菖蒲草ねにねをそへて玉と貫く
　あやめのふれはふにつけても衣の色めにたちて
なきなかす袂にかけは菖蒲草ねも墨染にうつれとそ思ふ
　引かへのうしをよはせけれと見えさりけれはよめる
たち返る都にたにも引かへてうしと思ふ事なからましかは
　雨のふりけれは笠さゝんとしけるに馬のおとろきけ
　れはよめる
さし交す身をからかさのあやしさに我駒にさへ驚かれぬる
　もとの三條にかへりつきて見まはせはつねにゐさせ
　給し所にもみえさせ給はさりしかはあさましさに
こと〳〵にたつおもかけは人しれすおつる涙のか言也けり
　この家のならひにて仁和寺にあかさかといふ所に骨
　をちらしけれは送り奉りて又の日おほつかなさにま
　いりてひねもすにさふらひてよめる
古も涙をともにちらしてやあかさかとしも名をなかしけん

人のもとよりいつしかいはゝやなをなみたのひまに
はたちよれかしなと人つてにいはせ侍けれはつかは
しける
まことにや隙もとめける墨染のころもかきらすぬるゝ袂を
服ぬき侍りける日よめる
みそきして衣をとこそ思ひしか涙をさへもなかしつるかな
むかしのあまうへにをくれたりし時人のもとよりを
くりて侍ける
音せぬに覺束なさはならはれぬ哀をこそはとふへかりけれ
かへし
思ひ出るたひに心のくたくれはとふ人さへも恨めしきかな
又人の許より
風の音もいかにやよその哀たにわきてしらるゝ秋の夕くれ
返し
とはれてはうれしきたひの涙さへ朽にし袖にかゝるけふ哉
おなし頃月のあかゝりける夜人のもとより
山のはにうつろひかゝる月見ても泪やさらに袖にひつらん
返し
思へたゝひとりなかるゝ月をみてをそふる袖のなれる姿を
いみの程に結縁經供養しけるに四巻にあたりけるに
身つから書て表紙に服なる男のなきたるを書てあま
のむかひたるに經の文字よりひかりをさゝせて尼の
頂にかけたるかたはらにあしてにてかける哥
君こふる涙の瀧におほゝれてふりさけさけふ聲はきこゆや
清家みまかりぬときゝて永實かりつかはしける
仇に置ししもとにたにもぬれしかはいとゝや袖の朽果ぬ覽

尼上うせ給ひてのちみゝらくのしまの事をおもひ出
てよめる
みゝらくの我日の本の島ならはけふも御影にあはまし物を
年こえにけれは
あらぬ世にふる心地して悲しきはまた年をさへ隔てつる哉

神祇

郁芳門院の根合に人にかはりてよめる
いつよりの誓ならねは君か代を大たらしめに任せてそみる
一品宮の天王寺にまいらせ給て御念佛せさせ給ひけ
るに御供の人々住吉にまいり御社にて歌つかうまつ
りけるに
いくかへり花咲ぬらんすみよしの松も神代の物とこそきけ
山里の障子繪に所々のかたかきたるにすみよしのか
た書たる所をよめる
住江に神さひにける松なれは波もしつえに木綿かけてみゆ
百首哥中に霜をよめる
住吉のちきのかたそきゆきもあはて霜をき迷ふ冬はきに兒
悔離別といへる事をよめる
今更に妹返さめやいちしるきあすはの宮にこしはさすとも
遇事をくやしふといへる事をよめる
古を思へは悔ししめのうちにさかきさすまはおかまし物を
戀の心をよめる
身をはつとわたしもはてぬ我戀やかつらき山の岩のかけ橋
たるみの明神のやしろをみてよめる
たかのほる人の爲とやこゝにしも跡をたるみのあけの玉垣
春宮大夫公實の許にて戀の心を

いかにせんうさかの森にみえす共君かしもとの數ならぬ身を
いろなる人のしたしき人々をかそへけるにそのかす
にもいらさりしこそおもはつなりしかと人のいひけ
るをきゝて
いかにせむつくまの神も埋もれてつみ劔なへの數ならぬ身を
別當實行の家にて隱家といへる事をよめる
あたりをは猶爪めかせ神垣やみわのしるしは絕もこそすれ
左京大夫經忠の家にて社櫻といへることを
けふみれは花もすきふに成にけり風はいなりに吹とみれ共
前齋宮の閑院におはしましける頃月のあかゝりける
夜まいりてみれは女房たちあまたくして月にあそひ
けれは南おもての杜のしたにかくれてみれは女房た
ちむれてこのもりは神の社にゝたる物かないさおほ
しき事申むとてよき男給へと申を聞てとらせんとこ
ゑをかへていらふれはおちてみなかへりにけり又の
日つかはしける
思ひかね社もみえぬ杜に來ていのりしとのはよいかにそや
かへし　ゆりはな
あまくたる神もしるらん思ふこと空しき杜にゆきていのらは
榊をよめる
榊葉を神のみむろとあかむれはゆふつけ鳥のねくら成けり
春日祭
如月のはつさるなれや春日山みねとよむまて戴きまつる
加茂祭
引つれて渡るけしきを來てみれはいつきて神のかさり成ける
稻荷にまいりたる人の杉をこひけれは遣すとてたゝ
うかみにかうかいのさきして書つけてつかはしける
人しれすいなりの神に祈るらんしるしの杉と思ふはかりそ
返し扇のつまにかけり
君をとはいなりの神に祈らねはしるしの杉の嬉しけもなし
田上に侍ける頃かみのさとゝいひける所にゆわかし
て人のむかへけれはまかりけるに鳥居の有けるまへ
に道しるへのものゝおろしけれはいかなる神のおは
しますそと尋けれはもちゐの宮と申神のおはします
と云を聞て俊重かたはふれて申ける
あれ社はもちゐの宮と聞からにつく／＼と思ふ事を祈れ
といふを聞て和し侍ける
あれと見はさしてそれ共參らましよそにもちゐの宮仕へして
と申てすきにけるとそ

釋教部

左京大夫經忠の許にて寺の櫻といへる事をよめる
風ふけはみたのみきりに散花を法のむしろとしき忍ふかな
論議講したる所に捧物に扇をつかはすとてよめる
たか罪も法の扇にあらそひて風のまへなるちりとなしつる
結緣經かきたる人の法師品の心をよませけるに
君かためかけるみのりの水莖に我身をさへもすゝきつる哉
神力品の心をよめる
大空をみのりの風やはらふらん雲かくれにし月を見るかな
經の文を各とりて歌よみけるに提婆品の勤求於大法
といへるとをよめる
誰かために求てえける法なれはけふまて此身かすにもり劔
法師品の心をよめる

ひとやりの御言ならねは玉章の心をかりにかけぬ日そなき

隨喜功德品の心をよめる

法のうみ磯つたひきて浪の音をつゝむにさへもぬるゝ袖哉

陀羅尼品のこゝろを

うちはへて頼む深山のあをつゝら苦しみなきはわれ獨かな

授記品の心を

名殘なき物とや花を思はまし身になるへしと敎へさりせは

信解品止宿草庵の心をよめる

おひたちし程をしらすはかりにても草の庵に宿らましやは

人記品の心を

諸共にさき始めける花なれといかなるこのみなりをくれ劍

四卷經功德天品中に有聞(蘭)兩功德花光といへる文を

二つなき今日の誠をしるへにて法のみそのゝ花をしらはや

大光普照の文をよめる

この身しもまなき光にもれけるはまとひや空の雲と成らん

人のもとより雲居寺の大佛おかみ奉らんにくせよと有しかはいひつかはしける

雲井にてかみなき人のしなゝらは靜かに思へみはゆかす共

十二光佛の名を人々よませしによめる

無量光佛

心して數はかりなき光にもきらはれぬへき身をいかにせん

無邊光佛

普といへは限り有にそにたりけるそこともさゝぬ光なれ共

無碍光佛

へたてなさ彌陀の光につみ人の心のくまそさはり成ける

無對光佛

類なき光のうちにおさまらて數の外にやもれんとすらん

炎王光佛

名にしおはゝ炎に光さしそへて闇に惑はむ道しるへせよ

清淨光佛

いとゝしく頼もしき哉哀その潔よきよりたつ名と思へは

歡喜光佛

むかへとる彌陀の光の嬉さは名にあらはれぬいひたてれ共

智惠光佛

わひ人の心のうちをよそながらしるやさとりのひかり成覽

不斷光佛

誓ひをきてみちひく人の隙なきに光もたえぬ物にそ有ける

難思光佛

人はいさ光のすちをしるそともおなし佛やしらはしるらん

無稱光佛

たとふへき言葉も道もたえぬれはいふ方もなき光とそ思ふ

超日月光佛

月日すらまちつけつれはある物をみたの光を思ひこそやれ

極樂にはもろ〳〵のくるしみなしといふ心を

苦みをなしとも更にいはしみつ名に流れにし彌陀の御國は

池中蓮花おほきさ車の輪の如しといへる事をよめる

むまれはや廻るとならは小車のわに紛ふなる池のはちすに

常に大空には樂の音なとするといへるをよめる

笛の音にことの調へのかよへるはたなひく雲に風やふく覽

常に曼陀羅花といふ花空よりふるといふ事をよめる

色々にたへなる花の散かひはあまのみ空やまたらなるらん

たへなる花とりてつねに佛に奉るといふ事をよめる

もる人は誰共なしにさま〳〵の花にものりを供へてそみる
さま〳〵の鳥あつまりて法を說といふ事をよめる
何となくさえつるたにも有物をいかなる鳥の法をとくらん
極らくに生るゝ人は皆佛の道をゝこたらすして心思のことくになんあるといへる事をよめる
蜘蛛のいとさる身とはならす共暫しかきつく方をしらはや
心みたらすしてたのみをかくれはかならす極樂に生るといへる事をよめる
その國を忍ふもちすりとにかくに願ふ心のみたれすもかな
佛の御したはひろく長くしておほ空になんはゝかるといふをよめる
み空にも吹通ふらしおほくちのまかみか原のこのした風は
觀無量す經文十六相觀いらんとする日を見て佛のみくにをおもふ
色々の雲のはたてをかさりにている日や彌陀の光成らん
水想觀
思ふより心のちりをすゝきつる水につけても流れぬる哉
彼國の地はるりや金をしきて各光をはなつといふをよめる
光さするりのこけちにいとゝしく黃金のまさこ敷かさぬ覽
その國のうへ木は花もときはにて枝ことに光をさすといふ事を
さま〳〵の植きは花もときはにて枝もとをゝに光をそさす
極樂の池は浪の聲にみな法を說といへる事を
池水のもにすむ身とは思へともわれから法にむつれぬる哉
大方ふさねて彼國たへなる事を
きゝめてゝ願へと法にときつれは何かみ國にたへならぬ物
つくれるほとの有樣をみてまことの佛のすかたををしはかれといへる事を
ほのかにも月みる程はなくさまて心は猶そ西へかたふく
阿彌陀佛の御身は世中にみちてはかりうへからすといへる事をよめる
みたの身も天のみ空に憚かりてよもせはしとや思ひしる覽
觀音の御身は阿彌陀佛にもまさりたるといへることをよめる
すくるとはかりそめことの篠薄ほに出て誰も人におらるな
勢至は彌陀の迎へさせ給人をきよくすゝき玉ふ誓ましましてかならすすくし給といへる事を
人すくふ心きよさは現はれて彌陀のむかへにいさなはる覽
極樂の蓮に生てみたをみたてまつらん事を思ふ
限り有てはちすのぬみと生れなは終に思ひの開けさらめや
まことの佛は池になんあらはれ給といへることをよめる
世中にしつむとならはてる月の影をならひの池にすまはや
三業を調へて生たるは花とく開といへる事をよめる
思ふこと三のおしへをとゝのへてはすの初花みるよしもかな
その蓮には戒をたもちたる人なんむまるといふ事を
津の國の難波のこともたもたれは惡からぬ身とならまし物を
雙觀經文四十八願の中その國にはきよくさとりていかにもあしきおもむきのことなしといへる事をよめる
あし樣のことのゆかりは大方の耳のつてにもきこえさり鳬
その國に生ぬる人はむかしのことをしるさとりをえてそのかみのことをしるといふ事をよめる

淺ましやちよの法にもあはすして六の道にもまとひぬる哉
　彼國の人はそらをとひわたるさとりをえてよろつの
　國を見るといへる事を
あくかるゝ心に身をは從へてゆくてによもの國をみるかな
　阿彌陀佛の御光あまねくてらしてもろ〳〵の佛の御
　くにをてらすといへることを
いつくにも有明の月はさやけきにいとゝ旭の影やそふらん
　佛の御命ははかりうへからすといへることをよめる
其程とみたの御よをは限らねはいくそうき(僧祇)とも如何數へん
　法をたもつ物はことはきくさとり深くなるといへる事
　をよめる
流れくる法の浮木をこす涙はきよきのみかは音もさやけき
　かの國のかゝみのことくしてもろ〳〵の國を照し給ふ
　といへる事を
極樂は法やとかれてみかくらんよものうつれる鏡とそみる
　佛の御名をきくもの女の身をかへて男になるといへ
　る事をよめる
かの岸にわたらん物はあすか河さはりの淵や瀬になりぬ覽
　名をきくもの佛の道を退せすといへる事をよめる
年ふれとくちせぬ橫の宿なれは降とも雨のもらしとそ思ふ
　九品往生經文十二光佛
何しかはかけても程をしるすへきあふ計りなき光と思へは
　佛御光ほとりもなしといへる事をよめる
つま籠し神のやへ垣しけくともみたの光のさゝさらめやは
　さはる所もなき光といへる事をよめる
法の船にみたの光やさしつ覽浮瀬をこせとそこもさはらす

　たくひなきひかりといへる事をよめる
さりともとなをかことにも賴む哉積れる罪も類なけれは
　炎王光佛
ならくかの底迄させやけゝらなくほにてる光闇もけすかに
　きよき光といへる事をよめる
わきかへる清たき川の瀬を早み沈むみくつを浮へさらめや
　よろこひの光といへる事をよめる
嬉しさの光を袖につゝみてもうらなる玉をみるよしもかな
　さとりのひかりといへる事をよめる
いりかたき人も悟のひらくにはのそむ光そさはらさりける
　たえせぬ光といへる事をよめる
後の世はわれと都にまよはめやたえぬ光のちかひおちすは
　思ひかたきひかりといへる事をよめる
そのほとゝ思ひ難きはよもの海にそこゐもしらぬ心成けり
　無稱光佛といへる事をよめる
思ふには空をもなとかとはさらんみたの光そさはる隈なき
　日月の光にもまさるといへる事をよめる
月も日も軒はかくれもある物をみたの光そさはるくまなき
　一切經の阿彌陀佛偈文かの世界はきよきなのみあり
人わたす波の立ゐにあらへはや清見かせきとなをとゝめ劍
　その國にはよろつたひらかにて高くくほなる所なし
なにことも心にかなふ國なれはへたつる山の木末たになし
　彼國はなかるゝ河の(ゐイ)みありて法をとくといへる
　事をよめる
わか袖のしほるとならは流れつゝ法をとく覽水にぬれはや
　天人水にいりてたはふるといへる事をよめる

羨ましみのりの淵に戯ふれてたへにもあまのかつく成かな
もろ〳〵のみのりはみなかくれなん時にあみたの御法のみのこるといへる心をよめる
誰しかも哀とみえんけぬもせてやまかたつけゑ春のけたれを
龍樹十二禮文
佛まことにたへにやすらかなる國におはしますといへる事をよめる
ぬしもぬしところも所たとふへき方も渚によするしら浪
佛の御身の色こかねの山のことしといへる事をよめる
時雨つゝ色つく山のこのまよりいつる光によそへてそ見る
佛のむかひにおはしましたる光なん千の日のことくになむ明かなるといへる事をよめる
誓ひおちすむかへをのへの朝つくひちへに集へる光さします
觀音の御頂におはしますあみた佛をおかみたてまつる事をよめる
峰たかきをはすて山の梢よりさし出る月のひかりをそみる
佛の衆生をあはれませ給御意なんおほ空よりもひろきといへるをよめる
浮世には思ひの外にかへるとも心ひろさのうちにいりなん
もろ〳〵の衆生をみちひかんとちかはせ給ちからによりてなん此よにおはしますといへる事を
むらさきの雲のあたりもみえぬかな人をみち引心つよさに
もろ〳〵の佛の御國より参りあつまり給ひたる佛はさつたちの御光あみたふつの御床にさしあへりといへる事をよめる
思へ唯こそりてきます光さへさしあはせたるみたの御國を
そらをかけるさとりをあらはしてかの國にきたるといへる事を
嬉しくも心のまゝにきたるかなあまのみ空を玉ほこにして
極樂にあしき道なき惡き名なしといへる事を
流れくる御法の水に現はれてみつの道にはあしみたになし
かの國にはもろ〳〵のおもむきにあしきともなし
何事もともにくしてもみゆるかな心をくへき人しなけれは
極樂にはいかにも惡き事をは名にいはすといへる事を
惡樣の事のみまなき身をすてゝ名をたにいはぬ國へゆかはや
よろつによき事のほとりもなきさまなん海のことくにあるといへる事をよめる
よもの海たとふる國のかたなれは心も西へなみよりにけり
往生論偈
かの世界は廣き所なんおほそらのことくにあるといへる事をよめる
春雨のあしとは人のふりくれとさなくもみえす程の廣さに
その國の草やはらかにして鳥のたはふれあそふになんくるしみなきといへり
其國はふれけん鳥も羽やすみ草のはかいもすゑなひやかに
諸の花くさ〳〵にさきみたるといへる事をよめる
そこはくの花の紐とく庭の面にをしのけたるははちす也皃
たからのうへきにかうらんめくれり
いとゝしく菊の玉江の光れるを廻れるませやもてはやす覽
たからのあみそらにあまねくあり

ひまもなきあみにも鳥の驚かてあそふ羽風に花やちるらん

諸のかうはしき香あまねくにほふ

極樂はおほ空さへそなつかしき匂ひかはらぬ物しなければ

心にも身にもなやましき事なんはなるゝといへり

くるしともうしとも物を思ひしはみし夢の世の心なりけり

佛の御聲たへにえもいはすといへり

稻妻の光のまにもなるかみの聲にとくらん法をきかはや

あまねくよろつの佛の法とく國をてらしたまふ

よものくに法とく庭のしけきかと思へはみたのひかり成覽

十住毗婆娑論偈文

たへなる蓮色にしたかひてひかりをさす

涙まよりさける蓮の色ことに光をさへもかへてさすかな

若人種善根

うへをきし心のはちす開けなんねかふ涙をうるほひにして

見るものみなよろこひをなす

うれしさにたえぬ涙やつもりゐて我身をかさる玉となる覽

かのやつのみちの船にのるといへり

つみ人も法のみ舟にたすかりてくるしき海をわたるとそ聞

往生要集十樂よめる十首

聖衆來迎樂

珍らしくたてし誓ひの誠あらはひきゐてきませけのたえぬまに

蓮花初開樂

あやしくも蓮のうちにむまれなは開けぬともと思ひける哉

身相神通樂

天とふやかりの社に身をなして祝ひし月のさかへてそみる

五妙境界樂

しかはあれと思ひたゝれぬ心こそ罪深き身のはたし成けれ

快樂無退樂

ことはりや潮のみちひる海にたにいりぬる水の返る物かは

引攝結緣樂

てをさへて結ひ止めし水のあはを嬉しきせにもかき流す哉

聖衆俱會樂

かけまくもかしこき法の聖とやかたしけなくも膝を交へん

見佛聞法樂

めもすまに守るしなゐの隙をなみとけるみ法の聞もいとなし

隨心供佛樂

時となく花のあか水むすふての乾かぬまてもそなへつる哉

增進佛道樂

遙々ものほらんとそ急かるゝほとけの道やさかしかるらん

阿彌陀小呪

歌のはしめの字に阿彌陀の呪の字をゝける

おくろさき淺きとたゝのみを盡し立る姿にふりぬとはみよ

この身いかなるかたへかはされて思はぬかたへまとはんすらむといへる事を

武藏のにまちたる鹿のをはされて思はぬ方へゆかむとす覽

としのつもりにはあやしきことのみかさなりてよろつにひきいらるゝ身のありさまによそふ

秋津島しほのとゝみに埋れてかくれ行身をとふ人もなし

身のあやしさにおもひくつをれて念佛をたにせぬによそふ

身の程のうきを思ふにまとはれてみたの敎へも賴まれぬ哉

りんたうといふ花のかれのにのこりたるによす

りんたうの枯野にひとり殘れるは秋のかたみに霜やをく覽

たまくく念佛はすれとも心もたゝれぬによす

誰爲のなをさりとにあみた佛と物うかるねに唱へしもする

心もたらぬ念ふつはかたくくにうたかはしきによす

てもたゆく繰返しつゝ唱ふれといさゝあみたのみな知らめや

もしもやとたのみをかくるをよす

いさゝめに哀と見ませときまつとみたを賴まん心はせをは

思ふとのみたかふ身なれは後世もいかゝと思ふによす

せりつみし心ならひの悲しきはみたの誓もたのまれぬかな

極樂のかたはしに君かたにまいりなはと思へともなを佛にならましきとのおほゆる事をしはかりてよめる

如何にくくとみ向へえてはありなめとなをしなみなき品そ欲けき

後の世のともこのよの有樣にてをしはからるれは涙つきせぬ心ちして

葛飾のわさ田のをしねこきたれてなきも絶えしと盡ぬ涙か

女の旁に障あるたにねかへはまいるなりまして此身はあやしけれと男のまねかたなれはなとかはとおもほえて

乙女すら願へははすにむまる也うへしせなにてなに歎らん

彌陀のちかひは人きらはす給はすと聞てたのもしさによめる

迎ふるはせつりもすたも嫌はねはもれしもせしな數ならす共

世中のさためなきにつけても船なとにのりて風にゆらさるゝ心地してよめる

そゝきずる嵐かさゐにゆらされぬ迎へにきませみつの蜑人

女なとの後の世の事思はて何ともなくてすくるにあはすれは時々も思ひいられておそろしさによめる

はしけやしなれ社榮へいな我はみたの御國を好もしと思ふ

かみには眞言の文字をゝきてよめれはたはむれなれとたのもしさによめる

上にをけるもしは眞の法なれは歌もよみちを助けさらめや

散木奇歌集第七

戀部上

百首哥中に初戀の心をよめる

難波江のもに埋もるゝ玉かしはあらはれてたに人を戀はや

忍ひたる戀を

あさてほす東乙女のかやむしろしき忍ひてもすくすころ哉

初遇戀

芦のやの賤機おひのかたむすひ心やすくも打とくるかな

不逢戀

あふ事のかたなのはをもあゆむかな人の心の危ふまれつつ

旅　戀

したひくる戀のやつこの旅にても身のくせなれや夕轟きは

後朝のこゝろを

とへかしな誰もさそとは知ぬらん今朝しもしぬる心弱さに

遇不會戀

山賤の芦屋にかけるたかすかきふしにくしとも思ひける哉

思

むやひするかまのほ(をイ)縄の絶はこそ蜑のはし舟ゆきも別れめ

片　思

いはみ潟をたか磯による涙は碎けてかへる物としらはや

恨

何事にうらむと波はあやかりていとふ涙のしのにちるらん

長月の十日あまりのほとに女のかりつかはしける

かつらきの神ならぬ身の悲しさ(きイ)はくるれは物を思ひます哉

人のかりつかはしける

芦間行たなゝし小船人しれすこかるとすれとさはりかち也

人のもとにまかりたりけるにこよひはかへりねと申けれはいひつかはしける

數ならぬ我身はよるの衣かはきつれは人のまつかへすらん

かへしをんな

なをさりにきたる人をやさよ(ハイ)衣かへす計りの戀によそへむ

戀のうたよみける所にて

君かため日つきに[れイ]たてるにしきゝの下くつ計り成にける哉

さゝめかるあら田の澤にたつ民もみの爲にこそ袖も濡らめ

信濃なるすかの荒野にすむ(はむイ)熊のおそろしきまてぬるゝ袖哉

御園生のまをのあさ萩なゝ(まイ)たくりたくるにつけてをく(つイ)る君哉

菫つむ賤のたふさにしなへたる形見にたにもこふと聞はや

わすれ草しけれる宿をきてみれは思ひのきよりおふる也鳬

夏の戀のこゝろをよめる

つらしとも思ひなさすは夏衣たゝひとへにや戀しからまし

物申ける人のつねにあやしきとの有けれはうらむるを聞てくせ〳〵しさなとたくひなさと申けれはまゝきのやたてのひらなるにむすひつけてつかはしける

まろならぬやたての竹も節をにくせ〳〵しくてよをは過鳬

人にわすられてはらたつといふ(へるイ)事をよめる

よし思へとかくに戀の忘られてなけ(ハイ)くやわろき君や賢き

殿下にて戀の心をよめる

夜とゝもに戀をおほめく人にこそ我姿をはみすへかりけれ

みなくゝり絹の(はかひ)のかひもなく人を雲井のよそに見る哉

年へたる膝のうへきのこちたさをしらても人に身を(かふる)哉

君こひて我せこにさへうとまれぬこや羨みてあゆみせし人

みさこたにうやま(ミイ)ふ礒を打(立イ)曝しあらふる鰹をなこめ兼つる

戀しさに涙の色もかはり行つもりはいかゝならむとすらん

たまさかにくるとはすれとめを渡る鳥の早くも歸りぬる哉

寄衣戀

唐衣ふちのまろやはあやにくも重(にイ)ねも敢すぬきすてゝこし

ふみをみぬこひ

文みすと聞につけてもうたしめのはしたなき迄ぬるゝ袖哉

ゆふへのこひ

みくまのゝはま夕暮になる程はいくへか人をこひ重ぬらむ

殿下にてこひの心を

秋かへすさやたにたてるいなくさのねをにも身を恨つる哉

戀催舊意といへる事をよめる

初瀬河いはもとさらす行水のわきかへりてもぬるゝ袖かな

こひの歌よみける所にて

先きては人めもしらすあたらし(つらイ)を何さま惡(あさましイ)とはしたなめ剱

ある人のもとになそ〳〵物語をあまたつくりてとかせにつかはしたりけるををさまにときたりけるを又

つかはすとてよめる

いかでもと思ふ心の亂れをはあはぬにとくる物とやはしる

殿下にてこひの心をよめる

日くるれは忍ひもあへぬ我戀やなるとの浦にみつしほの音

人にさはるこひ

逢事はまれかの浦にあさりする蜑もさのみや人めもるへき

殿下にて

戀し共さのみはいかゝかきやらん筆の思はん事もやさしく

待人といへる事を

（次郎）いつとなくこぬみの濱に君待と漂よふ波のたゝぬ日そなき

人のもとよりたひ〳〵申せと御かへりなきはいかなるをそもし文をみぬかなといひたる人の返事にしける

いさやまた文も見られすともすれは跡絶の橋の後めたさに

遠き道をへたてたる戀といへる事を

すくせやななそいなむやの關をしも隔てゝ人にねをなかす覽

且見戀

ひえの山その大たけは隱れねとなを水のみは流れてそふる（ミイ）

隔月戀

かきたえてみつきに成ぬこれやさは心盡しのかとてなる覽

みつきといふは。つくしのふのかとてなり。

隔年戀

年こえぬさのみはまたしなか鳥ゐなのみそかは過しとな覽（きしとすらんイ）

隔一夜戀

笛竹のあな煩らはし一よをもこぬをつらさの節にせよとや（なせイ）

しのひたる戀

奥山のくきかくれなるはたつもりしられぬ戀になつむ頃哉（まとふイ）

はしめたる人のもとへつかはしける

けふつゐに爭ひかねつ我心いはて慰むことしなけれは

うたかはしといふ人のもとへつかはしける

心みよよもつらからし播磨なるしかまの市に人はたゆとも

郁芳門院の根合に戀の心をよめる

戀佗てねをのみなけは有馬なるいてゆゝしけの袖のしほれや

人のもとにまかりて後いかなる事か有けん送て侍ける

音なしの瀧とはいかに流れまし冬ふかゝらぬつらゝ也せは

かへし

岩くゝる瀧のうはへは氷る共とゝろきおちん程はたえせし

かたらひける人のとも人に物申と聞てうらみ侍りけれはあれはむかしよりいひそめたれはなと申を聞て

春たてはめくむ垣ねのみやつこき我こそさきに思ひ初しか

人のもとにまかりたりけるにおまへにいとゝ（まイ）ふたかりてえおりすと申たりけれはいひつかはしける

終夜たきりておつる涙かなこやまちかねの山河のみつ

返し

岩間もる絶まをまつはくるしともおもひしれかし山川の水

堀河院の御時中宮の御方にて殿上の人々歌つかうけるに戀の心をよめる

夜と共に苦しと物を思ふかな戀のもちふとなれる身なれは

おとこかれ〳〵になりてなけきける人にかはりてつかはしける

通ひこしまのゝ繼橋ほと〳〵（ほとイ）に音たえぬへき身をいかにせん

十月はかり人のかりつかはしける

佗人の袖ははゝその杜なれやしくるゝまゝに色かはりゆく

雖契不來

いさまたし人の憎さに己か身の言葉にさへも見するはち哉(計哉イ)

かたはら〳〵になき名たちてなけく人にかはりて
人のかりつかはしける

色々にかかきせたるぬれ衣はいつはりしてやぬひかさぬ覧

中納言國信の家にて戀哥合しけるによめる

初戀

風吹はたちろく宿の板しとみやふれにけりな忍ふこゝろは

後朝の心を

契有てわたりそめなは角田河かへらぬ水のこゝろともかな

過不會戀

戀しさにたえすなかるゝ我袖のなみたを人の心ともかな

夜戀

よとゝもに玉ちる床のすか枕みせはや人によはのけしきを

經年戀

君こふとなるみの浦の濱ひさきしほれてのみも年をふる哉

殿下にてわれ人をこふといへる事を

下の帯のいひ惑はせといきもあはす短かゝりける我すくせ哉

人戀我

くちぬらん袖そゆかしき我駒のつまつく度に身をし碎けは

もの申ける人のはゝに申へき事の有てまかり(てイ)
たつねけるにたひ〳〵なしと申てあはせさりけれは
つかはしける

帚木はおもてふせやと思へはや近つくまゝにかくれゆく覧

人のかりつかはしける

大かたは思ひたえなん池のあまの釣のうけ引事しなけれは

人のもとにまかりてきぬへたてにふしてかへるとて
申かけゝる

隔てつる衣の關のかたけれは恨みてそ(もイ)ふる人のこゝろを

人のもとにまかりたりけるにこよひはかへりねと申
けれはよめる

佗人は風のしたなる葛なれやよな〳〵(よひイ)くれと返りのみする

人を尋けるにうへにといはせてあひ侍さりけれはよ
もすからたちあかして歸りにけれはあれよりいとお
しくいかゝおほえしといひたりけれはつかはしける

思へ唯袂は露にそほぬれてたちやすらひし夜半のけしきを

あるましき事なといへる人のかりつかはしける

遙かなる雲井をわたる雁金もつるには澤におるとこそきけ

春宮大夫公實の家にて戀のこゝろを

水の海とおつる涙は成にけりあふへきしほもなきと聞より

戀の心をよめる

とかりするさつをの弓弦うちたえてあたらぬ戀にやなふ頃哉

殿下にて戀の心をよめる

いひ初し言葉と後の心とはそれかあらぬかいぬかからすか

よそにみて人をこふといへる心を

若草をたゝ假そめに見しひより東ねもあへぬ物をこそ思へ

人をうらむといへるこゝろを

恨むるも戀しといふもきゝとけはひゝきと聲と水と氷と

違約束戀

よも〳〵と頼めし君か言のはゝ秋立ぬれはかれ〳〵になる

歌給に男の女にあひたるまへに思ひのやつ有所をよめる

思ひやる心やちゝにさそふらん頼めぬたひに君かきませは

堀河院御時に女御殿の御方にまいりたりけるに人の扇に手ならひせさせけれは書付侍ける

わきもこか姿の池をみつるより涙のたちゐに物をこそ思へ

しりたりける人のゐなかにまかりてほとへぬれはいまは忘れたるらんといひたりけれはつかはしける

忘れめや涙にそめし紅のやしほのころも色しあせすは

たかきをおもふといへる事を

谷河のみかけにつくるまろすけも雲ゐる峯のいは根をそ思

人のもとに文つかはしたりけるに返事をせさりけれはつかはしける

誰をとも定めぬ山の山ひこもわれとしきけはこたへさり覺

かへし

をしなへて答へぬ山の山彦をうはの空にもよふことりかな

別當實行の家にて忘後人をこふといふ心を

かきたえし程ふる川の底みれは流れし身をそおもかけに立

わすれたりける人のまた程へてかへらんといへりけるをきゝて女にかはりて

かきたえし人は(乖イ)わすれて今更に思ひ泉のわきかへるかな(らんイ)

大貳長實の白河の宿所にて被下戀といへる事を

小刀の東のまにたにあはゝやと思ふ身をしも(たやは)さくへき

戀のうたとてよめる

逢までとたちも歸らて程ふれはおのゝえならぬ袖もくち覺

胸はもえ袖は涙にしほれつゝひ水にいれるこひもするかな

思はんと頼めしことはあみのめにたまらぬ風の心なりけり

雨中戀といへる事を

我袖をひちかさ雨にそほぬれてさほす(はさすイ)といはん君そ(もイ)おこる(下闕)

人のなく〳〵うらみけれはかへりてつかはしける

せたの橋の馬ふみ□くちめおほみそこの泪そ面影にたつ

修理大夫顯季の六條の家にて七月七日に寄織女戀といへる事をよめる

七夕にかしつと思ふ戀しさをかへせはやなを袖のぬるらん

おなしこゝろを

うかりける武士なれや七夕もこよひになれはあふなる物を

とはんなとちきりける人の久しうおともせさりけれはやらむとて人のこひけれは

思はんと頼めしことの忘れなはとはれぬ身をも恨みさらまし

かたちよしといはれける人のもとへつかはしける

住吉ときくにもかゝる涙かなあふせ待まのいつとなけれは

物申ける人のあまたの人に物申と聞てよめる

武士のかりにのみくる秋の野をすみかと頼む鹿そはかなき

さゝくみといふ物を女のもとよりみせにをこせたりけれはかへしつかはすとて

君と我むすほゝれなは河竹の流れてもみようきふしや有と(すイ)

つれなくのみ侍ける人のもとへつかはしける

明くれは物思ふ事をたくみにてわりなく胸をしる人そなき

はるの戀といへる事を

思ひかねいくのゝ里をへたつれは霞をさへもうらみつる哉

冬　戀

逢事はさゆる朝の水なれやとゝこほりつゝとくるよもなし

堀河院御時艶書合といへる事をせさせ給ひけるにつかうまつれる

數ならてよに住の江のみをつくしいつを待ともなきよ（身イ）也㒵

かへし　中宮上總

流れてもあふ名はたてし住江のみをつくし（くイ）にてたちははつ共

又をんなにめして男に給はせけるに

浮身なら人もつらしと知ぬれとことはりなくもおつる涙か

かへし　四條宮甲斐

かりそめのたえまをさへや恨むへきことはりなきは泪のみかは

たかひてあはすといへる事を

玉ゆかのおましのはしに肌ふれて心はゆきぬ君なけれとも

夏戀

あふ事は夏野に茂るこひ草のかり拂へともおひむせひつゝ

ねさめのこひ

まとろむに戀しきとの慰まはねさめをさへは恨みさらまし

なをしはしなと申ける人のもとへつかはしける

ねらひするゐなの芝山ふゝきしてたえて待へき心地社せね

更衣の朝に人のかりつかはしける

けふよりは衣とゝもにつれもなき人の心もかはらましかは

大貳長實の白河の宿所にてよめる

來ても又かへる朝のかなしさにこぬをうしとも思はさり㒵

春宮大夫公實の家にて人々戀の哥よみけるによめる

つらゝゐて軟る汀のさむしろにおれふす芦のねをのみそ鳴

男の女のもとに草子かゝみを忘れてこひにをこせたりけるに返しつかはすとてくすへき歌とこひければ

忘るゝに心のほとのみえぬれはかねてつらさの増鏡かな

大殿の歌繪の中に男のつらつえをつきてゐたるまへにこひ思ひあり又へといへる物あり鵜むかひてたてりからの女ひとりある所をよめる

戀しともいさゝはいはし年をへてうきから人を思ひ出るに

同繪に女のかみをかきこしてなつる所を

かきやりし人の袂の戀しさにいくたひ髮をふりこしつらん

寄鳥戀

玉櫛笥ふたみの浦にすむ千鳥唯あけくれは音をのみそなく

人のかりつかはしける

うたゝねの夢路にみえし逢事を春のよとたに思はましかは

物へまかりけるみちに澤に鵜のさはきけれは

いととしく物思ひをれは山かつのすけ刈澤にたつさはく也

修理大夫顯季の八條の家にて人々戀の歌よみけるに

山鳥のはつをの鏡かけふれて影をたにみぬ人そ戀しき

鳥羽殿にて人々戀のうたよみけるに人にかはりてよめる

かはり行人の心はつらからて忘らるゝ身をうらみつる哉

哀なりこひにてよをはつくせとや身は淀川の底（をイ）にすまねと

あし北のゝさかの浦のうつせ貝いもせそなへて幾夜へぬ㒵

雨中待人

雨降し日はあやにくにこし物をこは誰なれや訪つれもせぬ

寄虫戀

夕顔のしけみにすたくくつわ虫おひたゝしくも戀さけふ哉

戀のこゝろをよめる

やへふけるまやにも雨はもる物をなを（そイ）わか戀の隙なかる覽

とゝむれと不留といへる事を

秋風にすゝきのなます思ひ出てゆきけむ人の心地こそすれ
　戀のこゝろをよめる
もろこしと何思ひけんさとられぬたまになきけん人の涙を

散木奇歌集第八

戀部下

　修理大夫顯季の八條の家にて人々戀の歌よみけるに
　よめる
増鏡うら傳ひするかさゝきに心かろさの程をみるかな
　よへともかへらすといへる事を
御狩のにかさなかれするはし鷹の聲にもつかぬ恨をそする
　憑不遇
賴めつる言葉にことの戀らすは辛さはかりや嬉しからまし
　くれともあはす
心えつまのゝ萱原ふみからしくるもしるしのなき身也けり
　思不言
心あひの風ほのめかせやへすかき隙なき思ひにたち休らふと
　人を見てこふ
はねかつら赤裳の裾に繰ためてはなふく妹をふれすはやまし
　中納言俊忠のかつらの山里にて戀のうた三首よみけ
　るになき名たつといへるとを
たちしよりはれすも物を思ふかななき名や野への霞なる覽
　皇后宮權大夫師時の八條の家にて哥合によめる
これをみよむつ田の淀にさてさして萎れししつの麻衣かは
　人々あまたまうてきて五首歌よみけるに戀の心を
しるしあれや竹の丸ねを數ふれは百夜は伏ぬしちのはしかき
　殿下にて戀の歌よませ給けるにつかうまつれる
君こふとゐの刈藻よりね覺して編けるぬたにやつれてそみる
　前左衛門佐基俊の家にて戀の心をよめる
てにとれは涙にそへる水莖のつかのまたらやかたみなる覽
　前兵衛佐顯仲の八條の泉家にて人々十首の歌よみけ
　るに
あちさゐの花のよひらはをとつれてなそいなのめの情計りそ
淺ましやこは何事の樣そとよ戀せよとてもむまれさりけん
　又人にかはりて
戀すてふ猶ぬれ衣といふへきにやかてもきする我なみた哉
　戀の哥とて
涙河かけにもはちすおりたちて老の浪にもぬらす袖かな
　人にわかるゝ戀といへる事を
我を君心のまゝにすかしまのとをなつみのうらみてそ行
　障本夫戀
沖つ浪しはしなかけそみさこゐる磯傳ひきてつまゝたを覽
　かへるをなけく戀
つく〳〵と思ひたむれは手束弓かへる恨をつるはへてする
　思　夫
をくれとてそふる心や道すから駒のつまつくはしと成らん
　人にしらるゝこひ
槇の板をほろにあたして通ひこん眥ひも敢す妹かしなひに
　競人戀
誰をけふ心をしかにかけつれはあひ遲れてはいられはイさり兎
　難休戀

鳴海潟うのすむ磯に生るめのめもかれす社みまくほしけれ

戀遠人

ちつのほきとちのわたをもこえぬへしそれにおもねる心也せは

相思戀

我もしか戀しと計りいひつるや珍しけなきゐのこなるらん

隔月戀

あひもみて重ぬる月をわきもこか衣の袖とおもはましかは

後朝戀

消すからぬしなき戀やあくかれて歸る我身になりへきぬ覽

戀哥とて

朝おきて口にはなもと唱ふれと心は君を戀つゝそをる

不見書戀

年をへて隣のかへはくつせとも夢にも文をみぬそかなしき

寄鯉戀

おろさせてなますてありとみつるよりみつのみゝさへこいしさやなそ

戀のうたとてよめる

ねぬなはに枝さしかはす丸小菅まろをこすとや妻と定めし（もイ）

殿下にてかへさるゝ戀といへる事をよめる

秋の田の刈穗もなく返されて忍ひもあへぬねにそそほつる

寄小兒戀

逢事の片言しけるみとりこはなこそもいふもことそ聞ゆる

寄鳥戀

君をゝきてことこひするか奥山に水戀鳥のみつこふかこと

かたらひせる人のこの頃はいかなるをにか色もあを

みおとろへたるはなと申けれは

戀草にしみかへりたる色なれは思ひ初けむ日をそうらむる

稀通戀

ひる鹽のとゝみならすはやそ島にたえま勝なる恨せましや

殿下にて推量戀といへる事を

大かたの心憎さをしるへにてあやうくものを思ふころかな

海路戀

戀草をさしにゝつめる舟なれはかしもみとろし心せよなみ

女のかりつかはしける

戀しさに身のうき事も忘るれはつらきも人は嬉しかりけり

大殿の哥繪に山里と覺しき屋のつまに女ひとり詠て

ゐたる所におさなきちこふしたりそのかたはらに女

のきる裳といふものをゝきたりまへに田の有にかも

といふ鳥ひとつゐたりまたいもしとおほしき（くてイ）

かりこゝのつとひたる所をよめる

君まつと玉藻の床におきふしていくたひ鴨のうきねしつ覽

人のかりつかはしける

冬の池の入江の蘆まさえ〳〵ていつかは霜の（ちちも）とくへき

つれなくのみ侍ける人のかりつかはしける

侘つゝも頼めたにせよ戀しなん後の世までも慰めにせん

こひのうたとてよめる

露を重みたはゝに匂ふ萩のえのえもいひしらぬ戀もする哉

なこその關のこひといへる事を

東路のなこその關も我こふる人の心の名にこそ有けれ

人のかりつかはしける

今そしる人こふる身のかなしきは涙に袖のくつる也けり

殿下にて戀の心をよめる

きのふ迄さひわにみえし姫百合のいつたち馴て人しみぬ覽（とね也イ）

寄花戀

我こふる人にゝほひの庭櫻おれは心のゆきもするかな

はるの戀

霜かれの野へともなしに春たてはもえても物を思ふころ哉

梅の花にむすひつけて人のかりつかはしける

匂ふかに思ひよそへて梅の花おるにつけてもぬるゝ袖かな

寄水雞戀

水雞をは鳴をたゝくと聞なして我をはとはて空を尋ぬる

後朝心を

夜をこめて歸らさりせは葛のはのあく共けさを恨みさらまし

寄酒戀

よの人はとひ菜ふ共すまさらはみきとないひそ暫しもらさし

經年戀

年ふれとこすのきけきのたえまよりみえつゝ浪は（しらなひはイ）面影に立

修理大夫顯季の觀音寺にて歌よまれけるに寄躑躅戀

といへる事を

いなゝらはいひも放たてもち躑躅やにかけたるはひこしろへとや

加賀守顯輔家にて人々（人イ）哥よみけるに戀の心を

かりつめる我戀草はもゝしらへこまにあは（かイ）ねはつくるまもなし

初戀

ふりはてゝ（いイ）いひ（ゆイ）初つれは紅のあくけなくてもかへりぬる哉

神祇伯顯仲家にて逐日增戀といへる事を

日をへつゝあ（にイ）くらの（うらイ）濱の忘貝わすれはてぬとみるそ悲しき

中納言俊忠か家にて戀歌十首人々よまれけるに逢む

事をうらなふといへる事を

神風やみつの柏にことゝひてたつをま袖につゝみてそくる

くれとも不留

思ひ草はするゑに結ふ白露のたま／＼きては手にもかゝらす

ふしなからまことなし

小車のわつかにとこをみつれ共錦のひもはとけてかへしつ

祈とも不過

千載　うかりける人を初せの山下しよはけしかれとは祈らぬ物を

追從戀

おかみ河ねしろ高かやふみしたきとる足つきもせなか篤とそ

すかひてあはす

假初にいるとや鹿の思ふ覽あふひとすれは身をかくしつる（つゝイ）

いやしきをいとふ

怪しきも嬉しかり覺おとしむる共言のはにかゝると思へは

かたきをとく

遙けくと思ひかけては山水の分てもつゐにおちさらめやは

別當實行の六條の家にて戀の心を

金　いつとなく戀に焦るゝ我身よりたつや淺間のけふり成らん

かたこひのこゝろを

遙々とやさたつ妹はこひもせてつたなきせなそなきも絕（もへイ）ける

戀の心をよめる

身の程をもて宴せ共君みてはめてもやするとあされをそする

隔（障イ）本大戀

手枕をくけてしくれは恐ろしみはやはひましねみつのかとより

殿下にて寄水鳥戀といへる事をつかうまつれる

羨ましいかなる鴨のわきもこか妾の池にうきねしつらん

美作守顯輔家にて戀を

君をこそ淺はの原にをはきつむ賤のいしみのしみ深く思へ（とるイ）

或所にてゆふへの戀といへる事を
いつとなく聽たれ山のさゝれみつくれ行まゝに音そへつ也
殿下にて十首哥よませ給ひけるに戀の心をつかうまつれる
心のみくたくる戀や玉つ島いそ(岩イ)こすなみのかへるなるらん
おなし殿下にて人を恨といへる事をよめる
石はしるとかは(いまはイ)の瀧も結ふてにしはしはよとむ物と社きけ
修理大夫顯季のかつらの山里にて戀の心を
雲はれぬふしの烟も風吹はなひくけしきはみゆなる物を
關戀といへる事を
くるとにあひつの關もわれといへは固くなしてもぬらす袖哉
中納言國信の坊城の堂にて人々哥よみけるに戀のこころを
玉ゆかの花の褥にいつくしき君をしなへてしたにたにねん
別當實行家にて戀のこゝろを
戀しとはかきやらしとそ思ひしに浮身はそれも叶はさり覺
修理大夫顯季の樋口にて戀の心を
別れにし手束の弓のしらとりをきのかはゆすり戀ぬ日そなき
皇后宮にて會有けるに院宣にまいれと催有けれはまいりて雨中鶯といへる事をつかうまつりけるに久しき戀の心を
淺からす思へは社はほのめかせ堀金の井のつゝましき身を
大武長實の八條家にて戀のこゝろを
なこそてふ言葉はいかことくさを關の名そとも思ひける哉
奈良の歌合に人にかはりて
嬉しとやなくをも人の思はまし涙にこひのくつるよならは

戀の哥とてよめる
つれもなき人のゆかりに夜もすからやはぬめをさへ恨みつる哉
なく涙おそふる袖はくれなゐに色このみとや人は見るらん
大武長實の八條の家にて晩戀といへる事を
住よしと人をみてくらゆふしてゝまつに涙をかけぬ日そなき
左京大夫經忠の八條の家にて戀の心を
あひそめよゝもたゝにてはと計のこむと賴めし程は過さし
中納言雅定の八條の家にて共(公イ)有障戀といへることを
淺ましや君のみとにことつけて人のてま(ひまイ)をはしらぬ成けり
修理大夫顯季のなきさの院にて戀の心を
哀てふ人も涙におほゝれてともしき袖をくたしはてつる
雨中戀
隙もなくもりくる雨のあしの音を我とをつまと思はましかは
物ねたみして男にさられて獨有人におとこのものいひ渡ると聞て母(女イ)のとおほしくていひつかはしける
このわにはよもめくらしなかへりにし先の車の譬ひ思へは
寄月戀
今そしる戀する比の月影はさも身をとをる物にそ有ける
寄山戀
あまきり(さイ)あひ夕ゐる雲に閉られて妹惑はせるなにおふせの山
中納言雅定の六條の家にて哥合しけるに戀のこゝろを
さもとたになけの情にいつしかな有のすさひの程とやはみる
寄草戀

（續後）谷ふかみ水かけ草の下露やしられぬ戀のなみた成らむ

別當實行の六條の家の哥合に寄泉戀をよめる

我戀はおほろの清水いはこえてせきやる方もなくて暮しつ

殿下にて寄海戀を

ちぬの海涙に漂ふうきみるのうきをみるはたゆゝしかり鳧

おなし殿にて三首の歌合有けるに戀の心を

口おしや雲井かくれにすむたつも思ふ人には見えける物を

修理大夫顯季の六條の家にて雨中戀といへることを

降雨のあしかれとしも思はねと繁き恨みはたゝならしかし

戀の心をよめる

戀す共身の氣色たに變らすはいはぬに人のあやめましやは

をとなしの瀧のこひ

君こふと名には流れてをとなしの瀧のしら糸さは絶ねとや

いはてのせきのこひ

人めもるいはての關は固けれと戀しき事はとまらさり鳧

大貳長實の白河の家にて戀の心をよめる

淺ましやなみしはの野にたつ鹿のつめの我のみぬるゝ袖哉

寄馬毛戀といへることを

隙もあらは小畔に立る青鷺のこま〳〵と社いはまほしけれ

又おなし題にて

我といへはあれてそみゆる春駒の心は人につきけなれとも

左京大夫經忠の八條の家にて戀不依人といへる事をよめる

紅の袖にはつれしまみよりもなれかつゝりのわらけ（しイ）をそ思

修理大夫顯季の六條の家にて戀不知程といへることをよめる

せきもあへぬ涙にて社我戀のつもれる程をしるへかりけれ

男にわすられてなけく人のまたなき名をさへたちて恨みけるかその人のかりつかはさんとて哥こひけれはかはりてよめる

いとゝしくくちぬる袖にぬれ衣をひきかさねても歎く頃哉

皇后宮の弘徽殿におはしましける頃ほそとのにて人に物申けるに女房のうへゝのほるとて道見くるしおはしてと女官の申けれはたちて殿上の方へまかりにけるをのちにまいりやすると侍けるにみえさりけれはかれよりをくりて侍ける

大貳君

おほつかな春の夜深きはなれ駒跡を尋ねんかたもしられす

かへし

とりつなけみかきの原のはなれ駒浮世にあれて跡も定めす

長月の晦日人のもとにまかりたりけるになしとてあはさりけれは有所を尋ねけれはしらすとて申さりければ書あつめて家にをかせ侍ける

おしめともたちもとまらぬ秋霧の行衛もしらぬ戀もする哉

風吹は空にたな引うき雲のゆくゑもしらぬこひもするかな

山のはにあかすいりぬる秋の月ゆくゑもしらぬ戀もする哉

さほ山の嶺ふきわたるこからしの行衛もしらぬ戀もする哉

さよなかに友よひかはす雁金のゆくゑもしらぬ戀もする哉

秋の野のもとあらの萩にをく露の行衛もしらぬ戀もする哉

山河のゐくひにかゝる白浪の行衛もしらぬ戀もする哉

よさの浦に嶋かくれ行釣舟の行衛もしらぬ戀もするかな

もしほやく海士の苫屋に立けふり行ゑもしらぬ戀もする哉

夕されは空にわかるゝむら鳥の行衛もしらぬ戀もする哉
　戀の哥よみける所にてよめる
木をきさみ繩を結ひし昔よりつゐにはとけて見えける物を

散木奇歌集第九

雜部

　はるのつかさめしに俊重か式部丞申ける文にそへて
　頭弁重資のもとへつかはしける
日の光あまねき空のけしきにも我身ひとつは雲かくれつゝ
　是を御覽して周防内侍をめしてこれかかへしせよと
　仰られけれは心はいかやうにかさもさふらひぬへき
　さまにやしさふらふへきと申けれはさこそはと御氣
　色有けれはつかまつりける
金 なにか思ふ春の嵐に雲晴てさやけき影は君のみそ見ん
　そのたひなりにけるとそ。
　おもふことありける比よめる
終夜かはかぬ袖を友にして身のうき事をうれへつる哉
　下﨟にこえられてなけき侍けるころ人のかりつかは
　しける
年をへて身はしつめとも世とゝもにうきたつものは心也鳬
　同ころ朝かほにつけて人のもとにつかはしける
程もなき朝かほにをく露の身のなにうき事を思ひしるらん
　とのゆかり有て伊勢の國にまかりて久しう侍りける
　においをとろへぬる事を思ひつゝけてよめる
鈴鹿山關のこなたに年ふりてあやしくも身の成まさるかな
　堀河院の御時御前にて探題歌よませ給けるにしほか
　まをとりてつかまつれる
すまの浦にやくしほかまの煙こそ春にしられぬ霞なりけれ
　百首の哥中に松をよめる
雎鳩ゐる磯まに生る松の根のせはしくみゆる世にもふる哉
　鵜
網引するみつの濱へにさはかれてあけをさゝのへたつ歸る也
　山
いくしおりこえてか人に岩かねのこりしく山を顧みるへき
　河
大井川みなはさかまく岩ふちにたゝむ筏のすきかたのよや
　橋
朝夕に傳ふいたたの橋なれはけたさへ絶えてたちろきに鳬
　懷舊
戀しともいはてそ思ふたまきはる立かへるへき昔ならねは
　夢
新古 さゝかにの糸かゝりける身の程を思へは夢の心地こそすれ
　雨
つく〳〵と思へは悲し數ならぬ身をしる雨のをやみたにせよ
　よふことり
東路のなこその關のよふこ鳥なにゝつくへき我身なるらん
　元服
髫髪子かはなちの髮を取たてゝまきそめかはよ淵瀨變るな
　志賀の山こえ
志賀の山心はれにそこえつれと霞にさへもまかひつるかな

雲

くちなしの色にたなひくうき雲を雪けの空と誰かみさらん

笛

あを竹を雲の上人ふきたてゝ春の鶯さへつらすなり

こと

琴の音のともにむせふ夕されはけもいよたちぬ心さむさに

のりゆみ

ひき流す手束の弓のやを速みともねにまとのなりかはす哉

産七夜

君かよを七彦のかゆなゝ返り祝ふ言葉にあえさらめやは

臨時祭

たつ程の重ね土器なかりせはおほえてよとの渡りせましや

暁

明ぬなりしはしまきれよかり衣尋ねん程になをなつさはん

あけほの

岩のめは岩のかけはしほの〳〵し暫し休らへまつならす共

寺

始なきつみのつもりの悲しさをぬかの聲々くときたつ也

猿

たかみこのいとも怪しと見まし鳧猿丸をしも引立てしとや

さゝ

山河の岩間のさゝのひたすらに忍ひしふしはあらはれに鳧

遊糸

さゝかにの雲らぬ空の糸なれはあそふ氣色のたえすも有哉

くも

さゝかには苔の袂にふるまへと泪ならてはくる人もなし

おきな

しくち引あこのは山に年ふりていかみになれはしめられに鳧

水海

夕つく日ゐ潟の浦のいりましに雲すはえして簑もすゝけぬ

薪

枯はてゝもきゝに成し昔よりたきすてられん日をそ數ふる

石

石はさもたてける人の心さへかたかと有とみえもするかな

海人

ひく鳥の網のうけ舟浪間よりかうてふさすとゆふしてゝかく

池

よにわひて涙たちまちに有なれとあそのみ池にぬさ奉る

瀧

七夕のをりなかしける布なれや空より落る瀧のけしきは

しゐしは

夏そひくうなかみ山の椎柴にかし鳥なきつ夕あさりして

をとめこ

乙女子かとみのおとにひれふりて返すま袖を忍はさらめや

みつきもの

みつき物にゐくはまゆの糸をもてくるても絶す供へつる哉

やしろ

祈る事なゝのを社こう〳〵とことなはせよくゝちはしる也

となり

垣こしにほのつくたにも有物をねたくも梅のあるしなる哉

つた

契有てはひかゝるともみゆるかなつたや梢のいもせ成らむ

船

なこかれよみすりもすまに焼つみてあかふま袖の灘と思ひそ

　うき草

かきやれは浮て流るゝうき草の世を早くして過ぬへら也

　仙　宮

たちぬはぬ衣の袖しふれけれはみちとせへてそ桃も咲けり

　おいぬる事をなけきて

われ舟のよをうみ渡る積りにはおもての波におほゝれに晃

　思ふ事侍けるころよめる

せきもあへぬ涙の川ははやけれと身のうき草は流れさり皃

　無常のこゝろを

しつのめかゐくつむ澤の薄氷いつ迄ふへき我身なるらん

　人に忘られてなけきける人のかりきくにつけてつか
　はしける

菊のみとなに思ひけん秋くれは人もうつろふ物にそ有ける

　田上に侍りける比つはきをきりをきてはひにやかむ
　とてからすをみてよめる

我身とも椿の枝のみゆるかなはひに成へき程のちかさに

　思ふ事侍りけるころよめる

風をいたみゆらの戸渡る柴船の暫し逃れて世をすこさはや

　ゐなかへ行人のもとにふみやつくるとたつねけれは
　よめる

雁金の跡なき身とは知なからいかゝみきりに文もつくへき

　色このみたてける人のおとこかそへけるにいかゝあ
　るなと尋ねられてたはむれてよめる

打わたるひとしおほのゝみなせ河淺き心をたれかみさらん

　山城守なりける人のめをある人忍ひて物申すときこ
　えけるを程もなくかれ〳〵になりぬと聞て遣しける

石川やはなたの帯の中絶は狛のわたりの人にかたらむ

　夕くれかたに何となく物心ほそくおほえけるにのき
　近き竹にすゝめの鳴けれはよめる

日くるれは竹の園生にぬる鳥のそこはかとなき音をも鳴哉

　みたけへ参りけるに吉野川のほとりにてよめる

よし野河岩のゐせきをわきかへりしらゆふ花や瀧のしら玉

　とねりこといへるきのしたに草の有けるをひかせけ
　るを見て

とねりこの下にいはゆる駒（馬イ）ひゆを引すてたらは主やのるへき

　下臈にこえられてなけきける比

うき事は珍しからぬ身なれとも旅にも袖のぬれまさるかな

　隆源阿闍梨七條坊に申へき事有てたひ〳〵まかりけ
　るにいたはる事有とてあはさりけれはかみさうし
　（紙障子）にかきつけ侍りけり

こりはてぬにゐの初雁あさにする宿にもあらて人かへしつ（けイ）る

　かへし

初雁のにゐの書けのつかなりとほかけそすへきいかゝ返さん

　住吉にて旅の心をよめる

住吉のしきつの浦に旅ねして松の葉かせにめをさましつる

　田上にてつれ〳〵なりけるにかはのをとつねよりも
　をとつれてともしなきこゝちしてよめる

河の瀬のおちまふ水のゆく〳〵とおもふ心を人にいはゝや

　鶴のこゑのしけれはよめる

澤に生るますけの苗をふみしたきあさゐるたつの聲聞ゆ也

七十になりて後むかし見し人のもとにまかりてふる
き物かたりなとしけるつゐてによめる
數ふれは車をかくる齢にてなをこのわにそまはりにける
皇后宮弘徽殿におはしましける時にしおもてのほそ
とのにてたちなから人に物申けるにくるしかりけれ
はつちにゐたりけるをいとをしたゝみをしかはやな
と申けれは疊は石たゝみしかれて侍るめりといふを
聞てよめる　　大弐
石たゝみ有ける庭を君にまたしく物なしとおもひける哉
かへし
名にしおはゝ身もさえぬへき石たゝみ片しく袖に衣重ねよ
もの思ひける女のしぬとそたゝになかむるを聞て
よめる
とはりやいかてか戀もしなさ覽あふくま川に水のたえなは
田上にて物いひけるついてに松たけの有けるををそ
くやくなといひけるを聞てよめる
ほともなく取いたせとや思ふへき松と竹とは久しき物を
よふけてむかひの山に猿の鳴けるを聞てよめる
さらぬたに寐覺の床のさひしきにこつたふ猿の聲きこゆ也
殿上をりて侍りけるころうちわたりになに事かなと
人に尋けるついてによめる
古しへは人にとはれし百數のことをも君にたつねつるかな
下臈にこえられて叙位のおくにかき付侍りける
數ならぬ我身はいちのみそなれやゆきかふ人のこゑぬ流は
よのありかたきにいかゝせんすると申を聞て人のい
かゝおもひなりぬると尋たりけれはよめる
いさやまた港のさきの心地して思ひたゝれぬ數をそする
なこのうらといへる事をよめる
なこの浦の音さへけさは烈しきにいかに鳴戸の沖さはく覽
障子の繪に海のつらに人なかめてゐたり船のゆくを
みる所をよめる
葛飾のまのゝ浦はの沖つとにあけのそを舟かろをすなり
あるあまのくちあしとてものゝくはれぬにしとい
ふものこそ思ひ出らるれといひけるを聞てもとめて
くはせけるにからみといへる所はからしとてくはさ
りけれはよめる
よしと思ふ心の願ふにしなれはからみ成共まいらさらめや
中宮亮仲實かことをあたらしくつくりてみせけれは
ひきならしてよめる
ひき鳴す聲そさやかに聞ゆなるくちにし船のみをならねと
をとはにまかりてたきのもとにて人々かはらけ取て
うたよみけるによめる
人のもとにあまたゐなみてよふけぬるよしをよめる
今はしもあかぬまとゐにさよ更て水の流も花咲ぬらん
權僧正永縁かもとより牛を心さして侍りけれはかへ
り事に遣しける
嬉しさをきかする程はこゝのつの牛のひとつのけにも及はす
かへし
古のたきつしま姫ならねともあかすおほゆるわかの浦かな
五位して殿上おりて侍りける頃家道君のもとよりつ
れ〳〵はいかゝなと訪て侍りけるに少將なとのきた

る事を思ひ出てつかはしける
三笠山さしはなれにしあしたより涙の雨にぬれぬ日そなき
かへし　家道朝臣
三笠山たちはなれにしそのかみの袂は我もさこそぬれしか
田上にはへりける比山のかひに人のあまた物ひくをとのしけるをとはすれは山よりふねつくりてくたすなりといふをきゝてよめる
山彦はこのもかのもにこたへつゝ音たかさこに船くたす也
斎宮に侍りける比正月廿八日に斎宮おりさせ給ぬと聞てむろ山の入道かもとより送りて侍ける
故郷と成ぬる宮の夕かすみ思ひかけすや立かはるらん
かへし
思へたゝたけの都は霞みつゝしめの外なるみよのけしきを
みやこへのほると聞てをくり侍りける
かへるへき君かおしさに都路の花さへつらき春のそらかな
返し
限り有て立かへるには櫻花かりかねをたにえやはとゝむる
大殿にてかみ／＼あはせといふことせさせ給けるに師のこひければよめる
君かよを神々いかに護るらんしけきぬゆひの数にまかせて
あそひ侍りける所にて隆源阿闍梨いたくねふりければかはらけさすとてかけゝる
おひ茂るねふりの森の下にこそ目覺し草はうふへかりけれ
人のもとより巻物に手ならひしてとてをくられたりければかたのことく書ておくに書付侍りける
芥ゐてきたなきみその水莖はかき流せともしとろもとろに

田上にて八月許につれ／＼なりければ何となくあゆみ出てさくらたにのかたへまかりけるに道のとをかりければやすむとて式部の大夫のよめる
春ならて櫻たにをは見にゆかしあきともあきぬ道の遠さに
といふを聞て和し侍りける
櫻たにまことに匂ふころならは道を秋とは思はさらまし
水くるまのほとすきてすてたれはめくらぬをみてよめる
捨られてうき瀬にたてる水車よにめくる共[illegible]まぬ身なれや
つかなみといふもののうへによこゐねてたひかさなるまゝにあやしけに成けるを見て俊重かよめる
藁籍の上によるよる旅ねしてくろつの里になれにける哉
とよめるを聞て和しはへりける
つかなみの上は黒つになるれ共下のねよさにしく物はなし
させる事なくは京へのほらしと思ひけれといつしか宮このかた思ひ出られてよめる
身なからもならぬ心は程もなくいとふ宮古の方そ戀しき
つれ／＼には詠やるかたにくわといふ木のたちなみてよろつをさふれとあるしのおしけに思ひたれは取きらぬ事をよめる
詠やる方をもいかゝさへさ覽はかなき事にくはゝなれねは
山にあそひあるきけるにしかのひしるこゑのしければ
かせかけてひしるを鹿の聲きけは狙ふ我身そ遠さかりぬる
つくしに侍ける頃肥後守盛房か歸身のよきありたまはんと申けるかをともせさりければいかにかと尋け

るに忘れにけりと申を聞てよめる
なき影にかけゝるたちも有物を鞘つかのまに忘れはてける
神祇伯のあきたりけるを修理大夫顯季にとのつゐて
有ける時にのそみ申よし申されなんやと申たりける
に俊にいかやうにかなと尋けれは申きなと申たりけ
れはそうせよとおほしくていひつかはしける
よきさまに事はしかしな日にそへてめつるたきゝの下の憂を
正月五日叙位事なと思ひつゝけてよめる
ゆく／＼とけふ又誰にこえられてうき身そ河の流せくらん
田上に侍りける比むかひの山きはにおほきなるゐの
しゝのみえけるを小牛とこそみつれと人のいひける
を聞てよめる
鹿を見てむまといひたる人たにもゐをは牛とや思はさり劔
河よりいかたのくたるかくひのたてるをみてをしの
けてくたるをみてよめる
筏士にあふくま（そイ）川の身をつくしをしのけられて過るころ哉
まへのすひつにするともなくてかなはといふものゝ
たてるをみてよめる
いかにせんいつちゆけとも世中の叶はぬ様そにる物もなき
宮古にすみわひて田上にまかりてよめる
あしひたくまやの住家は世間をあくかれ出るはしめなり鳬
むかひの江にわらはのあそひたはふるゝを尋ぬれは
みそかひといふ物ひろふなりといふを聞てよめる
江のよとにみそ貝拾ふうなひ子か戯れにてもとふ人そなき
身のあやしき事を思ひつゝけて涙くましさによめる
ともすれは先つくらるゝうつせ貝空しくてのみよをや過覽

すいかんを人のよませ侍りけれはよめる
宮木野の雫にかへるかり衣忍ふもちすりみたれしぬらし
狩衣ほやの紫すりたちかへてあけのゆひゝも結ひしてたり
人のもとにまかりたりけるにかみ／＼をひきてもの
にとりいてゝ侍りけれはよめる
嬉しさの天のみ空にみちぬれはいとなくかみを仰きみる哉
大殿の哥繪に男のかゝみをもちてかたはらにある女
に見せける所をよめる
是をみよますみの鏡きよけれは萬代ふへき影そならへる
同繪に尼のゐたるまへに兒のはすのはをもちてゐた
るところを
世中をそむくとならははちす葉の濁にしまぬ心ともかな
身のあやしさに何となく人のうらめしきやうにおほ
えけれはよめる
誰となく恨めしき哉宿世にて身のあやしきは人のとかゝは
伊勢に侍りける比祭主親定かいはてといふ家おもし
ろしとてまかりてみけるにまとにおもしろかりける
中にもかはむかひの山つらいふなりけるか思ひ出ら
れてよめる
をちこちのと山の裾を戀し共いはて思へはしる人もあらし
あそひける所にある人のきたりけれはよめる
嬉しやなきなるかはせやすみぬ覽君か光ののそむしるしに
天王寺へまいりけるになからにてこゝそ橋の跡なと
いふをきゝてよめる
行末を思へはかなし津の國のなからの橋も名は殘りけり
人のおさなき子の四五はかりなるをゐてきていみし

うまびする童なりといひてはやしけれとまはさりければほいなけに思ひてにくみければ名は何とかいふと尋ればつるとなん申といふを聞てよめる

よもまはしけふは人みる昔よりつるはてきみの物としらすや

男のかれ〳〵にまかりなりて歎ける人のもとにまかりてとふらひけるにおとこのあふきとみゆる物のみえければかたみに置たるかといへばわすれたるなめりといふを聞てよめる

つかのまもをきかたかりし扇こそ秋風吹は忘られにけれ

ありける事をあらかふ人にさりとも男にとはゝかくれもあらしといひけるついてによめる

風吹は靡く尾花にさゝかにのいかにはかなくかくすなる覽

肥後君か哥をよみてかやうなるふる歌や有とたつねたりしかはつかはしける

吳竹の筒をのみゝるせはしさによも此ふしはあらしとそ思ふ

うちへまいりけるに陣にまもりをみつけたりけるをかゝる物なん有といふを聞て藏人家時こそまもりはおとしてわふれと人の申ければつかはすとて隨求のたまのもとに結ひつけてつかはしける

求るにしたかふもりの玉なれは光さすかにうせぬとをしれ

としおいぬらんと思ふ人のとしをかくしてわかやくを聞てよめる

君はしもきゝ渡りけん津の國のなからの橋を造りそめしも

むかしもの申ける人をある人の物申と聞てつかはしける

袖ぬれてわたりし物をふるせ河ふかくも人のおもひける哉

人のもとにまかりたりけるに扇を忘れて侍りけるをかへし送るとて人をもかくやあたに忘るゝとかき侍りけるを見てよめる

さやはさはあたにも人を忘れけりあやしや君か心ならひに

しりたる人のもとより梅花貝といふ物やあるとたつねたりければつかはすとてよめる

春風になとやおりけんみちのくのまかきか嶋の梅の花貝

はなかつみといへる事をある人のよみたりけるをいかにいふそと尋ければようもしらぬ事をしりかほにいふと聞えければ心のうちに思ける

鴫のゐる玉江におふる花かつみかつよみなからしらぬ也覽

つくしよりのほりけるころ式部大輔正家か子の俊信かこけいの前駈しけるれうにとらのかはのしたくらや有と尋ねたりけるにそへてつかはしける

こまなめて狩する人は狩鞍の虎ふす野へそゆかしかりける

さやうによきはなかりければえつかはさてよめる

虎ふせるこのしたくらく成ぬれは狩ゆるをもかたき成けり

身のあやしさにあらましを思ひつゝけてよめる

つく〳〵と獨りゐみをもしつる哉あらまし事を思ひ續けて

探得船字

漕戻れかしもみとろしすは忘してすゝけにけらし興津嶋舟

うちわたりに夜更てあるきけるにかたちよしといはれける人のうちとけてしとしけるを聞てしはふきをしたりければはちていりにけり又の日つかはしける

形こそ人にすくれめ何となくしとする事もをかしかりけり

人のもとにてあそひけるに酒なとのみて椎の有ける

をつみなとしあるひしりのあやしき事なとくち〱
そしるを聞てよめる

きよみきのひしりを誰も傾けてしゐの罪えぬ人はあらしな

人のもとにまかりて夜もすから物かたりして歸りけ
るまたの日かれよりをくりて侍りける

匂ふらんよもの山への花よりも戀しき物は君かことの葉

かへし

たとふらんはな心には言の葉の秋にならはや色かはるへき

契りし事共をわすれにけるにやとさまに思なりにけ
るときこゆる人のかりつかはしける

契り置しをはすての山なれはよもさらしなと猶頼むかな

そのつゐて有けるにさらしなをよめる

さら科はをは捨山の麓にていかて都に名をとゝむらん

琳賢かおほはらの瀧にまかりて飛瀧音清といへる事
を

雲井より聲高砂におちたきつなかれそいはの衣なりけり

修理大夫行宗か往生要集をかりてかきうつしけるを
ほとへにけりとてしきりにこひかへされけれはかき
はてゝとおもひていひつかはしける

樊於期か荊軻にかうへかしけるもさそは遂に返さゝりけめ

かへし

燕丹か深意を盡せはそ〔樊〕於期も首を蘇よけむ

或人の堂（室イ）の障子の繪に天王寺の西門にて法師の
船にのりてにしさまへこきはなれていくかたかける
をこれはとおほしきなりと堂の主のいふを聞て

阿彌陀佛と唱ふる聲のかちにてや苦しき海をこきはなる覽

おほえの橋かける所をよめる

遙かなるおほえの橋はつくり劔人の心そ見えわたりける

かはしりに受領のくたり船にあそひの船こきよせた
るかたかける所をよめる

うたひくる蘆まの聲はちりならぬ心もうこく物にそ有ける

なるをに松の木一本たてる

なるをなる友なき松のつれ〱と獨もくれにたてりける哉

にしの宮に神民の船にほこさかきしてぬされうとい
ふ物とりて風のいのりするかたかけるをよめる

柴を舟まほにかきなせゆふしてゝ西の宮人かさまつりしつ

もとめつか

たらちねも求めさりせは乙女子か跡にも影を並へましやは

すまの浦にもしほやくけふりたつ

すまの浦にたくもの煙たなひけは岸うつ浪の立ぬ日そなき

布引瀧

山姫のみねの梢に引かけてさらせる布や瀧のしら糸

ふねてらに侍ゐて經よむ所かけり

ふね寺にのりうかふなり終夜聲をほに上てよみすましつゝ

わたのみさきにほあけたるをふねおきよりはしるか
たあり

にしけには和田の岬もある物を影さかりぬる身をいかにせん

右兵衛督伊通の家にて浦嶋か子といへる事をよめる

浦嶋を浪もあけくれうつせかひあまの筥のみ空しと思ふに

田上に侍りし比かたひなたにゐて手のかさむしりて
よめる

怪しさは源とこそ思ひつれはたへはこせの內にそ有ける

川に釣する翁の有を尋ぬれはこさいのなけれはもと
めさふらふなりといふを聞て
よそ人のつくれる罪と思へ共わかれうすると聞そかなしき
式部大輔のむかひの山田のかきねにふみはつしといふ
事をして鳥をとり侍りけるを人もみぬ程にかゝりた
りけるにやけなとちりてそののちかゝらさりけれはまも
らする人のおとろきてかゝらぬよしを申けるを聞てよめる
思ふ覽しり括りたる鳥ならはふみはつしてもかゝるめみしと
伊勢に侍りけるころ別當實行公卿勅使にて大神宮へ
まいられたりけるに齋宮のくたらせ給ひしおり行事
弁にて侍りけるか事はてゝ京へかへるとて宮に參り
て日來なれてまかりかへるこそ心ほそく候らへかや
うにまいらん事も有かたくもし命候らはゝ公卿にな
りて勅使にて下らん時そかやうにも參るへきと申て
のほりけるに十年はかり有て勅使にてくたられたり
けるかむかしのあらましこと忘れすはかならすまい
らんすらんと仰られけるにまいらて過られけれはを
ひてつかはさむとてその比の哥めしけれはふたつを
よみてまいらせたりけるをこれをつかはしたりける
昔せしあらましをのかはらぬを嬉しとみえはいはまし物を
御返し
いせの海のしほひの方へ急く身を恨みなはてそ末も遙けし
此歌はいかにそやある男女の中のうらみたるににた
りとてつかはさゝりける
みちこはと待つる汐もすきぬれは浮身わたりを恨てそふる
おいたる人のよきゝぬともをきてわかやくを見て
若々となりはへしてもみゆる哉くひせにもとはまと也けり
むかしおとこなと有しおりの事なと思ひ出けるけし
きをみてよめる
子共あらは空夢みてや語らましなすらひならぬ影を忘れて
伊勢に侍りける比たよりにつけて修理大夫のもとに
つかはしける
とへかしな玉櫛のはにみ隱れてもすの草くきめちならす共
返し
しらすやはいせの濱荻風吹は折ふしをにこひわたるとは
殿下にて上陽人の心をよませ給けるに〻蕭蕭眉々細
長といへる事をよめる
さりともとかくまゆすみの徒らに心はそくも老にける哉
もの思ひ侍りけるころ
老はてゝなけきする身はもかみ川流に棹をさすにそ有ける
屏風の繪にあれたる家のむねに草や木なとおひしけ
りたる下に家あるしとおほしき人のおいたるかたか
ける所をよめる
我宿のかはらの松の木高さに身のふりにける程をこそ思へ
伊勢に侍りける比みやこのかたよりしりたる人のも
とより扇にそへてをくりて侍けり
音もせてこゆるはしるし鈴鹿山ふりすてゝける我身感とは
かへし
ふりすてゝこえさらましか鈴鹿山扇の風のふきこましかは
すゝか山は扇のこほりにあり。
大貳長實白川にて川邊興といへる事をよめる
をかみ河やきのはひえに鮎釣りて遊ふもさめぬその[illegible]

伊勢に侍りける比室山入道と申ものゝもとよりをく
りて侍りける
いさゝめにみしま計りを慰みてえもうらなれぬ萋れあし哉
かへし
いへはけに萋れ蘆とそ聞えけるたれうらなみのなこり成覽
同人のもとより松たけにそへてをくりて侍りける
長らへん君かかきはのはるけさにちよ松たけをそへさらめや
返し
めつらしき心さしをは松竹の末のよまてや袖につゝまん
ものへまいりける道に草のふみつけられて有けるを
みてよめる
みちのへにふみしたかるゝ翁草かる人もなき歎きをそする
前齋宮の内侍の逆修しけるに講師中納言律師たうと
くしけれはにはかにおほきなる鏡を布施にしけるに
歌よみてかゝみのしたにいれはやといひけれは俄に
よめる
君にけふますみの鏡みかゝれて移れる罪のかけやきゆらん
金葉集の奥に御らんしあはれへとおほしくてかきつ
けてはへりける
なく空にみちぬる汐の濱ひさき久しくもよにむもれぬる哉
恨躬耻運雜哥百首　　沙彌能貪上
三日月の影にかゝよふかけろふのほのほかにてもよを過す哉
おふの海にしのまの蟹のかつくてふ風の鏡のたか方の世や
あくた河みくつと成し昔より流れもやらぬ物をこそおもへ
なりも出ぬ此身と思ふになにゝゐて月日に添て海をよむ覽
いかにせん遂には山と積るなるその塵ひちの數ならぬ身を
をしねほすたのきにかよる丈夫の心元なき身をいかにせん
我といへはあための山にしほりする掬木の枝の情なのよや
世間はうきつの浦につらゝゐてすかの群鳥あくかれぬへし
年ふれはけかしき溝におちふれてぬれ鹽とけぬいとをしのみや
佗る山世にふる道をふみ違へ惑ひつたよふ身をいかにせん
をひ風に世をうみ渡るまはしまや早我か身は思ひすて、き
蘆手なき犢の大野に放たれてする方もなき身をいかにせん
つはりせしふたこの山のはゝそ原よにうみ過て消ぬへき哉
厭はれてよにふる雨のなかりせは類なき身と成やしなまし
疊み置るいは間をすくる涙河おひたゝしくもたきるなる哉
物思ひの心くらへのかた人になるともまけしたくひなき身は
荒の磯にさき出るせゐの搖きなくつめたてられて世にもふる哉
明くれは身をつけたてゝ世中をきこのはしても過しつる哉
世中のそむきかたさに身の程を思ひしらすと人にみえぬる
さりともと思ひはれとも梓弓いるへき方もなき身也けり
ふしつけしおとろの下にすむはえの心幼なき身をいかにせん
清水山ならの眞芝にかゝされてねらふさつをのたゆみなのよや
怪しとや人はみる覽佗をたてぬきにしてをる身と思へは
何となくくち木の杣の山くたしくたす日暮はねそ流れける
時きはるしゐやと云ひてけなましを我身は幸もしこりさまね〔本ノマヽ〕
えち川に岩こす棹のとりもあへす落す袞のいちはやのよや
世中の心とけても覺えねは結ほゝれてもすくしつる哉
紅葉ちる音は時雨にたくへともまきるゝ方もなき身也けり
ふし芝に宿れるほやの己のみときはかきはに物をこそ思へ
世中を思ひはなてははなち鳥とひ立ぬへき心地こそすれ
思ひ佗おつる涙はくれなゐにそめ河とこそいふへかりけれ

くちみ山くちたてりとや思ふ覽しられぬ谷の松のふる枝を
淺ましや衰うき世を忍ひつゝなにとまかよふ我身成らん
道のへのこほりか下のねっこ草諭されし身のたへかたのよや
しみ氷る諏訪のと中のかち渡り打とけられぬ世にもふる哉
身の程をそよなさそとは思へ共猶恨めしきよをいかにせん
世中のかたちにみゆる物ならは引とゝめてそ恨みかけまし
はかへせぬ歎きの森は冬くれと常にもかもなとこしなへ也
誰とかはわきてもいはむ我爲に恨めしからぬ人しなけれは
さらぬたにかはかぬ袖を清見かたしはしなかけそ涙の關守
立出れはひちつかれつゝはし鷹のすゝろはしろき我身成覧
何事の忍ひかたきに初雁のうき世中にまたかへるらん
世中のありしにもあらすなりゆけは涙さへ社色かはりけれ
我といへはいはきの山の峯高み雲のかゝらぬ時をこそまて
世中をおもひしりけりと思ふよりきえぬる霜のあはれ成哉
ときはなるうきをの葉はこからしの烈しきにさへちらぬ也覧
檜のはいかれはに風の吹つれはいつそよくともなき身成覧
わひ人の涙は海のなみなれや袖しのうらによらぬ日そなき
嬉しさは夢計たになけれともかへにむかひてよをすくす哉
するしまを渡るあきさの音なれやさゝめかれてもよを過す哉
うは玉のかみのすちきる程計心のうちを人にみせはや
世中を思ひつゝけて詠むれは身はくつをるゝ物にそ有ける
よの中を恨みてすくるたかせ舟聲うちそへてからろをす也
とひちかふ鴫の羽數を數ふ共我物おもひにまさりしもせす
忍ひては誰か誰といひてまし我身をわれと思ひしらすは
心には心をそふとおもひしに身は身をしほる物にそ有ける
世中に沈むとならはくした川なかれうせぬる我身ともかな

流れあしのうき事をのみみ島江に跡とゝむへき心ち社せね
我心身にすまはれて故里をいくたひ出て立かへるらむ
心には思ひすてゝし世なれとも身は歎かれぬ物にそ有ける
世中はをそのたはふれたゆみなく包まれてのみ過す頃かな
猶も猶いひてもいはむけふもけふ思おもひの積るつもりを
柴の庵にはひおほられる青つゝらむつかしけ成よにもふる哉
すへしけみ煙にむせふ芦のやのふすへられてもあけ暮す哉
わひ人は風の下なるちりなれやおちゐられても覺えさり覧
山賤のつくしにゐたる我なれや心せはさをなけくと思へは
いため山さかゆく身かは玉鬘苦しくてめみ世を過しつる
遁れてしはにまならねと世中を姉くもとのみいはれぬる哉
我心千々八千種に思へともなりはつるみはたゝひたすらに
みすりせく玉津を河のとこなめに思ふ思ひにおも變りせよ
世中をいてや何かはと思へ共しなへちらふしなつみてそふる
なけきつむ力車のわをよはみ立めくるへきかたもこそせね
あはれてふ身のをくさは霜かれてこもろき物は涙なりけり
身にかへてひく人あらは膝にふす玉の小琴もならまし物を
さきのよも今もこんよの身の程もけふのさまにて思ひしる哉
こからしの吹たゝよはす浮雲は絹まれぬ世にふる身也けり
なりはつる姿をみれは悲しさにしほ／＼と社ねは啼かれけれ
み狩する犬たにかけしせこなはや思ふ心はいつかたゆへき
いをさきのこのみの濱のうつせかひもに埋れて幾世へぬ覽
何事も思ひいたらぬ世中に身はあまりぬる物にそ有ける
世中は思ひくまなき物なれや頼む身をしもいとふと思へは
われか身は歎きこりけるうけ棹やはき集めつゝ人となし劔
難波かた芦間の氷けぬかうへに雪降かさぬおもしろのよや

我とく世にすみ侘て秋山のしたひかしたにさをしかなくも

此世をは假ともいはん青丹吉習はぬ身にはそれもそふなと

東路に有といふなるにけ水のにけのかれてもよをすくす哉

今よりは嬉しからせよをしかへてあふさきるさの我身と思はむ

山にまた水そひぬなりよもすから物思ふ宿にぬえの聲しつ

よのふしといひたてね共笛竹の音に現はれぬよを恨むとは

かけのみや立そふ物と思ひしに歎きも身をははなれさり覓

闇のよにまたまとへとや悲しさをこれを此よの思ひ出にして

兼てより思へは悲しみちのくのたてふに骨のされんとす覽

かきつむる老その杜のもの葉をきえなん後の思ひ出にせよ

朝いてにくきひの豐みきのみ返じいはしとすれと強て悲しき

飛鳥川せきりに結ふ水の泡の消うせぬへき身をいかにせん

人なれし浦のかもめもあれぬるに知られぬ物は我身也けり

はたけふに黍はむしゝめしゝめきて囂しき迄よをそ恨むる

よもの海をひとつのけして汲乾さむ時にそ此身なりもいつへき

いかてかは此よの闇も照さまし光あかさのつえなかりせは

佐藻古曽齒無智文盲荷生計和布人非人庭可成畢哉

散木奇歌集第十

雜部下　長歌

百首哥中述懐をよめる

下載 もかみ川。せゝのいはかとわきかへり。思ふ心はおほかれとゆくかたもなくせかれつゝ。そこのみくつとなるとは。もにすむ虫の我からと。思ひしらすはなけれとも。いはてはえこそなきさなる。かたはれふねのうつもれて。ひく人もなきなけきすと、なみの立るにあふけとも むなしきそらはみとりにて。いふ事もなき悲しさに。ねをのみなけは[illegible]袂をそふる袖もくちはてぬ。何事にかはあはれとも。思はん人にあふみなる。うち出の濱のうちてつゝ いふともたれかさゝかにの。いかさまにてもかきつかん ことをは軒にふく風の。はけしき比としりなから。うはの空にもをしふへき。あつまのそまに宮木ひき。みかきかはらにせりつみし 昔をよそにきゝしかと。さすかにみ よのはしめより。雲の上にはかよへとも。なにはの事も久かたの。月のかつらしをられねは。うけらかはなの咲なから。ひらけぬとのいふせさに。よもの山へにあくかれて。このもかのもにたちましり。うつふしそめのあさ衣。はなのたもとにぬきかへて。後の世をたにとおもへとも。たのむ人々ほたしにて。行へき方にまとはれぬ。かゝるうきみのつれもなく。へにける年をかそふれは。いつゝのとをになりにけり。いまゆくすゑはいなつまの。光のまにもさためなし。たとへはひとりなからへて。過にしはかりすくすとも。夢にゆめみる心地して。ひまゆくこまにことならし。さらにもいはす 霜枯のお花か末の露なれは 嵐をたにもまたすして。もとのしつくに成はてん。ほとをはいつとしりてかは。くれる〔に〕 もとたに〔もイ〕しつむへき。かくのみつねにあらそひて 猶ふる里にすみの江の。しほにたゝよふうつせかひ。うつし心もうせはてゝ。あるにもあらぬ世中に。又なに事をみくまのゝ。うらのはまゆふか さねつゝ。うきに堪たるためしには。なるをの松のつれ〳〵と いたつら事をかきつめて。あはれしれらん行末の。人のためにはをのつから。しのはれぬへき身なれとも。はかなき事を雲島の。あやにかなはぬくせなれは。これもさこそはみなしくり 栝葉

か下にうつもれぬ。それにつけても津の國のゝいくたのもりのいく度か。あまのたくなはくりかへし。心もそはぬ身をうらむらん。

返　歌

世中はうき身にそへるかせなれや思ひすつれと離れさり燒

中納言國信の坊城の堂にて人々長哥よませけるに向泉述懐といふ事をよめる

よそれしま　いはの涙まをとひまよふ。し水をみれはあすかると。なになかれたる末なれや。すめるけしきにたえせぬは。ありすかはとは思ひなし。まつのはゐねをおるなみも。こつたふはねとおほめかる。むすふ雫はこる露のころたかへたる心地して。くたるみなはゝしろたへの、雪のしつれとあやまたれ。忘つゝゆくとたえをは。なかれ氷のあくかれて。うきたちぬると思ふにも。わかときわけのあさ衣。あさましきまてさえゆけは。今又さらにむかひして爪木こりたくほとなれや。それをみるにもみつかきの。かきやるかたもなきさ成。人なみ〳〵にたちゐつゝ。なけきゐるともしらまゆみ。しらてやたれもひかさらむ。あはれむかしはこたくみを、つかさとりしもの　きはうつ。ましろのたかの　そりはて。をかれぬ事のかなしさに。をそふる袖もくちみやま。かひなき身とは知ながら。なからへにける身のほとに。いくらい物を思ひ〔さ歟〕つゝ。人をもよをもうらめしと。いふきのもりの下草の。しけれおもひにやくもたつ。いつもやへかきかきつめて。のちせのうらにかつきする。あまのあまたのみるめにも。はゝかられまの花かつみ。かつみるさまはまこもにて。なをかへけるもうつ山し、やましきことはいはつゝし。いはねはこれあれ〔そ歟〕心には。思ひあまりて故郷に。しなへうらふれなつみおる、身をみつ海のおきなから。なをからさきのからすてふ。おほをそとりの聲きけは　おこなふ事をするかなる　ゐみのかたをかおかしとも。きこゆる事はあらはれぬ、さはひとかともおほしきに。あらすとよにはあらそひてきたなむほとになくたつの、たつきなきさにおちふれて。こにこもりたる身にしあれは。よはになくねをよそ人は。こを思ふとやおもふらん。そもぬれきぬにあらはこそ　ひるまをたにもなくさめゝいてやよろつにあしひたく。あしのしのやのしつはたにゝをりしなへたるあやくすの。ぬきいつくそもひとつたに。みたれぬをは有物を。なそしもうきにはひちれる、みくりのわかはくり返し。身をひとくつに思はれてくつをれゐたるあちきなさ。なさけ有身と思ひせは。花を友とて日をくらし。月のまへにてあかせまし、さもいたつらにうみたてゝ。人となしけむたらちねそ。おもへはつらきつらゆきか。跡にねかへるかたきしに。ねをはなれたる草のはも。たとへていふは久堅の。そらもとゝろきふく風に。すかれる露の玉よりも。えならぬ身をもおもさはくなり。

返　哥

身の憂にしみかへりたる歎きをは玉江の水もえやは清むる

刑部卿政長の八條にて人々あつまりて長哥の會せられけるに初冬述懐といへる事をよめる

山里は。冬こそことにかなしけれ。みねふきまよふこからしの。とほそをたゝくをときけは。やすき夢たにむすはれす。時雨と共に。かた岡のまさきのかつらちりにけり。今は我身の歎とを。なにゝつけてかなくさめむ。雪たにふりて霜かれ

の草葉のうへにつゆならなむ。それにつけてやあさゆふに。
我まつ人のわれをたつぬる。

返　歌

いくかへりをきふしゝては冬のよの鳥の初音をきゝそめつ覧

旋頭哥

中納言通俊のかつらの山里にて人々旋頭歌に戀のこころをよせてよまれけるによめる

斷軸
つれなさをおもひあかしのうらみつゝあまのいさりにたくものけふりおもかけにたつ

百首の哥に無常の心をよめる

あすか川うきゝにつもるあは雪の涙たちくれはたのもしけなきよにも降かな

前下總守仲正くによりのほりて送りて侍りける

あつまちのやへのかすみをわけきても君にあはねはなをへたてたる心地こそすれ

かへし

十韻
かきたえしまのゝつき橋ふみみれはへたてつるかすみもはれてむかへるかこと

混本哥

こひの心をよせてよめる

いかてもと思ふ心はありす川うちなかれてもふるかな

草花によせてよめる

をみなへし心にかけておもへともおりふしもなし

折句哥

中宮亮仲實かもとにうしかりにつかはしけるついてにはきの枝につけてつかはしける

恨む共しらてや鹿のしきりには萩のはひえを水柵にくる

かへしうしにくくして

恨めしと鹿をないひそ萩のえもかことにいへはすてとこそみる

沓冠折句哥

はるつれ〴〵に侍りけれは春宮大夫公實中納言國信刑部卿顯仲なとのおほむもとへ奉りける哥

果敢しなをのゝ小山田作りかね手をたにも君はてはふれすや

春宮大夫のかへしをはせて使につきてをはして。いささは花尋にとてさそはれしこそ。むかしひろはたのみやすところのたきものたてまつられたりけん心ちして。おかしかりしかとぞ。

なぞ〳〵物かたりよくとくと聞えける人のもとへつくりてつかはしたりける哥

小倉山峯より出て行月もあふ坂まてはくまなかりけり

隱題

柳

すまの浦やなきさにたてる磯馴松はひえを波のうたぬ日そなき

拾遺抄

桐火桶

しとねにはしうしいせうとぞ思ひつるしたり顔にも積る花哉

あるかきり日をけになかく思ふ覧とふ人もなき伴のすみかは

すみれ

散花をあかすみれはやたひ人のしらぬ山路に日をくらす覧

卯　花

篝火にうのはなしとはみゆれともみなるゝ事は劣らさり殆

椤

思ひかねあふ契をそうらみつる名殘成らんとをおもへは
〃姓菖蒲
君かさふゝちはらならは春日山岩根の松にかゝらさらめや
しもつけ
根みても何にかはせん花みると今朝しもつけぬ心せはさは
なてしこの花
惜ねかみかきなてしこのはなれなは思ひ亂れて戀やわた覽
きゝやう
あやまたぬ花の都をゝのれからうき京なりと思ひけるかな
はきのはな
常盤木のはなれて獨みえつるはならひなしとや身をは知覽
薄
まねけともたちもとまらす過ぬれはしほれやす覽花の袂は
はたをりめ
薄をはたをりめしてよほに出てたてらぬ人を招きもそする
かるかや
我駒をしはしとかるか山城のこはれの里に有とこたへよ
をみなへし
ちる花をみなへしもちて行秋の戀しき時のかたみとやせん
もちつきのこま
形をはみてや忍はて怪しくもちつきのこまの戀しきやなそ
きくのはな
春くれはたなひく煙たえせすと菊の花にのくさかもゆらん
からかみのかたき
よと共に心をかけて賴めとも我からかみのかたきしるしか
けふそく
思へともけふそくやしき人心見ぬよりさきに何たのみけん
田上に侍りけるころこもりかいねといふ物をもちゐにしてとり出て侍りけるをまたのひみそうつにして侍るを見てよめる
法師このいねとみしまにもちゐれはみそうつ海も皮にける哉
しほゆあみにつくくに廣所へまかりたりけるにしりたる人のものをこせたる中にはまくりにじせといふもの又いかかさめみるとむくさの物を送りて侍けるをとりをきたるをみて戀の心をそへてよめる
我袖はまくり手にして隱せ共いかてかさめにぬるとみる覽
すみはこのふた
こぬすみはこの二人こそこのむらめなそや我身を疑はる
からすのす
いつみからすのすきひたり尼君にあまのりあふれさしせ巾さん
みたらし川
いかにして心みたらし疵なくいての山吹散まかふとも
つるふちのこま
咲出るふちの小松にかゝらすはいかて千とせの程を過まし
くるみのから
老のくる身いからくのみ覺ゆるはおもてに浪をたゝむ也覽
こまつふり
春の野にこ松ふりつむ淡雪をけたすておりて家つとにせん
まゝきのやたて
みくら山槇のやたてゝすむ民は年をつむともくちしとそ思ふ
からかうし
夜と共にてつからかうしあけおろす袖に我身の成にける哉

く　はりばこのふた
針箱のふたつの袖にさしつれと一つもみえすおちにける哉
　あしたかきりかけ
覺束なあしたかきりかけふも又くれ行空にみそまかへつる
　たくみとりのす
姬小松ねたくみとりのすかたをはたちへたてける春の霞か
　とくさむくのは
程もなくとくさむく野は成にけりむしの聲々よはり行まて
　このしまのみやしろ
明石にはこのしまのみや白妙の雪にまかへる浪は立らん

連哥

殿下中將にておはしましけるころ人々に連歌せさせ
てあそはせ給ひけるにせさせ給たりける
かりきぬはいくのかたちしおほつかな
　これを人々つけおほせたるやうにもなしとて後に人
　のかたりけれは心みにとてつけゝる
しかさそいるといふ人もなし
　堀川院御時うりふねかきいれたりけるをみて肥後君
うりふねはうみすきてこそまいりたれ
　まいりたりときこしめして御前にめされてつけよと
　仰を有けれはつかまつりけり
なみにふられてみなそこに見ゆ
　殿下にて人々に連歌をせさせてあそはせ給ひけるに
　あけかたに成て鐘の聲ほのかに聞えけれは
　安藝守重基
こゝのつのちのこゑ遠くきこゆなり
　つく
わかむつのねのつみやきゆらん
　能登守公俊か家に中納言基綱したしきあひたにてわ
　たらせ給へと申たりけれはくせよと有しかはまかり
　たりけるにいてゐにてこゐつくらせけるに長大夫と
　いふ物のつくりけるをみて　長濟律師
このみちにほうちやう大夫長したり
　おいたる翁のむかひゐてれうりするをみれはたれと
　か申ととへはみよしのすけとなん申といふを聞て
みれはみよしのすけるれうりも
　堀河院弘徽殿にわたりてあそはせ給ひけるにくろお
　とこといふ笛ふきのこゑしけるを聞しめして
　御製
くろおとこくろとのほとにをとすなり
　中納言御前にさふらひてとくつかまつれとせめられ
　けれはくちにまかせてつかまつりける
ひこのしろぬしゆきさたかるい
　中納言重資藏人頭にて侍りける時殿上の人々あまた
　くしておほ井にまかりてふねにのりてきよたきとい
　ふ所までのほりてあそひけるにいはともけはしくて
　なみたかしとてかへりけるに
　隆源阿闍梨
きよたきはかんせきせんのところかな
　つく
なみたかせふねわきかへらすな
　北山の邊にまかりけるにみちしるへに人くへしと聞
　えけれと見えさりけるにきつねさるといふ所に馬に

のりてはしらせていてきたるをみて

中宮亮仲實

わつかにきつねさかにきたれり

つく

こう〳〵といひけるしるへはしらせて

木助敦隆かのりたるとの外にやせよはくしてをそかりけれはをくれたりけるをまちつけていかにとゝへは

敦隆

ほねあかりすちさへたかきこまなれや

つく

ひにゆくことはしかへしそきみ

中宮亮仲實備中の任にくたりける時に備前國にあふすきのくるといふものゝたちなみたるさきにうといふ鳥とさきといふとりとゐたりけるをくしたりける六波羅別當といふ僧の中たりける

とりとみつるはうさきなりけり

これをかみ仲實えつけて京にまうてきてかたりけれはつけゝる

このみかとかきはまくりもきこゆれと

昔七大寺をかみに故師大納言殿ならにおはしましたりけるに東大寺の長濟律師か房にとゝまらせ給ひたりけるに房主かこのむ事にて今宵和歌會さふらひなんと申けれはよませ給ひて講するおりにきりとうたい辭られてなかりけれはさはきけるを聞て

備中守政長朝臣

とうたいゝとうたいしとも見ゆるかな

俊頼つけよと人々有けれは

やましなてらはさてはやましな

くらまにまいりたりけるに師の房にてあしのきたなきをすゝかむとてたらひをもてきたりけるをみて房主の僧にいひかけゝる

たらひしてあしをはいかゝすゝくへき

僧のつけたりけれはかへりて申ける

みつかめにゆはわかぬものかは

さかのゝ邊にまかりてあそひけるにはきをみなへしの有けるを

はきほゝしふちはかまきよをみなへし

平大進基綱

まねくすゝきにみもそあかるゝ

すゝめのきさはしの男はしらにゐてなくをみて

肥後君

すゝめこそおとこはしらになきゐたる

つく

きさはしたなくいひやしつらむ

中宮亮仲實か家に人々あまたまかりてあそひけるにたるきにとりをさしたりけるを見て

たるきにはやまのうつはりさしてけり

慈雲房

のきはに海の月をやとして

うといふ鳥の有けるをみて僧のしたりける

あらうとみれはくろきとりかな

人もつけさりけれはのちに聞て

さもこそはすみのえならめよと〻もに
人々あまたやはたのみかくらに參りたりけるにこと
はてゝ又の日別當法印元(光イ)清か堂の池のつり殿に
人人ゐなみてあそひけるに元清連歌つくることなむ
えたることとおほゆるたゝ今連歌つけはやなと申ゐ
たりけるにかたのことくとて申たりける　俊　重
つり殿のしたにはいをやすまさらむ
元清しきりにあんしけれともえつけてやみにしこと
なとかへりてかたりしかはこゝろみにとて
うつはりのかけそこにみえつゝ
堀河院御時年中行事の御障子のもとにおはしまして
あそはせ給けるにさとよりまいりたる人の殿上にゐ
て物申を聞て中納言國信のしもにおはしますにあし
うのほりたるかなとみそ申けるをきこしめして御く
ちすさみのやうにおほせられける　御　製
雲の上にくものうへ人のほりゐぬ
俊頼つかまつれと中納言申けれは
しもさふらへにさふらへかしな
修理大夫顯季あるかれけるにおほちに車の輪のかた
わもなくてかたふきてたてるをみて
忠清入道
かたわにてかたわもなしとみゆるかな
後に彼大夫のえつけさりしとかたられけれはつけゝ
る
こしへくるまもいかゝしつらむ
月のあかゝりけるに宇治のあしろにて
治部大輔雅光
月はひる日をはよるとも見ゆるかな
かゝる連歌有けるをつくる人もなくてやみにけりと
人申けれは
いつかあしろにはゝ(へイ)なかるへき
ある女房のくらまへまいらむとてかたへの女房にし
たうつをかりけれは一日うつまさにまいりしにはき
たりしかはみなやふれにけりといふを聞て
けふみれはしたうつまさにやれにけり
と申たりしかとつくる人もなかりしかはかの女房に
かはりて
くらまきれにそいまははくへき
堀河院御時ゆは殿にてあそはせ給しに
源中納言
はるくれはゆみはとのにてまとゐせり
とうつけよとせめおほせられけれは
番にあたりてまいる人々
人のさいくにものをせさせけるかわろくしたりと腹
たちていひける
貧窮にさいくをしたるすいくかな
いと連歌ともなかりけるをきゝなして
死苦もきたりてさめむものをや
法橋なりける人のこの比人にいはるゝ事有けるをた
はふれて　隆源阿闍梨
法橋しきりに案しけれとほと〻へけれは

むへきたなけに見ゆるなりけり
よしの山の君といふ僧の房のたきのかみ障子にかき
つけたりける
たきのいと見にくる人もなし
これを聞てすゑにかきつけ侍りける
谷川の心ほそさにかきたえて
身になけくを侍りけるころ　平大進基綱
身のうれへ刹那かほともやすめはや
つく
須臾もこゝろのなくさむはかり
山上に侍りけるころ日の暮かたにいし山のかたに鐘
の聲の聞えけれはくちすさひに
いし山のかねのこゑこそきこゆなれ
これを連歌にきゝなして　俊重
たかうちなしにたかくなるらむ
かきねにいたちはしかみといふものゝおほるをみて　隆源阿闍梨
かきねにはいたちはしかみはえてけり
つく
ねすもちのきよこゝろしてさけ
備中守政長八條の家にて人々あまたあそひけるに泉
すこしひてつくにもあまらさりけるにやくする侍の
はきにひるのくひつきたりけるを　玄蕃大夫隆成
いつみのひるはみえもするかな
つく
いそけともみつのそこなるけしきにて

いちにいちめかさ多かるをみて　時房
いちみれはいちめかさこそつきもせね
きなるうりをゝきならへたるをみてつく
うりかふためのみのみつとへは
おさなきちこのちまきむまを持たるをみて　承源法師
ちまきむまはくひからきはそにたりける
つくる人もなしときこえしかは
きうりのうしはひきちからなし
前の中宮に連哥といふ女房にしのひて右中弁伊家も
の中と聞えけるかほとなくをともせすときゝてふち
なみといふ人のしける
こゝとしや連哥をしてはをともせぬ
右中弁のゆつりてつけよと申しかは
一はしもやとにすゑつけよかし
すみとりのすみなきをみて　經仲
すみとりのすみもとられてゐたるかな
つく
ひもおこされぬひをけのつらに
ようもしらぬ事をとへはえしらぬよし申を聞て　肥後君
難儀をはかりにも人のいはぬかな
つく
せりつみにしてよをしすくせは
人のをしたりけるにくた物の中になしの有けるにこ
との外にかたかりけれはしける　仲實朝臣

けふの事かたなしにてそおしはかる
つ　く
みなみのところにかゝらんとは
太政大臣殿のこのゑの家に新院の東宮と申ける時おはしましけるころ大夫公實の宿所にてあそはれけるに人々ゑひさまたれてまはるゝをみて
參議爲房
さかもりのことくらく（胡徳樂）ともみゆるかな
彼の大夫のつけよとありければ
たうとくりきてまひよろほへは
堀河院御時主殿司あたらしくいてきたるをみて
少納言懷季
ねすみをいに（老）もおひにけるかな
つ　く
かはほりのすゝたるかほとみゆるまて
長如來といふこうちのこうつをみて
隆源阿闍梨
長如來こをりやくともしけるかな
つ　く
天王寺なる凡夫にはまく（負）
たかさといふ物きたる男のはたけにかよふを見て
津守國基
たかさきてはたけにかよふおきなかな
つ　く
うしにむまくはかけたるもあやし
刑部卿道時のしほゆあみに津の國なる所へおはしけるにくしてまかりてしほはてゝ京へかへるかはしりにふねをこきいれたるにふねのおほくつきてひしめくをみてわさとならねとも
かはしりにふねのへとものみゆるかな
刑部卿としゝけにつけよと有しかはつけたりける
しほのひるとてさはくなるらん
大風にたてしとみなとをふきたをしたるをみて
承源法師
大風にたてしとみこそふしにけれ
つ　く
庭はらむもんひしかたにして
ふしみにくゝつしさむかまうてきたりけるにさきくさにあはせて哥うたはせんとてよひにつかはしたりけるにもとやとりたりける家にはなしとてまうてこさりければ
家　綱
うからめはうかれてやともさためぬか
つ　く
くゝつまはしはまはりきてをり
人々あまたくして觀音寺のかたへまかりけるにひきかへのうしのことの外にちいさくやせてえひかさりしかはいほうしりとつけてわらふほとにかたはしさまにたふれぬへくよろほへはうしろさまにあゆはせてたふすなと人々あるを聞て
くひほそくいほし（蟷螂）ゝりしてたちなをれ
つ　く
いなこまろひてみそにおつるな

ひくちのみやの御堂供養に殿上人院よりまいらせ給たりけるにことはてゝゆりはなにあひたりけるについてある事有て　　ゆりはな

みやき野のりんたうくやうことをへぬ

つ　く

き鄕のとのふせとりにして

皇后宮亮顯國人のかりおはしたりけるにあはさりければ

やり水のこゝろもゆかてかへるかな

後にこれをえつけさりしことのはちかましかりしと人にかたりけるをききてかういへなとてつけゝる

たてならへたるいはまほしさに

ならにしりたる僧の論議しけるかいとしもせすと聞えけれは　　承源法師

論議をはみそひしをにそしたりける

いちにきゝてつけゝる

たうさうなりと人はいへとも

ある所にあそひけるにたかうなまいらせよといふをきゝて　　橘成元

たかうなとたかうはいはてもてまいれ

つくる人もなかりけれは

きしにおひたるたてきしたてゝ

十月はかりに月のあかゝりけるよ四條宮にまいりて女房達に物語してあそひけるに俄にくもりて時雨のしけれは申たりける

おほそらはなみたほうしになりにけり

つ　く　　甲斐公

しくれもうやとかほにかゝれる

堀河院御時出納か腹立てへやのしうといふものをみくらのしたにこむなるを聞て　　源中納言國信

へやのしうみくらのしたにこもるなり

つけよとせめありけれは

おさめとのにはところなしとて

仲實朝臣のもとにて役する侍のものをこほしたりければ　　仲實

しろたへにしれてもみゆるおとこかな

つ　く

腹くろしとは名をえたれとも

堀河院御時内侍所へ供御まいらせさせ給ひけるに内侍の日來はへりけるかさはる事有て俄に出へしときこしめしをきたりけるをえしらて藏人は候と申たりけるによく尋よと仰事有けれはおとろきて尋けるに出にけるときこしめして仰事ありける

内侍こそ支度の内を出にけれ

つけよとせめ仰られけれはつかまつれる

外記はおもひの外にまいれと

つくしに侍りける比すゝくらにほしゐの有けるをみて　　有僧

すゝくらにふるきほしゐそつきもせぬ

人のかたりけるをきゝて

たか領々にならむとすらむ

山女をみて　　仲實

けふみれは山の女そあそひける
つく
のゝおきなをそやらむとおもふに

西山に五節の命婦といふことひきのもとに人々あまたくしておはしましゝにみちにてときはを過させ給とて　　帥大納言殿

ときはゝすきぬいつらかきはく

刑部卿政長のつけすとてゆつられしかは

みちすからまもりさいはいたまふれは

伏見の山さとにてあそひともをあるしのをこしたりけるをあそへなとかうてはなといひけるをついてに　　六郎大夫孝清

あそひをたにもせぬあそひかな

人々つけよとありけれは

さもこそは哥もうたはぬ君ならめ

ひと／＼あまたくしてしもわたりへまかりけるにたかはたけといふ所にてくしたりける人のしたりける

たかはたけいとたかしとも見えぬかな

人もつけさりけれは

くほたもかくやくほならさらむ

これはおほくきこえしかとも。わすれたるをはえしるし申さす。

右散木奇歌集以織部正乗尹本挍合了

群書類從卷第二百五十五

和歌部百十家集廿八

藤原爲忠朝臣集

親月中の二日はかりに友とちひとりふたりかたらひてくらまの山にもうて侍りけるにふもとの賤か家のいとあはれなる垣ほに梅の花いとにほひやかに咲わたしけるをみてよみ侍りける

山かつのかきほも春の色みせて匂ひみちぬる梅の初はな

かへさに谷川のみきはに梅の咲たるをみて少將かくよめりける

みわたせは梅かゝうかふたに川の流れもおしき花のうは波

或處にて人々あつまりて歌よみ侍けるに梅かゝといふことを

そことなき野へにそ向ふ梅かゝはまたみぬ方の盛とをしれ

大貳の家にて人々十五首の歌よみ侍けるに霞を

煙かと今朝みえわたる春霞やまのこのめもゝえやしぬらん

あるしの男かはらけさしおきてかくいへりける

みよしのゝ嶺のしら雪きゆるかとたちし霞に驚かれぬる

花をまちわふる心人々よみ侍けるに

またしとを思ふこゝろに詠やるねてもさめても花の面かけ

庭の櫻のさかりなるをみてよめりける

我そのゝ咲し櫻をみわたせはさなから春のにしきはへけり

花のころ人々法性寺へまかりてひねもす哥よみあそひくらしけるにやうやく花も散しきけれは法師のいてゝ昨日の嵐はけしくてなといふほとに

春風にちりしく花のこの本は峯のあらしに恨みふくめり

柳

朝あけの露のみむすふ玉柳かせにくたけてものやおもはむ

西山へまかりけるにやなきの谷河にふしかゝりて水にひたれるをみて

河柳ゐせきにこしを打かけて流るゝ水に髮あらふとか

やよひのすゑつかたひえの山へのほりけるに行道のきしの跡かたにつゝしのあまた咲けるをみてかねかたのきやういと興し給へは

よち登るさかしき山のとるてには覺えす手折つゝし也けり

ある所にてすみれを人々よみ侍りけれはよめる

春雨のいくしほそめてつほすみれうすき紫の色やみすらむ

祐里僧都すみれをよめりける

春くれはかたのゝ原のすみれ草摘しかた手につはなぬく也

西山の山莊へまかりけるに人々ひとひふつかここにあそひをりて哥なとよみ侍りけるにあしたのうくひすといふ事をよみはへりける

朝未氣かすみをこめて鶯のなく音に寢屋の窓はあけゝり

ある人の屛風の繪にうくひすの梅の花をちらすかたをかきけるをみてよみ侍りける

あさ露にこぬれはたゝく鶯のちらまくおしき梅の花かも

また屛風の繪に雁のあまた雲をはるかにとひゆくかたをかき侍るをみて

春くれは雲まを分て歸る雁ことちをたてゝひきそつらなる

はるのゝをとをりはむへりけれは草の中にきゝすの鳴けるをきゝてよみ侍りける

萌出る草のゝ原にこもるてふこれややけのゝきゝす成らん

歸　雁

時きぬとふる里さしてかへる鴈こそ北みちへまたむかふ也

歸雁を

ふるさとへ霞の衣きかさねて寒きこしちへかへるかりかね

又

春たちて都の空を思ひやりつはさうちたれかへる雁かね

おなし

薄かすみ搦引山のたえまよりかへりし雁は雲のいとすち

雉　子

きゝす鳴春の大のを見渡せはさはらひあさりほろゝうつ也

三月三日あるやむことなき女房の桃のはなを一えた口きとなんいひおこせけれはかくよみてつけ侍ける

三千とせの齡をのふといふ桃の花をは君におしけくもなし

雨にしとゝあひたる櫻のはなを按察公よりおくられはへるとてよめる

けふしもそ雨ふりそめて櫻花くれなゐふかく色やみすらん

かへし

ふりそむる雨の手かすにあふ花の色の深さをみまし社すれ

ひと／＼よりて哥よめるに花のちるといふこゝろを

櫻咲こすゑの花を風ふけはうすくれなゐにさゝ波そたつ

春　駒

萌いつる尾花あしけの春駒はつめもおしますあれわたる也

戀

かそいろの契は深きつはめたに二人とことを語らひはせす

醍醐にすめる僧のわらひを籠につみておくるとてかくよみ添ておこせたりける

年つみて老をしらする早蕨のすゑをかゝみよ人もわかみも

かへし

春毎に老をしらする早蕨のかゝみるすゑのよこそつらけれ

ある處へいきけるにあるしつれ／＼なる事をいひ出てやかてすゝりをよせたとう紙をいたして春雨といふ心をよめといひけれは

はる雨のとしふる軒に落きてはおもひの玉のかすそそひ行

とかくいひかたらふほとに三位侍從たつねいりはむへりぬしはしよのわさなといひてのちかくいへりける

さゝかにの軒端にすかく糸すちに春雨つなく露のしら玉

彌生のはしめつかた人にいさなはれてひむかし山のほとりへ花みにまかりてものとも哥よみけるに人に

かはりて

なに事もおもひわするゝ春くれは齢を花にはこくまれぬる

おもふとち二三人かたらひて横川へ花みにまかりけるにあるしの僧いてゝさいつころ雨風はけしくてなこりなく散侍るとて青葉ましりにところ〳〵殘りけるをみてみな人ほいなくおもへり興もなからん所に時をのふへきにもあらすとてうち出侍りけるにみちにいての山吹のいとにほひやかに咲けるをみてとりあへすよみ侍ける

花もはや散てしあとのなこりにはこやみて過む井ての山吹

こゝろさすことありてにし山の法輪寺にまうて侍けるに例の資□をともなひて三月末に山につきぬ院主の坊にいりて侍りけれはとかくと物して時をうつし侍る程に遠山寺の入會のかねもつけわたる程に僧等小法師なと佛の御前にまうていて陀羅尼なといとたうとくよみはへるとともに念誦して小夜かたふくまてありて坊にかへりぬ夜あけぬれは院主うしろの山の尾上にしなひ三尺にをよひぬる藤のいとにほ（ひ脱歟）やかなるか枯木に咲みたれてみるに興ありいとたへかたくて

いつよりかすみそめぬらん紫のいまおりさかるやま藤の花

かくして山をおりて大井川をみわたし侍れはおりふししつおのいかたをくたしけるをしはしみやりて

大井川くたす筏の水さきは波もくたけて玉と散ける

中將きゝたまひて

さしくたす筏のかけに驚きておちくる鮎のひれふるもみゆ

夏

衣かへのこゝろを

けふよりは蟬の一重に成ぬてふ春をはかへす賤かふるきぬ

卯花

雪とみる賤かゝきねのうの花はさなから冬の心ちこそすれ

獨聞ほとゝきすといふことをよみはへりける

ひとりのみよをはあかしの礒のやにあはれとゝひし郭公哉

郭公きゝつるといふことを人々よめるつゐてに

伊吹山おろせる風に聲こもりさたかならねと聞ほとゝきす

五月五日あやめふくをみて

今日はゝや閨の軒はに菖蒲葺てまはらにうつる朝日かけ哉

しけたかの家へ人々よりて哥よみけるにあやめを

いつよりか菖蒲の草をいはひそめねも長きよにひき傳ふ覽

早苗とるといふ事を

遠近の里のをとめ子さなへとる手もとにくれて日影なき迄

おなしこゝろを

里人は山田のくろにしめはへてとりし早苗をまつ手向けり

植殘す早苗を

早苗とりうへもわたさぬ田面こそかた淵にゝて小波そよる

盧橘風かほるといふことを人々よめるつゐてに

匂ひくる風にそ忍ふ橘のかをやむかしと袖にとめまし

雨中盧橘かほるといふ事をよみ侍ける

しめやかに花橘はかほれともなか〳〵しきは雨はれもせす

ほとゝきすはしめて聞といふことをよみ侍ける

此ころと待おりふしにほとゝきすう月五月はをのか時とて

辨のかたにありける女はうさみたれにほとゝきすを

きゝてといふ事をよみはへりける
五月雨に聲もさたかに鳴わたり羽さきしほれぬ時鳥哉
ある人のもとにてほとゝきすをよみ侍けるに三井寺
にすめる僧のよみ侍る曉郭公
よこ雲のわかるゝ空に子規こゑをつれ行山のはしく〳〵
ある人の子規によするこひをよめりける
さつき山こするもたかき戀をしてなく音そらなる時鳥かな
はしめてほとゝきすを聞といふことをよみ侍ける
あし曳の遠山のはに時鳥なくねなからに今朝そきゝつる
女はう侍從ほとゝきす待わふるといふことをあふき
にかきはへりける
まちつくす夜はの契をほとゝきす我のみ鳴て聞よしもなき
人々うつまさへまうて侍けるに別當の坊月のよに時
鳥の鳴といふことをよめりける
時鳥月につれてやいてぬらんおもはぬ宿の軒はにそなく
ある所へまうてゝ雲外郭公といふ事をよみ侍ける
時鳥雲の外にてなきぬ共たれきゝとめてあはれとはいはん
雨中のほとゝきすをよめと人のいひけれは
村雨にはね打しほれほとゝきすけふは鳴音もしめりてそ聞
御牧といふ所にしれる人侍けれはたつねまうてける
にあるしのよみ置る哥ともとりいてゝみせ侍て後岡
のほとゝきす(古點)といふ事をよめと云けれは人にか
はりてよみはへりける
うき身にはとふ人もなき時鳥うれしと聞し岡のへのいほ
あるしのゝほとゝきすといふことをよめりける
こしかたはいつちなるらむ時鳥山かはとをのむさしのに鳴
関のほとゝきす
逢坂の關のこなたにほとゝきす山田の杉によひとなけかし
あるとき河内守まうてきぬ人々哥よめといひはんへ
りけれは浦郭公といへる事をよめりけり
時鳥をちくる汐に聲やみてからきめをすきいそやにそなく
〔み點〕
宰相のもとに上達部二三人よりて廿首の哥よみはむ
へりける中に朝郭公を
くやましな朝寢なからに時鳥しのひに聞て枕うらむる
あるひとのきんさたのもとにてあしたの時鳥をよめ
りける
時鳥まちつくしてそ朝いねるきけといさめてのきになく也
人のもとへ五首の哥よみてやりける中に夕時鳥を
物おもふ暮につれなき時雨あはれとふか今の一こゑ
ひむかし山にすむ人のきやうへたよりあるついてに
せうそこをくるとてなか雨につれ〳〵なる事ともか
きてはしかきに月のかけたになきなといひて
晴まなき空そものうき此ころは月のかけまてかくる五月雨
かたゝよりなれは此返しもせすなりぬ後四五日をへ
てたよりあれはかへしをかきてやりける
山すみはさこそあるらめかた岸のくつる計りに思ふ五月雨
過こしかたをかけておもふことのはへれは又
つれ〳〵にむかししのふにをく露の泪にまさる五月雨の空
五月雨を
さみたれに淀の渡りは水まして汀のまこもそこにふしけり
おなしこゝろを
さみたれに大江の汀波たちて高根のきしに舟そつなける

としかたの朝臣の家にて人々廿首のうたよみ侍りけるに五月雨を
さみたれにみかさそ落る太山川なみにつれてそ蛙なくなる
山川五月雨を
さみたれに山田のくろを押流し岸もたいらに眞砂あらへる
山五月雨を
きはもなき不二の高根の五月雨は雲と共にそひたすとそみる
舟中五月雨
さみたれに筏ひきかこふ海士をふね竿さし分る蘆の葉末を
加茂の山庄にまうて侍りけれはやむことなき人々うちよりて歌よみひねもすあそひ暮しける三十首はかりの中にくはへよといひはへれは橋によする五月雨を
水まさりわたりも絶しなからなる橋のゆきけたみえぬ計に
江五月雨
まのゝ浦入えの方のわかすゝき波にもまるゝさみたれの比
或屏風のゑにおほきなる瀧のかたをかきけるをみてよみはんへりける
さみたれに堤の瀧の水まさり岩ぷつをとはたん〳〵となる
山五月雨
さみたれは朽木を流すみ山河まつおりあひてかたよせに鳬
川五月雨
降つゝく河水ましして小田のはらひとつに成ぬさみたれの頃
藤中納言こゝち例ならすとて過にしころより宇治へおはして氣をはこくみ給ふとなんわかき上達部殿上人なと思ひ〳〵にとふらひまかるほとに少將とつれて宇治へまうてけり中納言きそくおしなをしぬとていとゝこゝちよけにみえてひねもすあそひくらしけるに宇治河の流れ朝日山こしまかさきの夏のけしきなとみるにいと興ありまきのしまさきあをみわたれるにところ〳〵に駒おしはなしてわか草なとをすさめるをみて
春過て夏のにあさるはなれ駒こゝろのまゝに草すさむ也
おなし心を少將
ぬしもなき夏のゝ原のはなれ駒こゝろの儘にかけつ戻りつ
杜の夏草を
おひしける森の夏草かる人のわけいるこしのかまみえぬ迄
水にうつれる螢火をよみ侍りける
さは水にうつれるほしと螢火といつれわけえぬ玉とみえ鳬
夏の野の草かるをのこをみてよみ侍りける
しけりける夏の大のゝ草苅は水入にひとし見えつかくれつ
少將の家の閑になてしこの花さかり□けれはやかてすゝりをこふて
咲いつる若葉も同し朝夕にみれとめかれぬやまとなてしこ
三位入道の家にて人々よりてなてしこをよみはへりけるついてに
撫子はわか身のするとおもへれはをく朝露をまつはらひ鳬
夏月をよめりける
夏なれと影こそすゝしよひ月のゆふたち過るあとの庭かな
法性寺のはす池の汀にならひゐてすゝみ侍りけるにゆふ月いけのおもてにうつろひ給へるに水草しけく月をかくしかちにみえ侍りけれは人々冴ける月に雲

のたちをほふこゝちにやなとたはふれてまことに興
ありけれは
池の波こゝろのあらはうき草をはらひてみせよ水底の月
雨後夏月といふ事を貞意僧都よめりける
夕立の過ゆくあとの雲まよりかりあきらかに月そすみぬる
ゆふたちを
黒雲に風おちきては夕立の雨やとりする木々のむら鳥
水邊納涼
夏の日のあつさをしのく不二河の汀のかたは冬こゝちする
西空法師といへる僧よはひ七十にかたむきけるかい
とたうとき僧にてをり／＼人のかたへおはして哥な
とよみ侍りけるかかねさたの朝臣のかたへ法會のさ
たにつきてまうてきたれるに上達部哥よめとしゐて
けれは杜邊納涼といふ事をよめりける
年つみて暑さ苦しもいてやさはともにおいその杜に涼まん
又あるひと河邊の納涼を
山川の水かさもふかき汀にてすゝみくらせる夏の夕くれ
おほ井のすけといふ女房いみの事ありてこのころさ
とにおりゐ侍けるかある人の杜蟬といふ事をよませ
けれはよみ侍りける
夏の森のこすゑ吹なるゆふ風に蟬のはかへるころもての杜
藤はらの刑部少輔の家にて哥よむ人々あつまりて廿
首よみ侍りける中に樹陰蟬と云事を
椎の葉のうこくはかりに鳴蟬のこゑさへきけは涼しかり鳧
夏の蟬といふことを女はうしんすけよみ侍ける
夕立の雲風さはくおりからにこすゑの蟬もこゑしきる也

御禊
みそき河瀬さきにいてゝ大麻にはらへることを神も聞らん
夕貌
賤か屋のまかきに咲るゆふかほの花は秋をく露にまかへり
水鶏
蟹のとをすからに叩くおきみれは水鶏たち行しのゝめの空
おなし
明かたのときつけ鳥と諸共におきよとたゝく水鶏也けり
二條殿へくきやうかむたちめあつまりて哥よみてま
いらせけるに
涼しくも衣手かろし御禊川あつけはらひてかへるさのもり

秋

早秋のこゝろを
春夏も思はすくれて今朝ははやけしきも秋の色そみゆめる
初秋はしの三日はかりにある人來てくれにおよひて
あそひたりけるによめる秋風といふ心を
人すまぬあれやの軒にはふむくらかたまくりする秋の夕風
荻の葉かせになひくこゝろをよめりける按察公
荻の葉は吹秋風のつまやらんくるとひとしくねころひに鳧
あるところへまかりけれは老若うちよりて哥よみけ
り荻を題にてよめといひけれはとりあへす
秋風にすその荻はおしあひて聲をしたてゝ露をはらへり
苅萱
秋風はいかにおもへは苅萱のもちける露をふきはらふらん
西山へ人にさそはれてまかりけるになにかしの僧と
かやきこゆる所にてしはしあそひをりけるに庭の風

情ことさまにかはりていとおもしろしいろ〳〵の千草とも植ける中に荊かやの露おもけなるか風にみたるゝもいと哀にみえしかはよみ侍ける

秋風に心みたるゝかるかやのねおきひまなき露の手枕

薄

露ふかき大河島のはなすゝきまねく心はなにゝかあるらむ

原　薄

分ゆけは尾花かうへの露おもみすそのゝはらにしほる袖哉

花山にすめるひしりのもとよりをみなへしのいとにほひやかなるを一本おこせるとてかくよみて付ける

女郎花きみやしのふと一本をゝくる心をあたになかめそ

返し

女郎花をくれる上はなれも又露とちきりてあたにみましな

野女郎花

をみなへし露ふき結ふ淺茅原みるにえならぬこゝち社すれ

ある女はうつ荻をよめるとてかきつけておこせける

秋風の末こすまゝにした荻の露きえかへりふしそわひぬる

梅津の坊へまかりけるに庭はかまのほころひわたりていとやさしくみえ侍りけれはとりあへす

露深ゝあれたる庭のふち袴たれうけはりてみるよしもなし

侍従房のしら河にすみ侍りけるかやゝひさしくをとつれもなときそといひおこせけるにあるときまかりてけれはしは〳〵物かたりなとして後すまるをみわたすにまことにおさ〳〵しからすいとわかくてよこもれる事よとあはれさまさりぬにしのかたをみをれはあさかほの朝またきより露ふかくさきいてけさはよめりける

世中のはかなき事は朝良のたゝ一ときとしらせてしかな

おなしこゝろを

あるとみれは其儘きゆる朝顔の花みてたにもしる人そなき

女房ゑもむのかみ草むらの虫をよめりける

秋のゝの草むらことになく虫のかれふと共に聲かはりゆく

人々よりて十五首哥よみける中に松むしを

秋もはや末の落葉に松むしのこゑうつもるゝ野への哀さ

おなし心を

初霜にかるゝ草はをたのみてもかひなくよはる松虫のこゑ

あるひとのまかりて哥よみけるに葛をなんよめりける

片岡の秋の夕風ふく時はうらみやはせむ葛のうら葉も

北山にて人々よりて百首の哥をよみ侍りけるに雁わたるといふことを

天の原つらなり渡るはつ雁は雲すちかふて横をれにけり

雁友にをくれてひとり嶺こすといふことをゆけひのつほねよめりける

そことなく數ある友を先たてゝひとり峯こす初雁の聲

侍従の君すなこをまけるあふきに雁のつらなりわたるかたをかきけるによみてある人にとらせける

つらなりて渡れる雁の羽も弱み天つ空にそしはしやすめる

或ときかむたちめ殿上人なとよりてひねもすあそひくらしけるに遠聞鹿聲といふ事をなむよみける

いふき山遠く聞ゆる鹿の音はたにの外なるつまやこふらむ

夜鹿を

山もとの里人いかに聞わふる夜るなきたつるさをしかの聲

月

淡路かた浪にうきねのなかき夜は月に心のやとる也けり

人々月の歌をよみけるに舟によする月を

ことはなれ行月かけはあかしかた心をすまのうら迄もみゆ

月

すみのほる月の行衛をみるときは山また山によは更にけり

おなし

浦々をつとふなるをの松かけにくまなくすめる月をみる哉

八月十五夜

名にしおふ今宵の月ときゝけれはいつにすくれて詠ます哉

おなし月を

月をみは今宵の月にしくはあらし入迄みはやよはなかく共

月のかけの水にうつらふといふことをよみ侍ける

影宿すみたらし河のすむ水にさなから月のあまくたるかと

住よしにまうてて社頭の月といふ事をよめる

曇なきやしろのうへに照月はけにすみよしと猶もたのもし

雲間月

照月のまへのみとをる黒雲をせきをしすへてみる由もかな

望　月

雲もなく山遠くして照月の更行そらを惜むかねの音

八月十五夜

月をみは今宵の月にめてゝやせむ老ゆく木の秋の最中に

嶺　月

峯かけていさよふ月ののほるをは旅ねの床にふし乍らみる

月

世中にかはらぬ物は月はかりなかむる人はいくかはりしつ

庵　月

世をうしと草のいほりに忍へ共かはらすとふは月の影なる

あはらやの月といへる事を内侍すけよめりける

葎はふあれやの月をなかむれは風はらく〜と影もすさまし

おなしこゝろを

人すまぬ草のいほりはあるれとも住ものとては秋の夜の月

月によする述懐

月影はまたもめくりも逢へきにあはさるものはすきし事共

紅　葉

時雨にそまつ染てけるもみち葉のあたりの松も錦うつめり

おなしこゝろを

もみち葉も千入に染て山姫のきかさねたりし衣笠の山

紅葉如錦といふことを人々讀はへりけるに

故里にきてもかへらは時はいま紅葉のにしき心まかせに

擣　衣

秋更て寒さ増れる賤かいほにうちあかす也あさの狹衣

擣衣聞といふ事を

夜もすから聞も侘しき賤のめか衣うつ手のたゆくあるらむ

菊の花を一もとある僧のおこせるとて

千よのふる菊の齢を君にそとおくる心に花はありけり

山路落葉

木葉ちる岨のかけ道うもれともかきそ拂へる里のわらはへ

冬

時　雨

音信る槇のいた戸に音あらきしくれそ冬のはしめとはしる

旅人によする時雨を西空法師よみ侍りけり

思はすもしきつの浦に時雨して織いなむしろかつくたひ人

行路時雨

時のまに時雨は過て日は照ぬゆく〳〵ほさむまのゝすけ笠

おなし

秋かけてそむる紅葉のほともなく時雨と共にふれる太山へ

あられ

あられ降杉の板やの音たかく夢うちさます夜半の寒けさ

六條藏人の家にて哥よむ人二三人はへりて十五首よみけり其中に時雨を

さやかなる月と思ひし空なるをしくれてきたの黒雲そうき

時雨

照曇りまなく時雨るゝそら社は冬のはしめと先しられけれ

時雨

はけしくもひらの高根の時雨ては麓の里にはやめくりけり

霜

草も木も霜のおきなと成にけりからきめにあふ野への色哉

松霜

行としいつもれる松の霜みれは下葉かしけてみる空もなし

暮天霜

くれかゝる夕の空の霜の氣はかさゝきわたす天の河はし

閑庭霜

朝しもの庭白たへに置をみておい行としのかしらなつめり

女房すけ寒蘆をよみ侍りける

みしま江や霜いかれ葉を氷とちふくうら風もやふらさり兜

おなし

哀なりみなとかはらは冬枯にのこるますけも氷しめけり

雪

雪ふれはきそ路のかたは埋れてかけにし橋もみえす成けり

おなし

あらち山梢の雪に風吹ははるゝとすれとまたはふり〳〵

横川にすめるいとたうとき聖のまうて來てひとひふつかあそひ居て歌なとよめる中に閑庭雪といふ事をよみ侍ける

雪つもる庭の柴かき色かへて先さきそむる梅とみえけり

社頭雪

かけ寒る神のみまへの榊葉は雪のしらゆふかけてこそみれ

ある家にて人々歌よみ侍りけるに旅の雪といふ事をよみ侍る

降雪にふねこそわたせ藤川におりゐる鷺をしる人もなし

野宿雪

宿りとる野へのいほりの寒けきに思はぬ夜はの雲そ降そふ

野徑深雪

雪つめと鳥羽の通ひち道そあるひまなくやりし小車の跡

みまきといふところに住僧のようの事ありて京にしはらくありてある暮かたにきたりてよろつみし事ともかたりて後やゝさむくおもほゆるまゝ障子あけてみ侍りけれは雪のいたうふりけり僧とりあへすよめりける

音もせて降つむ雪の暮よりも老ゆく末の我そ猶なる

太山雪

木々の色もしろたへなれや山姫の雪ふる袖もひかり増とは

冬神祇

袖寒き田中のもりの辻やしろほたきをはやす聲きほふらむ

古寺殘月

曉のかねにかたふく月影はかさきの山にいりかゝりけり

歳暮

暫しとてとむる手もなくゆく年の早くもあすは春に成にき

祝

何ことも惠みあまねき御代にしてたかやの軒も苫のむす迄

戀

思はすや結はぬ清水かけみえてしつくを袖にかくる我みそ

おなし

うかり鳧根もあらはれし菖蒲草さみたれわたる戀もする哉

深夜増戀

戀そめて夜とに夢もみしかとも今はいをたにねられさり鳧

待不來戀

ちきり置妹を今やとまちぬれは更行鐘のねすそあけゝる

女ほうすけ雨中増戀といふことをよみ侍ける

君こふと思ひくらせる夜の雨は人しれすしも袖そぬれぬる

戀

思ひ河思へはうけることの葉も終によるせのたのもしき哉

五月五日戀をあやめによせてよめる　　少將

あやめ草ねたくも思ふけふの日は君か心に我ひかれつゝ

草によする戀を

しほれぬる尾花かもとの思ひ草はかなく消むのへの露とそ

こゝろにおもふ戀を

人しれすおもふ心を君にさはおほろにうつせ春の月かけ

契りたゆるといふことを弁の君よめりける

契りこそくちやしぬらむ末のまつ涙もこす也袖のたまくら

戀

思ひいてよ伊駒の山の峯の月おもはぬかたに影やさすらむ

刑部卿の家にて五十二首哥を人々よみける中に忍ふこひといふ事をよみ侍ける

くちなしの色にも似たる我戀はいはての森にさてやはてなむ

船によするこひ

言つてむ海士の小舟のたよりにもそなたのかたに焦る我身と

戀

水莖のかきもつくさぬ思ひをはせめては君か夢にてもしれ

おなし

君とわれなれこし秋のかたみには置し扇をそれとこそみれ

人にしられぬ戀といふ事を女房ゑもんのかみよみ侍りける

我戀は垣ねかくれのをさゝにて人もしらねはうきふしもなし

わかるゝこひ

いてゝゆく我つまかたの横のとをおしあけかたの別悲しも

おなし

こふるみは蜑の小ふねにあらねとも我からかゝる袖の泪に

夢にかよふ戀を

思ひねの夢路やかよふ君かふす枕のもとにうらみかほなり

あらはるゝ戀

すまのうら鹽やく煙立のほり焦るゝものとつまはしりにき

忍ふこひを人々五首よみ侍りける中に

我戀はしのふの山の芝やまのけふりと消てあとかたもなし

水によする戀を

我思ふ心のそこはわきかへるいはまの水のあまりなるきみ

おなし戀を三位入道よみはへりける

戀しのひ朽なむあとの枕なる露もゝらすなかくはてにきと

不遇戀

片糸のより〳〵君をせとるみは思ひ細りてあふへくもなし

戀

照月のかけたにみえぬ泪こそくるれはまちてあはぬ恨みに

おなし

物おもふ宿はしくれの心地してかはくまもなき袖の涙に

三位よしすけの家にてかむたちめ殿上人よりてうた
よみはむへりけるに戀の十首の中に

思ひかけていはんも辛し玉の緒のあはすは何の心はかりを

おなし

ゆくゑなき戀もする哉しら雲のわかるゝ峯とくらふ思ひを

あるめのよめる

「[illegible]」

今宵そと契りてあはぬ夜はの月まはらに移るかけもそれそと

後朝戀

あとゝめて別るゝよりもはかなきは詞殘りて明るしのゝめ

逢不逢戀を人々よみ侍りけれはとりあへす

面かけを我身にそへて別るゝは月みるよはのふくる也けり

此間闕

湖

にほひ海かすめる沖にたつ波を花にそみするひらの山風

山家といへる事を人のよめりけるに又

山深み靜かにいねる寢覺にはまともる月にこゝろすませり

旅泊

くたひるゝ旅の泊りの曉はそこはかとなくみけるふるさと

旅

ゆく旅の空すさましき山路には袖にをきそふ木々のした露

野路

行さきはそこともみえぬ草のはら心細くもとをるあせみち

山居人といふ事をある女はうのよみ侍ける

あすしらぬ身にしあれはと假寢する今宵はのへの苔の小莚

おなしこゝろを

篠ふきのいほりをとちし草枕しける草はの露のよそうき

又

風もなくしつかなる山に住人のまた聞わふるさると鹿の音

眺望

武藏野や草はのうへをこす風のそらにのほりて降かむら雨

述懷

かす〳〵に過にし事はくやまねと思ひそ出る老のつれ〳〵

おなしこゝろを

行衞なき雲ゐにすみし鷹たつも道を求めてかけるときあり

又

數ならぬうきみの上やとゝまらん昔となりしあとのいひわさ

春

ひさくらをよめりける　按察公

梓弓はるはもえたつ草の原もゆともなきをいかにひさくら

花を

春くれは花のしらゆふ咲かけて手向の山はにしきたつなり
　りやうにん法師あるところへきて人にすゝめられて
　よみはへりける
ふる里をおもへは夢かうつの山花みてしたふ春の旅人
　紅梅をある人の一えたおこせけるをその返しに
くれなゐにうは染したる梅花あめ降そむる色とこそみれ
　花の散ける心をよみ侍りける
よしの山花のなかはに風吹て空はにしきのなみそたちける
　おなしこゝろを
春行てみわのひはらにやすらへはまれなる花をちらす春風
　おなし
木末うつ雨も惜しなちる花のふる程おつるなさけなくしも

夏

春過てしつか麻衣ときちらしさはへせはしとすかく里人
　葵
けふそとて賤機をりし山かつもおとろの髪に葵かけたり
　ほとゝきすを
早苗とる比しも小田にをりはへてうちしきりなく田哥鳥哉
　横川にすめる良禪法師哥よむ人にてつねは京にあり
　て人々に會し侍りけるかこゝたわつらはしきと聞て
　まうてけるにいさゝかはるゝけしきにてよろつもの
　しける程にうちつゝきをやみもあらぬ五月雨になと
　いひいてゝ此僧よめりける
五月雨にふりてゝなけや時鳥はるゝともなきあけくれの空
　若きをのこともあつまりて哥よみけるついてに五月
　雨を
船つなく淀の川きし棹たてゝうはなみはやしさみたれの頃
　かうちのそれかしといふ人にひと〳〵哥よめとあな
　かちにいさめけれはよみ侍りける五月雨を
五月雨のおやみもなきに小男鹿の上毛のほしは猶みかき鳧
　少貳のかたよりせうそこをゝこせけるはしかきに五
　月雨をよみてみせ侍り
みなと川岸うつ波のあらくして聽さきにこるさみたれの比
　ある人雨中のつれ〳〵に侍るとてひねもす哥よみあ
　そひける中に五月雨を
五月雨にみなとのかたへ水越てつなける舟をゝしなかし鳧

秋

　七夕雲といふ事を
たなはたの舟まちつけて天の川岸のこなたは雲そひれふる
　おなし
一とせにひと夜といへと昔より契たえせぬほし合の空
　又
天の川はし打わたすかさゝきの羽さきにのふる草むしろ哉
　又
銀河わたるせひろくのる舟のをそしとまねく雲の手ふりは
　辨のかたにすむ女はう七月七日たなはたの哥とてよ
　み侍ける
うらやまし今宵はあはむ七夕のさゝめをせむつもるをのは
　七夕
今日は早もゝはた立てをりあへるみけしの衣たちやきせ南
　安養寺にて人々らうにやくうちよりてひねもす哥よ
　み侍りけるに秋風をよみはむへりける

秋風はなにのうらみに野山なる草木をなへて吹てたふせる

荻

そよ〳〵と秋の夕風ふくときは誰ともしらすまたし荻はら

侍從の公詹の荻といふ事をよめりける

よもすからそれかと妻戸たゝかれていねもやられぬ軒の荻原

冬

杣雪

太山には雪こそはやく積るらしみほの杣人冬やすみする

きた山にすむ人のをとつれて侍るおりふし或人の繪を持出て歌つけてたへとあなかちに望みければみるに木々の枝に雪の降かゝれるかたをかきたりこの人辭しかねて

常盤きと人やみるらむ木々の枝に雪の花さくゑのみちらしな

やむことなきかたに初て御子むまれ給へり人々よろこひにまかりて歌よみはへり

萬代もつきぬ岩ねの松かえにすたつは鶴のひなにこそあれ

宴遊

めてあかぬ雪をめくらす袖のかにうつる心や面影にたつ

遊樂

千代よろつよをのみこむる園の竹ふしをそへぬる松の調へに

公事

霧はらひ霞をこめて君かためつかふることも又はよのため

祝

北のふちみなみの山に月さえて光たえせぬよろつよのかけ

又

春秋のひゝきをそへて風の音うこかぬ國をあふく君か代

鳥五首人にかはりて鴫

きのふまて蘆まに巣たつ鴫の子のけふはねにのみ現れに鳧

百舌鳥

うの花の咲とみしより百舌もはやしてのたおさの時と鳴也

雀

田つらにそ羽けふり立るむら雀はなみかたよす風にまかせて

鶉

住あらし鶉たにこぬ宿なれはこけふか草の露もたまらす

鷲

筑波ねの峯にすむなる鷲のねに騷きてみゆる猿の手つかひ

あるとき松公のきたのかたよりも唐の繪を北國の繪師にうつさせて侍る翅のたくひをゝこせて和歌をくはへよとのそみしかは

暮かゝりむれゐる鷲はみ穂のうらたゝしら雲の棚引とみゆ

烏

むら烏たそかれときに打つれていそく羽なみは遠の山もと

鷄

よは更ぬ時をおもへは遠山の鐘よりさきにつくる庭鳥

鶴

松たてる千歲の宿りありとみて雲をしのきておるゝひな鶴

また仙水のかたを書たる鶴を

繪にかきし庭の洲濱の鶴をみてとひていぬへき思ひけもなし

鵜鳥

朽木はしゐ杭にとまる鵜鳥のつかひしはしや水にすゝける

猿子鳥

囀りしあとりの聲に時過て桑かふ事をうちわすれけり

鶺鴒
神代より岩ほに馴し石たゝき人のためしに成にけるかも
鴨
なかきひの茂きの枝に喧すくなくひよ鳥にねふたけもなし
神鳥
ひらの蒿奠るとみれは雨ふりてしとゝにぬれてやとる椎の木
尾長鳥
とひかふにさはるや辛き尾長鳥しこきておるゝ松のうは枝
鷄
かやくきの賤やの軒にむら立て拾ふ落穗にはしやつかゆる
鳩
追たてゝ小鷹をはなす小原野の里よりうへにゝくるやま鳩

右爲忠朝臣家集以村井敬義本書寫一挍了部立等不審姑
從舊貫

式部大輔菅原在良朝臣集

花落薫衣
散かゝる花やむかしのわきもこかかさねし袖の匂ひ成らむ
花影浮水
氷そこに春やとまると尋みむうつろふ花のかけにならひて
三月盡夜
春霞たちかへりゆく通路をしはしとゝめよ雲のかけはし
夏夜於二秘書閣一同詠二雨中早苗一和歌
かく計りをやみたにせぬ五月雨にいかてかたこの早苗とる覽
夜深待郭公
子規まつとせしまにふしまちの月こそたかく空に成ぬれ
山家郭公
都人まつらんものを山里に聞ふるしたるほとゝきすかな
臨晩有涼
ゆふされはなひくをさゝの音にこそ思はぬ秋の風は立けれ
山家早秋
山里のくすのうら葉を吹かへす風のけしきに秋をしるかな
七夕
さよ深くあふせたつぬる彥星は共睦ことのほともあらしな
同
天河ほしあひの空も見ゆはかりたちなへたてそ夜はの秋霧
月前擣衣
月かけに秋のよすから起ゐつゝうつ衣手に霜やをくらん
九月十三夜對月惜秋

つき故になかきよすからなかむれはあかすも惜き秋の空哉

月契千秋

いつよりも月のゝとかに見ゆる哉千とせの秋の初と思へは

月照紅葉

よるきたる錦とは見よ散かゝる紅葉も月も隠しなけれは

終日對菊

白菊のかきほの花をなかむとて住家ならてもくらしつる哉

秋夜陪二吏部大王文章一詠二臨曉聞虫一

かたしきのねさめの床の虫の音は哀みにしむ物にそ有ける

秋日於二遍昭寺一詠二野徑尋花一

女郎花匂へる野へを尋ぬとてぬれこそきたれ道しはの露

九月十三日夜詠二終夜見月一

名に高き今宵の月にあくかれて露とをきいてあかしぬる哉

翫二紅葉山寺一

思ひきやむなしきとに尋きて紅葉のにしきふまん物とは

初冬於二羽林藤原次將文一詠二戀秋對菊一

なさけなく別れし秋の戀しさに露そたちうき菊のあたりは

山路時雨

山深みしくるゝ空を眺むとてはかなくけふもくらしつる哉

夜思時雨

うたゝねに衣のさゆる景色にてよしのゝ山の雪をしそ思ふ

雪埋寒草

老ぬれは我身とのみも見ゆる哉蓬かうへにふれるしら雪

栖霞寺冬意

淋しさはいつにもまさる小倉山ふもとの里の冬のけしきは

寄擣衣戀

諸共にたちきし人を戀わひてかたみの衣なく〳〵そうつ

故李部大王令レ通二或女御一間予爲二其媒介一而女未レ成二配偶之禮一王忽催二告別之悲一女以二一首一被レ投レ予共詞曰

宮城野にかれにし花の悲しきはおられぬ萩のうへも露けし

予以二戀君之趣一更綴二答レ女之詞一

宮城のゝ小萩か末のかれしより鹿そかひなき音をやたてける

法華經神力品

くさ〳〵にとをのしるしをしらせしも一つ御法のゆかり成覧

松樹蔭池水

岸ちかくおひたる松の緑こそ池に千とせの影はとゝむれ

松樹契遐年

嬉しさの行末とをくみゆるかな千歳をまつの宿のしるしに

冬日雲居寺

紫の雲ゐをねかふ身にしあれはかねてむかへを契り社をけ

松樹契遐年

いく千世と契りをきけむ我宿の年に生そふまつの梢を

夏日於二右武將軍小野別業一詠二池水久澄一和歌

池水もいひやもらせる千とせまて流れてすまむ君か宿とは

右在良朝臣集雖多不審依無類本不能挍合

藤原基俊家集上

正月朔日女のもとにつかはしける

物ことに新まれとも戀しさはまたふるとしにかはらさりけり

同し一日ころに物申ける女のちかことたてゝ侍しに
つかはしける

初春のときのみことゝ天地の神うちつくし君かちかひは

おなしころものこしにて物申ける女のもとにつかは
しける

老らくの心まとひぬ鶯のわかたれ聲をきゝそめしより

七日わかな人のもとにつかはすとて

年をへて若菜はつめと老にけりかしらに春の雪つもりつゝ

柳

春風に吹なみたりそ我妹子かかつらにすてふ青柳の糸

年ころもの申わたりけれといと心かたくてやみ侍け
る女のいかゝ思ひけむいとおもしろく咲たる花をつ
かはじたりしかはいひつかはしゝ

いかにして花の下紐とけにけむ人の心はありしなからに

大宮の左大臣うせ給ひて又のとし南おもての櫻に鶯
の鳴けるを聞て

ちらぬさきは何なゝ鳴そ鶯よたのむかけなき吾そよにふる

花作春友

たのめともいてや櫻の花心さそふ風あらは散もこそすれ

三條大納言花みにまかるとてはしめてさそひ侍りし
かはまかりて又のひかくいひつかはしたりし

山さくら尋し人の心こそ散はなよりも今朝はおしけれ

かへし

さかさらは何ゆへ人にしられまし花うれしかる春も有けり

さきのおほいまうちきみうせ給てのはる花のいとお
もしろく咲たれとみる人も侍らさりしかは獨山寺に
まかりてくるゝまてなかめて三條大納言のもとにつ
かはしし

此春は人もすさめぬ山さくら心おしくやとくにちりぬる

かへし

きくに社いとゝおしさは増りけれみる人なしに花のちる覽

雲林院にまかりたるに花のはしめてちりてしをみて

人しれす我やまちつる櫻花みるおりにしも散はしむらん

田家三月盡

小山田の苗代水はひきなから春はこゝろにえこそまかせぬ

うの花かき

今はよに故郷人もたつねこし身のうの花をかきにしたれは

卯花隔隣

賤の庵あまたの小屋もみえぬ迄中垣かほにさける卯花

右近の馬場にて人々尋子規といふ題をよみ侍りし

いつこよりいつちいぬ覽子規尋ぬとたにもしらせてしかな

雨のうちの子規

さして行かさとり山のほとゝきす今宵はこゝに雨宿りせよ

卯月十日頃久しく音もせぬ女のかりいひつかはしゝ

時鳥わすられぬかな故郷のならしの岡のよはの一こゑ

時　鳥

誰里のかきね忍ふと子規けさわかやとを過かてになく

山近聞時鳥
ゆめかとよ隣の岡の子規しのひもあへぬさよの一こゑ
曉聞子規
朝くらや木のまろとのゝ明かたに山子規なのりてそゆく
夜々待月
五月雨よさるは月よを此頃はいかにせよとかなゝよふりぬる
あめのうちのたひのやとり
五月雨にあまのとまやに旅ねして哀露けき草まくら哉
盧橘夕薫
袖ふれし昔の人そ忍はるゝ花たちはなのかほるゆふへは
山家蚊遣火
夏のよを下もえあかす蚊遣火の煙けふたき遠の山里
竹風如秋
夕されはさゝむら竹に吹風のそよく音こそ秋かよふらし
雨中待人
雨降といかてか人をまたさらんたか爲かけるわれかまゆねそ
五月五日三條大納言のもとにくす玉つかはすとて
あやめ草いはかき沼の長きねを君かためにそ玉にぬきける
對水待月
夏のよの月まつ程の手すさみに岩もる清水いくむすひしつ
雨中木繁
玉柏しけりにけりな五月雨に葉守の神のしめはふるまて
五月の晦日つれなき女のもとにつかはしける
山里のならの外面にをくかひの下もえおれと知人もなし
五月ふたつ侍りし年の後の一日修理大夫顯季朝臣の
もとよりかくいひつかはしたりし
なをきなけいまた五月そ子規思ひたかへて山へかへるな
返し
つけさらはこそにならひて時鳥ほと／＼山に入やしなまし
夜深思牛女
このよひのふけ行まゝに七夕のむかしの契いまやくやしき
閑庭露滋
庭の面にしける蓬にことよせて心のまゝにをける露哉
萩のうへの露
つまこふる鹿の泪か秋萩にこほれぬはかりをける白つゆ
女郎花
朝霧のたえまにみゆる女郎花こよひの露にねくたれにけり
薄
秋風に色に出にけり花すゝきかはかり露はむすひをけとも
林中月
まきもくの檜原の山のこのまよりかのこまたらにもれる月影
むしのうらみこひによす
ゆか近しあなかま夜はのきり／＼す夢にも人のみえも社すれ
月のまへの旅の心
あたら夜をいせの濱荻おりしきていも戀しらにみつる月哉
衣うつ
たか爲にいかにうてはか唐衣千たひやちたひ聲のうらむる
山さとのあかつき
山さとの尾はなさかふく軒端より有明の月はさし出にけり
旅のやとりに月をみて
月みれは思はぬ山そなかりけるいとゝわりなき旅の空かな
九月九日三條大納言のもとにつかはしける

長月のけふの爲にと菊の花露しもおひて咲にける哉
　九月廿日ころ久しく煩ふこと侍りて心ちたのもしけなくおもひしに久しくをとせぬ人のもとにつかはしし
秋はつる枯のゝ虫のこゑ絶はありやなしやを人のとへかし
　草上露
〔續古雜下〕何事に思ひさゆらん朝露のうき我身たにあれはあるよに
　船中落葉
ちりまかふ紅葉はにあけて行舟を秋もてゆくと人やみる覽
　雪埋古橋
わかこまよ心してふめ降雪につきめもみえす淀の繼はし
　雪の朝雲居寺瞻西かもとよりかくいひて侍りし
常よりもしのやの軒そうつもるゝ今日は都に初雪やふる
　返し
ふる雪にまことは篠やいかならん今日は都に跡たにもなし
　山家雪
雪のうちにけふはくらしつ山里は爪木の煙こゝろほそくて
　月あかきよ雪いとおもしろく降はへりしかは友たちのもとにまかりて夜ふけてまかりかへりしに
かへるさの宿たにみえす降雪に道しるへせよ冬のよの月
　池水作鏡
吾宿の池の水をかゝみとてみれは哀に老にける哉
　舊年立春
老ゆけとおしくもなし年の内に春はふたゝひあひぬと思へは
　梅告春近
たちよらは陰ふむはかり春きぬと梅の匂ひのほのめかす哉

　十二月廿日に昔あひしりて侍りける女に人のもとにてまかりあひて物申けるほとに白河にせうとのもとへとていそきかへりしをとゝめかねて
おしめとも行としたにも悲しきにしはしとゝまれ白河の水
　雪をかきあつめてをき侍しを人のこひにつかはしたりしかはつかはすとて
とけむともまたみえぬ哉白雪のふるやはこれそとり所なる
　戀
秋風に葛のうら葉の打かへし思へは戀のうらめしき哉
はふりこかかみより板に引杉のくれゆくからに茂きこひ哉
逢事はかた結ひなる吾妹子かゆはたの紐はいつかとくへき
なそもかくゆらのと渡る海士船の梶とるまなく物を思ふは
誰故に迷ひ初にし心ともことはりしらぬいなふちのたき
河上にさらす細布けふたにもむねあふはかり契りせよ君
如何にして君恨む覽おはたゝのいたゝの橋の桁よりもこて
　初てあへる女に鏡をかりて返しつかはすとて
みて後はいとゝ心そます鏡かけすむ人になりやしなまし
　こゝろかたき女のもとに
波よする磯邊の芦の折ふして人のうきにはねこそなかるれ
　いとしもなき女のいかなることかありけむ
山城の水たのこなき己さへあなこと〳〵しわれなすさめそ
　終夜物越にて人と物語し侍りしにしはしをともせさりしかはねいりたるかととひはへりしかは
思へたゝまた引よせぬ梓弓ひとりは人のねいるものかは
　はしめの戀
人しれぬ戀にはまけしと思ふにも空蟬の世そ悲しかりけむ

あしたの戀
月草にすれる衣の朝露にかへるけさゝへこひしきやなそ
あひてあはぬ戀
たはれにし妹にあふやと道のへにとひし夕けそ人頼めなる
よるの戀
波よする岩ねにたてる磯馴松またねもいらて(ずイ)こひあかしつる
としへたる戀
人心何を頼みてみな瀬川せゝのふるくひくちはてにけむ
あした
をしてるやよさの浦波打かへし今もみまくのほしき君哉
はしめて人のもとにつかはす
いかて〳〵と思ふ心はおく山の苔むす岩のとしそへにける
筏おろす杣山川にうきしつみ君にあふへきくれをまつかな
雪いたう降たるあした女のもとへつかはしゝ
音せぬはあな覺束な白雪のふりおほふ竹のよの程はいかに
申ちきりて久しくをとせぬ人のかり
濱千鳥まつかひもなし曉のめさましきまてなとかをとせぬ
忍ひたる女のもとへつかはしゝ
おほなこか草かる岡のさゆりはのしゆふ迄は人にしらすな
おなし心を
久しくは程やはへぬる程へねと又こはいかにみまくほしきそ
又の日後朝
いかなれは短き冬の日なれ共けふあやにくに長くなるらむ
初ていひそめて女のみや恨にけむといへりければ
苺(つイ)ちもる岩垣清水むすひかねあくへくもあらぬ君にもある哉
住よしに參りてよみはへりける
住よしのまつをとはむ神代より我をしつむ人はありやと
一品宮仁和寺にあたらしき堂をたてさせ給て觀音のむらさきの雲にのりて紫金臺さゝけて西の空よりいたり給へるかたをつくらせ給へりおかみにとてまかりたりしに是に哥つかふまつれと仰られしかは
紫の雲のおりゐる山里は心の月やへたてなからむ
御かへし
へたてなき心の月は紫の雲とゝもにそ西へゆくへき
佛供養したてまつりしに四條の宮の筑前のきみ忍ひて聽聞すと聞て車にいひいれ侍ける
たゝひとつ門の外にはたてれとも鬼こもりたる車也けり
備中守仲實朝臣國に侍りし時いていひつかはしゝ
君かあたりみつゝ忍はむあまさかる吉備の中山雲な隔てそ
五月いたう煩らひし比妹のもとより(とひて)侍りしかは
あたしのゝあさちをしなみ吹風に露の命のをき所なし
世中はかなく聞ゆるころ左京權大夫俊頼朝臣のもとへいひつかはしける
かたらはや草はに宿る露はかり月のねつみの(さはく)まに〳〵
山寺に入あひの鐘をきゝ侍りて
いりあひの遠山寺の鐘のこゑあな心ほそ我身いくよそ
三條大納言聞ゆる事侍りて人につかはしたるにちかひてかれよりかくいひをこせられたりし
限りあれは富士の高根に鳴澤の我をとつれに何(あにイ)まさらめや
返し
玉笹にむれゐる雀朝ことに我こそ先はおとろかしつれ
やすなりの朝臣のもとにいふ事ありてのち音もつか

うまつらさりしかはいひつかはしゝ
人しれす思ひこめたるさゞれ石の打いてしヿはいかゝ成にき
しゐを人のもとにつかはすとて
落積る朽はか下をかきかへしたかため拾ふ木のみとかしる
住吉のくにもといとちかくゐたりと聞にをとせさり
けれはいひつかはしゝ
みこもりに一日もおちす思へとも我わすれける住のえの松
おもひを（をイ）のふ
芦根はふ浮よわたるとせし程にやかて深くもしつみぬる哉
年をへて歎く嘆きの茂りあひて我みおいその森となりぬる
季仲卿太宰帥になりてまかりくたりしに馬の餞に扇
つかはすとて
千とせまて契れるヿを忘れすは鶴のは風に思ひいてよ君
或所に哥合せむとて哥よみもとめさはくと聞てたれ
ともなくてさしをかせ侍りし
吹風に和哥の浦こそさはくなれ涙よいつくに我みよせまし
雲居寺瞻西家の門を過とてかくいひ入てまかりける
いへはありいはては過し玉つさのかけて思ひを哀とはみよ
かへし
ことならはたゝには過て玉章の中々也やかりにをとする
春宮大夫入講行ひ侍りしに捧物つかはすとてよみて
つかはしゝ
うらやまし心の雲や晴ぬらむわしの山路に照月をみて
三月朔日清水寺にこもりたりしにしのひたるけしき
にてこもれる人にいひつかはしゝ
もろ共に旅のそらには出たれとあなおほつかな春のよの月

きくの花おもしろく咲たるを山寺にうつしうゝとて
心なき草木なれとてみるなれと法の庭にも移しぬるかな
是は堀河院の御時集めしゝかはまいらせし。これ
より後の歌はいにしへ今のをかきあつめたる也。

藤原基俊家集下

みちのくにのかみもとよりのあそむのもとより久し
うあひみさるよしいひていつのほとともいはさりし
かは
かへりこむ程をふるにも武隈のまつ我みこそいたく老ぬれ
季仲の帥なかされて後九月十三夜月のおもしろく侍
りしヿを思ひ出てたよりにつけていひつかはしゝ
みるたひに昔のことのおほゆれは又其まゝに月もなかめす
東宮大夫うせ給て又の年のはる植られし紅梅のいと
さかりに咲て侍りしかはものへまかりし道にていそ
かしく侍りしかと人かけもせさりしかはむかしおも
ひいてられてたゝう紙に書て木にむすひつけて侍り
し
昔みしあるしかほにて梅か枝の花たに我に物かたりせよ
後に見侍りて少納言さねゆきかくいひおこせて侍り
し
根に帰る元の姿の戀しくはたゝ木のもとをかたみにはみよ
又かへし
戀しさにさはこのもとに立よらむ昔にゝたる匂ひあるやと
むかしあひしりて侍りし女いと久しくをとせぬ忘れ

にたるかといひおこせたりしかは
白浪のいらこかしまの忘れかひ人わするとも我わすれめや
十月朔日比大原よりまた紅葉ぬ楓をしきてくた物いれておこせたりし人のもとへいひつかはしゝ
折けるはいかなる山の山人そ紅葉もあへぬあたらこの葉を
思ひかけぬ人のもとよりむまのをなむいふ人のあるよひて見よといひたりしかは
きりたちのたれ杣山の木の本にいさまたえ社思ひ出られね
或女八月ふたいの念佛に女郎花を奉るとて哥こひ侍りしかはかはりてよみ侍りし
我ことく五つのさはりある花をいかゝ蓮の身とはなすへき
雲居寺瞻西かせつ經を聞てめて侍りし人にかはりていひつかはしゝ
岩ま出ていつる泉のわくかこと法の言葉もつきせさりけり
十二月廿日ころいと寒きにむすめに面白きふることと(うたイ)とも書あつめてとらすとて草紙のおくに書付侍りし
昔人むへもいひけむ子を思ふ心のやみはさうとなりけんたいうしといふ子を僧につけて侍りしか久しうをともせさりしかはかくいひつかはしゝ
かそいろのひきもはなたぬうなひ社我思ふことなを思へ君
小法師といふ子を南都の永縁僧都につけて侍りしに僧都ならにまかりてかくいひおこせて侍りし
我をさへ千代とそ祈る春日のゝ二葉の松をみそめてしよりかへし
君か代は千世ともいはし春日のゝ二葉の松も神さひんまて

三月十日はかり六波羅に講行ふと聞て女車にのりましりてまうてたりしに口惜くはてにけれは經よむ尼のもとにまかりてかへらむとするに引出物にとて櫻のいみしう咲たるを折てえさせしかは
家つとにさのみな折そ櫻花やまの思はんこともやさしく
越前守仲實朝臣妻にまかりをくれてはてのことし侍りし諷誦ものをくるとて
曉の夢となりにし君こふとつきおとろかすかねのこゑかな
雪中待人
氷りあへぬ山田の澤に降雪の下きえかへり君をこそまて
戀
こりすまになをもまつ哉冬の夜の有明の月のいてゝやと思へは
のこりのはな
夏山に一枝はるのみえつるはのこれる花の匂ひ也けり
ほとゝきす
から衣たつ田の山の郭公うらめつらしきけさの初こゑ
久しく音せぬ人に
とよみ餘り二よみみよみ思へとも猶まとをなる木曾の麻衣
うの花
うの花のさける垣ねは布さらすさかみの市の心ちこそすれ
ほとゝきす
來鳴ぬもことはりなりや時鳥まつ人からの夏のよなれは
詞書久
戀すれはうつし人社わりなけれかひすゝ妹をそなふてふ哉
正月ついたち大安寺僧都のもとにゆつる葉やるとて
霜やたひをけとしほまぬ初春の千歳を君にゆつる葉なれは

九月十三夜同し僧都のもとにまかりて夜一夜物かたりして侍りしつとめていひをこせて侍りし

〔玉葉秋下讀人不知〕あかさりし君か名殘に久かたの月をいるまてなかめつる哉

かへし

〔同基俊〕我もしかあかてかへりし月影の山のはつらき眺をそせし

おなし僧都の母のために八講を行ひはへりしに捧物つかはすとて

わしの山ふもとはるかに照す月しらぬ山路の道しるへせよ

南都におさなきこをやりて雪のふりしかは師の僧のもとにやり侍し

さらぬたに覺束なきに春日山子を思ふ道に雪さへそふる

あひしりて侍りし女のもとより

さすかにそ夢の中なるゆめはかり見しよのをとは忘れさり覧

かへし

現こそ秋のねさめは悲しけれ中々夢と思はましかは

初て女にまかりあひてその夜ほとなく明てからすの鳴はへりしかは

君かある夜明もはてぬにあくへしやいてさかにくき子持烏よ

かへし

人を厭ふけしきの空にしるけれはまたきあけぬと鳴烏をも

みちの國のかみもとよりの朝臣馬えのせむといひて任やゝはてかたになりぬれとをとせさりけれは

あら玉の年のいつとせ待わひぬ我よもしらす馬はたのまし

風のうちの女郎花

さらぬたに心色なる女郎花むへなひきけり秋のゝ風に

女のもとよりかくいひて侍りし

忘らるゝみをしる雨は音もせて忍るにしもぬるゝ袖かな

かへし

忍るは苦しきものを我妹子か身をしる雨となりやしなまし

正月朔日郎賀阿闍梨のもとよりかくいひおこせ侍りし

鳥の音も谷の氷も打とけてのとけき春に成にける哉

返し

鳥のねものとけき春に成ぬれと我もとゆひの雪は消あへす

月ころ煩ふこと侍りてしほゆあむとて津の國のかたにまかりてゆあみはてゝのほり侍りしかと猶やまひやみ侍らさりしかは心ほそくおもふたまへ侍りしに松の木あまたたてる處をすき侍りしにこゝはいつくそと問侍りしかはみかけの松となんいふと人の申しかは

〔續古雜下〕よにあらは又かへりこむ津の國のみかけの松よ面變りすな

月のおもしろきよならに侍る子の戀しくはへりしかは永縁僧都のもとにいひやりし

いときなき我こをならの里にをきて今宵の月の面影にたつ

十月朔日のころ時雨するひ雲居守膽西かもとよりある尼君のもとになと久しくはをともせぬといひたるにかはりていひやりし

しくるとも紅葉ふみ分たつねみむわひたる衣袖かさにきて

わつらふこと侍りしころあひしりて侍る女のもとよりとふらはて右近の馬場のひをりのひとは何事そととひて侍りし返ことに

いつくをか君たつねまし道芝のをく白露に消なましかは

七夕あかつきをおしむ
たなはたの雲の衣の袖ひちておしむそらなき朝ほらけ哉
しほゆあひて人のむかへにまかりしに曉にむやとい
ふ所に鹿の鳴はへりしをきゝて
朝ほらけあしまを分てこえ行はかりはのみのにをしか鳴也
ある女四月のついたちころもちつゝしを折てえさせ
しかは
おく山の岩ねかくれのもちつゝしねはや〳〵とみゆる君哉
よるの雪月にゝたり
月かとてこぬ人まては冬のよの降をける雪のはかる也けり
長月つくるひ大藏卿匡房の卿のもとへつかはしゝ
行秋をとゝめつる哉おく山の紅葉のにしきたちやかへると
かへし
おしめとも紅葉も散ぬひもくれぬかへらし物をよるの錦は
同しひ雲居寺にまかりて急き歸りしかは瞻西かくい
ひて侍りし
行君かせめておしきにくらふれは秋はかすにもあらぬ也覓
かへし
またしらぬこむよそ今は賴まるゝ秋にもおちす人の忍ふに
前齋宮のゆりはなか尼になりぬと聞て
彼岸にこきつきぬともあま小舟こなたにしのふ人を忘るな
かへし
あまを舟きよき渚にこきつきて忍はむ人もわたしこそせめ
十二月つこもり小法師といふ子のもとに永縁鏡もち
ゐをこすとていひつかはしたる
年をへてつかさ位をますかゝみ千代の影をは君そみるへき
かへし
萬代によろつよ添て十寸鏡きみかみ影にならへてやみん
はしめのこひ
す守このいひ出ぬ事のいふせさにかひこめくつる身とや成なむ
こ　ひ
さしてくるつけの小櫛のかひもなしなたの鹽焼いさ歸りなむ
あひしりて侍る女久しうをとつれつかうまつらさり
しかはかくいひおこせて侍りし
いかなれはしめちか原の冬草のさしもなくては枯はてに劔
かへし
なを賴めとこそは誰にも契りしかをはりしらぬさしも草哉
おなし女のもとより
いかにせむわくらはにたにとはゝこそ思ふ心の程も語らめ
かへし
神風や伊勢の濱荻いつのまに汐たれ衣人のきるらん
正月七日女のもとにつかはしゝ
澤にいてゝいさ諸共に芹つまむねよきは君かことゝ思へは
またあはぬ女に久しうをともせさりしかはかくいひ
おこせたりし
渡らぬに絶ま久しきまろ橋のふみみる事もつゝましきかな
かへし
まのゝ浦のとたえかちなる丸橋をふみ心みよけにや危うき
また外にてはか〳〵しく見さりけるむすめの姨なる
人のかくいひおこせたりし
故鄕に種まきをきし撫子の花のさかりをいかゝみるらん
かへし

さかりにも成にける哉ふる里に我種まきし花の匂ひを

二條宰相よろしき哥よみたると聞ていひやりし

老らくは忍ひもあへすなには潟あしまの風のそゝろ寒さに

前木工頭俊頼朝臣のもとより九月十三夜かくいひ侍りし

澄わたる月にたなひく浮雲のおほろけならす恨めしきかな

かへし

なに高きあたら今夜の月かけを立かくすらん雲の心よ

八月雨いたくふるころ女にかはりて男のもとに

雨ふると移ろふなゆめ我せこか衣にすらむ秋はきの花

ある女のもとにいきたるに瓜のかたかきたる扇帋をえさせたりしかは

瓜つくるこまのあたりに尋ねきて君かゝたにもなる心かな

或人熊野にまいりてわかのうらにて哥よめりと聞て

和哥の浦にきみかいひをく言の葉をいかに聞けむ玉つ嶋姫

丹波守季よしの君いみしうあひかたらひて常にまうてきをとつるゝ久しう音もし侍らさりしかは霜のいみしう降たるにいひつかはしゝ

ほともなく今朝をく霜の消ぬれは人の心をみはてつる哉

美濃守もとふさの朝臣身まかりて後の事つかうまつりしに誦經物つかはすとて文のおくに書付侍りし

今日まさに泪にくれてとはむとはかもの豫ても思はさりきや

はやうあひしりて侍りし女の今は老はてゝ頭の雪はらひもあへすなむあるといひたりしかはかくいひつかはしゝ

わきもこかかしらの雪も寒けきに猶や昔の戀しかるらむ

霜のいみしうふりたるあしたならの子を思ひやりて

永縁僧都のもとにいひつかはし、

〔玉葉冬〕ならのはに霜やをくらむと思ふにもねて社冬のよを明しけれ

りうき(豎義)請申僧のうたかきて奥に書付し

春の日の光もしらて雪深き谷のまつこそ年老にけれ

十二月晦日永縁僧都のもとよりくたものをこすとて

尋ねつゝしらぬ山路に白雲のかゝるこのみを拾ひいてたる

かへし

白雲のしらぬ山路のこのみをは君かためにそ我ひろはまし

は　き

〔玉葉秋上〕小男鹿のけさうらふれて鳴なへに野原のこ萩花ちりぬへし

二月はかり或處に八講行ふと聞て女車にのりくはゝりて聽聞し侍りしに前なる紅梅の風にいたく散侍りしかはせむせいか導師にて侍りしにたれともなくてさしをかせし

春風のいかにふけはか梅のはな君か御うへにちりかゝる覽

ある女の埋火はなたちはなといふ題よみて見せよといひはへりしかはおもふこゝろありて

よもすから下消かへる埋火のいけらは君にあひみてむやとはなたちはな

此主のかへしをやさしくしたりしか

たち花のはなちる里の風とめは昔の人とねぬへしや君

君といへはなとみまほしき波まなる沖つ小しまの濱楸かな

追考出

鶯

夜をこめて鳴鶯のこゑきけはうれしく竹をうへてけるかな

山寒花遲

みよしのゝ山井のつらゝ結へはや花の下紐おそくとくらん

かやりひ

さらぬたに夏は伏屋のすみうきに宵の煙のところせき哉

鹿

宮城のゝ萩やをしかの妻ならん花さきしよりこゑの色なる

さかにまかりて鹿のなくを聞てよめる

をしか鳴この山里のさかなれはかなしかりけり秋の夕くれ

女郎花

あたし野の心もしらぬ秋風に哀かたよる女郎花かな

時雨

霜消て枯ゆくをのゝ岡へよりならのひろはにしくれふる也

戀

篠竹のあな淺ましのよの中やありしやふしのかきりなる覧

あさちふに今朝をく露の寒けくに枯にし人のなをそ戀しき

別

朝霧のたちわかれぬる君によりはれぬ思ひにまよひぬる哉

雨後山水

よしの山うしやむら雨降ぬらむ岩まを瀧つをとゝよむ也

遥望漁船

さゝ波やひらの山風早からし波まに消る海士のつりふね

竹

今年生の籬のうちの吳竹も秋はよなかく成やしぬらむ

苔

奥山の岩ねかうへのこけむしろたちゐる雲の跡たにもなし

右藤原基俊集以織部正乘尹本挍合了

和歌部百十一 家集廿九

清輔朝臣集

春

立春

〔續古春上〕いかはかり年のかよひち近けれは一夜のほとに行かへる覧

いつしかと霞まさりせは音羽山をと計りにや春をきかまし

立春曙

けふ社は春はたつなれいつしかとけしきとなる明ほのゝ空

山家早春

をの山の春のしるしは炭かまの煙よりこそかすみそめけれ

社頭子日

松はいな神のみむろの子日には榊をちよのためしにはせん

霞

〔新古春上〕朝かすみ深くみゆるや煙たつむろのやしまのわたり成らむ

海上晩霞

夕しほにゆらの戸渡るあま小舟かすみの底にこきそ入ぬる

鶯

春のくるこのあかつきの鳥の音をはつ鶯とおもはましかは

かた岡に谷の鶯かとてして羽ならはしにくちすさふ也

鶯のなく木のもとに降雪ははかせに花の散かとそ見る

なに事を春の日くらし思ふ覧かすみの庭にむせふうくひす

ひめもすに已かなきをる聲の綾はけにもゝひろに成もしぬ覧

天の戸をゝしあけ方にうたふ也こや鶯のあさくらのこゑ

谷の戸にかへりやしぬる鶯の花のねくらはちりつもりつゝ

早鶯猶若

鶯ははなの都にたひたちてふるす戀しき音をや鳴らん

若菜

白妙の袖ふりはへて春の野の若なは雪もつむにそ有ける

梅

梅の花おなしねよりは生なからいかなる枝のさきをくる覧

ちれはおし匂へはうれし梅の花おもひわつらふ春のかせ哉

みるたひに軒はの梅の匂ひこそ宿の物ともおほえさりけれ

春くれはすそのゝ梅のうつりかにいもせの山やなき名立覧

なさけあらん人にみせはや梅花折々かほる春の明ほの

あしかきの奥ゆかしくもみゆる哉たかすむ宿の梅の立枝そ

梅度年香

かにそしる雪の下より咲そめて霞のうちにゝほふ梅かえ

梅有色香

うらうへに身にそしみぬる梅の花匂ひは袖に色はこゝろに

是。はらからとも。みなあるへかしき程なるを思ひてよめる也。

法性寺殿の大北(忠通)のまん所此哥をあはれかりて春のはしめのみゆき有けるにかくいたはせたりけるをよろこひて家の女のもとへ

梅のはな枯ぬる枝とおもひしをあまねくめくむ春も有鳬

きさらきのころ三條の女御の御もとへまうてたりけるに雪ふれるあしたなりけれはたゝにはいかになと女房申されしかは軒ちかき梅を折てさしいるゝとてよめる

(玉葉春上)梅の花匂ひも雪に埋もれはいかにわけてか今朝はおらまし

返し　女房

同君みすはかひなからまし梅の花にほひは雪にうつもれす共

柳

我門のいつもと柳いかにして宿によそなる春をしるらん

わきも子かすそ野になひく玉柳うちたれかみの心地社すれ

垂柳臨水

さる澤の池に涙よる青柳は玉もかつきしあさねかみかも

櫻

をとめ子の袖ふる山を來てみれは花の袂もほころひにけり

おもひねの心やゆきて尋らん夢にもみつる山さくらかな

見る度にこそにことしは咲まさる若木の花の末そ床しき

(玉葉春上)をはつせの花の盛やみなの河峯よりおつる水のしら涙

老らくは心の色やまさるらむ年にそへてもあかぬ花かな

(千載春上)からくにの虎ふす野へにゝほふとも花の下にはねても歸覽

神垣の三室の山は春きてそ花のしらゆふかけて見えける

惜む身そけふともしらぬ仇にみる花は何れの春もたえせし

かさしをる三輪の檜原の木間よりひれふる花や神のやをとめ

待山花

よも山の花待ほとのしら雲は口やそれとそおとろかれける

晩望山花

みよし野の水わけ山の高根よりこすしら浪や花のゆふはへ

見花述懷

身をつめは老木の花そあはれなる今いくとせか春に逢へき

南殿のさくらを見て

よしの山峯つゝきみし花さくら一木かすゑに咲みちにけり

宇治左大臣(頼長)花見給てかへりて後人々に哥よませたまひけるに

あかす思ふ心は花にとめつるをとまらぬ人に身をは委せて

落花曝砌

けさみれは軒はとめゆく雨水のなかれそ花のとまり成ける

遠尋殘花

散はてぬ花の梢のよそにてはうす雲かゝる峯とみえけり

殘花何有

しら雲にまかひし花や殘るかとうはの空にも尋ねゆくかな

春駒

(千載春上)みこもりに蘆のわか葉やもえぬらん玉江の沼をあさる春駒

春鴈向北

初雁は越路うれしくみし物をけふはかへるの山もうれしき

霞歸鴈衣

にしきともみえぬ霞の衣きてなに故鄕へかへるかりそも

杜若

こやの池の汀にたてるかきつはた浪のおれはやまはら成覽
　澤畔苗代
鶴のすむ澤邊にかへす苗代はよをなかひこの種やまくらん
　藤松樹花
藤浪のさきかゝらすはいかにして常盤の松の春をしらまし
　池邊藤花
風吹はみきはの藤の紫になみのしら糸よりませてけり
　大臣の家にて藤の花のうたよみけるに
一たひはしるしみえにしむらさきの雲のなをたつ宿の藤波
　欵冬
我宿に八重やま吹をうつし植てちとせの春を重てやみむ
　欵冬繞池
山吹のくちなし色にとちられていひ出す方もみえぬ池水
　雜春
梓弓はるの山邊にいりぬれは身のいたつきもしられさり鳧
　暮春
大かたも春そくるゝはおしきかと花なき宿の人にとはゝや
　旅宿暮春
あけゆかは我も立なむ假の庵にとまらぬ春を恨むへしやは

夏

　卯花
榊葉にゆふしてかけてつはつかみまつる垣ねと見ゆるうの花
　卯花混月
卯花のうはひてもてる雪の色を叉月かけにとられぬるかな
　時鳥
何事をぬれきぬにきて時鳥たゝすの森に鳴あかすらん
あはてのみ此世つきなは時鳥かたらふ空の雲とならはや
ほとゝきす心のまゝに尋ぬとて鳥のねもせぬ山にきにけり
いさやまたなきもやしけむ時鳥けふそ我には初音成ける
郭公よこ雲わたる山のはにさもほのめきて過ぬなるかな
いくとせそきくとおもへは時鳥待につけても老そかなしき
　時鳥聲杳
〔千載夏〕かさこしを夕こえくれは時鳥ふもとの雲のそこになく也
　垣根時鳥
時鳥垣ねかくれのしのひ音も我はかりにはへたてさらなん
　獨聞水鷄
とはすへき人たになくて休らへは叩く水鷄に聞そなしつる
　社頭水鷄
夜もすからあけの玉垣うちたゝき何事をねく水鷄なるらん
　端午述懷
人なみに袂にかくるあやめ草うきにおひたる心地こそすれ
　照射
ことはりやさ社は辛く思ふらめともしの鹿のめをも合せぬ
　五月雨
〔千載夏〕時しもあれ水のみこもを苅あけてほさてくたしつ五月雨の空
たこの浦のもしほもやかぬ五月雨にたゝぬはふしの煙成鳧
　二條院の御時このうたをよろしとやきこしめしたり
　けん御さうしかきにたまはせたりけるなかにかみに
　かきてさしはさまれたりける哥
ふしの山煙はかりを雲の上にならせることはうしと思へは
　此御うたの心はうへゆるされぬことをおほしめしけ
　るになむさて御かへしに申

雲ゐ迄ふしの煙ののほらすはむせふ思ひもしられさらまし

船中五月雨

五月雨のせとにほとふる友舟は日影のさゝむおりを社まて

田家夏雨

かりしほの外面のむきも朽ぬへしほすへき隙もみえぬ五月雨

盧橘遠薫

たか宿の花立はなにふれつらんけしきをなる風のつてかな

風静盧橘芳

君か代に枝もならさて吹かせははな立花のにほひにそしる

海邊螢

濱風になひく野嶋のさゆりはにこほれぬ露は螢成けり

瞿麥満庭

庭の面のからなてしこの紅はふみているへき道たにもなし

夕立

〔新古夏〕をのつから涼しくも有か夏ころも日も夕立〔くれ新古〕の雨の名殘に

水邊納涼

河嶋の松の木陰のまとゐには千世の齢ものひぬへきかな

夏月浮泉

何事に涼しく物をおもはまし岩間の水の月みさりせは

夏神樂

河やしろ浪のしめゆふ水の面は月の光もきよく見えけり

夏狩

夏の野をゆするふりたて駒なへてあさふませ行人やたか子そ

山路草深

とやまには草は絶たるかたもなし芝かる賤の音はかりして

水草隔橋

まこも草たつきもしらす成に鳬いはけのすゝや沼のまろ橋

苅野草

花さかむ草をはよきよ夏の野をなへてなかりそ賤のをたまき

夏祓

河の瀬におふる玉もの行水になひきてもする夏はらへかな

秋

旅泊秋來

もゝつてのなみちに秋や立ぬらんせとの汐風袂すゝしも

早秋

山里は庭の村草うら枯て蟬のなく音も秋めきにけり

七夕

おもひやる心もすゝし彦星のつままつ宵のあまの河かせ

花染の衣はかさし七夕にかへる色とていみもこそすれ

おもひやる今朝の別は天河わたらぬ人の袖もぬれけり

〔新勅秋上〕天河水かけ草にをく露やあかぬ別のなみたなるらむ

たなはたやをのかきぬ〳〵成ぬ覽空なる雲の中のたえぬる

たなはたはあまの玉床打はらひこゝろもとなく暮を待らむ

けふはかり天の河風こゝろせよ紅葉の橋のとたえもそする

七夕言志

七夕はわたりもやらし天河もみちのはしのふまはおしさに

たなはたの雲のはたてに思ふらん心のあやも我にまさらし

萩

萩花露重

我宿のもとあらの萩の花さかりたゝ一むらのにしき成けり

秋花勝春花

ふしわふる萩の立枝をはかりにて懸れる露の重さをそしる

小萩原柳さくらをこきませし春のにしきもしかしとそ思ふ
　あきの比人のもとへゆきたりけるにあるしはなかり
　けれはせむさいのおもしろかりける中に女郎花のお
　ほかりけるを一むらおりとりて哥をよみて殘の花に
　むすひつけゝる
さもあらはあれ主はいかに思ふ共女郎花には身をもかへてむ
　薄
むさし野にかねて薄はむつましく思ふ心のかよふ成へし
　草花纔開
糸薄すゑはにをける夕露の玉のをはかりほころひにけり
　秋野逍遙しけるに薄の風になひくを見て
たつねつる心や下にかよふ覽うちみるまゝに招くすゝきは
　風底荻
荻はらとよそにきゝつる風の音の袂にちかく吹そふるかな
　稲花
〔の新古〕うす霧のまかきに花の朝しめり秋は夕と誰かいひけむ
　題しらす
秋の野はこほれぬ露にしるきかな花みる人もまたこさり鳬
　あきのころ世の中はかなかりけるに花を見て
まかきなる花につけても思ふ哉今いくとせの秋かみるへき
　朝望旅鴈
いつちとてさして行らん山高み朝ゐる雲にきゆるかりかね
　鴈聲遠近
天の原とわたるつらにくせよとやたのむの雁の聲あはす覽
　鹿
〔續後撰秋上〕高砂のおのへの風や寒からんすそ野の原に鹿そなくなる
　深山聞鹿
いかなれはいもせの山にすむ鹿の叉かさねては妻をこふ覽
　題しらす
おもふと殘らぬものは鹿の音を聞あかしつるねさめ成けり
　露
〔千載秋上〕立田姫かさしの玉のをゝよはみみたれにけりと見ゆる白露
　露秋夜玉
たつた姫をける物とやおもふらんあくれはきゆる露の白玉
　霧
霧の間にあかしのせとに入にけり浦の松かせ音にしるしも
　山家霧
秋かせにあれのみまさる山里は霧のまかきそくもり成ける
　月
山のはの月待出て見るのみや思ふにもののたかはさるらん
行こまのつめのかくれぬしら雪や千里の外にすめる月かけ
谷川にやとれる月のうき雲は岩間によとむみくさ成けり
〔千載雑上〕今よりは更行までに月はみしそのことなくなみたおちけり
よもすからおは捨山の月をみて昔にかよふわかこゝろかな
曇なきますみの月や雨にますとよをか姫のかゝみなるらん
〔千載秋上〕しほかまの浦ふく風に霧はれてやそ嶋かけてすめる月かけ
　同三十首の中に
夜とゝもに山のはに出る月影のこよひみそむる心地こそすれ
月みるとねやへもいらす白妙の袖かたしきてあかすころ哉
行末〔く歟〕の人にもいかゝかたるへきいはんかたなき夜半の月影
いそかへり我世の秋は過ぬれとこよひの月そためし成ける

いかなれや花も紅葉も折こそあれ年の一とせあかぬ月かけ
さよふかく月にあけたる槇の戸に人の心のうちそみえける
世中のなさけも今はうせにけりこよひの月に人のさはねぬ
人毎によもさらしなと思ひしに聞にはまさるおはすての月
伊勢の海おふのうらなし蘂はれてなりもならすもみゆる月影
から衣そてしの浦の月影はむかしかけたる玉にやあるらむ
山里の紅葉も月もあかけれとおなし色には見えすそ有ける
ゆふたすき思ひかけすもみゆる哉野森に澄る月よみのかみ
何となく心すみてや出つらん月に棹さすよさの浦人
光をやさしかはすらん〔おつる玉鬘〕もろこしの玉つむ舟をてらす月かけ
しきたへの枕に出る月みれはあれたる宿もうれしかりけり
手枕にかきやるかみのみたれまて曇りもみえぬ秋の夜の月
くまもなき月をもみてやあかすらん伏里の里の人そ床しき
紫のねはふよこのにてる月はその色ならぬ影もむつまし
人しれすかたはれ月そうらめしきたれに光を分てみすらむ
夜もすから人をさそひて月影のはては行衛もしらて入ぬる
見るからに影恥しき身なれとも月にはえこそ忍はさりけれ
みな底に宿れる月の影をこそしつめる人はみるへかりけれ
今よりは心のまゝに月はみし物おもひまさるつまと成けり
月みれは誰も泪やとまらぬとおもふ事なき人にとはゝや
かく計りくまなくみゆる月影の〔あき千載秋上〕心のうちをてらさましかは
更にける我世のほとそ哀なるかたふく月は又も出なむ
久方のあめのをしてや是ならん秋のしるしと見ゆる月かけ
ひたすらに厭ひもはてし村雲のはれ間そ月はてり増りける
千よの秋を一夜になして眺む共あかてや月のいらむとす覽

旅中月

うき雲は麓にかゝる高根にて行衛もしらす月をみるかな

山寺明月

初瀬山峯をやとなる旅ねには枕よりこそ月はいてけれ

月夜逢友

今宵こそ雲間の月にさしそへて又めつらしき影はみゆなれ

月前聞虫

めもあやにみゆる今宵の月影にはたをりそふる虫の聲かな

三日月

三日月は山のあなたの里人のおしむをわれて出るすかたか

山中晨月

ほの〳〵とあらしの聲も成にけりしら月山の有明のそら

八月十五夜

大かたは秋の半ときく物を月のひかりはみちにけるかな
昔よりいつはりならぬひとことは今宵の月の光なりけり

虫

日にそへて聲よはり行きり〳〵す今幾夜とてつゝりさす覽

叢夜虫

もろ聲に秋の夜すから鳴むしは花のねくらや露けかるらん

菊

かきりなき齢のみかは見るからに心ものふるしらきくの花

菊綻禁庭

八重菊の咲る所の名にしおはゝ今一重をはそへてみてまし

九月九日にきくのさかさりければ

花さかて老ぬる人のまかきには菊さへ時にあはぬ成けり

紅葉

露むすふ秋は幾日にあらねとも岡のくす葉も色付にけり

またきより景色の杜の下紅葉なへてならすも見えもする哉
もみちするおなしみ山の梢にて獨さめたる岩ね松かな
〔千載秋下〕今そしる手向の山はもみち葉の幣とちりかふなに社有けれ
をくら山木々の紅葉のくれなゐはみねの嵐のおろす成けり
もみち葉も麓の塵と成にけりなにはの事もはてそ悲しき

紅葉繞墻

山おろしに四方の垣ねやいかならん紅葉のみ社嚢なりけれ

山路秋深

ふみ分る山の下草うら枯て秋のすゑ葉に成にけるかな

野風

秋の野の花吹みたる夕かせにたもとよりさへ露そこほるゝ

晩見稻花

夕日さす秋の田面をみわたせはほなみそ風の行衞成ける

暮秋

鳴むしの命とみゆる秋なれはくるゝはさこそかなしかる覽

田家秋暮

をしねかる山田のひたに言よせて過行秋をひきもとめはや

雨中九月盡

大空は秋の別をおもふらしけふのけしきはうち時雨つゝ

冬

山居時雨

〔新古冬〕柴の戸に入日の影はさしなからいかにしくるゝ山邊なる覽

菊花纔殘

むらさきの雲間の星とみゆるかなうつろひ殘る白きくの花

老思殘菊

すきにけるわか盛をそおもふへきうつろふ菊は又もさか南

月前落葉

出るよりさえてそみゆる木枯のもみち吹おろす山のはの月

山家落葉

〔新古冬〕をのつから音する物は庭の面に木のは吹まく谷の夕かせ

閑庭落葉

山里にちる紅葉葉のくれなゐはふむ人もなき物にそ有ける

落葉埋路

ふみしたきゆかまくおしき紅葉葉に道ふき分よ山の下かせ

落葉水紅

降からに谷の小河のもみつるは木の葉や水の時雨なるらん

羇中霜

朝またき初霜しろしむへしこそお花かりしく床はさえけれ

霰

いそへには霰ふるらしあま人のかつく白玉數やそふらん

雪

〔千載冬〕吉野山はつ雪今宵ふりにけりあくれときえぬ峯のよこ雲
きゆるをや都の人はおしむらんけさ山里にはらふしらゆき
きのふけふふしの高根はかきくれて清見か關にふれる初雪
〔新勅冬〕おほとりの羽かひの山の霜の上に重ねてみゆる今朝の初雪
雲井より散くる雪は久かたの月のかつらの花にや有らん
世をわたる心のうちそ哀なる雪ふみわけていつる山人
何方へあにこきいてゝなこの蜑の雪をかつきて歸る成らん
世中のうきたひことに思ひたつ山路も見えす雪降にけり
朝またきしのふもちすり打はらひあたちか原の雪みるや誰

いか計りふりつみぬ覽あらち山岩のかけちに崩れおつる雪

旅宿初雪

はつ雪に我とは跡をつけしとてまつ朝たゝむ人を待かな

山家雪

つま木こる人さへ雪に跡たえてみしみ山路の事もかよはす

旅行雪

都人おもひしもせしふゝきしてさよの中山けふはこゆとも

夜聞水鳥

誰きかむ友ねにあかすをしたにもさゆる霜夜はいかゝ鳴なる

氷

すはの海や氷すらしも夜もすからきその麻衣さえわたる也

氷逐夜厚

すはの海涙にくたけし薄こほり渡るはかりに成にけるかな

寒夜千鳥

楸おふるあその河原の河おろしにたくふ千鳥の聲のさやけさ

蘆礙舟

霜枯の芦間にしふくつり舟や心もゆかぬ我身なるらん

炭竈

すみかまの煙にかすむをの山はとしにしられぬ春や立らん

冬月

〔續後撰冬〕白妙の雪吹おろすかさこしの峯より出る冬の夜の月

森間寒月

〔新古今冬〕冬枯の森のくち葉の霜の上におちたる月の影のさやけさ

池上寒月

冬の池の玉もにさゆる月影やあくれはきゆる氷なるらん

野徑寒草

ひくまのにかりしめさしゝ淺茅原雪の下にて朽そはてぬる

冬夜

〔新古今〕君こすは獨やねなんさゝのはのみ山もそよにさやく霜夜を

さゆる夜に衣かたしき思ひやる冬こそまされ人のつらさは

閏十月ありけるとし松のもみちたりけるを人にをくるとて

神無月時雨る月のかさなれはたへすや松も下紅葉する

十月十日比に山のもみちをみて

神無月もみちの山にたつねきて秋よりほかの秋をみる哉

除夜

はかなくて今年もけふに成にけり哀につもる我よはひかな

戀

戀のうたの中に

〔新勅戀一〕自らゆきあひのわせを苅そめにみし人故やいねかてにする〔せんイ〕

同　我戀をいはて知らする由もかなもらさはなへて世にも社ちれ〔しれイ〕

〔千載戀一〕なゝわたの玉にも緒をはぬく物をおもふ心をいかて通さん

〔續古戀四〕難波めのすくもたく火の下こかれうへはつれなき我身成凫

〔續古戀四〕かくはかり思ふ心は隙なきをいつこよりもる泪なるらん

〔千載戀四〕〔はイ〕あふ事をいなさほそ江のみを盡し深きしるしもなき世成凫

〔新勅戀一〕年ふれとしるしもみえぬ我戀やときはの山の時雨成らむ

戀しなん命は露も思はねとためしにならん名こそおしけれ

〔千載戀四〕露深きあさはのゝらに小萱かるしつの袂もかくはしほれし〔ぬれしを千載〕

あふ事のかたき岩ともなりけるをいかなる戀の身を碎く覽

中々に思ひたえなむと思ふこそ戀しきよりも苦しかりけれ

あちきなや思ふかたこそ足引の山櫻とも身をはすてしか
心には岩木ならねは思ふ事たゝあやにくにかけぬなさけか
［千載戀五］朝夕にみるめをかつくあまたにも恨みはたえぬ物と社きけ
ますらおのはとふく秋やはてぬ忍ひし人は音たにもせす
たか山にはなれし鷹のかさなかれ行ゑもしらぬ戀もする哉
やそ嶋やちしまのゑそか手束弓心つよさは君にまさらし
これや此いせおの蜑のすて衣あなあさましの袖のしほれや
思ひやる心はなれぬから衣かさぬと人に見えぬはかりそ
［續古今戀五］戀しさの慰むかたやなからましつらき心をおもひませすは
鐘のをとにそゝや明けぬとおとろけはたゝ獨ねの枕なりけり
［千載戀三］我戀をなか〳〵人はしのひけりなさけは人の物にそ有ける
しはしこそぬるゝ袂もしほりしか泪に今はまかせてそ見る
河千鳥なくや澤へのおほひ草すそうちおほひ一夜ねにけり
あふ事のとをちの里は大和かは思はぬ中にありとこそきけ［同上］
［玉葉戀二］そなたより吹くる風そなつかしき妹か袂にふれやしつらん
秋の色や思ひの色のはひならん今一しほそしむ心地する
岩根ふみかさなる山を行よりもくるしき物は戀路成けり
［千載戀一］なみた河うきねの鳥と成ぬれと人にはえ社みなれさりけれ

忍戀

［新古戀二］人しれすくるしき物はしのふ山下はふくすのうらみ成けり

初言出戀

秋風にうへ野の薄打なひきほのめかしつるかひもあらなむ

近隣戀

くれなゐのすそ引程の宿なれと色に出ねは人にしられし

失媒介戀

よそ乍らほのめかしつる飛火さへなとかきけちてみえぬ成覧

不慮會戀

契をきし樹のはしかき見えね共みとのまくはひ月日へにけり

逢不會戀

鳥の子をためしにいひし程よりも君か辛さはかさなりにけり

老後戀

はし鷹のしらふに成て戀すればのもりの鏡かけもはつかし

終夜戀人

獨ねて床のうらはに夜もすからむせふ煙はあまのたく火か

夢會戀

夜と共にかへしてきつる唐衣いくよといふにしるしみつ覽

旅宿戀

故郷をしのふね覺の草まくら露につゆそふ心地こそすれ

見書戀

いもをゝきて都へしまの舟てにはうち泊こそ涙はかけゝれ

乍隨不會戀

鴈かねの雲のよそなる玉章に心もそらになりそはてぬる

毎晝會戀

水ゆけは川そひ柳うちなひきもとの心はゆるきけもなし

毎夜契戀

かくしつるよるは古巣に行鳥のかりのねくらや我身成らむ

毎夜違約戀

あたならす頼むるさまはもゝよ草言のははかり見ゆる君哉

留信失戀

よな〳〵の空頼め社嬉しけれ忘れすかほのなさけと思へは
中々にかくれのをのゝをみなへし露の形身を何にをきけむ

稀逢戀
つきもせすくもてに物を思ふ哉とたえ勝なるふるのなか橋
寄源氏戀
逢事はかたひさしなる槇はしらふす夜もしらぬ戀もする哉
寄社戀
夜とゝもに泪をのみもわかす哉つくまのなへにいらぬ物ゆへ
寄花戀
面影にたつたの山のさくら花あかてやみにし人そかゝりし
寄更衣戀
おほつかなうすくやけふは成ぬ覽人の心もころもかへして
寄瓜戀
山城のこまの渡りの瓜よりもつらき人こそたゝまほしけれ
思高戀といふ事を
谷水に空なる月もすむ物を雲井の中におもはすもかな
契後隱戀
あふ事をたのむの雁のいかなれは思ひかへりて雲かくる覽
閑居増戀
つく〳〵と思ひ殘せる事もなきなかめは袖そぬれ増りける
題しらす
あひみてはかはる心もある物をつれなき中にたえせさり覺
人を待とてよめる
こしといはゝまたてぬへきにあらね共思ひ餘にとふゆふけ哉
さうしをならへてみかはしなからつれなかりける女
のもとへ
かつきするちかの浦には住牟らみるめ刈へき方もしられす
けさうしけれと心かたかりける女に
つれなしとかつは三河の八橋をなをこりすまに戀わたる哉
心かるき聞え有ける女のつれなくあたりけるに
我といへは兒手柏のおもて〳〵とくひもろきも結ほゝれつゝ
宮はらに侍ける女に草のはにかきてさしいれける
いかにせむにゐはえまさる戀草の繁らぬ程にあふ由もかな
いかにとおもへと色にいてかたき女に
しのふ山下行水のたえかねてむせふ思ひをもらしつる哉
しのひてたゝ一夜物申て後心ならすかきたえける女
のもとへ
〔新勅戀三〕いかにねてさめし名殘の悲しさ〔はかな新勅戀三〕そ又もみさりし夜半の夢哉
宮つかへしける女のつねにもえあはさりけるに
しほみてはいりぬる磯と眺めつゝ袖のひるまもなき我身哉
つねにあひかたかりける女の是よりいはむときをま
てといひてやゝ久しく音もせさりけれは
覺束ないせの濱荻をりよくはほのめかさむと言しいもはも
人にうたかはるゝ女にかはりて
杉くれをひく杣人はあまたあれと君より外によこめやはする
女をうらみていまはあはしなとちかことたてゝ後も
とよりけに戀しかりけれはあをきすちあるかみにて
かへるのかたをつくりてかきつけてやりける
ちかひしを思ひかへるの人しれすくちから物を思ふころ哉
女のもとにゆきてかたらひけるによもやまにたのめ
けれとなをうたかはしきことをのみいひてかりのこ
をひとつさしいたしたりけれはそのこゝろをとりて
鳥のこのかへる〳〵は契れ共十つゝとをもいふかわりなき
いひたえたるおとこのはてにはなきなをいひつくと

きゝてうらみむといふ女にかはりて

なきなにそ(ろきゝ)忘れてとはれけるたえにし人にいひやたてまし

冬比女のもとにゆきてかへりてつかはしける

獨ねの心ならひそ冬の夜はなかき物ともおもひけるかな

ねむころに思ひける女をえむしけれはいつれの神に
かいのりて心さしの程をしらむといへりけれは

水上のしるしならねと山河の淺きけしきはくみてしりにき

人のむすめに物申わたり侍けるにおやかくともしら
ておもひたつをありときゝてわりなくおほえけれは

〔玉葉戀三〕我ためは雫にゝこる山の井のいかなる人にすまむとすらん

物いひわたりける女にほいにはあらてつかはしける
のちわすれかたくや思ひけむよみてつかはしける

戀しさのたくひも涙に袖ぬれてひろひ侘ぬるわすれ貝かな

かへし

戀しさに袖ぬるはかり思ひせは忘れ貝をもひろはさらまし

宮はらなる女のなさけなきけしき成けれはいひやり
ける

哀をもかけてやみにし白浪のなこりをしのふ我やなになる

かへし

あたによる涙の心をわくからに哀しらぬに成にけるかな

人あまたかたらふときこゆる女のもとへ

うらうへに風吹磯のあまを舟いつれのかたに心よすらん

かたらひける女のいつちともなくゆきかくれたりけ
るかたみにや裳はかりをゝきたりけるをみて

ぬきをける袂をみてもねをそ鳴いつこの浦のあまに成けむ

祝

遐年屬君

君をのみときはかきはに祝ふ哉外には千世もあらしとそ思ふ

寄神祝

たらちねの神の賜ひしをたまは千世迄まもれ年もかきらす

祝兩人

武隈のふた木の松と祝ふかな陰をならへて千年ゐよとて

松不知年

幾世にか松のみとりの成ぬらん我みてたにも年は經ぬるを

竹久友

よゝふれと變らぬ竹のなかりせは千年の宿に何をうへまし

鶴契千年

君かすむ宿になれたるあしたつは千年の友と思ふなるへし

松殿關白(基房)宇治にて河水久澄と云事を人々によま
せたまひけるに

〔新古賀〕年經たる宇治の橋守ことゝはむ幾世になりぬ水のしら浪〔みなかみ新古〕

日吉禰宜祝部成仲七十賀し侍りけるによみてをくり
ける

〔同〕七そちにみつの濱松老ぬれと千世のゝこりは猶そはるけき

人の娘の着裳の所にて蘭花を折てよみける

乙女子かいまきの岡の藤袴こしゆふつゆやいはひをくらん

女の子うみてうふきぬこひけれは松の枝にかけてや
るとて

千世に又ちよや重ねん松かえに巣たちはしむる鶴の毛衣

おさなき子をいはひていひつかはしける

千世ふへき二葉の松の綠子はおもかけさへそときは成ける

人の子の百日に

行末を思ひやるこそはるけゝれけふそ千年のもゝか成ける

いもうとのはらに中攝政(兼實)のおほんむすめむまれ給へる事をよろこひて重家のもとへ

我かとに小鹽の松の生ぬれはをよはぬ身迄千世をこそまて

かへし　　　　　　　重家卿

思ひやれくらゐの山に枝しけくさかへ行へき松のけしきを

山階寺に萬僧供養して御卷數奉ける臺のおほひにあしてにてかくへき哥とてこひけれは天暦帝の四十賀のとき彼寺御卷數の臺にかきけるうたは平兼盛なむよめりける例をおもひてよみける

かく山のいほつ眞榊するゐはまて常盤かきはに祝ひをきてき

慶賀

君か世は遙に見ゆるわたつ海の限れるはてもあらしとそ思

平家の人のつかさなれるよろこひに

おひのほる平野の松はふく風のをとにきくたに涼しかり鳧

四位してのち年をへて従上したりける折に人のよろこひけれは

山かけにおひしらけたる椎柴のわかはへいつる春も有けり

隆信朝臣四位して侍ける悦につかはしける

紫のはつしほそめのにゐ衣ほとなく色のあかれとそおもふ

返し

いつしかと色まし染むることのはにいとゝ身にしむ紫の袖

二條院御時中宮に哥合あるへしとて殿上ゆるされたりけるよろこひ申とて重家のもとより

わかの浦に年へて住しあしたつの雲ゐに登るけふの嬉しさ

かへし

芦たつのわかの浦みてすきつるに飛たつはかり今そ嬉しき

二條院位におはしましける時殿上にはへりけるに世かはりて六條院御時殿上かへりゆるさるゝ人のもとへ

立かへる雲ゐのたつに言つてむひとり澤邊になくとつけ南

重家若狹より能登にうつれる比よろこひ申とて

もしせはき國にや沈むと思ひしによく登りぬと聞そ嬉しき

離別一首

(續古別)行末をいはひていつる別れちに心もとなきなみた成けり

羇旅

我ひとり急く旅とそおもひつる夜をこめてのみ立かすみ哉

はしりゐのかけひの水の涼しさにこえもやられす逢坂の關

二條御門うせたまひて御はふりの夜よめりける

萬代とたのみし君を宵の間の空の煙とみるそかなしき

(玉葉雜四)ありしよに衛士のたく火は消にしをこは又何の煙なるらむ

美福門院うせ給ひて後さるへき人々はみな色になれるををもひて俊成のもとへつかはしける

人なみにあらぬ袂はかはらねとなみたは色に成にけるかな

かへし　　　　　　　俊成

墨染にあらぬ袖たにかはるなり深きなみたの程をしらなむ

齋院いまた本院にもいたりたまはさりける時わつらひておりたまひにけり共後ほとなくかくれたまひにけれはよみてかのおほちのもとへ

榊葉の移ろふたにもうかりしをいふはかりなき心地社すれ

五宮うせさせたまひて後御室へまいりけるに庭の松を見ておほえける

うへをきし君にそ千世をゆつらまし神さひにける庭の松哉
中攝政(基實)うせたまへる事をなけきて重家卿のもと
へつかはしける
泪川その水上のいかならん末の身をたにせきもあへぬに
かへし　　　重家卿
かけてたに思はさりしを泪河かゝる浮世にあはむ物とは
故北政所の御はてに法性寺殿にまいれりけるにこと
ともはてゝたかきいやしきちり〳〵になりたまふに
この葉の殘りてあらしにちるをみて
今はとてちり〳〵になる故郷は木葉さへ社とまらさりけれ
花園左大臣(有仁)北方うせられにける比はゝのおもひ
にて侍をそのわたりなる人のとへりけれはよめる
〔新古哀傷〕世中はみしもきゝしもはかなくてむなしき空の煙成けり
としころのつまにおくれたる人のもとへつかはしけ
る
いもせ川かへらぬ水の別れにはきゝ渡るにも袖そぬれける
かへし
きゝわたる袖たにぬるゝいもせ河水の心をくみてしらなむ
とし比すみける人にをくれて後はてのをなんといと
なみけるとき人のもとよりわかれし月日に成にける
あはれさなといへりけれは
ありし夜の月日はかりは巡れ共昔の今にならはこそあらめ
物いひわたりける女のみまかりける後誦經すとてよ
める
けふや君後の世まても忘れしと契し事をおもひ出らむ
物申ける女身まかりける家にまかれりけるに梅花さ
かりなりけるえたにむすひつけゝる
きてみれは泪の雨もとゝまらすぬしなき宿の梅の花かさ
いとけなき子にをくれて侍けるを人のとふらへりけ
れは
おり〳〵に物思をはありしかと此たひはかり悲しきはなし
三歳なりける子にをくれてよめりける
いとけなき人おりたゝはわたり川淵瀬といはず水もひなゝむ
子にをくれたる人のなとかとはぬなとうらみて侍り
けるかへりことに
夢とのみみゆる此世のはかなさは驚き顔にとはれやはする
したしきものにをくれてとかくしてつきの日よみけ
る
今朝よりは夜半の煙のなこりかと山の霞もめにそたちける
僧都敎智ゆかり有てとし比したしくて侍りけるかう
せて後四十九日のわさしける誦經文に書つけゝる
君をとふ鐘の聲こそ悲しけれ是そをとするはてと思へは
雅重朝臣萬葉集をかりてはかなく身まかりにけれは
かのあとをたつねたるにかへしつかはさんとてせう
そこはかきくしてをきたりけるをかくなむといへり
けるをみていひつかはしける
濱千鳥はかなきあとをふみをきて身は何方の雲に消なむ

神　祇

〔千載神祇〕天の下のとけかれとや榊葉のみかさの山にさしはしめけむ〔玄于〕
はふりこかさす玉串のねき事を亂るゝ神もあらしとそ思ふ

釋　敎

世中は千草の花の色々に心のねよりなるとこそきけ

法にはかなき道にいりにけり返す〳〵もけふそくやしき
（續古）何事もむなしき夢ときく物をさめぬ心になけきつるかな
ふたつなき御法の舟そ頼もしき人をもさして渡すと思へは
埋れてくまなき玉はある物をちりを拂はてねかふはかなさ

閑居夜雨

思ひ出ぬ事こそなけれつく〳〵と窓うつ雨を聞あかしつゝ

暮鳥宿林

夕されは竹のそのふにぬる鳥のねくらあらそふ聲きこゆ也

朝望旅客

あさ霞ひなのなかちに立にけり墨繪にみゆるをちの旅人

龍　門廿五名所中

やま人の昔の跡をきてみれは空しきとこをはらふ谷かせ

長柄のはし

歎かしな長柄の橋の跡みれは我身のみやはよにはくちぬる

住吉社

住吉の岸松かえのゆふ烟はれぬおもひは神そしるらむ

是も卅五首名所中若浦哥

はる〳〵といつち行らむわかの浦の浪路に消るあまの釣舟

二十五名所中に浮嶋を

わたつみの波にたゝよふ浮しまは宿も定めぬ海士や住らむ

述懷

としを經て梅も櫻もさく物を我身の花にまちそ侘ぬる
うきなからいまはとなれはおしきみを心の儘に厭ひつる哉
つく〳〵とみし面影を數ふれは哀いくらのむかし成らむ
夢のうちにいそちの春は過にけり今行末はよひのいなつま
こもり江においぬる蘆の風吹は折ふしに社ねはなかれけれ

述懷百首のうち

世中を今はかきりと見る月の心ほそくそなかめられける
よもきふの露と終には成物ををき所なく身を歎くらむ
初瀬川谷かくれ行さゝれ水あさましくても住わたるかな
わふるやま岩間にねさすそなれ松わりなくてのみ老や果なん
漁火のほにこそ物をいはねともあまの恨はたえせさりけり
たくなはのくるしと人はおもはすと
賤のおのきその麻衣ぬきをあらみめもあはてのみ明しつる哉
今はたゝ力車もつきはてゝやるかたもなき歎き成けり
我獨からなつなこそ悲しけれ身をつみてたにとふ人もなし
唐衣みさをも今はかなはしを何にかゝりてすくすへき身そ
あるへしと思ひなるおの一つ松たくひなく社悲しかりけれ
むさし野のうけらか花のをのつから開くる時もなき心かな
恨めしと思ひはてぬる世中をしのふる物はなみた成けり
夕間暮お花吹こす秋かせの凉しきをにあふよしもかな
みこもりのゐくの若なにあらね共物思ひつむ袖はぬれつゝ
世中のつらゝはいつもわかねはや心とけたるおりもなか覽
うき汐の波にたゝよふ濱千鳥跡ととむへき方もしられす
いしふみやつかろのをちにありときくえそ世中を思ひはなれぬ
立かたき思ひのつなにまとはれて引かへさるゝ事そ悲しき
奥〃の下ひかしたに鳴鳥の音にもいかて人にきかれし
今はたゝをとなし河に身をなして浮世も人に見えしとそ思
よも山を眺めてのみも暮すかないつれの峯にいらむとす覽
はかなしや雪のみ山の鳥たにも世にふるとは思はぬ物を

愁る雜哥のうちに

鶯のいつも都へいてしかとこの春はかり音やはなかれし

ふる里をしき忍ふにもあやむしろおになる物と今そ知ぬる
三笠山立はなれぬるあま雲のかへしの風をまつ空そなき
故郷をしのふもちすり限なく思ひみたるゝさまをみせはや
徒然とより所なき心ちしてあしろに日をもかそへつるかな
いにしへおもひいてられけるころ三條大納言（内大臣
〔新古雅下〕いまた中將にておはしける時つかはしける
なからへは又このころや忍はれむうしとみし世そ今は戀しき
物名　からにしき
〔新勅〕睦言もつきてあけぬときくからに鳴の羽かきうらめしき哉
五宮にまいれりけるにいつみ殿の御所の御前なる田
にきりの所々たちたるをみて
朝霧のたえ〳〵かゝるそとも田はむらほにてたる心地社すれ
人のもとへつかはしけるふみをとなりに太皇大后宮
のおはしましける時かの宮の人とりいれてつゝみか
みに哥を書ておこせたりけるを次日その心をとりて
ちかの浦にふみたかへたる濱千鳥思はぬ跡を見しそ嬉しき
俊成入道うちきゝせらるゝときゝて我とのはのいり
いらすきかまほしき事を尋ぬとて
さをしかのいる野の薄ほのめかせ秋のさかりに成はてす共
讃岐の院に加階のそみ申を侍りけるか二とせ三年す
きにけれはしはすの廿日あまりのころほひよみて奉
りける
くらゐ山谷の鶯人しれすねのみなかるゝ春をまつかな
此事鳥羽院にまうさせたまひけれは哥のあはれに
とてたまはりにけり。
人のもとへまかれりけるにあるきたかへたるよしを
いひていれさりけれはいひいれける
はる〳〵と山路をこえてくる月に宿かす雲のなとなかかる覽
みあれの日友たちのもとよりあふひをゝくりていか
にしそめたりけることにか昔のちきりこそうれしけ
れといふ心をいへりけれは
古の契りはしらすあふひ草おもひかけたる今日そうれしき
うへゆるされける比侍從代と云事にもよほされける
時少納言入道信西かもとへつかはしける
澤水になくたつの音や聞ゆらん雲ゐにかよふ人にとはゝや
返し　信西
蘆たつの澤邊の聲は遠くともなとか雲井にきこえさるへき
兵衛のつかさなる人におほやけに奏することありけ
るに申ける
もらさてはあらしと思へは柏木の杜のわたりを頼む計りそ
臨時祭の哥人にたひことにせめられけれは
われ獨としを重ねてかさすかないくへになりぬ山吹のはな
哥のしるしにやゆるしにけり。
二條院御時殿上番かきたりとてしはすの廿日あまり
にめしこめられにけり一めくりのほとはゆるさるま
しくてあくるとしまてあるへかりけれは雪のふりけ
るによみける
年ふかく雪にこもれる山人は春に成てやいてむとすらん
太皇大后宮の大進にてとしひさしくなりにけるを亮
のあきたりけるをのそむとて
吹あくる風もあらなむ人しれぬ秋をみ山の谷のふるはを
しのひかたきなさけある人のもとへうれしきよしい

ふ(中ナイ)とて

此世には忘れかたみにつみもちて老のつとなる忍ふ草かな

おほやけによきと奏し申ときく人のもとへよろこひ
にたへかねてましける

嬉しさの袂にあまる心ちして涙さへにもこほれぬるかな

二條院御時中宮のおほむ方へ夏も涼しきはあきの宮
のちかきしるしにやといふ心のうたさしをかせたま
へりけるかへしを女房にかはりて

昔よりきよく涼しき宿のうちに秋の宮ゆへと思ふへしやは

したしき人に殿上ゆるされぬときゝてそうせよとお
ほしくて女房のもとへつかはしける

ゆかりまて哀をかくる紫のたゝ一もとのくちそはてぬる

御返し　　二條院御製

紫のおなし草はにをく露のその一もとをへたてやはせむ

讃岐のさとの海士庄に造内裏の公事あたりけるを守
季行朝臣はしたしかるへき人なりけれはいひつかは
しける

松山の便うれしき浦かせにこゝろをよせよあまの釣舟

此うたのとくにゆるしてけり。

四位申けるをゆるされさりけれはおとうとゝも四位
にて侍にいまゝてゆるされぬよしなと申文にかきて
奉るとて

やへ〳〵の人たにのほるくらゐ山老ぬる身には苦しかり㒵

此たひなむゆるされける。

四位して侍し時重家卿のもとより

むさし野の若紫のころも手はゆかり迄こそうれしかりけれ

かへし

めつらしきわか紫の衣手は老の身にしむ物にそ有ける

左大臣経あはへ下られけるともにまかりけるものゝ
ゐ中人になりてくちはてなむすることをかなしひて
柳によせてうたよみてをくりける返事に

何かおもふ流になひく川柳そのねはつよし朽もはてしそ

天王寺にまうてゝかめ井にてよめる

こうふともきえしとそ思ふ露にても亀ゐの水に結ふ契りは

新院御位におはしましける時臨時祭の四位の陪従に
めされて侍りけるに弘徽殿のほそ殿に立よりて先帝
中宮女房をたつねいたしてひあふきのつまをおりて
かきつけてとらせける

(風雅雑下)昔みし雲のかけ橋かはらねと我身ひとつのとたえ成けり

返し

八島もる雲の懸橋かはらねはたゆと名残はふみゝさるへき

四位の正下したりけるよろこひをわかき人々のいへ
りけれはよめりける

けふこそは位の山の峯までに腰ふたへにてのほりつきぬれ

かへし

くらゐ山老の坂ゆくしるしには猶峯までものほらさらめや

四位の後荷前使と云事にもよほしけれはよめる

あまた度靡きてさきに過にしをしゐのもち夫に我を思へる

あたらしき四位おほかるにふるきものをしもかくつ
ねにおとろかしけれはよみてつかはしける

世にしけきわか紫をかきわけて古根を何に堀もとむらん

成範卿しもつけへなかされて後めしかへされたりけ

鳥のこの有しにもあらぬ古巣にはかへるにつけてねをや鳴覽
　後つかはしける
　かへし
かた〳〵になきて別し村鳥は古巣にたにもかへりやはする
　みあれの日あかたへゆきける人に葵をつかはすとて
けふはよき手向をくさを程後〔恐有誤脫〕のあふひを神やおもはむ
　法性寺殿にて人々侍ける中に女房のたき物をいたさ
　れけるを後にみけれはあらぬ物にて有けれはわらひ
　てやみにけり又の日昨日の心をそさなと女房のいへ
　りけれはよめる
玉たれのみすのうちより出しかは空たき物と誰もしりにき
　これを女あるしめてゝ。まとのたき物をたまはせ
　たりけりとなむ。
　人のもとより雉子をゝこすとてよめりける
是を見よ春のきゝすの我もさそ妻戀かねてなれるすかたを
　かへし
妻戀になれる雉子のさまみれは我さへあやなほろ〳〵と鳴
　わらはともたちの受領になりてくたるに馬のはなむ
　けすとて
二葉より花咲迄にみなれ木のよとせの春やかすみへたてむ
　臨時の祭に四位陪從といふ事にめしいたされてかも
　にまいりてよみて人のもとへつかはしける
こもりぬに沈むかはつは山吹の花の折にそねはなかれける
　里海士と云所をしりけるかたかふ事有けるをとふら
　ひたまふとて宇治前大僧正覺忠のもとよりつかはし
　たりける
夜とゝもに心はかりやこかるらん舟なかしたる里のあま人
　かへし
はるかさむかたもおほえす里の蜑の焼もの煙下むせひつゝ
　このいのりにかしこにいまする神にあふきを奉ると
　てかきつけゝる
浦風はよもに吹とも里のあまのもしほの煙うるはしみとて
　そのゝちほとなくなをりにけれは。神のしるしと
　よろこひけらし。
　靜蓮入道昔おとこにておなしく出家せんなといひけ
　るかとしをふるまてをそき事をはちしめて世をすつ
　るは人のためにはあらぬものをなといへりけれはか
　へりことによめりける
我身とはおもはぬ物を世中も人のためこそすてまほしけれ
　沙彌觀西となある文をさしをかせたるをみれは藤原
　資基かてにてありあやしみて使にとへはかしらおろ
　したるよしをいふによみてつかはしける
昔にもあらぬなくさの濱千鳥跡はかりこそかはらさりけれ
　やまとの國いそのかみと云所にかきのもと寺と云所
　のまへに人丸かはかありといふをきゝてそとはをた
　てたりかきのもとの人丸墓としるしつけてかたはら
　に此うたをなんかきつけゝる
〔玉葉雜五〕世をへてもあふへかりける契り社苔の下にも朽せさりけれ
　そのゝちむらの者とも。あまたあやしき夢をなん
　みたりける。

右清輔朝臣集百花庵宗岡本書寫挍合

源師光集

霞の心を

朝またき霞にけりなむこの浦に出る友舟かすかくれゆく

こゝろある海士のすみかのいかならん霞こめたる松か浦島

霞しくしきつの浦のうけのをは心あてにやたつね行らん

雨中鶯と云ことを

うくひすは梅の花笠きたれはや雨にも聲のしほれさるらん

隣家鶯

春の来ぬ宿としりてや鶯のこなたの竹に枝うつりせぬ

行路鶯

鶯の都にきゝし聲す也なれもやたひの空にいてつる

梅を

色も香もしるにはあらす梅の花見れはなけきのわする計そ

さくら

みよし野の花にまかふる白雲のはるゝはそれもおしき也鳧

中將有房朝臣家哥合に櫻を

人しれぬ心の行て見るはなは殘る山へもあらしとそおもふ

故郷花

ふりにけるしかの櫻の春ことに幾よの人のこゝろ見るらん

宰相入道教長家哥合尋山花

浮世には思ひもいらて吉野山はなゆへならす岩のかけみち

はな

山さくら咲にけりとも見ゆるかな春の日くらしきえぬ白雪

見よし野の花の錦に春風はにほひをさへも織つけてけり

籠り居て侍ける比白川の花見になむいきたるとて左大將（實定）さそはれしかは法性寺にて

いさやまた月日の行もしらぬ間に花の春ともけふ社は見れ

花尋樵夫

爪木をは花の陰にや休めつるさらはいつくと我にをしへよ

白川に侍けるに花のさかりに左衛門督家道のもとへ申つかはしける

山里の花のあるしを尋ねても宿からなれやをとつれもせぬ

かへし　左衛門督

あやなしや花のなたてを思ふよもとはて日数の過ぬる物を

雨中柳

春雨になを立のほる煙かと見ゆる柳のこすゑなりけり

白川にて殿上の人々花見侍けるにいさなひくして歸鴈といふことをよみてやかてうちへかへりまいり侍しに

むかし見し雲井ははやくたえにしを羨しくも歸る鴈かね

春のくれを

花を見てうき世の中も慰めし春にさへまた別れぬるかな

卯花

我宿の月のひかりとおもふらんをのかさと〳〵さける卯花

時鳥

ほとゝきす待えぬ年はなけれとも思ふはかりはまた聞ぬ哉

左大臣家歌合時鳥

郭公こゑなおしみそあやめ草玉にぬく日をけふとしらすや

五月雨

五月雨の日をふるまゝにさはた河その高橋はなのみなり鳧

閏五月郭公

ことしたに聲なおしみそ時鳥をのかさ月のそへるしるしに

山里に侍けるころ郭公はなくやと人の尋侍りしかは
いたく鳴てあまりなるよし申たりしかは　經正朝臣

今もさは昔もきかすほとゝきす厭ふためしに君やなりなん

返し

足引の山ほとゝきす古も物おもふ人はいとひやはせぬ

夏虫

夏虫をはかなくよそに思ふ哉これは此よにもゆるはかりそ

夏月

夏のよをうらみもはてし月影の名殘は秋もかくそ惜みし

橘寄無常

見むといひし君もまちえぬたち花は花の盛もあちきなき哉

七夕

秋にしもゆきあふをは七夕のなかきよとてや契りそめけむ

棚機にあひそめ衣ぬきかさんかへる色をはいみもこそすれ

としに待あふをよりも七夕はなか〳〵けふの暮や久しき

雁

斯はかりいとふうき世をいかにして又かへりくる初雁の聲

此題闕

夕まくれ旅の空ゆく雁かねはふしみか田井やとまりなる覽

重家卿哥合戀

戀しとも又つらしとも思ひやる心いつれか先にたつらむ

戀のこゝろを

つらかりし言の葉をなと恨み劔それをたに社きかす成けれ

早く見しその面影のはなれねは君ゆへ身をも捨ぬとをしれ

久しくをとすれすとて[ ]小侍従

文見ぬも歎きにあらす岩橋の渡しそめたるとたえならねは

かへし

葛城の神の心をあはれとももとけぬつらさに思ひしるかな

寄水鶏戀

槇の戸をたゝく水鶏のそれか共驚かぬまてとはぬ君かな

こひ

汐のみつ磯への草も限りあれは見る目は少しありと社きけ

後の世と契らは身をも捨はてむおしむ命もたれかゆへそは

打歎きしなはやとのみいはるゝは逢見ぬをもいけるとかかは

雨中戀

辛さ社雨にはいとゝしられけれかくふりにしもいつかさはりし

秋の比しほゆあみになにはのかたへまかりたりしに
頼政卿もわたのへかかたに侍ると聞て申つかはし侍
し

旅ねするかたは浦々かはれともおなし都や戀しかるらん

返し

君かすむうら悲しくそ我はおもふしのふ都も誰かゆへそは

京へかへるとて

此里もうらなれにけりあさたては都を出し心地のみして

難波よりかへりて侍しに左大將實定のもとより

都たに秋のあはれは有物をひなのなかちのものかたりせよ

返し

思ひやれひなのなかちの淋しさはいとふ都へかへる心に

定長なにはのかたにしほゆあみにまかりてかれより
申をくりて侍ける　定長

尋てもなとか厭はぬ芦のやのなたのしほやの秋の旅ねを

じほのゆにまかりたりしをこの人もとはす侍しか申たりし

君にこそならひそめしか旅ねする秋のあはれをとはぬ心は

中將隆房朝臣雪のいみしく降侍るに月おもしろかりしに內女房あまたくして法勝寺へなんとて立よりていさなひ侍りしかはまかりてよもすから遊てかへりてかれより申つかはしたりし　隆房朝臣

あはてこそ昔の人はかへりけれ月と雪とをともに見てしか

返　し

月寒る雪かき分てとふにこそふるきかひある宿としりぬれ

その夜大島といふ風俗なとうたはれて侍□いてらてそへてつかはしける

くまもなき月と雪とに大島の羽かひのしもをいつか忘れむ

月あかく侍しに隆房朝臣のもとより

君にあはて日數ふるやのいふせさは今夜の月も朧にそもる

返　し

月見てもまつおもひやる我心かけとなりてや朧なるらむ

此間闕

大將になりて正月に雪の降たるつとめて左大將のもとより

雪つもる年のしるしに花のさくはねのはやしをなとか尋ん

かへし

はのはやしはなさく春の嬉しさをつゝむほとなり谷の埋木

賀茂重保禰宜になりたるに申つかはしける

千早振その神山のかひありて木たかくなるを聞そうれしき

かへし

神山のみねの榊をとりもちて君かいふこそうれしかりけれ

いはひを

君かよの數にはたらしもゝつてのやその濱路の眞砂なり共

秋比兼雅朝臣宇治に侍と聞て申つかはしける

時しもあれ都のたつみ打しくれ君かなかめを思ひこそやれ

返　し　兼雅朝臣

詠めやるよを宇治山も打しくれ昔を忍ふけしき成かな

久我內大臣家にて植梅待花といふ事を

春までの命はさためなけれとも若木の梅をねこしつるかな

右大臣家哥合述懷

今は唯いけらぬ物に身をなしてむまれぬ後のよにもふる哉

廣田歌合同心を

行末の〔に〕かゝらむ事〔身とも新勅〕もしらすして我たらちねのおふしたて劍

述懷十首中に

憂事をおもひしらすと思ふらむ思ひなからにすくる我身を

さり共とはかなく世をも賴む哉有へきほとは見ゆる我身を

憂なから猶おしまるゝ命かな後のよとてもたのみなければ

慰る方こそなけれ身のうさをいひ合すへきたくひなければ

例ならぬを大事に侍ける比七月七日大輔かもとより

七夕にかす衣手のぬるゝかなこれやかきりのたひと思へは

と申たりしかは

此間闕

皇嘉門院近江世をそむきぬと聞て申つかはし侍し也

人はみな苦しき海に沈むまてのりうかひぬるあま小舟かな

かへし

しりしらぬ苦しき海の人をみて渡さんとおもふ海士の釣舟

二條院かくれさせたまひての比三河の内侍かもとより

よと共に昔をこふる泪のみつきせぬみとはしらすや有けむ

かへし

見せはやな昔こふらん泪にも物おもふ袖のまさるたもとを

人々歌かき集むるを侍るに集つかはすとて　季能朝臣

大なみに打いつるかなせたえにし淺澤水のなかれなれとも

かへし

古しへのなかれわすれす思ひ出る心の水のふかさをそしる

海上曉望

朝なきにしほちはるかに出にけりかもめにまかふ沖の釣舟

別

こゝろとの別をなにも歎くらむやかてかへらぬ旅も有世に

陵園妾

松の戸を一たひさしてあけねとも猶いりくるは有明の月

右源師光集雖有不審依無類本不能校正

群書類從卷第二百五十七

和歌部百十二家集卅

源有房朝臣集

春

子日

野邊みれはまた二葉なる姫こ松いつくに千世のかけ籠る覽

賀茂哥合に霞を

見わたせは明石もすまも霞していつれなるらんをのか浦々

橋邊霞

春霞かつらき山をよこきれはひとりとたゆるくめの岩はし

海邊霞

霞たつゑしまのはなをみ渡せはたみかへしたる心ち社すれ

雨中鶯

雨ふれと聲もしほれぬ鶯は梅の花かさきてや鳴らむ

梅香渡水

心のみ池のあなたにかよふかはむめも匂をこちをこせけり

山家梅

誰みよとありかもしらぬ山かつの垣ねの梅のさかりなる覽

對山待花

これやこの花のためしと思ふよりめかれせられぬ峯の白雲

櫻を

春はみな涙そこえけるさくら花山やさなからすゑの松山

春ことによしの丶山の花見にとわけなれにけるす丶の篠原

日吉歌合に花を

花ゆへにしらぬ山路のあらは社いるさかへさの栞をもせめ

重家卿歌合に花

ねにかへる時をみんこそ悲しけれ花にさきたつ命ともかな

櫻誰家

たか里の梢としらぬはなれと散はよそなる心地こそせね

水上落花

山河のなかれを見すは水上に花ちりけりといかてしらまし

二條院の御前にて遠尋殘花といふ事を

ちりぬらんと思ひおもひそ尋ねこし嬉しかりけるをそ櫻哉

關路歸雁

出雲なるてまの關やにきこゆなりやくもを分てかへる雁金

喚子鳥を

さらぬたにょのうき時はいりなむと思ふ山路によふこ鳥哉

藤花

我宿のふちのはつ花さかぬまは心のまつにかゝるなりけり

春暮

しぬはかり暮ゆく春のおしければ命もけふやかきり成らん

夏

郭公

かへりぬる春のおしさやわするゝと山時鳥はやもなかなむ

前中納言師仲右近馬場にて人々郭公の歌よませられしに

ほとゝきす里なれそむるいてたちは山路に歸るをな習ひそ

雨中郭公

ぬるとてもいそきなすきそ郭公いつくも雨の下としらすや

水雞を

今こむといひおきて人のいぬるよは敲く水雞に答えをそする

菖蒲

菖蒲草いもか袂にかけてこそよはなつかしく成まさりけれ

早苗

春かけてうちしをきたるゆひなれは門田の早苗とる程もなし

五月雨

五月雨は田中のいとに水こえてこなきつむへき方もしられす

五月雨は水まさるらしそま河におろす筏のさほもかよはぬ

社頭盧橘

舞きぬかあたりに匂ふたち花はいよ／＼すゝの心地社すれ

故郷螢火

古里はあしのやへふきくちはてゝ螢のみ社ひまなかりけれ

樹陰納涼といふ事を

涼しさは秋にかはらす松かねに夕なみかくる天のはしたて

秋

旅宿七夕といふ事を

七夕になにをかさまし旅衣かたしくほかの袖しなけれは

草花未遍

秋をあさみあらそふ花もなきのへに獨も歩むをみなへし哉

經盛卿家哥合に草花を

小萩原わけゆくほとは古里へかへらぬ人もにしきをそきる

皇太后宮御方にて霧間野花といふ事を

われといへは野原の霧にかくろへて風にはなひく女郎花哉

高松宮の哥合に雨中草花といふ事を

龍田姫をのれは雨にぬれぬ共おはなか袖をまくりてにせよ

荻

夕まくれおき吹風のおとせすは秋の哀となにをいはまし

閑居荻といふ事を

哀とも誰にかいはむ夕まくれひとりのみきくおきの上かせ

雁

むれてくる雁そなくなる哀又かへらはかすのたえしとす覽

經盛卿家哥合に鹿を

むへしこそをしかなくなれ妻こひぬ人もかなしき秋の夕暮

田家秋霧

霧のうちにはとふけうなる尋ねゆく山田の庵の道のみえぬに

故鄉明月

古里のなはのつふらえをとはむ昔もかゝる月はすみきと

高松宮の哥合に依所月明といふ事を

これやこの明石の浦ととはすとも空にしらるゝ月の影かな

乍臥見月といふ事を

月みれと枕にちりもゐさり発ねやの板間のひましあはねは

故鄉秋風

秋風は萑のかとをたゝくとも荻の葉ならてたれかこたへん

紅葉未盛
山姫か木々のもみちの色衣まつかたへとはそめはしめける
落　葉
山河はわれと柵かけすとももみち吹おろす風にまかせん
羇中落葉
まゆみちる安達か原に朝たてはこの葉くつはく駒のつま音
海邊秋暮
やよや秋こよひはこゝに旅寐せよはまゝつかねに枕並へむ
羇路秋暮
ふるさとの人のみとこそ思ひしは秋も別るゝ旅にそ有ける

冬

時　雨
ふらす共みのしろ衣きてゆかむ時雨はかねてくもる物かは
山居初雪
み吉野のきさ山陰のすゝの庵に雪のうはふきけさそしてける
羇中深雪といふ事を
まくりての袂もぬれぬたひ衣かゝる深雪のはれまなければ
行路雪
過にける駒のあとめに任せつゝ我とは雪をけかしやはする
雪中客來
冬のうちはとひくる人そ厭はるゝ跡つけまうき庭の雪ゆへ
雪
まきもくの檜原の木末すきぬらん雪の下をれをとしきる也
よも山になへてみ雪のふりぬれは何れか甲斐の白ねなる覽
曉頭千鳥
須磨明石をのかうら〳〵定めおきて暮れはかへる千鳥鳴也
曉千鳥
しほの山かよふ千鳥の聲すなりさしてか磯の明くれのそら
驚かす千鳥のこゑのなかりせは明るもしらしいねのあま人
千鳥を
とをかたに鹽やみつらん友千鳥たつなるたひに聲の近つく
湖上水鳥
たはれいつるしかつの浦になれぬれや汀はなれぬかすの村鳥
冬　月
妹背山ゆきけの雲やはれぬ覽よしのゝたきに月のさやけき
社頭冬月
霜さゆるちきのゆきあひにもる月の幾よかみつる住吉の神
水邊冬月
冬河のかものうはけに照月ははらへとおちぬ霜にそ有ける

戀

初　戀
いかてもと思ひ初つるその人の袖にはけふやすみのつく覽
忍　戀
我戀は沼のみくりのみ隱れてねはふと人にしられすもかな
つれなかりける人のもとへ
袖にもあふなはたゝし歎きたに頼めよしはし心やすめん
はしめあらはれてのちしのふこひ
もらしてし袖の雫をいかにせん又いまさらに忍ふもちすり
朝遲歸戀
見る儘に伏屋の隙はしらぬ共なをきぬ〳〵になりそわつらふ
遇不遇戀
逢事はたか心よりありしかはまたひきかへてつれなかる覽

隔衣戀
鳥の音を聞てのゝちもゆるさぬは妹か衣のせきにぞ有ける
花下戀
一すちに人や見るらん散花を惜むにのみもぬれぬたもとを
春戀
春きてはまつのはとのみ思ひしに我戀草も色まさりけり
戀遠所人
思ひやる心はみちに旅ねしてかつ〳〵君を夢に見つらん
高松宮の哥合に隔關戀といふことを
清見かた浪さへかへる關なれとかよふ心はとまらさりけり
契不遇戀
ひたすらに恨みもはてしあひみむと頼めし事も情ならすや
女許へふみつかはしたるに返事にはあらてもとのふ
みをかへしつかはしたれはたちかへりつかはしゝ
思ひきやうちに藻鹽もかき添ぬもとの千鳥の跡を見んとは
被返書戀
玉章をひたちの帶と思ひせはかへるにつけて嬉しからまし
隔物談戀
つの國のこやとはいはて語ふはたゝ蘆垣のとにたてれとや
住吉の岸ともいはしわすれ草人のこゝろにおひけるものを
寄荻戀
風わたる籬の荻をかことにて人まつよはゝいこそねられね
寄槿戀
頼めをく人なき身こそあさかほの夕をまたぬたくひ成けれ
戀のこゝろを
戀しさは心つからのをなれはかこつ方なきねをもなくかな
いつか君なか黒髪のねくたれをわか手枕のたはと見るへき
戀にこそ沈みはてぬる身なれとも泪はまたもうきぬへき哉
戀はたゝふたもしなれと玉章にかきも盡さぬ心地こそすれ

雜

殿下はしめて閑院つくらせ給て人々に哥よませさせ
給ひしに對松爭齡といふ事を
春日山常盤かきはに榮ゆへきふちにはちよの松もいかにそ
住吉哥合
國々の民のかまとを見渡せはみなうるほへるあめの下かな
刑部卿範兼卿三位してのちはしめて歌よみしに松伴
榮久といふ事を
千歲まて榮ゆる松のなかりせはなにかは君か類ひならまし
二條院の殿上にさふらひしに藏人を御つかひにて歌
よみてまいらせよとおほせられしかは
津の國の難波のみをくたらまし和哥の浦浪たてぬ身ならは
むすめにおもひをかけてはゝのもとへたひ〳〵ふみ
つかはすとて
はては皆そのこの本につもら南はゝその森にちらす言の葉
天王寺なるわらはのたいこのさくら爲にまはしてか
へりしに申つかはしゝ
ふる袖の名殘をおほみ從はんなはの海にてみるめかつけよ
古みやはらに女房あまたして花のうたともよまれけ
るに心ならすまいりあへしをやかてよきおりなりか
さねよとせめられてにはかによみてまいらせてのち
のこりのうたゆかしきよし申せはねうはうの中より
みれは皆花のなたての言のはをかき集めつゝいかゝちらさん

返し

昔たにも花のなたてといふなむは我ちらしけむとぞ悔しき

殿上の人々あしろへまかるとてたいこに侍しをすきさまにいさなひあはれしにちゝの入道わつらひしかはたちさりかたきよしを申てひわりこはかりをつかはすとてかきやりし、

諸共にゆかましものを網代木にひをまつ老の波なかりせは

わつらふ事ありてたいりへひさしくまいらさりしに女房藏人にふみをかゝせてとひたりしかはかへりことに

ひとつても嬉しからすはなけれ共その玉章と思はましかは

したしき人々はつせにまいるに中將所望せしころおまへにをしつけよとて

この瀬をはせく人もなし初瀬河さのみはいかゝ沈みはつへき

除目のころいそむ事有て細劔をやはたへまいらすとてつゝみかみにかきつけし

男山たむくるたちのかひなくは此世のことを思ひきれとや

高倉院かくれさせ給て諒闇のとし經家朝臣おやの服にてありけれは四月一日申つかはしゝ

誰もみな衣かへせぬ年なれは我身ひとつとおもはさらなむ

同年七月七日中將泰通のもとへ故院の御事をおもひいてゝ申つかはしゝ

なき影をいつかみるへき渡り川けふも逢瀬のあらはこそあらめ

父の服ぬきしときいもうとなるひとのもとへ申つかはしゝ

藤衣なとひとゝせと限りけむ是はかりこそかたみなりつれ

信解品のこゝろを

子を思ふ泪のたまをぬきかへしもとの衣のかさりとぞみる

右有房朝臣集一册。元祿己卯冬以二花山院入道右府定誠公本一寫レ之。

右源有房朝臣集以二白花庵宗固本一書寫一校了

平忠度朝臣集

春

立　春

東路や一夜かほとに來る春にいかて先たつかすみなるらん

霞

いかなれはおなし霞のなかめやる遠ちの里は深くみゆらむ

經盛卿家哥合に霞をよめる

さいたつまゝたうら若みみよし野の霞隱れにきゝす鳴なり

子　日

千世ふへき子日の松に袖かけてひくまの野へにけふは暮しつ

若　菜

雪分てゐくの若なも生にけりけふのためとはいかてしり劔

雪中若菜

いかてわか野中の雪に跡つけて下もえ渡るわかなつまゝし

殘　雪

年の内は亦ふりなむと思ふたに消るは雪の惜くやはあらぬ

梅

春をとめて人はこすとも梅の花よきてをわたれ春の山かせ

夜思梅花といふ心を人々よみ侍りしに

むめの花よるは夢にも見てしかな闇のうつゝの匂はかりに

故郷梅花をよめる

古郷はそこともみえす梅（のはなイ）かえの匂ふや宿の軒端なるらん

櫻

青柳の糸染かけて佐保姫は見にくる人のなきやうらむる

櫻

惜かねちる花ことにたくふれは心も風にさそはれにけり

賀茂哥合に花をよめる

みよし野の花咲にけり常よりも朝ゐる雲の晴るゝまもなき

爲業哥合に故郷花

木のもとをやかて住家となさしとて思ひかほにや花は散覽

さゝ波や志賀の都はあれにしを昔ながらの山さくらかな

東山の花見侍りけるに家つとはおらすやと人の申侍りけれは

家つとももた折しらす山さくら散ぬに歸るならひなけれは

呼子鳥

聞佗て我かとはかり答ふれときもあらすとやなをよふこ鳥

苗　代

苗代にせきやとむらん垣ねもるいさら小河（さイ）の音よはるなり

人々三月盡の哥をよみ侍りしに

我身にはよそなる春と思へとも暮行けふは惜くやはあらぬ

明るまてなかめあかして

暮ゆくもさすか名殘やとめつらむ哀かはらぬ明ほのゝ空

夏

卯　花

心あらむ人もかくこそ植てみめ賤か垣ねにさけるうの花

卯花藏水

もり出る音にてそしる卯花のしつ枝しからむ玉河の水

郭　公

待えたる心地こそせねほとゝきす遠里小野の夜半の一こゑ

海邊郭公

卯花と涙やみゆらんほとゝきすまかきか嶋にきつゝなく也

菖蒲
あやめ草たつぬる人の心にそまつ長きねはかゝりそめける
夏草
小萩原また花さかぬ宮城野に何を妻とて鹿のふすらん
隣家盧橘
匂ふなる花立はなやいにしへをやとの隣にさそひきつらん
螢
身の程は思ひあまれる景色にていつちともなく行ほたる哉
瀧下螢火
秋近くなりやしぬらん清たきの河せ涼しくほたる飛かふ
夕氷室
ひむろ山あたりの外やいかならん夕風すゝしみな月の空

秋

立秋
秋きぬとしらて聞とも大かたはあやしかるへき風の音かな
月前草花
萩かはな手折はぬるる袖にさへ露をしたひてやとる月かけ
薄
花すゝき靡くけしきにしるき哉風ふきかはる秋のゆふくれ
荻
衣手に吹くるかせもおきの葉に音信てこそ身にはしみけれ
故鄕萩
萩原と見るそ悲しきたかまとの尾上の宮の昔ならねと
河原院にて故鄕鶉といふ事を人々よみ侍しに
鶉かまの昔のあとはあれはてゝ淺茅か原にうつらなく也
鹿
さよ更て鹿の音遠くなり行は峯の嵐や吹よはるらん
霧
さらぬたに秋のね覺は悲しきをいかにせよとか鹿のなく覽
駒迎
旅人にあらぬ我さへ夕きりにわたせわするゝみなれ河かな
小夜更て世田の長はし引わたせ音もさやけし望月の駒
月
宵のまも空やはかゝるいかなれは更ゆくまゝに月のすむ覽
月影はいつことわかし物ゆへに宿に心のとまらさるらむ
おしか野のたかはかりしきさぬる夜を後も忍へとすめる月哉
野徑月
月影の入をかきりに分行はいつこかとまり野原しのはら
關路月
月影もうつしとゝめすあふさかの關は清水の名に社有けれ
九月十三夜
おしといへと秋の半の月はなほ今宵もありと思ひなされき
遍照寺にて人々月見侍りしに
あれにける宿とて月はかはらねと昔の影は猶そゆかしき
旅宿擣衣
旅ねする竹田の里にうつ衣一夜の程にきゝそなれぬる
法金剛院にて池邊紅葉といふ事を人々よみ侍りしに
青葉をは池のみ草にまかへつゝ色つく枝そ影は見えける
山家の秋の暮といふ事を
山里にすみぬへしやとならはせる心もたへぬ秋のゆふ暮

冬

初冬

荻の葉に哀しらせし風の音の今朝はいつしかと烈しかる覧

落　葉

峯つゝき吹こす風にさそはれてもみち散かふ常盤木のもり

霰

うちはらふ心ちこそすれ旅ころも袖にたはしるけさの霰は

雪

かさこしの峯にたまらぬ白雪ははれゆく空に猶そふりける

海邊雪

うちそよく水のむら芦下折て浦さひしくそ雪ふりにける

千　鳥

うきねする磯間の浦のさよ千鳥友よひかはす聲きこゆ也

月前千鳥

小夜更て月影さむみ玉の浦のはなれ小嶋に千鳥なくなり

曉更千鳥

ねさめするわれしも（か友としもイ）ともとおもはてや野嶋か崎に千鳥鳴覧

炭　竈

山高み雪けの空と見ゆるまて幾すみかまのけふり立らん

除　夜

人數にあらぬをなけく我身さへ春とあすよりいはふへき哉

戀

初ていひ出る戀といふ事人にかはりて、

わか身より戀はよそなる物なれや忍ふ心にかなはさるらん

互忍戀

戀しなむ後の世までの思ひ出はしのふ心のかよふはかりか

失本心戀

かゝらしと思ひし事を忍ひかね戀に心をまかせはてつる

戀遠郷人

こひわたる妹か住家は思ひねの夢路にさへそ遠けかりける

隔河戀

まれにたにあふ夜もあらは天河隔つる星やたくひならまし

月前戀

月影や深き戀路のしるへなるなかむるまゝにおもひ入ぬる

神かけてちかひ侍ける女のさうしなるよしを申あひ侍らさりけれは

思ひきやかけて誓ひしその神のいもゐによせてたえむ中とは

忍ひて人に物申けるにかねもうちつなりといさめけれは

鳥の音をしはし待みよさゆる夜は霜にもあへす鐘もなる覧

浮世をは歎きなからも過しきて戀に我身やたへすなりけむ

いかゝせむこはよの常の習ひそと戀しもなそや思ひなされぬ

おもひ出る人なき夜半の袖たにもたゝなる物か秋の寢覺は

經盛卿の福原の山庄にて寄松戀といふ事を

賴めつゝ日數積りのうらみても待より外のなくさめそなき

寄名所戀

身をすては哀共みよ猿澤のいけるよにこそなさけなからめ

寄源氏（レイ）戀

あふとみる夢さめぬれはつらき哉旅ねの床にかよふ松かせ

夢中會戀

夢さめて名殘に堪すなりゆくはあふとみつるにかへん命か

年をへてつれなき女に〔にそ〕

〔玉葉戀一〕恨みかね背きはてなむと思ふより浮世につらき人〔も〕そ嬉しき

絶後悔戀

忘れにし心をのみそ恨むへき人はたえねといとひやはせし

なにとなくいひかはしける女にしたしきさまに成へきよしをいはせ侍て〔人イさらに〕後心うきたるさまに見えければ

〔平家〕いとはるゝ方こそあらめ更に又よその情は變らさらなん

雜

閨冷夢驚といふことを人にかはりて

風の音に秋の夜ふかくね覺して見はてぬ夢の名殘をそ思ふ

ある所の屏風の繪にあれたる家に老人花みたる所を人々よみ侍りしに

夏淋し昔にあらすふりぬるをしらぬ翁と人やみるらむ

女房大輔に初てあひて哥よみ歌談なとしてあくるあしたにつかはしける

難波津のふるきなかれをせきとむる心の水を深くみしかな

友たちの今まうてくると申て音もし侍らてあくるあしたに月みる人にいさなはれて心の外なりしさまと。ことなしひけしたりける返事に

月をみて待れぬ夜はのあらは社頼めてこぬもわきて思はめ

法輪寺にこもりたる人の申送りて侍りける

思ひたつ心よはくもぬるゝかな草の庵にすみそめの袖

返し人にかはりて

草の庵は思ひやるたに露けきにさそ墨染の袖はぬるらん

なけく事侍りける頃おなしさまなる人のもとより申をくりて侍りける

他人の涙にぬるゝ袖に又秋は露さへをくそかなしき

かへし

さもこそはおなし歎といひなから露もかはらぬ袖のうへ哉

世のはかなき事なと侍從に申て侍りしほとに山里に籠りぬるを聞て申送り侍りし

あやなしな世をそむきなは忍へとは我こそ君に契り置しか

長恨哥のこゝろを

冬來ては何をかたみに眺めまし淺茅か原も霜枯にけり

盛方朝臣書置たる〔たりけるイ〕萬葉集を彼人身まかりて後後室のもとへ返しつかはすとて

有し世は思はさりけむ書置てこれをかたみと人しのへとは

返し　後室〔家イ〕

見ても猶袖そぬれぬるなき人のかたみと忍ふ水莖のあと

忍てもの申ける女心にもあらす絕侍りにける後こと人にあひかたらひてほとなく身まかり侍りにければ誰ともなくて母のもとにさしをかせ侍ける

諸ともに心のまゝに歎くらん人さへはてはうらやまれつゝ

親のいさめければ申たえにける女の身まかりぬと聞てよみ侍りける

わかる共有しなからの中ならはふたゝび物は思はさらまし

法華經品々の哥よみし中に信解品

たらちねとさかぬ先より大方は怪しき迄そなつさひにける

提婆品

よそに社仇とみゆとも千年まてつかへし中は隔てしもせし

安樂行品

そのたまを結ひこめける元結もとくへきほとの有ける物を

觀音品

おり立て頼むとなれは飛鳥河淵のせになるものとこそきけ

八幡臨時祭

神さひて猶やさしきはもろ人のあさくらかへす春の明ほの

賀茂哥合に述懐の心を

ひたすらに浙るにあらす思ひかね背きはつへき世共しらせよ

述懐

[玉葉雑五]
なからへはさらし共と思ふ心社時[うき]につけつゝよはりはてぬれ

親

千年とそ先いはれたる君かためおもふ心はかきりなけれと

三位中將重衡のもとより内の御大はん所へ梅につけてまいらせむとてこはれて侍りしに

千世経へを君かゝさしに此春[そイ]は手をりそめつる宿の梅かえ

右之本者。薩摩守忠度朝臣。後成卿のもとへ遣し侍りし。自筆の本を大樹より出され。兵部卿宗綱卿にかきてまいらすへきよし仰らる。然るに予彼卿の學席に行て。後世の證本にそなへんかため。みしかき筆にまかせて。寫留めよみ合侍りけるとなん。

文明十六年春三月中の三日　羽林藤原基春

右忠度朝臣集以古寫二本比挍了

惟宗廣言集 自永暦至壽永

春

元日のこゝろを

けふそとはよのまに誰かつけつ鐘あくれは聯て春めきに亀

行路子日

子日とも思はてすくる春の野に松に引れてたちとまりぬる

霞哥十首よみ侍し中に

見わたせはあしたの原のうす霞うすきや春のはしめ成らむ

漣やなからのやまに雪きえて志賀の渡りはかすみこめたり

名所霞哥林苑

春かすみたなひきぬれは浪こゆと音にやきかむすゑの松山

霞藏關路人

あふ坂のせきゆく人は誰ならん霞いうちに聲のきこゆる

海邊霞

もしほやく煙になるゝあま人は霞に春をわかすや有らん

鶯

春くとはまかきの梅に見えぬるをわれつけかほに鶯のなく

曉　鶯

我宿のまかきの梅[竹興]をねくらにてよをこめてなく鶯のこゑ

山家鶯

宿ちかき谷のふるすは雪きえてまたうちとけぬ鶯のこゑ

百首中殘雪

おく山の谷のふゝきのこけむしろ春さへ雪そ降[の歟]しきにけり

山家殘雪

人はいさわれとはふまし若菜つむそともの野への雪のむら消
歌林苑の哥合わらひ
春くれはおとろかしたにもえいてゝおりしる物は蕨なり鳬
宰相入道教長哥合山家をたつぬといへることを
花かとてたつねきたれは白雲のたつたの山の梢なりけり
同こゝろを
我こゝろなくさめよとや山櫻たつぬる峯にかゝるしら雲
侍從家隆家哥合花を
よし野山かすみはれゆく絶まより立かはりぬる花のしら雲
日吉哥合花を
朝またき春の木すゑを見渡せはかすみにきゆる花のしら雪
公卿殿上人あまたひきくして白川にて鞠會ありてこのしたにてまとゐしてかはらけさしていまやうなと侍しに今日和哥のなきこそ遺恨なれと人々侍しかは女の哥しかきてこのしたにおとして侍しに人々けふにのりてふるくなり給へるともからはなみたおさへかたくてをの〳〵やさしき返歌とも侍き
花ゆへにみ雪ふりにしわたりをは思ひやいつるしら川の水
刑部卿頼輔朝臣家哥合歸鴈を
難波潟つらねてかへる雁金はおなしもしなるあして成けり
歎冬を讃岐院御會
いかなれは春を重ねてみつれとも八重にのみさく山吹の花

夏十五首

更衣
夏衣人めはかりはかふれとも花になれにしをとしそおもふ
禁中更衣
九重にけふわかきつる夏ころも猶うすきなやたゝむとす覽
名所卯花
下枝までおりゐる鷺とみゆる哉ゆるきのもりにさける卯花
日吉哥合郭公を
尋ねかねかへる山路にほとゝきす一こゑなくやなさけ成覽
侍從家隆哥合時鳥を
一こゑをきゝての後も時鳥またなくことはかはらさりけり
暮天郭公
聲よりや姿や人に忍ふらんくるれはなのるほとゝきす哉
馬上郭公
郭公あかてすきぬる一聲に思はぬかたへ駒をはやむる
海邊郭公
小夜ふけて一こゑなのる郭公きかすやあらんいねのあま人
歌林苑哥合五月雨を
五月雨にそこととも見えぬ難波江は芦の末葉そみを盡しなる
連日五月雨
つく〳〵と軒の玉水をとつれていくかに成ぬ五月雨のそら
旅宿五月雨供花
五月雨に旅寐の床のうきぬれはいかたにや〔の歟〕みる心地社すれ
連夜照射百首
ともしするすそのゝ原のかり衣この下露にぬれぬ夜そなき
早苗夾道哥合
秋ならは稲はの露にぬれなましさなへをわくる小田の細道
鵜邊螢
鵜舟をはかゝりもしらすいてにけり螢飛かふまきのしま人
水風似秋供花

吹風に芦の葉そよく夕暮はあさちに虫のなかぬはかりそ

秋二十首

閑庭秋來 哥合

あれはてゝとふ人もなき宿なれと庭のあさちに秋はきにけり

雨中七夕 哥合

かさゝきのはしよりわたる七夕はこよひの雨や急かさる覽

夕草花 哥合

夕霧のたちわたりぬる小萩原にしきをたゝむ心地こそすれ

野徑女郎花

露しけき野路の篠原わけゆけは袖ぬらさするをみなへし哉

鶉なくいはたのをのゝ女郎花おらてすくへき心地こそせね

夕　荻

さらぬたに露のこほるゝ荻の葉に風わたるなり秋のゆふ暮

承安二年なか月の十日ころにふしみの山庄に御幸なりて侍しに女房のつほねをすきてとをり侍しにふしみのおもしろさはいかにとたつねいたされて侍しかはかみのはしにかきてつほねへさしいれて侍し

とふにいとゝ思ひかねゝよ鶉なく伏見の里の秋の夕くれ

月哥十首よみ侍る中に

天の原いまはいとはし秋の月こゝろにいるも苦しかりけり

野徑月

見渡せはおほえの山に雲はれていくのともなくすめる月哉

日吉歌合月を

月清み志賀のからさき見渡せは氷をあらふおきつ白なみ

海上月

名にたてるふしまか崎を見わたせは空行月をうつす成けり

雲間明月 哥合

雲をいてゝくもにまたいる月影やふれは消ぬる庭のしら雪

九月十三夜 供花

月の舟秋のなかはをこきすきてなに流るゝはこよひ成けり

百首中鹿を

思ひきや妻よふ鹿の聲故にさもあらぬ袖をぬらすへしとは

鹿のこゑいつれのかたそ 哥合

何方と聞わかねとも身にしむは鹿の音おろす木からしの風

山家曉鹿 山哥合

さひしさを何にたとへむを鹿なくみやまの里の明かたの空

虫 哥合

露しけき淺茅か原に鳴むしはよその袖をもぬらす也けり

庭菊似雪 哥合

ませのうちにまたき降つむ白雪の移ろふに社菊としりぬれ

終日見紅葉 白河會

朝またきけさ立いてゝもみち葉をよるの錦となる迄そみる

福原京にみやこうつり侍しころ故郷暮秋といふことを人々よみ侍しに

うつり行都のかたをしたひてや秋もこよひは西へくれぬる

冬十五首

田家初冬

いつしかとそともの小田に風冴てもりこし水もうす氷けり

海邊落葉

磯ちかくもみちを拂ふ立田姫またいくしほか染むとすらん

羇中落葉 賀茂

しくるとて柞か下に立よれはふれとぬらさぬこのは成けり

野徑時雨 賀茂

さらぬたに朝たつ袖は露けきに時雨てわたるのちのしの原

たなかみにて網代輿といふ事を人々よみ侍しに

日をへつゝ波の花さく網代木に紅葉をさへもよせてける哉

冬哥あまたよみ侍中に寒草を

冬かれの淺茅かすゑにをく露のきゆる雫はたるひ也けり

内藏頭季能朝臣の家哥合山庄初雪といふ事を

今朝よりは松の葉しろく雪消てさひしさ增るみやまへの里

行路雪 深 賀茂

雪ふかみ駒はこゆれとあふ坂の關の岩かとふみもならさす

雪中客來 賀茂

降つもる雪ふみ分てくる人は心さしさへふかきなりけり

湖上水鳥 賀茂

つらゝゐるまのゝ入江に漕舟の跡としめつゝかつくにほ鳥

月前水鳥 哥合

すはの海の月のこほりにゐる鴨はさえぬ折にや思ひとく覽

月前千鳥 百首會

やよやいかにかたふく月を眺れはふけゐの浦に千とり鳴也

旅泊千鳥

千鳥なく浮寢のとこのとまやかたとまらぬ物はなみた成鳧

爐火夜久

埋火のなからましかは小筵にひとりや冬のよをあかさまし

寄述懷除夜

數ならぬ身には積らぬ年ならはけふの暮をも歎かさらまし

戀廿首

初 戀百首

思ひあまりかきもらしつる水莖に戀渡るとはけふやしる覽

忍 戀 顯輔朝臣歌合

よと共につゝむ袖しのうら波は心にかけぬときのまそなき

日吉歌合に戀の心を

ちらさしと袖に泪をつゝむまに戀をかれしといふに成ぬる

河内守隆親の哥合戀の心を

あふ事は心なかくそたのまれぬたれも命をしらぬよなれは

ふれてのちまさる戀といふ事を

しるらむや谷のいはまの埋れ水もらすに袖のぬれ増るとは

被妨人戀 哥合

かけ初てまたねもなれぬ琴の緒をいかなる人のひき違ふ覽

戀三人

我戀はたゝみつふするかたし貝みなあふ事のなきそ悲しき

馬上戀 供花

思ひかね駒にまかせていてぬれはこひちの末は逢人もなし

月前戀 哥合

月ゝのはれゆくまゝにいかなれは涙の雨のふり增るらん

老後戀

思ひきやおいその杜に身はなりてあはぬ數の積るへしとは

憑會他人戀

なをさりの契はわれにとしをへてねたしや誰にあふの松原

哥林苑にてやくそくの日をのふる戀といふ事を

逢事をそふとてけふものひぬれはあすもあすとやいはむとす覽

後朝戀 賀茂

片身とて袖にしめつる移りかを洗ふはけさのなみた成けり

同こゝろを

あはて社恨もせしか葛の葉のかへるけさまた露のこほるゝ

互怨戀哥合

恨むるも我ならひにて賴まるゝ戀しきとのあるかと思へは

輕人戀人哥林苑

きぬ／＼にならむ歎といひなしてあらぬ淚を君にかけつる

二世ちきる戀

はかなくも後のよ迄と契りけるまたきにたにもかはる心を

遇不逢戀

あふとの露はかりみなかれぬれはこれや歎きのもりの下草

もの申ける女かしらおろしつと聞ていひつかはしける

まことにやそりはてにける梓弓おもひかへらん事も社あれ

引すへてわかてなれにし箸鷹のそりにしとをいつか忘れん

雜十首

祝

君か代はなかゐの浦のさゝれ石の松おひしける山となる迄

王照君

心から玉藻のくつとかゝれにき何かゐしまの恨みしもせん

上陽人

まゆすみも姿もあらす成ゆくをいかにかはらぬ淚なるらむ

旅

かくしつゝつひの住家と思ふにも野への旅ねは露そ零るゝ

述懷哥合

黑髮のみたれてものゝかなしきはおもふ筋にもなき世成鳧

かく計り數ならぬ身のいかなれは人よりさきに物は悲しき

世中しつかならす侍しころ宗圓法橋しのひて哥合すとて懷舊哥こひて侍りしかはつかまつりし

世中を思ひみたるゝたひことに昔をのみそ忍ふもちすり

無常

露の身の仇なるとをしれとてやためしにひけるさゝかにの糸

即身成佛

この身にてひかりをさゝむさゝしとも心ひとつに有明の月

和光同塵

やはらくる塵はかり社かはるらめ神も佛もおなし身なれは

廣言家集。以阿佛眞蹟不ㇾ違一字書寫、遂再按畢、

貞享二年初冬中澣　前内大臣經光

右惟宗廣言家集以無類本不能按合矣

鴨長明集

春

歳内立春

春といへはよし野の山の朝霞としをもこめてはや立にけり

霞隔浦

もかり舟漕出てみれはこしの海のかすみに消るよさの松原

梅花誰家

われも今しのはんやとに梅植しまた見ぬ花の面かけにたつ

花をおもふ心をよめる

思ひやる心やかねてなかむ覧またみぬ花のおもかけにたつ

關路花

春くれは不破の關守いとまあれやゆきゝの人を花に任せて

依花不厭風と云こゝろを

吉野河しからみかけて櫻さくいもせの山のあらしをそ待

父身まかりてあくる年花をみてよめる

春しあれは今年も花は咲にけり散をおしみし人はいつらは

花

よし野山高根に花や咲ぬらんはれゆく中にとまるしら雲

はる風に雲のしからみむらきえて高ねをあらふ花のしら浪

よし野河あさせしらなみ岩こえて音せぬ水はさくら成けり

三月盡をよめる

立とまれ野への霞にことゝはむをのれはしるや春の行すゑ

夏

山家卯花

山かつはかきほに咲るうの花の手折ほとをそ惜むとはみる

夜見卯花

てる月の影をかつらの枝なからおる心ちするよはの卯花

郭公

ほとゝきす初音聞つる名殘にはしはし物社いはれさりけれ

社頭郭公

ほとゝきす鳴一こゑやさかきとる枝にとまらぬ手向なる覽

五月雨をよめる

五月雨の日數つもれはしら菅の葉末をうつむ井出の下水

螢火照橋

芦の葉にすたく螢のほの〳〵とたとりそ渡るまのゝつき橋

蚊遣火盡といふ事を

蚊遣り火の消行みるそ哀なる我したもえよはてはいかにと

夏月映泉

はしゐつゝ結ふ雫のさゝ浪にうつるともなき夕月夜かな

樹陰納涼

夏くれは過うかり鳬いそのかみふるから小野のならの下陰

樹陰晩涼

水掬ふならの木かけに風ふけはおほめく秋そふかく成ゆく

まてしはしまた夏山の木の下にふくへきものか秋のゆふ風

秋

萩をよめる

花見つと人にはいはし小萩原わけつる袖の色にまかせて

水邊草花

さをしかのしからむ萩の下おれにあやなくよとむ谷川の水

涙まくらにしきの袖をかたしきてみきはにねたる秋萩の花

家の女郎花さかりなるときゝとをきところへまかるとて
あるしはとゝふ人あらは女郎花宿のけしきを見よと答へよ

閑庭苅萱
わけてくる人なき庭の苅萱はをのれみたるゝ程そみえける

鴈をよめる
行水に雲井の雁のかけみれはかすかきとむる心ちこそすれ

雁聲遠聞
玉章のうらひきかへすこゝちして雲のあなたに名のる雁金

鹿をよめる
風わたる眞葛か原のさひしきに妻とふ鹿のこゑうらむなり
夕されは身にしむ野への秋かせにたへてや鹿の聲を立らん

霧隔行舟といふ心をよめる
音すなり野嶋か崎の霧のまにたかこく船のとものなるらん

月
あらしふく有明のそらに雪消て月すみのほる高まとのやま
月かけの雲かくれ行秋の夜はきえてつもりぬ庭のしら雪
なかむれはいたらぬくまもなかりけり心や月の影にそふ覽

荒屋見月

海上月
くまもなき鏡と見えてすむ月をもゝたひみかく沖つしら波
玉と見るみさきか沖の浪間より立出る月の影のさやけさ
下總國にみさきといふ所あり。日本の東のはてなれは。月の浪まよりいつるやうにて。みゆるなりとなむ申侍。

擣衣音遠
契りあらは重ねもやせん遙々とうつをのみきく衣なりとも

海邊擣衣
月清み磯のまつかねきぬたにて衣うつなりさとのあま人

紅葉映池水
秋山のうつれる池の水草こそ梢にみえぬ青葉成けれ

女郎花の霜かれゆくを見侍りて
くる人も枯々なれや女郎花秋はてゆくはをのれのみかは

長月の晦日のころ鹿のなくを聞てよめる
霜にうつむ眞葛かしたのうら枯て淋しかるねの（にイ）をしか鳴也

虫聲惜秋
秋したふ虫の聲こそよはるなれとまらぬ物と誰かをしへし

冬

時雨
山のはにはなれてきゆる薄雲はあらしのをくる時雨也けり
音するも淋しきものと槇の板に思ひしらするはつしくれ哉

落葉
山颪に散もみち葉やつもるらん谷のかけひの音よはる也

大井河にまかりて落葉をよめる
あすもこむとなせ岩なみ風ふけは花に紅葉をそへて折けり

殘菊
冬來れは星かとみゆる花もなしみなむらさきの雲隠れつゝ

霰
杉の板をかりにうちふくねやの上にたちろく計霰ふるなり
霰ふる蘆のまろ屋の板ひさし寢覺もよほすつまにそ有ける

深夜千鳥

さよ更て千とり妻とふ松かけにこぬみの濱や淋しかるらん

ね覺する波の枕になく千鳥をのかねにさへ袖ぬらせとや

水逐夜結

薄氷つはさにかけし鳴鳥のいく夜つもりて隙もとむらん

水鳥をよめる

水草ゐる汀をかへて鴨とりは上毛さへこそみとり成けれ

曉千鳥

月影のかたふく磯にゐる千鳥かたはにのこる霜かとそみる

月前水鳥

くもり行月をはしらてをく霜を拂ひえたりとをしそ鳴なる

社頭冬月

片岡のならのまき葉も散はてゝ枝にとまらぬ月のしらゆふ

ある人の北野にて歌合せんと侍しにおなしこゝろを

いつはりをわきて咎むるしめのうちに晝となみえそ冬夜の月

寒蘆隔水

霜はらふ羽音にのみそにほ鳥のあしまの床は人にしらるゝ

歳暮のこゝろを

おしめとも過ゆく年のいかて又思ひかへりて身にとまる覽

戀

初戀の心を

袖にちる露うち拂ふあはれわかしらぬ戀路とふみそめて見

忍戀

忍ふれは音にこそたてね棹鹿の入野の露のけぬへきものを

まて暫しもらし初ても身の程をしるやととはゝいかゝ答へむ

不被知人戀

うき身にはたえぬ思に面なれて物や思ふととふ人もなし

初見返事戀

なにせむに（いかにせんイ）覺束なさを歎きけん思ひたへれと書ける物を

後朝戀

越かねし逢坂山をあはれけさかへるをとむる關守もかな

成疑心戀

うちはらひ人かよひけり淺茅原ねたしや今夜露のこほれぬ

毎夜他行戀

をのつからたかはぬ夜半も有やとて主なき宿に通ひ馴ぬる

思二世戀

新續古今集　我は唯こむ世の闇もさもあらはあれ君たに同し道に迷はゝ

並床不逢戀

よそにのみならふる袖のぬるはかり涙よ床の裏つたひせよ

契曉戀

たのめつゝ妹を待まに月影をおしまて山のはにそかけたる

誓言契戀

神かけて頼むれはよし心みむさてもつらくは人たのめかは

夢中會戀

うつゝには暫し袖をも引とめてさむる別をしたふかひなし

互精進戀

中にまた人をはふせし神垣やならふかひなき丸ねなりとも

蒙示現戀

しるしあれはいつなる物を逢とみるいもみの床のおきうきやなそ

對泉戀人

おもひ出て忍ふ涙（のイ）やそひぬらん色に出なる山の井の水

寄草花戀

朝露に小はき分てもならひにき雫も色もそれはものかは

戀のこゝろを

恨みやるつらさも身にそかへりぬる君に心をかへて思へは

戀しさの行方もなき大空にまたみつものはうらみ成けり

消かへり押へてむせふ袖のうちに思ひ殘せる（トイ）との葉そなき

する墨をもとき顏にもあらふ哉かくかひなしと泪もやしる

みてもいとへなにか涙をはちもせんこれそ戀てふ心憂もの

今よりはこりぬや心思ひしれさるそやしらぬ人にうつるは

秋の夕に女のもとへつかはす

忍はんと思ひしものを夕暮の風のけしきにつゐにまけぬる

雜

やをなき人の若君むまれ給へる事をいかゝとあれは

ともかくもえ社いはねの松かえに木高く巢立鶴の子なれは

津の國へまかる道にこやといふ所に泊りて侍にねやのさうしにあやしけなる手にて手ならひをして侍るかたはらに書付ける

津の國のこやの蘆手そしとろなる難波さしたる蜑の住ゐそ

山里なる所にあからさまにまかりてよめる

かりにきてみるたにたへぬ山里にたれつれ／＼と明暮す覽

ものおもひ侍るころおさなき子をみて述懷のこゝろを

奧山のまさきの葛くりかへしゆふともたえし絕ぬなけきは

あれは厭ふそむけはしたふ數ならぬ身と心との中そ床しき

心にもあらてなにそのふるかひはよし賤の身よ消はてね唯

何事をうしといふらん大方の世の習ひこそきかまほしけれ

うきなからすき野の雉の聲立てさをとる計り物をこそ思へ

霜うつむ枯野によはる虫の音のこはいつ迄か世に聞ゆへき

世は捨つ身はなき物になし果つなにを恨むるたか歎きそも

うきはいかにせんとて惜む今朝（本ノマヽ）そと人にとはれて心をそとふ

花ゆへに通ひしものをよしの山心ほそくもおもひたつかな

哀ともあたにいふへき歎きかと思ふか人のしらすかほなる

住佗ぬいささはこえむしての山さてたに親の跡をふむへく

これを見侍りてかも輔光

すみ佗て急きなこえそしての山此世に親の跡をこそふめ

と申侍しかは

情あらは我まとはすな君のみそ親のあとふむ道はしるらん

懷舊の時子といふ事を

思ひ出て忍ふもうしや古へを今つかのまにわするへき身は

淨土の相かきあらはしたる中にはなのふれるところを

たえすちる花も有けり故鄕の梅もさくらもうしや一時

ある聖のすゝめにて百首の哥を厭二離穢土一欣二求淨土一によせてよみ侍し中に隔を

白雲に消ぬ計りそ夢の世をかりとなく音はをいれのみかは

對月忘西

朝夕に西をそむかしと思へとも月待ほとはえこそむかはね

承元元年五月日　散位鴨長明判

右鴨長明集以一本及流布印本挍合了

群書類從卷第二百五十八

和歌部百十三家集三十一

藤原隆信朝臣集上

春上

文治六年女御入内屛風に小朝拜にむれたちたるところを

かはたけの千世をこめたる庭に出ておきふし君を祝ふ諸人

後京極殿（良經）左大將ときこえ給ひしとき百首歌合ありしに元日のせちゑ

いつしかと袖をつらぬるもゝ敷に萬代めくれ春のさかつき

五條三位入道（釋阿）四季の題にて十首歌人々によませられしに春たつ心を

きのふまて雪降つみしみよしのゝ山も霞てみえにける哉

大納言實國左衛門督と申し時歌合せられしにはるたつ心をよみ侍し

逢坂のせきのしみつの薄こほりとくるや春のこゆる成らん

正治（土御門）二年院（後鳥羽）人々に百首歌めしゝに

逢坂の關のしみつのをとは山をとにもしるし春のけしきは

二品法親王（守覺）人々に五十首歌よませさせ給ひしに

朝戸明てはるたつ空をなかむれはおもひもあへぬ鶯のこゑ

後京極殿左大將御時百首歌合春水

きゝなれし峯の嵐にいつしかとをとつれかはる谷のした水

西行上人伊勢百首とて人々にすゝめ侍し

すゝか河せゝのいはかとうちたゝき氷し水も春をつくなり

院百首に

あと絶し雪よりそこの庵まてふきあらたむる春の山かせ

千五百番哥合に

春日山松のみとりはほのみえて消あへぬ雪に春風そ吹

君かへむちよのためしに引そめし野への小松も數そひに鳬

引たひに千年をそふる小松原いく萬代を野邊にきぬらん

春歌中にねの日のこゝろをよめる

けさみれは子日の松も雪消ていつ引かふるけしき成らむ

文治六年女御入内屛風にのゝへにこまつかきたるに子日しに人々いてたるところ

今年より千とせの陰をならへよと二葉の松をためしにそ引

殷富門院大輔人々に百首歌よませ侍し中に

雪とくるのへのした草下もえて霞たなひく春はきにけり

人々十首哥よみ侍し中にとをきむらの霞といへるこゝろを

宿かりしわたりやいつく春かすみへたつる程に我はきに鳬

院百首中に

はるきては人もとふへき三吉野に雪よりふかき朝霞かな

建保元年和歌所哥合にかすみとをきうへきふかくす
といふことをよめる

霞たつふる河のへのうすみとりみえ社わかれ二もとの杉

おなしころつちみかとの内大臣(通親)家にて人麿の影
供に野霞

淺みとり霞にけりないそのかみふるのにみえし三わの杉村

海邊霞

浦つたふはまちの末もあと絶てしほひにみつる霞也けり

文治六年女御入内屏風に山野にかすみたちわたりて
すみよしの松なと書たる所

山高み霞をわけてなかむれははるかにみゆるすみよしの松

後法性寺殿(兼實)右大臣ときこえさせ給ひし時哥合せ
させ給ひしに

やまたかみそこともみえぬ梢かな霞のそこやみやこ成らん

つちみかとの内大臣家にて人丸のえいく侍しにとを
きしまのあしたのかすみ

今朝みれは沖つこしまも浪路にて霞むとたにもみえ分ぬ哉

西行上人いせの百首とて人々にすゝめ侍りしにかす
みのこゝろを

たひねせしやとの梢やそれならむ霞にもるゝたまのを柳

春かすみ霞こめたるをの山は人のあはれもかゝるなりけり

わけ入し秋のけしきにかはれとも霞もふかし荻のやけはら

和歌所にてかすみゆくみちをかくすといへるこゝろを

霞わけまよふ山路はやま人の歸るしるへそしほり也ける

二品法親王人々に五十首歌よませたまひしに

蘆の葉はまたもえなくに霞こめこやもあらはにみえぬけさ哉

後京極殿左大將と申しゝ御とき志賀のうらをはるの
心によせて

袖さえし志賀の浦かせ吹かへて霞たちそふさゝなみのこゑ

後德大寺(實定)左大臣大納言と申けるとき人々に百首
歌よませられしにかすみうらをへたつといふことをよ
める

よさのうらの霞はれゆく絶間より梢そみゆる松の村たち

院百首に

花ゆへにまたれし春のけしきにも霞むはつらし峯の月かけ

鶯のこゑにもしるきけしきかな春きぬとしもなかぬ物ゆへ

和歌所のうた合にせきのうくひす

古巣をはいつあくかれてあふさかの關戸出るうくひすの聲

後法性寺殿右大臣とまうしゝとき人々に百首歌よま
せさせ給ひしに鶯

雪おれし籬の竹のよのまにもうちとけにけり鶯のこゑ

文治六年女御入內御屏風にはなの中にうくひすのゐ
たる所

鶯の聲の色さへ身にしむは花のたよりにきけは也けり

よしみつの大僧正(慈鎮)家人々に百首うたよませられ
しにのこりのゆき

奥山のいはもと雪のめつらしくまた春めかぬわたり成けり

つちみかとの内大臣家にて山家のこりの雪

花をまつ山に春はしるけれとなを雪ふかしみよしのゝ里

院百首に

いかなれはつむへき物とまたる覧種まく事も知らぬ若菜を

おしなへてよもの梢はかすめとも梅かかのこす春の明ほの
秋よりも梅かほるよの月をみむ鹿こそなかね袖はつゆけし
　和歌所歌合に梅花あかつきの袖にゝほふ
春の夜のやみにあるを梅のはなかほるたもとに在明の月
　後京極殿にていけのきしの梅といふ題を
はるかせにきし打浪やおりつらん池の底まてにほふ梅かえ
　つちみかとの内大臣家にて哥合侍しにとなりのむめ
梅かほる宿のねやにやうらむらん垣ねのほかにわくる匂を
　三位中將資盛歌合し侍しに梅をよめる
むめのはな色も心にそむれとももとまるは袖のにほひ成けり
　院百首に
淺緑いとよりかくるたまやなきぬくしら露のなに社有けれ
　二品法親王五十首に
野も山もみとりはゝるの色なれとなをめつらしき青柳の糸
　後京極殿左大將御ときの百首にはるのあけほのを
なにとなく心うきぬるひとりねに明ほのつらき春の色哉
　おなし歌會にひはり
雲にいるそなたの空を眺むれはひはりおちくる明ほのゝ空
　春歌中に
大とりのはかひの山を朝ゆけは春日の原にきゝすなくなり
　和歌所哥合に春山月
春とても花をやはまつさらしなや朧月夜のをはすての山
　しら河にて人々哥合し侍しにはなをまつところのこ
　ゝろといへるこゝろを
片敷の袖をかへさぬことゝ社あれ花待頃もいやはねらるゝ
　つちみかとの内大臣家にて人麿のえいく侍しにはる
のかせところをわかす
吹風の春をしらする匂ひこそいたりいたらぬ里なかりけれ

春下

　後京極にて十首のうた合侍しにあしたのはなをよめ
る
またれつる花やよのまに咲ぬらん朝日にかほる峯のしら雲
　おなし心を
いつる日は山のは高く空晴てくもらぬ雲はさくら成けり
　大納言經房歌合し侍しに山のはな
あかなくになほたつねても山さくら心わくへき花の陰かは
　五條三位入道十首歌人々によませられしに花をよめ
る
高砂のおのへの櫻さくまゝにくもかくれゆく松の村たち
　花歌中に
みよしのゝ花のよそめにまかひけり春はたちのけ峯の白雲
名殘なくよを厭ひてそいりし身の花にけかるゝ三吉野の山
わけきつる峯の白雲それなからかほるや花の梢なるらん
　後京極殿左大將ときこえ給ひし時の百首哥合にしか
の山こえ
春はたゝ雲ちをわくる心地して花こそみえね志賀の山こえ
　正治二年院百首
尋ねいる花はそれともしら雲のへたつとみれはかほる山風
しるきかなのとけき春の花さかりちらぬ櫻にかほる山かせ
　文治六年女御入內屛風に山野人の家なとに花さきた
る所
野も山もあまねき花の匂ひきて思ひひらくる春を知かな

八幡わかみやの哥合に花をよめる
いはねふみしらぬ山路を尋ねても春の住家は花にまかせつ
人々十首歌よみ侍し中にはなかくをとゝむ
きのふ今日なれぬるひとの心をは花の散なむ後そみるへき
後京極殿左大將ときこえ給ひし時とをくちかく花を
みるといへる事をよめる
峯は雲麓は花とまよふまににほひをかはす花の山かせ
後法性寺殿宇治一切經にいらせ給ひて侍しついてに
歌よませられ侍しにはなかくをとゝむといへる事を
夏衣たちかへりてもわするなよ春のやとをは花にまかせつ
太宰大貳重家歌合し侍しに花をよめる
としをへてつくす心を哀とやにほひをそへて花も咲らん
二品法親王の五十首に
よしさらはさても心をなくさめよ花ちる峯に殘るしらくも
正治二年院百首に
かく計りおしむゝ殘にたへぬみを誰とへとてか花のちる覽
千五百番のうた合に花をよめる
散花を浪かとみれは高砂のおのへもけさは末のまつやま
尋ねこし山路は花をしるへにて散木のもとやすみか成へき
かものしけやす哥合し侍しによみてつかはしゝ
山高み風にしたかふ白雲のたちはなれぬや櫻なるらん
さかのしやうしむ上人律師と申しゝときうた會せら
れしに[百撰]花をよめる
あたにちるもろからいかて櫻はなのとけき春の色をみす覽
後法性寺殿右大臣ときこえ給ひしとき百首哥人々に
よませさせ給ひしにはなをよめる
あたにのみ移ろふ花の色なれとそめし心はかはらさりけり
按察公通十首歌人々によませられ侍しに落花のこゝ
ろを
散までもおらしと花を惜みをきてさなから風にまかせつる哉
和歌所にて十首御歌會侍しに落花を
ちらさしと惜みし花はそれなからみるになくさむ庭の雨哉
千五百番哥合に
たつねつる花の雫に袖ぬれてそらなつかしき春雨の雲
雨そゝく色こそ春にあひにけれ人もわけこぬ庭のよもきふ
いまはとてよそに成ゆく雁金も春の哀はなをのこしけり
春といへはいまはの心つくはねの峯をはるかにかへる雁金
後法性寺殿右大臣御とき百首の中にはれたるそらに
かへるかり
くもりなく月すむ空を行雁はかへるなのみや秋にかはれる
同百首にもりの間のすみれ
うらわかみつみやそめまし紫のすみれにましる杜の下草
正治二年院百首に
佐保姫は夏は緑をそむれともすみれにかはる野への色かな
文治六年女御入内屏風に人のいへにふちのはなさか
りにさきたるところ
世々をへて絶えせぬ藤の花さかりかゝる春にもあひにける哉
白河にて人々藤のはなをよみしに
おきつかせ吹ともみえぬ高砂の尾上の松にかゝるふちなみ
和歌所哥合にあめのうちのふち
春雨にぬるとしも社みえわかね涙になれたるたこのうら藤
同哥合に水邊のつゝし

紅葉せしとなせの瀧のあきの色をうつして咲るいはつゝじ哉
　後京極殿左大將ときこえ給ひしときの百首哥合にの
　こりのはるといふことをよめる
かくしつゝ積れはをしき春の日をのとけき物と色眺めけむ
　二品法親王五十首うたの中に
行春のあかぬ名殘をなかめても猶あけほのや面かはりせむ
　正治二年院百首に三月盡心を
おしみかね春の名殘もさよふけぬあとなき空を眺め殘して
　ふねのうちの三月盡といへることをよめる
こきよせよ難波わたりに舟とめて今宵計りの春をなかめむ

夏

　二品法親王人々に五十首歌よませさせ給ひしにころ
　もかへのこゝろを
花の色にそめし衣よまてしはし霞の袖はたちかはるとも
　西行上人伊勢百首とて人々にすゝめ侍りしによめる
限りあれはひとへにかふる夏衣花の色にはなをやそめまし
　正治二年院百首によめる
夏こたち青葉ましりの花もあれは猶たちかへしけふの衣は
　千五百番哥合に
心には春のなこりを恨みてもかひなき袖のひとへ成らん
若葉さす君かひかりに葵くさよろつ代かけて神やうへけむ
　吉水の前大僧正家百首に
いかなれは二葉なからに年をへてけふのみあれにあふひ成らむ
　後京極殿左大將ときこえ給ひしとき歌合に新樹
面影はしくれし秋の紅葉にてうすもえきなる神なひのもり
　大宰大貳重家々にて閏四月にほとゝきすをまつとい
　ふことをよめる
數ふれは鳴へきほとそ時鳥をのかさつきのなはかはれとも
　按察公通十首歌人々によませられしに郭公をまつと
　いへるこゝろを
待〳〵ていかにかすへき時鳥なかぬとみゆる明くれのそら
　後京極殿百首歌合になつのよの心をよめる
ほとゝきす鳴一こゑに明るよもまつには秋の心地こそすれ
　大納言經房歌合し侍しにはしめの郭公のこゝろを
なをきなけ尋ねそきつる郭公里なれぬねはきかまほしさに
　二品法親王五十首に
尋ねつるやまちくらして郭公なをおくにきくさよの一こゑ
　建保元年和歌所哥合に郭公
けふもなを山路くれなはほとゝきすいかに尋ねむ一聲の空
　あめのゝちのほとゝきす
五月雨にぬれ〳〵こそはたつぬれと雲まゝちける郭公かな
　人麿のえいくの歌合にあか月のほとゝきす
またよひの月に待つるほとゝきす鳴一こゑに有明のそら
　文治六年女御入内屏風に人のいへに郭公なきたると
　ころ
すきぬとや人は聞らんほとゝきす心にとまるあか月のこゑ
　八幡歌合にほとゝきす
さ月やみ夜深き聲はほとゝきすをのかものから哀とやきく
　吉水前僧正家百首中にあやめ
いつれをか哀とは思ふあやめ草たもとの露と軒のしのふと
　正治二年院百首に
さらぬたにかけなつかしき夏のよのねさめにゝほふ軒の橘

千五百番歌合に
菖蒲草けふかりそめにふきつれはしのふそ軒のあるし顔なる
なかきねを結ふあやめの枕にも猶ほとなきは夏のよの夢
和歌所にて十首うた合侍しに
すゝしくも袂にかよふ匂かな軒のあやめを風やふくらん
後京極殿左大將御ときの哥合に池菖蒲
あやめ草いかにつきせす長きねそ池は昔のあとゝこそきけ
千五百番歌合に
軒ちかき花たちはなに風すきてにほひを殘すせみの羽衣
後法性寺殿右大臣御時百首哥人々によませさせ給ひ
しに〔脱も〕さみたれ
五月雨はしのまのあまのねやくちてこや鹽たるゝ姿成らん
正治二年院百首中に
螢ならていかゝかるへき五月雨に沼のあやめはなみの下草
千五百番歌合に
五月雨はふしみのたゐに水こえて庭まてつゝくうちのかは浪
河原院にてけむせう法し哥合し侍しに故郷のなてし
こ
うへてみし籬は野邊とあれ果て淺茅にましる常夏の花
按察公通十首哥中に夏くさ
庭の面を蓬かそまとなしはてゝ虫の音きかん秋を社まて
後京極殿百首哥合に夏草
わか宿の蓬のにはゝ夏深したれわけよとかうちもはらはん
白河にて人々水邊夏艸といふ事をよみ侍しに
色めかむ秋ちかくなるをみなへし軒はのみつや鏡なるらむ
正治二年院百首に
夏草のしけみにやとは埋もれて露にもくもる宿〔頭註〕の月かけ
二品法親王五十首に
をとはかはせゝの岩浪たま散てもゆる螢も影そすゝしき
後白河院御時供花のついてに歌よませられしに江邊
のほたる
そこきよき玉江の水に影そへて猶あらはすは螢なりけり
西行上人伊勢百首中に
夕暮の露も散そふ草まくらいつれの玉かほたる成らむ
正治二年院百首に
身をこかすよはの螢の思ひにもちかつく秋は涼しからめや
山のはに入日の影はさしなからひとむら曇るゆふたちの空
かきくらすとはかりみゆる夕立にいつれの里かあさちふの露
おいかよは猶のこりける夏のよをねぬに明ぬと何恨みけむ
人麿のえいくの哥合海邊夏月
夏衣たちよるなみに月さえて秋にやとかす袖のうらかな
後白河院御時供花の會に水風あきのことし
夕まくれまたきに秋をさそひきて袂にやとすまのうら風
後法性寺殿右大臣ときこえたまひしとき十首哥人々
によませさせ給ひしにいつみのへんの月
袖ひちてすゝむ清水にすむ月は我てに結ふこほり也けり
いへ〱の納凉といへるこゝろを
宿とにせく水上のにこるかなたかむすふ手の雫なるらむ
殷富門院大輔人々に百首うたよませ侍しに
嵐ふくとなせの瀧の涼しさは秋の紅葉のちらぬはかりそ
和歌所にて十首哥合侍しに松のもとのゆふすゝみ
立よれは夕浪すゝし住吉の松をあきかせふかぬものゆへ

千五百番うた合に

深山かけ夏なき年やこれならむ月を清水に松のしたかせ

後京極殿左大將ときこえたまひしとき百首うた合に

あふき

うたゝねに馴やならす床の上に月と風とはあきの物ゆへ
かは

せみ

鳴すさむひまかときけは遠近にやかて待とる蟬の聲々

西行上人伊勢百首に

みそきするいくしのしてに風過て凉しくなりぬ水無月の空

文治六年女御入内屛風にかはのへんにみなつきはら

へしたるところ

さほ河のたえぬ流にいくしたて祈るみそきも君かよのため

秋上

後京極殿左大將ときこえ給ひしとき百首哥合せさせ

給ひしにのこりの暑さ

をとにのみ哀をそへていかなれは袖にしられぬ秋の初風

二品法親王人々に五十首哥よませさせ給ひしに

今さらにきけはなをこそ悲しけれかねて思ひし秋のはつ風

吉水大僧正家百首に

秋の色も年にそへてやまさる覽けさ吹風にゝるものそなき

和歌所にて六首哥合侍しにはしめの秋のあか月のつ

ゆといへるを

秋きぬとさそたしら露の置もあへす風に玉ちる野への明ほの

千五百番哥合によめる

秋の色をいつしかみする夕つくよさすや岡邊の松かせの聲

あきらけき庭のともし火ゆふとに雲るにかよふひこほしの影

正治二年百首に

秋をへてなかき契りはたえねとも明る苦しきたなはたの糸

西行上人いせ百首に

秋風を聞ほとしはしひまもかな物思はても身にはしむやと

後京極殿百首哥合に

むはたまの闇をあらはす稻妻も光のほとはゝかなかりけり

後法性寺殿右大臣ときこえ給ひし時の百首に草花の

心を

かせふけはこはきか枝に玉散てうつら鳴也宮城のゝはら

同御時草花野にみてりといへる心を

ひくらしにわけ行野邊のかり衣いくしほそめつ萩か花すり

文治六年女御入内屛風にのゝ花さかりに咲しを人々

おりたるところ又ほりたる所なとかきたるを

都人ちくさなからに移しうへは野へには殘る花やなからん

同御屛風に山野人家なとに秋風吹たる所

をしなへておき吹風の音さへそのとけき秋をしらせ顏なる

千五百番哥合に

しら露のをくとはのへの花をみてぬとはしのはむ萩の上風

秋哥中に

秋といへは心も色になりぬへしおはなにまし咲花をみて

はけしさを恨みやすらん女郎花なひくは風をそむく成けり

六條入道左大臣大納言と申しゝときの百首歌による

のおき

我せこを待つるよひの風ならはあやしかるへき荻の音かな

二品法親王五十首に

なくさめてあすの暮をもきくへきに哀を告る荻の音かな

秋部中に
慰むる友ならなくによもすから宿とふものはおきの上かせ
後京極殿十首歌合に野風
山高み分こし道をなかむれはすその丶おきに秋風そふく
百首歌合にあきのかせ
荻はらやの丶への秋かせすゑわけて叉をとするは夜半の村雨
後法性寺入道殿右大臣ときこえたまひしとき後百首
におきのをとねふりをおとろかす
一たひは袖ぬらしつる荻のはにまとろめはまた風わたる也
あねかこうちの三位季經あきの心野徑にありといへ
るたいを人々によませ侍しに
我なから行ゑもしらぬ心かないつれの丶への花に成らむ
按察公通十首うた人々によませられ侍しにの丶かせ
旅衣や丶はたさむき秋のよに風こそわたれをの丶しのはら
正治百首に
秋とてもたれかはつらき真葛原こはなにゆへの恨み成らむ
夕暮はのはらのけしきたゝならて露吹かへすくすのうら風
みる儘にやかてきえゆく野への色をまた仄めかす夕月夜哉
後京極との左大將の御ときの百首うた合に秋夕
野邊の色はみなうすゝみに成にけりしはしとみつる夕霧の空
中納言兼光らう詠のうたとて人々によませ侍し中に
秋の夕のこ丶ろを
なかむれは悲しきものと知なから猶うとまれぬ秋の夕くれ
西行上人伊勢百首に
鳴子ひく門田のいなは霧こめてそよくときけは鳴そたつなる
後京極殿百首歌合にしき
明ぬるか鴫のはねかきねやすきて袖に月もこ深草の里
秋　田
夕つくよほのめくかけも哀也稲葉のかせは袖にかよひて
文治六年女御入内屏風に山野にしかなとたてるとこ
ろ
風の音ののとけきみよはさをしかの聲のみ秋のけしき也けり
二品法親王五十首中に
荻の音にしかのそ〔右歟〕へて秋はきぬ風よりほかにとふ人はなし
人々十首うたよみ侍しによるのとまりのしかといへ
るとを
うきねするゐなのみなとにきこゆ也鹿の音おろす峯の松風
三位中將資盛歌合し侍しに
秋の夜はち草の花もある物を色なきしかのねこそ身にしめ
供花會に關路曉鹿
月の頃須磨のあさけの鹿の音にゆるす關ちもゆかれさりけり
西行上人いせ百首に
そてぬらす鹿のねはかりをとつれてとふ人はなし秋の山里
正治二年百首に
心なきのへのをしかのいかなれは秋の哀を聲にたつらん
秋はた丶さなからよはのねさめにて鹿の音きかぬ曉そなき
民部卿經房歌會し侍しにしかをよめる
をのかねに秋の哀はある物をなにゆへ鹿の聲をたつらん
中納言資實すみよしにて哥合し侍しに鹿をよめる
あやなしやをのか盛りの野へに出て秋を恨むるさを鹿の聲
人々山家あきのけふといへるとをよみ侍し
うつしうへて都にもみし野へなれと朝たつ鹿の聲はなかりき

正治二年百首に

横雲のはれゆくあとの明ほのに峯とひわたる初雁のこゑ

二品法親王五十首に

昔みしあとゝもみえすあれはてゝうつら鳴のやふか草の里

清水前大僧正家百首に

霧のまにこまにまかする磯傳ひいつく成らん松かせのこゑ

西行上人伊勢百首に

霧深きとしまが崎のゆふしほにとも恨むなるたつの一こゑ

文治六年女御入内屏風に海邊きりたちわたる所

磯つたひそこともしらぬ夕霧にたちこめられぬ涙のをと哉

和歌所にてきり古きはしをかくすといへるとを

きゝわたる昔なからのなのみして跡なきあとも霧こめて覧

同御歌合にせきのみちの穐風

都出てかさなる山の秋かせに昔のあとをしらかはのせき

文治六年女御入内屏風にあふさかのせきにこまむかへにゆきあふところ

ひく駒やちかく成らん相坂の關のいはかとをとひゝく也

中納言兼光らうゑいの歌よませさせはへりしにあさかほ

はかなしと思ひもはてしなか〳〵に日数はへけり朝顔の花

和歌所の哥合にゆくみちのむし

時のまにやかて名殘や惜むらんゆきかふ人を松虫のこゑ

和歌所にて六首哥合侍しに故郷虫といへるとをよめる

はかなしやたれに契て深草の野となるあとに松虫のこゑ

後京極殿左大將ときこえ給ひしときの百首歌合にのわき

夕まくれむらくもまよひふく風にまくらさためぬ花の色々

秋下

後法性寺入道殿右大臣ときこえ給ひしとき百首歌よませさせ給ひしに月をよめる

出ぬより月みよとこそさえにけれをは捨山の夕暮のそら

文治六年女御入内屏風に人のいへのいけのへんに月みたる所

よろつ代もすむへき宿の池水にのとかにやとれ秋のよの月

八月十五夜和歌所哥合に月おほくの秋のとも

きみならて誰か契らん秋の月ともにすむへきよろつよの影

海邊秋月

秋かせのふけゐのうらに空晴て浪のをとまてすめる月かな

河月こほりにゝたり

秋やあらぬ月や氷をむすふらん光さえたる玉河の水

西行上人いせ百首中に

くもりなく月すむみねにきてみれは千里は山の麓也けり

後法性寺殿右大臣ときこえ給ひしときの百首に

あくかるゝ心を月のさそひ出てたか住む宿をとはむとす覧

二品法親王五十首に

月きよみ心すむよはいつくにも有ける物ををはすての山

後德大寺左大臣大納言と申しゝ時の百首に月のまへのとをきこゝろといへるとを

更科やをはすて山もまたみぬに思ひしらするよはの月かな

正治二年院百首に

曇りなき月をなかめぬ心にや千里はほかのものとしるらん

天のはらおもへは秋そ哀なるひとよも月のあたにすまねは
建仁元年三月和歌所哥合に山家秋月
このまもると山分きてなかむれはのきはさやけき峰の月影
後京極殿左大將ときこえ給ひしとき同八月十五夜を
よめる
なか月のつきよりさきに今よひこそ秋の二夜を詠そへつれ
按察公通十首歌人々によませられはへりしに水月
さとゝをみ人も結はぬいたゐにもみ草をわけて月はすみ鳬
おもふ事侍しころ月を見て
何事を思ふともなき人たにも月みるたひになかめやはせぬ
和哥所歌合に田家月
門田ふく稻葉の風をそよとても月よりほかにとふ人はなし
同うた合にふかき山のあかつきのつき
よしさらは鳥の音もせぬ山ちとて明るも知ぬ月をなかめん
海邊月
ほかとしもあかしの名をはしらしかし月に心をすまの浦人
八幡わか宮會にふねのうちの月
こきよする同し磯へに影とめて月も浮寢やさひしかるらむ
おなしこゝろを
漕よせてとまれは磯にやとり鳬おきのふなちをゝくる月影
つちみかとの内大臣家にて人々ふるきてらの月とい
ふをよみ侍しに
わしの山てらす光をわけとめてさかのゝ露にやとる月かけ
後京極殿左大將の御とき月にむかひて昔をとふとい
ふことを
見し世よりみぬ昔まて尋ぬれはこたへぬ月そいふに増れる

しらかはにて人々歌合し侍しにくものあひたの月と
いふことを
あかなくに雲かくれゆく月影のはれまをみれは傾きにけり
正治二年百首に
すみのほる心やゆきてなかむらん月のみやこの有明の空
千五百番哥合に
秋の夜はくももこゝろや在明のかたふくまてもすめる月影
明ぬるかとやまのはらの秋の月かたふく空に鳴のはねかき
後法性寺入道殿右大臣ときこえ給ひしときの哥合に
山家月
よもすから在明の空を眺むれはしかなくみねに月傾きぬ
後京極殿左大將ときこえ給ひしとき四季の題にて哥
合せさせ給ひしにもりのあひたのあかつきの月
夜もすから木間わけゆく月影のしつえにもるや明かたの空
千五百番哥合のうた
しほ風や秋はよさむになるみかたあまのとまやも衣打なり
後法性寺殿右大臣御とき後百首にころもうつこゑは
るかなり
たえ／＼に音そ聞ゆるさよ衣うつ手やたゆむ里やはるけき
つちみかとの内大臣家にてあめのゝちのきくといふ
ことをよめる
ぬれてほす露に千とせをかけみよと山路の菊に雨過にけり
正治二年百首に
白菊の花になくさむ日かす哉秋にかきらぬにほひと思へは
おとらしとをのかさま／＼よはる也秋はするのゝ虫の聲々
和哥所にて十首歌合に山嵐

山かけや音しつかなる嵐こそ烈しきよりも身にはしみけれ

同心を

軒ちかきみ山おろしの烈しさをきゝなれなはと思ひける哉

後京極殿百首歌合につた

今朝みればつたはふ軒に時雨して忍ふのみこそ青葉なりけれ

民部卿經房歌合哥こはれしに紅葉

物ことにさひしき秋のみやまへにかゝるもみちの色も有けり

正治二年院百首に

立田山すその〻霧はへたつれと空に紅葉そあらはれにける

眺めてもいかにしのはむ紅葉々は時雨降ぬる秋の日かすを

後法性寺殿右大臣御とき百首にもみち

秋山のもみち葉さそふ風のをとにまつちるものは心なり鳬

三位入道十首歌中に九月盡

こすゑにも秋のおしさやかよふらむ涙とゝもに散木のは哉

後京極殿百首歌合にはゝそ

山科のいはたのをのに秋くれて風に色あるはゝそはらかな

西行上人いせ百首に

わか袖をしくるゝ空にめなれてや哀もかけす秋のゆくらん

大納言實國十首歌人々によませられしに九月暮のころ

けふのみと思はぬ秋の風にたにたへなるものか秋のゆふ暮

冬

二品法親王人々に五十首歌よませさせたまひしに

永き夜のさゆるねさめに袖ぬれて床さへこほる冬はきに鳬

冬來ぬとしるしはかりをみせ顔にこほれはとくる山河の水

正治二年院百首に

わけすきし露をは霜に置かへていくたのをのに冬はきに鳬

つちみかとの内大臣の家にて歌合侍しにしくれ

秋はくれ冬の日數は淺茅生の露ほす袖に時雨ふる也

後京極殿にて十首うた合侍しに田家時雨

夢さむる閨よりやかて時雨る也かりたの面のいなくきの音

きたの〻歌合に山家時雨

雲晴て後もしくるゝ柴の戸や山風はらふ松のしたつゆ

正治二年百首歌たてまつりしに

たれすみて宿のこすゑとなかむ覽時雨にくもる遠の山もと

千五百番歌合うた

時雨こそ音も雫もよそならめ月さへもらぬあしのやへふき

宰相入道教長人々に東西のしくれといふことをよませ侍しに

なか空の月をよきてや時雨るらん出入山に雲そかゝれる

三條宮にてしくれねふりをおとろかすといふことを人々よみ侍しに

うたゝねは夢やうつゝに通ふらんさめても同し時雨をそ聞

二品法親王五十首に

散積るこのはのうへは時雨する音さへ庭のものとこそきけ

落葉のこゝろを

ちりしをとも哀と聞しならのはを又うらかへす風わたる也

後白河院御くまのまうてのるすの間法性寺殿にて人々歌合せられしに關路落葉と云ことを

をとは山紅葉散かふ梢よりあらしをこさぬせきもりもかな

故郷落葉といふことをよめる

音にこそ時雨もきゝし古里のこのはもるまてあれにける哉

正治二年百首歌たてまつりしに
色々に散しもみぢもをとたえて月影さむきこがらしのそら
つちみかどの内大臣家にて歌合侍しに月かむさうを
てらすといふことを
置霜にしほれなはてぞ眞葛原秋のうらみをつきに殘して
冬歌あまたよみ侍し中に
片岡の萱かしたねにをとつれてよはりし虫の聲もいつらは
荻のをとは風にのみやは聞えける枯葉のうへに霰ふるなり
建仁元年和歌所哥合にあらし寒草をふくといふことを
荻はらやよはりし虫の聲もなし露も嵐の音はかりして
後京極殿右大將ときこえ給ひしころ十首歌合侍しに
野徑寒草をよめる
をく霜に野への草葉は結はれて暮なはなにのかりねをかせん
文治六年女御入内屛風に海邊ちとり書たるところ
やちよとそ千鳥鳴なるしほの山さしての磯のあとを尋ねて
正治二年百首歌たてまつりしに
沖津風よはにや寒きとも千鳥くもにつきてそ浦つたふなる
千五百番哥合うた
なにゆへのうらみをすまの友千鳥涙にしほるゝ曉のこゑ
後京極殿左大將ときこえ給ひし時の御うた合に海邊
ちとり
すまの關千鳥の聲はうつゝにてとたえかちなる夢の通ひち
同歌合に湖上水鳥
とをさかるしかの浦浪磯ちかく猶よせくるやあちのむら鳥
文治六年女御入内屛風にいけの水鳥をりゐて氷なと
したる所
をしのゐる池の汀のうすこほりふかき契をむすふ也鳧
千五百番哥合に
寒けしやつかはぬをしのよもすから涙にかたしく霜の毛衣
和歌所哥合に水鳥
さゆるよは蘆のはかくれ浮ねして旭にいつるあちのむら鳥
えいくのうた合に寒夜冬月
冬のよはの中の清水こほれともわすれすやとる月のかけ哉
西行上人いせ百首に
水の音も氷れはたゆる山里を人めはかりとおもひけるかな
冬歌あたまよみ侍し中に
よる浪のかへりもあへす風さえて蘆のは末にたるひしに鳧
後京極殿左大將ときこえ給ひしとき歌合侍しにわた
りのこほり
都おもふ心そいとゝすみた河こほりをわくる袖はさえつゝ
左大臣の御とき池の水なかは氷るといへることを
旭さす池のこしまのこ松はらかけよりにしは猶氷けり
百首哥合にみそれ
嵐ふく木葉こきませみそれふりさひしかりける山のおく哉
西行上人いせの百首中に
霰ふるは山のすその柴の庵に夢みしとてはすまさりし身を
正治二年百首歌たてまつりしに
音さやく風のまに／＼霰ふり夢路たえぬとなれるころかな
深山へは雲けのけしきたゝならて積らぬさきにとふ人そなき
三吉野の冬のすまひそ哀なる日かすは雪のふるにまかせて
雪埋む山ちのそこの夕けふりしはおり／＼ふる誰かすまひそ
それをたに埋みなはてそわくらはにとはれしあとも雪の下道

千五百番歌合に
春の花秋の月かとなかむれは雪やはつもる庭のこすゑも
後法性寺殿法性寺新御所にて御會侍しにゆくみちの
あしたのゆき
ふる雪に我よりさきの跡なくは迷ひやせましけさの山ちを
八幡歌合にゆきを
雪ふかみ古さと寒きみよしのゝおくにはたれか冬こもる覧
後京極殿にて哥合侍りしにはのゆきを
人をさへとはて社みれ庭の雪を我ふみそめむ跡のおしさに
さかの正信上人律師と申しゝとき歌こはれしに雪を
野も山も雪降ぬれはあとたえてふなてにのこる冬の通路
二品法親王五十首に
淋しさは冬そみせけるをしほ山小松かはらの雪のあけほの
春秋の花も紅葉もおりすきてはてはさなから雪のむもれ木
ふる雪に麓のみちはあとたえてたれおく山に冬こもるらん
民部卿經房哥合せられしに深雪
今朝みれは梢も庭もひとつにて雪のそこなるみよしのゝ里
後京極殿左大將ときこえ給ひし御とき四季題にて歌
合侍しにふかくさの里を冬によせて
なくさめし花の色々雪つみてのとたにみえすふか草の里
ちかもり入道哥合し侍しに雪
穴師河をとまさる也まきもくの山のしら雪したやとくらん
八幡哥合に月前雪
空はなを雪けのなこりおほろにて庭にさやけき月のかけ哉
文治六年女御入内屛風に五節のまいりかきたるとこ
ろ
久堅の天つをとめこひきつれて雲のかよひち尋きにけり
後京極殿百首歌合に野行幸をよめる
みゆきせし野へのふる道ふみ分て跡たえせぬはせり河の水
正治百首に
大原やこゝろ〳〵にやく炭のけふりはひとつ空のうき雲
後法性寺入道殿右大臣ときこえさせ給しときの後百
首にとをくちかきすみかま
炭竈にめなれてすくる山賤もほかの煙はあはれとやみる
後京極殿百首うた合にさむきまつ
いかなれは冬にしられぬ色なからまつしも風の淋しかる覧
同百首うた合に佛名
冬ふかき有明の月のあけかたになのりて出る雲のうへ人
後法性寺入道殿右大臣御とき後百首につこもりのよ
の佛名
あひ難きみよの佛のみなをさへ年とゝもにもつくすよは哉
正治二年百首に
春の日を秋のよとこそなかめしかさてもほとなき年の暮哉
何事を待としもなき深山へは今年もかくてすきのむらたち
後京極殿十首歌合せられしに山家のとしのくれとい
へることを
祝ふへき明日の春をもしらなくに松こそたてれみ山への里

賀

後法性寺殿宇治一切經會にいらせたまひて侍しに哥
かうせられしによめる
千世ふへき君か光を待そへてけしきことなる朝日山かな
とはのきたとのつくりあらためられて御わたりのゝ

ち御會侍しにいけのうへのまつの風といふことを
よろつ代もすむへき君かかけみよと池のみくさを拂ふ松風
和歌所にて十首歌合侍しに庭のまつ
聲たつるやまへは遠き庭までもよろつ代しるき松風そふく
二品法親王五十首中にいはひ
出る日に光さしそふ君か代はちよへむことも曇りなきかな
後京極殿にてまついろをあらためすといふことをよま
せさせ侍しに
松はなをときはなからやちきる覽色ますふちの千世の行末
五條三位入道人々に十首歌よませられしに祝
ちよふへき齡も今はたけくまの松もうらやめ君かちとせは
日吉のなり仲九十賀し侍しによみてつかはしゝ
老の波猶しつかなれ君かよをこゝのそちまてみつのはま風
正治二年百首に祝
今はわれ惜からぬ身そ惜まるゝ君かやちよにあはむと思へは
萬世もつきせさるへきわか君をはるかに賴む身社おいぬれ
昔よりさこそはいはふ萬世も君そまことのためしなるへき
五位正下ひさしくをさへられてあまたのとしををく
りてのちゆるされて侍しに清輔朝臣のもとより
くらゐ山むすほゝれつる谷水はこの春風にとけにけらしな
かへし
くらゐ山春待えたるたにみつのとくる心はくみてしらなむ
同よろこひにおほはらのゆきの入道寂然のもとより
春霞たちのほるなる位山よをへたてゝもうれしとそきく
かへし
位山のほるにつけて人しれす誰もいてけるいへをしそ思ふ

民部卿經房正二位せられたりしにつかはしゝ
峯近きくらゐのやまにさく花の色をかさぬときくそ嬉しき
かへし
たれもおる位の山の花なれととふにそ色はふかくなりぬる
よりまさの卿五位の正下して侍しに
わかの浦に立登るなる浪の音はこさるゝ身にも嬉しとそきく
かへし
いかにして立登る覽こゆへしと思ひもよらぬわかのうら浪
かゝゐして侍しよろこひによりすけの卿もとより
色まさる君かころもの嬉しさはよその袖にも包むとをしれ
かへし
つゝむなるよその袖にて思ひやれみに餘りぬる色の深さは
四位して侍しに大貳重家卿もとより
よそにたに嬉しときけはむらさきの衣の袖をせはしとや思ふ
かへし
身にあまる若紫の色なれはさこそはよその人もきくらめ
よりまさの卿のもとより
さか中に暫し休みしくらゐ山のほりたちぬときくそ嬉しき
かへし
やすむまにすきにし君をくらゐ山峯のしるへと今は賴まむ
清輔朝臣のもとより
紫のはつしほそめのにゐ衣ほとなく色のあかれとそおもふ
かへし
いつしかと色をましつる言のはにいとゝ身にしむ紫の袖
のりよしの卿兵衛佐になりて侍しにちゝのなりのり
の卿のもとへ申をくりし

いへの風ふく柏木のこのもとはよそにきくさへ凉しかり曉
かへし
我もみしその柏木のもとなれはこのもとまてもたえぬ也覧
四位從上して侍しによりすけの卿のもとより
紫の衣のいろをますはひのさしもうれしとしらすや有らん
かへし
嬉しさの色もましけるはひになをさしそふ物は君か言の葉
けむせうかもとより
色まさるわか紫のころもてはうらめつらしく身にやしむ覽
かへし
いろ増るわかむらさきの袖よりも猶めつらしき筆のあと哉
二條院御ときのまゝにたい〳〵しつみて年久しくつもりてのち殿上ゆるされて侍しにのちの德大寺の左大臣大納言と申しゝとき申をくられたりし
いかはかり嬉しかるらんとたえして又渡りぬる雲のかけ橋
返し
とたえして又渡りぬるかけ橋はけふゝみゝてそいとゝ嬉しき
院のくらゐの御時殿上ゆるされて侍しにおなし左大臣のもとより
ふみなれし雲のかけはし春くれは又花さくときくそ嬉しき
かへし
更にまた君かことはの花さけはとたえも嬉しくものかけ橋
としをかさねてかゝいして侍しに人々述懷哥よみ侍しに
こそといひ今年と登るくらゐ山峯は猶こそゆかしかりけれ
中納言親宗おさなきこのありきそめにくるまひきいれられて侍しにいしをつゝみてそのつゝみかみにかきてはへりし
三千歳の數にとれとて包む石の苔むすまては君そみるへき
かへし
苔むさんみちよの數に包む石のいかなる宿の庭にかある覽
正治二年百首にとり
かゝるよにあふそ嬉しきいかるかやとみの小河の跡し絶ねは
和歌所のよりうとにまいりて吉書そうすとて
嬉しくそわかの浦風のとかにてむれゐるたつの數にいりぬる
よをのかれてのちなをかへりまいるへきよしおほせられしかはまいりてまた吉書に
嬉しさを猶たちかへりつゝみてそ苔の袖にも色はそへける
後白河院御供花のついてに人はうたよみ侍しに寄仙家祝
幾千度ぬれてほすらん君かよを山路のきくにをけるしら露

旅

後法性寺殿右大臣ときこえ給ひしとき百首うた人々によませさせたまひしに旅の心を
夕ま暮みやこのかたを眺むれはこえこし山を出る月かけ
西行上人いせ百首とて人々にすゝめ侍し中にたひ
柞原したはをりしき山科のいはたのをのにわひつゝそぬる
かへし
藻鹽草しきも習はぬ寢覺して蜑ならぬ身もしほたれよとや
二品法親王五十首にたひ
蜑のすむ宿をはからし沖津浪立をときけはめをさましけり
正治二年院百首歌に
朝な〳〵いくへこえきてなれぬらん重なるやまの峯の松風

古里はいくへの雲にあとゝちてかさなる山のみねの月かけ
としいまたいはけなかりしにかむつけのかみにてくたるとてあふみのみつうみを舟にのりてこき出るほとなにとなく心ほそくおほえてみやこのかたのみかへりみらるゝになみのたつを見て
ゆくかたは都へとしも白浪のかへるてふなはむつましき哉
こまつといふところをまかりてみれはまことにちゐさきまつはらおもしろく見わたされたるに月いとあかきをなかめいたして
風わたる梢のをとは淋しくてこまつかおきにやとる月影
つきの日もくれぬれはつるかといふところにとまりしにうかれめともあつまりて哥うたひなとせしに心ほそさもすこしなくさみて
忘られぬ都もけふそ忘れぬる君ゆへとてはこしちならねと
そのよも明ぬれはすい一のわたりとてしほうみのなみもいとけはしけなるふねにのりてこき出るもわたりとこそいへといとはるかに見わたされたるほとおそろしくさへおもひつゝけられていそにつきてあみひくをみて
をくあみの沖をはるかにめくれとも都にのみもひく心かな
くにゝてかみ〳〵のたむけなとすきぬれはせうようしありくとてしらやまをみて
音にきくこしの白山しらねともみるにもしるく雪つもり覧
みやこへかへるとてふなきのやまにもみちさかりにこかれわたりしうみのおもてにもちりたるを見て
紅葉ちるふなきの山はよそなれと沖を遥にこかれてそゆく
ちくふしまにけふりのたつをみて
よを海とおこなふほとやいまならん煙そみゆる沖津しま山
なかつきのころ天王寺にまいれりしに又人々まいりあひたりしかすみよしにまうつるよしきゝていひつかはしゝ
思ふとちかけならふなる住の江にさそふ水たになとなかる覧
かへしわかみつ
誰とてもさそはぬものを住吉はひとをもわかす待とこそきけ
ひと〳〵にいさなはれてかはしりのかたへあそひにまかれりしにうかれめなとあまたきあつまりたりし中にきひめかむすめとかすくれてめとゝまりしかはかへるみちよりたよりにつけていひやりし
淺からす心をかけし浪路よりぬれにし袖のかはくまそなき
そのゝち又たよりにつけてかれよりをくりたりしかへし
淺からぬ心にはあらし大かたの浪路に袖はぬれもしにけむ
關白殿にて哥會侍しにきよみかたをたひのこゝろによせて
清見かた磯のせきやに音すみて月になれたる浪まくらかな
たひのうたあまたよみし中に
ふりすてゝ都はいてぬ鈴鹿河やそせのなみに袖はぬれつゝ
はる〳〵といくのゝ道の末遠みいり日さすまは駒はなつみぬ
正治二年百首に
松浦潟こはよにしらぬうきねかな袖も枕もなみはかけつゝ
わかれのこゝろをひと〳〵よみしに
はる〳〵と行ゑもしらぬ別路はとゝまる人もまよふ也けり

あつまへゆく人に
東路の野はらしのはら分ゆかはこひむ涙をおもひおこせよ
光行あつまへくたり侍しによみてつかはしゝ
歸りこむ日數の程をかそへつゝ人をも身をもいはふけふ哉
すみよしの歌合に旅宿時雨
住よしの松かしたねのたひ枕時雨も風にきゝまかへつゝ
海邊旅宿
千鳥なくよさの浦風こゝろせよ都こひしきたひのねさめに

哀傷

とはの院かくれさせ給ひて世中みなりやうあむなりしにつきのとしの春とはとのゝ花さかりなりしころ花のしたにたゝすみありきしを女房のなかより花一えたおりてとこはれたりしかは花の枝にむすひつけてつかはしゝ
宿もやと花も昔のはなゝれとかさす袂の色そかなしき
美福門院かくれさせ給ひて御しやりはかうやの御山へわたしたてまつりし御ともにてくさつといふところより舟にのりてこき出るあけほのゝ空のけしきなみのをとまてもおりしりかほにかなしくきこえ侍しかは
朝ほらけ漕行あとにきゆるあはの哀まヿにうきよなりけり
はるゝゝと又まいる人もなきこゝろほそさもたくひなきに御山へいらせ給ふ日雪いたう降しかは
誰か又けふのみゆきを送りをかむ我さへかくて思ひ消なは
四十九日の御はてに御かたゝゝそうなともみなちりちりにかへらせ給ふへき心ほそさもかきりなきにおりしも雪のふりしかは
はかなさは花も紅葉もためしあれと雪ちる日社悲しかりけれ
常はあひかたく侍し女のみまかりぬときゝてつねにつかはれしわらはのもとへつかはしゝ
君たにも有ていとはゝわひつゝも身のうきのみや歎ならまし
この人かきりなりけるおりにわかなからんあとにとふ人あらはこれをみせよとてあつけたりけるをはゝにもとりいたしてみせけれはたくひなく哀なるこゝろまとひいまさらにさしそふ心地してみけるにくやしくや成にけむはゝのかへりことそへてむかしのてにて
人しれす思ひしヿを契りをかて浮名をとめむあとの悲しさ
さてこれははゝの
通ひける心をしらすいとはせて後は悔しきねをさへそなく
みとせはかりすみなれにし人のみまかりにしをとふらひて侍し人のかへりヿにそへてこれより
行衛なき別れの道のかなしさはとまるもやみにまよふ成覧
かへし又たちかへりて
とまるらむ心のやみの悲しさはきく人さへも迷ひぬるかな
後徳大寺の入道左大臣少將公綱にをくれけるよしききて申つかはしゝ
思ふ人なきかおほくはなりぬともこの別こそ悲しかるらめ
かへし
身のうさも此ヿに社まさりぬれあらましかはと思ふのみかは
同ころ八月十五夜くもりたりしつきのあしたかの大納言のもとより

もの思へは心の闇やくらしけむなにもにさりしよはの月哉
かへし
なかむへき人の心を月影も空にしりてやかきくらしけむ
大納言のふみのおくにやとからにやとかゝれたりし
をまたかへりことにもやとからはまことにさもや侍けむ
とかきてわか身にも思ふこと侍しころにてかへしのお
くにかきそへし
たれもさそやとからとみし月なれと心くもらぬ人にとは南
又たちかへりてかれより
たれかいはむ人の心も晴くもりさためなきよの月と思へは
かくてまたなをそのふみのおくにかやうにきこえな
れぬることもこのよひとつのことには侍らしなといとね
むころにかきつゝけられて又かきそへられたりし
をのつから世を背く身と成ぬ共うきを厭はぬ友とならなむ
又かへし
此よをそうしとは厭ふ身にしあれは背くをすゝむ友としら南
そのあきのくれにまたかれよりつかはしたりし
先たちて散しこのはのかたみとも思ふ秋さへまた別れぬる
かへし
ときは木の梢おほかる宿なれはなにかは歎く秋のわかれを
うは(祖母)にて侍し人みまかりて法性寺といふ所にを
くりをきて月あかゝりし夜
すみのほる月も煙に曇りけりこやなきかけのしるし成らん
あけほのにかへるとて
のほりぬるよはの煙やみちぬらん霞そふかき春の明ほの
はゝのかのふくきられし日やかて我身もとりわきこ
ころさしふかくておなしくふかきいろをそむるに又
ここにて侍猷圓も おなしすちにひゐこ(彦)まてそめ侍
てそのほか又そむるたくひもなかりしあはれさも思
ひつゝけられて
悲しさは又たくひなき鶴のこのたゝひとすちにそむる毛衣
としころはひとへにかのかけをのみおやさまにたの
みて世中のこともわかみにはしらてとしのつもりにけ
るをも思ひわかさりけるにいまさら思ひしらるゝこ
とおほくて
なきあとはたゝみとりこに變らねと頼みて年の老にける哉
みなみおもてのむめのはなさかりにさきたるを見る
につけてもこそのはるよはひのほともしらすみてう
へさせもてけうしなとせられしおもかけもいまのこ
こちして花のえたにむすひつけし
墨染の袖こそあらめむめの花かはらぬ色をみるさへそうき
三位入道これをみ給ひて
春雨にしほるゝ花もすみそめにかはれる袖を哀とやみる
をさなきものとものはゝみまかりにし哀さはこれに
はしめぬうきよのならひといひなからわかくいはけ
なかりしよりあさからぬさまにのみ思ひならはして
世中のつゝましさなともあまたつもりぬるゆくすゑ
はるかならむことをこそもろともにいひちきるほとに
めもあやにむなしくみなしつるかなしさはうつゝの
こゝちもせすなからかきりある世のならひなりけれ
はくわむをんしといふかたの山にをくりをきて五十
日はやかてその山のふもとなるしはのいほりにれい

じせむほう（例時懺法）なとをもおなしくはきこえかはすほとにと思てあかしくらすになかつきの廿日ころなれはやゝ冬のけしきにもなるあらしのをともいとものかなしくて

よもすから夢たにみせぬ風の音は途りし山のあらし成けり

時雨のをとはしたなくきこゆるにつけてももりこんたもとにもまさりてのみしほりかねつゝかの山のうへおもひやられて

露をたにあてしと思ひし君をゝきてきも悲しきやもめくり哉

いろをそむるにつけてわれこそさきたちてきすへきいろをさためなきよのならひといひなからおやこのよはひなる人にをくらされてかくそめつることもなをつきせぬこゝちして

わかために君そゝめましふち衣きるにつけても夢かとそ思

さるほとに十月中の十日ころにもなりぬこのよにてはうちつゝきさむ（座）なともしけくみとりこは しりあそひなとしてなにのよのことはりわきまふへくもあらさりしにあしたことにみたの名號をとなへ經なとをよみつゝ月ことの十五日には佛の御まへにて人をすゝめて一晝夜の念佛をとなへなといとなみしことをこの十五日にもそのまゝに念佛をまうさするにそのよのあかつきかたにつゆはかりまとろみたるゆめに天人のすかたなる人うしろはかりみえてそらへのほりぬるをわかこゝろにこの人と思ほとにうたをすむする聲にてたうしたうりてん上となかくきこゆるにきとおとろきたれはこのうつゝに念佛となふるそうのこゑにきゝまかへつるをいとめつらかにおほえて僧をよひてかの普賢品にはたうしやうたうりてむ（當生忉利天）上とこそ侍るをこれ はたうしときこえ侍つるはいかに心ゆへきにかとゝひ侍しかはたうしとはへらんはいたるといふもしにこそとこたふるにさらになみたこほれまさりてめてたくあはれにおほえて

頼み有てさたかにみつる夢をなを深くそいのる思ふ餘りに

後法性守入道殿右大臣と申し御時御とふらひに給せしに

悲しさをたゝよそなからとふよりはわれ幻にならまし物を

御かへし　しかしこまりなから

悲しさはたゝとふたにも畏きをまほろしまても思ひける哉

かきつたふるにつけてことさまいかにそやうちまかせぬさまなれと又あはれもさしそふこゝちしてこのむかしのひといはけなかりけるより民部卿しけのり思こゝろありけれとかやうにさたまりにしかはかひなきことにてやみにけるをつねになれあそふ人なりしかはのちにはむかしさる心のありしなといひてわらひたはふれしをこのゝちとふらひにつかはしたりし

朝夕になれしをこふるきみよりもよその別はなをそ悲しき

かへし

よそにても哀かくへき君なれはあやなく今はかたみとそ思ふ

僧正範玄のもとより五十日すきて

限りあれはとふらふ鐘も音たえて昔のあとやいとゝ悲しき

かへし

今はたゝよな〳〵獨ね覺してさもあらぬ鐘の音のみそきく

山の入道かのくわん音寺へとふらひにおはして五十日かほとはおはせしかかへりてのちいひつかはしたりし

あさとにをきゐしくさの庵よりも猶ふるさとは袖や露けき

かへし

草の庵にきえもはてなて露のみのなに古里にをきあかす覽

つきのとしのはるみなみおもての梅のはなあやにくにつねよりもにほひをにさきにけるも日ころはたゝいてゝみるともなかりつるにたかのり(隆範)わらはにて七さいに侍しかうつくしくさきたるえたともをおりてゆくをなにわさにかとみるほとにはしりきてこのはなはこそも母のほとけにまいらせんおりてことおほせられしかはおりて侍ほとけにまいらせはやといふをきくにそいまひときはいろをそふる心ちして

はかなくて散にし梅のこのもとに昔をのこす色そかなしき

つきのとしのはてに佛事せしにさたいへ(定家)のあそむのもとより

さてもなをたゝけふ迄を名殘にて鐘の音さへつきや果ぬる

かへし

けふまてや限と思ふかねのをとに猶盡せぬは涙なりけり

正日にはかへまいりて日もゆふくれになりにしにこそをくりをきしをもいまのこゝちして

またしらぬ山路をふみし頃よりも猶まとはるゝけふの暮哉

はゝに侍し人こゝろさしはかたみにをろかならすなから中將なりいへ(成家)少將さたいへ(定家)なとそのいもうとたちもあまたうちつつきいてきてのちはわかみひとつちゝかはりたるみにていと心ほそなからそれにつけてもいよ〳〵こゝろさしは淺からす思ひかはしてすき侍しに心よりほかなるをによりてとしのみとせまてあひむかふをもなかりしをたま〳〵なかよくなりてひころ月ころのうらみもわすれてあはれにかなしくのみおもふほとにそのとしのきさらき(建久四)のころはかなくみなしつるをかゝりけるものゆへみとせまていふせくてすきにけるかなしさもいよよよかきりなくまたあり〳〵てかくいまはのときにもなかよくなりてのちのわさなとほいのまゝにみやつかひつるおやこのちきりのふかさもひとかたならすおほえて法性寺といふところの山のおくにをさむとてなく〳〵おほえける

みとせまてこひつゝみつる面影をあかてや苔の下にくち南

をの〳〵いみにこもりあへるなかに少將さたいへこのはゝのおほえなりけるをかの少將ことはりもすきて思かなしみてわかみひとつのことになむ侍けるとていとそなけきしつみてひとつうちなれとふみにかきつゝけていひつかはしたるをみるにつけてもいととかなしさまさりてかへりことにかきそへ侍し

數ならぬ身にたに餘る悲しさは君をとふへき言のはもなし

少將これをみるにいとゝせきやるかたなきをなとかきて

墨染におなし袂をやつしても我をやとへと思ひをきけん

まことにたれよりもさこそはおもひくつをれ給ふらめとかきて又これより

やつれぬる袖にもなをや增る覽思ひをきけむ色のふかさは
　かくてはるもくれぬれはなこりさへいとゝつきはてぬるこゝちしてうつきの一日又かの少將のもとへ
ことしこそおしまて春をすくしつれ增る別に心くたけて
　二日は四十九日なりけれはかへし
すきはつる名殘社けに悲しけれきのふの眺め明日の程なさ
　かものしけやすみまかりてのち人々かのふるさとにてともにあひてともをこふといふことをよみ侍しに
まとゐして契を結ふみたらしになき影のみそうつらさり鳧
　民部大輔のりまさの朝臣のむすめにとしころすみ侍しかほいならぬさまになりてのちとし月つもりてかの朝臣もみまかりていと心ほそききさまにて侍よしきてとふらひにまかりて
すみなれし昔の跡をきてみれは面影のみそあるしなりける

物名

　さくら　ほとゝきす　月　雪を戀のこゝろによめる
君かうさくらくなるほとゝきすきて心つきぬと行て恨みむ
　おとこ　をんな　無常のこゝろに
入相の鐘のをとこそ悲しけれけふをむなしく暮ぬと思へはしとね
情なく絕にし中をはかなくも忘れはてしとねをのみそなくものこし
つらしとて我さへつらくあたるまに人の恨も殘しつるかなしたひも
味氣なや我身のみこそ苦しけれしたひもはてぬ人を慕ひてうつをはしら
夜もすからこれはなにそと唐衣うつをはしらてめを覺しけるからかみ
味氣なやこひせしとのみそきして我心からかみを恨むるしのふくさ
慰めし人めさへこそかれにけれよはの嵐のふくさかりしもくれのをも
色々の花さく秋の夕まくれのをもろともにみるかひもかなしかのうら
妻こふる秋にしなれは小男鹿のうら悲しくもきこゆなる哉からすかひ
ことはりと思へは人もつらからすかひなき物はうきみ也鳧へにさら
たひ〱にあふは嬉しきけふさへにさらにも迷ふわか心哉すもゝの花
よをすつと何かいふけふあすもゝのはなに故思ふ我みそ
　殷富門院大輔人々に百わかうの花の名を法文によそへてよませ侍しに
有とても有にも非すなしとてもなきにも有ぬ世に社有けれはゝこ
悟らはやみ法にとける言のはゝこのよをうしと敎へけり共きく
このよにてきくにつけても思ひやる法のにはなる花の匂をしふれ
のりにとく言のはことにをしふれと猶はかなきは心なりけりくたに
消はてむ我身の末をいかにせむきくたに悲しあなうよの中

折句歌

まつかさき
待出る月の光のかひ有てさやけきそらにきみをそなかめん
こむあをに
こひ〳〵てむつをつくす明ほのゝ惜き名殘にゝる物そなき
こしかたな
こりすまに墓ひきつらんから衣たちはなれては泪こほれぬ

沓冠

後法性寺殿右大臣ときこえ給ひし御とき御會のつい
てにさよふけぬとくたゝむといふ事をくつかふりに
をきてこひの心によめと仰られしかは
さめ〳〵とよる書しけくふる泪けふの暮はたぬれやまさ覽
同御時まいれと仰られし日をわすれてや有らむとて
たまはせ侍し　いひしひを　たかふなよ
いかにまた獨り明すか忍ふてふ人はつらしな思ひこりねよ
御かへし　あすの日を　たかへめや
飽て只すくるわかなかのへて思へ書社あらめ思ひこりめや
たむこのこかやとよりにしにかはをへたてゝすむよ
しきゝてちかきわたりよりとてひとをやりてたつね
しをいつくよりにかとおほめくよしきゝてやりける
うた二首ちかしとはこれよりそ
近きとこかくこそ有けれしりもせよ隣に隣はしわたるまそ
まめやかに　たのまむよ
横のいためならふ人の宿は今かくれさらなむ西のわたりよ
かへしはふたつをひとつにとりあはせたるなるへし
たのめかし　まちかきに
賴め今のへの中みちめくりしかかはかり近きしるし計りに
さて又中將さたいへ侍從ときこえしころひころもよ
そのしる人にていひかはされけりときゝてなをまた
つかはしゝ　しゝうには　をとらしを
しる人をしるとはきけとうす櫻にほひもあらし花の匂ひを
かへし　しゝうには　にしものを
しかすかにしらぬ人なし浮雲もにたる櫻の花ときゝしを

廻文哥

白浪の高きをとすらなかはまはかならす遠き方のみならし
茂るはもかさしていはまやみくたく深山はいてし坂も遙けし
長きよのゝも遙にてそまくらくま袖にかるは物のよきかな
はらあける舟なる棚はいをとると老はなたるなねふるけあらは
品玉もをかな〔し脱歟〕まひもまて暫てまもひまなしかをもまたなし

せむとう哥

昔より花をは誰も惜め共いと斯計り歎く例は又もあらしな
小夜更て今も鳴南時鳥我より外に又まとろまて待人もなし
心あらは光をそへよ秋の月今宵社名に流たる夜半と聞つれ
衣手はむへもさえ鳧朝とけく今朝みれは雪降にける　野原篠原
重なれは行衛も知す成ぬ覽契し事は我も忘れす君も忘れし
世中は厭ひても猶厭はゝやと思ふ心は何に向ひて過る　成覽
五條三位入道むかしはまをのおやにもまさりてこゝ
ろさしあさからすたのみきこえしをやう〳〵としつ
もりてのちはゝなともなくなり侍りてかの入道もや
そちにあまりわか身もまたむそちにあまりてのち世
をのかれて侍しにいとあはれにむかしいまのをなと
ねむころにかきつゝけられてせめての心さしのあま

りに哥に一句をそふるよしなと侍りて
綠見と思ひし人も老ぬとて背く世をみる悲しさは夢か現か
かへし
有てなき夢も現も誰にかく問れまし君かみるよに背かさりせは
このかむるいつきせすをさへかたきあまりにこれよりかへしのおくにかきそへ侍りし
諸共にとはまし人もなき跡に君獨哀かくるも夢かとそ思ふ
かへし
諸共にあらまし人のなき跡の悲しさは夢ち計りにあふをまちつゝ

藤原隆信朝臣集下

戀一

西行上人いせ百首とて人々をすゝめ侍しに戀のうた
あさりする礒まの蜑の袂社いりそむるよりかくはぬるなれ
正治二年院百首に戀
色深く思ひたつたの山路にもかくや時雨のひまなかるへき
和歌所哥合にはしめの戀心を
しるへとて風のたよりを賴めとも猶あともなき浪のうへ哉
はしめの戀のこゝろを
つらからん人の心もしらぬよりあやしや袖の先しほるらん
戀の道いつなれ顏にしるへして心はさきにまよひそむらん
後法性寺殿(兼實)右大臣ときこえ給しころ人々百首歌よませさせ給しにはしめの戀のこゝろを
獨りねの床の山なるいさや河いさや戀路もけふよりそしる
後京極との(良經)左大將ときこえ給ひしころ歌合侍しにみしまえを戀のこゝろによせて
渡るせをいかに尋ねんみしま江のみしより迷ふ夢のうき橋
百首うた合中にみるこひ
花の色にうつる心は山さくら霞のまよりおもひそめてき
五條三位入道(俊成)十首歌人々にすゝめられしにこひ
戀路にはしるへとたのむ我心まとひにけりなゆく方もなし
後德大寺左大臣(實定)大納言時の百首のうたに文をみてまさる戀
我といへはいなみのうらの忘貝ふみゝていとゝぬるゝ袖哉
後法性寺殿右大臣御時の後百首になれてあはさるこひ
まことには逢と涙のよりきつゝなるゝにつけて袖濡せとや
吉水前大僧正家(慈圓)百首にあはぬこひ
なをさりに賴めてたにも慰めよあはぬは常の習なれとも
西行上人いせ百首に
あふさかもまたこえぬより思ふかな忍ふの山のおくの通路
法住寺殿にて哥合侍しに時にのそみてやくそくをたかふるこひといふことを
賴めつゝ逢ぬためしはよにもあれとさやは契しけふの暮迄
每夜に契戀といへる心を
契をくその言の葉のまゝならは幾夜かゝれぬ中とならまし
後京極殿百首哥合にまつ戀
こぬ人をなにゝかこたむ山のはの月は待いてゝさよ更に鬼
同歌合によるの戀
たのめつゝふけ行よはを歎きても鳥の音をやは待明しつる
正治二年院百首に

待程はいける心もなきものをいつくにのこるうらみ成らん

千五百番歌合に

今はたゝ思ひたえたるよな〳〵の契りもしらぬ松のかせ哉

後法性寺殿百首にあふこひ

夢ちのみ逢とはみえし中なれはこれもうつつの心地社せね

よそにてもあさゆふ馴し面影のこよひはさらに珍らしき哉

君やそれ有し辛さの誰なれは恨みけるさへけふはくやしき

後京極殿百首歌合にあふ戀

夜を重ねかへす衣の恨みてもうつゝまてとは思はさりしを

吉水大僧正家百首中に逢戀

慰まんためと思ひしあふことはみをいたつらになれと成けり

同百首にのちのあした

なにとこは明ぬと告る鐘のをとそ心のやみはまた夜深きに

あふてのちまさる戀といふことを人々よみ侍しに

逢みても又きぬ〳〵に成ぬれは思ひのみこそ猶かさねけれ

後法性寺殿右大臣御とき後百首にのちのあしたのこころを

あはさりし思ひもおなし君ゆへをけさやは戀の始なるへき

とゝめつる我心にやちかふらん歸るをゝくるけさの面かけ

床の上に置つる今朝の露よりも歸る我身そまつきえぬへき

朝かすみ立別れゆく雁金のなきてかへるといもしるらめや

後百首中にかへりてふみなき戀

道しはの露は君こそわけつらめふみゝぬ袖のなとしほる覽

はしめのこひ

いつのまの露に袂のしほる覽戀路はけふそかとてと思ふに

戀のこゝろを

哀ともたれか心をなくさめむ身よりほかにはしる人もなし

戀二

殷富門院大輔人々をすゝめて百首歌よませ侍しに戀のこゝろ

わか戀は霞のうちの梅か香の色にはいてし身にはしむとも

春風になひく柳のむすほれてをとにたてぬはくるしかり鳬

我戀はまたほにいてぬをかや原したに亂れて露そこほるゝ

狩人のいる野にたてる鹿たにも聲たてゝこそ妻はこふなれ

人心あしのまろやのむら時雨をとにはたてし袖はぬるとも

つゝみかねおつる涙や古里のしのふにあまる軒のたま水

あつまちやはるかに聞し里のなは心のおくに有けるものを

後法性寺殿右大臣の御時百首にしのふ戀

人しれす思ひそめてし紫のなたかのうらの名にたてめやは

こひしなはそれゆへ人やあやむると思ふにおしき命なり鳬

正治二年院百首に

思ひねの夢も氣色やしるきとてえそまとろまぬ人のあたりに

千五百番哥合に

袖の色はわかむらさきにあらなくに心を染る忍ふもちすり

忍ふ山うつゝにたにもまた見ぬをはかなくたのむ夢の通路

和歌所哥合にしのふ戀

あらはれてつらさしらする人もかな忍ふる中の泪かこたむ

同こゝろを

逢ぬまのつらき恨みもなき物はしのふる中の日かす也けり

修理大夫經盛歌合し侍しに戀心を

しのひても心は通へよそなから思ふに人のあた名やはたつ

吉水前大僧正家百首にしのふこひ

現にもさらはいかにそ我戀をあやむる人の夢にみえつる

後京極殿左大將ときこえ給ひしときの百首歌合に忍戀

あくかるゝ心の誰かとこにゆきてあやむ計りの夢にみゆ覽

後法性寺殿百首にあふてあはぬ戀

さりともと待ともなく悲しきはあひみて後のつらさ成けり

大輔か百首にあふてあはぬ戀

夢にたにあはてうかりし古もおもかけにたつ歎やはせし

よを重ね靡き果にし秋の田のいねとはさらに厭ふへしやは

思へともあひも思はぬかた糸のくるかとみれは猶たえに鬼

今さらにあはてのうらの忘れ貝ふみゝるともたえ果ぬとや

いまそしる後の世かけて契しはいけるをいとふ心なりけり

西行上人かいせの百首に

契置しこむよまて社かたからめ變らぬみをは厭ふへしやは

院百首に

あかぬまに別を告し鳥よりも獨かなしき鐘のをとかな

千五百番哥合に

忘れしの露の情をしのふくさなをこふるまておいにける哉

戀をのみ賤か門田のひたふるに音たゆる迄あきはてぬとや

和歌所歌合に山家あか月の戀

こよひ君みやこにたれと眺むらんなれし名殘の有明の月

むかし月をみて戀をますといふことを人々よみはへりしに

もろともに契しよはのむつことをおもひ出よとすめる月影

前播磨守隆親哥合し侍しに

かきくらす涙を袖におさふれは移りかさへもくちにける哉

かとをすきていらさる戀といへる心を

忍ひつゝかよひ馴にし黑駒のすきわつらふも人やとかめん

むまのうへの戀

いもかりと早めならひし駒の足のさもあらぬ道を何急く覽

六條入道左大臣大納言と申しゝ時の百首にうつりかをよめる

しのひつゝ重ねしよはの移り香にあまりしみける我袂かな

後京極殿百首哥合にわかるゝ戀

くれはまたと思ひし程の別れたに名殘はいける心地やはせし

同百首にたゆるこひ

しらさりき今はと言しあか月をやかてまとの言の葉そとは

まれなる戀

いかて猶かゝる絕間を過す身の一夜をたにも明しかねけん

夕　戀

あやにくに物そ悲しき待し日は曇る空さへうれしかりしを

戀二

師光入道歌合し侍しに戀心をよめる

戀しなむ後の浮世はしらねともいきてかひなき物は思はし

太宰大貳重家歌合し侍しに戀哥とてよめる

我ゆへの泪とこれをよそに見は哀なるへき袖のうへかな

白川にて人々歌合し侍しに戀

うき乍ら身をも厭はて世中にあれはそ人をよそにてもみる

親盛入道歌合し侍しに

面影はわか獨りねの床におきていつくにたれと夜を明す覽

人々たひの戀心をよみ侍しに

戀をのみすまの浦ちに衰へて浪まにわふといかてしらせむ

戀心

野も山も草木もこひやしけるらん露をこほさぬ曉そなき

後法性寺入道殿右大臣御時たひにて會戀といへる心をよませさせ給ひし

ならへつる枕も假の草なれはなにかは床のかたみなるへき

のちの百首に

君とわかかはす心はあふさかの關にやふたり立とまるらむ

後京極殿百首歌合旅戀

まとろまぬそのよな〳〵をかそふれは夢路もとをき草枕哉

とをき戀

尋ぬへき程をきくにもいとゝしく心の道にまつまよふかな

吉水大僧正家百首に恨戀の心を

うしとてもたえやはつへき限りなく思ふより社人も辛けれ

正治二年院百首に

朝ゆふの露のみふかきおもひ草色をみすへき言のはもかな

わひつゝも幾夜になりぬしきたへの枕定めぬうたゝねの床

千五百番哥合に

いくしほとそむる心を人とはゝかはる泪のいろをこたへむ

いかにせむ思ひは深しいせの海に釣する蜑のうけひかぬ身を

朝ゆふにうき面影をみなれさほさすかにさても慰みやせん

戀せしのみそきもいさや夢にたに御手洗河の忘れかたみを

明ぬとてはかなく忍ふなこりかなあふとしもなき夢の契を

とへかしな哀と迄にあらす共扨もやいけるとはかりをたに

和歌所哥合に久戀

つゝみこしことは昔にあらはれていくよ涙の袖にもるらむ

後京極殿御哥合に夏戀

夏なからあかしかねぬるねさめかな人の心のあきやきぬ覽

百首うた合にたつぬるこひ

尋ぬれはためしやはなき幻のよをへたてたる涙のうへにも

あらはるゝ戀

人しれす心のうちに染し色もちしほになれはかくれさり鳧

恨　戀

露しけき秋ののもせの眞葛原いつ迄よそのものときゝけん

ふるきこひ

年へぬる辛さに絶てなからふときかれむさへそ今は悲しき

曉　戀

あふとみるなさけもつらし曉の露のみふかき夢のかよひち

おいたるこひ

色にそむ心はおなし昔にて人のつらさに老をしるかな

寄月戀

月よなをくまこそなけれかきくらすこひの泪は雨とふれ共

寄雲戀

おのつからねやもる月もかけ消てひとり悲しきうき雲の空

寄風戀

色に出しとのはもみなかれはてゝ涙をちらす風のをとかな

寄雨戀

獨ねのとこにしもなとをとすらん靜かにそゝくあか月の雨

寄烟戀

つれなさにたへす也なむ煙をも我ゆへとやは眺めしもせむ

寄山戀

夢にたにまたふみもみぬしのふ山深き戀路をいかて尋ねん

寄海戀

岩根うつ荒磯なみの高きこそまたよそなから袖はぬるなれ

寄河戀

はるかなるほとゝそ聞し衣河かたしく袖のなにこそ有けれ

寄關戀

逢坂の關のこなたになをとめてこれよりすくる歎きせよとや

寄草戀

よと共にかはくまもなき我袖やしほひもわかぬ涙のした草

寄鳥戀

面影をほのみしまのに尋ぬれは行衛もしらぬもすの草くき

寄獸戀

いかてわれふするゐの床にみをかへて夢の程たに契むすはむ

ことによする戀

なをさりにはかなくすさむ琴の音も松には通ふ物と社きけ

あそひ(遊女)によする戀

涙の上に浮ふ契のはてよりも戀路につまむ名こそうからめ

くゝつ(傀儡)によする戀

さま〳〵にうつる心もかゝみ山影みぬ人をこふるものかは

あまによする戀

戀をのみしたの浮島うきしつみあまにもにたる袖のなみ哉

きこりによする戀

淺ましや心をしほる山人もみにおふほとのなけきをそする

あき人によするこひ

尋ねはやほのかにみわの市に出て命にかふるしるし有やと

絕久戀といへるこゝろをよめる

人しれす結ひそめてしわか草の花のさかりはすきやしぬ覽

後法性寺殿右大臣御とき百首に

よしさらは我や苦しき逢みての後にたえぬるよその人めは

戀四

二條院東宮と申しゝ時おなしよはひなる人をしのひわたりし程に人々あやしきさまにもてさはくよしをきゝていひつかはしゝ

春霞かすみの衣ほころひてしのふのみたれあらはれやせん

かへし

人こゝろ花としみすは春霞あらはれゆくもなけかさらまし

としのわかゝりしころ女のもとへいひつかはしゝ

世中の色をもかをもしらぬ身にいかにそめける心なるらん

かへし

なをさりの心の程は淺くともそめける色をいかゝかへさむ

としいたうわかゝりし人に文なとはかよはしなからなをふかくはおもひしれるさまにもきかさりしをうらむへきにもえなくていひつかはしゝ

戀にたに身をならはせる君ならは思ひしれ共いはまし物を

かへし

戀の道心にもあらすふみ初てくやしとのみそ思ひしりぬる

越前守にてくたりしに思ひのほかにめつらかなる人をみいたして

これやこの花の都をふりすてゝゆきとまりけるこしの里人

かへし

花の色に心とめしや都出てかひなきこしのすまゐ也けり

みやこへかへるとてもろともにといさなひしをたのまぬさまにいひしかは

諸共にかへる山路をさそへともかりとや人のたのまさる覽

かへし

淺からす我はたのむの雁なれとなきくにいかゝ身を任すへき

又おなしくにゝて思ひかけすかたはらのくになる人にゆきあひてこまかにかたらひゆくほとにむかしみやこにてみし人にてありしかは

いかはかり深き契を結ひてかふたゝひこゆるあふさかの關

かへし

深しともえこそしられね相坂の關のしみつの絶しちきりは

かくてのち程なく京へのほりけるに女のもとより

たち歸りまた逢坂やへたつらんいつらふかしといひし契は

かへし

思はすにゆきあふさかの關もあれは又こえ歸る道も有なん

人のむすめのいはけなきをみてにけなき心をかけつゝとし月をすきしほとに世中あちきなきをおほくて（若生）いかなるすちにか思なりにけんなをこの わかおひ

おひたゝむ盛ゆかしき若草にはかなくかけし露や消なん

身にもあはぬおもひに心をくたきてつかひ人をかたらひてつかはしける

もしほやくあまの苫屋のしたよりも煙はたかく立のほる也

かへしはなくてもとのふみをかへしてそのうたのそはにしものくはかりをかきそへられたりしを見れはふかき煙や立のほるらんと有しかは又

汨河人めつゝみをせきかねてもらすにてしれ深きこゝろは

かへし

かねてより淺き心のしるけれはむすひはそめし山河のみつ

西の五條わたりにかつらといふさとにすみ侍しをんなのつれなかりしにうつきのころいひつかはしゝ

ゆき通ふ桂の里はなのみして逢日はいつとしらすそ有ける

かへし

言のはにかけてないひそ葵草かつらの里は月のみそすむ

月あかき夜女のいへをすきけるにしのふ所にてかくともえをとつれてあしたにいひつかはし侍し

人しれす心はとめし月かけのうはの空にもすきにけるかな

かへし

西へゆく月に心はそへしかとうはの空にやあくかれにけむ

心にかけてとしひさしくつもりにし人のたま〳〵ちきるをありけるよしもひんあしきをありてゆきたりけれとえあはてかへるとてこゝろにおもひける

つらきかな三年まちつる逢坂のせきの關もりたれもらす覽

あるひとに心をかけていかてそのゆくゑをたにきかんと思てたつねし程に小侍從そのゆくゑよくしりたるときゝてまかりてとひしにさま〳〵のことともこまかにかたりてなにとなきものいひまてもなさけおほくいたき人さまなる物からおもひかけすにくいけありし人をうちみやりていきのしたにしぬといひて打わらひしけしきなとをきかせたらはいとゝいかはかり思ひまとひ給はんといひしをきゝていよ〳〵せむかたなくおほえて歸にし朝に小侍從か申つかはしゝ

しぬといふ事はよそにそ聞し身のあやなくけさは消ぬへき哉

かへし

しぬといふ共人毎に身をかへてさらはでんょの尼とたになれ

いとわりなうしてはしめてあひたりし人につきの日
は五月五日なりしにいひつかはしゝ

昔よりおなし菖蒲の長きねもけふかけてこそ露けかりけれ

かへし

年をへて濡にし袖も菖蒲草かゝるうきねはあらしとそ思ふ

世中いみしうつゝみし人のもとへつかはし侍し

今は唯よその人めをつゝみこし心も身にはそはゝ社あらめ

かへし

今よりはいとゝ思ひそたえぬへぬ〔き歌〕その心さへそはす也なは

つねはあひかたくてのみさすかにとし月もなれにし
人のあたならぬ心さしはもろともにかさなりゆくあ
はれもさま〳〵に思ひつゝけられてあふよの涙さへ
をさへかたかりしをこの人心にはねんころに思ひし
れるけしきなから又おもふ心なきにしもあらぬさま
にてまくらなる硯をひきよせて月のひかりにかきつ
けし

ぬるといひし袖を重ぬる今夜さへまたゝれゆへの涙なる覧

かへしやかてそのはしにかきそへ侍し

かつみても猶いひしらぬ思ひには重ねてしもそ袖は濡ける

いと心つよかりける人をいひおもむけて歸て後たひ
たひ文をやれと返しもせさりしかは

水茎のなかれてのよの思ひいてに唯一筆のなくさめもかな

かへしたゝこのたひはかりいまよりはゆめ〳〵とん

このよにはたゝ一筆をかたみにて今はかきりの契とをしれ

忍たる人ちきる事ありてなか月のなかのとをかころ
に山さとなるところへゆきてよもすからまちふせゝ
しにしかの聲風の音のみ身にしみて夜もあけかたに
なりにしかははしらにかきつけてかへり侍し

賴めをきしいも待かねてねたるよの秋風さむみ鹿そ鳴なる

つきの日けふなんかの山さとに侍とて

待つらん心のほとはしらねとも我もしかこそなき明しつれ

後白河院（七十七）くらゐにおはしましゝ時二條院（七十八）東宮と申しゝ御方にまいりて月あかゝりし夜れ
いせい殿のひろひさしなとたゝすみありきしにせむ
えう殿のそりはしに女ふたりたちたりしをすくるさ
まにてひきとゝめしにいまひとりはにけにしあとに
この女いとわりなうおもへりしかともとかむへき人
なかりしかはゆるさすなりにしをいとあはれにおほ
えてゆくゑをとへとたれともあらはさゝりしかは

心をは雲ゐの月にとめなから行衛もしらすあくかれよとや

かへし

ゆく衛なき月も心しかよひなは雲のよそにも哀とかみん

かやうにいふ程に夜もはしたなく明にしかはまたま
たもなと契をたのみてゆるしてのち又たつぬへきか
たなくて人しれす心をつくしてすくる程にたか松の
院の東宮の女御にてしけいしやにおはしましゝ御か
たにいせのことゝいひし人これをきゝてゆめかうつつ
かなとうちなかめてやすくし給ふなといひしかは

たれとかは夢うつゝをも定むへき君やこしとも訪人はなし

かへし　　い　せ

夢か共けふこそしらぬ〔ね歌〕契あらは思ひあはするよにもあひ南

かくてとしも十よ年に成ぬれは思ひたえたることに

てやみにしを又あるところにて物いひわたりし人のこゝろさし淺からてすみなれし程になにとなきむつかたりなとかたらひかはいつゝこまかにきけはこの人ならむかのせんえう殿にてみし人なりけるを女日ころ月ころもよくしりなからかくともあらはさゝりけるをさてのみすみなれにけるも哀にさま〳〵に覺て歸にしあしたにいひやりし

今そしるありし雲井の月影にめくりあひけるよゝの契は

かへし

さもこそは雲井のよそにとしへなめ契し月をさやは忘るゝ

またこれより

面影はさやかにそれとわかねとも契し月をわすれやはする

かへし

さやかにもみさりし月の影なれは忘れて社は年もへぬらめ

また

年ふともいかゝ忘れむ月かけのすみなれてたにあかぬ哀を

かへし

すむにたに哀のみます月影の曇るたひにはうちしくれつゝ

此かへしは思ふこゝろありけるにや。

二條院くらゐにおはしましゝ時月あかゝりしに梅つほのかたに女たちたりしをみれは日ころいかてもとおもふ人にて有けれはいとゝうれしくて

今宵よりかけを並へよもろともにくもるもみえす在明の月

かへし

くもりなき光はともになかむとも影はならへし有明の月

かやうにいひかはしていとはしたなからねはかたらひなれて歸にしつきの朝つかはしゝ

あくからす月とはなにゝ思ひけん戀のしるへと成ける物を

かへし

月かけもいかなる人をしるへして心のやみに我まよふらむ

女のもとへしぬへき心地なんするといひやりたりし返事にこひには身をもかふるものそなといひたりしかはまたをしかへして

戀しなむ身を惜むにはあらね共同しよをたに別れすもかな

かへし

戀しぬときかは哀もかけてまし情なきよになからへむとや

おとこ有ときく女に時々物いひわたりしをあやなくたえまかちなりなと恨み侍しかは

一すちに靡かぬあまの煙をはたか恨みとかいふへかるらん

かへし

人しれぬ思ひはかりは靡けともけふりは空にしられさり鬼

女のもとへまかりたりしに又おとこ有ける人にてきあひにけりいとあさましくてものゝはさまにかくされてするかたなかりし程におとこいかゝ思けむやかてたちかへりにしかははひいてゝ

狩人のいる野にたてる鹿たにものかるゝみちは有と社きけ

かへし

逃るへきかたなき野への鹿よりも我こそいたく思ひ消ぬれ

あなかちに忍わたる人を心にはおもひなからをとつるゝことたにもなくてすくるを女はまた恨るよしききてわりなきゆかりを尋てつかはしゝ

とへはえにとはねはうしと恨む也かくてや人は思ひきゆ覽

かへし

とはるゝもとふにつけても裏うへに泪のみ社せきもやられぬ

戀五

春ころ山しなわたりなとあくかれありきしに梅花さかりなる人のいへをすくとてあるしをとはせしにをの外にいひしかは申いれし

梅かゝはしるへかほなる春風のたかゆくゑ共なとや吹こぬ

かへし

しらるへき行衛ならねと梅かゝに誘はれてこはいかゝ厭はむ

かやうにいひつゝいりてたいめむなとしてまたもゆくへきかた〳〵有て歸にしつきの日又いひやりし

色深くそめし心そわすられぬみやまのさとの梅のにほひに

かへし

かへりにし心の色の淺けれはあたにそめける花とこそみれ

そのくれにやかてゆきてかたらひなれにし程にこの女又しのひわたる人あるよしきゝていひたえにしを花のさかりにさくらのちりたるをものゝふたにいれてかれより

あるしゆへとふをのはゝかれぬ共ちりぬる花の行衛尋ねよ

かへし

ありふれはのちうきものと世中を思ひしりてや花も散らむ

とて猶又をとつるゝ事もなかりしを猶女のもとよりさこそうとみはて給とも花の散はてぬ程になとてかゝり道のたよりにもおしみ給はさらむなとことはゝかりにていひたりしかはその返事にそへて

哀しる人たに辛き身にしあれは惜むと花のとまりやはせん

かへし

いさやその花の心はしらねとも思ふにつらき人はあらしを

物いひわたりし女の伏見里にかくれてすむよしきゝてまかりてたつねしを猶かくれしかは

尋ねつゝ伏見にきつるかひもなし身をうち山の詠のみして

かへし

都人たれに契をすかはらやふしみにきけるなかめ成らん

すかはらとよめるそこのふしみにはあらねと。女なれは。こまかにはしらぬにや。

さてからうしてあひにけれは夜もすから日ころ月ころのむつことなとかたらひあかして曉かへるとて

曉のならひもすきてかなしきはふしみのさとの別なりけり

女かへし

曉のならひにすきて悲しきはふしみの里をかへらましやは

とし月すみわたる人にいとまをこひて南山しなにすむ女のもとにまかりて朝に歸てみれは枕にかきつけたりし時はさ月なりけり

ほとゝきすこしけき闇に山科の岩田のをのを今やすくらん

これをみるにいとあはれにてそはにかきつけ侍し

ほとゝきす今はかよはし山科のこしけき道は露けかりけり

八條院とは殿におはしましゝころそのわたりにみすせりかはといふさと〳〵をあそひありきしにかやゝのあし簾といふものかけたりしにいと思ひの外なる女をみいたして

かけてたに思はぬ宿の蘆簾みすに馴けるしるしとそ思ふ

かへし

蘆簾おもひなかけそかけてたに行衛もしらぬみすのさと人
つの國なにはわたりにて思ひのほかなる人を見いた
して又たくひなき心地しけれは
つの國のあしよし今は尋ねみしなにはのことも君にとゝめて
かへし
つの國の長らへてしもあらしみを蘆よしとてもいかゝ頼まん
この女我も人もいもゐしやうしにはゝかりたりし程
におりしもおやのおとこあはせんといふとて女もい
みしうあやなきことゝ歎きつかはしたりしかは
仇涙のかゝる契をしらすしてなにか難波のうらなれにけむ
かへし
あた涙のかゝる汀にしほれても更になにはのうらめしき哉
内わたりなる人にひさしくたいめむ給はらぬといひ
しをさらぬたになき名たつなれはとてあはさりしか
はこせちのころ雪ふりにしにくしつゝみたるさまに
てかの女のすみけるさうしのみすのへりにさしはさ
みてにけにし
今は唯ふみそめよかし白雪の跡なきなのみ世にやふるへき
つらかりし女のもとへいとうしと思ひしりなから身
の程をしりてなんえうらみぬとてつかはしゝ
うき乍らうしとはえしもいはれねは心なき身に成やはて南
かへしいたう思しりぬるよしなとねんころにいひて
恨むらんそのことはりはしるものを心なしとは誰かいふへき
とてそのゝちはいかにも身をまかせんといひたりし
かはまた
けふよりは身をまかすともすきゝにし深き恨は猶や殘らむ
又かへし
世中に深き恨のなくもかなけふよりのちとたのむ身のため
ある宮はらにて女あまた物かたらひて歸にしあした
中にすくれてきこえし人にいひつかはしゝ
思ひわくかたも渚による涙のいとかく袖をぬらすへしやは
かへし
思ひわかてなにと渚の涙ならはぬる覽袖のゆへもあらしを
又をしかへして
君ならて誰にか袖をかこつへき猶思ひわくかたはなけれは
この返事はいかにいふへしともおもほえすとて
移ろはん事こそかねてうかりけれ色なる人のちらす言のは
またこれより
うつろはむことな思ひそ淺からぬ色をは色にそむとしらすや
また／＼もこの女のもとへたひ／＼文をやりてねむ
ころにいひわたりしに返事もいとこまやかにてたく
もの煙にはいかゝ思たつへきをあつまときゝしかは
とて思ひたえなんもいかゝはせんといひたりしをき
くことや有けむ
浦山しいかなる風のなさけにかたくもの煙うちなひくらん
かくいひても猶あかす覺えて
東路ときくにいとゝそ頼まるゝあふくま河にあふせ有やと
をろかにはあらすなから心ならすおとつれをたにせ
て日數つもりにし人に五月五日
あやめ草ねのみなかれて心にもあらぬまに社日數へにけれ
かへし
けふそしる袂にかゝる長きねをあひ思はぬにひけるものとは

女のたのめし日をいひのへつゝ後の日をまてといひしかははしめ契し日のくれかたにくもる空もけふうれしからましをなとうち詠くらしてかくなん

今日といひし暮は猶こそたゝならね契しをなをたのめ共

かへし

逢事を頼めしけふの暮なれはさそあらましに物そかなしき

時々物申わたりし女のもとよりねさめに郭公をきゝてかくなんおほえつるとて

諸共にとかたらひしあか月のおなし聲なるほとゝきすかな

かへし

思ひ出てねさめし床の哀をもゆきてつけゝるほとゝきす哉

五月五日女のもとへつかはしゝ

思ひきやあはぬまにひく菖蒲草うきねをそへてかけん物とは

物いひわたりし女のもとより花たちはなを文につゝみていかなるすちの心とゝをしはかり給へとかきたりけれはいと心えかたくかの昔の人の袖のかそするといひけむたくひにも思ひよそふへきかたなくまたはむあんしん潘安仁の車にいれけむためしをおもふにもこの身いあやしさにはとたかひたれはいひやりし

昔思ふにはひか何そを車にいれしたくひの身にあらなくに

女かへし

何れとは思ひもわかすなつかしくとまる匂のしるし計りに

物いひわたりし女のはらからにてわかき人の侍しをある近衛つかさの文なとをこせけるをいとつゝましく思ひて哥のかへしなともせさりけるに猶しゐていひおこせたりけれは

淺ましやあはての浦の涙たにもよらぬに袖をぬらす物かは

さのみかへしせすときゝしもなさけなくやとてかの人にかはりて

いかなれはあはての浦のあた涙のゆへも渚に袖ぬらすらん

女のもとへふみをたひ〳〵つかはしゝ返事をせさりし程にいひつたふる人のもとへ文にてみよともいひかほにいとやさしくかきちらしたりけれはいひつかはしゝ

なをさりに散くる風のつてなれと色あることのは社身にしめ

かへし

つてにても今は散さし言のはの色にみえ劔うしろめたさに

戀六

五條西のとう院わたりにすみ侍しころかはさへたてて宜秋門院のたんこすむよしをきゝてつねにいひかはし侍し程にかのすみかをは西殿といひて文のうはかきにもかきてやりなとせし程にかれよりかく西のすみかの侍けるも人をみちひくはしにもやなとされいひて

願ふらん西へみちひくはしなれは此よひとつの契ならしを

かへし

西にひく心のはしは踏そめつ渡らん日こそしらまほしけれ

かくたゝことにいひける程にその河にいとひろき橋をわたすときゝてこれより

なか河の水にせかれしみちはしを渡してけりと聞そ嬉しき

この返事にはしいてきなはこれよりのちわたらむ人

は心さし淺くやといひて

桁よりも通ひやすると待へきになに渡す覽なかのみちはし

猶これより又をし返てかのいたゝのはしのくつれなはといふ古歌もはしのあるうへのかねことにこそもとよりなからんにはなにのけたよりかはわたりもそめむといひて

朽はてゝ桁になるとも年をへて渡りたゆへき橋ならなくに

この返事に猶又いたゝの橋柱すこれは人の心をもみむとのこりたりつる橋はしらのなをりぬときくにくちはてむまての命もしらねは心の程もしられてこそはやみぬへかむめれとてさるは又かたはらたちはなれぬおい人もかきりなくいさとに侍れは人めつゝみのしけさもたえまかちなる中かはにやといひて

朽はてゝけたをもはしは渡る共人めつゝみに猶やせかれむ

かやうにいひかはす程にれいならぬを有てやいとをなとしたるに又この女もひるくふよしをきゝていひやりし

朝露のひるまはいつそ秋風によもきのあとも思ひみたれぬ

かへし

亂るらん蓬のあとの苦しさに露のひるまもいつとしられす

猶たひ〳〵とひたつねしかといさと人も所せしひるもいつはつへしともなといへは

よな〳〵はいもねぬ人も有ときく書間をたにもいつといは南

かへし

うちもねぬ關守たえぬ宿なれはひるまをいつといかゝ頼まむ

又これより

白浪のよる計り社もりもせめひるまはなとかうちもねさ覽

またかへし

夜を重ねうちもねさ覽關よりはひるまをとても許しやはせむ

なをまた中つかはしゝ

きゝ渡るなをさへいとゝ頼むかなすみよからしや天の橋立

かへし

なのみして住よからしをなか〳〵にきゝのみ渡れ天の橋立

心のほとをしらせはやと思し人に秋ころいひつかはしゝ

初時雨よにふりにける言のはをいかなる色にしらせ初まし

かへし

初時雨世にふりにける言の葉は色にいつとも頼むへきかは

女のもとより夢かたるへきにもなけれは人にもしられぬへくもなきをいまさらにかくないひそといひたりしかはこれより

諸共にかたらぬ夢を契にてこはいかにして年の經ぬらん

かへし

年をへてあはするともなき夢をこはいかにして驚かすらん

つれなき女の心はかよはすしもあらぬさまにみえなから人めつゝましけれはたゝよそのしるへにてといひたりしに

よそなりと人めはかりは白雲の隔てぬなかと思はましかは

かへし

思ふらん人の心も白雲のへたてぬなかといかゝなるへき

秋ころ物いひわたりし女のつれなきとのみ侍けれは

かく計り深き契をしきのふすかりたにたてるなをきかしはや

かへし
秋の田のいな共いかゝいはさらむ假初ふしは辛からしやは
またこの女のもとより秋のくれに
暮てゆく秋の限りのけふなれは言のはさへそ盡はてにける
かへし
秋の田のいなてふ言のはゝつきぬ雪ふる道を今はたつねん
このつきの日は神無月のついたちの日なれは又これ
より
言のはもけさより深き色そへよ朽にし袖もころもかへしつ
かへし
今朝よりはくちし袂もかはるなり心の色もさやうつるらむ
またこれより
けさよりはひとへにくちしさよ衣かさねんことを思ひたつ哉
またかへし
重ねてもたち別れなはから衣わか袖のみやくちはてぬへき
女のもとへいつかさはりなき日といひつかはしたり
し返事にむくらにとちられていつとなしといひたり
しかは
茂るとて人こそとはね八重葎さはらぬをさへいとふ物かは
かへし
思ひなき人こそとはね八重葎しける宿には袖はしかすや
此かへしはひしきものには袖をしつゝもといへる。ふ
る歌のこゝろなりけり。
これよりはあらぬさまに人こそとはねなといひたり
つるを又をしかへして
さはりかと思ひけるかな八重葎袖しく宿といひけるものを
かへし
ふりにけるひしきものさへ忘れめや僞ならぬ思ひなりせは
またこれより
ひしきもの忘れてたにも葎にはさはらしと社言しわれしも
女のもとへ文つかはしたりし返事にむさしあふみと
おほえてとはかりかきたりしにこれより又をしかへ
して
うるさしといふたに辛し武藏鐙しねとはかけて思はさら南
かへし
とはぬたに辛しと聞し武藏鐙しねとはかけて思ふへきかは
とてうるさからぬむさしあふみになんとかきたりし
かは
かけてたに辛くはあらし武藏鐙ふみうるさしと厭ふなる覽
かへし
よしさらはかけてもいはし武藏鐙ふみうるさしと厭ふなもたつ
女のもとより曉のねさめにすゝめありきつるあみた
のひしりのこゑも我身ひとつにしむこゝちして思ひ
なきとこにはよもきゝ給はさりつらむなといひたり
しかは
我は唯あか月ことにねさめして耳なれにけるみたのとなへを
かへし
羨ましいかなる人の夢さめてみたのとなへに耳なれぬらん
つれなかりし女のいひそめし日はけふそかしといひ
たりしかはこれより
いひそめしことはゝかなく成ゆけと日數は君も忘れさりけり
かへし

みる度に心にとまることのはゝ日數をとても忘れやはせん
　日をかゝす文やりし女のもとへひとひふつかをとつ
　れさりしかはかれより
なをさりにちりこしとのはなれ共かれゆく程は悲しかり凫
　返し
逢事を待てふとのはにしあれはかれにはかれし色はます其
　うらみむと思ひし女のもとへふみをやりたる返事に
　我身にはなを露のなさけもかけぬさまにいひて中將
　さたいへ侍從ときこえしころそれもかの女によその
　しる人なりけれはかの侍從の淚にしつむよしありし
　いとをしさなといひたりしをきくにもかくこそ人の
　哀をはしりける心につきせすなさけもかゝらぬ身の
　程いよ〳〵思ひしられて又いひつかはしゝ
君ゆへに沈むかひなき浮身にはよその淚そうらやまれける
　女かのしゝうのとをかくまて思ひきこゆるもひとも
　とゆへにこそなといひて
君ゆへに哀をかくるむさし野の草葉の露はよその物かは
　後白河院の御ともに日吉にまいりこもりてみやこな
　る女のもとへいひをくりし
つきもせぬ戀路はいとゝ逢坂の關こえて社まよひましけれ
　かへし
いかはかり苦しとかしる相坂の關こえしより迷ふこゝろは
　この返事のおくに猶かきそへたりし
歸るへき日を數へてもかひそなきとをさかり行しかの浦浪
　猶かの返しはみやこへ歸てのちいひつかはしゝ
とをさかるなに社たてれ君かため急きてかへる志賀の浦浪
みやこへ歸ても猶さはること有ていつしかもまから
　さりしかは女のもとより
都にも猶ふふみちはへたてけりみるめ渚のうらならねとも
　かへし
都人ゆきあふ道を急きてそみるめなきさのうらはすきにし
　ひさしくをとつれさりし女のもとよりことははなく
　て歌はかりよみつゝけてつかはしたりし
かくてさはたえける物を白糸の苦しきほとゝなに思ひけん
くやしくも人めつゝみをもりいてゝ淺きなそたつ山河の水
君とわれいくへ隔つる關なれはまちか乍らもはるけかる覽
たえぬるかさりともとこそ賴みしかふかく契しなか河の水
侘つゝもこのよひとつの思ひ河もえむ煙のはてはいかにそ
たまゆらも命をかけしことのはの絕はてぬるや限り成らん
いかにしてまとろむ程に慰めて夢計りたにあふとみるへき
誓ひてし人の命に取かへてこひしぬる身といかてきかれむ
都へはいてぬときくを郭公まつにはなとかをとつれもせぬ
誰にかは身より外には憂ふへきうきをことはる人しなけれは
　かへし
かくてしも絕はつましき白糸のくるしき程をなに亂るらん
山川のあさくみゆとも流れてのそこの心はしられさらめや
夏なから霧のみ深き關なれは間近しとてもいかてあふへき
恨むなる深く契しなか河のめくりあふへきせをまたすして
諸共にもゆる煙のはてならは同しそらにやたちものほらん
諸ともに命をかけし玉の緖の絕ぬほとこそ人もうらむれ
よを重ねあくかれ出るわかたまの夢の枕にみえさらめやは
裏うへに弱りのみゆく我ををきて戀しぬるみといかゝきかれん

いつしかとをとつれしをも郭公またぬ宿にやをそく聞らん

よそ人のとふとのみきく仲なれは憂ふる程もなとかなか覽

　後法性寺殿にて月をみて戀をますといへるこゝろを

諸共になかむるよはのむつことを思ひいてよとすめる月かな

雜一

　二條院の御時殿上のそかれたりしつきのとしの春臨時祭の舞人にてまいりたりしに南殿の櫻を見て花のえたにつけて女房のもとへ申入侍し

わするなよなれし雲ゐの櫻花うき身は春のよそになるともかへし

思はすに身こそ雲井のよそならめなれにし花は忘れしもせし

　寂蓮中務少輔とまうしゝ時花のさかりにさくらのちいさきえたにむすひつけてつかはしたりし

きてみよと更にもいはし山櫻殘りゆかしき程にやはあらぬかへし

心をはまつさきたてゝ山櫻たつねゆくまもめかれすなとて

　六條三位經家くらのかみと申し時家のはなさかりにさきたりしを一枝とこひにつかはしたりしかは花にさして

君かため宿の櫻を折つれはみにくやとたにまたすなりぬるかへし

おりてくる花の匂をみるにこそもとの梢はゆかしかりけれ

　みやこうつり有し年花のさかりに法金剛院に上西門院おはしましゝにまいりて兵衛のつほねにたいめむきこえてまかりいてにしつきの日花のおもしろかりしよしなと申て

たくひなき花をみしにもしるかりき昔のにほひ殘る宿とはかへし

花はかり有し昔にかはらねとふるえに殘ることのはもなし

　花のさかりに人々まうてきてあそひ侍しなかに寂蓮中務少輔とまうしゝ時つねの春よりもことしはいたうなこりおほくて花の散なむのちのうさなとまうしかは

散うさは花のみもあらし誰も皆我故とまるなさけならねはかへし

心あらむ宿の櫻をおしむにそなへての花はみつゝすきにし

　四位してのち臨時祭のかへいしう(加陪從)にてまいりたりしに舞人つとめしことなと思ひ出られて小侍從の君のつほねを尋て申いれし

年をへてかさしなれにし櫻はなおなし庭にてよそにみる哉かへし民部卿成範おりふし小侍從にたいめむしける程にてこの返しはわれせむとて

さしかふるかさしの花は位山のほれは誰もさこそみるらめ

　又の春臨時祭のかへいしう(加陪從)にたかふさ(隆房)の卿の藏人頭にてもよほされしに返事のはしにかきそへし

心には雲ゐのふちをかけなからさのみやさゝむ山ふきの花かへし

山吹をこの春はかりかさしては雲井のふちも咲かゝりなむ

　とありしかとへいしうはゆるされにけりその後いく程なくて殿上ゆるされて臨時祭の使つとめ侍しにかの隆房卿のもとへ

藤の花かさすけふこそ思ひしれ君か言のはかけしなさけは
かへし
行末をかけて思ひし藤なれは春待えたるかさしとそしる
卯月の十日ころ三條の宮に御とのゐして居たまひし
に郭公の初音をきゝて衛門督公光
いつかたときゝまとはして郭公うはの空にやなかめ明さん
かへし
郭公きゝてなかめぬ夜はにたにさ月の空はまよふこゝろを
又五月五日やへうの花にあやめをくしてつかはしゝ
左衛門督
珍らしきやへうの花のめうつりに心もひかぬあやめ草かな
かへし
數しらぬ身をうの花はめなれつゝいとゝ菖蒲のねをそかけつる
平忠盛朝臣のもとに五月五日人々まかりて歌なとよ
みて歸にし程にそのつきのとしかの人世中つゝむと
有て又五月五日こそをおもひ出けるにやいひをくり
たりし
秋にはさもあらぬねをかけ添てこそのけふのみ忍はるゝ哉
かくてつかはしけるにちかひてまかりけ(た)りしに
唯今かくなんいひやりつるといひしかは
とはぬまにあけて久しの菖蒲草こそを忍ふにねそ通ひける
さ月のなかの十日ころしもわたりにすみ侍しにその
かたはらなる所に賴政卿わたりゐたりけるをさもし
らさりしほとにかれよりまうしつかはしたりし
となりとはしるやしらすや郭公有とはきくに語らひもせぬ
かへし
音もせてとなりにきける郭公かたらふに社初ねきゝつれ
七月ついたちころに小侍從人につたへてつかはしゝ
文をゝきて七日にしもみせたりけれはその返事にけ
ふの文のおもはすさなとはちしめたりしにいとあさ
ましうのへやるかたなき心ちして
逢事をならはぬ身には七夕のけふの契もしらぬなりけり
かへし
たまさかにあふをいむとや七夕の契をしらぬ心なるらむ
さ月のころ內にまいりて人々こたちなと夜もすから
あそひ侍しにしむ大夫のつほね大夫とのとよふをな
しゑなりとて郭公ともすとはおなしなにてわかなを
よふなといふすゝろことをいひ出して更に郭公とな
につけんなといひつゝいてにしまゝにいと久しうわ
つらふと有て秋まてにもなりにけれはかのこたちの
御中へとて
秋ふかき霧にむせひてほとゝきすなれし五月の空そ戀しき
なとやらむ。この文をはあけて見て。返事もなくて。
おひかへされにけり。
あきころわつらふと有て山里にすみ侍しに後德大寺
の左大臣大納言ときこえしとき常に申つかはしゝか
ひさしくとはれさりしかはこれよりおとろかし申す
とて
思ひやれ心はいつも秋なれと霧さへはれぬみやまへのさと
かれにもわつらひたうひける程にて
われもしか霧にむせひて日をふれは秋の心の深きとをしれ
八月十五夜くもりたりしにさりなからもし人なとま

いるともやとおもひて後法性寺殿(兼實)右大臣ときこえ給ひし時まいられしにそのころわつらはせ給おりふしなりけれはまかり出しをたいはむ所よりとて
御かへしもとすけの朝臣にあつけてまかり出し
名に高き今宵の月にしるかりつ君かあたりの晴ぬけしきは
とは殿のひかむの御念佛の番に宿所まてはまいりなからわつらふと日數つもりしなこりなを心よからてためらひしほとに十五夜の月いとあかゝりしにさた家朝臣番つとめてときゝしに申つかはしゝ
晴やらぬ霧にむせひて眺めねともりくる月の影そさやけき
かへし
秋のそら名にあふ月のくまなさに心のうちの霧もはれしや
大納言實國左衛門督と申しときいさなはれしかは白河なる所にてかくらうたひあそひし程に曉かたにほしになりてこよひの月はたゝこゝにますなとうたひし程におもしろかりしなこりあかすおほえて歸りにしのちふつかみか有て月あかゝりし夜申をくりし
あか星のあかていてにし曉はこよひの月におもひいてすや
かへし
只爰に只こゝにとこそ思ひしを出しは月のかひもなかりき
月あかゝりしよある宮はらにてきよみちの卿やすみちの卿なとかくらうたひてあそひし程にたれもいとけふなきさまにすさひつゝいそきたちしかは女房の中より
もろ人の心もとけぬこよひかな天の岩戸も明すや有らん
かへしすへきよし人々すゝめられしかは
天の戸の明ぬとみゆる月影の心とけてやたれもいつらん
北白河なる所にて唯心房西行なとさそはれしかはまかりて歌よみ連哥なとせしに上西門院の兵衛ときこえしふるひとおはしあひて曉かへりしなこりをおしみて道にをひつきてつかはしたりし
いつかまためくり逢へき長きよもあかて明ぬる月の名殘は
かへし
誰もさそあかて明ぬる月影のよにすみなれは今めくりこん
九月十三夜小侍從のもとへまかりてあそはんと契たりし程に又さりかたきこと有てほかへまかりてそのつきの日かの侍從のもとへつかはし侍し
人しれぬ心は空にあくかれて思はぬさとの月をみしかな
かへし
雨ふれとわひつゝねにし月影をいかなる里にさは眺めけん
後德大寺入道左大臣大納言ときこえしとき九月十三夜に大皇大后宮にまいりてあそふへきよし有しかはまいりたりしにかの大納言又と人にいさなはれていてられにけりときゝてまかり出しをこたちよひとゝめてしはしと有し程に又やかて程なくさてとくいてねとありしかは心もえられすなからまかりいてし程に車に文の入たりしをいつくよりそと尋ねしかはたいはん所のかたよりさうしたちたるわかきものゝ出てなむいれてかへりぬるといひしを明てみれは
尋きてあはぬものゆへかへりけん昔の人のこゝろをやしる
かへしたいはん所へまいらせおきし

月にのる心はかりそ變らねとまたれぬうさのたくひなき哉

左京大夫修範いへのとなりにてつねにたいめんきこゆへきよしなときこえなからなにとなくてのみすきにしを九月十三夜月ともにあかゝりしに申をくりし

諸ともになかめまほしき月影は宿のへたてそ隈と成ける

かへし

月をみる心は誰もかよひけり宿のへたてはくまとなれとも

又十三夜月おほろなりしにもろみつのきみのもとへ申つかはしゝ

君にあはて日を古里のいふせさはこよひの月も朧にそもる

かへし

月みてもまつ思ひやる我こゝろかけと成てやおほろ成らむ

九月廿九日後德大寺左大臣大納言ときこえし時德大寺におはせしにまかりてたいめんたまひてよもすからあそひてかへりしつきの日かれより

君に逢て名殘を惜むけふしもあれ暫しとまらて秋もいぬめり

かへし

暮て行秋よりも猶あかさりし名殘をいはゝいともかしこし

九月つこもりの日ある所に人々まかりあひて歌よみ連哥なとして歸にしに女房中より

年毎に秋のわかれは有ものをけふはしめたる心地こそすれ

あまたのなかなりしかとも人々かへしなくてほとへしかは

年毎にかはらぬ秋の暮もなをあふ人からとけふこそはしれ

かくてかへりしをなをよひとゝめて

尋ねくるかひこそなけれゆく秋の別にそへて歸るけしきは

かへし

ゆく秋の別れにそへて歸らすは何ゆへ君もをしむへき身そ

法性寺殿にて人々歌合せられしに關のみちの落葉といふ事をよめりしうたまけにさためられしを清輔朝臣ともに心よせ有てまくへくもあらぬよしたひ〳〵申されしかともなをまけにしかはいとほいなくていてにしつきの日かの朝臣のもとへ申をくりし

いかなれはふき捨られし言のはをきくよそ人の情かけゝん

かへし

大方の關にゆるさぬ事のはゝ心にとまるかひもなかりき

はつ雪のあした寂蓮中務少輔とまうしゝ時文をつかはしたりしかはおりしもこゝろときめきせられてあけてみるにさせる事なき文にて有しかは戀さめに覺てかへり事にそへて

庭の面に雪をなかめて待人はふみゝて後そくやしかりける

かへし

眺めても我を待ける雪なれはふみゝて何かくやしかるへき

もろみつのもとより雪の朝にいひつかはしたりし

とふ人もなき我宿のすまゐこそ雪ふるまゝに思ひしらるれ

かへし

庭の雪に跡こそつけね思ひやる心はゆきてとふとしらすや

俊惠に久しくをとつれさりしころ雪の朝にかれより

庭の面にあと踏つけし昔こそ雪ふりぬれは戀しかりけれ

かへし

かき分てとはぬはかりそ白雪の降ゆくまゝに深く社おもへ

後德大寺左大臣雪ふりし朝たゝよるへきよし有しに

そのころおもくわつらひてえまからぬよしきこえし
返事のおくにかきそへ侍し
思へたゝ身の常ならは我宿にひとりみるへき今朝の雪かは
つきの日又かれよりわつらふよしえきかさりける事
なとねむころにの給て
へたつるか霧にむせひてとはす共雪ふりにたる宿な忘れそ
又かへし
雲深き宿を隔つるいふせさにいとゝを霧にむせふとをしれ
かもの臨時祭の使にかへりたちのみかくらはてゝろ
く給ていてにしおりしも雪うちゝりしかはかのとし
ゆきの大うちきたまはりけむこともおほえて
かねてより春やきぬらんふる雪のみのしろ衣きつるけふ哉
としころまい人かへいしうなとつとめしことを思てそ
のつきの日かの社の神主しけやすかもとへ申をくり
し
君みすやさくらやま吹かさしきて神の恵にかゝるふちなみ
かへし
かさしこし花の匂にしるきかなみしなの色に登るへしとは
おなしころ山の入道のもとよりいひつかはしたりし
老のなみ松にかゝれるかひ有てふちをかさすと聞そ嬉しき
かへし
山ふかき哀をそへよ藤のはなかさすにつけてかけし心は
ないし所のみかくらのひやうし(拍子)とりて暁かへり
たりしにたむこのこかもとより
こゝにみる月には猶や増るらんあかほしさゆる明かたの空
かへし
あかほしにこよひの月の影そへて心もはるゝ明かたのそら
おなしあしたに後徳大寺の左大臣のもとより
九重にひゝきけらしな朝倉のかへす〱もうれしとそ聞
かへし
色をます言の葉にこそ朝倉のかへす〱も身にはしみけれ
按察入道資賢のもとよりよへのみかくらあやまりな
くつとめとをし給へるよしつたへうけ給なむいとい
とよろこひ申とて
曇りなく雲のよそにもきゝし哉すみのほりけるあか星の聲
かへし
つたへきく君なかりせは雲の上にすむかひあらし赤星の聲

雑二

俊恵か白河わたりにすみし所を人々かりむゑとつけ
て哥よみ所にしてつねにゆきあへりし程にのち〱
にはをの〱さま〱のまめやかのことゝもなとまて
とふらひあひたるよしをきゝてはるのはしめのころ
いひつかはしゝ
花咲しわかの浦浪ことしより身さへなかぬときくはまことか
かへし
をのつから立よる浪も花さけはかひあるわかの浦と社みれ
おなし所を人々雨たまらすとてくれといふものをと
ふらひてふかせむとせしにをそくつかはしゝかはか
れより
つれ〱とあれゆく宿を眺むれは暮待ほとそ淋しかりける
かへし
あれまさる宿にすむらん月影をくれ待つけてとはむとそ思

又いかなるを有けるころにか世中あちきなきよしな
といひてあとをくらくしてうせなんと思なといひた
りしかはその返事にそへて
とまりゐて闇に迷はむ我爲やあとをくらくといふにや有覽
かへし
そよやけに浮世をすてゝいてぬ共君ゆへ闇にまたや迷はん
ある人のもとにまかりてよもすから哥よみ連歌なと
して曉かへりし程に牛をゐて歸にけるとてまちし程
やすらひしに女房中より
今よりはうし共いはしあかなくに歸るをとむる物に有ける
かへし
飽なくに歸るをとめぬ宿なれはいととうしとそ思ひなりぬる
中將さたいへ年むけにわかゝりしころよまれたりし
百首をみていとめつらかなるまてに驚かれしかは返
しつかはすとて
ことのはゝ絶せぬいへの風なれと身にしむ色を哀とそみる
かへし
人しれすそむるかひなき言の葉も哀をかくるけふそ嬉しき
さて又かの中將のもとより家集をみよとてつかはし
て心につかむにしるしつけよと有しをいつれも〱
もすてかたく覺なからさのみもいかゝとてことにす
くれてみゆるはかりにしるしつけてつかはすとて
色ことに身にしむ言のはなれとも深き淺きのしるしはかりそ
かへし
ふかしてふこのことのはや光なきことはの露の色と成らん
又ひむにつけてつかはしゝ
色々のことの葉たにもあたならは光もそへし露のしらたま
僧都全眞とをき國よりいひをくられたりし
思ひ出るともや今はなかる覽よになからへぬ數にいれつゝ
かへし
巡りあはんとをまつたに悲しきによになき數にいかゝいるへき
あきかぬの朝臣さい宮のれうとうにてくたるとて申
をくりし
いせしまやしほやき衣なれぬよりとはぬ恨も袖はぬれけり
かへし
袖ぬらす涙もかけしを神風やみもすそ河のちよのかけには
大原のゆいしむ房のもとへまかりて歸てのちみやこ
よりつかはし侍し
古里へかへるはかりのなのみしてとめし心はおほ原のさと
かへし
都人まれにいはねのしはゐしてかへる名殘そおほはらの里
近衞院御時のないしにひさしくたいめむきこえてた
またま大原に入たりしにもいそくを有てそのすみか
ははるかなるおくの山もとゝきゝてえまからさりし
かは歸るとてゆいしん房につたへて申をくりし
年つもるとのはしけきみ山へを猶よそなから歸りぬるかな
かへし
尋ぬへき草のとさしにあらすとも同し山路をなとかよき劔
山入道ひさしくをとつれぬおほつかなきなとうらみ
つかはして
深山木のくちはのちらぬ程たにもとはて年ふる君にも有哉
かへし

千年とも遥に頼む影なれはこのもとまてものとかにそ思ふ
いかの大進爲業よをそむき侍けるをそく聞つけてかくともつけ給さりけるをなとをうらみつかはすとて
人はいさ誠の道に我しいらは君にそまつはつけんと思ひし
さきのいつみのかみたかゆきよをそむきて大原にときゝてまかりてさま〴〵のむつことなとつくしてもさてのみ日かずをすくすへきならて又秋ころなんまかりいるへきと契て歸にし後かの入道のもとより
くるゝまの程たにしらぬ露の身のたのめし秋を待そ果敢き
かへし
誰もさそくるゝ待まはしらね共あらは秋とも頼むはかりそ
寂蓮よをそむきて後いつしかも申さまほしかりしをうちつゝきさはることゝも有て程へてのち申つかはしゝ
なれしにも變らてあはむ身のうさに人の姿をみぬそ悲しき
かへし
あひみぬは變らぬ身にも包む也とはぬや何のうきになす覽
世中さま〴〵にかはりゆきしころ二條院の御事なとを思ひ出たてまつりけるにやみかはの內侍のもとより雨ふりし朝に
見しや夢きくやうつゝと思ふまの眺にぬるゝ袖をとへかし
かへし
みし夢に思ひあはするよのなかの眺は誰もをとりやはする

雜三。

むかしすはうの內侍のふる里のはしらに我さへ軒のしのふ草といふうたかきをきたるあとのちかころまてやふれゆかみなから有しを人々まかりて故鄕懷舊といへるをよめりしに
これやその昔のあとゝ思ふにもしのふ哀のたえぬやとかな
後法性寺殿右大臣におはしましゝ時夢のゝちのふるきおもひといふを人々によませさせ玉ひしに
ふたゝひと歸るかたなき昔にも夢路はかよふ物にそ有ける
二品法親王五十首に述懷
いかにこは背きもやらぬよなる覽人やは惜む身やは進まぬ
さきたてし心よ今はしるへせよ吉野の山のおくのかよひち
いつならんこのよの夢の闇はれて悟りひらかん山のはの月
住吉の會に述懷
山ふかく心のいろは墨染のたもとはかりをかへやらぬかな
おなしこゝろを
みよしのゝ山のあなたにさきたちし我心こそわれを待らめ
後京極殿(良經)左大將ときこえさせ給ひしときうきたの杜を述懷によせて
ならふきもこたかき中に年ふりて獨うきたの杜のしるしは
述懷うた中に
世中は漕ゆく船のあとの浪うきたる身をはなにゝたとへん
何かいはむ夢の中なる夢のよは厭はすとてもなからへし身を
よとゝもにし水に袖をぬらしつゝいつかは春に逢坂のせき
此世をは厭はても唯過ぬへしつゐの住家もそことしらねは
はかなくて夢に成にし古を猶ゆめにたに見るよしもかな
いかなれは長柄の橋にたくふ身のけふ迄も世に跡をとむ覽
二葉より引人もなきむもれ松ひとりも年のふりにけるかな

惜からぬ身には年こそ積りけれあれなと思ふ人はなき世に
わかの浦に年ふるたつのねをそなくこさるゝ涙に袖はぬれつゝ
ありはてぬ程はうきみと歎きてももえむ煙のはてそ悲しき

無常

なへてよの習ときくもめの前に憂ためしみし後そしらるゝ
消ぬまの暫しはとまる露の身もなをきかたきこの世也鳬

山寺の懐舊といふことを

朝夕の友と成ける鐘の音をいとひし夜はのつみいかにせん

山家

都出てこのよをいとふ住家ゆへなか〳〵とまるわか心かな

正治二年百首に山家

都人とはぬもいかゝうらむへき雲にわけいる宿のかよひち
とはゝやな猶山ふかき宿もあらはこれより月や淋しかる覧
をとしるき柴のさ枝にしほりして軒はの岡を人かよふなり

千五百番哥合に

ねさめとふ深山の里の松の風きくもきかぬもさひしかり鳬
我宿をとふ人あらはしるへせよいはふむ道になるゝ山もり
うらちかきみねの庵のさひしきは麓の雲にゆふなみのこゑ

二品法親王五十首に閑居

とふ人を待し家ゐは苦しくて山路たえてそすみよかりける
かくて猶浮身なからもきえなくに草の原こそ道たえにけれ

眺望

山ふかくいりぬるみねに雲消てふもとゝみゆる古里のいほ
たれとしもしらぬ別のかなしさはまつらの沖を出る舟人

千五百番歌合のさう(雜)の中に

明ぬとやつりする船も出ぬらん月に棹さすしほかまのうら

ふるさとの池はみくさにとちられて心に月をやとしつる哉
おいかよのあたら光のあきのそら雲ゐのよそにみつる月哉
なかめてもむそちの秋はすきにけり思へは悲し山のはの月
くらゐやまのほりたちにし椎柴の道に迷ひて老にけるかな

世をそむきなんと思ひ侍しころかねて人なとにはちらさゝりしを後法性寺入道殿御邊にはほのめかし申たりしに九月十五日とくへきよしをきかせ給ひて十三夜にたれかもとよりともなくて

まつことのありとしもなき人たにも月に心はすみぬる物を

御かへし

空にみつ光をちかくかそへてもふかき山ちの月をしそ思ふ

院にいとま申とて土御門内大臣のもとへたかのりか事なと申て

老かよはふけゐの浦のたつのこをいかて雲ゐの數に連ねん

いとまのこと申入たれは御けしきかたしけなきさまになん侍る命をいきて和歌所なとへもまいるへきよしねむころに侍て

蘆まよりふけゐの浦を立いてゝ雲井にかへれたつのこ乍ら

さまかへてのち月あかゝりし夜あさりしむけんのもとへ

六十路あまりまたみぬ程にすむ月はいへを出たる光なり鳬

かへし

家を出てみるたに明きよはの月いらむ山ちに辿りあらすな

この返しにそへて入道殿うけ給はりとて

いかはかり月も哀と照すらんかゝるへかりし人のさまかは

御かへし

かくてしも憂身はしらす夜はの月てらす光を頼むはかりそ
　女房たむこのこかもとより
おもひやる秋の哀もかきりかないへを出ける夕暮のそら
　かへし
おいかよにいへをいつるは習ひにてあきの哀そ猶盡もせぬ
　日ころわつらふをなをこゝろよからさりしかは月あかゝりしに少將さたいへのもとへ申をくりし
霧はれぬ身をも今こそ照しけれこれやうきよのほかの月影
　かへし
あきの月うきよのほかの霧晴てさこそはあらぬ光そふらめ
　吉水前大僧正御房より
なれし露の消にしあとを拂ふにもそめけむ袖を哀とそきく
　御かへし
散くるもかしこき君かことの葉にそむる秋の色をますかな
　三位すゑつねのもとより
人つてにきくはまとか先たちてとはれし道に君もいりぬと
　かへし
先たゝむと思ひし道を今までに遲れてけふはとはるへしやは
　前少將たゝゆきの朝臣のもとより
とひみはやこのよの色をたちかへて淸き心やすみそめの袖
　かへし
山ふかき色はかりをはたちかへてなをこの世にそ墨染の袖
　宗圓かもとより
別れける道をはなとかつけさ覧したひはつへき心ならねと
　かへし
かくてしも背きも果ぬ世中を厭ひかほにはいかゝつくへき
　小侍從のもとよりとひて侍しに哥の侍らさりしかは
大方のわかの浦浪よせすともそむく哀はかけよとそ思ふ
　現世後世しえたる事なとかきて侍しかは
數ならて哀へまさる身の果は後のよをたにと思ふはかりそ
　かへし
うき世をは我もさてこそ背きしかまた思ひしる人も有けり
　としころをしを池にはなちたりしかほかへもまからてほかのともをさへひきくしておほくなりて侍りしかおりしもみなまかりにけるに宗圓かたひて侍しはかりはねをきりたりけれはのこりたるをぬしにかへしやるとて
家を出る主をみてや住馴れし浮寢のをしもあくかれぬらん
　かへし
年をへてなれこし池のをしとりも變る姿をおとろきゝする
　おなしころ中務大輔伊綱のもとより
厭ひえぬ憂身のみこそ悲しけれいへを出ぬと人をきくにも
　かへし
いとひえぬ世を悲しともしる人そ家を出ぬる友には有ける
　後法性寺殿右大臣御時百首に述懐
憂身とは思ふ物からすてやらてこれさへ人におとりぬる哉

雑四

　人をうらみかねてつかはしゝ
かすかのゝ　わかむらさきの　いろふかく　思ひそめては
としふれと　忍ふもちすり　しのふれは　こゝろのうちに
みたれつゝ　やるかたもなき　いふせさに　もらして後も
いけ水の　ふかきおもひを　くみてしる　人しなけれは

かすならぬ　身をうき草の　ねをたえて　よにもすましと
おもへとも　山のおくまて　たちそはん　そのおもかけの
くるしさに　あるにもあらて　よにふれは　心はそらに
かりかねの　ねをのみなきて　夜もすから　かたしく袖の
露けさは　秋のゝへとも　成ぬれは　こはきかもとの
さほしかの　こゑたつはかり　かなしきを　おもひしつめて
すくせとも　かくてのみよに　有明の　月よりほかに
ともなくて　我みかけとし　なりぬれと　人にはそはぬ
ものゆへに　こゝろにふかく　君をのみ　しめちかはらの
さしも草　さしてたのむる　むつことの　たのむへきをも
きかねとも　此よひとつの　契りにて　かゝるおもひは
よも山の　谷のした水　あさからし　と思ふはかりに
きのくにの　なくさのはまの　なくさめて　しはしもいかて
ありそ海の　そこのこゝろを　しら涙の　しらすはかりの
そのはもかな

美福門院のかくれさせ給ひてのち御なこりの君たちにつかへたてまつりてとし月をくるにつけて人はみなむかしよりけにかひあるさまにて我身ひとつしつみはてぬるかなしさもつくつくと思ひつゝけられて

いそのかみ　ふりにしよゝの　ひさかたの　天津みそらと
あふきこし　ことをおもへは　あら玉の　としをあまたも
かさならぬ　我身ひとつに　さま〳〵の　うきことおほく
あひきつゝ　いへはかなしも　山しろの　とはのみかけを
むねとして　このゑのみかと　たてをきし　春のあしたの
花さかり　やかてゆふへの　雲となり　秋のみそらに
なかめこし　月の光も　いりしより　わかよのやみは
かきくもり　しくれそめにし　宮のうちも　をのかちり〳〵
紅葉々の　とまるひとなく　冬くさの　霜かれにきし
さひしさを　あはれとみつゝ　すみかまの　はてはけふりと
のほりにし　なをはたかのゝ　山にとめ　あとは今にも
たえすして　むかしのにほひ　あらたまを　いまもわれらか
人しれす　たのむ心は　かけまくも　かしこき御代は
つるのこの　すゑはる〳〵に　かはたけの　なかれひさしき
よゝまても　おいすしなすて　つかふへき　心はふかし
葦引の　山した水の　かくれたる　しるしはなくて
すきたてる　身はかすならす　なりゆくを　おもへはくるし
あま雲の　はるゝまもなく　打しくれ　おほそらをのみ
なかめてそふる

このもとは昔のかけにかはらねと我袖のみそ時雨もりける

此なかうたをみてさたいへのもとよりいひをくれりし

春日山　ふちのしたえの　かれはてゝ　かゝるかたなき
すゑにしも　むすひ置ける　契りさへ　あらぬよまても
うかりける　みくつはそこに　しつみつゝ　玉もかつくと
袖ぬらす　あまのすむてふ　わたつ海の　よるへなきさに
ふなてして　たゝよふほとの　はかなさに　吹まふ風の
かた〳〵に　心をかけて　たのむへき　君かゆくゑを
尋ぬれは　たかのゝみゆき　消かへり　むかしかたりに
成にけり　かひなきこけの　したをのみ　こふるたもとも
朽はてゝ　ひく人もなき　宮はしら　われうきふしを
しのひつゝ　猶よのなかに　すむ月の　かはらぬかけを

たのみても　したはにやどる　露の身の　おきふしねのみ
なかるれと　思ひねにぬる　夢にたに　みぬよのことの
いふせさを　かきをく君か　ことのはに　かはりそめけむ
すみ染の　夕のそらの　かなしさも　とはたのおもに
ひかりたえ　てる日しくれと　かきくもり　定めなきよの
やみなから　やかてくらせる　程をさへ　みとりの竹に
吹かせの　更にみぬよに　立かへり　なくさめかたき
こゝちして　程なきあけの　ころも手の　色になりゆく
なみた川　せゝのしからみ　かけまくも　かしこきことは
いはし水　いはしかけしと　おもへとも　たきつ思ひは
せきあへす　心のうちを　もらしつるかな
うきなみの立まふ風のあらきにも哀昔とかけぬひはなし

　このかへしはやかてそのつかひをとゝめてつかはしゝかはかきとゝむへくもあらねとおりしもおさなきものとものはゝみまかりにしつきのとしにて心はかりあはれそひぬる心地してふてにまかせてかきをきけるはいと〳〵みくるしくや

ふりにける　たかのゝやまの　みゆきより　思ひきえつゝ
つもりぬる　あまたのとしを　はるかすみ　へたつる空に
かきくらす　こゝろのやみは　夏山の　こしけき中に
すゝきても　よゝの雲井の　月かけの　晴まをまちて
いたつらに　おいにけるみは　あきふかく　なりゆくむしの
なく音さへ　よはり〳〵て　いつをまつ　命とたにも
しら菊の　霜かれはてむ　あとをこそ　おもひをくへき
み山きの　朽葉はちらて　さかりなる　わかえかれにし
このもとを　あはれ〳〵と　みくまのゝ　うらめしき世の
ならひとは　思ひなからの　はしはしら　くちはてぬへき
衣手の　いろをそへつる　君ゆへに　昔もいまも
おとろかれつゝ
見しよをもみさりし君か言のはのいかて昔を今になすらん

　世をそむきて侍しを五條の三位入道の夢かうつゝかなと侍しあはれはなをつきせぬこゝちしてそのゝちふつかみか有て申をくりし

しのふ草　しけりのみます　むかしにや　うき世のほかは
かよふらん　いてにしいへの　ふるさとの　のこるくまなく
いまさらに　露と消にし　おもかけも　あとにとまれる
ことのはも　袖のみぬれて　かなしきを　有ともなくて
あり明の　あかしかねつゝ　秋のよも　やゝくれかたの
虫の音を　ともとたのみて　なくさむる　こゑのいろさへ
よはりゆく　心ほそさは　さゝかにの　いとひても猶
いとふへき　うきよにかくて　すみそめの　衣はかりは
そめつれと　はれせぬきりに　むせひつゝ　なかき夢路の
さめぬまを　今はむみやうの　くも消て　こゝろの月も
はれよとや　おなしはちすを　ねかふへき　さとりあらはす
君かことのは
ひらくへきさとりや近く成ぬらんさらに昔の夢そかなしき

　三位入道かへし

あさちふの　露けきやとに　なかめつゝ　秋のくれにも
成ぬれは　たゝおほかたの　ころたにも　なくさめかたき
よのなかを　そむきにけりと　きくときは　いかはかりかは
哀おほき　ましてうちはへ　こひわたる　むかしのことを
しのふ草　かけてしのへる　ことのはゝ　かきなかしける

水くきの　あとことにこそ　かなしけれ　思へはひさし
契ありて　なれにし程を　かそふれは　いそちもすきし
はるのそら　立わかれにし　かすみより　えたをわかるゝ
花につけ　夏にもなれは　軒ちかき　花たちはなの
かほるかに　むかしの袖を　よそへつゝ　まとろむときは
おもひねの　ゆめし〔ち歟〕にのみそ　なくさむる　秋の月には
さらしなや　更にもいはす　をはすての　山より出てゝ
山のはに　いりぬるかけを　こひかねて　すくる月日を
おもふには　とゝせの秋に　なりぬれと　こふるこゝろの
はかなさは　きのふけふとそ　まよはるゝ　かゝるなけきも
これはみな　はかなき夢の　まとひなり　今はひとへに
ねかはくは　はちすのいけに　ふくあめに　うゐの思ひを
ひるかへし　こゝろをふかく　すましつゝ　さとりひらかむ
ことをしそ思ふ

宣陽門院の御領おはりの國なりけるところをさせるあやまちもなきにめされてみとせまて返給はらさりけるをいまはさてやみぬへきにこそと思たえぬる心ちしてさまなともかへてのちこのことをよきやうに申せなといひつけたりし人のもとよりかくよをそむきぬときこしめしていとなむあはれにおとろきおほしめすその御しやうはかならす返したまはるへきよしなん御けしき侍といひつかはしたれはその人のもとへよろこひなからこのなかうたをよみてなむきこえけるかつは故院の御ゐいなとをもかきとめまいらせてあさ夕の御おこなひなとをもその御まへにてせさせ給よしをきゝけれは

かけまくも　かしこきみよに　つかへつゝ　としへにしみは
とまりゐて　むなしき跡に　つきもせす　かへるこゝろは
ふかきうみ　たかき山とも　あふきこし　はこやの山の
おもかけを　今もなこりの　君か代の　よろつよまての
かたみとて　かきとゝめてし　水くきの　あとのしるしは
みえねとも　猶たちいてゝ　おいのなみ　ふけゐのうらに
おとろへて　ゆきかくれなむ　あとまても　君かやちよに
つかへよと　おもふあまりに　つるのこの　やしわこ迄も
をしへをく　こゝろのうちは　いはしみつ　かものかはなみ
そこ清し　いまは我身の　おはりなる　哀をかけは
すみそめの　たもともせはき　うれしさを　身にあまるまて
つゝみてしかな

老の涙立かくる共わかの浦の蘆たつのこをかたみとはみよ

釋教

後法性寺殿右大臣御時百首うた人々によませさせ給しに般若心經を

くれたけの空しとゝけるそのはゝみよの佛のはゝと社きけ

花嚴經

あかねさす日の出初るしるしにはあをねか峯そ色變りける

阿含經

ありとやは風まつほとを賴むへきをしか鳴のにをける白露

法花經

つねにすむ月の光そへたてなきわしのみ山も鶴のはやしも

泉堂寺如來白蓮法身

ひらくなる悟の花はよのなかのにこりにしまぬはちす也鳧

未ㇾ得二眞覺一恒處二夢中一

結ひける夢ともしらぬ長きよをけふきゝとくや覺る成らん

廻故上口花

あさひまつ暫しの闇はなけかしな入にし月のあとを眺めて

序品

色々にふりしく花のにほひにて法の庭にはかねてしりにき

入₂於深山₁思₂惟佛道₁

いりかたき佛の道をさとるには山のおくこそかとて成けれ

化城喩品

そのかみに結ふ契し有けれはけふとてのりもたえぬ也けり

神力品

いくかへり出て此世をてらす覽わしのたかねにすめる月影

法華經講するところにて

草木まて普くかけしたねしあれは法の花さくけふの庭かな

はゝの紫式部かれうに一品經せられしにたらに品をとりて

夢のうちも守る誓のしるしあらは長き眠をさませとそ思ふ

來迎の心を

よにそめし色をかへしてむらさきの雲待えたるあか月の空

てらすへき光りやちかく成ぬらん心にかゝるむらさきの雲

神祇

和歌所にて十首御哥合侍しに神祇の心をよめる

かねてよりわかの浦路にあとたれてきみをや待し玉津嶋姫

同ころ新宮にて神祇心を

君かよをはるかにみつの濱風や吹かよふらん池のさゝなみ

後法性寺殿御百首に神祇

おほかたの惠はかけよ三笠山させる數にもあらぬみなれと

たつねつゝ賴みをかけんみわの山祈しるしも有とこそきけ

關白殿左大臣御時十首歌合ありしに

くもりなく神やしるらん春の日のはれゆく末の萬世のかけ

おなしころ御うた合ありしに春日山をいはひのこゝろによせて

君か代は光そまさる春日山くもるときなく照す日かけに

右隆信集得之浪華書鋪未得異本比挍云

和歌部百十四　家集三十二

藤原隆祐朝臣集

先日御尋候愚詠少々令レ進候。度々蒙レ仰候之間書貫候也。中々とかく申候はんに付て。片腹痛覺候へ共隨レ仰進候。所所會はあまたよみて候しかとも不レ書留一候。只是は覺候はかりを書て候也。如レ此仰につけてこそいまは尋かきてやと存候へ。又人まねに愚詠を左右に番て候。奥にかき候。返々尾籠に候得共中々かすに非す候へは。人のみとかむへきにもあらす候歟。勝劣は人々の合點にしてたかひて候也。くるしからすと承存候得は。可レ有二御披露一候也。他事見參之時候。恐々謹言。

三月六日　　隆祐

九條大納言三十首御會永仁二年三月

早春霞

今日といへは思ひそめてやかすむらん雪降山に春はきに鳬

澤春草

時しあれは海の春風さそへともなひかぬ程は波の下草

曉梅

里わかぬ朧月よのありあけにちきりて匂ふ軒の梅かえ

花滿山

咲つくに四方の霞のこのまより山をそいまは花と尋ぬる

江上暮春

けふまては入江の春の夕くれにみちくる鹽も猶かすみつゝ

溪卯花

うのはなの咲ぬる波は音もせて猶たえ〳〵のたに川の水

野郭公

ふる里はまたほと遠し時鳥しらぬ野中のまつとせしまに

雨後鵜川

うかひ舟をのかちきりをゆふやみに曇のこさぬ村雨の空

月前荻

荻の葉の露ふき過る秋風にひとりしほれぬ月のかけかな

夕虫

ゆふ露のやとりあらさぬ淺茅生に古きまかきのまつ虫の聲

海邊鹿

うら風にさそはれいつる月影をむかひの山にをしかなく也

閑庭薄

とへかしな籬の秋の花すゝきなひくかたには露そこほるゝ

名所擣衣

絕にけるふしみの夢もあらはれて一夜殘さすうつ衣哉

朝寒蘆

霜こほる玉江の蘆のあさな〳〵はらふもさむく吹あらし哉

深夜千鳥

更のほるあしちの空の月かけに数あらはれて千鳥なくなり

故里雪

みよしのゝふるき都のみ雪とて跡なき庭に昔をそしる

聞聲戀

我こひは夕きり深くたつかりのこゑのみそらにきゝ渡る哉

稀戀

更にまた契りし月もしのはれすまれなる夢のありあけの空

増戀

数ならて過にしかたの袖の上はいかなる色に露の置けむ

怨戀

つれもなきそなたの風に眞葛原うらむを人の心ともかな

被忘戀

僞もわすれぬ迄のゆふ暮を猶うきものと何うらみけむ

旅行

けふは猶都も近し逢坂の關のあなたに知人もかな

旅宿

一夜とも宿かる程の契あらはいかにうきねの恨みはてまし

旅泊

故里になれこし月の契あらはいかにうきねの恨みはてまし

山家橋

人はこす谷の岩はしをのつから雲はれわたる月影もかな

山家松

山深き草の庵の軒はにもおもひゆるさぬ松風のこゑ

山家苔

こけの色も猶ふかゝらしみよしのや是よりおくの秋の山里

寄神祇祝

春日山ちとせのまつの梢まてたのむ心にかゝる藤波

寄水懐舊

なかれこし昔や遠きわすれ水うつる計のかけもたえつゝ

寄雲述懐

雲の上を今年もよそに詠つゝ身をしる雨にぬれぬ日そなき

此哥詠出して候之時。故入道不レ惡之由申之。京極中納言入道之許へつかはしゝかは。返状如レ此。

侍從殿御哥拜見驚レ目候。今度三十首以ニ此御哥一詮候歟　懸點雖ニ無念候一。任レ意加レ之候。凡長短表ニ所存一候。一首洩レ之候。何事の故そと定被レ寄ニ思食一歟。全無難候。只皆懸ニ合點一無念候へは。成定ニ十首許一可レ抄レ之由。不レ及レ力。大切之御詠由候へは。次第にかくかひ合まいらせ候之間。甚しるし候はんと。深慮候そ非ニ公事一。力不レ及候得共。明に御倉小舎人一命と不参候はんするこそ悲候へ。いつこにても御詠候へ。あはれ面かけみるやうに覺候事の懷舊思欲暮候。眞實不可思議候也。得て候ける題とも。さも案候ける物かな。凡心中迷惑合委事候。恐々謹言。

御室御會とて京極中納言入道定家被レ申るゝに

浦霞

時わかぬ田子のうら波夫なから春は霞もたゝぬ日そなき

新花

はなの色もくるゝものとは白雲のみねの別そ猶うらみつゝ

夕郭公

過ぬるやけふのなたての時鳥いましはしあらはよはの一聲

初秋月

草も木も色とる程はおそけれと月のまちける秋の初風

擣衣稀

秋風に身にしめやらぬ里人のぬるよあまたにうつ衣かな

暁　雲

はつ瀬山あらしはたゆむ明かたに雲わけのこるかねの音哉

溪　雲

秋のよの月もなかめぬ谷の戸は雲のあるしをとふ人もなし

嶺　松

峯たかき松の下かけいたつらにふもとそ人め宿はとひける

庭　苔

散かはる花も紅葉もはては又苔のまかきに殘るしら露

窓　燈

かきりある秋のよのまもあけやらす猶きりふかき窓の燈火

又同返狀

侍從殿御歌悅給候了。明旦かけ法眼之許へ候。此御風躰眞實每度驚ゝ目候。皆別御風情あたおろかならぬ事に候歟。御教訓の趣にて申候らめとも。かゝる事やは候。此道さすかにたのもしく候。霞もたゝぬ日もなきと候ける。不思議候。嶺のわかれうつくしく候けふのなたておもしろく候。月のまちける。殊勝候。雲のあるしめつらしく候。苔のまかきやさしく候。

七首本定心中に霞花月すへきとおほえ候。恐々謹言。

定　家

如此度々被ㇾ申候しかは。今の歌よみにこそ候けれと思て候しほとに　新勅撰集沙汰聞え候し頃より。隆祐哥よみさかりたるに　世中に聞え候しに合て。彼撰に一首入て候し。面目なから末哥よみとも聞及はぬ人も。あまた入て候へしにこそ。誠よみさかり候ける。同さらはよく讀候はん時の哥も入候へかし。彼は又一首も入候はぬか。いかに候やらん。とかたかた不審にて。此道物うくなりて候し程。遠所より忍たる御歌合めされしに。

朝　霞

朝日かけまたいてやらぬあし引の山は霞の色そうつろふ

山　櫻

櫻花そらにあまきる白雲のたなひきわたるかつらきの山

郭　公

しからきの外山のすゑの時鳥たか里近き初音鳴らん（なるイ）

萩　露

みや城のゝ木の下風や過ぬらん露におくるゝ秋萩のはな

夜　鹿

烏羽玉のよや更ぬらんさを鹿の聲すみのはるをのゝ草臥

時　雨

神無月くもらぬかたの寒るまて（空まても歌合）風にみたれて降しくれ哉

忍　戀

思へとも（ふ岩イ）岩ねの松（苔イ）に波かけてかはらぬ色にぬるゝ袖かな

久　戀

徒に年はへにけり玉のをのなからへはともちきりやはせし

羇　旅

けふはまた明石のとよりこき出て心をつなく（つらきまくらにのこる月かけ歌）よものうら浦

山　家

都にて人にしられし我身とも忍はてなるゝ山のおくかな

此哥まいらせて候しに。遠所の返事に。故入道の許へ。此道

深夜千鳥
更のほるあしちの空の月かけに數あらはれて千鳥なくなり
故里雪
みよしのゝふるき都のみ雪とて跡なき庭に昔をそしる
聞聲戀
我こひは夕きり深くたつかりのこゑのみそらにきゝ渡る哉
稀戀
更にまた契りし月もしのはれすまれなる夢のありあけの空
増戀
數ならて過にしかたの袖の上はいかなる色に露の置けむ
怨戀
つれもなきそなたの風に眞葛原うらむを人の心ともかな
被忘戀
僞もわすれぬ迄のゆふ暮を猶うきものと何うらみけむ
旅行
けふは猶都も近し逢坂の關のあなたに知人もかな
旅宿
一夜とも宿かる程の契あらはいかにうきねの恨みはてまし
旅泊
故里になれこし月の契あらはいかにうきねの恨みはてまし
山家橋
人はこす谷の岩はしをのつから雲はれわたる月影もかな
山家松
山深き草の庵の軒はにもおもひゆるさぬ松風のこゑ
山家苔
こけの色も猶ふかゝらしみよしのや是よりおくの秋の山里

寄神祇祝
春日山ちとせのまつの梢までたのむ心にかゝる藤波
寄水懷舊
なかれこし昔や遠きわすれ水うつる計のかけもたえつゝ
寄雲述懷
雲の上を今年もよそに詠つゝ身をしる雨にぬれぬ日そなき
此哥詠出して候之時。故入道不ㇾ悪之由申之。京極中納言入道之許へつかはしゝかは。返狀如ㇾ此。
侍從殿御哥拜見驚ㇾ目候。今度三十首以二此御哥一詮候歟　懸點雖二無念候一。任ㇾ意加ㇾ之候。且長短表二所存一候。一首洩ㇾ之候。何事の故そと定被ㇾ寄二思食一歟。全無難候。只皆懸二合點一無念候へは。成定二十首許一可ㇾ抄ㇾ之由。不ㇾ及ㇾ力。大切之御詠由候へは。次第にかくかひ疊まいらせ候之間。甚しるし候はんと。深慮候そ非二公事一。力不ㇾ及候得共。明に御倉小舍人一命と不參候はんするこそ悲候へ。いつこにても御詠候へ。あはれ面かけみるやうに覺候事の懷舊思欲暮候。眞實不可思議候也。得て候ける題とも。さも案候ける物かな。凡心中迷惑合委事候。恐々謹言。
御室御會とて京極中納言入道定家被ㇾ申るゝに
浦霞
時わかぬ田子のうら波夫なから春は霞もたゝぬ日そなき
新花
はなの色もくるゝものとは白雲のみねの別そ猶うらみつゝ
夕郭公
過ぬるやけふのなたての時鳥いましはしあらはよはの一聲
初秋月

草も木も色とる程はおそけれと月のまちける秋の初風

擣衣稀

秋風に身にしめやらぬ里人のぬるよあまたにうつ衣かな

曉雲

はつ瀬山あらしはたゆむ明かたに雲わけのこるかねの音哉

溪雲

秋のよの月もなかめぬ谷の戸は雲のあるしをとふ人もなし

嶺松

峯たかき松の下かけいたつらにふもとそ人め宿はとひける

庭苔

散かはる花も紅葉もはては又苔のまかきに殘るしら露

窓燈

かきりある秋のよのまもあけやらす猶きりふかき窓の燈火

又同返狀

侍從殿御歌悅給候了。明日かけ法眼之許へ候。此御風躰眞實毎度驚レ目候。皆別御風情あたおろかならぬ事に候歟。御敎訓の趣にて申候らめとも。かゝる事やは候。此道さすかにたのもしく候。霞もたゝぬ日もなきと候ける。不思議候。嶺のわかれうつくしく候けふのなたておもしろく候。月のまちける。殊勝候。雲のあるしめつらしく候。苔のまかきやさしく候。

七首（本ノ定）心中に霞花月すへきとおほえ候。恐々謹言。

定家

如此度々被レ申候しかは。今の歌よみにこそ候けれと思て候しほとに　新勅撰集沙汰聞え候し頃より。隆祐哥よみさかりたるに　世中に聞え候しに合て。彼撰に一首入て候し。面目なから末哥よみとも聞及はぬ人も。あまた入て候へしにこそ。誠よみさかり候ける。同さらはよく讀候はん時の哥も入候へかし。彼は又一首も入候はぬか。いかに候やらん。とかたかた不審にて。此道物うくなりて候し程。遠所より忍たる御歌合めされしに。

朝霞

朝日かけまたいてやらぬあし引の山は霞の色そうつろふ

山櫻

櫻花そらにあまきる白雲のたなひきわたるかつらきの山

郭公

しからきの外山のすゑの時鳥たか里近き初音鳴（なるイ）らん

萩露

みや城のゝ木の下風や過ぬらん露におくるゝ秋萩のはな

夜鹿

烏羽玉のよや更ぬらんさを鹿の聲すみのほるをのゝ草臥

時雨

神無月くもらぬかたの寒る（空まても歌合）まて風にみたれて降しくれ哉

忍戀

思へ（ふ歌イ）とも岩ねの松（苔イ）に波かけてかはらぬ色にぬるゝ袖かな

久戀

徒に年はへにけり玉のをのなからへはともちきりやはせし

羇旅

けふはまた明石のとよりこき出て心をつなく（つらきまくらにのこる月かけ歌）よものうら浦

山家

都にて人にしられし我身とも忍はてなるゝ山のおくかな

此哥まいらせて候しに。遠所の返事に。故入道の許へ。此道

むかしより父におよふこと稀なるに。隆祐相傳て御覽するや。猶よく／＼たしなむへき也と被仰て候しにこそ。父はをのつからよく讀たるにと申も。悲しみのあまりおもひ出すかともうたかはれ候。他人はまた折節による事もやと不審に候に。君の御けしきに置ては。何の歎もかはす。あまたをろかならぬ事に思ひ候て。勅撰にすくなく入候。恨もわすれはてゝ。故入道も此道計心やすき事に思ひ候也。また入道逝去して候し年。同御所より十首の歌。めされ候しに。野春雨。

〔マヽ〕の上の朝のゝいとの朝みとり空にかすみて春雨そふる

名所花

よしの山ひとつにみえし花の色のうつれはかはる峯の白雲

江菖蒲

菖蒲草ことしはかけぬ袖のうへに猶おなし江の波そ立そふ

湖上月

しかの浦や氷らぬ波の音はして月のみふねそ遠さかりゆく

山紅葉

紅のこそめの糸のむらしくれ山のにしきをゝらぬ日そなき

閑庭雪

とへかしなあとも厭はてまたれ鳧また空はれぬ庭のしら雪

寄木戀

つれもなき軒の松のいつはりはたのまぬ暮も猶そかなしき

寄草戀

いかにせん人の契りの月を見てあさち色つく庭の秋風

夕懷舊

いく度かけふも暮ぬと眺めつゝかへらぬかたを忍ひきつ覽

曉述懷

明方の山のは近き月のみそ何おもかけをそらにみせける

又此哥の返事。少輔爲泰書候て。今度十首故入道かありし時よりも。猶かさまさりて御らんするや。他事なく好たしなむへき之由被二仰下一て候し後は。しつみえて候。歎も物ならす覺えて新古今集の時。生あひて。數あまた入候。同事に思て候也。

撰歌の外聊有二子細一哥。

是は大殿御會百首に五月雨五首中に

入江なる海士のすて舟うきはてゝうらに流るゝ五月雨の比

光俊朝臣よませ侍りし千首歌に芭蕉を

故里の庭のはせをのかいろはをあまたになして秋風そふく

西國に十禪師いはひ奉りたる所にて百首哥合し侍りし中に月を

天の原むら雲とほくなるまゝにはやくも過ぬ秋のよの月

日吉社にたてまつる千二百首中十禪宮百首に長歌をつくりて其詞をうへに置て侍りしによの字にあたりて侍る歌に山家春を

世の中に厭はぬよりもとはれけり花のたよりのみ芳野の奥

西國に下侍しころきつきの社へ詣て侍りし道にて社に奉らんとて讀てはへりし哥の中に旅宿風といふことを

きゝなれて變らぬよはのあらし哉わかすむ浦も都ならねは

五條二位公顯のもとより念佛を申さんとて立華の料に高倉大納言經通の許なる梅をこひに遣すに哥の相添たきよし故入道のもとへ申させて侍しに隆祐讀て遣へきよし仰られしかは

いろに出て契りもふかき宿ならは折袖ゆるせ春の梅かえ
明る日念佛聽聞すへきよし彼卿の許より申されて侍
りしにまかりて聽聞し侍に彼大納言の許より亭主へ
花よりも御法のこゑそ匂ひこしおくるは風のふかきよの空
ひとりなをにしに心を殘すらんさそはゝたれも山のはの月
心なきあまのしわさのもしほ草法のひかりに書てすて南
やかて返事すへきよし申され侍りしかは筆をとりて
色ふかく手折し花の便こそみのりのこゑも身にはしみけめ
君とわれにしに心をかきつれはさそはゝたれも山のはの月
時しもあれあまのしわさのもしほ草法の光にさへる波かな
住吉の方に侍し頃或處より虫とりてまいらせよと仰
られしに虫やのうへに書侍りし
君か爲かねてうへてし里なれは千よの秋しる松むしのこゑ
おなし所に侍しに故入道へ荻の葉といへるひえ鳥を
所望して侍しに葉山といふ鳥を是もおとらぬよし仰
られて給りて侍し心につかす覺えて返上すとて
涼しさは葉山のかけもわかねとも猶吹送れ荻の上風
返事彼荻のはにつけて
是も又秋の心そたのまれぬは山にかはる荻のうはかせ
于時七月。
又同所に住侍しに故入道より隆祐か哥某か跡ありと
御覽するよし遠所より被ニ仰下一侍る也今は心やすき
よしこまかに仰たりし返事のたよりに
世中にしつむと何か歎きけん和哥のうら波かゝりける身を
御返事
きく度の花のなみたもさそはれて跡ふきたえぬ和歌うら風

新勅撰にすくなく入たるとふらひの次に白川 三位伊時
入道のもとより
色深き森のことの葉はかるれはあるかなきかに人の見る覽
返し二首入て侍人の合點にもはつれし殊に見所なき
物に侍れは
數ならぬ數こそあらめ朽はつる言のはをしもなとかかく覽
五位正下して侍しに右中弁光俊のもとより
たちのほる春まちけりとみゆる哉一しほまさるあけの衣手
返し同下名に權弁より右中弁にあかりて侍しに
たちのほる君か心の春にあひていとゝいろそふあけの衣手
同日祝部忠成かもとより
そめまさるあけの衣の色にみつめくまん春のゆくすゑの空
返し
我たのむ春の日よしの行末をあけの衣のいろにみるかな
春のころ平の行胤天王寺に詣て住吉へ申送り侍し
すみ吉のまつ人もかな尋みんかすみにうらは道しらすとも
返し
霞め共まつみる浦もしりなから心のうちをいかゝへたてん
少將伊成朝臣住のえにて一兩日遊ひてかへさの道よ
りたか犬をこひ侍るとて
箸鷹のこの朝はかり引そへよいまにもよりも鳥やたつまと
少將また都より
今よりはおもひしそむな住よしの松の嵐の音のはけしき
住吉のあまのたく繩うちはへて忘るゝ草はかれやはてなん
思ひ出る心そふかき住吉をあさゝは小のと誰かいひけむ
返し

今よりの松の嵐のはけしきにきかましかはとまつ覺えつや
住吉のあまのたく繩くる人のかるれはかれぬ草の名そうき
おもひ出て深き心もたのまれすあさゝはをのに殘る面かけ
　雪のふかくつもりて侍し夕にいつくよりとなくて置
　侍し
降くらし跡たえ果る庭の雪にとはるへしとは思ひやはする
　さやらんとおほゆる所にさし置せるに返し
雪のうちにうきみの跡や厭ふとてとはてそ人の心をはみる
　同頃雪のあしたに藏人俊定か許より
跡たえてとはぬ日數の故里に恨もつもる庭の雪かな
　返し
ひかすふる恨もいまはわすられて心のゆきの跡や見ゆらん
　夏のころ胤行〔行胤歟〕鎌倉より
春秋の花と月とのあひみてもわすれぬ人は猶そこひしき
　返し
春秋の花と月との詠たにわすらるゝ程ときみをこひつゝ
　そへて
山の井のにこらぬ水を結ひてやゝかて別し面かけそたつ
　月の明に侍し夜住のえの釣殿にて連歌し侍しに神主
　國平か許より
かすならぬ言の葉にのみ埋れてよそにそ忍ふ住のえの月
　返し
すみのえの月も色そふことの葉によそなる人の心をそしる
　鎌倉なる人の和琴のかたうつしてと申たりし遣すと
　て返事の次に
都よりとふへき人のいかなれはあつまのことをしらぬなる覽

　返したまへて鎌倉より或人
あつまには都のことのかはるかと尋ねてそのはかこつ（みれはひとつイ）也覽
　住吉に侍しに都より知たる女房あまた天王寺に詣て
　て侍しかは住吉の神主經國女におほひかひこはんと
　おもふに哥のそへうきよし申侍しかは讀てつかはし
　侍し
波よするつもりの浦による貝を拾はぬ袖にうつせとそ思ふ
　返し貝にかきて
尋ねきてひろはぬ浦のつらけれは袖に包むにかひやなか覽
　入道殿天王寺にて四月九日はかなくはなし侍し歎の
　内にもさいの日七首のうた讀てゐなから念佛久しく
　申て落入せたまひにしこと世に往生のよし聞え侍し
　に未聖人みえす侍しかは申送り侍りし數多の歌の中
　に
むらさきの雲のむかへの跡にこそ藤の衣の名にはたちけれ
曇なきみたのみかほの月かけに露の置ゐて消ていてにし
　遊心聖人
　同時淨忍かもとから
　同年左衛門尉時朝か父往生のよし聞え侍しにすかた
　やつれて時朝鎌倉より上りたるよし聞え侍しに申送
　る
西へ行ちきりは同し別れちを思ふ淚のたれまさるらん
　返し
　法皇隱岐國にて崩御夢とのみ承後程へて守護左右衛

門尉泰清かもとより年頃あひ奉りし御所は目の前の煙となりはてゝ露の命とまりかたく侍し人々をさそひくして都へ送り奉りし心の内心なき海士の袖までも朽ぬへくみえ侍しよしくはしく申送りて侍し返事の次に數多書付侍し中に

たちのほる煙となりし別ちにゆくもとまるもさそ迷ひけん

なれ〳〵て沖つしま守いかはかり君もなきさに袖ぬらす覽

よの中になきを送りし御幸こそかへるもつらき都なりけれ

このよには數ならぬ身のことの葉をいさめし道も又絶に

返　し

たちのほる煙の後の別ちをみしはまよひの夢かうつゝか

よの中になきから歸る行幸にはあらぬ衣の袖もはつれき

嶋守もむなしき舟のうかひ出て殘る歎きのすむかひもなき

和歌のうらの道の心をおほせ劔君のみ跡をさそしのふへき

前宰相中將信成此御事によりて遁世のよし申送りて侍し女房のもとへ

熊野社に奉る百首の哥の中に廻文哥海上眺望

なかとをき方は南のすこきさきこすのみなみは高きをと哉

十禪師に奉る百首の上置長哥みもしにあたりて侍廻文

みかきよりかさす枝にはきの花は軒にたえす盛りよきかみ

相傳して知侍しかは備後の吉備津彦宮に奉りし百首中におなしく廻文哥を慶

日頃よのともしき住家のそむ覽其かみすきし元のよろこひ月中にことなきやうに聞なし侍りき此等の善惡によらす折節思ひ出され候はかりをかきて候抑御尋候故入道か自讃哥幷人々撰る自讃哥新古今中

思ひいてよたかかねことの末ならんきのふの雲の跡の夕暮

明はまたこゆへき山の峯なれやそらゆく月の末のしら雲、

近きころの哥中遠所御哥合萩露

またやみむまたやみさらん白露の玉おりしける秋萩の花

百首中懷舊のこゝろを

翁さひ人なとかめそこのうちにむかしをこふるつるの毛衣

此四首そすこし哥と覺しき物にてあると申き人々の撰貴人幷名人なとはみも候へは所詮申候雨中盧橘

左衛門尉俊村

ぬれ〳〵も花橘の匂ふかなむかしの人や雨と成けむ

是はゆかしき秀哥とて京極中納言入道の許へ被ニ注送ー候き或撰中に被レ書ヲ入人數ー候又此邊に見え候ものともに歌をよませて候つれはさもありぬへく候らん有のまゝに仰をかふむるへく候皆當座雨中立春

立かはるけふのけしきにしるきかなのとかに霞む春雨の空

雲間冬月

雲こほる山かせあしま雲まよりもれ出る月の影の寒けさ

僧

わしの山入ぬる峯の月なれと法をつとふるこゑそ聞ゆる

浦蚊遣火

法橋康賢

藻鹽やくすまのうらはの蚊遣火にたつる煙も色そかはらぬ

思

烟ともならぬ我身の思ひをはいかてか人のそらにしるへき

無　常

なかきよにまた夢さめぬ世中をうつゝと人の思ひけるかな

三月盡

けふのみと春を惜て詠へきおほろ月よの影たにもなし

菊

いろかはる千草の花はちりはてゝまかきに殘る秋のしら菊

田家夕雨

山田もる草のとさしも亂れつゝむら雨しけき秋の夕暮

戸外秋風　右兵衛尉源康澄

杉のやの草のあみとに吹風の秋はいかなる色もそふらん

網代

白波の岩きりとをす早き瀬につれなくみゆる宇治の網代き

後朝戀

宵のまはともに詠し月かけの殘るもつらきしのゝめのそら

螢　右馬允源光經

難波えや入江のあしの外も又よな〱すたく夏むしのかけ

峯眺望

旅人のいく山こえて見渡せはふもとにのこる峯のしら雲

鶴

いまよりはきつゝ馴なん我君の雲井にとをき鶴の毛衣

梅　千熊

つれもなく雪はふれゝと春のしれかほれる梅の花の下風

蓮

池水にはちすの花はふかけれと猶たのまるゝ法の道かな

菖蒲

よそにみし淀のわたりのあやめ草こよひ一夜の枕とそなる

歌よむものあまた有よしに書付らるゝとやおほしめしさふらはん一首も直し不レ入候思は住吉の大明神御照覽候へし以外によあひて近來いま〱しきこしおれの中に好よみ候詞

山又山　朧夜おほろ月よといはて無下にすちるしことく〻異名をしさて無詮候　そみかくた古き詞に候へ共うけす候山臥とてはわさともよく候　してのたをさ又時鳥にて候へし

有明の月夜のもしなくてはいま〱しく候　ひちて　かてらこのほどは候はね共不宜詞　春の明ほの　明ほのゝ空　冬の夕風　山の夕風露の下草　雪の下草はにはよく候　軒はの山　水はのみね

初五文字に。かなといふ詞。くれなの山。うすかきさくら心ちこそすれ。是らはうけられす候。故入道も申き。位よき哥もよみ出しけむに。此詞置て叶かたからんには。はゝかるへからす。さきに注申詞よむへからす候へし也。つもなとは不レ宜。かもは難に申候に侍れとも宜覺候よし申き。哥をよまんには。心をあたらしく詞をふるくすへし。めつらしき事を案し出して。古き詞のやさしきを得へし。めつらしくよまん有明の月なとを。月のありあけといひつれは無下也。歌はよき歌をよみたりとも書付て後能々なふりて。文字ひとつも。いかにして。いま少しの能様になるとみるへきよし候しを。隆祐なとは。大かた叶ひかたく。讀出し候ぬる後。善悪なふり引なをす事は。いかに候やらん。こん叶かたく候て。いかなる晴の歌をも。たゝ一兩日になりて。よみ候しかは。あさましくあふなき事に申候き。

右隆祐朝臣家集脱誤錯簡義不通者多々姑仍舊貫云

藤原光經集

建保六年八月十三日中殿御會に池月久明といふ事を
もゝしきや玉しく庭の池水に千代を重ねてみかく月哉
同年の十二月五日内裏哥合に冬山朝を
朝またきさすや日かけのうつるより霜にぬれゆく山の下草
冬海夕
白妙のふちえの浦は名のみして夕霜をかぬ浪の上かな
寄風祝
限りなき大うち山の松かせに千年を契る雲の上人
建保七年正月廿七日内裏御會に松上霞
よしの山花にさきたつ花なれや霞にまかふ松のしらゆき
翫梅花
移し植し若木の梅の花さかりめかれぬ色にならひそめぬる
おなしき年の二月十一日内裏當座の哥合に春風
朝日さす山のしら雪きえそめて霞にゆるき春のかせかな
春雨
かきくらしこのめ春雨ふる時はみとりにぬるゝ山の色哉
春月
たつね來てみる人やなき花さかぬ朽木のそまの春のよの月
春雪
雪ふれはみ山や寒きしからきの外山にいつるうくひすの聲
春野
朝な〳〵きゝすなくなり武藏野の霞のうちにつまや籠れる
春山
よし野山さのみは花もなかりけり人たのめなる峯のしら雲
春水
すみよしのあさ澤をのゝわすれ水たえ〳〵ならぬ春雨の比
春里
もしほやく煙と人やなかむらん霞たな引あしのやの里
春戀
春の日のなかき契や菅のねのかれにし色に消るあは雪
春祝
君そみんときはかきはの色なから松と竹とのよろつ代の春
同二月十二日内裏當座哥合に深山春
春霞たちにし日より青柳のかつらき山そみらくすくなき
夕歸雁
夕暮にいつくをさして歸るかり霞のうへに遠さかるらん
水邊秋
秋霧のふかき夕にせり川の千世のふる道たれたとるらん
朝野鹿
朝霧の深き野原にたつ鹿のをのれとぬれてなかぬ日はなし
被知戀
たちにけるわか下もえの夕けふり心にけたぬ時のまそなき
曉更(矢イ)戀
有明の月をその夜の形見とてなくさむほとの契たになし
同二月十七日殿上に出御ありて當座の御會侍しに行
路梅といふ事を探題にて
玉ほこやゆけとも末は遠き野の霞にしろき梅の初花
不見戀
夢にたにまた見ぬ人の俤をさそふもつらき夜半の月哉

同二月廿三日內裏當座哥合に早春朝

あら玉の春に明行山のはによこ雲かけてかすむそらかな

夏曉更

有明の月にうかるゝほとゝきすしのはぬこゑを雲に鳴かな

暮秋夕

かせませにしくれてくるゝ足引の山の紅葉の秋もすくなし

冬深夜

むは玉のよはの山風ふけぬらしこほりによはる瀧のしら浪

羈中月

露おもき我袖をくるひかりかなこえぬる山のあとの月影

後二月四日八幡宮哥合に雨中柳

春雨にぬれて色こき青柳のはなたの糸にかゝるしら露

月前霞

山かせの霞吹はらふたえまよりさくらにしろき月を見る哉

寄春雜

春のよの月かけうつる石淸水濁なき世と神もみるらん

同日鴨社哥合に朝野菫

朝霞たてるやいつこ武藏野の草のゆかりにすみれつみつゝ

水邊鶯

霞む日はそこともみえぬ瀧のうへのをくらの山の鶯のこゑ

社頭風

神代より色もかはらぬ榊葉のかをなつかしみ春風そふく

同日賀茂社に奉られし哥合に曉山櫻

あけぬるか櫻へたてぬ山とりのをのれもしろきよこ雲の色

浦歸雁

歸るかりそれともみえぬ春霞かすみのうらの夕くれのそら

社頭松

治れる御代のためしに神山の松ふく風は枝もならさす

承久(順德)元年五月廿一日內裏哥合に野徑霞

白たへの袖もみとりに移りけり霞わけゆく野ちのさゝはら

深山花

みよし野の山のかすみや晴ぬらん花もあらはにゆく嵐かな

暮春雨

さひしさはやよひの雨の古里にぬれてものうき鶯のこゑ

曉郭公

天の戸ををしあけかたの郭公よこくもなから聲そきえゆく

水邊草

夏の池のみきはもすこき松かけのあたるもあをき風の色哉

秋夕露

鳴鹿のなみたにまかふ夕かなをのかすむ野の秋のしら露

聞擣衣

あし曳のみやまおろしにたくふ也ふもとの里に衣うつこゑ

庭紅葉

山里の庭のまゆみのうす紅葉しくるともなき秋の色かな

冬夜月

むは玉のよるは重ねてさえけらし枯のゝ草の霜のうへの月

杜間雪

神なひのもりの木からしこゑもなし下草かけておもる白雪

承久二年二月十三日內裏御會に春山月

山櫻よこ雲なから吹風につれなくかすむ有明の月

野外柳

青柳のこするゑそ高くかすみぬるみつのうへのゝ春の明ほの

おなしとしの三月廿三日内裏當坐哥合に曉落花

櫻ちる山のあらしやはらふらんかすみにはる（そイ）ゝ有明の月

朝欵冬

山吹のはなの朝露うちはらひおる袖ぬらす井手の里人

暮春霞

よし野山花ちりはてゝ行春に霞はかりやたちのこるらん

絕恕戀

こぬ人を思ひたえたる夕暮は山のは出る月もうらめし

被忘戀

わすれ行人の心そあとたえぬとはれしやとは庭のよもきふ

同廿四日内裏當坐哥合に鶯歸谷

鶯のかへるいへちもはなやなきたけのはやまの谷の夕かけ

朝藤花

朝露に色こきませて春風の吹かた見ゆる池の藤なみ

三月盡

をのつから深山にのこる花もあらしけふを限の春かせそ吹

猒忍戀

さのみやはしのふの山の下露にしほれよとたに契やはせし

惜曉戀

曇れかし言葉のこして明るよのゆふつけ鳥の聲もうらみし

おなしきとしの七月七日の夜詩哥管絃の人々をのをの七人めして御遊侍しに仁壽殿にて和歌御會侍き

題七夕惜夜といふこゝろを

七夕のあふ夜はこよひ更にけり惜むなみたや露とをくらん

庭上秋風

秋風に軒葉になひくさゝ竹の大宮人は袖そ涼しき

同としの八月十五夜内裏御會待月

秋は猶なくさめかたきゆふへかな月待やとの荻の上風

見月

徒にいく夜の夢か絕ぬらん月のさかりのさらしなのいほ

惜月

あちきなく思ひもいれし山のはにかたふく月は誰もみる覽

承久三年二月廿一日内裏御會に春風

このほとは霞になひく春風の音こそきかぬ荻のやけはら

春雨

あし引の山のこのめもはるさめにぬれてとけ行花の下ひも

九月九日中山御所にて姬宮御節供役送にまいりて侍しついてに庭上菊といふことを

植しよりともに千年や契るらん菊咲庭の松かせのこゑ

月前菊

うつろはぬまかきの菊のしら露に光そへたるやまのはの月

伊平朝臣貫首に成侍しときつかはし侍し賀札のついてに

色まさるみかさの山の峯の松いく千世ふへきはしめ成らん

返し

みかさ山日影にもれぬ峯の松もとふにそ深き色は見えける

先帝位の御時昇殿ゆるされ侍らさりしかは

いつ迄かよそに見るへきみとせ餘り雲井になれし雲の上人

新院（順德）殿上ゆるされ侍らさりし比

雲井より君かみかけになれそめてはこやの山の月そ戀しき

前右少弁光俊筑紫に配流後ふみつかはし侍しついてに

月のいるそなたの空を眺めても君ゆへ袖のぬれぬよそなき

返　し

月影の山のは出しよな〳〵はかはきやはせし藤のたもとも

新院佐渡國にうつらせ給て後康光かもとへふみつかはし侍しついてに前途程遠おもひをそなたの雲になくさみかたきよし申て

思ひやるそなたの雲のはてもなし都の山も見えすや有らん

物かなしきゆふくれは鹿のねもいとゝこゝろをなやます心地して

物思ふ此夕くれに心あらはおのへの鹿よこゑなきかせそ

あか月のしくれいつよりもあはれにおほえて

都たに夜半の時雨は悲しきにならはぬ里のねさめをそ思ふ

羇中山海景氣月紅葉もいかはかりさひしかるらんなと申て

旅の空いつれさひしさまさるらんみやまの紅葉浦の月かけ

當番公宴の夜なとは禁裏月をともにみし事までおもひ出られて

諸共にみし百しきの夜半の月うらめしなからかたみ成けり

去年八月十五夜大炊御所にて御會侍しことたゝいまの心地して

雲のうへにたれ待出てなかめけん去年の今宵の山のはの月

九月十三夜よもすから月を見てむかし思ひ出るなかにひとゝせの十三夜御會に心あらは衞士のたく火もたゆむらんと侍し御製ことに心の底にとゝまりて難忘よし申て

をのつから衞士のたく火はたゆむ共誰か今夜の月を見るへき

しきしまの道は殊に有二御沙汰一事にて中殿御會なといふ希代事までおこしたてられしに此比は和哥のさた聞えねは

和歌の浦とふ人もなしもしほ草かきをく跡もさてやくち南

月は都もかはらすなからいかなる浦にて眺望か有なと申て

思ふたに悲しき物をみやこ人いか成うらの月をみるらん

をのつから御遊なとのおり〳〵はさふらふ人々のこころもすむらんとをしはかられて

いか斗心すむらんまつかせのふく夕くれのいと竹の聲

貞應(後堀河)二年三月十七日前右少弁光俊勸修寺にて詩歌合し侍しに花開古寺中といふことを

をのつから花やあるしとゝはる覽ふるき野寺は住人もなし

軒あれてしのふそあをき白妙の花のしたはる春の山寺

暮山霞色多

立まよふかすみを分て出にけり山のは遠きゆふ暮の月

花の色はさなからこもる山のはの霞にあまる夕附日哉

水鄕春望滿

大井川くたす筏のをとはして霞に見えぬあけほのゝ空

あけほのや霞はれ行うら風にみとりにのこる志賀のはま松

同題を女房にかはりて花開古寺中

初瀬山ひはらの霞吹風にたえ〳〵しろき花のむらきえ

たつね來て花みる人のまたもあれなふるき野寺の春の夕暮

暮山霞色多

よし野山まつふく風の音はかり霞にもるゝ夕くれのそら

山人のかへる夕へやまよふらんかすみそたてる峯のかけ橋

水郷春望滿
玉しまやこの川かみのもとつゝきけふりにまかふ春の青柳
かすめらん千世のふる道あとやあるみゆき絶にし芹川の里
同夜當座にて探題を人々よみ侍しに野外殘鶯を
しめをきしねくらの花の散しよりひとり春なる野への鶯
河　風
みちのくのゝたの玉川行人の袖に吹こすうらの鹽かせ
池　鷺
こやの池のあしまにたてるみと鷺のをのれもあをき曙の色
同夜又詩歌合侍しに山水落花多
この比は散敷はなに埋れて音はかりするやま川の水
こきませし櫻なるらし山河にみなかみ青き玉のを柳
春の歌とてよみ侍し
ゆくてにも結ふはかりはなかりけり雪間に青き野への若草
あけぬるか櫻吹おろす山風に霞かゝらぬよこくもの月
あらし吹よし野の奥をいとへともいつれの山も花はちる覽
霞むよの月やこすゑにはれぬらんたえ〳〵白き花の下かせ
鳥部野のかたへまかりて古き墓所ともをみてよみ侍し
みし人のけふりと成し野邊に來て古きそとはを哀とそ見る
夕　花
たつね來てみる人もなき夕暮にいたつらにちる山櫻かな
夏歌とて
鳴蟬のこゑもあきなる氣色かな夕日冷しき山の下かせ
郭　公
ほとゝきすほのかたらひて夕附夜あか月やみの空に過ぬる
内裏女房花合にまけて花にさしていたすへき歌こひ侍しかは
吹風も治れる世は音もせてのとかに匂ふ花さくらかな
荻　風
荻の葉にしはしはかこつ秋風の尾花によはる野への夕暮
夕　鹿
我のみや哀ときかん掉鹿のなく夕暮のみねの松かせ
戀
さきの世の契しらるゝ身の程を思ひしらてや猶うらむへき
關　嵐
あらし吹きの關守にことゝはん心とさむる夢やすくなき
橋本社に讀て奉り侍し秋十五首の哥
をのつからよるをく露や殘るらんあさひかくれの庭の萩原
をみなへし露にぬれ行花かつらゆふ暮かけて秋風そふく
をのつから露も殘らし秋風の吹みたれたるをかのかるかや
軒ちかきまかきに荻を植しより秋かせきかぬ夕暮そなき
山のはのきりとひわけて行雁の羽風にしろきいさよひの月
さよふかき松のあらしに聞そへて鹿の音つらき秋の山里
あけぬとはゆふつけ鳥やしりぬらん霧によふかき逢坂の關
花すゝきほさかの駒やまかふらん玉しく庭の月の光に
いたつらに月も水草に曇りけり見る人もなきふるさとの池
さひしさは人もをとせぬ山寺の月に更ゆく軒のまつかせ
あけぬるか山のは遠きむさし野の尾花か末に月そ殘れる
たれか又近き(とイ)枕にかこつらんわかさと遠き衣うつこゑ
散つもる紅葉色こき庭の面にをのれまされる白菊の花
あら玉のすこか竹垣みえぬまて茂れるつたも紅葉しにけり

さらてたに秋のゆふへはかなしきに心してふけ庭の松風

朝　花

をのつから霞にこもる色もなし山のはしろき明かたのはな

夕　花

かすみつゝそれとも見えぬ夕暮は花ゆへにまつ山のはの月

夜　花

むは玉のよるのあらしに散はてゝあすは梢に花やなからん

三月つこもりころ法輪寺にまいりて

さひしとは紅葉の秋もみしかとも花散はつる春の夕暮

けふも猶人めまれなる山寺に住らん人の心をそしる

日比より三月盡日は可ㇾ惜よし前右少辨に申ちきりて侍しほとにさはる事ありてほかに侍しにまうて來て書てをきかへりける

諸共におしむへきけふの春の色を浮身ひとつに暮しつる哉

數ならぬ我身をしらて君かたゝ露のかことをたのみける哉

返　し

もろともに契し春の暮にしもあしわけをふね我もうらみき

眞葛原うらみなはてそをのつから露のかことは心ならぬを

夏山殘花

夏山のみとりも深き木かくれにやよひの花の色そまれなる

夕待郭公

里遠きたなかの森の夕間暮またれすとても山ほとゝきす

書絶後信

見る度に落るなみたの玉つさやありしむかしのかたみ成覽

水草隔船

こきかへる難波入江のあしの葉にかくれて見えぬ蜑の釣舟

旅宿曉夢

旅枕ならはぬ山の松かせにみるとしもなきあかつきのゆめ

浦　月

あかしかた霧吹はらふ秋風にたえ〴〵しろき浪のうへの月

建保五年四月比れいならぬこと大事に侍りしにおもひかけす隣家に侍きねに託宣ありて太田社にこよひのうちに哥合して奉りたらは平愈あるへきよし申侍しかは凌ニ甚雨一奉り侍き

雨中郭公

ほとゝきすなくや卯月の夜の雨に草の庵を思ひこそやれ

卯花似月

有明の月のひかりとみるまてに卯花さけるあまのかく山

社頭述懷

ふして思ふ心も苦しあすよりは太田のすきのしるし現はせ

此歌。やまひのむしろにしつみなから。詠盡て次日より平癒侍き。

貞應二年四月廿六日雲居寺の邊にまかりて夕くれいつよりもあはれにおも(ほ脱歟)えて

家を出は爰に庵そむすふへき雲井の寺は心すみけり

女のもとにまかりて侍しあかつき雨いとはしたなくふり侍しかは別もやらぬ折しも山時鳥鳴わたるを聞て

郭公ことそともなく過ぬなり雨にやすらふきぬ〴〵の空

海路秋

和田の原ゆくへもしらぬ夕霧に我うらたとる海士の釣舟

六月十九日勸修寺にまかりて前右少辨のもとにて夏

水といふをを
みな月のてる日もしらぬおく山のこかけ冷しき谷河の水
夏草
秋風のふかぬゆふへもそよきけり軒端に近き庭の夏萩
夏月
ほとゝきす鳴ていりぬる山のはに替りて出る夕暮の月
宮道明神によみてたてまつりし歌の中に春山
霜かれも春はみとりのあしを山そかひの霞みせぬ比かな
夏水
山かけの岩もる清水結ふまは秋にそかよふ峯の松風
秋雨
かせませにしくるゝ山の夕日影うつりもあへす散紅葉かな
冬松
みちたゆるふもとのさとに聞ゆなり外山の松の雪折のこゑ
旅夕
玉ほこやゆくをかきりの夕かな野にも山にも宿はあれとも
述懐
もらすなよわか古寺にちきりある宮道の神の廣き惠みを
春
天の原そらは雪けの雲なから霞にしるき春は來にけり
ねの日する野中の松にことゝはん古たれか引もらしけん
あけぬるか枕のうへに音すなり軒端の山のうくひすのこゑ
鶯のねくらの花も白雪のふりまかへたるあさほらけかな
明ぬるか鳴うくひすのこゑなから枕にかほる窓の梅かえ
難波潟かすみかくれにをとす也あしわけ小舟いまや出らん
鹽竈のかすみ吹はらふ春風にをのれまかはて立けふり哉
夢さめて玉の簾をまきもくの檜原のにしに月そかすめる
山里の窓よりきたは雪とちてにほひそうすき春の梅かえ
春風に花もにほはぬまきもくのひはらにひとり霞む月かけ
春くれは淺間のたけや霞むらんとかむ計のけふりたになし
住吉のうらよりにしも霞めとも夕日にのこる松のむら立
鶯のこゑするかたをたつねすはたれかみ山の花の下かけ
この頃そまことの雲の色ならん櫻またしきかつらきの山
朝かすみたつたのこすゑつほむより春をいそかす初櫻かな
初瀬山かすみもふかき夕暮のはなにたまらぬ鐘の音哉
山姫のかすみの袖も白妙にうつるはかりの花の下かせ
降雪に萩のやけ原道たえてあさるきゝすのあともすくなし
山ふかみ櫻にもれしときは木の綠も見えすかゝるしらくも
春のよの月吹風に音さえてまかきのすゝき淡雪そ降
浪まよりそれかとみえし松もなし霞につつむよさの大しま
たつねすは山よりおくの山さくら重る雲とみてや過まし
花かつら今やみたるゝ乙女子か袖ふる山にはるかせそふく
かつらきのくめちの神やいとふらん柳のいとのよるの月影
櫻はなさけはかつ散山風にこするそうすきかゝるしら雲
葛城のくめちのかみやいとふらん柳の糸のよるの月かけ
よし野山かすみこきませ吹風にそれとも見えす花やちる覽
早蕨のもゆる野はらの夕かすみ春は絶せぬけふりとそ見る
春雨はふるともみえてふる里の軒の忍ふにつゆそこほるゝ
故里の軒端の櫻吹かせにしのふもしろく花やちるらん
みよし野のまきたつ山の呼子鳥花よりおくのこゑそ淋しき
吹まよふよものあらしは夢なれや花の散をも現とは見す
春の日のなかゐのうらの朝なきに霞て出るあまのつり舟

くれて行春のかたみやよし野川青葉ましりの峯の山ふき

夏

白妙の色こそまかへ乙女子か袖ふる山にさけるうの花
あか月はたゝ大かたもうき物を山ほとゝきす聲なきかせそ
あやめ草軒のしのふにふきませてみとりそふかき故里の色
早苗とるかけひの水やあまるらんふしみの里の五月雨の比
あなし川水まさり行五月雨にゆつきか岳は雲そかゝれる
山かつの庭のかやり火きえすさみけふりすくなき夕暮の空
奥山のいはかき清水せきとめてこの下なからけふも暮しつ
夏ふかく茂る青葉をもりかねてこのしたくらきもりの月影
おく山の岩かきかへて夏ふかくいつ色そめて秋の木からし
をのつから草もゆるかぬ夏の日も野中のもりは冷しかり鳬
あはつのゝすくろのすゝき打靡き秋風またて露そこほるゝ
夏草のしけみわけゆく旅人の袖のみしろきむさし野の原

秋

秋きぬと音こそかはれ山里のまとよりにしの峯の松かせ
この秋もあふ瀬たかふな天の川こその渡りはうつろひぬ共
たなはたのあふ夜はこよひ數妙の玉のまくらや露けかる覽
秋萩の枝もしたりてをく露に月かけおもき宮城野の原
朝な〳〵野原の萩にをく露をかせよりさきにみる人もかな
秋風に朝日そにほふ小山田のいほの外面のをかの萩はら
花すゝきもとあらの萩にこきませて野原も秋はにしき也鳬
掉鹿のなく夕暮の秋かせに山のは寒くいつる月かけ
移しうへし昔をとへはあともなしひとむらすゝき故里の月
みよし野や花の盛も見しかともちくさのたけの秋の夕暮
あし引の山たちのほる夕霧のたえまにしろき秋の三日月
心あらはよもの秋かせ吹はらへ月まつ峯にかゝるしら雲
眺むれは月はくまなき山風に木の葉の雨のふらぬよそなき
秋風にみたれて靡くさゝのはのみやまもさやにすめる月影
まかひつる夕のけふりたえはてゝ月にそ霧の色は見えける
ふけにけり庭の尾花の露なから軒はにしろき山のはの月
あかしかた浦より西にこき出てかたふく月を送る舟人
をのつからまとろむ夢もなかりけり隣の月に衣うつ夜は
眞葛原うらかれにたる夕霜にありとはかりの松虫のこゑ

冬

我宿は松ふく風に聞なれて時雨する夜も夢はみえけり
神な月あすは時雨と思ふより秋の別の袖はぬれけり
神な月時雨は色もなかりけりぬる〔る歟〕・はかりの峯のときは木
白妙の霜をく夜半は篠竹の大宮人も袖やさゆらん
これのみや秋のかたみと殘るらんまかきの尾花庭のしら菊
山川にいくへ氷の結ふらん岩間にむすふなみものこらす
冬くれはもる人もなき小山田のかりほの庵のあれて淋しき
山かつのそともの岡のならの葉をことあり顏に吹あらし哉
山里のまとふり埋むもみち葉につれなく殘る軒の松かせ
木の葉ちる冬は來にけり足引の山かつらかき風もたまらし
山里はよもの草木の霜かれてその色となき冬そさひしき
散つもる木の葉わけいる冬のしかをのれあらはに山そ成行
はれくもり時雨るころも久堅の月のかつらの色はかはらす
まとろまて今夜もふけぬまきのやに住うき程のむら時雨哉
うつしうへし一村すゝき霜かれて虫の音きかぬ冬そ淋しき
山里の窓より北の竹の葉に朝霜むすふ冬は來にけり
たひ人の朝行袖や寒からし霜打はらふまのゝかや原

山人の山わけころも寒からし霜の朝けの峯の松かせ
初瀬山ひはらもしろくをく霜にあか月寒き鐘の音哉
家々の垣ねの竹も埋れてたかさとわかぬけさの白雪
旅人のこえぬもしるき山路かなわかあとつくる今朝の白雪
風の音もさえゆく夜半の月影に浮雲まよひつもる白雪
をのつからみとりに殘る色もなしけさ雪白き山のときは木
あとやある冬草わけてまとりすむうなての森のけさの白雪
浪のうへはかつそけぬらし降雪のしほひに白き伊勢の濱荻
難波江やあしわけを舟こきとめて雪にとまふく冬の夕暮
此頃はとやまのまさ木散はてゝならのひろはにつもる白雪
旅人のまたあとつけぬ雪のうへに月のひかりも白川の關
あさあけの山の白雪吹かせにやかてはなるゝよこ雲のそら
あしからの山路やいまはたえぬらし關の戸ふかく埋む白雪
さゆる夜の月もたまらぬさゝの戸に霰ふきいるゝ山颪の風
旅人の菅のをかさもかひやなきみそれに濡るゝのちの笹原
あり明の月もあけゆく槇の戸にあられみたれて吹あらし哉
難波かた入江の月の影さえてうら風のこすあしのむらたち
きりかくれ姿はみえす川千鳥すむや澤邊の曙のこゑ
をのづから雫にこるかけもなし氷にむすふ山の井の水
あし引の山田のかけひ音たえて氷にむすふ冬は來にけり
さよ更てなつみの川やこほるらん山かけ寒きをしの一こゑ
冬の池の月影寒し水鳥の靑葉の山も霜やをくらん
月影はたなかみ川にこほれともあしろに殘る浪の音かな
狩くらしかへるかた野の道もなしとたちの草をうつむ白雪
冬かれの梢にさはくむさゝひのたけあらは成もりの月かけ
龍田姫そめし紅葉は散はてゝ山もあらはにすめる月かけ

戀

としをへてまたあふ事やなからまし命そ人の契なりける
まとろまて待夜はさらに明にけりたのめし人や夢のせき守
山鳥のをろのはつおのますか鏡見るかけつらき戀もするかな
はかなくそ命にかけて賴みけるしなぬ別れもかゝりけるよを
君かすむそなたの空の夕かすみわか人しれぬ心へたつな
忘れしのその頃人にわかれなて賴めし末はかゝりけるみを
草枕たひねの袖の露けさにおもかけぬらす山のはの月
人しれぬわか下もえの夕けふり心のそらにたゝぬ日そなき
我思ひたれかはしらんよひ〳〵の徒ふしはまくらたにせす
たれとまたおなし枕に詠らんたのめし夜半の有明の月
わか戀はふる野の澤の埋れ水人にしられて年もへにけり
命あらはめくりあふへき形見とて袖の別にぬるゝ月かけ
あか月の夕つけ鳥も心あれこよひそ人にあふ坂のせき

雜

とまり舟おなし苫のうきまくらあくれは是もわかれてそ行
すむ人の心しらるゝゆふへかなこけのとほその松風のこゑ
山ふかみ谷しつかなる夕暮はまたもえきかぬ鳥の一こゑ
高砂の尾上のかねに月さえていとゝさひ行まつかせのこゑ
さよ更て山ものとかにすむ月にをのれひとりとましら鳴也
朝夕の煙にもしれあしのやのなたの鹽やきいとまなしとは
あか月は木々の雫のしけゝれはやまわけ衣ぬれまさりけり
なにとなく都戀しき山里にきゝも習はぬまつかせ（のこゑイ）そふく
をのつから人もとひこぬ山里の庭の石はし苔おひにけり
みやまへや心すみける曙にたかよしれとてぬえの鳴らん
風ふけはゆるきの森をたつ鷺のねくらあらはに散木葉哉

けふりたつ里の夕はとひすきてしらぬ野原に宿もとめつゝ
故郷はあれてしのふやしけるらん軒もる月の影そすくなき
住吉の松にあらそふ君か代を何れも千世と神そ守らん
墨をすり筆を染つゝすへらきにおやのつかへし道を遂ふな
わかの浦や誰をしるへにこき出て深き鹽路に迷ふ舟人
あま小舟をのかうら／＼こき出て釣するおきの月やみる覽
朝夕に雲のかけはしたちなれて君につかふる道をしらはや
思ふ事すゑもとをらぬ沼水に沈める月やうきみ成覽
山里に時雨せぬ夜は月を見てなみたはかりにぬるゝ袖哉
みたらしや非聖に迷ふうたかたの哀うきみの果をしらはや

忠信卿住吉哥合とて人々すゝめ侍しとき山春を

よし野山春のけしきの朝しめり霞にぬるゝ故郷の花

里　冬

しからきのとやまの里の淋しさは時雨せぬよも松かせの聲

旅　戀

あまさかるひなの別そうかりけるおなし都の契たになし

御室五十首の哥に初春

たましきの都にはるは立にけり東のかたや先かすむらん

雪中鶯

山ふかみ猶空さえて降雪に春も稀なるうくひすのこゑ

橋邊霞

白妙の濱なの橋も見えぬまて遠方こめて立霞かな

行路梅

道のへの垣ねにさける梅の花たか袖わかす匂ふ比かな

春　月

久かたの空吹はらふ春風にかすみかゝらぬ山のはの月

岸　柳

神なひのみむろの岸の柳かけみとりも深き水の色かな

旅春雨

ふみまよふ山路のこけの色そこきわか袖ほさぬ春雨の比

遠歸雁

歸る鴈かすめる空にかすきえて山のあなたに遠さかりぬる

山　花

三輪の山春のかさしの櫻花ひはらをわけて誰かおるらん

闇　花

心あてにそれかとそみる櫻はなかすみの闇の春の夕くれ

庭　花

をのつからとひくる人も見るはかり花ちる庭の朝清めすな

● 河歎冬

山吹の花ちりしより吉野川岩なみはやく春そくれ行

社卯花

神山の青葉ましりに咲にけるはつうの花の色そすくなき

早苗多

けふ幾日田子のもすそのぬれなから千町の早苗とり暮す覽

里郭公

春秋もしらぬ常盤の里人に夏をきかする郭公哉

岡郭公

水莖の岡への里のほとゝきすねてのあさけにきかぬ日はなし

夜盧橘

夏のよもやゝ更ゆけは橘の下吹かせの袖そすゝしき

籬瞿麥

きり／＼すなかぬ夕も哀なり籬にさけるやまとなてしこ

江螢

大井川くたす鵜舟のかゝり火に入江の螢かすまさるらし

早秋

いつもきく庭の松風吹かへて衣手寒き秋は來にけり

萩露

鳴わたる鴈のなみたとをく露といつれかそむる野への萩原

荻風

植すてゝ間人もなき故里のまかきに殘る荻の上かせ

尋虫聲

松虫のこゑする野へを尋ぬとて草村ことに袖ぬらしつゝ

山家月

をのつから風もさはらぬ笹の庵みやまもさやに月はもり㒵

野徑月

むさし野や行旅人のあともなし月の光の秋の白雪

船中月

みなといりあしわけを舟こき出て難波のおきの月をみる哉

曉鹿

夕附夜あか月やみのくらふ山木のしたゝとる鹿や鳴らん

河霧

もかみ川霧の下こくいな舟ののほるも見えぬ秋の夕暮

擣衣幽

秋のよのなかきねさめの月影に遠ききぬたの音の淋しさ

夕紅葉

をくら山夕日かくれや時雨つるぬるゝ顔なる秋のもみち葉

殘菊匂

打はらひ折袖さむく匂ひけり霜のまかきにのこるしら菊

朝時雨

神な月時雨てあくる山のはにはなれもやらぬ横くもの空

竹霜

なかきよのねさめの窓の竹の葉にあかつき寒く霜や置らん

池水鳥

冬の池の水草をしなみ降雪にをのれも白き鴨の村鳥

嶋千鳥

さゝ嶋の磯こす浪にたつ千鳥心とぬれてなかぬよそなき

松雪

しからきのとやまはうすき白雪の埋みもはてぬ松のむら立

湖雪

志賀のあまの釣する袖や寒からし雪に成行比良のやま風

惜歳暮

うつり行月日そおしき飛鳥のあすかもあらは年やくれなん

寄雲戀

諸ともにかよふ心やへたつらんいもせの山のなかのうき雲

寄露戀

別れにしそのあか月の名殘とてかならす露は袖に置けり

寄煙戀

するかなるふしのしは山しはしたに消ぬ思ひに立けふり哉

寄草戀

我戀は軒の忍ふのうす紅葉たえぬなみたや故郷の秋

寄鳥戀

尋みる野へのかよひ路あともなしたか僞のもすの草くき

寄枕戀

敷妙の枕の下にをく露はなきてぬるよのなみた成けり

曉述懷
徒にわかよふけぬとなかむれははつかあまりの月そ出ぬる

閑中燈
何となくむかし戀しき夜の雨におなしかたみの窓の燈

山旅
あし引の山路や遠き旅人のあとよりうつむ峯の白雲

海旅
たひねする磯のとまやに月をみて涙のまくらに夢そ少なき

野旅
草枕むすふ野はらの里遠み鳥の音きかぬあか月のそら

寄松祝
いく千代もときはかきはと契らし竹の園ふく松かせのこゑ

人にかはりて旅宿月明といふことを
旅人の草引むすふむさし野に山のは遠くすめる月かけ

秋花催興
秋は猶鹿の音きかぬ夕たに袖に露をく庭の萩はら

藏在所戀
宿をたにおしへぬ里にとひくれぬ誰しるへなる余所の杉村

前右少弁光俊春日社哥合とてすゝめ侍し時春風とい
ふことを
山さくら霞もしろく明る夜の横雲なひき吹嵐かな

夏雨
里遠きたなかのもりの村雨に山ほとゝきすぬれて鳴也

秋雲
山のはに入かたいそく光かなあらし吹よのうき雲の月

冬月
降雪にかれ野のすゝき埋れてのこるくまなき冬のよの月

社雜
春日山はるの光のあまねきにもらしなはてそ谷の埋木

北野宮によみて奉り侍し述懷十首哥
春の色はよそなる山のこかくれにみを鶯のなかぬ日そなき
かきりあれはをのれもさきぬ遲櫻うきみや春をしらて過南
物思ふ心のうちは夏草の茂みにもゆるほたるなりけり
思ひきやむとせなれにし秋の月雲井のよそに眺むへしとは
位山あふけは高き月を見てひとりふもとに袖そしほるゝ
かすならて世にすみかまの夕煙なに中々に立のほるらん
いつかわれ神の惠のあらはれて衣のいろはあけのたまかき
たのむそよあけはみそちの年のうちに神は誠の敎はかりを
とにかくに思ひさためぬ身の程を夢にもみせよ菅原のみや
いかゝすへき世に住わひはよを捨て入へき山の庵たになき

山家月を
時雨とは月見ぬ人や思ふらんこの葉かつちるみやまへの里

海邊月
鹽かまのうら吹はらふ秋風に（の秋かせさよふけてイ）月にけふりの色そすくなき

月明隱士家
くもれたゝあまりくまなき宿の月みる佗人の影も耻かし
物思ふ心のやみのくらきよも蓬の宿の月そさやけき

月前擣衣
月影はまたやまとをき秋のよの夢を殘さすうつころもかな

賀茂神主よしひさつくしにて身まかりける後久繼か
もとへ文つかはし侍しついてにいりかたの月もむか
しはかた見なりけんなと申て

たらちねの遠き影見と詠めけんそなたやつらき入かたの月

返し

憂なから今はかた見と賴むかなそなたの空のいりかたの月

秋のならひは大かたの袖も露けきにいかはかりかしほるらんなと申て

この比の露もなみたもふち衣秋の夕やぬれまさるらむ

返し

袖の露は秋のならひとかこちてもたえぬなみたの置所なき

とはぬ日數もあやなく積りぬれと中々ふかき夢のうちはなといひつかはして

うき夢を驚かさしとしのふまにとはぬうつゝも日數へに鳬

かへし

うき夢を夢ともわかぬ心にはとはぬ日數もけふそしりぬる

一日百首の哥よみ侍りし中にかすみを

山姫の霞の袖を吹かせにたえ〴〵みゆるみねのしらゆき

うくひすを

靑柳に枝うつりする鶯はをのれまきれてこゑのみそする

花

みよしのゝ山に住人それもなを花にはあかて春やくるらん

故里のおい木のさくらあはれなり何れのよにか植はしめ劒

郭公

山かつの園のあふちの花盛りたえすもきなくほとゝきす哉

五月雨

うちわたす沼のうき橋水こえて人もかよはぬ五月雨の比

なかむへき月のさかりに成に鳬よるたにはれよ五月雨の空

紅葉

この比は紅葉色こきやま里にしくれもしらぬ竹の一むら

雪

降雪にそことしらてややみなまし野中のいほに煙たゝすは

難波潟うらかせ寒き夕暮にあしの葉しろく雪は降つゝ

忍戀

をのつから慰む隙もありなまし人にもかたる思ひなりせは

不遇戀

契りあらは何れの世にか巡りあひて同し枕の月を見るへき

曉

あか月はたゝ大かたやうからまし夕告鳥のこゑなかりせは

海邊

さくらあさのをふのうらなし花咲て立白浪にまかふ頃かな

述懷

世中をさなから夢と思ふよりたのむうつゝもなきよ成けり

見し人は夢に成にし世中をうつゝありともなにたのむらん

山家

山里は枕におつる瀧のをとにをのつから見る夢そすくなき

懷舊

何事もむかし語りの世中になからのはしやかたみなるらん

かへりきて昔をそ思ふ故里のいた井の清水誰か汲けん

旅

關の戸ををし明かたに出つれと猶雲くらしあしからのやま

五十首哥よみ侍しとき野春駒

あはつ野の草やみとりに成ぬらん霞のうちにあるゝ春駒

雨後月

時雨つる山の木のはにうつる也ぬるゝかほなるむら雲の月

關路雪
淸見かた關の戸出る旅人のうらちにつゝく雪のあけほの

寄水戀
わか戀は山の下草しけゝれは人にしられぬ谷川の水

寄衣戀
物思ふなみたやそむるからあゐのやしほの衣いろかはる迄

古寺曉
初瀨山あかつきことの鐘の音にかならすぬるゝ我袂かな

海邊松
たまくしけ二見か浦の松かせに浪路はれ行あけかたの月

橋上苔
あれはてゝ人も通はぬをはたゝのいたゝの橋は苔おひに鳬

夜瀧水
みよし野の山たちのほる月影に玉ぬきちらす瀧の白糸

貞應二年十月廿六日津の國のをはやしといふ所にゆあみんとてまかりて侍りしほとなれあそひし遊女に十一月九日小屋野より別るとて
旅人のゆきゝの契り結ふともわするな我を我もわすれし

霰
夕間暮うらかせさえて難波江のあしの枯葉に霰降也

旅
東路やかくるゝまてにかへり見る都のやまはあとのしら雲

山寺
尋ぬれと人も音せぬ山寺のあかゐの水にすむ心かな

家隆卿家哥合に野亭時雨を
秋の野の花にこもりし宿あれて時雨るゝ比はとふ人もなし

古江寒草
難波江や行衛もしらぬ鹽風のこゑ吹とむるあしのむら立

閑庭冬月
霜枯の葎の軒をもる月のまかきの竹に影そすくなき

旅山雪深
あけほのや遠方人のあとやなき雪にともよふあしからの山

寄冬松戀
かたしきの袖の泪やこほるらん霰ふるよの松のあらしに

貞應三年三月廿七日九條新大納言基家御會に關路花
あふ坂の山の春風こゑたてゝ花に成行すきのむら立

海上螢
あけゆけはいかになるみの浪の上による〳〵計りとふ螢哉

野宿月
白妙のをはなかりしき今宵さへ猶むさし野の月をみる哉

河邊雪
玉しまや此川かみの道たえてわか里まよふ雪のゆふくれ

暮山戀
戀衣きなれの山のゆふつゆにおもかけなからぬるゝ袖かな

前右少辨もとにて當座十五首よみ侍りしに春山雪
春も猶あらくま山はかせさえてゆつるはしろく雪は降つゝ

春河風
川かみやゆつはのむらの夕けふり霞にませて春風そふく

春野遊
おもふとちすみれつむとて住吉の遠里をのにけふも暮しつ

春關月
秋の空あかしの浦にみしよりも霞の關の春のよの月

春橋霞
行人の袖こそみえねをはたゝのいたゝの橋の霞む夕暮
春岡草
岡野へやなをしら雪もふる草ににゐ草ましり春は來にけり
春嶋雲
此比もさくらはあらしやまとちやきひのこしまは唯の白雲
春旅雨
旅人や行なやむらんをかさきのおほみあし〔ち無〕ちの春雨のころ
春浦松
春の日のなかゐの浦を見わたせはのとかにかすむ松の村立
春庭竹
庭なかのあすはの神のうゐてけるいさゝむら竹鶯そなく
春池鳥
花に鳴こゑも物うきいかるかのよるかの池を人のとへかし
春里煙
立のほるあさけのけふりまかひけりたか住里の玉のを柳
春瀧水
瀧のうへのみふねの山の花盛りそれまて白し水のみなかみ
春夜戀
起もせすねもせぬ比のうたゝねにみるとしもなき春のよの夢
あまた哥よみ侍りし中に
諸共に今年のはるや春しりてみしもゝしきの花をみるへき
春述懷
心なききの關守もいとふらん花ちる比のはるのあらしを
あふさかの山のあらしは寒くとも花のふゝきは打も拂はし
雪ふれは四方の木草も白妙ににほふまつちのやま川の水

人は猶つれなき山の夕時雨わか袖はかり色はありけり
前右少弁いつもちに侍し頃まかりて採題を人々よみ侍しに水邊花を
春の池のみきはの櫻風ふけは涙よりうへにつもるしら雪
春寺
もるかなをかさきの山の春の雨こけの衣のいとゝしほるゝ
寄火戀
きえねたゝ思ふも苦しわきもこをほのみの崎の蜑のも鹽火
同所にまかりて三首題を人々よみ侍しに遠村梅
梅の花咲にけらしな遠方の霞にしろきさとのひとむら
浦歸雁
歸るかりそれかあらぬか白くもに櫻ふきまく浦のやまかせ
春竹風
故郷のまかきの竹も青柳のおなしみとりに春風そふく
新大納言基家歌合に羈中霞
春はまた草の露なきゆふへさへ霞にぬるゝ野への旅人
曉歸鴈
歸る鴈ゆくかたしらす夕つくよあか月やみは聲はかりして
山家鶯
山ふかみ鶯はかりをとつれて花なき里はとふ人もなし
朝春雨
なかむれはあさゐる雲のとちはてゝ山のは遠き春風のそら
名所花
よしの山こそ降雪のおもかけや花のふゝきの明方のそら
勸修寺僧正成寶池邊に水閣をかまへて管絃あるへきよし先日對面の時かたられ侍しをそのゝち心にかゝ

るよし申侍しつゐてに

思ひやる池のみきはの松かせにたくひやすらん糸竹のこゑ

五月二日勸修寺の僧正の坊にて曉郭公といふ事を

ほとゝきす鳴てもおしめ山のはにあけぬといそく入方の月

夕早苗

山里のかとたのさなへ打なひき夕暮すゝしかよふ秋かせ

寄山祝

ときは山おなしみとりの色乍ら松にそ千代の程は見えける

おなしき三日池の邊にてをの〳〵哥よみ侍しに山家夏

なかむれは軒端の山の雲消て青葉すゝしき風の音かな

池邊松

池水のあたりによをやつくさましたゝまくおしき松の下影

寄舟戀

とへかしななみたの海の深きえに沈みはてぬるあまの捨舟

賀茂久繼玉津嶋に參りて講へきよし申侍しかは行路郭公といふ事を

たとり行しらぬ野山の夕くれにまたて聞つる郭公かな

海邊夏月

和歌の浦や蘆の葉わけてよる舟のうきね涼しき夏のよの月

馴後増戀

知さりき人の心のおくまてもなれて悔しき戀の道哉

新大納言家庚申會に故郷五月雨

かせ渡る軒のしのふのさみたれに故里人の袖はぬれつゝ

庭樹蟬

鳴蟬のなみたの露は色やなき木の下青き庭の夏草

見不逢戀

きえねたゝ契りもしらぬ我妹子をみそめの崎にくゆる藻鹽火

北野宮哥合に春野雪

霞ゆく遠方人やぬれぬらんみそれにましる野へのあは雪

夏瀧水

布引の瀧のしら糸よるはなを螢かすそひ玉そみたるゝ

秋浦風

消のこるかけもつれなし燈のあかしのうらの秋風のころ

冬山月

あられふるならのひろはに夢さめてみ山の月を誰かみる覽

社述懷

千早振きたの宮のゆふたすきかけてそ賴む行末の空

勸修寺哥合に深山花

雲や花はなやしら雲みよし野の山もかすめる明ほのゝ色

古寺郭公

佗人のわきてはまたぬほとゝきす雲の林にこゑなおしみそ

海邊月

清見かたふしの山かせふけぬらし煙まかはぬ空の月かけ

羇中雪

敷妙のいへなき山にこえくれて里とひわふる雪の下道

夕松風

山高み夕日かくれの松の葉にこゑふきとむるよもの木枯

花のさかりに法勝寺にまかりて侍しに讀て人につかはしける

しるしらぬ人やわく覽花盛この下かけの春のまとゐに

返し

しりしらぬ誰かはわかん花さかりたちよる人を松の木陰に

曉戀

歸るさの袖になみたの餘るより月をそしほるしのゝめの道

花哥とて

今朝みれは絶まも雲やかゝるらん花に殘らぬかつらきの山

よし野山花と雲とに埋れぬ昨日は見えし峰の松はら

春きぬといかて知らん花さかぬまきのをやまの鶯のこゑ

七夕

久かたの天の川かせ吹ぬらし紅葉のはしをこゆるしらなみ

秋

おく山の岩かきもみち染はてゝつれなき松に時雨降也

冬

朝ほらけすゝきをしなみ降雪にけに淋しきは冬の山里

あさ露にみのしろ衣ぬれにけりさゝわけまよふ野への旅人

今朝みれはすむにほとりのあともなし氷そ清き冬の池水

山かつのかきほもしつむ夏草にをのれまきれぬ撫子の花

庵結ふ誰かまかきのあとならんふるき山路に殘る白菊

移ろはてしはしはにほへ庭の菊ことしまた咲花もあらしを

あふ事を思ひ絶たるゆふへさへ心よはくもぬるゝ袖かな

ひのひかりやふしわきける世中に花咲春をまつそ久しき

難波かた鹽路も遠き朝なきにたみのゝ嶋を出る船人

眞砂ちる吹上のはまのはま風に岩打浪のこゑしきる也

身のうさにいとゝ泪ももろこしの吉野の山に宿もとめはや

旅人のあさたちくれはうねのゝにをちかた遠き鶴の一こゑ

我かとのいたゐの清水むすはすは袖の物とや月をみるへき

まかねふくきひの中山うつもれてほそ谷川も雪のした水

鹽かまのまかきの嶋の松風にのこるけふりの色そすくなき

春の日のうら〳〵遠く霞むよりもしほの煙をのれともなし

若菜つむ野への春風猶さえてかたみもおもくたまる白雪

雲の色も明かた寒き山のはの松の葉こしに殘る月かけ

あはれしれみを浮草のうきなからさそふ水たになきよ也覽

さゝなみや志賀の山こえいそくとも花の雫に猶やぬれまし

見すしらぬ故鄕人もたつねけり花の盛のみやまへのいほ

散花はのこる梢もある物をやよひの月の入かたのそら

秋の野のみくさかりふきねぬる夜は枕に近き松むしのこゑ

あさほらけ霧晴わたる河上に一村みゆるねしろたかゝや

あか月の時雨の雨やそめつらんけさ色まさる軒のもみち葉

玉ゆらの露ものこらし秋風の草葉そよきてふかぬ日そなき

いたつらに露にをかるゝ秋萩の花ふみしたき鹿そ鳴なる

散つもる木葉かくれに行水のなかれもやらぬ我思ひかな

あさかみの思ひみたれてあちきなく我のみ物をおもふ比哉

おく山のいはかけ草にをく露や人にしられぬなみたなる覽

たひ衣たもとゝをりてぬれぬらんをさゝか露を猶や分まし

みなと風寒く吹らし舟人のうきねあらそふあか月のこゑ

打よする（よせかへるイ）浪の花すり色もなし袖のみぬらすいそのあま人

柴の庵やひとり住うき深山へにともありかほにましら鳴也

鐘の音をなと夕くれと思ひけん月さへのこるあけほのゝ色

物思ふこゝろなくさのはま千鳥浪の枕になく〳〵そきく

六根之中意根

うきしつむ後の浮世を思ひしれ心の外のこゝろやはある

右衛門權佐親俊會し侍しに春曉月を

み吉野の山も霞みてあくるよの花にいさよふいりかたの月

夏庭草
花さかぬこのころ色やまさるらんおなしみとりの庭の夏草
秋山松
山姫の紅葉の袖もみゆはかり霧吹はらへみねの松かせ
冬河風
降雪に宇治の川かせこゑたてゝあさといそかぬまきの嶋人
寄煙戀
人しれす忍ふの里にやく鹽のけふりふきけつ浦かせもかな
霞間花
立まかふかすみはかりははらふとも花吹のこせみねの松風
寄葵祝
みあれやまけふ諸人のもろかつらかけてそ祈る千世の行末
野徑鹿
鹿の音もをちかたならぬ夕霧に人こそみえね宮城のゝはら
曉時雨
鐘のをとのあかつきつらきね覺より我袖ぬらすむら時雨哉
初祈戀
思ひたつけふみてくらのたむけ草末葉もあたに靡くよも哉
河朝柳
あさ露の玉しき川の玉やなきにゐる鳴もりのかさし成らし
杜郭公
ほとゝきす鳴や泪の下露にぬれて冷しきころもてのもり
草花露
秋風にさなから露やこほるらんまかきになとか庭の萩はら
行路雪
あらち山やたのわけ行たひ人の袖に吹まく雪の夕かせ
誓契戀
あたならぬ其かねことを頼めとやいさまたしらす人の心は
寄竹述懷
百敷やみきりの竹をみし秋もみとせ隔てつ雲の通路
湖歸雁
志賀の浦沖にかすみて行舟や遠さかりぬる春のかりかね
故郷螢
ふるさとの庭の夏草ふくかせにをのれみたれてとふ螢哉
山中月
人も見ぬみやまのおくの月かけにいたつらに吹松の秋風
夜千鳥
岩にうつあら磯なみの夜の月かたふく浦に鳴千鳥かな
恨絶戀
忘らるゝ身を秋かせに眞葛原うらみはてゝも露そこほるゝ
寄石述懷
味氣なく淺瀬に沈むさゝれ石のこまかに物は思ひくたかし
前伊勢守清定舞女いさなひて吉田に詣來て遊ひ侍て
のち二三日はかり有てつかはし侍りし
乙女子か雪をめくらす袖のかにうつりはてにし我心かな
返し
をとめ子かたちまふ夜半の袖のかの心に殘る色そあたなる
故郷月
故郷の忍ふの露をふくかせにかけみたれゆく軒の月かけ
海邊戀
等閑の契りはかりを松しまやおしまれぬ身もとしはへに鳧
羇中夕

たか爲と結ひはおかし草枕これも契りの野への夕くれ

曉擣衣

あらし吹遠山もとの里つゝきあか月さむく衣うつなり

暮山鹿

さひしさはしくるゝ雲のたつた山夕日かくれに鹿も鳴なり

濱殘雪

おほとものみつの濱松あらはれてふれとたまらぬ春の淡雪

嶋　柳

ことし行にゑ嶋寺の玉やなき花まつ程のかさし成らし

珠簾葵

玉簾かけてむかしそ忍はるゝおなしあふひのかさしなれ共

十三夜

數ふれはけふ長月の十日あまりみよともすめる山のはの月

淵底鹿

わか庵の枕のしたに聞ゆなりたにかくれ行棹鹿のこゑ

里初冬

菅原やふしみの里に冬の來てけさ吹かはる松かせのこゑ

山路戀

人めのみ忍ふの袖の道はあれとかよふ心のしるへたになき

海路戀

我戀はやへの鹽路をこく舟のうきて契りの何をたのまん

夕聞法

歸るさの家ちわするゝゆふへかな聞にうれしき法の庭人

曉無常

みし人を夢になしてもねぬるよのあか月かたそ物は悲しき

名所月

月影の氷しきつのうらかせにをとはしくれの住よしの松

曉擣衣

この比のあか月寒き月影に里も殘らすうつ衣かな

月

をく露にぬるゝかほなるひかり哉よやふけぬらん袖の月影

おもふ事なくさめかねて（むやとてイ）詠むれは更行月も袖ぬらしけり（月にそそてはぬれ増りけるイ）

わか袖のなみたに月そのこりける草葉の露に嵐吹よは

秋の夜はかならす露や結ふらん袖になれ行山のはの月

秋のよは露もなみたもあまるとてしほらし袖にやとれ月影

無　常

はかなしやいつまて草のいつとたにしらぬ命や殘るしら露

ありはてぬ命も露もあたし野の草葉になひく風やまつらん

春野風

野へ見れはこそのしら雪むらきえてなひかぬ草に春風そ吹

白妙のはなのゝ霞ふきわけてさくらいさよふ春のゆふかせ

あはれ秋露もなみたもいかならんそよかぬ荻に野への春風

行路夏

玉ほこのゆくてもたゆき夏の日に山陰もなきむさしのゝ原

夏草の露わけころも吹かせにしはし冷しき野へのかよひ路

見渡せはおちかた白き旅衣ひもゆふかほの花にそあるし

秋山雨

村時雨もる山かけにをのつからぬれぬ紅葉も色そさやけき

たつた山小倉のみねは雲とちて殘る紅葉を時雨にそみる

秋も猶すきの葉青きあしからのやへ山しくれ何を染らん

閑居冬

人とはて木のはに道は絶にしを猶ふり埋む庭のしら雪

をのつからとひこし人の道もなしすゝきにおもる庭の白雪

社述懐

春日山花咲はるもよそなれはうきみはかりや谷の埋木

春日山花さく藤のなかにしもなと春しらぬうきみ成らん

野朝露

あさほらけ草葉におもき白露をさなからこほす野への秋風

初瀬川河瀬も見えぬ夕きりのたえまに青き二本の杉

寄虫戀

我のみや鳴てもきかんきり〳〵すひとりね覺のあか月の空

五百弟子品

女郎花おひぬ野原の朝露にうきこときかぬ袖もぬれけり

朝夕のけふりもしらしおく山にのとかに法を聞そうれしき

前宮内卿家隆卿人々すゝめて彌陀四十八願をよませ侍しとき聞名具徳のこゝろを

あひかたくうれしき御名を聞しより早く悟を得ぬ人そなき

月

月すめは秋も氷を敷妙のまくらもしらていくよへぬらん

無常

あらし吹花や紅葉の色をみてわかよをしらぬ人もはかなし

月前鹿

秋萩の花に起臥なく鹿のかけあらはなる宮城野の月

月前戀

いかにしてしほへてみせんさよ衣月の雫はなみたなりけり

清水の地主明神に奉り侍し述懐哥

のほるへき道はあれとも位山ふもとにまよふ雪の夕くれ

住わひて浮世そむかんみやまへの草の庵にけふりたゝすは

前右少辨百首哥みせにつかはしたりしおくに

もしほ草かきすて難き中にまたたまに聲あるわかのうら浪

宰相中將公賢卿よをのかれて侍し頃前右少弁光俊のもとにつかはし侍りし

八座やはねの林も何ならしさとるはちすのこゝのしなには

返し

ことはりやうき言葉のしけゝれは羽林をとひわかれける

隱岐院(後鳥羽)御のほりあるへしなと申侍しころ

哀とてしつむもくつをかきなかせ興津しら浪立もかへらは

返し

興津浪たちもかへらはもしほ草かき置跡も空しからしを

雪中鶯

雪とつる窓より北の梅かえに花を遅しと鶯そなく

山花

みよし野の山にゐる人山にても花にはあかて花や散らむ

河上月

ぬきとめぬ玉しま河の波のうへに秋の氷を結ふ月かけ

曉燈

かきりあれは月は入ぬる秋のよの長きねさめに殘る燈火

閑庭露

松かけのあさちかうへの白露をたまゆらをかぬ庭の秋かせ

寒夜水鳥

風の音のさゆる霜夜もあしかものさはく入江は凍らさり鳬

朝氷

山川の岩にせかれてたつ浪のさなからこほる冬のあけほの

いつまてそ草に忍ひし沼水のあらはにこほる冬のあけほの

野雪

をのつから秋の名殘のむらすゝき埋みはてゝそ野への白雪

山家霰

あられふる音もさひしき槙のやのねさめに殘る山のはの月

寄鳥戀

こゝろさし人は淺せに河鳥のうきみしほれて啼ぬ日そなき

被忘戀

忘らるゝ宿の垣ねのあをつゝらくるものとてそ人も待れし

河

そま川やおとすいかたの瀨をはやみ棹も取えぬ涙の通路

古寺月

はなすゝくあか井の水に影みえてこけの軒もる山のはの月

述懐

徒にみそちあまりの春の夢おもひ覺てもおなしよそなき

世をのかれて後さかの草庵にて

よしやたゝ草の庵のかたひさし久しかるへき此よならねは

三月晦ころ修行に出侍しあとに詠みまかりにけると聞ていそき都へ歸りて侍しとき俊成卿女のもとより

みやこ出し春のわかれの旅衣やかてそふちの色に染まし

返し

ふる里にかへれは染るふち衣たひねの袖はぬれし數かは

八月十日ころ月あかきよ嵯峨の草庵におろしこめて侍しを俊成卿女入堂のついてに人をつかはしさしもあかき月をもみぬうたてしきよし申されて侍りし返しに

むらさきの雲に心をかけしより月の行衞もしらす成にき

返し

紫の雲まつ人は山のはの月のひかりにさしてこそゆけ

右藤原光經集得古寫一本挍正了

群書類從卷第二百六十

和歌部百十五　家集三十三

源孝範集

わかの秘事をかきて守實（號瀧野堂賢成氏ノ弟）にたてまつりける時つゝみ紙に

敷嶋の道のひかりもおくあれと八千世の君にかきそ傳ふる

いなかわたらひに侍けるころ冷泉大納言入道許にふみたてまつりけるに

おほけなき心を和歌のうら波にかけていたつら袖そ朽ぬる

十七日いにしへは征夷大將軍家御弓はしめけふそかしと思ひてゝ

梓弓けふひきそむるいにしへに春もさそひて立かへりなむ

雨夜もすからをとつれて寒き明方にと山の雪を見て

明わたると山は雪の色そへてふもとにさゆる夜のはるさめ

きさらきの中の十日あまり花をこそなとまつころに風さむく空かきくらしてはては雪ふりいてゝひめもすふゝきなとこしちにいふらむもおほうにやとなかめ暮したるにとなりわたらひしめたる宗春法師のくれもかゝる空を心あらんわかきものなと尋とふらん又した待もすらんなとたはふれて申をくるとて

ふりかくす雪の心をうらみてもしたにや君か花を待らん

と申をくりたる返事につけて

春さむみ花はこゝろもかけぬよにふりくる雪そ情かほなる

その夜空もさりけなくはれて曉ちかきほとさすかになさけあるひかりの春とも見えす又冬のおもかけとはいひかたきに雪のはる〳〵とつもりたるなかめつゝさえかへるをも忘れたる折ふしよみ侍りける

月はけさ霞をよきて在明に春ふりかくす雪の色かな

とし久しくなれたる友たちの侍しかおのわらはにめてゝ子にてあれなと申けるに扇を出しける玉かつらの君のためしもなとたはふれこと申て哥よみけるをさらはこの哥扇にかき付よとすゝむる人のを葉にしたかひて

もとたちのはふき忘れぬ玉葛さりとて人にかけやはなれん

二月十三日いつも聖廟法樂とて靜勝軒太田道灌にて一續侍しに梅盛

薄くこき色香もわかぬ梅のはなひとつにかほる春の明ほの

世中はうつろふかたをねたむならひも侍らんにかのわらはに扇はなのえたつかはしけるもはゝかりおほく老の波たちかへりわかやかなるやうにみくるしかるへきをおくひて

逢坂はまたきうき名のくるしきにかよふ心の關やすへなむ
種玉庵宗祇を後に京より下りきたりける（文龜二年下向江戸館）ほとなく立歸り手向のぬさなとになすらへてつかはしける時
なれこしか齡もともにふる河や又も逢みん立わかれても
かまくらのさとにまかりて見るにあらぬさまにあれはてし處々に神の御社なともかたはかりなる中にえからの宮にまうてゝむめの咲たるをみて
京進之内 里ふりぬなに中々の梅かゝは春やむかしも忘れぬる世に
月うちくもりさすかに梅もうちかほれる折ふしに
うちくもり霞にゝたる月影にはるのものそふ梅の下風
宗祇のかたへつかはしける
こしの空いや遠さかる傳もうし鴈は秋ともたのまるゝ世に
としの節會には禁中の御かきのもとなとにたゝすみてまつりことのおもむきなとおかみたてまつりしに公卿殿上人なとのなれたてまつりしも思ひ出て戀しきに世をはやうしたまう人もあまた傳へきくにまたおなし世におはするも都の外所なるをおもひやりて
この比の月こそあらめみし友を霞へたてゝすむ世なりけり
春のはしめ空さむく前の河邊も永ゐてむかひの峯は雪ふりかゝり春ともおほへ侍らねは
春とおもふこゝろの外に色もなしみきはの氷みねのしら雪
曾祖父貞範建武二年藏人になりてふた月はかりみやつかへけるころみちのくにゝゐひすのそむきたてまつりけるしつめにつかはされけれは藏人を辭申てかふむり給はりて左近將監にてくたりていくほとなくゐひすをせいしてかへりいりけるに賞はのぞみにまかせんとの給なりけるに昇殿を申ゆるされてありしとなとおもひいてゝ
京進 よもきふや枯にし跡のひこはへを我身に頼む春そまたるゝ
かくて其年のくれにわつかに爵をたまはりける。
みやこにすみ侍りし比世間みたりかはしきによりて主上仙洞室町殿にすみわたらせ給ける比大夫判官みはしのもとをまかり過とて折たるよし申て橘のえたにつけて　　　政行　二階堂
咲匂ふ花たちはなも君ならて誰にみはしの梢ならまし
返し
たちはなの匂ひも深きなさけにてけふを昔とのちは忍はん
心敬法師の遠忌に對橘問昔
墨染の袖のかたみの夕かせはけふのむかしをさそへ立はな
月前郭公
郭公かたらふ月もそれなからみし世の人はいさよひのそら
秋のはしめつかた音譽上人へつかはしける
この里をいく田の杜の陰ならは秋はいかにと人もこそとへ
むさしの國としまといふ郡に入江かけたる所に住侍りけるまへはよし蘆なとしげりて鹿のつねにたゝすみける山とをき所なれはめつらしくきゝをるまゝにちかきあたりに都人のくたりて住けり夜ふけはめさましてきゝたまへと申つかはしたるによな〱枕をそはたてけれとも聞侍らす人の聲なとのとをきを聞なして申にやとかこちをこすとて都人のうた

曉のふなもよひするあまの子のかひよといふを鹿と聞らん

返し

軒ちかく鹿立ならす宿とひて侍しよころのかひよともきけ

守實より九月盡菊をくたさるとて

けふのまの花とはかりに君もみよ此一えたの秋のこゝろを

此御返り御つかひをまたせて

白菊に君かなさけをおりとめむ秋こそけふに暮て行とも

しも月廿三夜ふけ行けしき松のあらしとしほのみつにこゝろすこくて

月まつとおほえす更る冬のよのしほにことふるうらの松影

ともたちなりける人かみつふさにまかりて久しくたひねしけるにつかはしける

京 しも拂ふしるの浦風身にしめてうなかみかたに月をみる覽

四品なとゆるさるゝ事二三代中絶しにわつかに叙爵いまゝにて年をへけるを歎きて百首歌よみし中に

京 おち瀧つ淵まく水にゐるをしの浮てそ廻るのほる瀬もなく

ある人の旅にまかりたる宿に時雨ふる夜とまりて

心あるやとのかたみの板ひさし時雨ふるよそ思ひしらるゝ

八月の末はかりこその比ころ逢見そめしなと申つかはすとて

なかめわひぬ新手枕のきぬ〲に露かけそめし有明のそら

都にすみ侍し時一條攝政家御歌合に閑庭虫

京 目くるれは虫のねさそふ心地してあさちかたよる庭の秋風

逢恨戀

あひ見ても有しつらさをかたる夜は枕ふたつの中河の水

殿下をはしめたてまつりて各なのめならす褒美したまひしなり。

和哥所御哥合に哥たてまつるべきよし仰られしかはよみてたてまつりし内戀東西人

京 逢坂のこなたかなたに契りをきて行もかへるも人や恨みん

攝政殿をはしめ申てみた感嘆なされし。おもひでになん侍りし。

三位入道常閑許に暮秋山

京 小松原おはなましりの山のへに波こす木の秋かせそふく

大納言持爲卿ことの外褒美ありしなり。

初秋月

同 くる秋をまちとる桐のはつ風に木の間もとむるよひの月影

招月庵正徹書記感嘆ありし哥なり。このほか所々にての哥あまたあり。しみなもらしにけり。

石山の座主の坊に杲守僧正の花をうへ給て

年をへはたかうへ置し木すゑとも知られぬ花や庭にのこ實

とありし櫻のさかりにむかしのあはれにもよほされかりまかりてよめる

同 花さけはたかうへ置し梢そとたつねみる世をなと恨みん劔

千首哥すゝめて人の太神宮にたてまつりけるに花

しら河やさくらそ春の關ならむこれより花のおくは有とも

みなみのはてにいつくともしらぬ山陰のやうなる處よりけふりのたつをみて大原山なとの面かけうかひて

大原やすみやく色にまかへつゝたかかくれ家に宮柴たく覽

山舍烟なといふ題のあらん時あらはしたくそ侍る

冷泉大納言入道持爲逝去に

さても世に人はふりにし長月の時雨はかりそ廻りあひぬる

平常縁百ケ日に

ふりぬとも思ひわかれぬ夢なからまつ心地して百夜明しつ

三轉法樂之内

我君のはつもとゆひの黑髮よ千世ふる霜のしらかなるまて

豆州主君樣御理髮申侍りしことをよめる

よそなからつねは申かはしける人のもとへはしめて

まかりて庭松

京袖かけてけふそめなるゝよそにても風のつてきく庭の松かえ

京進不レ入哥。題次第不同。

早春

きのふこそ忍の岡の春の色世にあらはれて立かすみかな

梅

誰か袖にちきりをきてかむめの花夕の空を匂ひゆくらむ

梅浮水　竹間鶯

瀬をはやみ流るゝ水も心してしはしさかまく梅の一ふさ

呉竹の葉分のひかけもるかたにえたうつりして鶯そなく

花盛　花薫風　歸鴈

花さかり山のならひは風さえて下おれきかぬ雪の暮かな

吹風のいとによらるゝ物ならは花の匂ひやくりためてみむ

夕暮の軒端にちかく亂れきてしのふにすれるころも鴈金

夕雲雀　燕　晴天歸鴈

すたつ子にはねならはせて夕暮の空にひはりそ諸聲になく

羨やまし古巣ふるさぬつはくらめ人は人をも忘れぬる世に

月きよみ秋もわすれぬ中空に行かたたかはる春のかりかね

春曙　野亭菫

みなせ河山もとしらむ波の上に夜ふかくかすむ有明の月

春雨の名殘つゆけき才いまより明る光を花やそふらん

暮春曉月

いつまてか菫はかりの枕をもとはれぬのへの春にくらさむ

散花はかせにつけてもかこちきぬ春はやよひの有明の月

郭公

深山いてゝ天つ空ゆくほとゝきすつはさやすめよ宿の梢に

ほとゝきす雲のかよひち吹とちてしはしとゝめよ雨の夕暮

庭橘　梢蟬

夕かせは松のうらやむおもかけに花立はなの雪はらふらむ

陰くれて梢いろこく殘る日をおのれ染ぬとせみそしくるゝ

江螢

夏かりや入江のあしの又はへのみしかき夜半に行螢かな

夏草

露散てむしの音ましる草村はしのひて秋やかよひきぬらん

深山納涼

さゝの葉に霜こそあられ短夜をいつとみやまの月の下かせ

月前雪　獨惜月

よしの山有明の月にならひきていさや白根の秋のはつ雪

傾ふけはみるおに月を慕ふよにあらましかはの人そ古にし

山家月

秋行はかつちる山の下庵にこの間もりそふ月をみるかな

としをへてしめつる山の下庵に心ありても月はすむらん

紅葉

薄霧にゆふ日のなこり照そひて松の色こき峯のもみち葉

立田姫そめすは露のはへもなくふる葉乍らや秋の木からし

過やすき時雨をとめて岡のへの梢にみする秋の明ほの

　　秋　別

歸りこむほとをはいつとたのめともあきやは人に夕暮の空

　　秋漸暮　　暮　秋

よな／＼に影はいかなる長月の月をさそひてあきや行らむ

朝な／＼しくるゝたひに染まさる草木につけて秋そ暮行

虫のねも野への眞葛もかれはてゝとまらぬ秋を我そ恨むる

　　暮秋思人

行あきに衣々ならふ有明のあかつきはかりうき身ともかな

　　初　冬　　落　葉

年の内にふたゝひかへて立田姫そむるころもに冬は來に鬼

神な月はるてふけさのうすくもり霞とみれはしくれ來に鬼

あし引の山したかせの吹上に雲のはかけて散梢かな

　　千　鳥

から衣うらさしかくす夕しほにさはく千鳥の跡のしらなみ

軒ちかく夕しほのほる川くまに浦よりかよふ千鳥鳴なり

　　雪　　松　雪

花の色月の光にたくへしは消てはへなき雪の明ほの

松の葉に氷ちとめぬしら雪のなたれておつる夕暮のこゑ

　　冬　嵐　　冬擣衣

ひときほひうすまく雲のゆふあらしいつれの峯に霧を吹覽

神無月松かえしほる木枯はこの葉みたれし夕くれもなし

冬ふかき月はみなからうき秋をわすれかたみの衣うつ也

　　七夕別

七夕のわかるゝ袖のなみたをや水上ならむあまの河なみ

　　草花色々　　石山法樂

をみなへししをに朝顔藤はかまいつれを秋の色としもせん

　　擣　衣　　月下擣衣

手枕のすきましらする秋風におとろかされて衣うつなり

衣うつひゝきに袖の露ちりてかたしく月の宿そあれ行

　　南北擣衣　　霧隔船

梅のはた咲ちるえたはかたを分夜さむはおなし衣うつ也

こゝろしてかちこたへせよ夕きりに行かた見えぬ波の友舟

　　秋　山　　秋　橋

もみち葉の色にわかるゝ山松はみとりなからや露のそむ覽

秋をまつ逢瀬やいつこ山おろしに紅葉をかくる波のうき橋

　　遠尋虫聲

暮にけり所定めぬむしのねにわけこしかたは霧かくすまで

　　山家聞虫　　高徧月

とふ人をしはしと思ふ柴の戸に心もしらぬ日くらしのこゑ

かせしほる外面の竹は末ふして松のみたかきには月かけ

　　忍　戀

苦しさをしゐてもたへしあちきなく我身獨の浮名なりせは

　　新　戀

初瀬河かへらぬなみに物おもふ心をすゝるみそきをやせむ

　　連夜待戀

こよひかと月の姿のかはるまて頼めぬ空をなかめなれぬる

　　忍尋緣戀

色かへぬ松や檜原のしる人をまつたつねてそ三輪の山もと

　　俄初逢戀　　逢夢戀

おほろけに朧月夜のためしとはたのめぬ空にしく物そなき

夢のうちの夢のたはふれ夢ならて慕ふ衣々なとうつゝなる

　　　思

うちなひくお花かもとの草の名はなを枯やらぬ秋の夕しも

いつよりか人のつらさの種そへて尾花かもとの草をつむ覧

　　　寄露戀

秋の色になへての草もかこたれて袖のゆかりや武藏のゝ原

　　　寄關戀

面影は身をもはなれすなれ〳〵て別れしかたはしら河の關

　　　寄獸戀

小車のわすれはてしと忍ふまに牛かふほとの庭のよもきふ

袖のうへにひのくま河は流れても水かふ駒のかけやなか覧

　　　寄霧戀

たつねても又や櫻のみへかさね霞める月の行衛しらねは

　　　旅戀

出てこし程は雲井の有明にさそ今こむとなかめわふらん

　　　恨　　　追日增戀

かけはなれ思はぬ人はつらからす辛きも契うきもなくさめ

松のみか時雨もかけし袖の上こゝろのいろのあさな〳〵に

　　　曉嵐　　　晩汀篊

ふかき夜のね覺の枕そはたてゝよもの嵐をきゝあかすかな

篊士のつなくねりそもくたけよと汀におつる夕あらしかな

　　　夕　　　雨中綠竹

のき近くねくらの鳥はしつまりて竹ふく風の夕くれの聲

をやみなくみとりを洗ふ雨の中にもとの色そふ庭のむら竹

　　　山家

山人のゆきゝとたゆる朝夕は雲のみわたるまへのたなはし

　　　關旅

逢坂の山の山守いとまあれや關の戸さしを御代にまかせて

ふるさととしたふもかりの世中に草の枕のなとうかるらむ

　　　曉鶴　　　江雨鷺飛

霜まよふ空にしほれてなく鶴のまくらにおつる曉のこゑ

こと色はふりくる雨にくれはてゝ入江を渡るさきの一つら

　　　栫猿

みねの松のほりつくして鳴さるや月の桂に枝うつりせむ

　　　閑居

苺むしろしかし浮世は獨ゐてちりをもすへぬ庭の松かせ

　　　述懷

仕へつゝ榮へし方も忍はしよ道はありても身そをろかなる

濁るとも世をは思はすをろかにて心つからの身をそ恨むる

愚かにも思ひは捨したらちねに受る此身そをのつからなる

　　　寄浦祝

二道にわかれしわかの浦千鳥君か八千世にこゑかはすなり

右孝範集柰得異本無由挍正姑傳疑以俟他日耳

常縁集

春

初春霞

あしひきの山の嵐の朝な〳〵よはれはかすむはるの色かな

霞

をちかたの山のたかねをはしめにて軒はに近く霞きにけり

山　霞

春のくるいつくはあれとあしひきの山よりしるく立霞かな

子　日

梓弓はるの子日にひく松やかはらぬ世々のしるへ成らん

若　菜

きみをおもふ心はおのか爲そともしらすや賤か若な摘らん

田若菜

若なつむ賤かゆきゝの跡ならんかへさの小田のあせの通路

鶯

春なから氷は結ふ谷の戸にとけて音にのみ鶯そなく

春　雪

昨日けふと消るをみれはふりそめしたかねに歸る春の雪哉

かきくもる空とはみれとふるほともたまらぬ物や春の淡雪

題しらす

きさらきや猶も雪消の雲まよひ花にはふかぬはるの山かせ

梅

咲花は千種にあれとこのころの梅の匂ひにしく物はなし

行末の春をしらねは梅のはなおいの爲にと猶匂はなむ

梅の花春にかはらぬをはかり色をともにはなさしとそ思ふ

梅　風

とりとむる物にもかなや梅か香を枕のうへに過るはるかせ

梅花夜薫

誰か又枕にすきて思ふらん梅か香匂ふ床の小夜かせ

梅久爲春友

なれきつる春を幾世の末かけてかはらぬ梅の匂ひ成らん

梅欲散

散ことは風たゝぬまを待はかりうつろふ梅のはなの色かな

柳

かせたゝぬ朝けの庭の青柳もひかけに露のたまらさるらん

柳　露

こきちらすかせや吹らむ青柳のいとにたまらぬ露のしら玉

門前垂柳

朝またき分入人の跡しなく露うちはらふかと柳かな

春　雨

あふきみる心を花に先たてゝ今日もや雨になかめくらさむ

待　花

つれもなき花に心をさきたてゝいくたひかゝる峯のしら雲

いまはとて心いくたひ通ふらん花にさきたつみねの白くも

雨中初花

世を捨て住身を人のとひやせむ花さかぬまは三芳のゝおく

わきてなを雨もや花をいそくらんよそに先たつ庭の一もと

あすまてはまたれしとてや春雨のけふ降そらに花の咲らん

朝　花

あさな〳〵雲たちそひて小倉山みねふく風は花の香そする

題しらす

ひのひかり月の影をも朝夕にそふるとみゆる花さかりかな

夜　花

いつくにか花はさくらむ春のよのねさめの床に匂ふ山かせ

春のころ故郷にかへりて

うかりつる昔のたひもふる里のことしの花に猶やわすれん

故郷夕花

霧こめし秋の月こそよそならめかさしに匂へふるさとの花

題しらす

世は何と移ろひかはるふる里のむかしなからの夕くれの花

歸りこん君か爲とや古里の花も八重たつ錦成らむ

うき世とていてしとやおもふ山櫻春のいくよを冬籠して

栽　花

うつし植る花や咲らん山里の軒はにつゝくみねのしらくも

春植物

山さくらあかぬなかめにくるゝ日の心や花の陰にとまらん

落　花

もろく散花もやおもひなくさまん終にとまらぬ習あるよに

落花滿庭

降雪にうつもれはてし庭よたゝ花散はるの暮方の宿

遠歸鴈

みるまゝになをかけ消て遠かたの霞めるそらにかへる鴈金

歸鴈遥雲

春の鴈分入末もしらくもの重るそらに音をや鳴らむ

春　月

すむ影はそこともみえす天のはらおなし雲井に霞むよの月

へたてゆく昔の春も月かけは分ぬこゝろになと霞むらん

美濃守なる人尋わたりて哥よみ侍しに

あふきみる心のまゝにくまそなきそら行月の天津はるかせ

故郷春月

月ならてむかしの春の面影は有としもなきしかのふるさと

欵　冬

山吹の花なる露やいひ出ぬおもひにうかふなみた成らん

こゝろこそ行衛もしらね山吹の又咲までの春をなかめて

河欵冬

山ふきの花のなかるゝよしの河とまらぬ春のしるへ成らん

古渕欵冬

やまふきの色より外もいにしへをいはて過ぬる志賀の花園

松下躑躅

色にいてぬ松のおもひや下露に濡るゝつゝしの心成らむ

藤

かけうつす軒端の藤やむらさきの色によりくる池のさゝ浪

松上藤

暮て行春より外は年經てもいろにはいてぬ松のふちなみ

暮　春

今はとて古巣にかへる鳥の音や暮行春のとまり成らむ

今はとてくれ行春を東路のかすみの關にとゝめてしかな

夏

更　衣

人もなをきかへまおしく思ふらむ花になれこし春の衣手

餘　花

春くれしおもかけなれや夏山の青葉に殘る花の一本

新樹

雪にたに埋もれはてぬ松の色をおなしみとりに茂る山のは

卯花

草も木もかれぬをうつむしら雪や卯花咲るまかき成らん

卯花似月

夕暮やかたわく月の影ならむ卯花かきのさとの一むら

卯花のさくをみなから暮ぬれは月の影わく里のひと村

社頭卯花

朝ことにかけぬもしけきしらゆふや卯花咲る神垣の内

田家卯花

卯花の咲る田中のかきねにはまたしら雪の消ぬとそみる

葵

神山にいつひきそめて葵草けふもかはらぬかさし成らん

漸待郭公

足山のこすゑを深みほとゝきす初音も今はせとそまたるゝ

つれもなき名をやおはまし郭公をのれ鳴へき比は來にけり

待郭公

月にたになく音つれなき郭公たれにまたれぬ恨なるらむ

月夜よし夜をさへあかす郭公なく音をしゐて誰にまたれん

久待郭公

ねになきておもひも出よ郭公またれしほとの跡の日かすを

郭公

一聲におとろかされて暁のまくらにまとふ山ほとゝきす

足引の山たちはなれたかさとのねさめをかけてなく郭公

待との心よはくはほとゝきすあり明のそらの今のひとこゑ

影ふけて月にことふほとゝきす明やすき夜のうらみ成らん

暁郭公

在明の月を殘して足曳の山ほとゝきすいつこにかゆく

郭公數聲

かす〳〵のをのかなくねに思ひしれすくるさつきの山郭公

閑居郭公

ほとゝきすこゑやまきるゝ友ならん有とは見えぬ草の下庵

盧橘

いにしへは忘れぬものを立はなの花に思へと猶匂ふらむ

わすられぬ心をなをやさそふらんむかしに匂ふ軒の立花

早苗

さなへをは田つらの雨にとりわひて賤かたもとや濡増る覽

早苗多

浮業と思ひや知らぬ（すらんイ）ますらおか小田の早苗にけふも暮しつ（つゝイ）

民戸早苗

ひき植る門田の早苗けふよりやまちかく馴て秋をまたまし

五月雨

日影さへもらぬさつきの空の雲雨はいつこをよきて降らん

つなてひく淀の河舟いたつらにのきはに繋く五月雨の比

みるまゝに猶かき曇り入相のかねよりくるゝさみたれの空

入相の鐘にやしらんくるゝ日の影もみ分ぬさみたれのくも

山河や岩こすなみのをとしるくはれぬたかねの五月雨の雲

降初したかねの雲を其まゝに晴間もみえぬ五月雨の空

入相の聲より暮てけふの日ももる影見えぬ五月雨のくも

五月雨久

かきくれしたかねの雲もさみたれの空に重ねてふる日數哉

夏月

入相の鐘きゝすてゝみるほともあらすかたふく夏のよの月
いくたひか明やすき夜と恨きて月にかはらぬおもひ成らむ
夏ふかみ軒端をかこふ蓬生にみしよ戀しき月の影かな
轉寢の夢もむすはす枕にもいさとにふくる夏のよの月

樹陰夏月

立出てよそにやとらむ夏の夜の月にしられぬ木の本の庵

夏　草

紫のおなしゆかりとむさし野の茂る草葉にわくかたもなし

庭夏草

あさちふの淺からぬ夏の色よりそ庭に人めの遠さかりぬる

夏地儀

茂りあふをかやかくれを行水の有とはみえす音はかりして

鵜　川

よな〳〵に鵜河のかゝり燒わひて心の暗や猶かさぬらん
むくひある我後の世や篝火のうかはの波の底に燃らん
哀なる夜半の鵜舟のかゝりかな心の暗のあかりならねは

螢

草ふかき賤か住家はをのつからすたく螢やともし成らん

水邊螢

早河の水にもきれて石の火の打いつるかと飛ふほたるかな

叢　螢

身をかくす宿やなからん茂りあふ草むらことにもゆる螢は

夕　立

あしひきの山の尾上を隔にて夕立くもるをちのひとむら
かせさはくたかねの雲をはしめにて軒はにおほふ夕立の雨

蟬

吹かせや空にかよへる夏山の峯よりたかき蟬のこゑかな

納　涼

山陰の茂みか下に吹風はよそにしられぬ秋かとそおもふ

秋

初　秋

草も木も洩ぬ思やはつ秋の桐のひと葉に雨そゝく暮

初秋風

落初る桐のひと葉の音なからやかて身にしむ宿の秋かせ

早涼至

いつしかとこゝろの底にこたふらむけふくる秋の荻の朝風

七　夕

秋きぬとおもふ心をしるへとやけふふくかせの涼しかる覽

待七夕

あまの河何につゝみを棚機の秋よりほかはたかくみるらむ

乞巧奠

銀河あふせそなをもいそかるゝたなはた妻の心つくしに
男星のくへき宵とやさゝかにのいとしもことに引や添らん

荻

蹈分てことゝふ人のためには秋かせならて庭の荻原

閑庭荻

身のうさは秋の夜ならぬ時もあれとあかつき遠き荻の上風

萩

をのつからなひくを風のやとりそと思ひなさるゝ庭の萩原

萩　露

心ある人の行衛の跡ならん野はらのわきてはきの下道
色かはる秋の眞萩をもる露や錦をあらふ雫なるらん

打わひていくたひ露をはらふらむうつろふ萩に秋を恨みて

分ぬれし小鹿の跡かひとゝをり花に露なき秋の萩はら

かせたにも音せぬ宿の夕とやをく露ふかき庭の萩原

行路薄

分わひてこよひやこゝに假枕夕露をもる野への小すゝき

女郎花

明なはとしめをく野邊の女郎花うしろめたくや露こほる覧

露

袖をのみ宿とはしらて秋くれはのにも山にも露みたれつゝ

題しらす

桐の葉に秋かせ立て道芝の露もおもひもふかき比かな

秋夕

つれなくもなからひにける我身かな人さへつらき秋の夕暮

秋夕風

夕暮もかせもなれにし物ならすおもひなさるゝ秋のそら哉

更になと露をは袖に殘すらむとても身にふく秋の夕かせ

題しらす

なかめやるほとは千種に（のイ）雲かけて夕の山の色そかなしき

虫

果なく音もしるく蓬生の露もたまらぬ庭の秋かせ

鴈

故郷をなれもやおもふ旅枕むすひもあへぬ初かりの聲

初聞鴈

秋かせや身にさむからん初かりの鳴こゑしけし更るよの空

鶉

いつとなく麓のをさゝ色みえて露ふくかせに鶉鳴なり

月かけはたかねに更て明わたる麓ののへに鶉なくなり

うつらなく麓の野への夕暮やなを秋かせも身にしみぬらん

鹿

岡邊なる早田に霜のむすふまてよな〳〵あかぬ小男鹿の聲

うきをを思ひいてよとさをしかはねぬよの床に音をや鳴覽

遠聞鹿

吹をくる軒の嵐やさそふらんへたつるみねのさをしかの聲

寝覺鹿

山ふかみ峯の嵐のあかつきもおもひしらるゝさをしかの聲

秋田

おしね刈賤かこゝろのくるしさや秋よりのちのたのみ成覽

霧

明やらぬ夜半とやおもふすむ人の立霧ふかき山陰の里

月

夕暮の秋をはたへすおもへともこゝろのくまも月に殘さす

人はいさ心や千々にかはるらんなかむる月はむかしなれ共

うき秋もなくさむ夜半の月影を千々に誰はた物思ひけん

つく〳〵と思ひ續けてこし方はけにさそありと月をみる哉

月のすむ雲井に行をはしめにてかたも殘さぬ我心かな

すむ人もいかになかめてなくさまむ淺茅か宿ののきの月影

長月の色にも成ぬ松の葉のいつとも分す誰なかむらん

九月十三夜くもるといふこゝろを人々よみ侍りしに

うたてなと今宵のそらの曇るらむ月に名たかき秋も殘さす

終夜見月

いにしへをおもふ心のはてそなきなかむる月は影更れとも

月多秋友

秋を經てかはらぬ友や久かたの空行月のひかりなるらむ
秋を經てかはらぬ月にことゝはんたへて我すむ庭の蓬生

名所月

花ちりしうき夕暮を秋かせの月にわするゝみよしのゝ山

河　月

山河や岩うつなみの數々にやどりをくれぬ月の影かな

山居秋月

月たにも我うき世をや隔らんもるかけきよき槇の下いほ

擣　衣 (夜聞擣)

かせさえてねぬの床の曉をおもひたゆます衣うつらむ

聞擣衣

おもふそよふけ行夜半に衣擣里の淺茅か宿の秋かせ

菊

朝しもにそれともみえぬしらきくの花は日影やしるへ成覽

紅　葉

あひに逢て色こそ増れ夕日かけうつろふ山の峯のもみち葉
露ふかく過にし方の梢をも染ての秋の色にこそ知れ

夕紅葉

暮るゝ日のおも影なからたつた山峯の紅葉の色に見えつゝ

暮秋興

今はとて暮行秋を山かけやこの葉に迷ひ小鹿啼らむ

九月盡

秋ははやけふを限としりなから入相の鐘に驚かれぬる

冬

時　雨

けさよりや音つれ初て槇の屋の軒にひまなき時雨ならまし
いねかてに更行床はよろつたゝ思ひ殘さぬさよ時雨かな

山時雨

三室山しくれふるらしもみち葉の風に亂れし跡をとひつゝ

峯時雨

龍田山みねのもみち葉散はてゝ淋しき色にしくれてそゆく

谷時雨

谷河や岩とかしはに降しくれふるとてかはる色をやはみる

野時雨

霜かるゝ野邊の眞葛葉しくる共秋の色にはえやはかへらむ

杜時雨

神南備の杜のしくれに行人の袖さへほさぬころにも有かた

河時雨

佐保河の梢のもみち散初てのちはまもなくふる時雨かな

閑時雨

須磨の關在明かたのたひ枕なみたをそへてふるしくれかな

里時雨

誰さともしくれ降らし吹かせの行衛に木のは散まかひつゝ

閨時雨

むら時雨ふるや軒はにもる露の閨のまくらに幾よともなき

落　葉

露にくれあらしにあけてをのれのみもろき木葉は何を恨む

曉落葉

しくれそと打驚けは板間にももらぬこのはの曉のこゑ

朝落葉

朝とに木葉の深くなるまゝにとはれぬ暮そおもひわひぬる

夕落葉

木枯のこのは吹まく山陰のゆふへをみても人の難面き

山落葉

あし曳の山のあらしにさそはるゝ木葉や人めまたからす覧

谷落葉

絶々に流れし水の音もせす峯より落る谷のこのはに

落葉混雨

木のはにも雨にも染て龍田姫過にし秋や思ひ出らむ

落葉隨風

いつくとも方は定めす散この葉さそふ嵐のこゝろにまかせて

冬　木

足引の山はあらしの聲もなし一葉のこらぬ冬の梢に

霜

深きよの庭白妙にをく霜や明ぬとみえし光なるらむ

枯　野

野をさむみ秋より後は刈人もかれて程ふる霜の下草

寒　草

さゆるよの枕にふかき雨の音やまかきの草のつらゝ成らむ

岡寒草

霜をわく色なりけりな小篠原をかへの草のかれ初しより

谷寒草

岩かねの苔に霜ふり水こほり谷の戸とつる山かせそふく

野寒草

一本も殘る色なき武藏のや草はみなからしもかれにけり

原寒草

草のはら下葉殘らす霜をへて小篠ならては風も聞えす

庭寒草

庭もせに夏はみえつる蓬生のかけあらはなる霜の夕くれ

池寒芦

しほれ葉は氷にとちて村芦の色なを寒き池の面かな

江寒芦

枯わたるあしの葉陰は氷ゐて入江の汀なみも音せす

難波えは舟もさはらす成ぬらん枯たつ芦も霜にしをれて

湊寒芦

みなと江のあしの下葉はかけもなし霜に汐かせ氷かされて

氷

小夜更て氷やすらし山河の岩うつなみはをともきこえす

湖　氷

波の音は絶て聞えす志賀のうらや沖まて遠く今氷るらし

瀧　氷

こほらめや那智のみ山を流れ出るたきの白浪あらし吹とも

谷　氷

鶯のなみたの氷とちそひてさそなと思ふ谷の戸のうち

田　氷

水こほりあらしまもなき小山田の庵のかよひち逢人もなし

懸樋氷

絶々の懸ひの水も氷る也いかゝはすらんやまに入ひと

冬　月

くもるへき影とはみえす山たかみあらしを分る冬のよの月

冬月寒

ねられめや月はみすとも木からしの聲より後も霜氷るよは

冬澤月

茂かりし草に霜ふるよな／＼は野澤の水に月そ澄らむ

千鳥

霜さゆる老のまくらにねをそへて啼は千鳥のいつを戀らむ

我のみとおもひやすらん啼ちとり河邊の風のさゆる夜の床

曉千鳥

河かせもなく音もともに小夜千とり曉かけて猶も寒けき

夜千鳥

小夜深くねさめさりせは千とりなく河邊の哀思ひしらめや

池千鳥

氷ゐる池のみきはを涙のよる濱の眞砂となく千鳥かな

河千鳥

やむこともなくて幾夜か佐保河のなみに濡つゝ千鳥啼らん

汀千鳥

水こほり月の流るゝ汀にておもひかねてやちとりなくらむ

浦千鳥

こよひもや妻を見ぬめの浦かせに涙をかたしきちとり鳴也

濱千鳥

松にふくかせは氷て千とりなくはまの通路あふひともなし

冬動物

さゆるよの霜のふるとさま〳〵におもひ殘さすなく千鳥哉

水鳥

夕暮の外にねくらやもとむらむさゆるなみ間にさはく鴛鳥

おもひしりぬすむよの程をゝし鴨のたかせの涙に浮沈とは

網代

あしろもる枕はさそな田上の河かせさえてふくるよのそら

網代守いはねの床も敷妙のまくらもさそな宇治の河かせ

夜網代

衣手の田上河のあしろもり我こそならめ月をみるへく

網代寒

あしろ木にいさよふ波のそのまゝに氷てさゆる宇治の河風

霰

烏羽玉のよはの霰はまはらなる槇のいた屋の床のさむしろ

寢覺霰

あかつきのねさめはなれぬ霰ふる槇のいた屋の枕ならねと

屋上霰

芦ふける宿の軒はにふる霰をとにはたてす冬のけしきを

篠霰

玉さゝは霰ふる日の名なりけり冬のみ庭に植てみましを

竹霰

吳竹にあられふりくる夕かせはたまをあつむる窓のうち哉

柏霰

しらかしの枝にも葉にも風こほり霰降くる山のおくかな

初雪

時雨ふる行衛の雲に山かせのさえしやけさの庭の初雪

心なき峯のあらしよいかならん雪にみそむる松のひとむら

雪

遠かたの山邊の雪や積るらむあさく成行木々の下陰

山たかみあらしや絶すかよふらむつもりもあへぬ松の白雪

花にすき紅葉に暮れし恨をも埋(めるイ)むは雪の明かたの山

曉望雪

宿の戸を明ぬとみれは更る夜の軒はの山に積るしら雪

朝雪

散花の梢にかへるこゝろかなみねのあらしの雪の明かた

山雪

雪のふるいつこはあれと久方のふしのたかねの明ほのゝ空

遠山雪

我宿のまかきを見てそしられける道へたてつる山のしら雪

峯雪

冬ふかみ峯にも尾にも雪ふれは待人もなし誰をとはまし

谷雪

くるとむくとゆかれぬ谷の岩の本雪に光のある心地する

杣雪

杣人のとらて殘れる梢とてやすくはみえぬゆきのこのころ（ころかなイ）

杜雪

今やまた生田の杜の千枝にさすそれもひとつに雪の降らむ

野雪

冬ふかき野はらの草や降雪のつもるにつけて春を待らむ

野邊みれは雪をひとつにいろ／＼の色は殘らぬくさの上哉

關雪

關の戸は鳥の音よりも先たちて雪に明行相坂の山

河雪

いたつらにふるとそみゆる飛鳥河水をはよきて積るしら雪

湖雪

鳰の海汀のこほりはる／＼と雪にきこえぬなみのをとかな

浦雪

浦風によりくるなみの音はかりつもれる雪にかはりぬる哉

濱雪

吹上のはまの眞砂かせこゑ濡れてけふもしら雪積ぬるかな

嶋雪

すみよしの松のあらしの音さえて淡路の嶋に雪をみるかな

田雪

秋風に立し穗なみのおもかけはさすかにのこる小田の白雪

都雪

大ひえやをひえを雪のはしめにてけふは都の庭になかむる

禁中雪

百敷や衞士のたくひも打しめりゆきに眞砂の色もわかれす

社頭雪

祝子かいかきをしむるみしめ繩ゆきはへたてぬ色に降つゝ

古寺雪

ふる雪の積れはかねの響さへよそに尾上の小初瀬の山

故郷雪

ふる里のよしのゝ宮は今もかもみしよなからに雪は降つゝ

里雪

山さとはとふ人稀にしら雪のけふも降しく庭のおもかな

閑居雪

住とたに人にしられぬ宿なれと冬は來にけり雪の降ぬる

旅宿雪

分きつる道のほとこそしられけれ宿の夕に積るしら雪

竹雪

夜なから竹の林は降雪のつもれるほとのこゑにしらるゝ

松雪

高砂の尾上の松にふる雪をうらよりかよふなみかとそみし

杉雪

かせもなく横河の杉は雪とちて木の下庵や住よかるらん

檜雪

巻向のひはらはかせもなかりけりゆき折しけく聲の聞ゆる

冬夕

みるまゝにとはれぬ庭の夕暮を雪もこゝろとふり積りつゝ

冬山

所から冬の空をやいそくらむ雪にみそむる越のしら山

冬里

愚にて住よのほとやしらるらん雪に跡なき里のかよひ路

冬禽

雪をもる園生の竹にしられけりねくら求むる鳥のこゝろも

冬獣

紅葉さへ踏分わひし小男鹿の雪に鳴ねをなと絶ぬらむ

夕鷹狩

みかりはや雪うち散て寒き日のかたふく方に鳥立をそみる

野鷹狩

今もなを嵯峨のゝ雉子音をそ鳴みかりせしよや思ひ出らん

狩場風

楢柴の木からし吹てけふも又交野の原に狩暮にけり

炭竈煙

すみかまの煙はかりに立のほり風なき山にゆきの積れる

遠炭竈

立騰るけふりあらすはみやま木の陰の炭かま誰かしらまし

爐火

いつかさて色にも出む埋火のかきあらはさぬ下のおもひを

あらしふく冬の枕もわすられてのとかにあくる埋火のもと

神樂

大内や霜に月さへ榊葉をうたふこゑのみそらに聞ゆる

年内早梅

雪降て年はいくかもあらすとや匂ひにしるき梅の咲らん

佛名

年暮てみよの佛の御名のこゑ又きくはかり積る日數歟

年欲暮

影こほる月は幾夜もあらしかし霞める空に年の移らは

惜歳暮

行年のをしきのみかはわすられぬむかしの遠くなれる心を

夜歳暮

一年はひとよ計の手枕に殘れるゆめのおもかけそみし

老後歳暮

年くれぬ又や我身の老のなみ立かさねつゝ春に逢まし

山歳暮

あしひきの山より年は暮にけり松をむかふる人のゆきゝに

河歳暮

飛鳥河なかれてけふそ年くるゝ昨日にかはる思ひほとなく

路歳暮

たまほこの道ゆき人のけしき迄年の暮こそしるくみえけれ

山家歳暮

松むかふ人しあらすは山ふかき庵りに年の暮をしらめや

閑居歳暮

つく〳〵と眺めし折の積るをも年のくるゝに思ひしりぬる

歳暮松

春のくる門に千とせをむかふとて年の暮には松をとる也

除夜

烏羽玉のひと夜を春に隔てはなをあやにくに惜き年かな

戀

初戀

つくはねの峯の木の間に落初る水や我身の思ひ成らむ

よそ乍ら人にこゝろをかけ初てけふより後の思ひにやせん

忍戀

心からおもふなみたのさのみなとつゝむ袂にたまらさる覽

人しれす心にたにも難波なるみつとは更にかけしとそ思ふ

忍親昵戀

さねかつら末葉にむすふ露かけてもとつる〔マヽ〕人の在と知れし

題しらす

侘くれは咲ぬ千種の花もなし思へこゝろのしのひかたさを

聞戀

僞のことのはなからおもふそと人の心をきくよともかな

いひ侘てつらき心の有とたにまたきゝあへすぬる袖かな

見戀

朝夕にみるめはかりを浦かせにたゝよふなみや我身なる覽

せめて思ふみるめの浦による涙のよせてかひなき心成とも

難波江や芦端をわけてみつ汐のみるめに思ひ増よ成らん

あしへよりみちくる汐にあらねともみるめに増る我思ひ哉

忍待戀

もらすなといひしを今は我からの心よはさにおもひ侘ぬる

待戀

つれもなく思ひよはらぬ心かなまつよの床の在明の空

まちなれし夕の鐘のこゑなからたのめぬ床も塵拂ふらん

毎夕待戀

待なれし入相の鐘やさそふらんたのめぬ暮に思ふこゝろを

待空戀

打侘て今宵も又やまつことを八こゑの鳥におもひ絶なん

題しらす

たのめてもとはぬ心は誰かしらん待夜いはてそうきも泪も

哀にもまつよを殘すこゝろかなかせいことゝふ窓の呉竹

初逢戀

年月をつらさひとつにつくしてもあふ手枕はその葉そなき

嬉しさのあまり成らん新まくらむすふたもとにかゝる涙は

別戀

わかれちのおもかけなから有明の月はつれなくなと殘る覽

惜別戀

わかれちに更行夜半や曉のかねより先のおもひ成らん

後朝戀

夢ならは覺る枕や賴まゝしおもひにたとる朝の別路

契れけさ逢もおもひのほかなれは又行末もいのちならすや

逢不會戀

しらさりしこひしとはかり一かたに逢ての後に思ひ有とは

題しらす

思ひいつやあなしの山の山かつらかけてつきせす歎く心を

わすれすよもすの草くき霜かれに跡ものこらぬ契はかりも

遠戀

わするなといひつる人のことの葉もいさしら雲の遠方の空

旅戀

かへるさそなを急かるゝ古郷にありて別れし人をみんとて

恨戀

こゝろ共なりける物を眞葛はらことゝふかせのすこき夕暮

わすれ行人に我身のつらさをも思ひしらするうき世共かな

たのまはやまつよの床に僞の露の情のこゝろ成とも

互恨戀

をろかさを恨る人のこゝろをは絶ていのちや我もかこたむ

互恨絶戀

朝露のきえぬは有と恨しやおもひ絶へきはしめ成らん

恨絶戀

さりともと思ふ程こそつらさをも猶こりすまに賴よもあれ

戀天象

在明のつれなき空やよな〳〵にまちもよはらぬ心成らん

戀地儀

たのむそよ人のこゝろの行末に氷とけ行山河の水

冬　戀

降雪にとはぬとみえて僞の人のこゝろもうつみやはせぬ

寄雨戀

つれもなき人もさすかにおもふらん夕の雨のつらき心は

寄里戀

ゆきかよふ心へたつなあしひきの山より遠の里にすむとも

寄草戀

かくてやはふるされはてん忘草うへしを人の心ならねは

寄鷄戀

あふ坂の夕附鳥の聲よりそうきといはるゝ曉のそら

寄鐘戀

たいまれぬ人のこゝろを恨てもさすかまたるゝ入相の鐘

寄枕戀

さりともとあふ夜を賴むおもひねの枕は夢をさそはさる覽

打侘てぬる夜とならは現をもまくらの夢に殘さすもかな

寄衣戀

ちきりつゝ送りしほとの年を經はこよひや中の衣かへまし

寄床戀

年をへてとはれぬ床の塵ならてつらき心やなを積るらむ

雜

曉

をのつからさむる夢路や更る夜の鐘より先のしるへ成らむ

關路雲

關の戶や今明かたに成ぬらむ橫雲ふかしあふ坂の山

橋

住すてゝ誰又とはぬ山ならん苔に跡なき谷のかけはし

橋　苔

すゑ絶てわたらぬ先にあやうきやこけのみふかき岨の梯

湖水眺望

行舟に俤はかり唐崎の沖津夕に殘る松かせ

夕陽映嶋

浦かせも猶音さひて殘日の日かけにむかふ淡路しまやま

鹽屋煙

蘆の屋のもしほの煙たゝぬ日も猶やすからす世に住ふらん

草菴夜雨

心からすむ身なりとも夜の雨はさそなさすかの草の庵を

鶴聲近枕

かせわたる蘆間の鶴の啼聲にねぬよの床の心をそしる

遠寺晩鐘

絶々におのへにひゝく入相や寺あるかたのおくの山かせ

田家老翁

苔をあらみ小田もる老の心にはなをたへかねて露はらふ覽

山家

松の風谷の流れの音ならてきゝこそなれねやまの下いほ

あしひきの山下陰やをのつから花にまちかくなれて待[集異]らん

山家人稀

山はふかく心はあさき恨のみいつとも分ぬまつの戸のうち

山亭人稀

蹈分ぬ苔路におもひしられけりとはれしほとの山陰のいほ

ふみわけぬ岩根の苔のかよひ路にとはれぬ山の程はみえ覺

山家述懐

浮世とていとふこゝろに任せつゝ守もあらしも山もとの庵

述懐

をろかなる心の程ををのれのみおもひしらぬや浮世なる覽

愚なる身を知なから世中の思ひにたへぬことそうらむる

年たけてなを愚なる心ともいはてなれこし人もはつかし

つく〳〵と身を思ふ時そ恨なる人やはつらき世やは悲しき

獨述懐

よろつたゝおもふに絶ぬ世中は我身ひとつの爲ならすやは

述懐非一

今そしるうき身の上のことはりに一かたならぬ思ひ有とは

世中すてやらぬ事のみなけき侍りて思ひつゝけゝる

よしやよと思ひなくさむ折もあれと絶ぬはつらき心成けり

芳野山よしやとおもふ折もあれとこゝろの果そ君のかけ道

心からすてゝはいてす世中のなをうき時や限ならまし

題しらす

とはすふる程そとふよも世にあらは思ひしるへき庭の苔哉

故郷にをくるゝ松の色をみてこゝろそつらき明ぬ暮ぬと

齋藤入道恴念に山田庄押領せられし後よみてつかはしける十首

堀河やきよきなかれをへたてきてすみかたき世を歎計そ

いかはかり莵とかしる心からふみ迷ふ道の末の宿りを

かたはかり殘さんことも今かゝるうき身は何と敷嶋の道

おもひやる心のかよふ道ならて便もしらぬふるさとのそら

便なき身を秋かせの音ならさてもこひしき故郷の空

木葉ふる秋のおもひよあら玉の春をわするゝ色をみせなん

たよりにはあるゝと計聞なれし我古里よいふかひやなき

みよしのとなく鴈金といさ[きらは]ひたふるに今君によりこむ

今更にたのむにしりぬうかりしは行末遠きちきり成けり

我世經んしるしと今も賴かな美濃のおやま[ヽ]の松の千年を

かへし　齋藤入道恴念

ことの葉に君か心はみつくきの行衞とならは跡はたかはし

かくて山田の庄もとのことくかへし[つ]て侍りける後いひつかはしける

故郷のあるゝをみても先そ思ふしるへ[あらは]はいかゝ分けん

かへし　恴念

この比のしるへなくとも古里に道ある人をやすくかへらむ

題しらす

限りあればもろこしまても遠からす月に心の末はいつくそ

寄月述懐[〔恐有脱字〕]

影きよき雲間の秋かせもこゝろのやみははらふよもなし

宗祇法師より和哥の事尋ね侍りけるによみて遣しけ

る
今更に身のをこたりそしられけるとはすはいかに敷嶋の道

題不知
和哥の浦や汀の藻くず拾ふにも猶數ならぬ色をみせぬる

宗祇法師都へ登りけるを餞しけるついでに
もみち葉のなかるゝ龍田しら雲の花のみよしの思ひ忘るな

題しらす
横雲は先立こえて逢坂やをくれてすくる關のたひびと

旅行
こよひもや小萱かもとにかりねせむ末しら雲の武藏のゝ原

旅泊
興津舟あまの浪路はしらくもに漕くるかたや泊なるらん

旅泊重夜
楫まくらうきねの床の數そひておもかけ遠きふるさとの空

佐夜中山にて
月にゆくさよの中山なか〳〵に明てはくらききりの下道

木曾路にて
いつまてかかゝるよをしも明じなん床の小莚塵にまかせて

題不知
あつま路や都のそらの戀しさに更てなかむる夜な〳〵の月
暮わたる入江のなみも捨舟も在とて明日も誰かすさめむ
今朝の山路きのふの野へも忘られて夕波荒き濱邊をそゆく
松しまや小嶋の苫屋くれはてゝなをおもかけに浦風そふく

やよひの末つかた陣に侍る比蒲庵老母身まかりける
をゆかり尋ていひをこせける　道虎
暮かゝる春に先たつ別路はいつより露の色やそふらむ

かへし
やふしわかぬ露の惠の嬉しさをあふくたもとそ色は猶そふ

題しらす
いつまてか生死のうちを思ひ草葉末の露を身にしらすして
極樂はいかはかりなる光にてこよひの月のうちにすむらん

祝
へたてなき君か惠や直なる世にふる人のこゝろならまし
靜なる世にまた立やかへりなん神ときみとのめくみ盡せす

鶴契齢
あし田鶴のすむよの程に靜なる宿のこゝろを任てそふる

題しらす
苔むしろかはらぬ色を見てもなを行末ちさる宿の若松
北の空七のほしの八百萬まもりとならむ宿はしるしも

神祇
神もさそなかれての世を守るらむみもすそ河の清き心に
妙に見神もうてなに世々かけて直き心にきみ守るらし

山田庄栗栖の社にて
花さかり所も神のみやまかな　宗祇法師
さくらに匂ふみねの榊葉

郡上郡那比の新宮といふ社にて
神もこゝに幾世か夏を杉の杜　宗祇法師
みやゐはなれぬ山ほとゝきす

慕景集

源持資

立春

山かつらいやとしの葉の末かけて霞むかたより春や立らん

庭鶯

吳竹のみとりにはふく鶯の聲も色ある庭のはるかせ

簾外梅花

露ならはみたれんものか玉すたれ月にひまもる梅の下かせ

正月廿日あまり上杉常賴入道京にまうのほりみことのりのかしこまり申のへしとて消息傳へし返しことせしふみのはしに書迹りける

ふたつなきをはりしらは武士の仕ふる道はうらみなからむ

氷川社奉納の和哥すゝめられ侍りて殘雪といふをよめる

おいらくの身をつみて社武藏野の草にいつまて殘る白雪

氷始解

今日とても及はぬ筆は隳なからけさはすゝりの海も氷らす

谷鶯

君もさみ臣も臣てふ世にしあらはいかにきなかん鶯の聲

二月の釋菜金澤の文庫にて行ふよし三好日向守勝元の許より申こされけれは隣家梅花といふ題を聖供にそへてつかはし侍るとて

はなれやよゝ友垣の近きにはとをきもなるゝ梅の下かせ

深夜歸鴈

いさとても枕の鳥のこゑ〳〵に幾夜やきこそふ天津かりかね

待花

待あへぬいのちに花をみよしのやよし立かくせ峯のしら雲

朝花

嵐ふく高根は雲の色かへて花よりあくる朝熊の宮

小田原の驛をつとめて已々かへり侍りけるに箱根の別當長巽法師か酒すゝめてあるしまうけしけるとき驛のやとりに花の散けるをみて法師酒すゝめられけるに

思はすよおもひの外に見る花のちれ餘波〔本有闕字〕をなと惜むらん

返し　長巽法師

ちる花の名殘をなとかおしむらん心のまゝの春にあふ身は

横見隼人正夢想の哥勸進せられし時夕藤を

紫のゆかりもにくむをはりやわすれてたとる藤のたそかれ

ある人さかしらにて横見氏屋形をおそふなと聞へてけれともはやくより跡なきをいちしるくてそのぬれ衣をあらひしあるしまうけのときによみてつかはしけれはむらさきのゆかりの色なとたはふれてしかなるへし深夜歸鴈といふことを神田の社にておの〳〵よみ侍るとき

啼つれて聲より聲もますらおの心にかへる夜半のかりかね

北條豐前入道則圓圭簑田といふ處に山庄めくしつらひ心やさしうしなして伊達忠春二階堂治部大輔なと我にしたしきをまねきて百首の哥すゝめられしに峯新樹といふをよみ侍りける

まちわひし花になくさむ山に又かゝる青葉の峯のしらくも

嘉吉元年五月京にのほり侍るに屋形のかしこまり申のへて皇のみことのりいたゝきつゝかへらむとせしころ畠山持國管領へしたしきえにし侍りてふりはへて暇ものしにまかりし時今川氏兼朝臣の御もとへみそかこと傳へねとてなん御はなむけたひしに駿河の府にいたりて鵜殿但馬守盛重をして申傳へしに氏兼朝臣悦ひつゝ二日府の國分尼寺菩提樹院にやとりてこゝにてあるしまうけうつ高し遠山左衞門尉宗植一色勘解由貞俊なと親しきゆかりなりけれはこゝらの宮寺にまふて侍り貞惣社やしろ雷宮健穂の高嶋のやしろなとにこゝろさしのぬさ手向侍りてよみ侍りける

ねきことや志津機山の郭公旅ゆくわれをゆふかけてとへ

梓弓かへる袂にもろ薬草かけていのらむかもの神垣

飛鳥井中納言雅世卿へ消息し奉りて添削の詠草奉るとき

一聲の歩をもらせ東路の關のあなたの山ほとゝきす

秋たつ日上杉幸丸元服せられ侍るを賀してやるとて

けふといへは初もとゆひに萬代の秋の契りを結ひこめぬる

月前往事

梓弓思ひなれしもにくみしもたへて我のみ月をみるかな

月前述懐

なをからぬ心をかくす我かけにいとはて照す月そはつかし

權中納言公富卿の許より三井寺の僧永覺僧都のみちのおくへ下りしかに消息つたへてたまはりしをふりはへてその返事奉りしそうそこのはしに

千里てふ都の空の月もかくおなしつらさに人もみるらん

細川勝元朝臣武備の要を草子めくものに調しまいらせよとのたまひこされ侍れは三卷となして更に益なしと申送り侍りしときよみて奉りける

武士の道やはかけんはし鷹のこもつちこえを心にもせは

勝元朝臣短慮不成功といふ呂蘩の作し詞なと消息のはしに書付てこのこゝろはへを問ひ給ひしかは

いそかすはぬれさらましを旅人の跡よりはるゝ野路の村雨

人しれぬ心のあたにいそききてつかれてともにふし柴の露

北條加賀守直元の許より雪のいとあつくふりてあした酒肴なと取そろへて是をなん友まつ雪のとはりにもせさせよ問むはやすけれとも跡つけむもものうしなとゝねもころなる消息なれはその返し言せし紙のはしに

跡つけて雪にとへかし天地に先たつ春のやとゝ思はむ

康正元年の冬藤澤の役に至り侍敵も味方も入ましり三日をかさねていとみあらそふ事になりぬされとも屋形の武威つよくして北條(上杉歟)憲宣(定正)のぬし終に自服して餘兵おのかしゝ空しうなるあるはあたにあたりてかたみに死するも侍る時藤澤のかたへの松はらのむれにてたゝかふ男あるに中村治部少輔藤原重頼とて京家の人の世に沈て屋形に扶持せられて侍りしになんかたきの男は栗毛なる馬に乗て二引龍ののほり龍の紋つけたるさしものなりけり遠目なから鎧の毛いかめしう見えけるにしはし戦ふて鎗をあは

せしにめの前にかたきの男つきとめて〔衍歟〕られてやかて中村手つから首を取て我陣に來りてかふ〳〵なんと語りけるにいまた壯年にもたらぬ男の色白うしてたけたか〔ゝ〕るへき心地したり鬢のあたり唯ならすたきしめつゝ哀もいやましあたなからにくからぬ俤なり中村重賴此心はへのやさしき哥ひとつものして手向にとすゝめ侍りけれはその首にむかひて

かゝる時さこそ命の惜からめかねてなき身と思ひしらすは

返し　　　治部少輔重賴

なき身とは誰もしれ共諸ともに今はにおよふをなしそ思ふ

梅

人ならは浮名やたゝんさよふけてよな〳〵通ふ梅の匂ひは

寄鳥戀

よの中にとりも聞えぬ里もかなふたりぬる夜の隣家にせん

絶不會戀

心さへそらにやならふ西に入ひかしに出る星のちきりは

文安四年の夏飛鳥井中納言雅永卿の許より故鄕橘といふをよむへきよし仰を侍りけれは奉りける

おもはゝか野中にとては植をかし昔は誰かいきのたちはな

持兼か妻三つになり侍る子をとみのなやみにてうしなひぬるつとめての年後のわさともいとなみ侍るむまこのわさに逢ぬるをいのちなかけれは耻しき世の返す〳〵も口おしきなと書くときてよめの許へいひつかはしける

なつかしく又恨めしき月日かな別れし去年のけふを迎へて〔そと思へはイ〕

持兼い妻返し

去年のけふ別れし時も今とても忘れは〔らイ〕社〔イ无〕はおもひ出さめ

述懷の哥詠しけるとき

君におき民にふしつゝ朝夕に事へんと思ふ身そおほけなき

右太田伊豆守源持資〔後備中守〕入道道灌〔號靜勝軒〕詠艸。以ニ靜勝軒靈西堂藏本ニ寫ㇾ之。

天正二年三月　　　侍從藤原朝臣共宗

一本云

右一卷太田伊豆守持資入道道灌〔号〕之平素詠艸也。以ニ前靜勝軒靈西堂之藏本ニ而寫ㇾ之畢。

天正二年三月下旬　　　侍從藤原朝臣共昧

桂林集

やまと歌は。世をたすけ國をおさむることわさにして。色にそみ香に匂ふ草木も。詞の種より出。聲にたて音になく鳥獸も。こゝろのもとをあらはさすといふ事なし。今の世中時しありて。蘆原のみたれしふしをあらため。花洛のふるき跡をおこして。弓をかくし劒をもおさむへき御代と成にしかは。まして戸さしせぬ關のひかしは。この道のさかへにあへるを。よろこひ侍へきもとはりになん。從五位下源直朝は。征東細柳營下股肱の臣たりしかと。功なり名とけ(遂)てかうふり(冠)をかけ(掛)しより。風に吟し月に嘯きてみつから月庵と稱す。遠くは遍昭か跡をたつね。ちかくは西行か風をしたふ。今古道へたゝれりといへとも。その心さしは一致なり。こゝに年ころつもれる濱の眞砂の中に。花さける金をもとめ光ある玉を探りて。家の一集となし侍らまほしきよし聞えつけ侍き。古のひしりの御代にあつめられたりし千うたはた卷も。いまた貫之かこゝろには滿足せさりしによりて。纔に三百餘首を拾て。今のゑらひ玄の玄なりといへり。與をうる事は。歌の數おほきにはよらすと聞え侍れは。今此集の本意もそのこゝろひとしかるへし。仍て數百首の中に。崑山の瑕なき片玉をみかき得て。類をわかち部を定めて一卷となし。久かたの月のかつらになそらへて桂林集といふ。かゝりけれは。一枝の外に。折のこすもとつ葉の殘りおほきうらみあるやうなれと。みてるをかく事は。天の道にしたかふ社はとしかいふ。

桂林集

源直朝

春部

早春

いつしかと山は雪けにたつ雲の消るかたより霞む空かな

つもりこし尾上の雪のむら消は所々に春や來ぬらん

霞

横雲の別るゝきはの山のはのおほつかなきや霞なるらむ

朝霞

今朝は猶霞にけりなあしひきの山のはとの遠さかる迄

鶯

みやまへや木末の雪はそれなから先打とくる鶯のこゑ

梅

梅のはな咲にけらしな鶯の谷のふる巣をいつる初こゑ

故郷梅

ふる里の難波わたりの梅かゝにいまもむかしの春かせそ吹

柳營瑞泉寺の梅御覽しけるとき梅村問笛といふことを

春くれは宿とふ人のふゑの音に吹あはすめる梅の下かせ

梅の哥の中に

このねぬる袖のまくらの朝露にのこる月さへ梅かゝそする

道のへの花は一木の梅なからおほくの人の袖そ匂へる

梅のはなかさしにさせはをのつから袖に消せぬ雪そ降ける

若菜

打むれてわかな摘なり春日野の雪はみとりに成にけるかな

柳

うちかすむ柳の糸や佐保姫の朝氣のまゆのみたれ成らん

田家柳

山賤の門田の柳春はまつ水のみとりの種やまくらん

春雨

大空は霞なからに春雨のふるえの柳いろそそひゆく

春雨はその色としもみえさりし霞の下の露の若くさ

歸鴈

いかなれは越路の月をよそにみてかへるか鴈は花の盛りを

春月

はるの夜は木の間かくれをもる影の霞てふくる有明の月

花

春はなを尋ねたをそし山櫻入日のかけの花にのこりて

むかしなと雲にまかへて詠けん花より外の花はあらしを

久かたの月は霞のはるのよに花の光そさやか成ける

峯の月なかめあかしてけさみれは木末の花になりにける哉

山櫻先みにゆかんあらましの友さそふまに散も社すれ

とふ人の有ともいまは我宿の花散庭に跡やいとはむ

ちるまゝに山の櫻のあるはなくなきは數そふ花の陰かな

色も香も花はむかしのまゝなから我身ひとつの春の夕暮

吹送るかせのたよりの遠けれは花は匂はすみねのしらくも

夜思山花

霞む夜の月はかりさへある物をさそな太山の花の明ほの

雲間花

山さくら峯になれは折々のくもや雲間の花とみゆらむ

河花

みよし野の吉野の河に淀はあれと花の波には山陰もなし

聖護院准后あつまにくたらせ給ひし時花の下に立よらせ給ひて行人も道まとふかにうつもれぬけふは宿かせ花の下陰とのたまひかけしを

行やらてけふも暮しつ山櫻君かためとや雪とふるらん

蛙

雨ふれは山田のつゝみ水越て草の葉末に蛙なくなり

杜若

いかなれは淺澤沼のかきつはたこきむらさきに花の咲らん

藤

日にそへて波やかく覽むらさきの藤江の松の枝もたはゝに

藤埋松

陰たかき松の梢に咲藤の花の聲きく春の夕くれ

老人惜春

老か世の末をおもへは年々にまさりておしき春の暮かな

三月盡

山のはのそれともみえすけふの日の暮るや春の歸る成覽

けふはや四方の山邊の春かすみ衣々にしも成にけるかな

暮はつる空そ悲しき老らくのこんといふなる春もしられす

夏部

更衣

なれ〳〵し春を殘して夏衣かへても袖は花の香そする

卯花

うのはなの咲る垣ねはよな〳〵に雲かくれせぬ月をみる哉

菖蒲

ふるさとは庭の蓬をそのまゝにあやめに添てふく軒はかな

郭公

待しよりね夜の空の一こゑを夢とはきかし山ほとゝきす
郭公なかぬよころにならひ來てそれともわかぬ今の一こゑ
ほとゝきす月の桂にやとるらし空さりけなく聲の落くる
武藏野に長障せし時ほとゝきすをきゝて
ほとゝきす夢かとたとる一聲に猶まとろまん心地こそせね
武藏野は木陰も見えすほとゝきすいくかを草の原に鳴らん

盧橘

故郷の草はみなからひともとのはなたち花の香に匂ふらむ
むかしにもあらぬね覺を慰さめてまくら匂はす軒の立はな
昔思ふさよの寢覺の袖の上に我も有とやのきのたち花

五月雨

五月雨はそれならぬ方も八橋や水ゆく河の瀨々のしらなみ
けふいくかふるえの柳打なひきなみに波よる五月雨のころ
風にあれて月もるほとはふかさりし閨の板まの五月雨の頃

早苗

田子のとるさなへいつゆの玉たすきかけて心に秋やまつ覽

夏草

露をたにやとしかねたる若草の結ふはかりにしける頃かな

野夏草

夏のゝはかやか絲もひとつにて花なるくさや秋を待らん
一本のそれともわかす武藏野の草はみなからしける頃かな

短夜月

峯ちかき小川の舟のみなれさほさすほともなき月の影かな
夏かりの玉えの芦のもとをあらみいさよふ影や短か夜の月

夏月涼

手にならす扇の風もわすれつゝ月にまかする夏の夜のそら

鵜川

大井川岸にいさよふかゝり火はゐせきにかゝる鵜舟なる覽

沼螢

むらくのまこもつゝきの沼水にみえかくれつゝ飛螢かな

螢似露

ほたる飛汀の芦のよなくにをかぬ露ちるかけのすゝしさ

蓮

紅ににほへは花もにこるとや玉もてみかく蓮葉の露

池蓮

池のおものはすの浮葉の茂りあひて水も濁れる影のなき哉

遠夕立

遠かたの空のむら雲それかともいひあへぬまにかゝる夕立
すゝしさの今誰かたに成ぬらん遠さかりゆくゆふたちの雲

水風晩涼

夕されは池の玉藻にあそふ魚の沈むはかりにかけも涼しき

竹風夜涼

我門の竹の葉そよく風の音によなく宿の夏そかくるゝ

御祓を

水上にみそきやすらん麻の葉のしからみかくる瀨々の白波
御祓河なかるゝ水に夏はゆきあきはこえくるせゝの夕波

秋部

初秋朝

今朝ははやいかなる人の心にも秋のいろをし思ひわくらん

松高風有一聲秋といふ心を

いつもきく高根の松の聲なれとけさしもいかて身にはしむ覽

七夕

天河なかるゝ水にことよせてかへらぬ中のちきりともかな

七夕別

天川暁の空にたつ雲の消かへるをやこゝろなるらむ

荻

下ふしもたえて物おもふ夕ともしらてや軒の荻の上かせ

荻の葉にかせ打そよくゆふ暮は波こゝもとの秋の故郷

萩

起わかれねすりの衣うらふれてしほるかのへの萩の下露

霧中鴈

尾上をは月にこえ来て明かたの麓の霧にまよふ鴈かね

鹿

小男鹿の妻戀すらしむは玉の夜寒かさなる山の秋風

虫

露霜は消かへりてもありぬへし哀いのちを松虫の啼

故郷虫

出ていにし人はかけせぬよもきふの宿にはかなき松虫の聲

月

さやかなる月には繪もくもるらん心ある人の秋の夜すから

今とてはたのめすとても秋はへぬ老のたもとにやとる月影

詠つゝ哀もまさりうきことも思ひなくさむあきの夜の月

相州三浦郡逗子里にしるよしして行けるに明石とい
ふ所にて十五夜の月のくもりければ

かさ擧月も詠るかひそなきこよひ明石のとまりなれとも

人の國に侍けるとし

今夜しも昔はちよの秋ならてみるをや月もさそ思ふらん

九月十三夜義氏將軍家の會に月前祝といふことを

千々の秋みるともあかし君か代はそらゆく月の影たえぬ迄

野月

春の山も忘れにけりな秋の野の月と花とのゆふくれの空

名所月

難波かたしほみちくれは汀なるあしの末葉にかゝる月かけ

遠山霧

そらはれてあくる麓の霧のうみにうかひ出たるむさつ嶋山

河霧

秋ふかみ霧たちこめて山河の岩こすなみも下むせふなり

山家秋風

山ふかみ露しく袖もわかぬ夜のねさめならはす松風の聲

草花露

ゆふされは尾花か波もくたけつゝつゆを分ゆくまのゝ浦風

野分あらかりしのちのあしたに

露ふかきのきのむくらの風はれて庭もまかきも野への秋風

河の霧を

落灘津河せのなみの行かたに霧の聲きく秋の夕暮

紅葉

時雨ゆく雲の衣ををりかけてから紅にそむる山のは

河紅葉

淵も瀬ももみちになりぬ立田河くれなゐくゝる水や絶なん

月照紅葉

夕しくれ過ぬるあとの木々の色をまた一入の山のはの月

籬菊

しらきくの花もてゆへる庭の面のまかきそ秋の盛り成ける

しら露の衣手匂ふきくの花たそかれときの霧の籬に

大樹より菊の花を給はりけるによみてたてまつれる

君の代にあふへき秋はおほけれとまつ祝ふらめ菊の一えた

此御かへりとて。手折つる心の色はその葉の露にのこれる庭のしらきくとのたまへるとなん。

惜秋

わすれてはたゝおしまるゝ心かな我やはよ所の秋の夕暮

野草秋

かせさむき尾花かすゑの波の間に添もあへぬ秋の日の影

九月盡

けふもはや暮はてにけり今朝の露殘るもはかな秋の形見に

冬部

初冬

山河や日數うつろふ紅葉はのなかれもあへす冬は來にけり

時雨

住あらす草の庵の小夜時雨おもへは月ももらぬかけかな

落葉

柴の戸に木の葉吹おろす山かせもなるれは餘所の夕暮の空

冬ふかくなりにけらしな山里の木のはは閨の月もらぬまて

尾上より風にちりゆく紅葉はゝ空もくもらて降時雨かな

夕落葉

秋の山染し時雨はふりはてゝ嵐色つくゆふ暮の空

霜

淺ちふの小のゝ冬草するゑ葉にも餘りてみゆる霜の寒けさ

寒草

をく霜はあらしやはらふ冬草の枯なてのこる野への松陰

寒芦

難波江や霜をかさねてしほれ蘆のほのかにかせの殘る頃哉

枯わたる芦の葉したり降雪のほなみにかへす秋の夕かせ

水鳥

さゆる夜は芦のほかけを衾にて下にかたしくをしの毛衣

みたれふす芦のしほれ葉ふみしたき霜打拂ふ鷺のなく聲

千鳥

くれかゝる浦のとまやに宿かれは我友ちとりなみになく也

浦千鳥

月さえてあかしの浦の友ちとりほの／＼みゆる島つたふ覽

薄氷

山かはのさむく日ことに眞菅おふる岩ねの水さへかつ氷ゆく

湖氷

影やとす波は氷て志賀の浦や松はいまこそ一木成けれ

池氷

池の面にうつろふ月のみかゝれてあまつ空まて氷る夜半哉

冬月

宿はあれぬ淺茅庭の霜のうへになを影寒し冬のよの月

雪

をとつれも絶て程ふる我やとにさりとて人はけさのはつ雪

朝雪

問ぬとて人なうらみそ我も又跡たにおしき今朝の初雪

雪埋竹

軒ちかきまかきの竹の雪折にふしのまもなく明す夜半哉

炭竈

大原や小野の炭かま風吹はやかぬ峯にもたつ煙かな

埋火

うきときは身にたくへつゝ埋火の消なて殘る世にも有かな

歳暮

月日たゝ流れもあへす暮はてゝ(てゆくイ)我年なみにしからみそなき

戀部

初言戀

ことに出はかくと思ひし言の葉も打むかひては忘れはて兒

忍戀

かれねたゝ軒のしのふの紅葉して色に出ぬと名のたゝぬまに

忍契戀

しらしかし木の葉散埋む谷川の水のなかれて下むせふとは

契行末戀

はかなくも後とないひそ我袖の色をし人のあやしめぬまに

待戀

ちきりをく秋より先の露の命いかまほしくも成にけるかな

逢戀

入まてはあらしいまはの心かな山のは遠き月をなかめて

逢夢中戀

うつゝとも夢とも更にわきも子かきてぬる夜半の袖の枕は

見戀

さめぬ間に消はてねたゝ烏羽玉のはかなき夢も又は現も

月前戀

我かたのよるへしらせようきみるの涙にたゝよふ袖の浦風

後朝戀

かならすといひしなからも更行にたゝいめぬ月の夕暮のかけ

たち出てゝ見をくるそらに有明の月も消ゆく人のおもかけ

ともに見しそいおも影は殘りけり忘れかたみの今朝の月影

曉戀

しるやいかに幾夜あけ行篠目のしのにをりはへ物思ふとは

夕戀

はてもなき心の空のうき雲をよその夕に何なかめけん

おもひやるあたりの空の果もなく夕はかゝるうきも添らん

久戀

こふるまも思ひそめける月日さへわするゝ程に成にける哉

名立戀

よしやたゝうき名いとはし空のくもはては消なん跡の夕暮

過不逢戀

ともに見し人の心はさもあらてむかしの秋にかへる月かけ

寄月戀

またれつゝつれなしとても山のはに人たのめなる有明の月

寄艸戀

いまよりや露も身にしむ若草のつまにこもれる末の秋風

聖護院准后鷹の綸をあるわらはにたまふけるに思ふ
とはしらふの鷹のしらすやはうちいてぬとも戀の心
をとのたまひけるをそのわらはにかはりて

うち出ぬ心はあさしはし鷹の身よりあまれる思ひみせなん

雜部

曉

有明の月の光もあし曳の山のはちかき横雲のそら

夜雨

よなよなの枕の下に聞なれてよそにそおもふ軒のむらさめ

山

我心いく重の峯を越ぬらんなかむる山のゆふくれのそら

河
すみた河むかしいかにとこととへはわたらぬ涙にぬるゝ袖哉

池上松風
立ならふ池のみきはのまつ陰は風と涙とのやとり成けり

浦　煙
もしほやく海士の衣のうら里のうら悲しくも立けふりかな

關
あはれにもゆく年波はしら河のせきとめかたき旅の空かな

音羽瀧
雪消の水のしら浪岩越て音羽の瀧の名こそ高けれ

旅宿風
行暮てこよひ篠屋のふしの間をかりねくるしき風渡るなり

山　家
春は花秋はもみちのあたなれは浮世はなれてすむ山そなき

山家水
柴の戸にまた住なれぬ山の井やくみたにしらぬ心くらへん

浦ちかう侍る所よりみるといふものを人につかはすとて
朝夕は海士のしはさを見るからにうきてふ世をそ思知ぬる

寄松述懐
淋しさも世にふるほとそ思ひにきたかならはしの宿の松風

寄鳥述懐
芦ねはふ入江につくる鳴の巣のうきなから社世には住けれ

寄河述懐
ましやよはけふのうき瀬も飛鳥河わたりしられぬ末の白波

鏡裏堪ゝ驚雨鬢霜といふこゝろを
増鏡みれはかしらに霜そをくなか〳〵年いふるにそ有ける

十如是の哥人〻よみ侍りける時に本末究竟等のこゝろを
山のはに出入かけと人はみつ月はひとつにすめるこゝろを

大樹圓覺寺にて追福のみこゝろさしおはせし時一品經卅首の中にて如是展轉教といふことを
名にしおふ法の心をつたへ聞てやすく住へき花のうてなか

一切有爲法如夢幻泡影
うたかたの哀とみすやむは玉の夢幻の人のよの中

彌陀の第十八願のこゝろを
今そしる五のとかは其儘にねかふ十聲のたのみある身は

地　獄
我からとけたはやけたん心より燃るほのほも閉〔衍歟〕る氷も

畜　生
此世には契ありても天かけり地にふすたくひ何うまれけん

修　羅
いつまてか荒き浪ちにまとふへき果なき海の底のすみかは

人　間
むまれくる人の心のやみなれはさむるともなき夢のよの中

天　上
いかゝ思ふその羽衣きては又撫るいはほのはてしなき世を

緣　覺
詠わひぬもろき木の葉の夕風に常なき世とは獨しりても

菩　薩
渡りえてうへなき空にすむ月のあたりは近き雲のかけはし

母の十三年にあたりける春よみ侍ける

枯はてゝいく侍かふるはゝそ原忘ぬいろはねにそ殘れる

もとみなれし人のもとにゆくての便に立よりて侍けれはこのちかきころ身まかりぬるよし申けるを夢のこゝちしてかの塚のもとにむかひて

ありし世の心ならひに宿とへはおもはぬかたの苔の細道

兼載法師か墓所は古河の北野和田といふ所に有里人にとひければ是なんその塚なりといふくさ深く葎とちて露分る人もみえさりしにそのかみの新菟玖波集などのふることゝもおもひ出て

つくは山しけき言葉の花の露苔の下にも光みゆらむ

藤原の孝範朝臣詠草にけふ十七日いにしへ將軍家御弓はしめそかしとおもひ出て梓弓けふ引そむるいにしへに春もさそひて立かへりなんとかきけ(る脱歟)をみて

梓弓春の都をへたて來て東のかたにゐる空やなき

後奈良院の御時　宣旨下し給はりぬる秋よろこひにたへてよみ侍ける

聞えあけて名をもたのむの鴈の聲身はしもなから雲の上迄

大樹かうふりせさせ給ける時まうけのものともを見侍て

かけ高き逢か島の山ゝゝは君か齡をつむにそありける

松歷年

柚をさし松も木高くなる儘におとろかれぬる我よはひかな

營下にめし出されて神祇を

君か代はとはりなれや石清水神もにごらぬめくみのみして

此一冊依ニ月卷所ㇾ詠。於ニ彼家集中一。探ㇾ花拾ㇾ實。撰ニ爲一集一子序。旨趣詳ニ況潮信甚急。仍不ㇾ及ㇾ廻ニ思慮一。纔凌ニ老眼一令ニ書寫一訖。鳥跡之狼藉。烏焉之失錯。旁以似ㇾ招ニ耻辱一者乎。重可ㇾ淦ニ清書一而已。

天正第三曆季秋吉辰。　權大納言實枝

花にさきもみちに染るその葉は
手にとる月のかつらとそみる

羣書類從卷第二百六十一

和歌部百十六　家集三十四

赤人集

山ふかみふりくる霧にむすはれて鳴鶯のこゑまれら也

（あすよりは風葉）春たゝは若菜摘んとしめし野にきのふもけふも雪は降つゝ

我せこにみせんと思ひし梅花それともみえす雪のふれゝは

〔以下百餘首は大江千里集かまぎれ入りしなり〕

鶯の鳴つる聲にさそはれて花のもとにそわれはきにける

靜なる垣ねもとめていつくわか春のありかを共にもとめん

花の枝を折つるからに散まかふ匂ひにあかすおもほゆる哉

神さひてふりにし里にすむ人は都に匂ふはなをたにみす

花をみてかへらんことを忘るゝは木たかきかけによりて也覧

年月にまさるとしなしと思へはや春しも常にすくなかる覽

あかてのみ過行春をいかてかは心にいれてをしまさるへき

かねてより別をしみし春はたゝあけんあしたそ限り成ける

春とのみ所〳〵に惜めともみなおなし色にすきぬるかうき

はる〳〵にあひておひぬる身なれはや更に泪の流れさる覽

今ははや歸りきなまし藤の花みきとせしまに年そへにける

木つたひしみとりの糸のよりけれは鶯とむるちからなき哉

花をのみ尋ねこしまに春はたゝ深さあさゝもしられさり覧

はかなくて空なる風の年をへて春吹おもることそあやしき

あたらしき春の山への花のみそところもわかす咲にける哉

あと絶てしつけき宿に櫻花ちりはつるまてみる人もなし

年ふかく老ぬる人のかなしきはさける花をもたとるなり覧

ちかゝらぬ時に一たひわかるれは年の三年にへたゝりに覧

別にし君か身をすて徒にかたちのかはる身こそつらけれる

白雲はわかるるをに立ぬれと君ともにこそゆきかくれぬれ

別ての後もあひみん遠くとてこれをいつれの時とかはしる

人をゝくる共に春さへ過ぬれはこれから□あひた也ける

ふたつとてみえぬに月の山をにてり度りつゝあきらけき哉

暑からす寒くもあらすよき程に吹くる風の止すもあらなん

くもりなくたきは山さへ晴ゆけは水の色さへあらたまり行

白雲のなかをやりつゝ行水のめてたきをは山にそありける

獨して雲のかけ橋こえゆかんいつこのかたか山はさかしき

行水のあをき山より落くれはしら雲たつとみそまかへつる

おきつより吹くる風はしら波の花とのみ社みえわたりけれ

〔此歌續後撰集雜上に赤人、初二の句「あしへよりふきくる風に」とあるは此本より採られしなるへし「おきつ」は「おきへ」「風は」は「風に」を誤りしなり。赤人の歌にはあらて、大江千里か歌なり〕

わひて行やとは光のくれ行は吹風のみそ戸さしなりける

よそにても花を哀とみるからにしらぬ山へにまつ入にけり
さしわかて深くあはれとみえけれははれてしつけき所成鳬
かけしけき水のあたりに年をへて過にけれとも哀れなる哉
吹風の光をとはと思へはそしはしもこゝにあそふへらなる
あやしくも年をなからへ獨してあくかれ渡るみとや成なん
あまつ空高くはれつゝみえつるは暮行山も遠くそありける
やとヿに花のにしきをおれゝはそみるに心のやすき時かな
谷水のヿの音絶すあしゆれはときのまにたるふたゝすそ聞
なく涙ふる袂にしうつりてはくれなゐふかきやとゝ社みれ
わかる時いひつる年の遙けきは近きをみるそ佗しかりける
あはれとも我身のみ社思ほゆれはかなき春を過しきぬれは
一年にまたふたゝひもこし物をたゝひる中に春はのこれる
鶯は過にし春を惜みつゝなく聲おほきころにもあるかな
空蟬の身としなりぬる我なれは秋をまたてそやみぬへらなる
うくひすと時ならぬはそ鳴聲の今はまれらに成ぬへらなる
かきりとて春の過にし時よりそ鳴鳥のねもいたくきこゆる
秋近く蓮はひらく水のおもにくれなゐふかく色そみえける
吹風に草もおなしく成ゆけはおつる花こそまれにみえけれ
なく鳥の聲ふるくのみきこゆるは殘れる花の枝をこふるか
月影になへて眞砂のてりぬれは夏のよふかき霜かとそみる
我心しけき時には吹風のヿにはあらねとすゝしかりけり
山ふかく谷をわけつゝ行水の吹つる風そすゝしかりける
天河ほとのはるかに成ゆけはあひみるヿの空めなきかな
秋の夜の霜にたとへし我髪は年のはかなくおいしつもれは
(古今秋上よみ人しらず)大かたの秋くるからに我身社悲しきものとおもひしりぬれ

おく霜に草のかれゆく時よりそ虫のなくねもたかく聞ゆる
一年にひと夜のみこそ棚機の天のかはらをわたるてふなれ
物思ふこゝろの秋に成ぬれはすへては人そみえわたりける
大かたの秋を哀れとみるヿもあてなる人はしらすそ有ける
常よりも秋の木葉はおつらんにくれなゐ深くみえわたる哉
かすかなる艸のはみゆる秋のには物思ヿそすくなかりける
すきてゆく秋のかなしくみえつるは老なんヿを思ふなり鳬
もみちはの色紅にみえつるはなく蟬のみやなくなりぬらむ
秋のよをさのみなきつる虫のねは我宿に社あまたきこゆれ
行かりの秋過かたに獨ゐて友にをくれてなきわたるかな
吹風の音たかくのみ聞ゆるはおく露かたてさむくも有かな
木葉皆からくれなゐにつゝるとて霜のまゝにも置まさる哉
秋のよをさむみ鳴つゝ行雁のつゆをのみまて立かへるらむ
しのゝめにおくしら露のさむけれはたゝ獨して蟬の鳴らむ
秋の夜を雁は鳴つゝ過れともまつヿつてはみゆるよもなし
空にかり飛をはやくみえしより秋はかきりとおもひしり鳬
なく鴈の聲たにそらに聞えなは旅なる人はおもひまさりぬ
鳴蟬の聲たかくのみ聞ゆるは軒ふく風の秋そしるらし
いつしかと春を迎ふるあしたにはまつよき風の吹そ嬉しき
小夜更けて猶ねられねは春風の吹つる事もおもほえぬかな
一年に冬くる年はけふそ知ふしおきてみれとあかし難さに
物を思心はこひにくたくれとあつきおきにはおよはさり鳬
わかゝみのみな白雪になりゆけはおける霜にも劣らさり鳬
年ヿに數へこしまにはかなくて人は老ぬるものにそありける
あく迄にみてなさけらに寒きには人のみましに暖まり鳬
老ぬれはあははや覺てとゝなしに夜半に過れはねてのみそふる

人をにまたおく霜のさむけれは草葉をたにそからせさり鳬
獨ゐて燃るほのほに向へはやのきをともなき身とそ成ぬる
かくはかり老ぬと思へは今更に光のすくるかけもをします
かさゝきの峯とひわけて飛行はみ山かくるゝ月かとそみる
雲はれて淸き月影けふならすあらむかきりはをしみ社せぬ
別れての後はしらぬをいかならん時にか人のあはんとす覽
そこ非なく物をそおもふあかてのみ別れし物を思ふ我身は
世中を思ひしりぬる心こそ身よりも過ておもひしりけれ
心をし蜑のうけらになしつれはなかるゝ水にしつまさり鳬
はかなくて何も我身の獨してあした夕へにしけくかるらん
したなくて空に浮へる心こそ夢みるよりもはかなかりけれ
我身をは浮へる雲になさゝらは行方もなくはかなからまし
まほろしのほとゝしりぬる心には春くる夢とおもほゆる哉
假初にしはしうかへる灯のみなあはとのみたとへられける
黑かみのしろく俄に成ぬれは春の花ともみえわたりける
われか身も春のかきりに人しらば草木なるとて思しりなん
夢にても〔本ノマヽ〕嬉しきとをみる時はたゝに憂ふる身にはまされり
しほにけてわすてくる雁も春にあひてそ飛かへりける
春をにあひてもあかぬ心哉花雪とのみふりまかひつゝ
春のみや花はさくらん谷さむみうもるゝ草は光りをもみす
しら波のたちかへりくる數よりも我身をなけく事は増れり〔かなん古今〕
あしたつのひとりおくれてなく聲は雲の上まて聞えつる哉
あま雲の身を隱すらん日の光我みくらせとみるよしもなし
おもふとなく鶯かつけたらは色もかはらぬ我身とやみむ
時鳥さつきならねと鳴にけるはかなく春を過しきぬらん
〔以上大江千里集〕

和歌の浦に汐滿くれはかたをなみあしへをさしてたつ鳴渡
春のゝにあさるきゝすの妻戀に己かありかを人にしれつゝ
久かたのあまのはやまにこのゆふへ霞たな引春立くらし
あつさ弓春やまちかくやとりせはつきてきくらん鶯のこゑ
打なひき春さりくれはしかすかに空くもりあひ雪は降つゝ
いにしへの人の植けん杉の葉に霞たな引はるはきにけり
子らか手をまきもく山に春されはこのはしのきて霞たな引
春霞なかるゝともに靑柳のえたくひもちて鶯なきぬ
かけろふの夕さりくれはかり人の弓いるかたに霞たなひく
むらさきのねはふよこ野の春のゝに君をこひける鶯そなく
わかせこをならしの山の呼子鳥君よひかへせ夜の深ぬと〔まイ〕に
朝をにきてなくことりなれたにも君に戀らし床夏になく
春なれや妻やもとむる鶯の梢をつたひなきつゝそふる
かすかなるはるひ山よりさほの上さして行なる呼子鳥そも
こたへぬによひなをかしそ呼子鳥さほの山へを登り下りに
朝露にしとゝにぬれてきなん鳥かみ山よりも鳴わたる也
今更に雪ふらめやはかけろふのもゆる春へ〔ひイ〕と成にしものを
ふゝきつゝ雪は降れともしかすかに霞たな引春はきぬらし
山きはに鶯なきつ打なひき春と思へは雪ふりしきぬ
みねのうへにふりおく音〔ゆきイ〕は風のおと音に散らし春は有とも
　つくは山をよめる
君かため山田のさはにゑくつむと雪けの水にも裾ぬらしつ
梅かえになきてうつろふ鶯のはね白妙にあはゆきそふる
山たかみ降くる雪を梅花ちりかもくるとおもひけるかな
　この哥はよみかはせるなり。
霞を詠す

きのふこそ年はくれしか春霞春日の山にはやたちにけり
冬すきて春はきぬらし朝日さすしかの山へに霞たなひく
梓弓春になるらし春日山霞たなひくよめにみれとも
鶯の木つたふ枝のうつりかは櫻の花のときかたまけぬ
霜かれの中のやなきはみる人もかつらにすへく思ほゆる鴨
淺みとりそめかけたりとみるまてに春の柳はもえにける哉
山もとに雪は降つゝしかすかにこの川柳もえにけるかな
青柳のいとの細きを春風にみたれんいろにみせんこもかも
うめの花折もてみれはわか宿の柳のまゆもあはれなるかな

花を詠す

さくら花ときはすきねと鶯のこひせさるねは今や鳴らん
わか里の柳の糸を吹みたるかせにやいもか梅のちるらん
年をにうめは咲とも空蟬の世にわれしもそ春なかりける
うちつけにとは思へともはしめてもまつみまほしき櫻花哉
あしひきの山の端てらす櫻花この春さめにちりにけるかな
あの山の櫻の花はけふもかも照みたるらんみる人なしに
うちなひき春立ぬらし山もとのわか木の末に咲ちるみれは
かはつ鳴よしのゝ川の瀧の上にあせみの花そ咲てあたなる
春のきしなる瀧もとに櫻花散ぬへらなるみる人もかも
春雨はちらまくもをし櫻花しはしさかなんをしみてし哉
春雨はいたくな降そ櫻花またみぬ人にちらまくもをし
春雨にあらそひかねて我宿のさくらの花は咲そめにけり
春の野に菫つみにとこし我そ野をなつかしみ一夜ねにける
いつしかもこよひ明なは鶯の木つたひちらす梅の花みん
みわたせはかすかのゝへに霞立ひらくる花はさくら花かも
のと河のみなそこさへにてるまてに三笹の山は咲にける哉
ゆきみれはまた冬なるをしかすかに春霞立雪はふりつゝ
去年咲し草木今咲いたつらにつちにやちらんみる人なしに

月を詠す

朝霞みる日くれなは木間よりうつろふ月をいつかたのまん
春霞たなひくけふの夕月夜きよくてるらむたかまとの山
春されは木かくれおほみ夕月夜覺束なしや花のかけにして

雨を詠す

春雨にありけるものを立かくれ妹かいへちに此日くらしつ
かすか野に烟立めりやをかしは春のおほきふ雨のふるらん

野にあそふ

春の野に心のへむと思とちこしけふの日はくれすもあら南
百敷の大宮人はいとまあれや梅をかさしてこゝにつとへる
住吉の里ゆきしかは初花のまれにみん君にわれあへるかも

かうへをめくらすうた

春日なる三笠の山の月も出ぬ鴨關山に咲る櫻の花も見へく

ふるきことをなけく

冬はすき春はきぬれと年月はあらたまれとも人はふりゆく

春のあひきゝ

春山にゐる鶯のあひわかれかへるまつまのおもひするにも
我やとの春さく花の年をにおもひますともわすれめやわれ
梅花さきちる野へに我ゆかん妹かつかひはわれをまつらん
春の野に霞たな引櫻花うち散までにあはぬ君かな
わかせこをわか戀らくは奥山のあせみの花の今さかりなり
梅花したり柳に折ませて春にそふるは君にあるらむ
女郎花さく野へに生る白つゝししらぬをもていひし我を

しもによす

春立は草木の上におく霜の消つゝわれは戀やわたらむ

かすみによす

春霞山にたなひきかくすいもゝあひみて後そ戀しかりける

春霞立にし日よりけふまてに我戀やます人めしけきに

あをつゝら妹を尋ぬと春の日の霞たちまふけふしくらしつ

みわたせは春日の野へに立霞みまくのほしき君かあたりを

あやしきは我宿にのみ立霞たてれぬるとて（ぬれともイ）君かこゝろに

戀つゝもけふは暮しつ霞たちあすの春ひをいかゝくらさん

雨によす

我せこにあひてすくなき春雨のふるわさしらす出てくる哉

春立はしけし我戀わたつみの立しら波にちへそまされる

おほつかな君にあひみてすかのねのなかき春日を戀渡る哉

今更に君はよにこし春雨の心をひとのしらさらなくに

春雨の心もひとにかよはんや七日しふらは七日こしとや

梅花ちらす春雨おほくふるたひにや君かいへゐせるらん

雲によす

しらま弓いま春の野にゆく雲のゆきや別れん戀しき物を

かつらをゝくる

ますらをかふしゐ歎きて作りたるしたり柳のかつらせよ妹

松によす

梅花さきて散なはわかいもをとくみにこんとわか松の木そ

別れをかなしむ

朝とあけて君か姿をよくみれはなかき春日を戀やわたらん

とひこたふ

春山のあせみの花のにくからぬ君にはしめやよかれは戀し

石上ふるのやしろの過にしをわれさら／＼にこひにあひ覺

此人哥返しあらすとてかへせり。それはこのついてにいりたるなり。

さのかたはみにならすとて花にのみ咲てなみえそ戀の櫻を

さのかたはみに成にしを今更に春雨ふりてはなさかんやは

梓弓ひきつへきやは夏草の花さかぬまてあはぬ君かな

河上のいつもの花のいつも／＼きませ我せこ絕すまつはた

春雨のやますふりおちて我こふる我いもひさにあはぬ頃哉

我妹子を戀つゝおれは春雨のたれもるとてかやます降つゝ

春くれはまつ鳴鳥の鶯のをさきたちし君をしまたん

あひ思はぬ人をや常にすかのねの永きはる日を立や（こひやイ）暮さん

あひ思はすあらんかゆゑに玉のをの長き春ひを歎き暮しつ

春霞たな引野へにわかひけるつなはまをつなたえんと思な

たとひうた

夏の哥ともを詠す

ますらをの袖たちむかひしめしのゝ神なひ山に鳴く時鳥

たひにして妻戀すらし時鳥神なひやまに小夜更てなく

これはふる哥の中に出たり

時鳥鳴はつ聲はわれきかんさつきの玉にまきてぬきてん

朝きりのたな引のへの足引のやま郭公いつきてかなく

藤浪のちらまくをしき時鳥いまきのをかになきてこゆらん

朝きりの八重山こえて時鳥卯花かくれなきてゆくなり

木かくれて今そ聞なる時鳥なきひゝかして聲まさるらむ

あひかたき君にあへる時郭公をゝきよりは今こそなかめ

こかくれて夕くれなるを時鳥いつこをいつと（へイ）鳴き渡るらん

月きよみ鳴郭公みんと思ふわか心のをみん人もかな

時鳥けさの朝霧なきくるを君はえきかすいやはねつらん

ほとゝきす花橘の枝にゐてなきしひゝけは花はちりつゝ
さつきにうの花月夜郭公なけともあかす又もなかなむ
よひのまにおほつかなきを郭公鳴なるほとの音のはるけき
卯花のさくまてをしき時鳥野にて山にてをれよとそおもふ
やまとには鳴て待らむ郭公中〳〵とのなきもおもほゆ
物おもふとねさる朝けの時鳥我衣手になきしほりつゝ
こん人と時鳥をやまれにみん今やはかくるこひつゝをれは
橘のはやしを植ん時鳥つねに冬まてすみわたるへく
あまはれの雲まにたくふ時鳥梢をさしていまなきわたる
かくはかり雨のふるをや時鳥うの花やまに猶やなくらん

蟬を詠す

たゝならんをりになかなむ空蟬の物思時になきつゝはをる

はしはみを詠す

おもはし(ふらんイ)の心も秋に匂ひぬと鳥のはしはみあきたゝねとも

花を詠す

風にちる花橘を手にうけて君かみためと思ひつる哉
かくはしき花橘を衣にぬひおちこむ妹をいつかとまたん
郭公なきてひゝかは橘の花ちるやとにくる人やたれ
わか宿の花橘はちりにけりくやしき事にあへる君かも
野へみれはなてしこの花散にけり我まつ秋はちかつきに皃
わきもこにあふちの花は散にけりきていもさけるを有と聞
春日のゝ藤はちりにき何をかもみかりの人の折てかさゝむ
時ならて玉をそぬける卯花の曉はまたひ(さつきをまたはイ)さしかるへし
うの花のさける垣ほに時鳥なきてそわたる人はきゝつや
きゝつやとわかこひつるを郭公さらになれつゝいま鳴渡る
人とは夏のゝ草のしけくとも妹と我としたつさはりなは
此ころの戀のしけらく夏草のかりははつともおひいつるを
たくひあらはねなつのしけみ打拂ふ人わか命常ならめやは
我のみやかく戀すらん杜若つくとふ妹はいかゝあるらん
橘の花ちる里にかよひなは山ほとゝきすひゝかさらむか
なつなれはすこく鳴なる時鳥ほと〳〵いもにあはてきに皃
五月闇花橘にほとゝきすかけそふ時にあくる君かな

此哥人麿集にあり。

花によす

かたよりに糸をこそよれ我せこか花橘をぬかんとおもひて
時鳥かよふ垣ねの卯花のうきを有や君かきまさぬ
卯花の咲とはなしにあた人の戀わたるらむ〔かた〕思にして
われこそはさてしもあらめわか宿の花橘をみにはこしとや

此哥人丸集にあり。

人しれす戀れはくるしなてしこの花に咲てよ朝な〳〵みむ
夏草の露わけ衣またきぬに我衣手はひるよしもなし

日によす

みな月のつちさへさけて照日たに我袖ひめや妹にあはすて

此哥人麿集にあり。

秋のさふの哥

天河水底までにてらす舟つひに舟人いもとみえつや
久かたの天河原にぬる鳥のうらひれをりつくるしきまてに
我こふる妹ははるかに行舟のすきてくへしやともつけなん
大空にたな引あめのかすみれは人の妻さへ妹にあひぬへし
漢河やすの川原に舟うけて秋にまつとは妹につけよとて
空よりもかよふわれすら誰ゆゑに天の川みち歎きてそくる
八千矛の神の御代より妹もなき人ししらせし來りつけゝん

我戀にほにあけてみん今宵我あまのつはしのいみかし（まやと）
已か紐長きとは開つ手に卷てまたきてねよ君正にとかなし
なからふる妹か姿はあくまてに袖ふりみえつ雲かくるまて
ゆふつゝのかよふ空まていつとてかあふきてまたん月人男
天河みつくもり草ふく風になひくとみれはあきはきにけり
我まちし秋はきさきぬ今たにも匂ひにゆかんおちかた人に
わかせこにうらひれをれは天河舟こきいたすちか聲聞ゆ
天川そこのわたりのうつろへは河原をゆくに夜そ深にける
昔よりあけて衣をかへさねはあまの河舟うかみあけぬらん
遠き妹と手枕やすくねぬる夜は庭とりなくな明は過とも
あひみまくあれともあかす東明の明にけらしな舟出せん妹
萬代をたつさはりゐてあひみんと思へしやは戀ならなくに
萬代を隔つる月か雲かくれくるしき物そあはんとおもふは
白雲を幾重へたてゝ遠くともよふさ（ゆふかけてイ）をそみん妹かあたりを
我爲と棚機つめのその宿にをる（りきイ）しらぬのはおひとかしかも
君にあはてひさしく成ぬおひにせし白妙衣あかつくまてに
天河梶おと聞ゆひこほしの棚機つめとけふやあふらし
天河やすの河原にさたまりてかゝるわかれはとくとまた南
棚機のいをはたたてゝおる布は秋まつ衣たれかとめきん
年にありて妹かまた南うは玉のよるより曇る遠きわたりは
わか待し秋は來りぬいもせと何とあるらむひさむかひゐて
あはすしてけなかき物は天河へたてゝまたや我戀をらん
彦星と棚機つめとこよひあふ天河原に波たつなゆめ
しみ〳〵もあひみぬ君は天河舟出はやせよ夜深ぬ時に
秋風のきよき夕に天河舟こきわたせ月人をとこ
あまの川きり立わたり彦ほしの梶音聞ゆ夜の更ゆけは

君か舟今こきくらし天河きりたちわたる此河のせに
秋風に河のせきよしひこほしのけさこく舟に波のさはける
天の川かはへにたちて我まちし君きたるなり紐ときてまて
あすからはわか玉床を打拂ひ君とふたりはねす成ぬへし
此夕ふりくる雨はひこほしのとわたる舟のかひのしつくか
あまの川やそせよりあふ彦ほしのときに行舟今やこくらん
天河うちはしわたす妹かいへとまらすかよへ時またすとて
月をへて我思いもにあへる夜は此七日日のつきせさるかも
年にきてわか舟わたる天河風は吹とも波たつなゆめ
天河かせは吹ともわか舟はとくこきよせよ夜の深ぬまに
よし今宵あへるときたにをとはむ待もせすこしよそ深ぬ覽
あまの河白浪たかくわかこふる君か舟ては今そすらしも
はるかなる君もて行て天河うちはしわたし君もあはすは
天河霞たちのほり棚機の雲の衣のあへるそらかな
いにしへのをりにしはたを此夕衣にぬひてきみまつ我を
あし玉も手玉もゆらにおるはたを君か衣にぬひきせんかも
よき月日あふよしあれは別路の惜かる君はあすさへもかな
天河わたるせふかみ舟うけてさしくる君か梶音そする
あまの河わたせるとのみてくらの心は君をゆきてませとよ
久かたの天の河原に舟うけて君まつ我はあけともあらぬか
あまの川あしぬれたゝむ君か身も枕もせねは夜の深ぬこそ
わたしもり舟わたせよとよふ聲のゆかぬ成へし梶音もせぬ

　此哥人麿集にあり。

戀しきはけなかき物を今たにも短くも哉あひみる夜たに
まけなから河をへたてゝ有し袖今宵まかむと思へるかよさ
人さへやみつからくらむ彦星の妹よふ聲の近つきぬるを

天河せをはやみらんうは玉のよるは明つゝあはぬひこほし
わたしもり舟はやわたせ一年に二たひかよふ君ならなくに
戀するはけなかき物を今宵たに暮るへしやはとく明すして
棚機のこよひあかねは常のを戀やわたさん棚機わたせ
あまの川棚機わたすたなはたのこれわたさむに棚機わたせ
天の川をうきやりついつれをか君かうけをも我まちわかん
秋かせの吹にし日より天河せに出たちてまつとつけこせ
天の川こそのわたりは有けるを君かきたらむ道のしらなく
彦ほしの妹よふ聲のひきつなのたえんと君を我思はなくに
わたし守舟出しゆかん今宵のみあひみて後はあはぬ物かも
あめつちの　そめし時より　あまの川　むかひに出て
ひとゝせに　ふたゝひあはぬ　つまこひに　物思ふ日は
あまの川　やすの河原に　かよひぢの　かよふわたりに
くほふねの　ともにもへにも　ふねよそひ　まかいもしけく
いきの日も　とはれぬ物を　秋かせの　吹くるよひに
あまの川　白波しけき　おちたきり　はやまさりたる
わかくさの　つまた枕に　おほ舟の　おもひたのみて
こきくとも　此おのこらか　あら玉の　年のを長く
おもひこし　戀をつくさん　ふんつきの　なぬかのよひの
わかれかなしも

返し哥

こまにしき紐とき易きあま人のまつらくるにそ我も思はん
あめつちと　わけし時より　ひさかたの　あましるしとは
あまのはら　天河原に　あら玉の　月をかさねて
戀る妹に　あふ時まつと　たちまちに　わか衣手を
秋かせの　吹しかへさは　たちゐつゝ　たつきをしらぬ
あまのたなはた

あすか川かはよとさらす立霧と思ひすくへきをならなくに

躬恒集

延喜三年十月十九日仰によりて哥みつ奉る女一のみこの裳き玉ふ時に内よりさうそく玉ふその裳にみつくきかたきにすれる哥

なかれ出る山をしおもへはよしの河深き心もたえむ物かは

わたつ海の神も知覽同しくは蜑のかるもを我にかさなん

白雲のたちのみわたるくらはしの山に心をおもひつめつゝ

延喜五年二月十日宣旨によりて奉れる和泉大將四十賀のれう屏風四帖内より始て内侍督殿に給ふ哥

山たかみ雲井にみゆる櫻花心のゆきてをらぬ日そなき

大あらきのもりの下草しけりあひて深くも夏の成にける哉

すみの江の松を秋かせ吹からに聲うちそふるおきつしら浪

河上に時雨のみふる網代にはもみちさへこそ落まさりけれ

朱雀院女郎花合の哥をみなへしといふ五文字を句のかしらにおきてよめる

をゝぬきてみるよしも哉なからへてへぬやと秋の白露の玉

をりつれはみて秋の日は慰めつへて此花をしらせすもかな

清涼殿の南のつまにみかは水なかれいてたりその前栽にさゝら河あり延喜十九年九月十三日に賀せしめ給ふ題に月にのりてさゝら水をもてあそふ詩歌心にまかす

もゝ敷の大宮なから八十島をみる心ちするあきのよのつき

亭子の帝の大井におはしませる時に九の題のうた秋水にうかへり

此河に木のはと浮てさし歸りみはけふよりそみなれ染ぬる

秋の波いたくな立そおもほえすうき木にのりて行人のため

秋の山にのそむ

けふなれは小倉の山の紅葉はゝそこさへてりてみえ渡る覽

秋霧のはるゝまに〳〵みわたせは山の錦はおりはてにけり

もみちおつ

水の面のからくれなゐになる迄に秋にあひかね落る紅葉は

菊のこれり

きくの花けふをまつとてきのふおきし露さへ消す今盛なり

君かため心もしるく初霜のおきて殘せる菊にそありける

鶴洲にたてり

鶴のゐるかたにそ有ける白妙のあまの濡衣ほすとみつるは

うらわきて風や吹らんおきつ波おなし所をたちかへりつゝ

たひのかりゆく

故郷をおもひやりつゝゆく鴈のたひの心は空にそあるらし

としことに友ひきつらねくる鴈をいくたひきぬと問人そなき

かもめなれたり

なれてこしおきの鷗はつけなくに後の心をいかてしるらむ

すにをれはいさこの色にまかふ鳥てにとる計なれにける哉

猿かひになく

わひしらにましらな鳴そ足引の山のかひあるけふにやはあらぬ

心あらはみたひてふたひ鳴聲をいとゝわひたる人に聞すな

江の松おいたり

深みとり入江の松も年ふれはかけさへともに老にけるかな

老にける松そ知らんあゆ川のみゆきもかくはあらすや有劔

夏の雜の哥

五月雨にみたれそめにし我なれは人を戀ちにぬれぬへら也

水の面におひてわたれる浮草は波の上にやたねをまくらん

はしめて

逢ぬよも逢よもまさしいをねねは夢のたゝちはなれやしぬ覽

こしのかたに別る人に

行君を道もたひらの都にはまたきかへれる山そありけむ

冬日人に送る

もみちはや秋なるらん神な月しくるゝをに色のまさるは

ひらの山

かくてのみ我思ひらの山さらは身はいたつらに成ぬへら也

うちやま

わたつみの涙うちやまは濱にいてゝ拾ひおきてん戀忘れ貝

ひえの山

夏ならぬ草とり捨て植し田はひえのやますも生にけるかな

かみやかは

住の江の岸のまに〳〵昔より神やかはらぬ松はうへけり

水無瀨川

遠近にわたりかねてそ歸つゝみなせかはりて淵になれゝは

さひかは

昔よりありのまに〳〵あらせぬはわかすさひかは人の心を

しらに

山ちかみ人にもみえぬすゝむしは秋わひしらに今そ鳴なる

日くらし

松の音は秋のしらへに聞ゆ也高くせめあけて風そひくらし

しをに

宵のまと思ひつるまに秋のよはあけしをにしに月のみゆ覽

ちゝこくさ

花の色はちゝこくさにてみゆれ共一つも枝に有へきはなし

かりやす草

鶯の心にはあらて春をたに鴈やすくさすとひかへりゆく

わかれの哥

かたかけの舟にやのれるしら波の立はわひしく思ほゆる哉

雨の降日人に送る

衣手のけさはぬれたる思ひねの夢ちにさへや雨はふるらん

雜の哥

君みてはあかぬへしやと心みにたゝまくもうきから錦哉

大空をなかめそくらす吹風の聲はすれともめにはみえねは

いつらなる山にかあらん鴈かねの音のほのかに聞はつる哉

神無月紅葉の時はやまとまてからくれなゐにみゆるさほ山

思へともあひもおもはす思ふとき思ふ人もや思はさらなん

下紐のとけしはかりを賴みつゝたれともしらぬ戀をする哉

生ふれとも駒もすさめす菖蒲草かりにも人のこぬか佗しき

山寺にありて人にやる

世をうしと山に入ひと山なから又うきときはいつちゆく覽

雜の哥

新玉の年のよとせをなましゐに身を捨難みわひつゝもへぬ

徒に生ぬへらなり大あらきのもりの下なる草ならねとも

歎きのみおほえの山は近けれといま一さかを越そかねつる
ことさらにしなんと社かたからめいきてかひなく物思身は
けふくれてあすかの川の河千鳥いまいくせをかなき渡る覽

秋

秋の夜の朧にみゆる月よにももみちの色そてりまさりける
久方の月をさやけみ紅葉はのこさもうすさもわきつへら也
露けくて我衣手はぬれぬとも折てをゆかん秋はきのはな

七日

秋風はいつしかとのみ待しかとあひてぬるよは只ひとよ也
夜をさしてぬる君なれは天河ゆふまくれにもいさわたり南

九日

老はみのからき物なりけふはしもぬれてもぬれん菊の白露
打はへてやすきいもねすきり／＼す秋のよな／＼鳴渡る覽

山こえ

共に我かへる山ちの紅葉はのおのかちり／＼わかるへら也
秋霧のはれぬ朝の天空をみるかとくもみえぬ君かな
秋のゝに日暮しつるを女郎花よるやとまらん花のなたてに
荻のはのそよとつけすは秋風をけふから吹と誰かいはまし
秋はきの中に立てしましりても我をは人の花とやはみぬ
もとの色はいつれなるらん白露の下にうつろふわか宿の菊
神無月水にうつろふ菊の花いつれかもとの色にはあるらむ
藤の花ちりなん後もかけしあらは池の心のあるかひはあ覽
とさらにみにこそきつれ櫻花道ゆきふりと思ふらんやそ
玉ほこの道ゆきふりにさくら花折とや花のわれをおもふ覽

夏

月みつゝ待としらすや時鳥こてはたほかにゆきてなくらん

雜歌

年をへて思ひ／＼てあひぬれは月日のみこそ嬉しかりけれ
よと共に人を忘れぬむくひにやけふは嬉しくあひみそむ覽
みつゝわれなくさめかねつ更科の姥捨山にてりし月かも

秋

天川舟さしわたす棹鹿のしからみふする秋はきのはな
くらへみんわか衣手と秋萩の花の色とはいつれまさまれり
あら玉の年ふりつもる山里のゆきあかれぬは我身なりけり

春

あひ思はぬ花に心をつけそめて春の山へになかゐくらしつ
常葉なる松をはおきてあちきなくあたなる山の櫻をそみる
をしめともとゝまらなくに櫻花雪とのみ社ふりてやみぬれ
散ぬともかけをやとめぬ藤花池の心のあるかひもなき
わか宿の池の藤浪咲しより山ほとゝきすまたぬ日そなき

夏

時鳥五月雨のみしかよは月かけさへそともしかりける
五月雨のたそかれ時は月かけのおほろけにやは我人をまつ

冬

み吉野の山の心はけふやしるいつかは雪のふらぬ日は有し
梅か枝になく鶯の聲聞はよしのゝ山にふれるしら雪

秋

我宿の秋はきの花咲ときそ尾上の鹿も聲立てなく

七日人に逢る

打はへてすくめる人はたなはたの逢夜計はあはすもあら南

秋のゝの花の色〳〵とりそへて我衣手にうつしてしかな
立かへり又もみにこんもみちはゝおとしなはてそ山河の瀧
水の面のふかくあさくもみゆる哉もみちの色そ淵せ成ける
菊花みつゝあやなくなほもあらて人の心ようつろふなはた
山ちかくめつらしけなく降雪のしろくやならむ年積りなは
山のはゝまた遠けれと月影ををしむ心そまつさきにたつ
久かたの月人男ひとりぬるやとにさしいれり人の名たてに
みるほとにいつほせよとか月影のまた宵のまに高く成ゆく
久方のあまつ空なる月なれといつれの水にかけなかるらん

夏

五月雨の月のほのかにみゆる夜は時鳥たにさやかにをなけ
いらぬまにこんと云しかは今宵社われて惜けれ夏のよの月
あたらしくてる月影に時鳥ふる聲しるく鳴わたるなり

冬

花とのみ雪のみゆれは冬なから心のうちの春にやあるらむ
年ふかく降つむ雪をみる時そこしのしらねにすむ心ちする
降雪とまつしりなから匂はねとなかはすきては花と社みれ
枝の上に雪をおき乍くらふ共誰かは梅にあらすとはいはん
雪の上に思ふ心はいちしるくつれなき人のめにもみえなん

春

よそにのみみてややみなん山櫻花の心のよのましらひに
鶯の谷の底にて鳴聲を山ひこたにやつたへきかせむ
青柳のはなたの糸をより合せてたえすも鳴か鶯のこゑ

延喜六年六月廿一日壬生忠岑日次贄使としてかとのかはのにへ殿にあり躬恒宣旨かひの使として忠岑かかへらむとするに此哥を送る

とゝむれととゝめかねつも大井河ゐせきをこえて行水のを

忍ひて御をひかせ給を聞て

秋風のふきもてこすは白雲の天つしらへをいかてきかまし

七夕の朝に

棚機そあかて別し今朝よりもよるさへあはぬ我はまされり

八日の哥

行かへり今こん秋を戀そへてこよひ計りはあひやしなまし

ひをけの銘

夢にたにねは社みえめ埋火のおきゐてのみそ明しはてぬる

火はしの銘

冬すきはなけおかれなん物故に君か手にはたたなるへら也

朱雀院の鶴のはかなくなるを

蘆たつのよはひはかなく成にけりけふや千年の限なるらん

わかれをゝしむ

君を思ふ心は人にこゆるきのいその玉もゝけふやからまし

さほかけ

何れ共思ほえなくに覺束ないさほかけにてひとめみしかは

くれのおも

いつしかとまつ夕暮の面かけにみえつゝみえぬをの侘しき

延喜十三年十月十五日内裏菊合に右大弁の仰により
て奉る

菊の花こきもうすきも今までに霜のおかすは色をみましや
初しくれ降そめしより菊の花こかりし色に又そはりぬる

もとよりの色にはあらねと菊の花色にいてゝも年へぬる哉
あたなれと我には菊の花のみてうつろふ色のこさ増りける
君かため心もしるく初霜のおきて殘せるきくにそありける
たか□ことり
おり立てうへすはありと殊更に秋のかりにはあはんとそ思
人の家のほとりのやまの井
過かてに人はとまれと山の井の便りと思へは淺くそ有ける
月影にわきかたきよの白菊は折てもをらぬ心ちこそすれ
十月
紅葉はの落くる瀧はかけてのみたえぬ錦をほすかとそみる
散紅葉
風にちる葉紅の色は神な月からくれなゐのしくれこそすれ
春
春にあふと思ふ心は嬉しくていま一とせの老そそひぬる
聲きけは老のまさるに人憎くきつゝのみなくよふことり哉
夏
五月雨の夜は暗くとも時鳥さやかにたにもなきてこぬかな
時鳥一聲なきていぬる夜はいかてか人のいをやすくねん
春
思ひをは松のみとりに染しかと花のかりのみゆくこゝろ哉
みのゝすけのくたるに送る
一日たにみねは戀しき君かいなは年の四年をいかて過さん
延喜十五年二月廿三日仰によりて奉る御屏風の哥み
つ
わか宿の梅にならひてみよしのゝ山の雪をも花とこそみれ

ちりまかふかけをやともに藤花池の心そあるかひもなき
時鳥よふかき聲は月まつとおきていもねぬ人そきゝける
延喜十五年三月廿一日左衛門督の家にて三河守のう
まのはなむけによめる
なにしおはゝ遠からね共みやき山是を手向のぬさにせよ君
くすり送る哥
別るゝか苦しき事もやまなくに何か藥のあるかひもなし
春
降雪に色はまかひぬ梅花香にこそにたるものなかりけれ
秋
秋風の吹ぬと思へはいてゝこし家地の方そこひしかりける
秋田かる所
み山田のおくての稲をかりほして守る刈穗に幾夜へぬらし
惜めともつひに散ぬる紅葉ゆゑふかぬ風にも物をこそ思へ
延喜十七年仰によりて奉る御屏風の哥雪の中の杉
雪の内にみゆる常盤は三輪の山山のしるしの杉にそ有ける
鈴鹿山
おとにきくいせの鈴鹿の山川のはやくより我戀わたるきみ
まとかた
梓弓いるまとかたにみつ鹽のひるあひかたみ夜をこそまて
網代のはま
鹽みては入江の水もふかやめの網代の濱によする興津なみ
うはせ河
うはせ河下の心もしらなくにふかくも人のたのまるゝかな
はり川

から衣ぬふはり河の靑柳のいとよりかゝる春やみにこむ
たけ河
もみちはのなかるゝ時は竹河の淵のみとりも色かはるらん
わたらひ
玉くしけふたみのうらに住あまのわたらひ草はみるめ成覽
みつ
殊更に我はみつらんこさゝ原さしてとふへき人はなくとも
うきしま
いさやまたこの浮島に泊なん沈みてのみも世をふれはうし
なかはま
なか濱にいてしほたるゝ時鳥五月はかりはあまにさりける
此十首は延喜十六年四月廿二日わたくしごとにつきていせの齋宮にまかりける時則寮頭國中をつかひにて國々所々の名を題にてよませ玉ふのにのぞみて
女郎花いかに思ふらん秋の野に一夜そねにし花のなたてに
同十六年九月廿二日遠江介のせうそくに法皇明日石山に御幸有べしいとまあらばけふ中にくべしと云々仍まかりたれば屛風障子ありこれに所〳〵のおもむきを題すべきとあればよのうちにかくべし其題も汝かけとありいなぶれど[　　]あれはかき侍りぬ法皇御舟にて瀨田にのぼらせ給ふ橋の本に舟つなぎて介けふ物とも奉る介かたらひて舟にのりて御舟にぐしてさぶらふべしと則此哥
いつみにて沈み果ぬと思ひしをけふそ近江に浮ふへらなる
その屛風障子に哥所〳〵の題にしたがふ

足引の山への道はいかなれやゆくとみれとも過かてにする
我よりも先に生ぬる松なれは千とせの後にあはさらめやは
梅花さきてかひなき興つ波立よりてたにみる人もなし
あまのゝるたなゝしを舟あともなく思ひし人を恨つるかな
もしほやくあまのたく火の煙より思ふかたには立のほり覽
山里に年はふれとも瀧つせのはやく我みし人たにもこす
下にのみもえわたれとも打はへて我思ひをはけつ人もなし
紅葉ちる秋ならすとも棹鹿は山のねたかく今もなかなん
紫の色しこけれは藤の花松のみとりもうつろひにけり
かへる鴈雲路のたひにくる時は何をか草の枕にはする
さらしなの山より外にてる時もなくさめかねつこの比の月
雪の中に思ひをのふるさこの中將に送る
ほかにもや雪はふるらむ今までに春こぬ宿は花とたかみむ
延喜十八年八月十三日右大臣家八講おこなふ夜于時佛法僧といふ鳥なく有感此哥奉る
あし引の　み山にすらも　このとりは　谷にやはなく
いかなれは　しけき林の　おほかるを　たかき梢も
あまたあれと羽打はふき　とひすきて　春夏冬の
時もあるを　君か秋しも　もみちはの　からくれなゐの
ふりいてゝ　なくねさたかに　きかせそめつる
山にすら稀に聞ゆる鳥なれと里にも君か時よりそなく
其人も君はつけしもせし物をいかてか鳥のかねてしりけん
とのゝ御返し
法を思ふ心しふかく成ぬれは里にも鳥のみゆるなるらん

同年晦日夜雨の降をみて

おにすらも宮の內（このうちとイ）とてみのかさをぬきてや今宵人にみゆ覽

同年の九月廿八日殿上の人々ちぎりていちじく山のほとりに行てありけんなどちぎりしにさこの少將其日になりてほの〳〵さはりありてきたらず二首の歌をつかひにつけて送る

いつしかと待しるしなき紅葉はの已か（つこイ）ちり〳〵なりやしなまし

宮人の數はしりにき女郞花いくらととはゝいかゝこたへん

山のほとり尋ぬる道にそうのいへあり紅葉ちりしきたりぜんざいに花すゝき風にしたがひてなびく人をまねくにゝたり源少將馬よりおりて

人しれぬ宿にな植そ花すゝき招けはとまる我にやはあらぬ

そうにかはりて

今よりは植こそまさめ花薄ほにいつる時そ人より（とまりイ）きける

夕くれに東光寺座主阿闍梨にあへり木のもとに莚を敷池のほとりに灯をつらねてまつ人かめのゐひすすむべきにあまたの盃酒あり一村の菊を家の前に植たり感題て哥あり夜深てかへらんとする頭少將のゝり馬を座主阿闍梨に送りてつきの夜乘てかへる

菊の花秋の野なからうつろはゝよふかき色を今宵みましや

同年十月九日更衣たち菊の宴し給ふ其日さけのだいのすはまの銘の哥女水のほとりにありて菊の花をみる

菊の花をしむ心は水底のかけさへ色のふかくもありける（るかなイ）

同年十月十九日舟岡に行幸有し時に御乳母の命婦まへにめしてもみちは折て奉れとあり一枝折て此哥をむすひつけて奉る

けふの日のさして照せは舟岡の紅葉はいとゝ赤くそ有ける

野に出たりける人を思ひやりてうちにて

語るをもきかまほしさ（きイ）に秋のゝの花みにいにし人のこぬ哉

人のむすめのもきるによめる

此春そ枝さしそむる行末（ハ）の千とせをこめて（かねイ）おふるひめまつ

七日の日の朝美濃守におくる

君にあはてひと日ふつかに成ぬれは我彥（けさイ）ほしの心ち社すれ

かへし

あひみすてひと日も君にならはねは棚機よりは（もイ）我そ增れる

同廿年二月廿七日遠江守の餞に右近少將にかはりて

別るとも君をしらねはけさまては散花をのみをしみける哉

かつらとさくらの木とより藤の花のはひかゝれる哥

かつらより香をうつしつゝ櫻花なをうしろにも藤そ咲ける

くれの春東國にわかるゝ人に送る

はる雨に君をやりては相坂の關のこなた（なてイ）に戀やわたらむ

春くれてさひしきやとはつれ〳〵と庭白妙に花そちりける

人めをも今はつゝまし春霞野にも山にもなはたゝはたて

秋

ちくさにも（にもイ）霜夜はうつる菊の花ひとつ色にそ月はそめける

色をにみつ菊の花よるといひて（そイ）おほつかなくもてらす月哉

一もとの菊にはあれと露霜にわきて〳〵色はそむらし

いままてに相坂山の紅葉はのちらぬは關や（もイ）さへてとめける

菊の花をりて夜深ぬ白露はわかてなからにおきやしぬらし

白妙の妹か袖して秋の野にほにいてゝまねく花すゝきかな
秋の野の花みにくれは白露にしとゝにも我ぬれにけるかな
さやかにもてれる月哉菊の花ひるのこと社よるもみえけれ

春

いかにしてけふを止めんをしと思ふ花の道(みちりてイ)より日は暮に咒
春霞立出て野へにこしか(をらイ)ともおいて若なはつむ心ちなし
櫻花のとかにもみん吹かせをさきにたてゝも春はゆかなむ
春くれは吹風にさへ櫻花庭もはたれにゆき(らイ)はふりつゝ
梅かえに雪のふれゝは何れをか花とはわきて折てかさゝん
雪とみて花とやしらぬ鶯のまつほとすきて鳴すもあるかな
うちにて時鳥をきゝて
久かたの空ちかけれは時鳥雲井の聲のとをからぬかな

春

をしとのみ思心にひとへつゝ散りのみまさる花にもある哉
鶯のなきいにしかは梅花さけるとみ(りイ)しは雪にそありける
年をになけとしるしもなき物をくれゆく春を何よふことり

雑

濁江に生ふるすかこもみかくれて吾戀ふらくは知人(をイ)そなき
大ゐ川せきてしからみかけてのみ思ふ心をとゝめかねつも
とも角もけふ社きかめ後はいかゝあす共しらぬ身をは頼まし
おもひをのぶ
身をわふる涙かいまそ(りイ)いつみ(ハ)なるたかしの浦にみちし覧哉

春

梅の花たゝにやはみん春雨にぬれ(るイ)〳〵そなほ折やしてまし
青柳のいとめもみえす春ことにはなのにしきを誰かおる覧
春霞立なからよをあかしてはかりと共にそ鳴て歸りし

梅花いろはめなれて吹風に匂ひくるかそとこめつらなる
春のたつけふ鶯の初聲を鳴て誰にかまつ開すらむ
はるたちて日はへぬれとも鶯のなく初聲(はイ)を今そきゝつる

夏

老ぬれは頭に(はイ)しろく卯花を折てかさゝん身もまかふかに
夏草はしけく日をに成ゆけとかれにし人のみえぬわかやと

春

年をにとゝめかねてそ(ハイ)散花のさきにもたゝぬくひをする哉
日くらしに雪とふらすは櫻花人にもみえてよにもをしまし
盛をもみる人ならは櫻花ちるを(もいとイ)ゝかくおもはましやは
ひんかしの國に別る人に送る
足からの山ちはみねとわかれなは心のみ社ゆきてかよはめ
櫻花散なん後はみもはてすさめぬる夢のこゝちこそすれ
すかのねのなかき日なれと櫻花散このもとはみしかゝり咒
春の日は暮やしぬらむ花をおきて歸らんをそ物うかりける
紫の色のふかきは水底にみえつる藤の花にそありける
いかるかにけ
をそ共開たにわかすわか(りイ)なくも人のいかるかにけやしなまし
ゆふかみ
戀すれは痩社すらめものこしのゆふかみしかく思ほゆる哉
あしぶち
おそき馬はあしふちならてあふれ共心のみ社さきに立けれ
あを
このめはる時になるまて苗代の青田になるもつくらさり咒
かすけ

棚機にわかかすけふのから衣袂のみこそぬれてかへらめ

雑

かへる鴈雲非遥にきく時は旅の空なる人をこそおもへ

年に逢て我をきませる君を(のイ)おきて又名はたゝし戀はしぬ共

君なくてふるの山へに春霞いたつらにこそ立わたるらめ

延喜七年五月晦夜内の仰をにより奉る哥

五月雨はこよひはかりか時鳥聲もやけふのかきりなるらし

おなしくは山ほとゝきす宮人のまつ時にやはなきてわた覧

春

よしの山雪は降つゝ春霞立はかすかの野へにそありける

散といへは人かとや思ふ櫻花めならぬ色のまたしなけれは

夏

白妙にさける垣ねの卯花の色まかふまて照す月かな

秋

千年ふる尾上の松は秋風に(の)聲こそまされ(かはれイ)色はかはらし

秋ふかき紅葉の色のくれなゐにふり出てのみそ鳴鹿の聲

年をにあきくる雁のたよりにもわか思ふ人のをつてもなし

月をあかみおつる紅葉の色もみゆ散おとのみは聞えさり覧

冬

神代より年をわたりてあるうちに(がうへにイ)降つむ雪の消ぬしら山

暮てまたあくとのみ社思ひしか年はけふ社かきりなりけれ

ちはやふる神かき山の榊葉は時雨に色もかはらさりけり

なくなりにける女をこひて哥を送れりそのかへしに

なきをこそ君はこふらめ年ふれは有も悲しき物にそ有ける

初雪

黒髪の白く成ゆく身に(レイ)もあれはまつ初雪をあはれとそみる

春

をさらに君はこしかと櫻花あかてそ今はかへるへらなる

藤のはなかけてそ思ふ紫のふかくも夏になりぬとおもへは

夏

時鳥けふとやしらぬあやめ草めにあらはら(れ歟)て鳴もこぬ哉

うは玉のよやふけぬらむはらへとの河へ遥に千鳥しはなく

七日

久かたの天の河きり立時は(や)機棚つめのわたりなる(るイ)らん

雑

狩にくる野へはたよりに我宿をとふ人あらはなしと答へよ

秋述懐

草も木もうへ(ふけイ)はかれ行秋風にさきのみまさる物思ひのはな

かへし

をしけき心よりさく物思ひの花の枝をやつらつえにつく

同年の八月十三日の夜左衛門督殿にてさけなとある

ついてに

秋の夜の哀はこゝにつきぬれはほかの今宵は月なかるらん

あたらしく女郎花を植て

故里の野へや戀しき女郎花しはしはかりそ旅はくるしき

ら　に

秋風に香をのみそふる花なれは匂ひからにそ人につまるゝ

霧くもる道はみえすもまとふ哉いつれかさほの山ちなる覽

野へをたにみぬ人の爲またきおきてつとに折つる秋萩の花

夏

五月雨にみたれて物を思ふ身は夏のよをさへ明しかねつる

藤原遠中朝臣しなのへまかる人に

にしへ行月ををしめは東路にわかるゝ人をまたいかにせん
　秋の日ぬしなき家をすくるに
何せんに菊を植けん生るまてあらしと君かおもひける哉
秋風におとはすれとも花すゝきほのかにたにもみえぬ君哉
　雜
夢にたにさやかにみえぬ人故におほつかなかる戀もする哉
我戀はしらぬ道にもあらなくに惑ひわたれとあふ人もなし
ひとりぬる人のきくにそ神な月俄にもふる初しくれかな
　亭子院にかつらの木を堀て奉る時
みかくれてふけ井の浦に有し名は老の涙にそ現はれにける
言のはを月のかつらの枝なくは何につけてか空につけまし
　女郎花
主もなき宿にきぬれは女郎花はなをそ今はあるしとそ思ふ
大空のかけのみゆるを山の井の底のふかきと思ひけるかな
さはた河せゝの白いとくりかへし君うちはへて萬代はへよ
濱千鳥あとふみつくるさゝれ石の岩ほとならん時をまつ君
　春
木のもとにこよひはねなん櫻花またよこめても散も社すれ
草枕旅行人はたれならむしりしらすともやとはかしてん
　田舍の家の櫻
さくら花都ならねと春くれは色はひなひぬ物にそ有ける
かりにきてたよりにをかは玉ほこの道行ふりに花や思はん
千鳥なく濱の眞砂をふみわけて行旅人はあはれたれそも
かりかねを雲ゐ遙かにきく時は旅の空なる人をしそおもふ
いさりするあまの心もしらなくにひろひやを貝こひ忘れ貝
梅かえにきすむあかすの鶯はなきまに花ををらせつる哉

香をとめて誰をらさらむ梅花あやなく霞立なかくしそ
春の野に衣かたしきたかためかならはぬ夢に若なつむらん
わか宿の花のたよりにとふ人は散なん後にまとおもはむ
春くれと花の心もなき物をうたてもなくか鶯のこゑ
あちきなく花の便りにとはれるは我さへ仇に成ぬへらなり
とはるゝもあたにはあれと我宿の花の便りそ嬉しかりける
春霞たちにしものを今も猶よしのゝ山に雪のみそふる
五月雨のよも絶ぬよにつけとてや昔から月のまたきみゆ覧
　七　日
天川つまむかへ舟さすさをのさしてはあれとしに一たひ
明行は露やおくらん棚機のあまのはころも袖しほるまて
我のみそいつともしらぬ彦星はあはて過せる年しなければ
　屛風の歌人の家海のほとりにある所
野へに社若なは常につむときけおきのみるめは時々そよる
　行　舟
波の上にほのにみえつゝ行舟はうら吹風そしるへなりける
　や　な
春のためうてるやなにもあらなくに波の花にもおち積る哉
　女のある家におつる花をみる
花盛りこんとかいひし人よりもさきに櫻はちりぬへらなり
　秋
聲にのみ散と聞ゆる紅葉はのよるの錦はかひなかりけり
　冬
年ふかく積れる雪に跡たえて人かよひちのみえぬわかやと
　除目の朝に思をのふ
都にて春をたにやは過してぬいつちに雁のなきてゆくらん

法皇六條の御息所春日にまうつる時に大和守忠房朝臣あひかたらひて此國の名所の和歌八首をよむへきよしかたらふによりて六首送る于時延喜廿一年二月七日

故里の春日の野への草も木もふたゝひ春にあふとしかな

きくに猶かくしかよふと石上ふるの都もふかぬとそおもふ

春霞かすかのゝへに立わたりみちてもみゆる都人かな

春日のゝけふのみゆきを松原の千年の春は君かまに〳〵

年をにわかなつみつる春日のゝ野守はけふや春をしるらん

櫻はな雪も降なり三笠山いさ立よらんなにかくるやと

花　見

鶯はいたくな鳴そ移香にめてゝわかつむはなゝらなくに

草　合

櫻花わかやとにのみありとみはなきもの草は思はさらまし

あかすしてけふのくれなは藤花かけてのみ社春をしのはめ

つこもり

そこみえて流るゝ河のはやけくもはらふる事を神や聞なん

七月七日

けふの日は曇らさらなん久かたのあまの河霧立わたるへく

彦ほしのつまゝつよひの秋風に我さへあやな人そ戀しき

八月十五夜

いつこにか今宵の月のみえさらむあかぬは人の心なりけり

かりてほす山田の稻をかけそへておほくの年を積てける哉

忍ひてかよひ侍ける人の家の柳を思ひやりて

妹か家のはひ入に立る青柳に今や鳴らんうくひすの聲

あつさ弓春立日より年月のいにしかともおもほゆるかな

かりの聲を聞てこしのかたにまかり侍にし人をこひて

春くれは鴈かへるなり白雲の道ゆきふりにことやつてまし

月夜に梅花折てと人のいひたりけれは

月夜にはみるともみえし梅花香を訪ねてそをるへかりける

鶯の谷の底にて鳴聲を嶺にこたふる山ひこもなし

わかなつむ春日の野へは何なれや吉野の山にまた雪そふる

御屏風

水の面にうきてなかるゝ梅花いつれをあはと人のみるらむ

今ははや根ありてなまし草のねのかはらてつひに春を待哉

春のゝに心をたにもやらぬ身は若なはつまて年をこそつめ

吹風を何いとひけん梅花ちりくる時そ香はまさりける

春くれはうつる心の色にいてゝあたにあやなく人に知るゝ

櫻見にまうてくる人に

わか宿の花みかてらにくる人はちりなん後そ戀しかるへき

春の野にあれたる駒のなつけには草はにみをもなさんとそ思

足引の山吹の花山なからさくらかりにはあふ人もなし

いつれをかわきてをらまし梅花えたもたはゝにふれる白雪

いまゝてにちらすはあらむ梅花こき物とのみおもひける哉

わか宿にさきたる梅の立めくりすきてにいぬる人もみる覧

舟岡に花つむ人のつみ出てさして行方いかてたつねむ

しるしなきねをも鳴かな鶯のことしのみちる花ならなくに

花のちるをみて

あひ思はてうつろふ色とみる物を花にしられぬ詠めする哉

ゆきとのみちるたにあるを櫻花いかにせよとか風のふく覽

興風集

寛平御時中宮哥合に（古今春上藤原好風）

春風は花のあたりをよきてふけ心つからやちりけるとみん

春霞たな引野への若なにもなりみてしかな人もつむやと

櫻花ちくさなからにあたなれと誰かは春をうらみはてたる

春霞色のちくさにみえつるはたな引のへの花のかけかも

山風の花の香さそふ麓には春の霞そほたし成ける

きつゝのみ鳴鶯の故里はちるにも梅のはなにそありける

さたやすの親王后の御五十賀に奉給ける時の御屛風の繪に梅花見たる所

いたつらにすくる月日は多けれと花みて暮す春そすくなき

聲絶すなけや鶯一とせにふたゝひとたにくへきはるかは

睦ましくかこひへたてぬ杜若誰かたにかはうつろひぬへき

折からに我名は立ぬ女郎花いさおなしくははな〳〵とみむ

ちきりけん心そつらき棚機の年に一たひあふはあふかは

白波に秋の木葉のうかへるをあまのなかせる舟かとそみる

木葉ちる浦に波たつ秋なれは紅葉に花もさきまかひけり

あたらしく我のみやみん菊の花うつらぬさきにみん人も哉

山河の菊の下水いかなれはなかれて人の老をせくらむ

寛平御時ふる哥奉れと仰ことありけれは立田川もみちはなかるといふ歌をかきて中におなし心を

み山より落くる瀧の色みてそ秋はかきりとおもひしりぬる

浦ちかく降くる雪は白波の末のまつやまこすかとそみる

君こふる涙の床にみちぬれは身をつくしとそ我は成ぬる

しぬる命いきもやすると心みに玉の緒はかりあひみてし哉

わひぬれは強て忘れんと思へとも夢といふ物そ人頼めなる

おやのまもりける人のむすめにいとしのひてものいひけるほとにおやよふといひけれはいそきていりけるにもをすてゝ入にけるかへすとる

あふまてのかたみとて社とゝめけめ涙に浮ふもくつなり鳬

恨てもなきてもいはん人そなき鏡にみゆるかけならすして

我戀をしらんとならは田子の浦にたつ覽波の數をかそへよ

思ひにはきゆる物そと知なからけさしも何におきてきつ覽

何かその名の立をは惜からむしりてまとふは我ひとりかは

身をはかつおもふ物から戀といへはもゆる中にもいる心哉

身は捨つ心をたにも失はしつひにはいかゝなるとしるへく

たれをかも知人にせん高砂の松もむかしの友ならなくに

鶯はあさむきやせん白雪の花とみるまてえたにふれゝは

うすくこき色は分ねと花といへは一つかほにもみえ渡る哉

あかすして過ゆく春に便あらはとしはかりの宿やからなん

山里は春のほたしにとちられてすみかまとへる鶯そなく

夏の夜の月は程なく明なからあしたのまをそかこちよせつる

夏の月光りをしますてる時はなかるゝ水にかけろふそたつ

秋のゝの露におかるゝ女郎花はらふ人なみわひつゝやふる

女郎花はなの心のあたなれは秋にのみこそあひわたりけれ

山の井は水なきとそみえわかぬ秋の紅葉のちりてかくせは

大空の月の光にあしからの山のこなたはあきにそありける

小倉山秋の紅葉は散にしをてりてそみゆるしきにしけれは

あらし吹山のふもとに降雪はとくちる梅の花かとそみる
白波にをりはへあまのこく舟は命にかふるみるめかりにか
夢にたに人の思ひにまかせなんみては心のなくさまん物を
涙川そこはかゝみにきよけれと戀しき人のかけもみえぬは
戀しとも今は思はすたましひもあひみぬ先になく成ぬれは
あひ見てもかひなかり覺うは玉のはかなき夢におとる現は
あしたつの何れの朝かなかさらむ思ふ心のゆかぬかきりは
夢にたにあひみぬなから消ねとや戀しきとのこゝにせむ覽
なきわひて身を空蟬と成ぬれはうらむるとも今はきこえす
わひぬれは強て忘れんと思へとも夢てふ物そ人たのめなる
うきてぬる鴨の上毛におく霜の消て物思ふころにもある哉
萎れてもあはれたとへて慰めしなからの橋も今は聞えす
戀しきに身もなけつへし慰むることにしたかふ心ならねは
浦ちかく立朝霧はもしほやく煙とのみそあやまたれける
筑波ねの蔭におひにし里なれは光りのおほふ物とたにみす
雲の上にあと踏とむる濱千鳥行衛もなしとなきのみそする
みつれとも心もゆかぬ夢ちをははかなき物とむへもいひ覺
なけきこるをのゝ響の聞えぬは山のやま彦いつちいにしそ

群書類從卷第二百六十二

和歌部百十七　家集三十五

忠峯集

兵衛佐貞文か家の哥合に
春立といふはかりにやみよしのゝ山も霞みて今朝はみゆ覽
たゝみねおほせありて奉る
春雨のほとふるとも時にあへはひもとく花のつまと成けり
春日の春のまつりにみける女車の下すたれよりすき
てみえけるにつかはしける
春日野の雪まを分て生出くる草のはつかにみえし君かな（もイ）
はるの初に右大將の屏風哥
春きぬと人はいへとも鶯の鳴ぬかきりはあらしとそおもふ
はるのゝはおひぬ物（もイ）なくみゆれとも思出草はなき世也けり
あつさ弓はるさめとにみゆるきのめもめつらしき鶯のこゑ
いとゝくもうつろいぬるか櫻花あなゝる人もみてこりぬへし
（後撰夏藤原高經）夏のよはあふなのみして（らイ）敷妙のちり拂ふまに明そしにける
いたつらにをのか聲かとほとゝきす鳴ては人に恨みらる覽
から衣行かふ人のさしはへてくる里もあらし山ほとゝきす
夏夜ほとゝきすをきゝて
暮るかとみれは明ぬる夏のよをあかすとや鳴山ほとゝきす
哀てふ人はなくとも空蟬のからに成まてなかむとそ思ふ
秋の夜月のいみじうあかゝりしに
久かたの月のかつらも秋はなほもみちすれはや照まさる覽
（後撰秋中よみ人しらず）秋夜は人をしつめてつくゝゝ（れイ）とかきなす琴の音にそ明ぬる（なきイ）
山田守あきのかりほにをく露はいなおほせ鳥のなみた也覧
これさたのみこの哥合に
松のえ（ねイ）に風のしらへをまかせては立田姫こそ秋はひくらし
神なひのみむろの山を分行は錦立きるこゝちこそすれ
中宮の御屏風に
山里は秋こそことに悲し（こひイ）けれ鹿のなくねにめをさましつゝ
風さむみ衣かりかねなくなへに萩の下葉も色つきにけり
もみち葉の流るゝ（たきはイ）水の紅に染たる糸をくるかとそみる
秋の野の女郎花を見て
人のくる（みイ）ことやくるしきをみなへし霧の籬に立かくる覽
山さとに秋きり（こゑたかくイ）分てなく物は妻まとはせる鹿にそ有ける
ある女につかはしける
あき風にかきなす琴のこゑにさへはかなく人の戀しかる覽
后宮哥合に
しら雪のふりてつもれる山里はすむ人さへや思ひきゆらむ

女につかはしける

かきくらしふるしら雪のむら（したイ）消にきえても物を思ふ比かな（ものもふころにもあるイ）

后宮の哥合に

みよしのゝ山のしら雪ふみ分て入にし人のをとつれもせぬ

むかしものなどいひし女のなくなりしか夢に曉かた
にみえて侍りしを

命にもまさりておしく有物はみはてぬ夢のさむるなりけり

我玉を君か心に入かへておもふとたにもいはせてしかな

もろくともいさ白露に身をなして君かあたりの草に消なん

女に

瀧つせにねさしとゝめ（まらイ）ぬ萍のうきたる戀も我はするかな

難波なるみつのゝ（てふイ）濱の夢にたにみつと思はむね覺せらるな（るイ）

から國のきそのはま（ものイ）へにやく鹽の思ひはるけき我や何なり（るイ）

うれしくて後うき事はぬるをに我身をはかる夢にそ有ける

鳥ならはあたりの木々に隱れゐてほれたる聲に鳴まし物を

風ふけはみねにわかるゝしら雲のたへてつれなき君か（をイ）心か

田子の浦に君か心をなしてしか 異本 ふしてふ山も思ひ知せん

駿河なるうつの山への現にも夢にも君をみてやゝみなん

ゆめにたにつれなき人の面影をたのみもはてし心くたきに

かくてしも（しつゝイ）有へき物かゝさゝきの渡せる橋も隔たらなくに

かせさむみ聲よはり行虫よりもいはて物思ふ我そ悲しき（まされるイ）

たこの濱すさきのちとり心して底の玉もを我にもらせよ

吉野山よしよ（やイ）つれなくしのはれよ耳なし山のしらす顔して

日暮れは山のは出る夕月の〔星とは見れど遙けきやなそイ〕

あひしりて侍ける人の身まかりにけるとき

ぬるか（るイ）内に見るをのみやは夢といはんはかなき世をも現とはみず

ある女に物いひたりとさはかれし比

雨ふれとみなと立出ぬ白鷺のぬれ衣をたにきせんとそ思ふ

ある人のかりのたよりにつけて

みちのくに有といふなる名取川なきなとりては苦し（わびイ）かり鳬

かくれぬの底より（したイ）生るねぬ繩のねぬ名は立てしくるな厭そ

世中は（古今はいかい在原元方）いかに苦しとおもふらんこゝらの人に恨みらるれは

やまかき

露さむみよるやまかきのきり〳〵す聲ふり立て鳴増るらん

かるかや

さく花のはかなかるかや匂ひつゝ人の心をあたになすらむ

かひの國へまかり申とて

天津風ひろく涼しきおほとのに野へにならひて聲立なむし

君か爲いのちかひへ（にイ）そ我は行つるてふこほり千世をうる也

ひえ坂本なる音羽の瀧をみて

おち瀧つ瀧の水上としつもり老そしにける（にけらしなイ）黑きすちなし

右大將の四十賀の屏風に夏

大あらきのもりの下草しけりあひて深くも夏の成にける哉

秋

秋はまつさす葉（えイ）よりうつろふを露の心（のイ）はわくるとなみそ

七月八日

けふよりは今こむ年の昨日をそいつしかとのみ待渡るへき

これさたのみこの家の哥合に

秋のよの露をは露とをきなからかりの泪やのへをそむらん

中宮の御屏風に山　ある所

かはつ鳴ゐての山田に蒔したね君まつなへと生立にけり

あさ人菊の露に袖ぬらして有といひ侍ける

おひきくの雫をおもみわか行にぬれ衣を社老の身にきれ

有明のつれなくみえし別れより曉はかりうきものはなし

ある女のいみしう心つらく侍りしかは

ひとりして思へは苦しいかにしておなし心に人ををしへん

女にはしめてあひていみしうあはれにおほえ侍しかはその女に

思ふてふ事をそねたくふるしける君にのみ社云へかりけれ

中宮の御屏風にあまのかづきしたる所

心さし深く水底かつきつゝむなしくいつなおきつしまもり

あひしりたる人のみちの國へすまひのつかひにまかるに

瀬をせけは淵となりてもよとみけり別れをとむる柵そなき

仲春中宮の御屏風に

春はなをわれにてしりぬ花さかり心のとけき人はあらしな

右大將四十賀の屏風に

にこりなき清たき川の岸なれは底よりさそとみゆる藤なみ

内侍督の左大將の四十賀にうしろの屏風によませし

千鳥なくさほの川霧立ぬらし山の木葉も色まさり行

これさだのみこの哥合に

雨ふれは笠とり山のもみち葉は行かふ人の袖かとそみる

内侍督の左大將の四十賀せさせ給し屏風に

夏草の上にしけれるぬま水の行かたもなき我こゝろ哉

一人ゐる我數妙は嚔かまのうきたるなれやよるかたもなし

女のもとにつかはしける

月かけに我身をかふる物ならは思はぬ人もあはれとやみむ

友則がうせにける時によめる

折しもあれ秋やは人の別るへきあるをみるたに戀敷物を

いみにこもりたる人をとふとて

墨そめの君かころもは雲なれや絶すなみたの雨とふる覽

あひしりだる人の住吉にまうづると聞て

住よしとあまはいふともなかゐすな人忘草おふといふてふ

あひしりたる人ひさしうとはすしてまかりたりしにうらみ侍しかは

すみの江の松に立よるしら浪のかゝれる時やねはなかる覽

三月三日ある所にてかはらけとりて哥合ども

みちとせになるてふもゝはことしより花咲春に成そしにける

しほのなかりける夜よめる

鹽たてはなへてもからき世中にいかてあへたるたゝみ成覽

國にある所〳〵のかたを繪に書てさひえといふ所にかゝむとてよませける哥

年をへて濁りたにせぬさひえには玉もかへりて今そ住へき

ふるき哥にくはへて奉るなかうた

くれたけの　よゝのふること　なかりせば　いかほの沼の　いかにして　おもふ心を　のはへまし　哀いにしへ　ありきてふ　人まろこそは　うれしけれ　身もしもなから　その葉を　天津空まで　聞えあけ　末の世までも

あと〻なし　いまも仰の　くたれるは　ちりにつけてや（とイ）
ちりの身に　つもれる事を　とはるらん　これを思へは
けたもの〻　雲にほゆらん　こ〻ちして　ち〻のなけきも
おもほえす　心ひとつそ　ほこらしき　かくはあれとも
てるひかり　ちかきまもりの　身なりしを　誰かは秋の
くるかたに　あさむき出て　みかきもり　とのへもる身の
みかきもり　おさ〳〵しくも　おもほえす　こ〻の重ねの
うちにては　あらしの風も　きかさりき　いまはの山の（もイ）
ちかければ　春は霞に　たなひかれ（をかしイ）　夏はうつせみ
なきくらし　秋は時雨に　袖そぼち　冬は霜にそ
せめらる〻　か〻るわひしき　身なからに　つもれる事を（としイ）
しるせれは（かそふイ）　いつ〻のむつに　なりにけり　これにそはれる
わたくしの　老の數さへ　せめくれは　身はいやしくて
としたかき　ことのくるしさ　かくしつ〻　なからの橋の
なからへば（てイ）　難波のうらに　たつなみの　涙のしたにや（はイ）
おほ〻れん　さすかに命　おしけれは（とイ）　こしの國なる
しらやまの　かしらは白く　成ぬれは　をとはの瀧の
をとにきく　老すしなすの　くすりかも　君か八千世を
わかへつ〻みむ

ふるうためし〻をりにそへて奉る

君か世にあふ坂山のいは清水こかくれたりと何おもひけん（おもひけるかなイ）

梅か〻を櫻の花につけたらは思はすに行鳥あらましや

むかし住し家にて時鳥を聞て

いにしへや（むかしイ）今も戀しきほと〻きす故里にしも鳴てきつらん

秋の野の萩の白露けさみれは玉やしけるとおとろかれつ〻

あき山をのそむ　大井行幸

秋山の紅葉みしまに日もくれて立田姫にや宿はかるらむ

人〳〵もろともにはまへよりまかりけるに山のもみちを見やりて

いく木ともえこそしられね（見わかねイ）秋山の紅葉の錦よそにたてれは

紅葉おつ　大井行幸

色〳〵の木のはおちつむ山里は錦にとめるなきな立らん

秋風にくらふの山の女郎花こ〻ろをおもみあはれとそみる

菊　大井行幸

霜わけて咲へき花もなき物を色を殘して人を尋る

たひの鴈　大井行幸

むかしより春立かへり秋はきぬいつこを旅の光といふらむ

ひくらし奉る時のうた

山里にわひくらし〻を九重のみ山いりして我はわするな

左大將の御賀のうた

鹽かまの磯のいさこを包みもて千（み）世の數とも（そイ）思ふへらなる

女のもとにはじめてやる

すまの蜑のたれる（こイ）鹽（木のイ）釜もゆれとも人にしられぬ我戀ならん

秋の〻に妻なき鹿の獨りふしふせとねられぬみ社すへなみ

うしと云て怪しやなとかみをなけん生て有身のよとは增れり

風吹は空にむらちる雲よりもうきて立する人はまされり

侘人の衣（こころ）のうら（ちをイ）にくらふれはふしの山へはしたこかれけり

あひ思はぬ人の心は山なれやいはほよりけに動かさらなむ（るらんイ）

夢の路とこまとひなる世をへつ〻歎く詠めに世〻をふると

一たひも戀しと思ふくるしさは心そちゝにくたくへらなる

しのひて女のもとにまかりて侍しにいくはくもなく
て明侍しかはまかり歸るとて

夢よりもはかなき物は夏のよの曉かたのわかれなりけり（くみゆるイ）

筑波嶺の陰をたに見しかひもなく今はまつ山涙なとかめそ（とゞめイ）

みつねとよみかはせる

待程はたのみも深し夜をこめておきて別るゝそはまされり

かひの國にまかりたりしほとにたのみたりし女の人
に名立と聞侍りしを歸まうてきて

忘るれは又も渡らぬうき事の忘れゞのみもおもほゆる哉

二葉よりわかなてしこを哀なるいくその秋にあはむとす覽

あきはかり泪かたくも成にしか物をかなしと深くおもはし

秋霧は立ぬをりありはれもせて降なん名をはいかゝ告めん

いとまにてこもりゐて侍るに人のとはねは

大あらきの森の草とや成に釼かりにきてとふ人もなきみは（けるイ）

藤衣はつるゝいとはわひ人のなみたの玉のをとそなりぬる

みつねとよみかはしける

身をしれは出る涙もあはれなり春のなかめはつねにふるを（のイ）

同　哥

秋はつることは哀もまさりなん入ぬる月はよのまはかりを

同　哥

思ひやる心のほとははてもなし風のいたらぬくまは多かり

伊せのみちのすゝか河にて

名にはいへとたかにもすへの鈴鹿河せゝの涙社冴けかりけり（かけぬイ）

からさきといふ題を

いかて人たれからさきに渡りけむ水の面にあともつかぬに

大井の行幸

年ふかくねさし入江の松なれは老のつもるは波やしるらん（りイ）

同　題

水かけをえにける松はいとゝしく波の上にやおひまさる覽

かしの木

あら玉の年こそまされ秋そにむかしの霧や今も立らん

躬恒とよみかはせる

鳥の子はかさねて暫し有ぬとも人を賴まんことのはかなさ

鶴すにたてり（らイ）　大井行幸

眞鶴をたちゐなかせるかたのすに千年の跡を殘さゝらめや

鷹

山深みすかけせしより心有てまもりかへけるやかたをの鷹

かもめなれたり　大井行幸

白浪のこせともたゝす群ゐつゝ人になつかてみなれたる哉

うつせみといふ題をありはらのしけはる返し

袂より離れて玉を包まめやこれなんそれとうつせみむかし

陽成院の御つかひにしてかひの國にまかりたりしほ
とにたのみたりし女の人に名立と聞てかへりまうて
來て遣はしける（つイ）

そのこそ　とろきのゆかり　有しとき　さきのすへらの
おほせにて　白雲まなる　かひかねに　さしつかはしゝ
時にわか　いひしを葉も　よひことに　ちきりしをは
和田のはら　ふかきみとりに　ありそ海の　あた涙立なと
いふことは　おり返しつゝ（のイ）　いひおきて　時雨とゝもに
ふり出にし　まなこはちりに　立かへり　あつまの道も

みえさりき　心のやみに　まとひつゝ　あふさか山を
こえ出し　しけきおもひを　山しろの　山をうしろに
うらみつゝ（いイ）　うしろめたしと　思ひしに　わが身はせたの
橋にわたり　いかにせましと　うちなかめ　あふみの海を
みやりしに　やむをなみの　立しかは　はるかにみえし
たてしまの　からき別を　するかなる　富士のみ山と
みゆれとも　つゐにとまらぬ　みちなれは　手向の神を
うちねきて　さして行衛に　いたりにき　殘れる冬は
しかならて　草のまくらに　わひくらし　年たにたゝ（こイ）は
春かすみ　立かへりなん　ともし火に　わかなすかとの
しつはたに　みたれてならす　ありしかは　立とゝまりて
へしほとに　せみの初聲　なきしなつ　都よりくる
みやことり　空に鳴ねを　聞しかは　君まつ山は
もみちして　涙さへこゆと　きゝしかは　雲のうかへる
ことなれは　よるもあらしの　かせ吹て　晴たる空を
うちなかめ　いつしか山を　立のほり　まつ山ことに
うつろひし　有とみんとそ　いそきこし　何かはさらに
さりけれは　色のみとりも　さしなから　心ねさへそ
かれにける　さりとも水の　あはこゝろ　すみもしぬへく
おほえしに　にこりそめにし　あさきりは　時雨とゝもに
朝きりに　いていりしけき　にほとりの　底さはかする
いけ水に　身を浮草の　かくせとも　かくしもあへす
難波かた　なにはに生る　あしのねの　朝ゆふへに（つゝイ）
あらはれて　聞ゆる事を　くるしみて　もえ出てほかに
うつる成けり

右忠岑集以肥後守經亮本挍合了

忠見集

御屛風に春よし野山に霞たてり

霞たつよしのゝ山を越くれはふもとそ春のとまり也ける

春日野所〲やく

燒すとも草はもえなん春日野をたゝ春の日に任せたらなむ

石上山田つくる

春くれはまつそうちみる石上めつらしけなき山田なれとも

もるやま

たか爲そ民の年へてもる山は世をへて松の生そはる覽

みくまのを舟よせてはまゆふとる

みくまのゝ浦の濱ゆふたか（われイ）舟の何かはいく（いくらをイ）へつみてかへ覽

なからのはし

人しれす渡しそめけむ橋なれや思なからに絕にけるかな

身をつくし

吹風にまかするともみをつくしまつと知てやさしてきつ覽

秋すまの關あり

あき風の關吹こゆるたひ毎にこゑうちそふるすまのうら浪

高砂たひ人ゆく鹿たてり

高砂の鹿なくあきのあらしにはかのこまたらに涙そ立ける

佐保山紅葉あり霧立り

さほ山のもみちの錦いくらともしらて霧たつ空そはるけき

こゆるきのいそあまいさりす

こゆるきの蜑はあさりに疲れつゝいかなる時に（かイ）なめかる覽

冬むさし野旅人たてり

行くらす旅のやとりもむさしのゝ草結ふよはおもはしき哉（むつまイ）

淺香のぬま

月わたる（やとイ）淺かの沼の水淸み夜は玉藻のなひくをそみる

うきしま

おきつ浪よせはよせなん浮島に年ふる松をこゝなからみむ

こしのしら山

年ふれはこしのしらやま老にけりおほくの人の雪積りつつ

同御時御屛風に正月子日若なつむ

若なとておほくの年をわかつめは君そ子日の松にゝるへき

二月はつむまいなりまうて

戯の身にしあらねは稻荷山祈る日よりそさかはゆきける

三月櫻の木のもとにかちゆみいる

心にもいるひの弓はやまならぬ花のあたりに的そことふる

四月池の藤松にかゝれるをもてあそふ

池近くうつりにけりな藤の花こゝのそこのといかて惜まん

五月時鳥なく山道に女車いく

深山いてゝ都へならは時鳥よひなきそへてことつてにせよ

六月河のはちすをり

みな月のなこしはらふるかみのを水の心はなきやしぬらん

七月七日川あむ

涙の立水のあやをもけふみれは七夕のともおもほゆるかな

八月相坂駒引

さやかにもみえすそ有けるあふ坂の駒よりみゆる望月の影

九月九日菊

萬代をわかゆるきくそをく露のまゆをひらくる時はきに匙

十月大井川井關に紅葉なかる

色〳〵の木葉なかるゝ大ゐ川しもはかつらの紅葉とやみん（とそみるイ）

十二月りんしのまつり

ひねむす（姬小松イ）にみれとも飽す木綿つけて（かけイ）鴫の社（祭イ）におひやつかなし

十二月なやらふ

年をにやらふなはして有つるを今年や終にゆきゝえぬへし

又屛風によしの山

みよしのゝ山のわたるを分くれは春のわたりに成にける哉

春日野のわかな

春日野の草はみとりに成にけり若なつまんと誰かしめけむ

井手に山吹ある家ありおとこ籬に立よりてせうそく

いはす

折てたにゆくへき物をよそにのみ見てやかたらむ山吹の花

返し

よそにても井手の山吹みきといふな語らは外に散も社すれ

難波に蘆舟あり

なにはかた行かふ舟のつなて繩くる社（とも）みえね芦（すイ）のまをなみ

さらしなにやとりとる旅人あり

更科にやとりはとらしをは捨の山まててらせ秋のよの月

筑波山に紅葉あり

常陸なる筑波の山のもみち葉のなにあかすとか露のをく覽

筑波山このもかのもの紅葉はは秋はくれとも飽すそ有ける

須磨の關

ときせちはすまのせきにもかはらね（ぬイ）は都に秋の風や吹らむ

いなりまて

神のやとみつの社に祈すとけふより君か坂はゆかなむ

水のほとりにかくらする

水上のこゝら（心イ）流れて行水にいとゝなこしのかくらをそする

ある所の御屏風に正月ぜちする

春かすみ立といふ日を迎へつゝ年のあるしとわれや成なん

二月子日に女の出たれはれいけさうするおとこあひてせうそこす

子日とも契らて若か野へくれは松に懸りて世をやつくさむ

三月春おしむ所

人の身にきつゝはとまる春ゆへに惜こゝろのまとひける（ぬイ）哉

四月いへの神まつる

年毎に祭らんとてはきね（かすイ）はみむ（そイ）いたゝくかみのしらけ行迄（くるまてにイ）

五月五日菖蒲蓬家にふきたり

夜半にのみ鳴郭公おほつかな菖蒲とるへきけふはいつそも

七月七日ほしまつる所

彦ほしのかけを待夜はおほつかなほのかに照す月の入かた

八月駒をみる女車あり

みまほしと思ひし駒にひきむかへ君か車にあふさかのせき

九月九日に菊のわたおほひたり

花の香をけさはいかにそ君か爲まゆひろけたる菊の上の露

山里なる女におとこ來て物いふ

ゆふ暮になれは聞ゆるすゝむしを思ふはかりのたより成覧

十月うちのあしろに女車物みる

底深きしきつの淵に住すして網代によれるひをのみやみん（へイ）

諸共にくれとかひなき網代かなよそ白浪にひをしへぬれは

十二月佛名する所

つみとかはめにしみえねは降雪のきえむ朝をみるはかり也

御障子の繪にふかき山に鶯の聲聞人あり

うくひすの鳴ねをきけは山深みわれよりさきに春は來に覧

霞立る山より瀧おつ

水上のわたにかすみたな引ははるのくるよりたきのしら糸

岸のほとりに藤花さける

手もふれてことに出れ（こゝにはおしむイ）と藤の花庭にうつれる涙そ（はイ）おりける

柳櫻ある家

青柳の糸をそよれる櫻花ほころひはてゝちらんよ（ひイ）のため

霧立て紅葉の木ともかくせる所

いろ〳〵の紅葉の錦霧立て殘れるはし（てイ）はいく木（つくイ）とかみむ

山里なる女鹿のねを聞て

妻こふるしかなくときに成に覧わかひとりねを誰に聞せむ

おきないねはこひをかする所

年（あきイ）をにかりつむ稲はみえくれ（つみつれとイ）と老にけるみそ置ところなき

麗景殿の哥合に左方にて霞を

あら玉の春をもしらて故郷は立田の山のかすみをそみる

風

かせ寒みこほれる谷のみつしもそ春くるをとくと待らん

若菜

ふりはへて若か爲にと春の野につめるかたみの若菜なり覧

あやめ

春雨は降そめにしかうつたへに山を綠になさんとやみし

うくひす

わか宿の梢をたかみ朝ほらけ鳴うくひすの聲ほのかなり（はるかイ）

梅

香をとめて人も見にこぬ梅花まちくらしつゝ獨をるかな

柳

あをやきの糸はみたれて春ことに露のとまらぬをとや成覽

櫻

おしむへき庭の櫻はさかりにて心そ花にまつうつりぬる

山吹

山吹の花なき里の住ゐこそふりはへとをく出つとおもはめ

ふちいりてかつ

をそく咲藤の花ゆへいつしかと我さへまつにかゝりぬる哉

あはぬ戀いりてかつ

かきりなき戀をのみして世中にあはぬためしを我や殘さん

あひての戀いりて持

夢のことなとかよるしも君をみむくるゝ待まも定なき世を

有方をまた霞

あさみとり春をきぬとやみよしのゝ山の霞のおひそみゆ覽

若菜

春くれは若菜摘野そ思ほゆるかたみにもらぬ人のなければ

風

山河のなかれまさるは松かせや谷のこほりを吹てとくらん

雨ふりてぬる

春雨そ山のみとりは染てけるいさ今よりはぬれ衣きむ

梅

わかやとに梅の匂のみちぬれはおりてつめると人や思はむ

鶯

うくひすの初ねはほのかにあし引の山へとひ出る聲聞ゆなり

櫻

我やとのものともいはし櫻花折てくらふる人もあらなん

柳

青柳のいとよりあふるほともなくとくしる物は月日なり鳧

山吹

やまふきの花の汀に匂へはや澤に蛙のこゑ聞ゆらむ

藤

わか宿の松にひさしき藤の花紫野にはさきやしぬらん

あはぬこひ

くれことにおなし道にもまとふ哉我身のうちに戀はもえつゝ

あひてのこひ

別れてはくるゝもしらす戀しなは君やほとなき物と思はむ

屏風梅花ちれる所に女ともあそふ

折もあへす散ぬるむめの花によりよそなる人や我を恨みん

三月柳おほかる家

我やとのやなきの色も春くれはみとりの糸に成にける哉

八月十五夜の月にあそふ人あり

大空を照す月をはおきなからかつらの影はくらくや有けん

朱雀院の御屏風に

子日する野邊に小松のなかりせは千世の例に何をひかまし

おり〳〵の哥梅のつくり花を

梅花はる待わひて咲にけりいまは匂ひのそはる計そ

いつのおりとしらす

まつはたゝ千とせ社つめひく人は幾その子日かそへわた覽

行かへるほとさへとをき子日哉千世の松引かめのおの山

一もとをちとせはみてん松なれとあまた多くも引てける哉

ひきてくる子日の松の千とせをは待みん君そ久しかるへき
ひく松にちとせわくとも亀山に残るよはひのおもほゆる哉
　殿上の人〻女蔵人ともの松原に出て子日しけるを
宮人の子日する野を九重に霞の立とよそにみるらん
　若　菜
春をあさみかたみの底にみたね共君か為にとつめる若菜そ
若菜摘野にはからきもなかり鳬まつにしるへき君に任せて
　御前のさくらよませ給しに
朝ことにはきけむ物を櫻はなけふより後やちりなから見む
　さくら人のおらせて侍けるに
拾　もろともにわれをしらねは櫻花誰かとも枝にしらすも有哉
　人のこのさくらの折たる枝をもたるを
このおれる櫻のえたの殘れるはあらき風をもあてしとや思
木なからそみるへかりける櫻花折まにおほく散にける哉
櫻みるに有明の月に出たれは我より先に露そ置ける
　柳
ちる花をぬきもとめなん春くれはいとよりかくる青柳の枝
　東宮御屏風山吹の繪に
井手にのみ有と聞えし山ふきの九重ちかく咲にけるかな
われを思ふ人そあるらし故郷にゐての山吹おりなからみつ
山吹をおるとはなしに夕暮の蛙なくまて立る霞か
　鶯
うくひすの鳴こゑ聞は深山出て我よりさきに春はきにけり
　六月になくを
尋きて聞は有けり鶯のなくなる夏とおもひけるかな

　春の別をおしむ
春ゆかは花と共にしたひならんをくれは何の身にか成へき
はかなくも花のちり〳〵まとふ哉行衛もしらぬ春に後れて
大空と山路をたのむ春くれはたひゆく雲を霞とおもはん
　御前の前栽より螢の飛立を
新古　いつちとか夜はほたるの登るらん行衛もしらし草の枕に
　菊の賀せらるゝ又の日
拾　吹かせに散ぬるならは菊の花雲井なりともあひはみてまし
あまたあらはそふへき物を神な月殘れる菊の限なりけり
菊の花うつらぬ枝のましれるをけふより後に霜はをかなん
　すはまにすいへるつる立り
千歳ふる霜のつるをはをきなから菊の花こそ久しかりけれ
　きくもてあそひたる繪に
またやあるとゝふ人あれや菊の花かきりなしとも惜るゝ哉
　住の江(吉イ)の松書たる繪に
住の江の松は老ぬと思ふらんかけにも涙のよりてみゆれは
　山たかき瀧おつる所
水底のわくはかりにはくゝる覽よるひともなき瀧のしら糸
　初雪をみて奉る
はつ雪にけさはおきても思かなさても有つる我身ふりぬと
　物にいく人にぬさやるとて
ぬさよりもなく〳〵我そたくへまし涙をゝくる手向有やと
別路をいつかたへ共しらぬ身は行人をこそとふへかりけれ
ぬさよりも我やゆかましみちのおくの忍ふ計のかたみ送に
遠けれは思はすとも忘れなんかたみをわけて送るまされり

拾 露にたにあてしと思ふ人しもそ時雨ふるころ旅に行けり
をくれしといはぬ涙も手向にはとゝめ乘つる物にそ有ける
　こしのかたへゆく人に
忘れすは人は越路と思へ共今はかへるの山をたのまん
行道をうみちとのみは侘はてしかへるの山の松をたのみて
　此哥三條のおほい后宮の御哥なり
旅人の露はらふへきから衣またきも袖のぬれにけるかな
　物にまかる人にきぬゝさ給とて
君か爲なてしもしるく此たひの手向の神と成そうれしき
　是もおなし宮の御哥なり
　右馬助すけのふの朝臣信濃の湯にまかるに
あし曳の山くるしくて下るともくたりて山はひとり越なん
　ある人の土佐へまかるに
月影に道のあひたはあかくともこよひは共に出んとそ思ふ
　つのかみさたひらの朝臣きの國に下に中宮ぬさ給ふ
　朝に
都出て難波のかたに行人は住よしと聞浦にとまるな
　但馬湯に人のまかるに
たちまちの手向の神もしらすして袖に霧たつ旅のぬさ哉
　いつこにか有けむかるかやを題にてよみ侍しに
白露のかるかやことにいさしらす草はも玉の櫛けならまし
　美濃國にてかつまたの道(湯イ)を
此山(やイ)の道のかきりとおもへともかつまた道(のみゆイ)は遠き成へし(けりイ)
　播磨のこうにやとれるに時鳥のなくを
誰をかはこうの山邊(わたりなるイ)のほとゝきす草の枕にたひ〳〵はなく(そイ)
　同國なるふなさかに
風おはぬ舟さか山はとし月もおなし所そとまり成ける
　布引の瀧を
みねのうへに絶す雲のみ棚引は白くおちくる布引のたき
　つくしにくたるにあきの國あこ(しのイ)山を雨のふるにこゆ
　るとて
一たひもまたみぬ嶺(みちイ)にまとはぬは雨のあし(下イ)こそ指南成けれ
　しけみちの中將殿ゐ所にきくをうへをきてうつろふ
　まてまいらさりけれは
菊ならぬ花にありせは散なまし植て霜にはをかせたれ共
　はりまのゆめさき川をわたりて
わたれともぬるとはなしにわかみつる夢さき川を誰に語覽
　藤原きよたか紀守に成て殿上おりてとし頃になりて
　小貳命婦にやるにかはりて
天津風ふけ井の浦にゐるたつのなとか雲ゐに歸らさるへき
　この哥ろくたふへしとあるにをとなけれはおとろか
　し申
やそうらのいたゝく雲(山イ)の物(ぐもイ)なれは久けれともまつは賴もし
　昔かたらひ侍し人の年比ありてあひはへるつのくに
　たまさかといふ所にあるにすゝむしの鳴けるに
たまさかにけふあひみれと鈴虫は昔なからの聲そ聞ゆる
　津守なる人に
君か代に難波の浦は茂りあひぬあしかる事をせねは成へし
　同人にと葉
難波津のあなたの事は住よしの(のえのイ)年ふる松そしらはしるらん
　伊豫に下るによしあるうかれめに

音にきゝめにはまたみぬ播磨なる響のなたと聞はまことか

返し女

年ふれは朽こそまされはし柱昔なからの名にはかはらて

田舍人なる家のやけたる見にまかりて

我宿は煙と成て雲井なるいつこをさしてゆかむとすらむ

ある人のひたゝれえさせむとあるかうらをなむうしなひたると申

住よしの岸ともいはてしら浪の猶打かけようらはなくとも

よそにみて歸るとて

雲ゐよりくれはかなしき故鄕をかりの道とそ思ふへらなる

と申けれは打かけてをみなへしになまみるをかけてたまへるに

みるめゆへ(かるイ)纓にしたれと女郎花けふは我にそ(そイ)かつきをとれる

おさめ殿よりなつそ給へるに

空蟬はさもこそ鳴め君なら(えイ)てくるゝなつそと誰かつけまし

かへしよみ人おほく侍らす

せみの聲(からころもイ)くるゝなつそと思へとも秋も立やとなとかきさ覽

かりの子を奉とて

紡なくて親となれたる雁のこをみやたてしても思ふへき哉

ある所よりひめし有ける

きえねはや時にあはせん(かイ)春風にあたらてわひし谷の氷は

ある人の山吹奉るに

春とをくあれともゐての山ふきは心のゆけは折なからみつ

うへのくちは色の御あふきにたゝつるのかたをおもてにかゝせ給へるいまかたつかたにはあしてかゝせ給へるに

浦に住鶴のあふきをわかかたの風かとのみもおもひける哉

なにそむる秋の扇を女郎花さきにけりともみゆる色かな

おほやけにさふらひし田舍へまかり歸るとて

いにしへのにきしは(きしにはイ)ものか九重の(百しきをイ)きつゝかよふと思ふ心は

おほやけよりせにふたつ給へるを

鳴とりのかよふ水たにあさきせに浮へる鴨は二つつられて

きぬ二疋(ふたむらイ)給はせて返事申せと仰られけれは

昨日まて恨みし風は大空のうき雲はらふつかひなりけり

人のしら露とておらせたるを

白露に置きたるまゆみをし折ていかにつけとてみする成覽

をのゝよしふるの朝臣の大貳にてもろこしのひとのよすめかひておちつくもといはれけるにそのことひ出したる人をさもいひけるにあひかはり侍りて

夢をこそねさめの程に語りけめみたてまてにも聞えける哉

つくしにまかりけるにある人に馬をかり侍けるにかさゝりけれは

夏の日の暮方に社あやしけれみのときもなくともみえねは

是を聞てなりくにの朝臣馬を給へれは

よそ人の馬にわか名は立はてぬこれにはつけむ物もなき哉

人にきぬかりて返すとて

濡さしとつゝみをれとも大空のかはきぬなれは露やをく覽

津國に年比身をつめて侍けるに大やけきこしめしてめしあけられてよゐにさふらひてまかり歸りて又の日少將ありとしの朝臣をして被仰たる

見しかとも誰ともしらす難波潟浪のよるみて歸りにしかは

此返事にまかすへしとありしかは

住江の松とほのかに聞しかはみちこし鹽やよるかへりけむ
延喜の御時躬恒かさふらひける例にてみつし所にさふらはせんと仰られてせしの三月まてくたらねは人の許にいひやる
櫻花たかき梢のなひかすは歸りやしなんをりわひぬとて
ある人に
折わひて歸らむものかたきかけ（かつらきのイ）の山のさくらは雲井成けり（ともイ）
卅の宮より（さゝる）とて藤の花給へるに
いかてかはちらさてくへき藤の花風によりてそ涙も立らめ（こそ君もみるらめイ）
はしめてめしあけられけるに
君か世にさか行へしと思ひせはしらまし（とはましイ）物をたゝみねの道（みちイ）
あるみやす所のさつきたよりありてうへのきぬ給へりけるがうらなとやなかりけむ
浪高み寄へくもあらぬ舟なれや浦にもつけておき乍らみん
、同御息所のまかて給けるにしはしとまりてある女の出にけるに
すもりこも立（出イ）にけるかとみるに社（時はイ）かひなき身さへ恨有けれ（うらやまれぬるイ）
此返しうちに有けるにつけて
有へくは人につけつゝ今はなをたよりなきみと思ひける哉
返し
人にます心つかひもある物をたよりなくてふ事をつくさん
又かへし
いつこにか尋てあはむ身を分て君かゆるさぬ心つかひを
女に
よそにしてわふる涙に我ならぬ人はしくれと思ひなす覽

年かへりて同人のうらみたるに
いつかたに立よれとてか春霞おもはすにのみまつは知らむ（窓にみゆらんイ）
人に
誰ならん我名乍らそ（はかなイ）願はるゝ（猶イ）かくても終にあらし（やましイ）と思へは
はかなくてうきてみゆれと白雲の山にもかゝる心とをしれ（ものとしらすやイ）
水くきの行てかへらす成ぬるをなにゝなかるゝ我身なる
傳にてもとひける物をはてもなくよりなき身とも思ける哉
人を思心のそこはいけなれやいひそむるより戀のつもれは
ほのか成聲許りにやきり／＼すねなくに秋の夜を明しつる
音にのみ聞てわたらぬあふ坂の關のし水になかれぬるかな
そこにして深しといふは賴まれす淺くて影の絶せすもかな
ある御息所の御かたの人をかたらひて廿日はかりのほとにつき出してさとには出むとすると人のいひけれは
月影に道のあたりはあかくとも今宵はともに出んとそ思ふ
雨のいみしうふるはしめたる人に
一度もまたみぬ道のまとはぬは雨の下こそしるへ成けれ
物いふ女のとをたてゝ入を見侍て
音に聞なるとのうらにかつ／＼てふあまや（よイ）佗しき昔をみる哉（あやふするかなイ）
とて道にてわたりける人にあひて
都にはありわひぬれは津の國の住吉といふかたへこそゆけ
京の人にいひたり
つの國のわか賴めりし（みてイ）住吉にたより（もイ）涙こそまなく立けれ
ふる昔めしけるにかきそへたりける
言のはの中をなく／＼もとむれは昔の人にあひみつる哉
右忠見集以肥後守經亮本書寫校合了

曾禰好忠集

あらたまの年の日かすをかそふとて。すかのねのなかしとおもふ春の日すから。まなこをはかすむ山へにきはめつくし。心をはすくす月日にたくへつゝ。風にかたよる青柳の。いとまのひまもなきまてに。鳥のなくねをきけは。我も哀とよそに聞。花のゐめるをみれは。誰もおかしとみるらめと。人はかしこきかほをつくり。我ははかなき事をのこしをきて。花のちるはるのあした。木のはのおつる秋の夕。月のあきらけき夏のよ。風のさひしき冬のあかつきまて。おこなれと。おやのつけてし名にしおはゝ。なをよしたゝと人も見るかに。

よさの浦に老の波かす數へつる蜑の仕業と人もみよとそ

正月

春のはしめ

みしまえにつのくみ渡る芦のねの一よはかりに春めきに鳬

あなし川ふる山かけて來春のしるしとけさは水そぬるめる

なる瀧の岩間の氷いかならん春いはつ風よはにふく也

みねに日やけさはうらゝにさしつ軒のたるひの下の玉水

雪消はゐくの若なも摘へきを春さへはれぬみ山邊の里

雪きえし嶺の嵐の吹なへにけさ山河のみかさまされり

心より春のあらしにさそはれてとくる氷やいつら成らん

山のかひ霞渡りし朝よりわかなつむへき野へをしそ思

香久山の瀧の氷も解なくに吉野の嶺は雪消にけり

かものゐる入江の水うすらきて底のみくつもあらはれに鳬

正月中

かつまたの池の氷のとけしよりやすの浦とそには鳥もなく

すまの蜑も今は春へとしりぬらし何處共なくなへて霞める

春日野に村消のこる雪よりも今はいつまてふへき我身そ

ひはらもる布留の社の神やつこ春きに鳬としるらめやそも

あらためし神の御てくらさせるかと澤邊に田鶴の群ゐたる哉

けふりかと四方の山へは霞たちいつれのこのめもえ殘る覽

打霞たつきもみえぬ春のゝに聲をしれとやうくひすのなく

ね芹摘春の澤田におり立て衣のすそのぬれぬ日そなき

みやつこきおふる垣ねを春たては深き綠にまつはみえける

片岡の雪まにねさす若草のはつかにみえし人そ戀しき

正月をはり

朝なきに棹さす淀の河長も心とけては春そみなるゝ

あさ日さすけさの雪けに水まさり世をうき橋の行衞しら波

朝みとり山は霞にうつもれて有かなきかの身をいかにせん

にほはねとほゝゑむ梅の花をこそ我もおかしと折て眺むれ

春とに澤へに生る芹の葉を年と共にそ我はつみつゝ

梅つ河岩まの瀬の立かへり春は花かとうたかはれつゝ

たか染し色にか有らん春くれとめなれすみゆる松の綠りは

花みむと命もしらす春のゝに萩のふるえをやかぬ日そなき

我みても春はへぬるをなよ竹のそれより先にいくよへぬ覽

やま里の梅のこ原に春はかりいほりておらん花も見かてら

中の春二月のはしめ

ぬきもこか衣きさらき風寒みありしに増る心地かもする

我宿の板ゐの水やぬるむらんそこのかはつぞ聲すたくなる
さくきつにすかきさほせり春をにゐりさす民の仕業ならしも
梅花こよひ嵐のやまさらはなけきてのみもあかすへきかな
我みをはみる人すてゝすさめぬを哀にもはたよふことり哉
（拾遺）ゆふたすき花に心をかけたれは春は柳のいとまなみこそ
木のめはる春の山邊をきてみれは霞の衣たゝぬ日そなき
山かけのうつき垣ねに消殘る雪をそ花によそへつゝみる
宮木きるをのゝ河原を見渡せはめもはる／＼と淺みとり也
あつさ弓春の霞はへたつれと入さの山の月そさやけき

二月中

かすかのゝわか草山に立きしのけさの羽音にめを覺しつる
松か崎いつもみとりの色なるをいとゝし春は霞たちつゝ
わか宿のもとあらの櫻さかねとも心をかけて見れは頼もし
をたひつるかるものあまも春くれは浦／＼をに詠をそする
のほり船こち吹風をすくすとてよをうしまとに歎てそふる
煙り立春の浦／＼みる時そまたみぬあまのありかをそしる
色かへすみゆるさぬきの松山も春は綠のふかさまされり
あふをのかたみをせはみ春の野の若なにつけて年を積つる
（新古）荒小田のこぞの古ねの古よもきいまを春へとひこはへに兇
春山に木こる樵夫の腰にさすよきつえきれや花のあたりは

二月をはり

（新後拾）たゆるよもあらしとぞ思ふ春をへて風にかたよる青柳の糸
かりかねぞ鳴かへるなる世中をうしとみつゝも秋は厭はて
はる／＼と浦々烟立わたりあまのひよりにもしほやくかも
花の時いきたらはみむみ吉野の萩のやけふはなへてみつるを
山櫻はやもさかなん吹風にみねのしら雲立かともみむ
わか苗を宿もる人にまかせ置て我は花みるいそきをそする
春雨のふるのみやまの花見にと三笠の山をさしてのみこそ
花にのみ妹かわさたに手もふれてふるすなからに暮す春哉
鳴かへるかりの泪のつもるをや苗代水と人はせくらむ
冬かひの手なれの駒も放ちてむ岡への小笹はへぬとならは

。暮の春三月はしめ

はゝこつむ彌生の月になりぬれはひらけぬらしな我宿の桃
花みるといとまを春の山にいれて木のもとごとに詠をそする
わらひ生る矢田の廣野に打むれており暮しつゝ歸る里人
道とをみ物うしと思ふ春のゝも花みる時そ心ゆきぬる
あさな／＼庭草とるとせし程に妹か垣ねはうすらきにけり
宮木野や燒生の萩も下葉よりもとあらに咲む花をしそ思
花により今宵の風にいをねすはあやなくいもや心へたてむ
かさなしに花見にきたるけふしもあれ四方の山へは木闇かり兇
色みむと植しもしるく山吹のおもふさまにも咲る花かな
櫻花みるに心のゆきぬれは春はいそきし名をそたてぬる

三月中

閨の上に雀の聲そすたくなる出立かたに子や成ぬらん
花さかりあまたの春を過しつゝ我身のならぬ歎をそする
玉かきのみつのみなとに春なれは行かふ人のはなを手向る
二葉よりみつゝなれにし花櫻何をうしとてかくすかすみそ
雪かもとみれは櫻のたまらぬはさくほとなしに散はなり兇
やま姫の沍てはさほす衣かと見るまてにほふ岩つゝしかな
花みむと吉繩さして行道をなかひくほとに風もこそふけ

山隱れ風にしられぬ花しあらは春は（けふイ）すくともおりて詠めむ（かさしイ）
わかために霞の花をかくせともあらき風にはしたかひに皃
たくひれのさきさか岡の躑躅原色てるまてに花咲にけり

三月をはり

道芝もけふははる〳〵青み原おりゐる雲雀かくろへぬへみ
みそのふのなつなの莖も立に皃今朝の朝なに何をつまゝし
過ぬらん月日も知す春はたゝ淀のわかこもかるにてそしる
あらはにて燒ふにみえし春のゝも草ふかけにも成にける哉
みほの浦のひき網のつなのたくれ共長きは春の一日なり皃
やす河の早瀨にさせるのほりやなけふの日和に幾ら積れる
つはなぬく淺茅か原も老に皃しろわたひけるのへとみる迄
淺ちふも雀かくれに成にけりむへ木のもとはこくらかり皃
春ふかく成にけりとは住吉の岸の藤なみおるときそしる
梅つ川春の暮にそ成にけるせゝのゐせきに闕もとめなん

夏

四月

梅津川　春のくれにし　あしたより　庭の木陰は
ひまもなく　もりの下草　しけゝれは　露もぬるけみ（はイ）
をきわたり　風ものとけく　なかき日の　あくれは今日を
すこしかね　暮れはあすを　なけくまに　かきねに咲る
卯のはなの　めも白妙に　色わかす　雪よりけなる
おもとしの　ちふさのむくひ　するほとに　くる夏とに
あひくれと（きイ）　ときにしあはぬ　みにしあれは　草はをつめる
ともなく　うきみひとつの　つたなきを　なをよしたゝと
名つけつゝ　はくゝむとの　かなしさに　世を捨かたみ
ふるほとに　ものゝみいまは　ほしけれと　夏のこゝろを
つくりたるかも
かはすかきたてたる事もなき人の流れての世のしるし也皃

四月はしめ

（後拾）榊とる卯月になりぬ（なれは集）神山のならのはかしはもとつはもなし
見るまゝに庭の草はは茂れ共（くイ）今はかりにもせなはきまさぬ
み草おひしあさかの岩ゐ夏なれはたふさをひちて（りとイ）結くる鴨
夏の日は空さへ永くなれはにやあまてる影の過かてにする
時鳥ほのに初音を聞しよりよるとしなれはめをさまし（のみさめイ）つゝ
野へみれは草わく許なりにけり我なはしろもおひやしぬ覽
夏引の白糸のてくりまたしきによるはみしかく成にける哉
世中のなり行さまも同し事いつらはそこら立しかすみそ
三笠山さしてもみえす夏なれはいつこ共なく青みわたれり
（新古）かりにくと思ひし（うらみし集）人の絕にしを草葉につけて忍ふ比かな

四月中

大荒木の下草まてに風ふけは靡きてかみを祀りあへるかも
みあれ引（川イ）賀茂のみとしろ引うへて今はとしのみ祈る計りそ
やほたてもかはらをみれは老に皃辛しや我も年をつみつゝ
うつき原てこなか布をさらせるとみえしは花の咲るなり皃（し集）
（後拾）河上のあらふの池のうきぬなはうきをあれやくる人もなき
（後拾）夏衣たつた河原のこのかけに今はゆきつゝすゝむ計そ
かをかけは昔の人の戀しさにはな橘に袖をしめつる
（風）夏のよのゝとけき雨を足引の（なる）山の松風ふくかとそきく
芦のはに隱れてすめは難波めのこや（の集）は夏こそ凉しかりけれ

夏あさの下葉の草のしけさのみ日ことにまさる比にも有哉

四月をはり

なつ衣うすくや人の思ふらん我はあつれて過す月日を
かきねには卯花うへむ雨夜にも我やと守る人とみるへく
かりにくる人につけてそたはれぬる長閑き夏の草はなれ共
蛙なくゐ手の若こも刈ほすとつかねもあへす亂れてそふる
日くるれは下はこくらき木のもとの物おそろしき夏の夕暮
よの中は淺茅か原もおなしことしけれる夏と何かたのまん
なつかしく手にはおらねと山賤の垣ねのむはら花さきに鳬
すくもたくみほの浦人舟なれていくその夏をこかれきぬ覽
野中には行かふ人もみえぬ迄なへて夏草しけり合にけり
夏の日のすかのねよりも長きをそ衣ぬきかけ暮しわひぬる

夏中五月はしめ

後拾 みたやもりけふは五月に成にけりいそけや早苗老も社すれ
おり立て思ひによとのま菰刈あなかましらぬ人のきかくに
鷺たてる五月の澤のあやめ草よそめは人の引かとそみる
名にしおへはたのまれそする我戀る人に楝の花さきにけり
菖蒲引賤のははかまぬれ／＼て時にあふとそ思ふへらなる
風うへし狛野の原のみそのふのしけく成行夏にも有かな
淺ち生る小野のしのはら草深みさゝの宿りを誰かしるへき
詞花 こも川の筏のとこのうき枕なつはすゝしきふしとなりけり
とけてすらぬる程もなき五月雨にね覺かちにてあかす比哉
入日さしなく空蟬の聲きけは露のわか身そ悲しかりける

五月中

山賤のはたにかりほす麥の穗のくたけて物をおもふころ哉
わか蒔し庭苧の種をけふみれは千えにわかれて陰そ涼しき
大原やせか井のみ草かき分ておりやたゝまし涼みかてらに
をたまくりかけて手引し糸よりも長しや夏のくるゝ待間は
長閑にて涼しかりける夏の日も思ひあつかふともなきみは
かりにても思へはこそは夏草のしけれる中を分つゝもくれ
蟬のはのうすら衣になりしより妹とぬるよのまとをなる哉
詞花 きたりとてぬるまもあらし夏のよの有明の月も傾ぶきに鳬
影清み夏のよすから照月を天のと渡る船かとそおもふ
我せこかきませりつるかみぬ程に庭の小草はかたまよひ鳬

五月はて

小山田のみたえせしより天にます岩戸の神をねかぬ日そなき
さゝら浪たつ山川は淺けれと深く成行夏にも有かな
庭たつみなかれて人やみえくるとくもれは頼む夏のゆふ暮
茜さす岩戸の山もみえぬへくめをさはめてもてれる夏哉
花散し春の嵐をおしみ置て夏の日よりにふかせてしかな
庭におふるあさちか花をはやしけん昔の人そみねと戀しき
こかるれと烟もみえす夏の日は夜そほたるはもえ増りける
隙もなく物おもひつる宿なれとするわさなしに夏そ涼しき
上そよく竹のはなみのかたよりをみるにつけても夏そ涼き
手もたゆく扇の風のぬるけれは關の淸水にみなれてそ行

六月初

けふよりは名こしの月に成ぬとてあらふる神に物なるな人
詞 かく計草はも夏も深けれとあらはに置る淺茅生の露
河上に夕立すらしみくづせくやなせのさ波立さはくなり
かこはねと蓬の籬夏くれはあはらの宿もおもかくしつゝ
里遠み作る山田のみもりすと立るそほつに身をそなしつる

新古 蚊遣火のさよ更方の下こかれくるしやわか身人しれすのみ
夏はきのあさのをからとあた人の心かろさといつれ増れり
こはなしによるはたみゆる夏むしの晝の有かやいつく成覧
なか日すらなかめて夏を過す哉吹くる風にみをまかせつゝ
さゝら波立てをりくる水のあやは夏の河原の涼みころもそ

六月中

わかせこか夏の夕暮みえたらは涼しき程にひとよねなまし
うとまねと誰もあせこき夏なれはま遠にぬとや心へたてむ
燃れとも煙もたゝぬ夏の日のあつさぬるさを忍ひてそふる
わきもこかひまなく思ふ閨なれや夏の晝まは猶そふしうき
年ふれは老ぬる人のしろ(らイ)かみを夏も消せぬ雪かとそみる
入日さしいつしか夏の日もくれは紐打とけて妹とぬへきを
萩のはに風のそよめく(に集)夏しもそ秋ならねとも哀なりける
後拾 きてみよといもか家路へつけやらん我ひとりぬる床夏の花
夏河の瀬々にあゆとるますらをは我うき影を自らそみる
みそきするかもの河風吹らしも涼みにゆかむ妹をともなひ

六月終

わきも子か汗にそほつるねより髪夏の晝まはうとしとや思(みるイ)
下紅葉秋もこなくに色つくはてる夏の日にこかれたるかも
夏の池の水の面かくす蓮葉にたゝよふ露の身をいかにせん
妹と我ねやのかさとに晝寢して日たかき夏のかけを過さむ
詞 隙もなくしけれる夏の山路かな明ぬにこゆる心地のみして
むしのねもまた打とけぬ草村に秋をかねてもむすふ露哉
入日さしくらしのねを聞(なくイ)からにまたきねふたき夏の夕暮
夏はかりかもの河瀬(原イ)に過してむ古郷人はこゝろをくとも

ゆく道をあやなくまたきとまる哉日暮しのねは定なき世を
村雲のうきてさまよふ大空を詠しほ(せしまにイ)とに夏はくらしつ

秋

すゝみせし　夏の暮にし　ゆふへより　野への草葉を
かきわけて　よもに吹くる　こからしの　やゝはた寒く
成までに　年月をは思ひの　外に過しやり　かひなき身をは
心のうちに　歎きつゝよを　長月の末迄に　みゝにきゝ
めにみる事を　しるしをかは　露の命は　きえぬとも
ゆく末水の　たえぬとはを　流れての秋の　かたみともみよ
うちわたし岸へは涙にくつるとも我名はつ(くち)きしあまの橋立
はしめの秋

七月

詞 山城の鳥羽田のおもを見渡せはほのかに今朝は(そ)秋風そ(は集)ふく
ほたちする秋はきに鳬おりそほち早苗束ねし袖もひなくに
遠山田去年にこりせす作置てもるとせしまに(てきつイ)妹はたかれぬ
空を思ふをとめの衣ひとひより天の河なみ立そよるらん
新古 おきてみむと思ひし程にかれに鳬露よりけなる朝かほの花
同 朝ほらけ荻の上葉の露みれはやゝはた寒し秋のはつかせ
秋をへて雲ゐにきゝは渡れ共波にくちせぬ天のうきはし
田子の浦にきつゝなれけむ乙女子か天の羽衣さほすらやそ
我思ふ色にはさける撫子の露に心をゝかるへしやは
蟬のはのうすき衣しかはらねは秋きたり共おほえさりけり

七月中

我守るなかての稻ものきは落てむら〳〵穗先出にけらしも

〔新勅〕久かたの岩戸の關も明なくに夜半に吹しくあきのはつかせ
いつこへによな〳〵露はをけとてか稲はを人の急きかる覽
たかをける玉にか有らむ秋の野の草はをよきす置る白露
我宿の門田のわせのひつちほをみるにつけても親の戀しき
武藏野の岡への原の秋萩も花咲かたになりにけるかな
くれはとく行てもきかむ古郷に我を待むし鳴とつけたり
木枯の秋と立にし其日よりいなはのそよといはぬ日そなき
秋の野の草村ことに置露はよるなくむしのなみた成けり（へし集）
其かみに岩にも種を蒔りせは秋の田のみをよそにみましや

七月をはり

我せなは妻こひすらし遠山田守るとつけて日數へぬれは
〔新古〕秋風のよもに吹くる立田山（をとは集）何の草木ののとけ（か集）かるへき
むつましきいもせの山としらねはや初秋霧の立てへたつる
人ならは語らふへきを思ふ事の薄はそこといふかひもなき
秋かせの草はを分て吹くれと野へには跡もとまらさりけり
こし人のおきて別れし朝より秋きにけりとしるくみてしを
二葉にてねさしゝしのゝ秋くれはよなかに成てね覺勝なる
あれはありとなけしのよそにみし人の秋風吹はそれそ戀敷
おほひえやをひえの山も秋くれは遠めもみえす霧の籬に
女郎花にほへる野へとみるなへにはたをる虫もよはに鳴也

八月上

くる鴈の夜半の羽音におとろきて野への白露をきゐぬる哉
むしのねそ草村ことにすたくなる我も此よはなかぬはかりそ
ねたるまも露や置つゝしほる覽引板うちはへて守る山田を
〔續後拾〕我せこかわれにかれにし夕よりよさむなるみの秋そ悲しき

くつわむしゆら〳〵思へ秋の野の藪の住かはなかき宿かは
みし人のたのめしことをたのめつゝ秋をはよその物と社きけ（みれイ）
とをつ山宮城か原の萩みるとあきははかなきたはれなそ立
〔拾〕枝もたはに萎れぬるかと思ふ迄いくそかをける萩の上の露
かみなひの三室の山をけふみれは下草かけて色付にけり
打むれてと渡る雁の羽風かも天の河浪さはくらむかも

八月中

とやみれは我夏かひのかたかへり秋きに鳬とおはそしかる
さむさのみ夜ことにまさるなよ竹の風にかたよる聲の悲しさ
散つもるよとこは山と成ぬへし秋のよをへてぬる人もなみ
くまことにこゝらさやけき秋の月小倉の山のかけはいかにそ
望月の駒すらとしにひかるゝを我すくしくる秋そ悲しき
〔續後撰〕あしけなる（を夫木）おくての稲をまもるまに萩の盛は過やしぬらん
はた寒く風は夜ことに成（吹集）まさる我みし人はをとつれもせす
〔拾〕みとせおひの駒を手ことになつけつゝ引くる秋の今朝の關風
我せこかきまさぬ宵の秋かせはこぬ人よりもうらめしき哉
待よひの風たにさむくふかさらはみえこぬ人を恨ましやは

八月をはり

みちのくのあき田の山に秋霧のたちのゝ駒も近付ぬらし
〔新勅〕衣うつ碪の音を聞なへに霧立空にかりそ鳴なる
秋風はまたきな吹そ我宿のあはらかくせるくものいかきを
かせによりうては衣を手のたゆく寒さに急く秋のよな〳〵
〔後拾〕いさともをくさもかきに露ぬるゝ風に長閑き秋のひよりに
なけやなけよもきかそまの蛬くれ行秋はけにそかなしき

身に寒く秋のさよ風ふくからにふりにし人の夢にみえつる
我身こそいつともしらね中〳〵に虫は秋をそ限るへらなる
いつしかも聲は絶せし棹鹿の（と歟）をのかうきみの秋をしもなく
我せこかいたやのすゝこかけさけて絶ぬを待そ秋はすくなき

九月上

いとゝしくよを長月に成ぬれはね覺かちにてあかすへき哉
よそみゝにしかのしらね（ところイ）を聞しより秋は悲しき物と知にき
はやきまきはゆふへになれはむらこ也誰をりそむる錦成らん
秋風のふくさ衣をとりみたりさほす程にそ寒きめはみる
（新古）人はこす風に木のはは誘はれぬよな〳〵むしは聲かはり行
住吉のならしの岡の玉つくり數ならぬみは秋そかなしき
み山には村〻にしきひけるかと見るに付てもあき霧そ立
あつま山みのゝ中道絶しよりわか身に秋のくると知にき
老にけるよはひもしはものふ計菊の露にそ今朝はそほつる
まふしさし鳩吹秋の山人はをのかありかをしらせやはする

九月中

きゝす鳴かたのゝはらを過行は木のはもとに色付にけり
わきも子か衣薄れてみえしよりたはれねせしと思ひ初てき
（拾）まねくとてたちもとまらぬ物故に哀かたよる花すゝきかな
きる人も世になき物は秋山に風の吹立にしき也けり
長月の夜のうれはに置露は花をしのふる鹿のなみたか
そなからは山ともはやく成なゝんこゝらの紅葉散つもりつゝ
（詞）のしろもる宇治の川長年つもりいくそ月日をかそへきぬ覽
山里はかいとの道もみえぬまて秋の木のはにうつもれに幾
くらふ山秋の月よにみれはあかし峯は紅葉やいとゝてる
妹かりと風のさむさに行我を吹なかへしそさ衣の袖

九月をはり

我家は行ほとゝをしさほ風のしはしはをやめ妹も待らん
（新古）箱根山ふた子の山も秋ふかみ明くれ風に木のはちりかふ
入日さすさほの山への柞はらくもらぬ雨と木のはふりつゝ
（新千）とやまなる正木のかつら色こきをみにくる人も見えぬ秋哉
秋ふかみ山のにしきもつきたゝはきる人なしにちりぬ計そ
我せことさよのね衣重ねきてはたへを近みむつれてそぬる
田上やせたの早瀬にやなさして寄年なれはうきねをそする
ともしすと秋の山へに入人の弓の矢風に紅葉ちるらし
筏おろすあとのはや水せきとめて暮行秋をみるよしもかな
秋はてゝ我せな君の絶えしより閨のよをゝとりそたてゝし

冬

神無月　時雨ふりくる　みやまより　風さへことに
をくれねは　四方の木のはの　のこりなく　なかむる空も
はれすのみ　くもり渡れは　なよ竹の　なかきよな〳〵
思ひあつめ　くれたけの　くれ行冬の　ありさまを
心のうちに　しのふるとの　くるしさに　人のそしりも
しらすして　とはすかたりを　あつめたるかも
耳に聞めにみる事をうつし置て行末の世の人にかたらん

冬のはじめ

十月

（詞）何事もゆきて祈らむと思ひしを社はありて神無月かな
しくれつゝ人めまれなる我宿は木のはの散を誰かとそ思
烟たえ物さひしかるいほりには人こそみえね冬はきに幾

のかひせし小篠か原も枯にけり今はわかこま何になつけん

（詞花）草かれの冬まてみよと露しものをきてのこせる白菊の花

しくるれは待そ悲しき我宿のねやの板まのあふよなけれは

白雪の凍らは玉と手に取てぬかれぬまてもぬきてみましを

長き夜にすたきし虫を厭ひしに今はあらしの音そはけしき

風早みつまこひなりし鹿のねをなと我上と思はさりけむ（ふ集）

（新勅）露はかり袖たにぬれす神無月もみちは雨とふりにけれ共

十月中

吹ちらす冬のあらしそうらめしき木のはをきぬと頼む山人

人つてに寒しと聞し風の音をわかうたゝねの耳なれにけり

（續拾）ひとりぬる風のさむさに神な月しくれ降（ふり）にし妹（ひと集）そ戀しき

（詞）とやまなる柴の立枝に吹かせの音きく時そ冬はものうき

み室山木のはふりにし朝よりあらはにみゆる四方の玉垣

河上や笠きの岩屋けを寒み苔を莚とならすうはそく

ねらひする冬のかり人待かねてをのか心に寒し（とさむきめそみるイ）とやおもふ

ふる郷の道は草葉もかれにけりことてし人はたふれしぬ覽

岩戸山よにあけかたき冬のよのあまの關守誰かすへけむ

夏きぬと行しなからも冬のよのせなとしねなは寒か覽やは

十月はて

冬くれはおり立人もなかりけり有しにまさる水の上のあや

柴木たく庵に烟立みちて絶す物おもふふゆの山里（ふゆ集）

（新古）草の上にここら玉ゐししら露を下葉の霜と結ふ頃かな

さむからてね覺すしあらは冬のよに我待人はこすはこす共

みたれつゝ絶なは悲し冬のよを我ひとりぬる玉のをよはみ

ふちふのに柴かる民の手もたゆく束ねもあへす風の寒さに

さむしとて道は休らふ程社あれいもかりとたに思ひ立なは

すむねやも木のは隱れにせしわさも冬きて後そ顯れにける

（續古）蘆の葉の散にし日より難波江に通ふしなさ（つはイ）をさしてみへつゝ

鵲のちかふる橋の間遠にてへたつる中に霜やふるらむ（おく集）

中の冬十一月上

（新續古）龍眼木葉もとりに行へき神山のみちは雪にやうつもれぬ覽

藪隱れ雉子のありか覗ふとあやなく冬の野にやたはれむ

風寒くなりにし日より相坂の山の岩井はみくさおひにけり

こゝにたにかはかり氷る年なれはかひの白根を思ひ社やれ

秋はてゝ時雨ふりにし我妻（ふ集）を冬のよすからこひあかしつゝ

楸おふるあとの河原のあさちへは殘らす霜にかれはてに覽

あし鴨のきゐる岸へのふちよりも深く成行ふゆにもある哉

見渡せ（さてはイ）はこしの高ねを雪積りいさしら山のほとはいつれそ

冬はきて草はをからしはてゝ鳧御狩の野守もるかひもなし

しつのめのあさけの衣めをあらみ烈じき冬は風もさはらす

十一月中

（後拾）岩まには氷のくさひ打てけりもりこし水も絶てをとせす（たまるし水も今はもりこす集）

（新古）冬草の（は集）かれにし人の今さらに雪ふみ分てみへむものかは

よは寒しね床はうすし古郷のいもかはたへは今そ戀しき

（新古）（新勅）露霜のよはに起ゐてふゆのよの月みる程に袖そこほりし

千早振かみなひ山のなら柴を（のは）雪ふみ分て（ふりさけて集）手おるやま人

秋たにも風にうらみし葛のはのいとゝ枯ぬる（にしイ）冬そかなしき

かまと山雪は隙なくふりしけと火のけを近みたきらさり鳧

おき中にこかれわたれと冬なれは濵路を寒みいそく舟人

待かねて妹やねぬらむふゆのよはふけにたり共猶や行まし
久かたの空かきくもり時雨つゝこほりの隙もみえぬけさ哉

十一月をはり(ヰイ)

さよ中にせなかきたらは寒く共はたへを近み袖もへたてし
けをさむみさえ行冬の終夜めたにもあはす衣うすれて
(詞花)ふかくしもたのまさる君ゆへに雪ふみ分てよな〳〵そ行
炭かまの煙にみをやたくへまし我たらちめもさてそ絶にし
ひとりぬるわか身はあれて草村の野ら風よりも寒くも有哉
降ふゝき雪まもみえぬ冬の日のはれぬ雲井に鴈そ鳴成
おほ原やまきの炭かま冬くれはいともなけきの數やつも覺(をしそつむイ)
小鹽山おのへの松の枝をにふりしく雪は花と見えつゝ
御鷹居ふゆ野を分る狩人のいつれの山かこまはかくさん
あたこ山樒の原に雪つもり花つむ人の跡たにもなき

くれの冬

十二月初

うはそくかあさなにきさむ松のはは山の雪にや埋れぬらん
あはなりし瀧のしら糸冬くれは解へくもあらす氷むすへり
君まつとねやの板戸を明置てさむさもしらす冬のよな〳〵
み山には山の嵐あらけ(恐有誤)也椎の風おれいくそかくれり
山人の露とむすへる柴の庵雪ふみ分てたれかとふへき
しみ凍る木のねをとことならしつゝをこなふ人そ佛とも成
うづみ火の下にうき身と歎つゝはかなくきえむ事をしそ思
冬籠りきぬ〳〵山を見渡せははるゝよもなく雪はふりつゝ
霙ふり曇れる冬のはれすのみ盡せぬ物やまろか身のうさ
氷りするみはらの池の池つゝみおほはぬはこの鏡とそ思ふ

十二月中

風さはきあられ降しき寒き夜に何をあかすと結ふ氷そ
筑波山はやましけ山しけゝれとふりしく雪はさはらさり鳬
冬やまの炭やき衣なれぬとて人をは人のたのむ物かは
雪ふれはゆる木の森の枝わかすよるひる鷺のゐるかとそ思
鴨のゐるすさきのみより氷とちよりこし波も沖におりつゝ
へつくりのかきねの雪をよそ人は鶴の上毛と思ふらんやそ
荒磯にあら涙立てあるゝかも君かねはたはなつかしき哉
とをつかはよしのゝ瀧を分くれは氷そあはと浮てさまよふ
(新拾)みやこにも道ふみまよふ雪なれはとふ人あらしみ山への里
大荒木のおほくの枝もなひく迄よはにさひしき冬のよの風

十二月をはり

年ふれはうはの玉もゝおひに鳬からすのかみに雪積りつゝ
くゆりつゝ世に炭かまのけふたきを吹つゝもやせ冬の山風
(拾)にほとりの氷の關にとちられて玉もの宿をかれやしぬらん
すゝか川八十瀬の浪の音なきは氷やせゝに結ひとめつる
(拾)鵲の行あはぬまの程さむみあかてわかれし中そ悲しき
(拾)太山木を朝な夕なにこりつみて寒さをねかふ(こふる集)小野の炭焼
烏羽の上毛に雪の降しくはわかにはとりのふゝきかもとそ
數ふれはこゝらへにける年月のゆきつもるらん方や何れそ
いとまなみかひなきみさへ急く哉みたまの冬とむへも云鳬(やし集)
(詞)玉まつる年のをはりに成にけりけふには又やあはむとす覽

序

あら玉の年のみそちにあまるまで。春はちりほ(かイ)ふ花をおしみかね。秋はおつる木のはに心をたくへ。夏はうは

ひもさゝて風にむかひ。冬はさひしき宿にむもれゐて。あれたる宿の隙をわけ。過行月をかそへつゝ。明ては暮る久かたの月日をのみもすくす哉。哀たつきありせは。百數の大宮つかへつとむとて。すへらきのみかきにおもなれて。あした夕になくさめましと。こゝろのうちになけくまに。朝には窓にさえつる鳥のこゑにおとろき。夕にはまかきにひらくるはなの色を詠つゝ。よもきの門にとちられて。いてつかふるをもなき我身ひとつは。うけれとも。ひをむしのひをくらし。草はの玉のかせをまつほとなれは。水のあはよりも。をに春の夢にもをならす。きのふ見したからの宿も。今日は淺茅か原と露しけくて。あしたにかよひしたまのとほそも。夕には八重葎にうつもれて。空行雲のはてもなく。みしもきゝしも。なく成ゆけは。なかれてつきぬ水くきのあとにしるして。數ならぬこゝろひとつをなくさめむと。もゝちのかすをよみつゝけ。あまたのことにいひつらねて。しきしまのみわの社のふもとなる。すき／＼しくもなりにけれと。松の木の千とせふるも。つゐにはかれくちぬるをや。あさかほのかたときにしもかれうせぬれと。ひらくるほとを榮へとするをや。雲になくたつも。つゐにむなし。みそにはふむしも。心のゆくゑは。へたてなしとおもひなせは。なにはなるあしきもよきもおなしと。すくもすかぬもことならす。なをよしたゝとつけてけれと。いつこそ我身。人とひとしきとてや。

百首和歌

春　十

きのふまて冬籠れりしくらふ山けふは春へと嶺もさやけみ

くまをにけふは春へと霞ゆくみねのわらひももえぬ覽やそ

新勅 卷向のあなしのひはら春立は（くれは集）花かゆきかとみゆるゆふして

山さとの梅の薗生に春たては木傳くらすうくひすの聲

しらましや明にけり共春のよのねやの妻戸に朝日さゝすは

我妹子かけさの朝いにひかされてせなさへ餘かひたゆき哉

鴈かねそ霞をわけて歸るなる來む秋までの我身いかにせん

花みつゝ春の山へに暮してん霞に家路見えすとならは

庭のおもになつなの花の散ほへは春まて消ぬ雪かとそみる

たちなから華見くらすもおなしをおりてかへ[illegible]のへの早蕨

むはらこき手にとりためて春のゝの藤の若葉を折て束ねん

夏　十

春霞たちしはきのふいつのまにけふは山邊のすくろかる覽

新古 花ちりし庭の木のまもしけりあひて天照月の影そ稀成

夏ころもきときになれと我宿に山ほとゝきすまたそ聲せぬ

せみのはのうすら衣になり行になと打とけぬ山ほとゝきす

夫木 草まかふせなか（おほあらき夫）早苗を搖分ているとせしまに裳裾ぬらしつ

よそにみしおもあらの駒も草馴てなつく計に野は成にけり

五月やみ雲まはかりの星かとて花橘にめをそつけつる

くもりなき大海の原を飛鳥のかけさへしるくてれる夏かな

みな月の名こしを心ふ心にはあらふる神そかなはさりける

なつかしく吹來風にはかられてうは衣もきらて暮すころ哉

秋　十

新勅 さくら麻のかりふの原をけさみれはと山かたかけ秋風そ吹

秋かせの吹衣手のさむけれはかた敷かたに涙そ立ける

（新古）（仁集）山里の霧の籬のへたてすは遠方人の袖もみてまし
（同）（家持）（刀乗の集）くる鴈の羽かせすゝしくなる時は（なるなへに集）誰か旅ねの衣かへさぬ
（同）やまさとに葛はひかゝる松かきの隙なく秋は物そ（物は秋そ集）かなしき
夏萩のおふのしけりをみる時そ秋きにけりと程はしらるゝ
（詞秋）遠山田はなみ打過出にけり今は見もりも詠すらしも
みよしのゝきさ山かけにたてる松いく秋風にそなれきぬ覧
ひとりもぬ風もやゝ吹まさる也ふりにし妹か家路たつねん
松風のうらさひしかる秋すらにわれをは人のしのふ覧やそ

冬　十

から錦山の木のはをきりたてゝぬさとは風そ四方に手向る
しけかりし蓬の垣のへたてにもさはらぬ物は冬にさりける
（詞）楸生るひさのゝ原（さはへのちはら集）も冬くれはひはりの床そ（も興）顯れにけり
白雪のふり行冬をかそふれはわか身に年の積るなりけり
かゝみかと氷とちたる水そこにふかく成行ふゆにも有かな
神まつる冬は半になりに曉あねこかねやにさかきむりしき
ふけるとて人にもみせむ消さらはあはらの宿にふれる白雪
いは山とゆふしてかけていのりこし榊をしなみをける霜哉
うはまたらけさしも闇（ず）に見えたる（そ）はむへ社よはに袖はさえけれ（宗集）
（拾後撰）高瀨さす淀の汀のうは氷下にもなけく常ならぬよは

戀　十

（新古）由良のとを渡る舟人かち（ちイ）をたえ行衛もしらぬ戀の道かな
わきも子かゆたの玉すら打なひき戀しきかたによれる戀哉
戀侘て我ゆふ帶（おふちのま弓夫）のほとみれは身はなきまて（の夫）にをとろへに曉
（くら夫）ましろなるおきのまは雪みる時そ妹かてせはゝいとゝ戀敷

やしほちの波の高きをかき分て深く思ふとしるらめやそも（其の本集）
（後拾）味氣なし身にます物は（わか身にまさるものや）何か有と戀せし人をもときしかとも
君こふる心はそれにくたくるをなと數ならぬ我身成らん
君こふと忍ひ〳〵にみを燒て風のあなつるはひとなしけむ
をたまきはあさけのま人わかをや心の内にものはおもはし
わか戀はつけてなくさむ方そなき何處も歎く同し世なれは

是は此天の下の神代より。人の心の恣きかけさへ。しるき山の井にみかねをよせし。なにはつにさきてにほへる花と。おほくの人のくちのはに。覺る事をしるしたるなるへし。

ありへしと歎く物から限りあれは泪にうきて世をもふる哉
さかた（わイ）川ふちはせにこそ成にけれ水の流は早くなからに
かすならぬ心を千々に碎きつゝ人をしのはぬ時しなけれは
やつ橋のくもてに物を思ふかな袖はなみたの淵となしつゝ
松のはのみとりの袖はとしふとも色變るへき我ならなくに
かきくらす心の闇に迷ひつゝうしとみるよにふるそ侘しき
けふかともしらぬ我身を歎くまに我黑髮も白くなりゆく
さゝ浪や長良の山のなからへて心にものゝかなはさらめや
へしや世にいかにせましと思ひ（にねとイ）かねとはゝ答よ四方の山彦
みよしのにたてる松すら千代ふるを斷も有哉常ならぬよの
夢にても思はさりしを白雲のかゝるうき世に住ゐせんとは
るいよりもひとりはなれて飛鳥（雁イ）の友にをくるゝ我身悲しな
八重葎しけれる宿に吹かせをむかしの人のくるかとそ思ふ
まろ小菅しけれる宿の草の上に玉とみる迄をけるしら露
のとかにもおもほゆる哉常夏の久しく匂ふ大和なてしこ

ゐての山よそなからにも見るへきを立なへたてそ嶺の白雲
のちおひのつのくむ蘆のほともなきうき世中は住うかりけり
續後拾 あれはいとふなけれは忍ふ世中に我身一つはすみ侘ぬやは
さはた川流れて人の見えこすは誰にみせましせゝのしら玉
草深きふしみの里はあれぬ覽こゝに我世のひさにへぬれは
はな薄ほにいてゝ人を招く哉しのはん方のあちきなけれは
人こふる涙のうみにしつみつゝ水のあはとそおもひ消ぬる
續千 とふとりの心は空にあくかれて行衛もしらぬ物をこそ思へ
おしからぬ命心にかなはすはありへは人にあふせありやと
思ひやる心つかひはいとなきを夢にみえすと聞はあやしき
もくすやく浦には海士やかれにけん烟たつとも見えす成行
故里はありしさまにもあらすかと云人あらはとひて聞はや
もとつめに今は限とみえしより誰ならすらむ我ふしゝとこ
の飼せし駒の春よりあさりしにつきすも有哉よとの眞薦の
詞 かひなくて月日をのみそ過しける空を詠て世をしつくせは（これし集）
播磨なるしかまにそむるあなかちに人をつらしと思ふ比哉
　きのえ
ふた葉にて我ひきうへし松の木のえたさす春に成にける哉
　きのと
續古 冬深く野はなりにけりあふみなるいふきのと山雪ふりぬらし
　ひのえ
あふくもや空に棚引渡る覽てる日のえしもさやけからぬは
　ひのと
かすならて思ふ思ひの年ふともかひあるへくもあらす成行
　つちのえ
小山田のひつちのえしも穂に出ねは心一つに戀しとそ思ふ
　つちのと
人をのみ世にはまつちのときは山みねの葛葉の恨てそふる
　かのえ
いくよしもあらしと思ふ世中のえしも心にかなはぬそうき
　かのと
人のつまとわかのとふたつ思ふにはなれこし袖は哀増れり
　みつのえ
行水のえにたにあらは藤川のなかれて人にすまさゝらめや
　みつのと
近江なるみつのとまりを打過てふなてゝいなむとをしそ思
　一日めくり
定なく一日めくりにめくるてふ神のやしろやいつこ成らん
　一よめくり
みし人よ巡りたにこはありへても野中の清水結ふとやみん
　ひんかし
故郷のうしろめたさに打忍ひむかし戀しきねをもなくかな
　たつみ
續後撰 涙のたつみしまの浦のうつせ貝むなしきからと我や成なん
　みなみ
人は皆見しも聞しも世中にあるはあるかはなきはなきかは
　ひつしさる
袖ひつしさるも哀といはゝ社袂をふちとなしもはてゝめ
　にし
さほ山のにしき成ける紅葉ゝを風よりさきに見にやゆかまし
　いぬゐ

山吹もまたちらなくに春もいぬ井手の蛙に身をやなさまし

きた

何もせて若きたのみにせし程もみは徒に老そしにける

うしとこ

世中をうしとらいはゝかた時もあへりなむやと忍ふれは社

つらねうた

戀しさを慰めかてら心見にかへしてみはやせなか袖をも

おもひつゝふるやのつまの草も木も風吹をに物をこそ思へ

思へともかひなくてよを過すなるひたきの島と戀やわた覽

わたらんと思ひきさして藤河の今にすまぬは何のこゝろそ

　圓融院の御子の日のひめしなくてまいりたりとでさいなまれて又の日奉りける

よさの海内外の濱は浦さひてうき世をわたるあまの橋立

　と名は高砂の松なれと。身はうしまとに。よする白浪の。たつきありせは。すへらきの大みや人と成もしなましの心にかなふみなりせは。何をかねたる命とかしる。

はしたてと名は高砂の松なれとみは牛窓によするしらなみ

白浪のたつき有せは皇の大みや人と成もしなまし

しなましの心にかなふ身なりせは何をかねたる命とかふる

よさの海はひまのこまにはあらね共雲まを過す程そ苦しき

世のうきは春にそあはぬみ山へのむもれてゆかぬ谷川の水

谷川の涙のしほに朽ぬへし世にはからくて住のえの松

すみの江の松は綠の袖なから名をたにかへは物は思はし

思はしや名をはうつまぬ世成とも煙とたゝはわかむ物かは

　源順これを見てかへししたりとなん。

此比おかしき事あんなり。余社の海の天の橋立わたりより。中絕てほとへにけるをいひおこし。しるもしらぬも。耳にも目にも。おかしきときかせ。面白しとみせて。心のうちに思ひけることを。言の葉にあらはし。思ひつゝへにける戀を。歌の內にそなへたる。その中にも。草のはの風をまち。あさかほの花の夕ふるほとよりも。はかなきよとあるを。みてしより。いしまの水の立かへり。あを柳のいとをくりかへしみれは。心にそなへる百千の言。ひとつすつへきなく。あまたの言のはのうちに。くもの聲の空をみえす。なにはをみれと。人にまされることなしと。あるをのみそたかへる。螢をひろひ。雪をあつめて。おほくのとしをへにけれと。かひなき身もこそあれ。かゝれとなそや。あみのめすきたり共いはゝいへ。たれも千年の松ならなくにといふをを。けにはかなきも。かしこきも。千年の後は。あちきなし。物いはぬ花鳥にも物をいはせ。心なき草木を。心有かほにいひなしてたに。常ならぬ世をなくさめんと。おもふ心しもあれ。むねの氷もとけ。心の思ひも消。またさはのまつをのみきりて。月のかつらをおらさらむもくるし。花さく春もくれやすく。紅葉する秋もとゝまらす。年へぬるみよりの袖の。忍ひにおつるくれなゐの。泪にそほちにけるを。春も秋も心うしとあれは。今は時しらぬをはりを。うしのすみそめにやなしてましとそおもふ也。

春　十

山川の薄氷わけてさゝ浪の立は春への風にや有らん

うねひ山ほとかに霞立からに春めきにける心地かもする

東路の行かふ道のはるたゝは花みて心やらさらめやは
古道の雪ふりしきて此春はいさやわかなもまたそ摘みぬ
見渡せは淀の若こもからなくにねなから春を知にけらしも
子日すとみし程もなく草枕むすふ計に野は成にけり
花ゆへに身をやすてゝし草枕ちゝにくたくるわか心哉
澤田河井てなる芦の葉はかれて陰さすなへに春更にけり
あし引の山よりよそに打みれは人待わたる春暮にけり
ともすれは歸る春をも惜む哉めつらしけなきをゝしる〳〵

夏　十

夜半を分て春暮夏は來にけらしと思ふまもなくかはる衣手
時鳥うゐたつ山をさとしらは木のまを行て聞へき物を
大荒木の小笹か原や夏を淺み旗卷く葛はうらわかみかも
いさせとも小倉の山に家ゐしてみしかき夏のよをもうらみし
御禊する賀茂の河浪立日より松のかけこそふかくみえけれ
ゆふやみにあまのいさり火見えつるは笆のしまの螢也けり
岩清水手にむすひつゝわかきぬる木の下陰もかれにける哉
五月やみ峯にも尾にも空蟬の鳴聲きけはたゝならぬかな
ゆふ立にやゝ暮にけり六月の名こしの禊せてやすこさん
大かたに暮行かたをおしみ置て心のうちは秋をしそ思ふ

秋　十

秋霧の立つるすから心あてに色なき風そき〔さ歟〕衣にしむ
誰をしか行てみつ覽さほ姫のひとはをほせる山のさかしき（さイ）
花薄穗にいつとまたきつくなゆめ秋にまたける我きかなくに
山田もるそほつも今は詠すなふねやかたよりはさきみゆめり
白露の萩のうらはにをける朝はかりの羽風もゆゝしかり覽
杣人のならさゝりせは秋山の軒はも今はもみちしなまし

忘れこし野中のつまはさほしかの聲きく時や思ひいつらん
神無月ちかつきぬらし思はすになとよも山の立かはり行
あさのをはあれとたつ覽かたしらすをしも秋を過しつる哉

冬　十

冬きぬと人はいへとも朝こほり結はぬ程はあらしとそ思ふ
〔曾古〕朝な〳〵君に心をゝく霜のきくのまかきに色はみえなん
をし鳥の羽ふきやたゆき冴るよの池の汀に鳴こゑのする
きゝすなく野へになこひそ冬こもりかるへき物か人の心は
神まつる榊はさすに成にけり夕つくよにそ大ぬさにみし
神無月しくるゝたひの山ひこに紅葉を風の手向くる哉
暮行とよそのほのかに聞しかと我身をこゆる年ならなくに
あかねさす朝日に消る雪まよりきさしやすらんのへの若草
春たゝは氷とけなむ沼水の下戀しくもおもほゆる哉
としの内に花咲にけり打忍ひ春ふく風にまたきちらすな

戀　十

色に出は人しりぬへきをたえた（以矢）の沼よりもけにうへそ難面
書まなくよるはすから（レイ）に絶すのみいしくの原のしけき我戀
かつまたの池のうら浪打はへて立てもゐても物をこそ思へ
うつゝにも身は數ならは云へきを夢の中にも人めみしゆへ
僞にありはすらめとわかきくに思ふといふをえこそ厭はね
時のまもゆくめつらしに思ほへてみまくほしさに誘れに覽
袖におつる玉はいくらそちりすらも積れは山と成と云物を
あまの原をちこちにすむ七夕もわかを物や思ふらんかも
忍ふれといくその神のつみなれや忍ひもあへす戀まさる覽
戀わひてへしとそ思ふ世中にあらぬ所やいつこ成らむ
これはあさかやまなにはつ

あさましやあさかの沼の櫻花かすみこめてもみせすも有哉
さはた川瀬〻の埋木あらはれて花さきにけり春のしるしに
かをとめて鶯はきぬたな引のかくすかひなし春の霞は
宿ちかく櫻はうへし心うし咲とはすれとちりぬかつかつ
まきもくのひはらこく社おもほゆれ春を過せる心ならひに
蚊遣火の下にもえつゝあやめ草あやめもしらぬ戀の悲しさ
けふよりは夏の衣になるなへにひもさしあへす子規なく
さみたれて物思ふ時はわかやとのなく蟬さへに心ほそしや
へつくりにしらせすも哉なにはえの蘆まを分て遊〔イへ〕ふ鶴の子
みとりなる色こそまされよとゝもに猶下草のしけき夏のゝ
行雲のはたてよりこそまつはみれ秋の初になれるけしきは
るりの壺さゝらゐさきは蓮葉にたまれる露にさもにたる哉
やそしまの都とりをは秋のゝに花みて歸るたよりにそとふ
待とをに思ひし秋は更にけりしるくそみゆる萩の下露
のもやまもいろかはり行風寒みいかて尋ん忘にしせこ
井せきよりもる水の音の聞えぬは冬きにけれは氷すらしも
のきはなる梅さきぬとてはかられぬ人たのめなる雪や何也
あら玉の年暮行は老にけり心ほそくもみゆるくものい
さす草ももえぬ覧やそ春きては若菜摘むへきふちか〔坂夫〕たの山
くる春は何をしかみむ梅花ふるとしなから散行みれは
はるかなる人まつほとは忍ふれとしるくやみゆる我衣手は
一度も物をわかなく思ふにはむねも千〻にそ碎くへらなる
ときのまも心もこゝろ戀しきは後うき物と人をこそ思へ
鴛鴦のみなるゝ音はつれなきを下くるしとはしらるめや人
思ふともおもはすといひて味氣なく人を恨るをのわりなさ
もる山になけきこるみはをともせて煙もたえぬ思をそたく

吹風の便りにとはむ玉たれのみすもうこかは我としらめや
物思ふに苦しきよはゝさし置つあけはみにませさし櫛の箱
長閑なるとき社なけれ富士の山いつかはたえむもゆる思の
かく戀ん物としりせはひとめみる人に心をつくる身なれは
はつかしに人に心をつけしよりみそかなからに戀わたる哉
　きのえ
たこの浦のまつりをひと百數のえらひに入てなれる成へし
　きのと
小夜更て何か戀數のとかにて年へはしるしあらさらめやも
　ひのえ
心にもうしとそ思ふ我戀のえらはぬやなそよきもあしきも
　ひのと
きのふ迄冬籠れりしかまふのに蕨のとくもおひにける哉
　つちのえ
籠ゐのこをしなくかは思みつちのえあはねは有にそ有らし
　つちのと
風吹はゆるきの杜のひとつ松まつちのとりいとくら也けり
　かのえ
花のかの枝にしとまる物ならは暮る春をもおしまさらまし
　かのと
心うし深きやまにも入にしかのとかになりてうきを過さん
　みつのえ
春立たは先松植しこゆみつのえすはさひあしきてや止なん
　みつのと
一目みつ長閑に今は有へきをあふにかへたる命とやいはむ
　一日めくり

わか一日めくり〳〵てこせし程にしゝきまひする年はきに覺（ら興）
一よめくり
みちの一夜めくりかへし文を猶さへ有ものそいて立もする
ひむかし
（玉葉）つらく共わすれすこひむかしまなるあふ隈川の逢瀬有やと
たつみ
霞たつみむろの山に咲花は人しれすこそちりぬへらなれ
みなみ
いなり山みなみし人をすき〳〵に思ふ〳〵としらせてし哉
ひつしさる
戀するに衣手ひつしさるかひのあらは絞りてみすへき物を
にし
（三寳）いさやまた戀にしぬてふともなし我をや後の例にはせん
いぬゐ
きてはいぬゐては長閑にゐもあへす猶人妻はかひなかり覺
きた
よのなかにかはかぬ物は戀〳〵てぬるしきたへの枕なり覺
うしとら
淺茅生いなをうしとらはふすなれと秋は人より先にかるれは
このほかよしたゝかうたをはあり
（詞花）水上のさためてけれは君か代に二度すめる堀川の水
物かたりつくるところにてよめる（を）
（拾遺）わかをはえも岩代のむすひ松千とせはふともとけしとそ思（誰かとくへき集）
すはへする小笹かはらのそよさらに人わするへき我心かは
右曾丹集以三本挍合了

群書類從卷第二百六十三

和歌部百十八　家集三十六

櫻井基佐集　上

春

長閑なる比龍泉寺へまかりけるに哥よむ人〻方丈にあつまりて野霞といふ事をよみ侍ける

山よりもなほ野をかけて春霞たつとみしより草ももゆめり

おなし心を或人のよめりける

ひと吉野中の峯にたな引て煙にまかふあさあけのそら

霞にかくるゝ舟をよみ侍りける

へたてつる網はさはちの島さきや霞かくれに帆さき見え兇

初聞鶯

かすかなる谷の戸さきも鶯の今朝のはつ音に來とくとは

きさらきのはしめに久瀬の家の梅さかりなりけるを物こしに見侍りけれは折ふし見侍出て哥よめといひて袖をひかへけれはとりあへす

梅の花香こそはあらめほゝゑみていかに往來の人にみゆ覧

曉梅鶯といへる事を

山かつらまた曙かけに鶯の羽たゝきて鳴梅の枝末に

遺利入道の寄墻の梅咲けるに鶯の鳴けるをきゝて

鶯の聲におとろく梅の花枝末まはらに咲初にけり

又一日ありて入道かくよみて梅に付侍りける

鶯も匂ひによるや我宿の梅におちくるあさな〳〵に

或所にて軒梅を

梅か香のしのひ〳〵に軒の妻さそひて入しこすの追風

かきねの梅の雪を

匂ひくる梅かゝおほふ淡雪のをのかはたへにとむと成へし

坊門の宰相の家なる柳風にみたれていと面白かりけれは

枝からそなかめもふかき青柳の風にとはれて心みたせり

川柳

えたたれて水せきとむる河風にうつ白波を花とみるかな

池柳

池水のみきはのかたの青柳は浪にもまれて露やまくらん

朽木柳

たふれふすくち木の柳一かたにかす〳〵くすむすゑの若枝

やよひのはしめつかた常にしたしみ侍る人の御枝といふ所に住侍りけるかこゝちなやましくて既に身まかりぬへくおほゆれは今一度うき世にあるうちにみまくほしさなとかきて文おこせておくに

春風にさそはれやせん櫻花ちらさるうちにみむ人もかな

いとゝあはれにおほえて返しをかきておくに

またしとそおもひし物を櫻花ちりかゝれるときくはまとか

芳野の花さかりなる頃二三人うちつれてまかりて終日詠暮して
芳野山花の盛は寒けくてみるから雪のこゝちこそすれ
常之入道
吉野山かつちる櫻袖とめてはらへは花の雪にまかへり
南圓堂にまうでゝ侍れは花の盛にみえしほとに
補陀樂の淨土は春にあらはれて枯たる木にも花や咲らん
折早蕨といふをを
春の野の芝草分てわらひおる賤か袂の隙もなきかな
岡のわらひといふをよみ侍ける
袖はへて人はならしの岡野へに暮かたかけて蕨折なり
或人の家にて歸る鴈をよめる
春くれは霞を分てとふ鴈のこし路のかたへ羽むけするなり
遠山鴈
雲を凌き遠山こえて歸鴈霞かくれに跡きえにけり
曉歸鴈
かへるとて曉かけて天のはら行かりかねにめをさましつゝ
おなしこゝろをよめりける
越路へとかへりし鴈の跡はたゝすちりもちりと霞消行
花
よし野山花の盛に山寺へ一もとゆるせいへつとにせむ
同
櫻さく頃はたちこむ花のもと袖ひきはへてちるをかきりに
花を待心を
春は花遲しと山路狩くらしちりてのち〔の脫歟〕は心いかにそ
花をたつぬる心を
花みむとたつね往來の人毎にかなたこなたと問かはしけり
花を狩といふ事を
花咲と散まて我は狩くらしのちは心にのこる花の香
落花
櫻花はなの白浪たつときは風をうらみぬ人はなかりき
菫
いくしほか春雨そめつつほ菫ふかき色をはわきてこそつめ
或人の欵冬を瓶にいけをきけるをみてよめりける
河岸の八重山吹もおりくれはかめの口にも咲とみてまし

夏

更衣のこゝろを
春もすき夏きてかふる薄衣ひとへにかろき我身とそしる
内大臣の屏風とてすなこまかせたる繪に山さとの賤かやのまかきに卯の花のさかりなるかたを書て花のもとに旅人二三人たちよりてみるところをかきはんへりけるに
朝露にしつえたはゝの卯花は行かふ人のめをやとむらん
又月の夜の卯花といふことを
白妙にかつみえわたる卯花の光は月のかけにまかへて
卯花誰家といふをを
咲みちし垣ねのかたの卯花にあるしはたそと問れこそすれ
菖蒲葺と云ことを
幾歳をかけてふくらん菖蒲草けふはねこめに軒をふきつる
池のあやめ露ふかき心を
露ふかき池のあやめを引人の袖にあまるは玉かとそみる
初聞郭公を人〻よみ侍りけるに

この頃と待夜かさねて杜鵑今朝といふけさ聞そめにけり

隔山聞時鳥

嶺たかくかすかにきこゆ時鳥吉備の中山よこに鳴なり

ほとゝきすをあやめによせて

あやめふく軒に鳴ける時鳥ねをはなかくもひけと思へり

杜郭公

いつくより鳴つゝくらむ時鳥老曾の杜にしはしやとりて

たつぬへき人ありて醍醐へまかりけるにほとゝきす
の鳴をきゝて

とめはやな音もめつらかに郭公過かてになく聲をしそ思ふ

侍従といへるうつまさへまかりけるに道にてほとと
きすをきゝてたゝ一声といふことをよめりける

空たかく鳴過けりな時鳥たゝ一聲とかすかなりける

郭公の初音をきゝて

朝あけに聞初にけり子規いかに思ひてこゝら鳴らむ

相模坊といへる人哥よむ人にておはしけるかほとゝ
きすのはつ[illegible]をきゝてよみ侍ける

時鳥またうらわかき初聲はまたさとなれぬしるしとそ聞

窓のもとにひとりこゝろをすまして侍りけるおりふ
し時鳥のなきわたるをきゝてよみ侍りける

ねかはしなわかゐる閨に時鳥心のまゝに聞よしもかな

或人の家にて

あまひこの　るかたに子規雲のよそをや鳴て過らむ

或人の家にて雨中の時鳥といふ事をよみ侍りける

晴やらぬ雨氣の空に時鳥いつこをさしてふりてゝは鳴

三東宗悛の家にて人々哥よみけるに曉の子規をよめ
る

郭公曉かけて鳴聲をかた耳にきく枕つらしな

待時鳥

ほとゝきす曉かたの一聲を夢うつゝともわかて過けり

朝のほとゝきすといへる事を三位中將よめりける

朝あけに鳴て過ぬる時鳥聲はさたかに聞おほせけり

夜のほとゝきすを定教と云人よめりける

夜はすてに更ぬと思ふに時鳥あはやときけは聲消にけり

或所にて時鳥遲しといふ心を人々よみ侍るによめる

時鳥なく頃しもになかされはあさな夕なにつかふ空耳

待ほとゝきすを人のよめといひけれはとりあへすよ
み侍りける

子規鳴もやすると曉にまたぬ八聲に鳥の音を聞

池上の草庵にまかりて一夜をあかし侍りけるにつら
ねうたよもすからによみて遊ひおるおりふし時鳥の
鳴けれは

橘のにほひによるや時鳥鳴て過ぬる聲そかほれる

ほとゝきすまたぬ人はなしといふ事をよみ侍りける

夏くれは世はをしなへて時鳥聲に思はぬ人はあらしな

ある女のよみ侍りける

いく聲もきかまほしきに時鳥今一聲となと思ふらん

或桑門のよみ侍ける

郭公かたらひくらすあた人の野路と山路と送る夏の日

播磨守といふ人小野にしはらくこもりて侍りけるを
したしき人三人はかりともなひてとふらひけるに山
にて聞時鳥と云事を人々よめりけるによみ侍りける

時鳥とを山かけてなく時はいふきの山のそま人そきく
近聞ほと〻きすをよみはんへりける
庵近く名乘そならは時鳥あすもきなけと思ふ計そ
軒ほと〻きすといふことを藏人少將よめりける
蘆き野の草の茂みにおりはへて鳴郭公心ありやと
卯 花
闇の夜もはれやかなれや垣ほなる卯花月のてるにまかせて
松井の下里によりて人〻哥よみけるに卯の花を
夕風にゆるきの杜の卯花は神を新の四季かとそみる
卯花風にちるといふことを別當阿闍梨よめりける
篠かきにさく卯花を夕風のちらすなおしとうらみこそすれ
六條念西院にて哥よむ人〻あまたつらなりて葵
神まつるけふはみあれそ葵草かさしにかくる賤のめもさへ
おなしあふひをよしかたの入道よめりける
神業のたえぬみあれに葵草いく代かけても色にかはらし
或寺にて村雨のはれまをまち侍りしに廬橘薫風とい
ふことをよみ侍しに
匂ひをは袖につ〻みしたち花の昔の香をは含そ忍へる
仁和寺のほとりにしたしき人のはへりけるかあると
きせうそこをおこせるとて何とて久しく見えさるに
やこの頃は霖雨によりて一しほつれ〳〵にてくらし
かたく侍るけふあすのほとに越させたまへなとかき
こしたるやかて立こえしはらくこ〻にありてよろつ
そこはかとなく事ともいひ出てあそひおりけるにあ
るし五月雨をよみ侍りける
五月雨にふるやの軒の玉水はとく〳〵きてそ老を聞ける

船によする五月雨を
かこへとも繧の小舟の笘をもてうきねくるしき五月雨の比
北山せうをん院にて人〻よりて哥よみけるに弁の君
五月雨をなんよめりける
有馬山いなの篠原水出て根もあらはれし五月雨の頃
舟によするさみたれを
舟もなき五月雨比の角田川すむこともなくにこるさかなみ
安穪寺の住僧えんけい五月雨をよみはんへりける前
のこ〻ろを、
五月雨につなかぬ舟やなかるめり峯のうは手をうちし白浪
久下八郎爲によする五月雨をよめりける
きほひくる水やこすらむ宇治橋のけた打波は五月雨の比
あるとき兵庫へまかりけるにさるへき人〻さん〳〵は
いし侍れはこの浦の政所哥よむ人なれはいさといひ
てぐしてまかりぬさてこ〻にてひねもす哥なとよみ
侍りけるにあるし江五月雨をよみ侍りける
難波潟入江のまこも水こえてそこともしれぬ五月雨の比
夏 草
夏の野に茂る草葉の露ふかく鳴きり〳〵す聲もさたかに
あるし野草を
夏の野に大野の原の草茂りはなし飼ける駒もいさめる
か〻る所へ客人のきて夏草ふかしといへる事よめり
ける
露ふかき草野に牛を追入てくるれはそこと尋わひぬる
瞿麥をよみ侍りける
朝夕に袖のみ添て惜みつるこのなてしこをいかに思はむ

をなし心をさゐきの坊よみ侍ける
いつしかにみれとめかれぬ撫子の花の色香を我あかなくに
宗林庵といへる人澤邊の螢をよみ侍ける
みたれぬる澤邊のかたの螢火に道もまよはす往來するこ
やんことなき人のもとにて終日哥よみはんへりける
に螢を人々よめりける
夜もすからいねぬるねやの灯につゝみ置なり螢火のかけ
客人來て二首よめる中に一首は螢をよめりける
とふ螢風にまかせていつちとも鳴音しのふて胸やもゆらむ
旅宿螢
うき旅のやとりの床の灯にかけあきらかにみゆる螢火
こゝろある人〻暑きころやうあんしのえんにひねも
すすゝみゐて暑氣をはらひけるに俄に空かきくもり
て夕立のしけれはときゆきといふ人よめりける
かきくもり風すさましく落やめは跡はけしき夕立の雨
わかき僧のこれをきゝてやかて行路夕立といふことを
よめる
夕立にあふさか山のこなたなる杉の木かけにやとる旅人
非むらの家にてらうにやくあつまりて半日より夜に
入てあそひおりけるに折ふし哥よむ人一兩人來りけ
れはこれをちからとしてよみはんへりけるおりにふ
れて松下泉といふことを
みるからに涼しさまさる松陰の岩井の清水むすひあけける
樹陰納涼
夕風のそよ〳〵吹は楢のはの雫の落るかけそ涼しき
おなしこゝろを民部少輔よみはんへりける
いさ暑忘れやはする常磐木の影そすゝしき日さかりの比
河邊納涼
しら浪のなかれも涼し河水にひれふるうをの遊ふゆたけさ
或人とぐして鴨へまうではんへりけるに杜の木すゑ
に蟬のかまひすしく鳴侍りけれは
打しきる蟬の鳴音にみたらしの杜のうちには鳥の聲なし
御祓
今日そとて辛崎濱の大麻は皆人ことのはらひなりけり

秋

秋立こゝろを
けふはゝや秋立初ておとつるゝ風そ身にしむたそかれの比
おなしこゝろをよみ侍りける中村刑部丞
草も木も面かはりせり今朝ははや秋の景色は空よりもして
荒屋の秋風といふ事を
葛かつら茂るはかりのあはらやは音さへあらき秋の夕風
荻をすなこしける扇にかきたるをある人の北の方哥
つけてたふへきよしいおこせたりけれはよめる
荻の葉の露うちはらふ秋風につらぬく玉をまくかとそみる
たゝすけ入道の女よめりける
風により妻戸叩くをいかなれは荻のわさとはいひ立にけむ
西山にすむ人おはしけりいとわかきころより世をし
りそいてかた山陰に光陰をおくり侍るかある人にい
さなはれて秋のなかはにまかりけるにそのすまゐい
とあはれにやさしくきたにしは山ふかくみなみひん
かしは野につゝきたり西は笆かきに竹のあみ戸をし
めほそ道を二十間はかりさし入てみけれはひとつの

かや屋見ゆ小柴かきゆひまはしたるさまいと興あり
眞木の戸ひらきてみ侍れはさま／＼の秋草をあつめ
たり竹の簀子におましをのへてしはしこゝにやすめ
りやゝありてあるし出ていさなひいれて和哥集なと
あまたとり出てみせはんへりぬかくしてこゝにひと
夜うちあかしたるに庭の荻すゝき風にあてられてさ
はきあへるといとものかしかましくごゝろうこきけ
れはとりあへすよみ侍り

袖かはす尾花か下の荻の葉はすからに吹し風やうらみむ

荻の葉風にちるといふことをよみ侍りける

秋風にちりしく庭の荻の葉は尾花か露にしめりてそみゆ

簷　荻

我庵の軒の寢覺に荻の葉のやゝとおこして問かとそきく

野荻をよめりける

秋の野の道のかたへの荻の葉は何を招くとうたかはれぬる

しやうりん庵の沙彌野萩といへる事をよみ侍りける

萩原や立入みれはあかなくも宮城か原に日をくらしてん

おなし人行路の萩をよめりける

野を遠み行はてなき眞萩原なをあかなくてかへさ忘れき

庭　萩

露おもき萩か上枝はかたふきて花の雫をなかすとそみる

島崎の萩といふことを沙彌よみ侍りける

音にきく野島か崎の眞萩をは舟の便にけふみつるかな

えんりうの計にて人〻よりて哥よみけるに萩移水と
いふことをよみ侍り

音羽川きしのかけなる萩の花うつれる水も花の香そする

玉泉寺にてさるへき人〻うちよりて哥よみけるに露
をよみ侍りける

霧ふかき秋の野原の朝露は光みかゝぬ玉そまきける

ゆきとし庵主吉祥寺にゆかりありて此所のかたへに
草庵をむすひて心にかなふともとちをかたらひほと
けの御名をとなへて折／＼ゐて和哥をすんし世にす
さめられてはなにか朝晩のつれ／＼をなくさむへき
にとおもひてこよなふ一すちに庵のうちに足をかゝ
め侍りあるとき人の（に歟）すゝめられて心に任せてそこは
かとなき事とも互にいひ續けて後折によせて露如玉
といふことをなんよみ侍りける

秋のみの庵の草葉に置玉はありとみゆれとけつにほとなし

又すゝきをよめりける

あはれけにすゝきをみても人心風にしたひて世をや渡らむ

岩田の家にて七月七日牽牛織女の哥よまむとて人々
あつまりけるにまかりてよめる

彦星の妻こし舟をまちかねて雲のはそてをふりまねきける

人よめるおなし心を

秋風に濱邊すゝしき銀河こよひあふせの涙まくらとは

おなしこゝろを

天河契もふかしたなはたのいつの世よりかいつの世までそ

七夕雲といふ事を侍從公よめりける

秋風の雲霧はらふ天川あふせまかはぬ空のけしきは

霧によする七夕をひろたのなにかしといふ人よみ侍
る

明方にたつ河霧におほれつゝよこ雲ともにわかるたなはた

七夕のわかれを
きぬ〳〵のわかれやしたふ織女の立かへりみる天の川なみ
ある人をみなへしの咲けるを見て興してよめる
あたにふく風になひきそ女郎花うはのそらなる便ありとも
おなしこゝろを
朝露のおもけにみゆる女郎花いさ立よりて拂やはせむ
蘭
花のひもとくきてみれは藤はかま葉をに深く露をむすひて
或人の女ふちはかまを見て
藤はかまきてみる人を待わひて風のためにや露しほれけり
小栗栖と云所にちやうかん法師とて世すて人のはんへりけるほとけに心さしふかくして常はせうみやう念佛しよろつうき世のわさにかゝはらす名をつゝみ徳をかくして露命をおくりはへりけりあるとき此聖のもとへちかつける僧の有けるかいさなひまうつへきよしたひ〳〵いひをこせはへれととかくしてまからさりけるにあるときせうそこおこしていとねんころに聞へはんへれはいかて心さしをむなしくせんとまかり侍れはけにもたうときすまゐにてそのこゝろさしまめやかにみゆるき事ともかたりいてゝ夜もすから打あかして夜明けれは庭に出てみけるにまかきにあさかほの花うるはしく咲みたるゝをみてすゝりをよせてかくよみ侍り
世の中のはかなきとは朝皃のたゝ一時の花としらすや
といひはんへれはあるしきゝて返しとおもひて
朝皃の花みてたにも知ぬ身は何にかならん猶そはかなき

又草むらのむしを
住あらす秋の千草の枯まよりかれ〳〵なりし虫の音そうき
おなしこゝろを
秋更てむしの音茂き草の原いかに夜寒の風や身にしむ
松むしを
秋くれは風そうるさき松虫の聲ふきからすあへの松はら
或人の屏風に葛をかきけるに哥つけてとのそみ侍りしによめる
秋風に出あひぬれは眞葛原露ふきはらひうらみてそみゆ
簑浦ちかまつよりからの紙にかきける鴈をよめといひはんへりけれは
三越路のいく山越てくる鴈の秋の田面につかれやすめり
又初鴈を聞といふ事を
鴈わたるけさそ聞つる天の原遠しといへと鳴にまかせて
或人よこに行鴈といふ事をよめといひけれは
遙なる嶺うちこえてくる鴈は風にふかれて横へきれけり
月
今宵しも隈なき月と詠め入てかたふくまてに見送りそする
八月十五夜
名にしおふ最中の月を心ある人こそうはの空にならまし
なかはら伊豫介の家にて人々より三五夜中の月をみるとて哥よみけるによみ侍りける
花はすき月を松山はるかなる嶺にさやけき望月のかけ
しけもちの母よみ侍りける
いつとても月の御影はあかなくにこよひは猶も詠めます哉
しんせうゐんの老僧よめりける

更るまてこよひの月をめてゝなんなかはに及ふ秋の老の身
　雲間月をよみ侍りける
さやかなる月のみ隱す雲簾かくるそつらきみるとしらすや
　山　月
はるかなる姨捨山の月影をふもとの里にみすましそする
　或人の家にて哥よむ人四五人かたらひて暮まてあそ
　ひおりけるに障子のはしまちかく月のかけさしけれ
　はあな月朧出たまへなといひてみな人〻えんに出て
　いかにといひはんへりけれはとりあへすよみ侍りけ
　る
たそかれに山の端いてゝ近けくも月の影さす庭のおもかけ
　まらうとのきたりてしはしほとありてよめりける嶺
　月といふことを
かひか根にいさよふ月の更る迄いねもやられぬさよの中山
　夜擣衣をなかはらとしゆきといふ人よみ侍りける
小夜更て霜夜の鐘も近けきにいつこにうつそ床のさむしろ
　おなしこゝろを
よもすから世の憂わさを賤の女かたえまもあらす衣擣なり
　あつまさき入道の家にて人〻哥よみけるに遠聞鹿とい
　ふことをなんよみ侍ける
まつち山夜寒の風もいとはすてすからに鹿の妻そこひける
　客人よめりける夜の鹿
さと人もきゝ侘ぬらん秋の夜は山より里へさをしかのこゑ
　おなし人山鹿
大江山秋のみくれはとよむなり妻こふ鹿のこゝもかしこも
　或としの秋の末つかたせうゐほうしの庵にてかなた
　こなたよりてひねもす哥よみくらしけるにかきの紅
　葉といふことをよみそへ侍りける
尋はや篠垣しめし庵の内ににしきはへたる庭のもみちは
　ひなたあきさたの家にて秋の名殘おしまんとて心あ
　る人〻あまたよりて哥よみ侍けるに軒端の紅葉を
住なれし軒はの紅葉今ははやあたりの草木てらすはかりに
　又簷のもみちといふ事をよみ侍りける
よそめをも忍ふにあらす我宿の簷の紅葉は秋にあらはる
　ある人の屏風にきくをかきける繪に哥かきてといひ
　けれは硯をよせて
初霜にうつろひやせん菊の花いろ〳〵ともに秋そあらはす
　又ある屏風に秋田の面をかきけるに讃はんへりける
秋の田の稻かり初て引むすひ田守の袖にまつりをくこ
　あるとき修學院をとをりけるに秋のなかはとみえて
　稻をこき磨けるありさまをつく〳〵みてよみ侍りけ
　る
賤の女か蒔こむ稻を隙なくもする手いそかし玉襷して
　或人の落葉浮水といふことをよめといひはんへりけれ
　はすきし比かつら川の逍遙を思ひ出てとりあへす
大井河錦をなかすうは涙はみねの紅葉やなかは散るらむ
　秋のはての比をよみ侍りける九月盡
けふとてもさ夜かた迄は秋なれは名殘にのこすとの葉草を

櫻井基佐集下

冬

桂のふもとにしる人ありてまかりけれはこのあたりにやんことなき人の世をそむきておはしけるかとしころねかはしき人おはせよかしとおもひくらせし折からそやとて二三日うちかたらひてよろつものし侍りけるに折にこゝろをよせて時雨を

をとつる杉の板戸のしくれには暮行としとなれそ知ぬる

あるしきゝて

年々に時雨の雨にとはれしかあす社しらねふりし身なれは

まちかき庵にひしりのすめりけるか來りてよめる行路時雨

思はすも往來の人の時雨してしはし立よる橋の下陰に

或人きたりて

晴間なく降そふ今朝の時雨には木葉も露も降にこそふれ

客人の中にいとわかき僧のはんへりけるか人〳〵にすゝめられてよめりける時雨を

かきくらす雲のはこねにひと時雨跡は日影のさしゝ山もと

おなし時雨を

時雨つゝかつ散嶺のもみち葉は山のあらしやこきおろす覧

やんことなき人の屏風にもみち書たるをみてよめりける

時雨する比良の高嶺の紅葉はゝ嵐そふともえこそちらしな

又しくれを

浮雲のはれ間〳〵の夕日かけさすと思へは又しくれけり

或老翁の窓前のしくれといふ事をよみ侍ける

我庵の窓うつ時雨しは〳〵も音つれきては夢もむすはす

神無月のなかはに心むつかしくてふせりおりけるにとし比ともなふ人のたつね入てけれはつれ〳〵なる折からによして思ひてよろつものなとかたりあひて時をうつしけるに空うちくもりてしくれはしたなくし侍れはまらう人歌よみ給へといへるにかへりてこの人にしゐはへりしかはよめりける

山深み茂みのかたにむら時雨木葉とつれてふりもをやまぬ

河内寺かねしけと云人ある所にて時雨をよめる

めくり來る雲の手さきのしくるれは跡は日かけに通ふ柴人

浦時雨をよみ侍りける

陸奥のちかの浦半のしくるれは猶しほたるゝ海士の袖かも

又峯の時雨を

風はけし伊吹かたけのしくるれはふもとの里に人も通はす

せうわゐんにてかなたこなたの人〳〵よりて夜もすからつらね賀興行しはんへりけるかのちうたよみといひけれは松霜といふ事をよみ侍りける

あさとに松の上葉にをく霜は老のかしらにさもといふらめ

又松間の霜といふをよみ侍りける

かすをなる老のかしらにさも似たり松の葉分の朝霜を見て

しやうかほうしときこふる人篠の霜といふ事をよみ侍る

くらふ山篠の葉にをく朝霜をはらはてかよふ山かつの袂

暮天霜といふをよみはんへりける

暮かゝる空よりおるゝ夕霜は野への枯葉にをくにそ有ける
なかさとゝいふ所にやむことなき人のすきし比より
ひきこもりていつちへも出す山谷のけしき麓川のふ
せひ草木のうつりかはれるありさまを友としておは
しけるに或ときたつねていりはんへりて世のはかな
きわさ（本脱歟）とたかひにいひつゝけてのちかくよみ
てはしらにをく閑居霜
朝露を庭の軒端のかれまにそをきて年をは送りけんとは
ある谷川の橋のうへに霜あつくをきけるをみて
はかなきはうき世を渡る浮橋に猶もをくなりからき朝霜
冬の日のいとさむけくてつれ／＼なる折ふしよみは
んへりける寒芦
うら風に氷てみえし汀なる芦の枯葉もねをのみそなく
寒草
冬かれすそかの川原に殘りぬる眞菅も今は跡はかりみゆ
雪
降雪に木曾路の旅は道たえてそことも見えぬ橋そあふなき
藏人のかみみつするといふ人哥よむ所にきて山雪と
云事をよめりける
冬つかたあらちの山を越くれは楢の雪そまた降にける
ある人の北のかた旅雪といふことを人にすゝめられて
よめりける
船わたすあふくま川に降雪のたまりもあへす袖そはらへる
曉雪
歸らんと曉かけてをきみれは往來もたへむ大雪そふる
ちやうをん入道峯雪といふことをよめりける
雪降て山の立木もみえされは花の春とそ人はまかへり
野宿雪
ふる雪にあさ野の宿にやとゝりて先うちはらふ笠のあは雪
ともなふ人の雪ふるにせうそこおこしてけふの雪は
いかにやそこら見玉へるなとかきてはやく立こゆへ
きなとくれ／＼かきはんへりしまゝにうちこえけれ
は例の哥よむ人ありてすゝりなとひかえいかにをそ
く立こゆなとたはむれて庭前の松に雪のいみしう降
けるを題にてよめる松上雪
千とせふる松もとし／＼冬くれは雪をや綿にかつく上枝
ある僧のきたりてよめる雪
空さむく風はけしくも吹落て雪降さとの道うつみける
寺法師のまかりあひてひねもす人／＼哥を吟してあり
けるにすゝめてけれはしはし有てよめる篠雪を
ふる雪に篠の青葉もうつもれてはらへはみゆる寺の藪垣
おなし人また
うるさきは冬たつ旅の空にしてくるゝもしらぬ野路の大雪
大みやのにうせんの家にて一夜こゝろある人／＼よ
りて哥よみ侍けるにこのころあつまのかたよりのほ
れる人とて侍りけるかこしおれをもこゝろかくる人
とあるしいへりけれはしゐてよませにけり
雪とのみなかむる方は都人あつまかたにはふしにみなれて
常盤井ちかのりか息あふきをあたらしくおらせてあ
る禪智識に雪の詩を所望してかき玉ふに和にせよと
のそみ侍りけれは辭すれともきかてよみ侍りける
冬はまた雪おもしろし木々の枝に春の花咲なかめすれはそ

鳥羽のなにかしといふ人哥よむ事をこのみはんへりてあるときうちにまかりけるにたちよりてよめりける山家初雪

冬ぞとはけさぞ知ぬるかやの庵軒はにあつき雪ぞつもれる

龍泉寺に年ひさしく住し喝食のいまたはやほうしになりていとたうとく人もてかしつき侍りしかちかきころ和歌にかたふきて六義のみちをなけきはんへりとかくて苦勞してかた〳〵にて哥よめりけるか人々すゝめけれは遠山雪

白雲につゝきてみゆるとほ山につ(も脫歟)れる雪はまかふ明ほの

しやうあんしの沙彌太山雪

冬くれは光そまさる山姫の雪はゝたへにすきとほりける

おなし人杣雪

木曾山の杣人今はやすむらしかりやの雪をけつ煙たつ

かんてゐんのえんにて人〳〵遊て庭の梅をみやれはけさ降し雪をえにところ〳〵もちしかはよめとすゝめられて

(歌闕)

おなし人〳〵霰

篠の葉にをきし霰のくたけても消せてちりし玉あられかな

おなしあられを刑部少輔たかむらよめりける

玉あられ篠にあたりてちる時はさこそくたけて物そ思はん

ある人の家にて小夜ふくるまて埋火かきおこしてあそひおりけるにあるしよめりける冬神祇

過かてに道ゆくわきの辻社ほたきいさむるもりの木からし

夜の神樂をよみ侍りける

いさめける庭火のかけに月まちて雲井にひゝく朝倉の聲

ある所にて佛名

心さす三世の佛をたのみにておのれをいのる雲のうへ人

ねんさい法師よめる古寺殘月

鐘の音にのこりてさしし有明の月の輪きえし西の山寺

歳暮をよみ侍りける

いつとなく暮行としの今日は又思ひかへりて春にあふらん

歳暮によする述懐を

いつとてもかはらぬ年をいかなれは送り迎ふと急く我身そ

戀

逐夜增戀

君をのみ思へは夢もみしかとも今はいをたにねゝはそあ(闕)

待不來戀

待わひて妹かすみかを尋れはあふくま川のあなたなりけり

かひなき戀といふことをよめりける

おもへともかひこそなけれ白濱の鹽干にひろふ空貝かな

朽木によする戀を

山ふかき谷の朽木の心して知る人もなくなけきくらせり

川によする戀

君ゆへに仇名を我は立田川たつ波にもあらてうきに沈めり

寄袖戀

現とも夢ともわかぬ我戀はなにとなるみのしほたるゝ袖

寄烟戀

人をのみ思ひ暮せとあさまなる烟となりてむねそこかるゝ

なさけなき戀とい(ら脫歟)へるをよめる

蟬の羽のうすき情もあすしてさて果しなき跡に思はん

涙によする戀

君をのみ思ひこかれてなみた川袖のみなとに我そしつめる

糸によする戀

我戀は賤かあさその心してなか〳〵しくて身はほそりけり

かきやる文をしほによせて

君を耳おもひあかしの浦にして鹽のひるまにかき集めけり

かよふ戀を

夜となく晝ともわかぬ我戀は君にこゝろのかよふはかりそ

寄鏡戀

見るたひに形見の鏡つらきかなそれそと思ひ心うこきて

あたにおもはぬ文を

かきつむる心もあるを君はさて仇なる風と思ふつらさよ

文によせて

これを見て哀と思へ水莖の跡はつかしき戀もするかな

はしによせてうらむる戀をしけゆき

をはたゝの朽たる橋の君にして桁よりゆかん人そつれなき

枕によする戀

押なてゝ恨そまさるわか閨の小菅の枕たゝひとりねて

水によする戀

我戀は岩もる水にさも似たり思ひあまりてなかす涙そ

旅によする戀

獨ねの夜半の床こそかなしけれ旅としなれは妹そ戀しき

月によする戀

松島やおしまて月さへすむ物を君は情をなと惜らん

螢によする戀

聲はせて思ひこかるゝ螢より猶もこかるゝ我か胸のうち

從おもふ戀

遠からてやかて住家をかへん時いかに哀と君やおもはん

涙によする戀

しつみにき今はたちかの濡波に消ても君に心うかれん

したふ戀といふ事を

あれはいとふなけれはしとふ人心しらて思はゝ君や思はん

待夜あはすしてかへるこゝろを

いかに君またせ〳〵て今ははや横雲ともにあはてわかるゝ

神に祈る戀を

あらきたの野坂の浦に戀をして君を三島の神に祈らん

かなはぬ戀

されは又命のほともしれたるに叶ぬ戀に身をそやつせる

一夜契りし戀を

君をのみおもひ入間の里にして一夜契りてたつもつらしな

逢別戀を

わか戀はひとつみなとを出船の逢て別るゝゐそとつしまへ

笛によめ（す缺）る戀

君に我中そかはらぬ笛竹のそのふし〳〵はねもあはすして

竹によする戀

よゝふれと思ひとをらぬ吳竹の末葉の露と今は消なん

寄氷戀

わか戀はさのゝ中川いてぬれはこゝろも氷とくるよもなし

寄鳥戀

曉にもしもやとると松の戸に妹はこすして鳥の聲きく

時鳥によする戀

時鳥まつにねぬ夜はつもれとも妹をまつほと苦しくはなし

花によする戀

花を見て思ひ忘るゝ時あれと立されはまた思ふ君かな

きゝわふる戀

聞てしもきかまほしきは君のうへいかゝあるやと心盡せは

柳によする戀

春風におもひみたるゝ青柳のいとたへかたき　にも有かな

嵐によする戀

さよ更ぬ妹はこすしてむこ山のおろす嵐に身はひえにけり

風によする戀

山風の行手の君に有ならは吹くるたひにことつてやせん

五月雨によせて

さみたれの軒の雫にあらねともとく／＼通ふ夏の夜にして

郭公によせて

みしか夜の軒にしのふそ時鳥聲をきくやと待あかしける

あやめによする戀

わか戀は五月なかはに思ひ染あやめも知すねこそなかるれ

あふてわかるゝ戀

おもへともゆき逢坂の關なれは訣れかなしき君にも有かな

荷によする戀

山路行柴人なれや我戀は君をおもにゝ持そくるしき

夢によする戀

思ひねの夢にそみける君かかけさむれは辛し跡もなけれは

ある人としころ思ひける女のもとへ文をつかはしけるになにゝよりてひさしくをとつれもきかぬなとうらみてよめりける

けふそみる菖蒲の草も君にしてねたくも思ふ恨こそあれ

あるやんことなきかたに宮つかへはんへる女のとしころかたらひしおとこのやゝおとつれもきかさりけれはあやしく思ひて文をやりけるに哥よみてたはせよといへりけれはかはりてよみてつかはしける

秋風の吹にや君を松の戸にをとつれもせぬ人そうらめし

ときふさときこへし人ある女をこひてたひ／＼せうそこつかはしけるにある時女返しをし侍り

池水にしけりあひたる水草のうきたる君はねことをらは

にしの京にやんことなき人のむすめすみけりとし比かたらひしおとこはいさゝかのふしをいひ出てとたえしたゝひとりゆかりのもとにありけるをある人のきゝてあやしきさまにやつれて見にまかりけるになへてならぬさまなれはいとゆかしくてのちたよりをもとめて文やり侍り

久かたの月は哀にみたれとも心にかゝるくまそかなしき

女返し

久堅の月の光はきよくともうはの空には曇こそすれ

坊門のさゑもんのすけ戀のうた四五首よみてとありけれはほとへてよみはむへりける二こゝろある戀を

五月雨に思ひ亂れんあやめ草かなたこなたへ靡くつれなさ

小田によする戀を

時のまもわすれはせしと春の田をかへす／＼も人そ戀しき

雪によする戀

こよひとて妹を待まに雪降んつもる思ひに消る心ちす

川によする戀

深山川あやすきなりな君なれはすちりも散て浮名なかせり

野に上する戀

野も山も人し侍なは我ゆかんたとひしぬるも君ゆへならは

すきかのほとりに住ける人ありけりある時まかりて

哥なとよみけるにあるし戀の哥をよみ〻てけれは契

り初し戀のこゝろを

逢こともなくてそ思はん筑紫なるあひそめ川の身社つらけれ

月によする戀

君をのみ思へはくもる我心さやか（けさ歟）な月も霞てそ見る

我よりたかき人をこふるこゝろを

天の原雲井遙にすむ君を心たかくもこふる我かな

しのひまとふ戀を霞によせて

忍ふ夜の道さまたけの霞ゆへそこともしらね行空もなし

又

夕霞立もつらしな君かすむやとの軒端をみまとひにけり

雜

かた〳〵にてすさみ侍りし江上春月

すみわたる玉津島江の春の月空は霞におほろなれとも

春　曙

（歌闕）

餘寒氷

春といへは夜のまに氷る池水の汀の芦はあとをとちにけり

餘寒の風といふ事をかえん法師よめりけり

濱松の立し條に吹風は春としもなく音そさやけき

せうこんしのそうあんにて哥よむ人〳〵あつまりて

殘雪をよみはんへりけるに

永き日も猶そ氷れる岩かけにのこれる雪の春のむら消

又

消のこる雪のかた山むら鳥たそかれ時につれて行みゆ

おなし人雪きゆるといふ事を

ゆき消て水かさまされ太山川瀨〻の岩ねをあらふなりけり

岡殘雪

長閑なる春の日うらの岡のへに殘れる雪も日ゝにきゆめり

きやうふのせうとてとうこくよりものほれる人のは

んへりけるか哥よむ人になんありけれはすゝめてよ

めりける草殘雪

春の野のすゝ（く歟）ろの薄萌出て又泡雪にあひきは（さ歟）のはら

又山に殘雪を

春きても茂みのふかき太山野は所〻に雪そのこれる

とくけんしにてかた〳〵よりて哥よむ人のあつまり

て朝時雨

うちつゝく春雨なれや花のため遲しといそく雨のあしかも

安房守きんよしのいゑにてひねもす人〳〵哥よみ侍

りけるに夕雨をよめる

つれ〳〵となかめかちなる春の日に夕の雨は猶そさひしき

三位の局岡雉をよみはんへりける

長閑なる岡へのはらに鳴きゝす聲あらはにも妻乞をする

おなし人雲雀

空たかく雲雀鳴なる春の野に霞立そふくれの山もと

いはむらの重雄おなしひはりをよめりける

梓弓春や雲井になくひはりやといふよりもいや落にけり

雲雀を

打つれて雲雀立なる網屋川羽風にさは（さ歟）ひきゝ波そたつ

よしみねの僧歸鴈知友といふことをよめる
歸る鴈渚の眞砂におりえつゝ都の名殘しはしおしめり
　人にかはりてあかつきの鴈を
きぬ〳〵の別の涙たれ有て曉かへる鴈の羽をとそ

歸鴈

鴈歸るとくにもしらは玉章をこしのしらねの妹につてなん
　せうあんしの僧歸鴈雲につらねてゆくと云事をよみはんへりける
行雲の羽袖をかけて明暮とこしのなかちへ雁かへるらん
　おなし人歸雁をよめりける
天の原雲すしたてゝかへる雁薄墨もかな繪にもうつさん

嶺歸雁

雁かへる嶺のつゝきをめあてにて行手もはやく跡消にけり
　ある家にて鴈を
今はとて花をはすてゝ立鴈の匂ひを殘す跡をしそ思ふ
　雨中のつれ〳〵なるころしたしき人二三人ものへまうてゝかへるさにたちよりあそひおりてすすりをよせ筆をまさくりけるかたう紙ありとり出てかくよみ侍り春田
行道のかたへにはへしみしめ繩水せきいるゝ小田の苗代

又

出こほる春のあら田をすき初てけふよりしては野にそ立覽
　おなしこゝろを
賤の男か堅き山田の一返しちからいれんと休む鋤の柄
　えいくわう法師春鐘と云事をよめりける
永日と思ひ思へとけふの日も暮かたつくる入會のかね

　或人の家にて春の[illegible]をよめといふけれ[illegible]
峯たかく谷の岩根をくゝる水末は落あふ春の川波

春述懐

世にあるは春めく人こゝろ世になきなれは心つねなり
　ある人春神祇をよめといひけれはかはりて
千早振神代のためしいつまでもつきぬしるしにさかゆ榊葉
　春釋教をえいせうあんの僧都とかやよめりける
草も木もなへて花さく御法には嶺の嵐も成佛の聲

哀傷

　或人亡父の三回忌にあたりて追善として七日僧尼をくやうしはんへりけるによめりける
わかれにし歎も今は忘れ草みとせになりてけふそつみつる

餞別

　さぬきの守ちかいへといふ人公用によりてやよひのはしめに伊豫國へまかりなんと用意しけるかやうやうおもひたつ日にもなりはんへれはすてに首途しけるによみてつかはしける
思ひやる波ちはるかに行舟の跡の思ひはいつれともなし

親家返し

けふ出てかへらむことも白浪の立をかきりめとし思へは
　そのゝち三つきはかりほとへてたよりありて人〳〵のかたへ文おこせけるによみて侍る
鴈ならぬ身こそつらけれ雲ゐにも心はかりは通ふとをしれ
　山科にとしころすむ人の有けるかとうこくしもふさのむまれにてにわかにゆかりのためにまかりなんといへりけれはしたしむひと名殘おしみてはな

むけなとしはんへりけるによみ（て脱歟）をくりける

東路のゆく末とをき別には又あふ坂の關そたのめる

西院のもとにすめる梁閑のいほにて人〳〵ひねもすあそひをりけるにつねにわりなくむつひける僧にせんゐんほうしふとまかりてたいまみちの奥へまかりはんへるなこりこそおほかれといへば人〳〵はこれをきゝて空をさへつき〳〵しくもいへる僧かなと一とうにけうさめてはへりけるもいとこちたしされともまめやかなりけれは名殘もなくたちて行程に袖をとらへてよめりける

みちのくへ思ひたつ社名殘あれいつくも旅の身にはあれ共

これをきゝてたちもとり袖をかきあはせてかくいへりける

わかれ行あとの名殘にのこれとてすさひ捨たる道の一文字

這上下卷者櫻井中務丞基佐（法名永仙）詠歌也。藏二深窓一。雖二秘本一。令二懇望一書寫畢。

右櫻井基佐集上下二卷雖不審不少以類本無之不能挍正

群書類從卷第二百六十四

和歌部百十九　家集卅七

出觀集　入道二品親王覺性詠

春

立春のこゝろを

山風によこきる雲のいつそとてみとりゆるけき春の立らん

雪きえて春たつ空のうらゝにも鏡の影の霜はさむけし

うちきけはこそと今年と遠けれと思へはきのふけふと成覽

春たては峯のかけひの霜くつれ□なをす水もりくとて

をの山は霞にけりなすみかまの煙はきのふ絶にしものを

いつしかと二見の浦の霞めるは明ゆくとしのしるしなりけり

春のくるよはの旅ねのかたゝかへ歸あしたの道そかすめる

春初視

立春をみよの千年のはしめとや天のこやねにさため置けん

春來望海上

春きては淡路島やま見えわかす波もてゆへるかたも霞みて

幽栖春到

春風にほをのうけくさ打靡き谷のとほそにたるひとくなり

題不知

春かせに入江の氷とけしよりあをみわたれる淀のわかこも

子日

子日する岩ねの松はいはねとも二葉にしるし千世の景色は

霞

朝霞すそのゝ里を立こめてそことも見せすもすの草くき

すまの浦をこむる霞のかたよりになひくやあまの煙なる覽

ふしの山麓めくりの霞こそ峯にしられぬ煙なりけれ

しからきのとやまを霞こめしより空にそをのゝ音は聞ゆる

三輪の山峯の霞のしるしにやすそのゝ里は春をしるらん

題不知

をちの山松はすそこに見ゆる哉麓の霞みねのしら雲

行路霞

立歸り宿の梢を見渡せはよそに思ひし霞こめたり

さかにすみ給ふころ野徑霞といふを

春されはさかのやきにと打むれて霞にきえぬ遠の里人

關路霞

にはつ鳥聲にあけつる關の戸を猶もゆるさす霞こめたり

霞籠歸鴈

かすめともこしのそなたのしるき哉あま飛雁の聲を尋ねて

山路入霞

麓にてふりさけみれは久方の霞にとつる春の山みち

霞裏聞松風

霞せぬおりや昔もむすひけん聲計するいはしろの松

霞隔社頭

峯つゞきたな引とみし朝霞かたをかをさへこめてける哉

鶯

鶯ははつ音いかゝとおもふらん花もちりぬとみゆるあは雪

花もまたにほはぬほとは鶯の初音はかりそ身にはしみける

鶯の聲かゝりける山里をとふ人なしとおもひける哉

鶯のうはけはたけにまかへとも聲の色にはにる物そなき

閑居聞鶯

ともかほに鶯はかり音つれて霞にむせふ春の山さと

竹近聞鶯

風吹はまかきの竹のなひきゝて手にとるほとに鶯そなく

鶯の竹のねくらに槇の戸をあけあはせつゝ初音をそ聞

春日遊覽

おもふとち春の野邊みにあくかれぬ宿に鶯なかはつけなん

山家春興

山里は春の朝あけそ哀なる霞のそこの鶯のこゑ

題不知

たにのすをくもにつけては打とけてさえぬ都にきなけ鶯

船中聞鶯

住古のおきにみいてつほそえ舟まつに鶯きなくかきりは

ありまにて旅宿鶯といふことを

故郷になくとおもひて鶯けはさもあらぬ谷のうくひすの聲

曉月聞鶯

月のこる谷の鶯をとつれて野寺のかねに山あけにけり

竹畔殘雪

日をさふるまのゝ若竹影うすしいつまて殘る去年の雪かも

雪深冴白冬

冬もきしあさてこふすまいまさらに薄くおほえて積る雪哉

若菜

小山田は雪けの水の深けれはあせつたひにて根芹つみけり

正月七日ゆきふりたるに　法印有觀

かめ山のはるけきのへのわかなをは君か爲にと雪そ降つむ

御かへし

雪のつむわかなはよそにみつれとも我爲にとは今そ知ぬる

春日携絃

さたまらす聲〳〵うたふ鶯にをちあけさけつけてこすかな

梅有遲(遲歟)速

いかはかりかつちる梅を惜まゝし立枝に蕾む花なかりせは

月前梅花

わきて猶露あたゝかにをきけれはかた枝に梅の花咲にけり

白梅勝芳

八重梅の立枝かちなる木間よりもる月さへや香にかほる覽

題不知

くれなゐに染ぬ色社梅の花かはなか〳〵に身にはしみけれ

梅花うすくれなゐのしたかきをむら〳〵そむる春霞かな

霞中嶺梅

紅は春の霞のいろなれはかほるに峯の梅をしるかな

もつめにすみ玉ふころ閑人翫梅といふことを

つれ〳〵とにはに佇む山里はなつそふ梅も花ものいはす

隔墻見梅

葦垣にこそかくろへし梅か枝のみこすはかりに成にける哉

民村梅

をの〳〵かしりへの道のせはしさによそめは一つ園の梅かえ

梅花夜香
八重梅の匂ひにしめてさよ衣ふせこをよそに思ふ比哉
柳
春はまたひきくらふへき物そなき一もとたてる青柳の糸
朝ねかみ亂れてかゝる玉柳たれとふしきの姿なるらん
題不知
若艸のしけるつゝみをみわたせは柳の枝にさきそむれぬる
河邊柳
つなてこす川そひ柳いかなれは水の心にひかれそめけん
柳色透霞
絲なるいつもと柳ほのみえてかすめとしるき君かかとたは
朝霞柳のまゆにたな引て亂れにけりなうすく見ゆるは
池塘沓柳
こやの池はいひもかくれて青柳の糸より外の物なかりけり
江邊柳
朝夕に飃のさせしやしけからん離の島の玉のを柳
垂柳遮路
ふし柳したのくひせのはへしより末もとをらす谷の細道
二月廿日ころに雪のいたくふりたりけれは
雪ふかみさらにとちてそ冬こもる春にあけてし槇の板戸を
早蕨
出てみよ野への早蕨もえぬらし雪の消まにきゝす音そふ
山櫻遲發
ひらけてもうしろめたなき山風を思か花の咲もやらぬは
春意有山花
山櫻まつとおしむとかはれ共つくすはひとつこゝろ成けり

望山待花
またきより高ねにことし櫻花めにたつ雲そ始なりける
山花未遍
み山木の絶まの花とみえつるはつほみかち成よそめ成けり
山櫻またもきて見ん人のためおらてそ歸るまれの初花
題不知
のにみゆる春ならませは問てまし初花さける山は有やと
問樵夫尋花
妻木こるしつおにとへは花は見ゆ朝日あたりの峰にとそ云
花綻山家遠
麓にて高ねをこえてみし雲は我住宿の櫻なりけり
夜戀山花
夜もすから花のけしきを思ひやる心や峯に旅ねしぬらん
題不知
櫻咲春にしなれはつくはねのこのもかのもにかゝるしら雲
山櫻たれかこすゑとしらねとも心は花になれそしぬらん
紅のうす花櫻咲ぬれは雲も色をはえこそぬすまね
櫻花咲みちぬれは立田山雲のきぬはたはるゝまそなき
花をみな心の儘にあくかれはいつくかつゐの住家ならまし
翫花日曛
朝霞わけきてみつる山櫻おりてそかへるくれのあらしに
花影寫水
さくら咲谷の小川に影見れは思はぬ花のかさしをそさす
山花透霞
一枝に霞の衣下縫してみゆるは峯のさくらなりけり
山近見花

都より尋てみしを山櫻すたれをまきてけふもなかめつ

曉更見花

有明の月の光に朝戸明ていつしか花のねかほこそみれ

花色同昔

あかさりしそのゝみ山の櫻花みしにかはらす咲にけるかな

花近民家

あつまやの柴木の煙心せよあたら櫻の匂ひやつすな

春高野よりいて給ふみちに舟のうちにて遙憶都花と
いふ事を人〻によませさせたまふとて

花の色に思ひなしつゝなくさむは都のかたの八重の白雲

落花

都にて庭にふまゝくおしかりし花こそ春の山路成けれ

さのみやは風のとかともおほすへき心止まる花もあらなん

かみなひの三室の山に散花はたつたかはらにつもる白雪

あら礒の浪に櫻のよりくるはしかの花園風や吹らん

櫻咲しかの山こえ風吹は麓のいそに花そなみよる

庭もせにしけみにちたひ散花をやかてくたすはこのめ春雨

よる花をあさこき出て尋ればおきつのいそのわかきなり皃

尋ゆく峯の櫻はちりぬらしさ山もよそにあらし吹なり

花誘ふ風そ思へはつらからぬさこそは誰もおらまほしけれ

櫻さく峯にあらしやわたるらん細谷川のはなのうきはし

春すくと風にもちらぬ花もかなさてもこのよに物や思ふと

はかなさを恨もはてし櫻花うき世は誰も心ならねは

題不知

つらしともうしとも花を思ふこそたゝ春風のゆかり成けれ

落花滿庭

なかめつる人の跡こそ櫻花ちりしく庭の絶間なりけれ

春日同詠溪流落花和歌并小序

夫紫金臺寺之上方者。紅塵華洛之西畔也。樓殿之任峯巒也。添綵畫於霞色。池沼之遶左右也。疊瑠璃於浪文。干雲閣之勢矣。假天近而究壯觀。望月臺之樣焉。縮仙室而在咫尺。卜兎裘於擯俗之地。孔鷲王於經行之砌。彼金谷園。風煙雖傳德殖香。山寺之水石遠不知兒手出。如長栖橋蹤絶。馴瀧川名流。外土之得勝無益。于尋斯庭之瀟奇。有便于見者歟。於是屬蘭若之閑暇。萃櫻花之樹陰之者濟々焉。僉相語曰。何齋折得繁艷以挿銅瓶。何空捨輕葩以供金仙而已哉。若曾移繩床於苔上。旁列薜襟於花前。座客靡然。若不眼膺。是以諷詠夕靜。懸思於出雲之以觴吟。春深（恐有誤脫）宴於暮月之三月不可不賞。不可不惜。千時錦花數千片。目不暫捨。玉盃兩三巡耳。如今溫。依花勸醉。杖醉翫花。溪嵐北興之時。張油號俯立。山月西落。曉褰夢號倘望。遂以溪流落花爲題目。各呈佳什。如予者。久雖學赤人之詞。徒欲覃白頭之齒。締交備記事云爾

かほるかをかけひの水にさきたてゝ流そ淀む谷のさくらは

題不知

谷川をやとゝかけひにせき入て流るゝ花をとめてこそ見れ

花ゆへにさらぬ別そしられぬるあかて散行ひとへこゝろを

落花埋路

ましはかる裾野の道のみえぬこそ花こき散す山おろしの風

雨裏不見餘花
あめもよに思ひもしれと遅櫻山わけ衣しほらてそ見る
春深花不殘
このもとに山さくらとをひきたてゝ思そ出る春のにほひを
春草漸滋
春ふかくなり行まゝにあけにけり野中のし水草かくれして
やまさきの國明寺にて海邊春駒といふことを
濱おきの若葉をあさる春駒はいせをのあまやとり繋くらん
春駒をしそく三寸のほとに人々よませ給ふとて
いはへつゝ雲に入ぬと見ゆる哉野澤をあさるつるふちの駒
湖邊春草
若草のもえ出しより磯なつむしかのうら人たゆるまそなき
あかつき歸雁のなきけるにむかしのをおほしいてゝ
思ひ出る人あり明の月影に心ほそくも歸るかりかね
旅行歸雁
かりかねのかへさの道を尋れは我行こしのしらね也けれ
曉天歸鴈
明やらて行衛見えぬと歸る雁雲ゐの北に聲そたえぬる
ありまへおはするみちによふことりのなきけれは
山路ゆく我をとゝめてよふこ鳥いふことならす谷をすく也
閑宵呼子鳥
さよ更て隣の音のしつまれは人よふこ鳥聲もまきれす
苗代處々
苗代の水そ濁れる小山田のかみのせまちもあせやせくらん
左右有苗代
小山田にくろをへたてゝかくうへに苗代水をひきわかつ哉

苔庭菫菜
つほすみれ花咲庭は紫のゆかりに苔もむつましきかな
題不知
山里は賤のくひかきしたしけみあさちましりにすみれ花咲
閑居春日永
事もなき窓のねふりもあきぬれとまた傾ふかす春の日影は
春日の心を
雲雀上る麗らの影に窓開てわかしものかみこゝらぬけころ
杜若
そこ淸き淺さは水の影そひてふたへに見ゆる杜若かな
躑躅
岩つゝし咲かた岡のよそめこそとよはた雲の立とみえけれ
躑躅映水
岩つゝし枝のたはむと見えつるは移れる水をくめは也けり
深山躑躅
きひの山ほそ谷川をおひにしてしたもと色に咲つゝしかな
暮春躑躅
花ちりて人め絶にしかた山を思ひすつなとさくつゝしかな
藤花
紫のかけいとかけてそなれ松たてるや藤のさかり成らん
旅宿藤花
獨ぬるなこの鹽干の磯枕なみたかくみゆたこのうら藤
藤花繞寺
藤浪のまつのかとよりかゝりきて月のみ顔も雲かくれせり
朝見藤花
朝日さすまつの梢の横雲のはれぬや藤の盛なるらん

藤花藏石

藤の花咲しかゝれはむらさきのうへにそふるゝ峯のしら雲

當座歌合に近對欵冬といふこゝろを

橘のこしまのくまの遠けれは植てこそみれ八重の山吹

雨洗欵冬

山吹の雨にしほるゝ花ゆへにゐての川なみなき名をそたつ

更衣漸近

つき草の花色衣ぬきかへてひとへにならんことはいくかそ

卯花先夏開

玉川の峯の卯花咲ぬとてまたきかきねに神まつりする

山家春暮

春くれて谷にかへれる鶯を宿にうけとるけふそやさしき

題不知

思ひやれくれ行春にをくれたる霞の里の心ほそさは

三月盡

花をこそ風のとかとも思ひつれ何ゆへにまた春もとまらぬ

かねてより思ひしかとも春の暮けふはにはかの心ち社すれ

けふは猶恨むにとまる春也と花の名殘のあらはこそあらめ

夏

更衣

夏衣めつらしけれはしかすかに心は春の花にしもなし

卯花

玉河のそのみなかみの早けれはゆふかけて見ゆ岸の卯花

夏の夜はかきねつゝきの卯花のおられぬ枝や有明の月

山里は谷の小川に音はして卯花かきに波そ立ける

我宿もいそのとまやの心ちしてよせつる波とみゆる卯花

玉河と音に聞しは卯花を露のかされる名にそ有ける

卯花掩路

山人は花をふみてや通ふらんうつきかきをのそとの細道

卯花露

こさめふり露をきすかる垣ねには枝かたふかぬ卯花そなき

卯花藏宅

卯花の枝のひまよりたつ煙くゝめやかたに朝けすらしも

卯花隣隔

山里は卯花さける中かきにうらうへにほすしつのてつくり

對樹定春花

かさしつゝ歸りし花の形見にはしつえおれたる櫻をそ見る

題不知

岩越るみかさやこゝに掛れとまたき山井をさしつてそ見る

まつりのころ

けふくれはひとつ社のもろは草こゝらの神の物とこそなれ

題不知

夕顏のかゝる垣根にこかけとりふせれはすゝしむきの秋風

郭公をまつこゝろを

いつしかもきなくへしとは思はねとけふこゝろまつ郭公哉

初聲をきゝやはしつるきかねともまつも嬉しき時鳥かな

毎人待郭公

さそひつゝ花をゝしみしもろ人は山郭公まつもかはらす

雨中尋郭公

時鳥きかぬ物からみやま路に又さしくもりこさめふりきぬ

郭公遲語

忍ひねの程そ過ぬる郭公なくへきさ月なくはなさけそ

山陰待郭公

ねらひするさつをかさきに時鳥はやまか下に待あかすかな

待郭公勝例

郭公みにかへて待ことゝしもしなはしねとや音つれもせぬ

側聞郭公

うらめしく又嬉しきは郭公ありなし聲のよはのかたらひ

題不知

時鳥なくかた岡のはふりこはみあれのあふひとる空そなき

月前郭公

卯花のかけとおもふか郭公月の殘れるかきねにそなく

ほとゝきすの心を

郭公とをちの里の一聲はいさきかぬよのうちにかそへむ

なれまつといねぬあさけに郭公あふちの枝に今こそはなけ

あくかれて尋そせまし時鳥山かたつきていほりさゝすは

谷ふかみ雲のかよひ路近けれは軒に鳴なる郭公かな

柴の庵のかけひの水の音とめよ谷のすきこに時鳥なく

此里はなきけるものを時鳥いつくもおなしさ月と思ふに

あら熊のすむてふ山も郭公きなくときけはいらさらめやは

もろ共に住山なれはほとゝきすねくらは梢やとはこのもと

かうやの山にこもりたまへりける比或上人の五月は

かりにみやこへ出けるに

まつ里へかりに出らん時鳥ありすのみやま□わするな

隔林聞郭公

時鳥ひはらを過て尋れはちかひて谷のとにそなくなる

郭公山寺友

ほとゝきすよかれする夜ははつせ山獨こそすめ笹のかり庵

夢はかり聞て過しを郭公おもひあはするこのさ月かな

題不知

與客聞時鳥

時鳥君もろともにきゝつれは又もきませとみましをそしく

ほとゝきすを

つくは山しけきかひなし郭公よはになく音は絶まかち也

時鳥鳴にうき身をなくさめてあたし心もなきさ月かな

時鳥をかたらへはひとりねの淋しからぬはこのさ月のみ

おりはへて今そ鳴なる郭公さ月のさよの空もとゝろに

さ月きてまたまとろます時鳥こゑを聞よも聲きかぬよも

郭公なくよは月やねたからんてらさぬやみの空をなかむる

夜半郭公

時鳥曉近き一聲はけふとあすとにわけてきけとや

待與月郭公

月はなを山端もあり時鳥いつれのかたの空をまたまし

聞郭公看月

時鳥名殘おほかる聲になをそへてそおしむ有明の月

題不知

おしましとおもひやなれる郭公聞もならはぬよはの聲哉

五月雨の空にしもこそ時鳥聲くもりなく鳴わたるなれ

時鳥忍ひかたきは五月雨のやへ雲かくれ過るひとこゑ

五月雨にはかひの露やおもからん過かてになく郭公かな

松上郭公

時鳥きなくなるをのひとつ松聲のたくひ〔あら歟〕も有しとそ思ふ

松かえに時鳥なく曉はたかさこふねのいてやしぬらん

海邊郭共

あまを舟うらはの里にことつけよおきつ島山時鳥なく

旅宿郭公

哀なる高瀬のよとのこも枕又いかにとはほとゝきすなく

曉聞郭公

有明の月に鳴音を時鳥よをうらみてもひとりきくかな

題不知

わすれ草しけれる軒を時鳥思ひ出てもなきわたるかな

待賢門院かくれ給ひて後法金剛院におはしてむかしの御あとあはれに見たまひけるおりしもほとゝきすのなきけれは

ふる里をみにこさりせは時鳥たれとむかしを戀てなかまし

水鷄

人かとやよひのくひなを思はまし柴のとほその板戸也せは

谷深み何とてたゝくくひなそもむくらの戸さしあけぬ物故

月前水雞

傍しや闇へもいらて詠むるを月をみよとてたゝく水雞か

船中聞水雞

とまの上をよはの水鶏にたゝかれて枕の下に涙そをとする

水草藏橋

めもはるになにはの芦のしけゝれは尋そわたるまきの板橋

菖蒲薫風

我宿のねやのつまなるあやめ草ねたくも風のかをぬすむ哉

題不知

草の庵の軒に菖蒲をふきつれはひとひさしさす心ち社すれ

長きねの無てならぬは菖蒲草えもいわぬまにひけはこけり

長きねをいとゝみつるは菖蒲草ひきたかへても思ひける哉

池故菖蒲繁

八重ふきのあしならね共年ふれは菖蒲ひまなしこやの池水

早苗

けふ既にをたの早苗はうへつめり垣根はみゆく駒入なゆめ

山田早苗

かみしもの谷の心のせはけれはそしろのたこの數も習はす

川邊早苗

しはしとれやそうちかはの水車門田の早苗うきもこそすれ

連夜鵜河

草の庵に枕さためすうかひ舟いく夕やみか世をおとすらん

篝廻島

篝舟いつれのかみにゝへたてゝみてくら島をこきまはる覽

照射

ともしすとみやきか原にたつせなはまつほと苦し山の下露

題不知

むなわけに繁る夏草踏したきほくしをまもる鹿そはかなき

ゆく鹿の荻のはすりの音きけはあはれしつをのやころ成覽

五月雨

五月雨にしからみかけて庭もせにみゆるや竹の籬成らん

五月雨にほそ谷川の水こえてかきねは底の玉もとそなる

川邊五月雨

五月雨にかはかたきしのふし柳古くかけたるもくつ隱れぬ

舊宅五月雨

槙の戸も朽にしやとに五月雨のよはの雫のたゝく音する

窓あれてかへのくつれにはふ蔦の此五月雨にねさし添らん

羇中五月雨

なつかしき都のてふりぬれぬへし晴間をまたん五月雨の空
五月雨の晴せぬ程はなには潟たみのゝ島そとまりなりける

花橘

さ月にはかたえさしおほふ橋の匂ふ廂そすみかなりける

廬橘夜香

夜もすから花橘のかほりくる板間はふかし月の秋まて

廬橘誰家

かさしたの宿はいつくとしりかたし花橘のたてるこのもと

螢

こすのとによひの燈きえやらてほのめく影は螢なりけり
玉水にやとれる星と見えつるは明ゆくまゝに消る夏虫
むら草のしたは飛かふ螢こそ風にこほるゝ露と見えけれ

螢照水草

夕風の玉ふきはらふ蓮葉はすたく螢の光りをそかる

曉螢火

明ぬれはすたく螢のともす火も枕にきえぬをのゝ草ふし

竹中螢

心しててらせ夏虫吳竹にねくらしめたる鳥もこそたて

隔竹望螢

板しとみおろさぬこすのうちのひは竹よりおくに燃る夏虫

蓮

はな蓮心にいれてなかむれは胸のうちよりひらくとをしれ

古池蓮

池の面にはすの絶間の一筋はかよひし橋の跡にや有らん

河風荷〔き脱歟〕氣馥

蓮葉のなひて浪を打まゝに頓て汀の風そかほれる

氷室

春秋ものちのかたみはなき物を氷室そ冬のなこりなりける
長さかにけふいたすひのした消ておほする駒の汗と社なれ

依泉客來

まし水の枕にそゝく山里は大宮人もかとたくなり（キノマヽ）

關路泉

逢坂のいはかきし水つゝむとて玉散かゝるみつのひろまへ
逢坂の關のし水の淸けれは影をとゝめてかみもすみけり

巖下泉

たにさしてすゝむ心もわすれけりいしふむ山の下のし水は

泉邊夜漸深

さらぬたに岩間の水のもる物をねよといふ鐘の聲聞ゆなり

深谷泉

谷ふかみ水こひとり〔の脱歟〕聲すなりつゝのあまりの音をたつねて

夕立

高ねよりむら雲のほる程もなく夕立すなり空や神なる
夕立につゝみをくより水おちて瀧にそむかふ谷のとほそは

夏日越關

夕立にふしの芝山雲かけて淸みかせきのなころをそ行

夏月浮江

難波江に只ひとわれのつらゝゐて葦の葉とつる夏のよの月

泉邊月

天河雲のみをよりなかれゆく月は淸水に猶やとりけり
月すめは氷とちたる岩間よりいかて山ゐのなをなかるらん

戀月翫月扇

曇るかとたゝむにつけておもふ哉花田のかみにみかく月影

對月恨宵短

みしかよのつらさも色にあらはさし我を恨と月もこそ見れ

旅泊夏月

こなみ色のとまり涼しき夏のよは月にそひろふ浦の鹽貝

舟とめて影をあはれふ程もなく月傾ふきぬあまのまてかた

水路夏月

舟てしてやかて明ぬる夏のよは月にこきつる程かすくなき

月前聞鐘

なかめつる程なく鐘の音すゝ月のいく時おきてうつらん

題不知

さらぬたにみるほともなき夏のよにまたれて出る月の影哉

夏のよた（は脫歟）ゝ時の間もなかむれはやかて有明の月をこそみれ

瞿麥

こきはこく薄きはうすしとこなつの色（を脫歟）まねふる花の上露

荒砌瞿麥

まとあれてくすはへちれる庭の面に猶なさけあり大和撫子

瞿麥滿庭

とこ夏のにはもしみゝに咲しより錦のしたに道はなりにき

庭上皆瞿麥

とこ夏のにしき織しく庭の面は淺茅もひとつはたの糸筋

題不知

夏草はさしも山路にふかゝらしとはねは社は跡もたゆらめ

林頂蟬

かけしけきやすのかはらの柳原こたかく蟬の聲さはく也

林中邇涼生

涼さはなるやひさきのしたのみかなもしらぬ木の陰も有覓

山家林影多

はひそなるひさきましりの夏木立夕日もさゝす槇の板戸は

題不知

波たてるくぬきか下に駒とめておきつかはらに暫し涼まん

山家晩涼

夏山の木の葉かくれの夕月夜もる影涼ししのゝかりふき

題不知

夕されは見るさへすゝしをさゝ原風に浪よるふか草の里

を山田は夏のくれこそ哀なれいなはの螢しつのかやりひ

水岸如秋

みわたせは池邊のこはき打なひき鹿鳴ぬへし岸の夕風

秋近月明

ほともなき夏の日數を月影のまたても秋になりにけるかな

草花先秋

草深き夏野にさける小萩原また秋たゝぬにしき也けり

山家蚊遣火

かひたつるかきねむかひの細道は都の人に見せまうきかな

遠村蚊遣火

日くるれはをちのいまさとかひたてゝとはたの面に煙棚引

遙谷蚊遣火

この峰のあなたの谷をいりはてゝ人住けりとみゆる蚊遣火

雨後谷心涼

雨晴て入日の雲に虹ふけははたみさむしも谷の夕かせ

田家待秋

ひこほしもあはれとやみるみたやもり秋待ほとの同し心を

晩風如秋

山風にこのくれ竹のはかられてそゝや秋ともさはく成哉

荒和祓

うき事は水の聲にそ成ぬらん淸きなかれにいくしたつれは

山家六月祓

淵もせにかはる流れに御祓しつ憂身もかくてやましとそ思

山里はこよひすかぬく淺茅をも庭にかるこそたより也けれ

秋

立秋のこゝろを

さゝてふすねやの板戸も今宵社ひきたてつへき秋風はふけ

都には思ひなしにそおもふらん山さと寒しあきのはつかせ

いつしかも我とき衣ぬはぬまによ寒の風の吹そわりなき

哀さも身にそしみける獨ねのすかきのとこの秋のはつ風

荻の葉にけふ秋きぬとなのらせて竹のとよりそ風は入ける

秋來夜始涼

けふこそははつ秋風そ小夜衣ひきかけそむるはしめ也けれ

初秋猶對泉

涼しさはむすふ泉におほすれはねたくや思ふ秋の初風

七月五日近待七夕といふことを

彥星もいまふつかとや數ふらんあまのたまゆか獨ねぬよを

織女

天の河いつれのかたかふかゝらん逢嬉しさとあはぬ思ひと

七夕にあさひく糸のふししけみこれを逢よの契ともかな

たなはたは天の羽衣ひきかさねならへて玉の枕すゝしも

梶の葉にあまつ彥星思ふことかゝはかゝましあすの歎きを

織女のみけしのあやと見ゆる哉わき雲たてる星合の空

後朝

七夕の歸るあしたのうき雲やあかぬ思ひのけふりなるらん

いつよりも今朝露けきは七夕のをのかきぬ〳〵なれる泪か

秋のはしめにあまのゝやしろにまうてたまへりける

に月のあかくて風のはけしかりけれは

さもしるき月の光もあるものをなにとあらしの秋と告らん

これを人のかたりけるを聞てたてまつりける

行宴法師

雲はらふよはの嵐のあれはこそ秋行月の影も見ゆらめ

初聞鹿

今宵より秋の山里鹿なきぬ嬉しとやいはん淋しとやいはん

鹿聲告秋

我にしも秋とつけつるさをしかに返をこそいはまほしけれ

さをしかは風のけしきに心えて秋きぬと又人につくなり

題不知

さらすとてあと留むへき今宵かは何とすゝむる鹿のねそこは

鳴たひに鹿の聲こそ遠さかれのへのあなたに妻やまつらん

獨ぬるとこの山への棹鹿のしのひもあへぬ聲きこゆなり

露しみえ風吹のらのさむけきに聲もみやひくすかる鳴也

さらぬたに山路も見えぬ朝露にこゝろまとはす鹿の聲哉

夕霧にこやのたちとや見えさらん槇の戶近く鹿そ鳴なる

山里は鹿の鳴音に夢さめてあるしの袖も露けかりけり

のへかこふ霧の籬やあたならんあたらこ萩を鹿そしからむ

旅宿鹿

宮城のゝ小萩かはらにとまるよは鹿に宿かる心ちこそすれ

近聞鹿聲

此里に鹿の鳴音の近きかはをのか立とにそいてゐにけり

山邊聞鹿

峯になく聲ものきにそ聞ゆなるあなたへ鹿のおりぬ限は

夕秋思鹿

夕月夜ほのめく峯に鹿鳴はこのよをあらす思ひ立かな

雨夜聞鹿

もる山のさよの時雨に鳴鹿はこゝろの外の涙そふらん

夜長聞鹿

秋のよはかねより先に夢たえて幾度聞つ鹿のやこへを

月前聞鹿

遠かたにかたぬく鹿そさけふなるおなし心に月やみるらん

ふたかたに心をわけてあかす哉いさよふ月と鹿の鳴音と

月にはた鹿のよつまや契りけんかたふく儘に聲のうらむる

鹿聲久不聞

さをしかの妻もよはぬにしるき哉とこの山へに新枕せり

草花未遍

衣手の萩か花すり色薄しわくるしづえのさきしやらねは

萩

秋の軒をゆするふりたてわかゆけはころも懐かし萩か花摺

秋はきの上葉下葉の納しめり心くるしき花のかほかな

草花藏路

秋のゝは花のえことをよくほとにおひあひぬらん道の芝草

曉露點萩

なつかしき色はかりかは小萩原露もうは葉に有明の月

草露繁ゝ瓏

風渡る荻の上葉にをく露はこゑなき玉をなくる也けり

水邊萩

えにあらふ錦と見れは野分する磯邊の萩のなひく也けり

霧中野花

霧ふかみ朝たつ鹿の聲せすはいかてしらまし野への村萩

霧のまも荻の上風音たかししらぬはのへの萩の下露

秋野晩望

夕霧におはなか末に鳴もすの聲はかりしてのへはまかへり

野花尋人

小萩さく宮城の過てきつるかと袂の色にとはれぬるかな

女郎花

露にねて風にはすまふ女郎花なとひとつ野にかた思ひなる

おきふしに露そこほるゝ女郎花野風やさむき秋やかなしき

薄

いふこともなきをゆへに道すからしのゝを薄人まねくめり

しのすゝきまねく折しもとまりなは我心さし有とやは見ん

苅　萱（か脱歟）

したおれはをの姿そかる萱の野原の風にことつくる哉

今待たれ野へにとまりて苅萱の枕のあとのなをらさるらん

晩風在荻

夕風に荻の葉そよくこやのうらは芦間分行舟かとそおもふ

いそかれぬ獨ねとこに入やらて荻の上こす風をこそきけ

荻近簷

野へ近き荻のはむけはくらけれと月にかゑつる風哀なり

荻風似雨

むら時雨秋のまかきをわたるよは人にしらする荻のうは風

月

山里は枕の軒のかやまよりもりくる秋の夕つくよかな

山の端にさしてる月の影見れは向ひの岡にふれる白雪
こもりえのはつせの山に月さえて霜のそこより鐘ほのか也
隈もなく空晴ぬとも秋といへは雲まの月のもるもさやけし
むら雲の晴行ひまの月見れは鏡のはこをあくる也けり
老ぬれは物うきものを今宵こそむかし月みし心ちのみすれ
何にかもよさのうらはの月みけんすくもたく火の煙立けり
我宿の駒のあしおるたな橋をたとらすわたるよはの月哉
年をへて野中のし水ぬるけれとさえたる月の影そやとれる
なにはかた月の光におきつとり葦まのゝひこかすも見え皃
旅の空宿かす雲になかゐせてはやく朝たて有明の月
住の江に宿れる月の影を見てまつをかつらと思ひけるかな
すかはらや伏見の暮に月待とをはつせ山にあからめもせす
月よゝし賤のをた巻ひきのけてはいりの庭に隈なあらせそ
山の端に入ぬる後そ我心ほかの月見てかへりきにける
おしましよ山のあなたに待影を心せはしと月もこそ見れ
大井川はやせおちまふ水の面に流れもやらす澄る月哉
月影のいさよふ峰をまちかねて山叉山を越てこそ見れ
槇の戸を軒端の月にをし明てあたねの床にこよひ明しつ
蜑乙女月にをれもをかりにとや明石のとなみわけてたく覽
めもはるにいそさきいてゝみる月は花の湊の氷なりけり
くまもなきしかつの浦の夕なきに月あらふ也さゝ浪の聲
今宵こそ思ふことなく月はみれ雲ものこらすよもの山本
中〳〵に月にちかひて行雲はくまなきよりも嬉しかりけり
いかにして千種の露にやとるらん空行月はひとり澄るに
なかめして過にしかたを憶ふまに峰より峰の月もうつりぬ
月清みやすのうら船掉させは夕なみ千鳥立さはく也
さらぬたにうき雲かけぬ月影の猶かさこしの峰にかたふく
よもすから天てる月の影さえてねこし山こし風わたる也
月ゆへにむかしの人も眺めけん心はつかしさらしなのやま
ひると見て猶もあやしきみ空かな月に心は澄とこそきけ
村雲の絶間をわたる月みれはくまなき空もまたれさりけり
天の川せゝの岩間やしけからん流るゝ月のかたわれにける
かるかやのしけみか下に鳴虫はおほろ也とや月を見るらん
月清み幾秋風かはらふらんをはすて山のみねのうき雲
うき雲の波よせかくる天川光さしゆく月のみふねに
よもすから淸瀧川にすむ月はひれふる魚のかすを見よとや
かはかりの光はいまたみすとのみいはれのゝへに澄る月哉
秋のみね月おちかゝる曉に松かせさむみましら鳴也

八月十五夜

名に高き天津み空の月たにも入山のはゝえこそはなれね
ひきかふる今宵の月の光こそ秋のはしめにみし心ちすれ
いかなれは月すむ空のむかしより今宵は雲のたへま成らん

田家月

よもすからひた引ならす秋の田は驚くはかり月もすみけり
かた山のすそわのたゐのひたの音は淋しき月のつまと成皃
高ねより出る月にそむかへたる西の山田にさせる庵は

月照野花

くまもなく月すみ渡る秋の野は花の影こそくもり也けれ

題不知

花のえにのへの夕露すかるよりやとらん月の影そまたるゝ

月前草露

秋の野は草むらことに玉かさりますみの鏡みねにかけたり

月影のうらなくやどる上露をなと打はらふ荻のはそこは

曉月映露

いつくにも有明の月はかゝるかと露滋からぬ宿にとはゝや

題不知

水の面は心してすめ秋の月池のぬなはの影やつすめり

稻妻のてらす影たにさやけきにはやたち出ぬ秋のよの月

殘月照松嶺

白浪はこすとも見えて有明の月そかゝれるすゑの松やま

月照遠島

松しまやをしまか沖のはなれ島しまつたひ行秋のよの月

近對山月

月ゆへに峰にむかふる柴の戸は秋より後そさすへかりける

九月十三夜

いにしへもかゝりけれはや天の川月は今宵となに流れけん

みちもてゆくふたよの影をゝき乍我となをえて澄る月哉

詠めつるよころの影にみわすれてあかぬけしきに澄る月哉

木間昇月

をとは山木のまをのほる月影は折〳〵そすむ關のを川に

月前眺望

山の端をいつ共月のみえぬ哉めちにかゝれるくまし無れは

與月栖山家

芦のやのこやのすかきの隙をあらみ月諸共に澄そやさしき

隱倫見月

わらひとるおりには雲も厭はねと月にはれけりみ山への里

老後見月

おきなさひあらぬ人にもあへる哉かゝみに向ふよはの月影

夜靜月明

さよふけてをのか家々しつまりぬ月こそ獨いねかてにすれ

閑者月

庭の面に行かふ人もなき宿は影にくもらぬ月をこそみれ

月閑中友

問人におもひよそへて見る月のくもるは歸るこゝち社すれ

貧不飢月

板まより月には見えて月を見んむかしの儘の袖もはつかし

乘月歸家

槇の戸にをくりつけつる月影を山端まてはかはりにそ見る

簾舊漏月

月のもる宿の庇の玉たれはすそのはつれも嬉しかりけり

禁中月

さやかなる月の光を明ぬとてしめしやす覽衞士のたく火は

陰晴月不定

こゝははれかしこは曇る秋の空人めくるしく曇る月かな

山深月明

いまそみる谷よりおくの岩淵にすみける月の影のくまなさ

山家月明

山科やをかへのくるすゆきもみきかりにも月に何習へけん

月下聞法

宿あれて月の落たるこすの中に優しくならすつましらへ哉

池上秋月

心なく天のいはとのをし明て月すみはてぬこやの池水

月下問僧

月影はくまなきものを尋行人はいつくの雲にふすらん

棹舟見月
浪の上に映れる月をよきてこそ池のみ船はさすへかりけれ
月映瀧水
布引の瀧と聞しは雲ゐより月の光の落るなりけり
題知らず
鹽風はなるをの松におとつれてわたの入江にやとる月かけ
月夜越山
よもすから共に連ても行はかり月めくりあへ山のあなたに
寺閑月明
月ひとりすむ山寺にそみかくた誰に尋て宿をかるらん
雨後月明
雨はれて月の面は淸けれと猶かた空の雲は消あへす
月宵通社頭
終夜浪の白ゆふ手向しておまへのおきを過る月かけ
過やらてつもりの浦の月見れは住の江のかたに松風そ吹
曉望浦月
月影の二見の浦にかたふけはかゝみをあらふおきつ白波
月似玉與鏡
鏡かと二見のうらに見し月のもる木の下は玉にまかひぬ
月前孤舟
月淸み鹽干のかたのかせなきにこきはなれぬる天の友舟
題知らす
月きよみしかのから崎こく舟は氷に棹をさすかとそ見る
くまもなきあはちのみほの月影はたなゝしを舟浦つたひ行
月夜渡
てまもなくしまとのわたりみ棹とれ嵐の山に月も社いれ

月宵逢故人
むかし君なかめしよはの月よりも老ての秋は猶や淋しき
樵路曉月
松風の音も淋しき曉に月にうたひてすくる山ひと
見月思往事
なかむれはむかしも戀し我心かきなみたりそ秋のよの月
月光似昔
あをによしむかしあれにし都にもふりぬは月の光なりけれ
海邊鴈
玉章のことはゆるすもみゆる哉と渡る鴈の雲かくれして
關路鴈
あふ坂を朝たちゆけは諸共にとこよの雁も今そ鳴なる
題不知
露滋みあさふむ人もなき後はをそくをかやのおきなをる哉
海上秋泊
舟とむるたこの浦はの夕鹽にふしのみたけは霧こめてけり
霧
大井川となせも見えぬ朝霧にゐて日のなみの聲むせふ也
川霧に駒のあしみの音せすはすくともしらしうちの橋もり
ぬれ衣を牡鹿や妻にきせつらん隔つる霧のうしろめたさよ
山家霧
かすかなる住居も見えす霧こめて心にくきは秋の山さと
田家霧
朝霧も雲かと見えて小山田はねやに木葉の時雨もる也
今朝はたゝなるこもひかしいな雀立隔てたる霧にまかせて
霧隔山寺

朽たりし岡へのてらは霧こめて跡たに見えすなりにける哉

霧中遠帆

あはち潟かち音す也ちたの江の朝あけの霧にかたほ隠れて

林霧半收

秋霧のゝほりも果ぬ木ゝの色はひとのにたゝぬ錦なりけり

秋行霧深

畔つたふ小田の中道霧こめてはたこの駒もあしみたとれり

霧中旅店閑

秋霧にたつきもみえぬかりのやは往來の人の訪たにもなし

秋夕遠望

立こむる遠の夕霧むら消てゐつゝくさともちり／＼に見ゆ

槿　花

朝かほのかゝる籬のなよ竹はをのか花とや人にみすらん

擣　衣

夜もすから哀とそ聞山ひこの聲うちそふる賤のさ衣

月前擣衣

ころも打音をそなたに聞なして月見てそ行まきの島まて

擣衣天曙

明ぬるか夜すから千こゑ萬聲うつさ衣の音たゆむ也

秋思故郷

ふるさとにわかなれ衣かさぬらん秋風寒しひなのあらのも

題不知

日くるれは宿かるかやの露けさに袖もかはかぬたひ衣かな

旅行秋興

行末は霧の籬にかこはれてあせのよこ道いなは露けし

荻かはらをかやか野へを分行は鹿もうつらもをのか聲／＼

うつらなくの山の薄わけいてゝ下紅葉する谷にやとりぬ

近聞虫

ねやのうちのかへの中なる蛬ひとつ枕になきあかすかな

故郷虫聲

古郷は秋そかなしき櫻麻のをふのした草きり／＼す鳴

夜虫聲多

さよ更てこゝら鳴なりいそのかみふるからをのゝ鈴虫の聲

さよ更てこのもかのもに聲す也かやか松虫はきかはたをり

秋高野へまうて給ふにほしかはといふ所にてむしの
いたく鳴けれは

秋の夜は旅のねさめそ哀なる岡のかやねの虫のこゑ／＼

擣衣何方

風にうつ砧の音そ聞わかぬふけはまちかしやめははるけし

閑夜虫聲近

蛬よもきかとよりくゝりきてしつまるよひの夢やふる也

秋闌虫響少

秋ふかみあさちか露を蛬はなれもはてゝ鳴よはるなり

虫聲漸稀

をのつからしりへの岡の風のまに有か無かにきり／＼す鳴

菊花帯露

花の上は露もをかすとみゆる哉玉をいたゝくませの白菊

我宿のしめさす菊の露けきはあるしの袖をまねふ也けり

閑中菊

わけてとふ人なき宿のしら菊はしけみさ枝の露もこほれす

月前菊

白菊の下はにやとる月影はおれふす枝の花かとそみる

をく霜と見ゆるや月の照すらんうつろふ菊の色もかはらす
ひまもなく咲滿ぬれはやへか上にやへ重なれるませの白菊
ませの内に稀にひらくとみし菊のけさは萏の數そすくなき

折菊壽郷人

都人たをれるのみをみてこすは籬にとまる菊やうらみん

菊滿池塘

古池の水もあまらぬつゝみより菊はかりこそ咲こほれたれ

老菊戴霜

うつろへる色もみえねは今さらに霜にませゆふ宿の白菊
朝霜の置かへしたる菊なれと香るにしるしみまれみすまれ

紅　葉

初時雨ふるほともなくしもとゆふかつらき山は色付にけり
さま〳〵に心そとまるむら紅葉薄きもこきも下の青葉も
秋にあへぬ木のは耳かはくたらのゝ萩の古枝も下紅葉せり
柞はらやゝ初霜のをくまゝにかた山つはきみとりのこれり
はれくもる時雨の數をかそふれはやしほの紅葉しほ過ぬ也
紅葉する秋の梢はみわの山杉こそのこるみとり也けれ
うす霧のひとへたちても見ゆる哉紅葉かさねの衣手の森
よのほとに紅葉しにけり立田山みねのうす霧色〳〵に見ゆ
紅葉するやしほの岡の一入はけさのしくれや染わたすらん
もみち葉の色々をみなおりもちて手に社うつせ秋の山へを
山姫のあまつひれかも紅の末つむ花にそむるこすゑは

紅葉有淺深

色あさくはしの立枝のみゆるかなみな紅のみねのつゝきに

雨後紅葉

雨雲はなをはれぬ共紅葉する峯は入日のさすかとそ見る

紅葉勝花

おもへたゝ雲にまかひし花よりも錦とみゆる秋の木末を

羇中紅葉

紅葉するならをお花にかりませて軒ふきたるゝ旅のかり庵

古寺紅葉

はつせ山紅葉しぬれは鐘の音も紅になる心ちこそすれ

隔谷見紅葉

通ひ行谷の石橋ありといへとおらてむかひの紅葉をそ見る

隔河見紅葉

飛鳥川むかひの岸に紅葉してなゝせのよとの波そ色成
我宿はいさゝを川のはし紅葉こなたの岸のくひせともかな

山鹿與紅葉

さを鹿はまたふたけなる秋山にかはりはてたる菊の色哉

纔有落葉

大あらきの森の下風吹まゝに一葉つゝちるもとかしはかな

松間蔦紅

松の色は霜の後社あらはるれかゝれる蔦のなともみつらん

紅葉掩松

紅にみゆる梢もこからしの吹にはまつの聲そきこゆる

山家秋雨

ぬれぬとも槇の板戸もたてあへす野分にたくふ村時雨かな

山家秋意

月もらぬ谷のすきふの柴の戸を秋の嵐のとふそ嬉しき

題不知

山里はをのゝ草村風さえてくすのしたはむうつら鳴なり
賤の男かくろ木のこや竹すのこいなほみたれてかゝる頃哉

山里はそしろのかとた刈ほして垣根のあけひゝとりゐみ覧

　田家秋風

かり庵のいなはかうへのそて枕吹かへす風のよ寒なるかな

　題不知

風をいたみおろす枕のこも簾ひまよりぞもる宵のいなつま

昨日けふをくろのはたりこり初て秋田のほたち刈み刈すみ

庵さすをくろのひたはてもふれてあま泄水のひく音そする

　西七條にすみたまふころ山家秋暮といふ心を

秋の暮むしもうらむる山里にきくはかりこそ冬をいとはね

　九月盡

おいゝては明し乘るにいかなれは秋過る夜のみしかゝる覧

谷川をみねの木の葉にむめさせて過行秋の道つくる也

　人〻に百首のうたよませ給ひけるつゐてに秋のくるゝこゝろを

すきぬるか難面き秋の心かな戀しかるへき野へのけしきを

あすよりは秋の花てふ名をかへて冬のゝ草と枯やはつへき

　さかのをくらに住たまひけるころ

山里はみな冬かれて棹鹿の音にそわつかに秋はのこれる

冬

　初冬の心を

冬こもり宿はけさよりたてつめり峯のましはに霰ふるとて

山里は竹のすかきに風さえてねさめかちなる冬そきにける

冬くれはをちかた野へのならかしは朝ふく風の聲そ淋しき

　院の御修法してとはにおはしけるか十月はつかころにてらへかへりいり給ひけるに今は紅葉もちりぬらんとおほしけるにおもひのほかさかり也けれは

色〱にやとの梢のみゆるかなまた此里は秋やのこれる

　御かへし　　源　頼經

秋ははや過にしか共紅葉はのちらても君をまつとしらすや

　落　葉

山里はならのおち葉をふむ音にとひくる人そかねて聞ゆる

なこりなく紅葉散らしたつ田山ふもとの時雨紅にふる

峯わたる風なかりせはあはらやの上に木葉を誰かふかまし

　山家冬閑

冬こもるやとは木の葉にうつもれて只松風の音のみそする

　題不知

たとりたつ音はかりして山里はしめりそ渡るをのゝしの原

山里はきくそひさしき明くれの雲打しくれたとりたつ也

　落葉如雨

一葉つゝちるは降出る心ちして嵐に雨のこゑまさるなり

　雨後落葉

雲はれてもらぬはかりそ板ひさし木葉の音は猶しくる也

　水邊落葉

風吹は峯の紅葉は幾にほひ瀧のみなはの糸を染らん

紅葉はをひらのおろしの吹かせてしかのおほわた錦浮へり

谷川に木の葉つもれはきひの山秋は錦のおひをこそすれ

　落葉埋橋

紅葉はのつもるくもてのやつはしはやきれにをれる錦也覧

　落葉藏水

今朝みれは立田の川も埋れて木葉にたてるみをつくし哉

　池上落葉

池の面にあらふ紅葉の錦をは汀にたゝむこからしの風

苔庭落葉
庭の面は埋れぬともしらしかし苔より上にしける木葉を
樵路落葉
今さらに道を木葉にふみあけておのへの松の枝をろすめれ
無風落葉
こからしの駈ともみえて音羽山紅葉にせかる谷の小河は
落葉埋路
此頃は木の葉にあとをふみつけてもとの道より來人そなき
閑庭落葉
ふみたむる庭の木葉をかきつめて又すみけりと煙みせつる
朝落葉
ひとりみる庭の木葉を心なく朝きよめする山おろしの風
不慮有落葉
思はすに冬の梢に見ゆるかなほやかしたなる蔦のもみちは
古砌殘菊
昔みし籬はかりそあれにけるうつろふ菊の色はかはらて
池邊殘菊
紫のうつろふ色の影見れは松にもかけぬ池のふしなみ
月前殘菊
月はさし菊はまかきに霜かれてをの〳〵のこる冬の山さと
殘菊のこゝろを
雪の色をさきたてゝ咲花なれは冬まて菊はのこるなりけり
時雨
散つもるくち葉か上に時雨ふりうす雲かゝるしかの山里
はつしくれ梢そむらしかた岡のあしたのはらに雲かゝり行
眞葛はふそはのとこねの小やの上をぬらしもはてぬ山巡哉
僞にいかにもいはゝ成ぬへし時雨てはるゝそらのけしきは
木の葉散とはかり聞てやみなましもらて時雨の山廻りせは
さよ深きまきの板やのむら時雨ひとりきけとや淋しかる覽
さしもあらぬ時雨なれ共玉河はことにとりなすよはの音哉
海邊時雨
をしてるやしまきに波のたゝよへは聽てすしけく時雨降めり
旅宿時雨
時雨たにとまらさり覓旅ねするみつのはまやはまはら也とて
覊中時雨
猶も又時雨しぬへき日影には旅のころもをぬかてこそほせ
時雨のこゝろを
旅ねするかたをか山に雲かけてしくるゝ空に月もさやけし
冬月
しくれ行雲にはつれて照月はひとつ空にもおほえさりけり
冬枯の木のまもりくる影みれは霜さえにけり月のかつらも
古里はよもきかふるえしもかれて月はかり社澄もあらさね
朝ことに風の聲こそすゝるなれよをへて月の影しまされは
題不知
槇のはのとはすかたりも聞わかすゝとか「こ歟」竹垣今朝時雨きて
寒野月
冬のよのをかやか下の寒けきに月もきゝすもいかて澄らん
山家冬月
霜さえてむねあらはなる柴のやは月を衣にかさねてそふす
寒夜獨看月
獨ぬるふすのゝにいたとをし明て霜に冱たる月を社見れ

旅泊冬月
むら雲に月のやとれる程もなくなみの枕に時雨すくなり
寒山月
落つもるならのおち葉に霜さえて峰の木枯月をふくなり
凌空望月
更にけりあられふるよの村雲のはれま〳〵の月を見る間に
寒庭月
霜氷いやかたまれる庭の面にさえたる月をやとしてそみる
梢透月光冱
木葉なき梢をわたる木枯は雲をそ拂ふ有明の月
蘆間冬月
伊勢の海鹽みちくれは濱荻のひまにたゝよふ冬のよの月
霰
風さえて村雲さはく夕されは氷の上にあられたはしる
さゝふきのまやの軒にはたるひして雲のそはえに霰ふる也
遠山初看雪
此冬は霰はかりに日數へて初雪といはん程そすきぬる
題不知
今こそはをちのたか山み雪ふれ里にしくるゝひとつ雲より
もつめに住給ひける頃はつ雪を御らんして
晴のほるあさゐの雲のしたとに初雪ふゝくひへの高山
初雪未深
初雪のひとへ降にも跡たえてとひくる人もなきすみか哉
雪中尋山家
うす雲のかけてはれぬる初雪に野中の薄ふしあへぬかな
淋しさをかねて山ちにさきたてゝ霜の下なるすみかへそ行
山寺雪深
けさ見れはあかゐも雪に埋れて雪をくみつゝかへるなり蹺
雪朝客來
初雪のあしたに君かきませるはあるしをとしも問こさる覽
雪中惜別
降雪にひれふる袖もみえしかしあまさかり行君かふなては
松上雪
梢にそ雪はつもれる住の江の松のしつえは波にゆられて
故鄉雪
雪ふれはあれにし里のやへ櫻かすかさならぬ花をこそ見れ
古さとはかみさひにけり淺茅原しらゆふかくるけさの初雪
山近對雪
宿近く妻木こるをのつえを見て山路の雪のふかさをそしる
山雪連雲
としへたる岩か上にやつもるらん雲ふれきたる峰の白雪
谷雪與氷
谷川の氷におほふ岩ね松影さかさまにつもるしら雪
雪不擇處
降雪にみやもわらやも跡たえてひとつ心に淋しかるらん
雪を名所によせて人々にうたよませさせたまふとて
雪ふれとかはらさりける梢哉花ゆへにこし櫻井のさと
夜雪似月
雪ふれはこやのよとこのひま白み板まの月の洩かとそ見る
橋上雪
雪をふみ駒のあしみの深けれは橋も音せすせたのなかみち
江邊雪

難波江の芦への雪にしらたつのその毛衣やひとへそふらん

雪中見旅人

むら〳〵にするとそみゆる旅衣雪ふりかゝる笹のこちかへ

雪埋遠樹

その原や伏屋も雪に埋もれて有とはみえしはゝきゝもなし

社頭雪

よしの川吹こす風のさえしよりかねのみたけは雪そ積れる

雪埋寒草

降積る末はの雪やをもるらんかたなひき也まのゝかやはら

冬のなる萩のふるえを今更にしかより後は雪そしからむ

雪のこゝろを

さほ山に柳のころもかけて見ゆこけの緑に雪をかさねて

山里はまたすみなれて埋もれぬ雪はえふらんともしらねは

むねよはみふゝく嵐しの音絶ぬつもらははらへよはの白雪

桂木や高ねの雪は深けれとかへるまゆみの聲はたまらす

とはれぬも羨もなき宿なあれや跡つきあへす雪のふれゝは

吹まよふ風にまかひて雪ふれは天のみ空にいさこみなきる

雪の中に見ゆる煙は大はらやせれうの里のわたり成らん

今朝見れはきその伏やの竹はしらたはむ計に雪ふりにけり

雪つもるこさかの道を踏わけて誰きてとはん深き山里

山里やかやまの苫のふかけれはうら緑なる軒のしら雪

うらかれしくるすの小野も雪ふれは花咲にけりかやか下折

海邊雪

すまの蜑の鹽焼きぬはなれにしをけさ白妙に雪そかへたる

むら〳〵に消るゑしまの雪みれはまた墨かきの果ぬ也けり

題不知

なには行みふねの棹の雫こそ蘆のほすへの露をゝきけれ

しほれあしの下葉とちませ氷して物淋しかるなには江の里

浦近聞千鳥

淋しかるすまの關やの旅ね哉うら波かけて千鳥鳴なり

深夜千鳥

鹽風に千鳥しはなくすまの關月おちかゝる沖つ浪まに

終夜聞千鳥

よひのまはひかたに鳴しとも千鳥曉しほに浦つたふなり

遙聞千鳥

遠さかり浦つたひ行さよ千鳥思つけなる聲に鳴なり

題不知

千鳥なくふけゐの浦のかち枕又すまならぬ關も有けり

川前千鳥

みをき行よふねの棹やとゝむらん月のてしほに千鳥鳴也

氷

住吉のきしの松風わたる也細江の汀つらゝゐぬらん

池水のつらゝのとちし其日よりあしの葉音の波によすなる

大原やをかはの氷ひまわれて炭つみ車わたちいるなり

終夜いふき颪につらゝゐて沖にうつなりしかのうらなみ

鳴のふすを田のかり田は氷してしみとけやらぬあせの細道

古池水

鳴つたふ池の汀はふりにしを氷をあゆむ道もありけり

たちろかぬ氷のいたをふきそへて浪のふりたるこやの池水

氷閉橋

冬川の氷にたてるはし柱かたふきなからかためつるかな

河氷凝舟

さゝ波やしかの浦かせさゆるよは氷に澄るあまのつりふね

池上氷

氷してうきねの床はたちにけり外の池とてひまもあらしを

水鳥

水鳥のあしにひかるゝねぬなはゝひともとまりぬくゝり也覧

谷川のふしきにねふるをし鴨はつらゝのとこや寒けかる覧

水鳥のうきねの夜とこさえ〳〵て下折の芦の籬寒しも

池にひつ松のはひ枝の下くゝりつれてそわたる鴨のむら鳥

さゆるよは芦間をあさき水鳥のかつくしら玉うす氷せり

芦間水鳥

霜枯のあしのもとつ葉落はてゝつたふかもめの隱家そなき

月前水鳥

月影の晴くもる夜はをし鳥の上毛の霜ををけはきえ行

鳰鳥のかつくにわれぬ薄氷有明の月のやとる也けり

瀧邊水鳥

せかれつゝよとみかゝれる岩蔭にあちむらつたふ瀧つ山川

寒沼水鳥

むれてゐる鳥のさはきにぬま氷われもわれぬも打あはす也

雪朝水鳥

今朝見れはをしの上毛そ斑なる芦間を分て雪やもりこし

寒夜水鳥

うきねして夢みるほとやなかる覧雪打拂ふよはのをしとり

古池水鳥

淺ちふにもとの汀は成はてゝそこにそつたふ池のむら鳥

網代

早川にいそきしからむあしろ木を上こす浪や打なをすらん

あしろ木に紅葉の錦をりかけてはつるゝ糸とみゆる白波

あしろ打やなせの波の聲せすは月を氷とみてややまゝし

鷹

あはせつる手なれの鷹のそり行は鈴の音さへ空にこそなれ

雨後鷹狩

晴やらぬあまゝに出るみ狩野は雲のあなたに鈴そきこゆる

埋火のこゝろを

埋火に松葉かきつめ吹つけてあかしそかぬる冬の山里

連峯炭竈

此頃は峯つゝきやく炭かまにふしこそもとの煙なりけれ

依煙知炭竈

今もかも山のかひより煙たつくちあけてけりまきの炭かま

雪のあしたさしきあけて御らんしけるにすみうりの
すきけれは

雪はかりひこの内には見え乍ら炭やめすとて猶ありくめり

雪中寒梅

雪つもる垣ねに梅や咲ぬらんみのしろ衣かにそかほれる

海路歳暮

とし月は涙の枕にくれにけりおきつ島山雪ふかく見ゆ

歳暮のこゝろを

年の暮と山の里はいそかれすすそのゝ小松かとにたてれは

哀にもことしはけふになりにけり何をいそきて過る月日そ

戀

人々に十五首のうたよませたまふとて初戀のこゝろ
を

祝ひつゝけふ書そむる言の葉にあやしやいかにもし習する

よそにのみ戀てふとのみなれさほけふは我手に取にける哉

忍　戀

さりけなき景色の森とおもへとも心のうちはたけくまの松

忍ひねの思はすかほやしるか覽君かけしきのたゝならぬ哉

思ふとくみてしれかし水莖にかきなかしてはもりも社すれ

戀のこゝろを

ね覺する時の哀とおもはすはしはしまとろむ程もあらまし

逢みんとはかなく書し一筆に身のいたつらになりける物を

うき人の心ともかなかつらきの神のたのめしよるの契を

あくかるゝ戀の道社はるかなれ逢より外のとまりなけれは

つらさをは忘れもしなん戀しきを思すつへき心ちこそせね

我獨り戀しといまはいひやらしとはぬはさても思しれかし

□まきてかたしく儘にさよ衣あなたの袖はなるゝよそなき

憂を猶戀る我身のつれなさは人のつらさにおとりやはする

僞のたひにはらへるよとこそ中〳〵塵はつもらさりけれ

同夜にすまはよそにも見るへきに暫もえ社ありふましけれ

君と我思ひはふかき契りかなさのみつらさをこふる心よ

戀しなん後はかならす思ひ出よさすかに絕てみえし物をと

君にわれ深き心はみえなましとらふすのへもこゝに有せは

逢みてのあらましとを詠めして思つゝけぬよはゝあらしな

つれなくは人のとかとも思はまし言ぬそ戀のかきり成ける

うらかへし思は嬉し戀しきもつらきも人のゆかりならすや

よそなから心をとゝむ中〳〵におもひ絕ぬといひも社すれ

なそもかくつらきはさらにつらからて思はぬ人を思ふ心そ

世中にあはぬためしの名取川きえわたりなんとそかなしき

逢みても思ふはかりはいはれぬを色に出ぬる袖そ嬉しき

いかなれは戀しと斯はかゝるれと思けつにはけたれさる覽

こゝろから心のくねの苦しさにいはねはいはて戀わたる哉

我戀はことたか磯の浪なれやをのれ苦しくわきかへりつゝ

限あれは阿鼻の焰の中にても我戀はかりこかるらんやも

心からほの見し人をしるへにてけふは戀路に惑ひぬるかな

あやむしろ君を戀つゝ獨ねてをになるまてに歲そへにける

戀しさはなき所なく成にけり心の中につゝみしものを

あはてのみ年をふるやの板庇茂る忍ふそいふせかりける

逢さりし昔は人そつらかりし又もこぬには身をそ怨むる

手枕にいれしかたみと思はすは涙にくたす袖はおしまし

夜かれしを悔しく何と恨みけん絕ぬほとりと契らましかは

後　朝

明ぬなりはやかへりねといひなからなそや心を引とゝむ覽

歸りつる其曉にまたねして夢にそ見つるあかぬなこりを

夏初戀

ぬきかふる蟬のは衣薄けれとおもふ心をえこそもらさね

冬夜戀

夜もすから袖の淚のこほるかな人の心のとけぬかきりは

精進中戀

しめあけてはやもあひこは神よ神わかねきとの印と思はん

問巫女戀

いとをしとことふる聲のとよさに嬉しくも有すゝのみこ哉

寄舟戀

我戀はしける芦まのくち舟の人にしられて年そへにける

隔河戀

今宵又のせて返すなむかへ舟あふくま川のなもそけかるる

尋失戀

君ませとやる小車はむなしくていかなることによひねぬ覽

依雨返車戀

雨降とてつけ事のつらけれは袖をぬらしてかへるをくるま

約雨霽戀

我は只菅のをかさも打きてんなとや雨間をまてとしもいふ

變約戀

立忍ひまてとたのめしなかやりとかけてもしける空頼み哉

契不過戀

まとかと待にかはきし我袖のもとの涙に猶ぬるゝかな

見獨寢戀

獨のみ我手枕もね覺するひかけのまみのねたくも有かな

戀不擇人

たま牀の花の莚もさもあらはあれ眞菰か內のつゝれ戀しも

互尋不過戀

みるめをはよもに尋てかたかひのあはて浦々に幾よねぬ覽

依戀怨隣

芦かきのまちかきになとゝはさ覽忍戀をもへたてやはせし

適會空曙

小車のひとつ床には臥なからさしのけられて明ぬこのよは

老後戀

哀にも思ひたつ哉木のちつかまつへき我よはひかは

閑人戀

戀せすは山里すみの獨ゐて淋しきのみやなけきならまし

忘憂戀

戀すれは筆を差置ひまそなきかくてふるよをかくへき物を

雨方送書といふことをわらはにかはりてよみ給ける

ほのみしとなれにし人の戀しきとこすみ薄墨書そやりつる

いとをしくし給わらはのさとにいてゝ久しくまいらさりけれはつかはしける

中絕てとしはへにしを夏引のいとかくはかり思はすもかな

人のもとなるわらはのもとへ

奥山のいはかきふちのかくろへてふかき心をしる人そなき

月前戀といふを

ねやの戸をさゝて幾よに成ぬらん君戀しさに月を詠て

夜もすから月に慰む我戀はいらは心のやみいかにせん

片　思

人しれす磯間になみはよせくれとうしろむきなる岩ね松哉

思へ共心もくまぬいかたしのなにゝひかれてすきわたる覽

題不知

戀しさも數ならぬみのつらさをもふたつなけきを荷頃哉

恨

ほのみせし姿計をたつのこかこひのなくさに打しのへとや

いもせ山あらし吹よの月影にことのはとにうらみつるかな

旅　戀

とへかしな露けきよはの草枕つらき人すら戀しき物を

のしまさきちへの白浪こき出ぬいさゝめと社いもか待らめ

みぬ人の其俤はうつゝにて旅ねは夢のこゝちこそすれ

都いてし其曉は數ならす旅のね覺をおもひをこせよ

夢に見て草の枕におとろけはいつら都の人とねたらん

雜

祝のこゝろを

いつとなくちとせを近き松か枝に吹はる風ものとけかり凫
行末を思ひしやれはわたつ海の遙にそくるあまのたくなは
ことはりや皇御國の治まれは天のかこ山日影のとけし
まとかとけふより後をかそへみんいはねの松のちよの春秋
君かよはいつと渚に浪かけてさはく眞砂の數もしられす
ちよふへき位の山の風なれは草木もなひく物にそ有ける
ありそ海の水はたゆとも廣澤の流はいとゝすみやまさらん

羇旅

あつまちや都のふみはをそけれと心計は行かよひけり
都にはふたりなかめし山端の月をみてこそ思ひいつらめ
こく程はさてなくさみぬなこの浦の磯のうきねそ哀なける
露しけき軒に今宵そあかせとや賤のあるしの宿もかさねは
ねやのうへのあはぬ板間もとかならて月に嬉しき旅の庵哉

脂そく一寸のほとに羇旅のうた人〻によませさせたまふとて

うしつらし都はみしと思ひしは別ぬほとのこゝろなりけり

山路曉行

いくむまや越てきぬらんよをこめて鈴の音する山をすく也

つの國のみのをにこもりたまへりけるかそれより高野へまいりたまへりけるあか月有明の月を御覽して

このまもる有明の月のをくらすはひとりや山の峯を出まし

御をくりに天王寺へまいりたりけるものとものゝ中に賢知にたまひける

あくかれし都の人をむつましくみるにつけてもぬるゝ袖哉

高野よりいてたまひけるに雨降日かはよりのほりたまふに入道宰相も御供に侍りけるかたてまつりける

上の雨下なる水に責られてつゝめるはすのみをいかにせん　觀蓮

御かへし

うへしたの雨と水とはさもあらはあれ蓮開けんみをそ羨む

おなし人かうやへかへりのほるにはるなんまいるへしと申とて

とに角に老ぬる身こそ悲しけれ思へと又もいひもやられて

御かへし

月よめは幾程もなし老ぬともいつへき春をまたさらめやは

世にしつみたる事をなけかしくおぼえけるころたてまつりける　前大納言實定

よの中の□けてのよをもはなれぬは山の此方にすめは也凫

御　返

心をはうきよの外にさきたてゝ人めは山のこなたにそすめ

釋　教

尋れは我も佛もひとつみのまとひさとりのなのみ也けり
此よ迄吹つらしけん風ならはみのりの花はちりこさらまし
高瀬舟くるしき海のくらきにものりしる人はまとはさり凫

隨喜功德品の聞一偈隨喜のこゝろを

みのり聞こけのむしろの露けきは思あまりの涙なりけり

衆罪如霜惠日能消除

はかなくて朝夕草にをく霜のてらす日影に消さらめやは

法花經あまた供養し給ふときゝて入道宰相三部と申たるに一部をたまはせたりけれは　觀蓮

この里はみつの車と思ひしをいつれのしなに我もれにけん

御かへし

始にはみつの車と聞しかとまとはひとつのりとしらすや
みのをにこもりたまへる比たよりにつけてたてまつ
りける　源　頼　経
露わけてあさつむ花に墨染の袖の雫を思ひこそやれ
御かへし
わけてつむしきみの上の露よりも都思ふそ袖はぬれける
法橋慶信
かきこもるみのをの瀧の白糸をくる〳〵君そ千世迄もへん
御かへし
命をはすてしみなれは千とせとも思そよらぬ瀧のしら糸
かうやにすみ給ふ比月あかきよ季正入道かもとへつ
かはしける
うらやまし心の月の雲はれてこよひの空のけしきともかな
御かへし　沙彌西善
ひとたひも思すまさはこよひにも心の月の何かをとらん
九月はかりに源俊重かもとより秋風身にしむよしな
と申たりけれは
かくはかり峯のけしきのあしけれはさこそ都も夜寒なら（る脫歟）め
御かへし　源　俊　重
さこそはと思ひもすてぬ嬉しさを哀とみませ峯のひしりも
崇徳院よりかうやへをとつれ申させ給へりける御か
へりことに山路の雪に埋もれてなと申給へりけれは
崇　徳　院
ふる雪は谷のとほそを埋ともみよの佛のひやてらすらん
御かへし
てらすなるみよの佛のあさ日には降雪よりもつみやきゆ覽

阿彌陀講のついでに十樂のこゝろを人〻に孔子くは
りによませ給ついでに聖衆來迎樂をとり給て
露のみを苔のむしろに置すてゝかたふけよする蓮にそのる
道心追歲深といふこゝろを
古はあくかれいてゝすてしみを今は佛とかへしてそしる
心月輪
よとゝもに心のうちにすむ月を峯よりにしに何おしむらん
無　常
哀にもひとりとゝまる人そなきをくれ先立事はあれとも
かくれなは宿をは月に契をかん今そすむへき心と思へは
なからへぬうき世を思ふ曉はまくらの下も露けかりけり
高野御室かくれたまへる比月のにしになるまてなか
め給て
山端にかたふく月そおしからぬ情なきよは思ひしりにき
おなしころよさむなりけるあしたむかしの御ことな
とを思ひ出したてまつるよしを申て　源　俊　重
冬さむみ山の煙し絕ぬれはすみおほ原の里そ戀しき
御かへし
すみかまの煙はかりはたてぬ共君をおもひはきえしとそ思
春に成て南院にまいりたるに昔うへをき給へる梅の
盛に咲たりけれはつけて奉りける　源　俊　重
俤もたちそふらめや花の色に君かまそての匂かとみよ
御かへし
なつかしくかほるにしるし梅花君かまそての匂なるへし
れいならすをはする御とふらひにまいりあへりけれ
はさうしをへたてたる處におの〳〵よひいれ給てな

くさみぬへきわさなんありなんやとの給はせけれは
あさくらをうたひたりけるかいみしくおほえたまひ
とくこゝちもをこたり給にけれは

あさくらを聞に心もすゝしくてかみのめくみに逢こよひ哉　前大納言實定

御かへし

あさくらやかみの惠みのかひありて返〳〵も君はちよませ　前左衛門督公光

畏くもなのりして晃朝倉やきのまろとのゝ近きあたりに　左大弁實綱

源はいつれも同しのりなれは神のめくみにあふそことはり

人のもとへきぬつかはすとて

厚衾なこやか下のおいねすみもとのかはきぬひきや捨らん　法橋慶雅

御かへし

かみふすまひきそ捨つる老鼠ちよ迄きぬをかふるへけれは

公通卿人ゝいさなひてまいりけるにをの〳〵哥なと
よみてかへりけるつきの日きのふの御うたはいみし
かりし物かなとかの卿のもとよりほめ申たりける御
かへりことに

人しれす谷かくれせることの葉をかたりちらすな木枯の風

御かへし　大納言公通

ちらさてはえそあるましき木枯にかゝるをのは谷隱れせり

入道宰相のもとより桃をまいらすとて

あひ難き三千よの桃のけふよりは幾度みよにならんとす覽

御かへしにうちのくこになんたてまつりぬるとて

我君の爲そと高くさゝけをくみちよの桃のはつほと思へは

忝誇二仙洞之恩喚一添二老屈之壽算一爰故鄕情忽動新詠
屢呈而已　觀蓮

住なれし昔戀しき都へにいとゝ心のとまるたひかな

入道左京兆暫辭二南山之幽閑一之邃崛一適訪二□郡寂寥
之禪室一會面移レ時言讀消レ日歸駕之後幸投二佳什詠
篇一之處殊增二感情一不レ堪二握翫一愈以答和矣

我たにもあくかれぬへき都へにとまらし物を君かこゝろは

やよひの頃源賴經かさくらのかりきぬしほれてえな
んさしいてぬと申たりけれは

ことはりや春の久しくなりぬれは櫻のあをはさそ凋るらん

二條院のくらゐにおはしましける時たてまつり給け
る

いそのかみ古きつかいを忘すはあはれ亂れん數にもれしな

谷かくれ朽て年ふる埋れ木のめくみめくます君かまにまに

さりともはおもふ計をしるへにて心をそやる雲のうへまて

御かへし　二條院

かけてたに思もよらす白浪のなれし昔をわするへしとは

賴まるゝ身そと報せてさりともと思へときくは嬉しかり晃

いつくともわかぬ惠の心にもとに思としらせてしかな

おなし御とき内裏にてかひあはせあるへしときこえ
けるにある人のうたを申けれは

もゝしきの玉の臺の簾貝あじやかうらに波やかけゝん

雲の上にちりそまかへる春風の吹あけの濱の梅の花かひ

崇德院の法金剛院におはしましけるにあめかためを
たてまつり給て

急きつる心のほとをなにつけて君か爲とそゆふへかりける

御かへし　崇德院

いそき出て我ためにとし聞つれはあまき心に受そ納むる

徳大寺左大臣のもとへさま〳〵ののりをつかはした
りけれは御かへりことに

さま〳〵のみ法を見るそ頼もしき我身の罪は消やしぬらん

御かへし

罪はかりきゆとなとしも思けんみのりは不死の藥とをしれ

入道宰相いまた中將ときこえける時此よしをつたへ
きゝて　　教長卿

さま〳〵の法を廣むる洽さは高きいやしきわかしとそ思

御かへし

み法をはいかゝたやすくちらすへき求むる人にひろむ計そ

漁舟何去

いさり舟かゝりのかけの消ゆくはいつれの方に島かくる覽

蘆隔漁火

天つ星まかふ波間のいさり火はみなとの蘆に雲かくれしぬ

船裏曉風冷

曉のしほ風ふけはあさころもゆめひとつなりよさのうら舟

海路日徐久

またしらぬとまりのかすそ積りぬるわか敷島の方は何れそ

漁火遠去

あまを舟いさりたく火のいつく迄八重の鹽海こきはなる覽

夜泊波聲近

いそにては哀にきゝしおきつ波枕の下はおとろかれけり

側聞曉鐘

ひはらもる有明の月に聞ゆなり尾上の寺の鐘のひと聲

夕到古寺

山くれて雲のうちよりうつ鐘の聲を尋て今そきにける

湖邊群鶴

から崎に舟やよす覽白鶴のむれてしかつのうらわたりする

夜聞水聲

さよ更て絶ぬときけは又くなりものさひしさの水の音かな

よもすから軒に滴る水の音は難波のとにきゝそなさまし

閑居唯谷水

谷ふかみ人めまれなる柴の戸を猶さそふなる水の音哉

岩ま行谷のほそ川音つれてまときなしかの庵淋しも

雲隔山家

山人にをのかすみかを尋れは雲をさしてそ程をゝしふる

しかの里あさゐる雲の深けれは尾上の木立みえみ見えすみ

松遶家

山里は思はぬ松にかこはれてかこひし柴のかきはくちにき

松閑中友

むかひゐて幾とせ過ぬ此宿にあるしもひとりまつも一もと

松近簷

苟且の夕つめ渡す柴の戸は松をたよりにねりそをそゆふ

山家曉情

何となく心細きは明ほのに横雲わたるしかのやまさと

長河鷺

大ゐ川みかさ增れはをちのせに驚たちさはく簗くつれして

河やしろ篠に白ゆふかけてみゆをちのいてゐにきゐる群鷺

松風似雨

をと計り雨ふる磯の松風にいかてやあまのしほたれにけん

山家鶴馴

谷ふかみうつす栖は白たつのとなりをしむるところ也けり
天晴有鶴聲
あさみとり空うらゝに聲す也とはには殘るたつや鳴らん
竹風覺夢
風わたる籬の竹のそよ〳〵とみえての夢をあはすなるかな
曉聞竹風
鶯のよふによこゐもきくへきに竹やすらかに風わたるなり
曉風入簾
いたしとみもとにうちこすあし簾有明かたの風そ吹入るゝ
繞竹到山家
まはりたつ程はあれ共山里はうらあらは也そとのたかはら
寒夜曉情
とこさえて獨ぬるよは常よりもみゝにたつ也鴫の羽かき
題不知
難波江の蘆のほすゑのなみよるはしたはむたつのは風也皃
たかねより遙にみれは大ゐ川となせはをちの梢なりけり
住吉のかみあひおひの松なれはへにける歲も千世と限らす
神のますおまへにしける玉さゝのなひくそをみの衣也ける
天王寺にこもり玉へりけるに住の江の方へおはして
松風のをとにたくひて住吉のをきかけさかりからろをす也
市河といふ處にすみ給ふころ山家待客といふとを
忘るなとみせしらせてし槇の戶を辿るか君か今にきまさぬ
山さきの圓明寺にて晴後遠水といふ心を
朝日はれあるかなきかのいな舟のみゆるや淀のわたり成覽
遠望在川
このまより淀のわたりを見渡せは汀に細くなかすやり水

嵯峨のをくらといふところにすみたまふころ山家曉
望といふとを
哀也軒にほのめく夕月夜かけさす人もなき柴の戶を
にし山のもつめにこもりゐ玉へるころみむろちかき
あたりにかりのよをかさねてをりゐけるかをとせさ
りけるよよみ給ける
數ならぬうきみの程やしりぬ覽たのむの鴈もよかれしに皃
おなしころ人のもとへ
山里にすめは住とや思ふ覽かくてふるみはあるかあるかは
述懷のこゝろを
世中を思ひさためし共日より我みは空にゆきなしらくも
物名むらさきのけさ
いかなれはゆるきのもりの紫のけさしもをにたちさはく覽
きりとうたい
秋くれはさやけき月とたつ霧と哥いつれをか先によむへき
右出觀集雖多不審依無類本不能挍合

群書類從卷第二百六十五

和歌部百二十　家集三十八

北院御室御集　守覺法親王

春

立春

年なみの立かはりぬるしるしにや氷し水も下むせふなり

鶯

奥山の谷のふるすのうくひすもたかきにうつる時にあひ㒵

梅喚鶯

梅か香をゝのかはふきにゝほはせて友さそふなり鶯のこゑ

霞

春きても雪きえやらぬ吉野山かすみにもまた埋れにけり

夕かすみそことも見えす立こめて風の音にそきくの濱松

山霞

春かすみしるへかほにて朝たては中々まかふ山路なりけり

野望霞

朝日さす野　　おりゐる雲雀

海路霞

おきかけて遠さかり行聲すなりかすみのうちにうたふ舟人

羇旅霞

八重まては今朝そ霞のこめてけるさゝかき薄き鄙のかり庵

梅

散かたになるともおらん梅かえの花の盛はやつれもそする

梅かえの花にこつたふ鶯のこゑさへにほふ春の明ほの

なにとなく世中すさましくおほゆるころ南面のむめの咲そめてさかぬかたも有をみて

梅の花咲をくれたる枝みれはわか身のみやは春によそなる

春雪埋梅

をのか色は雪よりそこに埋もれて匂ふに梅はあらはれに㒵

殘雪未盡

根にかへる花かと見れはまたさかぬ櫻かしたの雪のむら消

櫻

花とみるよそめはかりのしら雲もはらふはつらき春の山風

吉野山うき世のほかとのかれきて中〳〵花に心とめつる

瀧のうへのみふねの山の花さかり峯にもおにもかゝる白浪

かへるさの末ほと遠き山路にもいかゝ見すてむ花の夕はへ

山花未綻

かねてより猶あらましにいとふかな花待峯をすくる春かせ

野櫻

いはしろの松の常盤にことよせて野中の櫻ちらすもあら南

樹陰翫花

ともすれは木の下露に袖ぬらしなつさふ花よ哀とやみる

法金剛院の八重さくらのもとに人々日暮しあそひかへりなむとて花歌よみしに

新續 わするなよ同し木陰に尋ねきて馴ぬるけふの花のまとゐを（にイ）

海邊花

さくら咲春やなかゐの浦ならぬ花にとまらぬ舟人もなし

顯昭かもとより八重櫻にそへて

新拾 君かへむ千歳の春を（秋集）かさぬへきためしとみゆる八重櫻かな

返し

同 千世經へき例ときけは八重櫻かさねていとゝ仇に（あらずや有哉）思はし

落花

花ゆへに世の優さをしりぬれは散らすも風のなさけ也覽

みれはおし花ちる峯の夕霞立へたつるもこゝろ有けり

羇中落花

山さくら雪とふりつゝ跡たえて家路を駒にまかせてそゆく

やよひついたちころに東山を見ありきしつゐてに山家春興といふ事をよめる

山里の柳さくらも折をえて都のみやは錦なりける

夏

更衣を述懐によせてよめる

數ならて年へぬる身はそれなから猶人なみに衣かへしつ

朝見卯花

今そみるうの花山のはなさかり明ても月の影殘りけり

海邊五月雨

五月雨の日かすつもりの浦なれや下枝もひちぬ住の江の松

有哥。續古今慈鎭和尚哥に。今朝みれは雪もつもりの浦なれやはま松かえの浪につくまて。相似歟。

深夜五月雨

月も今はかたふくほとに成ぬらむはれすは晴す五月雨の空

郭公

玉 過ぬとも聲のにほひは猶とめよほとゝきすなく宿のたち花

軒ちかく一こゑはしてほとゝきすをちの木梢になこり鳴也

夜更て郭公のなくをきゝて

ふけてしも山ほとゝきす來鳴也よひにはまたぬ人も聞とや

杜郭公

うれしさは袖にあまりぬほとゝきす鳴かさねたる衣手の杜

暮天郭公

時鳥なのるにしるしこれそこのたれその杜のありす成ける

郭公聲稀

ほとゝきす猶はつこゑをしのふ山夕ゐる雲のそこに鳴なり

尋ねみてうらみははてむ時鳥いつくもかくや夜かれしつ覽

草上螢

今こそやほたるともしれ散てなをかへりやはをく草の上露

螢照海濱

伊勢の海の清きはまへにてる影を玉とひろへはほたる也覽

螢照船

葉するよりこほるゝ露の心地して蘆分船にほたる飛かふ

納涼

しはつ山ならの葉かけの夕すゝみおりにもあらぬ秋風そ吹

杜邊納涼

涼しさはひとへに秋の心地してゆふ風立ぬ衣手のもり

秋

初秋

千 浅ちふの露けくも有か秋きぬと目には汇かにみえける物を

初秋納涼

風さはく竹はかけ――おもひたかへし秋はきにけり

七夕

秋とのみなにかまたまし彦星の逢瀬をやすのわたり成せは

たなはたの秋さり衣一夜のみかさぬる山となとかなりけん

小夜更てしのふけしきのしるきかな霧立かくす星合のそら

萩

新後 やつるとも一枝おらん小萩はら花ふみしたく鹿はなしやは

分ゆかはたかたもとにかうつる覧我しめし野の萩か花すり

野へならはしからむしかにかこたまし我と散ぬる庭の秋萩

野花露

秋のゝの千くさの色にうつろへは花そかへりて露を染ける

霧

をとしるし鹿の通ひちこれなれや霧のゐなたにこのは踏也

旅霧といふ題を人にかはりて

宮古鳥ありとみえはやことゝはむすみた河原は霧こめて覓

海邊霧

浦つたふさほのうたのみ聞ゆなりあまの友船霧かくれつゝ

霧籠曉天

あけぬとやくらき物から知ぬらむ霧間をわくる鴫の羽かき

虫

こからしに虫の音たくふ秋の野は露も泪もとまらさりけり

月

おほわたの浦半の風に霧晴て千船の數もみゆる月かけ

はる〳〵と千里のほかへ行月はをのか光やしるへなるらむ

峯にても雲のちりゐる月影を岩間にあらふ谷のした水

風わたるこすゐに雨の音はして月のみそもる松かうら島

筑波ねの茂きこまより月もれはこのもかのもの雪の斑きえ

駒とめてみれは心もうつりけりひのくま河にすめる月かけ

八月十五夜月の歌あまたよみし中に

逢坂のせき路はるかにひく駒の跡なき雪や夜半の月かけ

高野にこもりたりけるころ山居月の心を

世をいとふみ山かくれのすまゐには月さへ雲の座なかり覓

野宿見月

秋の野にやとかる月をはな　あたりの露をはらふ袖そふ

月澄海邊

しほたるゝ伊勢おのあまの　さまにもおはすうつる月影

旅月

舟むやふをしまか磯の梶まくら月さへやとるとまりなり覓

對月忘愁

うきなからやとらむ月を待ほとにいつれは乾く袖の露かな

曉更月

おしみかねひれふるまてそしたはしき松浦の山の有明の月

あたにみし露は草葉に曉明の月そ中〳〵影はきえゆく

田家曉月

新後拾 明ぬとは宵より見つる月なれと今そ門田に鴫もたつなり〔なく集〕

ある聖人來りて夜もすから法文なといひてやう〳〵明かたになる程にさてしもあらしとて人〻月の歌よみしに

なにとこのにしへは月のしるへせて事そともなく我誘ふ覽

擣衣

これはさはおきゐの里か秋の夜の露まとろまて衣うつなり

紅葉

染殘す木〻の紅葉もあらしとてしくれは山をめくるなり覽

もみち葉のこかれわたるや秋をやくけしきの杜の梢成らむ

紅葉日淺

いつしかは色に出しとしのふ山下葉より社もみちそめけれ

水邊菊

白妙の色をうはひて咲にけりいつぬき川の岸のむら菊

野外秋盡

つねよりも哀はふかし秋くれて人もこすのゝ葛のうら風

九月盡

おしみかねはかなく暮て行秋のなこりにとまる袖の露かな

九月盡日會あるへかりしにはゝかる事出きてとまり
にしかは顯昭か許へ

諸共に惜むも秋はとまらねとさてはなくさむ方やあらまし

返し

行秋もおしむ人ゆへとまる（やイ）かと君計にそけふはまかする

冬

初冬

冬きぬと水のこゝろやしりぬらん谷風さむみつらゝゐに覽

山中落葉

さそひ行嵐を道のしるへにて峯うつりする木〻のもみちは

水上落葉

龍田川瀬おちの浪も色つきて木のはの下に聲むせふなり

時雨

時雨つゝ過ぬるかたは雲消てひとつけしきにみえぬ空かな

行路時雨

遙々といくのゝ道の村しくれ駒とめつへき木の下もかな

雪

はらふともそのかひあらし吳竹の夜のまの雪に折ふしに覽

めもはるにみるそ淋き菅原やふしみの田井の雪の明ほの

葉かへせぬ濱松かえも花さきてえもいはしろにふれる雪哉

雪のうちにさゝめの衣うちはらひ野はらしのはら分行や誰

なに事を月に見わかむかさこしの雲はれわたる峯のしら雪

野雪

まねかねと猶過まうき景色かなのへの尾花の雪のしたおれ

遍昭寺にて池邊雪と云事を

浪（千）かけはみきはの雪も消なまし心ありても氷る池かな

山路雪

ふみわけむかたこそしらねみ山木の雪の下行稀のかよひ路

雪埋社樹

しらゆふを空より誰かたむくらむ今朝はつ雪のふるの神杉

曉天雪

はれやらぬ横雲まよひ風さえて山のはしろきゆきの明ほの

千鳥

はしたてやよさの浦松ふく風に聲をたくへて千鳥と渡る（はせイ）

群てゐるをのか羽風に浪たてゝこゝろとさはくうら千鳥哉

河上千鳥

夜を寒みさほ風をくるたよりには千鳥の聲も瀬々わたる也

水鳥

はねかはす友ねのをしは打とけて氷そむすふこやの池水

朝見水鳥

[新勅]あさ氷とけなむ後と契りをきて空にわかるゝ池の水とり

歳暮

行年の別れ計をなけきにて身にはつもらぬならひ成せは

[續千]ひと方に思ひそはてぬ春をまつ心におしき年のくれかな

歳暮に雪のふる朝敦經朝臣か許より

雪の内に暮ぬる年そ惜まるゝ我身もいたくふりぬと思へは

返し

年暮る雪のうちにはふりぬともあけなは春にあはし物かは

雑

述懐

思ひてのあら[はイ]は心もとまりなむ厭ひ易きはうき世成けり

[續後]何事を待ともなしになからへて惜からぬ身の年をふるかな

社頭述懐

我からや神の惠もへたつらむうき身のほとをみつの玉垣

曉の枕になにとなく過にしかたのはかなさなとおも
ひつゝけて

何事も夢になり行いにしへのおもかけのこる明くれの空

閑居

うらさひて葛はひかゝる槇の屋に窓うちすさふ村雨のこゑ

閑居水聲

岩そゝく水よりほかに音せねは心ひとつをすましてそきく

山家晩思

葎はふしつかふせ屋の夕煙りはれぬ思ひによそへてそ見る

旅

故郷をいとゝよそにそへたてつるこゑこし山のやへの白雲

いなしきや鄙のかりねはめもあはて都を夢の内にたにみぬ

ふみなれぬ岩根をつたふ通路にしはしたちのけ峯のしら雲

山路旅行

よそにては通ひちなしとみし峯を雲ふみわけて山そ越ゆく

旅宿松風

ふみゆけは濱松かえに風こえてなさけありその磯枕かな

旅宿言志

よしさらは磯の蓬屋に旅寢せむ涙かけすとてぬれぬ袖かは

和泉國新家といふ所にて鹽湯あみしに源中納言雅賴
卿のもとより

限あれは身社數にもいらさらめ心のゆくをいとはさらなむ

返し

言の葉のたよりのかせにちるときそ通ふ心も色にみえける

しほ湯あみはてゝ宮古へかへるとてよめる

日數へし鄙の住ゐをおもひいては戀しかるへき旅の空かな

住吉にて月を見てよめる

月のみそもり明しつるもしほ草しきつの浦の松のしたふし

高野へまいる道にて

[千]跡たえて世をのかるへき道なれや岩さへ苔のころもきて凫[にイ]

香隆寺の邊なる所へ行たりしにあるしいつみにから
舟をうけてさま／＼の物ともつみたるを見てよめる

唐船につめるたからやあまるらむ今はの身をも玉そ散ける

無　常

はかなしやいかなる野邊の蓬生につゐには誰も枕さためむ

つねならぬ此世のはてそ哀なる思へは誰もよもきふのちり

新續 なきあとに影をたにやは留むへき歸らぬ水の泡ときえなは

　曉はかなき事とも思ひつゝけて

明方のねさめのとこはうつゝにて浮世を夢と思ひしりぬる

　秋の彼岸に故宮のため佛事せむとて泉殿へまいりし
　に長尾の松原のまへをすくとて

有し世の松のみとりのけしきにてうき身は賴む陰なかり鳬

　御前にまいりつきて

はかなくて消にし跡を來てみれは露所せき庭のむら草

　嵯峨の邊にとき／＼あそひなとせし所にあるしうせ
　て後事ともひきかへてあらぬさま成しかは

昔みし住家ともなくあれはてゝおもひしよりも淋しかり鳬

　天王寺宮六條の御八講にまいらむとてちかきわたり
　をかりてやとり給けるにやまひおもくなりてもとの
　すみかへもかへらてかくれ給にし後門この柳のあま
　たある前をすくとてよめる

一すちに物そかなしきかりにすむあるし絕にし青柳の糸

　おさなくよりおふしたてたる童の日來おもくわつら
　ひしか今はかきりとみなしてしかはさてしも有へき
　にもあらてなるたきと云所にうつりわたりにきなく
　さめかたきやとのさひしさに常にきゝなれたる岩根
　にそゝく瀧のをとまても折からにや身にしむ心地す
　れは

せきあえぬ泪はたくひ有鳬とおりしもむせふ瀧つせのこゑ

　はかなくなりて後雪のふるあした

をくれゐて獨なかむる庭の雪に心まてこそうつもれにけり

　ありし世にかきをきたりし文ともなとこそはかなき
　かたみともなるへけれと思ひてとりよせて見れは横
　笛の譜神樂催馬樂風俗の譜とも又聲明法則まてもい
　たらぬくまなくくらからすしたゝめをきたるさま末
　の世のたから此道のかゝみかなとためしなく見ゆる
　につけておしさもひとかたならて

苔の下に笛の音まても埋もれて只名計そ世にとまりける

袖の上になにのしつくの殘るらんたえにし物をさゝ浪の聲

わか駒を何かはやめんまつち山まつと逢へき道もかよはし

おほとりのはかひの霜は消果てゝ名殘の露もとまらさり鳬

もろ共にとなへ馴にし法の聲そのふし／＼をいつか忘れむ

　詩歌の藻の殘りたるをみるにつけても

なきをさてかたみにとまる藻汐草浦さひて社波はかけゝれ

　經かくとて人のもとへつかはしたる文ともをとりあ
　つめし中にいつそや病のをやみたりしたえまをやみ
　はてたるとやおもひけむそのよし人につけたる文の
　ありしをみるにも常ならぬ世のさためなさも今さら
　におもひしられしかは

迷ふへき闇をはしらて儚くも霧のたえまと思ひけるかな

　法事の日むかしふきし笛を誦經にすとて

ふき馴し玉の横笛ぬしなくてさもあらぬかねの音そ悲しき

遍昭集

春

古 花の色は霞にこめてみえすともかをたにぬすめ春の山かせ

西寺の柳を

同 あさみとり糸よりかけて白露を玉にもぬける春のやなきか

二月はかりみちをまかるとて

後 おりつれはたふさにけかるたてなからみよの佛に花奉つる

やまとのふる山をまかるとて

同 いそのかみふるの山への櫻花うへけむ時をしる人そなき

雲林院のみこひえの舍利會にのほりてかへり給ひけるに

古 山かせに櫻ふきまきみたれなむ花のまきれに君とまるへく

春花山に法皇のみゆきありしとくかへらせ給なんとせし時

拾 まてと云はいともかしこし花の山暫しと鳴む鳥の音もかな

おなし山に人の入てゆふかたまかりかへりなんとせしかは

古 夕暮のまかきは山も見えなゝむよるは越しとやとり取へく

たいしらす

同 今こむといひて別し朝よりおもひくらしのねをのみそなく

うちわたりに侍し時人にこむとたのめて夜ふくる程にうしみつとそうするをきく

拾 人こゝろうしみついまはたのましよ

といひ侍しかは

同 夢にみゆやとねそすきにける

五節のころまひゝめを見侍て

古 天つ風雲のかよひち吹とめよをとめの姿しはし見るへく

なにくれといひありき侍しほとにつかうまつりしふかくさのみかとかくれおはしましてかはらむよをみむもたへかたくかなしくら人頭少將なといひてよるひるなれつかうまつりしなこりなからむ世にもましらしとてにはかに家の人〻にもしらせてひえにのほりてかしらおろし侍しにもさすかにおやなとのをは心にやかゝりけむ

後 たらちねはかゝれとてしもむは玉の我黑髮を撫すや有けむ

はしめて山ふみ侍て

後 今更に我は歸らしたきみつゝよへときかすとはゝ答へよ

ふかくさの山におさめたてまつりしを思ひ參らせん心のほとはおもひやるへし

古僧都勝延 うつせみはからをみつゝも慰さめつ煙りたにたて深草の山

ゆふくれにくものいとはかなけにすかき侍るをみてつねよりもあはれにて

新古 さゝかにの空にすかくもおなしことまたき宿にも幾夜かへん

世のはかなさいとゝ思ひしられて侍しかは

同 すゑの露もとのしつくや世中のをくれさきたつためし成覽

なと思ひつゝけてまかりありきしほとにとしもかへ

りてもろともに見し殿上人もあるはかうふりえあるはつかさ給はりなとしてかはらにいてゝ御ふくぬく所にあやしのほうししてつかはしゝ

古 みな人は花の衣になりにけり苔のたもとよかはきたにせね

かくていつこともなくありき侍てはつせのみてらにさふらひつるほとにかたはらなる女の寺の僧をよひよせていふやうとしころの人なうなりたるをいかにしてもある物ならはいま一たひあひみせ給へ身をもなけしにもしたらはみちをもなし給へたゝともかくも此人のありさまをゆめにもうつゝにも見せしらせ給へとておとこの具をおひたちまて誦行にせさすとてえもいひやらすなくをはしめはなに人ならむとおもふほとにわかうへにきゝなしてちかくよりてなをきけはめのうへなりけり子ともゝそひていみしう泣くいとかなしうてなそやはしりもいてなましとちたひおもへともいみしうかへされてよもすからなきあかしたるところはみのなともくれなゐになんしみたりけるさてまたよにありともきこえぬを小野のこまちこもれりけるかはたらに經よむたれならむとてつれな人して見せけれはみのひとつきるほうしのさすかにあてやかなるなむすみのかたにゐて侍といひけれはみゝをたてゝきくにいとたうとくあはれなりたゝ人にはあらす少將のたいとくにやあらむとおもひていかゝいふとこのみてらになん侍いとさむきを御こゑきこえ侍れはいとたのもしくなんみそひとつかし給へ

後 いはの上にたひねをすれはいと寒し苔の衣を我にかさなん

といへるかへりことはかりを

同 山ふしの苔の衣は只ひとへかさねはうとしいさふたりねむ

といへるたゝ少將なりけりとおもひてたゝにもかたらひしなかなれは物いはんと思ひて訪ねいきたりけれとふと失せにけりときこしめして五條のきさきの宮より内舍人を御つかひにて野山をたつねさせ給けりからくしてわりなくかくれたるところにゆくりなういりにけれはえかくれあへて逢ひぬ宮のおほせことになむみかとおはしまさぬにむつましくおほしめしゝ人をたに御かた見にと思へきをかくよにうせられたうひにたれはいとなんかなしきなとか山はやしにいるともこゝにたにせうそこを云はさるましきみさと在所にもをとせられさらむなれはなきてわふなるいかなるところにてかくものせらるとなん侍しかはこゝかしこわりなくたつねはへりてかしこくまいりたるといへはおほせことかしこまりてなんみかとかくれさせ給てのち世にふへき心ちし侍さりしかはかゝる山のすゐにこもり侍てしなむをまち侍にまたなんあやしくめくらひ侍にいとかしこくとはせ給へることわらはへのはへるところも心にはさらにわすれ侍らすとて

古 かきりなき雲井のよそに成ぬとも人を心にをくらさらめや

とな〔ん脱歟〕申つるとけいし給へといひける入道の顔姿いとなんかなしかりけるそのほとにもあらすなりてたゝみのをのみなむきたりける少將なりし時きよ

けなりしを思ひいてゝいとかなしかりけるかたとき人のあるへき所ならねはかへりまいりてことのよしかくなむとけいせさすれは宮かしこくしほたれさせ給て御返つかはすに人ゝもみなせうそこつけてやり給けれとかくれにけれはえたつねあはすなりにけれと僧正まてなりて後のことにや仁和のみかとのまたみこにおはしましゝ時ふるのたき御覽せんとておはしましけるみちに遍昭はゝの家侍りけるに庭を秋野につくりていとおかしう御物かたりのついてによみたてまつりし

同 里はあれて人はふりにし宿なれや庭も籬も秋の野となる

おなしみかとの御をはの八十賀にしろかねをつゑにつくりてたてまつり給ひし時このをはにかはりて

同 千早ふる神やきりけむつくからに千年の坂も越ぬへらなり

たいしらす

万代 諸人のそこら祈りし印あらはやそちうき身に傳へさらめや

さかに侍し時ほうしの房のまへにせんさいの侍けるを女とものたちとまりて見侍しかは

拾 こゝにしも何にほふらん女郎花人の物いひさかにくき世に

さう／＼しう侍しかはむまにのりて物にまかりしみちに女郎花の見えしをゝよひて折しほとにむまよりおちてふしなから

古 名にめてゝおれるはかりそ女郎花我おちにきと人に語るな

同よみ人しらず 花とみて折んとすれは女郎花うたゝ有さまのなに社有けれ

同 秋の野になまめきたてる女郎花あなと／＼し（かしかまし）花も一とき

ならへまかるみちにあれたる家に女のことひき侍しをきゝ侍ていひいれてし

同 わひ人の住へき宿とみるなへに歎きくはゝるとの音そする

拾 あき山の嵐のこゑをきく時は木のはならねと物そかなしき

のこりのもみちを

同 からにしき枝に一むら殘れるは秋のかたみをたゝぬなり鳧

雲林院の木かけにたゝすみありきて

古 わひ人のわきて立よる木のもとはたのむ蔭なく紅葉ちり鳧

くたにをたいにて

同 散ぬれは後はあくたになる花の思ひしらすもまとふ蝶かな

はもしをかみにてるもしをはてにてなかめをかく

同 花の中めにあくやとてわけゆけは心そともに散ぬへらなる

しかよりかへり侍し人花山に入てふちのはな見侍しかは

同 よそにみて歸らん人に藤の花はひまつはれよ枝はおるとも

はちすに露のをきたるを

同 はちす葉のにこりにしまぬ心もてなとかは露を玉と欺く

同 我やとは道みえぬまてあれにけり情なき人を待とせしまに

同 世を厭ひこのもとそに立よりてうつふしそめの麻のけさ也

源賢法眼集

小山田の水のこほりのうちとけて今朝は蛙もゆるに鳴なり
春日野のゝへの霞に立ましりしるもしらぬも若菜つむらし
みなかみの岩間の水とけぬらむゐせきの清水こゑまさる也
　梅のさきたるかきねをゆきすくとて
ゆきすりに梅かかきねに立寄てそらたき物を身にしたる哉
去年といひ今年といへと我は只きのふけふとも思ほゆる哉
　正月六日夜
夜もあけはあしたの原に立出て雪のきえまに若なつみてん
いつのまにわき葉さしけん今朝も又雪降つめるのへの若に
さもあらはあれ人はみす共花の木は風隠れにそうふ(へかりける)
春くれは木のもとゝの櫻花はなのふちともみえ渡る哉
櫻花みきはしらゝに散つもりあまもひろはぬ貝かとそ見る
むらさきのむらこの糸を染かけて風に波よる岸の藤なみ
　やよひつこもりの日ゐせく所にて
逝春のゐせきにとまる物ならは先おりたちて我そせかまし
山路にて初音はきゝつ時鳥わかふる里にはやくなれなん
　郭公はしめて程に京なる人のもとに
鳴出る山時鳥人ならはよきをつてのたよりならまし
　二月十五夜に
さ夜中のたき木の煙立そひてはやしのかすみひまなかり覧
　郭公をまちて
一聲にあけぬるものをほとゝきすさよ更るまて何またす覽
あさましくみしかき夜かな時鳥二こゑとたにえやは鳴ける
さらてたに伏かとすれは明る夜を何をあかすと叩く水鷄そ

いかはかり歎をつめる身なれはかよをへてもゆる螢成らむ
我宿におほしたてたる花なれとふたはの心またしらぬかな
　七月七日
たよせにやけふはかさまし七夕の空に棚引くさゝかにの糸
河風や身にさむからんさ夜中にねくらさためぬ千鳥鳴なり
　わつらふ人のをこたりたるに
山のはにいりなんとせし月影をあはれ有明とみるそ嬉しき
　わらはのほうしになる夜
ふりかけしねくたれ髮をかき探り人達へたる心ちもやせん
　京にのほるとてあまの川といふところにて
をとにのみきゝ渡りにし天のかは旅の空にてけふみつる哉
名にしおはゝ仇なやたゝん女郎花咲亂れたるのへに積りて
年をへてみゝなれにたる山ふしも夢さめぬへき鹿の聲かな
み山には嵐吹けりたきつせの水せくはかり紅葉つもれる
　とし老ぬることをなけきて
年月の過にしかをた尋ぬれは我身につもる物にさりける
たむくとも手向の神やうけさらん紅葉のにしき(本ノマヽ)
みなそこにうつれる秋の山蔭はかゝみのはこの錦とそみる
　よる紅葉おしみて
やすきいもねられさり覧紅葉散夜半の嵐のうしろめたさに
　九月はつる日
秋はたゝけふはかりそとなかむれは夕暮にさへ成にける哉
いかてかは老せぬものといひをきし霜いたゝける白菊の花
をし鳥のはねも氷にとちてけり霜うちはらふ音たにもせす
みこもりていてむよもなき沼水のいや氷ゆく冬そかなしき
紅葉ゝをわか心とは散すともよその嵐にまかせてはみし

としころもろともにあるわらはの京にのほるに
何をかもなくさめにせん冬山のふりつむ雪のとくる待間に
うつろふにふかさまされる菊花たれ秋はつるいろといひ劔
すみよしにて
すみよしの天くたりけむ其神のあはれ相生の松をしそ思
音たえていかにとたにもいはぬまの水を深くも頼みける哉
我かとのほかなる車めくらさん法しらさらむ人のさとまて
雪　春野にふた葉したはのわかなつむらん
法華經とくところにて
むすほゝる蓮の糸をとかれすは葉末のいかて亂れさらまし
さいしやうらうといふまいを
露の身は草葉にのみか老ぬれはつえにもかゝる物にさり鳧
御狩野に朝たつきしのほろ〳〵と鳴つゝそふる身を恨つゝ
すみすます人知らめや程遠み鳥のかけたにみえぬ山みつ
京にありしおり人のうみたりし子をもりぬとて人に
とらせたりしかはやりし
おもひきや我しめゆひし撫子を人のまかきの花とみんとは
よるよふこ鳥をきゝて
跡たえて人もかよはぬ山里のなによもすから呼子鳥そも
山邊の露をみて
葉をしけみ山邊にかゝる露の身をゝき所なき世にもふる哉
かたらふ人のひさしくをとつれぬに
さゝれ石の上行水のあさましくさら〳〵さらにとはぬ君哉
右源賢法眼者。義祖滿仲朝臣愚息樹下集作者也。取レ家者
凡卑於レ道者雖二頗不一レ堪。申二出禁裏御本一。令二書寫一之畢。
然而不審少々在レ之間。重可レ勘也。　御判（常德院殿）

夢想國師御詠草

甲州河浦と云所に山こもりしておはしましける庵の
庭の雪むら消て人のふみたるに似たりけるを御覽し
て
（風雅雜上）我庵をとふとしもなき春の來て庭にあとある雪のむら消（はなしに集）
相州三浦に舶船庵と云を結ひてすみたまひける頃よ
み給ける
ひく鹽のうらとをさかるをとはしてひかたもみえす立霞哉
鎌倉亞相（尊氏）并武衛直義朝臣臨川寺のまへに亭のあ
りけるにて法談のゝち嵐の山の花を見て當座の人々
歌よみけるに
誰もみな春はむれつゝあそへとも心のはなをみる人そなき
散花を梢のよそに吹たてゝあらしそしはし枝となりぬる
なをもまたあまた櫻をうへはやと花みるたひにせはき庭哉
みるほとは世のうきことも忘られてかくれかとなる山櫻哉
さくとみるまよひより社散花を風のとかとも思ひなれぬれ
いまみるはこそ別にし花やらん咲て又ちるゆへそしられぬ
征夷將軍尊氏西芳寺の花の下にて法談の後人々哥よ
みける時
心ある人のとひくるけふのみそあたら櫻のとかをわするゝ
花のさかりに西芳寺に御幸なるへしときこえけるに
うちつゝき御さし合有てのひける程に花の散けるを
み給ひて
猶も又千とせの春のあれはとや御幸もまたて花の散らむ

武衞將軍禪門惠源花のころ西芳寺に來臨のとき人〻歎よみしに

なからへて世に住かひも有けりと花みる春に思ひしらるゝ

（新千雜上）ちれはとて花はなけきの色もなし我ためにうき春の山かせ

いきて猶ことしもみるになれ〳〵て又こん春を花に待かな

數ならぬ身をはあるしとおもはてや心のまゝに花そ散ゆく

征夷將軍同春來臨のとき

山陰にさく花までも此春は世にのとかなる色そみえける

この庭の花みるたひにうへをきし昔の人のなさけをそしる

咲花は今もむかしのかたなるに我身はかりそ老かはりぬる

年たけて後庭の花をみたまひて

（新拾遺雜上）七十の後の春まてなからへてこゝろにまたぬ花をみるかな

西芳精舍に御幸なりて兩株の佳花歷覽ありける翌日に奉られける　竹林院內大臣（于時大納言）

めつらしき君か御幸を松かせにちらぬ櫻の色を見しかな

御返し

花ゆへの御幸にあへる老か身に千とせの春をなをも待かな

やよひの末にかゝりて花の咲けるとしよみたまひける

はなも又春の名殘をしたふとやことし彌生のすゑに咲らん

花散すきて後西芳寺に將軍おはしたりしに

さかりをはみる人おほし散花の跡をとふこそなさけ也けれ

又庭の花をみ給て

同しくは風にしられぬよしもかな我とともとなる隱家の花

左武衞將軍禪閤（直義）相公羽林（義詮）同道して來臨法談の後於二庭前之花下一人〻哥よみけるついでに

治まれる世ともしらてや此春も花にあらしのうきをみす閑

行春のとまりをそことしるやらん花をさそひて過る山かせ

これや又春のかたみとなりなまし心にちらぬ花のおもかけ

又もこん春をたのまぬ老か身を花もあはれと思はさらめや

ゆく末の春をも人はたのむらん花のわかれは老そかなしき

此年の九月晦日に入滅したまひけり。

征夷將軍（于時亞相）幷典廐（義詮）西芳寺に來臨法談之後庭前兩株之佳花賞翫之次に人〻うたよみけるに

いつも見はかくめつらしきことはあらし散しも花の情也宪

いさしらす庭の梢やかけならん池の底にもはなそ咲ぬる

吹風のえたをならさぬ春なれはおさまれる世と花も知らん

春の夜といふとを

分出るひまもなきまてかすむよはおほろそ月の姿なりける

山居郭公といふ題にて

鳴出し軒はの山のほとゝきす里よりかへる程そまたるゝ

彈正親王光臨の時題をさくりて人〻歌よみける次に

夕暮は何いそきけん待出て後もほとなきみしかよの月

武衞來臨之時夏月といふ事を

月をみる心になかき夜はあらし更行うさは夏のとかゝは

納　涼

暮ぬよりゆふへの色はさき立て木かけ涼しき谷川の水

題不知

山あひの木のまはしらぬ短夜にな猶明のこす谷陰の庵

當時侍者にておはしましける比圓覺寺を出ておくの方の巡禮し給ひてうちのくさといふ山中に庵むすひ

て初てうつり居たまひける夜月くまなきを見給ひて

のかれきて今みる時はかはりけり思ひやれかし深山への月

二階堂出羽守道蘊亭にて中納言爲相卿曉月房なと參會法談の後人々哥よみけるに迷情之中假有生滅と云題にて

夜の程もいくたひ出て入ぬらん雲間つたひに出る月かけ

風雅釋敎
いつるとも入とも月を思はねは心にかゝる山のはもなし

今はゝや心にかゝる雲もなしのかれきてみる深山への月

いつまてと霜枯を待淺茅生によはらぬ虫の音さへはかなし

葛はうらみ尾花はまねく夕くれに心つよくも過る秋かせ

瑞泉院の一覽亭にて雪のふりける日

まへも又かさなる山のいほりにて梢につゝく庭のしら雪

雪中に草木國土悉皆成佛の文を思出給て

わきて此花さく木をとうへけるは雪みん時のこゝろなり兒

初雪の日將軍雪を踏分て來臨し給ひしかは

新拾遺雜上
とふ人のなさけの深き程まてはつもりもやらぬ庭の白雪

たはむほとしはしは枝につもりつゝ二度にふる松のしら雪

天龍寺の方丈の集瑞軒より雪のふりけるとき嵐の山をみ給ひて

雪ふりて花かとみゆる嵐山松とさくらそさすかゝはれる

いつくにもこゝろかなふ山あらは隱居にせむとおもひならひけるころ

世をいとふ我あらましの行すゑにいかなる山のかねて待覽

佛身無爲にして諸趣に墮すといふ心を

新後拾遺雜下
忘れては世をすてかほに思哉のかれすとても數ならぬみを

濃州虎溪といふ所に住給ひける頃參學の人々とふらひけるをいとひたまひて

世のうさにかへたる山の淋さをとはぬそ人の情なりける

また鎌倉山に人の住居たる庵に一夜とまり給ひけるに軒の松風夜もすから吹けれは

我さきにすみけん人のさひしさを身に聞そふる軒の松かせ

相模國にそこくらといふ溫泉に下り給ひけるに其山の奧の人里もつゝかぬ谷の底に山賤の庵のありけるをみ給ひておなしく世をすてゝ社とよめる古歌をおもひ出て又返して思へは世を捨たる人はいかにも世を捨かほなるけかれもあり此山賤は中〳〵この理にもかなへる心地してよみ給ひける

世中をいとふとはなき住居にてなか〳〵すこき山賤の庵

相州三浦の横須賀といふ所にいり海にのそみて泊船庵とて住給ひける頃中納言爲相卿とふらひ來られたりけるを舟にてをくりいたしける時によみたまひける

かりにすむ庵尋ねてとふ人をあるしかほにて又をくりぬる

又三浦の庵を捨て總州へおはしましける時其庵の檀那三浦安藝前司貞連もとへつかはされける

うかれ出ることを恨と思ふなよありとても又有はてんかは

濃州淸水といふ所に庵むすひてすみたまひけるをすてゝ出給ふとて

風雅雜中
幾度かかくすみはてゝ（すてゝ）出ぬらん（つらん集）さためなき世に結ふかり庵

右武衞將軍西芳精舍に來臨法談のついてに人々哥よみけるついてに

をのつからとひくる人のある時も淋しさゝそふ山かけの庵

花室といふ尼寺の長老我身解によそへてよみてたて
まつりける

遠近の海と山とはへたつれとおなし空なる月を社みれ

御返し

所からかはるけしきのある物をおなし空なる月とみるかな

總州の退耕庵にすみ給ひける時或人來て此住ゐのめ
つらしさに心のとまるよしを歌によみたりし返事

めつらしく住なす山の庵にも心とむれはうき世とそなる

擧足下（不イ）足皆是道場といふ心を

風雅釋教 故郷とさたむるかたのなき時はいつくに行も家ちなりけり

題不知

世にすむと思ふ心を捨ぬれは山ならねとも身はかくれけり

さとりとて常にはかはる思ひこそ迷ひの中の迷ひなりけれ

惜め共終にはてある仇し身をかねて捨るそかしこかりける

我のみとかしこ顔なる僞さよ僞かりせはかしこからまし

捨るとて人を恨むる世はあらしなにゝさはりてうきを侘覽

吹たひにはやめつらしき心地してきゝふるされぬ軒の松風

甲州ふえふき河の水上に住給ひけるころ

流れては里へも出る山川に世をいとふ身のかけはうつさし

世尊不說之說迦葉不聞之聞といふ心を

新拾釋教 樣々にとけともとかぬ言のはをきかすして聞人そ少なき

成佛なしといへる心を

むすひしにとくるすかたはかはれ共氷の外に水はあらめや

無輪廻中妄見輪廻といふ心を

山をこえ海をわたるとたとりつる夢路は閨のうちに有㒵

彈正親王西芳寺におはして法談の後歌よみたまひけ
るついてに

さすか又人のかすなる身となりて老にはもれぬ年そ積れる

思ひなす心からこそ身のうさを世の咎とのみかこちける哉

釋教

しるへとて深きしをりを賴む社まことの道のさはり成けれ

無常の哥をすゝめける時

あたなから心にのこる僞そけふりとならぬすかたなりける

後醍醐院御時金剛山といふ所にて合戰ありけるに公
家武家の人〻おほく命をおとしたるよし聞えける頃
よみ給ひける

徒に名にかへてたに捨る身を法の爲にはなとおしむらん

俳諧

いもの葉にをく白露のたまらぬはこれやすいきの淚なる覽

月影にまかひあらそふ人あらはさたの外成身をいかにせん

花梨のなりたりけるか春のくれまて庭に殘りたりけ
る枝を折て將軍へ奉りける時

さくら散て花なしと社思ひしに猶この枝に春はありのみ

有馬の温泉に浴したまひける時其山の麓に堂のあり
けるか舊損して雨もたまらすもりけるを御覽して

寺ふりて雨のもりやと成にけり佛のあたをいまやふせかむ

土岐伯耆前司入道存敎よみてたてまつりける十五首
の中に

折にふれ時にしたかふことはりをそむかぬ道やまと成らん

返し

ことはりをそむきそむかぬ二道はいつれもおなし迷なり㒵

夢の世と思ふも今の迷ひかなもとのうつゝのなしと聞には

夢のうちに夢と思ふも夢なれはゆめをまよひといふも夢也
花の色月のひかりをあはれともみる心にはいたつきもなし
さかぬ花いてぬ月そとみる時はこゝろにかゝる春秋もなし
いつくより生れくるともなき物をかへるへき身となに歎覽
こし方も行末もなきなか空にうかれても又さてやはつへき
幻に暫しかたちをうくならは何と定てとかといふへき
幻にしはしかたちをうけゝると思ふもけにはとかと知すや
いとはしなもとより空に澄月はしはしへたてゝ雲隱るとも
新後拾遺釋教
雲よりも高き所に出てみよしはしも月にへたて（やはある集）ありやと
今こゝに向ふ山路のほかならて尋ぬるかたを迷ひとやせん
めにかけてむかふ山路のおくに社人にしられぬ里は有けれ
心をも身をもたのます今はたゝあるに任せて世をや置く覽
何となくあるにまかせて住人もさすかうき世は忘れさり覺
聞は耳みるはまなこのものならは心はなにのぬしとなる覽
聞は耳みるはまなこと思ふなよ我にあまたの主はなかりき
春そとてえしも草の色なれは枯葉の秋も何といとはん
思ひなす心よりこそかはりけれおなし草葉の春秋のいろ
よしあしの二つのみちはたえはてぬ心とてけに姿なければ
心とてけには姿もなきものをよしあしとなと思ひわきけむ
なく鴨の寒き夜すからかつくらん氷の下のこゝろしらすや
鳴かものかつく氷の下までもけにとかはらぬ冬のよの月
住はてん山の奧まてともなへと月にそかねて契りをきけん
世をすてん後とは月に契るなよあはぬをはの末もはつかし
かゝる身をむなしき物と聞に社世のうき時は思ひなくさめ
世のうさに慰むどいふ言のはに身かゝれさる程そしらるゝ
あはれはや柴の庵のおく山にありとも知ぬ世をすくさはや
身をかくす庵をよそにたつねつる心のおくに山は有けり

題しらす

此程は思ひをりつるぬのひきをけふたち初てみにきつる哉
きる笠もおへるたきゝも埋もれて雫こそくたれ谷のほそ道
新後拾遺雜下
世を背く後はなかめぬをならは月に暫しや身をおしまゝし

和歌部百廿一　家集三十九

慶運法印集

春

立春

けふもなを雪けの風はあら玉のとしともわかて春やきぬ覽

初春霞

今日といへはゆきけの雲もうちなひき春くる空に霞ぬる哉

棹姫のころもはる風空さえてまたゝちなれぬ朝霞かな

山霞

久方の雲井にたかく霞む也ふしの煙のはるのあけほの

さほ姫の袖のわかれはしらねとも霞にかゝる峯のよこくも

浦霞

あま衣はるくる空のあさなきに袖しの浦はかすみこめつゝ

霞隔遠樹

はゝきゝはよそにさへ社みえわかね霞む伏屋の春の明ほの

鶯

谷風に春しりそめて鶯のうちいつる浪の花になくなり

くれ竹のふしみの里のあれまくになれもふるすと鶯そ鳴

鶯のをのかはかせもふきとかていかにこほれる泪なるらん

若菜

見渡せは若菜摘へきかたもなしおきのやけはら雪は降つつ

ふる里となりにし後のかたみとやふしみのた井に若菜摘覽

さそはねとおなし心にうちむれていくさと人の若菜つむ覽

梅

むめの花またこの里に咲ぬまそよその匂ひもわきて知れし

梅の花いかにとめてかたをらましうはのそらなる風の匂を

梅かゝは我袖のかとなりにけり鶯さそふかせのしるへに

春氷

名とり川氷ふきとく春風になみのはな咲せゝのむもれ木

松殘雪

しかの浦や松ふきしをる春風におちてはみつのあは雪そ降

春雪

雲こほる空にはしはし消やらて風の上なる春のあはゆき

とけ初るこほりのひまの浪のうへにいつれは花と淡雪そ降

二月餘寒

わきもこか衣きさらきころもへぬいつまてさゆる嵐なる覽

曉春月

春のよのあくる光の山のはにいとゝおほろの月そのこれる

川上春月

春はたゝみきともいはしいつみ河わきて霞める浪の上の月

春雨

我身よにふるとしもなししかりとて袖やはぬれぬ春雨の空

旅春雨

袖ぬらすふしのすその〻春雨やよそにみえつる雪け成らん

柳

さほ姫の霞のころもうちなひき袖にすかとる青柳の糸

早蕨

はつくさのはつかにもゆるけふりにも猶埋るゝのへの早蕨

山歸雁

歸るさはぬさも取あへしゆふたゝみ手向の山の春のかり金

花

眺めやる遠山ひめの花かつらかけてまたれぬ時のまもなし

花たにも猶いつはりのあるよとや色なる雲のまつかゝる覽

木のもとにきてたに雲そまかひける何を櫻とよそにみつ覽

棹姫のかすみの袖をさく花の匂ひにそめて春かせそふく

詠めやるをちの高根の花の色に曇りもはてぬ夕つくよかな

閑山花

のとかなるすまゐともなし櫻花さきちる山の春の心は

大淀浦

大よとの浦より遠に霞む也かみちの山の花のしら雪

折花

おりとらは人やとかめむ櫻花たゝ一枝とをなしふとも

翫花

たかためと思ひもわかて櫻はなあかぬ心にたをりつるかな

老か身の涙なからにたをりつるもろき櫻の花のかさしを

故郷花

みかき守なきよなりともさのみ又折はやつさししかの花園

惜花

花を社なをもうらみめさそひ行風のやとりはしる人もなし

散とみてあるへきものか山櫻まちしにたにもつくす心を

ちる花に心のひまのあらはこそ風のやとりも行てうらみめ

落花

吹く風にみかさをそへて石はしるよしの〻川の花のしら浪

空にのみ降かとそみる春風の吹こす峯の花の白ゆき

吉の川花のかゝみのはやきせは散かゝるにも曇らさり覽

はなさそふかたの〻みの〻春風に雲のみをなる天のかは浪

花の色にまかひし雲はかたみとてのちしのふへき空め之覽

殘花

いまさらに誰かは問む山ふかみ風たにしらてのこる櫻を

遊絲

すかのねの永き日暮しいとゆふのいとなく空にあそふ比哉

春田

氷たにまたうち解ぬあらをたをあらすき返す春はきにけり

喚子鳥

うちむれて越行山のよふこ鳥我か人かといかて問まし

春駒

雪にこそ道もみえしか春駒のあれ行あとをいかに尋ねん

つなかれぬ春の心とさくらあさのをふのした草駒いはゆ也

いかなれはさしも長閑き春の日に駒の心のあれまさるらん

雲雀

いつくよりあかるもみえす霞む日に鳴ね空なる夕ひはり哉

いつくともねくらは知す夕雲雀なかなく聲は空にのみして

苗代

ひくかたそあまたみえ行苗代の水の心をたれによすらん

藤

松かねはさそあらはれん田子の浦や梢をあらふ春の藤なみ

暮春

久方の雲のあなたの春ならはなきてや鳥のいとゝかへらん

船中暮春

いさけふは霞の浦に舟よせて爰そとまりとはるをしたはん

夏

首夏藤

さらにまたひとしほそへて松かえの梢のなつにかゝる藤浪

更衣

色みえて心は花にそめしかとかたみともなき衣かへかな

墨染の衣はけふもぬきかへし浮世にかへるなをもこそたて

卯花

卯花のちりかふみれは玉川の水のみなはそきえかてにする

葵

七十のおいの命のもろは草かけしや今は末のたのみかも

遲櫻

わかれてのゝち忍へとやをそ櫻春のゝこせるかたみなる覽

郭公

なれをしそ哀とはきく時鳥さすか待えぬとしのなけれは

宿かれと花橘はにほへとも心もとめぬほとゝきすかな

初郭公

人傳もまたしき程の郭公この里よりや初音なくらむ

人傳郭公

いかさまにまては鳴らん郭公きゝつといたる人にとはゝや

聞郭公

まつよへしつらきところも時鳥なかなく里と成〔に歟〕りける哉

郭公稀

知やいかに山ほとゝきす時過てかれ行ころのあかぬ名殘は

早苗

あかさりし花のなこりをしたひきてたれ櫻田に早苗とる覽

小山田にとるやさなへのけふりより稻葉の雲の秋そ待るゝ

菖蒲

しらるなよ身は隱れぬの菖蒲草うきに盡せぬねはなかる共

數ならぬ我身うきねのあやめ草ひく人まつや袖ぬらす覽

故郷橘

住すつるわかふる里の立はなやみしをもあらぬ老木なる覽

五月雨

山のはに雲のあはたつ日數へてうたかに晴ぬ五月雨の比

をとは河にこりて落る五月雨に水の心のみえすもあるかな

夜々照射

かひなしや幾夜もえてもさを鹿にあはぬほくしの空し煙は

水鷄

關のとは鳥の鳴ねをまつものとなにそはたゝくゝゐな成覽

鵜河

水の淡のあたに流るゝおなしせにきえぬよかはの篝火の影

大井川水のみなかみする〳〵と山もとめくるかゝり火の影

蚊遣火

淋しとてしはおりくへし面影を煙にのこす里のかやりひ

夏草

茂りあふみつのみまきの夏草に駒のすさめし跡たにもなし

夏月

殘るへき影とはかねて知れけり入方とをきみしかよの月

夕顔

かくはかり賤かふせやのいやしきも盛りはみゆる夕顔の花

野螢

あふせまつ星かとみえて天河かたのゝみのにとふ螢かな

納涼

せきいるゝ岩まの水のたまゆらもたゝまくおしくすゝむ比哉

夏祓

御祓河なかれてはやき麻のはのよるへしら涙秋風そふく

秋

初秋

けふといへはかねて思ひし淋しさを猶身にしめと秋風そ吹

早秋

いつのまに露はをく覧秋とたにまたしらすけのまのゝ萩原

乞巧奠

七夕に今宵手向んよつのをのきよきしらへも雲ゐにそすむ

七夕

天の河みつの心のわくちはにしつめかねてやあふせ待けむ

久方の天のは衣たまさかにきてもとまらぬ星合のそら

七夕に心をかさはよのうさも忘れなましな一夜はかりは

天の河渡る一夜はかひもなしとたえくるしきゆき合のはし

萩

宮城のゝ木下露もみえわかすもと荒の小萩ちりのまかひに

はなにのみあくかれはてゝ色かはる下葉もわかぬ庭の秋萩

分行は袖のみぬれて秋萩のいろなる露もみえぬのへかな

草花靡風

花すゝき草の袂の露散てゝたまもゆらに秋風そふく

袖露

心なき草木はさそなはらふたに袂にあまる秋のゆふ露

初鴈

よや寒きをのか越路の秋風に遥々きぬるころもかりかね

和田の原しほせ遙にとふ鴈のつはさにかゝる沖つしら浪

虫

霜むすふおはなかもとのきり／＼すよ寒や秋の思ひ成らん

雨夜虫

ふかきよの窓うつ雨の音よりも猶をしけき虫の聲かな

故郷虫

年をへて荒行さとの秋風にいとゝふかくさ松むしそ鳴

鹿

身を秋の山田のを鹿をのれさへうれはしきよとねをや鳴覧

秋たもるよひ／＼との鹿のねはいとふにつけて哀とそきく

もりすてしかりたの面の露霜に獨ねぬよと鹿や鳴らん

露けさはよそに聞ても知れけり妻とふ鹿のをのゝ草ふし

ねにたてゝ鹿も鳴なりおく山のいはかきもみち時雨ふる比

待月

晴ぬまそなか／＼かけも映りける月まつ山の雲はいとはし

ひかけたに殘るもみえぬわたつ海のとよはた雲に月を待哉

雲間月
みれはなと心すむらん村雲のひま行月はのとけからぬを
たえ〳〵にもりくる月の影よりも雲は晴まのみゆる空かな
霧間月
かくはかり稀なる霧のとたえとも知てや月の空にすむらん
山　月
すみのほると山の月に聞ゆなりまさきかつ散秋風のこゑ
柴の戸に我身ひとつをさそひ置て月そみ山の奥を出ぬる
すみのほる程をはまたしおく山の槇の葉しのき出る月かけ
河　月
ふしの根の雪よりいてゝ麓なる川せにこほる秋のよの月
早瀬川月のこほりのけぬか上にあたなみかけて秋風そ吹
海　月
いほはらや松原とをく見渡せはみほの興津に澄る月影
里の蜑のあみのうけなはうちはへて長してふよの月を見哉
船中月
吹風にたなゝしを船こきわかれおなし江ならぬ月をみる哉
和田の原風そたよりと思ひしを夜舟は月のさそふ成けり
坂　月
ゆらのとは月もくもらてふちしろのみ坂ふきこす秋の汐風
松間月
山里のまやのあしふきもる月や軒はの松の木の間成らん
終夜見月
露なからかたしく床のすか莚すからによるは月そ宿れる
閑中月
かくはかり月のすみける柴のとを雲のやへたつ山とみし哉

社頭月
石清水なかれもいとゝ澄るよをまちける月の影のさやけさ
月前旅
うつらなくいはたのをのゝ旅人や月まち出て山ちこゆらむ
駒　迎
諸人の待かひありて雲のうへに今そいさよふ望月のこま
こよひこそ雲井にいつれ久方のそらになたかき望月の駒
秋時雨
みるまゝに外山の正木色つきぬ尾上の秋はさそしくるらむ
重陽宴
古のそのたに川の末うけて幾夜かさねつ菊のさかつき
擣　衣
遠近の里のあき風ふくるよにたかいねかての衣うつなり
はつ霜のふる里人もいまよりやなれぬ夜さむの衣うつらん
さらしなのさとの秋風ふくるよの誰なくさめに衣うつらん
いく里のへたてなるらんきゝてたにまとろむ程の衣うつ聲
山鳥の尾上のかねは明ぬるを心なかくもうつころもかな
初紅葉
常盤木にまかふはかりもなかり鳧また染あへぬ峯の紅葉は
雨後紅葉
もみち葉もいくしほまてをかきりとて晴ぬる空の時雨成覽
紅　葉
をしなへてまた色うすき紅葉かないつれはゝその梢なる覽
暮　秋
かけろふのをのゝ淺ちふうら枯てあるにもあらぬ秋の色哉
おしからぬ露の命のなからへてなにそは秋をまたしたふ

あさち原かつ霜かれてわかれてふるは色にもみゆる秋かな

冬

初冬

はゝそちる岩田のをのゝ朝嵐に山路しくれて冬はきに㒵

時雨

いつまてか袖ぬらす覽村時雨うきたる雲のほともなきよに

落草

たつた姫そめし千入もいたつらにあたなる色と散このは哉

紅葉はのうつる鏡となる水は散かゝるさへてりまさりつゝ

寒草

新拾遺 春日野の雪まにたにも萌いてし草はそ霜にあへす枯ぬる

冬月

淋しさも月になくさむ山里の煙をたにと何おもひけん

河邊霜

ゆふは河流るゝ浪も氷るらしいはもとこすけ霜さゆるころ

旅宿霜

あつまのゝおはなかりしきさぬるよの衣手寒し霜や置らん

冬夜

ふけぬるか蘆のはさやく津の國のこやの霜よに浦風そ吹

霰

故郷の軒のいたまにふる霰をとよりも猶もりまさりつゝ

千鳥

みたれ蘆の枯葉をしなみ夕汐のさしこす磯に千鳥なく也

ふけぬるか友なし千鳥をちかへり鳴や霜よのとこの浦かせ

夜水鳥

よと共にいくへの霜か置そへん鴨のうはけを浪のこさすは

こやの池のかもそ鳴なる蘆の葉にかくれて住も風や寒けき

雪埋寒草

冬なからまつさく花とみゆる哉をち方のへの雪のした草

遠山雪

山高みいくへの雲を隔ても見ゆるは雪の光なりけり

雪朝望

柴の戸そなを雪深き詠めやる宮古の雪は朝日さすなり

雪

ふり初は道たにみえし山風のさゆる雪けをとふ人もかな

いとゝ又こやの蘆ふき隙もあらしやへ降しける今朝の白雪

降雪やのこる光となりぬらん入ぬる月のあとのやまの端

草も木も埋れはつる雪にこそなか〳〵山はあらはなりけれ

たらちねのあつめしはかりあつめぬや光も薄き窓の白ゆき

鷹狩

みかり野のつかれの鳥の草かくれかくれはてよと暮る空哉

いつまてかつかれの鳥のなからへんとはかたのに草隱る覽

さらてたに手にもたまらぬあら鷹の驚くはかり降あられ哉

冬風

まきのやにひと村雨を送りきて尾上を越る木からしの風

網代

あしろもる床はうきねにあらね共枕のしたに波そいさよふ

炭竈

いつくより立ともみえぬ煙かなゆきの底なるをのゝ炭かま

神樂

くり返しうたふ神樂の聲すなり正木のかつらなかき霜よに

歳暮

大ゐ河はやせにくたす筏しのつなかぬものと年そ暮ぬる

戀

初戀

しるやいかにいつしか袖は萎れつゝ思ひ染つといはぬ計を

色みえぬおはなかもとのはつ草に何そは露のまつみたる覽

忍戀

よしさらは人なとかめそせく袖に我たにしらておつる涙を

洩ぬへき袖のなみたと思ひしをいかに忍ひて年の經ぬらん

泪川はては淵とそなりにける瀨をせくたにも苦しかりしを

さすかまたつゝめは洩ぬ涙とやくちぬる袖を猶たのむらん

身にあまる思ひの程もしらるへき涙を人になにつゝむらん

思不言戀

數ならぬ身はその葉もなきものを心にはつるおもひとも哉

初言出戀

忍ひこし月日をしらてうちつけに思へは洩すみとや聞らん

立無名戀

幾度かしらすとをいはん長らへて人をしけき世にし住へは

顯戀

今はよに名さへなかれぬ涙河水のこゝろのあさき契りに

いつ迄か耐て歎かむよにもるはなき名たに社苦しかりしを

不過戀

うき人をいかに賴てあふまての命はかりはうたかはるらん

なをさりの契りなり共賴はやつれなきをたに慕ひこしみを

あふをにかへもやすると同しよにいけるをいとふ心とも哉

遠戀

逢事はかたしきころもへぬはるけき程の中の通ひち

切戀

新續古　夢にたにあひみぬ中を後のよのやみの現に又やしたはん

後のよをいかに賴みてうき中にいけれは社と身をかこつ覽

祈戀

あふまてと神のしるへを賴まに我しめゆひし年はへにけり

新續古　人しれぬ我ねきことを賴むともいさやよるへのみつの心は

契戀

いかにせんたゝなをさりにいひ捨て僞りとたにしらぬ契を

なれぬるはかねて知るゝいつはりを賴めと人や契りをく覽

僞りはよひ／＼ことにならひきぬいかに契るかまことなるらむ

僞戀

しゐて猶賴みこそせめうき人のいつはり計有よならねは

待戀

僞りをまたしといひし我よりもこよひは人やまつわする覽

かくはかり待るゝ暮をいつはりになれて賴まぬみとや知覽

ひとかたにうき僞りの契りとも知ねはいひし暮そ待るゝ

逢戀

今宵こそ露の命の仇ものもけにあたならぬ契りとはしれ

うつゝともよしやさためし逢ことを夢と知てそまたも賴まん

語戀

とし月のうきにこりぬを契りにてなひく心のある世なり覧

かくてしもとをさかりなはいかゝせん心の奥は語り盡しつ

別戀

新續古　わかれ路をと葉殘らすしたへとやかねては鳥の驚かすらん

別れちのつらきにたにもかへぬみの命はいつの契りまつ覽

ひたすらに迷ひもはてぬ別れちを慕ふ心のみにやそはぬと

忘住所戀

尋ぬへき君かあたりそたとらるゝ我やとかへて待し習ひに

通書戀

藻鹽草かきはやるとも涙花なるみつとはしはし人に語るな

稀　戀

立かへり幾度袖にかゝるらんたえぬとみえしさゝかにの糸

驚　戀

なにとまた驚かすらん關守のうちぬる隙を待しちきりに

隱　戀

宿かへて待たぬ物ゆへよひ〳〵になしとは人のなと答ふ覧

恨　戀

新拾遺 とのはをつくして後は立歸り身をしるかひもなき恨かな

人傳恨戀

かくとたにせめてつたへよみを知は我社いはぬ恨なりとも

恨久戀

あまのすむ里とふ道のさゝれ石や今は波こすいはほ成らん

被忘戀

思ひやれうきをかたみの忘れ水わすられぬたにぬれし袂を

絕　戀

面影の殘るかたみもかひそなきありし一よも現ならねは

絕後顯戀

筏師のまさきのかつらたえて社暮まつよりも苦しかりけれ

絕久戀

我たにも洩すうきなと成に冤あひみし比のむかしかたりは

いかなれはあひみしとはこんよにもならぬ物ゆへ昔なる覧

寄風戀

いたつらにこよひも更ぬあすか風あすの契もしらぬ命に

寄月戀

いかにせん身を浮草の末葉より人の心のあきかせそふく

寄關戀

もしほ火の煙に曇る月もみすかひなき里のしるへとふとて

寄杜戀

あふ坂の關のせき守なれをしそこえし昔のかたみとはみる

寄宿木戀

色みえぬこゝろのはなもある物をつらきけしきの杜の秋風

寄思草戀

たねしあれは梢にねさす宿木のかりそめなからかれぬ中哉

寄夢戀

露けかれお花かもとの思ひ草袖のうちなるなみたまかへん

寄鳴戀

思ひねそあふともみゆるつれもなき人はいかなる夢結ふ覧

寄獸戀

思ひやれあしのいとなきにほ鳥の上に苦しとみえぬ計を

寄筏戀

思ひやれあきたもるよの鹿のねもさすか哀ときかぬ物かは

寄鐘戀

たかせさす筏のつなて引方のありともしらてくれを待哉

忘れしな入あひの鐘はつけすともあたに契りし夕ならねは

雜

松

二葉よりつかへし身社ふりにけれあはれと思へしかの濱松

竹

惠みなき名そたちぬへき竹のその我身空しき世にし住へは

山

久方の雲もをよはぬふしのねに猶そら高くたつけふりかな

幾代よりかゝけきぬ覽年のをのなからの山の法のともし火

杣

いかにせん我たつ杣の杣人とひとにはみえて數ならぬみを

杣河筏

杣河やたかせさしこすいかたしのたゝむか上にたゝむ白浪

布引瀧

久方の空にそさらす山姬の雲のころもの布ひきのたき

山中瀧

世のうさそ更に聞えぬ石はしる瀧のしらあはの音計して

生　浦

いかにせんならぬ思ひに年をへてたゝ徒におふの浦なし

椿

玉椿かけも二たひあら玉のとしのをなかきためしにそひく

城(衍歟)鳥

隅田河ゝきりふかし都鳥ありやなしやとたとるはかりに

樵　夫

山人のねりそのかつらくりはへて永々し日に妻木とる也

野寺僧歸

かねのをとに歸る袂も墨染の夕さひしき野への遠かた

眺　望

ゆらの戸に漕出てみれはふししろのみ坂遙に雲そかゝれる

餞　別

とゝまるも袖こそぬるれ心のみをくれぬ旅の道しはの露

關路行客

もる人のおなし心に越かねついきうき旅のあふさかのせき

旅　宿

草枕ゆく末いそくおもひねの夢も都はとをさかりつゝ

旅　雨

しくれ降よはの旅ねに知れけり越へき山の槇の下露

旅宿夜雨

宿りとる海人の苫屋の村時雨たひねの袖「る脱歟」も汐たれぬる

旅　泊

わすれめや磯山もとに一夜ねて浪のまくらのあけのそほ舟

旅泊重夜

風むかふかきねも知す宮こ人日かすかそへて我やまつらん

閑中煙

たえ〳〵にたつる煙も淋しさのなくさむ程はみえぬやと哉

山　家

新後拾　都人とはてとしふる山里をつらきところと松かせそ吹

のかれきて住はいかなる宿とたに人にしられぬ山のおく哉

山ふかみなをすみ侘ておもふには浮世の外もうきよなり鳬

いかはかり淋しからまし世中をのかれて住ぬ山ちなりせは

なけかれし浮世はすてつ山にても心とまらぬいつち行まし

田家煙

あま人の鹽やく浦のみなとたに庵もるしつもけふりたつ也

田　家

小山田のほにいてぬよりもり初てかりほす迄に幾よねぬ覽

まとろまて苅田の面の月もみつひたのかけなは永き霜よに

述懐

いとせめて歎かんためとなれるみや捨るも難き此世なる覽

和歌の浦やよるなく鶴の跡とめてをよはぬ道を身に歎く哉

さのみ又うしといひてもいかな覽捨るも易き此世ならぬを

はかなくも歎きける哉すつるたに心に叶ふ此そならぬを

數ならぬ和歌の浦はの藻汐草かくにつけても袖はぬれつつ

わかの浦やもくつにましるうたかたの哀をかけよ玉津島姫

うきよをは捨へきものとおもふにもいとゝ身にそふ我涙哉

大ゐ河はやせのいかた浮しつみわたれは渡るこのよなり覽

いつ方のいかなる山を尋ねてか思ふ計によをのかれまし

獨述懐

我たにも思ひ定めぬあらましをそむかんまては人に語らし

往事如夢

思ひてのありともかひやなからまし身の古を夢としりせは

懐舊

古も同し身なからなからへてみるをのみやは浮よと思はん

かくてたになからふるみに古のよをうきものと何思ひける〔え歟〕

さのみかくみし古の戀しきはいつより後の浮世なる覽

さのみまた忍ふもくるしいかはかり老て忘るゝ昔ならまし

懐舊涙

うきみには涙はかりをあひ添て親の守りそむかし成ける

無常

行水のあはれとそ思ふみつせ川渡らてやまん人しなけれは

寶塔品

出ているわしの高ねの夕附日ひかりならへて空にこそすめ

神刀品

卷向のひはらか峯のゆふ月夜かすみはつるもはる風そふく

釋教

かくはかりいるをかたき道なれはとはにみのりの月も澄覽

何かその迷ひさとりとわきていはん愚なるみの心ひとつを

わしの山雲のいつこにやとるらんかくろひはてぬ月の光は

寄風空諦

吹風のめにみぬ色と成にけり花もゝみちもつゐにとまらて

胸消是非

ふたつなき心になにと求めけん迷ひの外のさとりならぬを

神祇

やはらくる光ときけはちりのみを捨ぬそ神の誓ひなるへき

照すへき神は日吉のかひもなし今は我身のかけやかくさん

康永の比將軍家に始て住よしの社壇造營ありて翻〔飜歟〕請の時法樂に御會始に社頭祝

宮ゐするちきのかたそき君か代にあへるも神の心なるへし

春祝

松かえはいつともわかて君かよにあへるを春と花やさく覽

祝言

君か代は年の幾とせかさねてもかへるそやすき昔なりける

右一帖。以二或之本一書二寫之一。光珍書々々。但入二撰集一而不レ見二于此集一歌有レ之。左註レ之。

題しらす

新後拾冬　曇るともわかぬ山路の木のまより日影とゝもにもる時雨哉

雲雀

同雅春　いほ結ふ山のすそのゝ夕ひはりあかるも落る聲かとそ聞

前大僧正慈勝人々によませ侍りける千首前に田家

同雜上
をしか伏門田の霜の迸る夜そもる頃よりもいねかてにする
山を

秋の歌の中に

風雅雜中
塵のみそをき所なき白雲のたな引山のおくはあれとも

歳暮

新續古秋
足からの山立かくす霧の上にひとり晴たるふしの白ゆき

里梅

同冬
かきりなく老ぬる後の一とせは身に積るともよしや歎かし

題しらす

同春
あれはてしなにはの里の春風に今はたおなし梅か香そする

絶後顯戀

同尺
いつまてか迷ふ心のくまゝに御法の月のかけをかくさむ

題しらす

同
人しれぬ尾花かもとは中々にかれにし後そあらはれにける

暮春の心を

同戀上
たかかたに行とも知すみよしのゝたのむの鴈のはるの別は〔こそイ〕

名所鶴といふ事を

同
としくくにあかて別し名殘までかこちそへつるおいの春哉

同雜下
をくれゐて道迷へとはわかの浦に夜なく鶴やおもはさり劔

右之外在二此集本一。合十七首入レ集畢。付二驥尾一注レ之者也。

芸蘂散人

堯孝法印集

春

立春

新玉津島法樂三十首當頭
暮て行空におしみし年波のかへりてけふや春のたつらむ
つゝみあへぬ春のかすみのうす衣袖もかゝやく玉つしま姫

初春霞

天か下春たちけらし今朝みれは三笠の山そかすみそめぬる
草も木もめくみの春を色に先なひきそめたるあさかすみ哉

初春山

雪なからおのへの松に吹たゆむ去年のあらしや春の初風

遥尋花

みよし野も立田のおくも猶あさし心の花の道そはるけき

霞春衣

いく春か空にかすみの衣手もつらねそめぬる千世の行末

河邊鶯

谷ふかみ岩まにむせふ河なみも聲たてそへて鶯そなく

谷鶯

聲はなを雪のふる巣に埋もれて春のよそなる谷のうくひす

求若菜

春日野のをとろにましる若なをは道ある迹もいかて摘まし

野雲雀

夕日影をちかたのへは長閑にてあかる雲雀の聲のひまなき

初春見鶴

春くれは花咲色をまなつるの千世のすかくる峯の松かえ

鶯出谷
誰もみないてゝつかふる春とてや谷に殘らぬうくひすの聲

都早春
百首沓頭懷舊
雪消ぬみ山も遠くかすむより都のゝへに春そしらるゝ

梅薫風
にほひくる風さへうれし梅の花春にあふみの袖につゝまむ

瀧霞
ぬきやいかに霞のころもたてはかりはつれて落る瀧の白糸

鶯告春
長閑なる世のしるへかも鶯のさえつりそむる春のはつこゑ

岡早蕨
たれか今朝早蕨あさる春來ても寒き岡への霜のふり葉に

柳露
なをさむみなひきもあへぬ青柳にこほりてかゝる春の朝露

椿
畠山匠作會
ことの葉のつら／＼椿つらねきぬ千年の春を契る軒端に

歸鴈
歌合
見すもあらすみもせぬつてとしたふ哉霞かくれの鴈の玉章

初春松
將軍家月會三十首巻頭
けふしこそ子日にかさせ春にひく心をたねの松のことの葉

山花
同
心ある人たにすまは山路をもさのみひとりは花に迷はし

對花
同
なをさりにいひ出すへきかたそなきみる花のかけ聞鳥の聲

雲雀
朝夕にあかるひはりの心さしわか道しはにいかてまなはむ

遲日
色にそむ心のはなの咲ちるにのとけき春のかけそ忘れし

梅薫
やとれ月梅のにほひにかすみてもまた光そふ花のうへの露

けふの子日の
道ひろき千世の例に引そめつけふの子日の松のことの葉

欵冬
露をかぬひまこそなけれ清瀧の岸の山ふき涙やかくらん

春暮方
をのつから永き日かけにまとゐして心のとけき春の暮かた

初春霞
春といへは猶のとかにて天津空かきりしられす立かすみ哉

春雲
しら雲の花にあさゐる朝ほらけ雪さへにほふ春の八重山

山櫻
いとゝまたわかてやみまし山櫻雲もにほひの有世なりせは

月前霞
月は猶さやかに見えて秋の田のほのうへ遠く霞夜半哉

霞知春
長閑なる春のこゝろのしる人と空になれきて立かすみかな

松殘雪
猶殘る雪さへあかすうすみとりなひき初たる春の松かえ

朝霞
天の戸をあくる光は霞にて春日のとけき御代にも有哉

梅薫袖

咲梅に神のむかしを思へとや今もにほひそみつの衣手

子日

子日せし春も忘れぬ松山の神やむかしに心ひくらん

春羇旅

末遠く春をしめ野に敷島の道をもちきる草枕かな

名所花

いもせ山にほへる花のたきつせは中に落たる聲もむつまし

春山

春の日の名におふ神も峯高き君かみかけに光そふらし

夕春雨

かねの音はかすみのよそに暮果て春雨ちかし軒の玉水

歸雁

長月のそのはつかりや春もまたをくるゝ空にかへり行らん

春夜

心ありて花をはよきよかすむ夜の月のかつらをしほる春風

春月

長閑なる光はそらに猶みちてかすむともなき夜半の月かな

河柳

青柳の春のかけとや立田河からあゐくゝる水のしら浪

歸雁

越路をはおもふかたとて行鴈のなくねまかはぬ春のよの空

初花

佐保姫の今や手にまくいと櫻吹とく風もにほひそめつつ

三月三日

けふとてや流も淸き水くきにとりかはすらん花のさかつき

水邊躑躅

波よする磯の岩ほに咲躑躅あまのたく火のかけかあらぬか

早蕨未遍

雪消るたるみのうへのもえそめてまた春しらぬ谷の早蕨

漸待花

行て先やとりやしめむ花さかは山のいつくも人まあらしを

山家暮春

この比はいつち行らん山にすむ山人さへに春をしたひて

社頭春

護れ神道ある御代の身の春にあふをかしこみなをも久しく

春天象

のとかなるいは戸の關の明かたにかすみ吹こす春の初かせ

春人事

夢ならて結ふへしやは春の夜のねよけにみゆる草は有とも

見花

宿かりて春のいく夜をおしみきぬ月も折しる花の下ふし

夕落花

新續古 鳥は今ねくらをしむる梢にも花はとまらぬ春風そふく

遠尋花

みよし野もあさき山路に分なしぬ花ゆへしけき春の人めに

夜思花

櫻花あけゆく色やいそかれむ月さへにほふ今夜ならすは

曉花

有明の月は木の間を出やらてまつ山端の花そみえ行

暮春磯

たえ〲にかすむ磯邊の夕附日みらくすくなき春の影かな

暮春車

小車のめくる日かすに春もくれ花のにしきの紐はたゆとも
　暮春旅
われのみそ猶峯こゆる行春の鳥は雲路に歸るゆふへも
　庭の藤さかりに侍りしをたちよりて見侍しとて人〻に一首を殘し侍し時
かへるさそいと〻わする〻ことのはに心をかくる松の藤波
　親元俤をかきならす同日智蘊夜前一座難忘侍るよしにて
松風に〻ほひし花の色〳〵はおもかけにたつ宿のふちなみ
　返し
色そふる君かことはの花なくはしほれやはてむ宿の藤浪
　浦春月
霞さへおほふかた枝に洩月もえならぬ春のをふのうらなし
　山寒花遲
さえかへる袖ふる山の朝ほらけいつか櫻の雲に〻ほはむ
　折花
家つとにた〻一枝の櫻花かめにやさ〻むかさしにやせん
　花遍
我爲に花やはまたし日數へはよしひとかたは移ろふをみん
　春杉
春をへてまたおひそふもふる河やいつれ昔の二もとの杉
　春衣
あま人もしほやき衣ぬき置てかすみやかつく春の夕なき
　春懷
身にはた〻老のなみのみ數そひてみし世の春そ立も歸らぬ
　寒嵐吹雲霞
夕くれの月はそれともみえわかて霞そにほふ遠方のそら
　花下友
なれにけりあかぬ一木の花の陰哀いく世の契なるらん
　夕落花
今朝まては花にいとひしふけやた〻夕の雪の庭の春かせ
　水上花
なかれ行花はよし野の河なみの梢にかくるしからみもかな
　人々ひねもす花にむかひ侍し時
夕日かけうつろひけりな今朝の間に思ひ立にし花のしら雲

夏

　首夏
夏來てもさ〻れに〻ほふ岩つ〻し八千世の春を殘すとそ見
　早苗
つくはねのしけき惠にあふ民やすそはの田井に早苗とる覽
　朝夏月
新續古 月も猶殘るみきりの朝きよめ夏さへ霜をはらふとそみる
　初郭公
郭公ほのかなりつる夕暮の雲のはたてもた〻ならぬ哉
　聞郭公
ほと〻きす初音かたらふ枕にそ老のねさめのうさも忘る〻
　夕郭公
夕やみに雲路たとらは月かけて歸るほとなけ山ほと〻きす
　夜郭公
きかまほし枕のうへのほと〻きす今一こゑに夢もむすはす
　郭公

ほとゝきす同し雲間を洩月の匝かなるにもたとる一こゑ

待郭公

春は人をよふこ鳥たにある物をまたれてもこぬ郭公哉

更衣惜春

將軍家御會

思ふにはかへらぬ色を夏衣うらなく花にいかてしらせん

山新樹

きのふかもさかきとりしは御影山其かけわかす茂あひぬる

曉郭公

心あれや曉をきをもよほしてあかすかたらふ山ほとゝきす

五月雨

鹽木たく煙のすゑもみえわかすあこきか浦の五月雨のころ

急早苗

花みむと春もいそきしさくら田に又初早苗とりやそへまし

野徑夏草

いにしへの水の心もえもしらす茂る野中に草や結はむ

卯花處々

家會

花さかぬむかひの里のうつ木原我すむかたもおなし垣ほに

對月待郭公

ほとゝきすなれもかたらへさよ更て月待いつる有明のころ

子規何方

ほとゝきすきゝそさためぬ鳴聲もひとむら雨の雲まよふ空

湖郭公

舟とむるひらのみなとにうきねして山ほとゝきす枕にそ聞

秋

立秋

秋はけさたつの市人いつしかと露もうるほす袂なるらむ

初秋

よな〳〵のならはししらて手枕のすきまの風に秋は來にけり

菊

白菊のうつろふからにくれなゐの花にいとはぬ秋のはつ風

早秋露

秋のくるかた野のみのゝ楢柴になれてをきちる露やまさ覽

朝顏

秋の日の影よはり行ほとみえて夕露かけて殘る朝かほ

草花盛

もゝ草に心そうつる秋のゝのさかりに花の春もわすれて

秋人事

月をめて露をかなしむ夜な〳〵につもれは老の秋と成ぬる

曉虫

露霜はまたふりそはぬ夜ころたに虫のさむしろ曉のこゑ

籬菊

むらさきの庭のまかきに咲菊や山路にこえて千世を重ねん

山秋

誰ためもうき名おもはぬ女郎花男山にはさかすもあらなん

盧橘

世をへてもその言の葉にたち花の匂ひ殘れる陰はむつまし

待郭公

山里にきけは晝なくほとゝきすおもはぬ空に待やならへる

夏草

雪間よりみえしもそれか秋を待草のはつかのなてしこの花

蚊遣火

あかりての世には及はぬ下もえに我身とくゆる賤か蚊遣火

夏夕

月をそくいつるかたのゝ夕つゝに聲も雲まの山ほとゝきす

秋河

たれも今あその河原にふむ石のかすもたとらて月をみる哉

秋杜

夜や寒きいろやはうすき衣手のもりの露しもをきまよふ頃

月

道しあらは行てはらはむ久方の月のかつらにかゝるしら雲

月出山

山鳥のおのへさやかに出そめて松をへたつる秋のよの月

山月

かねの音も月もはるかにさよ更て雲そいさよふ小初瀬の山

十三夜晴

くもりてし秋の最中の空までもこよひはれぬる長月の影

南北擣衣

夜や寒き七の星のすむかたもむかへるわれも衣うつなり

紅葉

色かへぬ松にしくれのをしほ山もみちを分て染そつくさん

七夕

天河よりくる浪のたま〳〵に逢瀬にさへやこゝろくたくる

八月十五夜

名もたかくすめる今宵の月影に昔の秋そ空にしらるゝ

うき世とてそむかれなくに今宵みる月に慰むさらしなの山

月前杉

杉たてる門田の西のあきかせに月かけさひし三輪の山もと

野月

新續古 更にけり置そふ露も玉たれのこすのおほ野のよはの月かけ

澤月

そことなき野澤の水もあさからぬ秋の哀にすめる月かけ

夕出月

高根をはいつか出けん天津そら雲のはたてに月そいさよふ

秋夜

遠かたや河せの浪はみえわかて月そいさよふ宇治の山もと

鹿聲何方

なく鹿も聞こそわかねつくはねのこのもかのもの妻や戀覽

憶牛女

天の河思ひかはして世々やへし二つの星のふたこゝろなく

林霧

雲とみし花のところか秋はまた紅葉木かくれ霧迷ひつゝ

名所紅葉

染わたす秋のにしきを時雨にはほすともいはし天のかく山

秋夕傷心

うきともしけきむくらの門さしてあはさらましを秋の夕暮

霧

夕つく夜さたかにもなき松の葉に猶霧まよふ秋かせそふく

擣衣

秋寒き淺茅か末のあさ衣ゆふ日かくれの霜に打なり

山秋風

峯に生る松吹こして因幡山月のかつらにかへる秋かせ

萩

露になひき風にしたかふ萩をめてはきをうらやむ秋の夕暮

庭　菊

仙人のかよはん道のおもむきをうつしそめたる庭のしら菊

江　月

霧わたる空に猶吹すみの江の月をいてみの濱の松かせ

月前薄

あき風にまねくおはなもかひそなき月は入野のすゑ遠き空

竹間月

打なひき竹の末葉にかけ晴て月ふき入る窓のあきかせ

夜　荻

人しれぬ夢路の關や是ならんねやもる夜半の荻の上かせ

古寺嵐

とはゝやな思ふうき身の初瀬山峯の嵐のさもあらはあれ

夕出月

高根をはいつか出けむ天津空くものはたてに月そいさよふ

河　霧

ひろふへきさゝれもみえすちくま河秋の汀は霧深くして

落葉殘秋

おなしくは花にをみはや秋の色のすこしき春に殘る紅葉は

落　葉

嵐こす麓のおはなうちなひき袖にこきいるゝ紅葉とそみる

冬　風

ねくらとふ鳥もうかるゝ聲す也こからし寒き夕暮のそら

夕落葉

露霜のそめぬなみたも夕暮のおつる木葉にいさなはれつゝ

浦千鳥

わかの浦に友（とイ）よひ通ふはま千鳥なを道ありてなるゝ世も哉

河落葉

西河やふるき御幸のおもかけに紅葉もうかふ水のしら浪

淺　雪

新續古 ふるほとも淺茅にましり咲花のなひくとそみる今朝の初雪

雪　深

ねや寒み埋れふして聞はまたまかきの竹の雪おれの音

千　鳥

もろともに鳴や千鳥も水鳥のかもの河原の霜の明ほの

雪朝望

これやこの一夜にかはる烏羽玉のくろかみ山のけさの白雪

冬　曉

さえにけり明るむかひの里かくら霜もをかへのさゝ歌ふ聲

山時雨

夜をさむみ月もいさよふ足曳の山のは分てふるしくれ哉

遠嶺雪

峯たかみ雪のひかりも月かけもおなし雲間に明ほのゝ空

千　鳥

ちとりなく淀の河風寒きよに舟のつな手も引そわつらふ

なけやなけなれそせめては友千鳥獨ねさめの浦のとまやに

椎

庵寒み霜もをかへのしゐしはをねての朝けにたれかたく覽

歳　暮

事なくてことしも暮ぬ長閑なる春近しとそなへていそかん

佛　名

さよもはや竹のともし火更に晃となふる御名や殘り少なき

寒風吹雪

世を祈道をおもふに春をへてはこふあゆみは神もうくらん

入夜深雪

ふる雪は袖にさゆれと神のため春のゝにいてゝ若な摘也

野外雪

みつ鹽のをよはぬかたに降つもる雪やなるみのうへの成覽

冬雜物

こきかへり世ゝに汀の跡とめよ和哥の浦はの雪の友ふね

白雪散亂

此神に霜をいたゝき雪をわけつかへまつりて年ふけにけり

江月

さよふかき水草かうへの秋の霜むすふか月を古江にそしく

垣夕顏

かきこもる水のゝきしによるあはの消ぬも咲る夕かほの花

爐火

徒にねやのうつみ火かたらひて窓の光をそむくへしやは

網代群遊

ひをよりもより來人やをほ舟のたゆたふへくもうち網代の〔本脫歟〕

擣衣

將軍家御會

ころもうつ音も遠ちの里つゝきよさむ侘たる賤かあはれさ

夕かほのやとりのほとも中垣の枕にちかくころもうつ音

月前擣衣

鴈鳴て菊さくころは月影もなをしろたへの衣うつらし

時雨

窓あけてむかふ嵐の北時雨はれ行みれは雪のやまのは

浦霞

雲州會

むろの木のみとりを分て霞むなり漕いつる舟のともの浦波

浦鶯

その色とさたかならねとすまの浦の海士のさえつる鶯の聲

月前梅

春のよの木間の月の有明はおもひ出あれや梅かゝそする

梅交松

ちりうせぬ言葉の花を春そへて咲や梅かえにほふ松かせ

山中櫻

名にもにすふかぬ嵐の山さくら光のとけき花の色かな

加茂祭

いつ迄そいつきの宮の宮人もけふに逢ひをかさしせん世は

薄暮郭公

ねくらとふならひもしらて暮ゆけは猶あくかるゝ時鳥哉

郭公頻

此ころはもりの雫の遠近になかぬ日もなきほとゝきす哉

ともし

木間もるともしのかけやさをしかの心をつくす限なるらん

鵜河

うふねさすかゝりの影も大ゐ河心のやみを身のわさにして

名所鵜河

月はゝや入ぬるにしの河よとに山あひ出るうかひ火のかけ

かゝり火のいさよふ波にしられけり夜河ふけ行宇治の山本

盧橘薫枕

にほひ來て夢はとまらぬ枕にも過しむかしを殘すたち花

峯照射

五月闇はかなき鹿のよるほとそ哀にみねのほかけいさよふ

夕立

夕立のふり行をともあらち山矢田野をかけて風の凉しさ
むら雲のいさよふ峯に山かせの音はけしくもゆふ立の空

五月雨

はし姫のかた敷衣ほしやらてさそうち河の五月雨のころ

江螢

難波江やあまれるいさりたくなはのうちはへもえて行螢哉

杜蟬

なく蟬のはゝその杜は紅葉せむとこの山風たのみかたさよ

遠村蚊遣火

此里や山をもおへるかやり火のけふりのうへは峯のしら雲

落葉

雲そゐる冬はこの葉のかくろへもなき山姫の袖かさすらん

戀

初戀

思しれはつとやたしの若鷹のなれぬみとりに遁れえぬ世を

契待戀

今夜たにいつしかゝはる心かな更るまてとは契らさりしを

立名戀

逢にしもかへぬ思ひのから錦たゝまくおしき名耳ふりつつ

相互恨戀

覺束ないつ方よりかくゆりけんつらき二見の浦のともし火

寄木戀

思のみこり積事をやくにして苦しくからき海士のもしほ木

契戀

かはるなよたのめしまゝに聞えくる入あひの鐘は僞もなし

欲顯戀

いかにせんうき身とかむる犬かみの床の山風たのみ難さよ

寄紐戀

いかにして人にしらせんをのつから下ゆふ紐のとくる習を

寄月戀

深ぬともこのならはしを人もしれ月は必待いつる夜に

戀書

みるほとのせめてなくさむ玉章に僞をたににかき盡してよ

稀逢戀

たとるなり年の三とせをへたてきて新枕そと思ふはかりに

契戀

我かたに仇なる浪はこさねとも淚せく袖やすゑの松山

久戀

契しも袖ふる山の例にてけにみつかきのみつからそうき

寄雨戀

なをさりに侘つゝねんにかこちしや月に慰む雨のかねを

漁始戀

いつしかといたま求むる初時雨さそやくたさん閨の寒しろ

戀心

かきりなく塵ならぬ名も立やせん空にしめゆふ心つからに

祈逢戀

今そしる祈れはかなふことはりになひくみしめの結ふ契を

契經年戀

新續古

忘るなよさすか契りをかはしまに隔つる年の淚はこゆとも

稀戀

たれにかは思ふ契をわくらはにとふこそつらき心なりけれ

寄枕戀
浮名のみたかせのよとにさはく也いつ薦枕かはしそめまし
祈身戀
長らへてうきみしめさへかくてこそくちぬ契の限ともみん
寄糸戀
逢みむの行末まてはかた糸のより〳〵かこつ中のうきふし
寄藻戀
我そうき海士の苅藻の亂れても終に寄邊のなからましやは
聞戀
いもせ山中なる河をいかにせん吹こす風は聞わたりても
夕祈戀
情なくてもとのみしめは朽に尭更に靡けとかけやそへまし
祈戀
うかりける我みのほとよ初せ路の苦しかれとて祈やはせし
忍戀
みえすうき身をは忍ふの蜑衣唯うらふれて世をやつくさん
契戀
草の名のさしも人やは思ふへき我はいふきのやます忘れす
寄雨戀
こよひしもかはらてとはゝいかならん哀くるしき雨の音哉
立名戀
うかりける名たかの浦に迷哉さて靡き藻はかつく世もなく
寄海士戀
心あるあまとなりてもいつまてかつれなき人をまつか浦島
來不留戀
うかりけるかりそめふしにさゝ枕一夜の夢も結ひはてなて
寄星戀
やとりきてなかるゝ星の影もなし涙の床のあかつきの空
媒思移戀
かけうつるつたの細江のつなて船引人にしも迷ふ身そうき
社頭榊
御戸ちかく神のみけしや袖ふれて立る榊も香にゝほふらん
栽松
宿りあかぬ心を種とうへをかは松の千とせの數もかきらし
名所松
今日よりそみきとかたらふ武隈の松の本立ゆかしかりしを
名所鶴
歸來て結ふも嬉し田鶴のすむいつぬき川のふかきなかれを
曉更鷄
時をしるやこゑの鳥も治まれる御代は今とや神につくらん
曉遠情
老のなみ夜のね覺の枕にはまつかよひけり和哥の浦風
雲浮野水
あま雲の迷ふ野澤もよそならぬ庭の清水の面かけにみゆ
名所月
立かへれよろつの道も樂波や大津の宮のふるきためしに
閑居
おき出てなかめつる哉月きよく風秋にふく明ほのゝそら
浮世にはかく優りける住居をも語覽とすれはとふ人もなし
海村煙
もしほやく浦半も民のかまとゝやにきはふ煙立ぬ日もなし

野　風
風ふけは道の行手の淺茅原あさくそみゆる野へのかり庵
旅　宿
野へにふし波のうきねにあらぬたに旅の宿りは悲しき物を
山家水
かしこくも誰むすひてか住そめし水草きよき山の下庵
庭松契久
宿にしる松のよはひの思ひ出を八千世の道にちきる春かな
竹遐年友
そのはの花にもなひく千世の影を窓に友なふ春の呉竹
思往事
敷島の道にいらすはさのみかくおもひも出し世ゝのふるを
名所鶴
末遠くおもひおきつの濱松に千世をあらそふあしたつの聲
閑中灯
今もたゝこれそむかしの面影よ哀なつかし窓のともし火
松經年
尋來る君を思へは我やとの松も千とせをふるの山かけ
名所松
みねに生る松吹こして因幡山月のかつらに歸る秋かせ
古寺鐘
鐘の聲もよそにやかはるとよら寺夢をも西にさそへとそ思
竹
ことの葉の花も咲くさ千世の春なひきそふへし窓の呉竹
竹風如雨
むら雨もよそには過ぬ竹のはに吹やむほとの風にまかせて

名所關
ふはの山里のいた井の板ひさし久しき道もあらはなる世に
旅
故郷にかよふはかりの道も哉すゐもつゝかぬ夢のうきはし
老　心
木のもとにめてこし春の日數さへ積れは人の老となるもの
述懷非一
その葉も心のたねもつくは山わくる道には影しけくして
懷　舊
時鳥しのひねそへてことつてんみし世の人の行衛しるかも
神　祇
石淸水あふく心の友かゝみ猶もかゝみて神そ守らむ
寄道祝言
新續古 なを守れわかの浦浪かゝる世にあへるや道の神もうれしき
寄世祝
君かへむ世に有かひと神もまた八百萬まてあらはれやせん
寄月無常
やとりけりはかなき草の末の露本の雫も月はへたてす
松歷年
七十や千たひも越むしら河の浪よりたかき松のよはひは
羇　旅
新續古 草枕わかふる里の外に叉遠つ飛鳥の都こひしも
戀地儀みのゝくにへ行人に讀てつかはし侍る
たのみこし因幡の山のかひありて今歸りくる契をそまつ
寄神祇
まもるてふ道につかへて神も猶光たちそふ世をそ祈らん

浦　鶴

和哥の浦にあまたむれゐる友鶴のかず〳〵契る千世の行末

如是作

心ある民の草葉の品〳〵もたかならはしに作り出けん

寄世祝

古のたゝしきみちをそのまゝに今も行なふ御代のかしこさ

祝　言

萬代の例や引みる宮柱ふとしきしけむ杣木まつまは

神　祇

かしこしな神の心もすなをなる道に任せてあらはるゝ代は

夕聞法

庵しめて聞は夕の鐘の聲ふかき御法にかよふなりけり

心靜延壽

敷島の道に心のいる人そ老ても和歌のうらに友なふ

祝　言

入すみしるそのかみたかき惠もてやすくや四方の國守らし

往事如夢

昔てふことはいかなる夢なれは又も結はすさむる夜もなし

親　王

言の葉の花そふ竹のその陰や草にも木にもあらてにほへる

社頭松

いく春も松のとの葉松の春手向かさねて神をあふかむ

社頭祝

今年猶みちをもたてゝ宮柱ねかひのまゝにみかきそへまし

八　幡

八幡山春をかさぬる春にあひてかすそふ神の惠をそしる

玉津島

歌合

道しある世にしらゆふのかけまくも畏き神を猶や頼まん

北　野

心さへひらくる梅の色香をそいとゝ北野の神にたのまむ

住　吉

すみよしの松の惠のかしこさは道につかへて猶そあふかん

祇　園

猶まもれ神のその世をそのまゝに殘す八雲の道もたゝしき

稻　荷

いなり山立そふ松のふかみとりかすみになひく春かせそ吹

日　吉

神の名の日よしと今日を數へても春の手向や千世も重ねん

鐘聲何方

ねぬる夜の夢のたゝちも鐘の音もそこはかとなき曉の空

山

たかき世に風のすかたも立かくれふしの煙のたえぬ道とて

漢雲遠晴

神も猶光たちそふ春來ぬと空にしめゆふ朝かすみかな

松作友

年經てもなをき心のしるへとや松のみさをゝさして契らん

徑　苔

いかなれは袂も庵も通來てふかきちきりの苔に有身そ

湖水眺望

さゝ波やよるとて歸るあまもなし月にこき向ふおきつ島山

山家煙

山すみの煙の末を見ても猶あらまほしきはあらましの道

河

いすゝ河ふるきに歸る音す也すめるとこ世の浪のまに〳〵

書

まき〳〵に玉の聲あることのはやみかく心の道殘しけむ

雜

海路

鳥の聲鐘のひゝきも老らくのむかしにかはるね覺しりきや

むかしにも立かへるらん波の上も道廣き世の和歌のうら舟

蔡花園にまうてゝ法事の後御室木守の神殿なとの花を只獨瞻望して

たくひなき色をしるへきうき身さへ獨みやこの花の影かな

雲浮野水

そことなき野澤の末の雲水のうきてたゝよふ身に社有けれ

水郷葦

みさひさへふるき堀江の芦の葉のむかしになひく浦風そ吹

旅宿

やとりをもぬさをもとらぬ旅なれや手向もおなし花の下臥

人〻終日花にむかひ侍し時

夕日影うつろひけりな今朝のまに思ひたちにし花のしら雲

三寶院門跡にて社頭祝君といふ事各〻よみ侍るとき

此門は神のみむろのひとつにて老せぬ君そ千世をむかへん

蔡花園の難波の梅盛に侍し時細川右馬介入道の本へ一枝をくり侍し次にむすひつけはへりし

此花は難波たかつのたかき代にをよふ色香そしる人にせよ

返し　右馬介入道

言の葉いはなもたかつの梅かえにふかき心の色そしらるゝ

寶相院准后住吉にまうて給て社頭の松の枝につけて神前にて思ひつゝけ侍る

道に惠む神の心のしるけれはわきてそみする千世のためしを

御返し

仰みる千世のためしに道を思ふ神と君との惠みしるしも

祭の日智蘊本よりかつらの枝に付て申侍し

ぬるか内に神のみせける花そとはけふのかさしに思合せて

返し葵に結ひ付て侍りき

夢のつけあふひを結ひけふさへに心かけゝるほとそ嬉しき

將軍家御下知御施行等拜領之時細川右馬介入道家へ申侍し

あふく哉みのゝをやまの松かひもありける御代の道の惠を

返しその日世務繁昌忩劇無ㇾ極侍るに即返事を殊更書狀にそへて申たひ侍る

立かへるみのゝを山の松のたね猶さかゆへき千世のゆく末

けふも日くらし人〻來て述二祝詞一眞桑庄申二沙汰之一奉行三善爲數もとより

ふみわけし末あらはれて古にまたゝちかへるみのゝ中やま

と申侍し返事に

いにしへに歸るもうれし名に高きみのゝ中山道もたとらて

出仕以前夜ふかくまうてゝ

長閑にも君か御影を祈るにそ神に夜ふかくつかへぬるかな

會の間に廟の豆をおり出して侍しかは人〻こほれくふ誹諧に紙のはしにかき付侍し

敷島の道のすさひに拾ふことのは薗のまめにも有かな

昨日夜に入て會果てかへりしに夕月夜其興侍き今朝
うす雪ふりて春の空いとえんに覺えければ
さえかへる夕の月のおもかけも忘れぬ今朝の春の雪かな
いく春も猶あきらかにてらさなん千世のかたみを神も待て
黑谷花の下に三寶院門主待奉る事有て寶地院法印皆
以下人々終日花にむかひはへりし時
夕日かけうつろひけりな今朝のまに思ひ立にし花のしら雲

淨光院法印堯孝集。世間稀有レ之者也。陽光院殿御所持之間。懇望令ニ拜借一。一日之內。灯下にて令ニ書寫一畢。不レ可レ出ニ窓外一者也。穴賢々々　　也足

右堯孝法印集以堅田侯秘本挍合之然不審多々姑闕疑而已

和歌部百廿二　家集四十

素性法師集

木に雪のふりかゝるをみて

【古】春たては花とやみらん白雪のかゝれる枝に鶯のなく

梅のはなを折て人のかりやるとて

【同】よそにのみ哀とそ見し梅花あかぬ色かは折てなりけり

【同】散とみて有へき物を梅の花うたて匂ひの袖にとまれる（か　せ集）

【後撰】梅の花折はこほるゝ我袖に匂ひは移れ家つとにせん

山の櫻を見て

【古】見てのみや人にかたらん櫻花手毎に折て家つとにせん

【同】見渡せは柳櫻をこきませて都そ春の錦なりける

【同よみ人しらす】まてといふにちらてしとまる物ならは何を櫻に思まさまし

寛平の御時后宮の哥合に

【同】花散らす風のやとりは誰かしる我にをしへよ行て恨みん

【同おきかせ】櫻花ちくさなからにあたなれと誰かは春を恨みなれたる

【同】花の木は今はほり植し春立はうつろふ色に人ならひけり

朱雀院の御時北やまにまかりて

【同】いさけふは春の山へにましりなむ暮なはなけの花の陰かは

春の哥よみてと人のいふに

【同】いつ迄か野へに心のあくかれん花し散らすは千世もへぬへし（あへ集）

【古】音にのみ菊のしら露よるは置て晝は思ひにたえすけぬへし

【同】秋風の身に寒けれはつれもなき人をそ頼む暮る夜ことに

【同】はかなくて夢にも人をみつるよは朝の床そおきうかりける

【同】今こんといひし計に（のうつろへは）長月の在明の月をまち出つる哉

【古】秋風に山の木葉も色つけは人のこゝろもうたかはれけり（いかゝとそおもふ集）

【同】そこひなきふちやはさはく山河の淺き瀬に社うけ（あた集）浪はたて

【古】便なくなき名は沖に漕出なんよるへたもとに見かひもなし

【古】思ふともかれなん人をいかにせむあかす散ぬる花と社見め

【古】忘れ草何をかたねと思ひしにつれなき人の心なりけり

寛平の御時に屏風哥かゝせ給ひし（は集）よみて奉りし

三月に田うつを

山田すき春のたねをはまきしかと秋立身にはならしとそ思

あふ事のかたの涙に（は）袖朽ぬ海士のたく火は（のイ）胸に（に）もゆれと（し集）

【續後】植て見る松と竹とに君か代の千年ゆきかふ色もかはらす

別なは後忍へとそ空蟬のよをあひかたみせめていはまし

鋪妙の枕にたにもふさはこそ夢の玉しひ下にかよはめ

山吹のきぬおほくきてまたきたりし人に

古 山吹の花色衣ぬしやたれとへとこたへす口なしにして

朱雀院の御ともにつかうまつりて手向のやまにて

古 手向にはつゝりの袖もきるへきに紅葉に(を集)あける神や(かへさん)

古 いつくにか世をはつくさむ(いとはん集)心社野にも山にも惑ふへらなれ

同 吹風にあつらへつくる物ならは此一枝は(もとは集)よきよといはまし

泉右大將四十賀の屏風に

同 春日野に若菜摘つゝ萬代をいのる(いはふ集)心は神そしるらん

延喜御時月なみの屏風に

古 あら玉の年たちかへるあしたより待たるゝものは鶯の聲

古 我のみやあはれと思はむきり〳〵す鳴ゆふ陰のやまと撫子

七月七日ひくらしを

同 今宵こん人にはあはし七夕の久しき程に(ことイ　まちもイ)あへもこそすれ

うくひすの鳴し日

同 木つたへはをのか羽風に散花を誰におほせてこゝら鳴らん

仁和寺の中將御息所の家に哥合せむとせし時に花のさかりに

同 をしと思ふ心は糸によられなん散花毎にぬきて(いは集)とゝめん

同 思ふとち春の山へに打むれてそこともしらぬ旅ねしてしか

杜鵑初て鳴くをきゝて

同 子規鳴こゑ聞(はつ集)はあちきなくぬしさたまらぬ戀せらるはた

ならの石上のかたにて霍公(鳴しイ)を聞て

同 石上ふるき都の時鳥聲はかりこそむかしえけれ

同 主知ぬ香こそ匂へれ秋の野に誰ぬきかけし藤はかまそも

後 かゝみ山やまかき曇り時雨れと紅葉(はイ)あかくそ秋は見えける

延喜御時に御馬つかはして只今石山に參るへきよしあふせとあるに參りて

同 望月の駒よりをそく出つれはたとる〳〵そ山はこえつる

新古 逢事のかたみをたにもえて(み集)し哉人はたゆとも見つゝ忍はん

古(そうぐ法師) いさ櫻我も散なむ一と盛ありへ(古集)は人にうきめ見えなん

もとやすの親王五十賀し侍りけるうしろの屏風に

古 古にありきあらすはしらねとも千年のためし君に初む

法皇寺めくりし給ふ御ともにて

同 ふして思ひおきてかそふる萬代は神そしるらむ我君の爲

かへての枝を折て

後 此御幸ちとせかへてもあらせなむ(みてしかな集)かゝる山ふし時に逢へく

前齋院の后御くしおろしておこなはせ給ける時かの院の中島の松をけつりてかきつけ侍りける

同 音にきく松か浦島けふそみる諸も心あるあまは住けり

相坂にてあんしちにてすみ侍ける時に道行人を見て

これやこの行もかへるも別れつゝしるもしらぬも相坂の關

二條の后の御息所ときこえさせ給ひける時の御屏風の繪に田つた河の紅葉なかれたるかた書たるに

古 紅葉はの流てとまる湊にはくれなゐ深き浪や立らん

泉大將四十賀し給しに屏風の哥人ゝよみしに

夕暮は匂ふ草木のなけれはや散と見えにし紅葉とまれる
花やまにて人〻さけたうへけるに
後 山守はいはゝいはなむ高砂のをのへの櫻折てかさゝん
打たのむ人の心のつらけれは野にも山にもいさかくれなん
つらしとてもろはの山に隱なは我山ひこになきて恨みん
尋れは杉のゝこえて三輪山の末〳〵まつそ生そはりける
松山の水はかすともおもほえす戀しき君にしき涙そ立
音にのみならしの岡のさねかつら人しれす社くらまほしけれ
君か爲我やはつらきから衣かけてないひそいひかたきを
浦にやくもにすみつゝそ燃渡る海士のすさひに苅みるめは
錨おろす舟のつなては遲くとも命のかきりたえしとそ思ふ
獨ねはいかなる人か戀はする見つけてけるも煙もそ立
なにしかも袖のぬれけむ白浪のなこり有ても見えぬ心を
後朝忠 いたつらに立歸りにし白浪のなこりの袖のひる時そなき
拾 いつかたによるとかしらむ青柳のいと定なき人のこゝろを
山吹のはなの盛りは過にしをかへす〳〵も鳴かはつかな
思ふとち折て暮さむ岩つゝしいはぬ事をしいひ盡すとも
新古 春たにもありし心を夏衣いかにうすさのけふまさるらん
惜めともとまらぬ春もある物をいはぬにきたる夏衣哉
きのふよりかはれる事もなけれともけふよりや待秋の夕暮
拾 いかほのやいかほの沼のいかにして戀しき人を今一めみむ
おほつかなたれ鳥山と思ふにもをしのひしきも戀らさり凫
見ぬ人を心ひとつに尋れとまたしらすこそ戀しかりけれ
思ひやり心にかなふ物ならは一日にちたひ君を見てまし

岩のうへに苔の衣はうしろめた戀の涙はもらすもあらなん
後撰 逢みてはしにせぬ身とそ成ぬへき頼むるにたにのふる命を
君により我身そ辛き玉たれのみすはつらしと思はましやは
梅かえのくつる計にあらす共よそにも折てよを明さはや
戀しきを思ひみたるゝ世中にふかき夢路をうつゝともかな
稀なれはゆゝしと思ひし七夕にけふは劣れる身を如何せん
戀しさのなくさむ宵の明さらはしはしも物は思はさらまし
あふみのや深まの稻を苅つめて君か千年のありかすにせん
涙まよりおほくら山に積いねの積とも盡し君か千年は
法皇宮の瀧御覽しにおはしましゝに御ともにさふら
ひて瀧を題にて仰をにて
後 秋山にまとふ心を山河の瀧のしらあはにけちやはてゝむ
よしみねのつねより四十賀し侍りけるに遣しける
古 萬代を松にそ君をいはひつる千年のかけにすまむと思へは
北山にまつたけとりにまかりたりけるに
同 紅葉はは袖にこき入てもて出なん秋はかきりと見ん人の爲
仙人のすみかに菊わけて入たる所繪に書たるに
古 ぬれてほす山路の菊の露のまにいかてか我はちよを經ぬ覽
立田山こえ侍しにしくれふりしに
雨降は紅葉のかけにかくれつゝ立田の山にかくれはてなん
ふち井のためもと物よりかへるに
雲と見えて日を惑はすはなかれ出て瀧の門より消る水かも
山をのみあはれ〳〵と見てくれは鳴ひくらしの聲そ悲しき
しまのかもやたのからすを題にて哥奉れとおほせら

るれはやたからすを旬のかみに居しまのかもを旬の
しもに居て題のこゝろを
山閣したひの雲の間雁金のらうたにもある霞かゝはるも
天暦の御かりせさせ給て河内の國にやすませ給にま
かりかへりなんと申しを惜ませ給ひてそせいかあさ
なをよしよりとつけさせ給に
旅に出てせしことの葉に云しかとよしより思へ心くたけぬ
さ月人ゝあれととまらす
雨よりも袂なき身となりぬへしたえぬ涙にくちぬへけれは
御屏風にゆきくたる所
白雪と身はふりぬともあたらしき春に逢こそ嬉しかりけれ
春とのみ風はこしかとはかなくて老そしにける岸の姫松
秋風の吹上の濱の白菊は浪のよするか花の咲るか
みつのをの御門のかくれ給へるを白河にかへさのは
らへし侍しに
（後 罷左大臣）入すます荒たるやとをきてみれは今そ木葉は錦也ける（おり集）
又こき紅葉を見るに折しもしくれのすれは
（同伊勢なみたさへ集）神無月しくれにそひて古郷は紅葉の色もこきまさりける
人ゝ物かたりして世のはかなき事をいひて
みな人の昔語りに成行に布留の社の身をいかにせむ
山寺に籠りて哀なることを云て夜とまりて打なきな
としはへるほとにあめのふりけれは
（後）いつれをか雨ともわかん山伏のおつる涙も夜は（ふり集）にこそふる
家集不見哥
内侍のかみの右大將藤原朝臣の四十賀しける時に四
季の繪かけるうしろの屏風につけたりける哥
（古今賀）山高み雲井にみゆる櫻花心の行て折ぬ日そなき
夏
（同）めつらしき聲ならなくに子規こゝらの年をあかすも有哉
秋
（同）住の江の松を秋風吹からに聲打そふる沖つ白浪
（同）千鳥鳴さほの河霧立ぬらし山の木葉も色まさり行
（同）秋くれと色もかはらぬときは山餘所の紅葉を風そかしける
冬
（同）白雪の降しく時はみよし野の山下風に花そ散ける
さきのおほきおほいまうちきみをしらかはのあたり
にをくりける夜よめる
（古今哀傷）ちの涙落てそたきつ白河は君か世までの名にこそ有けれ
（古今戀）秋の田のいねてふこともかけなくに何をうしとか人の苅らん
右素性法師集一卷以古寫一本挍正畢

惠慶法師集　一

はしめのはる

あさりするよさの海士人ほこる覽うら風ぬるく霞わたれり

二月二日相坂こゆるほとに（イナシ）うくひすの聲をきく

後拾　ふるさとへゆく人あらはことつてむけふ鶯の初音きゝつと

關守にくちかためてそわれは行なきぬとつくな山の鶯

ある所に屏風の爲に正月山里に梅花ある家を男かいまみたり

我宿の梅はときはに匂はなん人めこひしとおもはさるへき（くイ）

二月山さとにさくらある所を男見る

宮こにも花なきならす山櫻尋て惜む心しらなん

三月藤柳ある家を男ゆく

こむらさき柳の糸によりませて花のにしきは我やとのもの

四月神まつる所（やイ）ほとゝきす鳴

神まつるしるしありても時鳥けふ初こゑ（へイ）を待てたる哉

五月菖蒲ふける所を男馬ひかせてみる

わか駒のつねはすさめぬ菖蒲草引ならへてはけふ社はみれ

六月よるやとの戸あけてなかめたる所

あけてぬるかひ社なけれ我宿のまきの板戸に人しいらねは（すイ）

七月たなはた（七日まつりしてイ）まつりてたらひに水いれてかけみる

天河かけをやとせる水かゝみたなはたつめの逢瀬しらせよ

八月相坂に駒むかへ

後拾　望月の駒ひく時は相坂のこのしたやみもみえすそ有ける

九月しかのやまこえ

霧もたち（つイ）紅葉もちれるうりふ山こえ惑ひぬるけふにも有哉

十月山さとにたかすへて人きたり

かりにくる人なかりせは昔みし都の事をいかてきかまし

十一月あれたる女（家にイ）琴ひく男きてとひたり

露霜もとまらぬやとにいとゝしくひく琴の音に袖そ濡ぬる

（闕題）

こく船の岸の藤波たかけれはまつ心をそよすへかりける

花おもしろうさきてすのこに男あり

とはさりし人もとふへく我宿の花のさかりをすくさすも哉

海のほとりの社にまつる人あり

おもふ事みつしほよする浦にます神のみ社つかへてそゆく

山里の垣根に卯花咲て女みる

卯花のさかりとなれは山里のかたゐかくする住居をそする

はつ秋

新古　秋といへは契置てやむすふらんあさちか原の今朝の白つゆ

馬にのりたる人秋の野をゆく

秋のゝ花に心をよせつゝそ駒うなかさぬけふにも有哉

人の家に（たに集）女ともきたり

新拾　我宿のものとのみ見は秋の夜の月夜よしとも人につけまし

月夜に笛ふきて男ゆく

月かけに笛のねいたくすみぬなりまたねぬ秋のよや更ぬ覽

山さとの人の家に菊の花あるし折てつくろふ

霜雪にあてぬさきよりきくの花つくろふ人の袖そ露けき

子日所
ふた葉よりあひ生してもみてし哉けふ契つるのへの小松と
　人の家のやり水のほとりに山吹さきたる
ちとせすむ水にかけさす山吹の花をのとかに惜むへき哉
　人の家に櫻さきたり
櫻花人の心のわりなさはあくともいはしちとせみるとも
　やり水のつらに山吹のおほくさけり水鳥あそふ
水鳥のなかるゝ河の山吹はかけをのみこそいとふへらなれ
　月おもしろき夜紅葉をみて人々ゐたり
もみちはを惜む心のわりなきにいかにせよとそ（かイ）秋の夜の月
　秋の月山にしかなく
秋の夜の月みるたにもあかなくに鹿の音さへも鳴そふる哉
　秋山のほとりに人〳〵ゆきてもみちみる
紅葉みに草の枕や結ふへきけふもくれなはあすもすくさむ
　田のほとりにかりする人あり
早苗とりおのか作らぬ秋の田をかりにきぬとや田主咎めむ
　正月ついたちころ人〻もろともにはつせに参るみち
　にて春日野をみやりて
霞わけ若菜つみにやとまらまし春日の野へもちかつきに凫
　おなしころ近江へまかるみちにかゝみの山のもとに
　雨にあひて
（後拾）かゝみ山越るけふしも春雨のかき曇りてや（やは集）ふるへかりける
　むかし人の家のありける所のまへなりける櫻のいと
　おもしろかりけるをみて
（拾）あさち原ぬしなきやとの櫻花心やすくや風にちるらん

　人ともろともにいちはら野の子日
二葉なるのへの小松にことよせてこ高くな覧かけを社まて
　やまとにまかるにゐてと云所いとおもしろし
（拾）山吹の花のさかりにゐてにきてこの里人と（に集）なりぬへきかな
　中務の君山さとにゐて春哥十ありけるをみる共題は
　みねの霞。谷の鶯。殘雪。春の風。（梅イ）さくらおそし。
　〔柳。岡の松。若草。戀イ〕
なきぬやとたちゐまちつる鶯は谷の内より聲そ聞つる
　のこりの雪
春立てのこりの雪は消ぬとも花をかたみにみてもへぬへし
　はるかせ
あらたまのひと夜計をへたつる（なるイ）に風の心そこよなかりける
　梅
にほふから〔下闕〕
　さくらおそし
山櫻まつに心をつくしてはをしまんほともいかにせよとそ
　柳
はるくれは梢もしらすあを柳のいとに心をよせみたる哉
　をかの松
かたらはむ人もなきかな山里は（のイ）をかの松風そよりほかには
はるをあさみ旅の枕を結ふへき草葉もわかき比にもある哉
　こ　ひ
古郷をこふる袂はきしちかみおつる山水いつれともなし
　ある所にさくら惜むに
櫻花まつとせしまに春くれはそならぬ事はおもひやはする

山里に人の許にて櫻のちるをみて

新古 櫻ちる春の山邊はうかり鳧世をのかれにとこしかひもなく

としかへりて二月になるまて待人の音信ねはいひやる

百千鳥聲のかきりはなきふりぬまた音信ぬものは君のみ

かうふりやなき

青柳の糸はみとりにあるものをいつれかあけの衣なるらん

東山に花見にありくとて山さくら

山櫻ちかくみんとの心にてけふはかすみにかくまるゝかな

いなりに哥よみてたてまつるとてしものやしろに

後拾 いなりのやみつの玉垣うちたゝきわかねき事を神も應へよ

なかのやしろ

いなり山みつすきなかにます鏡我をたてゝたのむかひあれ

かみのやしろ

思ふ事ならさらめやは千早ふる神のみまへのみくまくさ也

ふかき山にすむひじりの許にまかりてたつぬるにあんしちの戸をとちて人もなけれはかへるとで書つく

新古 草のいほりさしてきつれと君まさて歸るみ山の道の露けさ

同 ひしりかへし

あれはてゝ風もはらはぬ草の庵我はなくとも露はもりけん

ある所にかたわきて草合するに

拾 種なくてなき物草はおひに鳧まくといふ事はあらしとそ思

一月郭公まつ心

なかすともなくらんと社またれけれ山時鳥けふはいつそは

神なひのもりのまへをわたる

神なひの杜のありすの郭公一聲きかてわきやすきなん

かたらふ人の深草といふ所にありと聞てつかはす

深草のいへゐたへぬとせしほとに袂さへこそ露けかりけれ

返し

あさかりし人の心は深草のなかをわけてはとはしとそ思ふ

ある人のかゝみのはこに

朝日さすかゝみの山は曇ねと峯の朝きりたえすもあらなん

かたらふ人つくしにくたりてとし比おとつれてたよりにつけていへる

花とりをみても君しもわすれぬは都の方の人にそありける

返し

都とり君にをくれし春よりも聲なきよはる我としらすや

おほしまのなるとゝいふ所にてしほみちまさりて

新勅 都にと急くかひなくおほしまのなたのかけちは鹽みちに鳧

かたらふ人のとを國へまかるにかゝみとらすとて

續古 わかるれとかけをはそへつますかゝみ歳月ふとも思忘るな

五月五日めつらしき所にまかりて

後拾 かをとめて訪人もありや菖蒲草怪しく駒のすさめさりける

六月人海松院にすゝみにまかりたる

大井河岸にかけさすうみ松の風にやせゝの浪も立らん

梅津にてうふねのかゝりをみて

梅津河ともすうふねのかゝり火に底のみくつも隱れさり鳧

七月七夕

七夕のあふ夜のかつをいたつらに過す月日になすよしも哉

八月とをくまかる人にあふきをとらすとて

扇とてかりに羽（のイ）風を吹ほとにわかれん程やつくへかりける

おなし人かりの聲をまつ

拾 荻の葉もやゝうちそよく程なるをなとか鴈金音なかるらん（になとかりかねの集）

おなし北河原院にてあれたるこゝろ

後拾 すたきけむ昔の人もなきやとにたゝ影するは秋のよの月

むしのね

たもとかへするものにもか虫の聲衣の袖もそほちはてぬる

東山にて月あかき夜

ひさかたは手にとるはかり成に晃雲のゐるてふ寺に宿りて

きり／＼すの聲

から衣夜風涼しくなるゆへ（なイ）にきり／＼すさへ（まつイ）鳴みたれつゝ

鳥のこのやうなるうりをある所にたてまつるとて

我君のますへき千世の印には鶴のこにこそうりもなりけれ

なてしこをあるところにたてまつる

山かつのかきほなからにみるよりは色優るへき宿に移さん

返し

やとわかす露たにそむる物ならはもとの垣ほの色は替らし

或ところにうりやるとて

うりふ山秋たつ鹿のかりもりに靈けきめをもみつるけさ哉

おなし人の許にあをつゝらをこにくみてくりなつめ

まかりなとを花にませてやるとて

新千 繰返しまかきの内に花つめはいとまかりにもありとやは思（見る集）

返し

同 態と社くりはなつめれ曲り木に這（の）まつはるゝ青つゝら哉（こばイ）

九月はかり花見に人ゝまかりて秋野の花［本ノマヽ］霧を

玉鉾のみち行ちかふかり人のあとみへぬまてくらき朝霧

花すゝき

あき風にかすへてなひく花薄心よせある方やなからん

つゆ

ひろへとも袖のみ濡て留らぬは玉とみえつる露にそ有ける

しか

とを山のをにたつ鹿の聲聞てもてはなれてもぬるゝ袖哉

はぎ

こむらさきたか袖かけし衣そとみゆるは秋のゝはき成けり

きり／＼す

鳴聲も（はイ）我にてしりぬきり／＼す浮世背きてのへにましらは

くるかり

珍らしと思ひしなかに初鴈のまつとせしまにおいはてに晃

をみなへし

色に社われはみえけり女郎花なにもたかはぬ物にそ有ける

秋風においをなけく

秋風の吹につけてそ歎きつる世にへ（すイ）む程はみしかゝりける（りイ）

帥のおとゝつくしにくたり給ひて後西宮いきてみる

いとあはれなり

後拾 松風もきしうつ浪も諸ともに昔にもあらぬ音のする哉

なくなりたる人のにしの京に住し家にいきてみれは

籬のきくのあはれなるを

同 植置しあるしはなくて菊の花おのれひとりそ露けかりける

もみちをはしめてみる

から錦織つむ峯のむら紅葉みそむるけふはあからめもせす
かたらふひしりの隣なる所にきてとはさりけれは
親きも踈きもなしと聞しかとわきてしもやはとふへかりける
返し
玉鉾のみちゆきすりにとはすとも常に心に行かふものを
十月はかりはつせにまうてゝかへるに日くれぬれは
さほ山の麓にやとりて夜なれはもみちみへぬこゝろ
人ゝよむに
佐保山のかせの心もしらすして紅葉みすとや今宵あかさん
又のあしたに山きりにかくれたり
拾 紅葉みにきたる我ともしらねはや佐保の河きり立かくす覽
ふかき秋
くれなひの色とる山の梢にそ秋のふかきは先しられける
十月大井河のもみちみに人ゝまかる所に
大井河河邊の紅葉ちらぬまはとなせの岸になかゐしぬへし
十二月ある所の哥合させ給しに松にはの梅冬月池の
こほり
むらたつのやとれる枝とみるまてに松のみとりも埋む白雪
にはのむめ
白雪のふるとしなから庭の梅は花とかこちて匂ひやはせぬ
池の氷
涙よするあしのうらはも音せぬは池の氷やとちはてぬらむ
冬の夜の月
拾 あまの原空さへさえやまさるらん氷とみゆる冬の夜の月
あふみにひらと云所に人ゝまかりて題とも出して哥
よみ侍るに山河の紅葉
唐錦あはなる糸によりけれは山水にこそみたるへらなれ
よるのあらし
もみちゆへみやまほとりにやとりして夜の嵐にしつ心なし
ねさめのしか
人もこす隣たえわたる山里に寝覺のしかの聲のみそする
きしのほとりのきく
岸ちかくのこれる菊は霜ならて波をさへ社しのくへらなれ
水鳥涙にあそふ
みる人は沖津荒浪うとけれと態となれぬるをしたかへかも
はつゆきのみねをみて
氷たにまたやま川にむすはねと人のかきねは雪降にけり
つなてひくふねをみて
よとみなく浪路に通ふあま舟はいつこを宿とさして行らむ
なみの聲をきゝて
いそほりに騒く波たに高けれは岑の木葉もけふはとまらし
風のをとのたかきをきゝて
ひらの山もみちよのまはいかな覽岑のむら風うちしきり吹
かへさに北山よりこゆるに紅葉いとおほくちりかゝ
るに
山しけみ木のしたゆけは紅葉ゝも衣そほちぬ雨とこそふれ
あるやうことなきところより菊のうつろへるをいた
ゝきまいれは
山里にゝほふをみれはきくの花たきとのまかき思こそやれ
年のおはりにこよみのちくのもとまてまきよせたる
こゝろを人ゝよむに

まきよすることよみの心恥しくのこりのひらにおいみえに覓

　つこもりの夜としの行かふ心人ゝ讀に

ふる雪にかすみあひてやいたるらん年行ちかふよはの大空

　住吉に人ゝまうてゝすみよしといふこゝろをよむ

わかとはゝ神世のこともこたへなん昔をしれる住吉の松

　河原院あれたるこゝろ人ゝよむ

（續古）草しけみ庭こそあれて年へぬれ忘れぬものは秋の夜の月（しらつゆ集）

　とやまの軒はのみちよりたひゝきこゆるやうにする

　をみて

みるからにきえこそしぬれ軒は行人は露けき道やわくらん

　あるところにてなてしこを惜む

こゝろみにかへれは苦しなほさりに宿やからまし撫子の花

　あるところにすのあしくさのほたる夏の夜の月

あくまてもそこの月影みるへきに芦のうら葉の山に隱れて

　くさのほたる

水莖のあとふみならす我ならは草の螢をよそにみましや

　なつの夜（か集）の月

時鳥なにならぬかな夏の夜の月みるほ〔マヽ〕におもひあはせて

　しけゆきこにをくれてかなしふと聞てつかはす

契あらはまたは此世にむまるともおも變りしてみも忘れ南

　或人かはらに出てせうようするに風のいみしう吹は

　いひやる

青葉なるかもの河原にむれゐつゝあけの衣は凉しかるらん

　返しよしのふのあそう〔み歟〕

夏衣立ちいてゝすゝむ河かせにかへりてけふは人そ戀しき

　さうしのゐに須磨の浦のかたを書たるにかみの社に

　舟より行人の涙のたかけれはたよせにみてくらたて

　まつる

たよせとは思はさらなんわたつうみにいのる心は神そ知覽

白雲に色みえ紛ふみてくらたよせにうけよかみの此かみ

　おなしゐにたひゆく人十月はかりにもみちのもとに

　やとりたるを

行末も紅葉のもとにやとらまし惜むにたひの日毎（敦集）へにけり

　せんさいあはせのところ

かちまけのかすには露を置てやは花と花との色にくらふる

　わらはへはかたてゝとりとる

おもふをなきよなるへし村鳥のけふは鳴ねもたえて聞えぬ

　もみちにとりのゐたるところ

紅葉みてかへらんかたもおほえぬを呼子鳥さへ鳴山路哉

　いしにうみまつのおひたるあるところにたてまつる（の集）

（續古）うこきなき岩ほにねさすうみ松の千年はたれに涙（を）もよす覽

　みなつきはかり河原院にかれこれあつまりたり

跡絶えて荒たる宿の月みれは秋のとなりになりそしにける

　あるみこたちの御いかのすはまに

千歳すむ水のなかれはいとゝしくそこの梢のかすをさす哉

　又

よろつよの涙のまなくもよする哉鶴と龜とのあそふ濱へに

　或人以二家〔定歟〕家卿自筆本一書寫。予又以二其本一寫レ之。魚

　魯章草之誤可レ有レ之。重而得二證本一可レ有二挍合一而已。

　明曆二丙申五月廿四日　　徵碧

右惠慶法師集一卷以屋代弘賢藏本挍正畢
右一卷押小路家舊藏の古寫本を以て挍合す
品田太吉識

安法法師集

のちのよにみん人はすけるやうに思へけれとおほくのとしにかのはらの山のすまゐ心ほそき折ふしの哀なる事のたえかたけれは春の花のさかり秋のもみちの落るほとに川風のあはれ夜ふかき程をしとりのあかつきかたのころ月かけのいけみつにうかひ雁の草むらにかゝり哀なる折ふしに人しれすいひあつめたる事の葉さま〳〵につけつゝおほかれとたゝ一ふたつそおほゆるを書あつめたる也ついたち春たつつこもりの夜

暮はつる年惜みかね打ふさは夢みんほとに春は來ぬへし

雪降と衣かさねし程もなく花のひもとく春は來にけり

　春の日ある人たいゝたしけれは

我やとの今朝の朝霧見渡せはさほの河原に立わたりけり

　秋のあらし

秋の夜の夜半の嵐のなかりせはね覺の床に起ゐさゝえまし

　花すゝき

籬より穗にいてゝみゆる花薄誰かふみ結ふえたと成らん

　女郎花

吹風にたくひてなひく女郎花たはるゝさまに人やみるらむ

　白露

續古 荻の葉にそよときこえて吹風におつる涙は(や)露や(と集)おくらん

　秋はき

ほり植ゑした紅葉する秋萩にしかなくほとは空に知るへし

鹿

何處にか鹿の初音はきこゆらん萩の下葉のみまくほしさに

來るかり

くや／＼としたにまたるゝ雁金は音つれつらし今そ鳴なる

なく鹿

紅葉はや風の吹らんうち侘てうらこき聲に鹿のなくなる

きり／＼す

我かとく物思ふへしきり／＼すぬとも聞えてよもすから鳴

六條のかはらの院にむかしむつのくにしほかまのうらうきしままがきのしまうつしつくられたりけれはおとゝかくれたまひてみつねつらゆきなときゝつゝよめりけれはそれはいとかきりなけれは人のよまぬを心みにてしのひによめる

年ふりてあまそあれたるしほかまの浦の煙はまたそ殘れる

うきしま

おき津波たてはたゝよふうき島は昔の風のなこりこけり

筑前守つねみつのきみのくたりて九月一日の夜夢にみえたりけれはあひおもふなかなれはいひやる

夢にても夢としりせはねさめしてあかぬ別の物はおもはし

前和泉守順のきみのつかさ給はらてあふみのやすのこほりにあるにいひやる

世を海に思ひなしてやちかつえのやすのすまゐへ君は行覽

山のそうしやう日のにともゆひといふ所にやとりていますかりける

船路にてともゆひ里に宿すれはとけてねられす涙の聲して

みかはのかみためもとかもとより世の中のはかなきよしなとかきつゝけて哀なる事ともいひおこせたりけるかへり事のおくに

定めなき世をみの上に思ひつゝあかし暮すは誰によりてそ

おなしきみのきやうにありける時すやうをさけのれうとておけりけれはかくなんいひたりける

ためもと

櫻木をおきてきつれは夢にてもうとからんとは思はさり凫

駿河守かねもりのきみあふところことに院のしほかままいりてよまんといゝけるをこてくたりにければふみつくりてくはへてよめりけるやらすなりにけり

鹽竈の浦はかひなし富士の根を寫さましかは來てはみてま

和泉守やすひらのきみあやむしろにふみつくりてくはへてありける返し

打ふさすあやの蓆の中よりそ錦に織れるふみもみえける

人〻いつみぬるくして草の色春なりといふ題を讀に

岩間なるいつみぬる〔か歟〕けになりぬれは水際の草に春は來に凫

つらゆきをよみあつめたる歌のしふを惠京かりてかへすとて哥よめるにみな人／＼よみし

きの家のくせにのこれる言の葉は花社たむれちりの上まで

これは本あることなり。

天元二年〔圓融〕大風ふき大水いてゝみなきもなくいけもうつもれてのちきみのとへるよん〔マヽ〕こ

松もなく池もあせぬるやとなれは風も音なく月もかけせし

さかみのかみしけゆきのこむつの國にはゝきみのもとにありけるか人にころされたりけれはゝのかなしひのうたともよめるをみていひやる

こゝにこひかしこに忍ふよゝ乍夢ちならてはいかゝ逢みむ
さきたては藤の衣をたちかさねしての山路に露けかりけん
　神なつきはかりにひたへいきけるにこしのを山をみ
　るにもみちのなかりけれは彼是してよめる
こしのをの山も紅葉のまたしきにほかより時雨くるまそ㒵
　ひらにいきてつける程にやまにしら雲かゝりたりけ
　るをみて
千早振ひらのみやまの紅葉はや夕かけ渡す今朝の白雲
　つなてひきつゝゆくをみて
白浪のことけかれねは賤のをのつなていそける舟も行かふ
　山河よりもみちなかるゝをみて
山河の水かさまさる紅葉はゝ水上にこそあめとみゆらめ
　ねさめに鹿のなくをきゝて
紅葉ふるこの下風に夢さめてうらなき鹿の音をも聞かな
　時雨のふるにもみちのちりまかひけるをみて
おほ空に木末やこゝろあはすらん時雨と共に木葉ふりしく
　八月十五夜にあみたの念佛しけるその夜
西に入月のひかりを今宵より露の身にこそやとしはしむれ
　十二月廿日こよみのはてぬるを人々よむに
まきよする暦をみれは春日野の若菜摘へき程も來にけり
　いなりやまのかけの池にうつるをみてゑしのきみよ
　ませたまひけるに人々よむ
池の面にかけを移せは稻荷山みつのみかきに波やよすらん
　惠慶といふ人のはしめて來てよみていれたる
ぬしや誰池も泉もむかしにてそれか何かは君そすみける
　とあるかへし

みな人の栖の家はかはらねと身をしつめたる我そことなる
　かへるかりのあかつきかたに鳴けるに人よみける
いまなんと別に鳴か雁かねは花をぬさにて我はたむけむ
　正月一日
きのふまていつこなるらん春霞年のかへれは立歸り來る
たれならむ藤の花をしまんといひし程にかくれにし
　人をこひて
惜まんといひし花たに散らぬまになくなりにける命そけり
　そうの南やまにこもりていますに
新古 世をそむく山の南の松風にこけの衣やよさむなるらん
　いつみのかみやすあきらのおやのふくにてにひいろ
　のあふきおとして歸にけるにかきつけてやる
墨染の扇の風は秋よりも心すこさはよゝまさりける
　ひんかしやまに鹿のはしめて鳴けるをきゝて
後拾 籬なる萩の下葉の紅葉（いろを）みて思ひやりつゝ鹿の（そ集）鳴なる
　人々あつまりて初紅葉よむに
我やとの紅葉の錦たちつれは衣かへすと人やみるらむ
　ほとゝきすさつきなくをきゝて
たをさしてゑひにけらしなさみたれにたちゐ亂て鳴郭公
　月のいるををしむに
惜め共甲斐なく月の入ぬるを雲路をしらはおくれさらまし
　六條の大納言殿の弁のきみのおはしてよみておきて
　おはしける
池深み松の綠の色みれは今一しほは波そそめける
　とあるかへし

風ならて問ふ人もなき古里の松にかひ有春も有けり
ひこの少將あふきに大井川にむまひやしたるかきて
よませ給へるに
望月の駒ひきたてゝひやしけるみはやかつらの渡り成らむ
たいともしてよむにあきかせをさくりたりし
拾 夏衣またひとへなるうたゝねに心して吹け秋の初風
いせといふ人うたとものたいかきあつめてやれるに
ひさき生る河原の宿の遠近にみゆるもの／＼君にいはせむ
いけつらにかしらしろきおんなのうきなきつみける
をみて
老人のつみつる物はさはへなるよをうきなきの下葉成けり
せんさい宮のれうとうもちきのあそむほうしになり
てひんかしやまにありけるにしゝう(侍從)のおもとの
もろともにありてかくこゝろほそきすまゐをなん心
口るとておくに
世を捨る人におくれぬ人のすむ秋の山へを思ひこそやれ
大宮のすけのきみひはた色のうちもをほうしのため
にかりてかへすとてやれたりけるを
よもの海に年經る蜑のかつきつるもゝいとかくは亂れさる覽
とあるかへし
汐さして見えもしつらむ綿津海の蜑の苅もゝかる人からに
又かへし
年をへてよもの數多の土佐海にかくてみるめも乏からしを
又
とこの海に淸き汀の年ふれとみるめもよせん物とやはしる
つくしにくたる人おほくのうたこひたまへる人に
とまれ共いきの松原おもひやるときはにのみも詠むへき哉
宮のすけのきみまくらをこにうちとりて又のあした
におこせたまへる
五月雨のよも明かたくしきたえの枕さためていかにねつ覽
かへし
しはしこそ枕ともみめ又もこは夢かたりせしとおもふ枕を
九月
月かけも嵐の音もさえゆかは思ひあはせてこひんとすらむ
にしのきやうにて
神無月紅葉ふる里あれにけり時雨とみえて秋ぬるれは
かせのもん梢の色のくれなゐは霜のおくにそ色增りける
かへし
我はこの時雨のあとの雲をみておのれ梢の錦とそみる
しら菊のまかきのうちに咲みたれたるをみて
大空にこめたる菊のま垣かもほしまたらにて花のみゆるは
後拾 入道少將の御もとにいひやりける
いまはとて世をのかれけむよゝよりも思ひ社やれ木葉散頃
ある人のかすみきりをみてはしめよめるによみつけ
たる
谷の霧峯の霞はいとことか春と秋とはいもせ山かな
ある人きみの御ふみとてとしの內ぬえに哥よみにく
はりて
古しへは待れし春もまたれすや花につけても問つへけれは
たいこのさすのふみの山にこもりたまへるに
大空のゆかりと聞はまたみねと雲に埋る跡そゆゝしき
しはすにわかなのあついものをこせたれは

春日野はゆきまもあらしふる年はいかてにたるそ春の若菜は
　返　し
君かため年をつまんとしめし野に若菜は雪を打はらひつる
　十月ついたちに山〳〵のもみちわたれるをみて
おほよその野山の紅葉みるからにまつ身の上の霜を社思へ
　かうしんにたいをさくりてかりまつこゝろを
衣うつ音にあはする雁かねはいつこはかりにかりはきぬ覧
　そのかうしんの夜は七月七日なりけりたなはたのこ
　ゝろ
彦星のあかぬ別の涙ゆへあまの河波たちやそふらん
　秋の月一日のしくれに
いかならん奥山かとの初時雨都はたゝにこゝろほそきに
　てんわうしよりのほるとて舟にて
むかしみしなにはかたにそこかれゆく
　といふに恵慶
まつといふなりすみよしのきし
　さきの周防守もとすけむまのせうかねすみを題にし
　てよむ花のもとにてめつらしき人にあへる
春はたゝ花と人とに暮してんいつれもたえんことの惜さに
　きた山にはなの折人のもとにゆきて
花の色もまた鳥の音も夜深きにいかなる人の住家なるらん
　帰るとて
春山の花に折とる袂をそ宮古に問はゝつとゝいふへき
　かれこれきた山に花みにいかんもろともにとあるを
　すそうなりとまりていひやる（かわのたよりに集）
（新古）身はとめつ心はおくる山櫻使りの風に匂ひおこせよ

　ひんかし山の花をみて
山はるけ霞のなかの櫻花ちるも散らぬもみえぬけふかな
　三月十一日もとすけかねすみなとしてよめる
あれにける宿には花もしられねは山の櫻をよそにこそみれ
　ひやうふきやうの宮にてあめのうちの花といふこゝ
　ろを
そほつとも花のしたちをやとはせむ匂ふ雫に心そむへく
　藤のはなをみて
年ふれは色こそまさる藤の花いせゆく笠の物とこそみれ
　三月つこもり
世にあらは又もあひなん春なれと命を捨てけふ惜らん
　天王寺にてなみのこゑをきゝて
宮古出ていくか計に成ぬらんおほつか波の浦にようするは
　返　し　　恵　慶
難波かた名にからき世も思ひ出む覺束なみに袖はぬるとも
　おなしてらにしひのかしはきにいみしくなりたるを
　みて
かしは木もこのめもをいて有物を昔の人のみえすも有哉
　ある人にかはりて　　恵　慶
楢の葉のうすゝく程も君か來て問につけてそ露けかりける
　かんきみのこのかはらの院にこむとちきりていませ
　さりけるにいひやる
松もおひ岩をも苔のむすふまて命くらへに問ぬ君かな
　返　し
我も行て衣の袖にかきなては君かいはほの苔もみえしを
又

三千とせに一度なつる袂をは二葉の松もいかゝまつへき

四月一日

過にける花を恨むと詠れはおもかけにこそ花も詠むれ

春霞いつくはかりに歸らむたちとゝまれといひややらまし

あめの中の花

霞たにもいかならなくに花を唯いかならなくに袖朽ぬへし

二月はしめてはな櫻をみて

けふそみるはるの櫻は咲にけり殘の雪と思ひける哉

おいを思ふて三首

老にける身の上なけはおちとまる涙のかけにしはさみえ覺

老ぬれは南おもてもすさましやひたおもむきに西を頼む

四月廿日より郭公きくらむやといへるに

かきわけて鳴かはそこの郭公へたつる人のきかぬなるへし

左衛門とのゝ大らうきみのおはせんとのたまひける

にまたおはせぬにかくれたまひけれは

かゝりける露の命を置なから花みにこんといかていひけん

見ぬ人を惜む涙のためしには我袂をそのこし置へき

六月三日かゝのすけはなにことひとつのたまへとい

ひはむへれは

君くれて心細きもおもほえす秋のゆふへは我をとはなん

返事又かへり

秋まてと露のいのちの頼れす夜な／＼とこそ云へかりけれ

何事をいひのこさまし世の中に老のかた身と人のいふへく

あきのひかゝのすけないきなとしておいをなけきて

新古 もゝとせの秋の嵐はすくしきぬいつれの暮の露と消なむ

むかしみし人みちにおいはてゝあひてともにおいたる事をいふに

命あれは又老人にあひにけり誰さき立てこひんとすらん

なかかはのたえはてにけるあとをみて

なか川の水たえにけり末の世は秋をも待てかれやしにける

天元二年の大かせふきける折のうたのおいたるよし

を

けふまては昔なからに老にけりおくれさきたつ末そ知れぬ

屛風のゑにたひ人のたかるをみて

我やとの門田の稻も苅かねて歸らん駒のためとまつらむ

おなし屛風につり舟おきに出たる

いく雲井漕いてつらんわたつみの海士の釣舟年をはこひて

くらの内侍いまはとてひむかしさかもとにいきける

をきゝてやりける

百敷によをへし君かのかれ行みまさはとこそ思ひやらるれ

このをとゝ弁のきみのこうませたまへりける七夜の

哥人よませたまへりけるに

高砂のむまこの松の枝なれは千年の風もあふくへきかな

あるとのはらよりひやうふにこまひきしらかはにし

たるをかゝする所によむへきうたともまつりのかへ

さにきたのにゑひさまたれたるさまとかゝするをな

ともいはししのひてよめとありけれは

後拾 白河に水かふ青の駒ひきを波のたつとやよそめしつらん

とゝのへし加茂の社の夕たすき解（かへる集）るあしたそ亂たりける

右安法法師集一卷以村井敬義藏本書寫一挍畢

登蓮法師集

霞

霞たつ春のみ空とおもはすはけふも雪けの雲とみてまし

櫻

櫻花ちりなん後の面かけに朝ゐる雲のたゝん〔と脫歟〕すらむ

落花隨風

櫻さくなからの山に風吹はそらにもみゆる志賀のうら波

曉時鳥

曉のしるくもおもはぬ郭公なれもやこゑを鳴わたらなん

納　涼

夏深みひはらのそまのいはま川結ふ手ヿに秋そこもれる

水邊晚風

難波かたあしの葉末に風吹て螢なみよる夕まくれかな

夏夜月

月かけは秋のみそらのこゝちしてよる社なけれ絕ま成けれ

草　花

その色とおもひもわかす花といへは秋の野ことにちる心哉

朝過野徑

過かてに覺るものは白露の玉ゐる朝のまゝの萩はら

月照落葉

はゝそはら雨と木の葉の降まゝにもりのみ增る月のかけ哉

月前懷舊

千載 諸ともにみし人いかに成にけむ月はむかしにかはらさり覺

旅宿月

續詞 故里をおもひやりつゝ詠れは心ひとつに曇る月かな け集

刑部卿忠盛みまかりて後なか月の廿日ころにかのあたりの人のもとへ申つかはしける

秋風のみにしむよはのね覺にはいかゝと問し人そかなしき

母のそにて山寺にこもりてゐたりける人をとふらふとて

歎くらむすかたはみねと身をつめはいかゝ露けき秋の夕暮

九月盡

あすよりは小田の鳴子も引かへて時雨の音にならんとすらん

深夜時雨

小夜深みしくれてわたる音聞は思ひもわかて物そかなしき

旅宿雪

よそに社かひのしらねは消たつるいく夜に成ぬ雪の下ふし

戀

枝かはす契はこりぬ後のよもかゝるなけきの身とも社なれ

君もうし逢すは我も忘れなてつれなき人そふたりこける

海邊旅宿

續詞 みさこゐる磯の松かねまくらにて鹽かせ寒くみ集あかしつる哉

正實不滅度

詞花 世中の人のこゝろのうき雲にくもかくれする有明の月

海路晚冷

あはち島しほのとゝゐを待ほとに涼しく成りぬせとの夕風

海上晚望

ゐなのよりおまへの沖を見渡せは波まにきゆる海士の釣舟

無　常

昔みし人はさなから薄氷おもひしとけはあちきなのよや

明ゆけは葉末にのほるしら露の風まつ程や我かみなるらん

山海空弔也

さりともとやへのしほりに入しかとそこにも老の波は寄覧

右登蓮法師集一卷以無類本不能挍正矣

登蓮法師集補

續詞花雜中　陵園妾の心をよめる

松の戸をさして歸りし夕へよりあけるめもなく物を社思へ

千載雜中　述懷の哥よみ侍りける時

かく計うき世の中を忍ひても待つへき事の末にあるかは

同物名　かささのいはや

名にしおはゝ常にゆるきの杜にしもいかてか鷺のいはやすくぬる

同釋教　維摩經十喩此身は夢の如しといへる心を

驚かぬわか心こそうかりけれはかなき世をは夢と見なから

新古離別　わかれの心を

かへりこん程をや人に契らまし忍はれぬへき我身なりせは

新勅撰秋上　八月十五夜よみ侍りける

數へねと秋の半はそ知られぬる今夜に似たる月し無けれは

續古今秋上　月照流水といふことを

月影を氷と見てやすきなまし岩もる水の音せさりせは

續拾遺秋下　月哥の中に

清見潟月すむ夜半の村雲は富士の高嶺の烟なりけり

玉葉戀四　題知らす

うき人にうしと思はれん人もかな思ひ知らせて思知られん

續後拾遺戀四　題知らす

鳰ゐるすさの入江にみつしほのからしや人に忘らるゝ身は

九月盡によめる

玉葉秋下 年ことに變らぬ今日の歎き哉をしみとめたる秋は無けれと

つくしへまかりける道より都へいひつかはしける

同旅 古里を戀ふる涙の無かりせは何をか旅の身には添へまし

題知らす

新千載戀三 結ひける契りそつらきともかくも人をは今はいはしろの松

題知らす

新拾遺雜上 くまもなき月見る程やわひ人の心のうちの晴間なるらん

羇中送日といふことを

新續古今旅 有明の月影見れはすき來つる旅の日數そ空に知らるゝ

大納言公通卿家に十首歌人に讀せ侍りけるに郭公を

月詣四 いかで我思ひ知らせん郭公待つよなからにつもる恨を

仁安二年經盛朝臣家歌合に草花。月

秋の野の花に心をそめしより草かや姫もあはれとそ思ふ

承安二年廣田社歌合に海上眺望

なかめやる船路は跡も無かりけり恨や深き松浦さよ姫

治承二年賀茂社歌合に霞。花。述懷

八重深く野もせの霞たちにけりいつくか室の八島なるらん

新後遺春下 年ことにそむる心の印しあらはいかなる色に花の咲かまし

此世にも猶驚かぬ心哉いつを限れる夢路なるらん

羣書類從卷第二百六十八

和歌部第百廿三　家集四十一

林葉和歌集第一

春哥

花園の左大臣(有仁)仁和寺にて立春の哥あまた人〻によませられ侍しによめる

春きぬと人こそいはめいつのまに今朝鶯のやとに告らん

鶯は春となけともなよ竹の枝にも葉にも雪は降つゝ

山里はたな井の氷とけ行に春きにけりとくみて知哉

きさいの宮の御方に哥合あらんとて九條太政大臣(伊通)よませ侍しかは立春の心を

いつしかと朝日の影のしるきかな長閑かるへき千世の初春

左大將(實定)家にておなし心を

新古 春といへは霞にけりな昨日まて浪まにみえし淡路島山

大納言(實國)家哥合に

春のくるところはわかし物ゆへにあしたの原の先霞むらん

皇太后宮太夫(俊成)十首哥讀せ侍しに春たつ心を

春は今朝越ぬとおもふにあふ坂の關の杉むら猶霞むらん

中院入道右大臣(雅定)家にて人〻十首哥よみ侍しに立春の心を

打たゝき春やきぬらんこやの池の氷のとさしはや明てけり

又ある所にておなし心を

鶯の初音はやかて春なれはおひもなれをやしるへにはする

右大臣家人〻に百首哥よませられ侍しによめと有しかはおなし題を五首

雪のうちに春くるとしと鶯もかそへけりとは今朝そ知ぬる

いつのまにけさ引かへて難波かた今は春へと霞こむらん

年の内に咲にし梅にけふよりそをのか春ともつけよ鶯

春來ぬとけさ告渡る鶯は涙の氷まつやとけぬる

月よめは心のうちに立春をいかて霞の空に知らむ

元日の心を　哥林苑

昨日見し梢の雪も鶯の鳴にしあれは花かとそみる

多春採若菜といへる心を　同

わか園の若菜をしめて都人いくらの春をつまむとす蘭

子日のこゝろ　同

君か爲子の日の松をひきつれて千世を手ことにおさめつる哉

大納言(實定)家に十五首哥よませ侍しに霞を

外山には霞しにけり何方か我しめし野の荻の燒はら

師教朝臣家にておなし心を

春霞すゑのはらのをこめつれはあさる雉子の聲のみそする

海邊霞　　　　哥林苑

涙こしにみつゝこき行あはの島小松かくれは霞へたてつ

遠村霞　　　　同

昨日われ宿かりくらし過てこしこやの渡はかすみ隔てつ

此里もさこそみゆ覽きさかたやあまのとまやは霞こめつつ

霞籠島　　　　同

春くれはまかきの島にかけてほす霞の衣ぬしや誰なる

清輔朝臣哥合し侍しに海上夕霞

夕霞のしまをかけてたつまゝに海人の友舟數そ消行

大納言(公通)家十首哥よませ侍しに夕霞を

(月詣)ゆふなきに浦(ゆら集)のと渡る海士小船霞のうちに漕そ入ぬる

霞の哥とてよめる

宮木おろす杣山人に立そひてともにたなひく朝霞哉

よさの海は霞へたてゝいつかたか千舟よるてふ大わたの浦

あるところの哥合に

久堅の天のかこ山おしこめてつゝむは春の霞なりけり

經盛卿家哥合に

たつのゐる蘆邊をさして難波かたむこの浦まて霞しに鳧

加茂哥合に

しめはへて賤のあらまく小山田の春のかこひは霞なりけり

海邊の霞といへる事を人々よみ侍しに(「の」脱歟)

難波かた夕あさりする蘆田鶴の聲は霞ほかにそ有ける

石見かたふかく霞の成行に漕はなれぬるほとを知哉

夕霞しはしなこめそあひきする野島の蜑の袖かへるみん

よさの海に島こき出る釣舟を又立かくす夕霞かな

あゆちかた汐干に立る白鶴の聲は霞にまかはさりけり

又霞のこゝろを

何となくあれ田にかよふますらおのやかて霞に立隱れぬる

はゝこつむ乙女か袖は夕間暮霞にのみそたな引にける

さらぬたにおほつかなきを夕つくよいさよふ峯に霞棚引

苗代の水にをりたつますらおはなにと霞にたちかくるらん

中〳〵に我は霞にまかひぬとをち行人のしらす顔なる

賀茂の哥合に人にかはりて

しなの路やみさかをのほる旅人は霞をこゆる物にそ有ける

霞の哥人々あまた讀侍しに

旅人や勢田の長はしたとるらん引わたしてもみゆる霞か

天さかるひなのなかちをはる〳〵と絶まもみせぬ夕霞哉

春霞あへの市路をこめつれは姿を聲にかへてける哉

あさほらけ木曾路の橋を見渡せは霞もはやくかけてける哉

關路霞　　　　哥林苑

何とこは音羽の山の夕かすみ人めはかりの關かたむらむ

源侍從師光君の家にて鶯の哥あまたよみ侍しに

(續後拾)うくひすの(「か」脱歟)鳴て木傳ふ梅かえにこほるゝ露や涙なるらん

朝またきすみにむせふ鶯はをのか古巣をとめやかぬらむ(「て」歟)

春雨にこぬれかくれて鶯の枝のまに〳〵うつろひそ啼

梅のはな折てかさゝむ鶯や香をなつかしみ袖にきぬるを

鶯のものうかるねに啼なるは春にしられぬ宿のしるしか

ふるす出て梅かえになく鶯は宮古も雪の消すとや思ふ

經盛卿家哥合に

梅か香に思ひやわかぬわきも子か折袖ちかく鶯のなく

大納言(實房)家にて鶯を

鶯の鳴つる枝は手折とも聲の色こそとまらさりけれ

鶯爲春友　　哥林苑

竹になく鶯なから春くれはみな我友といふへかりけり

曉　鶯

をのれさへね覺にけりなよ竹にまたふしなから鶯のなく

右大臣家百首内鶯五首

梅の花咲やをそきと色も香も我しりかほにきぬる鶯

いくほともすみはつましき宿とてや花のねくらに鶯のなく

梅の花散しはてなは百千鳥竹のふしとに枝うつりせよ

絕すのみかくしきなかは鶯の花ふみちらすとかはゆるさん

枝をにうつろひ鳴は鶯の花のねくらや住うかるらむ

曉鶯といふ事をある處會に

なきていぬる妹や折つる梅のはな告めかほなる鶯の聲

雪朝聞鶯といへるを

雪をおもみ鶯いたく啼なるははらひやあへぬ梅の花笠

哥林苑にて人〻十首歌よみ侍けるに梅のはなを

吹風に梅のあたりをしりぬれは散すもえこそ恨さりけり（れ歟）

清輔朝臣家哥合隣家梅花

梅の花色はとなりの物なから香はあるしをもさためさり皃

師光家にて人〻梅哥あまたよみ侍るに

わきも子か袖やふれつる梅の花あやしきほとの香に匂ふ覽

我せこは手折てもみよ梅花それやとかむる袖のかならぬ

袖はぬれ香はうつるとも梅花おもてなき名をたゝむとそ思

雪の色をさこそうはゝめ梅の花妹か香をさへ盜むへしやは

やみなれとしるくは有を梅花色をもみよと照す月かけ

梅花ちりかふ時はめに見えぬ風にも春は色かやはなき

過かてにしつえを折は梅花あやな梢の露にぬれぬる

春風はやゝもふかなん梅花ちらぬものからにほふはかりに

社頭梅花といふ事

神垣のたよりに立る梅花鶯そ來てねきと定むる

梅花悉開　　哥林苑

鶯や木をにきつゝぬひつらん笠とも咲る花の風かな

梅花風靜　　同

忍ひ妻くるかと思ふ吹風に枝もならさぬ梅のにほひは

梅花薰曉

梅かゝそねさめの床にかほるなる今鶯や枝うつりする

梅花聚人

しるしらぬ人まねきけり春は猶梅の立枝そあるしなりける

心漸在花といへる事を

松もひき若菜もとりつ今は又思ひ立なん志賀の山越

故鄉柳

古鄉のかはらの松は常磐にてそともの柳春めきにけり

隣家柳

こち風になひく柳の糸みれは隣よりくる春かとそ思ふ

爲業入道哥合雨中柳

春雨の心ほそさを青柳の糸とも枝にかけてみすらん

柳夾水

見わたせは波のあやおる池水をぬひこめてけり青柳の糸

水邊柳

こするふく風もや水にやとるらむ底に浪よる青柳の糸

千載 浪かくる立田河原のふし柳梢はそこの玉も成けり

青柳風靜

うるはしき御代のしるしか吹風にかたよりもせぬ青柳の糸

歸鴈をよめる　哥林苑

櫻咲山邊を過る鴈かねはこしの白根を越ぬとや思ふ

散かゝるこしちの雪にめなれてや花をみ捨て歸る鴈かね

刑部卿賴輔朝臣家の哥合におなしこゝろを

去年の秋の返るをは雁かねのやかてをのれそ書つらねける

春駒をよめる

詞花 まこも草つのくみわたる澤邊にはつなかぬ駒も放れさり覺

故鄕の春駒といふ事を哥林苑

淺茅生と庭こそならめ主もなき駒さへあれてみゆるやと哉

遠見春駒　同

はなちつるたなれの駒もみえわかぬ遠里小野の春の夕暮

殘雪　同

あやにくに春をしらする梅かえに猶ふるとしとみする白雪

春月　同

菫つむ野をなつかしみねたる夜は我ため澄る月かとそみる

すみれをよめる

春の野に咲すさみたるつほ菫つみゝつますみ今日も暮しつ

採菫日暮

菫草摘暮しつる春の野に家路をしふる夕つくよ哉

春日祭　哥林苑

すへらきの戴きまつる春日山けふはさる日と神も知らむ

稻荷詣　同

杉のはゝ霞にこめてみえすとも祈る徵はいなりかくれし

春野　同

雲雀あかる春の野もせに乙女子か袖をかゝくと摘は何そも

植木待花

我うへぬふるえの花を待たにも春は梢にめかれやはする

逢樵夫問花　同

咲さかすさこそ問とも山人よめくまん枝を折そへてくな

花をまつ心を

心有かこゝろのなきか吉野山花待ほとの峯の白雲

中納言(成範)哥よむ人々をすゝめて法勝寺にて十首歌よませ侍しに花二首

千載 みよし野の山下風やはらふらむ梢にかへる花のしら雪

露なから折てかさゝん山櫻雫に袖やしはしかほれる

いにしへ百首哥よみ侍し中に

よし野山峯こす風に散花や高しの浦によする白浪

忠盛朝臣家にて人々花哥よみ侍しに

花盛しかの山風吹ときはさゝ波よせぬ木の本そなき

清輔朝臣家哥合に

櫻咲春にしなれは遠近の山のはをにかゝるしら雲

重家卿家哥合に

みよし野の花咲ぬらしこそもさそ峯にはかけし八重の白雲

左大將(實定)家にて花を

花の色をあかすなかむる俤やうつろひゆかん時なかるへき

大納言(公通)家十首會におなし心を

新後拾 待しよりかねて思ひし散をのけふにも花の成にける哉

俊成卿十首會に又おなし題を

續後拾 山高み峯の櫻をたつねてそ都の花はみるへかりける
中宮亮季經朝臣家哥合に
風をのみなにか告めん櫻花手折は袖に散やかゝらぬ
師光君の家にて人ゝ花の哥よみ侍しに
みよしのゝ花の盛と知なから猶白雲とあやまたれつゝ
おらすとてちらてもはてし櫻花此一枝は家つとにせん
花みれは物思ひなしといひ置し人は散をやおしまさり劔
いとひつる春の山風けふはさは花のありかの道しるへせよ
遠近の峯の櫻をおしむまに春は心も空に散けり
花をこそ折てかさすにあやしくも袂に雪の降かゝるらん
夜とゝもに散ともつきぬ花ならは吹春風のまたれもやせん
まてしはしあたりの松はみとりにて櫻にのみや雪は降へき
待えたる花立かくす霞こそ月みる夜半の雲には有けれ
花を社はやも咲とはまたれつれ風もそへとはいつか思ひし
吹風をいとひ／＼て櫻はなはては手をに折てかへりぬ
右大臣家百首中花五首
新拾 さのみやは朝ゐる雲の晴さらん尾上の櫻盛成らし
よし野山ふかく入とも春の内は櫻か花をしほりにはせし
咲みてる枝の俤なかりせは春のね覺や淋しからまし
月詣 とことはにいつともわかぬ風なれと春は花ゆへ吹かとそみる
新古 なかむへき殘りの春をかそふれは花とともにも散泪かな
花みむと契たりし人のまうてこさりしかはよみて遣
しける
君こすと恨の色をふくみてそ花も我身もねにかへりにし
日の暮かたに房の花を人ゝまうてきて折けるを見て
暮ぬとて折なつくしそ櫻花月にも人の尋やはこぬ
空仁伊勢に侍ける時三月はかりにいひつかはしたり
ける
白川の花も我をはおもひ出よいつれの年の春かみさりし
返し
花のみや思ひ出へき年をへて我も君には馴にし物を
爲業入道哥合　故郷花
古郷の花の色さへかはりせは何にむかしを思ひ出まし
花　哥林苑
山さくら咲る盛は峯をに落けるものを布引の瀧
花下月明
月影のおほろ成せは分て思ふ心や花のかたに過まし
有大臣家哥合に花下明月
新千 花よりも月をそ今宵おしむへき入なはいかゝ（て集）散をたにみん
日吉の哥合に華
月詣 葛城や高まの櫻咲しより春は晴せぬ峯の白雲
賀茂哥合
雲かゝる高根のさくら咲ぬれはゐせきを越る天の川舟
人にかはりて
おしみつゝ折て來つれはあちきなし風にまかすと花や散覽
或處哥合に花
しはしたに花をはなとやみせさらん月には雲をはらふ嵐の
花下逢古人といふ事を
たつねきて花みる時そかよひけるみし古郷の人の心は
社頭待花　或處會

かねてより風をは神にまかせつゝ白ゆふかけん花を社まて

又　花

山櫻かこめに風のさそひきてふもとの里に宿もとむらん

法勝寺の花をみて

散しける花みる時そ思ひ出るみ雪ふりにし庭の氣色を

又おなし處の花をみて

あかすして此世つきなん後よりの春は櫻の匂はすもかな

立よりておれはおられぬ櫻はないつし我身の春によそなる

停船見花

花ゆへに思はぬかたにむやいして追風をさへいとふ今日哉

大納言實房家十首哥の中花

心からちらん櫻をみてのみそうしろやすくは風を思はん

水邊の櫻花といふ事を

影やとす花のした行山水をむすふは手折心地こそすれ

對花待友

白雲とよそにやみゆる山櫻折にといひし人のきまさぬ

また法勝寺の花見にまかりて

をしなへて花咲ぬれは白川の浪は梢をこすにそ有ける

またつきのとしまかりてよめる

散花をあかすも風の吹ときそ世は憂物とおもひしりぬる

また次のとし

むかしよりみる白河の櫻花老のなみにもかはらさりけり

歡喜光院に人〻まかりて花のうたよみ侍しに

新後撰 かへらんと思ふ心のあらはこそ折ても花を家つとにせめ

宰相入道(教長)家哥合　山花

新拾 よしさらは導にもせんけふよりは花もてむかへ春の山風

山家花　哥林苑哥合

山の色をゝしむのみかは山里はいつかは人め又もみるへき

或處哥合に人にかはりて

咲ぬれはほとなき物を櫻花いつをまてとか霞こむらん

花留客　哥林苑

我やとにしはしと鳥はなかねとも花をみすてゝ行人そなき

南殿の花の本にて

珍らしく雲井の花も思ふらんつゝりの袖に折てかさせは

左大將家にて

ことならは手折てもたん櫻はな心とちらす物とみるへく

山家の花といふ事を

我ひとり折らんと思ひし山里の花を尋て人もきにけり

山さくらちりこさりせはかけにのみ花やさかまし谷河の水

花下待友

散さてそ人も見に來んなにしかは花のしとねを風の敷く覽

故郷花

みよし野のみかきの原はあれぬとも花やむかしの色に散覽

山花の心を

さゝ浪やなからの櫻咲ぬれは花もしけりなしかの山越

みよしのは山路ふみ分行かゝり花のふゝきも人はとめけり

海路花といふ事を

風をいたみ響のなたをとをる日も峯の櫻にめかれやはする

花のちるを見て

中〳〵にいさたれこめて花をみし散かふ時はうさまさり皃

華下競來といふ事

山路をは爭ひきつる程よりも草のまとゐにむつれぬる哉

隣家花を待と云事

こえてさす一枝ゆへにかきこしの花を遲しと待そわりなき

尋花日暮といふことを

けふはまた尋くらしつ山櫻あらぬ木陰に旅ねせよとや

花落客稀

あかさりし花の名殘を戀つゝそ青葉か枝を折〳〵はくる

春雨をよめる

春雨の日をふるまゝに片岡の荻の燒原色つきにけり

大納言(公通)大内のふちつほの藤見んとてさそはれ侍しかはまかりて

やすみしる君かみかきの藤の花むへ紫の雲とみえけり

藤花をよめる　賴政朝臣會

梢より越て落くる藤浪のゐせきは松のしつえ成けり

隆房の少將のもとにて藤懸庭松と云ヿを

軒端なる松の千とせを咲こめて我物にせる藤の初花

海路見藤花といへるヿを

風をいたみ田子の浦半を漕行は又よせくるか(かくるイ)岸の藤なみ

大納言(公通)南殿の花みられしつきに藤花寫水といふ事を人ゝよみ侍しによめる

藤の花うつれるかけをもちなからしつえを涙の何とをる覽

採蕨逢友　哥林苑

子日せし野邊にて君に契らすはけふ早蕨の折にこましや

行路蕨といふ事を

打やすむ道行すりの手すさみにおれる蕨はつかねたになし

をのつから家つとにこそ成にけり道のたよりにおれる早蕨

苗代をよめる

なはしろの水をひき〳〵あらそひて心にえこそ任さりけれ

きゝすをよめる

(風雅)狩人の朝ふむ小野の草わかみかくろひかねて雉子鳴也

古池蝦蟇といふ事を

諸聲にうきぬの池に鳴蛙おなし心に何思ふらむ

さる澤の池の玉もに鳴かはつ昔を忍ふ聲にや有覽

山家春暮といふヿを

花もはや根に歸りぬる山里にをくれて春のいつち行らん

海路暮春といふ事を

ともに社船出はしつれ暮る春なとやとまりをよそに過ぬる

三月盡の心を

さきたてゝおしみし花をやりしより歸らん物と春は知にき

小三月盡の心を

誰爲にかたみにあすをとゝめをきて今夜は春の立歸るらん

又三月盡の心を

いかにして散にし花に告やらん何ゆへけふもおしき春そも

已上百九十首。

林葉和歌集第二

夏歌

百首歌よみ侍しに更衣のこゝろを

おしみかね暮ぬる春を夏衣ひとへにけふそ立へたてつる

大納言(實國)家哥合更衣

立かへり春やうらみむいつしかと今朝ぬきかふる花の袂を

俊成卿十首哥よませ侍しに更衣

夏衣今朝は立きしをのつから散殘るらん花もこそみれ

或處にて

夏衣立はきたれと花の色にそめし心を猶そかさぬる

百首哥よみ侍しに卯花を

雪かとて過て來ぬれは卯花を折しらすとや人のみるらん

重家卿家にて人〻卯花の哥讀侍しに

みそらには雲もたなひけ卯花の月の有明すまぬ宿かは

卯花誰家そといふ事を

よそにみて過こし宿も卯花の咲る盛そぬしはとはるゝ

卯花藏門　哥林苑

雪とちし草の戸さしははらひしをえそ折のけぬあたし卯花

ある處の會

卯花の比にしなれは山里の垣ねそ月のすみか成ける

曉頭卯花左近中將實方卿家會

かき曇る空はいとはし我宿の卯花月夜照まさりけり

夕見卯花　哥林苑

卯花の垣ねを過る夕暮は曇らはくもれ夏のよの月

夕つく夜入ぬと思へと卯花の咲る垣ねは影そ殘れる

山家卯花

咲かゝる竹のあみとの卯花は夜をこめなから明るなりけり

遙見卯花

卯花の盛なるらし袖たれて遠かた人の波を分行

人〻卯花の哥よみ侍しに

てれはちり曇れは咲ぬ月影に光あらそふ宿の卯花

望山戀花　隆房朝臣會

卯花のさきしかはせる柴の戸はいらてやみぬる夏のよの色

毎家餝葵　哥林苑

いかにせん山の青葉に成まゝに遠さかり行花の姿を

けふといへは賤のあしすもおとらしと思ひかけける葵草哉

待郭公の心を　同

打なひき春いにしより郭公ねぬ夜幾かに成ぬとか思ふ

按察大納言(公通)十首會に待子規の心を

聲をきゝてたに猶蜀魂あかぬ心はまたれやはせぬ

おなしこゝろを　哥林苑十首

待にしもよらぬ物とは思へとも猶そねられぬ山郭公

ならひつゝ尋やくるとなれも又まちもやすらん山時鳥

なきもせは聞もまかへし郭公いな人我にむつをなせそ

年毎にならひにけれは子規卯月となれはいとそねられね

郭公ねぬ夜つもりぬさりとても雲のよそなる一聲はいな

曉は鳴もやするとほとゝきす八聲の鳥の音をさへそまつ

あちきなしいさゝはまたしと思へともそれも苦しき時鳥哉

宵のまそ人をはまちし子規明るまてこそねられさりけれ

明ぬれと猶そ待つる時鳥いつとたのめし初音ならねは

谷近く住しるしとて郭公待れぬとしのあらはこそあらめ

尋郭公といふ心を　重家卿會

誰もさはまたきかぬほと時鳥人つてをさへ尋つる哉

右大臣家百首のうち郭公　五首

いにしへを忍ひ音なれや時鳥花立花の枝にしも鳴

是や此またれ〳〵て蜀魂心ゆかしのさ夜の一こゑ

聞てしもきかまほしきに郭公今一聲と今は思はし

（撰拾遺）をとつれむとをそまちし時鳥かたらふまては思はさりしを

（月詣）かねてよりたゝ一こゑとしらませはきゝはまとはし山郭公

尋郭公歸聞　哥林苑

今こそは入ちかふなれ郭公尋かねつゝ歸る山路に

人傳郭公

聞つてふしるしは何そ時鳥人わきてこそうらやみもせめ

師光君のもとにて人々時鳥の哥あまたよみ侍しに

大あらきのうき田の杜の郭公草わかしとや忍ひ音に鳴

小夜更ぬ雲路もくらし郭公月侍ほとは宿にかたらへ

郭公花たちはなは枯ぬとも萩咲まては夜かれすなゆめ

霍公一こゑにてや過なまし花たちはなをやとに植すは

はたけふにむきの秋風吹たちぬはや打とけね山ほとゝきす

あちきなし我のみまたし郭公きなかは誰もきかん物ゆへ

思へはな山ほとゝきすよりほかに誰かはきつゝ我になの覧

あま彦はこたへつたへよ足曳の山郭公ほかに鳴なり

雲の上になのりて過る時鳥大内山やありす成らん（と與）

子規みつの濱邊にまつ聲をひらの高根に鳴過ぬしや

左大將（實定）家にて郭公幽聞

時鳥ほのめく夜半の一聲をまたぬ宿にや近く聞らん

大納言（實房）十五首哥中に

をつてん人はなけれと郭公やよやしはしといはれぬる哉

ね覺時鳥といふ事を　哥林苑

郭公夢に聞やとまとろめはなれは寢覺を待ける物を

近聞時鳥

軒近く名のるとならは郭公またもきかなん程をかたらへ

遙聞郭公

ほかになく山ほとゝきすをとはむ我にまさりて人は待かと

又ある處にて時鳥あまたよみ侍しに

み山いてはまつ音つれよ郭公けふは尋て我そ聞つる

またれつゝまれになけとも郭公かたらふ聲にえこそ恨れ

蜀魂をのかね山に尋きて聞おりさへの一聲やなそ

なつかしき花たちはなにあかすしていとゝかたらふ郭公哉

五月雨の軒の雫のつく〳〵と待をもしらぬほとゝきす哉

うきなから猶そまたるゝ郭公人傳にのみ聞くにつけても

心あらはいまもなかなん時鳥雲まの月に影やみゆると

郭公さ月も過ぬいつらさはかたらひ置しこその情は

人傳に聞かさぬるや子規待夜のつもるしるし成らん

時鳥まつにはなかすいさやさは行あふ坂の杉の手向に

範兼卿家哥合に時鳥をよめる

初こゑと人にかたらん郭公しはしはほかになきなふるしそ

日吉歌合におなし心を

時鳥今一聲は久堅の天のかこ山おりはへてなけ

俊成卿十首會中に又おなし心を

夜もすからきけともあかす郭公妻戀なかはつまつれなかれ

山家時鳥
宮古人來つゝもとはゝ郭公こたふはかりの一こゑもかな
山路子規　範玄律師會
けふたにも聲なおしみそ霍公をのかね山をすくとしらすや
隔山聞郭公　哥林苑
時鳥ふもとの里に今日そきく吉備の中山峯に鳴音を
又おなし處にて
おもひ寢の夢に啼つる郭公あはせてこそは二聲もきけ
曉郭公　尾坂歌合
我もさそ老曾の杜の郭公曉かたはいねかてにする
宇治前大僧正長谷に住給ひし比五月はかりによみ奉りし
君かますおまへのをかの郭公聲の色もやは（や歟）しほ成らん
御返し
郭公やしほの岡に來なけとも聲の色こそまさらさりけれ
百首哥よみ侍しに早苗を
山陰にいくしまつりて取そめんむろの早苗ふしたゝぬまに
あやめを　哥林苑
にこり江のそこに引とも菖蒲草みかける宿の妻と成けり
菖蒲草かり行まゝにこもり江のまきの丸橋あらはれにけり
大納言（實房）家にてあやめを
なにか我たくひ成へきうきに生る菖蒲も人にひかれ社すれ
五月雨百首中
五月雨にみかさまされはこやの池のあしの末葉に蛙鳴也
師光君の家にておなし心を
五月雨はいなのさゝ原をしなへて皆ひたすらのこやの池水
又おなしこゝろを
さみたれに小田の岩垣水越てあさかの沼も名のみなりけり
右大臣家百首中五月雨　五首
五月雨のはれせぬ比はもかみ川瀨〻の岩かと舟もさはらす
さみたれは淀の澤水のみならす生ふるまこもゝ深く成行
玉江にはみえし菖蒲も蘆の葉もかつみかくれぬ五月雨の頃
五月雨は大江の岸に水越てこやの軒端に船つなく也
山川の瀧もとさらす啼蛙いつちかいぬる五月雨のころ
旅泊五月雨　哥林苑
五月雨はふるをもいてむ須磨の蜑の鹽たれ衣我にかさなん
船中五月雨
さみたれにたなゝし小舟湊いれは棹にそさはる芦の末も
山家五月雨
五月雨は山田の畔に水越てこなきつむへき方もしられす
盧橘　實房卿十五首會
うつしうふる花立はなは行末に我を忍はん香にもたくへよ
おなし心を　哥林苑
昔みし人はあまたを匂ひくる花橘に誰をよそへむ
春も秋もいとひし風はにほひくるはな橘の折そまたるゝ
曉更盧橘　朝政朝臣會
板まもる在明の月をしるへにて花立はなそ匂ひきにける
水鷄　百首中
天の戸を夜半の水鷄や敲くらん程なく明る夏のしのゝめ
水鷄驚夢　哥林苑
中〳〵に夢にはみへき待人をたゝく水鷄にはかられにける
家〻水鷄　同

槇の戸のならへる數をよそながら敲く水鷄の音にてぞしる

連夜水鷄　同

しりながらとふをはしらて猶たゝく水鷄を幾よ我わかる覽

夏　月　百首中

天の原くまなくすめる夏のよの月のかつらは折やたかへる

夏月似秋

月清み荻の葉そよく夏の夜は尾上の鹿のなかぬ計ぞ

水上夏月

影やとす水にて夏は忘られぬ何かは月の秋とあさむく

よし野川いはねにさゆる月かけは氷を夏のものとみよとや

難波江にやとかる夏の月影は蘆こそ草の枕なりけれ

夏の夜は月も清水にすゝむとや雲の衣をぬきて入らん

清水にや月の心もかよふらんもりくるまゝにともに涼しき

雨後夏月

千載 白雨も晴あへぬほとの雲まよりさもあやにくに澄る月哉（のなたはれやらぬ）（おなしそらとも見えぬ集）

今そしる一むら雨の夕立は月ゆへ雲のちりあらひけり

對泉見月　内大臣雅通家會

むすひあくる清水に秋の來にけれはむへ月影の隈なかり覽

おなし心を　右大臣家哥合

手に結ふ清水に月のやとらすはほかへ心やあくかれなまし

おなしこゝろを　或處

松蔭の月は入ともむすひあくる岩井の水は猶やもりこむ

水邊待月　右大臣家

宿さむと岩まの水草はらふてにやかてむつるゝよはの月哉

袖ひちてせく手ににごる山水の澄をまつとや月のやすらふ

海路夏月

月夜よしおふの浦なし影もよし涼みてゆかん綱手ゆるへよ

樹陰納涼　哥林苑

おほあらきの杜の夕風夏なからまくりてに社すゝみ成つれ

川邊納涼　同

水上に秋や來ぬらん大井河ゐせきにかゝる音ぞ涼しき

河上やなひく柳のすゝしさは秋を招くと見えもする哉

山川のみかさを深くせくまゝに夏はあさくぞなる心地する

夏深み涼みかてらに川やしろ夕かけてこそまつるへらなれ

わかあゆつる玉しま川の柳陰夕風立ぬしはしかへらし

百首の中に

千載 岩間もる清水をやとにせきとめて夏を外より過しつる哉（ほかより夏を集）

竹陰納涼　哥林苑

風さやく竹のこくれの夕涼み露さへ我を秋とあさむく

納　涼　賴輔朝臣會

花ならぬならの木蔭も夏くれはたつとやすき夕間暮かは

おなし心を　哥林苑

立やとる楢のびろ葉に吹風は手にもならさぬ扇成けり

又範兼卿家會

新古 楸生る片山蔭にかくろへて吹ける物を秋の初風（しのびつゝ集）

吹過る木の下風のすゝしさに立ぞ休らふ衣手の杜

ひむろ

氷室山あたりは冬の心ちして梢の蟬ぞ夏と告ける

夏　草　公通卿十首會

秋はいさ尾花くす花みやわかんみな綠なる野へにも有かな

なつの野

夏ふかみ草吹わくる風なくはたとりやせましまのゝつき橋
夏の野は咲すさひたるあちさひの花に心をなくさめよとや
夏深く野は成に晃さはに出るこくれの鹿のせなみゆるまて
水邊夏草
あやうしやみなはさかまく岩淵を何のそくらん大和撫子
夏くさをよめる
夏深く成そしにける難波女かあしまのこやの隱れ行まて
なつふかみ野原を行は程もなく先たつ人の草かくれぬる
又おなし心を　經正家會
秋ちかく野や成ぬらんなゝ草の草の姿の見え別れぬる
近見瞿麥　重家卿會
手にならす扇の風にあやなくも露そこほるゝ床夏の花
おなしこゝろを
朝夕のわか袖ふりにゐる鹿はいもうちはらへ床なつのはな
雨中瞿麥　範玄律師哥合
ぬれ色は露はかりにて有ぬへし何そは雨はやまとなてしこ
蓮亂晩風　哥林苑
夕されははすの浮葉に風こえてうつしそかふる露のしら玉
ともしをよめる
ともしすと葉山のすそに立かぬる我をやいもは待あかす覽
蟬をよめる　百首中
夏山の空ひゝくまて鳴蟬の木のはもゆるく心地こそすれ
又おなし心を　哥林苑
新拾
山彦も答へやあへぬ夕つく日さすや岡への蟬のもろこゑ
そ集
林近聞蟬　或處
夏木立軒はにしけく成まゝに數そひまさる蟬の諸聲

螢　百首
軒つたひすたく螢はさゝかにの糸もてぬける玉かともみゆる
大納言(實國)家にて螢火入簾といふ事を
あすたれひまよりくゝる夏虫はなれし澤邊や思ひ出らん
竹裏螢火　賀茂會
小夜更て竹の園生にともす火は枝をかそふる螢成けり
旅宿螢火　賴政會
さもこそは草の枕をかりてねめあるしかほにもともす螢か
ほたる橋をてらす　公通卿家會
たとり行いたゝの橋はくちめおほみ數々ともせ夜半の夏虫
社頭螢火　哥林苑
是やさはあくかれにける玉かとてなかめし澤の螢成らん
螢火遮路　同
小夜更ぬ心はさきに急けともともす螢にえこそはなれね
泉聲來枕
窓ならぬ谷のせゝらきふみゝつる折もうれしなともす螢は
よイ
曉にはや成ぬらん岩間もる水の白玉音の凉しき
泉邊秋近
瀧の糸の風にみたるゝ音きけは枕に秋そくる心地する
六月祓　百首中
岩そゝく谷の淸水に打そひて秋も袂にもりそきにける
御祓して立田川原の柳陰歸る物うき夕まくれかな
おなしこゝろを　哥林苑
飛鳥川あけはうきせやかはるとて今よひ汀に御祓をそする
已上百五拾三首。

林葉和歌集第三

秋歌

秋立日よめる

月詣 花ゆへにいとひし風の哀にもけふ秋きぬと告て過ぬる

竹風告秋

笹の葉にそよや秋風音す也いつか夜なかくならんとすらむ

七月一日宇治前大僧正御許より

物をにさひしさまさる秋くれはとはぬ人さへ恨めしき哉

御返事

とふへしと思ひなからす(異に)さひしさは我宿のみの物と知つゝ

又立かへり

秋立て淋しきをは世の常を君かやとには時もわかしな

御返事

青葉ふく風も音せぬ我やとは秋立ぬともよそにこそきけ

師光の君家にて七夕うたあまた人ゝよみ侍りしに十首

七夕のたえぬ契をうれしとも今宵はかりや思ひ知らん

天川水かけ草の夕露にそふさへあやな袖なぬらしそ

七夕の秋さり衣ぬれぬまはけふのこよひの玉のをはかり

たなはたのわかるゝけさの袂にや秋のしら露置はしむらむ

こてすくす年はなけれと織女は夜の深行をいかゝとや思ふ

影うつす水の心やあさからんすむほともなき星合の空

かさゝきの橋の渡りに七夕は夜も更ぬとやゆふけとふらん

彦星のあさ漕出て歸るらんかちとる袖の雫いかにと

うれしさと憂とや思ひわかさらん稀に逢みてたへぬ七夕

一夜とも心よりこそ契りけめ立なかへりそ天の川波

或處にて七夕の哥あまた人ゝよみ侍しに

月詣 逢瀬こそ又もなからめ年の内にふみたにかよへ鵲のはし

年を經てあさひく糸は七夕のたえぬ契のしるし也けり

衣〲に天の羽衣成やらてこよひはかりや鳥のねもうき

七夕の年の一とせ待得たるたゝ一夜さへ夜やはふくへき

七夕の百機たてゝ織あくるみけしのあやは今日やたちぬふ

賴輔朝臣家哥合に織女を

心から稀に契し織女はくやしきにさへ袖やはかぬ

右大臣家百首内　草花五首

白玉をつゝめる萩の錦をは誰あたし野にこゝら置劔

續古 何事を忍ふの岡の女郎花思ひなしほれ露けかる覽(つみて(おもひしほれて集))

ふちはかまたゝ露計そむれはやうす紫の色に咲らん

月詣 下をれはもとの姿を苅萱のあやなく風におほせ顔なる

荻の葉に風うちそよく夕暮は音せぬよりも淋しかりけり

萩

哥林苑

さをしかのむね分にする小萩原たゝきれ〲の錦なりけり

萩滿野亭　同

我やとは野はらの萩に埋もれぬ鹿よりほかに誰か分こん

女郎花近水

散玉に袂しほるゝ女郎花瀧津岩ねをすこし立のけ

薄當路滋

花すゝきしけみか中を分行は袂を越て鶉鳴也

古籬苅萱

ふりにける籬はあれよ年に咲なと苅萱のしとろもとろは

隣家夕荻

夕まくれあたりにそよく荻の音に聲打そふる芦の中垣

人にかはりて野亭荻

我宿に圍ひこめすは大かたの野もせにみてる荻かとやみん

隣家荻

となりなる荻にはかくと音つれて宿をすとをり秋の夕かせ

女郎花　師光家哥合

人とにたはれ〱て女郎花はては誰ゆへ露けかるらん

草花待露開

しら露やあたにむすひし蘭うち置まゝにほころひにけり

荻　日吉哥合

荻の葉の露をは風のはらひつゝあやなくも我袖ぬらすらん

草花纔開　哥林苑

野へみれは萩咲にけり時鳥たゝ一枝はしらす顔なれ

野花半開　或處哥合

夏と秋と野へには猶や行通ふかたえは花のほころひもせぬ

夕見草花

夕附夜しはしほのめけ咲そむる小萩か花の數もかそへん

草花先秋

くちなしの色成なから女郎花先さき立て秋を告つる

夜思草花

女郎花おもひこそやれ我たにも獨寢覺の床は露けし

草花隨風

まねくたにうれしき物を花薄さのみは我になひくへしやは

心在每花

秋は猶萩をそ花と思ひしは野へをみぬまの心成けり

霧中草花

まゝらなる霧の笆をたのみつゝたはるゝ野への女郎花かな

心在野花

移り行心のまゝに手折せは野邊には花も露ものこらし

折草花供佛

いさ折てあかにそへなん女郎花をのか五つの罪やきゆると

秋野

おほつかな外山かすそは霧こめつ小萩か原の鶉なく也

家草花

我やとに萩女郎花植しかとね覺の友は荻はかりこそ

庭移野花

うつし植し主は誰とて荻のはのよひ〱ことに我はかるらん

古鄕草花

すたきけむ主はとゝへは女郎花口なしにして露そこほるる

經盛卿家哥合に草花

秋の野を我こそ宿に移しつれ誰さそひこしむしのねそこは

季經朝臣家歌合におなし心を

ほかをのみまねく尾花に心なくたはれもかゝる女郎花哉

野風　公通卿十首會中

わかれけむ野邊ならねとも淺茅原秋ふく風は悲しかりけり

又

花の香をさそひて過る秋風を何としたひてなひく野へそも

岡のへのならの眞柴に風立はかへるは葛のうらはのみかは

風吹はまねかぬ花そなかりける野邊こそ秋は色には有けれ

から錦うらをみましや秋の野のそこ吹返す風なかりせは

旅亭草花

かりの庵にかこひこめたる女郎花思はぬ旅の一夜妻かな

柴の菴を何のそくらん女郎花旅の日數のやつれ姿を

野徑露深　或處

分行はこほれぬ露かおなしくは手折てゆかん秋萩の花

秋野　範兼卿家三首

花の色は千種なれとも秋の野を分るま袖は露もかはらす

丹葉は時雨そゝむる秋の野の花の色〳〵誰におほせん

いはれ野の花の千草の香をひとりさそひて過る秋の夕暮

庭前草花　或處

我やとゝ名にこそ立れ秋の野に萩女郎花露もかはらす

野花

明るまで猶くるゝ野の小萩原はや吹おこせ秋の初風

ひとりゐの友と成ける萩のはを燒けん春そ今日は悔しき

月前野望　宇治前大僧正房

秋の野の花の夕露色〳〵に照月影も亂あひにけり

虫をよめる　清輔朝臣家哥合

秋の野の千種の花の下とに虫の音さへそ色〳〵に鳴

師光家にて

秋のうちと誰に契て宮城野にはた織虫の急く成らん

和哥曼陀羅講にむしを

とにかくにかやか下はふ青つゝらくる人なしに鳴松虫か

爲業入道家にてむしを

秋風の露吹むすふ夕暮に聲〳〵虫のみたる成かな

秋虫初吟　哥林苑

秋風の吹立ぬるにたへかねて誰松むしの色に出らん

夕聞虫聲

こぬそとも暮はてゝこそしるからめまたき恨る松虫の聲

虫聲滿野　哥林苑

大江山峯まて響く虫の音はいく野にこよひあまりきぬらん

虫夜友

我爲は明ぬともなけ萎ひるとてひとり暮すへきかは

虫聲近床　哥林苑

きり〳〵す枕かはしてねにけるも此曉そ聞はしめつる

田家晩望といふ事をある處にて

夕まくれ遠の山田をもる人もいなおほせ鳥になるこ引めり

月をまつ心をよめる

大空のくるれは月をまつ物を山のはよそに何おしむらん

月二首　哥林苑

新拾 あまの原雲つきぬれはなこの海に光はみちぬ秋のよの月

すみのほる心や空に立そひて今宵の月の影と成らん

師光君の哥合に

天河やその浦半に雲消てなきたる夜半の月をみるかな

人ゝ月哥十首よみ侍しに

千載 月清み軒はにすかくさゝかにの糸の亂の數もかくれす

筏おろす清瀧川にすむ月は棹にさはらぬ氷也けり

をのかため明るにもあらぬ天のとに急な入そ秋のよの月

見る人もなからんほかの月影は眺むる宿にそへてゝらなむ

月清み蓬かそまの下晴て閨もあらはに鳴きり〳〵す

空晴て月すむ夜半はこしの海の波にきえせぬ雪そ降しく

月ゆへにおしむと待と山の端をいとふ心そいつれまされり
法性寺攝政家月の哥あまた哥よみをえらひて五人によめと侍りしにまいりて
風こしの雲吹はらふ峯にてそ月をはひるの物と知ぬる
み空行月をは軒にやとし置ていつち心のあくかれぬらん
むら雲を待より風にはらはせて立出る月の影そさやけき
秋風の露吹むすふ竹の葉に清くもすめる夜半の月哉
よさの海の涙まにやとる月みれは天の川邊に我やきぬらん
續後拾 千鳥なくゐなのみなとに風さえて波まにやとる有明の月
のこる集
秋くれは軒はの月はさそはれて轉寢なからあかしつる哉
山の端にふかく入ぬる月影は世をうき雲に住や侘ぬる
此世をは月ゆへに社おしみつれ暫しそ暗きやみにまとはし
出るより木の葉隠れの夕つく夜かくてやつゐに雲に消なん
實家卿家にて月哥人々あまたよみ侍しに
久堅の天津み空に雲まけは月の光そ庭に敷ける
まこもかるすさの入江のこもりえにいかに尋て月の澄らん
こやの池に月しやとれはなかめやる心も水のうへにすみ凫
むら雲の秋はいつこにかくるれは只月ひとり空にすむらん
闇の内にいまとて月に打とけしいたらぬ里のあらは社有め
出る山入山のはと月影はいつこか終のとまり成らん
秋の夜の月の光は浮雲の晴るゝ影をそふる成ける
左兵衛督成範卿法勝寺にて哥よみ侍しに月を
月影を雪かとみれは白すけのまのゝ萩原枝もたわます
故郷月　忠盛朝臣家會
千載 古郷の板井の清水みくさゐて月さへすます成にける哉

月照山水　哥林苑
山の井の水はにこさし木のまよりもりくる月の影やとし凫
水上月　忠存已講房
むすひあくる岩まの清水清けれは手にもち月の影そ近けき
重家卿の家哥合月
かきくもる折こそあらめ月影は晴るにつけて物そ悲しき
清輔朝臣家哥合月
新後撰 思ふ事有てやみまし秋の月雲吹はらふ風なかりせは
おなし所にて山月といふ心を
わたつみの海人となりてそ月そみん都の山の端に隠れけり
雲間月　哥林苑
今はゝや天の戸渡れ月の舟また村雲に島かくれせて
月照已屋　同處
あれまさる宿は心もとまらねはもりくる月そ住かはりなん
江上月　おなし處十首哥中に
吹風にみ空は晴ぬ秋の月玉江の水は誰かはらへし
俊成卿十首哥中月
我こゝろをくらさりせは秋の月千里の外に獨ゆかまし
右大臣家百首中月五首
宿るへき岩まのみ草たかためにはらへは月の出かてにする
かく社は誰もみるらめと思へとも語らまほしき夜半の月哉
我心いつちさそひて行ぬらんかこたは月の曇りもやせん
なかむれはいとゝ物こそ悲しけれ月は憂世の外と聞しに
千載 此世にて六十はなれぬ秋の月しての山路もおもかはりすな
月　宇治前大僧正房

めもあやに近けき月のくせなれや今宵初めてみる心地する

哥林苑にて月の哥あまた讀侍しに

天津風いつち雲をはいさなひてうたゝも月を獨捨らん

さゝ浪やこたかみ山に雲晴てあしりの興に月落にけり

師光君の小野宮にて哥合し侍しに海邊月

かもめゐる難波ほり江に月さえてこやの蘆垣數もかくれす

按察(公通)十首哥中月

風をさへさそひて月やたとるらん玉江の底も月の晴ぬる

旅宿月　尾坂哥合に

ことならはまた夜をこめて朝たゝむ山路の程を送れ月かけ

八月十五夜

暮るかと思へはあけぬ乘てよりいつら待つる秋の一よは

經盛卿家哥合に

月清みかひのしらねをなかむれはいつかは雪に空は晴ける

月送行客　師光家會

旅の空をくるとならは秋の月村雲かくれよき道なせそ

歌林苑十首月

社頭月

三輪山杉のまに／＼もる月は亂れてちれるぬさかとそ見る

野宿月

月清み秋の野原はいつこにか草の枕をむすひさためん

澗底月

谷ふかみ山井の水にすむ月は心のうつるかゝみ也けり

澗邊月

よこの海に釣する海士のうけの緒の靡くもみゆる夜半の月哉

亡屋月

月影のかへのくすれをすとをれはとかめかほなる蛬かな

恨女見月

月見ても待らんと思いもならは今まて宿になかめせましや

恨身見月

月みれは身のうき事のおほゆれは曇るは晴る心地こそすれ

戀古人見月

月をたに詠むとすれは何となくみしよの人そ數へられける

湖邊月をよめる　哥林苑

(新古)難波かたしほひにあさる蘆たつも月かたふけは聲の恨むる

依月客來といふ事を或所

君に我ひるとはいつか契しととがむはかりにすめる月かな

海邊月　宇治前大僧正御房にて

(千載)なかめやる心のはてそなかりけるあし(あかし集)やの沖にすめる月影

住吉歌合　社頭月

(同)住よしの松の行あひのひまよりも月さえぬれは霜はをきけり

月照古橋　影供會

朽めおほみ勢田の長橋澄わたり月はあしみもたとらさりけり

深山曉月

有明の月のみこそはかつらきやすゝ分わふる道しるへなれ

有馬にまかりてしほゆあみ侍しに月のあかゝりし夜

有馬山いなのしはやに月もれはいてゆへもなく袖そ濡ける

遍照寺にまかりて月をみて

古郷はこすのひまよりもる月の影さへみれは忍ふもちすり

月前閑談　或處

睦言をゝのれすゝめて月影のまたつきなくに入らんとす覽

荒屋見月といへる事を

吹風にかつや板まのあれまさる枕に月の影のもりそふ

九月十三夜　　哥林苑

長月のもち月しもはいかなれは影を今宵にゆつりそめけん

またある處にて

名にたてるこや長月の十日あまりみよとも月の隈なかる覽

右大臣家月十首哥合中に秋月四首

月得秋勝。有潤九月

今そしる秋くはゝれるとしはさは月も光をそふるなりけり

關路月

逢坂の關のこくれを厭ひても夜をとをすへき夕つくよかは

月前述懷

風雅 なかむれは身のうき事の覺ゆるをうれへ顔にや月もみる覽

月催無常

よそにかく今宵は月をなかむとも明日やあたりの雲と成覽

日吉の哥合に月

隈もなき影にあはれをさしそへて心の限りつくす月哉

賀茂にておなし心をよめる

宮古たになくさめかぬる月影はいかゝすむらんおは捨の山

依月惜生涯　　哥林苑

うしとてもいかゝは此世厭へきうたゝある夜半の月の影哉

淵上月　　同

さゝ浪や比良の高根に月すめはしかつの浦に雪そ降しく

池上月　　同

千早振あそのみおきにすむ月は誰手向たるかゝみ成らん

遍昭寺哥合に月

更科もみ空や晴ん池水にやとれる月の影さへはみし

爲業入道哥合し侍しに海邊月

山高みはるかにみれはするの松月の波さへ越るなりけり

駒迎をよめる　　哥林苑

はしり井の水には影のやとれとも立こそなつめ望月の駒

八月十五夜月くまなかりけるに宇治前大僧正御房へ奉りし

名にたてる月をは軒にもちなから心にかゝる君か宿かな

月添秋思　　隆親會

小夜更てむしそわふなる我とく月すむまゝに物や悲しき

おなし心を

啼虫の聲きくよりも小夜ふかき月みる折そ秋はかなしき

月にこそ秋の思ひはまさりけれくらふの山に我やすまゝし

池上月

隈しなき月はかりにて池水に入山のはもうつらさりせは

旅行鴈

行道にけふはちかへと初雁の我みやこへと聞そ嬉しき

海上初雁

こしの海の底にしつめる玉章を初かりかねそ空によむなる

深夜雁

更行は夜寒になるを心なく衣かりかね鳴てすく也

夜泊鹿　　哥林苑

千載 夜をこめて明石の瀬戸を漕出れは遙かに送るさをしかの聲

遠聞鹿聲　　左大將家

大江山鹿の音とをく聞ゆなりいくのゝ外に妻を戀らん

ある處

霧かくれ野しまか崎に鳴鹿はいつれの方の妻をこふらん

住よしにてしほゆあみて九月ばかりに侍しによめる

暮て行秋の木末はさひしきに松吹風そ音にかはらぬ

已上二百二十八首。哥百七十六首カク。不審。

林葉和歌集第四

冬哥

哥林苑人ゝ四季の哥よみ侍しに初冬のこゝろを

冬くれはかくれさり堯難波女か芦のあなたのこやの住かも

山家初冬　　清輔朝臣會

いつしかと人めも草も枯ねとやおろす嵐の今朝はけしき

又ある處にておなし心を

今朝よりは懸樋の水は音もせてとほそをたゝく風そ烈しき

右大將(寄定)長樂寺にて深夜時雨といふ事をよまれ侍し

月をこそ哀とよひになかめつれ曇る時雨も心すみけり

範兼卿家哥合に時雨

月詣かきくらしかた岡山はしくるれととをちの里は入日さし堯

經盛卿家哥合に

音つれはあはれそへよと槇の板に乗て時雨や契をき劔

住よしの歌合に旅宿時雨を

千載もしほ草しきつの浦のねさめには時雨にのみや袖は濡ける

おなし心を人にかはりて

かりほさすならの枯葉の村時雨哀は槇の音はかりかは

またある處にて

槇の板にいつもさこそは降雨のなとや時雨は音の身にしむ

行路のしくれ　　頼政家會

おもはすに時雨は過ぬ木蔭とてたのむ木葉そ降もおやまぬ

月前時雨　或處

月影のさしくるおなし板まより音してもるは村時雨かも

時雨易晴　哥林苑

餘波をは草葉のうへにとゝめをきて時雨の雲そ露も殘さぬ

或處にておなし心を

山めくる時雨の跡を見わたせはやかてさし行夕つく日かな

所々時雨

夕つく日さすや岡邊を隔てつゝこのもかのもに時雨降也

深夜時雨

小夜更て人はしつまる槇の戸にしくれのあしそ高く成行

さよふけて打音つるゝたひことに我袖さへそむら時雨する

殘菊をよめる

しら菊をなれ色〳〵に染をきて今朝なと霜の置かくすらん

落葉驚夢　範兼卿家會

槇の板に紅葉亂れて散よはゝいつかは夢のやすくみえける

哥林苑人〻大井河に田をかりて十月はかりにうたよみ侍しに

（千載）けふみれは嵐の山は大井川紅葉こき（ふき集）おろす名にこそ有けれ

山路落葉　教長入道會

音羽山こえつゝゆけはうすくこく錦を袖に折そかへつる

落葉をよめる

冬の夜はしくれのみかは槇の板に木の葉降にも袖はぬれ鳬

右大臣家哥合に落葉

しなかとりゐなのしは山吹風に下す紅葉やこやの八重ふき

雨中落葉　哥林苑

雨のあしのしけく成行音はして木の葉は閨に洩こさりけり

木の葉をは閨の板まにとゝめ置て獨もりくる初時雨哉

故郷落葉　同

淺茅生とさこそ成行宿ならめ木の葉の下に鶉なく也

網代落葉　隆房朝臣會

宇治山のもみち流てあしろ木の手をにあらふ錦とそみる

哥林苑哥合に落葉

（新古）立田山梢まはらに成まゝにふかくも鹿のそよくなるかな

俊成卿十首哥中に雪

日をへつゝみゆきつもりぬ吉野山入にし人や思ひけぬらん

寒野雪　哥林苑

雪ふれは花の色〳〵露もなし野邊にもうつる我心かな

雪　同

降雪に峯のたつ木もしられねはしほりし枝もかひなかり鳬

教長入道哥合に

今日も猶雪降やまぬよしの山いつら常盤の山のみとりは

日吉哥合に

あさ風のさむけきなへに菅原や伏見のたゐにはたれ雪ふる

野宿雪

仇に社野へのかり庵はさしつるに思はぬ夜半の雪の上ふき

重保はしめて神主に成て賀茂寶前にて卅講のつゐてに雪爲松花と云事をよみ侍しに

千とせまて雪つもるへき宿なれは花咲松も君のみそみん

哥林苑にて

春みとり秋くれなゐに見し梢みな白妙に雪降にけり

雪埋樵路　哥林苑

（風雅）つま木こる山ちは雪の深けれは世にふる道もたえやしぬ覽

雪朝山越　　同

今朝もなをあまきる雪の猶ふれは駒もなつみぬさやの中山

狩人もこぬものゆへに雪ふれはかた山きゝすふしとわふ也

薦こもの一重を敷きてさぬるよとしらてや雪の風ませに降

日を經つゝ消て又ふる雪みれは散てやみにし花のみそうき

關路曉雪

關の戸は鳥のそら音に明つれとふまゝくおしき雪そ降ぬる

月照山雪

けぬか上にふらてかさなる白雪はこしの高根に照月の影

神樂　　哥林苑

君か爲玉くしのはをとりかさし星さゆるまてうたひ明さん

雪中神樂

あまくたる神のしるしの榊葉に雪の白ゆふかけそへてけり

閑中雪

たつねこむ人こそあらめ我さへに立出へくも見えぬ雪哉

橋本寒蘆

風吹はさのゝ船はし波こすとみゆるはあしの穗末なりけり

八橋のと絕をみれは霜かれのあしのはのみそくもて也ける

氷爲旅鏡

朝立て旅の鏡とみよとてや山井の水のうす氷せる

雪中佛名

かつきゆる雪とも罪をおもはしや三世の佛を拜むしるしに

雪中待春　　哥林苑

降雪になくさむへきをいとゝしく花とみてしも春そ戀しき

山家待春　　同

あるしなきこゝちこそすれ花ゆへに春まつほとの冬の山里

山陰のたるひの下に住宿はうらゝに照ん春をしそ思ふ

梅花先春開　　同

鶯のきゐん春まてやつさしと梅には雪のおほひしてけり

歳暮述懷

しはしかと我身のうさを思ひしにこそもことしも歎暮しつ

十二月つこもりころに天王寺にまいりて歸しに船を
年くれぬいそけと申しをきゝて

なにとこはいそく綱手そ淚の上も都もおなし年そこすへき

歳暮歎老　　哥林苑

日にそへて身に添老を暮ていぬる年の一夜におほせつる哉

歳暮述懷　　範兼卿會

何しかは逆りむかふと急くらむまたこん年もおなし憂よを

くるとあくと世をうしとのみ歎て果は今年もけふに成ぬる

前大僧正御許にて

今年にて又こむ年も見えぬれと猶こりすまに春そまたるる

俊成卿　十首哥中歳暮

新古　歎つゝ今年も暮ぬ露の命いけるはかりを思出にして

としのはてに申ける

かく計り厭ふ命を人なみに明日は千とせとやいはんとす覽

右大臣家百首の内　歳暮五首

花をまち月をおそしといそかれし日數は年のはてそ悔しき

暮はつる年のしるしのなかりせは殘り少くなるもしられし

いつとても過る月日はおほけれと今夜は年をそふる悲しき

一年の夢のみはては今夜そと思ひなからもさめは社あらめ

さても猶暮ぬる年のおもひ出はいとふ命のいけるはかりか

已上六十六首。

林葉和歌集第五

戀歌

右大臣家百首内　初戀五首

またしらぬ戀路に深く入しより露分衣ぬれぬ日はなし
何となくなかめにぬるゝ袂かな戀てふものは是かあらぬか
人心とけよといはふ玉すさをむすひはそめしいみも社すれ
戀はさはみし俤の身にそひて袂をぬらす名にこそ有けれ
今日社はふみそめつるを紅のいつあかりける戀の千しほそ

按察大納言(公通)家初戀の心を

またしらぬ是や戀路の坂な覧ふみそむるより身のみ苦しき

又ある處にて

またなれぬ戀路に深くをし入て行衞もしらぬ人や誰なり
せきもあへぬ泪の川にたへ兼てその葉をさへもらしつる哉

右大臣家百首内　忍戀五首

忍ひかねみかきの原につむせりの雫に袖そあらはれぬへき
戀すてふ氣色を人にみえしとて打そはむくやあやしかる覽
むねにたつ戀の煙をけふまても我なれはこそ思ひしつむれ
夢にたに打とけなはやと思へ共それもうつゝのならひ成皃
もらさしと思ひつゝめと心なき涙のとかは君ゆるさなん

哥林苑人〻かたをわかちて歌えらひて哥合し侍しに

戀哥三首

千載　おもひきや夢を此世の契りにてさむる別れを歎くへしとは
あはれてふ言葉も哉それにたにけなん命をかへつと思はん
千載　思ひかね猶戀路にそかへりぬるうらみは末もとをらさり皃

又後のたひの哥合に戀の心を

同　夜もすから物思ふ頃は明やらぬ閨のひまさへつれなかり皃

清輔家の哥合におなし心を

新拾　あふにたにかへん命ははかなき(かなし集)に憂人ゆへに身をや捨へき

爲業入道歌合に戀

大かたはうきにたへたる身なれ共戀てふ物そ忍ひかねぬる

範兼卿家哥合に

我戀をねにたてゝ啼物ならは答へもあへし遠の山彦

またおなし處にて神に祈戀といふ心を

三輪川の清きなかれにいくしたて夢にみんとや我は祈りし
人のもとへつかはさむとて人のこひしかは

新勅　しぬはかり思と兼てかきやりしその葉にさは我やおちなん

左大將(實定)家にて

しなはやとあたにもいはし後世は俤たにもそはしと思へは

白川にて人〻哥よみ侍しに

定めなき露の命をもちかほにあふにかへんと待かはかなさ

賴政家の會に

秋の野をいつかは夢に分きつるなとやね覺の袖の露けき

師光君家にて人〻百首哥よみ侍しに戀哥十首

新勅　わきもこをかた待よひの秋風は荻のうは葉をよきて吹なん
新續古　うしとても思ひもたえぬ物故にさのみつらさを人に語らし
身にそへる君か俤心あらは行てもかたれ馴る姿を
千載　戀しなん命を誰にゆつり置て難面人の果をみせまし

（同）君やあらぬ我身やあらぬ覺束な憑めしをのみなかはりぬる
身をつめは哀とそ思ふ岡のへに霜かれ立る妻なしの木は
（續後撰）我戀は人しらぬまのうきぬ繩苦しやいとゝみこもりにして
忍ふ草かたみに摘てすくせともしけき人めそ猶もりぬへき
夢にたにあはす成ぬるね覺社又たのむへきかたもしられね
君こすは閨へも入らしはらひつる床の思はん事もはつかし

初戀の心を　日吉哥合

獨寢の床の秋風身にしむやよそに聞こし戀には有らん

又哥林苑人〻十首戀哥よみ侍しに

戀草はなへてかるともいなやいな忍ふはつまし袖しほれ毟
秋風の身に寒き夜の獨ねはぬしさたまらぬ物をこそ思へ
しるらめや涙の床のあやむしろをに成までにしき忍ふとは
暫し社うしつらしともいはれけれ果は戀しさ只ひたすらに
我なから身をはうらみつ君も又うたゝある物と心をは知れ
君かさは夜床の衣うらかへれなれる姿や夢にみゆると
戀しともうしとも思ふ我涙なとや袂に色のかはらぬ
我こゝろめにこそ見えね曇る日の影と君にはそへてし物を
夢にとてみえぬ物からまとろめは俤にさへ立わかれぬる
こむと言てこぬか辛さに比れはこしとてこぬは嬉しかり毟

内大臣（雅通）家戀哥十首よませ侍しに

花の色も月の光もかはりけり物思ふ時のわかなかめには
儚しと夢をもいはし憂はうくつらきはつらくみえぬ物かは
限あれは逢てふ名社惜からめなけの言葉はくやしからしを
おのつから戀のたえまのひまく〳〵のうつし心はうらみ成毟
月影は物思ふとしもなけれとも戀にはまつそ友と成ける

衣手につく覽すみを侘つゝはあやむとたにもよそに聞はや
思そめみそめさりけん古へをこふにさへ社かなはさりけれ
色は有てなとや涙の心なきつゝむとすれはいとゝ落そふ
あかつきそ思へはつらき憂人も寐覺よりこそ戀しくはなれ
曉の床に秋風吹こすは心にはまけぬ我身ならまし

右大臣家百首内　初逢戀五首

珍らしく今夜はかりやさよ衣うらをうらにや打返すへき
（新續古）逢事は夢のみ（にのみ集）とこそ待れしか現までとはおもはさりしを
今更にいとゝいとはん鳥の音を待てのみ社あかしかねつれ
あはれとも先みるはかり今夜我枕のちりをしはしはらはし
朽にける袖のためしをみせをかむ又難面やならんと思へは

同百首　後朝五首

なそや我しかまのかちのあひ初て返らぬ道を習はさりけん
あひもみて歸りし宵の袖たにもいとかく迄はひちすや有劔
（月詣）おもへたゝ夢にたにこそ人をみてあしたの床は起うかり毟
一夜たにと社かねては思つれ今朝起うしといふそつれなき
しきするおもへのなたは過ね共今朝のおき社思ひ侘ぬれ

同百首内　過不逢戀

逢坂の關の杉むら過なからもとの清水にぬれかへりぬる
千束まて我立をきし錦木を君は一夜にこりはてにけり
（新勅）曉の鳥そ思へははつかしき一夜はかりに何いとひけむ
（同）忘るなよわすれしとこそ頼めしか我やはいひし君そ契し
うつゝともなくて一夜は明にしを其夢をたに又もみぬうき

中院入道右大臣久我山庄にて山家冬戀といへる事をよまれしに

夜をさむみまつ人もこぬ柴の戸をあやなくたゝく山嵐の風

師光君の家にて歌合し侍しに

獨ねてまちのみ明す鳥の音をいとはん世にはいつか成へき

清輔朝臣歌合し侍しに祈神戀といへる事を

さも社は君を祈らめなそやこはうさかの杜の神もつれなき

成範卿家にておなし心を

つれもなき君にしなれは眞鳥住うなての杜の神もたよらす

見書増戀　哥林苑

引返しこまかにかける玉章も恨むところのなくは社あらめ

顯輔卿家哥合に後朝戀

新千載 さのみやは今朝さへ君を恨へきをきて來つるは人の告かは

おなし心を　或處にて

あかすして別るけさの道芝はかすよりほかの露やをきそふ

夏夜戀　哥林苑

から衣かへしてはねし夏の夜は夢にもあかて人わかれけり

先人おはせし時家に哥合し侍しに戀兩人といひし題をいはけなく侍しとき　十三歳

我戀はふたかみ山のもろかつら諸共にこそかけまほしけれ

おなしこゝろを　哥林苑

とにかくにたえぬ思に戀しなは誰にかへつる命とかいはん

大納言(實定卿)家にて戀

夢にさへかへすけしきのしるけれは返す物うき小夜衣哉

老後戀

姿こそおひその杜と霜かれめ袖のけしきは和哥の浦波

一會後被妨戀　範兼卿家

思ふとてえそ立そめぬ錦木を千束まつへきよはひあらねは

二夜とも越みてしかな相坂の關守しはし打もねなゝむ

重家卿家哥合に

衣〳〵になるへき人もなきものを別ぬと鳥の誰につく闇

戀哥ある人のこひ侍しかは

夢をたに思ふはかりもむすはしや扨もや戀の暫しやすむと

哥林苑にて

世中ははてや何かは夢ならぬあひみしをしも現と思はし

或人のもとにて

侘つゝはあふとみる夜の夢をたに君か情と思はましかは

寄貝戀

我戀は海人もすさめぬうつせ貝幾しほぬれて年の經ぬらん

經盛卿家歌合

さりともな戀しぬる身を君とてもいつ迄よそに聞んとす覽

後のたひの哥合に

新續古 たのめ置し人もきまさぬ秋の夜はまた鳥の音を待か苦しさ

影供會に

中〳〵に夢もけしきはうかりけり俤のみこそおもかはりせぬ

歌林苑十首會中戀

思へたゝ戀しぬるまて難面てやみにし我といひてなにそは

媒變約戀　同

もらさむと筧の水のうけ〳〵て何のふしゆへとゝこほる覽

忍戀　同

つゝめ共あまる思ひの言葉は心にもあらてありそしぬへき

被謗他戀　同

なくとても人やくるしき我涙みるめにさへもあまりける哉

旦來夕歸戀　同

あくと待ちくると墓て何時迄か我なつさはん人のよつまに

寄水鷄戀　同

水鷄そと人はきけとて忍ひ妻敲きもす覽問はすしもあらし

人のもとにまつといふうへわらはのありけるをある人の思ひかけてつかはさむとてあなかちこひしかはたひ〳〵よみてとらせ侍し

我心むすほゝれつゝすくせともまた打とけすいはしろの松

又のちに

かくはかり涙はあらへと高砂の松はつれなく色もかはらす

見返事增戀　哥林苑

まつはしのふみそめつるは嬉くて返りとにそ袖はぬれける

戀田舍人　同

忘れすよひなのすまゐになれそめしうなひ乙女かその傍〔を脱歟〕

待返事戀　同

ひく墨のたかひてもこはそれをたにもし習せぬ印と思はん

寄硯戀　同

玉章をかくに落そふ涙こそやかて硯の水と成けれ

被猜木人戀　右大臣家

たなはしに我黑駒のあしおれと思ひねにこそ妹はねぬらめ

經盛卿哥合に

思へ只うき計りなる袖ならはぬるとも夜はかへさましやは

或處にて

戀しぬと知せてかひはなけれとも聞えはてなは斷と告やれ

季經朝臣家哥合に

いたつらにしほるゝ袖を朝露に歸る袂と思はましかは

乍臥無實戀　哥林苑

うしみつは過ぬる迄もなつさへとまた何事も語らはてきぬ

被艷女戀　同

女郎花いたくたはれて人にまたいはれの野への露に そはつな

獨臥歸戀

道芝をわくとて露をおしからむうつりかもせぬ今朝の袂は

寄秋風戀　同

新續古はしや集 秋風もやゝ吹立ぬとはかりや戀せぬ人はよそにきくらん

寄殘菊戀　同

もとの色に移ろひ變る菊も哉かれにし人にかくとみすへき

寄竹戀

夜を寒み獨ぬるよは竹の根のとかくふせともふしうかり兒

寄草戀

山陰の雫にぬるゝまろ小菅まろしもひとりしほれさりけり

遍昭寺歌合　戀

いもかもる勿來の關をはかれ共鳥ならぬ音はかなはさり兒

觸事思出戀　哥林苑

をのつから立はなるれは傍を荻ふく風のまたさそひくる

尋山家人戀

是やそといもか家路を尋れは門田の稻葉そよと答へつ

寄寒草戀

續古 日にそへて霜かれ行けは葛の葉の有しはかりもえこそ恨ね

戀學問媛　實房卿家會

窓の内に蛍はの雪を集めても妹かふみこそまつみちれけれ

及曉逢會

啼ぬなる鳥はそらねにあらねとも明てそとをすあふ坂の關

成契久戀

たのむるにのふる命も年ふれは限しあれやなをそけぬへき

依賤被厭

さのみこそ心はかゝれむさし鐙さしもや君か我をさくへき

忘他事戀　　内大臣家にて

郭公なくへきほとも忘られて物思ふ時そまたて聞つる

或女のかきたえたるおとこの許へやらんとてこひしかはよみてとらせ侍し二首

君ならて誰にかとはんしはしたに人を忘るゝ道を教よ

つらからぬ人をも人は忘るめり憂は何ゆへとゝこほるらん

有馬にしほゆあみにまかりたりしに人〻あまた瀧水驚夢といふ事を

旅ねする枕に落る瀧つせは夢にもいもをみせしとやさは

賴輔朝臣家哥合し侍しに忍戀

あやなしやせめて人めを包むまにもとせし程の詠たにせす

依戀留城外

とりすかるこひのやつこにしたはれて立とまりぬる旅衣哉

經年戀　　宇治僧正御房會

歎つゝ年そへにけるむへこそは戀を命と人のいひけれ

不知在所戀　　哥林苑

いつこともしらせぬに社しられぬれ我を勿來の關にや有覽

戀の哥とてよめる

自ら逢にかへんとまつ命それさへいかにけなんとす覽

契後隱戀　　哥林苑

帚木のふせやといひて今朝は又隱るゝに社そのはゝはたて

不慮絶戀

自ら誓しとたえを橋にして聽てふみたにみせしとやさは

不通夜戀　　公通卿會

三とせまて待つる戀のしるしなくあかしもはてぬ新枕かな

隆信哥合し侍しに

餘所にみる人たに忍ふ袖の上を君しもうたゝ岩木成らん

被慰人戀　　哥林苑

三年迄あはぬためしはなくや有と聞を誓しの玉のをにせん

辭後會戀

蓬坂を又はこえしといふに社もとの清水にぬれかへりぬれ

旅行戀

笹わくる袖とはいひつ旅衣露のひるまを何にかこたん

契經年戀

まてといひし共の言葉は枯はてゝ茂りにけりな軒の忍ふは

隔夜遇戀

誰にまた二夜とたにも笛竹のふしもつゝかぬ音をなかす覽

立聞音戀　　實國大納言會

なつかしき今一聲を聞やとてたゝすむ軒に小夜更にけり

後朝戀　　同處哥合

明ぬ共かへらぬ物としらすへく我や例しに今朝はならまし

中〻にあはてこし夜の袖たにもいつかは斯はひちて歸りし

戀老彌切　　哥林苑

露の命のこりすくなく成ぬれはあふにも誰かかへんとす覽

年々會戀　　同

月ことのたえまをこそは歎しか今はとしにもなりにける哉

度々延約日戀

けふ〳〵といふをの葉にかゝりくる露の命ものふる限りそ

戀羅道心　同
後の世のけふりをしらて是をさは戀にこかるゝ思ふ儚なさ
隆親君哥合し侍しに
いけるにもあらぬ物ゆへなそやこは戀は死せぬ病成らん
人にかはりて
なく涙露とし置は眞葛はふあたの大野もせはくやあらまし
戀の哥あまた人々よみ侍しに
あふとみて醒ぬる床のわりなさにうたゝ有物は夢に知にき
よそにのみ荻ふく風はわたらなん獨ね覺の床はなすきそ
或處哥合に人にかはりて
夢にたゝあはす成ぬるね覺にはかへす衣を恨みやはせぬ
從門歸戀といふ事を人にかはりて
あけよとて叩く門かはかくとたに知れて社は立もかへらめ
月前戀　右大臣殿歌合
よしさらは君にも今夜我ゆへの涙もよほせ山のはの月
按察(公通)十首歌中夜戀といふ事を
誰とねていとひもすらむ鳥の音を獨そ我は待明しつる
俊成卿十首哥中戀
儚しと夢をもいはしそれを社戀のなくさの玉のをにすれ
過不逢戀　哥林苑
千載 思ひきやうかりし夜半の鳥の音を待をにして明すへしとは
昔思出戀　同
月詣 儚はむかしなからに身にそひて我のみ年の老にける哉
詞和不會戀　同
下つきをうれしく／＼とききもてはみな僞の言の葉かさは

隔川戀　尾張哥合
戀渡る中にしもなと名にもおはぬあふくま川の流れさらむ瀬
兵衛佐經正家哥合に戀の心を
あひもみはのひん命をやかてさは其一夜にはいかゝ戀へき
又おなし心を
うしや我よひ／＼をいむらましを思出にして世を過しつゝ
日吉歌合
命をはあふにかへんとまつ物を猶いたつらに先立ねとや
住吉會　哥林苑
新古 我戀は今を(はイ)かきりと夕ま暮荻吹風の音つれて行
人にかはりて
うかりつる夢をちかへて賴む哉逢と見夜もまさしからねば
當夜違約戀　哥林苑
今夜さはうれしかりつる袖に又もとの涙を猶つゝめとや
晩風催戀　同
何とこは荻の夕風さてもあらて我戀をさへおとろかすらん
寄夢戀　同
逢と見る夢のさむるはかへるにて又其暮にゆかは社あらめ
寄雪戀　同
けぬか上に友待雪はまちつけてあはて年ふる身をいかにせん
臨期違約戀　同
たのめをきし夜半と思ひてくれは鳥何にあやかる心成らん
をのつから暫しつれなき君なるをしらて儚く戀やしぬへき
思ふにもよらぬ命をしはしとて哀つれなき君にや有らん
戀しぬとさいはしとて是を猶いけるには又すへき物かは
路頭見戀　同

女郎花立るあたりはよきて行ん道行すりは袖ぬらしけり

關道歸戀　　同

なをさりの心や君に先立て道をとをさぬ關と成けん

隔不通書戀　　同

人傳にたえすもゝこし水茎の跡さへなとや打もまかせぬ

契夜有障戀　　ある處にて

今夜さへ猶いな船のいかにこは引くゐに棹のさはり勝なる

留書無言戀　　同

鳥の跡を我はつゝむといふならは誰言の葉もふみな散しそ

老後戀　　同

しほれぬる袂にそへていとゝしく老の波さへ包むとをしれ

旅宿に故郷を思ふといふ事を　同

何となくおほつかなきは古郷の妹か戀しくなるに有らん

寄秋花戀　　同

つれもなき人にみせはや女郎花あたしの野邊に招けしきを

欣蒙芳言戀　　同

をのつからしめちか原と賴めをかは露の命もそれにかけ劔

隔物談戀　　同

立にける跡をもしらて物こしに契はてつと思ひける哉

不用誓言戀　　同

ちか事もうき身はこりぬ我といへは神をも神と君か思はぬ

改名藏戀　　同

こゝをさもあらぬ人そといふならは我も名を社かへて尋め

被妨親戀　　同

かそいろはいかに恨て諫む共戀しなすとていけるへき身を

秘知音戀　　同

むつれくる人にはみせし戀衣立そふ老の波もはつかし

喚後又歸戀

相坂の關の名社に成ぬるはあやしやいかにふみやたかへん

遣車待戀　　通成朝臣家會

まつ方の車の音は我門を過ぬまてこそうれしかりけれ

喚後歸戀

今夜さへいねとかへすは秋の田のかりに契しとのはかさは

見書增戀

玉章は玉まく葛にあらねとも恨て露そいとゝこほるゝ

逢不會戀

かたらひしをやくやしき郭公日をへて雲のよそに成行

逢坂を越しは夢とみしかとも袖の淸水はうつゝ成けり

人のこひしかは女にかはりて

今はたゝ人めはかりの言の葉をかきなたえそと思ふ計そ

歎短夜戀　　哥林苑

あふとても命にかへぬ旅ならはせめても夏の夜をは恨みし

淺ましやまたむつとの程なるをいかに鳴ぬる鳥の音そこは

依戀赴遠路

はる〳〵と波路を分てこゆるきの急くと君はしらすや有劔

借他名途戀

高砂の松としきかはいかはかり磯邊の浪のいそかれもせん

其人と名のるに君かとけぬれは其名の主そうしろめたなき

曉戀

曉のね覺の床のさむけきに身にそふ物はうらみなりけり

聞無實怨戀　　哥林苑

君かけふなき名をたつとうらむるは我になき名を立る之兒

成契久戀

新拾 あひ見ても忘るゝ程も成なまし有し契りのまゝ（に集）成せは

歎空婚戀

ちかをもいなたてそめし新枕まことにかはす折もこそあれ

夜寒戀切

ひとりねの床はさこそはさひしきを猶身にしめと降霰哉

依戀忘衰老

姿をは戀のやつれにおほせつゝかくともつけて老はきに兇

違女札得戀

あらすとて返さまうきは横の戸をさゝて待んとかける玉章

立門空歸戀

明る迄たゝきしもせぬ水鷄をもはかなく人はとはぬ物かは

寄艸花戀

たゝはかれ荻の葉風よそれとたに玉ゆら心なくさみもせん

寒夜增戀

よひとてもこぬはうけれと風さむみ曉に社身にはしみけれ

失中人戀

かこたれて立かくるゝかなか人よいつかは聞し人のよ妻と

寄網代戀

あしろ木の手にもかゝらぬ君によりひをへて物を思ふ比哉

隔物臥戀

かへしあれは越ても行しなそもかくよれは枕をのけて臥覽

引放逃戀

立なをりまちはかりつる睦言にねたくも袖を取ゆるへつる

燻邊女談

睦言のわかてすさひのはいうらをよそけに妹か思ひ顏なる

契明夕戀

飛鳥川あすと逢瀨を契るにそ又よとむへき物と知ぬる

たひ〳〵の空賴めにしならはすは今夜のあすも嬉からまし

戀爲罪業

君ゆへに落る淚はわたり川しつまんせにそ落もあふへき

戀離道心

味氣なしいさこりたつる錦木を法の爲にとになひかへてん

隔三夜戀

物いみの程社あらめ昨日さへみよとや君かかきやたゆへき

責誓言戀

ちかをたゝ人をうらみぬ人まにも月には袖のぬれぬ物か

依月增戀

おもへたゝ人を恨みぬ人たにも月には袖の濡ぬものかは

曉戀　右大臣家哥合

見ぬもうしみてもわりなし夢ゆへに物を思はぬ曉もかな

不語終隱戀

聞はてん袖をはつせといひつるをねたくもさもと思ける哉

不知身程戀

さしもなそ厭ふなる覽芹つみし人たによには有とこそきけ

被厭下女戀

いなしきのひなの住ひにたへし迚我を厭ふかうなひ乙女は

不知居處戀

中〳〵にとらふす野邊と聞ならは早思ひねの夢にみてまし

寄鹿戀

妻戀ることはたくひもなき物をしかな思ひそ我もさそなく

厭戀思後世

くれなゐの涙の色の戀衣けふ墨染に思ひかへしつ

延約日戀

たのめをきしその日をのふる度ことにいかにつゝまる命成覽

被叱親戀

さそかしと親の諫めを思へともことはりなくもぬるゝ袖哉

煩戀歳暮

一とせをこひに暮してつゐにけふしほりはてつる我袂哉

不誤被怨戀

かへりては誰うらむへきことならん三とせもまたぬ新枕をは

有隣不遇戀　頼政朝臣會

はゝ木ゝと其中垣のみゆれはや有なからかくあひみさる覽

逢女歸戀

おろしをくいもか朝ての俤のまた小車にのりにける哉

迎不逢戀　重家卿哥合

ひくによる物なりなからあつさ弓なと思はすにふさぬ心は

約冬戀

冬來なはまた春ともやいひやらんさてもや命猶いけるへき

稱物忌戀

物いみと常はいへとも細々と人のいふをはなとや告めぬ

失返事戀

吾妹子かうらにかけりしあしてをは難波の【あしの假字】ひきかすめけん

戀延齢謀

たのむるにのふる命はなきなかす涙や玉のをとは成らん

初通書戀

水莖のあとかきなかしけふそやるあふくま川と祝そめつつ

見後手戀

ねすなけとみもかへらぬはいとゝしく心にくさの増る君哉

嫌中人戀

もゝはちにかへても云んけにも君中人からのつらさとならは

空疑戀

あやまたぬたひさへいもか疑へはよしや實をしらぬ成覽

嫌會所戀

難波女かこやならなくにいかにこはこゝもかしこもあしくと云

待憑戀

たのめぬに床うちはらふ折もあれはまして今夜は思ふ計そ

乍隨不遇戀

しほれ葦の涙にしたかふ程よりもなとや下ねの心つよさは

中人違約戀

いはせ川中のとたえの丸はしは道よりふみもかへすなり覽

欲絶戀

絶なんと思ひたつより中〳〵にうかりし事も忘られそする

寄石戀

苔のむす岩ほと成し人たにもとの葉にこそ打はとけゝれ

寄催馬樂戀　宇治僧正房

今日にてそ淺き心はくまれぬるいまはたのまし飛鳥井の水

契久戀

まてといひて年や經ぬ覽月影をかくやはさへし軒の忍ふは

被嫉妬妻戀

それゆへと思はぬ旅の詠をもいかにやかくはさのみ疑ふ

立田山夜半にこえしを歎ける人たに世には有とこそきけ

戀遠人　前大僧正房

はる〳〵と山また山を思ひやる心さへこそくるしかりけれ

憑不來
賴めつゝこさりし夜半はいかゝせしとたにも君か問社有め
　　隔遠路戀
陸奥のあいつの里に君はありと思ふはかりそ賴成ける
　　隔山戀
さゝ浪やみつの濱邊に妹しあれは春とやはわくしかの山越
　　人々戀の哥よみ侍しに
夢にあはゝ覺しと兼て思しにそれも叶はぬ身をいかにせん
僞にたのめしによりいける命猶それもかな千世も經ぬへき
今はさはやりし玉章かへさなん手にやふれ劔形見にもせん
關にすむ夕つけ鳥に我ならん鳴てもつゐに相坂におり
をのつから打まとろめは打おこしいかにせたむる胸の思そ
見る人もしるき思ひをしのふれはうら山しきはほたる成覓
玉とゐし小篠か原の白露を袖のうへとは思はさりしを
うたかひし枕やいかゝおもふらん床ひつはかりなれる我戀
心をそ我かたきとは思ひぬる戀のやまひも人しつけねは
いさやさはみたれあはんと言しかと又何事に忍ふもちすり
大空のなからましかは戀人の心を誰になけきかけまし
こりはてぬ今はまたしと思へとも荻ふく風にはかられに覓
我床は涙のよとゝ成はてぬ是こそ戀のすみか成けれ
さり共とあらましをせし程にそれにてつゐによを盡つる
夢をたに現になさんと思ひしに有しうつゝのなとや夢なる
　　後朝心をある所にて
逢にさは身をやかへつる朝露のをきていくへく心地社せね
新後撰くすのうらはもけさ見れは葉
我ならぬあふ坂山の葛の葉もかへるとてこそ露もこほるれ
今そしるよひのうつゝは明て後かへる朝の夢にそ有ける
　　忍戀
忍ふれは人社あやめとはさらめなとや君さへしらす顏なる
しるからぬ景色なりせは何しかはつねはかへにも打向へき
中々に君はあはれをかけすとも人にしられて戀もしなはや
かはらやの下やく烟下にのみさのみはいかゝ思ひこむへき
たえやらぬ涙を玉の緒にはしていつきるへしとみえぬ戀哉
　　依賤被厭戀
あしからし物をと我はえそいはぬ難波の蜑となれる身なれは

　　已上二百八十三首。

林葉和歌集第六

雜

祝

右大臣家百首　内五首

君か代は濱のまさこの上に又うちをく浪の數もこえなて

春日山神のちかひにかゝりつゝ惠をまつとみゆる藤波

(新古)神風や玉くしのはをとりかさしうちとの宮に君をこそ祈れ

君をわか心のまゝに祝をくその言の葉もかきりこそあれ

三笠山木高き藤のうら葉にはわきて春日も先やさすらん

太皇太后宮白川にはしめてわたりゐさせたまひて左大將(實定)なと參りて和歌會あらんとせしに。ちかちかと參とありしかは讀て侍しかとも左大將の京の家に火ちかしとてにはかにとまりにき

月照松

幾千世か君はみるへき有明の月に花さく松のこすゑを

おなし心を

月影も松のみとりに色はへて千世まてすまん氣色なる哉

よゝをへて木高き宿の松なれはかゝれる月の影そすゝしき

風生竹

千世ふへき宿とはかねて知ぬらん竹の葉風もそよと答ふる

此君の千世のみかけのあたりこそ風のつてまて涼かりけれ

風さやくまかきの竹のふしとにそゝや我君萬つ世まてと

正月三日人のもとにまかりたりしかは中門に松をたてゝいははれたりしに歌よめと侍しかは

春にあへる此門松を分きつゝ我も千世へんうちに入ぬる

公通卿十首哥よまれ侍しに竹爲友と云心を

此君のなからましかはいつとなく誰と千歳の數をかそへん

百首哥讀侍しに祝の心を

いつとなく君に齡をゆつりはの猶とことはにさかゆへら也

大納言(實房)家十五首歌中に祝

天てらす月日にめくむ位山としに木たかく成そますへき

經盛卿家哥合に祝を

鶴龜もよはひつきなん後は猶君かみかけにかくろへてすめ

大納言(實國)家哥合に

萬代と君をよはへは春日山やま彦さへこそ聲あはすなり

俊成卿十首哥中に祝の心を

君か代にしらたま椿幾たひか猶さかゆかん杖にきるへき

清水寺地主權現のおまへにて人〻いはひの心をよみしに

音羽山さよき流れの瀧の糸は千世を經つゝも君そむすはん

中院入道右大臣住吉に參りて哥よまれ侍しに

君か經ん千とせのかすによる浪を松にかけてや神も知らん

緑竹久友　哥林苑

葉かへせぬ哥のはやしに枝かはす此君たちや千世の我とも

鶴遐年友　同

年をへてなれそふ田鶴の數みれは我千世迄もたのもしき哉

月契多歲　右大臣家歌合

しらはやな幾よろつ代か三笠山君と有明の月は住へき

賀茂神主重保かむぬしに成てはしめて正月に哥合し侍しに子日を人にかはりて

子の日して千歳の數を水かきの久しかるへき程をこそまて
君かひく子日の松をことしより今幾千世も神のまに〳〵
すみよしにまいりて人〻祝の哥あまた讀侍しに三首
君か代の數とや神も定むらんしき波かくる住吉の松
君か經んよはひをかねて幾千世と浪のかすとる住吉の松
君かへん千世のかさしかいつとなく浪もてゆへる住吉の松
又祝のこゝろをよめる
君か經んよはひを千〻に分て見は其ひとつこそ萬代ならめ
皇后宮亮季經家にて人〻祝の哥よみ侍しに
春の日の光に匂ふ藤なれは末葉まてこそ咲さかへけれ
法性寺殿三十五首の月の哥よませ給し中に
曇りなき影をかはして萬代に君そ三笠の山のはの月
ある人一條わたりに春日をあたらしく祝ひまいらせ
て其御前にて歌なとよむとのはへりしに
めつらしく若葉さしそふ藤花いとゝそ北へさかへましける

別

百首哥よみ侍しにわかれの心を
新古 かりそめの別とけふを思へともいさやまことの旅にも有らん
登蓮法師つくしの方へ罷り侍りけるに哥林苑の人ゝ
餞し侍しによめる
新古 遙々と君かわくへき白浪をあやしやとまる袖にかけつる
又そなたへまかりし人を餞すとて
遙々と文字の關路を隔てすは文見てたにもなくさめてまし
敦頼あつまのかたへまかり侍しに哥林苑人ゝ餞し侍
しに
新拾 是をみよ戀しかるへき行末を思ふにたにもぬるゝ袂よ
又そなたへまかりしを餞し侍しに
歸こんその日はつけよかねてより行あふ坂の關に待みん
素覺入道津の國へ下り侍しに哥林苑人ゝ餞し侍しに
住吉のかたと聞よりいとゝしくまつに久しき物や思はん
賀茂神主重保こしのかたへまかり侍しを又哥林苑人
ゝ餞し侍しかは
歸るへき道とはきくを我涙いかにしるらんうつせみの世を
あかつき物へまかり侍し人をわかれおしみて
しゐて猶行なん君と聞からにかつみなからも戀しきやなそ
式部少輔範季みちのくになりてくたり侍しに舉の範
光又おなしく相具してくたり侍しに送り遣し侍し
心をは松にかけつゝ武隈の二木の千世をともに祝はん
またあつまのかたへまかり侍しに人のもとへよみて
送り侍し三首
待うへき人はなにかはかり初の別れに袖をかくはぬらさん
東路のかたときくとも我はいさ心つくしのわかれとそ思ふ
都鳥見えん渡りは思ひ出よ有やなしやの情はかりを
又あひしりて侍る人のとほき處へまかり侍りしかは
我心そへてしやれは旅ころも立わかるともおほえさりけり

羇旅

百首哥中に旅のこゝろを
宮古出てひとり明石の旅のうらにありす顔なる友千鳥哉
又後百首中に
旅ねする我ならなくに逢坂の關山鳥もひとり鳴也
遠き所へまかり侍るとて野宿して心におほえ侍し

都社思へは旅ねつるに我これはふすへき野へにはあらすや

按察大納言(公通)わたのへにてしほゆあみられ侍し時頼政朝臣にぐしてしほゆあみに下りあひて侍しかはきゝつけてよはれ侍しかはまかりてよめる

君ますと兼て知せはいとゝしくつなてを急旅にやあらまし

海路晩望といふ事を隆房朝臣のもとにて

まか千鳥もろてに急けかけてこく江島の沖に夕日さかりぬ

旅宿月といふ事を　或處にて

夜をこめて我は立ぬる旅の庵に猶有明の月そやとれる

すみよしに鹽ゆあみて侍し時海上晩望といふ事を

さても世をふるかとみるそあはれなる霞にまかふ沖津島守

はる〳〵と沖こく船のあとみれはむかしの人の心しられぬ

右大臣殿百首内　旅五首

有馬山たかはかりしき夜もすからふしも定めぬ草枕かな

かへりみし都の山もへたてきぬたゝ白雲にむかふはかりそ

みやこのみ戀しき旅のうきねにはうらうへかくる袖の白浪

(玉葉)宮古人おなし月をはなかむともかくしも袖はぬれすや有覽

こしかたも又行さきもいかにこは雲と波とに成はてぬらむ

已上五十一首。

箇内

左點百五十八首。

右點七十五首。

无點四百三十七首。

但左點は當座人〻并後日傳聞人〻聊有二感氣一哥等也。

右點は撰集并所々打聞等被二撰入一歌等也。

無點は不レ及二沙汰一謬歌。但依レ多レ召所レ令二注進一也。

治承貳年八月廿三日

右林葉集者。俊惠法師(俊頼朝臣子息)歌也。此寫本者。將軍家(常德院殿)。以二御物御本一。所レ令二書寫一之本也。以二件本一書寫之挍合畢。

右林葉集上下二卷以所藏舊本書寫以一本挍合畢

群書類從卷第二百六十九

和歌部百廿四　家集四十二

寂然法師集

春

谷の水峯のあらしもゝろともに春立けふといかてしるらむ
ちれはおしにほひはまさる梅の花いかにかすへき春の山風
春雨も日をへてふりぬみよしのゝ吉野の山に花やさくらん
よしの山花咲ぬれはあちきなくこゝろにかゝる峯のしら雲
山さくら咲るたかねのしら雲はいつれか花の梢なるらむ
（千載中）この春そ思ひはかへす櫻（山さくらイ）はなむなしき色にそめしこゝろを
木のもとは花故にやはすみそめしちれは心のあくかれぬ覧
花盛いさ木のもとに暮してむさかすはなにのみにか成へき
おしめとも風にみたれて散はなをむすひとゝめよ青柳の糸
むら鳥のわかれやおしき花のちる梢にきつゝうくひすの鳴
山櫻ちる木のもとはたちうくて休むとなしに日を暮しつつ
谷河の春のなかれをむすふにはたよりうれしき花を社くめ
あさみとり霞にきゆる鴈かねのこゝろほそきは春の明ほの
つく〳〵と春の日くらし降雨は月みる秋のこゝろこそすれ
小山田の種まくよりそ哀なるいなはのかせをかねて思へは
春雨のまたれぬ色もかはらねはちしほにみゆる山ふきの花
をそ櫻また散やらぬ花やあると外山ふみ分とふ人もかな
入ぬるかおほつかなしや山のはに霞かゝれる春の夜の月
このもとは花よりほかの友もなし誰をみをきて春の行らん
行春のかたみはかりに殘しける花のかけにてけふは暮さん

夏

をしみつる花にかへたる時鳥鳴音を待もくるしかりけり
すむ人の心そみゆるうの花をひとへにかこふをのゝ山さと
ゆふかけて片岡になく時鳥かものみあれになのりすらしも
卯花にほとゝきす鳴かた山のかきねにいかてみをかくし剱
あやめ草さ月もしらぬ山里の軒のしのふをよそへてそみる
たつぬとて宿にとゝまるよひもなし山時鳥いもやいさめん
たつねつゝ生田の杜のほとゝきす薫のしのやの忍ひねに鳴
あちきなくまたしと思へと郭公あかぬ名殘もときは成けり
まつといひあかすと歎くとにかくになにのむくひそ山時鳥
きゝもあへす涙こほれぬほとゝきす老のね覺の曉のこゑ
いくかへり聞てかあくとこゝろみようちはへてなく山時鳥
こゝろ社聲にをとらぬほとゝきす更行空にひとりやすらふ
松蔭の岩ねにしける苔むしろなつもかよはぬすみかなり鳧
ひくらしのなく片山のならのはにかせうちそよく夏の夕暮

秋

（千載上）秋はきぬとしも牛はにすきぬとや荻吹風のおとろかすらむ（なりイ）
あさちはら主なき宿の荻いはにたれにか風の秋をつくらん
秋風にうつらなく野を來てみれはうへにし萩いまかき也堯
あるしなきまかきはあれてをいれのみ秋を忘れぬ女郎花哉
みにことも誰にかいはむ小萩咲離をたゝにすくさすもかな
かねてより心はすみぬ秋のよの月まつみねのこからしの風
里はあれて月はすみます秋い夜を哀といふもなへてなる哉
過きにし昔をさらにさそひきて心にやとす秋のよの月
月をみて哀しるらむやとことにみを分て社とはまほしけれ
里わかぬものにしあれは秋のよの月い心をはちつゝそみる
忘れつゝひろかとおもふ秋のよの月とは虫の聲そしらする
月影を袖に移してみるのみやもの思ふ人いとりところなる
思ふことなくてなかめは中〳〵に月い哀やなへてならまし
心すむちゝの哀をあつめてや秋の月をはみかきいつらん
此世には心とゝめし秋の月すこしはやつすくもゝあらなむ
露ふるき蓬かもとをかきわけて月はみるやととふ人もなし
いかならん雲ゐなり共おくれしと月いみ獨り契りおきける
蓬生に成行やとはきり〳〵す鳴ねを床のものと社きけ
ちりつもる紅葉分きてよそにみは哀なるへき庭のおも哉
はかなくて暮行秋のかなしさをおもひしらする鹿のこゑ哉

冬

をとせぬに冬の景色のしるき哉こほりにけりな谷のした水
月は猶おなし空をもなかめけり野へのけしきそ秋は淋しき
かきくらし物そ悲しき神無月なかむる空もうち時雨つゝ
（月詣）山めくり染をく色とみし程にはては木い葉も時雨とそふる
霜枯のよもきか庭いさひしきに菊のみ秋の名殘なるかな
もみち葉のちるを歎し梢より月いもるこそうれしかりけれ
（續後冬）たれか又まきい板やにねさめしてしくれい音に袖ぬらす覽
色めきし花いかつらに女郎花いたゝく霜いあはれなるかた
花にのみ心はあれやきゝすなく枯野のすゝきみる人もなし
みよしのゝ山へに雪の積るにはまつふる里そ冬こもりける
（新古冬）たつねきてみち分わふる人もあらし幾重もつもれ庭の白雪
花さかぬ梢はみえすおほかたは雪のうちをそ春といふへき
おきつかせ身にやしむらんから衣うきゝの浦に千鳥鳴なり
霜冱る蘆のしのやにね覺してひまやしらむと待ぬよそなき
行年をゝくりむかふと云程にさためなきよいはてそ悲しき

戀

ますかゝみみし俤の身にそひて心は君にうつりぬるかな
袖にみつなみたの玉をぬきためて戀きかすを君にみせはや
（月詣）戀さのつらさにまくる物ならは今まてかくは歎かさらまし
君故におつる涙のおしけれはかたしく袖をほしそわひぬる（しほりてそねぬるイ）
（月詣）うたゝねの夢にも人のつらけれは驚く程にぬるゝ袖かな
かく計人の心をくたきけむむくひおもふもうらめしのみや
うらみかね思へはつらし世中に戀といふ事を誰はしめけん
つらきをは思ふあまりに忘られぬ絲き事いなくさめもかな
明ぬとて常は厭ひし鳥の音のひとりしぬれはまたれ顏なる
かへるさの袂にかゝる涙こそうらみしよりも色増りけれ

雜

上西門院の女房法勝寺へ花みにまかると聞て京へ出たりけるついてにしたしき女房のもとへつかはしける

花見にときくに心のたくふ哉すかたは苔にやつれはつれと

大原にて澄憲僧都の說經しけるをきゝて申つかはしける

きく人のころもに玉もかゝるまて涙こほれし法のにはかな

如法經書てうつみまいらすとて人々よみけるに

朝日待かすに入身そたのもしきいつへきほとは遙なれとも

月前遠情といふことを

天のはらへたてぬ月をしるへにてもろこしまてもゆく心哉

おもはぬふなてしてゆく人に

雲ゐにてむかしなかめし月のみや旅の空にもはなれさる覽

西住法師みまかりぬと聞て西行法師かもとへつかはしける

(千哀傷)みたれすとおはりきく社嬉けれさても別はなくさまねとも

骨をひろひて高野へ人のゝほりてかへりぬと聞ていひつかはしし(脫歟)

入さにはひろふかたみものこり鳧かへぬ山路のともは涙か

はらからなる尼のすみかにまかりたりけるに草ふかくなりて哀なりけれはかへりてのちいひつかはしける

滋きのとなれる住家をかき分てしかとはむとは思はさり鳧(しをイ)

ある人々法文百首をみて和せられたりけれは

濱千鳥はかなきあとを止めすは涙のかゝるたまもみましや

住よしにまうてゝ松にかきつけゝる

松風の音はいつことわかねともなを住よしの秋そことなる

舍利のこゝろを人々よみしに

これそこの涙にくれしけふりより分ちいてたる山のはの月

涅槃會の日人々そのこゝろよみけるに

墨染の袂そけふは露ふかきつるのはやしのあとのみなしこ

天王寺へまいるとてよめりける

(風雅)心有てみるとしもなきなには江の春の景色は惜くもある哉

諸行無常のこゝろを

みにかふるひとも有けることのはに心かゝらぬすゑの露哉

常在靈鷲山のこゝろを

(月詣)ときはなるつるのはやしのあや(そはかイ)なくも薪つきぬと思ける哉

仁和寺の法印の西山にこもりたまへるに九月十三夜に月を詠しける

なみち分むなしき舟に見し月の名殘にこよひ袖ぬらしつゝ

述懷のこゝろを

いつくにか我身すまゝし斯計うきよに山のおくなかりせは

無常のこゝろを

朝かほの花に宿れる露のよははかなきうへに猶そはかなき

みし人もかくれのみ行あた雲にいつたくふへき月日成らん

人のよみたる歌やあるとてこひたりけるに

出しより家の風をもわすられて散らす計のとの葉そなき

乍ㇾ入二撰集一漏二家集一歌

たいしらす

(千)世中をつねなきものと思はすはいかてか花の散にたへまし

同
陸奥のしのふもちすり忍ひつゝ色には出しみたれもそする
　火盛久不燃といへるこゝろをよめる
同 たに集
烟にもしはしたなひけとりへ山たち別にしかたみともみん
　悲鳴吻咽痛戀本群と云るこゝろをよめる
新勅
たちはなれ小萩か原に鳴鹿はみちふみまよふともや戀しき
　十如是のこゝろをよみ侍ける
　本末究竟等
同
をさゝ原有かなきかの一ふしにもとも末はもかはらさり覧
　たいしらす
同
つく〳〵とむなしき空をなかめつゝ入相の鐘にぬるゝ袖哉
　八月十五夜によみ侍ける
續後撰
なにめてゝ秋のなかはゝこよひそと思ひかほなる月の影哉
　十戒うたよみ侍りけるに
續後拾
なかきよをいかに哀とてらすらんむなしき空にすめる月影
　十戒歌よみ侍けるに不自讃毀他
續後撰
もかみ河人をくたせはいな舟のかへりて沈むものと社きけ
　勸發品受持佛語作禮而去
新勅
ちり〳〵に鷲の高嶺をおりそ行みのりの花を家つとにして
　弘決秋九月從慈始入天臺といふ心を
新後撰
長月の有明の月ともろともに入りけん峯を思ひこそやれ
　寂然大原にすみ侍りけるに高野より山深みといふこ
　とをかみにおきて十首歌よみてつかはしける中に
　西　行
玉葉
山深みなるゝかせきのけちかさに世に遠さかる程そ知るゝ

　此返事に大原の里といふことを下の句におきて五十
　首をよみてつかはすとて
同
ひとりすむおほろの清水友とては月をそやとす大原の里
　父なくなりて後日數も殘りすくなくなりて侍りける
　頃
風雅
君にわかおくるゝ道の悲しきはすくる月日も早きなりけり
　秋のうた
風雅
木からしに月すむ峯の鹿の音をわれのみきくは惜くも有哉
　さぬきよりみやこへのほるとて道より崇德院にたて
　まつりける
同
慰にみつゝもゆかむ君かすむそなたの山を雲なへたてそ
　崇德院松山におはしましけるにまいりて日かすへて
　都へかへりなむとしけるあかつきよめる
同
歸る共後にはまたと賴むへきこのみのうたてあたにも有哉
　おもふことありける比
同
つく〳〵とことそともなき詠して今宵の月もかたふきに覧
　もろともに世をそむきなんとちきりける人にこゝろ
　ならすなからふるよしをいひて　とのみ集 よみ人しらす
同
はかなさはけふともしらぬ世中にさり共のみはいつを待覧
　かへし
同
思ひ入心とならはいたつらにあたしこのよをすくさゝら南
　述懷のこゝろをよめる
同
何事をまつとにてかすくさまし浮世をそむく道なかりせは
　題しらす

同 稲つまの光のほとか秋のたのなひく末葉の露のいのちは

相空法師身まかりて侍けるを西行法師とはす侍けれはあまたよみてつかはしけるうたの中に

同 いかゝせむあとの哀はとはすとも別れし人の行衛たつねよ

かへし　西行

同 なき人を忍ふ思のなくさめはあとをもちたひとはれ社せめ（ひとこそは集）

大原に住侍ける比藤原爲業まうてこむとのみ申てみえさりけるかたまへまうてきたりけるに月おかしき所とて外にやとれりけれはいひつかはしける

新千 待えたる雲ゐの月も宿らねはおほろの清水すむかひそなき

普賢經我心自空罪福無主

新拾 かつまたの池の心はむなしくて氷も水もなのみ成けり

妙音品

新後拾 くまもなき月の光にいさなひてわしのみ山をさして來に鳧（さそはれて集）

十戒さつくるをきゝてよめる

同 さきの世の報ときけは身のうさに思ひうるへき心地社せね（こ集）

提婆品のこゝろを

新續古 なにとなく涙の玉やこほれけむ峯のこのみをひろふ袂に

身雖遠離心不遠離といふ事を

同 身の爲とおもひて出ぬみちなれや心は人をそむきやはする（は集）

人々すゝめて法文百首歌よみ侍けるに二乘但空智如螢火

新古 みちのへの螢計りをしるへにてひとりそいつる夕やみの空

菩薩清涼月遊於畢竟空

同 雲はれてむなしき空にすみなからうき世中をめくる月哉

旃檀香風悦可衆心

同 吹風にはな立花やにほふらんむかしおほゆるけふのには哉

作是教已復至他國

同 やみ深き木のもとことに契り置て朝たつ霧のあとの露けさ

此日已過命則衰滅

同 けふ過ぬ命もしかとおとろかす入相の鐘のこゑそかなしき

弃恩入無爲

同 そむかすは何れのよにか巡りあひて思ひ鳧とも人に知れん

聞名欲往生

同 音にきく君かりいつかいきの松まつらむものを心つくしに

心懐戀慕偈仰於佛

同 わかれにしその俤かけの戀しきに夢にもみえよ山のはの月

十戒哥よみ侍けるに不殺生戒

同 わたつ海の深きに沈むいさりせてたもつかひある法を求よ

不偸盗戒

同 うき草の一葉なりとも磯かくれ思ひなかけそおきつしら浪

不邪婬戒

同 さなきたに重きかうへのさよ衣我妻ならぬつまなかさねそ（ちぬ集）

不酤酒戒

同 花のもと露のなさけは程もあらし醉なすゝめそ春の山かせ

題しらす

同 ことしけき世をのかれにしみ山へに嵐のかせも心してふけ

相空法師身まかりにけるを西行法師とふらひ侍らさりけれは

（新後撰）とへかしなわかれの庭に露ふかき蓬かもとのこゝろ細さを

返し　　西行

（同）よそに思別ならねは誰をかはみより外にはとふへかりける

寂蓮法師集

五首　左大臣家會春

色はみな雪の朝の梅かえに春のものとて鶯のなく

夏

いかにかくみるも聞もと卯花にほとゝきす鳴玉河のさと

秋

小鹿なく夜半の寐覺を思ひ侘なかむれは又あり明の月

冬

ふる雪に軒はかた敷深山木のをくる梢にあらし吹なり

戀

いまは我うきを限となかめてもこゝろの外はなれし面かけ

殘菊　北野會　公景勸之

秋の夜の有明の空にみし月の影さへ殘るしら菊の花

時雨

神無月はかなく過る夜の雨をいかにもてなす柀の板やそ

嵯峨に住ける比九月はかりあさましき程に世にしらぬかせ吹てよもきの庵たのむかけなく成にけるをみて殿法印へ申ける

我庵は都のいぬゐすみ侘ぬうき世のさかとおもひなせとも

返し

道を得て世を宇治山といひし人の跡に跡そふ君こそはみれ

九月はかりにはらからなる僧の身まかりて侍り〔け脱〕る人のもとへ十月になりてつかはしける

とへかしな秋のわかれもむさし野の草の縁りを知人そしる

。二條院宮白川にはしめて住給ひけるころ祝のこゝろ
をさうしに書付よとおほせられければ

水上の程たに遠き白河のなかれの末をおもひこそやれ

隆房卿別當の時都の政みなむかしにあらためられけ
るとき七條の市のたちけるを追せければ上の三條四
條のあせたりけるにもとのことくにむらかりわたり
ければよみて遣しける

いにしへの跡をそたのむかつまたの池にも鳥の歸り棲よに

返し

いにしへのあとに歸らはかつまたのいけらん限物は思はし

出雲の大社に下向して侍りけるころ兼宗申遣ける

かくはかりふかき思ひをしるへにて八雲のそこに尋入ぬる（けむイ）

かへし

きく人も八雲のそこはしる物を尋ぬる道そまよふ成ける

左大臣殿の御會四季戀

なかめつるけふは昔に成ぬとも軒端の梅は我を忘るな

春雨はふるともなくて青柳の糸につらぬく玉そ數そふ

權別當（範玄）當〻夕落花

かせ吹は軒の木間をつたひきて花もふる舞さゝかにの糸

內大臣殿座主御十首の歌合あるへしとて薄暮卯花

卯花のかきね計は暮やらて草の戸さゝぬ玉河のさと

曉更盧橘

夜をのこすね覺の床もくちぬへし花橘の昔かたりに

遠山郭公

ほのかにも聲そかはらぬ時鳥花は雲かとみえしおのへに

風前夏草

秋の色ものへの緣にこもるらん結ひなはてそしのゝ小薄

蟬聲夏深

秋風もかよふはかりの梢より松をはらふや蟬のもろこゑ

螢火秋近

いまはたゝ一夜計や夏むしのもえ行末は秋かせの空

後白河院かくれさせ給ひて三四年の後五月御供花の
時六條殿にて池水久隆

昔よりたえぬなかれをしら河のせきいれし末も思ひ社やれ

郭公述懷をます

みな人の涙もよほすほとゝきすふるき御幸の跡よりやこし

秋戀在野外

宮城野を霧のたえまにみしよりも殘る色なき秋のおもかけ

被妨客人戀

かち人の濡れぬ例もさかつきの底にかくへきゑに社有けれ

閑居聞虫

しけき野に荒行宿といひなからあまりなれたる虫のこゑ哉

旅宿鹿

秋の野をね山のすそに分なして袖にかたしく佐保鹿のこゑ

紅葉淺

とやまなる松の緣にはゝそ原みえ分程に色付にけり

山路霧（をイ）

こゝろせく杉の庵の名殘かなゆくゑは（もイ）今朝の霧にまかせて

擣衣夜深

秋といへとふかき恨は衣うつ〔下闕〕

民部卿哥合山花

たつね入山下かせのかほりきて花に成ゆくみねのしら雲

初郭公　同會

新續古（わかれし集）
あくかるゝ人の心もほとゝきす里なれそむる夜半の一こゑ

深　雪

我もまち人をもとはむ道そなき雪の朝のをのゝ山さと

夜思水鳥

谷ふかき夜半のうきねや松かせのほのかに埋むをしの一聲

深夜千鳥

すまの浦のあまのいさりひ數きえて歸る浪路に千鳥なく也

故郷初雪

つま木こる跡も昔に成ぬとやよし野の宮の今朝の初雪

鳥羽殿御遊和歌社にて建仁元年四月

翁さひ人ないとひし誰もみなとはにあひみん千世の始を

螢　座主報恩講

夏むしのよそに成ゆく思ひまてうき身にやとす袖の露かな

照　射

消ぬとやともしを鹿の思らんはやまかすその木葉かくれを

泊

たれか又磯の庵に宿からむ漕よる舟の便ならては

末の秋あつまの道にて手越はつくらと云所を

越てこしうつの山路にはふつたもけふや時雨に色はつく覧

仁和寺敎王院にて梅花久匂といへる心を

あたりまて三室の山はのとかにて松かせにほふ宿の梅かえ

東の方に侍りけるころ十月計閑居虫

よそに思ふ人めのみかは虫の音もかれのゝ末の庵なりけり

海邊冬月

清見かたかへりし秋はとゝまらて月は關路に有明の空

繪島を見にまかりて

名に高き繪島の磯をけふみれは跡もとゝめす浪そかくなる

旅宿虫

並まちかき都をふるさとのかへに聞なすね覺なりせは

宇治山喜撰跡なといふ所にて人ゝ哥よみける秋の事也

あらし吹むかしの庵跡たえて月のみそすむ宇治の山本

東のかたにおなし旅なる人のつまなる女の身まかりにけるをきゝてなけきけれはつかはしける

續拾（も集）
ことゝはて思ひしよりは都鳥聞てくやしき音をや鳴らん

かへし

同
都鳥聞てくやしき夢の中におとろかす（を集）にそねはなかれける

羇中時雨

神無月たひねの空をなかむれは袖より外もうちしほれつゝ

故郷雪　前大納言殿御會

たかまとの尾上の里に雪ふかし猶ふりゆかむ跡をこそ思へ

山家雪

住わひぬ我たに人を尋ねはやと山の末の雪のかよひ路

雪中遠望

たか里の軒はやけぬといとふ覽雲にあまきる雪の梢を

家隆悅時ひさしく申さてつかはしける

うれしさも袖につゝまて過にけり苔の衣をいむとせしまに

かへし

嬉しさをいみける苔の袖にしもつゝむといはぬ恨をそせし

彼よりそへてつかはしたりける哥

色ふかくうれしからぬは君に猶とはれぬあけの衣成けり

返し

嬉しさをみかたの海の涙なれは靜かにそ思ふあけのそほ船

水鳥　　兼宗の哥會

嵐ふくひらの湊にゐるかもはうきねなからも浦つたひけり

網代　　同

風さゆるあしろのひをはよる涙の下より結ふ氷成けり

定家少將に成たりけるにことさら三日過てよろこひ
申へきよし思ひけるほとに雪の朝申つかはしたりけ
る定家卿

三笠山ふみゝし日より待しかと今朝の雪さへまた跡もなし

かへし

君ならて跡をはつけし三笠山はや雪かゝれしゐか梢に

又これよりつかはしける

神に社つゝみやすへき嬉さを聞よりやかて身にそしみける

立秋　　左大將御會當〻

おほかたの秋くるよひや是ならん色なき露も袖に置けり

同家十三首內　　泊瀨花

けふも又三輪の杉村行くらし花に分入小泊瀨のやま

宮城野

宮城野の小萩か露を分行は色こそかはれしのふもちすり

須磨關

月ならてすまの關守友そなきしはしな過そ海士の釣舟

深草里

秋の色のあはれきてこそおもひしを霜かれわたる深草の里

清見關

みやこ思ふ心のせきは淸見かた淚まにつたふ石の細みち

野草秋近　　式部卿會當〻

秋の色に分なす程をかそふれはけふはかり社萩か花すり

藤三位季經ふるき今の歌よみの和歌草又けさうふみ
を取あつめてほくしき紙にして結緣經かき供養しけ
るに普門品多於婬欲等の心を

思あまる筆のすさひを書かへて法のしるへと成そうれしき

納涼添述懷

いにしへの野中のし水くむ人のこゝろしらるゝ夕すゝみ哉

水邊惜曉月

有明の月をやとして山の井のあたりは秋も立うかり鳧

曉聞郭公　　鳥羽院にて五月十五日

（續千）ほとゝきす有明の月の入方に山のは出る夜半の一こゑ

松風暮涼

さほ鹿や猶秋まてとしのふらん夕は今も松に吹かせ

遇不逢戀　　影供哥會

（新古）里はあれぬむなしき床のあたり迄身はならはしの秋風そ吹

已上〻

季經卿三位して侍けるを久悦も申さて程へてつかは
しける

ふるき跡はさらにもとはす位山昔にこえむおりを待まに

かへし

老か世にかまへてのほる位山むかしの跡にいかゝこゆへき

中將公衡三位せられて侍けるにつかはしける

君かため春を聞こそうれしけれ心よはきは花にのみかは

返　し

はな故の春まて君かおもひけんこゝろをしるも哀ならすや

文治六年三月十七日殿法印もとより

朝夕におもひのみやるみつかきの久しくとはぬもろ心かな

かへし

君はよしひさしく思へ水かきのむかしとならむ身の行衞迄

重保かために一品經歌勸ける其ころ所勞ありてける
人にかはりて藥王品

夏虫の身をともしける光こそやみにまよはぬしるへ成けれ

院御會　山家五月雨

ぬれてほす菊の露たにある物を幾千世かふる五月雨のそら

雨中荻

しつかなる音こそ風にかはるなれ軒端の荻に雨そゝくよは

舍利報恩講　雪中聞法

鷲の山名殘を跡のしるへにて雪ふみ分る法のには人

範玄法印奈良の別當に成て侍ける春よみてつかはし
ける

今年よりならの都の八重櫻をのか物とも君そみるへき

夏草籠水

風吹てなひくにしるしさゆり葉の下よりかよふ庭のやり水（さゝ波イ）

白河の花ちりかたに人〻まかりけれは風あらく吹て
名殘なきまて花の散けれは

たつねつる人は家路も忘られて花のみけふはねにかへる哉

師光入道のもとにて聞談與人戀といふ事を人〻よみ
ける

ひとりねのあたりに聲はかよひきて契はよその枕也けり

歸　鴈

又もこは待へき身こそ歸る鴈秋まてやはと打なかめつゝ

海邊霞

蘆の葉もまたうらわかき津の國のこやの隔はかすみ成けり

ひえの山に道命阿闍梨房今にあり詣りてみるに處の
有樣まことにこゝろほそかりけれはかき付ける

ことの葉に心の色はくちすしてむなしき跡は峯のしら雲

座主の御房報恩講
ひえの山大乘院景氣垂山は枕の下湖は麓なりけり

月きよみ涙の千里をかたしきて枕のそこは有明の空

同

故郷に一むら薄うへてたになれしこゝろを野邊の夕暮

殿法印九月計山へ登りて道よりの哀共書つゝけてつ
かはしたりける十首歌和すへきよしありけれは

おもひしりて思ひをこする人もかなみ山の秋にかへる心を

返　し

心こそおよはぬ山のおくなれと秋のあはれはかへりつく迄

本

鈴虫のこゑも山へに聞ゆ也いかに成へき我身なるらん

返　し

鈴虫もよにふる道をいとへはや野へをはすてゝ山に鳴らん

本

大嶽のみね吹かせに霧はれてかゝみの山に月そくもらぬ

かへし

山のはも又ならひなき大たけにさこそは月の隈なかるらめ

本

をのつから笆の野へをかき分てしか住宿をとふ人もかな

かへし

嵐山この葉ふり敷麓よりしかすむ宿を思ひこそやれ

本

きく袖の露のふかさも有物をね（と拾）山のすそのさをしかのこゑ（をしか鳴らん拾）

かへし

をしか鳴おなしね（と拾玉）山のすそなれは聞わく袖そ露も置そふ

本

もる月はねやの板間に影ふけて我身の秋を思ひあかしつ

かへし

詠めつゝたのめし月も影ふけぬ我世の秋はいまいくよりも

本

鹿のねをおくるなからの山かせを稲葉にきくや志賀の里人

かへし

しかの音をいなはの風につたへきて世を恨たる志賀の里人

本

初時雨人もきてみぬ山かけに夜のにしきををりそめてける

かへし

君かすむ宿の梢は月かけのくまなきよるの錦なるらむ

本

かきくもり山めくりするむら時雨ものゝ哀をそめて過也

かへし

かきくらす物の哀の山めくりしくれをそむるこゝろ成けり

本

法の水淺く成行すゑの世をおもへはかなしひえの山寺

かへし

法の水ふかきなかれも絶ぬへしせき入て山の陰に住すは

東路を越くる春の跡なれやけさあふ坂の雪のむら消

花はみな散はてぬとも梅枝のふるさとゝはむ鶯もかな

ときは木のかたなる谷の岩つゝしいつこよりさす日影成覽

春の日の長閑にかすむ山里に物あはれなるいかるかのこゑ

御所先度百首

（新後拾）しら雲のかさなるみねにたつねつる春は（はな集）都のこすゑ成けり

百首哥めしける中に

志賀の浦やけふ立かへる春風にこほらぬなみも遠さかる也

（續古）軒ちかき花立はなのにほひきてねぬよの夢はむかし也覺

夕立のはれ行空の雲間より思へあへける夜半の月哉

よそにきく峯の嵐も荻の葉に里なれそむる夕暮の空

（新古）うつし植し小萩かもとも秋の野に成果ぬとは思はさりしを

（新拾）野分せし小野の草ふし荒はてゝみ山にふかきさをしかの聲

（新續古ら集）のへはみな思ひしよりもうら枯て雲まにをそき有明の月

雪ふれは道もたえなん山里をしくるゝまてはとふ人もかな

あと絶る山路の雪を哀ともこゝろはかりそ我をとひける

みな人の心も涼しいはし水ひかりを君か袖にまかせて

袖の上は千重にも露やかさぬらんしのたのもりの秋の下草

山のはを軒の梢に住なしてまとより出る晨明の月

今は只雲の八重たつおくにてもあたりをとはむ山人もかな

すむ人のかよはぬ程は跡もなし庭よりおくの旅のほそ道

住わひて猶山ふかくあとたえは誰をかこゝに松たてるかと

浦ちかき山路の末に日は暮てふもとの庵に海士のもしほ火

尋つる木の下風に雪ちりて花ゆへ春も忘られにけり

御室五十首

かへる雁雲の浪路に數消て友をはなるゝあまの釣舟

夏の日はなるゝをいとふ衣手の身になつかしき秋の初かせ

あれ行は虫の音まては思ひしをうつら立也庭のしの原

夕されはたみのゝ島に鴈鳴て芦の丸屋にころもうつ也

(續拾)山かせの音さへうとく成にけり松をへたつる峯のしら雪

君か代は眞如くちせぬ室の中に慈氏の朝日の光さすまて

庭の面を草にまかせて住程に庵まてこそ人にしらるれ

夕暮は雲にしほりの道たえて名をたにしらぬ鳥の一こゑ

御所哥合十首　月多秋友

(新古)高砂の松もむかしに成ぬへしなを行末は秋のよの月

月前松風

(同)月は猶もらぬ木間もすみよしの松をつくして秋風そ吹

雪似白雲

あらし吹峯につれなきしら雲の立かとみれは松の雪折

左大臣家花五十首

都より花のさかりを見わたせは浪まにしつむ白河の關

うきねする明石のおきの波の上に思ふ程にもすめる月哉

月影はいとゝくまなく空寒て秋の雨ふる松のかせかな

左大臣家十題百首内

(新古)かさゝきの雲の梯秋暮て夜半には霜の(や)寒まさるらん(わたる集)

(同)さひしさはその色としもなかりけり槇立山の秋のゆふくれ

外山なる木葉かくれにつたひきて嵐に靡くむさゝひのこゑ

牛の子に踏るな庭のかたつふり角のあるとて身をな賴みそ

(新古)紫の雲路にかよふことの音に浮世をはらふ峯の松かせ(さそふ集)

(新古)これや此うき世の外の春ならん花のとほその明ほのゝ空

すむ月は玉の植木の本寒て御法のにはに在明の空

影供哥合　緣ある哥めしける時　旅歌

むさし野の露をは袖に分侘ぬ草のしけみに秋かせは吹

柳拂水

龍田川たし(〔さ歟〕)の青柳ゆく水に數かくものはしつ枝成けり

山のはゝ分よるまゝにあらはれて霞をこむる松のむら立

梅かえに色をはのこせ吹風もこゝろあれはそ香をさそふ覽

左大臣家百首歌合　秋雨

小萩さくかた山かけのひくらしの鳴すさみたるむら雨の空

(新後撰)あふまての思ひは事の數ならてわかれそ戀の初なりけり

淺ましやなとか思ひのさしも草露置あへす果はもゆらん

しくれ行松のみとりは空はれてあらしにくもる峯の紅葉ゝ

貴賤更衣

人なみに賤か袂のかはるこそ花のころもの名さへ惜けれ

賀茂哥合

(千)世中のうきは今こそ嬉しけれ思ひしらすはいとはましやは(さらましイ)

(同)おもひねの夢たにみえて明ぬれは(ゆけばイ)あはても鳥の音社辛けれ

(同)さひしさにうき世をかへて忍はすは獨きくへき松の風かは

老若歌合

(新古)たにふかき霞の窓は明やらて雲にいさよふ鶯のこゑ

くれて行春のみなとはしらねともかすみに落る宇治の柴船

よをかさね心になれてほとゝきす初音そあかぬ名殘成ける
夏ふかき杜の梢も空蟬の羽にをく露はあきのゆふ暮
思ひ餘りなのるともなき虫の音のしのに籠れる野への夕風
たれとなく戀しかるへき今宵哉月影いとへさをしかのこゑ
新古 むら雨の露もまたひぬ槇の葉に霧たちのほる秋の夕くれ
さひしさを誰しのへとか小倉山秋のふもとにさをしかの聲（をしかなくらん イ）
しくれつる夕日の色も袖さえて山陰さむし菊のむら露
山かけにくもりもあへぬむら時雨名殘は月の影よりそふる
已上　十首御所老若哥合
うつろはてしはし日影を待程は露にそかゝる朝顏の花
あら磯の岩もとゆすり立涙のたえましくまてぬるゝ袖かな
里とよむ市の中にも有ぬへし心そ人はすみ染のそて
淺茅原ふるきそとはに契をかむ隣とならは哀ともみよ
柴の戸をとはてあくるや誰ならん通ひなれたる峯の松かせ
たれとなく人を告むる里の犬のこゑすむ程に夜は更にけり
已上　圓位法師勸進
雨後紅葉
立田山こえ行みねのむらしくれ梢にのみそ跡は見えける
山家送年
新古 たち出てつま木折こしかた岡のふかき山路と成にける哉
已上　右大臣家旬題百首
五月雨は苔の下もる谷水の山とよむまて日數ふりぬる
續後拾 大井河ゐせきの水やこほるらんはやせにをしの聲くたる也
新古 和哥の浦を松の葉こしになかむれは梢によするあまの釣舟
已上　大輔勸進百首

若水
鶯の涙のつらゝ聲なからたよりにさそふ春の山水
寄雲戀
人しれぬうらみは空の雲なれやつもれは袖の雨とふるらん
聞戀
いかにして露をは袖にさそふらんまたみぬ里の荻の上かせ
祈戀
貴船川百瀬のなみも分過ぬゝれ行末の袖を契りて
已上　左大臣家百首歌合
資盛卿哥合
花の春月の秋たに人とはぬ柴のいほりの五月雨のころ
左大臣家歌會
月といへは伯母捨山の秋の空なかむる宿はさらしなの里
或所歌會　鹿
鹿の音におもひを分る秋のよは身より外にも物そかなしき
秋の夜ふかく少納言定家かもとへまかりて物申ける
ほとに思ひかけすみすのうちに松虫のなき侍りける
をこの聲はいかにとたつね侍りけれは嵯峨野の方よ
りなむさそひたると申けれは歸て又の日さかへまか
るとて故郷のかたへ言傳あるなと申て
住わひは野へのかよひちつけやらん友をはなれて松虫の聲
かへし
いまはとて都に友を松むしのなく音そかれし君かゝよひち
九條哥合　雪
ふりそめる今朝たに人のまたれつる深山の里の雪の夕暮
十月計に東の方へまかりけるに箱根と云山をなむこ

えける所のあり様あやしくよの常にはかはりけりはるかに峯に上はて海をわたり谷にくたりては雲をふむさるほとに風は木葉をまくりあけてしくれの麓よりのほりければ讀侍ける

たひの空雲ふむ峯を分行は時雨は袖の下よりそする

冬哥の中に丸雪を

窓ちかき椎の下柴音つれてみ山の里に霰ふるなり

左大臣家哥會　夏戀

新古 思ひあれは袖に螢をつゝみてもいはゝや物をとふ人もなし

同家哥會　秋戀

大方の秋くるよひやこれならん色なき露も袖に置けり

出雲のきつきの宮にまいりていつも河の邊にて

出雲川ふかき湊をたつぬれはゝるかにつたふわかの浦なみ

日吉社會　社頭祝

やはらくる光の庭にゐる塵の末をも山と神そ守らむ

後白川院かくれおはしまして後の御事ともを經房卿に奉行すへきよし被仰置たる事を承及て彼卿のもとへ申つかはしける

玉葉 いさきよき心もしるし入月のなき影をさへ君にまかせて

かへし

同 なきかけをみよとて月の入しよりいとゝ心の闇にまよひぬ と集

嵯峨の釋迦をおかみ奉りて

續古 わしの山二たひ影のうつりきてさかのゝ露に有明の月

民部卿經房吉田宅色紙形に無量義經十功德品文〻是經諸佛室宅來去至一切衆生發菩提心

にほひこしもとの都の法の花散しく末は墨染の袖

壽量品

東屋のまやの板まにやとりきてかりにも住る夜半の月哉

百首哥めしける中に春歌に

志賀の浦や釣するあまの袖寒て歸る浪路に氷しにけり

建仁元年大內花盛に御幸あり花の下にて御製

雲の上に春くれぬとはなけれともなれにし花の影そ立うき

御返事すへきよし仰をくたれは

いかはかり雲ゐの花も思ふ覽なれし御幸のあかぬにほひを

世をのかれぬときゝて左大將實定

續千 世中をいてぬとなとかつけさりしをくれしと思ふ心有物を

かへし

同 人をさへ道引ほとの身成せは世を出ぬとはつけもしてまし

伊綱かもとより明石もすまもかせやさむけきといふ哥を入道素覺常に言出しゝ事をなとかきて

知らめやすまの浦風身にしめし人もなききに鳴千鳥をは

返　し

おり〳〵の友とみしたに濱千鳥とひをくるゝはさ社なかるれ

圓位上人熊野に籠たるころ正月に下向する人につけてつかはしける文のおくにたゝいまおほゆるとを筆にまかする乙とかきて

霞しく熊野かはらを見渡せはなみの音さへゆるく成ぬる

かへし

霞さへ哀れかさぬる三くま野の濱ゆふくれを思ひこそやれ

都移りのころ少將公衡朝臣のもとへつかはしける

おもひきや宿は都の宿なからひなのすまゐにならむ物とは

返し

故郷はひなのすまゐに成ぬとも宿もる月の影(秋の月はイ)はかはらし

人丸の墓尋ありきて柿本の明神にまうてゝ

玉葉 古きあとを苔の下まて忍はすはのこれる柿の本をみましや

かくれて思ひかけす尋(たつね集)あかりてよみける

おもひかね昔の末にまよひきぬとゝめし道の行衛しらせよ

高野にしばし籠たりけるころ教長宰相入道病に煩て
いまはと成にけれは頼輔卿とふらはんとてまかりけ
る程に身まかりて後彼山にのほりたるよしをきゝて
つかはしける

新古 たつねきていかに哀となかむらん跡なき山の峯のしらくも

返し

たつねきてむなしき空をなかめても雲と成にし人をしそ思

櫻井の僧正かくれ給て後年久成て彼住給ひける山里
をまかりて見けれはいと物さひしくあれはてて庭も
まかきも秋のゝらと成侍りけれはよみける

植置し笆の花も秋のゝらと成はてゝねとはおもはさりけむ

攝津國の蘆屋といふ所にしほゆあみける時布引の瀧
見にまかりて月出るまてありけり

山かせに雲のしからみよはからし月さへおつる布引のたき

仁和寺法印覺性より九月計に

われならぬ月もすみける山里をとはすは君か名こそ惜けれ

返し

山里の秋の哀をとはて社月故しはし君にまたれめ

爲業入道のもとより

くれぬとて君か急し月影は猶わか宿に有明の空

返し

あかさりし名殘の空を思ふにはまたいてやらし山のはの月

三輪社に詣てしるしの杉に書付ける

三輪の山あはれ幾世に成ぬらん杉の梢に宿をまかせて

住吉に詣てよみ侍ける

ふりにける梢もしるきすみよしの松に過たる風の音かな

百首哥中に杜間菫を

色ふかきしのたの杜のつほすみれ千枝の滴や雨にそふ覽

出雲の大社に參りける道美作國に懷綱か侍けるかく
ときゝてなとともなはさりしなと云つかはして

いにしへも思ひ出雲のかひもなく隔てける哉その八重垣を

返し

思ひあれは隔つる雲もなかりけり妻もこもれり出雲八重垣

院南野にまかりけるに野中の清水にてかれ飯たへて

新後撰 くむ人はまたいにしへに成ぬとも野中のし水思ひわするな

出雲の大社に詣て見侍けれは天雲たな引山のなかは
まてかたそきのみえけるなん此世の事とも覺えさり
ける

やはらくる光や空にみちぬらん雲にわけ入ちきのかたそき

うぢのおほひまうち君はかなく成給て後北のかたけ
ふりにそはぬ恨のあまりにや世をのかれきて彼空敷
山の麓に住たまひけるを春よりして秋にも成にけれ
はさのみやはとて出給ふへきよしを人ゝ申なと聞程
にけふなん出給ふへきとてもよほしかはなる車の音

ともあまた聞けれはまちかき山人の思ひやりける

行衛なきかすみの空をなかめきて思ふもかなし葛のうら風

かくてのち日比の山住の跡をまかりて見けれは人の音もし侍らて松のひゞきのみなむかよひける

たれもみな忍ひし跡に松風のをとのみ殘る秋のゆふ暮

よこの海の氷のはてに船とめて浦路も遠き浮ねをそする

神祇

のとかなるはこやの山にはる〳〵と神と君との契りをそ知

此ころは八雲の末のこの葉に思ひ出雲のいにしへの空

萬代を松生る濱にとしふりて君かためにやすみ吉の神

さかりなる和歌の浦浪立そひてめくみもしるき玉つしま姫

うき身今やそうち人の數なれは（下闕）

古池菖蒲

荒はてし池のみきはもあやめ草引につけてそ打はらひける

あやめ草けふ引あとに見ゆる哉たてをく石も池のこゝろも

菖蒲草けふひく跡そ池水に立をく石も有とみえける

遠山郭公

たつぬへき行衛もしらすほとゝきす外山の奥の雲に入こゑ

雨後夏月

とこ夏の花にたまれるむら雨の名殘そ月はみるへかりける

所々照射

いかにしてしかの立とを忍らんともしの影は葉山しけやま

家々納涼

末結ふ隣の人やまちつらむせく手にくゝる山の井の水

霞

春といへはちさとの外も一にてかすみをかきる明ほのゝ空

端午

人しれぬ淀野になれてあやめ草忍はぬ宿の妻をこふらん

槿

有明の月はのこれる日かけにも先かたふくはあさかほの花

閑居

木葉分て庭にたゝすむ鹿のみそ都にうとき友と成ける

晴

雲消る遠の山もとみわたせは檜原は庭の蓬成けり

橘のにほひもいまは六月に思ひのきはのほとゝきすかな

五月雨

降そめてたえ〳〵みえし庭たつみ一につゝく五月雨の空

五月雨に軒も朧のし水さへ見しにもあらすおもかはりして

さみたれに室のわたりをみわたせはおりゐる雲そ汀成ける

あま人よいかに日かけを松しまやをしまか礒の五月雨の空

五月雨にみつの濱松浪かけて梢にのこるまのゝうら風

時鳥かた待よひの山の端にさもあらぬ月はやく出にけり

夢なれや卯花月夜ふくるよの垣ねに忍ふ鳥の一こゑ

鶯のふる巣をつけし跡なれは雲路より鳴時鳥哉

將軍

下のおひの結ふ氷に手をかけてそらにそうつる弓はりの月

和歌二百九十五首

右寂蓮集以一本及流布印本挍合了

兼好法師集

石山にまうつとてあけほのに逢坂をこえしに
あふさかのせき吹こゆる風のうへに行衞もしらすちる櫻哉
雲の色にわかれもゆくかあふさかの關路の花の明ほのゝ空
雪ふる日にみこひたりの中納言とのより
あとたえてとはぬ日數もふる雪におほつかなさの積る頃哉
ふる雪に里をはかれす跡つけは待らむ人のかすにもらすな
返し
跡つけて今こそとはめうき身をもまつらん宿の庭のしら雪
七月七日月のかたふくを
天河みをゆく月はなかるともあふせにかけよ雲のしからみ
よふことり
春の夜のくらふの山のよふことり心の闇をおもひこそやれ
無動寺にて夏のよあくるまて月をみて
とりのねのきこえぬ山のかひもなしさても明ゆく短夜の月
まつりの日しのひてまかりすき侍しをくらの大納言
とのゝくるまよりつかひのあれは
忍つゝいてつるみちにあふひ草君みるへしと思ひかけきや
返し
わかたのむ神のしるへに葵草おもひかけすといかゝ思はむ
ふかくさにかよひしころあか月きぬたうつを
衣うつ夜寒の袖やしほるらん曉つゆのふかくさのさと
彈正宮にてたえてひさしきこひといふ題を
蓬生の宿のかよひちいつのまにかれにし跡もしもをへぬ覽
左大臣殿にて落葉風にしたかふといふ題を
空にのみさそふ嵐にもみち葉のふりもかくさぬ山の下みち
小將ためつらの君久しくとひ給はすとうらみやりた
る人のもとよりいひおこせたる
いまそしるとはゝやとこそおもひしにけに身を捨る心也覽
返し
浮身をもとはれやせまし思ふよりほかなる君か心なりせは
ほうりむにこもりたるころ人のとひきてかへりなん
とするに
もろともにきくたにさひし思ひをけかへ覽あとは峯の松風
いかたを
大ゐ河つなくいかたもある物をうきて我身の寄かたそなき
をくらの宮のすみ給けるところといふ堂にとまりて
有明の月おもしろき曙にいろ〳〵の花をおりて佛に
たてまつるとて月のこり露むすはんあしたまかきの
花をおりて佛界に供せんとかゝれたる事をおもひ
てゝ
昔おもふまかきの花を露なから手をりて今もたむけつる哉
ならひのをかに無常所まうけてかたはしに櫻をうへ
さすとて
契りをく花とならひのをかのへに哀れ幾世の春をすくさん
頓阿母のおもひにてこもりゐたる春雪ふる日つかは
す
はかなくてふるにつけてもあは雪のきえにし跡をさそ忍覽
返し
なけきわひともに消なて徒つらにふるもはかなき春の淡雪

やまさとのすまひもやう〱としへぬることを

淋しさもならひにけりな山里にとひくる人のいとはるゝ迄

とふらふへきことありてみやこにいてゝ

(續現存)立歸りみやこの友そとはれける思ひすてゝもすまぬ山路は

法華經の序品

いつかたものこるくまなく照すなり時まちえたる花の光に

祭主定忠身まかりて追善に結緣經の歌すゝめ侍しに

方便品

をしなへて一つ匂ひの花そとも春にあひぬる人そしりける

五百弟子品の心を

あま衣なれにし友にめくり逢てみぬめの浦の玉もをそかる

中御門入道大納言經繼卿の白河の山庄にてこれかれ題をさくりて哥よみ侍しに變戀を

あた人にならひにけりなたのみこし我も昔の心ならぬは

八月十五夜報恩寺にて人々あまた歌よむよしきゝ侍しをわづらふこと有てえまからて申つかはし侍し

月に憂身をあきゝりのへたてにもさはらて通ふ心とをしれ

返しをくらの大納言(實教卿)

諸共になかめそせまし秋霧のへたつるよはの月はうらめし

そのころやむことなき人のとふらひおはしたるに

とはれぬるつゆのいのちはつれなくてもろきは袖の淚成覧

こよひとたのめけるおとこのあらぬかたへまかりけれは女のよませ侍し

はかなくそあたし契をたのむとて我ためならぬ暮を待ける

冬の夜あれたる所のすのこにしりかけて木たかき松のこのまよりくまなくもりたる月をみてあか月まて物かたりし侍ける人に

おもひいつや軒の忍ふに霜さえて松の葉分の月をみしよは

世をそむかんとおもひたちしころ秋の夕暮に

そむきてはいかなるかたに詠めまし秋の夕も憂世にそうき

とにかくにおもふことのみあれは

盡もせぬ淚の玉のなかりせはよのうき數になにをとらまし

ほいにもあらてとし月へぬることを

うきなからあれは過ゆく世中をへかたき物となに思ひけむ

ならひそと思ひなしてや慰まむ我身一つにうきよならねは

たのもしけなることいひてたちわかるゝ人に

はかなしや命も人の言の葉もたのまれぬ世をたのむ別れは

あらしの山の花をみて

おほゐ河くたすいかたしはやきせにあかてや花の陰を過覽

むめのはな

みても猶あかぬにほひはつゝめとも袖にたまらぬ梅の下風

木のもとを過てそさらにしられける袂にうつる梅の匂ひは

三月はかりつれ〱とこもりゐたる頃雨のふるを

なかむれは春雨降て霞むゑけふはたいかにくれかてにせん

かくしつゝいつを限としらま弓おきふしすくす月日成らん

やなきの風にみたるゝを

物おもふ心となしに青柳のみたれてなにゝもえわたるらん

春雨にやなきの糸はそめかけつ花の錦をはやもをらなむ

世中思ひあくかるゝころ山さとにいねかるをみて

よの中をあき田かるまて成ぬれは露も我身もをき所なし

人にものいひそめて

かよふへき心ならねは言の葉をさりともわかて人やきく覽

つらくなりゆく人に
今さらにかはる契とおもふまてはかなく人をたのみける哉
　さためかたくおもひみたるゝことのおほきを
あらましもきのふにけふは變る哉思定めぬ世にしすまへは
ともすれは鳰の浮巣のうきなからみかくれ果ぬよを歎く哉
　世をのかれてきそちといふ所をすきしに
風雅 思たつきそのあさきぬあさくのみそめてやむへき袖の色哉（かは集）
遁れても柴のかりほのかりの世に今幾程かのとけかるへき
　修學院といふところにこもり侍しころ
遁れこし身にそしらるゝ憂世にも心に物のかなふためしは
身をかくすうき世（うきよをも集）のほかはなけれともものかれし物は心成鳧
續千 いかにして慰む物そ世中をそむかてすくす人にとはゝや
　花をみて
花の色は心のまゝになれに鳧ことしけきよを厭ふしるしに
　後二條院のかゝせ給へる歌の題のうらに御經かゝせ
　給はむとて女院（西華門）より人〻によませられ侍しに
　夢逢戀を
藤葉 うちとけてまとろむとしもなき物を逢とみつるや現なる覽
　侍從中納言殿（爲藤）にて人〻題をさくりて哥よみ侍し
　に木殘雪
山ふかみこすゑに雪やのこるらん日かけにおつる梢の下露
　花の雲
やまたかみまかはぬ花の色なれやなきたるそらに殘る白雲
　薄暮歸鴈
打聞 ゆきくるゝくもちの末に宿なくはみやこに歸れ春のかり金

　わするゝ戀
われ計忘れすしたふ心こそなれても人にならはさりけれ
　ほとゝきす
五月きてはなたち花のちるなへに山時鳥なかぬ日はなし
　よ河にすみ侍しころ靈山院にて生身供の式をかき侍
　しおくにかきつく
續現葉 うかふへきたよりとをなれ水莖のあとゝふ人もなき世成共
　もちたるあふきをほとけにたてまつるとてかきつけ
　し
常にすむみ山の月にたとふなるあふきの風に雲やはるらん
　堂のはしらに永仁五年公世の二位の五部大乘經くや
　うにのほりて箏ひきけるよしなとかきて
ひくことを哀としらはなき世まてかたみにしたへ松の秋風
　とかきつけたるか霧にくちのこりてかすかにみゆる
　もあはれにてかたはらに
松風をたえぬかたみときくからに昔のことのね社なかるれ
　ほりかはのおほいまうちきみをいはくらの山庄にお
　さめたてまつりにし又の春そのわたりのわらひをと
　りて雨ふる日申つかはし侍し
　返し延政門院一條
續現葉 さわらひのもゆる山邊を來てみれはきえし烟の跡そ悲しき
同 みるまゝに涙の雨そ降まさるきえし烟のあとのさわらひ
　人にをくれて佛事なといとなむに
しるへしてあとゝふかひもなき物はたれも涙にまよふ成鳧
　あつまへまかり侍しに清閑寺にたちよりて道我僧都

にあひて秋はかへりまてくへきよし申侍しかはそう
つ
かきりしる命こせは廻りあはん秋ともせめて契りをかまし
返　し
行すゑの命をしらぬわかれこそ秋ともちきるたのみ成けれ
みちにてよめる
峯の嵐うらはの浪もきゝなれぬかはるたひねの草の枕に
あつまにてやとのあたりよりふしの山のいとちかう
見ゆれは
都にておもひやられしふしのねを軒はの岡にいてゝみる哉
うみのおもてのいとのとかなる夕暮にかもめのあそ
ふを
夕なきは浪社(ニイ)みえね遙〳〵と沖のかもめのたちゐのみして
こよろきのいそといふところにて月をみて
こよろきの磯よりとをく引しほに浮へる月はおきに出に鳬
むさしの國かなさはといふ所にむかしすみし家のい
たうあれたるにとまりて月あかき夜
故郷のあさちかにはの露のうへにとこはくさはと宿る月哉
さかみの國いたち河といふところにてこのところの
名を句のかしらにすゑてたひの心を
いかに我立にし日よりちりのゐて風たに閨をはらはさる覽
きよみかせきにて
清見かた浪ものとかにはるゝ日は關よりちかきみほの松原
たこのうら
田子のあまのやく鹽竈はふしのねのふもとに絶えぬ煙成鳬
一とせ夜にいりてうつの山をえこえすなりにしかは
ふもとなるあやしのいほりにたちいり侍しかとこの
たひはそのいほりのみえねは
一夜ねし萱のまろ屋のあともなし夢かうつゝかうつの山越
心にもあらぬやうなることのみあれは
新千 すめは又うきよ成けりよそなから思ひしまゝの山さとも哉
なにとかくあまのすて船すてなからうき世を渡る我身成覽
山里のかきほのまくす今さらに思ひ捨にし世をはうらみし
うとく成ゆく人につかはしける人にかはりて
人めもる中とはなしにともすれはとはぬ月日の積るころ哉
又
わか方のとたえにしりぬほかに又かけひの水のわくる心は
絶切戀といふことを
わすられてたえむ命もあひみしに思へはかふる我身也けり
寄雲戀
峯つゝき嵐にうきて(いりイ)ゆく雲のうつりやすくそ思ひかけてし
續後拾 たのみこしのちせの山の峯の雲よそなからやは立別れなむ
空にたつ名のみのこりてうき雲の跡なきものは契り也鳬
年もへぬさてや初瀬の山風にわかれしまゝの峯のしらくも
かのえさる
つらからは思ひたえなて棹鹿のえさる妻をはしゐてこふ覽
五月廿日ころ御子左の中納言とのゝ庚申に
郭公聲舊　山田早苗　閑中五月雨
深夜夏月　風前夏草　螢火秋近
きゝてしも猶こそあかねほとゝきす鳴やさ月の日數ふる聲
水こゆる田のもの早苗色そへてうつるは山の陰にそ有ける

晴れやらぬ心の友となかめてもひとりそくらす五月雨の空
ふくるまも有けるものをよひなから明ぬと聞し夏の月かけ
うち靡く草葉涼しく夏の日のかけろふまゝに風たちぬなり
とふ螢またつけこさぬ雲ゐよりゆきかふ秋とかせや吹らん
　入道大納言(爲世)とのにて九月十三夜水うみの月氷に似たりといふとを
にほの海の氷のひまはなけれとも打出る浪や秋のよの月
　恨絶戀
かはりゆく心はかねて知れしをうらみしゆへと思ひける哉
　いのりてたつぬる戀
しるへなきおきつのはまに鳴たつの聲を哀れと神はきか南
　しかのこゑちかし
秋山のすそのゝ草のむねわけにそよくをきけは鹿そ鳴なる
　山　家
山風のたまらぬとこもすまれ凫身をなら柴の庵むすひつつ
山深みまたれし鳥の聲をたにきかていくよのねさめしつ覽
　後宇多院よりよめる歌ともめされ侍りけるにたてまつるとて僧正道我に申つかはし侍りける
人しれすくちはてぬへきことの葉の天津空まて風にちる覽
　返しそう正
ことはりや天津空よりふく風そ森の木葉をまつさそひける
　神無月のころはつせにまうて侍しに入道大納言(爲世)もみちおりてことおほせられしかはめてたき枝にひはらおりかさしてもたせたれとみちすからみなちりすきたるをたて(そイ)まつるとて
世にしらすみえし梢ははつせ山君に語らんことのはもなし
　返　し
こもりえの初瀬のひはらおりそふる紅葉に增る君か言のは
　正中(後醍醐)二年春宮より哥合のうためされ侍しに山路花　稀逢戀
けふも又ゆくての花にやすらひぬ山わけ衣袖にほふまて
いつまてと問はるゝ度に長らへて心長くも世をすくすらん
　民部卿殿(爲定)にてをの／＼歌よみてほめそしることありしに　立春
けふよりは霞たなひくあつさ弓やしまのほかも春やしる覽
　若　水
盡もせぬ君かやちよをいくかへりわかえてくまん春の若水
　早　蕨
いまも又萠わたる也とき過てかれにしをのゝ春のさわらひ
　歸　鴈
歸る鴈しはしやすらへ山のはの雲たにまよふ明ほのゝ空
　盛　花
かきりなき色も匂ひも猶そひぬ花はけふとやわきて待けむ
　初郭公
み山いてゝはなたち花にほとゝきす宿とふほとや初音成覽
　五月雨
(蘆葉)もかみ河はやくそまさる天雲ののほれはくたる五月雨の頃
　泉
月やとるせかゐの水のすゝしさにあそふ今宵そ鳥の鳴まて
　關
ふちはかま野はらの露を分かねてたかぬき捨しにほひ成覽
　駒　迎

いにしへは昨日やこえしひきつれてけふ逢坂のもち月の駒

松虫

秋寒き霜のちにや松むしの名にあらはれてねをはなく覽

爐火

埋火のあたりは春とおもふ夜の明るひさしき閨のうちかな

網代

をふねさしいさみにゆかむ武士のやそ宇治川の網代もる頃

寄雪戀

白雪の降にし中のかよひちはあさきにしもやたえはしめ劔

寄嶺戀

きくもうし有しにもにぬ言(あらイ)のはをなにと伊吹の峯の木枯

寄湖戀

心をそ氷とくたくすはの海のまたとけそめぬ中のかよひち

寄野戀

契りあらは又や結はん一夜ねしにゐ手枕の野邊のわかくさ

寄橋戀

ふりにけるためしにたにも思出よ長柄の橋のかけはなる共

延政門院一條時なくなりてあやしきところにたちいりたるよし申おこせて

おもひやれかゝるふせやのすまゐして昔をしのふ袖の涙を

返し

忍ふらん昔にかはる世中はなれぬふせやのすまゐのみかは

ひえの山にて四月十日あまりさかりなる花をみて

今も咲花のところはありなから過にし春をとふかたそなき

人にしられしとおもふころふるさと人のよかはまてたつねきてよの中のことゝもいふいとうるさし

年ふれはとひこぬ人もなかり幾よのかくれ家と思ふ山路(しめしイ)を

されとかへりぬるあとはいとさう〳〵し

山里はとはれぬよりもとふ人のかへりて後そ淋しかりける

いかなるおりにかこひしき時もあり

あらしふくみ山のいほの夕くれを故郷人はきてもとはなん

秋の夜おほろのし水をたつねて

おほはらやいつれおほろのし水ともしられす秋は澄る月哉

とをきくにへゆく人に餞すとて

別れ路をしたふ涙にくちはてゝ袖はたむけにきる程もなし

藤原行朝すゝめ侍しかしまの社のうた

時鳥なかぬかきりはたち花のにほふかきねそ人たのめなる

月やとる露のたまくら夢さめておくての山田秋かせそふく

風さやく岡の冬草けさのまにうつもれはてゝ雪そふりつ(とイ)ゝ

一すちに厭はゝかくもたのめしと思ふより社猶まよひぬれ

あしはらやあまてる神のみをうけて國平けし神そこの神

春日野の露にそうつる東路のみちのはてよりいてし月かけ

うたをよみをきて身まかりにける人の追善に其歌の一字をはしめにをきてけちえん經の歌すゝめ侍しにる文字

流轉せし古里人を忘れすは無漏のみやこにいつかむかへん

こくらくに往生すへき事なとゝとくをきゝて

舟しあれはちひきの石も浮ふてふちかひの海に涙たつな夢

五條ゐのくまといふをかくして

いかて我室の國にも生れこてうゐのくまたはうけつくす覽

宇治の御經藏の沈ありときゝて人のもとより

かつきせぬ浮世の蜑もほしあ(やらイ)へぬ汐たれ衣やりてみせはや

沈をふたきれつかはすとてうちふたつたてまつると
くつかふりにをきて
うきも又契りかはらてふるに今たもと濡つゝ露やくたくる
屏風のゑにもみちにかりなきわたるところ
いとはやも紅葉して兒雲井ちをなきて過なる鴈のなみたに
九月十三夜大覺寺二品親王(寛尊)よりめされし三首哥
に寄月待戀
高砂のおのへを出る月たにもさのみは松にさはるものかは
藤原基任かもとにてこたかれ歌よみしに
降雪にみち社なけれ吉野山たれふみわけておもひいりけん
今日いてゝつま木とらなむ降雪にそとものの山路絶も社すれ
かちゐの宮にて(尊胤二品親王)人ゝ歌つかうまつりしに
すみかま
新後拾 すみかまも年のさむきにあらはれぬ烟や松のつま木成らん
正月十二日春たつ日民部卿(爲定)家の庚申に早春雪
年越えしるしもみえす降雪のあまきる空はけふそ霞める
初聞鶯
きゝて社おとろかれぬれ雪のうちもまつへかりける鶯の聲
恨別戀
きぬ〳〵の名殘計にしほらはやかへる袂のくすのした露
夕旅行
ことゝはむこゆへき山と行末に見ゆるやゝとのまかき成覽
寄神祝
うこきなく絶ぬためしときふねなる山を河せに世を祈る哉
先坊御時御歌合につかうまつりし五首元享三年の事
にや
秋ふかき霜をきそふる淺茅生にいくよもかれす擣衣かな
今宵たにうちも拂はてさむしろに積れる塵や人にみせまし
繰かへすたのみもいさや神垣の森のしめなはくちし契りは
けふのみといはたのをのに秋暮れてはゝそ色つき降時雨哉
さゝわくる露ともみえし我袖を秋より後はなにゝまかへむ
ひとり花のもとにたつねいりて
みぬ人にさきぬとつけむ程たにも立さりかたき花のかけ哉
とをく花をたつぬ
僞のくものいくへにこりもせてつゐにまかはぬ花をみつ覽
かつらき山の花
かつらきや花のさかりをよそにみて心そらなる峯のしら雲
池に花のうつりたるを
影うつす花のあを葉と成にけりむら〳〵みゆる池のうき草
海邊の春曙といふ事を
花ならぬ霞も涙もかゝるなりふち江の浦の春のあけほの
御子左中納言家にて春風春山春旅
みなと河散にし花の名殘とやくもの涙たつ春のうら風
名に高き花のところときゝしにもこえてそみつる鹿の山越
とりの音にあきたつみちもみえわかす深き霞やさよの中山
建武二年内裏にて千首哥講せられしに題をたまはり
てよみてたてまつりし七首春植物
新千 久かたの雲ゐのとかに出る日のひかりにゝほふ山さくら哉
夏動物
時鳥待とせしまに神なひのもりの梢はしけりあひにけり
秋天象
よもすからそらゆく月の影さえて天の河せや秋こほるらん

冬天象

霜さえしやたのゝあさちうつもれて深くも雪のつもる頃哉

戀天象

螢のすむ里のけふりの立かへり思ひつきせぬ身を恨みつゝ

戀植物

徒になき名計をかりこものうきに亂れてくちやはてなん

雜地儀

せり河のちよのふるみちすなほなる昔の跡は今やみゆらん

大覺寺のたきとのといふあたりにすむ人のもとへ十月はかりしくれふる日たつねいきたるにはゝ山のふもとにて薄のおほくまねきたるを

かれ殘るすそのゝおはな秋よりも招く時雨に袖やかすらん

みつとりを

芦邊ゆくかものはかひに浪こえてはらはぬ霜も置やそふ覽

ある人のもとにてをの〳〵五首の歌よみしに山路のゆふへの雪

よしの山みねの嵐のさえくれてふみ分かたくこほる雪かな

野外冬月

冬かれはのかせになひく草もなく氷る霜夜の月そさひしき

海のほとりのちとり

難波かたみちくるしほに風たちて蘆の葉さやき千鳥鳴なり

連夜待戀

待程の頼み絶えなはいかゝせむこぬよの數のしられすも哉

たえてのちあらはるゝこひ

思ひいつるかひこそなけれ今更にうき名たつなる昔語りは

ふゆのはしめのうた

むら時雨ふりみふらすみをしなへて處もわかす冬はきに見

くれていにし秋はきのふとおもふまに嵐の音の冬こもる覽

秋は早すきにしあとの手向山いまたにぬさとちるこの葉哉

こほり

すむ月の影こそよとめあすか河心ありてもこほる浪かな

みよし野の山よりおちし瀧の糸のたえて久しく氷るころ哉

雪

をさゝふくみねの嵐も音さえて夕のとこにつもる雪かな

あさくもりのそらいとおもしろし

朝またきくもれるそらを光りにてさやけくみゆる花の色哉

山田に水まかするを

せりつみし春のあらを田うち返し水は心にまかせやはせぬ

なけく事あるころ心地そこなひてこもり侍しを新中納言ほとへてとふらひ給とて

數々にとはまほしさを思ふまに積りていとゝ言のはそなき

返し

いはぬたに憂身の咎はしらるゝを恨はいかに苦しからまし

今そきく恨しほとの日かすをも思ひ乍らにすくしけりとは

等閑にかこたはかくやしらさらんいはれぬはかり深き心を

としすけの中將入道の身まかりしに追善の結縁經のうた隨喜功德品の世皆不空固如水沫泡炎

うきなから暫し漂ふ水の泡のきえなてすさむ世とは賴ます

基任かすゝめ侍しあみた經のうた

いつか又よの浮雲のほかにみむこれよりにしにすめる月影

懷舊

なき人の俤さへにたえねとやうたて月日のとをさかるらん

月をみて
おもひ出る涙に月のくもらすは昔なからのかけもみてまし
花にむかひてふるきをおもふ
春の日のなかき別につく〳〵となくさめかねて花をみる哉
山吹
よしの河いはこすなみにかけみれは散につきせぬ山吹の花
菩提樹院のふちみにまかりて
咲き匂ふ淵のうらはのうらとけてかけものとけき春の池水
たかゝり
鈴のおとは近く聞えてはしたかの茂みの木ゐに隠れける哉
はし鷹の木ゐにかゝりて暮す日は我も家路に歸りかねつつ
ほとゝきすのはつね
つれなさはなく一こゑにわすられて名殘をしたふ時鳥かな
淨弁律師つくしへまかり侍しに火うちつかはすとて
打すてゝ別るゝ道の遙けきにしたふ思ひをたくへてそやる
これとしの朝臣の家にて河を
千歳ともなにか待へきいすゝ河濁らぬ世にはいつもすみ覺
遍智院宮よりめされしによみてたてまつりし歌
よる涙の音さへとをくかすむ也しほのひかたの春の明ほの
いく里の人にもをくれ春風のさそふにつきぬ梅のにほひは
あさな〳〵咲そふ花の白妙に峯のかすみの色そはれゆく
さても猶よをうの花のかけなれや遁れていりしをのゝ山里
さたかにと思ふ心にほとゝきすきく一こゑを猶たとるかな
夏野ゆくたなれの駒のむねわけになつむはかりも茂る草哉
よの中のうきたの森に鳴蟬もわかことよそにゆく方やなき
たへてのみなかむるまゝに心なき我身しらるゝ秋のゆふ暮
木のまよりしたは殘らすやとるなり露もる山の秋のよの月
生駒山あらしにうきてゆく雲のへたてもあへすふる時雨哉
手枕の野へのはつ霜さゆる夜のねての朝けにのこる月影
ものおもふわかなやよそにふりぬ覽今は涙をとふ人もなき
儚しやいとはるゝ身の命もてあふにかへむと頼む計りは
關守のまとろむほとゝ契る夜はふけてうれしき鐘の音哉
とのよりめされし名所の歌にいそまのうらの戀
涙かくるいそまのうらの磯まくらゆめにもうとくなる契哉
女につかはさむとて人のよませし
しらせはやこのはかくれのむもれ水下に流れてたえぬ心を
あはむといひなからさもあらさりける人につかはし
ける人にかはりて
たのめをく言のはなくはあはぬまに變る心を歎かさらまし
秋の夜とりのなくまて人と物かたりして歸りて
有明の月そ夜ふかきわかれつるゆふつけ鳥やそらね成けん
しはすのつこもりあはれなることともおもひつゝけ
てうちもまとろまぬにかねのをといと心ほそし
春ちかきかねのひゝきのさゆる哉今宵はかりと霜やをく覽
驚かす鐘の音さへきゝなれて永きねふりのさむるよもなし
なき人をとふらひて
をくれゐてあとゝふのりのつとめ社今は儚き名殘成けれ
夜もすから雨も涙もふるものをなとかへりこぬ別なるらん
あはれなる夢をみてうちおとろきたるにかたるへき
人もなけれは
さめぬれと語るともなきあか月の夢の涙に袖はぬれつゝ
みすもあらて夢の枕にわかれつるたまのゆくゐは涙なり覽

山寺に念佛してゐたるにみやこよりたつねくる人の
中にわかきおとこのいとねむころに物かたりしてか
へるすまゐはいとたつきなしやなに事かしのひかた
きなとゝふは思ふ心ありてやとみゆるも哀にて

山さとにとひくるともゝわきて猶心をとむる人はみえけり
なにこともほとあらしとおもへは

うきこともしはしはかりの世中をいく程いとふ我身成らん
いつかたにも又ゆきかくれなはやとおもひなから今
は身をこゝろにまかせたれは中〳〵ことたりてのみ
そ過ゆく

そむく身は流石にやすきあらましに猶山深きやとも急かす
よの中ありしにもあらすうつりかはりてなれみし人
もなくなり行ことを

語るへきともさへまれになるまゝにいとゝ昔の忍はるゝ哉
あしたのかすみ

宿ことの朝けの煙たつとしもわきてはみえすかすむ空かな
いはひ

わかの浦の眞砂や千世のあり數によむとも盡ぬためし成覽
春　月

夜もすからかすめる月の影なから行かふ雲やはれくもる覽

沍さはをとにのみこそきこゆなれはそ谷河の春の夜の月
山さとのさひしけなるを

身をかくす山路のおくもすむ人の心はよそにしられぬる哉
世中あやふきさまにきこえしもほとなくたちなをり
にしかは中納言とのに

世ゝをへておさむる家の風なれはしはしそ騒くわかの浦浪

平貞直朝臣家にて歌よみしに旅宿の心を

古里はなれぬ嵐にみちたえてたひねにかゝる夢のうき橋
おもひをのふ

數ならぬみのゝを山のひとつ松獨覺めてもかひやなか覽

耐ぬるか身は浮船のつなてなはひく人もなき世を渡りつゝ
忍によりてまされるこひといふ事を

ともすれはつもる月日をかこつかな人めは人の心ならねは
月にむかひておもひつゝけし

風そよく竹のは山の秋の月のとかにすまぬ世こそしらるれ

思ひをく事そこのよに殘りけるみさらむあとの秋の夜の月

身を隱す宿のかきほのしのすゝき忍はすほにも出にける哉
ほとゝきすなきぬへき夜のさまかなと人のいふをき
ゝて

なきぬへき夜半はたのまし郭公待らんとこそ猶しのふらめ
ゆふくれにはる〳〵とみねとひこえて鴈のゆくを

山のはにゆふゐる雲はのとけきにをのれ別れて鴈の行らん

又もこむ秋社いとゝたのまるれとまる年なき春のかり金

いとせめてこひしき頃とふるさとに霞のころもかへる鴈金
和歌所にて初聞鶯といふ事を

きくからに春そのとけきうちはふき都にいつる鶯のこゑ
にし山の花見ありきしに

あふ人に又さそはれてたちかへりおなし山路の花をみる哉

朝とにたちそふ峯のしらくものゆきゝもみえぬ花さかり哉
花のちるを

待ほとの花の心のつれなさもさきてはあたになとかはる覽
人のよませしに

いつまてとしのふの露を袖にみてきえたにはてぬ物思ふ覽
　久しくをとつれぬ人のかりいひやりし
花そめの色ともきかぬ日數さへとはねはやすくうつる比哉
　ともたちのきて世のありにくき事なと語をきゝて
ならひそと思ひなしてや慰まむ我身一つの浮世ならねは
　としころたのめわたりける女のかりつかはすへき哥
　とて人のよませ侍し
僞にわれのみなさてことのはをたのむ計の年そへにける
　おなし人に又つかはしける
玉かつらたえすも物を思へとやかけてたのめし人の難面き
　冷泉の大納言殿にて歌合に夏草
おほあらきの森のしつ枝もわかぬ迄のへの草葉の茂る比哉
　不逢戀
同し世にいけるをさすかたのむ哉あふにはかへぬ命なれ共
　述懐
ともすれは我身ひとつと託つ哉人をわくへき浮世ならねは
　御子左中納言家歌合に依花待友
さきなはと賴めし人のとはぬまは宿より外の花をたにみす
　祈不逢戀
たちなるゝ神のみむろの榊葉のかはらぬ色はづらさ成けり
　寄草戀
時過て人もすさめぬあやめ草うきにふりぬるね社なかるれ
　小野つき松をかくして
淋しさをなくさむものは四のをの月待ほとのしらへ也けり
　折句にやかた舟
山人のかへる家路はたえ〳〵にふくなるふえのね社聞ゆれ

　これもおなし家の歌合に晴天歸鴈雨中懐舊
歸る鴈はねうちかはす雲もなしなきたる空に數はみえつつ
きゝなれぬ草の庵の雨の音に昔しをいかておもひ出らむ
　西林院（承覺親王）宮にて題をさくりて歌よませられ侍
　しに五月雨
降そむる空よりやかてさみたれの日數しられて雲そ重なる
　靑蓮院二品親王より花契多春といふことをよませられ
　侍しに
くれ竹のそのふに匂ふ花にこそ千世の春しる色はみえけれ
　雪ふる日ひらの山にのほりて
殘りつる枝のしたみち猶たえてあらし吹しく峯のしら雪
　花のさかりたしまのゆよりかへるみちにてあめにあ
　ひて
（藤花）しほらしよ山わけ衣春雨にしつくも花もにほふ袂は
　藤大納言とのゝ松のおの花みにおはせしにさそはれ
　たてまつりて山さとの花を
人めをはいとひやすると山里のあるしもとはて花をみる哉
　花まち殿にてほたる
とふ螢なそやうき世の濁江にかけをかくさてもえわたる覽
　前坊御まへに月の夜權大夫殿さふらはせ給ひてみき
　なとまいりて御連歌有しにけむこう候よし人の申さ
　れたりけれは御さかつきたまはすとて
まてしはしめくるはやすきをくるまの
　とおほせかけられてつけてたてまつれと有しかはた
　ちいりてにけむとするをなかとしのあそむにひきと
　ゝめられしかは

かゝる光の秋にあふまでと申す

忍絶戀

世にもらはいかにせんとそ思ひこし心やすくもたえし中哉

懐舊

儚くて又やすきなんこし方に歸るならひのある世なり共

千鳥

わかの浦にみ代の跡ある濱千鳥猶かすそへぬね社なかるれ

網代

知へせよたなかみ河の網代もりひをへて我身よる方もなし

落葉

新續古 逃えぬおいその杜の紅葉はゝちりかひ曇るかひなかり覧

春のころ哀傷

わひ人の涙になるゝ月かけはかすむを春のならひともみめ
みし人もなき故郷よ散まかふ花にもさそな袖はぬるらむ
歸りこぬわかれをさても歎く哉西にとかつはいのる物から

兼好法師集補

兼好法師か母身まかりにける一めくりの法事の日さゝけ物に添へて申つかはしける　前大納言爲定

新千載哀傷 わかれにし秋は程無くめくりきて時しもあれとさそ慕ふ覽

かへし　兼好法師

同 めくり逢秋社いとゝ悲しけれあるを見し世は遠さかりつゝ

題知らす

新拾遺冬 あし鴨のはらふつはさに涙こえてうは毛の霜や猶氷る覽

夕旅を

同旅 旅の空幾夕暮に待ち出てゝ山のは變る月を見つらん

忍久戀を

同戀一 しのふ山又こと方に道もかなふりぬる跡は人もこそ知れ

旅の歌とて

新後拾遺旅 都思ふ草の枕の夢をたにたのむ方無く山風そ吹く

雜の歌に

同雜上 後の世を歎かぬ程そ知られける身のうきにのみ袖は濡つゝ

寒草を

新續古今冬 手枕の野への草葉の霜枯に身はならはしの風の寒けさ

忍戀を

同戀一 みさひ江の底の玉藻の亂るとも知らるな人に深き心を

祈戀を

同戀二 いかにせん神のうけゝる御祓とて見し面影も忘れはてなは

題知らす

同戀三 こぬ人を猶こりすまに松山は幾夜涙こす契りなるらん

絶戀を

同戀五 うきたひにこれそ限りとかこちしははかなくたのむ心成覽

群書類従巻第二百七十

和歌部百廿五　家集四十三

元可法師集

春

暁立春

ねぬる夜の昨日をこその別れ共ゆふつけ鳥の音にぞ驚く

山子日

さかの山千世のふる道今もなを松をためしの子日にそひく

若菜

けさは先跡なき雪をふみわけて歸るさまにや若なつまゝし

たまるともみえぬ雪まの若な哉かたみに摘もかひやなか覧

うきみには野守もつけし春のゝに我と出てや若なつまゝし

なへてしる雪まなれはや野へをにさそはぬ友も若菜摘らん

梅

さそひ行物とや風のおもふらむ木のもとさらぬ梅の匂ひを

中垣のへたてをこえて咲梅や主さたまらぬ花とみゆらむ

さそひくる風のたちえの梅かゝに思のほかの宿をとふかな

近衛前關白家にて題をさくりて百首のうたよませられ侍りし時雪中梅

空にふる色さへ梅のにほひにてそれともみえぬ春のあは雪

鶯

春さむき雪の山ちの鳥なれや朝日に出るうくひすの聲

はつせ山ひはらの谷の雪のうちに猶こもりえの鶯の聲

宗匠家にて題をさくりて三十首の哥よませられしとき

しき島の道ある春のうくひすはこと葉の花やゝとり成覧

聖廟にて一日三百三十首よみ侍し時若草

もえ初る荻の焼はらいつよりか風のやとりも人にしられん

おなしき時霞

立わたる霞のひまにあらはれて雲ゐにたかきあまのかく山

おなしきとき松霞

はる〳〵とかすめる松の梢より一夜をこめて春やたつらむ

夕霞

はつせ山入相の鐘のこゑ近し霞のおくやをとなかるらむ

大納言忠光卿の家にて題をさくりて歌よみ侍しとき

野春雪

雨とのみ野への艸葉やおもふらむ空より消るはるのあは雪

餘寒

さへかへる雲にあらしの音羽山はるとは何の色にみゆらむ

春月

いつもたゝなみたのとかとかこつ哉春しらぬ身の袖の月陰
天津空かすめる夜半はなか〳〵に涙いとはて月をみるかな
いとゝさへ(またイ)野守のかゝみ俤も見えぬはかりにかすむ月哉
木のめはるこれや杜の影ならむみとりに霞む春のよの月
ことゝへは霞めるかけのすみた河月も都のともやこひしき

歸雁

しはしなを雲井の雁の玉章もやらてみまくのほしきはる哉
花鳥の歸る道にもともなはてひとりと雁のなにいそくらん

あつまのかたへおもひたつこと侍し時人〳〵來りて
うたよみ侍しに歸雁

我になとこゝろも色もかはるらむ都を出る春のかりかね

橋邊歸鴈

あまつ雁手にたにとらぬ玉章をかけてそ歸る春のかけはし

杜春雨

くれなゐに秋やかはらん春雨の染るみとりの衣手のもり

宗匠爲定卿よませ侍し時の哥の中に岸柳

青柳の陰行ほとはみとりにて岸へにとをき水のしら波

近衞前關白家によませられし哥の中におなし心を

あまの河岸のやなきや七夕の春もあさひく糸とみゆらん

河柳

年へたるたつたの河のふし柳ふしても猶や木たかゝる蘭

花

尋花

ゆきてみむ高まの山のさくら花よそなる程や雲にまかふと

見花

またしらぬ山ちの奥の花もみつ浮世のほかの宿もとむとて

朝日さす峯の霞のたえまより色さへにほふ山さくらかな

山花盛

よしの山かさなる雲をいく重とは分てもしらぬ花さかり哉

大納言忠光卿家の障子のゑに哥よませ侍しときよし
野山かけるに(ところイ)

もろこしの吉野ゝ山も遠からし花につゝける山ちなりせは

落花

身をさらぬ心を花になしてたにちるを別となをしたふかな
いとへともとすれは花を誘ふ哉あないひしらぬはるの山風
みをたにも捨し心に散花をさのみは何とおしみわふらん
うたてなとあるし思はて山風のさそへは袖に花の散らむ
けふは猶山たちはなれ雲消てなかるゝ川そはなになりゆく
ありて世にはては春たにうけれはや暮ぬさきにと花の散覽
よしの河まさらぬ水もたきにそふ色と計やはなのちるらん

養子なりし僧身まかりて侍し頃寄花逃懐といふことを

老か身の果をもまたて散花をやしなひえつとなに思ひけむ

雲雀

雲に入鳥とやなりて行春のすゑのゝひはり猶あかるらむ

藤

忠光卿家の障子の繪に春日のやしろ鳥居に藤のかゝ
りたるところ

をしなへてかゝれる藤の花うたみめならふ松もあかぬ計に

苗代

春日山ふちの島ゐの春のいろに身をもはつへき宿とみゆ覽
しき島のうたかた水をせき入て誰なはしろに種をまきけん

暮春

さのみなと春ははつせの山颪花より後もはけしかるらむ

三月盡

あすや猶春にをくれて哀てふことをあまたにおもひ出まし

花をこそさそひつくさめ春をさへ殘さぬけふの入あひの鐘

夏

首　夏

きのふまて馴こし花の彌生山なさへ卯月とかはる計ふかな

かつさむる現は夏に來にけりとむすふもあたし春のよの夢

更　衣

墨染の衣はいつもかはらねとよその袖にもなつそしらるゝ

杜更衣

花のかのこきに染しを蟬の羽の薄きにかへつころも手の杜

池菖蒲

かけうつす軒のあやめは池水にねさしとゝめぬ草とみゆ覽

大納言忠光卿家に褒貶の歌侍しに旅宿菖蒲

こよひ猶あやめを草の枕にておもひそ出るよもきふの宿

待郭公

待かひやつるになからむ時鳥うき世によきて鳴音成せは

鳴ぬへきふしのすそのゝ村雨になを時しらぬほとゝきす哉

時鳥いかに待てかまちえしとこその初ねをこゝろにそとふ

郭公未遍

里わきてなく比も猶忍ひねとおもふにたのむほとゝきす哉

聞てなをこゝろつくせと時鳥さたかにもなきねをや鳴らん

杜郭公

ほとゝきす忍ふるころの初音とや人もなきさのもりに鳴覽

ほとゝきす生田のもりの幾度もとはゝこたふる初ねとも哉

關郭公

せきの戸をあか月出る鳥なから八聲はなかぬほとゝきす哉

郭公頻

時鳥珍らしけなくおもへはやあかぬもしらすねをつくす覽

盧　橘

ふるさとの昔はいつのむかしをか花橘の香ににほひけむ

にほひくるはなたち花やうたゝねの夢より後の昔なるらん

雨中早苗

みわ河の水をもせかて五月雨のふるの早田にとるさなへ哉

五月雨

行水の淸たき河も名のみしてにこるなかれの五月雨の頃

五月雨は日をにまさる水莖の岡のやかたをとふ人そなき

音羽川かは音たかしあふさかの關のこなたの五月雨の比

さもこそはうきぬの池の菱の葉もみかさに沈む五月雨の頃

夏　草

夏草をいかに分てかこと繁きうき世のかるゝ道もとめまし

燒し野もけふはみとりの夏草に花もこもりて秋や待らん

紫のゆかりもいとゝみえわかすひとつ綠のゝへの夏草

いかにして色の千種に咲ぬらむひともと植しなてしこの花

木間夏月

みしか夜はおなし木のまもあけはてゝ中々月そ心つくさぬ

夕　立

ならの葉にあられの音を聞しより猶風はけし夕立の空

過ぬなり梢はるかに鳴神の音羽の山のゆふたちの雲

樹陰氷室

とけやらぬうたの氷室の山陰に夏をよきける槇の下かせ

納涼

谷陰の岩ゐの清水よそにてはあつき日しもそいとゝ涼しき

鵜川

下り行身はなゝそちの鵜かひ舟たのむ一せもなき此世哉

大納言忠光卿の障子の繪にうち河にうかひ舟かきたるところ

夕やみの色なる槇の島津島うちを夜川とかゝりさす覽（也イ）

瀧上蟬

木のまよりおちくる聲や鳴蟬の涙のたきとよそに聞らむ

螢

生田河しつむみ草の玉かともみゆる螢にことやとはまし

いとゝ猶みたるゝ玉のかすそへて涙のうつせにとふ螢かな

はかなくもおもひにもえて終夜かつかく（字數）水にとふほたる哉

しけりあふ野へをもやくとみえつるやもゆる螢の光なる覽

あひしりて侍し女身まかりてのち寄虫哀傷といふことを

もえて行夜半の螢やこゐをたにきかて別し玉とみゆらむ

夏秡

みそきするかもの河風此まゝにかはらてあすや秋を告まし

秋

初秋風

敷たへの枕さためてみる夢もおとろきやすき秋の初風

かくとたに人はつけねと物おもふ心にしりぬ秋のはつかせ

七夕舟

いまははやゝすの舟つにふねかへせ此夜はふけぬ天の川長

七夕衣

七夕の涙なからやかへすらん昨日かしつるきぬ／＼の袖

織女のいをはたたてゝおるかうへに重ねて猶や衣かさまし

七夕扇

たなはたの扇の風に霧よりもまつはれぬるやおもひ成らん

七夕別

けさはなと立かはる覽あひみまく星は昨日に限りやはする

荻風

吹しほる程は中／＼音たえてよはれはそよく荻のうは風

荻の葉のそよくをとより絶にけり風のかけたる夢の浮はし

萩

花の色にうつろひ果てさたかにはをくともみえぬ萩の上露

紫のゆかりの草の枕ゆへまはき咲野にあまたゝひねぬ

眞萩原露たにおもき花のうへに心をしもやそへてをかまし

おちぬへき露の契もあたなれはおらてそみつる秋萩の花

薄

里人のゆきゝの岡の花薄夕露はらふそてとみえつる

手になるゝま弓のをかの花すゝきまねくはたれに心ひく覽

行かへりふりけむ袖のおもかけを殘すしめのゝ花すゝき哉

女郎花

なにたにもめてゝさか野の女郎花靡くをみては如何過へき

女郎花いまは契の秋そともしらてや風になをなひくらん

露

有明の月かけなからかたしきて袖になれたる露のたまくら

たのむなよさもあたしのゝ草のはにしはしと懸る露の命を

虫

ふしておもひ起て歎くや秋の虫のさせるとなき大和言のは

よる山を過んものとや夕くれの籬になるゝすゝむしの聲

くへき宵かねてしるしやさゝかにの雲のはたての松虫の聲

霜をけは千とせもまたて枯にけり名のみ常盤の松むしの聲

鹿

いつれにかぬる夜の夢の覺めぬらん嵐にたくふさほ鹿の聲

明石かたせゝの追風更るよにしかのねちかしあはちしま山

いほもらて聞よはもかな心にもおもはていとふさほ鹿の聲

終夜よそにのみして小山田をもる人こゝとしかやなくらん

鳥のねにおとろかされて門田よりわかるゝ時と鹿や鳴らむ

聞たひにおとろかすとて鹿のねに枕さためすもるいほり哉

雁

あまつかせけさ吹こゑや寒からむうきたつ雲の衣かりかね

わか門の稻むふせ鳥も時過て刈田のおもに鴈そむれゐる

霧

名もしるく山は朝日にあらはれて霧に棹さすうちの河舟

あくる夜も鳥のそらねとたとる哉猶霧くらきあふ坂の關

ひろせ川袖つく水の流さへ淺くは見えぬきりのうちかな

霧こむる麓の河はみえわかて空に有明の山のはの月

宵のまは霧たちくもるあふくまに河風ふけて月そさやけき

ふもとをは猶立こめてふしのねの霧よりうへにつもる白雲

月

月影も秋もはしめのみかの原いつみなれてはしたひわふ覽

めてこすは月にもいかて忘れまし積れは老の秋のあはれを

むかしこそ月みる夜半はかこたるれ思ひ出れはくもる涙に

窓くらき軒はの竹を吹わけて風より出る宿の月かけ

みなの河氷てけりなつくはねの峯より出る月のひかりに

名とり川みなそこかけて埋木のあらはれぬへき月の影かな

むは玉の闇のよころやわたすらん月に絶たる夢のうきはし

初せ河井手こす波のしらゆふに光も淸くやとる月かけ

月影もなかれの音も山河のよとなき水に先こほるらむ

月前荻

荻はらや音も光も身にしみてすゑこすかせに月そさやけき

月前席

すかこものとふの浦人七布にもみふにもねすや月をみる覽

居待月

更ぬまに出へき影もしら露のをきゐていそく山端の月

浦　月

しきたへの床のうら涙よるとひてねて明すへき月のかけ哉

近衛前關白家にて歌よませられし時水鄕月

行ともはやきを月にかこつかなゝかるゝ水のよとのさと人

浦島か箱根のうみの月に猶あけてくやしき程やこえまし

關の戸の明行夜半をかこつみは月にも鳥のねこそ鳴るれ

島つたふあしはや小舟なかき夜に幾浦かけて月をみるらん

うきなから身はあらましの山端に羨しくも月そ隱るゝ

秋　田

露結ふ小田のなはてのかりしほも靡く穗波の色に見えつゝ

擣　衣

あまつ風いとゝ夜寒の里人や月をも霜ところもうつ覽

聲にたにねられぬみ社から衣うつ人よりも夜さむしりけれ

南都西南院にて哥よみ侍ける時里擣衣
またきよりかすかの里の夜寒をもしるよししてや衣うつ覽
月かけに秋をく霜のあさ衣夜をかさねてや打あかすらん
みよし野の里のたのものかりころもよると契て今やうつ覽

鶉

いか計みにしむものそうつら鳴夜は深草のさとの秋かせ

紅　葉

けふは又柞にまさる色もなしひとしほそめの木ゝの紅葉は
はてはまた露をも染るもみち葉や此世にむくふ色にみゆ覽
染つくすからくれなゐの錦きや千束にあまる色とみゆ覽
はし紅葉庭に立枝の色よりやおもひのほかの人もとひけむ
霜かれの芦のおち葉のなかれ江に數そふをのゝみなと舟哉
はつせ山夕くれなゐの日影こそ檜原を染る色とみゆらめ
あらしやま染る梢のくれなゐに日をへてかはる瀧のしら糸

忠光卿の家の障子にうつの山のもみちを旅人の分て
のほりたるところ

日のもとの秋とはみえすうつの山からくれなひの蔦の下道

月前菊

をきあかす霜の籬のにほはすは月とはかりやしら菊の花

三位爲重卿石山にまふて侍りてよませ侍し歌の中暮
秋鳥

曉のしきの羽かきかきつめむもゝ夜もまたて暮る秋哉

秋　雨

松にこそ晴るまもなく時雨けれ染えぬ雲のあとの山かせ

暮　秋

紅葉はを猶こきいれむ立わかれ行とも袖に秋やとまると

閏九月盡

うきとのくはゝる秋とおもはてやけふの別を猶したふらん

冬

初　冬

新後拾 ふゆを社時雨も告れ定めなき世はいつよりかはしめ成けむ
岩橋の夜の契の神な月けふやしくるゝ雲(空イ)をかく(さイ)らむ
時雨さへなへては染ぬ梢かなにしこそ秋とみゆるはかりに
ほしあへぬ老のねさめの衣手は夢そ時雨のはれまなりける

落　葉

空蟬のからくれなゐに見し色も今はむなしくちゝ木のは哉
誘はるゝ心木葉にたくへてや風のすみかもゆきてうらみん
幾重ともしられぬ庭の木の葉哉散をは風やさそはさるらむ
くち果てもとの跡にや歸るらん木のはに埋む家のかよひち

寒　草

色々の秋のかたみも今はたゝあたのおほのゝしものした草

霜

老ぬれはいたゝく霜の起ふしも身を心にそまかせさりける

冬　曉

水に入かもの河風さむけれはゆふつけ鳥もこすゑになく

田殘鴈

花になく鳥とそみゆるしら雪のふるのかり田におつる鴈金

氷

夜をかさねみきはやとをく成ぬ覽よすれは氷る志賀の浦浪

寒　蘆

風さむみ曉おきにむすふ手の雫も氷るやまの井のみつ

難波かたなかれぬあしの枯葉こそ氷につなく舟とみえけれ

水　鳥

なつみ河氷れる比は山かけもすみえぬかたとかもや鳴らむ
世わたるはくるしき物と水鳥の下やすからぬ思ひにもしれ

千　鳥

沖つなみ夕しほなからさゝしまの磯こす涙にたつ千鳥かな
霜さゆる浦の苫屋の鳥のねに又ねをそへて立ちとり哉
　人の追善しける日題をさくりて歌よみける時千鳥
つのくにのこやの寢覺の友千鳥跡をとふにもね社なかるれ

霰

たをやめのかさしのかつら空にのみかけて亂るゝ玉霰哉
身にちかき衣のうらにかけなからみさりし玉とふる霰哉
さらぬたにぬきも留めぬ白玉のをのゝ淺ちにちるあられ哉
風さやくゐなのさゝはら玉ちりて宿なき床に霰をそしく
ぬきとめぬ玉のをすての山風にいとゝ亂れてふるあられ哉

雪

埋めともひと木を松のしるしにて雪に隱れぬ志賀のから崎
もしほやく蜑の磯屋はうつもれて窓なき雪にたつ煙かな
竹の葉に降しら雪や木にあらす草にもあらぬ花とみゆらん
ふりにける跡こそみゆれみよし野の里は昔の雪のあけほの
新後拾うつもれぬけふりを宿のしるへにて雪に汐くむ里のあま人
いとゝ猶雪にはよもとおもふ社霜よりかれし人めなりけれ
昨日まてよそなる雲と峯の雪みきはにたにもつもるけふ哉
いとゝなを雪のとさしと成しよりむくらの宿はとふ人も無
山のはにあはたつ雲のその儘に消あへぬ雪の日數をそふる

鷹　狩

はし鷹のとや野の草の冬枯につかれの鳥や又こもるらん
けふ幾日かたのゝみ野のなら柴に馴てもあかす狩くらす覽
消あへぬ雪のふる道跡とめて又くるす野のけふの御狩場
枯のこる交野のみのゝ村柴に鳥ふみたてゝあさるかり人
はし鷹の峯飛こゆる左羽にみぬおち草のつかれをそしる
みねこゆる疲れの鳥の落艸をつくるやたかのほこ羽成らむ
御狩はに木ゐとる鷹のをしへ草しけみも鳥の隱れかそなき
今いくか殘る日なみの御狩場にかた野の眞柴ふみならさまし
　宗匠家にて題をさくりて歌よませられし時豐明節會
更行はをみもおほみもおなし色に霜をかさぬる山あひの袖

歳　暮

夜の程に行てはくへき一年を別になして何したふらん
老の波歸らぬ水のしからみもかけてかひなき年のくれかな
かく計くるしき老のさかそともしらてや年のこさむとす覽

戀

初　戀

いかにして袖の涙の初しほにさのみはふかき色のみゆらむ
おもひたつ今よりやかて迷ふ哉人にとふへき戀路ならねは

聞忍戀

よそにのみきくの池水もらさしと人め堤を猶やせかまし

契　戀

ちきりしも僞ならはたのむともしらてや人の遠さかるらん
なからへむ命もしらぬあたしみに行末まてと何たのむ覽

逢　戀

うつゝとも夜にやしらんまたなれぬ戀は夢路をたとる心に
いまよりや逢にかへむとおもひしもおしかりぬへき命成覽

別　戀

きぬ〳〵を送るは辛き鳥のねの靆てかたみと成やしなまし
せめて身に曉計うきものとかこちて出んきぬ〳〵もかな
よしさらは只夜をこめよ明ぬとて辛かるましき別ならねは
深き夜の鳥は鳴ともつらからし別を人のいそかさりせは

顯　戀

寄後悔
いかにせむうたの。燒のに臥鳥のよそに隱れぬ戀のつかれを

被厭賤戀

うらみしよ賤かさゝめの身の程を我たにうしとおもふ心に
いかにせむうきみといひて逢ことを命にたにも人のかへすは

忠光卿のいへにて褒貶の哥よみける時におなしこゝろを

逢とはおもひもかけす雲もなくなきたる朝の賤かかたいと

久　戀

なからへて猶歎けとや命をもあふにかへしとつれなかる覽
人もうく我も報はゝ世々かけてたか情なさもはてやなか覽

欲言戀

よしさらはしらせてたにと思ふ社忍ふにかへぬ心成けれ

隱　戀

しられしなみを浮草にみかくれて水の心のわきかへるとも

寄月戀

よるといふ契は月にあり乍わたらぬ中や久米のいははし

寄霞戀

暮はてむ春をやなかにたのまゝし霞計のへたてなりせは

寄杜戀

いかにせん逢みぬ先にかつちらは名さへ浮田の杜のしめ縄
かくとたにいはせの杜の木枯にわか言の葉のいかて散けん

寄原戀

あふとはゐなのふし原臥て思ひおきてそかこつ人の辛さを

寄關戀

こえてたにつらき關はいかさまにふみたかへけむ逢坂の關

寄橋戀

しかりとて現にかゝる(のこるとはイ)よしそなき絶なはたえね夢の浮橋
わたらてやさて山すけの橋はしら立名を何と思ふはかなさ

寄忍草戀

かれねたゝ心のおくの里の名を草葉につけて人もこそしれ

寄思草戀

霜さやくをはなかもとの草はなと枯れとなかに猶茂るらむ

寄下草戀

とはるへきたよりたになく枯果ぬ生田のをのゝ霜のした草

寄菅戀

契のみさもあさは野のみわこ菅なにねふかめて思ひ染けむ

寄松戀

岩代の松にむなしき中ならは結ふやつらき契ならるん

寄楢戀

遠さかれかり場にたてる楢柴のなれすは辛き色やみえぬと

寄舟戀

身のよそになるとを落す早舟のめにたにみえす過る儚なさ

寄涙戀

うしとたにいはぬにぬるゝ袂かなこゝろをしるや涙成らん

寄玉戀

きふね河神にもつらき名をたてゝ玉ちる涙に身をや沈めむ

宗匠家にて題をさくりて哥よみ侍し時おなしこゝろを

新千 僞の言の葉とにをけはこそなみたの露の玉とみゆらめ（ち集）

寄鏡戀

山鳥のおろの鏡はおろかなる中にかけてや猶くもるらむ

寄棹戀

みるめかる千尋の海にさす棹の及はぬ中に身もつかれつゝ（こがれイ）

寄衣戀

むらさきのねすりの衣涙にもあさはかならぬ色はみゆらむ

寄糸戀

すちよはみ逢みむまての玉のをも猶たのみなき賤かしけ糸

夢にたに猶夏引のいとせめて戀しき時はなにをたのまん

寄布戀

むねあはぬ思ひよいかてあす迄の命よいかにけふのほそ布

ある人たび／＼文をつかはしけれともむなしくもとの文のみ返し侍ける女のもとへ又ふみをやるとて哥よめと申侍しに

返すさへ手やふれけんと思ふにそ我文乍うちもをかれす

近衛前關白家にて題をさくりて百首哥よませられ侍し時

いまこむといひし夜をの僞やかはらぬもうき契なるらん

おなしとき寄糸戀

絕ぬへき程そしらるゝよるたにも賴まぬなかの賤かしけ糸

聖廟にて三百卅首哥法樂し侍し時寄雲戀

いかにせむ夢の契もなき中におくるあしたの雲と消なは

寄枕戀

さのみやは逢瀨もよとのこも枕ならへぬ中に思ひみたれん

雜

浦船

よるへなき浦のすて舟主やたれとへとしら浪立さはきつゝ

夕

儚くもおとろかぬ哉行するの日每にちかきいりあひの鐘

夢

いつもかくなかきねふりの覺ぬ身は現や夢のたゝち成らん（こゝちイ）

古寺鐘

世中はねてもさめても夢なれは現とおもふ時のまもなし

初瀨山檜原の風にひゝきゝて猶夜をこむる入あひのかね

旅

草枕ゆめをたのみのふる鄕もねられぬ夜半は遠さかりつゝ

朝露のかこと計に東路の道のはてまておもふはるけさ

すみた河よしことゝはて故鄕にわか思ふ人の有よしにせむ（細イ）

うつの山あふ人あらはとひてまし行するしらぬ蔦の下道

月にゆくさよの中山なか／＼にあけは麓に宿やからまし

南方退治發向の時天王寺にて人／＼題をさくりて哥よみける時旅友

このたひは旅としもなしつれて行友を都とおもふ比かな

應安六年八月おもひのほかのことありて白川關こゆるとておもひつゝけ侍ける

秋風の吹につけてそ都出てつもる日數もしら川の關（月日イ）

名所泊

うろちより入にしむろの泊ふね法にもとまる心はなれよ

田家

まとろまて守あかせとや小山田のいほりはことに夜寒成らん

山家

すめは猶かはらぬ物を世のうきめみえぬ山路と何尋ねけん

山深くさのみはいらし世のうさは聞につけてそ猶厭はるる

そむかむといふ人ことにのかれこは山や中々うき世ならまし

やま里に住はてよとや世のうさをくる人ことに先かたる覧

山さとに又のかれ來る人そなきわか住ほとやうき世成けむ

近衛前關白家にて題をさくりて百首哥讀せられし時

窓竹

螢にも雪にもあらぬ竹の葉を窓には風のなにあつむらん

同關白家にて憂喜依人といふことを人々によませられしとき

追風をむかふといひてとまる社こゝろ／＼の舟路なりけれ

法印淨弁もとにてかんなの題にて哥よみ侍し時わかみ世にふるといふことを

有増のなくは何をかかすならて我身世にふる慰めにせん

おなし時ひとつこゝろを

世を捨る人に心をあひそへてのかれぬ先に山ちをやみむ

世をのかれて高野に住侍けるころおなし時に遁世して都に住侍し人のもとより

世をすつるおなしみなから住山の深きやふかき心なるらん

と申をこせて侍ける返し

いとへたゝうき世を厭ふ心たに深くはふかき山ならすとも

述懷

うきことを世の習そと思ふこそ身をすつましき心なりけれ

儚しと人をはいひて捨ぬこそみの程しらぬこゝろ成けれ

かくて社只世にはすめ捨るとはいふへき程の憂身ならねは

のかれはと思ひし程はなけれ共捨てはさすか身社やすけれ

世のなかをいとふこゝろも淺きより深きにうつれ黑染の袖

うき時は世をのかれしと思ふ社みをもうたかふ心なりけれ

世のうさも今いく程と思ふ社老になくさむこゝろなりけれ

背かむと思ひ定むる身成せは世のうきしもや嬉しからまし

さためなき世の習ひこそ中々に數ならぬみのたのみ成けれ

淨弁法印かもとにて題をさくりて百首歌よみ侍し時

懷舊

おもふ社ことはりなれと聞人の(しふイ)おもふ(おしふイ)計のいにしへもかな

藤原盛德すゝめ侍し懷舊

我のみや忘れはてまし思ひてのなきか忍はぬむかし成せは

懷舊

いとゝ猶忍はれむとやいにしへの立もかへらて遠さかる覽

心には過こしかたのちかけれとかそふる時やむかしなる覽

涙ゆへくもるもつらしいにしへを忘れて月を見る夜半も哉

なにことを音になして忍ふ覽うきはさなからもとの身にして

數／＼に過しむかしをしのふ哉老は物をや忘れさるらむ

釋教

よしあしと道をあまたに分る社心ひとつのさとり成けれ

一枝をさゝけし法の花にこそ心ひらくる人は見えけれ

まよふそと思ふこゝろの初め社まことの道のしるへ成けれ

墨染の衣のうらのたま／＼もうけかたきみを又やしつめん

よしあしと聞けはそ迷ふいかにして心の外の道にいらまし
高野に住侍し比奥院に通夜し侍し時思ひつゝけ侍り
ける
新續古 高野山うき世の夢も覺ぬへしその曉を松のあらしに
神祇
いかにして神のうけひく程計心のしめをかけてたのまむ
南都西南院にて題をさくりて哥よみ侍し時春日
東路の道のはてよりさしてこしみかさの山そ神代はるけき
寄月神祇
さやかなる月のみふねを猶かけて神代忘れぬから崎の松
・僧正宗緣かもとにて歌よみ侍し時寄神祝
君を守り神をあかむる契のみたえすや世々にむすふはや玉
代々たえぬ手向ともなれ神垣のちりよりなれる大和とのは

集中所ㇾ載。伊登々亂天降蕨哉。諸本作ニ亂矢散者玉蕨哉一。嘗觀ニ熱田宮藏日本書記一。其本悉用ニ反故紙一。中有ニ元可懷紙一。乃此歌存。就以校訂。可ㇾ謂ニ奇遇一而已　源弘賢

右元可法師集一卷以屋代弘賢藏本校正畢

宗祇法師集

春

立春
あら玉の春たつらしも天の原ふりさけ見れは霞たなひく
草菴にて人〻廿首哥よみ侍し時海霞
伊勢の海や春は雲ゐのあま衣しほなれそめてたつ霞かな
海邊霞
あま人もからぬみるめをいせ島や霞によするはるの夕なみ
雪中鶯
花としもえやはみ雪の山陰にこゝろもしらぬうくひすそ鳴
草庵の月次會に鶯呼客
さそふとも人しとはすは梅かゝを鳴ねにしめよ宿の鶯
春雪
かすみつゝ今朝うちゝるは山里に消るもしらぬこその白雪
梅花薫鶯
梅かゝにねぬ夜しられて玉すたれあくるもまたぬ鶯のこゑ
三十首歌よみ侍しに梅香留袖
梅か香ももとのねさしの淺からて色こき袖に猶にほふらん
宗匠飛鳥井入道大納言家にて三首哥講せられしに月前梅
夜を寒み梅かゝちかき手枕に月はかすみてはるかせそふく
梅の哥の中に
そことなき梅のにほひのしるき夜はやみの現に春風そふく
夢のみか梅咲みねのもろこしもにほひに近き夜半の山かせ
春草

みえ初て露たになれぬ若艸のすゑ吹むすふ野への春かせ

河邊柳

いなむしろおきふししけく山もとの河そひ柳春風そ吹

老いのち攝津のくにの閑居にて五十首哥よみ侍し中に岸柳を

下もえし草葉の色もをそくとくわかれて靡く岸の青柳

春田雨を

なをさえて霜はをくともかへすへき岡へのさなへ春雨そ降

湊歸鴈

ゆらの戸や湊こき出るかちの音もはるかに霞むかりの一聲

艸庵にて三首哥講せしに歸雁似字

これやその別とかいふ文字ならむ空にむなしき春の雁かね

都とをき所にて歸雁をきゝて

古里と思ふはかりの戀しさや身はなをさりの春のかりかね

細川京兆(政元)すゝめられし太神宮法樂百首續哥に

駒とめて猶かへりみよあふ坂や月の宮この春のあけほの

三十首哥の中に春駒

はなちかふ春野をみれは旅人の朝たつ駒もいはへてそ行

春月

身やはあらぬ露もゝれは恨こし月にあはれむ春のよの空

いかにせむ春に霞める月としも思ひなされぬ老のみるめを

霞む夜をならひときけは老のみの慰さむ月は春のみやみむ

宗匠家月次三首會に尋花不定處

咲さかす今朝は宮古の春霞いつれの花におもひ立らん

初花

消もあへすけさやは櫻雪とのみ思へはかほるはるの山かせ

寄霞花

かすめたゝさきも咲すも春の山たゝをしこめて櫻とそみむ

周防國に侍し時百首歌よみしにおなしこゝろを

俤はかすめる花もとをからて梢にまかふはるのやまこえ

遠望山花

いかにみておもひもわかむ曙のとを山さくらみねのしら雲

尋花

一もとにとまらて過は花はたゝおほかた春の山ちとやみむ

宗匠家にて古今の一句を題にて人〳〵五首うたよみし時はなのところは

心とめむ花のところはいつくとも思はしいはし咲を限に

おなし家會に花主といふ事を

我庵の梢ともみし春はたゝ遠近人に花をまかせて

深夜思山花

ふしわひて花やいつくの山端にかつなくさむる有明の月

月前見花

いたつらに人はねぬ夜をうくひすや月と花とに心みゆらん

紀元家許にて侍し三首會に朝花

うちしめり花は色そふ朝露にみたれぬ程の春風そ吹

折花

折とらはおしとおもふも我なから心にゆるすはなのひと枝

交花

馴ぬとて花に忘な深山木のかたはらにたにあらしわかみを

宗匠家の會に志賀花園を

かはかりのあはれはそへし古の春やは老木志賀の花園

五十首哥の中に山花

うつりこし世のあらましの色々は花に跡なきみよしのゝ山

盛花

みよし野の春の雲ゐを見ぬ人や花は程なきものとしる覧

人の世にたのむ盛もいかならん咲そふ花はやゝま風そふく

寄花述懐といふを

なからへて思へは人に見えぬへきうきめを花に猶や忘れん

源氏物語巻名を題にて哥よみ侍しに匂兵部卿宮

ぬれつゝや猶身にしめむ春雨の名殘に匂ふ花のしたかせ

散かたなる花の露のをきたるをみて

しほるやとおもふは幸し夕露も花にやとるそ猶あはれなる

花のころ待人のとはす侍し時

跡もなき雪にやあすは慰さめむ春にけふこぬ人はうけれと

寄雪花

庭の面はこそ見し雪のかたみにて跡なき花をいつち尋ん

上杉民部大輔亭にて二樂院下りたまひしときの會に

無風花散

花そうきかねてうつろふ秋の色を風より先にいつならひ劔

花

いかにせんいとふ心にまかせてもちらは形見の花の嵐を

草庵にて三十首哥よみ侍し時同し心を

ちらせたゝ風の誘はぬ世成とも花にいかなる限りをかみん

花哥中に

あやにくにいとへはちらす世成共花には風を誰かしたはむ

あらしにはことの葉つきて花をのみ恨む計にちるさくら哉

うらむへきかた社なけれさそひ行風の宿りは花にみゆれと

春鳥といふことを

春ちらす風のやとりをしら雲にたつねわひてや鳥も鳴らむ

源盛郷もとにて哥よみ侍しに夕雲雀

思ひすてぬ草の宿りのはかなさもうき身にゝたる夕雲雀哉

かたゐ舍にて曉きゝすの鳴しを聞て

霞たつとやまの庵の東雲にありかもしらぬきゝす鳴也

河款冬

水の色は花ににこれる影なから猶清たきの岸の山ふき

橋邊款冬

駒とむるいたゝのはしの夕浪にこほれて匂ふやまふきの花

寄花述懐といふを

山吹の花をしみれは老か身のとはすかたりも絶かれぬる

三十首哥中に松上藤

咲かゝる汀の松に竹河のふちのみとりもそれかとそみる

たかつの人丸によみて奉し哥の中に春欲暮

うつりきて月は有明花にはあらし宿とふへくもみえぬ春哉

暮春

行春や人に忘れん打すてゝ散にし花の跡の思ひを

夏

新樹露

下草の露さへをのか秋の色をよそけにしける木からしの松

三十首歌よみ侍しに杜新樹

郭公秋にはあはすこのころの生田のもりを一聲もとへ

卯花隔路

あなうとも花をはいはし雪なからさらても埋む宿の道芝

夕卯花

月はまた山のはくらきたそかれに光さきたつ庭のうの花

世中長閑ならさりし比一日百首よみ侍しなかに葵を

末の世の露のみたれにあふひ草猶そのかみそかけて戀しき

夏聞郭公

村雲の空にやまたむ郭公おもひさたむるしるへならねと

蒲生兵衛尉宿にて宗匠下り玉ひし時の會に山家待郭公といふ事を

時鳥わかすむ峯の待をもたえぬる身とは思はさらなん

初聞子規

子規わかまつことをしるやともおもひもあへぬ夜半の一聲

またてこそ聞へかりけれ郭公さてや心もおもひしつめむ

郭公一聲

たかしたふ今一こゑを郭公思ひかへしてこゝになくらん

ほとゝきすのうたの中に

たか里もあすやきかまし時鳥今一聲の夜半の行末

時鳥類

なくこゑの數にやとらむ郭公おちかへる山の瀧のしら玉

菖蒲

けふふくや何の菖蒲もみえさらんさらても軒は草の宿りに

五十首歌の中に早苗を

みなの河皆堰かけて筑波ねやすそはの早苗とらぬ日はなし

草庵の會に廬橘を

昔こそ人もかゝけむ道芝に露けくにほふ宿のたち花

夜廬橘

いかならん花たち花の匂ひにか思ひさまさむいにしへの夢

たか軒のにほひともなき立花に月のかつらの追風そふく

杜五月雨といふ事を

たのむ影もなくてふる身の悲しきは雫の杜の五月雨の空

五月雨の歌の中に

待〳〵てけふかとおもふをやみたに曇り暮せる五月雨の空

三十首歌のなかに夏草滋

常夏の花のあたりを忘草生る野へとはいつあらしけむ

瞿麥露

唐衣ぬるとも露の夕陰にやまとなてしこおらてやはみむ

鵜川

山蔭やこしけき中のうかひふね此世の闇をみるさへそうき

螢

いたつらに身を焼すつる蟲よりももえて難面影そはかなき

河螢といふ事を

さゝれ石の思ひはみえぬ中河にをのれうち出て行ほたる哉

紀元宗月次三首の中に蓮

池廣み清き渚のはちす葉にひろふはかりの玉そこほるゝ

藤原國雄かもとにて三首よみ侍し中に夏煙

限あれは雪さへ消るふしのねに絕ぬけふりを哀とそみる

泉

山城のいつみの小菅それなから岩しく庭にまかせてそみる

百首歌の中に行路夕立

行なやみてる日にたのむ木のもとはぬるとも出む夕立の空

蟬

あつき日の影よはる山に蟬そなく心の秋やゝかてくるしき

晩夏蟬

遠からぬ秋をもかけし鳴せみの薄き羽にをく露のいのちは

秋

三十首哥の中に早涼至
すゝしさはけふ立初る秋としもみえぬ音羽の山のしたかせ
早秋風
この夕また秋かせの宿やなき旅ねして行いせの濱荻
七夕
人の世の淵瀬にそおもふいつの秋わたり初けん天の河なみ
夕月夜影ふけ行は荻の音もやゝうらかなし星合の空
閑居五十首哥の中に荻風
あくれともうしとも聞を暮毎の心や荻にうたかはるらん
三十首歌の中に萩露
（をもるイ）おもふとも風よりやうき露ならんしほるなまちそ秋萩の花
萩移水
いはれ野のふる枝の眞萩花咲は池にももとの心をそしる
野草花といふことを
秋の野の露分こゝろも行かへり花にしほれぬ夕暮そなき
野薄
風吹は一野にたてる花すゝき思ふ計の袖もはかなし
宗匠家月次の哥に秋草
紫の色こき時の秋ならはなへて野分や吹すしもあらん
閑居秋風といふことを
さひしさも身になれはてし山里は秋吹かせの夕くれもなし
秋夕感思
身は老ぬなにの思ひの露までもかゝらしとすれは秋の夕暮
秋もわきて夕は老の何なれや思ひも露も身をくたく覽

老のゝち哥よみ侍し三十首歌の中に尋虫聲といふことを
聲にこそさそはれもこめ松虫の思ひの露を身にやかくへき
夜虫
終夜ねを鳴むしのおもひをそ袖よりけにもゆるとはみる
たかならぬ思ひによるの蟋蟀夏虫のみやはかなかるへき
曉鴈
おき出て山端みれはなく鴈も空にたな引東雲のくも
本能寺日興法印坊にておなしこゝろを
露けさをそのこゑならぬ天津鴈こそもかく社聞しね覺に
左右聞鴈といふことをある人しゐてよませ侍しに
閨のうへにをくれさきたつ行鴈を傾ふく月にむかひてそ聞
深夜鹿
おく山のあらしにたへて鳴鹿やうき世の人の心なるらん
鹿聲遠
さやかなる嵐のつての鹿のねも猶其山のそこともなし
野外鹿
花すゝきわか手枕の野へとたにおもはぬ妻に鹿の鳴らん
草庵の會に田家鹿を
ねもらぬいねかての夜に悲しきは鹿をふ庵の曉のこゑ
百首哥の中に露底槿花
朝良のはかなきうへにむすへはや花にはをもき露とみゆ覽
槿を
老は猶夕かけまちぬ露なからうつろふ花をはかなくやみむ
山端月
更て澄かけはあれとも月は猶山のはのほる夕やみのそら

河　月

水ならぬ氷をしきて月影の清きかはらに秋かせそふく

湖上月

鐘の音はあらしに更て秋の月涙にいさよふ志賀の山もと

月そすむ大宮人も秋は來て波に棹させしかのからさき

江　月

月そすむなを漕わたせ松浦ふねほり江に秋の夜は更ぬとも

周防にて讀侍し百首の中におなし心を

霜かれのさひ江のあしへゐる鴨の鳴ねも悲し有明の空

島　月

誘れていはゝや月にうきねするみつの小島の人ならすとも

踈居月

月たにも猶かけとめよ住侘て身はかれゆかん露のやとりに

宗匠家月次三首に終夜見月

待うかれ出にしまゝに幾里の夕つけ鳥を月にきくらん

晨明月

みる人も心すむへきあか月に待てや出しありあけの月

貴賤惜月

憂身なとおなし雲ゐに詠むらん月にそ人をわかすみるとも

三十首哥の中に月前情

月に猶身は憧るゝ世の憂めみえぬいつくもありて行やと

關路惜月

清見かたまた明やらぬ關の戶をたかゆるせはか月はこゆ覽

野草欲枯

しほれかしあたの大野の秋風はいつれを殘る艸葉とかみむ

宗匠家月次三首に松下擣衣

峯の松になくねはたえし蟬の羽の夜のあらしに衣うつこゑ

越後に下侍し時かのくににて題をさくりて哥よみ侍し中に聞擣衣といふことを

月草のはなたの衣うつこゑもうつろひよはる有明の空

海邊擣衣

聞わふるね覺の袖にこす涙をしらてやあまの衣うつらん

三十首の中に曉霧

きり立て山かせさひし古鄕のさほの河原のありあけの空

山朝霧

拂ひ行松のあらしのひまみえて一村ふかき峯の朝きり

崎　霧

秋の日はかち野に暮てたつのとふみほのみ崎に霧立わたる

紅葉の哥のなかに

時雨こそさためなからめ山姫の染る心になにをわくらん

うちそよく紅葉のうへの一しくれ色をのみやは倂にせむ

山姫の思ひの色のした染にこゝろつくさぬ初しくれ哉

越後國にてよみ侍し哥の中に紅葉深

うすくこき梢のしるし染はたす心やをのか千しほ成らん

老後三十首哥よみ侍し中に紅葉映日

夕日をやかねて時雨の染つらんかけに照そふ峯の紅葉は

河邊紅葉

河風はさそひ行ともしからみを梢にかけよ秋のもみちは

紅葉霜

霜にとや思ひをきけん夕時雨染のこす山の今朝の一しほ

五十首歌の中に殘菊匂

うつろへは匂ひまされる秋の菊花に日數をおしみてやみん

獨情暮秋と云ことを

みひとつに限らて慕ふけふの秋も老にはにたる人やなか覽

雨中紅葉

心とめて時雨や染し紅葉ゝに露のはへなき秋もある世を

冬

草庵月次三首哥に山館冬至

たまさかの人めも草も秋は猶あとみえし庭に峯の木からし

初冬時雨

染のこす梢ありとや神な月またきたつ山に今朝しくるらん

夕時雨

この比はゆふへの袂空の雲秋はなみたもしくれさりけり

艸菴にて題をさくりて哥よみ侍しに時雨

夕まくれわれゆへ袖のしくるともしらてや空の雲は過らん

時雨雲

跡もなき時雨とみれは夕くれの袂に歸るやまのはの雲

閑居にて五十首哥よみ侍し中に朝時雨

あさからはぬるゝいく夜の露よりも一時雨にやたえす散覽

谷落葉

道たえてはらふ人なき谷の戸の夕日かくれにちる木の葉哉

霜埋落葉

吹たむる木の葉を庭にみたるそと嵐や霜にとちめをきけん

枯落葉

山河や瀨々の紅葉のうきはしを空にもわたす峯の木からし

三十首哥の中に木枯

をのれとも散もみち葉を木枯のいつ吹そめて名には立らむ

おなし三十首に水氷無音といふ事を

なかれつゝ水もしらへし琴の音の緒をたつ計りいつ氷らん

寒草霜

白妙の花ふりはへて神垣やくすのかつらもゆふかつらせり

冬　月

すさましき光もつらし冬のよの月に我世のかけやそふらん

ひとゝせのうつりかはりて近る夜は霞も霧も月にさひしき

しろたへの光やふすま夜を重ね月におほえぬ闇（岡イ）の山かせ

湖千鳥

とひ捨し名殘やつらき小夜千鳥あさつま山の陰に鳴也

越後にて哥讀侍し中に海邊千鳥を

たちうかれ夕鹽みては汀さへ興津河原に千鳥鳴なり

千鳥の歌のなかに

なにことをうらみわたりて濱千鳥もに住虫の音を忘るらむ

さよふけて鹽風わたるあしのはのしなへうらふれ千鳥鳴也

水　鳥

三十首の中に水鳥多といふとを

みなと川夕しほ見ては山のはに渡るもさはくあちの一むら（村鳥イ）

冬　海

鷗うく入江にみすやあしかものさはく中にも靜かなるよを

なみ風の心にも似す冬の海を長閑に渡るあまのつり舟

霰

小笹原ひろはゝ袖にはかなさも忘る計の玉あられかな

朝　雪

つもるかとおき出てみれはさえし夜の月より薄き峯の初雪

三十首の哥よみ侍し中に雪朝望

朝戸あくる袖にさえきてあらち山はらふ計のみねの淡雪

殘雪

庭はまたはまゆふはかり降雪にいく重たかねの遠のしら雪

池邊雪

白妙の山をうつせる池水はみ草そ雪のたえま成ける

遠村雪

いつもみし外山の里を朝ほらけ雪にそおもふ誰かすむらん

野外雪

としのうちにみし色々の白雲のたつ野と成て雪そつもれる

越後にて讀侍し哥の中に礒雪

浦かせは鹽ひにさえて礒の松梢の雪に波そくたくる

海邊松雪

いかにせむ春の海邊も忘れねと雪のあしたに住よしの松

爐火

冬の夜はたく火を友とおる枝の心つよさも老そ悲しき

閨埋火

埋火も螢はかりに更るまのね覺は夏の幾夜をかへし

爐邊閑語

かきつくしかたれはむねの埋火も消て夜深き床のさむしろ

鷹狩

山高み鷹ひきすへて狩衣すそはのとたち今やとそまつ

たつ鳥に心もやらぬ箸鷹のみえぬつかれをいかてしるらん

一よりにやかてとりかふ箸鷹のその振舞そみぬもしらるゝ

歳暮雪

ひとゝせの過行道はかきくらし雪の積るそ猶しるへなる

又はよもと思ひし昔のとしの暮にめくりあひて七十にむかへる比つれなさにならひてたのむ心の侍るをなけきてよめる

かきりそと思ひし暮はめくりあひぬ頼むや年の果にも有覧

歳暮

網代木にいさよふ程の暮をたに年やはみせぬうちの河浪

いひもあへす移るは年のあた波をはかなく袖にせく氷かな

戀

初戀

見初ても程は雲ゐに夕月夜ほのめかすへきたよりたになし

閑居五十首哥のなかに寄雲戀

人しれぬきはゝ思ひも中空にかゝらて消よ夕くれのくも

寄露戀

儚くや秋にもかけむわかうへにをきそめし夜の露の恨を

忍戀

思入しのふの里はあさくともいつくの山をなをやたのまむ

忍親眼戀

かゝる嘆きありとはみえしその原やふせやに生る影も耻し

言出戀

夏虫のいはぬ思ひをそれとたにしられは何か聲もゝらさん

三十首哥中に戀雲

名にたかき岩木の山を君としもなと白雲のかゝりそめけむ

おなし三十首に戀煙

夕けふり遠近人も哀しるおもひをよそに君のみやみむ

寄煙戀

われとやはけふりをたゝん君にこそ思ひけたるゝ思成とも

跡もなき煙とやみむ戀しなはよゝにもゆへき胸のおもひを

不逢戀

難面にかへてや消む朝露のはかなきなからうけかたきみを

永からぬ命の内をかたいとのこなた彼方に世をやつくさむ

祈不逢戀

しるしなきみそきに袖はぬれ増る神も心になみやこすらん

越後にてよみ侍し哥の中に祈戀を

とにかくに祈りそわふる戀せしもうけぬ誠を神にしらねは

隣仵所戀といふことを

家しあらは猶たつねみむ玉鳥や人のこゝろの秋の河きり

草庵にて哥よみ侍しに通書戀

ひと筆のみえはや心言葉をつくしていはゝかきりもそなき

待戀

たかならぬ哀も待はつれなさにはかなや人をうらみつる哉

時ならぬあらましにのみ待事をけふとて頼む夕くれもかな

戀　日

つらからん夕を空にいそくやとたのめぬ中は曇る日もなし

寄月戀を

おもひたえむ限あらはそこぬ人の待るゝ月を恨みてもねん

三十首歌の中に戀月

さしこもる心ゆるひもなき夜半の恨をいかて月につたへむ

戀　風

吹風に身をなすとてもいかゝせん心の松の人にみえすは

五十首の哥よみ侍しに

日暮れは心ほそくも身にそしむ松にかゝらぬくすのうら風

忍逢戀

待ふけぬきかし誰もとかたる夜の月をいかなる人かみる覽

袖におちむうき名やとらん夢はかりみし世の床の山河の水

老後三十首哥よみ侍しに寄紐戀

うつろはむ物としならはあたし野の花の下紐なにゝとけけん

宗匠家月次三首に疑行末戀

憂身にはか計やはとその葉にかゝるにたのむ行すゑそなき

艸庵月次會に憑誓言戀

儚しや千々の社にかけすともたゝ一ことにみえむまことを

越後にてよみ侍し哥の中に依忍久戀

猶幾夜としを渡らん行河もありてはみえぬ人めつゝみに

後朝戀

朝ほらけうはの空なる雲をたにかたみにとめぬ夢そ儚き

五十首哥の中に寄枕戀を

はかなくていはすやなりし枕にもしらせ置へき今朝の思を

三十首哥の中に戀塵

跡にたゝむ名をし思へはわか心塵をいつとも猶やみたれん

寄虫戀

人はたゝわれかとおもふ心たになくてや聞かん松虫のこゑ

老後三十首哥よみ侍し中に寄山鳥戀

戀わひぬあらはいさめむちゝ母の遠山鳥の音をのみそなく

寄都鳥戀

いつかきて影をもみせし都鳥涙の川は水かさまれと

寄獸戀

契あれとみなれはそれもうしとてや告むる犬にかとよす覽

寄鏡戀

なにかおもふたとへは君か俤も鏡のうちのかりのかたちを

寄木綿戀

うれへをは身にとりかけてゆふかつら長くや人の思放れむ

寄船戀

まほならぬ人の心のからかちはとにも角にもとりそ煩らふ

藤原國雄許にて哥よみ侍しに夏戀を

恨しよさても思ひは晴れやらぬ五月雨髪のゆふかひもなし

草庵の月次會に絶恨戀

猶しはし覺さらましをぬるかうちに思ひかけきや夢の浮橋

寄身戀

をそくとて此身をうけは人にやはあふは別の世をも歎かん

寄心戀

忘れなむうしとて人を一かたにうらむるのみや心なるへき

寄忍草戀

忘れ草人したつねは岸もなくみつ鹽さそへそての浦かせ

恨戀

よしさらは憎しともいへ其をたに恨ところのある人にせむ

雜

攝津國の閑居にて五十首哥よみ侍し時曉述懐

さそひ捨て山のはちかくなる月に老は幾夜か涙かくらん

浮島の松を見侍し曉

難面てあはれこの世のなみのうへにたてるや誰も浮島の松

老後草庵に松をうへ侍し時よめる

引植し松によはひをゆつりをきて苔の下にや千世の陰みん

遠村竹といふ事を

山陰や竹一むらにかこはれてすむ世のほとに誰としらねと

名所鶴

徒にあけぬ暮ぬと老か身はうねのゝ田鶴の音をのみそ鳴

古寺鐘

夢さそふ鐘は麓に聲おちて雲に夜ふかき嶺のともしひ

夕まくれ遠山寺はそこともし見えぬ木するに入あひのかね

山家經年

うへし世はわすれ草生る山里の軒はゝ松のかけおほふまて

山家夕

夕暮はぬるとも袖に山深み世のうきにたにならひこし身を

山家の哥の中に

をのつからうき世をしらぬ山賤そのかれて後も羨まれぬる

心より老こそたより山里に住はてぬへくおもひさためは

草庵にて侍し會に山家水

たえぬなかれとまらぬ水のいつれをか我住山の行末にせむ

おなしこゝろを

むもれてもすめは住世をわか庵におもひもならへ苔の下水

田家水

小山田のかひやの光ほの〳〵とかすみそ渡る遠のさはみつ

三十首の哥の中に樵夫歸

儚しやたきゝつきなん夕をは思はてけふもかへる山ひと

白影の讃

うつしをくも我影なから世のうさをしらぬ翁そ羨まれぬる

遣唐使餞

船出せは心をぬさの追風に吹もかはるなもろこしのそら

遠所へくたり侍し時宗匠禪門二樂院なと餞別のよしにて訪におはせし時題をさくりて哥よみ侍しに旅行

心をやせめて都にとゝめをきて行衞なきみを待人にせむ

おなしこゝろを

たれをしもこふる都そ住なれし名殘はかりの涙ともなし

源盛卿許にて旅宿思都といふ事を
旅ねともおもはすしはしうつる夜の都の夢は峯の松かせ
五十首哥の中に野旅
しらぬ野へあらぬ庵もやとるまの契おもへはふる郷もなし
本能寺にて宗匠わたり玉ひし時の會に旅宿
たれとなき都のこゝろをあしかきのちかき旅ねに哀とそきく
旅宿雨
嶺たかみ椎の葉そよく夜の雨に家に在ともやすくやはねん
羇中雲
いつくとも又も眺めむ古郷のかたみの雲はやまかせそふく
羇中嵐
身こそ猶行ゑもしらぬあらしにも雲は宿かる夕暮の山
筑前國芦城山を越侍しにたくひなくさかしき道すか
らつゝけ侍し
世中はあらき山路に殘る駒のふみもさためぬ物を社思へ
筑紫の大島を通侍しに千鳥のいたうなくも浦かなし
さまさりて
濱千鳥こゑうちわひむ大島の涙のまもなくたれを待らん
三十首哥の中に海路暮
しら雲の八重の潮ちを過きてもまた夕浪のうきねをやせむ
旅泊のこゝろを
湊風さ夜更ぬらしうきねする由良の笘やに月かたふきぬ
筑前の蘆屋といふところに泊侍しになたのしほやと
いへるよりもおもしろき渡なれは夜もすから月を見
侍りて
朧やかぬあしやの秋は哀なる月にけふりやいとひそめけむ

秋のよ更級に旅ねして侍しに見し夜の月は光なきこ
ゝちし侍て
いつくにて月を哀と思ひけむおは捨山のありあけのそら
つくしにて哥よみ侍しに旅泊の心を
なかめつゝ月より西におもひやりし旅ねも馴ぬ有明の空
宗匠月次三首會に殘月越關
見つゝこし不破の關屋のさひしさそ槇たつ山の月に殘れる
木丸殿の舊跡荊萱の關を越るとて
數ならぬ身をもいかにと人とはゝいかなる名をか荊萱の關
白河の關を越侍しに能因法師此關になこりをとめ侍
しことを思ひて
行末の名をはたのます心をやよゝにとゝめんしら川の關
於村松十首詠哥沓冠置名號
なかめやる一村松の木間よりたくひなみまによするふね哉
村〳〵に霞そめぬる松のはの色や眞砂の山におとらん
このまよりしはしやすらふ月影をまつ陰悲しかりふしの床
くれて行春のけしきや眞砂山かすみはかりのうら風そ吹
うつるらし春をもしらぬ松かえに磯うつ波の花そうつろふ
さゝ浪や夜のまくらに聲そへてむすひもあへぬ夢の悲しさ
海原や舟の行衛もしら浪の哀うき世のわれそたゝよふ
ほしあへす月そやとれる心あれと蜑の袂にかゝる夕しほ
さひしさはいとゝまさきの海の波かへる昔の跡のあはれさ
釣垂るあまの小船の哀れ世をたゝあらましのけふも暮しつ
文明三のとし東下野前司常縁より古今集傳受の後年
をかさねて相傳のうへに猶のそむとありてたてまつ
りし長哥

久かたの　あまのうき橋　するとをく　たえせぬ世々の
ことわさは　いつれの道も　かはらねと　猶しき島の
やまとてふ　ことの葉のみそ　たくひなき　かゝるやあしの
身にしあれは　雲井にみゆる　ふしのねの　およふたよりも
なかりしを　そこゐしられぬ　わたつ海の　深きめくみの
しらつゆを　我かけそめし　道しはの　かれすもおもひ
なけきつる　年の数さへ　すてにはや　五とせ六とせ
過ぬれは　猶いたつらに　そはりゆく　老木の松の
おもほへす　かゝる嬉しき　春にあひて　いま一しほの
ことの葉を　きくかうへにも　我たのむ　神のおまへの
榊はの　さしていたらん　道をおしへよ

反　歌

身にあまる露をはしらて天雲の心たかくは君いかにせむ

老後三十首哥よみ侍しに述懐を

言の葉の道こそうけれさらてやは心のきはを人にしらせむ

述懐泪

捨やらて世のうきたひにこほれてふ涙は心あるかひもなし
ひたすらに世の理もしらぬ身とみゆへきものをうき涙かな

述懐の哥の中に

思へ共人をはいはぬことはりに猶身の上のしられぬるかな
世の憂にたへぬこゝろの誰ならは深き山にも身をなけく覧
等閑に世をは捨しと思ひこし心ふかさそ人におくるゝ
よしや身は跡なき夢と思ふたに憂にはたへぬ世こそ有けれ
よしあしのたかひに變る世成せは定めなく共身をや頼まん
沈み行みくつも何かつらからんうかふも泡のきみを待まに

老後述懐

しらさりし世の理のよしあしを思ひわくさへ老そ悲しき
老ぬれはうき世の友もかれ行を厭ふに悲しやとりとやせん
行末の浮世を遠くおもはぬや老の辛さのやとりとやせむ

雜の哥の中に

ものをのいのるにかなふ習あれは誰かうき世を恩しらまし

宗匠(家イ)月次會に懐舊

おもふへきむかしもなきみ折〳〵の涙は何をわすれさる覧

寄月懐舊といふことを

みるたひに俤たちぬ忘るなと月に昔の人や契りし

思往事

昔いかに我みし程の此世たにかゝるをやはと戀しき物を

東に侍し比たのむかけとも思ひし人頬しかはその氏神に祈なとし侍しその歸るさにむなしく身まかりけるよしを聞て

きのふまて千世もと祈る人をしも佛にたのむ道そかなしき

上杉民部大輔定昌逝去のよし聞てこしちのはてまて下り六月十七日かの墓所に詣て侍しにいつしか道の草しけくなりしを分暮してかへるさに

君忍ふ草葉うへそへ歸るさの苔の下にも露けくやみん

程なく文月十日比かへり侍し道に觀音のおはします堂にとまりてかの名號を句のかしらにをきて哥よみ侍し中に

瀬にかはる世をはや河のみなれ棹さして迎へよ岸遠くとも
さま〳〵にかたちを分る誓あらはうつゝにみする俤もかな

常德院殿光かくれおはしましぬるよしを草庵に折ふし人〻あつまりて哥よむほとにつたへ聞て花といふ

題にて

すゑの世のあらき風をも治むへき人なと春の花に散らん

　おなしころ西のくにへ下り侍に明石の月くもりてい
たつらなる夜この君の御哥にかゝみ山とおもひしと
もなとあそはされけるとをおもひいてまいらせて

鏡山光かくれしおもひにやあかしの月も猶くもるらん

　おなし君のおほむ周忌に懇志のあまりに法華の四要
品をすらせて宗匠をはしめ結縁をたのみ申侍しとき
懐舊の哥に

けふにやはあらぬとめくる月も日もそのよそ夢の春そ悲敷

　同し第三回の御佛事のころ入道政行朝臣廿八品歌人
人すゝめ侍し中に常不輕品を

くるしくもおこなふ道よ曉のあらしにわふる法の師のこゑ

　おなし時の懐舊に

おとろきしそのよの夢の春のかせをとしも花に恨てそ吹

　釋教

かくとたに御法にとをき身をしれは猶墨染の袖そぬれそふ

迷ふ身の爲とてとける道ならは御法の末の世ともおもはし

鷲の山ひろふ木の實のたねよりやかゝる御法の花も咲らん

　細川京兆すゝめられし太神宮法樂百首の中に山眺望

いすゝ河しらゆふ花の浪のうへに神ちの山はかすみ棚引

　筥崎の松原のいつれとなく神さひたるをみて

一木にはいかにさためし筥崎の松はいつれも神のしるしを

　住吉の社にたてまつりし歌の中に

あはれとも神そしら波瑞籬やたのむ老木の松の朽葉を

　寄月神祇

にしの海にのこる光を古鄕の月とやしたふすみよしの神

　高つの人麿に三十六首の哥たてまつり侍し中に寄道
祝を

末の世になりてもむかしありきてふ人をそあふく敷島の道

　五十首哥のなかに寄松祝

あへてあはむ草木やしるへ折のこる心のまつに御代の春風

　右宗祇集一卷以百花庵宗固藏本書寫一挍畢

羣書類從卷第二百七十一

和歌部百廿六　家集四十四

嘉喜門院御集

春

白雪の猶かきくらしふるさとのよしのゝおくも春はきに㒵

としなみのすゑの松山たちこえて又あら玉の春はきにけり

ものをにあらたまれとも春をへておなしねにのみ鶯の鳴

とふ人のあとこそ見えね庭のおもに積らてきゆる春の淡雪

きえやらぬのはらの雪をふみわけて若菜摘にといつる里人

春なからふる白雪の下きえに絲をいそくのへのわかくさ

たつねても我をは誰かとひもこん植てかひ有やとの梅かえ

新葉春上　いそのかみふるのゝ草はゆききえてみとり色そふ春雨そ降

いきうしと思はぬ旅の空なれや人やりならぬ春のかりかね

花とみてまつ日かすをやなくさめん櫻にかゝる峯の白雲

春下　尋ねつゝわけ入まゝにさく花の匂ひも深しみよしのゝおく

櫻花さきてとくちるならひこそ我身の春のものおもひなれ

あふさかや嵐の風にちる花をゆくもかへるもおしむ春かな

春下　嵐ふき花ちるころはよのうきめ見えぬ山ちもかひなかり㒵

咲そめしそなたは風にかつちりて殘るかたえに花そ少なき

正平廿三年（後村上）世中りやうあんに侍し比この春移しうへられし櫻の散たる枝につけて内（後龜山）の御方より

植置しむかしの人のかたみとて手折櫻はおもかけもなし

御返し

かたみとてたをる櫻の花たにも散てあとなき色そかなしき

天授二年（後龜山）やよひのはしめつかた如意輪に御こもりありし比御影堂のまへの花につけて内の御かたへ奉られける

こゝのへに色そへて見よむかし思ふみのりの庭の花の一枝

御返し

なきかけを花によそへてしのへ共是もあたなる色そ悲しき

花にたに心はそめし遠さかる春のわかれのうきにつけても

還御のついてに入内ありしに花のこずゑとも殘なくさきてあたら夜の月のひかりもおりをえたるやうに侍しかはこよひはこの花のもとにあかさるへきよし申され侍しかともいそく事ありてくわん御ありしかはつとめて花を一枝まいらせらるゝとて

雜上　おしむにもよらぬ別は憂ものと君ゆへ花やおもひしりけん

御返し

同
あかすして別れしまゝにとゝめを（ととめ集）きし心や花をさそひきぬ覽

物思ひなき世の春もをのつから袖にかすめる月のかけかな

住の江の松はふりぬる色なれとわかむらさきにさける藤波

春下
暮てゆく春のなこりといはねともまかきにしるき山吹の花

ふく風のめに見ぬ方にさそはれて花とともにや春も行く（の集）覽

夏

なれたにもしはしかたらへ時鳥よの人をはうき身なりとも

夏
あし引の山たちはなれ時鳥をのかさ月はさとなれて鳴（にけり集）

正平廿三年五月五日としとしのしきなとやおほしめしいてけん一ほん（新宣陽）の宮より

哀（けふ集）
今はまたあやめの草にひきかへてうきねのか（そ集）ゝる椎柴の袖

御返し

同
思はすよあやめもしらぬ墨染（しゐしは集）の袖にうきねの懸るへしとは

あまのすむ里のしるへの烟たにたえてほとふる五月雨の空

年へぬる宿のふる木のたち花はいくそのかみのかに匂ふ覽

難波かたあしのしのひの數そひてもえつゝとふや螢成らん

蟬のはのたゝひとへなる衣てのもりてすゝしき月の影かな

松の風いはもる水のをとまても秋にすゝめる山かけのいほ

みそきするなみのしらゆふ秋かけて川風すゝしみな月の空

秋

から衣たもとすゝしく秋風のたつ日よりこそ露もをきけれ

なつ衣うすきたもとにふきそめて哀しらする秋の初かせ

七夕のくるゝまつまにさきたちて秋風わたる天の川なみ

やよひの夢のうちは絃をたちけんいにしへのためしならねとなにとなき御あそひも物うくて年月ををくられ侍しに天授三年七夕の御樂ありしかは御ちやうもんのために入内ありしついてにそのかみのことなとやおほしめしいてけん御樂はてゝ後御ひははかりにてたひたひすゝめ申されしかは小樂ともせうせうあそはし侍しにとしとしの御たむけおりおりのものゝねなと過にしかたの事物哀におほしめしつゝけらるゝよし申されて

雜下
このまゝに絶（かくてのみ）すきかはや雲の上に（そのかみの秋おもひ出ゆる集）むかしをのこす峯の松風

御かへし

同
あはれとも君そ聞けるいまは世に（はや集）ふきたえぬへき峰の松風

つきの日夜部のしきなと申されたりし御かへりことのついてに東大寺のねはかりそむかしにもかはらぬ心ちしておほしめしいたさるゝをおほく侍しまゝになを心つよくものかれ申されさりしくやしうなと申されて

四のをのしらへにそへし松風は聞しにもあらぬねにや有劒

さらにまたなれし其世そ忍はれしかきなすをのねのみ流れ

御かへし

松に吹風はむかしの秋なからなかはの月やおもかはりせし

はかなくて過越秋や忘られんかきなす琴のねにしたてすは

をしなへて秋のゆふへは露そをく哀しるへき草葉ならねと

秋上
風ふけはぬきも止めすさゝかにのいと亂れつゝ置ける白露

はきか枝にをけらん露の白玉をはらはてみせよのへの秋風

のへとをみおはなか末も打なひきのとかにわたる秋の夕風
なにとかく秋のあはれをしりかほに夕は袖になみたそふ覽
　正平廿三年八月つねよりもあはれなりし夕暮に春宮
　（昇慶院）の御かたより
おもひやれ同し空にやなかむ覽なみたせきあへぬ秋の夕暮
　御かへし
せきあへぬ涙のほともおもひしれおなしなかめの秋の夕暮
秋下
ときはなる名にはならはて松虫のよな〳〵霜に聲のかれ行
きり〳〵すみなしもかれのあさちふに露の命や消のこる覽
暮て行秋やかなしききり〳〵す聲の限りはなきあかしつつ
よそにかく涙もよほすつまそともしらてやしかの獨なく覽
つまこふる野へに心のあくかれてをしか鳴なり秋のゆふ暮
古郷の雲井はるかにけさきなきいまた旅なるはつかりの聲
いとふへきくまこそなけれ澄渡るはまなの橋の夜はの月影
まつらなるたましま川のきよきせに光をそへてみかく月影
おもひやる都の空のおもかけもおなしなかめの秋の夜の月
すみよしの松の秋風よさむなる聲うちそへて衣うつなり
さと人もくるゝ夜ことに秋風の身にしむ比ところもうつ也
明渡るをのへの松はあらはれて霧にしつめる秋の山もと
しら露の色もひとつに咲菊の花はいつよりうつろひぬらん
　けんとく（建德）二年（後龜山）なか月の末つ方ひはの大な
　る枝につたの紅葉のかゝりたりしをわきてそめける
　もなにとなく御めとまる心ちしてとて女御殿よりま
　いらせられたりし御返事に　冬集
秋下
君かはや秋の宮井にうつるへきほともゝみちの色に社しれ
　と申されたりし御返事を内の御かたより
同
ちらて猶秋は千とせにめくるともはこやの山の峯の紅葉は（の秋も色そへよ集）
　又たち返り
その葉の色をそへすは露時雨そむるもみちもかひやなか[illegible]
ゆく秋や道まとふ覽紅葉はのちりかひくもる山のあらしに

冬

冬
あし引の山かきくもり神無月けふもいくたひ時雨ふるらん
冬
かよひこしあとは木のはに埋もれて嵐にたとる山の下みち
なにはえや汀のあしのよもすから結へる霜をはらふ浦風
あまつ空雲のみをゆく月影をこほれる袖にやとしてそみる
かたしきの袖にたまらぬ白玉はねやもるよはのあられ成覽
降り積るほともしられて拂はねとをのれとおつる松の白雪
　ふん中（後龜山）二年霜月廿日比雪いたうふり侍し日こ
　その冬あさのにて御らんせられし雪のしきなとおほ
　しめしいつるよし申されて
かきくらす嶺のしら雪それなからともにみし世の俤はなし
　御かへし
思へ只とふにつけても降る雪にみし世を忍ふけさの詠めは
おしと思ふとしもはやくゝれ竹の一夜のほとになれる春哉

戀

いかにして心のうちにせきとめんうきなゝるへき袖の涙を
隱しつゝうきにたへなて戀しなは後の世迄や苦しからまし
うかりける契のほとも錦木のちつかの後そ思ひしりぬる
戀二
行末を猶やたのまんなみた川なかれて後のあふせありやと

おもひかは涙の淵に沈む身はあふせもしらぬ物にそ有ける
僞もさのみはよもと思ふこそ又このくれのたのみなりけれ
あふまてとおもひし物をあか月の又きぬ〳〵にぬるゝ袖哉
たちかへり袖ぬらせとも契きや我中川のみつのしらなみ
はかなくそ人の契をたのみける我僞りもしらぬならひに
おり〳〵の辛さを何か歎きけん忘られてたにあられける哉

雑

難波江や蘆邊をさして行舟のいやとをさかる波のをちかた
雲かゝる山の幾重をわけすてゝ宮こをよそにへたてきぬ覽
淋しさはまたなれさりしむかしにて松のあらしにすむ心哉
山蔭のしはのいほりの淋しさをうき世にかへて誰かすむ覽
昨日といひけふと暮してあたし世を只等閑にすくす儚さ

正平廿三年侍臨ゐ御所よりあはれなる事とも申され侍し御文のついてに

おもひやれ見しおもかけもかき暮てなき人こふる袖の涙を

御かへし

かきくらす涙ときくにいとゝ又ほさぬ袂をぬらしそへぬる

めう(妙イ)いさう院の方丈より御とふらひなと申され侍し御文のついてに

いまさらにぬれそふ袖の涙哉昔をかけておもふあはれに
夢とたに思ひもはてぬはかなさにさむるうつゝも嘸迷ふ覽

御かへし

人しれぬなけきのほとは思しれむかしをかけておつる涙に
夢とたにおもひもはてゝ悲しきはさむるうつゝの別なり覽

その比よるのつるといふさうしこの所に侍しを右のおとゝ申いたされて返しまいらせらるゝとて

昨日はとひけふはとはるゝ仇し世の夢の内なる夢そ悲しき

御かへし

仇し世の習ひはさそとしりなから猶背かれぬ身を歎きつつ
惠あらは猶行末もおなしくは變らすまもれかすかのゝ神

此御歌とも再三見まいらせ候ぬ。さきにも關白のもとへ申つかはして候ことく。御哥ともに殊勝に候程に。いつれをもらし候へきにて候はねとも。又あまりに無念なるへきやうに候ほとに。墨をつけまいらせ候。これはみな〳〵集に入申候へきにて候。たひたひ申入候へるに。かなひ候ましきよし承り候て。すてに面目をうしなひ候へきにて候つるに。いたされ候ぬるのみならす。一見仕候つるより先たゝ感涙さきたちて。とかくのせひもわきかたく候なから。この松風の御贈答まめやかに。目をおとろかし心をまとはし候ぬる。代々の集ともにも。おそらくはかゝるたくひはすくなくそ候はんすらむとおほえさせおはしまし候。大かたみとりをいそく雲の下さえより。さむるうつゝのわかれにいたるまて。墨つけて候ふんは。とに〳〵あはれにもおもしろくも。一かたならすおほえさせおはしまして候。これほとにつもり候ける物を。たゝ山かけの紅葉にてのみ。三吉のゝたにふかくうつみをかれ候ける事。まめやかに〳〵あさましく口惜覺て候。我なからおそれをかへり見候はて。たひ〳〵申入候ける事。いまこそかしこくそとうれしく候へ。このうちきゝも人ことになにと

やらん申けに候とうけ給り候へとも。かほをそはになして老のあやまりもわすれはて候を。一すちに數奇のあながちなるゆへにて候へは。冥の照覽も候はんすらんなと覺候つるに。しかしなから住よし玉津島の大明神の御道びきにてかゝる事も思立候けるとまて覺候て。いまはとひたつはかりにこそ候へ。かやうのをの葉ともひろひをき候ぬれは。をに〳〵新葉の色ふかく行末までの跡となり候はんすると覺て候。なを〳〵松風の御哥とも。たゝ身にしむはかりにても候はす。ひまなきまてさそはれし。袖の時雨もをはりすぎ候ぬる。此たひの御ゆうなとは。たゝ大かたにのみひゝきわたり候へるに。我身ひとりにかきり候て。たへかたく候。袖のうへはその御ふるをゝもにひきなされけるゆへとおほし。半の月の御面影ともゝ。むかしより猶むかしさへおもひいてられ候ぬる。松風をそのふるをゝきゝなして袖の時雨の日まもなきかな。くもりなきなかはの月の影をこそ。たた君か代のためしにはひけ。申すこし候ぬる心ちして。とめ候ぬる。

詠三十首和歌

春五首

早春霞

今朝よりは春立ぬとや足引の山をしみれは霞たなひく

澤若草

雪きゆるさはへの水のあさ風になひくほとなき春のわか草

曉梅

心をは色にもかにもそめはてつ軒はの梅にありあけの月

花滿山

雲とみえ雪とまかひてよしの山峯にもおにも花は咲けり

江上暮春

難波えやあしまの小舟こきかへし暮行春もしはしとゝまれ

夏三首

澤卯花

谷深きしつかいほりのうつき垣花さけはとてとふ人もなし

野郭公

月出ぬ山へかへらてほとゝきすの中の森にしはしかたらへ

雨後鵜川

かつら川うふねのかゝり影見えてたゝ一とをりすくる村雨

秋五首

月前萩

とへかしの人は音せて下おきのするゑこす風にやとる月影

夕虫

わけ行ははや聲たてゝ夕つく日さすや岡への松むしの鳴

海邊鹿

月のこる磯山かけに鳴鹿のこゑにはぬれぬあまのころもて

閑庭薄

露ふかみのとなる庭のむら薄人こそわけねあき風そ吹

名所擣衣

すまのあまのまとをの衣ぬきかへて纏くまぬよや月に打覽

冬三首

朝寒蘆

うら遠く鹽引はてゝみなと江の蘆の枯はにのこる朝霜

深夜千鳥

風さむきまのゝ入江はさよふけてうつらも涙に千とり鳴也

古鄕雪

すきやらてしはしはこゝに眺めてんたかふる里の庭の白雪

戀五首

聞聲戀

かひなしや人の氣配もたゝそれと聲きくまての中川のやと

稀戀

折々のとひ葉をたに留めすは何につけてかかこたやらまし

增戀

さても身のありしにまさる心哉人のつらさは思ひしれとも

恨戀

おほよそはさも社あれと思へかし我身をしらぬ恨なりとも

被忘戀

かはらしの心ならひにまたるゝよ忘れはてぬと人は思ふに

雜九首

旅行

わけすくる山また山のしら雲に猶ふる鄕やへたてゆくらん

旅宿

憂なからこゝも旅ねと思はすは暫しもかくて我やすむへき

旅泊

舟とむる磯邊の浪のうつゝにも夢にもうとき都なりけり

山家松

さらてたに物のさひしき山里の軒はの松にさるさけふなり

山家橋

山深みひとり眺めて淋しきは日もくれ渡るそはのかけはし

山家苔

をのつから心やすめる山里の岩にこけむす庭のやり水

寄神祇祝

代々かけて神や守覽わきて我たのむきたのゝ松のしらゆふ

寄水述懷

いつ迄といはかき沼の木隱れてよに現れぬみつからそうき

寄雲述懷

身をかくす人もこそあれ雲ふかき山の奥迄たつねてそみん

齋宮女御集

ちかきほとにわたらせ給てをとつれきこえ給はねは
　女三宮より
へたてけるけしきをみれは山吹の花心ともいひつへきかな
　おほんかへし女御（四ィ）
いはぬまをつゝみしほとに（はイ）山梔の色にやみえし山吹の花
みかと（ィ上）村雨におとろかせ給ていそきわたらせ給
しに
雨ふらはみかさの山もある物をまたきにさはく雲のうへ哉（人イ）
　女御殿うせ給てさい宮の御とふらひの御かへりさい
宮
かけみえぬ涙のふちは衣てに渦くあはのきえそしぬへき
　まうのほらせ給へるにうへの御とのこもりたるほと
なれはたゝにおり給てつとめて
（新古）隠れぬにおふる菖蒲のうきねして果はつれなくなる心かな
　後にうちよりまとをにあれやときこえさせ給へる御
かへりに
（新古）なれゆくは浮世なれはやすまの海士の鹽やき衣まとをなる覧
　おりしらす女御
もしはやく煙になるゝあま衣織そたひかは袖のぬれける
　又御かへりに
歎くらん心をそらにみてしかなたつ朝霧に身をやなさまし
　うへのひさしく渡らせ給はぬ比秋の夕暮にきんをい
とめてたく引給にうへしろき御そのなよゝかなるを
たてまつりていそきわたらせ給て御かたはらにゐさ
せ給へと人のおはするにも見いれ給はぬけしきにて
ひき給をきこしめせは
秋の日のあやしきほとのたそかれに荻ふく風の音そ聞ゆる
　ときゝつけさせ給へる御心ちなんいとせちなりしと
そ御日記にはありける後にまうのほらせ給へると聞
えさせ給へとさもあらぬにを人をなときかせ給てつ
とめて
鶯のなく一こゑにきけりせはよふ山人やくやしからまし
　いかなるおりにかありけん御すゝりに入給たりける
かはと見てかけ離れ行水の音にかく數ならぬ身をいかにせん
　おたし比
いかてなを春の霞に成にしか思はぬ山にかゝるわさせし
　うへより御ふみのありける御かへりに
うすらひにとちたる冬の鶯はをとなふ春の風をこそまて
　ふくにおはしましけるにさとにて内よりまとをなる
御ふみに日ころおほしあつめたるとをてならひいや
うにてたてまつらせ給へりける
立くもるさほの河霧あれすのみ日たけぬ空に程のふるかな
　つゆもひさしき（玉葉集）
（後拾）吹風になひく淺茅は何なれや人のこゝろの秋をしらする（は集）
　たれにいへとか
しらなくに（すなよイ）忘るゝ物は覺束なもにすむ虫の名にこそ有けれ
白露のきえにし人の秋まつとときよのかりも鳴てとひけり

いはんかたなのよや。めのみさめつゝ
里わかすとひわたるなるかりかねを雲井にきくは我身也凫
たくひあらしかし
うらみつの濱におふてふ薦しけみひまなく物をおもふ比哉
あらしわか身を
眺する宮にもあらてしくるゝは袖のうらにも波はたつ覽
あはれのさまや
新古 ほのかにも風はつてなん花すゝきむすほゝれつゝ露に濡共
かきりなりけり
續後拾 秋の野の萩のしたねになく虫の忍ひかねてはほに出ぬへし
見くるしのさまや。れいの山ふところ
谷河のせゝの玉もをかきつめてたかみくつにかならんとす覽
いかなる事かありけん
さかさまにいふとも何か幸からむ返す〳〵も身をそ恨むる
すけなりかむすめ。はるまいらんときこえて。ある
男につきにけりときゝ給て
むすふ人ありける物を冬川のはるくる風とおもひける哉
れむせい院の池にうき草のあるをおほしみたるゝ比
にやありけん
玉葉 身のうきにいとゝ浮たる浮草のねなくは人にみせしとそ思
おなしみやにてむかひたる西のたいにほりかはとの
ゝ北のかたすみ給より
花すゝきほとたに遠き物ならはゝ音せぬ風もうらみさらまし
御かへり
いつかたの風にか秋はかよふ覽人しれすのみ靡くおはなを

又野分したるつとめてきたのかた
玉葉 ちかき野の野分はをともせさりきや萩ふく風を誰かきく覽
御かへり
はひこれる葛の下ふく風の音も誰かは今はきくへかりける
又北の方かたゝかへして歸り給へる又の日
いかてかは人は開けむわか袖は露をくのへにをとらぬ物を
あめのふるに三條の宮にて
拾 雨ならてもる人もなき我宿は淺茅か原とみるそかなしき
東三條院にて
玉葉 我ならて又うちはらふ人もなきよもきか原をなかめてそ降
内にて御まへのふちをなんしのひてこく人ありとき
かせ給て
朝とにうすとはきけと藤の花こくこそいとゝ色まさりけれ
ちゝ宮(重明)のおはしけるときに。はゝうへの御かた
ちなとを。いまのきたのかたのかたりきこえ給ひて
御くしのめてたかりしは。またあらんとて。とりた
てまつらせ給けれは
かたもなく成にし君か玉鬘かけもやするとをきつゝをみん
とてたてまつらせ給ふ。ちゝみやうせ給て又の年の
正月一日
いむなれとけふしも物の悲しきは年をへたつと思ふなり凫
雪のふる日心ほそきに
はかなくて年ふる雪も今みれはありし人にはをとらさり凫
まゝはゝの北のかた
見し人の雲と成にし空なれは降雪さへもめつらしきかな

むまのかみのはらから少將のみやつかへすへしとき
かせ給てすきゝれのとの給へは少將
數ならて梓のそまに立ぬ共すきのもとをはいかゝ忘れん
御かへし
わすれしといふにもよらし三輪の山杉の本には雨もゝり晃
前たいの御そふに御てつから物かゝせ給へるものと
もをむまのないしに見せにつかはしたりけれはうへ
の見せんとの給はせしをかくれさせ給しかはくちお
しかりしにうれしくとて馬の內侍
たつねても跡はかくても水くきの行衞もしらぬむかし也晃
とて中に入て御ふみにはしたにたゝのかみのあるに
書つく
君にのみとゝめてをきし古のたえにし跡をみるそ悲しき
濱千鳥あとあるをたにとゝめねはたゝしら波にかへす計そ
御かへし
古のなきに流るゝ水くきは跡こそ袖のうらによりけれ
水くきのはかなきたにもきえなくに行ゑしらぬは昔なり晃
はまちとりみなれし跡をおきつ涙かくすやあさき磯ま成覧
せえう殿の女御の御もとに
たまさかにとふひありやと春日野の野守はいかゝ告やしつ覧
御かへし
春日野の雪の下草人しれすとふひありやと我そ待つる
野の宮におはしける比三條殿よりまゆみのもみちの
ひとはあるにさして
木枯の風のたよりはちかけれとひとは忘るゝ物にそ有ける
伊勢にくたり給ておなしみやの御てくらつかひにく
たりたるに御ふみのなかにありけれは
ふりかへん人はとふへき雪きえのとくる便りも滞りけり
うちにおはせし時ひゝなあそひに神の御もとにまう
つる女におとごまてあひて物いひかはす
そのかみはさしも思はてこしかとも思ふを社をになりぬれ
女のかへし
神代より思ふ事たに有物をあたらおもひにいかゝなるらん
おなしひな社の前の河に紅葉ちる所にて
風さへや神のあたりを拂ふらん早きせゝにもちる紅葉はを
むまのないし山ふきにさして
八重乍仇にみゆれは山吹のしたに社なけゐてのかはつは
御かへし
やへなからあたにみえける山吹のひとへ心を思ひこそやれ
ひさしく里におはしける比おなしないしのもとに
後拾 夢のをおほめかれ行よの中にいつとはんとか音つれもせぬ
伊勢の後の御くたりのたひむかしおほしいてゝ
世にふれは又もこえけりすゝか山昔の今になるにや有らん
宮御かへし
鈴鹿山しつのをた巻もろともにふるには勝るをなかりけり
たいわらの宮に
後拾 おほ空に風まつほとのくものゐの心ほそさを思ひやらなん
御返し
同 おもひやる我衣手はさゝかにのくもらぬ空に雨のみそふる
一品の宮よりかみをつかせてこれに物かゝせ給てと
きこえたまへりけれはをかみをつきてかゝせ給て宮

蛛のゐのかくかくへくもあらぬ共露の形見にけたぬ成へし

　御かへし

かくよりもわりなくみゆる蛛のゐを露の形見にみるそ嬉敷（かなイ）

　伊勢い御くたりに齋院より

秋霧いたちて行らん露けさは心をそへておもひやるかな

　御かへし

よそ乍たつ朝霧は何なれや野へにたもとはわかれぬ物を

　もゝその宮に御ことかりきこえさせたまひて返した
　てまつらせ給に

聞ならす程はへにけるをなれとあはぬ戀路そかひなかりける

　御かへしあい宮

岩い上に松はたとひを引かけてよにあふ事は逢ひしもせし

　伊勢より

人をなを恨みつへしや都鳥ありやとたにもとふをきかねは

　御かへし

とはねとも深き心はいせの海の底なる蜑にをとりやはする

　みねのきみうせ給てのころ

世中もいはほのなかも傷くてみねの煙といかてなりけん

　御かへしおなし

はかもなき世を捨はてし人そ待けふりと成てさきに立ける

　一品宮より伊勢の御くたりに

わかれ行ほとは雲井をへたつとも思ふ心はよりもさはらし

　御かへしおなしおりに女御殿より

秋霧とたちゝる広の空よりもいまはときくの露そこほるる

　御かへし

袖にたにおきける露をむへし社をくるゝ袖の苦しかりけれ

　しのひてくたり給へれはあまに成給ひぬと聞てつち
　みかとゝいふ

あまを舟なるとにはやく漕出るかいの滴に君もいかにそ

　御かへし宮

淺ましく船流したる海士よりも我袖の裏のしもゝかはかす

　兵部卿宮入道し給へりしに伊勢より

續後 かゝらても雲井の程は（を集）なけきしにみえぬ山路を思ひやる哉

　女三宮御さうしかゝせ奉り給けるにあしてて長歌なと
　かゝせ給ておくにおなしところ

新古 みな人のそむきはてにし（ぬる集）世中にふるの社の身をいかにせん

　伊勢に大よとのうらといふ所に松いとおほかりける
　御はらへに

大よとのうらたつ浪のかへらすは變らぬ松の色をみましや

　七月七日に

わくらはに天の河浪よるなからあくる空にはまかせすも哉

　おなし日かたわきてせんさいあはせさせ給けるを雨
　いたうふりてその日とまりぬかた人心もとなかりけ
　れは女御殿

天川きのふの空の名殘にも身にはいかなる物とかはしる

　ためちかゝはらからためくにさい宮のかみなり五月
　五日まいりて宮の御まへのやり水をみかはの池とな
　んいふなるをたいはん所に

今年おひのみかはの池の菖蒲草長きためしに人もひかなん

　しのひてくたり給て女御殿より

鈴鹿山ふるのなかみち君よりもきゝならす社をくれ難けれ

　くたり給ひはつかなるへし御かへりいせより

鈴鹿山をとにきゝけん君よりも心のやみにまとひにしかな

又御かへし

はかなくて雲となるとも山彦の答はかりは空にいかにせん

女三宮御ふくぬきたまへるころ一品宮にいせより

秋はてゝ野への草葉も色かはりあらぬ色なるころもいかにそ

いせよりれいけい殿の齋宮のみやに

浦とをみ遙なりとも濱千鳥みやこのかたをとはぬ日そなき

御かへし

とひくるをまつほとすきは濱千鳥浪間に猶そ恨みらるへき

玉葉 うちにて何の折にかありけん

こち風に靡きもいてぬ朝舟は身をうらみつゝこかれてそ降

ちゝみこうせ給て後御かへりとに

同 歎きつゝ雨もなみたもふる里のむくらの門の出かたきかな

ひさしくまいり給はさりけれは

續後拾 ぬきをあらみまとをなれ共麻衣幾そたひかは袖の濡れけん

御かへし女御

續千 もしほやく煙になるゝあさ衣うきめをつゝむ袖にや有らん

うへの御夢にみえさせ給けれは

新古 ぬる夢にうつゝのうさも忘られて思ひなくさむ程の儚さ

又ことおりに

侘ぬれは身をうき雲になしつゝも思はぬ山にかゝらすも哉

常盤なる松につけてもとふやとて幾度春をすくしきぬらん

御返し女御殿

忘れゆく春の氣色にかすむとてつらきよしのゝ山もとはり

女御かへし

常盤山色かはらめや春かすみたなひくかたはとになるとも

池に藤のかゝりたるを女御殿

後拾 紫にやしほそめたる藤の花池にはひさす物にそ有ける

女御殿御かたにはなのありけるを御覧せんとありけれは梅ひとえたおりて上

見つゝのみなくさむ花の枝ならはつけて心を思ひやらまし

御かへし

梅花しつえの露にかけてける人のこゝろはしるへみえけり

はるまかて給て秋やきこえ給けん

春ゆきて秋まてとやは思ひけんかりにはあらす契りし物を

なやませ給ける比上

かゝるをもしらすや有らん白露のけぬへきほとも忘ぬ物を

いかなるおりにかありけむ

いかにそやなのりそれかととはんにも忘れる里やあまはつけまし

經信卿母集

ひんかしやまにはな見にいきたるにうくひすいたく
なく戀にはるかなものをと人のいふに
都にははなさきぬとやかたらまし谷の鶯見にやいつるを
なかつき九日まかきの菊おもしろき色に人きてみる
とみるまてにめもあやなりや宿のむら菊
錦しく
しもつき神まつるところにさかきさす
常盤なる山の榊をゝりとりて變らぬやとのしるしにはさす
ちかき所のはなのちるをゝしむ
梢ゆへとなりのはなををらん哉さかしらなりと風や思はむ
石山にて夜ひとよ水鷄なく
暗くとも心易くもあけしかしいかに岩戸をたゝくゝゐなそ
ほとゝきすのなかぬと人のいふに
こゝろも社かたらひしはや時鳥よに我宿はすきしとそおもふ
きよみつにこもりてほとゝきすのなく
いかてこの山時鳥かたらはんなをわかやとに尋てもこと
七てうには霧たちわたりてあかつきやをあくる程に
人のゆきかふをみて
あけぬるか河せの霧の絶間よりをちかた人の袖の見ゆるは
ひさしくをとせぬひとに
香合をいつからき社はあれと思ふまにまとに人の訪すなりぬる
百和香あつめてうたよますることのつちはりのはな
をくはへよといふ
いかてかは行きておるへき色々にむらこに匂ふつち針の花

やよひ三日ちさきいへに桃の花をみてゐる馬にのれ
るひと
賤のめの園生にたてる桃の花すけるなこれを植てみけるは
あきのくれかたすゝきのまねく
我宿のまへわたりする秋ならは垣根のすゝき招きとゝめよ
しはすのつこもりにはこのふたにゆきやまをつくり
てつもりけりといふに
ふりおほふ箱根の山の白雪も春のあけはやいかゝとそ思ふ
かまとゝいふ所にすみける僧のこ姫きみの御いのり
のしゝけるかなくなりたまひてのちかひなく御祈の
おりにしことといひたる返し
思ひきやかまとのやまに祈りしてよその烟となさむ物かは
十四首
うたよむ人のいへ〳〵にしふはあるなる。數のおほきすく
なきをいはす。みつからのえらひなしたるもしらて。のち
の人のくはふへきにあらす。いにしへよりありしかすをも
ちゆへし。此集十四首とつたへためれは。そのまゝにて見
いつるもをひかくなり。
ちゝ朝臣。美作守にてくたり侍りしときこくしたりけるに。
かのくにゝて日いたうてり日をへてあめふらす。いかて田
うへむとてたみうれへ侍しに。うなての社にかくらへいゆ
はし。さま〳〵いのりして。あめをこひ侍しに。この人い
また十二三はかりにやありつる。法樂に琵琶をひかせ侍し
かは。ひろまへ處せきまて。人たちいりてきゝ侍し。この
國のことなれはとて。くめのさらやまを。こえいとおかし
うひく。俄に空くらかり。あめしきりにくたりしかは。た

ちこみつる人。笠もとりあへすぬれにけり。あめ四日つゞき。たみよろこひをなしけりと父の朝臣も日記にしるしをかれけり。

琵琶琴上手といふ中にも。よのつねの人にはあらさりし。ときの調子のしらへをなしては。やよひの日かすのうちに。夏のせちのきたるをわきまへ。う月のうちに。はるのせちのあまれるをしり。なつよりあきにうつり。秋よりふゆにかはり。冬より春のたつをそのゐんにまきれす。よるひるの時のうつるをもたれこめゐて。もかいひきては。さたかにおもひえたり。あるよとくまかて侍へきをありと。道方卿いりつふしたるよ。女もいとゐきたなういねたりけるを。みちかたふとめさめて。まひより申つるに。かひなくもいねたまふものかなと申されけれは。まくらなるひはひきよせ。つまならし。またうしみつなり。ひむかき。はかまの紐さしたまふとも。とらひとつにうつりぬへし。をそくはあらしものをと申されしかは。よふかしとはおもひなから。それもたかふをもやといそかれて。

とらひとつ丑みつよりもうかりけりといひすてゝいてにけり。つとめて。あのことく。ときたかはす侍しかは。猶せちなるものにおもはれけり。

出羽弁。そめとのゝ中將。れいのけからはしきに。さとにまかてゝありし。わかき人ゝともなひ。ほしあひのそらをば。中宮のすけのはゝのもとにて見侍るへきよしを申しゝに。にはかにあめはら〳〵とふりきて。神なりそらのひかり。おとろおとろしうひらめきわたり。したいになりとゝろくをと。ちまてうこき。五十七十になる人もきかぬをとなれは。中將はあつこえたるものをかつき。みゝをふさき。あせしとゝになりて臥したり。わかき人ゝの。さはき恐るさまつくしかたし。かゝれはこよひのまとひは。むなしかるへきといひやる。あれより。

天の河逢瀬はしらすなるかみの今宵は思ふなかやさく覽

かへし。

思ふ中さけぬ例もあるものを七夕もうき神にやある覽

はゝのふか〔か衍歟〕くにやまさとにゐて。

袖よりもこほれやかゝる山里の垣ねのむはら花に露をく

かきりあれは。日かすたち。ほとけのわさもはてゝ京にかへりねと人ゝいふ。ふく衣をぬくとて。

藤衣ころもへすしてぬきかふる名殘もうらの日數なりけり

ほとけのつゝりといふはなよめといふ。百和香あつむる人

花の咲のへをそけふも尋ねつるこれや佛のつゝり成覽

あれたるやにてつき見る。

みる人の心は空にあこかれて月の影のみすめるやとかな

圓融院のみはかうのとき。人ゝまいりしに。きたのゝ社のまへにて大臣上達部みな車よりおり侍りけれは。宮司なと立いてゝとくめさせ給へしなといふ。經信朝臣は。車なからやりわたさるゝを。宮司いてむかひ。こゝにて人々もおりさせ給ふにといへとも。さらぬていにてすきたまふ。これはいかなることにか侍る。はつあるへきなとあさひあへる。はうにこえたり。また御八講もはてぬに。うちにきこえけり。かのはゝきみのちゝは。大宮女院のしかうの人にて侍しかは。此人わかゝりしときよりしろしめして。いたはりおもほしける人なり。その御所の左衛門出羽なときゝ

おとろきて。はやく母のもとへつけしらせて。きたのへへいはくし給へしといひをくられしかは。母少納言かおもふところ祉あらめとて。おとろきたるこたへもなかりしに。かく御はかうはてゝかへり給しに。かのこたちのもとより。かくしらせてさふらふしかありしやとゝはれけれは。彈正式に。四位は二位に車よりおりすと侍る。菅右府二位にて待るに。神になりたまひても。みちにたかふ事あるましきなれは。車よりおりなは。かへつてたかへるすちにて。神もうけ侍らしとこたへ申されければ。母さこそとて。なをたゝにや見ぬ。よのつねの女こゝろならは。さしをきものすへきものにはあらす。また内にてしかありつることを。殿上人なとの問ひきかれしありしに。はゝに申されしにおなしくこたへられし也。はたして。ことなく正二位の大納言までになり給ひし也。

經信卿郢曲にたへたりしも。はゝおふしたてたれはなめりすみところに人はよるそとて。西洞院のはかせか。あたりちかふすみかへて。おさなきよりふみをよませたりしかは。わかき時より作文のきこえもありしなり。

俊成卿女集

三十四に成し十五夜の御うたの中にこ殿のなかめことおはしますときゝしに

いにしへの秋の空まてすみた川月にことゝふ袖の露かな

ひとゝせ北野の歌に故大納言通具のよませし冬月

秋の色にみたれし露の影よりも枯野の霜にすめるよの月

山家夕嵐

眞柴たく篠の庵の夕煙いとゝかすかにふく嵐かな

こその八月十五夜

花の枝に露のやとかす宮城野の月にそ秋の色はみえける

百首の中に春

明やらぬ谷の戸過る春風にまつさそはるゝうくひすの聲

夏

澤水に秋風ちかし行螢まかふ光もかけみたれつゝ

岩たゝく谷の下水音きけはむすはぬ袖そまたきすゝしき

秋

むくらはふやとゝはわかす秋は來て心つくしに月そもり來

[續拾]秋風に外山の鹿は聲たてゝ露吹むすふ小野の淺茅生

風ふけはしのにみたるゝ苅萱も夕はわきて露こほれけり

月みはとたのめし秋のよもすから又恨めしく打衣かな

冬

[新後撰]松しまやをしまか磯による浪の月の氷にちとり鳴なり

戀

[續後拾]しらさりき結はぬ水に影みても袖に雫のかゝる物とは

同
なつ衣うすくや人の成ぬらんうつ蟬の音にぬるゝ袖かな
みる程そしはしなくさむ歎つゝねぬ夜の空の有明の月
淸見かたうきねの波にやとる夜は月に心のとまる也けり
思ひねの夢のうき橋と絕して覺る枕にきゆるおも影
こきはなれ行月影そあはれなるむしあけの松の風の音哉

月花五十首

山　花

をしなへて風こそかほれ春の山咲櫻あれはさかぬ梢も

古寺花

なへて世の花ともいはしをはつせの山の櫻の曙のいろ

湖

にほの海はるは霞のしかの波花に吹なすひらの山かせ

はしのもと

かつらきや高間の山のやま風に花こそわたれくめの岩はし

松のあいたの月

大かたの秋もさひしき木の間より月もる松を風はらふらむ

山　家

山深み秋かせふかぬねさめたに月にはみつる床の淚を

野　路

結ひなく人はかりねの草の原枕の露に月そすみける

月前秋風

淚とふ床の月たにさひしきに深き秋なる風の音哉

旅　泊

袖のうへになるゝかほなる光哉月こそ旅の心しりけれ

月前草花

風さむみ下葉かれ行秋のよの露にそ氷る淺ちふの月

菊のまかき

秋深き菊の垣根の月かけに霜かと露そ消かへりける

くれの秋

長月の有明かたの空の月心ほそくそかたふきにける

寄風戀

いかなりし風の便に聞初て身にしむ戀のつまと成けん

寄衣戀

朽はてん淚のつまとしらさりき契りし中の夜半のさ衣

北山三十首　春

しる人も嵐にまかふ梅のはな色をも香をも散にまかせて
尋入はるの哀も深きよの花に霞めるみよし野の月
うき世とやあたに契し山櫻まかふも峯に消る白雲

夏

時しらぬ苔のさ衣けふとてもかへらぬ春のかたみとは見し
待なれし夜半の契を時鳥淚にむせふしのゝめのそら
袖の香のむかしとたにも忘にし花橘の猶にほふらむ
さみたれて浪よせまさる須磨の浦の藻鹽にくたす蜑の袖哉
人とはぬ庭のよもきの跡もなく茂りにけりな夏のふるたに

秋

秋來ぬと末こす風に下荻の露きえかへりむすはゝれつゝ
はらひかねくもるも悲し空の月つもれは老の秋の淚に
すみまさる月はかりこそかはり行うき世の秋を猶忍けれ
あたにをく露のやとりの野への庵に今いくたひの秋の月影
かりに來て露のみいとゝ深草の里はまとに野への秋風

冬

秋かけて染し梢も時雨つゝ木葉散しくみ山への里

霧こめしまかきの荻も霜かれて嵐にはらふ野とそ成行
白妙の袖の氷に影さへてむすひかねぬる冬のよの月
あたらしき春といそきしけふことに我身ふりぬる年の暮哉

戀

新勅 なかれての名をさへ忍ふ思川あはても消ぬ瀬〻のうたかた
うかりけるねにあらはれし袖の上に（ぬるゝ）かほ成よその月影
ちきらすな今こんまてのかたみとはそのよの月の明方の空
朽はつる尾花か本の思ひ草はかなの野への露のよすかや
みてもまたいかにねしよの俤のうつゝもまよふ夢の通ひ路

衞門督のとのへの百首春

いかにして氷とちたる柴の戸にもりくる春の苔の下水
武藏野の草のゆかりになく雉子春はむかしのつまならね共
露なから菫つみにとなけれ共野をなつかしみふるゝ袖哉
風にちる花ゆへ悲しうつり行色はむなしとそむく世なれと

夏

しのはしな我もむかしの夕まくれ花橘に風はすくらん

秋

月影もおもひあらはともり初てむくらの宿に秋は來にけり
なかむれは空やはかはる秋の月みし世をうつせ袖の涙に
新勅 今はとてそむくうき世をかりの庵に秋は曇らぬ月のみそ澄
とへかしな淺茅吹こす秋風にひとりくたくる露のまくらを
みし人もなきかゝすそふ世中にあらましかはの秋の夕くれ
松かせに契りし秋も更ぬとや伏見の里に衣うつらん
との葉も枯行小野の淺ちふとなれる籬の秋の色哉

冬

時雨つゝ冬は來にけり秋風のはらひ捨たる蓬生の宿（庭イ）
眞木のやに霰ふるよの夢よりも浮世をさませ四方の木枯
さえわたるをしまの波の月かけを氷にうつす蜑の袖かな

戀

うらめしや思ふ心をかすめてもおほろにうつす春の月かけ
新勅 しるへせよ蜑のをふねの便りにもそなたの風の跡の白波
新勅 なれ〳〵て秋にあふきを置露の色もうらめし閨の月影
やすらひに出にしまゝの天のとをおし明方の月にまかせて
新勅 ほしわひぬ蜑のかるもに鹽たれて我からか（ぬるゝ集）ゝる袖のうら波
思ひ出よ朝倉山のみねの月よその雲間にかけ（袖イ）はたゆらん
くちにけりかはる契の末の松まつに袖（涙イ）こす涙の手枕

雜

たひ衣きつゝなれても露深き宮城か原の秋の月かけ
涙の上の月の行衞にこきわかれたゝよふ船のよの習ひ哉

新古今のうきよのさかの野へのおり五條へまかりて
うくひすの聲をきゝて

おもひきや君なき春の古郷にきて鶯のなかん物とは

かきりときゝていそきまうてしおりむかしのきたむきのあけほのゝこともたゝいまのやうにあはれにて

きえはつる夕もかなしあけくれの夢にまよひし春の古郷

てゝのふくのおり

いかにせん露さへ秋の夕とて泪の淵の袖のみたれは
露もをけ涙もかゝれ藤衣ほさても苔の袖はなれにき
世の常に染てもあさし藤衣かへす〳〵もよをそむく身に

以上以村井古巖藏本挍合畢

詠百首和哥

霞

朝日さす三笠の山の雲井より霞そめたる千世の初春
雪分し岩のかけ道跡たえて霞にたとる春の山人
須磨の蜑の氷し袖の浦波に春は霞（本ノマヽ）藻鹽たれつゝ
霞行夕のくものたえ〴〵に古郷おもふ鴈そなくなる
朝ほらけおほろに霞む山端に代々のむかしも殘る月かけ

花

よそにのみ峯の白雲たちかさね櫻咲そふかつらきの山
さとの名は吉野の山とあれにしを花そ都のかたみなりける
はるのきる花の衣や山風にかほるさくらの八重の白雲
さけはちる花のうき（の集）世とおもふにも猶うとまれぬ山櫻哉
（新後撰）春來ては風より外に（は）とふ人もなき山里に散櫻かな

暮春

くれぬとも谷には春をしらせけりふるすにかへる鶯の聲
哀なり春とてしたふ別まてうきよにおしむ心ならひに
（新勅）めくりあはん我かねことの命たに心にかなふ春の暮かな（は集）
暮はつる空さへ悲し心からいとひし春のなかめせしまに
わかれ行跡なき雲の形見とて今宵はかりの春雨そ降

郭公

おもひつゝぬるよかたらふ時鳥さめさらましの夢か現か
在明の空にまかへて時鳥月の行衛もあかぬしのひね
袖のかをわすれかたみの橘にむかしをとふ郭公かな
おもひ出て尋やきつる時鳥ふしみのさとのまつの夕暮
ほとゝきす雲のよそにや過ぬらん朝倉山の夜半の一聲

五月雨

さみたれはよもきか下葉水こえて垣ほあれ行撫子の花
待出し月もいく世をへたつらん晴せぬ峰の五月雨の比
水まさる宇治の川おさ高瀬さす身をうき舟の五月雨の比
五月雨は波うつきしの松枝もなひく玉もにみかくれそ行
苔ふかみ軒の雫か五月雨の雲間の風は猶こほれつゝ

初秋

涙もる袖をや秋のやとりとてあさをく露のまつむすふらん
露もまた染ぬ木葉も故郷を尋やきつる秋の初かせ
さひしさも哀もいかにしのへとて秋の來ぬらん淺茅生の宿
荻の葉にむすひやをきし風の音身にしむ秋の露の契を
吹かへすまくすか原の秋風も恨そめたる小男鹿の聲

月

里はあれて庭も籬も秋の露やとりなれたる月の影かな
月みてもちゝにくたくる心哉我身ひとつのむかしならねと
わすれなん夜半の寢覺の秋とたに袖の涙の月はなれにき
まてしはし同し空行秋の月又めくりあふむかしならぬに
うきよをも秋の末葉の露の身に置ところなき袖の月かな

紅葉

しくるれとよそにのみ聞秋の色を松にかけたる蔦の紅葉ゝ
いろにみよ秋の思ひの深きえにこかれて染るよもの言の葉
紅にちしほや染し山姫の紅葉かさねの衣手のもり
わかれ行秋の涙の時雨つゝ野にも山にも色かはるらん
たつ田川水にも秋や暮ぬらんもみち亂れて影そなかるゝ

氷

秋果し枯野の草にむすひつゝ氷そ露のかたみ成ける
打はらふ霜のつはさの音さえてをしの上毛に氷る月かけ
袖氷るさよの河風さむしろにかたしきかぬる宇治のはし姫
まれにこし山のかけはし音もなし氷にとつるせゝの白浪
大井川はや瀬の水もむすひつゝ氷る嵐の山風そふく

雪

花の色はかれにし秋の霜の枝にまたひらけたる雪の白菊
見し人もつもる跡なき面影は雪ふるさとのむかし成ける
かきくらし日数ふるやのゝきとちて空にはふかき雪の白雲
まかへこし月と花との哀まて雪にこもれるみよし野の山
ひとやたれやとはいつくと埋もれし木の葉に雪の猶積る覧

忍戀

はかなしや忍の山の夕煙きえなん空のあとのしら雲
いかにせんしくるゝ空の思ひ草下葉にむすふ露の亂れを
うらもなくかけもやとさしせく袖の泪(枕イ)の色を月もこそとへ
しきしのひ朽なん床の跡までもぬれし涙の露もゝらすな
わきかへりしたにそ咽ふおもひかはせゝの岩間の水の白波

あはぬ戀

初鴈の涙の露も色に出て尾花にましり咲るあき萩
かけてなをたえぬも悲し玉のをのあはすはなけの契計に
さゝわけし袖のためしのぬれ衣はさていく夜の道芝の露
たのめつゝかならす人にあはぬよの習ひ迄うき夜半の月影
行衛なきあふをかきりの白雲もたえてわかるゝ峯の松風

後朝戀

きえわひぬ命をあたにかけ初し露の契をむすふ別は
せきとむる袖のしからみ涙のみ又かきはらすしのゝめの空
契をく夕もつらし松かせのいろやみとりにおもひ初けん
かたからぬよしの悲しき別まて有しにまさる曉そうき
あふとみてさめにしよりもはかなきは現の夢の名殘也けり

あふてあはさるこひ

初時雨心のまゝにふりぬれとまつ色かはる人のことのは
わすれしの契も夢のかたみにてぬるよ涙の床にきえつゝ
面影はうき身にそへて忘しにかはらぬ月は有明の空
吹すくる行衛(つらし集)もとはぬ荻の葉に待よひふけし秋風の聲
枯果る契も悲し跡たえてふる野の道の霜の下草

恨戀

たえはつる心のうちを恨ても猶たとらるゝ夢のうきはし
うき侘てうらみや渡る契こし笥やも波のあまの釣舟
あちきなく殘る恨の永き世にはかなかりけるうたゝねの夢
恨よとかさねやそめしさよ衣涙の露もちきりはかりを
なれ〳〵て秋にあふきを置露の色も恨しねやの月かけ

旅

むし明の松に秋かせ吹過て涙もとめぬ涙の音かな
心のみ姨捨山とすみなれし月にやとかるさらしなのさと
是もまたかりそめふし(本ノマヽ)のさゝ枕一夜の露のちきりはかりに
むすひ捨ていつれる月を峯の庵心ものこる明かたの空
月のすむ雲井やいつく旅の空おなしひかりにやとる露哉

山家

身をかへてやとかる芝の庵にも誰とふ月の秋のひかりそ
あすをたに待てかりねの(ら歟)露乍幾よへぬらん苔のさむしろ
八重葎とちし岩かきうちかるゝ草の戸さしを拂ふこからし

露しけき野邊と成行山里に心も月もすみまさるらん
山ふかくそむくもおなしうき世とて猶秋風に鹿そ鳴なる

眺　望

あま小舟島かくれ行朝霧に遠きむかしの跡のしらなみ
むさし野や草の原こす秋風の雲に露ちる行末の空
分なれし雲の翅に秋かけてこしちの空に鳫そなくなる
涙にとつる色にや秋のこえぬらん宮城か原の末のまつ山
雲はるゝ松浦の沖のあきの月もろこしまてもすめる空哉

述　懐

數〳〵に忍ふともなきむかしまて心にかゝる賤のおたまき
しるへなき雲に跡とふ蘆たつも道ある空の光をそまつ
住なれしやとも軒端の忍ふ草猶思ひをく露そこほるゝ
なき數の哀はかりやとゝまらん誰もむかしの跡となりなは
かきつめて誰しのふへきかたみとは泪の底のもくつなれ共

祝

萬代をみかきかもりのまつかせのこゑ〔本ノマヽ〕
とをくかけそめて花やひらけしきたのふちなみのみやまにすむひかりをなる萬代のかけ
天の下かけとあふけはみかさ山峯に月日のひかりをそさす
行末をまもり初けん神代よりつたへし跡や君か代のため

東君あしなくしてきたれども。山間跡をのこし。北風聲すさましけれとも。野草いろをます比。ちかき野に遊覽するに。若菜つむ女の童五人。かたみひちにかけたるあり。をの〳〵哥くちすさめり。いとあやしくて。むかひていはく。いつくの里よりいかなる人のきたるかととへば。かれらはこたへていはく。さたまれる家もなし。たゝ人にしたかへる身なりといふ。いとあやしくて。もしやかんの人をたふらかさんとするにや。又は仙女かととふに。皆あさわらひて。若菜をつみて行にゆきつれたり。石上つゝしの根なとにこし打かけて。かたみかたはらにさしをきて。やすみゐたるとはにありて。此女ともいふやうは。いさや我らかありさま。哥によみもきかせたてまつらむといふ。いとゝおとろかされて聞居たるに。一人の女よめる

色に出る花やもみちのはて〳〵は土より出て土に社いれ

又ひとりの女

一露もつゝかぬ水のつらゝ哉うはの空なる聲になかれて

またひとり

薪つき煙も空にきえて後いつくにいける火の殘るらん

またひとり

松か枝萩のはむけに打なひきをのれかほ成風の音哉

又ひとり

限りなく虚き空といふめるを心の果といかゝとはまし

これをきくに。池水火風空をよめる。されはこそたゝものにあらさりけりと思ふに。我等か言なむち一生つき給はんときは。われらも故郷にみなかへされ申へきものともにて侍る也。其時は御身とても。いつれの處にかかへり給ふへき。いふかしきといひてきゆるかことくうせぬ。すなはち坐して一念不生の所に向て。しはらくねふりゐたるに。黑雲西の山端にしつみて。白雲東嶺にこもりて。ねにゆく鳥むらかりわたる。遠寺の鐘におとろかされて。道に人に語り奉しを。一句そへたまへり。後一宿花の心をすゝむへきと。

千五百番哥合に

新古 梅花あかぬ色かもむかしにて同しかたみのはるのよの月

同 風かよふ寢覺の袖の花のかにかほる枕の春のよの夢

題しらす

同 恨すや浮世を花のいとひつゝ誘ふ風あらはと思ひけるをは

同 礒の上ふるのわさ田を打かへし恨かねたる春のくれかな

夏のはしめのうたとてよみ侍ける

同夏 折ふしもうつれはかへつ世中の人の心の花染のそて

題しらす

同 橘のにほふあたりのうたゝねは夢もむかしの袖の香そする

和歌所歌合に田家月を

同秋上 とはりの秋にはあへぬ涙かな月のかつらもかはるひかりに

題しらす

同 いなは吹風にまかせてすむ庵は月そまことにもりあかしける

同秋下 吹まよふ雲井をわたる初雁の翅にならすよもの秋かせ

千五百番哥合に

同 あたに散露の枕にふし侘て鶉なくなりとこの山かせ

題しらす

同冬 さえわひてさむる枕に影みれは霜ふかき夜の在明の月

同 霜枯にそことも見えぬ草の原誰にとはまし秋の名殘を

母の身まかりにけるをさかのほとりにをさめ侍りける夜よみける

同哀傷 今はさはうき世のさかの野邊を社露消はてし跡としのはめ

千五百番哥合に

同旅 かくてしもあかせは幾よ過ぬ覽山路のこけの露のむしろに

和歌所歌合

寄風懷舊といふことを

同 古里も秋を(は)夕は(を集)かたみにて風のみをくる小野のしの原

同雜上 葛の葉の恨にかへる夢のよをわすれかたみの野への秋かせ

和哥所にて述懷のこゝろを

同雜下 おしむとも涙に月も心からなれぬる袖に秋をうらみて

五十首哥たてまつりしに寄雲戀

同戀二 下もえにおもひ消なん煙たに路なき雲のはてそ悲しき

水無瀬十五首哥合に春戀の心を

同 面影の霞る月そやとりける春やむかしの袖のなみたに

被忘戀のこゝろを

同戀四 露はらふ寢覺は秋の昔にて見はてぬ夢に殘る面影

水無瀬戀十五首歌合に

同 ふりに晃時雨は袖に秋かけていひしはかりを待とせしまに

和哥所哥合に遇不會戀のこゝろを

同 通ひこしやとの道芝かれ〳〵に跡なき霜のむすほゝれつつ

同戀五 夢かとよ見し俤もちきりしもわすれす乍うつゝならねは

落葉のこゝろを

續後撰冬 ふみわけて更に尋る人もなし霜に朽ぬる庭の紅葉々

老の後都を住うかれて野中の淸水を過とて

續古雜下 わすられぬもとの心のあり顏に野中の淸水影をたにみし

寶治元年十首哥合に山花

新拾春下 春はまた花の都と成にけり櫻ににほふみよしのゝやま

寶治二年百首哥奉りしに落花

同 けふとても櫻は雪とふる里の跡なき庭に花とやはみる

月哥とて

同雜秋 なかむれは空やはかはる秋の月みし世をうつす（せ集）袖の涙に

同 秋をの月を雲井のかたみにて見しよの人のかはるおもかけ

寶治元年十首哥合に旅宿花

同旅 露けさを契やをきし草枕あらし吹そふ秋の旅寐に

建仁二年戀十五首哥合に夏戀

同戀四 はかなしや夢もほとなき夏の夜のね覺はかりの忘かたみは

題しらす

同雜下 身をかへてあらぬ命のきえぬまをなき數にたに誰か忍はん

建仁元年八月十五夜和哥所撰哥合に

深山曉月

新後撰秋下 秋の夜のふかき哀をとゝめけりよしのゝ月の明方の空

最勝王經吉祥天女品のこゝろを

同釋教 ちかひあれは空行月の都人袖にみつなるひかりをそ思ふ（見る集）

名所百首哥奉りし時

同戀二 歎つゝ伏見の里の夢にさへむなしき床をはらふ松かせ

名所哥中に大井川

玉葉夏 大井川岩波はやく春くれて筏のとこに夏そ（は）來にける（り百首）

寶治百首哥に湖月を

同秋下 にほの海や秋のよわたる蜑小舟月にのりてや漕つたふらん

正治二年百首哥に

同 かたしきの袖に馴ぬる月影の秋もいく夜そ宇治の橋姫

順德院の御名時所百首哥めされけるに美豆御牧

同旅 船とむるみつのみまきのまこも草刈らて假寢の枕にそしく

寶治二年百首哥奉りける時澤若菜を讀侍ける

同雜一 誰となくしのふ昔のかたみにもふる野の澤に若菜をそつむ

千五百番哥合に

續千 みても猶あかぬ夜のまの月影を思ひ絶たる五月雨の空

寶治百首歌奉りしに秋田

同秋下 小山田の庵もる賤の秋の袖やとかる露そをきあかしける

寶治百首哥奉りける時聞擣衣

同 あちきなくいそかぬよはの枕まて夢路とをさすうつ衣かな

千五百萬哥合に

續後拾 秋くれは身にしむ物となりにけり昨日も聞し荻の上かせ

寶治百首歌奉りける時杜紅葉

同秋下 時雨行生田の森の秋の色をとはてそよそにみるへかりける

建保五（七歟）年内裏五首哥合に冬河風

同雜上 橋姫の待夜むなしき床の霜はらふもさむしうちの川かせ

千五百番哥合に

風雅春下 高砂の松の（にイ）緑もまかふまて尾上の風に花そ散ける

建保三年影供哥合に雨後聞蟬といふ事を

同夏 雨はれて雲吹風に鳴せみのこゑも亂るゝ杜の下露

寶治百首哥に寄關戀を

同戀一
こえてまた戀しき人に逢坂の關ならはこそ名をも賴まめ

寶治百首哥中に見花といふ事を

風雅雜上
たつぬともおもはて入しおく山の庵もる花をひとり社みれ

寶治二年百首哥奉りける時六月祓

新千夏
みそきする麻の葉末のなひくより人の心にかよふ秋風

建仁二年影供哥合に忍戀

新拾戀一
ひとしれす思ひ忍の山かせに時そともなき露そこほるゝ

題しらす

新後拾
つもりぬる別は春にならふともなくさめかね（へ集）てくるゝ空哉

名所百首哥たてまつりける時

同夏
五月雨のをやむ晴間の日影にも猶雲ふかし天のかく山

寶治百首哥奉りける時

同秋上
風かはるなつの扇はてになれて袖にまつ置秋のしらつゆ

同
たちこむる關路もしらぬ夕霧に猶吹こゆる須磨の秋かせ

建保内裏三首哥合に秋野月

同
おもひ出よ露をひとよのかたみにて篠分る野への袖の月影

水無瀨殿詩哥合に山路秋行といふ事を

新續古秋下
心さへうつりもゆくか龍田山木末に秋の色を尋ねて

建長三年影供哥合に行路紅葉といへる事を

同
時雨行秋の山路は紅葉葉のうつろふ色やしるへなるらん

群書類從卷第二百七十二

和歌部百廿七　家集四十五

小町集

はなをなかめて

古 花の色はうつりにけりな徒に我身世にふるなかめせしまに

ある人こゝろかはりてみえしに

後 心からうきたる舟に乗りそめてひとひも涙に濡ぬ日そなき

まへわたりし人にたれともなくてとらせたりし

空を行月の光を雲井よりみてやゝみにて世ははてぬへき

かへしあしたにありしに

雲晴て思ひ出れとことのはのちれるなけきは思ひ出もなき

たいめむしぬへくやとあれは

新勅 みるめかる蜑の【ゆきゝの】行かふ湊路になこその關も我(わが)はすへぬを(なくに集)

をみなへしいとおほくほりて見るに

なにしおへは猶懐み女郎花おられに皃な我か名たてに

古夏みくにの町が歌也 やよやまて山ほとゝきすことつてむ我世中に住わひぬとよ

あやしき事いひける人に

玉葉 結ひきといひける物を結ひ松いかてか君にとけてみゆへき

めのとのとをき所にあるを

新千 よそにこそみね(やへ)の白雲と思ひしにふたりか中(かおもはぬ集)にはや立に皃

山里にて秋の月を

續後拾 山さとのあれたる宿をてらしつゝ幾夜へぬらん秋の月影

又(に集)

新勅 秋の月いかなる物そわか心なにともなきにいねかてにする

人と物いふとてあけしつとめてかはかりなかきよに

なにをを夜もすから詫ひあかしつるそとあいなうと

かめし人に

古 秋の夜も名のみなり皃あい(ふ)と(い集)あへはをそ共なく明ぬる物を

かへし 古今此三字ナシ

同みつねか歌也 長しとも思ひそ果ぬ昔よりあふ人からの秋のよなれは

やむことなき人の忍ひ給に

同 現にはさもこそあらめ夢にさへ人めつ(をもる)ゝむとみるか侘しき(さ集)

人のわりなくうらむるに

同 あまの住里のしるへもあらなくに(にイ)恨みむとのみ人のいふ覽

ゆめに人のみえしかは

同 思ひつゝぬれはや人のみえつ覽夢としりせは覺さらましを

是を人にかたりけれはあはれなりける事かなとある

御かへし

同 うたゝねに戀しき人をみてしより夢てふ物は頼み初てき

かへし

新勅 頼ましと思はむとてもいかゝせん夢より外に逢よなければ

古 いとせめて戀しき時はうは玉の夜の衣をかへしてそぬる

人の心かはりたるに

同 色みえてうつろふ物は世中の人の心の花にそ有ける

みもなきなへのほに文をさして人のもとにやるに

同 秋風にあふたのみ社かなしけれ我身空しくなりぬと思へは

人のもとに

新千 和田つ海のみるめは誰か苅果し世の人をになしといはすは

つねにくれとえあはぬ女のうらむる人に

古 みるめなき我身をうらと知らねはやかれなて蜑の足たゆくくる

同 人にあはむ月のなきよに思ひ置て胸はしりひに心やけおり

同 夢路には足もやすめすかよへ共現にひとめみしをはあらす

かさまゝつあましかつかはあふ事のたよりに涙は海と成覧

拾 われを君思ふ心のけすのへにありけはまさに逢みてましを

新拾 よそにてもみすは有とも人心わすれかたみをつみて忍はむ

宵々の夢の玉しゐあしたゆくありても待んとふらひにこせ

ゐてのしまといふたいを

古 おきの井てみをやくよりもかなしきは都しまへの別也けり

忘れぬるなめりとみえし人に

同 今はとて我身しくれと降ぬれはその葉さへにうつろひに㒵

かへし

同 人を思ふ心この葉にあらはこそ風のまに／＼散もまかはめ

さたまらすあはれなる身をなけきて

後 蜑のすむうらこく舟のかちをなみ世をうみ渡る我そ悲き

いそのかみといふ寺にまうてゝ日のくれにけれはあけてかへらんとてかの寺にへむせうありと聞てこゝろみにいひやる

後 いはのうへに旅ねをすれはいと寒し苔の衣を我にかさなん

かへし

同 世をそむく苔の衣は只一重かさねはうとしいさふたりねん

中たえたるおとこの忍ひてきてかくれてみけるに月のいとあはれなるをみてねんことこそいとくちおしけれとすのこになかむれはおとこいむなるものをといへは

同 ひとりねの侘しきまゝに起ゐつゝ月を哀といみそかねつる

わすれやしぬるとある君たちのゝ給へるに

新勅 みちのくの玉つくり江にこく舟のほにこそ出ね君を戀れと

やすひてか三河になりてあかた見にはいてたゝしやといへるかへりことに

古 侘ぬれは身を浮草のねを絶て誘ふ水あらはいなんとそ思ふ

あへのきよゆきかかくいへる

とあるかへし

同 つゝめとも袖にたまらぬしら玉は人をみぬめの泪なりけり

同 をろかなる涙そ袖に玉はなす我はせきあへす瀧つせなれは

みるめあらは恨みむやはと蜑問は浮ひて待んうたかたのまも

古今 いつはとは時はわかねと秋のよそ物思ふ事のかきり成ける

古今 蜩のなく山里の夕くれは風よりほかにとふ人そなき

同 もゝ草の花のひもとく秋のゝに思ひたはれむ人なとかめそ

漕きぬや蜑のかせまもまたすしてにくさひかける蜑の釣舟

五月五日さうふにさして人に

玉葉 あやめ草人にねたゆと思ひしは我身のうきにおふるなり鳬（か集）

新勅 こぬ人をまつとなかめて我宿のなとてこの暮悲しかるらむ

續後撰 露の命はかなき物を朝夕にいきたる限あひみてしかな

新千 人しれぬ我か思ひにあはぬ夜はみさへぬるみて思ほゆる哉（ぬもひわひ集）

續 侘ぬ暫もねはや夢のうちにみゆれは逢ぬみねは忘れぬ

ものをこそ岩ねの松も思らめ千代ふる末もかたふきにけり

新古 木枯の風にもちらて人しれすうきことのはのつもるころかな（みち集）

風雅 夏のよの侘しきことは夢にさへみるほともなく明る也けり（をたに集）

續古 現にもあるたに有をゆめにさへあかても人のみえ渡る哉（て集）

玉葉 春雨のさはにふることをともなく人にしられてぬるゝ袖かな

四のみこのうせ給へるつとめて風ふくに（さかイ）

新後拾 今朝よりは悲しき宮の秋風や又あふこともあらしとおもへは（のイ）（やまイ）

新續古 われか身にきにける物をうきことは人のうへとも思ひける哉

新續古 心にもかなはさりける世中をうき身はみしとおもひける哉（に）（め集）

新拾 つま戀るさを鹿の音にさよふけて我かた戀を明しかねぬる（みのたくひをもありとしり集）

續古 卯花のさける垣ねにときならてわかことそ鳴うくひすのこゑ

秋の田の假庵にきゐるいなかたのいな共人にいはまし物を

井手のやまふきを

新後拾 色も香もなつかしきかな蛙なくゐてのわたりの山ふきの花

新千 霞たつ野をなつかしみ春駒のあれても君かみえ渡る哉（かすみしく）（ゐともひとのみゆるころ集）

難波めの釣する人にめかれけむ人もわかこと袖やぬるらん

千度ともしられさり鳬うたかたのうきみはいさや物忘して

人のむかしよりしたりといふに（りイ）

續後拾 いまはとて變らぬ物を古もかく社君につれなかりしか（いまとても）（ひと集）

涙の面をいて入鳥は水底をおほつかなくは思はさらなん

あしたづの雲井のなかにましりなは

なといひてうせたる人のあはれなるころ

久かたの　空にたな引　うき雲の　うける我身は
つゆ草の　露の命も　またきえて　思ふことのみ
まろこすけ　しけさそまさる　あら玉の　行年月は
春の日の　花のにほひも　なつの日の　木の下陰も
秋の夜の　月の光も　冬の夜の　しくれの音も
よの中に　こひもわかれも　うき事も　つらきもしれる
我身こそ　心にしみて　袖の浦の　ひる時もなく
あはれなる（れイ）　かくのみ常に　おもひつゝ　いきの松はら
いきたるに（よイ）　なからの橋の　なからへて（るイ）　せにゐる田鶴の
しまわたり　うらこく舟の　ぬれわたり　いつかうき世の
くにさみの　我身かけつゝ　かけはなれ　いつか戀しき
雲のうへの　人にあひみて　このよには　思ふことなき
みとは成へき

日のてり侍けるにあまこひの和哥よむへきせんしありて

千早振神もみまさは立さはき天のとかはのひくちあけ給へ

やり水にきくの花のうきたりしに

(雅補集にはたつみ)(古)瀧の水木本ちかくなかれすはうたかた花もありとみましや(を集)

かきりなき思ひの儘に夜もこむ夢ちをさへに人はとかめし

かれたるあさちにふみさしたりけるかへりことに小町かあね

(同)時過てかれ行をのゝ淺茅には今は思ひそたえすもえける

あたなに人のさはかしういひわらひけるころいはれける人のとひたりけるかへりことに

(後)うきことを忍ふる雨のしたにしてわかぬれ衣はほせとかはかす

ともすれは仇なる風にさゝ波の靡くてふとわれなひけとや(を集)

(新拾)忘草わか身につまむと思ひしは人の心におふるなりけり(无イ)

わかことく物思ふ心けの末に有せはまさにあひみてましを(を集)

みちのくへいく人にいつはかりにかといひたりしに

(續千)陸奥は世を浮島もありといふ關こゆるきのいそかさらなん(に)(こ集)

さためたることもなくて心ほそきころ

(續古)すまの浦の浦漕舟の梶よりもよるへなきみそ悲しかりける(あま)(をた江集)

いかなりしあかつきにか

(後)ひとりねの時は待れし鳥のねのまれにあふ夜は侘しかり兇(鳥る)(るゝ)(ゟ集)

(仲文集)なかれてとたのめしことは行末の涙のうへをいふにそ有ける

見し人のなくなりしころ

(新古)あるはなくなきはかすそふ世中に哀いつれの日まて歎かむ(か集)(るらん集)

(續古)夢ならはまたみるよひも有なましなに中〳〵の現なりけん

(同)むさしのに生とし聞けは紫のその色ならぬ草もむつまし

(風雅)世中は飛鳥川にもならはなれ君と我とか中したえすは

(新勅)むさしのゝ向の岡の草なれは根をたつねても哀とそ思ふ

(古)みし人もしられさり兇うたかたのうき身はいさや物忘して

(新古)世中にいつら我身のありてなし哀とや云んあなうとや云ん

(後)我身社あらぬかと耳たとらるれとふへき人に忘られしより

(同)なからへは人の心もみるへきに露の命そかなしかりける

(續後撰)よの中を厭ひてあまの住かたはうきめのみ社みえ渡りけれ(ゟ集)(かた)(ゟ集)

(古)はかなくて雲と成ぬる物ならはかすまむ空を哀とは見よ

(玉葉)吾のみや世を鶯と鳴わひむ人の心の花とちりなは

(古)はかなくも枕さためすあかすかな夢かたりせし人を待とて

(新古)世の中のうきもつらきもつけなくにまつしる物は泪なり兇(にぬ集)

(續古)吹むすふかせはむかしの秋なから有しにもあらぬ袖の露哉

あやしくもなくさめかたき心かなをは捨山の月もみなくに

(新古)締氣無きねくたれ髪をみせしとてはた隱れたるけさの朝顏

誰をかもまつちの山のをみなへし秋と契れる人そ有らし(古これたかのみこの歌なり)

白雲の絕すたな引峯にたに住はすみぬる物にそありける(よにこそありけれ集)

もみちせぬ常盤の山は吹風の音にや秋を聞わたるらん(同きのよしもちか歌なり)

他本歌　十一首

（古）いつとても戀しからすはあらね共あやしかりける秋の夕暮（秋のゆふへはあやしかりけり集）

（拾）長月の有明の月の有つゝも君しきまさは待もこそせめ（われこひめやも集）

あさか山影さへみゆる山の井の淺くは人をおもふものかは
　なか雨を

（續後撰）なかめつゝ過る月日もしらぬまに秋の景色になりにける哉

春の日の浦〻ことを出てみよなにわさしてか蜑は過すと

（古）木のまよりもりくる月の影みれは心盡しの秋はきにけり

天つかせ雲ふきはらへ久堅の月のかくるゝ道まとはなむ

（古）あはれてふ事こそうたて世中を思へはなれぬほたし也けれ

（同）世中は夢かうつゝかうつゝとも夢ともしらす有てなけれは

（同）あはれてふ言のは毎にをく露はむかしを戀るなみたなり熄

（同）山里は物のさひしき事社あれ世のうきよりは住よかりけれ（わイ）

　又他本　五首

小倉山消しともしの末も哉しかならはすはやすくねなまし

（古）別つゝみるへき人もしらぬまに秋の氣色になりにける哉

かたみこそ今は仇なれこれなくは忘るゝ時もあらまし物を

（新古）はかなしや我身のはてよ淺みとり野へにたな引霞と思へは（あはれなり）（や）（ついにはのへの集）

（後）花咲てみならぬ物はわたつ海のかさしにさせる沖つしら浪

右小町集以流布印本挍合

檜垣嫗集

　きよはらのもとすけか國守にてくたりたるに。いたくさかりすきたるきこえあるに。こともの消息したるに。なりといふ人おなし里にてあるに。ふみをゆつ（おく拾集）りし

いなり社人の思ひはなすときけ今は我身はふるのやしろそ

　なてしこの。いへにいみしくおほく咲たるを。人のこひにおこせたるに。たゝ一枝やりたるに。いかゝおもひけむ。よのほとさなからほらせてけるを。をしあてにさな覽とおもひて。うたかはしき所にかくいひやる

露のみのをきてみつれは床なつの花はねなから盜まれに熄

　くきのたむすけともといふ人。けさうする女のもとに。ふみをこせて。やかてはしめてきたるに。れいならすあやしくおほえしに。その心かけたる女にかくいひやる

ひとつかひ習はさりける鴛鴦のみつからきたる物としら南

　かたらひし人のうせにしか。おさなき子をあまたうみをきて。二三年はかりになりにたるに。その父ちかき人なれは。ひきつれてゐてきて。哀なるものかたりともしいてゝうちなくに

嬰兒の髮かきなてゝみることにまつのはゝなを戀しかるらむ

　としなとおいおとろへて心地のみつねならす。くるしうおほえて。なやましきに。あはれなと思ふへき

子なといふもの。ゆめになきに。なましとくなる人をことひつけて。たのむやうなれと。まとの心さしもなけれと。たゝなるよりは。なをいひふるゝともあるに。おくのくにゝそくたりにける。おくのといふは。大すみさつまのところなるへし。のほりてときゝてかくいひやる

きえぬへき命なれ共露の身のおくなるまつをまつと社ふれ

かくいひやりしかと。ふのつかひといふ事にてなむとて。とはすなりにけり

五月計消息をこする男のなをひころへぬるこゝちす。ものこしにたにと。せちにいはすれと。わかし(としち拾)日のこゝちもせねは。つきなくて思ひもたえて。なをあくら(はし拾)にこの月たてゝなといふつゐてに

人のいむ此月なみをたてゝ社おもはすならんことも恨みめ

いとのこほりにものいひし府官の心かはりて。めまうけて。そこにのみつきて。いとたまさかにをとつるゝに。たゝならんやは。おなしさまの人のみゆるに。いつちそとゝへは。いとへそまかるとたはふるゝに。このところをいとしまのこほりとそいふかしに

いとしまをかけて飛とはまてや鳥おにも羽にも言傳へせむ

虎のかはのしりさやを題にてひこのかみのよませしに

海へとて行みな虎のかはの尻さやけからぬは涙のよこせは

つゝみのたき

音に聞つゝみのたきをうちみれは只山河のなるにそ有ける

うさのくにとしかわかくて太宰府のけむ官にて肥後國にきたるに。そのをりはせといふところに尋きて。これや名たかきひかきとはきこゆるとゝひしに。をとろへはてゝゆゝしけになれるをみて。心をとりしけんを。くにとしかいふ

君ならぬ人のよのすゑいかにせむ心はせ社すみかなりけれ

なとかくおいにけむなとおしみしに

心はせすみかとならは君はさはこゝより外にゆく處あらし

四天(王脱)寺山を題にて

老ぬれは年はかくして有ぬへししわうしや待人にみゆれは

さくらの花のいへにいみしうさけりしに月さへわりなくあかゝりしかは一人なかめて

月かけを色にてさける櫻花雲かくれなはちりぬとやいはむ

香椎宮の祭の使さゝれたる少貳の。その日いみしく歌よむへかなり。さる事あらはいかゝせむとて。わさとひこに尋ねきて。をりはしらぬ。たゝつかひつへからむ。歌ひとつといひたるに。たいもなけれは。たゝ思ひやりに

千早ふるかしひの宮のあやすきは幾代か神のみそき成らん

こひのうた人のよみしに

逢までは身をもかへてむと思ひしに今は命のおしくも有哉

大隅さつまのなかにひしかりのはいまはちかくとよみしに

春の駒を打出てみれは秋こひしかりのはいまはちかく有覧

またおなしたいを

たかゝひし家は何處と道問ひし狩のはいまは近くならすや

きりのみなと
立しきり霧のみなとか降くらむときやは秋のせきに入ぬる
夜こしのやまを
きみかいし昨日のまとのあたらぬはやこしの山のあれは也覺
しりたる人のむかへたれは。筑前國にしはしあるほとに。日ころになれは。かへりなんと思ふに。けむなる人のめはなましそくなるに。けふ計はなをとまりたまへなといへと。日ころすへき事あれは。せちにいてたつに。雨さへわりなく降まさるにとて女出ゐて。かゝる雨にはいかてかなといふに。むかへ人みの笠なとあり。たゝとく／＼といそかせは。まかりまうしもしあへぬまて。いそきたちて。あまさうそくなとしさして。さらはひこのかたにおはするたよりあらはといふまゝに。かくいひかく
ふらはふれ三笠の山の近けれはみの島迄はさして行きなん
筑前のこふをそ御笠の山とはいひける。
きよはらのもとすけのかみ京へのほりしに。かとての所によひて。はしめちくこのかみなりしに。ほともなく此國にきて。ふたゝひあひみつるに。今はわれも人もおいにたり。またつくしのかたくへきにあらす。いさかし京へなとたはふるに。めのすはうの命ふものなとかつけて。いまかくいふと思ひもいてじものをなとやうにいひたるに
白河のそこのみつひてちりたらんときにそ君を思ひ忘れむ
かみの子すゑとものぬし。あはれにかたらひなとする程に。年比のめこともすてゝ。ほうしになりて。忻しは肥前のくにせふりのみたけにをこなひて。もろこしにいにしなこりのいみしうかなしといへは。よのつねなり。そのめことも。いまはと思ひなりて京にのほりなむとす。みつからはその人の心をくみゝるにも。また有つるこゝろはへ思ふに。わりなくいみし
かれぬへき草の末ともしらすして露の命を何にかけゝむ
おいにきはめてすみかもなくなりて。てつから水くむきはになりて。をけをひきさけて出るにしも。くにのかみしはし出らるゝみちにさしあひて。めかとなる物みつけて。なとかくはなと見とかむるに。名高きひかきなりと人のいへは。はたかくるゝに。よひいつ。はつかしけれと。かくれ所もなくて。をけをきしにをきてゐたれは。いかていとかくは有しそ。あはれなとあれは。おもひわひて
老はてゝかしらのかみは白河のみつはくむまて成にける哉
たちさらて紅葉をよませしに
しかの音はいくら計のくれなゐそ降出るからに山のそむ覽
すきものともあつまりて。よみかたかるへきすゑを。つけさせむとて。かくいふ
わたつみのなかにそたてるさほしかは
いてこれかすゑ付けよといへは
秋の山へそこにみゆらん
京におとこをやりて
人を待宿はくらくそ成にける契りし月のうちにみえねは
題不知

秋かせの心やつらき花すゝき吹くるかたをまつそむく覽

つくしからゐてのほりて。ある男もとのめのもとにすゑたる心いとよくて。うちかたらひてゐたるに。おとこはこゝかしこひとのくにゝのみありきければ。ふたりのみなんゐたりける。つくしよりきたる女いとしのひておとこをかたらひたりけるにはとこそいひける

夜半に出て月にみえすは逢ことを知らす顔にもいはまし物を

このもとのめ心いとよき人にて。男にもかゝることなむあるといはざりけれと。男ほかのかたより人かたらふなりときゝて思ひたりけれと。心にもいれて猶さる物にてなむをきたりける。又よはふおとこもありけり。世中心うしかゝる事きゝいれしなといひけるものなん此男をやう〳〵思ひつきやしにけむ。返事なとして。もとのめもとにふみをひきむすひてをこせたるをみれは。かくかいたり

身をうしと思ふ心にこりねはや人をあはれとおもひそむ覽

とこりすまによみたりける。かくて心のへたてたる事もなく哀なれは。いと哀と思ふ程に。男は心かはりにけれは。ありし事もあらねは。かのつくしにおやはらからなとありけれは。いなんといひけれは。男も心かはりにけれはとゝめてなむやりける。もとのめなん。もろともにありならひければ。かくてゆく事をいとかなしと思ひける。山さきにもろともにゆきてなん。船にのせなとするほとに。男もきたり。此うはなりこなみ。ひと日一よ。よろすの事をいひかたらひて。つとめて船にのりぬ。今は男もとのめは歸りなんとて車にのりぬ。是も彼も悲しくと思ひける(ふはとイ)に船に乘たまひぬる人のとて。ふみをもてきたる。たゝかくありける

ふたりこし道ともみえぬ涙の上に思ひかけても歸るめる哉

とありけれは。男も女もいといたうあはれかりなきにけり。漕出ていぬれは。えかへしもせすなりにけるに。くちおしかりける

相知りたりける人の忍ひて男あるにあはむといへは。家のかきを夜ふけてたゝけ。さらはをきてあはむといふに。あひわたるほと五六日男の音もせねは。いひやりし

さゝれ石の音たえにけるあふとのかたき處となりやしぬ覽

又あるほむに。この歌ありとそ。

元久二年五月廿九日挍合了。

從三位治部卿平朝臣判

右檜垣女集以扶桑拾葉集及一本挍合了

本院侍従集

おほえおはしけるかむたちめ(師輔)の次郎なりける人。(兼通)年十八(天慶五)はかりなるか。おほえはいとかしこかりけれと。かうふりえぬ有けり。おほち(忠平)は太政大臣にてなむおはしける。いもうと(安子)は。きさきはらのみこ(村上)に奉て。藤つほにそさふらひ給ける。おほむいとこ(侍従)さふらひ給けり。その(師輔)この次郎君おもひかけ給ひて。かくよみていれ給けり

新勅　色に出て今そしらする人しれす思ひかけつる(おもひわひ集)深き心を

なとの給て。御さとはいつくそとの給ひけれは。女

ほそとのにて物なといふに

新古　我宿はそこともなにかをしふへきいはて社みめ尋ねけりやと

男

同　わか思ひ空の烟とたくひなは(なりぬれは集)雲井なりとも(からも集)猶たつねてむ

またおとこ

返し

我ならぬ人は待ともすきくれは哀をすてゝひくかたによれ

君ならぬひとはまたねとすきくれの引とてよらむ心弱さよ

男にやりとをいさゝかあけて物いひけるに。ひとこともつゝましうおほえて。むねいたし。やきいし(焼石)あてむとて入にけれは。男わひていにけり。又のあしたに

あはすして歸りしよりもいとゝしく苦しと云しをそ侘しき

返し

ねぬるよの苦しきをはとふをのをこたる折そ嬉しかりける

おとこ

ねぬる夜の苦しきをのをこたるは我かくれたるしるし成覧

返事はなし。おとこ

身を捨て露のみともにきえぬとも哀とふへき人のなき哉

女かへし

夏のよの露とおきゐて明してはあやにく我や濡きぬをきむ

とてまかていけれは。あしたに女の里にはあらて。

本院なりけり

そま河の流れひるまを君はしれ我おり立ていかたしはせむ

返し

いかたしの心のすきはそま山の川のひくれもよそに社見め

さて物きこへむと。せちにの給ひけれは。たゝ物こしにて。うけたまはらむとありけるに。此女のつかひける人をかたらひて。いり給にける。さらに人もしらぬ事なりけり。又のつとめて。おとこ

續後拾　露のおきてあかぬ心にわかるれは我衣てそかはかさりける

返し

同　衣手のぬると聞にもいとゝしく我さへ(わかれは集)夏のよそうかりける

男ひとりねて又のあした

袖ぬれてほしそわつらふから衣君か手枕ふれぬよひには

かへし

我ために思ひしあらはよそにても君か袂はぬれしとそ思ふ

おとこ

返し

新千 忍ひつゝなかきよすから戀わひて泪の淵とうかひてそふる

男

同 うかひても君はねに覺いかなれは露とおきゐてなき明す覽

女

うかひても袂のみ社ぬれまされ我もねられす君こふるよは

續後 なけきつゝあなおほつかなから衣ぬれ增る覽袖をみぬまは

おとこ

續千 朝とにほしそわつらふ我袖はよな〳〵とにそほちまされは

かへし

同 ほす人も有とこそきけからころもうすく成行人のたもとは

おとこ返し

人しれす有明の月と出しよは露も我みもをきそまされる

女返し

よな〳〵に成ぬと思へは白露のおきてぬる覽袖もからしを

おとこかへし

つみにのみそはぬにきては夜とに露の置ゐてあかし社すれ

又男いてゝすなはち

ほの〳〵と明行程はうちなひき東雲よりそねはなかれける

女返し

等閑にしのゝめよりそあけ暮はうは露はかり置といふなる

かくてすみ給ほとに。この女又ひとのぬすみていにけれは。おとこいみしうなけき給て。女あはれと思ひ。かくなむいひやりける

玉集 世中を思ふもくるしおもはしと思ふも身にはやゝまひ也けり

男かへし

忍ふれと猶忘られす思ほゆるやまひは君に我そまされる

女

思はすもある世中のくるしきにまさる病はあらしとそ思ふ

この女うちにまかりけれは。いといみしうとをくて。なけき給けるに。ひさしうありて。女(の)いひた(や)りける

わか身ゆへうしとは思ひをきなからつらきは人の心なり覺

かへし

續古 身のうきと思ひしりぬる物ならはつらき心を何かうらみむ

かくてこの女服になり給ぬときゝて。とふらひきこえたる返事に。いつも時雨はとの給ひけれは

玉 我さへに袖は露けき藤衣君をそ立てきると聞には

返し

音にのみ聞わたりつるふち衣ふかく戀しと今そしりぬる

女のともたちのもとより。しゝう君のもとに。この女のほかさまになりにたるを。いかにおほすらむといひて

續古 ほかさまに靡くをみれはしほかまの煙やいとゝもえ渡る覽

返し

鹽かまのもゆる煙もなき物を空になき名を立そ侘しき

とあれは。まつおほすらんことこそおほゆれとて。御かたのこたちのいひやる

初秋の花の心をほともなくうつろふ色といかにみるらむ

男返し
時わかす垣ほにおふる撫子はうつろふ秋の程もしらぬを
又かへし
色かはる荻の下葉もある物をいかてか秋をしらすといふ覽
といひやる。
そのころ兵衛の佐になり給てけり。堀川大納言とかや。
一本云
右此本者。二條家爲定卿。以二自筆之正本一寫レ之。藤雅敎
右本院侍従集以横田茂語本書寫挍合了

小馬命婦集

堀川院にさふらふくち女のかへりひ。いみ給とて。殿もうへも。のこりなくいて給ひぬ。はかなき身はかゝるつゐてにもとおもひて。つれ〳〵におほゆ。ひむかし山よりみゆる家ともみむとて。たゝすみ出るに。それよりもめてたき池。ところ〳〵をみて。人の國せかいも。かくやとおもひやらる人〻あれと。きかせむとおもふ人ありて。思ひつるたはふれをとそ。

水のつらにふよう(不用)にて捨たる舟あり
譬へつゝ岸のほとりに身を捨て繋かぬ舟ものとけかりける
洲崎に松いといたうてたてりみにゆけは千鳥みな立ぬ
ひとりねをみにこそきつれ我ならて松か崎にも千鳥住けり
はちすのいとおかしきを立よりてみれはいかなるかけか見えけむ
池水のそこなる我もおいにけりかけにはちすとみるそ悲歎
山なかにえたも葉もなきくちなしのたゝひとつふたつなれるを
是は此耳なし山のくちなしかいふかひなくにみもなりに凫
池つらにはらひけるもくつくちふさ(たイ)にあり
刈すつる池のもくつの今はとてくちたる身にも哀とそみる
このしたの汀にあしほやう〳〵いてゝたてり
人しれぬかけとや賴む葦のほのけふはまほにも出にける哉
山のしりべに沼ありかみもしもゝみえすたゝになか

る

行ところ有へき物を沼水のいてこしかたもおもほえぬかな

水のいとふかきところに柳おひたり

誰かみて名につけそめし淺みとり深き江に社生はしめけれ

み山のしりへにくさ〳〵ものおほ(生)したる中にたていしあり水のしりはかはやなり

音にきくたてしまかとそ思ぬるからき水にもつけてみる哉

みまやのしりへにいたりてすさひして

獨ねはかひなかり凫駒なへてかけのむまやとまちて頼まん

もちふむとし比いひわたるにつれなけれはふちにさして

久しきをまつとやふちの思ふ覽かゝるをなけく宿にしも咲

なをつれなきを日比をともせて卯月になりて卯花にさして

(玉葉)明くれて日頃へに凫卯花のうきよのには(なか)になけき(かめ集)せしまに

返　し

(同)いとゝしく日頃へ行は卯花のうきにつけて(や集)そ忘れはてぬる

おなし人物かたりなとしてつとめて

そこはかとさしてくきなき言の葉の流石に飽ぬけさそ戀數

又いかなるおりにかもちふむ

むは玉のよるにもふみはあらね共みえぬは闇に劣らさり凫

返　し

待侘て心はやみにまとはれよむは玉つさはよにもさはらし

そつ殿のみふをかたらひて久しう音信さりけれは

たつやとそ待てへにける網鳥の間はれ初てはかゝるへしやは

かへし

露はらひ朝たつきしの草かくれとへとゝはねと思ふ心あり

なか月になりてみふ

行過る秋の草はにやとりして立らんきしのをもたのまし

返　し

大かたの秋社野へをわかる共ことなし草はたゝしきゝすを

又黄なるうすやうを萩の下葉にえりてしろかねを露にをかせて

をしか立尾上にしける秋はきに下葉のうへをしる人のなき

萩のした葉のこきを見て

露かゝる萩をもをきて棹鹿のまつわひしらになくを社まて

これよりまゆみのもみちにつけて

朝な〳〵霧へたつめるさほ山のにしにさす枝は露や置らん

返　し

たのむにし西にさすえのうつりなはやへや隔てむ棹の山霧

又みふほとへて

かきくもれ冬のこのはも散にけり淺ちかもとは露を待なり

十月にこほりをもみちにいれてみふかおこせたれは

神無月たか朝こほりほともなくきえて哀と誰かいはまし

としのはてかたにうらみてもちふん

さゝかにの糸よりもけによはき身に年月はこふをの侘しさ

霜月のつこもりかたに梅の花につけておとこ

冬や春はなや春への梅ならぬ雪に通ひし色はそれにて

返　し

しらぬまに年のゆきゝの花なれは折につけつゝさかむ計に

又こと人のけさうしけるほとに名たちにけれはもち

ふむひさしうをとせてこりぬやといへりければ

奥山のをのゝ音にも驚かてこりぬやとたにいふかあやしさ

おとこ

哀にそ思ひわたりしもかみ川わかいなふねの行と歸ると

かへし

いかさまにせよとかあまりかしま成生田の浦のいたく恨むる

いとはつかに物いひてゐなかにくたるおとこはるか
になりていへる

新千　つれ〳〵と思ひやりつゝ鶯のほのかに聞し聲そ戀しき

返し

同　戀しくは都のまつに鶯の鳴てそこまし花はちるとも（きなん集）

又かへし

心にもあらぬ難波のなからへてよそにへむとは思ひけむやは

此たひは返事なければおとこ

山ひこの答ふる聲のきこえねはなかむる空はまとはるゝ哉

返し

よふこ鳥いく聲鳴ぬ山ひこの答ふはかりはあらすそ有ける

又の日その國なるおとこかくいへり

とふとはたえ〳〵なるを鈴鹿山をときくにのみ歎かるゝ哉

返し

玉葉　數ならぬ身ははし鷹の鈴か山とはぬに何のをとをかはせむ

いひはしむるおとこ

いかにしてぬるとつけまし吹風にたより空なるあまの釣舟

うちはに夕たちしける比おとこ

なるかみのをりにもかへす唐衣日も夕立はいつとなけれと

かへし

夕立のよるの衣はのかへりて雲ゐにのみそならむとをしれ

いしはらにすむおとこ久しくきこえねはとて

いとゝしく燃社わたれいしはらの中よりわれて出る思ひは

おとこのとはぬかうらみをこせたれは

とはぬはし恨むる物と思ひせは幾そ度かはいふへかりける

おとこのもとにむかへたるに琴をひかするにをむな
とたえたれは男の心もかはりたるやうにみえしかは

いかなれは哀と思ひし睦言のふかきをたゆるよと成にけん

此おとこ日くるれは出ていにけりいもうとのおとこ
もおなしところなる出ていにければおなし心になけ
きていもうとのいひをこせたる

夕されはひとつかひにて行君ををしとはいかゝ思はさるへき

（題闕）

侘ぬれはをしともいはす池にすむわするゝ鴨と我そ知へき

齋宮の女別當よそにあひて何ともいはて又の日袖の
中にやといひたる返事にへたうの君

主しらて空にうきたる玉をたに結ひとゝむる物とこそきけ

たゝみの中よりきり〳〵すのさ月はかりに出きたれ
は

きり〳〵すむしろいかにか思ふ覽たゝみの中に秋はきに鳴

もちふむ八月はかりに物なといひてつれなかりけれ
は夕くるゝまていみしうゝらみをきて出ぬとおもへ
と又たちかへりてかうしをうちたゝきてひとりこち
し

戀さのぬるに任せてねられねはおきてそきつる夜半の白露

返し
いかてかは夜半の白露置つらんね覺の床もたゝならなくに
　そきやう殿の宮女へたうのもとよりとし月ふれとた
いめむすへき事もなきことゝあれは夏齋宮女別當に
かくなんきこえたりしこよひこそきこゆへかりけれ
とて
いかにせむゆかすはあはしこすはみし幾世を限る命とも(なし)
　齋宮女御さいしゆよしのふをめしてこれか返事せよ
とおほせられけれは
ゆかす共こす逆逢はてやまはやめ此世とのみは契らさ(りし)を
　女へたう
逢もみす命もしらすつきもせすこひのみ山となりぬ計そ
　返し
しけからは戀のみ山もいりてみむ枝を交する影はありやと
　返し
我ゆへははちすの上にきてもとへあはれ何處に君を尋ねん
　このよしのふかをりのほりにこの文を尋ねにきけれ
はよしのふ
かりかねにあらぬ我身のとしをへてつてのみ渡る君か玉章
　かへし
かけてくるつての玉章なかりせは歸る鴈とも待たれ(さらまし)
　堀川とのゝあさりの君いたくわつらひ給とて母のも
とにおはしてたゝう紙に書付てこまこそみよとて
(新古)なからへむ年も思はぬ露の身のさすかに消んとを社思へ
　返し
(同)露の身のきえは我こそ先たゝめをくれむ物かもりの下草
　堀川の后うせさせ給へりし五七日七月七日にあたり
たりけれはもとすけかいひをこせたるあまになりた
るときゝて
たなはたにかしゝ衣を色ゝにみるらむ袖を思ひこそやれ
　返し
きてしよりぬれてのみふる藤衣かるたなはたのなきそ悲敷
　さとに久しくゐたりしに人ゝの久敷とはさりしかは
(玉葉)ひとりしてみしかきりをは忘れしと誰かは我を思ひ出たる

建長五年七月十四日。以二戸部本一書寫畢。此後亦於レ有二他本一者可レ遂二一挍一也。但難レ讀所。亦落字之所。有二少少一而已。

右小馬命婦集以村井敬義本書寫一挍了

馬内侍集

後凉殿の御局にうへわたらせ給ふて梅のはなのすくなく咲たるをけちめもみえしかしすくなけれはとおほせられしかは

盛りありてちらまくいかにおしまゝし心のとけき梅の花哉

おなし年の三月中宮の御かたにはなをかめにさゝせ給ひてこれかちる心よめとおほせられしかは

ちらしとや頼め初けむはかなくもとまらぬ花にそふ心かな

七月七日にはすのたまを作りてさりにし人のをこせたれは

思ひあまり頼めし中のくやしきは此世とたにも契らさりし〔を脱歟〕

ともたちのもとよりあまに成なんとありしはいかにといひたれは

後拾 しかすかに悲しき物は世中をうき立程の心なりけり

さりにし人のもとよりいかにそ人やかたらひたるとあれは

新拾 きみかこと思はぬ人のつらからは我も心はあくかれなまし（は ぬ集）

左大將久しくをともし給はて

あふ事のなきさなれはや都鳥うらみて跡も絶てとひこぬ

なとかそれよりもあれはかへし

とはぬまは袖朽ぬへし數ならぬ身よりあまれる泪こほれて

その夜たひなる所にきあひてまくらもなけれは草をむすひてしたれは

新古 逢ことはこれや限りのたびならん草の枕も霜かれにけり

あるきむたちいまくとてすかせは

頼めくる君しつらくはよもの海に身も投つへき心ち社すれ

返し

挿はへてかさしの花の共おりも仇なる物とみえにしものを

左大將こほりをつゝみて身にしみてなんおもふとあれは

後拾 逢事のとゝこほるまはいか計り身にさへしみて歎くとか聞

人をよせねはしゐていりきたるがわひしけれはちかことをたてゝ後にあはむとてやりたれは一日はかりありて

祈りくる我かたをかのちかとをそくたゝすの神にも有哉

返し

あふとをかたをかとのみ思ふ身は何にたゝすの神にかく覧

ふみをこする男の秋とたのめたるころなか月はかり煩らひていひをこせたる

命あらはさり共とのみ頼みたるあき待つけん心地こそせれ

左大將こほりしたるかたなと書きたるあふきをわかく心かはりなはおこせよとの給ひしかは奉るとてこほりたる池のつらにをむなをすへてけふりをたゝせてかく

もえ出るむねの思ひはたかけれとなみたの河は猶氷りけり

十月はかりにあからさまにきたる人のかへりなんとするにしくれのすこしすれは（どころ集）

後拾 かき曇れしくるとならは神な月けしき空なる人やとまると

しはす二ありし年しのひてやみなむまたはなこそと
　いひし人のうるふ月はいかゝ思ふといひたれは
みそかにも有へき物をゆきふるに袂のうるふ月の侘しさ
　人おほくかたらふとてあるきむたちのもとより
色々の花のなかにも女郎花いかなる枝に露とまるらん
　をむなともたちの御もとに久しくとはぬ事といひて
つらからは扨もやみなて春の日の恨まほしきあまにも有哉
　返し
つらしてふ心有けり春の日のわかうらなきにおもひける哉
　しそくなりし人のあるおとこにかたらはれてこれな
　んひとつまつとておこせたれは
ひとつ松結ひけりとも今そしるとくる心はときはならしを
　左の大将とのかへり給ひて雨ふるにははるときゝた
　まひて
つかのまも戀しき人はつれ〴〵となかめにものや思ひ増覽
　久しくありておほしいてゝ
風雅 ほとふれは忘れやしにし春雨のふるヿのみそ我は戀ひしき
　返し
同 いとゝしくぬれのみまさる衣てに雨ふるヿを何にかく覽
　むけにをとつれ給はぬころ
後拾 くもてさへかきたえに晃さゝかにの命を今は何にかけまし
歎つゝふれとも數にあらぬみはいかゝはすへき賤のをた巻
　かへし
かくて社よそにふれ共さゝかにの如何に戀しき物とかは知
　雪のいみしくふるにおはしてあかつきにかくきなら
　ひてこそはいかゝおもふへきとのたまへは
忘れなは越路の雪の跡たえてきゆるためしになりぬ計りそ
　返し
年ふともきゆるよもあらし白雪の千歳の松にふりし積れは
　かくてしのひて有ほとにえあはておとこきみ
今さらになにかわふへき君ならて此よのヿは思はさりしを
　返し
何かその露のほたしにあらぬみも君とまるへき此世ならねは
　やまさとなる人に雪のふる日
ふれはかつ消ぬる雪としりなからなに山里のしひて戀しき
　かゝるへきヿにあらすといひてあはぬ人のもとより
　なか月はかりにまたらなる草はををこせたれは
人こゝろまたらにみゆる草なれは枯ぬる人のしるし成へし
　かくてその冬うちとけてもあはさりけれはとしかへ
　りて二月ついたちころにつほみたる花にさして
あたにはと頼みし風しあらからは盛もなくて花や散なん
　返し
風も荒く花も程なく散ゆかは浮身をいかに成ねとかおもふ
　もとの人なと聞つけてさはかしくて得あはぬなりけ
　りおなし人こゝろうきことやさゝけむうしたれは女
　もむつかりてあはさりけれは五月五日におとこ
うき事をいつわすれてかあやめ草たえぬしたねを立る待覽
　返し
忘られぬ憂につけても菖蒲草いかにしたねの長からめやは
　かくてあるにさはれなといふころくれなゐのはなを
　おとこの見せにをこせたれは

くるしとて色に出れはあさえけり染てくやしき花をみる哉
　五月みやの御まへにあめいみしくふるにほとゝきす
のなきてわたれは人に歌よませたまひしに
とふかたそまつしられ暁郭公いかになくねそあま宿りせて
　おとこのし文字八字よむ比いひにをこせたるか例な
　らすや有けむ
知そめしをやくやしきしのふ草しる人もなし絶やしなまし
　このおとこよをかねたる夜ゆめにやみえけむいひた
　るに
思つゝぬる夜の夢を知らぬ身は胸にたく戀さめたにもせよ
　あるおとこのもとより
長閑なる春の浦にもすかためは猶こゆるきのいそかしやなそ
なきたむる涙の玉を衣手につゝむ人めに程そへにける
　つかひあしくしてみつけられてこひたる人さりぬと
　聞てこのきみ
人しれすぬれわたる身はなみた川いはれの池を哀とそ思ふ
　返し
おもほえす涙の川にぬれ衣をわれより外に誰かきるへき
　龍田山に二日はかりありてたつたやまもいかゝとて
吹風にけになんかすそ女郎花忍ひにかゝる露をしらなむ
　とあれは
さかのいろなるこゝろとやきく
　といひしかは
をみなへしつゝむわか身はのへなれや
　おなしき九月はかりに
思ふ人やゝ過ぬとや菊のはな雨を聞ても露にぬる覽

　ほかにとて返しつなとかをとはのといひたりしかは
　みつからきたるにあはねは九月九日きくにさして
菊のうへの露をはをきてなみたこそわたの衣の袖も乾かね
　しのひたりし人のもとより
朝をになかるゝとこのまくら哉我もうきゝの心ちのみして
　きり〳〵すのなきしをひとりことに
なきなたつ袖も有しをきり〳〵す草露けしと何なけくらん
　五月五日にこのきみ
新古 時鳥いつかと待しあやめくさけふも（は）いかなるねを（に）か鳴らん（べき集）
　かへし
同 五月雨の空（は）くもらする（おほれ集）郭公ときに鳴ねは人もとかめす
　その夜きたるにおくにゐるかけはみえてなしとてか
　へしたれは
ほのみえし月を戀つゝかへるさの雲ちの涙にぬれし袖かも
　今はかきりといひたりし。かはしかのうらにとのみい
　ひやる三日はかりありて
しかの浦にたのむ涙は盡せねとせきもとゝめぬあふ坂の關
　返しはせてしはし有ていし山へまうつときゝて
逢坂のせき山こゆるけふさへやなをやなみたの盡せさる覽
　といひたりしかは
白露の末〳〵こゆるあふさかのいとはるさめに袖そ濡ける
　また七月七日に
けふとたに契らぬなかは逢さかを雲ゐにとのみ聞わたる哉
　返し
あふ事をけふとなかけそ鵲のはしきくたにもゆゝしき物を
　人のきたるにわたのころもとたのめやしけむ

流れ行ことの葉にこそしら露の命をかけておきかへりつれ

これをきゝてあきのふのあそむ

さ月山み山かくれの草木とやことのはたにもかけてちりこぬ

またあるとおとこしのふ草につけて

しのふ草しのふやつまといひなから夜深く露のをける袖哉

返し

物おもふに秋は深くそ成にける軒のしのふの色かはるまて

このおとこけさかへりつる道にほとゝきすのなきつるといへは

こゝろみに空にかよひて時鳥人のためなるねこそなかるれ

大風ふきたるつとめてひはたにさしてある男のもとに

今朝みれはとまれる宿もなかり㒵忍ふの草もいかゝ成にし

おとこのとをき所へいくとて

草枕たひねの衣かはかすは夢にもつけむ思ひをこせよ

たひねのところより

獨ぬる宿にふすふる蚊遣火のさよふけかたに燃かはりつゝ

久しくあはてなてしこにさして

逢ことはから撫子のはるけくて思ひわつらふとこなつの花

つゝむことありて文なともかよはぬほとかきあつめてをこせたる

井せきする岩まの水の打忍ひ忍ひかねてそねはなかれぬる

いかなれはしらぬに生るうきぬなは苦しや心人しれすのみ

浮草に枕やすらむをしとりの夜はのとけきいやはねらるゝ

我戀にくらへてしかな雨ふれは庭のうたかた數をかそへて

ね覺には聞もしつ寛夜もすから雨の聲にはをとりやはする

返し

五月雨により一夜あめは忍ふれとそれより他の聲はせさりき

齋院よりうつへをたまへれは

歎きとてほと〳〵思ふ斧の音は祝のつえをきるにそ有ける

かへし

をのゝ音も尋ねさりせは玉椿祝のつえをいかてしらまし

人のもとにかれたるもみちの枝をやりたれは

霜枯のあふくなけきの枝なれは深き色とはみえすそ有ける

左大將ちかことふみをおこせ給ふてかはりのふみをこせよとせめ給しかは

千載 千早ふる賀茂のやしろの神もきけ君忘れすは我もわすれし

やすのふ文をこすれといひもはなたねはうりにかきて

うりふ山そのほとゝのみ頼めつゝ久しくなるは辛きわさ哉

左大將兵衞のすけにておはせしとき卯月に物をいひそめたまふて

新古 郭公こゑをはきけと花のえにまたふみなれぬ物をこそ思へ

返し

郭公忍ふるものをかしは木のもりても聲の聞えける哉

(此返し歌脱たり新古今により補ふ)

此男ふみをこするを女いみしくいふときゝて

岸ちかみうこかぬいはゝつれなきに何と開らむ涙のした水

しほるゝもといひたれは

かくれともうこかぬ岸の岩の上にいさ白波の碎けやはする

なをきせよとあるに二日はかりありてわたをたせたれは

しつのえの松にもあらす思ひよりあまりなかけそ岸の藤波

ある人三月はかりとをき所より

井手近きいもねぬ宿の淋しきにいとゝかはつも聲は立つゝ

またあき

秋風の吹はみたるゝ花すゝき結ひし心われにつけなむ

人をよせさりしかは

數妙にふしみふさすみ歎く共猶うかりける身をいかゝせん

いせへくたる人みちより

鈴鹿山こえもならはぬ道すからこふるはいかに侘（ぐるイ）しとか知

しのひたる人とおらはいかゝ思ふかきりなめりかし

といへは

續詞 人とはゝいかゝこたへむ涙たに心してやは袖をぬらさぬ

雨ふる日いみしくふるともかならすまいらんとあれ

はさらなりとて

なかれつゝ忍ふる袖に比ふれはけふ降くらす雨はあめかは

つゝむとありてあはてのみ有るにつの國へなんまか

りぬる有様にしたかひてかれよりも參らむといひた

れは

忍ひてもいかゝはすへき芦の屋の其やへふきの隙もあらしを

ゐたるまへより人のいきけるにこゑきこゆるほとな

れはおほつかなくてなんまかるといひいれたれは

まち侘てたてつる聲によふこ鳥雲井なからもこたへつる哉

といはせたれは返し

呼子鳥ひなをもとめてなくならはよそなる聲に慰めもせよ

しのひたる人かはたけをうへよとておこせたれは

風ふけは梢かたよる河竹のよゝになれなはねそたえぬへし

あはたの右の大との（道兼）夜ふかく歸らせ給て日かけ

をたまはせたりしかは御かへりきこえさせし

包め共うきに人めのおしけれはあけは日影のまはゆからまし

もりといふ所をゐにかきてよみしかは

春は花あきは紅葉とさそはれて人も立よる衣手のもり

かめのかたをつくりてこにうす物をはりてほたるを

いとおほくこめたりさふらふ人々によませさせ給ひ

し

君か代をかめのおなしにみすとてや河への螢ひかります覽

十月はかりにおもへるとよみてと宮より仰られしか

は

千載 ねさめして誰か聞らむ此頃の木のはにかゝる夜半の時雨を

とし比もろともにありふる人よそになりてとしとに

人のもてきけるうりをさゝけるを有けるとしをこす

とて

年毎にしらす顏なるうりつくりかりもりしつる秋にも有哉

なかたえたる人あしろになむ日ころあるとてもみち

にひをゝつゝみてをこせたるに

日をへてもいかにとふらんあしろ木に夜思出る人はとにて

かりそめにおもひし人のまめやかにかたらふ人いて

きぬと聞てうつろひたる萩のしたはに書きて

うつろふは下葉はかりとみし程にやかて秋にも成にける哉

人のこまつといふ所に侍りしに雪のいたうふりしか

はつかはしゝ

朝ほらけ思ひやる哉ほともなきこまつは雲にうつもれぬ覽

返し

埋むとも雪は消えなむ春きなはとふへき人のなきを社思へ
とをき所よりたよりあるにとはぬひとに
年ふ共すくす便りをみさりせは忘れぬ哉となをたのまゝし
さるへき所に夜な／＼とのゐして曉にはくるものゝ
ほかにとまりたりけれは
けさみれは露むすほゝる朝こほりとくる物とも頼みける哉
しのひたるこころにある人ふみのかへりことせねは
歌を得よまぬなめりとてなにはつをかきてをこせた
れは
冬籠り忍ふとすれは難波津にさくや此はなちりもこそすれ
ゐしたる人のもとにふみをやりたりけれは返事もせ
ぬに
山彦もこたへぬ春の呼子鳥なけとやこゑの絶ぬかきりは
むかしみける人こゆみをたよりにつけて今みつから
とりにこむといひけるか大かたにきたれとまたみえ
ねは
日くらしにまち心みむあつさ弓はからす人の思ひいてよと
返　し
ひくらしに春のうらみも梓弓思ひためたるつらきこゝろを
かたらふ人おほかる男のとをき所なりけるかのほる
ときくにまたみかありときゝて
こよひきみいつれの里の月をみて都に誰を思ひ出らん
かへし
宿とにねぬよの月は詠むれとともにみし夜の影はせさりき
よにそらことをいはれてなけくにふみをこせかたく
待人のたえてをとつれねは

後拾 うかりけるみのふの浦のうつせ貝空しき名のみ立はきゝつや
まつ人なきはえあふましきことを人々いひてこのこ
ろしも日もくるゝことなといひて
袂のみひるまもなくて此比の朝日にくるゝ空をみるかな
人のもとよりこよひはいきやすへきとあれは
よしさらは戀しきことは忍ひつゝ絶えすはたえぬ命と思はん
返　し
續後拾 戀しさのしのふ計にあらは社しぬる待まのいのち思はめ（をもみめ集）
こよひかならすこむとて來ぬ人のもとに
やすらはてねなましものをさよふけて傾く迄の月をみし哉
四月つこもりかたにむかしさふらひしともたちのな
き事をいひたれは
今さらに忍ひそわふる時鳥もとつ人よとねのみなかれて
おなしところにすはゝ（へてイ）たましつめ（鎭魂）してま
いらすとて
身から社とにも角にもあくかれめ通はむ魂のを絶たにすな
とてまいらせたれは
世にも皆憧れにたる玉なれはうらなきつまに留る物かは
かたらふ人のあはぬ比ほとゝきすの鳴つるはきゝつ
やといひたれは
新古 心のみ空になりつる郭公人のためなる音こそなかるれ（たのめ集）
むかしみしともたちのかもの祭のしたいし（次第司）に
いてゝかくなんまいりたるといひたれは
きみしもあれ道のゆきゝも定む覽過ぬる人はかつ忘れつゝ
くらまにまいりたるにとり井のもとに櫻いとさかり
なるをみすへき人もかなとおもふにもあかねは

かしはきの若き葉にさして
さはに皆おりたちぬ共はを若みわかゝり染めし宿の菖蒲は
　五月のなかあめにあやめのおちたるを宮御らむして
　あはれうたよめとおほせられしかは
菖蒲草何れの澤にねをとめて身をは長めにくたしはつらむ
　女ある人のもとに物いふにつゝめはかきの下葉にか
　きてをこせたる
露とけて思ひもをかしもの故にしたにこかれて何か忍ふる
　いものはに露のとまれるを
つれなくていもか下葉に置露はいかにとまれる物とかは知
　おとこかひをこすとて
數ならて千尋の濱に拾ひつゝかひや有とそけふを待ちつる
　ときゝてもとよりある人あしくするにむけにあはね
　はいひをこせたりし
中空にかくてや絶ゆるさゝかにのいと淺ましき心なりけり
　人のこむとてこさりしかは風のふきしに
賴め置て君こぬ宿の風の音は夜となれはそはけしかりける
　こむといひし人きて夜一夜ありけれとあはてつとめ
　てなとこすなりにしと云ひやりたれは
終夜田子の浦波よせし音をふしの高根に聞かさりけるに
　しのふる人にいひつかはしける
おこし火の炭をは灰にかくしつゝ埋まれぬ名の戀を社思へ
　兵衞のすけなる人かたらふとみな人きゝてのち中將
　にふみかよはしければ人のきゝていひたる
柏木はあめも人めもしけしとて三笠の山にふみかよふとか
　さらにわすれしと契りたる人にたえてある所をたに
　しらせねは
行かよふ跡たえぬるかみつくきの流れてとかや人の賴めし
　人をかたらひてあふおりあはぬおり有しかはあふき
　のはなしてをきたるにかきてをこせたりし
つき草のうつし心やいかならんむら〳〵しくも成ぬへき哉
　かたらひてとし比ありつるひとのゆふさり人のむこ
　になりぬと聞ていかたのかたをつくりてかきてやる
（新拾）大井川人めもらさぬけふやさは杣のいかたしくれを待らん
　正月にそらのけしきなともよしよめとみやのおほせ
　られしかは
うらことにあまはみるらむ初春のけぬるき風に涙やなこまん
　おとこ恨てひさしくをとせて
（新古）つらからは戀しきをは忘れなてそへてはなとかしつ心なき
　返し
かりにても心をかへてみましかは今は長閑に成もしなまし
　久しくこねはいひやる
をは捨の月はいかにか出たりしなくさめかたき人はみる覽
　このおとこつゝみてさるへきおり〳〵あふほとにい
　し山へ参るときゝてかへりて三月はかりに
あふ坂の關のまに〳〵花をみて春のきにける程もしられす
　返し
諸ともにあふともなくて逢坂の關のまに〳〵花をみにけむ
　人かたらふときゝ給ひてなかのくわむはく（道隆）
あやしきはぬれぬ人なきそめ川のかゝらぬ袖も朽果ぬへし
　みちの國のかみこうりをたちぬるつきのなりとてう
　たはわすれて侍さりける返し

霧ふかく鳴しかをみようりふのゝけにかりもりの心也けり
きむたうのきみこその春やりたりしむめのはなをふ
みにさしてをこせたれは
むかしににたる梅のはなかな
といひたりしかは
梅花むかしのことをうたかへと空のけしきのかはれるやなそ
さねかたのきみえてきたりこのふみありけるを見て
うらやまし散くる跡や都鳥ならひ有せはをくれましやは
すけゆきあふきををこせてこれはいかにわすれやし
にしといひやりたれは
時鳥忘るらんこそうの花のかけとそふへき我としらすや
みそきの日しのひてかたらふ人のもとより
うしろめた神も聞いれぬをなれは我を忘るゝ御祓しつらむ
ある人心うきをや有けむ
人こゝろよしみつしほの今よりは我つらくとも田子の浦波
中關白とのおはせんとの給ひてまへわたり橘のかき
りおゝせてすき給ひぬれは
こち風にこのみしるくてたち花のたのめしをの過ぬめる哉
つれ／＼なりし日人のふみをこせるに
かすかのに誰かまつとはつけつらんけふの子日に鶯のなく
かくて得あはぬころ風ふくつとめて
朝日さす草のゝもとに家ゐしてすはへする日はとに悲しも
此おとこおなし人をゐ中へゐていきて京へ登るとて
雪ふる日
山高み雪ふるさとに君をゝきておほつかなくも思ふへき哉
このおとこ京よりふみをこせたるに雪なむいみしう
ふるといひをこせたれは
我思ひ都のかせとふきてしはふりつむ雪はあらしとをしれ
日ころありて夢になんみつるいかゝといひたれは
人しれすねられぬ床のさひしさを誰とか夜の夢とみつらん
るいなる人のせいすれはあはてのみあるにおとこ
くれいかに如何にしてかは大井川井堰の水はもりぬへしやは
返し
大井河井堰につゝむ我なれやけふ暮かたになけきをそする
をとりたる男やなきにふみをさしてをこせたれは
吹風になひくとやきく青柳のいとあさましくおもひよる哉
わか心とかれにし人正月に
別れては春に社また成にけれ年はたゝにそとまらさりける
又たれも／＼はなれてとし比になりて三月はかりに
あめふる日
思ひきや春のなかめの長閑きに君を雲井になさむものとは
右大將ものし給ての比いき所もしらすほかにあれは
しのふれは空に涙もきりみちてこひしき人やいとゝ成らん
人のあくかれてこさりし比あるところにまつむしの
なきけれは
きみをのみ待虫のねのある物をいつれのゝへの露にぬる覧
こせちのところにしのひてあるに大とのゝ少將にて
おはせし時見つけ給てかゝるをなとありしかは
三笠山日影まはゆき影みるにさし離れすはかゝらましやは
ときこえしかは
つらしといふ君もをはり忘られて人めをつゝむ我な恨みそ
おなし所にてあるおこと

ほのかにもみはや慰さむと思ひしに心をしらぬこゝろ之兒
都にもなへてはいはし櫻はな誰にゝほひをまつかたらまし
たきをおとせはいろ〳〵のはなうきたり
山高みゝたれておつる瀧の糸はあやさたまらぬ錦なりけり
つゝしつはきのはなさきたる所にて
鞍ま山おほつかなしと人とはゝ名にはたかへる道と答へむ
むかし見し所の花をある所にうへさせ給たりけれは
まいりたれは
宿かへて匂ひをとるな梅花むかし忘れぬ人もある世に
またある人
むめの花いくとせ春をへたてゝか昔わすれぬけふにあふ覽
まいりたる人
しる人に匂ひなかけそむめの花昔のこともいかてしのはむ
むかしのともたちのもとより大きなるたちはなをふ
みの中にいれて
類なき戀する人のあたりにははな立花もかはかりやなる
かへし
思ひきや花橘の香はかりもこひしき人にならんものとは
正月ついたちの日いまはとしころとも聞えつへしと
いひたれは
年はかくあらたまるめる世中に雪ふり增る身をいかにせむ
つゝむとのみある人に
峯の雪谷のこほりにとちられて跡みえかたきみわの山もと
返し
三輪の山しるしの杉もみえぬまて降つむ雪に跡たえてやは
ある人この人をかたらはむとひとにもいひ文をもを
こせむと思ひける程にそゞろなるきむたちなんとの
女かたらふときゝてきくにさして
ちらすとて菊に心をかけたれは花こそいたくうつろひにけれ
ともたちのもとなりしその人にはなれて又のとし中
の子の日の松をむすひてけふは中のねのひとはしら
すやとて
後拾 誰をけふまつとかいはむかく計忘るゝ中のねたけなるよに
はしめのやうにもあらすなり侍人のねところにあふ
きをわすれたるやるとて
朝またきあれ行床に我を置てまた忘らるゝならひなりけり
しはしたのむへくもあらぬ人のもとに
ちる花に枕さたむとみし夢は明る夜比をいくよかそへん
七月七日けふの空のけしきいかゞ見るといひたれは
歎きつゝあまの川なみなかむれは絕まかちなる雲そわたれる
おなし日をみなへしをうへよとてひとののをこせたれ
は
彥星にしのふる人やかよふらんけふしも匂ふをみなへし哉
いたくあれたる人のいへにもみちちりて人もおさ
〳〵なきかきくおもしろくたてり女なかめたるに
木からしのしける紅葉に跡たえて人もみえこぬ宿のしら菊
いみしき事ありともよそ〳〵にならしと契りける人
さしもなくなりてをかせたるてはこをさへにこひに
をこせたれはやるとて
後拾 玉くしけ身はよそ〳〵に成ぬともふたり契りしことな忘れそ
人ようさりこんとてこさりしを其をこたりをもしら
むとてようさりはかならすとあるに

同
待ほとのすきのみゆけは大ゐ川たのむる暮もいかゝとそ思
ときく〳〵みゆる人むまはそこに入いるといひたれは

續詞
あくかれて行衛もしらぬ春駒のおも影ならてみゆる社なき（は）（よもなし集）

ある所の御まへにきくあはせ給とてあるものゝ月あ
かきにこひありくをみて

月影にまかふとや思ふきくの花うつろふ色はヿにも有かな

はらからなる人のはゝきといふ所にてをともせねは
たよりにつけて

後拾
ゆかは社あはてもあらめはゝ木ゝのありと計は訪つれよ君（ず）（かし集）

なかあしくなりし人秋になりて此ころはいかにとい
ひたれは

きみしあれはね覺の風もしらさりき秋珍らしき比にも有哉

返し

君により人を戀しとしらるれはきみを哀とおもひそめつる

ゆのこしまといふ所をくのかみにすへて

行かへり長閑ならねはこしかたのしのふ計にまつ人もなし

よの中のいとはかなきころむかしさふらひしところ
に

いかゝせむいかゝいはまし日暮しのなきても餘るよの儚さを

さるへき所にてしのひてよるく〳〵きける人まかてゝ
つとめて

秋近き萩の下葉のかけてたにもりにし露そよるはつゆけき

返し

かけ草の下葉にかゝる露にても戀しといかに思ひ出けむ

ものへ行人にかゝみとらすとて

増千
みなれよとそふる鏡のかけたにも曇らてすくせ人忘る共

とう三條の花をるりのつほにさしてたのこいのはこ
にすへてこれはちりにけるをあたらしくさしてまい
らせよとて少納言のくら人につかはしゝ

櫻ばな誰に心をかよはしていかにゝほひをとゝめさるらん

さふらひし人のほかなるにふみ給とて

しめのうちの同しいかきの都鳥馴にしともを尋ねてそとふ

をろかならすちきりせる中いかゝありけむおとこ

君もいひ我も契りしヿのはゝかくしもかれん物とやはみし

ゐに女のものへまうてつる山ちにいろく〳〵の花ちる
をとゝまりてみる

色く〳〵の花の心をちらさらは故郷ありとおもはましやは

此ころもろともにある人つとめてのはきのけしきな
むといとあはれなるかならすおきて見むとちきりて
みるつとめてしも露といふものなしせむさいともよ
くかはきたりうき事かきりなくて

萩の上の枝もたはく〳〵をく露をつゆけさいかて乾きたる覽

このあかつきにとくおきんこれはをそきなりとてお
きよといへは

結置てとくと思ふ共さゝかにのいかに纏はむ露ならぬ身は

物かたりする人いつくにかあらんわかやうに絶えて
ねぬ人はあらしものをたれとかたらはんと思ひつら
ねられぬに夜ふけてほとゝきすのこゑ一たひなきて
やみぬれはいつこならむとおほえて

やとく〳〵になくねはゆめか郭公ねぬ我はかりきくよしも哉

やむことなき人の御文一たひ有て又をとつれもなけ
れは五月つこもり比に

とふ螢まとのこひにあらねとも光ゆゝしき夕やみのそら

をとろへはてゝうち院に住に歸る雁をきゝて

（後拾）とゝまらん心そみえぬ（ぬ）歸るかり（ん集）花のさかりを人にかたるな

殿上にてなき名をいひたてけれは

燃こかれ沖の燒野のくゆる上にみえぬなき名をおほす成哉

右馬内侍集以村井敬義本挍合

羣書類從卷第二百七十三

和謌部百二十八　家集四十六

伊勢集上

いつれの御時にかありけんおほ宮す所(七條后)ときこえける御つほねにやまとにおや(繼蔭)有ける人(伊勢)さふらひけりおやいとかなしうしてをとこなともあはせさりけるを御息所の御せうと(仲平)年頃いひわたり給けれとしはしはさらにきかさりけるをいかゝ有けん思ひつきにけりおやいかにいはんとなけきわたりけるを年ころへにけれはきゝつけてけりされとすくせ(宿世)こそはありけめとてとにいはさりけりたゝわかき人はたのみかたき物をとそいひけるほとに時のおほひまうち君にむこにとられにけり其をりにそおやもされはよといひけれは女はつかしと思ほとに此男のもとより人をこせたり此女の家は五條わたりなるに來てかき(補)の紅葉(このはゝ集)に哥をなんかきつけゝる

後撰　人すますあれたる宿をきて見れは今そ紅葉の錦おりける

女心うき物からあはれにおもほえけれは

同　なみたさへ時雨にそひて故鄕は紅葉の色もこさまさりけり

とてねすもちの紅葉につけてそやりける男いとおかしと思けり女今は我をはよもとはしと思ひてやまとへくたるとて男のもとへやりける

古今　三輪の山いかにまちみん年ふとも尋る人もあらしと思へは

をとこ返し

同　もろこしのよしのゝ山に籠るとも思はん人に我をくれめや

をとこのもとより

後　世をうみの淡と消ぬる(にしイ)身にしあれは恨むる事そ數な(まさイ)かりける

ならさかにおいてをこせたりける

同　わたつみと賴めし事の(も)あせぬれは我そ我みのうらを(は集)恨むる

やまとに三月はかり有けるにさう／＼しく寺めくりせんとてりうもんといふ寺にまうてたりける正月十一日はかりになん有ける此寺のありさまは瀧は雲の中よりおつるやうになん有ける仙人の岩やといふ所はいとあはれに年つもりて岩の上に苔やへにむしたりみるにあはれにたうとくのみおほえてなみたはおつる瀧にもおとらすなかむるほとにさかもとにて雪かきくらし降ほとにいさ哥よまんといふに此女

古　たちぬはぬきぬきし人もなき物を何山姫の布さらすらん

とよみたりけれはを人よますなりにけり今日はみち

に出てこしといふ所にやどりぬ

みもはて（で）す空にきえなて限りなく厭ふ浮世に身の歸りくる（うきみのよにかへるらんイ）

とひとりこちてそてしほるはかりなきぬらしたりけるかゝるほとにかの御息所の御もとよりはやのほらせよとめしたりけれははや(綴喜)のほり給ひね宮つかへをこせよと思しかと思はせていふになんしぬる心地してける扨のほる路にて伏見といふ所にて

名にたてゝふしみの里といふことは紅葉を床にしけは成覧

つかうまつるに此男は又をこせあはんなといへりあはて有けるに此男のあにゝあたる男有けりたのみ給なあなおさなわれを思へなとせちにいふ文なとかよはせてさらにあはさりけれはかくいふをもとの人しりたりけり女の里にて前栽のおかしかりけれは手すさみにおはなをむすひたりけるを初めの人きてみて

古 花すゝき我こそしたに（ふかくイ）頼みしかほに出て人にむすはれに覧

とて物を聞たるはやといひけれは人かすならさらんにはなとかはとてこそなと打とけたるけしきにていへは男もいとあはれと思ふ女はされとあはてやりつゝあにの男なとかまいり給はぬ人のこゝろをいひておほすやとて

後 ひたふるに思なわひそふるさるゝ人の心はそれそよのつね

返　し

世の常の人の心を（もイ）またみねはなにか此たひけぬへきものを

此男御心のつらけれはよしのへなんまかるとて

同 ひたふるに厭ひはてぬる物ならは吉野の山に行ゑしられし

返　し

後 我宿とたのむ吉野に君かこは同しかさしをさしこそはせめ

かくてみやす所なやませ給けれはあつまかさふらふきの藏人といふして此はしめの男あからさまにしもにおりよ物いはんといはせたりけれは返事に心をしはしなくさめてといふふるとのはしをなんいひたりけるをとこ

よひのまにはやなくさめよ石上ふりにし床も打拂ふへく

返　し

わたつみとあれにし床を今更に拂はゝ袖やあわと消なん

といひたりけれは人ゝよひのめさましてなんあはれかりけるまた人かすともせぬに心さしいとふかき人そひていひける文をこせけれと返事もせさりけれは

山かつといへ共かひそなかりける山ひこそらに我答へせよ

猶返事もせさりけれはあかぬとけいせよともいひはなてといへりけれは

後 いなせともいひはなたれすうき物は身を心ともせぬよ成覧

かゝるに時の大臣流され給むこにて(敏相)兵衞のすけより但馬介になされてなかされけるをたゝにてはさしもおほえてやみにしをかくとほくなかれゆきたるかあはれなる事といひたりけれは

かけていへは泪の川の瀬を早み心つからやまたはなかれん

同女年へていふともなくいはすともなくよはふを返事もせさりけれはこゝらの年月に成ぬれとなとかみつととの給はぬといへりけれはたゝみつとのみそいへりけるそれより此女をみつとそつけたりけるをと

このをこせたりける

立歸りふみゆかさらは濱千鳥あとみつとたに君いはましや

返し

としへぬると思はすは濱千鳥ふみとめてたにみへき物かは

夏のいとあつき日さかりにおなし人

夏の日のもゆる思ひのわひしきに水こひ鳥のねをのみそ鳴

返し

徒にたまる泪のみつならはこれしてけてといはまし物を

かういふ人〻の事をもきかて宮つかひをのみしけるに時の帝(宇多)めしつかはせ給けりよくそけしからぬ人の事をきかさりけるとみつからも思ふおやなともいふほとにはらみにけり男君をそうみたりける我心いとうれしと思ひけりつかうまつる御息所は后にゐ給ひぬうみたる子はかつらといふ所におきて雨のふる日うちなかめてゐたりけれは宮のよみて給はせたる

(拾)月のうちのかつらの人を思ふ（こふとてやイ）とや雨に涙のそひて降らむ

御返し

(古今)久堅の中におひたる君（さと集）なれは光りをのみそたのむへらなる

かくて帝おり給て三年といふに御くしおろし給て仁和寺といふ所に住給ふ時〻きさいの宮おはしましかよふ時にきさいの宮世になくかなしとおほすつかふまつりし人もいみしうかなしと見たてまつりしもとすみ給し所に帝おはしまして御ときこしめすつかうまつりし人〻昔たちなとめしあつめておろし給ふ宮の御方よりかくよみてまゐらせたる

言の葉に消せぬ露はをくらめや昔おほゆるまとゐしたれは

御返し

うみとのみ閑居の中は成ぬめりそなからあらぬ昔かみゆれは

となん此帝につかうまつりて子うみたりし人はよにさひはひなき物なりけれはうみたてまつりし昔八ッに成給ふとしうせ給ひにけれはいみしうかなしと思にもおろかにおほゆれはさらにいふかひなししなんと思にもしなれすよるひるなくほとにみつとつけたりし人のもとよりいひをこせたりける

思よりいふはおろかに成ぬれは例へていはん言の葉そなき

とあれはさらに物おほえて返事せすかへるとしの五月の曉時鳥の鳴を聞てひとりこちける

しての山越てきつらん時鳥戀しき人のうへかたらなむ

いまは男を心うかりてみやつかへをなんしけるきさいの宮の御こゝろかきりなくなまめき給ふて世にたとふへくもあらすなんおはしましける此人さうしには前栽をうへてなん住ける秋里にまかてゝあるにかの宮よりなとかまゐらぬまゐれ花盛も過ぬ松虫も鳴やみぬめりとの給はせたりけれは御返にきこえさせける

松虫も鳴やみぬなり秋の野に誰よふとてか花みにもこん

御返し

よふとしもねには聞えて花すゝき忍ひに招く袖もみゆめり

又まゐらする

人もきぬ尾花か袖にまねかれていとゝあたなる名をや立南

常になやましうのみし給ひけるをつひにみな月の八

目になんかくれ玉ひにける淺ましうかなしくてつかうまつりし人〻もさま〴〵にあつまりてよるひる戀なき奉るに後の御わさのくみのいとをなんよりけるしもなる人いとはよりはて給ひつや今は何事をかし給ふ雨をなかめてなんこゝには侍といひあけければいとはよりはてゝいまはねをなんよりあはせてなき侍といひたりければしもの人

より合せてなくなる聲を糸にして我泪をは玉にぬかなん

興つなみ　あれのみまさる　宮のうちに　年へて住し
伊勢の蜑も　舟なかしたる　心ちして　よらむかたなく
かなしきに　泪のいろの　くれなゐは　われらか中の
しくれにて　秋のもみちと　ひと〴〵は　おのかちり〴〵
わかれなは　頼むかけなく　なりはてゝ　とまるものとは
花すゝき　君なき宿に　むれ立て　そらをまねかは
はつかりの　鳴わたつゝ（り脱歟）　よそにこそみめ

いとみそかに人にあひたりけるを人〻やう〴〵いひのゝしりけり男のかうふりのはこに玉をなん入たりけるそれかをに

瀧津せと名に流るれは玉のをのあひみし程をくらへつる哉

こ中宮のまた東宮の女御と聞えし時題給はせてよませ給ける屏風の哥男のきあひて物いひたる繪なん有ける梅花見るたよりにものいひそめたる女にをとこ

見し人に又もやあふと梅花さきしあたりにゆかぬ日そなき

返し

一度にこりにし梅の花なれはちりぬときけと今はみなくに

櫻花盛りおなしをとこ

わかもとにいささそはれよ櫻花なに山里にかくれてはさく

返し

世にさかぬ物にありせは山櫻人にあまねくつけさらましや

藤の花さきたるを男來てかいまみて女のもとへやる

藤の花けふみつるよりこむらさきむら〴〵色そ深く成ぬる

此男來てかとに立やすらふ花たちはなにほとゝきす鳴男のよみてをこせたり

とにたてるわれや悲しき時鳥花橘のゐたにゐてなく

返し

何とも君をはしらし時鳥きなからなくはさかにやはあらぬ

六月みそきしたる所に男きあへり男

年なかに我歎きとは成ぬれは且に身そくともうせしとそ思

返し

歎をはなてゝはらふ大ぬさははや河のせに流れ出ぬめり

七夕の日

朝またき出てひくらんけふのをに心なかさをくらへてし哉

返し

棚機のなかきをゝしてくらふ共心のかたやまつはたえせん

秋の野に花見にいくと聞て男

秋の野に出ぬとならは花すゝきしのひに我を招きやはせぬ

返し

何方にありとしらめや花すゝきはかなき空をまねきたて南

男せちに物いはんといふほとに時雨のすれはかとよりいひ（に）いるゝ

わたつみの底し深くはいれ（らイ）す共時雨にだにもぬらさゝら南

しひていひければよひ入て物なといふ女

ふりとけぬ時雨はかりに山彦の聲をはかなくきゝかはす(わかずイ)哉
　しはすに男來りあひぬへきやうなりけるをおや聞付
　てさけきけれは女

夜こゆとたれかつけゝん逢坂の關かたむめり早くかへりね
　といふほとにゆきのいみしうふれは

歸るさの道の行へもおもほえすこほりて雪の降しまされは
　といふほとにあけぬれは男

［新古］あふ事のあかぬよなから明ぬれはわれこそ歸れ心やはゆく
　長恨歌の御屏風亭子院のかゝせ給て所々よませ給け
　る帝の御手にて

［續後］紅葉はに色見えわかてふる(ちイ)物はものおもふ秋の泪成けり
かくはかりおつる泪のつゝまれて雲の便りにみせまし物を
かへりきて君おもほゆる蓮はに泪の玉とおきゐてそみる
［續後拾］玉すたれ明るもしらてねし物を夢にも見しと思ひかけきや
くれなゐにはらはぬ庭は成に皃悲しきとの葉のみちりつゝ
　これはきさきにかはりて

導へする雲の舟たになかりせは世をうみなかに誰かとはまし
ゐる雲の人はきえせぬ物ならはみをと涙はなになかさまし
月も日もなぬかの夜の契をはきゝしほとにも又そわすれぬ
消し身に又もけぬへし春かすみかすめるかたを都と思へは
木にもおひす羽もならへす何しかも涙ち隔てゝ君を聞らん
　内侍督の御四十賀きよつらの民部卿し給ふ御屏風に
　わかなつむ所

［拾］春の野のわかなならねと君か爲年の數をもつまんとそ思ふ
梅のかたはらなる竹にたかうなぬくとて

竹の葉に散かゝらなん梅花雪の中をもほるとみるへく
　櫻の花さける川つら
水底にうつる櫻のかけみれはこの川つらそ立うかりける
　池のつらなる松に藤さける所
わか宿のかけともたのむ藤の花立よりくとも涙にをらるな
　石井ある所
わくとのみめにはみゆれと我宿の岩井の水はぬるまさり皃
　瀧のもとなる人
水上とむへもいひけり雲井よりおちくるともみゆる瀧かな
　鶴立る所
遙なるほとに立まふあしたつはわかまへちかく涙もよせ南
　鶴雲ゐにあそふ
［拾］大空にむれたるたつのさしなからおもふ心のありけなる哉
　藻かりたるあま
心して玉もはかれと袖をにひかり見えぬはあまにそ有ける
　松のするの海にひたれる所
海にのみひちたる松の深緑いくしほとかはしるへかるらむ
　わたつみより舟こき出たる所
はる〳〵と雲ゐをさして行舟のゆくすゑ遠き心ち社すれ
　あまの家烟たつ所
袖ぬれてあまのたく火はみえねはや雲と烟の立のはるらむ
　亭子院の六十の御賀に京極の御息所のつかうまつり
　給御屏風の哥子日する所に小松いとちいさきおほか
　り
おふるより年さたまれる松なれは久しきものと誰かみさ
　松に藤かゝれる所

賴みつゝ懸れる藤は松の木の千世といふ事も(まかす)そ有ける
竹おほかる所
年とに生そふ竹の世ゝをへてかはらぬ色を誰とかは見ん
北の宮の御もたてまつるにおとゝの御送物の屏風の
哥水のつらに松ある所
いにしへの心もたえす行水にわか松かけもけふこそはみれ
舟に乗てうき草とる所
(新千)ねをたえて水に浮へる浮草は池のふかさをたのむなるへし(りけりイ)
女郎花折て硯のもとにおける男
女郎花見るにこゝろはなくさまていとゝ昔の秋そ戀しき
かりする人の田舍の家の田なとのまへなるにちこう
よりたる所
かりにくときくに心のみえぬれは我袂にはよせしとそ思ふ
神樂
年とに神をそいのる榊葉の色もかはらてあらんとおもへは
きさいの宮の五十賀内にてせさせ給しに御屏風の哥
はらへする所
みそきつゝ思ふ事をそいのりつるやほ萬代の神のまにく
七月七日たらひすへてかけみる所
あらはなるかたにしも住あしたつは千世をみよてふ心之兒
是も后の宮の御賀おほきおとゝのつかうまつり給し
御屏風の綺に松に鶴立る所
(新古)すみの江の濱の眞砂をふむ田鶴は久しき跡をとむる成へし(けり集)
紅葉散まにさけのむ
まとゐする身に散かゝる紅葉はゝ風のかつくるにしき成兒
陽成院の帝の御七十賀にうちみたり箱に鶴龜菊なと
まきたり
露かゝる菊の中なるあしたつはいま幾度か千世かそふらん
式部卿の宮の前栽合に草のかう
草のかう色かはりゆく白露はこゝろをきてもおもふへき哉
りうたん
(新勅)風さむみ鳴鴈かねの聲すなりうたん衣をまつやかさまし
(新千)心のみ雲ゐのほとも通ひつゝ戀こそわたれかさゝきのはし
(續後撰)梅の花香にたに匂へ春立てふるあは雪と色まかふめり
ふる里はたれきかめとや鶯の花より後に春をつくらん
亭子の帝の小野なるゆきとしか家に梅花御覽しにみ
ゆきせらるゝに
(續古)思出て見にこさりせはむめの花誰に匂ひの香をうつさまし
(後)關こゆる道とはなしにちか乍らとしにさはりて春をみぬ哉(まつ集)
櫻花あたにちらさぬ事をたにわか心にもまかせてしかな
齋院の御屏風の哥春山に行人あり
(拾)散ちらすきかまほしきを故郷の花見てかへる人もあらなむ(は集)
萩の花見たる所
うつろはん事たにおしき秋萩にをれぬはかりもおける白露
京極院に帝おはしましして宴せさせ給ひまゐれとあれ
ばまゐりて池に花ちりなんとする心を
(古)年を經て花の鏡となる水はちりかゝるをやくもるといふ覽
(同)春ことになかるゝ川を花と見てをられぬ水に袖やぬれなん
又の日
けふまてと流れいてぬに水上の花はきのふやちりはてに劔

返しするなは
櫻花ひとさかりなる物なれはなかれてみえすなるにや有覧
歌合の時亭子院
（新勅）淺みとり染てみたれる青柳のいとをは春の風やよるらん（とくイ）
（千載）水の面にあやふきみたる春雨や山のみとりをなへて染らん
（古）青柳の枝にかゝれる春雨はいともてぬける玉かとそ見る
みる人もなき山里の櫻花外の散なん後そさかまし
あふ事の昔にたへにし我身よりいくらの泪なかれいつらん
哥合のうたかすかのとき
（新古）山櫻ちりてみゆきにまかひなはいつれか花と春にとはなん
ぬれつゝも雨には行んまつかさは千年の春をもらさゝら南
（新後拾）やをとめのをみの衣のきなから（やまぶみイ）になれぬ程をは誰かしる覧
（續後拾）みそめすもあらまし物を故郷の花に心のとまりぬるかな
宮　に
（續古）もろともにありし昔を思ひ出て花見ることにねそなかれける（こそなかるれ集）
からさきにて
（古）なみの花おきからさきてみえつる（ちりくめり）は水の春とも風そ成ける（ふきイ）
家の花散を見て
おひ風の我宿にたに吹こすはゐなからよその花をみましや
春物おもふ頃
（後）櫻花匂ふともなく春くれはなとかなけきのしけりのみする
（同）白玉をつゝむ袖のみなかるゝは春は涙のさへぬなるへし
四月一日宮にて
いつくまて春はいぬらん暮はてゝ別れし程はよるに也にし

返し兵衛の命婦
くれはてゝ春の別のちかけれはいくらの程もゆかしとそ思
（新古）春のよの夢にあへり（りつ）とみえつれは思たえにし人をまつかな（そまたるゝ集）
風さへもてさはくかな櫻花心にたにもちるをまかせて
二聲と聞とはなしに時鳥夜ふかくめをもさましつる哉
なてしこいとおかしきを隣にやるとて
（拾）いつこにもさきはすらめと我宿のやまと撫子誰に（をこま集）みせまし
（新拾）ひとりのみぬる床夏の露けきは泪にさへや色は染らん
年を經て物いひわたる人の
（後）たのめつゝあはて年ふる僞にこりぬ心を人はしらなむ
返　し
（後）夏虫のしる〳〵まとふ思ひをはこりぬかなしと誰か見さ覧
はるかみの宰相の北方のまへよりわたり給とてせう
そこをのみいひ入給へりけれは月のあかき夜になん
（拾）雲井にてあひかたらはぬ月たにもわか宿過て行時はなし
五月雨に物おもふ時の村雨は身よりふるとはまと成けり
夏虫のおもひに入てなそもかくわか心からけなんとはする
朱雀院にて心にもあらて人の鶴を殺してけるを今一
つの鶴いみしう戀てなきけるを雨の降日なん
（後）なく聲にそひて泪はのほらねと雲の中より（うへ集）雨と降らむ
九月九日よふかさなりけれは
（同）菊の上におきゐるへくもあらなくに千年のみをも露に爲哉
大和におや有けるをうせて後初瀬にまふすとて
なくたにもしる人にせよ山ひこも昔の聲は聞しれるらん

後 獨行事こそうけれ故郷のならのならひてみし人はなみ
　山のへにて
同 草枕たひとなれはや山のへに白くもならぬわれとまるらん
　帝前栽うゑさせ給て和哥よめと仰られけれは
同 植たてゝ君かしめゆふ花なれは玉と見えてや露もおくらん
　しをに
うけたむる袖をしをにてつらぬかは泪の玉の數は見てまし
露たにもおくとは見えぬ秋の夜はふけしを西に月のみゆ覽
いかなれは西に見ゆ覽月かけのまかふまてにも悲しき物を
うき事をおもひつらねてかり金の鳴こそ渡れ秋のよな〳〵
　七條の御息所の御五十賀をおほきおとゝのせさせ給
　ひし御屏風の繪に秋の月かけ
我やともてりみつ秋の月影は長きよみれとあかすそ有ける
　家の前栽にすゝむしはなちたる夜いたうなけは
拾 いつくにも草の枕をすゝ虫のこゝをたひとは思はさらなん
　なき事人のいひける頃
よとゝもにわかぬれ衣となるものはわふる泪のきする成覽
吉 しからみに袖をかくせとせきとめすなかるゝ物は泪なり覽
新勅 わひはつる時さへ人の悲しきはいつこをしのふなみた成覽
あひみても包む思の侘しきは人まにのみそねはなかれける
　久しうおとせぬ人に
吉 故郷にあらぬものからわか爲に人の心のあれてみゆらん
　亭子院の御屏風の和哥
續古 うきしつみ淵瀬流るゝもみち葉は深く淺くそ色もみえける

　ひたはへたる所
ひたはへてもる綱をのみ引時は稲葉に露そとまらさりける
　花のいとおもしろきを折て式部卿の宮にまいらすと
　て
故郷のあれはてにける秋のゝに花みかてらにこん人もかな
　御返し
秋の野に我松虫の鳴といはゝをらてねなから花は見てまし
　人の
いはせ山谷の下水打しのひ人のみぬまはなかれてそゆく
　返し
瀧つせの速からぬをそ恨つるみすとも音をきかんと思へは
　はらからのなくなりたるを戀わたる頃
後 おもかけをあひみる數になす時は心のみ社しつめかたけれ
　秋うたて人の物いふ頃
しるといへは枕たにせてねし物をちりならぬ名の空に立覽
浦ちかく浪の打よるさゝれ石の中の思ひをしるやしらすや
みよし野の山のした風さむからしいもせの川も浪高くみゆ
白浪の打おとろかすうきしまに立る松たにねこそわふなれ
難波潟みしかき葦のふしのまもあはて此よを過してよとや
沖津藻をとらてやゝまんほの〳〵と船出しとも何によりそは
　人にしらるへきかきりしられてつらく物の有ける頃
人しれす絶なましかは侘つゝもなき名そとたにいはまし物を
　人の心かはりたる頃繪に松に浪こえたる所を見て
續古 松かけて頼めし事はなけれ共なみのこゆるはなほそ悲しき
　友たちなる人つくしへゆくに
後 おさへつゝ我は袖にそせきとむる舟こす汐になさしと思へは

返し
おくれすそ心にのりて歸るへき我は涙を浪になしつゝ
うたかふ事ありて人の玉を給はせたれは
玉ならぬ身のうき事はきよけれとみかける物にいはぬ也覧
夢にてもみつとはいはし朝な〳〵我面影にはつる身なれは
人のそらことといひける頃
うき事のかくわく時(ん集)は涙川めのまへにこそおちまさりけれ
拾 さもこそはあひみる事の難からめ忘れすとたに云人のなき
返し
年ふれといつも我こそ忘れすの濱千鳥とはなきわたりけれ
又返し
逢事のかたにおりゐる芦たつのすになく聲は聞えやはする
新後 泪にそうきてなかるゝ水鳥のぬれては人にみえぬものから
おとこ
庭鳥にあらぬ聲にも聞えなん明ゆく時はわれも鳴にき
返し
曉のねさめの耳にきゝしかととりより外の聲もせさりき
有はてぬ命まつまのほとはかりうき事しけく思はすもかな
屏風に七夕のかけみたる所
わたるといふ影をたにみし七夕は人のぬるまを待も社すれ
年をへて思ひはすみに有年らおきひはつかぬ物にそ有ける
たか爲にこる歎とか打つけにになひもしらぬ我におほする
屏風の繪に夜ひと夜物おもひたる女のつらつえつき
たる所
夜もすから物思時のつら杖はかひなたゆさのしられさり覧

屏風の詞
拾 山里にやとらさりせは時鳥きく人もなきねをやなかまし
是も繪に恭うちたる所
をのゝえもくつ計にはあらね共歸りにたにもみる人の無き
屏風の繪に藤の水のつらにさける
をりとめてみまくほしさに藤の花陰をたにとや涙のをる覽
式部卿宮のうせ給て御四十九日はてゝ人ゝまかつる
に
かなしさそまさりにまさる人の身にいかておほかる泪成覽
君により侈きしにや我はせんこひかへすへき命ならぬに
ことかりたる人に
後 あふ事のかたみ(にの)の聲し高から(けれは集)はわかなくねとも人は聞なん
人に
みにそへる影とも人を爲てしか後ろ安さをみせんと思へは
夢ならてあふ事かたき世中は大方とこをおきすやあらまし
ぬきとめて數もみるへく新玉のを計りたにもあふよしも哉
わかとや雲の中にも思ふらん雨もなみたもふりにこそふれ
身の浮ふ事をもしらてかは中におりたちぬへき心地社すれ

伊勢集下

八條の大將の四十賀權中納言のし給ふ屏風の繪に子
日松家に植たる所
（拾後）千歳ふる松といふ共植てみる人そかそへてしるへかりける
柳ある家
我おもふ事はしらねと青柳のいとさへなひく物にそ有ける
巖に鶴たてり
岩の上をすみかにしたる葦田鶴は世を長閑にも思ふへき哉
女郎花おほかる野に鷹手にすゑ人たてり
（拾）秋の野の花のなたてに女郎花かりにのみくる人にをらるな
文をこせたる人のあるをたかもとにあるそとはす
れはおやのなくなりたるいかに侍るになん有ける
大空にとふてふをのとほけれは雲の上にそさして聞ゆる
返し女
濱千鳥つはさのなきをとふからに雲ちをいかて思かくらん
家ちかゝりけれは又男
鳥なき島と成なは飛さらすまちかきえにもすまんとそ思
此返事にかみをむすひてやりたりけれは
なこの海の淸きなきさの濱千鳥ふみおくあとを涙やけつ覽
返し女
なこの海の荒そまさらん奥つ涙なこまんかたの淺さ求めよ
又　男
なこの海しあれ増るへき物ならはこかるゝ船を打よせよ涙
返し女
荒なから舟よすへくも思ほへすかた定めても涙のたゝねは
又　男
なみ高みうらへによらぬわれ舟はこちてふ風や吹と社まて
女
追風に舟はなほりて吹ぬ共あまのいかりにとゝまりやせん
又　男
風吹はゆかん〳〵とまつ舟にいかりをおろす人はあらしな
をとこ
玉葛われくる事を君しみはつらなからにもたえしとそ思ふ
をんな
打はへてくるを見る共玉葛手にたにかけしむすひしらねは
子ありときゝて
玉葛むすひもしらぬ物ならはこのいてきなんをそあやしき
かくいひてまいらん〳〵とはいひてさすかにえこて
初雪のふる日
神な月時雨計りはふらすしてゆきかてにのみなとかなる覽
返　し
雪ませてみへき物かは神な月時雨に袖のぬれも社すれ
返　し
風吹はとまらぬ雪の命もていかむとおもふとのはかなき
春宮の御息所の御賀を中務の宮のし玉ひける御屏風
にわかなつめる所
春日野のわかなの數は殘してむ千とせの春も君そ積へき
いなりの山こえしたる所
いなり山行かふ人は君か代をひとつ心にいのりやはせぬ
をしからぬ命なれ共心にもまかせたゝねは浮世にそふる

はては身のふしの山とも成ぬるかもゆるなけきの烟絶ねは

（古）あひにあひて物思ふ頃の我袖に宿る月さへぬるゝかほなる

（後）いかてかく心一つをふたしへにうくも辛くもなしてみす覧

堀川院にとさとてさふらひける人のみちのくの介つねくにといふ人のめに成てくたるに

鹽かまのうらこきづらん舟の音のきゝしか如く聞は悲しや

返し

しをかまのうらこく舟の音よりも君をうらみの聲そ増れる

つくしへゆく人に

（後）待わひて戀しくならは尋ぬへくあとなき水の上ならてゆけ

かひへゆく人に

（同）君か世はつるのこほりにあえてきね定めなき世の疑もなく

おもふ事あるおりに

見しゆめの思ひ出らるゝよひをにいはぬをしるは泪成けり

隣なりける人のそこのに見くらへよとて花をゝこせたりければ

春にさへ忘られにける宿なれは色くらふへき花たにもなし

我をこそ忘れもはてめ梅花さきしそとたにおもひ出なん

三月ふたつあるとし

櫻花春くはゝれる年たにも人の心にあかれやはせぬ

せきう法師かいつのかうし(講師)になりてなかされし時にみな人の哥よみけるに

（後）別てはいつあはんとか思ふらんかきりある世の命ともなく

思をありける

（同）身のうきをしれはゝしたに成ぬへし思へは胸の焦のみする

（後）いせの海に年へて住しあまなれは何れの藻かはかつ殘せる

ふくぬきてかへりきて

ふしまろひ迷ふ形見を見よとてや流れし衣に身のとまり劔

（續後撰）さためなき世を聞比の泪こそ袖のうへなる淵せなりけれ

前栽うゑてすなこひけるに家の人にもあらぬ人ならんといひてすなこをこせたりければ

ありそ海の濱にもあらぬ底にても數しられねは忘てそつむ

故中宮の内侍のもとに

もゝしきの花の匂ひはくれ竹の世ゝにもにすと聞はまことか

返し

百數になかるゝ水のなかれてもかゝる匂ひはあらしとそ思

五月ふたつある年

五月雨のつゝける年のなかめには物思ひあへる我そ悲しき

夏虫の身をともしはて玉しあらは我とまねはん人めもるみそ

よひのまに身をなけつめる夏虫は消てや人にあふと聞らん

七月七日

戀〳〵てあはんと思ふ夕くれは棚機つめもかくやあるらむ

みつなへたてゝとある返事なりけり院の帝かつらにあるほとにたまはせたり

あふほとに川を隔てゝこふるとは棚機つめに何かことなる

返し

たくひなき物とはこれそ成ぬへき棚機つめも人めやはもる

今は物いはしとえんしければ

（後）秋とてや今はかきりの立ぬらむ思ひにあへぬ物ならなくに

内に菊の宴せさせ給ふ夜

秋のよもふかく成とや菊の花影さへそひて君にみゆらむ

亭子の帝をりゐ給はんとしける秋

後白露のおきかはるらん百數をうつろふ秋は物そかなしき

別るれとあひもおもはぬ(をしまぬ集)百數をみさらんとの何かかなしき

とかきたりけるをうへ御覽してかたはらに書付させ

給ふ

身一つにあらぬ計をおしなへてゆき歸りてもなとかみさ覽

人のもとに尾花のいとたかきをやりたれはしのふ艸

をなんをこせたりける

後花すゝきほにいて出すあるやとは昔しのふの草をこそみれ

宿もせに植なめつゝそ我はみる招く尾花に人やとまると

ゆくとくとみれ共飽ぬ秋の野はゆきもやられす止る共なし

たとへくる露と等しき身にしあらは我思にもけなんとそ思

しほるとも泪ならねはふらしけん春雨社はあはれとも見め

仁和寺なる人

白雲のたな引かゝるみやまにはもる月影もよそに社みれ

返し

雲かゝるてる日曇れるひまなれはあかきに月はみえぬ成覽

時雨ふる冬の木葉のかはかすそ物おもふ人の袖はなりける

ぬれ〱て色増るめる紅葉はに袖はなる共散すもあらなん

露乍へなんとそ思よそにても人やけぬるときかんと思へは

濁江はかたふかく社あれにけれ身をはちすさへみれは生覺

みかと物へおはしましけるまゝかつらなる家におは

しましして花御覽してかへらせ給けるに花にむすひつ

け給ける

梅花かた枝殘さす散にけりかこひてたにやをしまさりけん

御返し

春霞み立なからみし花なれとふみとめてけるあとそ悲しき

うちとのにて

後水もせにうきぬる時は柵も(の)うちのとのとも思ほえるぬ哉(見えぬるみちは柵イ)

いとこの別當のもと〔よ脱歟〕り

山風に聲きくよりはくれなゐのひとめ計もまつみてしかな

返し

紅のひとめはかりはそむれとも人はかりにてうすくも有哉

おく露をなにあかすとか秋の野のいとゝ泪をかりくはふ覽

あふきのみたれたるに

むすひけん人の心のあたなれはみたれて秋の風にちるらん

男のあたなりしに

住の江の岸にきよする興つ浪まなくもかけておもほゆる哉

住の江のめにちかゝらは岸にゐて浪の數をもよみるへき物を

こさまさる泪の色もかひそなきみすへき人の此よならねは

鶯に身をなしかへは散までも我物なりとはなは見てまし

今はとて別るゝたにもある物をしられぬ袖のまして侘しき

返し

さらはよと別し時にいはませは我も泪におもほれ〔お脱歟〕なまし

雲ちをもしらぬ我さへもろ友にけふ計とそ鳴たりつる

ねもたゝにかれぬる野への紫はなかくと思しとそ絶にし

人

時鳥鳴て絶にしやとなれとすみきと思て鳴つゝそふる

我宿はむへもふるすと成にける君(きかイ)ふるさとの花のなゝれは

又

山ひこのよそに答へし聲なれとことゝひし社戀しかりけれ

返し

よそにてもへなんと思ひ戀數はなれての後はあらしよ思へは

人

逢事も頼むる事もあやまたは世にふる身にもあらしとそ思

返し

いふともたかはぬ事にあらませは後うき事そ聞へさらまし

常にそら名たちけれは

後 千ゝにたつわか名きよめん百數の人の心をまくらとも哉

返し

同 泪のみしる身のうさもかたるへく人の心をまくらにもせよ

おとにのみ聲を聞哉あし引の山下水にあらぬものから

やせ渡る川は袖より流るれととふにとはれぬみはうきぬめり

人のもとに秋まかりていと夜更て歸りきてとめて

深しよの行あひの霜にうてしかとなと身に寒く當らさり劔

頃をへてあひみぬ時は白玉のなみたも秋は色かはりけり

紅に泪うつるときゝしをはなといつはりとわれおもひけん

返し

紅の泪しこくはみとり色の袖もみちてもみえまし物を

人のちいさき子をこれ子にせよとてをこせ給へるに

女

かた時の人をみしまになる物は只かたおひになるそ佗しき

七夕の繪に

河とたにかたみに見えぬ物ならは忘るゝ程もあらまし物を

をりはへてなきぬへらなり時鳥しけるなけきの枝々にゐて

人のはらからなくなりたるをとふらふとて

後 程もなく誰もおくれぬ身なれ共とまるはゆくを哀とやみし

同 そむかれぬ松の千年のほとよりは共に〳〵と慕はれそせし

同 とも〳〵としたふ泪の川水はいかなる色にしてなかれけむ

人

後 春霞はかなく立てわかるとも風より外に誰かとふへき

返し

同 めに見えぬ風に心をたくへつゝやらはかすみの別こそせめ

うきなから人をわすれんとかたみ又心にそかつさはりける

物おもひける人のあゆみ行ける道に火の見えけれは

古 霜かれの野へと我身を思ひせはもへても春をまたまし物を

住里は雲井ならねと初鴈のなきわたりぬる物にそ有ける

深きおもひそめつといひしをの葉はいつか秋風吹て散にし

返し

後 心なき身は草はにもあらねとも秋くる風にうたかはるらん

聲立てゝねたに泣れすうき物は身の待れえぬけさにそ有ける

年へぬるわか思ひにや秋の野の草木もあへすこかれ散らし

秋ならてちる木葉にもみえなくに露やは人の心ともなる

よもの蜑のかつきわふてふ白玉とみしまに袖は海となりにき

ぬれ返り玉かつけともあかなくに頼みし事の絶てなけれは

三月晦の日鶯のなきしに

ゆく春と聲〳〵鳴しうくゐすは夜のまなみたをたむる也覧

秋の月ひとつにあかぬ物なれは涙をためてうつしてそみる

古 春かすみ立をみすてゝ行かりは花なき里にすみやならへる

そこともしらてほかへわたりたるに男かくれたると

なん思ひつるといひたる返事に

（後）思川たえすなかるゝ水のあわのうたかた人にあはて消めや
人こふる泪は春そぬるみけるたえぬ思ひのわかす成へし
いとおもしろき櫻を折て人のかりやりたりけれは
（後）櫻花色はひとしき枝なれとかたみにみれはなくさまなくに
返し
（後）みぬ人の形見かてらは折らさりつ身に準へる花にし有ねは（古集）
友たちなる人の思事ある比とふらふとて
世中はいかにや／＼風の音聞にもまつはものやかなしき
返し
（後）世中はいさともいさや風の音は秋に秋そふ心地のみして
法しやう寺にて后宮おはしましける比御供にて
久方の月のまとかになるほとは紅葉そむ共しくれさらなん（をふくらん集）
（續古）わか爲になにのあたとか（て）春風のをしむとしれる花にしも吹
朝な／＼袖をやしほるきり／＼す夜はすからに鳴明しつゝ
法皇御くしおろし給ての頃七條の后のみや
（後）人わたすをたになきを何しかもなからの橋と身はふりぬ（な集）覽
返し
（同）ふるゝ身は泪の中にみゆれはやなからの橋にあやまたる覽
秋の野にねてのみあかす白露はひとりある人の泪成へし
いとまたき過ぬる秋の形見にて枝に紅葉そちりさしにける
あふ坂の關は夜こそもりまされくるゝをなとて我賴らん
返し
もりませと夜は猶社賴まるれぬるまもあらはこえんと思へは
さく花は年にかへれと空蟬のよをためしにて散にそ有ける
濁りなくみかゝれにける白玉は拂ふ袖にもちりたにもゐぬ

かねもりか家にみちたつねこうしてをる男
やへとつる道は夢にも惑らしぬる玉にたに逢ふと見えねは
人
形見にも身をしる雨の降りし哉我もせきあへす君もこ（しかに）
濡かへりせかれぬみをにひかれてや我さへうきて流より剣
夢とても人にかたるなしるといへは手枕ならぬ枕たにせす
忘らるゝ我身をしらて濱千鳥ふみとめてたに見へき物かは
面かけは水にうきてもみえすやは心にのりてこかれし物を
返し
心にやのりてうかれしあふみてふ名は徒にみつかけもせて
夏虫のおもひにいりてなそもかくわか心からけなんと（はずる）
われまねく袖とはしらて花すゝき色かはるとそ思ひ侘つる
あひもみぬ年のわたりに濡つるも身を深からぬ心とやみる
わかをく物は思はし棚はたにあふなぬかをそまつと思へは
わするてふ事をもしらぬ棚機や年のわたりをまちてあふ覽
（續古）かきりなく落つる（おもふ集）泪や河と見て渡りかたくはなりまさる覽
やとかさんを社みにはかたからめ夢計りには猶も見えなん
枇杷のおとゝ
かくれぬの底の下草みかくれてしられぬ戀はわひしかり鳬
返し
みかくれにはつか計の下草は長からしともおもほゆるかな
鶯のなくねをまねふ山ひこを友ありかほにともめつる哉
梅花ちるてふなへに春雨のふり出つゝなくうくゐすのこゑ
足引の山は遠しと時鳥里に出てもねをそなきける
匂ふかの君おもほゆる花なれはをれるしつくに袖の濡ぬる
ひたふるにけなはけな南露の身の玉ともみえす消まとふ覽

水茎の通ふはかりをすくせにて雲ゐ乍らもはてねとやきく

返　し

雲井にも通ふかなしと思ふへき人にすくせをつけまし物を

霜雪の消えてうき身の雫こそゑたはむまてさえかゝりけれ

白露のおきてあひみぬをよりは消かへりつゝねなんとそ思

物へゆきける人かへりて

またかゝるたひしなけれは草枕露けからんと思はさりしを

年の内にあひてもあはすなけき劔人のうへ社我身なりけれ

思ふ事なくてやみけん中をしも我身のうへになによそふ覧

院の帝物へおはしましけるに女郎花おほかりと御らんして堀に給へりけるを奉けると聞て枇杷のおとゝ

女郎花ほりけん枝のふしをに過にし君はおもひ出やせし

返　し

女郎花堀もほらぬも古へをさらにかくへきをならなくに

右京のかみなてしこのおほかるを見て

我袖にうつらはうつれ手もやますつみやいれにし撫子の花

返　し

こきかきりをはつみ入て撫子にうつれる袖の色をみせまし

故中務宮よりことかり給て返し給とて

あつまを侍のしらへにかりしかはかへし物とも思はさり覧

返　し

程もなくかへすに増るをのねは人のとかめぬねをやそふ覧

又あれより

かへしてもあかぬ思をそへつれは常よりこゑのまさる成覧

返　し

常よりやそふる心もかへりけんしらぬ聲なることも聞えぬ

年ふれと忘られはてぬ人のうへは心とめてそ猶きかれける

戀さにしぬてふをはきこえぬを世のためしにも成ぬへき哉

かにひの花につけて

花の色のこきを見すとてこきたるをおろかに人は思覽やこ

わらひを人にやるとて

我爲に歎きこる共きかなくに何にわらひをたきてつけまし

四月にさける櫻につけて院の殿上人の物へおはしまさすにもまいらてとまれるかもとに

とまりゐて春戀しくや思ふ覽花もかくこそおくれたりけれ

ある人

濁江のすまんこと社難からめいかてほのかに影をたにみん

返　し

すむをのかたかるへきに濁江のこひちに影もみえぬ成けり

まつ人の見えぬからにやさよ更て月のいるにもねはたかる覽

九條の御息所の御もとにこはこあはせの頃紅梅のつほみたるを入て奉りたるをきさいの宮

君にとしおもひかくれは鶯の花のくしけもをしまさりけり

御返し

みつのえの形見と思へは鶯の花のくしけをあけてたにみす

人のあはぬよとありしを

聲にたに聞ての後は時鳥あはぬ五月はあらしとそ思

返　し

聞とをなか〳〵とおもひし時鳥いむ五月をは過しやはせぬ

時雨する日かえてをゝりて

新古　とのはのうつろふたにも有物をいとゝ時雨の降まさるらん

返　し

時雨にしぬれと濡ぬるとのはゝうすなからにも濡すもあら南

隣の櫻の花を見て

後 かきこしにみれともあかす櫻花ねなから風の吹もこさなん ちりくる花を見るよりはねこめに集

返しあさたゝの少將

櫻花うゑて我のみみんとかはとなりありきや人のするとて

人

かりそめにそめさらましをから衣かへらぬ色に恨みつる哉

返し

身に泌てふかくしなれは唐衣かへすこと社しられさりけれ

ある人を見てをとこ

見す聞かすあらましものを賤機のたてぬきみたる思せましを

返し

なほさりの行手にかゝるたてぬきは長からしとも思はゆる哉

川の瀬にうきてなかるゝほとよりは衣の袖のぬれすも有哉

すむかたをしるしとまねく花薄心よはくそ風もふくらし

京極なる家にいきてそのわたりなる人に

此里のしるへに君も出こなん都のほかにわれはきにけり

わか袖のかはりにをれる花薄人をまねくとしらさらんやは

花すゝきよふこ鳥にもあらねとも昔戀しきねをのみそなく

さよ更てねられぬ時は時鳥君にきかれぬねをそ鳴ぬる

人待て鳴つゝあかす夜な〳〵はいたつらねにも成ぬへき哉

新古 來てみれはなこの浦まてよる貝の拾ひもあへす君そ戀しき

みくまのゝ浦よりをちにこく舟の我をはよそに隔てつる哉

同 思いつやみのゝをやまのひとつまつ契しとはいつも忘れす

大淀の松はつらくもあらなくに恨みてのみもかへるなみ哉

風吹は岩うつ浪のおのれのみくたけて物をおもふ頃かな

興つ風ふけゐのうらに立浪の名殘にさへやわれはしつまん

あま舟のかよひこしより鹽かまのほのほ出ます思つきにし

朝な〳〵しほやくあまの藤衣なるとはすれとあはぬ哉

人しれす思するかのふしのねはわかをやかく絕すもゆらん

風吹はいく田の浦のいく度かあるゝ心を人にみすらむ

わかせこにならしの岡の呼こ鳥君よひかへせ夜の深ぬまに

陸奥はいつくもあれと鹽かまの浦こく舟のつなてかなしも

袖の浦の色のはまとは成ぬ共なにのかいかはあらんとす覽

あつま池のはしたにおふるたまさかい久く成ぬ戀に逢見て

津の國の難波ほり江にこく舟のみきはもみえすまさる我戀

君を思ふわれか心は堀かねの井よりも猶そふかさ勝れる

あふみのや志賀の浦浪うらめしく尋きたれとかひなかり昇

新拾 石清水いはぬ物からこかくれてたきつ心を人はしらなん

ありし時ひゝきのなたと有しかは戀しからすのさきそ行覽

みまさかやくめのさら山さら〳〵に昔のいもし戀らるゝ哉

玉川にさらすてつくりさら〳〵に昔のむかし戀しきやなそ

山城の岩田のもりのはゝそ原みつゝや妹か家ちゆくらん

かたをかのあしたの原を過行は山ほとゝきす今そ鳴なる

をちへゆくこちこせ河のたかしかも色さり難き綠をそめん

新古 はつかにも君をみしまのあく田川あくとや今は音つれもせぬ

さらしなのをは捨山の有明のつきつもゝのをおもふ頃かな

古 しほの山さしての磯にすむ千鳥君か御代をは八千代とそ鳴

おとにきく天の橋たてはしたてゝおよはぬ戀も我はする哉

住よしの興にきよする沖つ波なみのよる〳〵あひみてし哉

夕されはさほの河原に住たつのひとりね難き音をそ鳴なる

新古 玉葉 忘なはよにもこしちのかへる山いつはた人にあはんとす覽

いはせ山苔の下水うちしのひ人の見ぬまになかれてそふる

おとなしの山の下ゆくさゝら浪あなかまわれも思ふ心あり

新古 我戀はありその海の風をいたみしきりによする浪のまもなし

春日野のなかのあさかほ面影にみえつゝ妹か忘られぬかな

人はいさ我はかすかのしのすゝき下葉しけくも思ひ亂るゝ

秋風のおとはの山の谷水のわたらぬ袖の色こきやなそ

棹鹿の妻こふ時に成にけりさか野の花も下紅葉して

おとは山木の下風にかほとりのみえかくれせし聲の戀しさ

難波かた玉江の芦をふみしたきなく覽たつはわか爲にかは

いかこなるものきゝ山の谷水のにこらぬおとに聞ゆなる哉

むさし野の草葉に宿る白露のいくかあるへき我ならなくに

たなゝしのあまの小舟の荒き磯にあなたつ〳〵し我獨ゐて

磯に出て漁りする日のきえぬれはふけ井のうらを尋つる哉

心のみ雲井のほとに通ひつゝ戀こそわたれかさゝきのはし

音にのみありと聞つるみよし野の瀧はけふこそ袖に落けれ

岩くゝる山井の水をむすひあけてたか爲をしき命とかしる

雲葉 岩城の野中のまつをひきむすひ命しあらは歸きてみむ

みよし野の山の下風さむからしいもせの河の浪たかく見ゆ

白浪の打おとろかすうきしまにたてる松たにね社わふなれ

かこのしままつ春とになくたつのあたらなる聲聞人もなみ

白浪のよする磯まをこく舟のかちとるまなくおもほゆる哉

手鑑 沖つもをとらてやゝまん漕舟のふなてしとも何によりそは

かたしきの衣もさむし松風に秋のふくともしらせすもかな

新勅 み山木のかけのこ草は我なれや露けゝれともしる人もなし

浦ちかみ浪打よするさゝれ石の中の思ひはしるやしらすや

蓮葉のうき葉の下による浪の君に心をよせてこそふれ

新勅 山川の霞へたてゝほのかにもみしはかりにや戀しかるらん

夕闇は道たと〳〵し月待てかへれわかせこそのまにもみん

山水を手にむすひても心みんぬるくはいしのなかも賴まし

天つ風雲吹みたれ久堅の月のかくるゝ道まとふへく

しるらめや我衣手は秋霧のおほつかなくてふるにぬるとも

けふ有てあすはきえぬる露の身の思ひおくへき言の葉も[illegible]

空蟬の葉におく露の木かくれて忍ひ〳〵にぬるゝ袖かな

卯花の匂ふ五月の月きよみいねす聞とや鳴ほとゝきす

ある大納言のひえ坂本におとはといふ山のふもとにいとおかしき家つくりたりけるにおとは河をやり水にせき入て瀧なとおとしたるをみてやり水のつらなる石にかきつく

おとは河せき入ておとす瀧つせに人の心の見えもする哉

女四宮へとふらひ聞ゆとて

後 こゝら世をきくか中にもかなしきは人の涙もはてやしぬ覽

とてまいらせたるに御返もなけれはまた

ことたにも通ふ世ならはなき人の泪のほとも聞はきなまし

なくなりにける人の家にまかりて朝にかしこの人につかはしける

後 なき人のかけたにみえぬやり水の底に泪をなかしてそこし

九月八日隣より菊にわたおほひにをこせたりける朝にほりてやるとて

同 數しらす君かよはひをのはへつゝなたゝる宿の露となら南

返しまさたゝ

同 露たにもなたゝる宿の菊ならは花のあるしやいくよなる覽

人のをこせたる

後 いせの海にあそふ蜑共成にしか涙かき分てみるめかつかん

返し

同 おほろけの蜑やはかつくいせの海の浪高き浦に生るみるめを

我家を人のになして花をやるとて

花の色の昔なからにみえつれは人のやとゝもおもほえぬ哉

松山につらきなからも波こさんとはさすかに悲しきものを

かへし

あちきなくなと松山に浪こさんことをは更におもひはなるも

したにのき

此花をいかて散さすなりつらんかはかり風の吹したにの木

せんたにの木

草枕袖は露にもぬれしかとわか袖ぬれし淵せたになし

きちかう

我宿にあきちかうしものおくみれはけふは紅葉を染る也覽

かまつほくさ

山田をしそほつ計ももりつれは秋もからんとわかまつほくさ

憂身とりきをもつらは水る共いつまもらはかもるもしるへき

うつせみの思に聲したえさらは又も雲井に露もおくらん

明ぬともたゝしとそ思ふから錦君か心しかたなゝらすは

宇田院よりおはれて人のかたにきける人のもとに

のけさまに人におはれし我なれやせなか合に人の成らむ

返し

はゝつくりせなか合に成ぬともおなし心にむすはれそせん

きしもなくしほもみちなは松山を下にて浪をこさんとそ思

みえもせすふかき心をかたりこは人にかちぬと思ふ物かは

もゝ敷の花を折ても見てし哉むかしも今も思くらへて

家をうりて

古 飛鳥川淵せもしらぬわか宿はせにかはりゆく物にそ有ける

歸りくる道にやけさはまとふ覽これになつらふ花なき物を

なからの橋つくると聞て

難波なるなからの橋もつくるなり今はわか身を何にたとへん

中務卿の宮の家に舟つくりておはしはしめける同院

御覽しにおはしましてよさりつかた歸おはしましな

んとしけるをりによみて奉りける

水の面に浮へる舟の君ならはこゝそとまりといはまし物を

ものへゆくに

諸共に身をしわけねはめにみえぬ心を君にたくへてそやる

ものへかつらやるとて

けつりこし心もありて玉かつら手向のかみになるか嬉しさ

有原のとしはるかなくなりにけるを聞て

かけてたに我身の上と思ひきやこんとし春の花をみしとは

春秋子をなくなして思なけきて

春は花秋は紅葉とちりしかは立かくるへき木のもともなし

おやにおくれたる頃男のとふらはぬに

なき人もあるかつらきを思ふにも色わかれぬは泪なりけり

故式部卿宮の御てかゝせ給けるをみて

なき人の書とゝめけん水莖はうちみるよりも流れそめける

中宮うせさせ給ける頃かいねりこしとて撿非違使の
道にあひてきらんとしけれは
深草に君まとはしてわふる身の泪にそむる頃とやはみぬ
ふくぬきてかへりて
こゝ午けなんとそ思よそにても人や消ぬときかぬと思へは
院の帝と今の帝とおはしましける時
日の光かさねて照れは紫のほしもふたつに色やなるらん
よそにきく袂のみ社そほちけれあまねく法の雨はそゝける
返し
いつはらす心をよする法の雨のそゝくしるしにぬるゝ袖哉
屏風に瀧おちたる所
限りなく心をおとす瀧つせはきにつたはりて流れこそすれ
ある人のいましたるに櫻のいとおもしろくさきたる
をまたくるまてあらすなといひおきたるにいかなる
にかこれは散花につけて
待わひてふすまに花は散にけりうき身成とや枝にとまりし
あひしりて侍る人のいとかれ〳〵にまうてけれは
たひをへてかけに見ゆるは玉鬘つら〳〵なからみえぬ成覧
つらく成たる人に
わたつ海の深き心の變らすはなにかは人をうらみしもせん
むすめのをとこたえにけれはかはりて
拾かくはかりうしと思ふに戀しきは我さへこゝろふたつ有覧
人の返し
もしもやと逢みんとを頼ますはかくふる程に先そけなまし
わかな
君により千とせい春は摘へきをわかなの種は野へに殘さん
四月晦日の日
こかくれて五月まつとも時鳥聲ならはしに枝うつりせよ
卯花のさけるさかりは月清みいねす聞とやなくほとゝます
かたをかの朝の原をきて見れは山ほとゝきす今そ鳴なる
時鳥よふかき聲は月まつといもねて明す人そきゝける
打とくる山への聲はほとゝきす長きよに社きかまほしけれ
心のみ雲井のほとにかよひつゝ戀こそまされかさゝきの橋
望月の駒引わたす影みれはおほつかなくもみえすそ有ける
やま井に雪のふりかゝりたるを
拾足引の山井にふれる白雪はすれる衣の心ちこそすれ
かゝみてふせさせたまひけるにうらに鶴のかたをい
つけさせて
千年とも何かいの覽浦にすむ田鶴の上をそ見るへかりける
忍ふとも君はしらしなみぬ人ののとかに物を思ひなすらむ
秋頃月を見て
月影の軒のあまりにさし入てなをあか心あくからしつる
時鳥をまつ
五月こは鳴もふかなん時鳥またしきほとの聲を聞はや
橘
五月まつ花たちはなの香をかけは昔の人の袖のかそする
時鳥をきく
今朝きなきいまたたひなる時鳥花たちはなに宿はからなん
としなかをあひみあはすみ嘆きけん人のうへ社我身也けれ
かしらしろき女を見て
後ぬきとめぬかみのすちもて怪しくもへにける年の數を知哉
逢さりし戀に我身のきえませは且みる〳〵は惑はさらまし

くるをかたかりける人に七月八日

いむといへは忍ふ物から夜もすから天の原社羨まれけれ

むかしひと所なりし人の年頃いかにそといひたるに

身ははやくなき物のを成にしをきえせぬものは心成けり

山櫻を折て人に

後 君見よと尋てをれる山櫻ふりにし色と思はさらなん

春頃

青柳の糸よりはへておるはたはいつれの山の鶯かきる

物かたりなとしてかへりぬる人のもとに

後 時鳥ほのかなるねを聞初てあらぬもそれとおとろかれつゝ

人のもとに

人心あらしの風のはやけれはこのもえあへす枝そしほるゝ

男のひとのもとにあたにあるといへるに

飛鳥川淵せにかはる心とはみなかみしもの人もいふめり

返し

厭はるゝ身をうれはしみいつしかと飛鳥川をも頼むへき哉

故中宮うせさせ給へる頃とほたうみの内侍けうをこせたりける返し

世のなかを　夢のをゝは　聞しかと　現なからに
ふかくさの　山のけふりと　わか戀を　しらぬ雲ゐに
守りあけて　松のかとにて　ふしまろひ　むなしき蟬の
もろ聲に　なくは雲ゐに　聞ゆらん　人は宮ひと
かへるさは　ゆきゝの道も　おもはへず　立ゐならしゝ
おほとのは　玉のみすさへ　あけてけり　おつる涙を
袖ならす　物にためつゝ　みましかは　いかなる海と
成なまし　おもへとあかす　わひしさに　いとゝ秋さへ
きにけれは　かなしき事は　かなしさの　あひかさなれる
むしのねの　おのか聲〳〵　なきみちて　わふる成けり
かくしつゝ　しはし計は　はまちとり　いてゝも人に
しはしたに　打かたらひて　ありつゝし　今は限と
さとに出て　ひとりなかむる　事のわひしさ

いかなるをりにか有けん

つれ〳〵い　春ひたすらに　なかむれは　瀧つ白あは
めのまへに　せけとせかれす　なかれつゝ　我身はあわと
うかひつゝ　きえみきへすみ　もゆる火の　心はひと
あふれつゝ　あるかなきかに　わひをれは　みしとしるしと
うくゐすの　行かてにのみ　なく聲は　かたらん方も
なくたえぬ　あひかたらはぬ　鳥たにも　人のあはれは
しるものを　萬もつらき　はまちとり　あとふみやれは
やまひこの　こたふ計を　わさにして　心とはねは
こくふねの　ほにあけてこそ　うらみられけれ

中務集

子日

（鳳雅）野へに出てけふ引つれはときはなる（わかぬ集）松の末にも春はきに覓

家の花を見る所

野山にも見るへき物を我宿の花をなかめて日は暮にけり（をはくらしつイ）

藤花を見て春をおしむ所

藤の花咲を見すてゝ行春はうしろめたくや思はさるらむ

山里に時鳥なく

山里もまれに成けり時鳥まて（たイ）ともなかぬ聲を聞かな

田のほとりにかりしたり

袖ひちて植し春よりまもる田を誰かはしらて狩にきつらん

九月九日菊のわたにておもてのこふ女

老にける身にはしるしも白菊のつゆの（はなイ）名たてに成ぬへき哉

前齋宮の五十賀の御屏風わかな

わかなおふる野をしめおかん君か爲千年の春も我そ摘へき

つるのあそふ所

君といへは命をゆつるあしたつは雲のなかをやおもひ出覽

はまつらに松おほくたてり

うらちかく波立松は色かへて世に住の江に生る也けり

はまに貝ひろふ

（いイ）あさりするうらも長閑に涙たゝけふはかひある心地社すれ

三條のおほいまうち君の賀權中納言のつかふまつれる屏風の繪に花見て歸る所

（同雅）あかてけふ歸ると思へは花櫻（やまイ）をるへき春そつきせさりける

池にのそきたる松に藤かゝれり

君をおもふあたし心もなき物を池の藤なみまつ越にけり

たちはなに時鳥のなくに

（後撰）色かへぬ花立はなに時鳥千よをならする（かたらふイ）聲そ聞ゆる

野に狩したる

女郎花かりのたよりと聞しまにあまたの秋は野へに來に覓

やり水のつらに菊さけり男文書

なかれつゝかけもみるへく汀なる菊に戀しき人はならなん

年のうちに春立雪ふる梅さきたり

降雪の下に匂へる梅花しのひにはやく春はきにけり

村上の先帝の御屏風に野火やく所

春はかく野をのみやくと思ふまになへて草木のいかに燃覽

春をゝしむまに歸鴈なく

とゝまらぬ春を惜むにいとゝしく歸る雁さへ鳴わたるらむ

きしに藤さける

河岸に生たる松に藤なみのかゝれと年のつきぬ也けり

五月五日田舍家に女共いとくりさうふふきたり

あやめ草てひきのい（しイ）とも身にかけて永日くらし人そ戀しき

田まもる人馬のはむをもしらてねたり

まもりくる山田のいねにすきふよは夢とそ鹿の音をも鳴哉

村上の先帝の御屏風に國々の所々の名をかゝせ給へるよしの山

（拾後拾）よしの野山ゆきかふ（にはイ）あとも絶にしを霞そ春のしるへ成ける

飛鳥川

新古 定なき名にはたてれと飛鳥川はやく渡りしせにこそ有けれ

石上

同 いそのかみふるき渡りを來てみれは昔かさしし花さきに鳧

伏見

櫻花散かふそらはくれにけり伏見の里に宿やからまし

もるやま

人めのみもる山になくよふこ鳥忍ひに誰をまつねなるらん

すま

拾遺 もしほ焼烟になれしすまのあまは秋立霧もわかすや有けん

佐保山

初かりの夜ふかかりける聲によりけささほ山そ思やらるゝ

しかすかのわたり

新勅 ゆけはありゆかねは苦ししかすかの渡に來てそ思わつらふ

うきしま

たのまれぬ心からにや浮しまに立よる浪のとまらさらなん

なこその關

みちのくの勿來の關と聞つれとなく〳〵なほも越ぬへき哉

御屏風萩の下に鹿なく

新古 人しれす萩の下なる棹鹿もほに出る秋や音にも立らん

常夏

うちはへてみる常夏にあかぬ哉日をにまさる色のみゆれは

十二月晦日に

新古 程近くきぬ成ものをいかなれは春にもあはて年のこゆらむ

村上先帝の御屏風の繪に田舍家に男まらうと來れり

梅の香をとめてきつれはめつらしき鶯ならぬ聲も聞かな

きしの聲

春霞あさたつ野へに立鳥も忍はぬねにや人もしるらん

近き山のさくら

我やとの春の山へのつまなれは外の花ともおもほへぬ哉

四月みあれひく

君をのみ祈り置ては打むれて立かへりなん加茂の河なみ

五月五日

しるき香も匂ふなる哉あやめ草けふこそ玉にぬく日也けれ

泉

新千 下くゝる水に秋こそかよふらしむすふ泉の手さへすゝしき

秋の曉花を見る所

有明の光りにまさる女郎花長きよにみんつゆにおきつゝ

野の紅葉をみる

けふをらぬ人もさそはぬ紅葉はによのま吹くる山風のかせ

冬こもりしたる池

續古 氷ぬる池の汀は水鳥の羽風に浪もさはかさりけり

雪降に物へゆく人

雪ふかく行東路も遠けれは道にて春にあひぬへき哉

朱雀院のわか宮の御もきの御屏風の和哥子日

小松原野へにいつれと友なはぬ春の霞も立ましりけり

梅の花見る所

梅の花おる手もとをもみつる哉香を尋てもとはんとそ思

柳あり

くりかへす春はきぬれと青柳のいとはふりすもみゆる色哉

道行に時鳥をきく

打はへてまちくる道の時鳥たゝ一聲や聞てやみなん
　神まつる卯花さけり
祈るをも聞くたよりには卯の花の盛をさへや神はみるらむ
　郭公を旅人きく
初かりのたひの空なる聲きけはわか身をおきて哀とそ聞
　やり水に紅葉うきてなかる
もみちはもおち積りぬる谷水は秋のふかさそ底にみえける
　かくらしたる所
小夜更て霜はおけとも山人のおれる榊の色はかはらし
　たかき山に雪ふる所
瀧の糸は皆とちつらむよしの山雪のたかさに音をかへつゝ
　御屛風松に藤かゝれる
うとからてかゝれる藤の花なから松に心はたかはさらなむ
　うめ
かへてなは千世までかさせ梅花花もかはらて春も絶すは
　道行人時鳥を聞
行道もはるけきほとは郭公聲に心のとまりぬるかな
　六月祓する所
君か爲いのる心はみなかみもなかるゝとくけふやしるらむ
　前栽うえたる所
露をたにおとさてほりつ女郎花うへはいつれの秋か見さ覽
　御屛風に秋の野に花見る所
花の色のあかぬ限りしかへらすはやとゝも秋の野へや成覽
　御屛風池のほとりの柳
水底にかけのうつれる青柳は浪のよりけるいとゝこそみれ

浦遠く立つる春の霞をはやくしほかまの烟とそみる
よと共にもしほ焼つゝ誰か爲か火にも水にもいれる我身そ
卯の花の盛にのみや山里のかきねもしろく人のみるらむ
　かくら
年をに神をそいのる榊はの色もかはらてをらむと思へは
　たかふなほる所
つちわくる底來てみれは呉竹のこもれる春のよともしられす
吹風にみたれぬ岸の青柳はいとも波さへよれはなりけり
　まつの下に水やれり
いにしへの心もたへす行水にわかまつかけもけふ社はみれ
　坊城の右のおほいとのゝ五十賀中宮し給ふ村上の先
　帝のめしたる紅梅
吹風に匂ひかはらぬむめの花たか染いてし色にか有らん
　子日
水底に色さへかはる小松原千とせ千代そふ野へに來にけり
岸近き松にかゝれる藤浪は春のなこりに立とまるらむ
山櫻ひとしられとも清瀧の底なる花やなかれ出けん
住よしのきしの藤浪春ふかくいくしほにかはいろまさる覽
五月雨の夜も明方に數かな物おもふ事や秋に成らむ
河水にかけのかたふく山吹はかはつの聲をあはれとやきく
山吹の花のさかりはかはつなく井手にや春の立とまるらむ
白浪のおるかと見えて遠方のきしのまに〳〵咲る卯はな
かた岡のみかきの原の鶯は花ちりぬとや音をはなくらん
　みつあきらの少將哥合するに夜梅
匂ふ香のしるへならすは梅花くらふ山にも折まとはまし

柳

繰返す年へてみれは青柳のいとはふりせぬみとやならなん

同少將むすめのもゝかに子日にあたりたりけれは一條の左大殿に物なとして奉らるゝに

春雨に空のけしきをつゝめともけふの小松は猶そ引つる

朱雀院御時誦めすに奉る

今さらに老の袂に春日野のわらへなるわかなつむ哉

御覽してひけこにわかな入て少將を使にて賜る

春日野にえほくのとしはつみつれと老せぬ物は若な也けり

御返事

年つめと同しさまなる若なにもけふたに我やあらんとす覽

女一宮の御いかこすあまなとして奉れ玉ふに

涙たてゝたつの影さへみゆる哉千世の數そふしるし成へし

水底に影をみせつゝあしたつも君には千世をへたてさり覺

雲井にて君を見るへきたつなれは千代もいと社逢けかりけれ

人のうふやに七夜

千年待君ありそ海のかけみれは小松も今そおひはしめける

物へいく人につるのかたをぬさにして

君かゆく雲ちおくれぬあしたつはいのる心もしるへ成けり

秋物へいく人に

風よりは手向にちらせもみち葉も秋の別は君にやはあらぬ

さぬきにてかけあきら

もみち葉の錦にみゆるうら／＼は波のあやをや立かさぬ覽

返し

色ふかき紅葉そめろ浦／＼はみちこし汐のなみやましけん

大貳のくたるに

老ぬれと猶ゆくさきそいのらるゝ千年まてにもいきの松原

風吹に物へいきける人に

風吹はおもほゆるかな住の江のきしの涙にもあらぬ君さへ

物へいく人に

時のまもあまた度のみ悲しきは君か行へきみちにそ有ける

物へいくに雨ふるとてとまる人に

なく泪空にみてるや大空にけふしも雨のふりとゝめつる

返し

こきませて泪に雨もふりつるにいつれによりて君とまる覽

こしへいく人にあふきやるとて

白山の雪の餘波はさむくともかたみの風はあふきつゝゆけ

物へいく人に扇やるとて

君かゆく舟路にそふる扇にはこゝろにかなふ風そ吹ける

順朝臣の能登守にてくたるに

雲ふかく春ともみえぬこゝろにもをりし梅社花さきにけれ

返し

梅花色は雪にもかよふめりかへるやとまて人はとはなむ

又返し

いつはたとまつほと過し白山にゆきゝのあとをたどらめや

豐後守にてくたりたる人の又筑後にて下けるにやる

別ゆく君かたもとをいのりにときにし道へもゆくこゝろ哉

身にかゝる扇のかせをそふる哉ふなちをゆかん君か爲とて

けふにあれたる所に時雨ふり男きたり

神無月空の時雨も故郷に君尋くる袖もかはかす

法師ふかき山にゐたる所

あと絶て入にし日より西山(よしのやまイ)の瀧の音にも人(のイ)めきこえぬ

人の家のまへより水なかれたる男有けり

いかてかはすまて行らん河浪の立とまらるゝやとの前より

旅行人あり雁なく

行人にそふる心のあやしくもしる人なきとまとひぬる哉

ゆくをたゝおもひやらなん鴈かねの歸る聲たに聞ぬ雲井を

たつときく空をなかめて春霞かりの別そはかなかりける

あさりしたる所

あさりしてかひありけりと思身を恨てふると人やみるらん

身をすてて底かつくともたくなはを長くくる人あらしとそ思

あれたるやとの紅葉家のうちに散入たる所

空見えて影もかくれぬ故郷は紅葉はさへそとまらさりける

七夕の繪ある所に

さよ更てけふわたる覽天の河かけこそみえね水まさるらし

七夕の繪の中宮のひひなあそひにかはらのかたすは

まにつくれりひゝなの車のかた七月七日

棚機もけふはあふせと開物(ひゝなのもイ)をかはとはかりを(や)見て歸るらん(りなんイ)

麗景殿の女御中宮に奉れ給ふ扇にあしてにて(はなんイ)

白浪にそひてそ秋は立くらし汀(レイ)の芦もそよといふなり

棚機の心やそらにかよふらんけふ立わたるあまの河きり

三條の女御なてしこ合し給に

あしたつのおれるはまへの撫子は千世をや色も引はそふ覽

垣ほなるやまと撫子色ふかきけふやこふてふ人をまたまし

なてしこの花のかけみる川浪はいつれのかたに心よすらむ

なてしこの花咲そむる夏の野にけふ日くらしの聲の聞ゆる

村上御門御時の菊合にすはまにつるきく有

玉葉 たつのすむ汀の菊は白浪のをれとつきせぬかけ(いろイ)そみえける

同御時に御前に紅梅ををらせて鶯のすなとつくらせ

給ふて

續後 鶯の歸れる(うつ)山の(やどイ)梅花香をしるへにて人はとはなむ

きたの宮のうちに奉り給ふあふぎに

新古 君か手にまかする秋の風なれはなひかぬ草はあらしとそ思(らなん集)

七月七日一品宮の御このかけものゝれうとうの少將

袖の浦の浪吹返す濱風は雲(あきに)の上まてすゝしかるらん

奉れるあしてのぬひものして

拾 銀河かはへすゝしき棚機にあふきの風を猶やかさまし

東宮の殿上人あふぎ奉れ給へる

こよなくてけふ(もイ)はすゝしき袂よりあふく風さへ秋に成つゝ

中宮の御さうしかゝせ給ひけるに玉ざゝの葉わけに

やとるつゆはかりとある哥を書てまゐらせたりけれ

は宮より

續古 みれは(ど)猶のへにかれせぬ玉笹のはわけの露はいつも絶せし(たえ集)

御返し

消ぬまをうき事にする玉さゝの露はかせまつほとそ久しき(あやイ)

堀川中納言ゐふたき[掩留]の所にめしたりけるに

山ゝ(なつやまイ)のしけりを分て鳴鹿をいかてともしの人尋ぬらむ

後撰の哥とも書て人につかはすに

なき人のことの葉うつす水莖のかきもやられて袖そぬれぬる
人のさうしかゝせけるおくに
我よりはひさしかるへきあとなれと忍はぬ人は哀とも見し
村上の御時にいれもしの仰をありて上たきといふも
し裳ありといふをいれさせ給ふ
よゝをへて落くる瀧のしら糸にぬけける玉とはあわやみる覽
雪をゝもみ枝は碎けとくれ竹の下に變らぬよこそ見えけれ
人(女房)かよはしたるをとこあり
戀わたる君をみしにはあらねはや思ふにまけてけふは戀しき
返し
あひみての後さへ物の悲しくはなくさめかたく成ぬへき哉
山里にかよふ人あるやうに聞て
千早振三輪の山もとへにけれは戀しき人もあらしとそ思
返し
音にのみありとはきけと三輪の山杉の生たる門たにもみす
人のひさしくおとつれぬに正月一日
いつそもや霜かれしかと我やとの梅を忘れぬ春はきにけり
また人に
定なく仇なる物をみるよりはときはにあらぬ色をやはみぬ
返し
住の江の我身なりせは年ふともまつより外の色をみましや
雨ふるとて待人のこねは
ふるによりさはる心もうきものを雨のみ辛くおもほゆる哉
梅につけて人に
みぬほとにうつろひぬらん梅花ふかゝりきとも後にかた覽
返し
鶯のやとの花たに色こくは風にあてゝをしはしまたなん
あてしとてまもれと風の吹きつゝ有にも増るかを如何せん
みのむしのつける枝につけて人
うつろはぬ花のあたりを尋つゝいをれる虫をあはれとそ思
返し
散かたの花のあたりはいとゝしく昔うつろふ色と社みれ
宮の御もきの哥よみて奉りしをみたまひて右大將
よし野山瀧の白いととちつれとはやくしりにし聲は忘れす
みしかきさゝやうをねこめにひきて女三宮より
露しけき淺ちか原の花なれはみしかきほとに秋を知かな
御返し
淺ちふの下に咲ける花の色を虫のねとにたれかひきけん
知たりける人のはやういきける所にまたいきたりけ
るに
みる人の袖をあやなくぬらす哉野中の水のふかきはかりに
かへるのかれたるをおこせて人
かれにけるかはつの聲を春立てなとかなかぬと思ひける哉
返し
誰かゝくからをおきては忍ふ覽(ひけんイ)よみかへるてふ名をや賴みし
はやうすみし家のさくらをはこに入て人
(新拾)年をへて折ける人も今(と)はなくに春を過さぬ色をみよ君(るかな集)
かへし
明暮にとはぬ計を玉(ぞイ)くしけそこなる花のいつか忘るゝ
さくらのまたはへしたる枝のあかきにつけて(見わかイ)
春過て秋はまたこぬ程なれは花か紅葉かえこそ定めね

又　人
あふと見し夢を頼て春の日のくれかたきをも詠めつる哉
返　し
心してあらまし物を夢にてもいかておもなくみえわたる覽
又　人
頼めともむなしき空を詠めつゝ忍ひに袖のぬれぬ日そなき
返　し
あはれとも思ふ心の空なるはなかむと人をきけは也けり
五月まゆみのもみちにつけて大納言
時雨をはまちもつけてや山のはのおのれまたきに紅葉染覽
返　し
まちかねて移ろふ枝のあたりには人にしられぬ秋やきぬ覽
又　人
君こふる泪もそてにもりぬれは我より外に人やしるらん
返　し
我こふる泪なからもみにそひて後ろめたくもしらすなる哉
又　人
身の上も人の心もしらぬまはとそともなきねをのみそ鳴
返　し
君にもことそとしらぬ泪をはいかにしりてか哀とそ思
又　人
はかなくて同し心に成にしを思ふかとくおもふらむやそ
返　し
わひしきを同し心と聞からに我身をすてゝ君そかなしき

又　人
澤水の心をしれる君なれはつねよりまさるけふをしらまし
返　し
まさるらん汀のほともしらねともよとの濱へそ思ひ出ける
思事ある比人に
あるよりも亂れ増りて絓のかるもの思ひす共君はしらすや
ある人
かくしつゝ世をや盡さんみちのくのあふ隈河はいかゝ渡覽
返　し
阿武隈を渡りも果ぬ物ならはかはなかく／＼に我いかにせん
きたるにかへしたれはまたきて
秋風になひく心はくすのはの吹かへさるゝをりそ佗しき
返　し
心より吹にもあらぬ秋風はかへるくつはのうらみさらなん
又人櫻を見て
人しれぬ我身なりせはやと乍ら花見にこともいはまし物を
返　し
花見にといひかてらにて人しれすをるとも風に散さすも哉
ある人しのひて物いふほとに時鳥のなきけれは
こよひこそしての田長も聞つめれ今や五月の空にしられん
返　し
時鳥きゝわたるらん五月雨の空をにたに人はなさまし
かたらふ人に物いひて
現とも夢ともわかて明ぬるをいつれのよにか又はみるへき
返　し

夢にても思ひしわかぬ物ならはみて忘なんとのわひしさ
又人
うつゝには心もこゝろねぬるよの夢とも夢と人にかたるな
琴をかりて人に
年をへておとに聞つる琴の音を手にならしつる秋そ嬉しき
返し
音にのみ聞けるをにおとらめやならしそむるに秋のそふ覽
かたゝかへに人の家にいきて歸てつとめて萩に朝か
ほのかゝりてさきたるを折てかれより
初秋いはきの朝かほあさほらけ別し人の袖かとそ思ふ
返し
袖の色も見えやはしけん朝顔のひるはうつろふ別ならぬに
よへの月みけんやと人のいへるに
拾遺
いつとても哀と思をねぬる夜の月はおほろけなく〳〵
人のこむとてこねは
契けんひをも過さぬ棚機は我とかくも思はさらなむ
返し
棚機の契りけんひは過すともたとふへしやはともゆゝしき
また
ゆゝしとも思はさり覺棚機の忘れぬ中のあらまほしさに
秋の月あかきに人
拾
戀しさはおなし心にあらすともこよひの月を君みさらめや
返し
同
さやかにもみるへき月を我はたゝ泪にこもる折そおほかる

年頃ありて人來て歸て
衣たにへたてし宵はうらみしに玉たれいうちの聲そ悲しき
返し
拾
うちとなくなれもしなまし玉簾たれ年月を隔て初けん
又人
しくれにも雨にもあらて君こふる我衣手のぬるゝ頃かな
返し
こさまさる紅葉ならねはぬるらめと色の深さも知れさり覺
秋いたく風吹日人に
秋はきの色つくたにも有物を心すこくも風のふくかな
返し
いねかてに成へき君か風の音は荻の葉ならぬみにそしみける
誰にかあらんまた人
秋のよの夢ちと思はゝいたつらに行て歸るも恨さらまし
返し
行かへる道もをくれぬ心にてまとひし我は誰を恨みむ
雨のふるよ人の來けるに
月見にとこぬよひあまた過にしを雨もよにこしと思ける哉
人に
玉葉
袖しきてふしゝ枕を思出て月みるをにねをもなくかな
七月八日
いむといへは忍ふ物からよもすから天の川社羨れつれ
人
高砂の尾上にたてる松をたにをれは折つる我としらなん

返し

たかさこの松は我とも霜かれにましれる枝を知人そなき

門さゝで和泉守順朝臣のかきをへたてゝあるに梅を
こなたの人みなとりたりといふを聞て梅をやりたれ
は順

ゐせきにもさはらす水のもる時はまへの梅さへ殘らさり覺

返し

井堰にもさはらていかてもりに劔杉の丸杭くひも飽かぬに

又　順

和泉にはあらぬ眞垣のしまちかみ涙の越つゝもると社きけ

又返し

打こほる涙のおとせはもらぬよりしまきの風そ吹かへさるゝ

みつあきらの少將に

木高くて雨もさはらぬみかさ山かけに隱ぬ人はあらしな

同所にてかけあきらかうはひをゝりて

常にかく恨て過す春なれと梅にやこりすのちもまたなん

返し

立てぬる春とそ聞し春霞かくさく梅におくるへしやは

又これ誰かならん

おもふとちまとひておれは梅の花心にくゝやふかくみゆ覽

同少將二月十餘日の夜の月のあかきに

春いとゝいよひゐなからもなからへんと思心も命たへすは

返し

此春をのふる心のはしめにて千世ふるまてと思ふやはきみ

人にかはりてある女にみつあきらの少將

如何せんたえまかちなる岩橋を頼わたらんことのかたさよ

返し

かつらきのつらきくめちの岩橋のそなたもたゆる心とそ聞

又返し

たえまなくわたさましかは葛城の神もとけてそ我頼まゝし

人にかはりて

おとろかてあらまし物をみも果ぬひるまの夢の戀しかる覽

又人のれうに

待ほとの遠たうみこそ侘しけれなこその關に今はさはらし

雨ふるよ人と物なといゝてねぬるをおもふひとにか
はりて

をやみせぬ雨にしほれて床夏はこよひふしぬと聞はまとか

七月七日

星まよふほとをあふとて棚機のやすき空なき雲井也けり
けふとみなしらぬ人なき棚機のなかさへそらに夜や深す
こよひこそ風もすゝしく天の河浪立わたる君も見えけれ
何事をおもふともなく終夜ねぬに明ぬる夜をそ恨る
ぬる折もなくてや床を明すへき夢とたに社つらきをはみめ
かゝらんと思はん人の夢路にもつらき心をみえしとそ思ふ
よそにのみあふみの海はかひなくて戀しき涙そ立亘りける
かくてのみ憂に命のたへぬれは頼めぬよまてまたんとそ思
かひなくて明石の浦の秋風に戀しき涙そ立まさりける
秋風の吹おりにしも問ぬかな荻の葉ならは音はしてまし
月影のおなし色なる梅花いるとも折てみつへかりける
仇にちる花も春ともみなからにみつの上社まついけれけれ

けふまてゝとなかれ出ぬる水上の花は昨日やちりはてにけん
侘しくはならぬまてにもうれへつゝ人に言へきとのなき哉
年月の行らん事もおもほえす秋はかりのみ人のみゆれは
戀し共いはゝすゝろにおもほえて人にしられぬなく頃哉
有したにうかりし物をあかすとて何處にそふるつらさ成覽
問ふをはいさや哀と思へ共つらくはいかゝしらせさるへき
うきまさる我身にしらてよそにのみ聞し昔に返してし哉
まつ人のたえぬからにやさよ更て月の入にもねはなかる覽
見し人をみゆやと夢を頼にはめもあひかたき物にそ有ける
今はとて散ゆく花のわりなさは露のおくにもおかれさり堯
長夜をいかにあかして女郎花朝かほなれはつゆけかるらむ
遙なる山ならなくに夏虫のそらにとふ火とみえにけるかな
山のはゝ池の底にも見えなゝん入とも月のかくれさるへく
うしと思心のくまのなき時はつらさかくれぬ物にそ有ける
人待となきつゝあかす夜な〳〵は徒らねにもなきぬへき哉
日くるれはまつぬる萩はさを鹿の鳴聲にたに驚きやせぬ
戀しきも心つからのわさなれはおき所なくもてそわつらふ

　ひさしうわつらふ所に

たなはたの夏の日くらしくるしくてなとかくなかき命成覽

　つききはくころ

天河めつらしきをおほかりと夜こそ此ころさはくてふなれ

　九月晦日の夜風の吹に

うちすてゝ別の秋のつらきよにいとゝ吹そふ木枯のかせ

　あはたの右大殿夜深く歸り給てこたにひかけをつゝ
　みて給はせたりしに聞えさせし

包め共こたに人めの茂きよにあけは日影のまはゆからまし

　ある所よりころもてのもりといふ所を繪にかゝせ給
　てよみにたはせたりし

春は花秋はもみちとさそはれて人のたちよる衣手のもり

羣書類從卷第二百七十四

和歌部百二十九　家集四十七

加茂保憲女集

しきしまの世中。わかみかとの御しそく。國のうちのつかさ。ちゝのかと。すきにし年ころならへる月日のなかに求むれと。我身のこと悲しき人はなかりけり。年のつもるまゝに物思ひしけりける時におもひけるやう。はかない鳥といへと。生るゝよりかひあるは。すたつを久しからす。はかない虫といへと。ときにつけてこゑをとなへ。身をかへぬなし。かゝれは鳥虫にをとり。木にはをよふへからす。草にたにひとしからす。いはんや人にはならはす。ちはやふる神代より人をさかしき者にしけるそ。空をとふ鳥といへども。水に遊ふいをといへとも。はりをまうけ糸をすけて。そのまなこをとちて。深き海といへと。きをくほめ。はかちをまふけて。をのつから渡りぬ。すへてかそへは。はまの眞砂もつきぬへう。たこの浦浪もかすしりぬへう（もくゝ）なし。又おとこ女きまにしたかひ。あけの衣としことに色まさり。つたなき松にすむたつは。みの衣としふれと色をかへす。いそみは深けれと。谷のそこに身をしつむることをなけき。あるは世をそむき。のりに趣いて。心をふかき山にいれて。みのをかけて。石のたゝみに身をかけて。苔の衣。きの葉をつきにして。松のはをくふ。これは齢をたもつときゝたり。さるによりて。戒をたもつをのよにこそ。身をもやつし。人と均しからね。ゆくさきは露にぬれて。草のうへに居。われよりあかれりとみし人の。つみのそこなるを救はむと。身よりかしこき人のみなり。女はかしこき玉のうてなのいへとし(家刀自)ともなりて。面白きをを時につけて見きゝ。はかなき八重葎にとちられて。日のひかりたに稀なりといへとも。露のをのつから光を見せ。虫のをのつから時をしらせ。草のをのつから花の色を見せつ。かくさま〳〵なるをを見れは。わか身の悲しきを。余は幸ひをさためたらぬ世なれは。さりともと若き頼みに頼みしをを。いま年のおいゆくまゝに。あはれなるをを思へと。いやしきには友とする人もなし。つたなきには宮ひかなることとなし。かゝれと心ひとつに歎きて。あしたには白妙の衣に。くれなゐの時雨ふりしき。ゆふへには墨染のやみに暮まとひて。あるときに胸に思ひをたきて。灰にかきつくれは。煙となりて雲とゝもに亂るゝ時には思ひなかして水にかけは。波とゝもにみたるゝにと。心をはなくさの濱によせ。かたちをはかひあるさまにもてなして。おもし

ろきとを心にこそ思へ。たれにかはいはむ。珍らしきと○葉をいひ出たれと。誰か頭をかたふけ。深きあちはひをもしらむ。よになき玉をみかけりといふとも。たれかた(手)のうち(裏)にいれて。光をあはれひむとおもへと。てい(こひちイ)の中におふるを。遙にその蓮いやしからす。谷のそこに匂ふからに。そのはちすいやしからす。宮の内の花といへとも。さくとは隔なし。ひんかしの山に秋のもみちてらす。西の山に春の花ひらけすはこそあらめ。そらにすむ月のかけ。はかなき水にうつらすはこそあらめ。おほきなる河。ちいさき川も。なみのさま隔なしとおもへと。人よりをとれる人の。すくれたる才あらはるゝを難しといへと。人にまさりたる人の。をとりす(たイ)るさいは。劣りたるとの葉の面白きにはあらす。人のかしこきなりといへと。冬の雪いつこのに(もイ)劣らすと思へと。こしのかたのにはしかす。鮭といふいほの冬いてくれは。北へなかるゝ水すらも友とせり。鵜といふ鳥を冬の川にかひて。あらき嵐にすゝむをとなし。鷹といふ鳥を夏の野にかりして。あそふをなし。松の子の日いつもおほかれと。夏の野にいてゝひかす。あやめ草おほかりといへとも。春の子の日にひかす。おなしくくらふる駒といへとも。かしこきには負けぬ。同しきかち弓といへとも。まとに當らぬはまけぬ。おなしきすまひといへと。力はきには勝ちぬとおもへは。いかてかへたてのなからむ。賢きはかしこく。幼きはおさなく。高きはたかく。短きはみしかく。長きはながうこそはあらめとおもへは。昔よりたから短きをさためとり。時をわきをきたるに。今わか身にみたれ物思ひのまゝに。つけむ言のはを。わかてやはあるへきとて。ある時は長きよをさかしかね。有時は短き日を心もとなかり。人しれぬ戀なきにしもわかねは。枕さためぬうたゝねのほとに夢さめ。花かすみ露につけ。草はにつけ。鳥虫につけ。あるおりには獨ありあけの月に。あさちか露おきゐて。秋のよひのまに心のゆかぬところなく。もろこしまて思ひやれは。つるむれゐつゝ(えイ)ひとりはむ。蘆原の中つ國なまめかしく。たをやかなる言葉まさり。さかしく賢こきことは。もろこしにはをとり。山のすかた海のほとり。あやしう甲斐ありて面白しといふ人にあはゝ。なにはのとにつけさらむ。されと人の心あはすして。おかしきとは少くして。うきとは多かり。暖のをたまきくりかへし。いやしき心ひとつを千くさになして。いひ集めたれは。あるはよそ文字。あるははたもしなとして。いひあつめたれは。みそもしにたに。つゝくることかたきを。とりあつむれは。近江のうみの水茎もつきぬへく。かきあつめは。みちのくのまゆみの紙もすき合ふましく。心にいるゝとの葉の哀なれは。おくと臥すと。思ひ集めたるとも。なみたにくたし果てゝんと思へと。やみのよの錦なるへしと思て。あけくれみれは。水のあはにたに劣れりけり。なかれての世に人に笑はれぬへければ。なをかりの涙に。おとしはてゝんと思ふものから。なを書あつめてけり。春夏秋冬しきなり。よろつよ照す日のもとの國。とたまを保つに叶へり。おこきなき奈良の都のひんかしには。萬世の影みゆる鏡の山さやかにすめり。千年ふるすゝかの關よりこゆる年の一日よりは。蟹いたく縄くり返し。千尋のいせの海をうたふ。西は限なき我君の御代にす

みよしのはまゝよゝにかれせぬ松おひたり。うきヿはみな忘れ草しけれり。嬉しきことは盡せぬあし原に田鶴おりゐる。年をつめる舟ちゝの帆をおろす。泊りかひある海にさはかしきなみなく。空にくれたる雲なく。霞たなひきわたり。水草も心をとなへ。とり虫もこゑ〳〵さえつれは。人もよろこひをなし盛りとする春のゝとけき。池のほとり。花のあひたと。心のほとさはらかに。松のたてさまよなれたるに。藤はひかゝり。こけの衣あをやかなるに。黒木のはし渡し。白妙のさきおりゐてのとかなるに。あかねさす日の色ころも。ふかきも淺きもきたる人まいり集まりて。はるのかたのあつまことを。くれたしこゑにしらへ。むめかえにきゐる鶯なと搔ならして。まさいらくなと吹きあそふ。うちにはなか筵しきて。なかもきたる人そよりきて。かしら白きおきな女。はかため(齒固)おほしきヿをいひとゝめて。あゆの口をうつくしみ。かけもうかはぬ餅のかゝみとして。はるけき行さきを見て。かみもゆるさぬ幸ひを。ほしきにしたかひて預り。人もゆるさぬヿの薬を。心のまゝに樂しむ。またほとにあひては。草のいほりに久しきつまをかさりて。戒をは保たすして。ヿふきを保てるさまとも。いつとみこゝろさしてにはと。身をもち餘りて。老のふくろ腰にあまりて。いへとしまち喜ひ。かやのゝたにゝはしくこなとよひあそふほとに。やう〳〵氷とけて。谷のひゝきおほく。おつる水にかほまさりて。あしのをたちきるとて。ひさきをまねひて。卯花しらかさね所〴〵ほころひて。山のはを出るゆみはりの。ひさかたのとく入かけをせしかは。おとろきてやう〳〵まとゐる月のかつらを。そらものともとはてにおりて。てるひをも見あれとてひく。いはふ社のところなく露のいほりも變らぬ榊きし。ゆふたすきかけて。いそかぬ人なくさはくほとに。郭公の聲さみたれなるほとに。かくれぬのあやめ草をもひきあらはし。淺茅か中のよもきをもあさりいてゝ。つまをさためたるうへめとも。たれをこひちにおりたるにかあらん、そほちうたふほとに。月日つもるヿ。おほぬさになりゆくは。流るゝ水にたく八、風にまかせてすゝみ。ひねもすになく空蟬の露をまつ命心ほそくくらしかねたる夕やみに。飛わたりたる螢のひかり。小男鹿は照射の光におとろく。水にやとれるかけを。いをはおつ。ともすなつの水のかさりに。大殿のともしひは消えぬ。てるひにもきえぬ氷をも。ひみつといひて。熱し〳〵といふほとに。よけたるに。ほのかなる夕立にそゝける雨は。わたつみにふる雪のまのヿはり。(ちすイ)このまよりわつかなる影見ゆる月のこと。あかす見ゆる程に。たつたひめ色をそめわく秋にいる。まゆみのもみちあかく。こたかき所々に。移ろひわたりて。雨にたとふる七夕の。ちきれる月日をまちて。忍ひのつまをも取らすして年ふれは。つねにあかぬヿはをかはし。めつらしくてか。よはひ星の。いとまなくわたる雲路のあした。夕なれすならねは。うきヿをもならはす。いまはすましといふ空もなく。まれにあふ曉の。なみたをおとしたる露とあつめて。うつふしふみをかきはしめけるよりなむ。あめつち星そらと云ひけるもとにはしける。むさしあふみ。初めはうつし。人はそのか心のみしかきをもちて千歳の契り。數しらぬヿのはをかはせは。いはきならねは。おこきて程もなく下ひもうちと

けて。なれたるすかた。つくろはぬかたちを。玉くしけ明暮は。ます鏡かけをならへ。あいなしみしる程に。そめし紅あくにかへりて。契りし松に波高く。ちかひしゝのはは泡ときえぬれと。七夕はゆゝしとそいふめる。女郎花たをやけき野へに。はなすゝき打なひくゆふくれに。たひとく行ほとに。むまのおもてまゝにしも見えねは。もちつきの駒といふは。せき水影をれはにやあらん。風のこゑ夜ゝにまさり。むしの聲心すこき山さとに。小男鹿うち鳴。萩の下葉色つくをなかめて。心ほそけなる女。はかなくちきりし人をまつとて。かきつらねたる雁をは。くるかと思ひて。なよ竹のなかき夜をあかしかねては。春日となけれと。いりくるも緑の色を心にしみてかはりたり。月のひかりを袖にうつしなとす。よひもつち音は高くなり。虫の聲をはみしかく成まさりて。あけたては霧たつ野へに狩するあた人。宿かりなとするに。よさりに成にたりとて。菊に綿おほひて。あさかほにしほめるこをよなおむなにしはのふれと露たまりゐて。こからしの嵐にむすほゝれたり。きり〳〵すめは。あさことに置まさる白妙の月(しもイ)見る人もなくて。むはたまの炭をおこして。くひものに心をいるゝほとに。おほやけ私さかき葉とりいて。やまゐして摺れるころも年ことにみれと珍らしといふや。いかなるそ。おりかへす。むまのあかれは空もくもらぬ日かけをかさして。まひあそふほとに。ゆふきりふたかりて。山にはのりしときたえて。花ほころひす。里にはともしき宿に煙たえて。霞たなひかす。もの思ひまきるゝをなし。袖のこほりをときわひて。ねさめの床のかりの聲をあはれかりて。はらわたをたえて。思ひやれるゝはくらけれと。おほつかなからす。あけたて(戸イ)。ふりわけ髮のゝも。はかなきゝを立てたるはか(様)にかゝれる烏。ゑにうたれんゝをしらすして。くる人をかへり見たるさをしか。雪にゑはぬとりは。ゆきをよきたふ(太布)と思へり。氷にとちらるゝいをは。冬をむすへる網とおもへり。みほにいるあみのほとにおいて。かしうしみかとにせられうもてありくとさはきて。いつしかとおやよにあひ見むとまては。わらはへはとくをにしなむと心もとなかりて。こゝかしこ打ならして。いつしかとそ語らふめる。かくときにつけて。にくからぬ世中の命も。さかへもをとろへすは。何の悲しひかあらむ。されともひとのしろとてあはれひは。めこなくして逍遥すとて。春は子の日とて野へにいてゝ。をのか命をは松にあえよとひきのへ。烏をはころし。秋をはもみち見ると。のへにましりて。たかをはなちて狩すなとりして。きたるもの狩衣なるにより。つねならぬにやあらむ。されといひてなにともいかゝうきはせむ。よをそむきたる法師こそは。物の命をころさすして。この身をかきらめ。をはらよらへ。それすらよくのほうしはくひなや。かゝれは。なを難波津のかほのほりへの舟のさせひけなり。ほうらいの山かめのこうを甍くすとも。とものうちけるこのてなり。きこりの腰なりけんよきよりも。あめのしたなる世中は。をのゝえ朽ちぬへうなんありける。

世中はしまりけるとき。昔はにはたゝきといふ鳥のまねをしてなむ。男女はさためけるに。草のたねならて生ひけるは。この鳥のをしへたりけるになん有ける。さてその人のことも。廣くなりて。かしこきはたかき人となり。おさな

きは。けすきみと定めける。人はみなをなしゆかり也。されは高きいやしきなそは。とりにこそあれ。いつも(れ歟)かたかき卑しきあらむ。おなし類にこそあらめとて。たかき女にも。いやしきおとこ心をかけ。いやしき女にも。たかき男あるへけれは。おとこ女のなかを定めわひて。すくせにまかせける。またかく同し人のことこと。よくもあしくもなかりけれはなむ。幸ひもいまに定まらさりける。かのおなし人のこともなかりけり。昔たかき卑しきなく。にしひんかしなう。春秋ふしかたらふにより。つねなきをはと。をはにと云ひける。おとこの心といふもの。つよく有しもせよ。めつらしくはつかなるに。心さしをつくし。いひそむるなさけのをは。たをやかなるみやひには。なにをかすへきとて。はまのちくさなるは。まつになにはつといふ歌をつゝけて。おなしきうゆのうちとて。やまと歌とてよみかはし。あさか山をしひいてゝ。あはつの河にかけをならへて住むといひ。あつさの杣のくれにひきゝては。まかきの島に待わつらひ。涙のかへることに打わひて。限りなき深きをといひ。はるけき行さきをちきれは。あはれを知らぬやうなり。まくるを深きとも見たまへかし。くらへ馬のはやうよりといへは。月のほのかなるに。ゆみはりのをしていれは。いと思はすなりや。ためらひてこそといへと。月よにひかれて。心もよりぬへけれは。たゝあまの刈藻のこしにてをといひて。はかなく亂るゝ衣のせきを隔てゝ。たまくしけ明ゆくをおしむに。鳥ふた聲三聲なけは。なみた打おとして。立ぬれはをなし。ひにくれもすくせのもり。くにのまつはらにこそあらめとそは。みとりにこそおもへ。

心のうちには。見のつ〔へイ〕にもまさりて思へと。うへにはつれなし。顔つくるとて。はこの内なる鏡にうかへる影を。それか〳〵と心けさうをしてまつ夕くれ。かへるあした露けしといひて。すむはかけをらして。をこつりさをにかゝれるをを。くゆる煙さきにたゝす。つくしみつくさかへるをかたし。ひと虫を玉といひしかと。あまたのふみを見もいれす。くれ竹のひとたにとまらす。ふしみの里になしつれは。あさちか原の露しけく。おくと臥すとに。おきつ涙。あれたる床に舟とうかへる心をはつくし。すくせをはおもへは。いろなるなみたちぬへうなむ。なほとり浦の靈なれは。ひとをの哀なるにはなは。いなひのゝいなひはてす。しかまに染むるあなかちにいへは。かけまくならの宮このふることゝなりて。なけきのみ やまのへにやなくなる。なつすゑ〳〵かそふるときは。なにゝあふみの竈の神を恨みつゝ。こぬ人ゆへにひねもすに戀ひくらし。よもあかころもをかへし。まれなる夢にたましゐをあくからし。ほのかなる蜻蛉に心をまとはし。した紐のとくるをしるしに思ふ程に。ゆふつけ鳥しは〳〵打なき。夜やう〳〵あけゆき。日さしいつるまて。あしたの床ものうく思ほえて。とくあくれは。あすとも知らぬ世中に。なそをゝして。つかきはのにりていはすれは。なきふしにやむはれむ。からにしき面白しといへと。つゐにたえて。やかてある面白き。さくら。つねに散らすは。ひとにいとはれなむ。みちとせをらす。花にをかはためしにせん。鶴あしはらにすますは。いかてか千とせをかそへん。かるかやみたれす花にをかは。たをけき名をは殘さむ　すれる衣めなれなはこ　なにをかは

珍らしきにはせん〳〵つゆの命のほと。あさかほのしほまぬ先にたにたはれすは。なにをかはたはれにはせむと。おとこけいかたの如何にと見あけて。心すきくれを見せ。いかためありともみせす。よこはしりのせきにもさはらすめは。池水のいひくたすとを。かは竹の葉茂きとには云ひつゝ。いひ集むることとも。おほそらを紙ひとひらに取りなして。かくともとといふやうなり。この歌はあめの帝の御時に。もかさといふ物おこりて。やみける中に。かもうちなる女。よろつのひとにをとれりけり。さるなかに唯もかさをなむ。すくれて病みける。かさのみにもあらす。おほくの病をそしけると。からうしてこの歌よりなん。よみかへりける。そのほと冬のはしめ。秋のをはりなりけれは。草木も風もやう〳〵枯れもていくゝ。つれ〴〵なるまゝに。珍らしき病なりとて。此瘡のそやみ(疑似)をかきをけれは。疾去ることによくなむ。見ん人ゆゝしく(とイ)思ひぬへしとて。いさゝか色にもいたさす。たゝ心ひとつに思ひて。わか身のはかなきとを。よの中の常ないこと詠むるゆふへ。そらにたまとる虫をよみ。ある時はあまたのたましゐをかたりにて。うた合をして。かちまけは(をイ)心ひとつにさためなとしてそ。なくさめて明し暮しける。見る人はさもこそやまひたかしそらめ。つねにゝよひ(師吟)人なむ　これをこのむかはなといへと開いれす。わつかにすゝき菊なとうへて見んとしけるを。此疾につきて知らぬ程に。菊も枯れにけり。ましてかゝるとをは思ひこめてや。やみなんや宜しからむと定むるに。なをあかねは。かゝる事をいかなる人しけん。心もなかりける人かなといはゝ。おほよその人のなたてなへけれは。あかせるなり。たいもしらする人もなし。たゝよまるゝ時を。面白きにすれは。冬も櫻こゝろのうちにはみたる。なつの日にも心のうちには。雪かき暮しふりて。きえまかひなとすれは。定まる事なくて。かき集むるても定めたらす。はしにかくへきことを奥にかき。おくに書くへきとは端にかき。定まるとなし。もかさいさかりに目をさへ病みけれは。枕紙に面白きもみちを。人のをいたりけれは。おもひあまりて。

曇りつゝ涙しくるゝわかめにも猶もみちはゝあかく見え覺

正月の比ほひおもひあまりてはなかうたもあるへし

春霞たなひきわたるけふよりやなへて草木も花こゝろつく

霧晴ぬあさまの嶽にいとゝしくけふは霞のたちやそふ(下闕)

池水の影もたえせぬはるひすらかけをもともに遊ふ鷗か

鶯はおしむとやなくあさくもりちりゆく雪の花の名殘に

さ夜ちる鳥はねうつ涙のをとす也よそのはる風来とくらん

松ひきて千代とも祈るけふしまれ降ほともなくきゆる初雪

うらすこくたつかは霧を見亘せはあさはむ鶴の上も[illegible]めり

わひとのみちたつ雪もきえぬめりけふしやのへに若菜摘[illegible]

春とに人はおゆれと難波なるあしのよそひはうら若くみゆ

人のよにうきにも春はかよふらしうへのみ草も色かはり覺

春駒のすさむるよとの若草もつまにはしかぬ物にそ有ける

君まさはうつしにもせよ梅の花とくとりとめよ風散すめり

春の野に若な摘とて花かたみ心にもあらぬつまをとりつる

鶯の花のえとにこつたひてあすもはるひにゆるきなく也

こきませの花のにしきを春風のたちきてさとへかへる雁金

苗代の水そをくなるたねしあれはうへにまかせて蛙鳴なり

とりあへぬ花をおしむと永日にさえつりやすく鶯そなく
春霞たなひきわたる青柳の糸はけふりによるかとそ見る
ゆふつけのしたりも永き春の日のあけはうら□鳴そ悲しき
春の日にこのめもえつや打むれてかたかきかはし人の行覽
青柳の糸にやいをはかゝる覽おろせるかけの網にゝたれは
山川もすむかたをかにもゝち鳥こゑきく春は夜のにしきか
春雨に野山もいろはそめてけり人の心をいかてぬらさむ
わたつみの汀は色も劣らねとしほかきはらふ綖は增れり
櫻花にほひそたくふ心かなちらはちるへきものならなくに
色も香もみきはにやとる山吹のおもかけたにも散殘らなむ
わかるれと春はゝひにもならなくに紫にそむ藤そかゝれる
花のえにはねうちかはし呼子鳥なけとも春はとまらさり覽
なみかけて人のおしむにむめつ川春の暮をはさしもつかなん
東野に任せし駒のけふはいてゝ色にあをはとよに光るらん
櫻花えたにはつゆもとゝまらてあたなる涙ののこりぬる哉
春雨の種まくかをわたつみにふれはや石にみるのおふらん
春立てはこのめに燃ゆるほのほ哉時につけたる戀にや有覽
浮世には花ともかなやとゝまらて我身を風に任せはつへき

夏

うつせみのときよにかはるなつ衣人の心をいかてをるらん
しろたへにさける卯花いりちとてかせ「本ノマヽ」のかみつ衣かけしも
年をにやそうちひとのやひらてにかしはきの森うすく成覽
わかすゝき秋の野わけて打忍ひ結ひやせましほにあらす共
夏草は枕にすへく成にけりたひゆく人のやとにかるらん
めつらしき初聲にしも郭公むかしの人のこひしかるらん
里をにことにかりくる時鳥ねたきはまきのとにもさはらす
すり衣かもの社に夕たすきそてかたかけてみたるらんやそ
けふみれはほにそ出にける忍ひつゝ駒のすさめし妹かなき草
榊とる我になきかせ郭公ねかひなまめくきみかおほきみ
人まては敲くくゐなをそれかとて儚く明る夏の夜そうき
むらさきのそこまて匂ふ杜若かけさす水はゝひにや有らん
五月山雫もよゝに時鳥たかさとへとかよはにきつらん
けふ見れはたまのうてなもなかり覽菖蒲の草の庵のみして
時鳥たひにありかや此さとのあやめのくさのやとに結へる
枝なから冬の夜半くる橘の花はふ□ひときにあふかも
まをかと行きて見てしか仇し野は此五月雨に如何なれると
かるこもに玉まきすくる五月雨をせちにも人に思ふへき哉
ふしかへり澤水むせふまこも草かけをも人はからんとや思
おほぬさにをける朝露けさわけて衣の袖をひきぬらしつる
小倉山ひみゆるかたにやとかれは螢のすたくかつは成けり
てれるひに露待侘てとひかへるみくつてふなは澤にや有覽
はちすはのしける池水ところなみ旅の空成ひとかやとさす
なつのよの草刈笛のくちなれてかへるさかなし夕暮の空
かく計千草しほみて照日にもひとりなかむる袖はかはかし
冬をへてともしにおふるむきの秋はよさむ□せみのは衣
　五月せみの聲むきの秋をゝくる
たに水はかたかけおふる夏草は岸ゆくかけの駒そすさむる
空すみてかゝみとすめる夏の日は飛かふ鶴の鳴さへそうき
五月山このもかのもに隱れかねはかなきものはともし也覽
てなるれと猶火鼠のかはほりは暑さそ勝るをきやしてまし
大幣にかきなてなかすあまかつは幾その人のふちをみる覽
撫子の何むつましき常夏をよるしも見ぬそわひしかりける

うへしときわか種とりし夏の色はつまとる計成にける哉
ゆみはりの有明の月の月の内に入影おしき夏にもある哉

秋

霧まよふ秋はきに晃をくれしとおもひて草木いまや色つく
七夕のあまの川船秋をにいかなるほしか綱てひくらん
七夕のわかるゝあさの袖ひちて星のみわたるかさゝきの橋
七夕にかしゝ衣を秋をに風ふきかへすこひそせんかし
女郎花人やたのめてこひつらむいもとかきたる秋の夕暮
秋の野に放ちすてたる駒のおはくらとは露そうつし置ける
おもふにはなるをなしと鈴虫のこゑふりたつる秋そ悲しき
山田守我衣手に露はをけと草葉にしてもうつろはなくに
ほのめきしひかり計に秋の田のみもり侘しきころの色かな
山田もる庵につまなきわれとてや夜な／＼おそふ秋の白露
秋風にあはれそへむと雲路わけはねふりわけて鴈はきに晃
秋霧のしめゆひそふるおほそらにいかてか鴈のとひ通ふ覧
蛍かたなきすれはいもかきぬしてうちあはせ聲となふ也
小男鹿も聲ふりたつる秋とてや萩のしたはも色にいてぬ覧
風吹は秋の白露まろひあひて結ふ草葉も色にいてにけり
見渡せは涙とそ見ゆる秋の野に帆にあけて舟や漕わたる覧
藤袴ほころひわたる見はほかにぬきせん人そ戀しかりける
小男鹿のしからみふする秋萩の露はえならぬ物にそ有ける
秋風の寒きよひまにおきのはにそゝのかされて人そ戀しき
蜩はしはしはならすあさかほの花見る心やすけくもなし
しら露のきゆるをおしみ下草にたまふきむすふ秋のよの風

冬

凄る覧草木にたくふたましゐを心をかせやふけらかしつる
なみならはよも山をに吹かへす雲のいほりさいかゝしつ覧
秋の夜のねさめのほとを鴈かねの空にしれはや鳴わたる覧
秋のたのさなから年をへてけれは殘すくなき月日也けり
あえよとて菊の白露のこへともすきにし齢かへらさりけり
もみち葉は色めく秋にあきりして木草に袖をひかれぬる哉
山かつのそのゝ紅葉はあかけれとやみなるよるの錦也けり
野山ゆき松たけくめるつゝらこのいくふし秋をくり返す覧
淵と成せとのみなるかよの巾をふみ迷はせる秋かみちかき〔本ノマヽ〕
紅葉らの降しく山にましらひてみのしろならぬいろかきつ
あさほめの色きぬ照すふねかとにうへに紅葉の袖は見え晃
紅葉はは秋にそしむるよの巾をみむろの山は名のみなり晃
秋風にかれにし人そこひらるゝ夜とも衣もかれやしつ覧
故郷へ秋は歸りぬ□さひける山のにしきをけころもにきて
人もみなかれゆく野べに花薄露にのみこそむすはれにけれ
打はへて機織る虫のある物をつゝりさせてふ聲やなになり

冬　こゝまてはあきといへり

わたつみに風浪高し月も日もはしりふねして冬のきぬれは
冬をいたみうすき衣とかへつれと心はのへにくさに成けり
もみち葉の積れる上にをく霜のなかからはきえて物を社思へ
くれなゐのせになかれめや菊の花霜にもうてぬ色そ悲しき
時雨ゆへ我たちよれはこの木はたのむかひなく成にける哉
山人のあしの上しもきえかへりみちにわふれて歎きこる覧
冬の野に淌むれたてる花薄むすひし紐そまつかれにける
冬の夜をかことふしもをおほす覧をのかは風に草も枯つゝ
人もかれ虫も音せぬ山里にたれかはしはしたちとまるへき
夕つくよ光を見すはあそひおの山のは近くよひそきにける

雲晴ぬあられをみれはふりはへて寒さのくるに侘(そイ)しかり曉
白妙の雪にいろつくさねかつら冬はくれ共をとろへなくに
久方の日てるかたにも冬の野はしみ社まされ色は見えすて
影みえてなれにし背も冬くれはまれにくらしな人やす(さめぬ)
冬寒み氷る池水ゆくかりのかけとちらめよひときるふへに(くイ)
冬河のなみのよいまに氷れるを風もてをれる綾かとそ見る
冬こもり人も通はぬ山里のまれのほそみちふたくゆきかも
のりのしのをつて□冬なれは山のたき聲とちやしぬらん
山川のいさからほりのとちたるは風社あみと吹むすひけれ
あさあともきなから消て川千鳥氷れる身にそ冬はすみける
わきかへりたきりて見ゆる山川も冬にはあへす氷すらしも
しろたへの鶴いうはけにおく霜のまきれて見ゆる朝顔かな
水鳥のうへはこほれる羽ころもいて入あらふ涙のまもなし
冬の夜をひとりね覺におきたれはおなし心に鴈もなく也
石におふる海まつのねはかたけれと年をき積る山に老ぬか
とひりせる執れかみわの杉のかとをはり知らす雪の降れとは
芦田鶴の聲をほにあけて我戀は天のかはらに今そふなつる
芦田鶴の雲のかくれにとひかくれ人にしられぬ戀そ侘しき
雲路にもたゝちにまかふ鴈かねの思ふあたりにゆき難き哉
おもへ共我身はよそにとふ鳥のなと人なれぬ戀にかある覽
雪高きみちなきは□我なれやあとたえ人のふみ見さるらん
ふすとおくと床よはひする歎にはこたま出來物にそ有ける
涙もて思ひけてともわか戀はほいほに見ゆる物にそ有ける
いへといへとさもうこきなき心哉いはきよりたに出る思を
あま衣ちしほそむれとよと共に色なき心いかてみせまし
風吹は涙のしめゆふなかれあしのふしおきこひに沈む比哉

君をのみ戀つるあまのたまいをはさほにかゝれる命成けり
たのめねとまつを(ひよ脱歟)にたかさこの尾上にすくすをそ侘しき
夜の程は淺かのぬまといひなからなとうとまれぬ心なる覽
かく計人のかたむるあふさかをいかて心のゆきかへるらん
みぬ人を雲井のよそに戀そめて踏むあとさへにまとふ頃哉
たく(とイ)ひなくいのちたえなはわかこひにいかなる人か〔下畧〕
あふとの雲井とをくて我戀はいのちにかよふほとに悲しき
濱千鳥あとにたましゐ通ふ也みつからみえぬいきかより消
玉章の命をかけし我戀のあはゝとさへもなきわたる哉
亂れつゝ戀を社すれむまきむまの亂れておほす神ならなくに
色みえぬ言のはたにもある物を心にそめはひとやかりなん
あし垣の中によのはのあちきなさあふを波によらは滿つゝ

逢ての戀

しぬといへと猶魂はほのめきしみてはからさへ無心地する
侘ひつゝも賴むになれは玉章の使をやるそけさは戀しき
ほのかにも結ひし水の面影にみえて戀しき君にもある哉
待といひて君をみとりの色深く長閑きかけにちよは隱れん
あはさりし戀に我身はきえにせはかへる〳〵は戀はさらまし
ある社は侘しかりけれ變をにたれかけぬよといひはしめ劔
慰むやと思ひける社をろかなれみても戀しきよに社有けれ
あへるよを命にかふる物ならはなきてそひて見るへく〔マこ
紅のはつはな染の色ころもきつゝみれともあかぬいろかな
ひとりねに哀と聞しゆふつけをけさなく聲は恨めしきかな
逢をはあかぬにあくるしのゝめも見はてぬ夢の心地社すれ

逢てあはぬ戀

みし人の聲ならね共きよふけてね覺になくそ侘しかりける
見てたにもまとひし心侘ひぬれは〔恐有誤脱〕あはてもいのちなりけり
白糸のいかなるなつか結ひ劍うちはへふしのなきそ侘しき
思ふてふあひみし時のをのはゝ辛きにかはる物にそ有ける
戀わひて面影にのみこひいれはひとつ身になる心地社〔下闕〕しきのうた。こひ哥とはさるものそ。おきてさうそいとあはれなる。あるはたひゆく人のおもしろきところにつけて。またみつうみのかたつける。山寺の心すこくたうとけなるに。きのもとにめくりて經をよむに。聲のたうとくきこゆるに。うみにはふねの漕行をともあひてあはれなるに。しけれるやのなかにわつかにたゝひ〔たびゝ歟〕とのゆくみゆ。心ほそけにて。あむまひとむまはかりゆく。おとこなと行。つほさかのうつ〔へ歟〕に。このはのさしおほえわたるもおかしきに。かはらよりのりのもたせて。ゆくほとのあはれなるに。よみなとすへて。いひつくすへうもあらねは。たゝはしなり。あるは心ほそきやとに。つれ〳〵と雨のふるをなかめいたるをなむ。まなこをはなかるゝ水にたとへり。
汐ならてはちすの海にこく舟のおくの聲をそほにとあけつ
水もなき空に網はるさゝかにの懸れる虫をいをと見るらん
雨降れは庭にきしろふ泡沫を何れかまつはきゆるとそ見る
わたつみを波のまに〳〵見渡せははてなく見ゆる世中のうさ
いせの海に藻鹽燒蠻の風を痛み空をしほむる君にそ有へき
足引の病やむてふほうのかはふきよる風もあらしとそ思ふ
そむけとも天のしたをしはなれねはいつこにもよる涙成覽
かりそめの旅とむすひし草枕もみちするまて〔行脱歟〕我はへにけり
泪もておもひつゝけし水莖のふてのうみともりにける哉

ときにのそみてつかひめすゝきじのもみち
染めし色も時にのそめは紅葉々のあたりの海に散かゝり覽
にはたゝき
かとをたによきし心を思ふにはくなふりはてゝ遠き山路を
にはたつみ岸のみ殘るあはみなに斧のえくたすなかめ成覽
かけともに見えたる月を浮雲のこせ〔本ノマ〕をふくるみにそ有ける
我をくよ深きなけきする鳥のこゑにやなけきこりしゆく覽
あしろのひをゝうちにて
さまもなも變らて涙は網代木の同しうちなるいほにこそ有へき
すまひくさほて吹く風にふきつゝら何そしる覽定めなきよを
かたわきて吹風によるすまひくさ露に移るそかひなかりける
よにいれて月の影さす槇のとは夕つけ鳥のふねもあけゝる
人めなき山にもみとはいれつれと隱れぬものはうきゝ也覽
ひをのかへし
早きせも淺きは違ふ同しうちもひをそかはねをとらぬ成へし
梶のをとによる漕く舟は哀なるみる人なみのあやはかひなし
あしたつの聲さへ雲にかくれせは哀をいかて空にしらまし
玉櫛笥鏡の浦にすむ千鳥おほつかなみにとふ〳〵とゆく
契りあれはいかゝ逃れむ。むまるとも。かひこめくちて。とりのこの。かへりては身のうきことを。おやゝのむすへる。心のうちに。いつかあらはひくゝむを。なく〳〵こもりけれは。をのかふね〳〵おひたちて。かくれしおやのはねころも。みなわすられてとひならひ。あるはかしこくなるすこの。かしこきたかとなをふるひ。あるははかなくさすらへて。たつとゐるとにおもひつゝ。なけきのえたをおりのほり。いまやはかなきしにすると。さえつるこゑをきく

ひとは。いそひするとや思ふらむ。あはれかなしきわか身かな。冬なりしときゝみにせは。たとかへしするかせふきて。おしむ草木もありなまし。人なみならてひとゝなり。ものおもふをはおほさはの。いけるかひなしと思ひつゝ。なをふるをはふはのせき。ひとよりこそはこえさらめ。ひとしくたにもなろやとて。はかなくすくすなつ冬を。あつしさむしといふほとに。とし月なみにこゆるきの。いそかぬわれはつれ〲と。うくらのしたにはひふして。かなふ人なみしとみ山。ふきあけおろすかせのをとの。朝ゆふへにかなしきは。かせきのこゑにいるときに。こたふるかことききこゆれは。なとしもこゝにあるかとそ。こゝろにかなふよふことり。よふにしたかふ山ひこの。ひゝきはかりをたのみつゝ。まれにかゝれるたかすたれ。なみたはかりのいていりに。くちはてぬれはいとゝしく。心のうちも見えはてゝ。身をはつかしのもりの下。かけにかはらぬ我身とや。人や見るらんあしゝけみ。かつはつれなくなりなから。したさはかるゝわかむねは。やすけくもなしなるたきの。おちつむたうはおほかれと。我身ひとつにかすならぬと。おもひしかともよの中の。うきとをつらふいれつれは。ならへにわふるあしのねの。けふりにたれもなりはてゝ。ゆゝし〲といふほとに。あすそせになるあすか河。ふちのころもにまつはれて。たかきいやしきなみたかは。みなかみはやくなりにけるかな。

草深く茂れる宿をいてゝいなはたかゝりのをならむとす覧

思はしと心をもとくこゝろしもまとひまさりて戀しかる覽

とをからぬ袂に淵はあり乍身はすてかたき物にそ有ける

天の河涙間にみゆるあかほしはくもまに浮ふほかけ成へし

思ひきやふたゝひきてし墨染の衣にちかくなれん物とは

山里にしる人もなきほとゝきすなれにしさとを哀とそなく

思ひわひくさきを頼む山里は冬くるときそわひしかりける

冬の夜の涙のかゝるむはたまのかみは氷にむすほゝれつゝ

淺ましきをは夢かと驚けとうつゝはさめぬ物にそ有ける

身の泡に思ひくたせはめみかけてたゝすきくれの衣とそ思

かへし

程へてそ網はかくへきすきくれのさるは身の泡に久しかるへく

またかへし

堰もあへぬ瀧津心をくれ〲といかゝ見なれて久しかるへき

人にむめをこひたれは

あひ思ふ君かためにはむめか枝に折れはいとゝ(下闕)

返し

うくひすのかよひし枝をおりつれは(下闕)

日ねもす小あめふりくらしてさくらの花やう〲ほころひてとりのこゑとありやゝなきのいとみとりみたれてにはのおもてあをやきなせりにはたつみきえかへるゐると見るほとにきゆめるみつほともをとらぬものは我身なりけりと見ゆるにて

雨の足もかす社まされ淀河のこもの汀もいかゝなるらむ

常よりもこもの汀はまされとも淺ましく社人はつらけれ

已上百十六首内他人哥

長哥

加茂女(保憲女)

私云。歌員數百十六首云云。而二百餘首在レ之如何。以二他本一可レ撿合一哉。

小大君集

わすれぬかきりとおもへと。はか〲しうもおほえす。人ことをといふことのやうなり。
正月一日のをなるへし
（後拾）いかにねてをくるあしたに云をそ昨日をこそとけふを今年と
女御たちのおほむつほねに候ける時の御佛名のまたの夜まいりたるに人〻あつまりいて〻とくまいれとせむれは何をならんとおもふに。けつり花を庭にさしたりけるに雪のか〻りたるよめとなりけり。こ〻ろもえす。
としつまは誰かは雲を拂ひあへむ菊の上ともしはし祉みめ
きのふつかひしとくさ（未勘）のおちて露のか〻りたりけるをあしたに人のとりあけたりけれは
（新勅）信濃野のや（におけるしらつゆは）とくさのうへに置露のみかける玉と見えにける（ゆるなりけり集）哉
雨のふりけるよのよひに月のいるをみてよめる
大空にちりにしはなや匂ふらん雲のはるともみゆるよひ哉
竹のある所にて風のふくにいみしうさ〻めきけれは
風ふけは涙やはさはく河竹のなかる〻水にこゑのかよへる
十月に女院（東三條）御はかう有てきくあはせさはきけれは
神無月ほとけの限りあらはる〻庭のまもなく花そふり（ちイ）ける
いつのまに法に移ろふ菊なれや過し物ともみえぬけふ哉
覺束ななにしきつ覽もみちみに霧のかくせる山のふもとに
君しあれはなみ木の花もたのまれすいたくな吹そ木枯の風
いとあまたあれと。か〻れはと〻めつ。
源宰相右兵衛督にはかにをみにめされてそのあをすりを朝のまにせめられてやまゐをかさぬるに氷のつきたれは
かきりなくとくとはすれと足引の山井の水は猶そこほれる
といふかの御うへのかくなむとあれは
足曳の山井に氷る水といへはとくとも袖のほとそしらる〻
人のもとにきける人の三年はかりさらにみえさりけるをこむ（みイ）とてあすは明はて〻くるまはゐてをいひたりけれはあやしうひさしき事と思へと人をやりてそひてをいはせたりけるをつと〻らへてうちにもえいらてみしていとねたかりけれはおとこ藤大納言（朝光）とか
（拾）岩橋のよるの契りもたえぬへしあくる侘しきかつらきの神
返しおとこ
秋たては見しとや思ふ葛城の神のよるにてやみぬへきかな
此おなし人なをしすかたにてきてこよひは内のとのゐなりこれをきたれとてまきゐのさやにちんのつかさしたるかたなを〻きていぬるか三日はかりをともせさりけるにかたなとりてみけるにさひたりけれは女
ときをきしさやの刀もさひにけりさして久しく程やへぬ覽
とてやりたりけれは
かねよはみかへる刀に身をなしてつかのまもなく戀や渡覽
おとこ心ちそこなひて四五日はかりうちへもまいら

てありけることゝいひてありける書に

かくてもやきえんと思ふ白露のおきゐて結ふ水くきをみよ

をんな

露によりくるゝ影まつ草のはにかゝる折しも消ぬと云へき

これを見て。みかなんなきしといひけるこそ。そらとなれ。

くすたまを女のかりやるとておとこにかはりて

沼とに袖そぬれぬるあやめ草心にゝたるねをもとむとて

返し女

くるしきになにもとむ覽あやめ草淺かの沼におふと社きけ

みのゝかみよりみつ妻なくなしてのころ霜のいみしきあしたに人

(後拾)此頃の夜半のねさめは(そ)思ひやるいかなるをしか霜はらふ(ははらはん)覽

返し

冬の夜の霜打拂ひなくとはつかはぬをしのわさにそ有ける

これなかのあそむやまひにわつらひてみかはのしほちをよひに宮權大しんむねまさをやりていはせけるに更にきゝいれさりけるをしひていひけれはすこしよろしきをたのみにてあかつきにといひてねぬるによなかはかりにおき出手あらひかねうちて佛にものまうすをとしけれはさや／＼とおもふにをともせすなりにけりてしをおこしていつちかおはしぬるそとてもとむれとなく成にけりあさましうてかきをきてにけにけり

(清後拾)なかきよの道(やみ)にまとへる我をきて行か(くも)くれぬる夜(そら)はの月哉(かけ集)

重なれるみ山かくれに住人は月をおしへんあふきたになし

入道の返しあしたにそありける

二條のみきのおとゝ(道兼)八月はかりにまいりたまふてうたひとつよませて給はらんとうへにせめ聞え給へはせむかたなくて草の葉の上にとありし御かへりはこれなり

露ふかき草葉のうへもいひかたみ何につけてか秋をとふ覽

秋の夜の草はの上の露の身をそれにつけてもかたりをか南

かくいひこめられぬとていて給ぬ。

せんえう殿の御つほねよりみそきのひかつらにあふひをかけてうへにまいらせ給へるおろしをたまはせたるに

瑞籬のあたりになれぬきねよりも神にいちしるし今は插さし

返しわすれにけり

また五月五日さうふのねを鶯につくりて梅のえたにすへ給へる(本集)

(新古)梅かえにとりたかへたる時鳥聲のあやめも誰かわくへき

かへし

なのりせて梢にこすは郭公はるかけてこし鳥とかやみむ

すみやう經よませんとかやそありし。

宮にすりの藏人とてさふらひし人の大はん所にひとり有けるをそれとらへよとゆきよりにおほせられけれはとらへて更にゆるさてふしぬるを夜ひとよいとをしと思ひふしておきていく程にいひける

なかゝれよ朝ねの髮の千よむすふ契とみれは悲しかりけり

返し　ゆきより

長かれといはすは長くあらしとやあやなく君かめにはみゆ覽
うへとのゐとておまへにちかく候人〻あやしきくれ
のまくらをおとして出たるにあか付たるを人〻彼殿
上にやりたり
後拾 道しはやおとろのかみにならされてつもれるか社草枕なれ
さふらはさりし人〻はいみしうわらふに。あるたゆ
ふのうへにをきたりけれは。とのゐせしはからかり
て。返しはまくらさためすとそ見えしや。
殿上にすみもてくるおとこををそくまいりたりとて
その時に候しくら人いまはうへにまいりしよその人
のとらへてかみになはをゆひつけてゆるさゝりしか
はものよりのそかせたまうてこはたかゝらせ給ふか
ともこりはへるへくとてゆるさゝりしかはねうはう
かたより
大原やすみのかしらのなはゆるせこのめに涙浮ふといふ也
といはせたりしかは。ゆるしてけり。われには思ひ
ましたり。とおほせられしこそ。
人のもとにまかりたりけるおとこの見侍けるをしら
てほかけにこ侍従といふ人のさし出て人に物いひけ
るおとこ
みつのえのあまにとはゝや白波のよる光るてふ玉もかくやと
いかにいはんなといひけるにねたりけるねことに
今つけむあまのみるめの恥かしく袖にとまらぬ玉もちり劔
宮きくのとなり。
たうのみねにあるたいとこ(大德)のさりゐ(舍利會)のか
うろにいれむとてはい花ほう(梅花方)さふらふなるし
はし給はらんと申たりけれは
春風にちりはてにけん梅花たゝかはかりそ枝にのこれる
中將の命ふにむまのないしの八月はかりにいひやる
見そめけるとも秋とか
枝しけみしたにもみつる萩のはな秋しりそむる人や戀しき
返し
色またてすゐにし消ゆる雪ならはつゐに錦は見てやましし
えあはぬ人にいはむとておとこのいふ
けふはわかきえはてなまし中〳〵に後を賴まむ命しらぬに
殿上人かつらより舟にてわたるにほしのかけのみえ
けれはゐものかみきんたうのきみ
みなそこにうつれるほしのかけみれは
あまの戸わたるこゝちこそすれ　さねかた
をくらの森のおほつかなきにかへしたれそや
ねたきわかをくらの里にやとりして紅葉の色をよそに聞哉
はつ雪のあしたにむかしを思ひいてゝ
めつらしといふへけれとも初雪の昔ふりにしけふそ戀しき　さねかた
ふりぬ共きえせぬ物にあらませは袖はぬれしなけふの初雪
みちのふの君人のもとにおはしてあしたに
露よりもはかなかりける心かなけさ我なにしおきてきつ覽
かゝる人〻もおはせぬを思ふに。いとかなしくてか
きもやらす。
おなし人ふくぬきたまひし
かきりあれはけふぬきすてつ藤衣涙のはてそ知れさりける

またみちのふの君さねかたの君に三月中のほと
散のこる花はあるやとうちむれてみ山かくれに尋てしかな
かへし
また散ぬ花もやあると尋みむあなかましはし風にしらすな
ためよりみちのくにのかみにてくたる日三條のおほ
きおほいとの(頼忠)のせんし給に
武隈の松をみつゝやなくさめむ君か千歳のかけにならひ(てイ)に
正暦五年のほとはいみしう人しぬそのころもくのく
ら人さとより
をきもあへす徬き空の露をいかて貫きとめん玉のをも哉
返し
玉のをも片糸なるはかひもなし亡ゆれは露もとまらさり皃
また門宮
草のはにあらぬよなれとともすれは露は我みの上かと(そみる)
かへし
をのかまたきえぬに消る比なれは露こそ人を露とみるらめ
これはみな人のあふきにあなり。此かへり宮の御
今はさはとまるへきよの玉ならす白き蓮の露をみかゝむ
かんけゆのそうにてありし　むらよ
常よりも常なき比の露のみをいかにいひてか日をは暮さん
かくいひし人のなくなりにしか(ほ脱歟)
見る程もなくて消ぬる露よりも誰か此世につゆ(ひイ)にとまらん
宮の御もとゆひよりてまいり給ふをはたゆふとのな
んつかうまつり給しをきたのかたうせ給うていみは
てゝの程にめしたるにつかうまつりをくとなむみ侍
をきし今もとめて参らんと聞えをき給て三四日あり
て物の中より侍けるを見たまふるにも哀なるをおほ
くなときこえ給へるに
ほしわふる袖のなかにや有つ覽之をそ玉のをにはよらまし
御返し
玉のをゝ君かためにとよりをきて衣のうらを見すそ成にし
みやに宮の御いかの事ためたふの君つかうまつり給
にまつのみいりたるをそのかたにつくりてありしと
き
ときわ(はイ)かて長閑き物はあめの下ちよまつ枝の陰にさりける
そのかへしをおほせことにて
誰にかはこゝらの年を算へこん松の一はを千世とをきつゝ
東三條の院にわたらせ給ていけのうき草とものむつ
かしけなるはらはせ給ていとおかしけれは
(後拾)君すめはにこれる池もなかり皃みきはのたつも心してゐよ
女のもとに物をたにいはむとてきたりける人あした
に
消かへり有かなきかの我身かなうらみてかへる道しはの露
かへし
あはれとも草はの露やとはれまし道の空にて消なましかは
おなし人
ひたふるにしなは中〻さもあらはあれ生てかひなき物思身は
返し
なくなれはなけの哀もいはるゝをさは心みに憧れねたま
かへし
身のうきにはひふす芦のかりにても頼む計のをのはそなき
おとこ松を結ひて

染かへしいくしほへてか磯のかみおふる松はを結ひをく哉
かへし
いそのへはむすひもしてん高砂の松にはをよふ人やなか覧
おなし人をむなのもとにきてかとをたゝきけるにあ
けさりけれはかへりてあしたにうらみたりけれは　をんな
尋ぬへき人も覺えぬ我かとのよるはむくらのね社さすらめ
返し　おとこ
草葉たに心有らしやへむくらいる人わきてねやのとさせは
といひてきたるになをかたけれは
此世にはつきしもはてし思ふを命ののちはいつかたゆへき
かへしなるへし
我しなはいつこをはかと尋てか此世につきぬをもかたらむ
おなし人つねにいへはいまなといふかをさまになり
ぬへしときゝて
我やあけしうら島のこか玉くしけ結ひし袖の空にみえねは
返し
玉くしけ袖から雲のたちしより空の眺めをからぬ日そなき
かへし
空に社つらきかすかけかはしきの百はかきには過やしぬ覽
扇のぬひ物したるをもたせ給てこれ見よとおほせら
れて給はせたるに郭公のうの花くひていくかたあり
たくにやはとて
垣ねいつるたよりにうつる卯花を惜むと聲はたてぬ成へし
これをさねかたに給はせたれは
郭公なくにしちらは卯花のかきねなからそきくへかりける

住吉にこ大將殿のまうて給けるにゆふひの入ほとに
空いと心ほそうて松のしたに涙のよするをみちのく
のかみためなか
松みれはこかれぬ物を住のえのいかなる涙かしつ心なき
三條の中納言殿にありし大夫君くもゝすに花をふき
かけたるを見て
笹蟹のくものをはたはうすけれと散くる花はもらさゝり鳧
さねかたの中將人のかりやらんとてためたうの君に
かくいはむはいかゝといひける哥
詞 いかてかは思ひ有とは報すへきむろのやしまの煙ならては
おかしなといひて。ためたうの君わかけさうする人
のかりやりてけり。女もきゝてわらふ程にわたりけ
れば。をむな。
此ころはむろのやしまもぬすまれて
といひけれは
えこそはいはねおもひなからに
かねもりかおほ井にてよめりし
新拾 大井河そま山風のさむけくにいはうつ波を雪かとそ見る
おなし人大監物なりし時ないし所にみかきまうしに
おほとねりのひきいてにきたりにある人内侍のすけ
のしるやうありてそこに有けるおりなりけれはまへ
にありけるたちふといふうりをきなるしきしにつゝ
みておほとねりなりけるおきなにとらせたりけれは
くらつかさにつきてそこよりいふ
山しろのとはにかよひてみてし哉うり作りける人の垣根を
かへし

とことはにゆけは成覺うり作りそのをなきにたてりしや君
　又の日つかさめしにするかの守になりてよろこひ申
　にまいりて袖よりおとしをきたりしはいとこそ
うりつくるそのふもしらす人しれすおつる涙やそほつ成覽
　いとからくとそありし。
　たなはたのあしたに春宮にてひむかしにたちはきの
　おさのありしかたにひきたるいとにくものすをかき
　けれはゆきよりにしかけ〳〵となむおとりたてると
　おほせられしかは
笹蟹のもろてにいそく七夕の雲のころもは風（たつイ）やとくらむ
　とありしをさねかたの君にかたり給ふめりしかはた
　ちなから
彦星のくへき宵とやさゝかにの雲のいかきもかけてみえ劔
　藤大納言少將にておはせし程に。女御御方七夕まつ
　りしたるところにきて。もいはむとありしかは。
　すのもとにてなにかといひておはしにけるをそれよ
　り給へりけりと人ゝきゝ給へりけりとて。あしたに
　よろつのちかこと文にかきてみせよとおほしくてあ
　り
（千載）七夕にかしつと思ふあふを（ひし）そのよなき名の立にける哉
　あるやむことなき人のもとに忍ひて十年はかりかよ
　ふ程に。こよひかくてといひたりけるを。まらうと
　おほくてあそひしなとして。えさらさりけれは。又
　の日そのをとをいひて。こよひは命たにあらは。かな
　らすとあるに　　女

（拾後撰）おしからぬ命は我もゆつりてむたのむるをを誰にみせまし
　おなし人そのよ物たにいひあへ（カイ）てとそいひし
終夜ひちあかしつる衣手の今朝もかはらぬ程をしら南
　とあれはかへし
よそなりし袖もやひちしむへこそはこゝに涙の止らさり覽（けれ）
　おやの思ひにてれいくる所にえこさりける人この程
　にありきしたらはとちかひけるを。うけひかさりけ
　れは。つとめて人わりなくといひて
わりなしやそらをにより誓ひせはけふ迄あらん物とやは思
　とあれは
誓ひてもありとたのめはたまさかに神の外なる程にも有劔
　世中はかなきころせんさいの露を見て
植てみる草はそよをはしらせけるをきてはきゆるけさの朝露
　ゐなかへやるふみのあけところに
天河うき木にのれる我ならは君かあたりに今はきなまし
　心さしふかゝらぬおとこの花そめのかりきぬせさす
　るやるとて
人こゝろうすき花染のかり衣さてたにあらて色やかはらん
　ちいさきうりのきなるをおなし色のかみにつゝみて
　あきみつの少將のかりやるをきゝたかへてよりひら
　にとらせたれは
雲のたつうりふの里の女郎花くちなし色はくひそわつらふ
　こゝろときめきしていひたりしかひなけれはかへし
　もせてとりかへしてはしめの人のかりやるとてわれ
　かとないひそといひけれは
あり所こまかにいつらしら瓜のつらを尋ねて我ならさなん

左近のきみにとのたまへりしかはわれとしられにけ
りとねたくて
瓜ところこゝにはあらし山城のこまかにしらぬ人な尋ねそ
五月五日
諸共に逢みぬ沼のねをひけは忘れやしにしなかゝらぬなか
雨ふるとてこぬ人のふらぬにも見えねは
（拾）ふらぬ夜の心をしらておほ空の雨をつらしと思ひけるかな
おなし人いみしうわつらひてけふはしぬへしなたの
みそとのたまへりしかは
（續拾）君によりくれまつ草にをく露のかゝらん程をいかゝ頼まぬ（ぬ）（は集）
ふみをこする人かへりとをせぬいみしう恨みてこた
みはかりといひけれはことてにて
ふみなみそわたしもはてぬ岩橋そ中ゝ道の空にわひなん
ひたちのかみなりよりかかれ侍しころ
あた人のかりにとひ來我宿に今はむくらのねこそはふらめ
おなし人のきたりけるにとゝ人のありしかはけはひを
えていみしうゝらみ侍しかはつとめてこれより
恨む覽心はまたやとけさらむをきつる霜のけさのさむさに
また人に
（後拾）殊更にうらむともなし此比のね覺はかりはしらせてしかな（を集）
宮にてゆみいさせ給にくらうなるに人めすにをそけ
れは
待ほとにひさしかりけり行すゑのまた遠けれは武隈の松
さねかたの君おやにをくれてなけくときく比
そこはふち淵はせならぬ涙川袖のわたりはあらしとそ思ふ

うりのあをきなるををしのかへりみむきたるよしを
これはいかゝいふへきとあしてにかきてまいらせた
りつれは宮より
うりふのゝ澤にすみぬるをし鳥の雲ゐにかよふ心あるらし
返し
心をし雲ゐとしめは葦田鶴のよはひとのみは思はさらまし
おほむいしなとりのいしをつゝませ給けるに三十一
有つれはひとつにひともしをかきてまいらせける
苔むさは拾ひもかへんさゝれ石の數にみなとるちよは幾つそ
七月七日大入道（兼家）とのゝ御いみなる程にすゝきに
ひきたるいとを
世中に包まぬ年の秋ならはおかしからましけふのなぬかも
ふみなとをこせける人のものにいきてほともなくか
へりきたれは
たゝ今そきつると思ふ袖のうへの裏うへもなく成にける哉
かへし
大空のたひの空なる濡衣をたかもとゝてかかたへきつらむ
九月はかりに同し男に
花薄ほに出に覓わかいかて人にしられてむすふわさせん
返し
結ふともとくともいそく花薄またきほに出て人にしらすな
又かへし　おとこ
ほに出てたゝにもあらし花薄風のよするをいとはさらなん
しらぬとあるかへり事に
賴めとや賴まれしとや定なきいのちにかゝる心といふらむ
又このころものへゆくとて

わかれ行かたしの道にをく霜のきえむ雫に袖やぬれなん
　かへし
かりすてゝゆきなん後の衣手は君ひとりしもぬれしとそ思
又　　　　　　　おとこ
むすふてはをになるとも花薄とくるまてたに忘れさらなむ
　かへし
花薄くもてに人に結はれていつかとくると待そはかなき
　くにより　　　　　おとこ
霜枯におきてこしよりひとりねの袖のさむさのまさり行哉
　返し
霜かれのわひしきをは思へともをきては露の草はならぬに
　　　　　　　おとこ
そらをとゝいふへけれ共神無月思ひいてつゝかつはしらるゝ
　　　　　　　おとこ
つねよりも戀しくなりて神無月たえすも袖のうるふなる哉
　ひさしうなりてきたりいりみちにちりありとをんな
　いへは
我ならぬ人も起きふす處にはちりのみゐると云そあやしき
　かへし
ちりならて又ゐる人もなき物を殊になき名もたつそ侘しき
　十月におまへの菊いみしううつろひたるをみて
誰かゝく錦はかけし神な月はたをる虫のこゑもたえにき
　子日おとこ女のもとにいひたりけるうたはおほえす
　女かへし
のへなからちきりしをを待ならはつらき心も猶やたのます
　つゝみの大宮にものきこえけるに四月に郭公の聲を
　ふたりなから聞たりける程におろかになり給にけれ
　はきこえけり
初聲をふしてやきゝしほとゝきす聞にたかはぬ心ち社すれ
　春宮にてなすひのゆゝしけなるにはかたのつきたる
　を見て
くひ處みれはうねなるおい茄子うへたる人のくへる成へし
　ためよりかいひける
人しれぬ心のまゝにひろひけるかひなか覽と思ひけむやは
　返し
續詞花戀下 君かかく（きみはかく）忘れかひこそひろひけれうらなき物はわか心哉
霜さゆる二見の浦のをしのうへを君より外に誰かはらはむ
　せえう殿の人ゝさくらのうたのもとにすゑつけたる
ちらて千とせをすくさましかは
　とそありける職上人ゝのつけゝる
おしむあまりめやなれなましさくら花
　をし鳥をこにいれてをこせたるに
人よれと今はたちけもなき鳥のこに籠れるや何のうたかひ
　なてしこを人のかりやるとて五月五日くすたまにつ
　けゝる
なてしこのけふ引そふる菖蒲草さはの物とは思はさらなむ
　雪のふかきかをたさふやとはかりいひてかへりたる
　に
ゆきすりにあと尋ぬれは消えに幾いつから越の方にか有劔
　うちにまいるにさねかたの中將月こそいとあかけれ
　とのたまひしかは
雲の上にさそはさりせは久方の身にそふ影もをくらさ（さらまし）

あしたつの雲井のなかにましりなはなといひてうせ
たる人あはれにおもほゆるころなかうた

小町集 ひさかたの　そらにたなひく　うき雲の　うける我身は
つゆくさの　露のいのちも　たまきえて　おもふ事のみ
もろこすけ(はイ)　しけさそまさる　あらたまの　ゆくとし月の
はるの日の　花のにほひも　なつの日の(もイ)　このしたかけも
秋のよの　月のひかりも　ふゆのよの　時雨のをとも
よの中に　こひもわかれす　うきことは　つらきもしらぬ
わか身こそ　心にしみて　袖のうらの　ひるときもなく
あはれなれ　かくのみつねに　おもひつゝ　いきの松はら
いきたるよ　なからのはしの　なからへて　せにゐるたつの
なきわたり　いつかうき世の　みくさみの　我身にかけて
かけはなれ　いつかこひしき　雲のうへの　人とあひみて
このよには　おもふをなき　身とはなるへき

小町集有 宵々の夢のたましひあしたかく(ゆ集)ありかてまたおとふらひにこよ

同 みるめ刈あまのゆきゝのみなとちに勿來の關も我はすへぬに

たいこの御時にひてりのしけれはあまこひのうたよ
むへきせんしありて

同 千早振神も見ませはたちさはき天のと河のひくちあけたへ

やり水にさくらの花のなかるゝを見て

同 瀧の水木の下ちかく流れすはうたかた花をありとみましや

入撰集哥

後撰 をさらにうらむともなし此比のね覺はかりをしらせてし哉
ちるを社あはれとみしか梅花はなやことしは人をしのはむ

右小大君集以古寫卅六人集挍合畢

清少納言集

詞書蠹欠

その葉は露もるへくもなかりしを風に散かふ花をきく哉（一本 とはゝやぶれてみえずと本にてかくべし）

返し

春も秋もしらぬときはの山川は花吹風を音にこそきけ

きくことある人たひ〳〵くれとも物もいはてのみ人
をはうらみていか計契し物かとかくしもうきをゝう
らみたる返しに

身をしらて誰かは人を恨みまし吹きて辛きつらさなる(りせイ)をは

おなし人にあひて忿する事ありていみしくちかこと
をたてゝさらに物いはしといひにやりてまたのつと
めてこれよりも

我なから我心をもしらすしてまたはあはしといひてける哉

せんたて(えイ)たるふはこみせたりといひしけにたえ
ての後をこせたる

けふまてもあるかあやしさ忘られし日こそ命の限なりしか

清水にこもりたりしに大殿の上(倫子)のおし所からい
ひをこせ給へりし

續後拾 おもひきや山のあなたに君をゝきて獨都の月をみんとは

ひとたうひたりときくをいみしくあらかふに久しり
ていひのゝしりて夜ことなんゆくときゝて

濡衣とちかひし程に現はれてあまたかさぬる夜ともきく哉

めのをとゝにすむときく比くらつかさのつかひにて
まつりの日たつともろともにのりて物みるときゝて

又の日

いつかたのかさしと神の定めけむかけかはしたる中の葵を

かたらふ人のあさてはかりかならすこんといひし日もみえす久しくなりておほつかなく成にけれは御心のつらさにならひにけるなにとかはといひたる返事に

よしさらはつらさは我に習ひ鼻賴めてこぬは誰かをしへし

宮のあはた殿におはします比さねかたの中將まいり給ひて大かたに物なとの給ふにさしよりてわすれ給ひにけりなといへといらへもせて立てにける則いひをくり給へる

後拾 忘れすやまたわすれすよかはらやの下たく烟下むせひつゝ 上集

かへし

實方集 賤のをは下たく烟つれなくてたえさりけるもなにゝよりそも しつのやの

人ゆいまゑにやまとへなんゆくといひたるに

こゝ年程ふるたにも有物をいとゝとをちの里なきかせそ

くらまにまうてゝかへりて

戀しさにまた夜をこめて出ぬれは尋てきぬるくらま山かな よりイ

住吉にまうてゝいとゝく歸りてきなんそのほとゆめわすれ給ふなといひたるに

續古 いつかたか茂りまさると忘れ草よし住吉になからへてみよ

いくとせもゆめ／＼忘れ給ふなといひをきてよつきといふにかへりきてくれ竹につけてをこせたりければ

忘るなよ／＼と云ひしは吳竹の節を隔つるかすにそ有ける

はるかつらの枝のもえたるにさして

花もみなしけき梢に成にけるなとか我身のなるかたもなき

返し

契てししけき梢のほともなくうらみときにはいかゝなる覽

のりかた(なりイ)くまのにまうつとてそのほとにはきなむといひしか歸りたるとはきけとをともせてきたる(り)とはきゝたりやしらぬに

いつしかとまつの梢ははるかにて空にあらしの風を社まて

おもひいつやこゝには十廿となん思ひいつるとあるに

そのなにそ思ひける社悔しけれかすしる計りくやしき物を

ほたいといふ所にせ經きくとて人のもとよりとくかへりねおほつかなきにとあるに

もとめてもかゝる蓮の露を置て浮世にまたはなにか歸らん

すはうを人のとりたるをえさせよといへは

しらせはや衣のうらにあるよりは泪の玉の袖にかゝるを

おなし人みなつきはかりにはきの青き下葉のたはみたるを折て

これをみようへはつれなき夏萩のしたはこく社思ひ亂るれ 草イ

女のなにふみともあらていふをみんといへはをこすとて

名取河かゝるうきせをふみわけは淺し深しもいひも社すれ

かたらふ人のいもうとのこのすか(るイ)ならましかはおもはさらましといひたりしに

わたの原そのかは淺く成ぬともけに白浪やよせぬとをみよ

人のもとにはしめてつかはす

たよりある風もやふくと松しまによせて久しきあまの釣舟
のかるれと同しうき世のなかなれはいつくも何か住吉の里

四きの御さうしにおはしましゝ比うへの右京命ふよひのほとにまいりて女房たちの中に

とゝめをきし玉しゐいかゝ成ぬ覽心ありとはみゑぬ物から

いしはしある所にて殿上人とも物いひけるまへを入道この中將なりのふの許に君のわたり給ひけるをしはしに哥よみかけ給へとせめられけれとも

よるのまにいしはしはかりねてゆかん

といひかけてたてまつりけるに久しかりけれはすたれのうちを君たちをそし〳〵といひけれはあなかまたまへとみつねものおもえすといひつゝ猶久しかりけれはこの中將まちやすらふほとにおまへにめしありとてとのもりつかさのきたれは

くさのまくらに露はをくとも

といひすてゝいりにけるを。みな人も中將もあやしとおもひけれは。こや人につたへかたりけん。いとなんまをにや。

みのゝ五せちいたさせ給ひしとしたつの日のゆふさり女房もわらはもをしなへてあをすりのもからきぬに山あゐしてゑかきてあかひもなとをむすひかけたれは殿上の人〳〵なと珍しかりてをみの女房とつけてたちましりたり人よりも頭中將よういしけさうし給ふ右京兵衞なとかたぬきひきつくろひなとするにひもとくれは

千載 足引の山ゐの水の(は)こほれるをいかてか(なる集)ひものとくるなる覽

といふいらへはそれやなといひゆりてとみにもいはねはさはかりのはかなきをほくすへきにもあらすまたとをくゐたらん人のさしをよひていふへきにもあらねはおもひわつらひてかたはらなる辨のおもとに

千載 うはこほりあはに結へる紐なれはかさす日影にゆるふ成へし(はかりそ集)

右清少納言集以屋代弘賢藏本書寫以一本挍合畢

紫式部集

はやうより童友たちなりし人に年比へて行あひたるかほのかにて十月十日のほと月にきほひて歸にけれは

（新古）めくりあひてみしやそれ共わかぬ間に雲隱にし夜半の月影

その人遠き所へ行なりけり秋のはつる日きたる曉にむしのこゑあはれなり

（千載）なきよはるまかきの虫もとめかたき秋の別やかなしかる覽

さうのをしはしといひたりける人まいりて御手よりえんとある返事に

（千載）露しけき蓬か中の虫のねを（もと集）聽けにてや人のたつねん

かたゝかへにわたりたる人のなまおほ〳〵しきことありて歸りにけるつとめて朝かほの花をやるとて

（續拾）おほつかなそれかあらぬか明暮の空おほれする朝かほの花

かへし手を見わかさ（ぬイ）るにや有けん

（同）何れぞと色わくほとに朝顏の有かなきかになるそかなしき（わびイ）

つくしへ行人のむすめの

西の海を思ひやりつゝ月みれはたゝになかるゝ比にも有哉

返し

西へ行月のたよりに玉つさのかきたえめやは雲のかよひち

はるかなる所にゆきやせんゆかすやとおもひわつらふ人の山さとより紅葉を折てをこせたる（くイ）

（續拾）露ふかきおく山里のもみちはにかよへる袖の色を見せはや

返し

嵐ふく遠山さとのもみちはゝ露もとまらんことかたさよ

又その人の

もみちはをさそふ嵐ははやけれとこの下ならてゆく心かは

ものおもひ煩ふ人のうれへたる返事に霜月はかり

（千載）霜氷とちたる比の水くきはえもかきやらぬ心ちのみして

返し

ゆかすとも猶かきつめよ霜氷水の上にて思ひなかさん

賀茂にまうでたるに子規なかんといふ明ほのにかた岡の梢おかしうみえけり

杜鵑聲まつほとはかたをかの杜のしつくにたちやぬれまし

やよひの一日かはらに出たるにかたはらなる車に法師のかみをかうふりにてはかせたちをるをにくみて

はらへとの神の飾の御手座にうたてもまかふみゝはさみ哉

あねなりし人なくなり又人のをとゝうしなひたるかかたみに行あひてなきかかはりに思ひかはさんといひけり文の上にあねきみとかき中のきみと書かよはしけるかをのかしゝ遠き所へ行別るゝによそなから別おしみて

（新古）北へ行かりの翅にことつてよ雲のうはかきかきたえすして

返しは西のうみの人なり

ゆき巡り誰も都にかへる山いつはたときくほとの遙けさ

津の國といふ所よりをこせたりける

（續拾）難波かたむれたる鳥の諸共にたちゐるものと思はましかは

かへし

〔歌略〕

つくしのひせんといふ所より文をこせたるをいとはるかなる所にてみけりその返事に

〔新千〕あひみんと思ふ心はまつらなるかゝみの神やそらにしる覽（かけて集）

かへし又のとしもてきたる

行巡り逢をまつらのかゝみには誰をかけつゝ祈るとかしる

あふみの水うみにてみおかさきといふ所にあみひくをみて

みおの海に網引民のひまもなくたちゐにつけて都戀しも

いそのはまに鶴の聲〳〵になくを

いそかくれ同し心にたつそなくなかおもひ出る人は誰そも

夕立しぬへしとて空のくもりてひらめくに

〔新古〕かき曇りゆふたつ浪のあらけれはうきたる舟そしつ心なき

しほつ山といふみちのいとしけきをしつのおのあやしきさまともして猶からきみちなりやといふをきゝて

〔續古〕しりぬ覽ゆきゝにならす鹽津山世にふる道はからき（ものそと）

水うみにおいつしまといふすさきにむかひてわらはへのうらといふ入うみのおかしきをくちすさみに

おいつしま島もる神やいさむ覽波もさはかぬわらはへの浦

こよみにはつ雪ふるとかきたる日目に近きひのゝたけといふ山の雪いとふかうみやらるれは

こゝにかくひのゝ杉むら埋む雪をしほの松にけふやま（かへる）

返し

をしほ山松のうは葉にけふやさはみねのうす雪花とみゆ覽

ふりつみていとむつかしき雪をかきすてゝ山のやうにしなしたるに人〻のほりて猶これ出てみたまへといへは

古里に歸る山ちのそれならはこゝろやゆふと雪も見てまし

としかへりてからひとみにゆかんといひける人の春はとくるものといかてしらせたてまつらんといひたるに

春なれと白ねのみ雪いや積りとくへきほとのいつとなき哉

あふみのかみのむすめに（イナシ）けさうすときく人のふたこゝろなしなとつねにいひわたりけれはうるさくて

水海に友呼千鳥ことならはやそのみなとをこゑたえなせそ

うたゐにあまのしほやくかたをかきてこりつみたるなけきのもとにかきて返しやる

〔續千〕四方の海に鹽燒（くゆ）あまの心からやくとはかゝる歎きをやつむ

ふみのうへに朱といふ物をつふ〳〵とそゝきかけてなみたの色をとかきたる人のかへしに

〔續古〕くれなゐの涙に（そ）いとゝうとまるゝうつる心の色とみゆれは（たのまれぬ集）（にイ）

もとより人のむすめを得たる人なりけり文ちらしけりときゝてありし文ともとりあつめてをこせすは返事かゝしとことはにてのみいひやりけれはみなをこすとていみしくえんしたりけれは正月十日はかりのとなり

とちたりし上のうすらひとけ乍さはたえねとや山の下水

すかされていとくろうなりたるにをこせたる

東風にとくる計をそこみゆるいしまの水はたえはたえなむ

今は物もきこえしとはらたちたれはわらひて返し
いひたえはさ社はたえめなにかそのみはらの池を提しもせん
夜中はかりに又
たけからぬ人かす波はわき返り三原の池にたてとかひなし
櫻をかめにさして見るにとりもあへすちりけれは桃
の花をみやりて
おりて見はちかまさりせよ桃の花思ひくまなき櫻おしまし
返し人
桃といふ名もある物を時の間にちる櫻にも思ひおとさし
花の散ころ梨の花といふも櫻も夕くれの風のさはき
にいつれと見えぬ色なるを
花といはゝ何れか匂なしとみん散まかふ色の異ならなくに
とをき所へゆきにし人のなくなりにけるをおやはら
からなとかへりきてかなしき事いひたるに
何方の雲ちときかはたつねましつらはなれ劔かりの行ゑを
こそよりうすにひなる人に女院かくれさせ給へる
春いとうかすみたる夕暮に人のさしをかせたる
雲の上も物思ふ春はすみ染にかすむそらさへあはれなる哉
返し
なにかこのほとなき袖を濡す覽かすみの衣なへてきる世に
なくなりにし人のむすめのおやの手にてかきつけた
りける物を見ていひたりし
ゆ霧にみし方かれし鶯の子のあとを見る〳〵まとはるゝ哉
おなし人あれたるやといさくらのおもしろき事とて
折てをこせたるに
散花をなけきし人は木のもとの淋しきをやかねてしりけむ
思ひたえせぬと。なき人のいひける事を。おもひ出
たるなり
ゑにものゝけつきたる女のみなむき形かきたる
うしろにおにゝなりたるもとの女を小法師のしはり
たる形かきておとこは經よみてものゝけ責めたる所
をみて
なき人にかことをかけてわつらふも己か心の鬼にやはあらん
返し
ことはりや君か心のやみなれはおにのかけとはしるくみゆ覽
ゑに梅の花みるとて女のつま戸おしあけて二三人ゐ
たるに皆人もねたるけしきかいたるにいとさたすき
たるおとこのつらつえついてなかめたるかたある所
春の夜のやみのまよひに色ならぬ心に花の香をそしめつる
おなしゑに嵯峨野に花みる女車ありなれたるわらは
の萩の花にたちよりておりとる所
棹鹿のしかならはせる萩なれや立寄からにをのれおれふす
世のはかなきことをなけくころ陸奥の名ある所〻かい
たるをみてしほかまの浦
見し人のけふりとなりし夕より名もむつましき鹽竈のうら
かとたゝきわつらひてかへりにける人のつとめて
よと共にあらき風吹く西の海も礒へに波はよせすとやみし
とうらみたりける返事に
かへりては思ひしりぬや岩かとにうきてよりけるきし仇波
年かへりてかとはあきぬやといひたるに

千載　たかさとのはるのたよりに鶯の霞にとつるやとをとふらん

世中のさはかしきころあさかほを人のもとへやるとて

玉葉　きえぬ間の身をはしる／＼朝顔の露とあらそふ世を歎く哉

世をつねなしなとおもふ人のをさなき人のなやみけるにから竹といふものかめにさしたる女はうのいのりけるをみて

若竹の老ゆくすゑをいのる哉この世をうしといもふ物から

身をおもはすなるとなけく事のやう／＼なのめにひたふるのさまなるを思ひける

數ならぬ心に身をは任せねと身にしたかふはこゝろなり覺

續古　心たにいかなる身にかかなふらん思ひしれ共思ひしられす

はしめて内わたりをみるにもものゝあはれなれは

身のうさは心のうちにしたひきていまこゝのへに思亂るゝ

うきことを思みたれて青柳のいとひさしくもなりにける哉

返し

つれ／＼となかき春日は青柳のいとゝうき世に亂れてそ降

いかはかりおもひそしぬへき身をいといたう上すめくかなといひける人をきゝて

續古　わりなしや人社人といはさらめみつから身をや思すつへき

くすたまをこすとて

忍ひつるねそあらはるゝ菖蒲草いはぬに朽ちてやみぬへければ

返し

けふはかくひきける物を菖蒲草我みかくれにぬれ渡りつる

土御門殿にて三十講の五卷五月五日にあたれりし

妙之やけふはさ月の五日とていつゝの卷にあへるみのりも

その夜池のかゝり火にみあかしのひかりありて晝よりもそこまてさやかなるにさうふの香いまめかしうにほひくれは

かゝり火のかけもさはかぬ池水に幾千代すまむのりの光そ

おほやけとにいひまきらはすをむかひたまへる人はさしもおもふ事ものしたまふましきかたちありさまよはひのほとをいたうこゝろふかけに思ひみたれて

すめる池の底まてゝらす篝火のまはゆきまてもうき我身哉

やう／＼あけゆくほとにわたとのにきてつほねのしたより出る水をかうらんをさへてしはしみゐたれは空のけしき春秋のかすみにもきりにもをとらぬ比ほひなり小少將のすみのかうしをうちたゝきたれははなちてをしおろしたまへりもろともにおりゐてなかめゐたり

續後撰　影みてもうきわか涙落そひてかことかましき瀧のをとかな

返し

獨ゐて涙くみける水の面にうきそはるらむかけや何れと

あかうなれはいりぬなかきねをつゝみて

新古　並て世のうきに流るゝ菖蒲草けふ迄かゝるねはいかゝみる

返し

同　何事とあやめはわかて今日も猶袂にあまるね社たえせね

うちにくゐなのなくを七八日の夕月夜に小少將のきみ

新勅　天の戸の月の通ひちさゝね共いかなるかたにたゝく水鷄そ

返し

同 槙の戸もさゝてやすらふ月影に何をあかすとたゝく水鷄そ

夜ふけて戸をたゝきし人つとめて

同 終夜水鷄よりけになく／＼そ槙の戸口にたゝき侘つる

返し

同 たゝならしとはかりたゝく水鷄故明てはいかに悔しからまし

朝霧のおかしきほとおまへの花ともいろ／＼にみたれたる中にをみなへしいとさかりなるを殿御らんして一えたおらせさせ給ひて。きてうのかみより。これたゝにかへすなとて給はせたり

新古 女郎花さかりの色をみるからに露のわきける身社しらるれ

とかきたるをいとゝく

同 白露はわきてもをかしをみなへし心からにやいろのそむ覽

ひさしくをとつれぬ人をおもひいてたるおり

千載 忘るゝは憂世の常と思ふにも身をやる方のなきそ侘しき

かへし

新古 たかさともとひもやくると郭公心のかきりまちそわひにし

みやこのかたへとてかへる山こえけるによひさかといふなるところのいとわりなきかけちにこしもかきわつらふをおそろしとおもふに。さるの木の葉の中よりいとおほくいてきたれは

ましも猶遠方人の聲かはせわれこしわふるたこのよひさか

みつうみにていふきのやまの雪いとしろくみゆる

名に高きこしの白山ゆきなれて伊吹のたけをなにと社みね

そとはのとしへたるかまろひたうれつゝ人にふまるゝを

心あてにあなかたしけな苔むせる佛の御顔そとはみえねと

人の

けちかくてたれも心はみえにけんをはへたてぬ契ともかな

返し

へたてしとならひし程に夏衣うすき心をまつしられぬる

岑さむみ岩間こほれる谷水のゆく末しもそふかくなるらん

宮の御うふやいつかの夜月のひかりさへことにくまなき水のうへのはしにかんたちめ殿よりはしめたてまつりてゑひみたれのゝしり給ふ杯のおりにさしいつ

後拾 珍しき光さしそふさかつきはもちなから社千代はめくらめ

又の夜月のくまなきにわか人たち舟にのりあそふを見やるなかしまの松をさしめくる程おかしく見ゆれは

新古 曇りなく千とせに澄る水の面にやとれる月の影ものとけし

御いかの夜とのゝ哥よめとのたまはすれは

續古 いかにいかゝ數へやるへき八千歳の餘り久敷君か御代をは

との

續拾 芦田鶴の齢しあらは君か代の千年の數もかそへとりてむ

たまさかに返をしたりける人後にも又もかゝさりけるにおとこ

續古 折ゝにかくとは見えて笹蟹のいかに思へはたゆるなる覽

返し九月つこもりに成にけり

同 霜かれの淺茅にまかふ笹蟹のいか成おりにかくとみゆ覽

なにのおりにか人の返事に

新古 いるかたは冴かなりける月影をうはの空にもまちしよは(ひイ)哉

返し

同 さしてゆく山の端もみなかきくもり心のそらにきえし月影

またおなしころ九月つきあかき夜

千載 おほかたの秋のあはれを思ひやれ月に心はあくかれぬとも

六月はかりなてしこのはなをみて

かきねあれ淋しさまさる常夏に露をきそはん秋まては見し

物やおもふと人のとひたまへる返事九月つこもり

花すゝき葉分の露やなにゝかくかれ行野へにきえとまる覽

わつらふとある比なりけりかひぬまの池といふ所なんある人のあやしきうたかたりするをきゝてこゝろみによまむといふ

世にふるになそかひ沼のいけらしと思そ沈む底はしらねと

又心ちよけにいひなさんとて

心ゆく水のけしきはけふそみるこや世にへつるかひ沼の池

侍從宰相の五節のつほね宮のおまへいとけちかきに弘徽殿の右京かひと夜しるきさまにてありし事なと人ゝいひ出て日かけをやるさしまきらはすへきあふきなとそへて

後拾 おほかりしとよの宮人さしわきてしるき日影を哀とそみし

中將少將と名ある人ゝのおなしほそとのにすみて少將の君をよな／＼あひつゝかたらふをきゝてとなりの中將

御笠山おなしふもとをさしわきて霞にたにのへたてつる哉

返し

さしこみている事かたみゝかさ山霞ふきとくかせを社まて

紅梅を折てさとよりまいらすとて

玉葉 埋れ木のしたにやつるゝ梅の花香をたに散せ雲のうへまて

卯月に八重櫻の花を内にて

續後拾 こゝのへににほふを見れは櫻かり(おそさくら)かさねてきたる春の盛か(かとぞ思ふ集)

の少將のかさしに給ふとて葉にかく

新古 神代にはありもやしけむ山櫻けふのかさしにをれるためしは

む月の三か內よりいてゝふるさとのたゝしはしのほとにこよなうちりつもりあれまさりにけるをこといみもしあへす

改めてけふしも物の悲しきは身のうさやまたさま變りぬる

五節のほとまいらぬをくちおしなと弁宰相の君のたまへるに

めつらしと君し思はゝきてみ(え歟)らんすれる衣のほとすきぬ共

返し

さらは君やまゐの衣すきぬとも戀しきほとにきてもみえ南

人のをこせたる

うち忍ひ歎きあかせは東雲のほからかにたに夢を見ぬかな

七月ついたち比あけほのなりけり返し

玉葉 東雲の空きりわたりいつしかに秋のけしきに世はなりに覺

七日

風雅 おほかたを思へはゆかし天の河けふの逢瀨はうらやまれ覺

契し

銀河あふ瀬はよその雲井にてたえぬ契りし世々にあせすは

かとのまへよりわたるとてうちとけたらんを見むと
あるにかきつけて返しやる

玉葉　等閑のたよりにとはん人をにうちとけてしもみえしとぞ思

月見るあしたいかにいひたるにか

よこめをも夢といひしか誰なれや秋の月にもいかてかは見し

九月九日菊のわたをうへの御かたよりたまへるに

新勅　菊の露わかゆはかりに袖ふれて花の主に千代はゆつらむ

時雨する日小少將の君さとより

同　雲まなく眺むる空もかきくらしいかに忍ふるしくれなる覽

返し

同　ことはりの時雨の空は雲まあれと詠むる袖そ乾く世もなき

さとにいてゝ大納言の君ふみたまへるついてに

同　うきねせし水の上のみ戀しくて鴎のうはけにさえそ劣らぬ

返し

同　うちはらふ友なき比のね覺にはつかひし鴛そ夜半に戀しき

又いかなりしにか

なにはかり心つくしに眺めねとみしにくれぬる秋の月かな（ケイ）

すまゐ御らんする日内にて

たつきなき旅の空成すまゐをは雨もよにとふ人もあらしな

返し

いとむ人あまた聞ゆる百敷のすまゐうしとは思ひしるやは

雨ふりてその日は御らんどゝまりにける。あいなのおほやけごともや。

はつ雪ふりたる夕くれに人の

戀侘てありふるほとの初雪は消ぬるかとそうたかはれぬる（にイ）

返し

新古　降れはかくうさのみ增る世をしらて荒れたる庭に積る初雪（白雪イ）

小少將の君のかき給へるうちとけ文の物のなかなる
をみつけて加賀少納言のもとに

同　暮ぬ間の身をは思はて人の世の哀れをしるそかつは悲しき

同　誰か世に長へてみんかきとめし跡は消せぬかたみなれとも

返し

同　なき人を忍ふる事もいつまてそけふの哀はあすの我身を

右紫式部集以細井嘉樹本挍合畢

和歌部百三十　家集四十八

和泉式部集　第一

春

後拾　春霞たつやをそきと山河の岩間をくゝるをときこゆなり
同（はるのイ）　春日野は雪ふりつむ（のみイ）とみしか共をひいつるものは若菜也覺
後拾　ひきつれてけふはねのひの松に又今千歳をそ野へに出つる
同　春はたゝ我宿にのみ梅さかはかれにし人も見にときなまし
續後撰　花にのみ心をかけてをのつから人（はる集）は仇なる名そたちぬへし
春の日をうらゝゝ傳ふあまはしそあな徒然と思ひしもせし
春の夜はい社ねられね起ゐつゝ守るにとまる物ならなくに
後拾　梅か香におとろかれつゝ春の夜の闇（にイ）社人はあくからしけれ（き集）
後拾　あきまての命もしらす春の野の萩のふる枝をやくとやく哉
風雅　みるまゝにしつ枝の梅も散はてぬさもまちとをにさく櫻哉
後拾　人もみぬ宿に櫻をうへたれははなもてやつす身とそ成ぬる
同　我やとの櫻はかひもなかり覺あるしからこそ人も見にくれ
春雨の日をふるまゝに我宿のかきねの草はあをみわたりぬ
かり人のいとまもいらし草若みあさる雉子の隱れなけれは
玉葉　つれゝゝと物思ひおれは春の日のめにたつものは霞なり覺
みにとくる人たにもなし我やとのはひりの柳したはらへ共
隱れぬもかひなかり覺春駒のあされはこものねたに殘らす
河邊なる所はさらにおほかるをゐてにしもさく山吹のはな
後拾　岩つゝし折もてそみるせこかきし紅そめのきぬ（いろ集）にゝたれは
花は皆散り果ぬめり春深きふちたにちるないましはしみん

夏

後拾　櫻いろにそめしころ（たちよイ）もをぬきかへてやま時鳥けふより（こなくなるイ）そ待
續拾　またれとももの思ふ人はをのつから山時鳥まつそきゝつる
庭のまゝゆるゝゝおふる夏草をわけてはかりにこむ人も哉
夏の日のあしにあたれはさしなから儚く消ゆる道芝の露
夏の夜はまきのと敲き門たゝき人たのめなるくひななり覺
山川の垣ねにみえし卯の花はみ[　　]さきのさかり也けれ
かさゝしと誰か思はむ千早振神のまれゝゝゆるすあふひを
をのかみな思ひゝゝに神山のこのてかしはと手をにそとる
常夏におきふす露は何なれやあつれてせこかまとをなる覽
手に結ふ水さへぬるき夏の日はすゝしき風もかひなかり覺
まこも草同し汀にをふれともあやめを見てそ人も引ける
新後拾　夏の夜はともしい鹿のめをたにも合せぬ程にあけそしに覺
螢火はこのした草もくらからすさ月のやみはなのみなり覺

後拾 人の身も戀にはかへつ夏虫のあらはにもゆとみえぬ計そ
詠には袖さへ濡ぬ五月雨にをりたつたこのもすそならねと
花こそあれはな橘をやとにうへて山時鳥まつそくるしき
かやり火の烟けふたきあふくまによるは暑さも覺えさりけり
蟬聞はあつさそまさる蟬の羽のうすき衣は身にきたれ共
後拾 思ふ事みなつきねとて麻の葉をきりにきりても拂ひ（へ集）つる哉

秋

朝風にけふおとろきてかそふれは一夜のほとに秋は來にけり
ひとひたにやすみやはする七夕にかしても同し戀社はすれ
うしと思ふ我身の秋にあらね共よろつにつけて物そ悲しき
ねこしにもほらはほら南女郎花人にをくるゝ名をは殘さし
續後撰 秋の田の庵にふける苫をあらみもり來露のいやはねらるゝ
風ふけはいつもなひけと秋くれはことにきこゆる荻の音哉
里人の衣うつなるつちの音にあやなく我もねさめぬる哉
風雅 かりかねのきこゆるなへにみわたせはよもの梢も色付にけり
玉葉 鈴虫の聲ふりたつる秋の夜はあはれにものゝなりまさる哉
白露のかけてをきたるふちはかまほころひにけり霧や立らむ
人もかな見せん（もイ）さきせむ（も）萩の花咲ゆふかけの日くらしの聲
秋ふけはときはの山の松風もいろつく計身にそしみける
人まても詠つる哉わかせこか出るにいてしありあけの月
棹鹿の秋たちすたく萩原にこゝろのしめはいふかひもなし
まつかきにはひくるくすを訪人はみるにかなしき秋の山里
後拾 ありとても賴むへきかは世中をしらする物はあさかほの花
續古 賴めたる人も（は集）なけれと秋の夜は月みてぬへきこゝち社せれ
後拾 はれすのみものそかなしき秋霧は心の内にたつにやある覽
をちつもるもみちの色に山河の淺きも深きなかれとそみる
ともかくも散さぬわさはしてましを一夜計の紅葉也せは

冬

紅葉はの此木のもとにあるをみて神名月とは言にさりける
しろなから露の置たるしら菊を（はイ）けさ初霜に見そまかへつる
秋はてゝ今はとかるゝあさちふ（はらイ）は人の心ににたるものかな
世間になをもふる哉しくれする雲間の月のいてやと思へと
續後撰 とやまなるまさきのかつら冬くれは深くも色の成（まさる集）にける哉
夏のせしよもきの門も霜かれてむくらの下は風もたまらす
置く霜をはらはぬ程はをしなへて鷗のうはけの衣手そする
閨の上に霜や置らむかたしけるした社いたく冴のほるなれ
宿はあれてあられしふれは白玉をしけるかともみゆる庭哉
ぬる人を起こす共なき埋火を見つゝ儚くあかすよなる〳〵
冬の池のつかはぬをしはさよ中にとひたちぬへき聲聞ゆ也
天の原かきくらかりて降雪を夜めにはあかき月かとそ見る
後拾 見わたせは（こりつみて集）まきの炭燒けをぬるみ大原山の雪の村きえ
わかぬれは（さひしさにイ）けふりをたにもたゝしとて柴折たける（くふる）冬の山里
水こほる冬たに來れはうき草のをのか心とねさしかほなる
氷りみな水といふ水はとちつれは冬はいつくも音なしの里
後拾 下もゆる（したきゆる）雪間の草のめつらしくわか思ふ人にあひみてし哉
せこかきてふしゝかたはら寒き夜は我手枕を我そしてぬる
かつけ共みるめはかせもたまらねは寒きに侘る冬のあま人
新古 數ふれは年の殘りもなかりけり老ぬるはかりかなしきはなし

戀

いたつらに身をそすてつる人を思ふ心やふかき谷となる覽

つれ〳〵と空そみらるゝ思ふ人あま降りこむ物ならなくに

新勅 見えもせんみもせん人を朝ゝにおきてはむかふ鏡ともかな

田子の浦によせてはよする浪のをたつやと人をみるよしも哉

新勅 よそにては戀し増れはみさこゐる磯による舟(半イ)さして(をイ)たにせす

新勅 さもあらはあれ雲井乍も山のはに出いる(如イ)よるの月とたにみん

後拾 黑髮の亂れもしらすうちふせはまつかきやりし人そ戀しき

夢にたにに見えもやすると敷妙の枕うこきていたにねられす

おしと思ふ命に添ておそろしく戀しき人のたまかはるもの

新勅 逢事を生(たま)のをにする身にし有はたゆるも(を)いかゝ悲し(あはれ)と思はぬ(之集)

後拾 渡津海に人をみるめのおいませは何れの浦の蜑とならまし

後拾 君こふる心は千ゝに碎くれとひとつもうせぬ物にそ有ける

續後撰 かく戀はたへすしぬへしよそにみし人社をのか命なりけれ

後拾 涙川同しみよりはなかるれと戀をはけたぬ物にそ有ける

我袖はみつの下なる石なれや人にしられてかはくまもなし

山かけにみかくれおふる山くさのやますよ人をおもふ心は

後拾 かれをきけ小夜更行は我ならてつまゝ呼ふ千鳥さこそ鳴なれ

世中に戀といふ(てふ集)色はなけれ共ふかく身にしむ物にそ有ける

いつれのみやにかおはしけむ白河院まろもろともに
おはしてかくかきていへもりにとらせておはしぬ

われか名は花ぬす人とたゝはたて只ひとえたはおりて歸覽

日ころみておりてさゐもんのかみ返し

山里のぬしにしられておる人は花をも名をもおしまさり覽

とあるふみをつけたる花のいとおもしろきをまろか
くちすさひにうちいひし

おる人のそれなるからにあちきなくみし山里(わかやとイ)の花の香そする

さゐもんのかみの返事又宮せさせ玉ふ

しられぬそかひなかりける飽さりし花にかへつる身をはおします

また左衞もんのかみ

人しれぬ心のうちをしりぬれは花のあたりに春はすくさん

一日御ふみつけたりし花をみてまろなんさいひしと
人のかたりけれはかくそのたまひし

しるらめや共山里の花の香はなへての袖にうつりやはする

かへし

また左衞もんのかみみちのくのかみのくたりしころ

知られしとそこら霞のへたてしに尋ねて(てとさイ)花の色はみてしを

それにうちそへたるをゝそみし

いまさらに霞のとつる白川の關をしいてはたつぬへしやは

まろかへし

行春のとめまほしきにしら河のせきをこえぬる身共なる哉

いなりまつり見しにかたはらなるくるしきさまのち
まきなととりいれてまろかくるまにとりいれしとき
むのふの少將くら人の少將いひけると聞しを一日ま
つりみるとて車のまへをすくるほとにゆふかけてと
りいれさせし

稻荷にもいはると聞しなき事をけふはたゝすの神に任する

かへし

何ととしらぬ人にはゆふたすきなにかたゝすの神にかく覽

といひたれはみてくらのやうにかみをしてかきてや

る
神懸て君はあらかふたれかさはよるへに溜る水といひける
かつさとのゝたへきみのとうをかりてなかえをかけ
たまへりしを人にはさらにとらせねともとていひや
りし
さと人はゆるさゝらましゆふたすきかくる車のなかえなり共
まさみちの少將なとのり給へりしそれやよみけむ
ゆふたすきかくる車のなか江社けふの葵のしるしとはみれ
雨いたうふる夜よひと夜思ひて侍るに
つれ〴〵とふるやの内にあらね共おほかる雨の下そ住うき
夕くれのしかのこゑ
よも山のしけきをみれはかなしくて鹿なきぬへき秋の夕暮
あかつきかたにたきのおとのきこゆれは
あはれにもきこゆなる哉曉の瀧はなみたのおつるなるへし
ゐに山寺ほうしのゐたる所にきこりとりやのかへる
所に
すみかそと思ふも悲しくるしきをこりつゝ人の歸る山邊に
田まほる家に人ゐたる所
ともすれはひき驚かす小山田の只管いねぬ秋の夜な〳〵
八月計りにいとおもしろき雨の降日
うしと思ふ我手ふれねと濕れつゝ雨には花のをとろふる哉
あきころたふときをする所にまうてたるにむしのこ
ゑ〳〵なけは
心にはひとつみのりを思へとも虫のこゑ〳〵きこゆなる哉
とをくてをこなひするをとを聞て
かなしきはおなし身乍ら遙かにも佛によるのこゑをきく哉

有明の月をみて
限りあれはかつ澄わたる世間に有明の月をいつまてか見ん
又十たい七月七日
新千 としをにまつもすくすもわひしきは秋のはしめの七日也鳧
風
ふきとたにふきたちぬれは秋風に人の心もうこきぬるかな
月
みる人も心に月はいりぬれといてといてにし空はくもらす
露
續詞 玉かとてとれは消ぬる白露をゝきなから社みるへかりけれ
霧
夕きりにあれたちぬれはあちきなし□
虫
其事といひてもなかぬ虫の音もきゝなしに社悲しかりけれ
雁
まもるとて山田のいほにすむ人のほになく雁の聲を聞哉
萩
萩原をあさたちくれは枝はさもおれはおれよと花咲に鳧
女郎花
花よりもねそみまほしき女郎花多かる野邊をほり求めつゝ
きくいはひとそ
長月といふにてしりぬ君か代はけふして菊のとかれしと□
又七月七日
天の川よひなかめぬ人そなきこひの心を知るもしらぬも
風

詞花 秋吹くはいかなる色の風なれは身にしむ計あはれなるらむ（やらむイ）

月

雲井（くもりなきイ）なる月とはみえてちりもゐぬ鏡に向ふこゝちこそすれ

露

葉にやとり枝にはかゝる白露をしろく咲たる花とみるかな

きり

秋霧に行衛も見えす我のれるこまさへみちの空にたちつゝ

むし

詞花 鳴虫のひとつこゑにもきこえぬは心〳〵にものやかなしき（人のこひしきイ）

かり

物おもへは雲井にみゆる雁金の耳にちかくもきこゆなる哉

はき

みるをにあたら物をとおほゆるは鹿たつ野邊の萩の花哉

をみなへし

女郎花さけるさか野の野へに出ていもに心はをかれぬる哉

七月七日たなはた（ヌイ）

羨ましけふを契れる七夕やいつともしらぬ人もある世に

風

ほりうへしかいもある哉わか宿の萩はの風そ秋も知らする

月

小倉山いりにし人は秋の夜の月はなをこそきゝわたるらめ

霧

秋霧のたつ田の山にあふひとはたつたの山にゆきや過らむ

露

白玉のしけるにはとておりつれは露に衣のすそはぬらしつ

女郎花

うしろめたかわかしめし野の女郎花花みる人に心うつるな

はき

さをしかは秋になりにけり萩の上の露くれなゐにみけり

むし

笹蟹のすかく糸をや秋の野に機をる虫のたてぬきにする

雁

ゆきかへりいつくも旅の雁金は長閑き折もなしとなくなり

九日

君かへむ千代の始のなか月のけふこゝぬかの菊をこそつめ

はりまのひしりのおもとにけちゑんのためにきこへし

拾遺 暗きよりくらきみちにそいりぬへき遙にてらせ山のはの月

ものゝあはれにおほゆれはものへなむまうつると聞ていつくへそこへなんとたにいへと人のいひたるに

いかはかり心深くもあらぬ身もうけれは谷のそこへ社ゆけ

世間はかなき事を聞て

忍ふへき人もなき身はある時にあはれ〳〵といひやをかまし

いし山より歸るにとをき山の櫻をみて

都人いかにととはゝ見せもせんこの山さくら一えたもかな

おなしみちなる寺にいりて見れはこゝの花はさかさりけれは知りたりしそうのありしをとはするもなけれは

さきぬ〔や〕櫻狩とて來つれとも此木のもとに（のイ）あるしたになし

それ迄の命たえたるものならはかならす花のおりに又見ん

おなしころ人のもとよりさくらの花を又見すへき人もなけれは御れうにとてたゝ一枝をなん折たるとて

又見せん人もなけれは山櫻いま一枝をおらすなりぬる

かへし

いたつらにこの一枝はなりぬめり殘りの花を風にまかすな

はるころひさしくをとせぬ人の山ふきに日ころのつみはゆるせといひたるに

後拾 とへとしも思はぬ八重の山吹を許すといはゝおりにこんとや

あめいたくふる頃ものむつかしうて

いかにせむ雨の下社住うけれふれは袖のみまなくぬれつゝ

ものへいく道にかはらやに日やといふものつくるをみて歸りてその夜月のうちくもりたるを見て

あはれこの月社くもれ晝見つる火屋の煙はいまやたつらむ

又人のさうするを見て

たち昇る煙につけておもふかないつまた我を人のかく見む

なけくことありと聞て人のいかなることそととひたるに

とも角もいはゝなへてに成ぬへし音になきて社みせまほしけれ

つれ／＼のなかめ

つれ／＼となかめ暮せは冬の日も春のいくかにをならぬ哉（おとらざりけりイ）

あれたるやと

壬々に我はひとかとおもはすはあれたる宿も淋しからまし

ねさめのとこ

語らはむ人をまくらと思ははやね覺の床にあれとたのまん

あかつきの月

曉の月みすさひにおきて行人のなこりになかめしものを

うつみひ

ぬる人ををこすともなき埋火を見つゝ儚く明す夜な／＼

あしたのしも

かた敷てねられぬ閨の上にしもいとあやにくに置る今朝哉

袖の氷

あさをに氷とちつる我袖はたかほりをけるいけならなくに

庭の雪

詞花 待人のいまも來たらはいかゝせむふまゝくおしき庭の雪哉

夕くれのおもひ

夕暮になともの思ひのまさる覽待人のまたある身ともなし

うたゝねの夢

はかもなき世を賴む哉宵の間のうたゝねにたに夢はみすやと

たゝにかたらふおとこのもとより女のかりやらんうたとこひたるやるとて

後拾 語らへは慰むをもある物を忘れやしなんこひのまきれに

あやしきをに人のいみしくいひしにそのおりはものもいはてつとめていひやる

をはりにおちし涙は流れてのうき名をすゝく水とならまし

二月のさくらのをそきころ

またせつゝをそく櫻の花によりよもの山邊に心をそやる

ものいみしうおもふころ風のいみしうふくに

身にしみてあはれなる哉いかなりし秋吹風をよそにきゝけむ

露よりも世のはかなきをを人のいふを聞て

草の上の露に例へし時たにもこは賴まれしまほろしの世か

かたらふ女ともたちの世にあらむかきりは忘れしと

いひしかをともせぬに
きえはつる命ともかな世中にあらはとはまし人のありやと
　ほうしのきてあふきおとしていきたるにやるとて
後拾雜六 はかなくも忘られにける扇かなをちたりけりと人も社みれ
　三月はかり人のこむとてたゝにあかしたるつとめて
　いひにやる
夜の程もうしろめたなき花の上を思ひ顏にてあかしつる哉
　九月はかりとりのねにそゝのかされて人のいてぬる
　に
人はゆき霧はまかきに立とまりさもなか空になかめつる哉
　あかそめか許（に）より
後拾別 行人もとまるもいかゝ思ふらむわかれてのちの又の別れを
　さりたるおとこのとをきくにへ行をいかゝきくとい
　ふ人に
千載別 別れても同し都に有りしかはいとこのたひの心ちやはせし
　世中さはかしきころかたらふ人の久しうをとせぬに
世間はいかになり行ものとてか心のとかにをとつれもせぬ
　ものいみにてあるちかき所に人のきてえ出すといひ
　たるに
隔てたる垣のまわたる月ならはかたらはす共影はみてまし
　人の屏風の哥よまするにはるの
はるとのはなの盛りは我宿にきと來る人のなかゐせぬなし
　野の花を馬にのりたる人三人はかり見てすくる所
あるかきり心をとめて過るかな花もみしらぬ駒にまかせて
　山花をかすめらん
花はなを人に見せなんへたてたる霞のうちに風もこそふけ

　いて井あり女なてしこを見る
咲しよりみつゝひころに成ぬれとなを常夏にしく花はなし
　松にふちかゝりたるくるまより人〳〵をりてみる
藤浪の高くも松にかゝる哉すゑよりこゆるなこりなるへし
　遠き山を人こゆ
こしかたを八重の白雲へたてつゝいとゝ山ちの遥かなる哉
　海にのそみたる松につたのもみちのかゝりたるを
紅葉するつたし懸れはをのつから松も仇なる名そ立ぬへき
　琴引笛ふきあそひする所
きく人のみゝさへさむく秋風にふきあはせたる笛の聲哉
　山のふもとに家ありもみち散て人なし
散ちらすみる人もなき山里のもみちはやみのにしき也けり
　人山をこゆるに前に橋あり
橋くちてよくへき道もなかり凫みねより渡る雲ならなくに
　はまの松原にふるきあまの家あり
いつかたの風にさはりてあま人の濱の苫屋をあらしはつ覽
　海つらに鷹すへたるたひ人雪降たる
空にたつ鳥たに見えぬ雪もよにすゝろにたかをすへてける哉
　雪のしろきつとめて人のもとより
續詞 けさはしも思はむ人はとひてまし妻なき閨のうへはいかゝと（にイ）
　返し　よりのふ
妻なしといふはまろやは數ならぬ閨にしもこそ心置かるれ
　いさかひする事ありておとこの家をさるとてつねに
　するまくらにかきつくる
かはりゐんちり計たに忍はしなあれたるとこの枕みるとも
　つらき心ありし人のゐなかよりきてをともせぬ
來たり共いはぬそつらきある物と思はゝ社は身をは恨みむ

和泉式部集　第二

わか心のつらきをみてたえにし人に心ちあしきころ
いひやる
あるほとに昔語もしてしかなうきをはあらぬ人としらさて
おもふとはいへともすれはうちえしつゝいてゝゆく
ほかにゐてしぬはかりおほつかなしといひたるに
今はとていくおり／＼し多かれはいと死ぬ計思へともみす
雨の降日つれ／＼と詠るにむかしあはれなりし事な
といひたる人に
おほつかなたれそ昔をかけたるはふるに身をしる雨か涙か
こゝろにあらてよそ／＼になりたる人にあめのふる
日
をのかしゝ降れともあめの下なれは袖計社わかすぬれけれ
あちきなきをのみいてくれは人のかへりことをたえ
てせぬはいかなれはかくおほつかなきそといひたる
に
夏草のかりに立名も惜けれは只そのこまをいまはのかふそ
こよひ／＼とたのめて人のこぬにつとめて
こよひさへあらはかく社おもほえめけふ暮ぬ間の命とも哉
人にあひて物いひしところを日ころほかにありてき
てみれはいたうちりはみたるを見ていひやる
逢ことのありし處を來てみれはさしも思はぬちりそゐにける
人のもとにわすれ草しのふ草つゝみてやるとて
物思へは我か人かの心にもこれとこれとそしるくみえける

人の久しうをとせぬに
をはりやかつ忘られぬ我たにもあるかなきかに思ふ身なれ
こゝろかはりたるおとこのまくらしはしおもひかは
るなとなんいふに
いさやまたかはるも知らす今社は人の心をみてもならはめ
梅の散はてたるをなかめて
おほろけに惜みし花は散りに皃枝にさへ社めはとまりけれ
人のいまさくらもさきなんといへは
まさゝまに櫻もさかむみにはみん心の梅のかをはしのひて
遠所へ行人によのなかのはかなき事といひて
それとみよ都の方の山きはにむすほゝれたる烟けむらは
九月はかりにいとつれ／＼にて人にいひやる
秋深き哀を知らはしらさらむ人もこゝをそたつねきてみん
なくならん世までもおもはんなといふ人のわつらふ
ころをとせぬに
忍はれん物ともみえぬ我身哉あるほとをたに誰かとひける
みわたしなるところにみゆる人々にいひやる
あらはにもみゆる物哉玉垂のみすかしかほは誰ちかくるな
しのひてものいふ人のあるにを人のあれはいそきて
出るにあふきかはりにけりやるとて
語らはむ人もなかりつとりかふと思ひしにやる扇なりけり
ものよりなつころきたるおとこのをとせぬに
夏衣きてはみえねとわかためにうすき心のあらはなる哉
月のあかき夜人に
月をみて荒たる宿に詠れはみにこぬまてもなれにつけよと
いしやまにこもりたるを久しうをともし給はてそち

の宮

せき越てけふそとふやと人はしる思ひたえせぬ心つかひを（とはイ）

かへし

あふみちは忘れぬめりとみし物を關うち越てとふ人やたれ

またいつかかへるとあれは

山なからうくはうくとも都へは何かうちての濱もみるへき

みやの御かへし

うきによりひたやこもりと思へ共近江の海はうち出てみよ

ある人のあふきをとりてもたまへりけるを御らんして大とのたかそと問はせ給けれはそれかときこへたまへけれはとりてうかれ女のあふきと書きつけさせたまへるかたはらに

こえもせむこさすもあらむ逢坂の關守ならぬ人なとかめそ

そちの宮たちはなの枝を給りたりし

かほるかをよそふるよりは時鳥きかはや同し聲やしたると

返し

同しえになきつゝをりし時鳥聲はかはらぬものとしらなむ

おほ雨のあしたよひはいかゝと宮よりある御返事

夜もすからなに事をかは思ひつる窓うつ雨の音をきゝつゝ

かへし

我もさそ思ひやりつる夜も盡らさせる妻なき宿はいかにと

いし山にありけるほとみやよりいつかはいつるなとのたまひけるにや

心みよ君か心も心見むいさみやこへときてさそひみよ

みやよりもみち見になんまかるとのたまへりけれとその日はとゝまらせ給てその夜風のいたくふきけれはつとめてきこゆ

紅葉ゝは夜半の時雨にあらしかし昨日山邊を見たらましかは

十月はかりそちのみやよりいかにつれ〳〵にとのたまへれは

花見つゝ暮しゝ時は春の日もいとかくなかき心地やはせし

そちの宮うせ給てのころ

（後拾）かる藻かき伏猪の床のいを休みさ社ねさらめかゝらすも哉

おなしころふのとのに

さるめみてよにあらしとや思ふ覽哀をしれる人のとはぬは

ふのとのより

袖ぬれていつみといふなは絶にきと聞しを數多人のくむなる

返し

かけみたる人たにあらしくまね共泉てふなの流れはかりそ

又おなし殿より東宮のなをたゝにかゝせて

をとにのみならしの岡の時鳥をかたらはむきくやきかすや

その御ふみをかへしたれはまた

人ゆかぬ道ならなくに何しかもいたゝの橋の踏かへすらむ

かへし

猶やめよ踏返さるゝをはたゝのいたゝの橋はこほれもぞする

あふきはらせてはらからたちにこゝろさすとて

今ぞかく隔れ島なる我なれははり集めたるかはほりそこは

ある人のこむといひたるに

もしも來は道のまそなき宿はみな淺ちかはらに成はてに鳧

つのくにより人のいひをこせたる

忘草つむ人ありときゝしかはみにたにも見すゝみよしの岸

かへし

忘れ草つむほとゝ社思ひつれおほつかなくて程のへつれは
　はるつかたの人のきたりけれは花もみな散にけれは
　　みちなりなとにや
いたつらにかへらむ事を思ふ哉花の折こそつくへかりけれ
　　返しおとこ
散に劔花をは今はいかゝせんみてすくしけん人にとはゝや
　　このおなしおとこ又やまふきのちりはてにたたるに
けふは又なにゝかきつるひとへたに散りも殘らすやへの山吹
　　かへし
散にきといひてややまむ山吹のおり枯したる枝はなしやは
　　むらさきのをり物のひたゝれをゝきたりけるをやる
　　とてよりのふに
色に出て人にかたるな紫のねすりのころもきてねたりきと（ともイ）
　　七月八日大將殿よりありしは忘れて御返にきこゆ
七夕のけふのよはひのうちかへり又待遠にものや思らむ
彦星は思ひもよらん中々にあきはきのふのなからましかは
　　正月七日おやのかうしなりしほとに若菜やるとて
こまゝゝに逢とはきけと無名をはいつらはけふも人の摘ける
　　返しおや
なきなそといふ人もなし君かみに老のみつむと聞そ苦しき
　　いなりにまうてゝ御前なるほとにしかのなけは
思ふ事しかたになくはいとゝしく高きみ山のかひよと思はん
　　まさみちの少將ありあけの月を見ておほしいつるな
　　るへし
ねさめしてひとり有明の月みれは昔見なれし人そこひしき
　　かへし
ねられねと八重むくらせる槇の戸にをし明方の月をたにみす
　　知りたる人の馬にのりて前わたりするを
いはましをわれか手なれの駒ならは人に從ふあゆみすな共
　　知りたりし人の月あかき夜きて返りにしにつとめて
　　いひやる
とこの上の枕も知らてあかしてき出にし月の影をなかめて
　　またいつみのかみみちさたかめのくたるひわかくた
　　るおなしひなりけれは
中々にをのか舟出の旅しもそきのふの淵を瀬とも知りぬる
　　かたらふ人のきたりけるをきよまはるとありとてか
　　へしけれはつとめてかういひやりたる
契りしを違ふへしやはいつくしきあらいみまいみ清まはる共
　　かへし
すさのをの尊を祈るともなしに越てそみまし涙のやえかき
　　ある人のものいひにきてひとへのなりけれはぬきを
　　きて出にけるつとめて
音せぬに苦しきものをみにちかくなるとていとふ人も有覽
　　しのひてかたらふ人のわつらひてこよひはえすくす
　　ましといへりけれはまたのつとめて
覺束な夜のまの程も白露のおきゐやすらむしにやしぬらん
　　一日もをこたらすをとせんとちきりし人の心ちのあ
　　しくおほゆる日しもをともせて又の日をとつれたる
　　にきのふはとて
かくやはと思ふゝゝそ消えなましけふまてたへぬ命也せは
　　物いたくおもふころ夕くれに
夕暮の哀はいたくまさりけりひゝとひものはおもひつれ共

七月七日まつ人のもとにいひやる

そのほとゝ契らぬ仲はきのふ迄けふをゆかしと思ひける哉

とき〴〵こし人のたえてのちその人のしそくなる人の

かりにこし蛩もかれにし浦淋てたゝみる儘にをのかしわきは

かへし

蛩はよもかれしとそ思ふ磯なれて波のたつやととはぬ計りそ

觀身岸額離根草　論命江頭不繫船

みる程は夢も賴ますはかなきはあるをあるにてすくす也兒

をしへやる（かそふイ）人もあら南尋ねみむ吉野の山のいわのかけみち

觀すれは昔の罪（の身をしらでイ）を知るからになをめのまへに袖はぬれけり

住の江の松にとはゝや世にふれはかゝる物思ふおりや有しも

れいよりもうたて物社悲しけれ我よのはてに成やしぬらん

儚くてけふりと成し人により雲井のそらのむつましき哉

きえぬ共あしたには叉をく霜のみならは人を賴み見てまし

鹽のまによもの浦々もとむれ（たつぬイ）は今は我身のいふかひもなし

新古　野邊みれはお花かもとの思ひ草枯ゆく程になりそしにける

ひねもすに歎かしとたに有物をよるは微睡む夢も見てしか

誰か來て見るへきものと我宿のよもきふあらし吹き拂ふ覽

人とはゝいかにこたへむ心から物思ふ程になれるすかたは

庭のまもみえすちり積木葉くすはかても誰の人か來てみん

新勅　ねになけは袖は朽ても失ぬめり身のうきとそ盡せさりける

をゝよはみみたれてをつる玉と社涙も人のめには見ゆらめ

花を見て春は心もなくさみきもみちのをりそものは悲しき

難波潟みきは（いりえイ）の芦にたつさはるふねとはなしにある我身哉

れいよりや時雨やすらむ神無月そてさへとをる心ち社すれ

たらちめの諫めし物をつれ〴〵と詠むるをたに問ふ人もなし

るりのちと人も見つへし我床は泪のたまとしきにしけれは

新古　暮ぬなりいくかをかくて過ぬ覽入相の鐘のつく〴〵として

さを鹿の朝たつ山のとよむ迄なきそしぬへき妻こはなくに

新古　命たにあらはみるへき身のはてを忍はむ人もなきそ悲しき

野邊に出るみかりの人にあらね共とり集めてそ物は悲しき

新勅　塵のゐるものと枕はなりぬめり何の爲かはうちも拂はん

惜と思ふ折やあり劔ありふれはいとかく計うかりける身を

ろもをさて風にまかするあま舟の何れの方によらむとす覽

すみなれし人かけもせぬ我宿に有明の月のいく夜ともなく

れいならすねさめせらるゝころはかり空とふ鴈の一聲も哉

春たゝはいつしかも見むみ山邊の霞にわれやならむとす覽

えこそ猶うきせと思へと背かれぬ己か心のうしろめたさに

軒はたにみえすすかける我宿はくものいたくそ荒果にける

ほとふれは人はわすれてやみにけん契し事をなをたのむ哉

と山ふくあらしの風の音きけはまたきに冬の奥そ知らるゝ

りんたうの花とも人を見てし哉枯やははつる霜かくれつゝ

にほとりのしたの心はいかなれやみなるゝ水の上そ情なき

續後拾哀傷　露をみて草葉の上と思ひしはときまつほとの命なりけり

なにのためなれる我身といひ顔にやゝとも物の歎かしき哉

限りあれはいとふまゝにも消ぬ身をいさ大方に思ひ捨てむ

さなくても淋しき物を冬くれは蓬のかきのかれ〴〵にして

るいよりもひとりはなれて知人もなく〳〵越んしての山道
吹風のをとにもたえてきこえすは雲の行衛を思ひをこせよ
ねし床にたまなきからをとめたらはなけの哀と人もみよかし

春歌

春日野に千よもへぬへし神のます三笠の山に來たりと思へは
野邊に出て松をためしに引て祉萬代經へき程は知りぬれ
花にあかてけふも暮なは水の面に浮へる月をかく祉は見め
かけにさへ深くもいろのみゆるかなはなこそ水の心也けれ

夏

あふひ草かさして行と思ふよりいそきたゝるゝ加茂の川浪
幾たひか身にはきゝつる時鳥みちの空にもほのかなるかな
夏草をわけてやきつる山里のかきねのはなは雪とこそみれ
駒の足にくらへてみれとけふは尚菖蒲の草のね祉せちなれ
夏のひも君か爲にもあはならすむすひし水の氷りとけめや
諸共にのとけくゐたれ芦田鶴の立へき岸もよらぬきしなり
清きせになごしのはらへしつるよりやを萬代は神のまに〳〵

秋

七夕のこよひあふせは天川わたりてぬると思ふなりけり
野邊なからおられましかは女郎花露も落さてみるへき物を
人もこゆ駒もとまらす逢坂のせきはしみつのもるなかり覧
誘はれて人も來に覧常よりもこよひの月そいらぬくさなき
風ふけは門田の稲も浪よるにいかなる人かすきて行くらむ
秋はひをかそへてゆかむよりてみる網代の浪は色も變らす
めつらしきみゆきなり覧秋の月時雨るそらとおもひける哉

雲林院にすむころ越後守のりなかに

きかせはや哀を知らん人も哉雲のはやしのかりのひとこゑ

節分のつとめて

けふよりは蘆まの水やゆるからむたつのたちとの氷薄れて

内侍うせて後頭の中將みつから(と歟)こえむとのたまへるに

涙をそみせは見すへき逢みてもをにはいてまだかたのなけれは

かへし　頭中將

たち出る涙の程をみるときは草葉はこひとしられやはする
白妙の梅もなにせんゆきをそ春の花とはいふへかりける
菖蒲草よとのなからのねならねと荒たる宿はつまと祉みれ
なのみにそこまのあたりのうり作り只秋霧のたつを祉みれ

つれ〳〵なりしおりよしなしをにおほえし事

世中にあらまほしき事

夕暮はさなから月になしはてゝ闇てふをのなからましかは
續後撰春中 をしなへて花は櫻になしはてゝ散てふをのなからましかは（春をイ）
玉葉 世中にうき身はなくておしと思ふ人の命をとゝめましかは
世中ははると秋とになしはてゝ夏と冬とのなからましかは
みな人を同し心になしはてゝおもおもはぬなからましかは

人に定めさせまほしき事

いつれをかよになかれとは思へき忘るゝ人と忘らるゝ身と
なき人をなくて戀んとありなから逢みさらむと何れ増れり
思へともよそなる中とかつ見つゝ思はぬ中と何れまされり
はやきせと水の流と人の世ととまらぬをはいつれまされり

あやしき事

世間にややしき物はしかすかにおもはぬ人のたえぬなり覧（をおもふイ）
世中にあやしき物はいとふ身のあらしと思におしきなり覧

くるしけなる事

世中にくるしき事はこゝぬ人をさりともとのみ待にそ有ける
よの中に苦しき事は数ならてならぬこひする人にそ有ける

あはれなる事

哀れなることをいふにはいたつらにふりのみまさる我身なり
哀なることをいふにはなき人を夢よりほかに見ぬにそ有ける
哀なる事をいふには都出て行たひみちのとをきなりけり
あはれなる事をいふには人しれすもの思ふときの秋の夕暮
哀なる事をいふには心にもあらてたえたる中にそありける

帥の宮にて題十給はせたる

大井河のいかた　ゆふくれの鐘　山寺のかすかなる
「　　」　「　　」　山田の紅葉
岸にのこるきく　くさむらのむし　おくら山の鹿
清瀧河の月

大井河くたす筏のみなれ棹さしいつるものは涙なりけり
詞花 夕暮は物そ悲しき鐘の音をあすもきくへき身とし知らねは
そむきぬと浮世の人しかよはねは窓にむかへる心ち社すれ
小山田のもるももらぬもよの人のすへてはかりの宿り成覧
いつまてと待をはかなき心ともさか野の花のをくれぬる哉
紅葉はの散もをらましかめ山のこふをつくして(なりも)社すれ
岸の上の菊は殘れと人の身はをくれさき立ほとたにそへぬ
をけはかつきえぬる霜をみるまゝに草むらことに虫そ鳴なる
いかはかり秋は悲しき物なれはおくらの山の鹿なきぬへし
あかゝらぬ心のくまをたつぬれはきよたき川の月もすみ覧

みちさたさりて後帥の宮に参ぬときゝて　赤染衛門

新古 移ろはて暫ししのたの森を見よかへりもそするくすの浦風

返し

同 秋風はすこく吹共くすの葉のうらみかほには見えしとそ思

皇太后宮うせさせ給へる御法事の物とて色〳〵の玉めしたるに參らすとて

玉葉 数ならぬ涙の露をそへ(かけてたに)たらは玉のさかり(かさり)をまさん(そへ集)とそ思ふ

霜のしろき朝寒

手枕の袖にも霜は置けるをけさ打みれは白妙にへに（二字衍歟）して

人のかへりことに

まとろまて獨詠し月みれはおきなからしもあかしかほ也

をそくまいりいみしく侘れは

霜の上に朝日さすめり今ははやうちとけにたる景色みせ南
君はこすたま〳〵見ゆる童をはいけとも今はいはしとそ思

たまくらの袖はわすれ給にけるかとのたまはせたるに

人しれす心にかけてしのふをはまくるとやみるた枕のそて

月はみるやとのたまはせたるに

更ぬらんと思ものからねられねと中々なれは月はしもみす

まゆみの木のおいたるを見せ給て

とはふかくもなりにけるかな

とのたまはすれは

しら露のはかなくをくとみしほとに

霜のしろきつとめて（一本衍歟）

我上は千鳥はつけし大鳥のはねしにしも猶さやはをかねと

人のかへりことに

霜かれはなにゝぬれたる袂そとさためかねてそ我も詠る
うつろはぬ常磐の山も紅葉せは如何ゆきてのをゝに見む
高瀬船はや漕出よさはるとてさしかへりにし蘆まわけたり
　人のかへりをに
其夜より我床の上は時雨ねとすゝろにあらぬ旅ねをそする
　人　に
今のまに君やきませや戀しとてなもある物を我ゆかめやは
　人のかへりことに
恨む覽心はたゆなかきりなくたのむよをうく我もうたかふ
　雨風はけしき日しも音つれ給はねはきこえさする
霜かれはわひしかりけり秋風の吹には荻のおとつれもしき
　人　に
つれ〳〵とけふ數ふれは年月にきのふそ物は思はさりける
　夕くれにきこえさする
なくさむるきみも有とは思へともなを夕暮は物そかなしき
　人のためてこす侍りけれはつとめてつかはす
後拾
をきなから明しつる哉ともねせぬ鴨のよはけの霜なら(なくに)
　おなし心にとあるかへりことに
君は〳〵我はわれともへたてねは心〳〵にあらむものかは
　こゝちあしきころいかゝとのたまはせけれは
たえし比たえぬと思ひし玉のをの君により又おしまるゝ哉
　雪のつとめて
初雪といつれの雪とみる儘に珍らしけなき身のみふりつゝ
　ふみつくるとて人〳〵あれはとのたまはせたれは
遑なみ君來まさすは我ゆかんふみつくるらむ道をしらはや
　霜いとしろきつとめていかゝ見るとのたまはせたれ
　は
さゆるよのかすかくをは我なれはいく朝霜をおきゐみ(るらむ)
雪もふり雨もふりぬる此冬(ころをイ)は朝しもとのみおきゐては見る
　つく〳〵となくけしきを御らんして
なをさりのあらましをに夜もすから落る涙はあめと社ふれ
　とのたまはすれは心ほそきをのたまはせつるを心み
　たれて
現にて思へはいはんかたもなし今宵のをを夢になさはや
　御返し
われさらは進みてゆかん君はたゝのりの心をひろむ計りそ
梅ははや咲に皃とておれはちる花とそ雪のふるはみえける
　御返し
冬の夜はめさへ氷りにとちられて明しかたきを明しつる哉
　なをよにもありはつましきをのたまはすれは
くれ竹のよゝのふるをおもほゆる昔かたりは君のみそせむ
　橋につけて人に
誰にこはなほみせましや我おれは山時鳥さらにきなかす
　物にまいりたるにたつねんかたもなきをゝいひたる
　人に
いきてまた歸りきにけり郭公しての山路のをもかたらむ
　ともかくもいへといふおとこに
そのかたとさしてもよらぬ浮舟の又漕はなれ思ふともなし
　けさうするおとこひんなきおりきて歸とてさりぬへ
　からむおりおところかせといふに
なにはかた折ふす芦のあしのねに又ねぬ人を驚かすやは、

和泉式部集　第三

れいの人にて物いふ所にたちよりたれとをともせね
はかへりてうらみたるに
聲たにも通はんをはおほしまやいかになるとの浦とかはみし
物へいく人いましはしのいのちの□（ほと歟）おしきとい
ひたるに
（續後撰）惜むらむ人の命はありもせよまつにもたえぬ身社なからめ
久しうをともせぬ人に
（千載）うらむへき心計りはあるものをなきになしてもとはぬ君哉
人によのはかなき事をなといひて
（玉葉）いかにせんいかにかすへき世中を背けは悲し住はすみうし（うらめ集）
うへのきぬをはりきりていとおしき事といひて
露草にそめぬ衣のいかなれはうつし心もなくなしつらむ
十一月菊の色したるきぬおやのもとにやるとて
此きぬの色しろたへになりぬ共しつ心あるけころもにせよ
やむことなきおとこに
白浪のよるには靡くなひきもの靡かしと思ふ我ならなくに
こゝろにもあらすあやしき事いてきてれいすむ所も
さりてなけくをおやもいみしうなけくと聞ていひや
るかみのもしはよのふる事なり
古へや物思ふ人をもときけんむくひはかりのこゝち社すれ
はかもなき露の程にもけちてまし玉と成劔かひもなき身を
外にもやまたうきとは有けると宿かへて社しらまほしけれ

殘てもなにゝかはせん朽にける袖は身乍らすてやしてまし
涙にも涙にもぬるゝ袂哉をのかふね〳〵なかぬとおもへは
悲しきは此世ひとつかうきよりも君さへ物を我思ふなり鳧
にこり江の底にすむ共聞えすはさすかに我を君こひしやは
過にけるかたそ悲しき君を見てあかしくらしを月日と思へは
徵睡まはうき世夢共見るへきにいつらは更にねられさり鳧
花咲ぬ谷のそこにもすまなくにふかくも物をおもはるゝ哉
隱れつゝかくてやゝまんたらちねの惜みもし劔あたら命を
春雨のふるにつけてそ世中のうきも哀れとおもひしらるゝ
十二月つとめてのうたとて□のおとこのよませし
打はへて涙にしきし片敷の袖のこほりそけふはとけたる
極樂をねかふ心を人ゝよむに
願くはくらき此世のやみを出てあかき蓮の身ともならはや
みやの御殿のさくらを
花もおしちらて千とせをすくさなん君か都ににほふ櫻を
世のはかなき事なといひてなくにちかくふしたる人
の袖のぬるゝをあいなのわさやといふに
おほかたの哀をしるにをつれ共涙は君にかけてこそおもへ
或所に几帳の帷いれてまいらせたれは袋かへさせ給
へるに
袖みれは嬉しきものを包みたる袋かへしつかけてのみ見ん
花の時心不ㇾ靜雨の中に松綠をますといふ心を人の
讀に
（續後拾）のとかなるおり社なけれ花をおもふ心の内に風はふかねと
松はそのもとの色たにあるものをすへて綠も春はとなり
燈の前に花を思といふ心

夜のほとにちりも社すれあくる迄ほかけに花をみるよしも哉
ひにあてゝみるへき物を櫻花いくかもあらてちるそ悲しき
燈の風にたゆたふみるまゝにあかてちりなん花をこそみれ
　祭の日御前に人すくなにてさふらふに葵に御てなら
　ひをせさせ給て
玉葉 ゆふかけて思はさりせは葵草しめのほかにそ人をきかまし
　おほんかへしきこえむもはゆけれはゆふを御み丁の
　かたひらにゆひつけてたちぬ（に集）
同 しめの内をなれさりしよりゆふたすき心は君に懸てし物を
　丹後にくたるに宮よりきぬあふき給せたるにあまの
　はしたてかゝせ給て
秋霧のへたつるあまの橋立をいかなるひまに人わたるらむ
　御返し
思ひたつそら社なけれ道もなくきりわたるなるあまの橋立
　たいふの命ふにとまる人よくをしへよとて
わかれ行心をおもへわか身をも人のうへをもしる人そしる
　人のかへりしに
はなゝみのさとゝしきけは物うきに君ひきわたせ天の橋立
　出門の所にきたる客人にしのひてとらせし
有川と佐野の舟橋みつるより物うく成ぬよさのわたりは
　こまやかなる人の文を見て
身は行とゝまりぬるはさきにたつ泪をもとく心なるへし
　入道殿より尼になりなんといひしはいかゝとのたま
　はせたるに
あま船にのりそわつらふよさの海にをいやはす（いへ）君をみるめは
　人に
行さきもすきぬる方も戀しきはみちの空にやゆきとまり南
　丹後よりのほりて練たる糸宮にまいらすとて
白糸のくるほとまてはよそにても戀に命をかけてへしなり
　なを或人にのほりて
與佐の海に涙のよるひる詠めつゝ思ひし事をいふ身とも哉
　前栽のおもしろきをみていひあつめたる
あらさしと思ひし宿を花により萩の原ともなしてみる哉
我心ゆくとはなくて花薄まねくを見ればめこそとゝまれ
女郎花いつこにうへん我宿のはなにてみるにおしくも有哉
いをしねて夜をにきけはあはれにもなきまさる哉鈴虫の聲
我やとを人に見せはや春は梅なつはとこなつ秋は秋はき
　これを見て一品の宮の相撲
はるの梅なつのなてしこ秋の萩きくの殘りのふゆそしらる
　内侍のうせたるころ雪の降てきえぬれは
なとて君むなしき空に消に劔あは雲たにもふれはふる世に
　同ころ殿の中納言失給へるにとふらひ給へるに
とはるゝも人はかく社おもはめと嬉しきまてに君そ悲しき
　宮より露をきたるからきぬまいらせよ經のへうしに
　せんとめしたるにむすひつけたる
新古哀傷 置と見し露もあり鳧はかなくてきえにし人を何にたとへん
とゝめ置て誰を哀と思ひけんこはまさるらむこはまさり鳧
　内大臣との〻若君をわたし奉り給へて見たてまつら
　んとありけれはこゝにわたりて見奉り給へとありけ
　れはいつみ
こひてなく涙に影は見えたるをなかゝ（る既歟）までも何にか渡らむ
　雪の降日

身にしみて物のかなしき雪けにもとゝこほらぬは涙成けり
若君の御送におはするころ
この身社このかはりには戀しけれ親戀しくは親をみてまし
つねにもたりし手はこをおだきに誦經にせさすとて
かきつくる
(續)侘ときくにたにきけ鐘の音にうち忘らるゝ時の間そなき
これをきゝて僧都の母いかゝとゝひたりけれは
つく〲とをつる涙にしつむ共きけとて鐘のをとつれし哉
同しころさかみかめのもとよりをはのもとに
親をゝきて子に分れけん悲しひの中をはいかゝ君も見る覽
返し
親のため人のもとは悲しきをなにそ(とかイ)分れをよそにきゝけん
木幡僧都の家やけたる人つていひやるはじに
出にける門のほかをしらぬ身はとふへき程もさた(すきに)覺
かへし
とはぬをも恨むる心今はなし車にのらぬほとそうかりし
きぬともやるとて
もしほ草やき鹹あまのすて衣思ひのほかにありけるをみよ
かへし
藻鹽草くゆらぬものをあま衣なにかくなみのたちかさぬ覽
同僧都母許に故内侍ともこともにうの花見しをなと
いひやりたれは
郭公なきかけにてもふる里のこけのかきねをいかにこふ覽
かへし
古里の垣ねにのみそ我はなく死出のたをさは葬らひもせす
宮法師になりてかみのきれをおこせ玉へるを

かきなてゝおほしゝ髪の筋ことになり果ぬるをみるそ悲しき
しはすのつこもりかたにあかつきおきてみれは月い
りかたになれは
としくれてあけ行空をなかむれは殘れる月の影そこひしき
祭主輔親かむすめの花にきしをつけていひたる
春の野に風はふけとも――――
かへし
鶯のねくらの花とみるものをとりたかへたるこゝち社すれ
流れつゝ水のわたりの菖蒲草ひき返すへき根やはのこれる
同日清少納言に
駒すらにすさめぬ程に老ぬれは何の菖蒲も知られやはする
かへし
すさめぬにねたさもねたし菖蒲草ひき返しても駒かへり南
石藏の宮の御許にちまき奉るとて
深さはのこもをそかれる君か爲たまは衣の袖にかくらむ
返し
深さはのこもはかたみにかゝりけれと君か涙の玉そかゝれる
いかなる人にかいかてたゝ一たひたいめんせんとい
ひたるに
(玉葉)世〲をへてわれやは物を思ふへき只一度のあふことにより
また人のかへりことに
頼むとて頼みける社はかなけれ晝間の夢のよとはしらすや
とて
安藝守の婦子うみたるこゝぬかの日ちこのきぬやる
なぬか行濱の眞砂をかすにしてこゝぬか(さへも)かすへつる哉
はやうわかれし人のもとに

それなからあるかなきかと昔見し人にとひてや我はしらまし
人の来るをひんなけれはかへしたるつとめてよへは
いねとありしかはまてきたるといひたるに
言儘にいきける物をいくにても留むへく社あるへかりけれ
あさからぬをゆへおつる涙かは浮ふ共いふしのふともいふ
あきのきたのかたにたき物こひたるとてやるとて
塵はかりにほひたになし君かすむ籬の菊の香にをくるはせ
内侍もうせてのち人のもとに
ひきかくる泪にいとゝおほゝれて纓のかりける物もいはれず
人のかへりことに
玉の緒を見るに儚き笹蟹のいかてしはしもかき通はゝや
おなし人に
古はありけるをときゝなからなをかなしさのふりかたき哉
人のかへりことに
よと渡り雨にはいとゝ眞菰草まをにそれをねになかれにし（つゝイ）
人のかへりことに五月五日
涙のみふるやの軒の忍ふ草けふのあやめはしられやはする
おなし人に
何事もみなふりにける君か為いかなる事をいかにきかまし
五月五日ちまきを人のもとにやるとて
ふか澤田汀かくれの眞菰草きのふあやめにひかされに皃
やなきにみのむしのつきたるをみて
みのむしになるを見るゝゝ青柳の糸にのみよる我心かな
雨ふらはむめの花傘あるものを柳につけるみのむしのなそ
このかたしたるわりこをさいす(祭主)すけちかかりて
かへすとてかりのこをいれて
いせしにによさの海より飛通ふうはの空にもかひになし皃
かへし
飛通ふよさのしまつをよそ人はとりも留めはかひもあらまし
石蔵より野老をこせたるてはこにくさもちゐいれて
奉るとて
はなのさと心もしらす春の野に色々つめるはゝこもちゐそ
とのゝ中納言の御返事
冬の野にかるてふかやはかれもせよ人の心に霜はをくやは
秋ゐなかよりきたる人に
秋風のをとにつけても待れつるころもかさぬる中ならね共
やまとよりのほりたりと聞人のをとつれぬる
大和よりきたりときけと唐衣たゝもろこしの心地こそすれ
人の返事に
たち歸り心のくせのならひにてそはこまほしく思ひなす覽
公資かめともろともにきてまくらこへはいたしたる
にかへすとてかきつけてかへしたる
たひをにかるもうるさし草枕たまくらならは歸さゝらまし
かへし
草枕その結ひめのたよりにはちたひも千たひかさんとそ思
人のかへりことに
かけたるはうしと社思へたまさかに車は何の心をかやる
雪いみしうふるひ
かくしつゝひをのふれはいとゝしくゆきゝの道や滞るらむ
僧都の母いとこひたるやるとて
このふしにたえも社すれまゆ籠りいと少くもひきてたる哉
かたらふ人の来るに粽やるとてしきたるかみに

夢にたもあふとみる社嬉じけれ殘りの賴みすくなけれとも
　冬のはてつかた雪のいみしうふる日人かりやる
ふりはへてたれはたき南ふみつくる路見まほしき雪の上哉
　五月五日菖蒲草の根を淸少納言にやるとて
これそこの人のひきける菖蒲草むへ社ねやのつまと也けれ
かへし
ねやとのつまにひかるゝ程よりはほそくみしかき菖蒲草哉
またかへし
さはしもそ君はみるらむ菖蒲草ねみけん人にひきくら(へつゝ)
　おなしき人のもとよりのりをこせたりけれは
まれにても君か口より傳へすはときける法にいつか逢へき
　ひとのもと物忌にてなむと聞て今日のつれ〳〵にこゝろはへのいとにくきもよくなむといひたるに
何にともうきにつけつゝ思ひ出て忘るゝ時の叉にあらしな
　卯花みにいきてかへりてつとめて
おりしまれきのふかきねの花をみてけふきく物か山時鳥
　小(山イ)田のなかつかさの内侍□侍けむたき物すこしとこひたるに
夢計りあはせたきものなかり㒵烟となりてのほりにしかは
　内侍なくなりてつきのとし七月にれいやるふみになのかゝれたるを
金葉雜下 諸共にこけの下には朽すしてうつもれぬ名をみるそ悲しき
　いかなる人にか
あさましやねぬ共人は見え㒵とゆめとも夢に人にかたるな
ひく人もなくてきのふは過してき我忘れぬにおふる菖蒲は
　またいかなる人にかいひ侍る
いとゝしくものそ悲しき定めなき君は我身のかきりと思に
戀しさはそれにしも社增りけれあふを限りと誰かいひける
情なさは思ひしもせし一日たにいかてか過す心地すらむと
有なからつらきも苦しなき人をおもひのみやは思ふなり㒵
後拾 契あらは思ふかとそ思はましあやしやなにのむくひなる覽
同 けふしなはあす迄物は思はしと思ふにたにも叶はぬそうき
同 よそにふる人は雨とやおもふらむわかめにちかき袖の雫を
同 日にそへて憂とのみも增る哉暮れてはやかてあけすもあら南
　いみしうふみこまかにかく人のさしもおもはぬに
藻鹽草やくとかきつむあまならて處おほかるふみのうら哉
羨ましさもわか胸のさはく哉いかなる人の身かはうこかぬ
後拾 忘れなんそれは(もイ)恨みす思ふらむこふ覽とたに思ひをこせは
いくかともしられす成ぬかすにせし泪の玉もこほれ落つゝ
絕はては絕はてぬへし玉のをに君ならんとは思ひかけきや
我袖になみたとのみそおもひしを心にかゝる君もありけり
なぬかにもあまりに㒵な便あらはかそへきかせよ興津島守
わりなくもたかくせらるゝ歎哉みそかにと社君もいひしか
　守の大和よりのほりたる日人のもとにやる
待人はまてともみえてあちきなく待ぬ人社まつはみえけれ
　また人に
恨むなよ我名たてつとみる人のなに思ふそとゝはゝ答へん
かきくらし雨はさ月の心ちしてまた打とけぬほとゝきす哉
身のうきも人のつらさも知ぬるをこはたか誰をこふる成覽
　あふひをやるとて
皆人のかさしにすめる其草の名は何とかやいひてきかせよ

また
くすりてふあふひもすきぬ今はたゝ戀忘れ草ひとりとも哉
はかなくて忘れぬめるは夢なれやぬるとは袖を思ふなり覽
我たまのかよふはかりの道も哉まとはむ程に君をたに見ん

和泉式部集　第四

よさの海のあまの仕業と見し物をさも我やくとたるゝ潮哉
増鏡いと見くるしやむへこそはかけ見し人の影は見えけれ
　内侍なくなりたるころ人に
歎くやとなき折ならはなにゝよりおつる涙も人にいは（とイ）まし
（玉葉）あひにあひて物思ふ春（本ノマヽ）はかひもなし花も霞もめにしたゝねは
つらしともそれはひては思はぬに猶身にしむは葛のうら風
とへと思ふ人はくちなし色にしてなにゝこふ覽八重の山吹
狩人のしたにみをのみ焦せともくゆる心のつきすもある哉
うき事もこひしきとも秋の夜の月にはみゆる心ちこそすれ
　人きてかへりぬる十月はかりに
我宿の紅葉のにしきいかにして心やすくはたつにかある覽
（續千）うらむへきかたゝに今はなきものをいかて涙の身に殘り劔
　たむこにありけるほとかみのほりてくたらさりけれは十二月十より雪いみしうふるに
待人はゆきとまりつゝ味氣なく年のみこゆるよさのおほ山
　人のかへりことに
としをへて物思ふをはならひにき花に別れぬ春しなけれは
　たんこに
（玉葉）ふれはうしへしとても又如何せん雨の下より外のなけれは
　おなし人に
うきにおひて人もてふれぬ菖蒲草たゝ徒にねのみなかれて
　山とかいへ出たるにはよめもろともにそありけるお

とこのおり〳〵をこせたる文ともをとりもたりける
ほかにゐたりけるほとその文のうらにふみかきてか
のはゝのをこせたりけれは
から衣つまとは君になりはてむ結をとめよあこかたまつさ
山里にて人に
よをかきる山里にても君をまつ心はかりそかはらさりける
はゝきのにうたうのめに
いつかまた我身をやらん山里もいとゝ物社かなしかりけれ
夕くれにちいさきうりを齋院より給はせたるにかき
つけてまいらす
夕霧はたつを見ましや瓜生山こまほしかりしわたりならては
なかたかひたりしあまのけさにむすひつけゝる
味氣なし我ときるへきけさのをの結ほゝれたるとけはとけ南
かしはのよりなにとかやさかみへやるとて
いをたにもやすくねさせて沖風の吹落したるかしはのゝ露
けむもちゆきつねか
うちはふく涙の上をはきぬなるにす隠れたるか鳥の見えぬは
人のをきたりけるかゝみのはこをかへしやるとて
後拾影たにもとまらさりけり増鏡はこの限りはいふかひもなし
現にて夢はかりなるあふ事をうつゝ計りの夢になさはや
雨もよにかよふ心したえせねは我衣手のかはくまそなき
そら物は雨にぬれ〳〵我袖の風にみなからかはかぬやなそ
限りなき物思ふ身とそ思ひしをけさはたとへん方のなき哉
たとふへき方はけふ社なかりけれ昨日をたにも暮してしかは
暮してもあくるをたになかりせはなに思はまし何思はまし
迚もかく角てもよそに歎く身のはてはいかゝはな覽とす覽

いとゝしく覺束なきに年月のゆきかへるかとみゆるけふ哉
花も皆夜ふくる風に散ぬらん何をかあすのなくさめにせん
ひをたにも幾かに成ぬと思ひしをけふた月に成にける哉
三月三日
しつのめの垣ねの桃の花もみなすく人けふはありと社きけ
郭公夢に一こゑきゝつれとうつゝならひにいまたねられす
折て見し人の匂ひのおもほえてつねよりおしきはるの花哉
花見てもひをは暮しつ青柳の糸くるしきはよるにそ有ける
おりよくは見にこぬまても我宿の櫻咲ぬとつけまし物を
うへよりは萩の下葉の下露のしほれておつる秋にも有かな
かくれなき物にそありける夏衣うすき心はきてもみね共
忘れぬとつみうる心ちする物をけふのみそきに拂へ捨てん
花薄まねくたよりのかひもなし心しりなる人し見えねは
我をこそかたらはさらめ足引の山ほとゝきすなきゝかせ南
かけにとてかくるゝ人はなかり皃みをうの花は盛なれとも
菖蒲草さ月ならねと我袖にひとしれぬねはいつかたえせん
めの前にかはりぬめりと見る物を又忘れすやありしよのを
ねられねは月を見るたにある物を身にもしみつる夜はの風哉
小夜中に月を見つゝもたか里にゆきとまりても詠らんとは
おちつもるこのはの上に降雪のわれも獨は詠めさらまし
何事も心にかなふ世なりせはひとり盛の花を見ましや
いはゝしや戀のみわたる心にはたえまあり共おほえさり皃
君かすむ渡りと思へははつせ河おりたちぬへき心ち社すれ
にうたう殿のこしきふの内侍子うみたるにの給はせ
たる
よめのこのこねすみいかゝ成ぬらんあな美しと思ほゆる哉

御　返

君にかくよめの事たにしらるれはこのこねすみの罪輕き哉

心にもあらてよそになろ男のもとに雨のいといたく
降日なみたの雨のとくひたるに女もこと人いてきに
けれは

をのかしゝふれ共雨の下なれは袖はかり社わかすぬれけれ

てはこをきたるやるとておなし人に

あふとを今は賴まぬ中なれとまた社あけねしまのこかはこ

人かたらひたる男のもとよりわするなとのみいひを
こすれは

玉葉 いさやまたかはるもしらす今社は人の心を見てもならはめ

おなし人つねにわすれぬよしをのみいひをこすれは

哀とも思ひやせましよそになる心のあらぬこゝろなりせは

月あかき夜人きて物かたりなとしてかへりてつとめ
てさてやあかしたまへりしとあれは

とこの上の枕もしらすあかしてき出にし月の影をなかめて

かたみに忘れしなとなと〔二字衍歟〕いひて久しう音せ
ぬに

さらはいかに我も思ひやたえぬへき同し心に契りてきとて

ことこゝろつきたる男さすかにとき〳〵きてみるに

見る每になと歎かする君な覽をのかかたみにをのれ成つゝ

たのめぬにとたのむる人のをとせぬに

をはりやかつ忘られぬ我にてもあるかなきかに思ふ身なれは

たのめて〔を字脫歟〕見えぬ人につとめて

休らひに槇の戸こそさゝさらめいかてあけつる冬の夜な覽

もろともにとのみちきる人のゐ中へ行に

をくれしと我をもすてゝ出たつは淚にのみやさは契りけむ

といひやりたるかへりことにをくるゝかつらきとの
みいひたる我もさすかにいくへきにもあらねは

流ゆく泪のかはにうき物はをくらす人とをくれぬる身と

ゆくみちよりとゝまるたましひをかたみにはせよと
いひたるに

わか玉は旅の空にもまとひなんとむへき袖の中はくちにき

この人のうへを思ふさまにていぬとかたるを聞て

契りしはおもふさまにて思ふとてあらましとをいひし成覽

さみたれは物おもふ事そまさりける詠のうちに詠くれつゝ

男のほかにある夜人に物いふさまにみゆれは

ねぬる夜の夢騷かしく見えつるはあふに命をかへやしつ覽

久しう逢ぬ人をおもふとてみちもおほえすなといふ
に

今よりはふるのゝみちに草しけみ忘れ行にはさそまとふ覽

雨のいたうふる日淚の雨のなといひたるに

後拾 見し人に忘られてふる袖に社身をしる雨の〔は集〕いつもをやまね

おなしおとこかくてはいきたるこゝちもせすといひ
たるに

ありとても今は賴ぬ中なれとひたすらなくはなきなとそ思

かならすこよひといひたるおとこにえあふましかり
けれは

むは玉の今宵計りを思ひつゝまとろまさらは夢にをみえん

八月はかりに人のきてあふきをおとしてけるをみて
竹のはに露いとおほくおきたるかたかきてあるほと
へてやるとて

千載しのゝめにをきて別れし人よりは久しくとまる竹の葉の露
ほかにかよふおとこいかにおもふにかありけんいま
たゝひと月の程わするなといひたるに
其事といはぬさきよりいつとても憂を忘るゝ時しなけれは
世のいとさはかしきころ
儚さにつけてそ歎く夢のよを見はてす成し人によそへて
物をのみ思ひし程にはかなくてあさちかすゑのよと成に晃
八月十よ日の夜ふなかはかりに
まとろめは吹驚かす風の音にいとゝ夜寒になるをしそ思ふ
十月はかりに物にまてゝ夜とまりたるにたきの音風
のをとのあはれにきこゆるにかたはらなるつほねに
はやうきゝし人のをとすれはいとしのひてさしをか
する
うき世にはあらしの風をしるへにてみし山水に袖を濡しつ
人のもとにいくなりときくおとこのきくの花につけ
てかはらぬよしいひたるに
かはらしといかゝたのまむ今はなをうす紫の色ときゝ〱
うらみて久しうをとせぬ人のもとにことはりをたひ
〱いへとかへりこともせねは
此たひはをにいてゝ恨みてむあはすは何のみをかすつへき
しもいとしろきつとめて人に
打拂ふともねならねはをしとりの上毛の霜もけさはさなから
ゐ中なる人のもとよりひてりしてくにのみなやけた
るをわひたるに
小山田のなとひたふるに思ふらむ露のおくてはありも社すれ
かたらふ人ありときくところにおとこのとまりにけ
れはつきのあか月いひやる
めに近き袖にもらすは人のよの月ともよそにみるへき物を
いとちかきところにかたらふ人のわたりたるにもの
いみにてえあはす
隔てたる垣の間わたる月ならは語らはすとも影は見てまし
久しうとはぬ人からうしてをとして又もとはねは
はきのいとおもしろく咲たるところに雨ふる日まら
うとのきて物かたりして歸に
後拾戀三中〱にうかりし儘にやみにせは忘るゝ程に成もしなまし
雨もよに急くへしやは秋萩の花見るとてはわさともそくる
いかなる人にかありけんわつらふときゝていひやる
さま〱に心をきたる露なれはたゝに草葉の上とやはきく
時〱くる人のもとよりくれゆくはかりといひたれ
は
後拾戀二詠めつゝをあり顔に暮してもかならす夢の(に集)見えは社あらめ
物へいく人にあはんとおもふにえあはてあふきにか
きつけてやる
是に耳よそふるたひは扇てふなにはいまれぬ物にそ有ける
ひさしうありてとひたる人のかへりことにいしをつ
ゝみてたゝこれを見給へとて
あふとをありし身なからある物と思ひ出てや人のとふらむ
ものへいく人に
新千別ある程はうきを見つゝも慰めつかけ離れなはいかに忍はん
人のもとよりおもはむかたにといひたれは
忘らるゝ時のまもなくうしと思ふ身を社人の形見にはせめ

いとおほつかなきまてをとせぬ人に十二月つこもりの日

歎かては何れのひをか過ししとけふたにとひて人は知かし

　さくらの花のまちとをなりと云ひて

くるゝまもしらぬ命にかへつゝもをそく櫻の花をこそ見め

　こしちのかたなる人に

いそきしもこしちのなこの月はしもあやなく我や歎き渡覧

　つらけれとわすれしとおもふ人に

うしとても人を忘るゝものならは己か心にあらぬと思はん

　時々うらめしき人のいまはをとせぬに

新拾 其かみはいかにいひて（しり集）か恨み劔うきこそなかき心なりけれ

たひ〳〵やるかへりことせぬ人に

なみかへる跡も見えねは水の上にかすかきはつる心ち社すれ

　十月はかりとしころ久しうをとせぬ人に

をともせて秋の過行年毎にうきくもかともしらすかほなる

　夜ことに人のこむといひてこねはつとめて

後拾 今宵さへあらはかく社おもほえめけふくれぬまの命とも哉

　なからのはしを見て

あり覺と橋はみれ共かひそなき船なからにて渡ると思へは

　水のほとりに千とりのたゝひとつたてるを見て

友をなみ河せにのみそたちゐける百千鳥とは誰かいひけん

　あしおほくつみあけたる船にいきあひて

声わくる程にきに覺たつ浪の音にきゝてしこやなにはかた

　しほみちぬとてふね出す所

をのれたゝみちくる汐もありけるを思人とそ我はふなつる

　くるまかはにて

くるまかはいふなやなとて流れけん恐しけにも見えぬ渡を

　あみひかせて見るにあみひく人とものいとくるしけなれは

あみた佛といふにもいほは救れぬこや助くとはたとひ成覽

　風にさはりて船とゝめたる所にかいひろひてもてきたるを見て

見る人も渚にをれはかひなしと思はぬあまのしわさ成へし

　そこに風にさはりてひころありけるに

網のめに風も止らぬ浦にきてあまならなくになかゐつる哉

　かりやして濱つらにふしてきけは都鳥鳴

後拾 事とはゝありのまに〳〵宮古鳥都のことをわれにきかせよ

　いもねられぬまゝにさくれはきぬのぬれたるもあはれ也

淺茅生にやとる露のみをきゐつゝ虫のねられぬ草枕かな

　さくら非こゆる日

こえくれはたゝちなり覺さくらゐとなのみそ高き所成ける

　月おもしろきに京をおもひやりて

新後拾 見るらむとおもひをこせて古郷のこよひの月をたれ詠らん

　又

詞花 宮古にて詠し月を見るときはたひの空ともおほえさりけり

　しのひたる人のいとふなるきぬをきてかしかましとてぬきをきたるやるとて

詞花 をとせぬは苦しき物を身にちかくなるとていとふ人も有覺

　いとかくつらきをもしらてなむたのむといふ人に

心をはならはし物そあるよりはいさつらからん思しるやと

われも人もつゝむことある中におとこかく心にもか
なはぬ事といひけるにかならすつねにうらみらるゝ
かむつかしけれは
（詞花）をのか身のをのか心にかなはぬをおもはゝ物を思ひしり南（集は）
いつもへいく人に
めもはるにかく村雲は隔つともをしはかりには思をこせよ
夕くれにとをきさくらを見やりて
匂ふらん色も見えねはさくら花心あてにもなかめやるかな
秋の夜の月いといたうくもりたるに
詠れとめちにもきりのたちぬれは心やりなる月をたに見す
とをくきぬうつをときこゆれは
いたつらにあかす月かなうらやましせこか衣を人はうつ也
久しうとはぬをいかにおもふらむといふ人に
岩の上のたねにまかせてまつ程はいかに久しき物とかは知
物おもふころあるやうある人に
身のうさをしるへき限りしりぬるを猶歎かるゝ事やなにを
こゝろうきをみる〳〵たのむはわか心にもあらぬに
やといふおとこに
我もわれ心もしらぬ物なれはいかゝつゐにはなると社見め
よのはかなきころ夢はかり人にあひて
ある程にとひ見てし哉たえにしはいか計うきよとかありしと
あるやうある人にすきにつけて
見てはさはたつねけりやと心みんしるしにたてる杉の下門
つねなきこゝろ見はてむとてなむこのよにかくてあ
るといふ人に
ありぬへき人もありける世間に我こそ夢とみねはたのまね

わりなくうらむる人に
（後拾）つの國のこやとも人をいふへきにひま社（なけれ）蘆のやへふき
ゐ中なる人にほとゝきすにむすひていとなかきしや
うふのねをくはせて
そこまてはきこえしもせし郭公袂にかゝるねをみてをしれ
人に
たくひなき浮身なり晃思しる人よにあらはとひもしてまし
かたらはんといふ人に
心みにいさかたらはん世間のこれになくさむ事やあるとも
四月はかりにたちはなのさきたるを
橘の花さくさとにすまへともむかしをきとふ人のなきかな
おなしころしやうふのかのすゝろにすれは
郭公しのひのころゐもきこえぬにまたきえこゆるあやめ草哉
物おもふころうのはなを見て
時鳥むへもなさけり卯花のをりはものこそあはれ成けり
とをき所へいぬる人をおもひやりて月に
あまの原いつも詠る月なれとこよひは空にやとりぬるかな
人しれすおもふ事あるをはらからにかくなんいふと
て
岩躑躅いはねはうとしかけていへは物思ひ増る物を社思へ
れいのものへいにし人をおもひ出て
いかならむせこかたひねの草枕いとかく露は置ゐしもせし
ものおもひつゝくるにかなしけれは（乙集）（にイ）
（續古）何事も心にしめてしのふるをいかて涙のまつしりにけむ（ぬらイ）
世のいみしうはかなきころ
聞えしもきこえす見しも見えぬよに哀いつ迄あらんとす覽

三月つこもりに
中々にさきてちりぬる花ならはひをへて物は思はさらまし
草のいとあをやかなるをとをくいにしへ人を思
淺茅原みるにつけてそ思ひやるいかなる里にすみれ摘らむ
たれわけんたれかてなれぬこまな覽やゝ茂り行庭のむら草
そのほとのよはのね覺の時鳥まつ一聲をほのかにも哉
かりのこを人のをこせたるに
いくつゝついくつ重ねて賴まゝしかりのこのよの人の心を
しのひて人にものいふ戸ぐちにて
しるけれは枕たにせてぬる物をまきのとくちやいはんとす覽
たちはなを見てむかしの人をおもひ出て
かほる香はそなからそれにあらぬかなはな橘のみなりけり（本ノマヽ）
九月つこもり久しうをとせぬ人に
秋深きあはれをしらはしらさらむ人も心そたつねきてみん
かたらふ人ひさしうをとせぬに
よの人はうらみもやせむ我はたゝかゝるしもこそ哀成けれ
たひにたつ人のもとよりたきのはむといひし物のありしたまへといひたれとうせにけれは
徒にあれは我身もあるものをはなれむまとて人やとりけん
おかしとおもひしおとこのけさうせしがをとせぬに
ありしふみにかきつけて
跡をみてしのふもあやし夢にても何事のまた有しともなく
雪のふるひいかゝなと人のいひたれは
かきくもる中空にのみ降雪はひとめも草もかれ〳〵にして
わさとうらむへき事もなき人の久しうをとせぬに
あちきなく思ひそ渡る恨へきこともなき人のとはぬを

しのひてかたらひたる人のたゝあらはれにあらはるゝをかゝるをはいかゝ思と人のいひたるに八月はかりに
風をいたみゝしたはのうへに成しより恨みて物を思ふ秋萩
物へまうつときゝてもし其所へかといひたるにされは
いかはかり心深くもあらぬ身もいけれは谷の底へこそゆけ
おやはらからなとおなし所にはかにほか〳〵になりて後たうときことするにいひやる
其中にありしにもあらすなれるみをしらはや何の罪の報と
物思ふころおもふをある人に
新勅 更にまた物をそ思ふさなくても歎かぬ時のある身ともなし かな集
つれ〳〵と夕くれになかめて
詞花 夕暮に物おもふ事はまさるかと我ならさらむ人にとはゝや
雪いといたう降日はゝかる事ありてなんといひたるに
忘れ草つゝむ〳〵とことつけてしのふる雪の音もせしとや
いなりにまうてたるにみをくりつといひたる人に
あふ〳〵も尋ねてきたる人ならはよそに見過て歸らましゃは
ひころほかにてはらからのもとにきたるにふともえあはてことかたにゐたるに
よそなるを何歎きけんあふをのある所とてあはゝ社あらめ
人の夜ふけてきたりけるをきゝつけてねたりけるなとつとめていひたるに 往集
後拾 ふしにけりさしも思はてふえ竹の音をそせまし夜更たり共
つねにわかうへいふときく人のあふきのいとわろき

をもちたるをとりてかきつく
大方はねたさもねたし共人にあふきてふなをいひやたてまし
久しうをとせぬ人のもとよりほとゝきすは聞たりや
こゝにはふたゝひみたひなむきゝたるといひたるに
一こゑもわれこそきかね郭公ことかたらはて人のへぬれは
正月一日はなを人のをこせたれは
新勅 春やくる花や咲ともしらさりきたにのそこなる埋木なれは
草々に生とはきけとなきなをはいつらけふたに人は摘やは
おなしころせうとにせむといひたる人の久しうをと
もせぬに
いつのまにいくへ霞の隔つれは妹背の山の方は見えぬそ

和泉式部集　第五

いかにいひたる人にかありけむ
素盞嗚の尊を祈る共なきにいとゝしく久かるへき床の上哉
おなしところなる人のとかたにをきてからなてしこ
を山とならぬなむあるとてをこせたるに
かひなきは同しかきほにおふれ共よそふるからの撫子の花
五月五日くすたまをこせたる人に
ひき出たるほとを思へは菖蒲草つくる袂のせはしくも有哉
またあるやうある人に奉るとて
心ねの程を見するそあやめ草くさのゆかりにひきかけね共
また人に
續古 身のうきにひける菖蒲の味氣なく人の袖迄ねをやかくへき
しのひくる人のつとめて人のあらはれぬる事といふ
におなし五日
引は社のきのつまなる菖蒲草たかよとのにかねを止むらむ
おなしあさかほのはなを人のもとより
きりのまに見し朝かほの花を社けふの菖蒲はいとゝ分れぬ
そのよはやうみたる人〳〵きあひてあはれなるもの
かたりなとするを人のもとよりいかにあやめのねに
よそふらんといひたるに
あやめ草そのねならねと時鳥なきこそしつれもとの人とて
心うしと思人のもとより梅をゝこせたれは
むめつかは井關の水ももる中と成にける身をまつそ恨むる
いくところなとある人雨のふるひつれ〳〵と物かた

りなとして

見るまゝに思ふや軒の玉水ももらさぬ中とたれかしるらん

つのくにといふ所にすゝきをうへをきて京にきたる

にかのくにょりおひにたりといひたるかへりことに

植をきしわれやは見へき花薄あしのほにたにいたさすも哉

もろともにゐ中へなといひしおとこさりてと女をゐ

ていくときゝて

中〳〵にをのれふなつるひしも社昨日の淵をさもと知ぬれ

いくかさねといひたる人に

續後撰
とへと思ふ心そたえぬ忘るゝをかつみくまのゝ浦のはまゆふ

うたこひし人のなくなりにけるをとかうして又のひ

いかゝととひたるに

新勅撰
思やる心はたちもをくれしをたゝ下みち（ひとすち集）のけふりとやみじ

月いとあかき夜女のもとより男のもとにうたよみて

をこせたりけれはいかむとていてたつほとにあめふ

りけれはつとめてやるに

こてふかと思ひておもひたちしまにさし曇にし月の通ひし

こゝちあしきころ人に

後拾
あらさらんこのよの外のおもひてに今一たひのあふをも哉

七月七日人のもとに

棚機にをとる物かはものをのみ思ひそ渡るかさゝきの橋

ものへいくとて人に（つけイ）

何方へ行とはかりはいひてましとふへき人の有身と思はゝ

又人に

詞花
我のみやおもひをこせんあちきなく人は行衛もしらぬ物故

おやなといふことありけれはしのひてはらからとも

なとむかしありしやうにて物かたりするあはれにお

ほゆれは

いにしへのありしなからにある人も心のなしに物そ悲しき

おとこのもとよりきえぬ水のあはかなといひたるに

吉野河をのかみのあはにあらぬ共岩うつ波はいかゝ砕くる

また人に

なかむれは思ひしらるゝ世間（にイ）のうきもあはれもしる人そ知

人のつとめてのかへりことに

おきてゆく人の心も白露のいまゝてきえぬ事をこそおもへ

物にまてゝこもりたるつほねのかたはらなる人のか

たらはんなといふにあすはいてなんとてかくいふ

尋すはまつにもたえしおなしくはけふくれぬまの命共かな

ゐにはなゝみといふところをかきたるに

よさの海の纓のあまたのまてかたにおりやとり劒浪の花波

はしたてにむまにのりたる人あるところに

こまならん人はなれたり行衛なく船なかしたるあまの橋立

つくしなりける女京なりけるおとこにかならすあは

んとたのめてこと人かたらひたりときゝておとこの

いひやる

頼むとてたのみかたきは此よかないかきの松に涙はこゆ共

八月つこもり人のもとにはきにつけて

後拾
かきりあらむ中ははかなく成ぬ共露けき萩の上をたにとへ

人のかへりことに

いつとなくさのみ露けき花の上を何かは風にしらせしもせん

ほうりんにこもりたるにかたはらなるつほねよりく

たものをあふきに入れてをこせたるに
新拾 いか計つとむるともなき物をこはたか爲にひろふこのみそ
おもはすにこゝろうき事ありけれはなむこゝろもゆ
かぬとおやたつ人のいひたるに
慰めにみつるにこすはつきもせす憂身を耳やみてやみぬへし
山よりきたる人のよそなからはえなんとをるましき
といひたるに
秋霧はたちかくすともいもかすむならの宮古の道は忘れし
人にたのめておもひにあはれなれはいふ
賴めても儚くのみそおもほゆるいつをいつ共しらぬ命を
人にたのめて思にあはれなれは宵に物にいきてあか
月かたにかへりて物かたりなとしてとをる人に
誰となく月はみつるをけさは先思ひ起せよこゝもかしこも
つらき事なきにしもあらぬ人のあちきなくうらみた
るに
我爲に人のうきをつらからはなに事にかはつけてしのはん
なま心うしとおもふ人おほかたにきたるに
うきをしる心なりせは世中にあり兒とのみ見てやみなまし
ちきりしをなむたのむといひたるに
人をこそ思ひもいてめ身のうさにつけて計は忘れやはする
九月はかりに人をそくあくとてかへりぬるに
秋の夜も明てやはやむきときなはまてかしまきのと計をたに
まいりたりしかと人のおはすときゝしかは返りにし
といひたる人に
厭へ共限ありけるみにしあれは有にもあらてあるを有とや
物思ふころやまてらにてかへるとて

後拾 なにしかは又はきてみんいとゝしく物思ひまさる秋山寺に
いみしうものおもはむとちきりたりし人のを人かた
らひたりといひつけてをとせぬに
いひしをそ賴むやさらは人をに恨はとふもありぬへけれと
たゝよひのまに人のきてとくかへりぬるつとめて
後拾 休らはてたつにたちうき槇のとをさしも思はぬ人も有けん
雪のいといたうふりてきえかたにはしめて人の思ふ
事のつもりぬる事なといひたるに
いつしかとたとふる雪も消ぬるにうはの空にも思ほゆる哉
かみまつる日人〲きてかしはのあるをとりて歌か
きてとせむれは
神山のまさきの葛くる人そまつやひらての數はかくなる
はかなうてたえにしおとこのもとよりあはれなるこ
といひたるかへりことに
玉葉 賴むへき方もなけれと同しよに有はあるそと思ひてそふる
たゝにある男のとかくあらんには必きてみんといひ
たるかそのほとになるにをそくきけれは
いたつらに物をそ思ふまつほとの命もしらすけふや〲と
おなしころとふへしとおもふにをとせぬに
玉葉 ゆくすゑと契りしとはたかふとも此ころはかりとふ人も哉
とかくあらんにはとはむといひし人のをとつれてや
みにしかはほとへてかくといひやる
契りしはあすかのふちの水なれやいつら此世に問人もなし
おなし人つねにこなたにもひさしう見えねはかくい
ふ

我故に人の中さへたゆめれとそのむくひさへおそろしき哉
二月つこもりかたに人ゝきて物かたりなとして花の
ちりにけるさう〳〵しなといふに
いたつらにかへらん事を思哉花のおりにそつくへかりける
朧けにおしみし花の散にける枝にさへこそめはとまりけれ
これを聞て人さくらはいまさきなんちりにける花を
はなにかおもふといひけるに
まさゝまに櫻もさかはみにはみん心に梅のかをはしのひて
ものへいく人にあふきたゝひとつとらすとて
二つなき心はみには見えしとてしるし計にそふるあふきそ
また
立歸り都のかたへいそかすはいつあふをのあらんとすらむ
おもへともおもはすとのみうらむる人に
まこも草まをにわれはおもへともさも淺ましきよとの澤水
雨のいたうふるひおなしこゝろになかむといひたる
人に
人にたにとふそあやしきいか計なかめつゝくる我と社みれ
たちなから人のものなといひてかへりぬるつとめて
詞花 涙さへ出にしかたを詠つゝこゝろにもあらぬ月をみしかな
かへされてなまねたうおもひけむよへはくやしかり
けんかしなといひたる人に
歸るへきあとたに見えすしけゝれは入ぬる人は惑ふ山路を
ものへいく人にまくらはことらすとて
忘らるなうら島のこか玉くしけあけて恨みんかひはなく共
さしくしのはこにかきて
さま〳〵に神をそ祈るさしくしのさしはなるゝか心細さに

三月つこもりかたにちりはてがたなるえたにつけて
人に
散にしはみにもやくると櫻花風にもあてゝおしみしものを
なま心うかりける人のもとへゆくに
あるほとのうきを見るたに憂物をつらき心はとゝめてや行
すみよしにまてたりける人いとほとへていかゝなと
いひたるに
忘れ草摘ほとゝ社思ひしかおほつかなくてなからへつれは
つのくになる人たひ〳〵ふみやりしかは見ぬかとい
ひたるに
なには人なにはの事をかけりけんたゝ此たひそみつの濱松
四月はかり人きて夜更て
夏の夜をあかしもはてゝ行月をみにこむとたに思ひ起せよ
なといてゝゆくとてまつとをゝしたつれは女
かく計たへかたくうきまきのとをさして行方ありけなる哉
梅の花ちりてくちおしかりし人のまた四月廿餘かの
程にきたるに
今日も又なにかはきつるひとへたに散も殘らす八重の山吹
おりからしたる枝はをかすやといひたれは
さてのみはやましと思へ枝をさへおりからしてそゐての山吹
かたらふ人おほかりなといはれけるをんなのこうみ
たりけるたれかおやといひたりけれはほとへていか
ゝさためたると人のいひけれは
此世にはいかゝ定めんをのつから音をとはん人にとへかし
こむとたのめて見えすなりにけるつとめて
風雅 くゐなたに敲く音せは槇のとを心やりにもあけて見てまし

かたらふ友たち二三人きあひたりときくにいひやる
語らはゝをとらし物をなにとをいふ共いふといひかはす覽
くらき夜ほとゝきす待こゝろ
くらき夜は見れとも見えす郭公いつくはかりに鳴てきぬ覽
たちはなのもとにて
こゝにして待心みんほとゝきす花たち花のかをにくしとや
ほとゝきすの聲を山へにたつねにいくを聞て
時鳥きゝつときかはその山のふもとに我はいへゐしつへし
物いみにてこもり居たる人のもとよりことつてやら
んほとゝきすのこゑきけといひたるに
心してきくへかり鳧ほとゝきすその一聲にかよひけりやと
かならすこむとたのめしおとこにそのひ
暮ぬまの命ともかなねぬる夜は忘れに鳧とあすこそはいへ
けさうする人のきて物なといひたる程にこと人のき
ぬれはこれかれたち分るゝほとにあふきをかたみに
とゝりかへてけりつとめてはしめの人にいひやる
語らはん人もなかりつとりかふと思ひしはゝやあふき成鳧
おとこにこれはなとかすてつるとりにたまへとりかへ
なくはあしかりなんとてをこせたる
人もなく鳥もなからむしまにては此かはほりも君も尋ねん
あめいといたうふりうらめしきことやありけんみを
しるなといひたりけれは
うかる身の雨の下にもふれはなを人は身をさへ知せてし哉
五月はかりきよみつにこもりてかたはらのつほねを
かたらひていへとて御前にゐたるにいひおこせたる
あめうちふるほとなり
やかてこそかきくもりぬれ郭公なき別れつるしのゝめの空
おとこおもひしりなむとおもひしにつれなきことな
といひたれは
哀をはしらぬならねといかゝせむ只思へかしこりすまにやは
月いとあかき夜人のもとよりその人ともわきてまた
しかしといひたるに
宵とに君をこそまてこと人は
人のふみのあるを見て六月はかり
にはのまゝおふる草葉を分きたる人も見えぬに跡社有けれ
いまはほかにときく人のもとにゆふくれにいひやる
玉葉 夕くれは人のうへさへなけかれぬ待れし頃に思ひあはせて
七月一日人に
今宵より誰を待ましいつしかとおきのはかせは吹むとす覽
秋花とものさきたるにやますけのさきたるをみて
をときけは人の物思ひやますけの心みかほにさける花かな
人のもとにその夜
たゝにしもほしあひの空を詠しな天の河風さむく吹也
いとつれ〳〵なる夕くれにはしにふしてまへなるせ
んさい共を唯に見るよりはとて物にかきつけたれは
いとあやしうこそみゆれさはれ人やはみるちゐさき
まつに
のち〳〵もまつはかり社しのはめと恨むるよりも頼しき哉
たけ
ありし人あらはきなまし風吹はうへうちそよく竹のよとに
かしは
柏木はやとにほりうへむした草をかりに人くるなのみ也鳧

はぎ

今さかは人もきてみむ秋はぎの下葉の色はわれのみそみる

　やまふきあやしう咲たるところなり

かはつなく井手にならへる山吹はむしの聲する秋も咲けり

　まゆみいろつきたり

きくよりもまたきまゆみの色つくは秋に入日に露や置らん

　あうすち

こつたひしむめをは置てこれたにも鶯のきとひとしいふ覽

　のきのくものい

思はしを荒たる宿にかき暮すくものいかきに風したまらは

　七月七日たなはたまちとをにおもふらんと人のいひたるに

ひこほしは思ひもす覽中〱に秋は今宵のなからましかは

　この頃ものいふこゑを立きゝて人の聞えんなといひたるに

荻の上に露をきそへし鴈金のうはの空にもきゝてけるかな

　なき事をひてなけくと聞てわれをあまかつにせよといひたるに

あまかつにつくともつきし憂事はしなとの風そ吹も拂はむ

　おさなきちこの病みけるをあはれとおもふへき人の聞ていかゝといひたる

いかはかりおもひをくとも見えさりし露に色へる撫子の花

　いまよりはちよそへんといひたるに

ちよふへきこまつときけは今よりは只朝夕のくさと賴まん

　ぬれ衣をのみきるをいまはゝらへすてゝむと人にいひてのちいかなるをかありけんなをこりすまのわたりなりけりといひたるに

かさねつゝ人のきすれは濡衣をいとをしとたに思ひ起せよ

　このころ袖の露けきなといひたる人に

詞花 みな集 秋は猶思ふをなき荻の葉もすへたはむまて露は置けり

　人にしたくつれたるといひたるにそなたなん疑かはしきといひたるに

そなたより涙かく共今はよに我かたききしの松はこさせし

　うしろめたな心あるをわかこゝろそへてみてしかなといひたるに

引かへて心のうちはなりぬとも心みならはこゝろ見てまし

　はりまのひしりのもとに

舟よせん岸のしるへもしらすしてえも漕よらぬ播磨かた哉

　しくれいたうふる日はやう見し人に

ひまもなくしくれ心ちはふりかたくおほゆる物は昔成けり

　こその春いし山にまうてたりしに山中にとまりて休みなとせしをまたのとしの秋まへを渡るにさそかしと思ふにあはれにてとはすれは人なしすゝきそなさけなけにすくみてたてるにかきてむすひつく

すきゆけとまねくおはなもなかり覺哀なりしは花のおり哉

　みちのくにのかみにてたつをきゝて

詞花 もろ友にたゝまし物をみちのくの衣の關をよそにきくかな

　むめさくらいつれおもしろしと人のいふに

櫻より色はさこそはふかゝらめかさへとなりくれなゐの梅

　さりにけるおとこのとをきところへゆくをいかゝおもふといひたれは

千載 別れても同し宮古にありしかはいと此たひの心ちやはせし

雨のいといたうふるころ

新勅 いかにせん雨の下社すみうけれふれは袖のみまなく濡つつ

權中納言の屛風のうたさくらさきたるいへにまらう
とおほかり

植しうへはかゝれとそかし櫻花みにとて社は人のきつらめ

まつにふちかゝりたる所人ゝおほくよりて見る

とはふちちらて千年をすくさ南松の常盤にきつゝみるへく

人の家にきんひきふえふきてあそひしたり

笛のねは紅葉をふくにあらねとも響にえたもうこくつき哉

いとはかなきところにて人に物いひて

現こそはかなかりけれ夢をたにいてこそ人は見ると云なれ

花山院哥合七月七日

あまの原今宵なかめぬ人そなきこひの心をしるもしらぬも

人のかへりとに

新勅 よの常のことも更におもほえすはしめて物を思ふあしたは（みなれ集）

ゆふくれにきこえさする

千載 またましもかはかり社はあらましか思もかけぬけふの夕暮（まつとても）（あき集）

とりのこゑにはかられていそき出てゝにくかりつれ
はころしつとてはねにふみをつけてたまへれは

いかゝとは我社思へ朝な／＼なをきかせつる鳥をころせは

月あかき夜あるやうあり

ひと夜みし月そと思へと詠れは心はゆかすめは空にして

人のかへりとに

君を社末のまつとは思ひしかひとしなみには誰かこゆへき

人　に

あふ事はとまれかくまれ歎かしを恨みたえせぬ中と也せは

月あかき夜人に

心見に雨も降なんかとすきて空行月のかけやとまると

れいのかへりとに

袖のうらにたゝわかやくと汐たれて舟流したる蜑と社なれ

七月七日

詠らん空をたにみす棚機にあまるはかりの我身と思へは

人　に

ねさめねはきかぬなる覽おき風に吹らん物を秋の夜ことに

徒然と秋はひころのふる儘に思ひしくれぬあやしかりしも

いてゝきこえさす

山をいてゝくらきみちにをたつねこし今一度の逢事により

風ふき物あはれなる夕くれに

秋風はけしき吹たに悲しきにかき曇る日はいふかたそなき

うと／＼しううち曇る物から雨のけしきはかりふる
はせんかたなくて

秋のうちに朽はてぬへしことはりの時雨に袖を誰にからまし

消ぬへき露の我身はさのゝみそあゆく草はに悲しかりける

露まとろまてなけきあかすに雁の聲をきゝて

まとろまてあはれいくかに成ぬ覽只雁かねを聞わさにして

九月はかりあり明に

續後撰 我ならぬ人もさそ見ん長月の有明の月にしかし哀は

續千 よそにてもおなし心に有明の月を見るやとたれにとはまし（は集）

人こひしきに

おしまれぬ涙にかけてとまらなん心もゆかぬ秋はゆくとも

君ををきていつち行らん我たにもうき世中にしゐて社ふれ
　人のかへりとに
あさのまに今はひぬらん夢はかりぬると見えつる手枕の袖
　おなし人の返とに
道しはの露とをきゐる人により我手枕のそてもかはかす

本云
右従レ一三迄者。京極黄門定家卿以二自筆本一令二書寫一。従レ四五迄者。民部卿局以二眞筆一寫焉。卽時再三挍合畢
　右和泉式部集得一本挍合了

群書類從卷第二百七十六

和歌部百卅一　家集四十九

相摸集

いとわれはかりとのみおほゆる。あつさの袖にくちはてにける深山木を。いかにとはかり。小高き陰もやと。たのみしおりは。殘りゆかしう。花もみ　雨かせにつけても。おのつから散る言の葉をかきをきたらは。みくす。によらん流れなりとも。淺きかたにやと。せきとゝめてしを。あいなう袖に涙のかゝりける身にと思ひしられはてぬる折しも。面なきことを。今更に心もなき水莖のあとにまかせて。あらはしてんも。いとうしろめたけれと。けふや我世のとのみ物哀なる露の命にをくれんなかに。もし思ひいてん人もしあらは。人しれぬ形見ともなれかしとてなん。忍ひもはてすなりにける。昔のことをは忘れはてにけれは。いまさらのをたにもと思ふほとも。なをふるめかしき。

　寛弘(一條)の御時はかりにや天王寺の哥とて人ゝよむおりのありしに西大門

こくらくに向ふ心はへたてなき西のかとよりゆかんとそ思

　かめ井

千世過てはちすの上にのほるへきかめ井の水に影は宿さん

　ふね

うき島に港をいかてはなれけんのり通ひける舟のたよりに

　塔の君

みかきけるこかね變らぬ塔を社君かはたへの形見とはみれ

　佛しやう

はひきえてわかちし玉もつとむれはいとゝ光そかす增ける

　弓

おもはすにあたや佛と成にけん法になひきし弓にひかれて

　おかみのいし

おかみけるしるしの石のなかりせは誰か昔の跡をみせまし

　くろこま

のかふかなかひの黑駒はやめ劔法のにはにもあはぬ我身を

　いけのはちす

人しれぬ涙はつみのふかき哉いかなる池のはちすおふらん

　ある所に庚申のよ天地をかみしもにてよむとてよませし十六首春

淺みとり春めつらしくひとしほに花の色ますくれなゐの雨

つきもせぬ子日の千世を君かためまつひきつれん春の山道

ほかよりはのとけき宿の庭櫻かせの心も空によくらし

そのかたと行ゑ知るゝ春ならはせきすへてまし春日野の原

　夏

やとちかき卯花かけは波なれや思ひやらるゝ雪のしらはま
かたらはゝおしみなはてそ時鳥聞なからたにあかぬ聲をは
みしまえの玉えのまこも夏かりにしけくゆきかふ遠近の舟
瀧つせによとむ時なくみそきせん汀涼しきけふのなてしこ
闕

冬

虫のねも秋すきぬれは草村にこりゐる露のしもむすふころ
このはもる時雨計の古里は軒のいたまもあらしと思ふを
えこそねゝ冬の夜深くね覺してさえまさる哉袖のこほりの
枝さむみつもれる雪のきえせねは冬とみる哉花のときはを
　小一條院に和歌十首人の許によみしをみてしのひて
心みんと思ひしかともまねふへくもあらすこそ七月
　あまの川をわたる
ほともなくたちやかへ覽七夕のかすみの衣なみにひかれて
天川かけみにわたるたなはたの月のかゝみはくもらさる覽
　草村の露玉ににたり
玉のを〔にイ〕の亂れたるとて草のはをむすはゝ袖に露やこほれん
あさことの草はの露とみるものを忘れてをける玉かとそ思
　秋かせ
ひとへたにあつかりつるを夏衣かさねきるまて秋風そふく
　あさきり
花みるといそきおきつる我よりもまつ朝霧のたちにける哉
　をみなへし
野へことにおりこそつくせ女郎花伏見の里はむくらはふ迄
我宿のはきの下葉のけしきまて秋は色にもいてにける哉
　ゆふつくよ
あかすとてうらみしもせし夕つくよ有明までも我そ待みん
　せみのこゑ
したもみち一葉つゝちるこのしたに秋ときこゆる蟬の聲哉
　いはひ
まなつるもおりゐしかたの松原にいくその千年數をしる覽
　こひ
いかてかはあまつ空にも霞むへき心のうちにはれぬ思ひを
人のしるへきほとにもあらぬことを殘りなくふみよ
りはしめてあらはすときく人にこりすまにちかくと
りよせてよひゐのてならひにかきつくる
いかにせんくすのうら吹秋風に下葉の露のかくれなき身を
いかにせんとかりの原にゐる鳥の恐しき迄かくれなきみを
いかにせんとけてもみえぬうたゝねの夢計たに隱なきみを
いかにせん我濡衣の色ふりてあしのしたにも隱れなきみを
いかにせん沖こく舟のしるゝ〔く歟〕のみ波に浮きつゝ隱なき身を
いかにせんしほひの磯の濱千鳥ふみ行く跡も隱れなきみを
いかにせん人も渡らぬこひ川のあとに流れて隱れなきみを
いかにせんほとなき袖のこもり江に沈める戀の隱なきみを
いかにせん山田にかこふかき柴の暫のまたに隱れなきみを
　よそなからにくからすみし人のをとせさりしに
逢事のなきより豫てつらけれはさそあらましにぬるゝ袖哉
　おほえなき人のせうそこをあやしかり聞えたりしか
　は
かすめても何かいふへき朝緑うはの空なるをならなくに
　かへし
かすむるも覺束なしやあさみとり春にしられぬ埋木にして

さしもあるましき人のかならすこん待てとありしか
は
頼むろを頼むへきにはあられ共まつとはなくて猶や待まし
時鳥の聲を夜深くきゝて
きかてたゝねなまし物を時鳥なか〳〵なりや夜はの一聲
ゆふやみにとたのめたりける人にあはて六月ついた
ちにをとつれたる返事に
五月雨の闇はすきにき夕つくよほのかに出ん山のはをまて
とはかりいひやりたりしかは三日はかりありてその
人の許より
有明の心地こそすれよひ〳〵にまつにひさしき山のはの月
かへしれいならす人のもとにありけれは
しら露にまきるゝよひの月影は有明よりもめつらしき哉
はつかあまりのころ物こしにわりなきさまにてあひ
たりけるあしたに
身をつめは哀とそみし夏のよの有明の月のいりもはてぬを
かへし
明かたに出にし月も入ぬらん猶なか空の雲そみたるゝ
また
くるすのゝひむろの氷いつ迄か結ほゝれつゝとけしとす覧
かへし
草深きひむろの氷埋もれてしたにきゆともとけはてめやは
まかりあはんといひし人に。月比をまて。かならすあ
はんといはせたりけれは。またいつらこれもやすき
ぬへきなと
あふとをたのめぬにたに久方の月を詠めぬよひはなかりき
かへし
なかめつゝ月にたのむる逢事を雲ゐにてのみすきぬへき哉
七月七日人の許より
逢事をおほつかなくてすくす哉草葉の露のをきかはるまて
返　事
いとゝしく覺束なさやまさりなん霧たち渡る秋のしるしに
八日かへりかちなるおりにや
かへさすはかさまし物を七夕にあひてもあはぬのちの心を
かへし
七夕にゆかしきほとの逢事はまつもかへすも物をこそ思へ
いとひかすとて
たなはたの糸にかけてもくるしきは心の内のみたれなりけり
てならひに
たなはたも哀は空にしりぬらん物思ひまさる秋のこゝろは
なにとなく物むつかしけれは思ひむつかりたるに人
のかへりことに煙も涙もとのみいひやりたれはまた
たちかへり
さかみにはあり共いはす富士の山烟もなみもなにゝかく覽
かへし
いつことも思ひそわかぬ富士の山みを離れたる烟ならねは
又人いかなるおりにか
うつゝとも夢ともなくて明にけるけさの思ひはたれ増る覽
返　事
みぬ夢もあらぬうつゝもをしなへてくたすや袖の涙なる覽
ものへまうつるに心地れいならすおほえけれは。道
よりかへるに。諸共にまうつる人につけて。みてく

らのかぎりをたてまつるとて心のうちに
心にはさしも穢れぬみてくらをおほたゝしめの斯な咎めそ
　かへりても猶なやましけれはうちなけきて
きのふけふ歎く計の心地をはあすに我身やあはしとすらん
　夜いとふかう更けてきたる人にあはてみちのとをさ
　もいとおしけれは
なをさりにきて歸るらん人よりはをくる心やみちに惑はん
　ある所にいつこともなくてさしをかせし
いかにして忘るゝ事を習けんとはぬ人にやとひて知らまし
　宮つかへ人あまた出ゐたる所にわたりたるころ。あ
　はんといふ人を大かたにたちゐるやうにて。いさも
　やといひしに。なを〳〵忍ひて。かたへには知らせ
　てとのみいひしかは。すへきかたもなくて
みやきのゝ風の便によそへすは露のもるへきかたのなき哉
　かへし
露はよも露もゝらさしみやきのゝ萩の下葉のひまはあり共
　八月十六日はかりに。よひの月はみきや内になんさ
　ふらひしといひたる人に
かきくらしわかみぬ秋の月影も雲の上にはさやけかりけん
　野わきいみしうしたる日ゆるきの森はいかゝと人の
　とひたりしに
ありわふる身の程よりは野分する淺ちか原の露はのとけし
　同　日
はやち吹く茂みの野らの草なれや起ては亂るふせは片寄る
　虫のこゑ〳〵をきゝて
いかにして物思ふ人のすみかには秋より外の里をもとめん

　あめなか月はかりうちつゝきひまなきころ
人しれぬ思ひのみかは大空もさみたれならぬさみたれぞ降
　軒のたま水かすしらぬまて。つれ〳〵なるに。いみ
　しきわさかな。いしたのかたにも。すへきわさのあ
　るにと。おのか心〻にしつのをのいふかひなきこゑ
　にあつかふも。みゝとまりて
雨によりいしたのわせも苅ほさてくたしはてたる比の袖哉
　またこれすゝしき風
もみちはもこけのみとりにふりしけは夕の雨ぞ空に涼しき
　風のさはきにをとつれたる人の久しくなりにけれは
荒かりし風の後より絶ぬるはくもてにすかく糸にやある覽
　九月八日のよ物いひて曉にいてぬるを。そののちい
　かてとまつに。さもなくて二日はかりありて。をと
　つれたりし返事に
こゝぬかの菊をとはてや過くすへき露の置たるあした乙皃(ともイ)
　といひたりしかは
初霜にうつろひ易き花なれはきくにつけてはとはしとぞ思
　なか月のはつかあまり時雨おかしきほとの夕くれ
　に。ある所にさしおかせしとしころのま(き歟)たの方
　を去りてはなれゐたまへりときゝしかは
人しれす心からにやしくるらんふけ行秋のよはのねさめに
　いかてきゝ給けんひさしくありて彼より
年へぬるしたの心やかよひけん思ひもかけぬ人の水くき
　つかひ人とゝめて返事
もりにけんいはまかくれの水くきに淺き心をくみやみる覽
　人の許より身つからは外にてをといはせしをおもひ

いてたるにや
初霜のをきふしそまつ菊の花しめのほかにはいつか移ろふ
かへし
をきそめは霜枯ぬへき色をみてうつろひかたきしら菊の花
風いたうふく日梢のこらすありしにある所に
言のはにつけてもなとかとはさらん蓬のかとも分かぬ嵐に
返　し
やへふきのひまたにあらは蘆のやの音せぬ風はあらしとをしれ
又かへし
こやとても風に靡かはくゆりつゝあしひの煙たちやまさ覧
皇大后宮うせさせ給ひて又のよ月のいみしうあかき
をみて
あめの下雲のとかにもあらぬよにすみても見ゆる秋の月哉
大たにゝいて給しに御送りの車なとの打つゝきたり
しかいみしくあはれにて
哀君雲のよそにも大たにの烟とならんかけをやはみし
そのころかの宮の宣旨のもとに
とはゝやと思ひやるたに露けきにいかにそ君か袖は朽ぬや
返　し
涙川なかるゝみをとしらねはや袖はかりをは君かとふらん
十月になりて同宮の人のなかに誰ともなくてさしを
かせし
神無月しくるゝころもいかなれや空にすきにし秋のみや人
返したつねておこせたりし
言のはをみるにつけても神無月いとゝ時雨そふり増りける
なか月の末つかたあはんといひたりし人のみえさり
しかはつこもりかたに
たのめしをまつひかすのみすきぬれは猶秋はつる程を知哉
いかなるおりにか人のもとから
さりとてはとけぬ物から中〱によはの時雨の驚かすらん
返　し
おとろかすしくれの比か神無月うちとけてやは夢をみる覧
あやしきことといひつけて。さるへき物ともなとした
ゝめて。けさやかにほかへいにけるのちに。うつろ
ひたる菊さかりにみゆるころ。むつかしきゆかりに
て。とき〱通ふ若き人のゆへなからぬか立よりて。
いかにまた人は外になと問ひしついてに。この花を
めとゝめて。たゝには過きかたくやありけん。かく
いひし
植をきし人の心はしら菊の花よりさきにうつろひにけり
かへし
うつろひし殘りの菊もおり〱にとふ人からそ哀なりける
さかりすきてくちたるなしを。おさなき人の許にや
るとて。たゝならしとて
をきかへし露計なるなしなれと千代ありのみと人はいふ之
かへし
露にてもをきかへてける心さし猶ありのみとみるそ嬉しき
神無月はつせにまうつるに稲荷のしものみ社にてみ
てくらたてまつる
殊更にいのりかへらんいなり山けふは絶せぬすきとみる覧
あとむらといふ所にやとりて鹿なく
鹿のねに草の庵りも露けくて枕なかるゝあとむらのさと

すかたの池にて
行人のすかたの池の影みれはあさきそ底のしるしなりける
良因といふてらにてふるの社の紅葉をみる
よしみねのてらにきて社千早振ふるの社の紅葉をはみれ
ならの鳥居のまへなる木ともにかけたる物おほかり
何ならんならの社の榊にはゆふとはみえぬ物そかゝれる
まてつきて房のまへに谷ふかくもみちの多かるをい
つくそととへはなへくら山といふ
春ならて色もゆはかり焦るゝはなへくら山のたきゝなり鳬
たかふちといふ所あり
旅人はこぬかあり共たかふちの山の雉子はのとけからしな
そうことといひつけて久しくみえぬ人に
ありふれはうき世なりけりなかゝらぬ人の心を命ともかな
はやうみし人のむまにてあひたるに
綱たえてひきはなれにし陸奥のをふちの駒をよそにみる哉
かへし
共かみも忘れぬ物を蔓ふちのこまかならすもあひ見ける哉
まつりのかへさ見て又の日六はら密の説經きゝにま
うてたるにきのふ紫野にみえし車のかたはらにあり
しかはことはてゝいつとて葵をやるとて
きのふまて神に心をかけしかとけふ社法にあふひなりけれ
されはよとのみみゆれは
忘るゝを歎くもなにか憂身には兼て思ひしことはりそこは
袖のしつくも見苦しうひきかくされて
あやしくもあらはれぬへき袂哉忍ひねにのみぬらすと思に
をのれけふたきはけにこそ
かきつめて胸のあまりにくゆる哉こやいかなりし中の忍そ
わりなかりし所に菰といふ物をあたり近くひきたり
しも忘れかたきふしにや
あやめにもあらぬ眞菰を引かけし假のよとのも忘られぬ哉
したゆふもさなからほとへにけれとつゝましきこと
のみあれは思ひたつ事もなくてさすかに
諸共にいつか逢へきあふことのかたむすひなるよはの下紐
文ともあた〳〵しうちらすときゝし人をほいなしと
恨みたりしかは彼より
常盤山露ももらさぬヿのはのいろなるさまにいかてちる覧
とあらかひたりしかは
色かへぬ常盤なりせは言のはを風につけても散さましやは
大方ふみを皆かへしみむといふをさもあらて奈良ま
てなんもてかはしてみるときゝてなをこゝろつきな
うて
水茎もあとたへねとやまかせつゝたつたの川に流しはつ覧
返し心やましうこそ
流すにもせくにもあらす水茎のたえんかたみと思ふ計そ
返　事
絶ぬへき形見と聞けは水くきの岩間をなにゝもりはしめ劔
また人のもとより
戀しともえこそいはれね中々にいはゝ愚になりぬへけれは
かへし
忍ふるに餘る思ひも有物をいはぬにみえぬいひかたきとは
月いみしうあかき夜
人しれす人またさりし秋たにもたゝにゐられし頃の月かは

いなつまのいそかしきをみて
いなつまは照さぬ宵もなかり憂いつらほのかにみえし蜻蛉
　はらからとのみいふ人のせきのひまあらむおりはと
　いふもあやしけれは
東路の其はらからはきたりとも逢坂まてはこさしとそ思ふ
　ちかう見ゆる人のよろつに心もゆかすおほゆれはう
　ちなけかれて
我乍ら我身をいかになしてかはみゆるに見えつ身をはなすへき
　いかてきゝけん昔ふみをこせし人のもとより
獨りぬるおりもやあると人しれす心のうちになけきつる哉
　返　し
なれもせすぬきかへもせぬ片敷の袖をはかけて誰かとふ覽
　昔かたらひし人遠き國より登りて訪つれさりしかは
　女かたへにあり
神かけて頼みしか共東路のことのまゝにはあらすそ有ける
　道にことのまゝの明神といふ社のあたりに。旅人のや
　とりけれはなるへし。
　かよふ所ある人のほかよりくるまゝにきくとあるは
　まとかといひしかは
待つ程の袖たにうきをなにとてか思ひもよらぬ濡衣をきん
　ところせけならん戀の哥ふたつはかりよみてえさせ
　よと人のいひしかは
かまと山口（ひとあるこしまイ）かしまともすれはもゆるしくるし心つくしに
つきもせす戀に涙をわかす哉こやなゝくりのいてゆなる覽
　いみしう思ひける人を筑紫にやりたる人の語はんと
　いひけれはさりともけしきの森にはえやならはさら
んと思ふこそつゝましけれともなとやといへる人に
　これより
東路のたまのわたりは玉敷のかたはしにたにあらしとそ思
　心くらへにてすくしける人をかたらひそめてのちう
　ちつけにをとつれしにたえまあるほとにこれより
いひ出てもいはて絕るもよそ乍ら見えてそみつる人の心を
　いかにきくやうありてにか人のもとにきこえたりけ
　る
ゆきかひの道のしるへにあらましを隔てける哉足柄の關
　とあるふみをさるたよりありて人のみせにをこせた
　りしのちかれよりふみたえたるやうなりしかはさい
　はれしもとの人に
なのみしてあと絕に憂ゆきかひの逢坂ならぬほかのせき道
　返　し
ゆきかひのあふ坂ならぬ關道は絕けんあとのかひやなか覽
　しるへにならましをといひたる人は殊更になみこえ
　にけりときゝしを猶もとの人もたえすなん通ひ給と
　きゝてたゝならしとて
あら磯のみるめは猶やかつく覽末のまつまてなみたかゝ共
　返　し
あら磯の底のみるめをかりにてもよゝ恨みけん蜑そしる覽
　又かへし
うらまてのみるめかるへきかたそなきまた波馴ぬ磯の蜑人
　この人を時〻これより驚かしなとせしを。あらいそ
　の人たつねきて。心えぬさまに男かたからはかくし
　給ぬ物を。へたてたるおこかましなとやうに。いひ

さはくときゝしかは。かのもとの人に。かくいはまほしかりしあら磯も。しほやく煙になりしほとの事にや

をとなしの山に社ゆけ呼子鳥よふとは人にきかすへしやは

堰難きなこそもあるをしほ浦のよひさか迄もかゝりける哉

あさま山かすむけしきはしるくとも袖に煙の猶やたつへき

いはせ川水社すきて速からめかきつくしきと聞くそ危うき

みしまえを舟出し人もおり／＼の波のなこりに袖やぬる覽

うき世をもたれはかりにか慰めん思ひしらすもとはぬ君哉

かきまきらはして。こまやかにやりてしかは。あやしう見ときかたかりしを。なめけなりとて。つゝみかみにかきつくる

狩人はとかめもやせん草茂みあやしき鳥のあとのみたれを

ふみをこするほともなくみつからあはすとて人のむつかりしに

信濃路やいなやいかなるかけ橋をふみもならさて先渡り南

家のうちにふしてある人のもとに忍ひて人のきたりけるを便なき程にてえ過はさりけれはよへはくちなしの下にて明しつることゝ恨みたるふみをみせていかゝいふへきと人のいひしかは

梔子の木のもといかに答へまし主は誰そと人のとひせは

ものより上りしにみのゝ守何事にか關かためてしはしあらせしをこれも同しほとに上りあひて京にていひたりし

あふ坂を君もみしかはいとゝしく今より後はたのまるゝ哉

返　し

逢坂もゆるさしと社思ひねのせきはかたむる物としりにき

めのくにゝあるほとにふみおこせし返事をせねは

此頃は人のつらさも獨していふきのたけもかひなかりけり

かへし

色深きをやまのまつをかきたからなにあた事をいふき成覽

遙なる所なる人のにくき事なんあるときゝしかは

ひとりまつ君ならね共うきをきくはわれのみ歎かしき哉

あはんといふ人のもとに渡りたるに門をとみにあけさりしにからうして入て二日はかりありてかへりにしのちこれより

から國のみかともかくや歎きけんわかれの後の戀の侘しき

返　し

まほろしの雲のいはとをたゝき劔夕の空におとりやはせし

年わかき男のわれにまさりたる人の女をおもひかけてかゝる人ありとしらせんさやうにいへつへき事とせめしかははなれぬ人ときゝて

みなれきにしほやくあまのほとよりは煙の高き物を社思へ

いひ出ては聽てなきなになりぬ共忍ひはつへき心地社せね

ちいさき小手はこを人のおさなき娘の許へやるとてよませし

明暮は袖うちかけてはくゝまむ我こてはこになり心みよ

返しおや

袖かけていはぬ先より人しれす君かかけこになりぬとそ思

綾織になたちし人を思ふて通ひしころとかむへき人のもとにやりし

ふみ繁み綾に織りたつ糸によりこちくるとはた思はさら南

返事なたかき人の御さかしらなるへし

いつくにかよるらんとのみ白糸のあやしがりけるふし處哉

返　し

わくらはにまねくるふしや絶なましいとあやまちの繋くみゆれは

かくいひかはす人の家は。これより北なるへし。そのなか垣をへたてゝ。いと忍ひて。いく所あるを。家上なる物語ひて。思ひはなれたるさまに見えながら。なをこれよりも。うち忍ひまきるゝおりありしかは。隣のあはれたるかたにやりし

いつとなくなみやこす覽するの松まかきのしまに心せよ君

かへし

誰もその同し波にしかけくれはたけくまならぬ松と社みれ

返し又はたはのりことになりにけるにや

思ひたにかけぬもの哉なみ／＼にいはるへしとは高砂の松

又かへし

高砂と思ふへしやはあた波のよな／＼よする汀はかりを

これをきゝて。ゐしたる人

白波のかけおりてのみ年ふるはみな住吉の松にやあるらん

この人とかよふ人ゝあまたあるなかに。昔おやの方のたよりにて使ひけるものゝ。まめやかなるをも忍ひつゝかよひけれは。誰もさるかたのあやしの物とみゆるしたるを。なにことにかありけん。たなはたがいみしう腹たち恨みこめたるふみこそみえしかと。このたかさことなのる人の八日をこせたりしかは。これよりやりし

露やいかにおける物にもかゝり劔機織めさへ告むはかりに

又忍ひのなか垣のふみにや。こなたもあなたも。つゝましけれはなと。こと多く書きつけたるほくのみえしかは。裏にかきつけて。れいの人にやる

さま／＼になにへたつ覽北のかた今はあれゆく南はかりを

返　し

我は西君は南といふめれとあれにしきたのきたのかたにて

またこれより

南よりにしにはゆかむさりかたき君社なかい北のかたなれ

人のもとにてあまた人ゝ

ねまちの月をふしてみるかな

といふもとをなんつけつるときゝて

いさよひもたちまちにやはいつるとて

九月の朔に人にものいふおりに。夜いとう更けて。ほのかにかりのなくをきゝて。すくしてもあるへきに。かれきけいかゝといふ人のありしかは

心そらなるたひのかりかな

また人

一聲もきかぬねさめはなけれとも

さやはいはむと思ひつると心の中に

めつらしき聲ときけともさ夜なかに

きり／＼すのいと近うなくをきゝて人

かへちかくなくきり／＼すかな

といひしかはまたひんかしおもてにありし人

夢にてもぬることかたき秋のよに

いとゝしくおきふすことの露けきに

もみちみに山寺にわたりたるほとまらうときて人も

なかりけりといひて。もみちの限りをなんおりて歸りにけるときゝて。その人にいひやりし

君くへき折としりせは故里の紅葉をのみそみるへかりける

しはすのついたちころにいみしう色こきもみちをふみのなかにいれていひたりし

みる人もなき我宿の紅葉はゝ風たにしらぬ物にそありける

返し

吹風ものとけき宿のしるしにや紅葉なからもときはなる覽

つの國にすむこやの入道哥物語なとおほかたにいふ人なりけり門のまへをわたるとていそくことありてえまいらすなにとかいひたれは

なには人急かぬ旅の道ならんこやと計もいひもしてまし

ふくにおはする人のゆかたひらの袖を鼠のそこなひたれはときかへてふるきはとまるをみるもあいなうあはれにて

ぬきかふる袖をつたへてふちころもみるも涙のたより之皃

人のおやの服ぬくとて河原にいてしに我もそのゆかりにおひをせさせたりしにやかてすつとてもろともにいてたりし人はおりてはらへなとすめり車よりおひをいたすとて

藤衣ぬく人ましていかならんおひをとくたに袖はぬれけり

うちわたりに思ふ人ありときゝし人に秋ころ

九重の雲路にかよふ玉章はかけてまつこそひさしかりけれ

亭子院の説經ひとゝ諸共にきゝてかへる道にしりたる車にて人のまうてたりけるをそれなめりと思ひていひやりし

行末もかけはなれしなのりの道めくりあひぬるみつの車は

はかなきことにむつかりし人あやにくに物かたり哥なとありける限りあさりいてゝ皆焼きてしをせむかたなくて歎くころ近くてきく人いかにそといひたりしかは

〔や歟〕あきはてゝ跡の煙はみえねとも思ひさまさんかたのなき哉

かゝることきゝたらんと思ひし人につれ〳〵のわりなかりしかは

あら磯のあまはやけともこりすまに猶かりつへき物語り哉

返し

あま人は又も社やけこりすまになにかりつむる物語りかは

人のもとより

心からくるしさ物を思ふ哉かゝらさりせはなけかましやは

返し

ふかゝらぬ人の上まて苦しとやうきみにそへて物を思はん

たえまかちなる人いかて對面をかなといへは

わたらしや礒の懸橋ふりぬたにまとをにみゆる中の景色を

なにとにかあらん物思ふ女の集とておほえなきことゝもを書きいたしてこれみしりたらん殘りかきそへてかならすみせよと人のをこせたりしかは

汐たれてよそふるあまもこれは又かき劔方もしらぬ物をは

とてかへしやりたれはたちかへり

よさの浦に藻鹽草をは掻つめて物あらかひは拾はさら南

返し

うきめかる心ならひに鹽すきてうたかひたえすよさの浦人

ふつきの八日あかつきに風の哀なるをきのふの夜よ

りといふことを思ひ出て
曉の露は涙もとゝまらてうらむる風の聲そのこれる
包むことありてたまさかにみゆる人しつ心なくてあはたゝしき心地のみすれは思ひたゝむもうるさうてこまちかいひけんやうに
逢事そやかて物うき曉の夜ふかきをわれおもひいつれは
よそなる人のいかてみつからとのみくりかへしかきたるふみのはしに
逢事は猶よそ乍らなからへよとく忘れなはとくやなけかん
返しきく事のありしとて
忘るとも行く覧方を思ひてはとまらぬ人はあらしとをしれ
ねたさにたち返
ゆく方もとむめる道もまたしらぬ程になきなのたちにける哉
これよりいかてこれか咎のやうなる事いはゝやと思ふほとになをかくつれなくてやみぬへきなめりと恨みしかは
放れにし駒のおりにも我ならぬ人をはえ社なつけさりけれ
返し
はなるれとあらふる駒のなき物を君か心はなつきしもせし
また
引かへてなつけむ駒の綱たえにいかゝのかひの人はみるへき
人のもとより
いかにせんみこもり沼の下にのみ忍ひ餘りていはまほしきを
返し
うきてのみ末も流れぬ沼ならは影みるおりもあらしとそ思
常にしもあらぬ女とち長月はかりのよるあひて。よろつの物語りするに。この人もとしころの人に忘られて。そのなけかしさいひ。われも常よりことに思ふ事ありかしなとかたりあはするおりしも風ふくおりにありしかは
我もこひ君もしのふに秋のよは
思ひいりたるにやものもいはねは
かたみにかせのをとそ身にしむ
人にものへたてゝあひてかへりてつとめて
有明の月はなかめし今よりは物思ふつまとなりまさりけり
返し
山かつの垣根のこかけかけみねともりにし月を哀とそみし
袖ふれてなれぬ中にもから衣さてのなこりは物を社おもへ
かたをかの岩ねのこすけ今更にみたれやまさん人に靡かは
おとこ
かへせ共うらめしからぬ心哉夏野のくすのうらはならねは
かへし
をたまくり葛の裏葉にあられ共歸らぬ野へはなしと社きけ
この人にふちなとたつねをきてあはんといひしかは
流れいてんうきなにしはしよとむ哉求めぬ袖の淵はあれ共
れいの人
白波は立よりくれとかひもなし人をみるめはおひすと思へは
かへし
いかてかはいかこの海に昔より人のみるめを人のかるへき
よになくなりたる人をおとしやせまし山川の瀧とかやといふことやありしむつましかりけんかしとつねにいふ人のありしかはむつかしくて

うたかたのきえはつるまて濁りなく音にはきゝし山川の水

いかなるおりにか人の

かたしきの袖はかさねぬ物ゆへにおり〳〵風の驚かすらん

返し

風の音も身にしむ計り寒からてかさねてましをよはのさ衣

つねよりも思ふ事あるおり。心にもあらて東路へくたりしに。かゝるついてにゆかしき所みんとて。三年といふとしの正月莒根にまうてゝ。なにこともえ申つくすましうおほえしかは。道にやとりてあり。つれつれなりしおり。心の中におもふことを。やかてたむけの幣をちいさきさうしにつくりてかきつけし百なから。みなふるめかしけれとも。やかてさしはへて。けしきはかりかすむへきならねは。まことにさかしう心つきなきことおほかれと。俄なりしかは。社のしたにうつませてき。精進のほとは。ときといふ事をそせし。初春五首

春山に霞たち出ていつしかと時のしるしやありけんとみん

春くれはたにかくれなる鶯もみやこにいてゝなかんとそ思

思ふことひらくるかたを頼むには伊豆のみ山の花を社みめ

つみやらぬわか心哉このめよりおつる涙のしつくのみして

した氷りまた打とけぬつゝらをは春の山への風にまかせん

中春

春雨のふりぬることを思ふには只つく〳〵と袖そそほつる

年おほくかへしきぬれとあれぬるは我中山のふる田なり発

なへてきておほす計りに小山田のなはしろ水は神そ結はん

若草をこめてしめたる春の野に我より外のすみれつますな

春の野のきゝすなり共我はかりかりにあやうき物は思はし

はての春

時にあひて惜むと思へは桃の花みちとせ迄もたのまるゝ哉

青柳のいとうきふしの繁けれはくるしき迄に思ひみたるゝ

雲かゝる山の櫻はをしなへておもしろく社なかにみえけれ

聲たてゝ澤の蛙やすたくらん八重山吹の今さかりなる

むらさきのむらこの糸にみゆる哉松にかゝれる池の藤波

早夏

雪かとてけさおとろけはうの花の夏のかきねにさけるこ発

我せこかくはゝひさなへおきなから白きやたこの裳裾成覧

郭公みやまにたかくいのる事なるときこゆる聲をきかはや

くす玉を袂にかくるさ月には嬉しきよにそあふちなるへき

ふたかこに我うちかみを祈る哉この手拍のひらてたゝきて

中夏

ひきなからうきの菖蒲と思哉かけたに宿のつまし分かねは

時鳥なくへきつまは我宿のはなたち花の匂なりけり

眞菰草よとの渡りにかりにきて野かひの駒をなつけてし哉

まちわひて今うちふせは時鳥あかつきかたの空になくなり

涙たにもきえぬ思ひの身をつめは澤の螢もあらはれにけり

終夏

なか〳〵と思ひ暮せと夏の日のあつかはしきは我身なり発

したにのみくゆる我身は蚊遣火の煙計りをことゝやはみる

我宿のませのゆひめもあたなれは露にしほるゝ常夏の花

涼しさを尋ねきつれは蟬の聲きかぬこかけのありかたき哉

おほぬさに千年をかけていのる哉神の心もなこしと思へは

早秋

けふよりや秋のさかひに入りぬ覧こくらかりつる夏の山蔭

七夕に心をかしておもふにもあかぬ別はあらせさらなん

篠すゝきまたほに出てぬ秋なれと靡くけしきのとにも有哉

ほしあひの影をなかめて天の川空に心のうかひぬる哉

てもたゆくならす扇のをきところわするはかりに秋風そ吹

中秋

思ふことなりもやすると鈴虫の聲ふりたてゝなきぬへき哉

闕

いくしほの時雨ふりてか立田姫くれなゐのはを深くそむ覽

しら露のをくてはもらぬ我なれと袖はそほつの心地社すれ

唐錦ふたむら山のもみちはをたゝてこそみめ秋はすくとも

初冬

衣更けふはとくせむうらもなくなるれとうとき色はうとまし

風の音に殘りあらしと思ひし秋のかたみのもみちこそちれ

人しれぬ心の中は神無月しくるゝ袖もおとりやはする

初霜は虚わかすやをきつらん移ろひそむる菊のまかきに

中冬

閨の上に霰もふれは時のほとに心にもあらぬ玉を社しけ

冬河のをしのうきねやいかな覽つねの床たにさゆる霜夜に

花さきし草ともみえすかれたるに雪社庭のおもかくしなれ

乙女子かかさす日影のなにしおはゝ曇らぬ豐の明ともかな

あさけして出てつる妹を待つ程は歎きこりつむをのゝ炭竈

埋火にあらぬ我みも冬の夜はおきなから社したにこかるれ

はての冬

烟立ふしの高根に降る雪は思ひのほかにきえすそありける

あつまやの軒のたるひをみ渡せは只しろかねをふける之覧

冬のよをはねもかはさてあかす覽遠山鳥そよそにかなしき

梅か枝にかゝれる雪の消えさらは春待程はのとけからまし

思ふ事月日にそへてかそふれは年のはてまてなりにける哉

さいはひ

御山迄かけくる涙の導かはよにあるかひもひろはさらめや

あめつちの神のひろめん幸を袋にうけてかへりしかな

み山への高き朝日にあたりなは長閑くのみそ曇らさるへき

み山なる富草の花つみにとてゆるきの底をふり出てそこし

うちかつき門を廣めて今年より富のいりくる宿といはせよ

命を申

呉竹のよになからふる物ならは伊豆の方をそふし拜むへき

うき世そと思ひすつれと命社さすかに惜き物にはありけれ

命たになかすにあらはつの國のなにはのとそ嬉しかるへき

都なるおやを戀しと思ふにはいきてのみ社みまくほしけれ

むれてゐる鶴におとらし苦のねの短かかるへき命なりとも

子をねかふ

たきものゝこをみんとのみ思ふ哉ひとりある身の心細さに

たらちめの親の生たる時に社このこかひある物としらせめ

何事も心にあらぬ身なれともこのたから社まつはほしけれ

光あ覽玉のをのこゝみてし哉かきなてつゝも思したつへき

岩に生る松のためしもある物をはこめのおもと種を重ねよ

うれへをのふ

何れをかまつ憂へまし心にはあたはぬことの多くもある哉

いつとなく波のかゝれは末の松かはらぬ色をえこそ頼まね

かけまくもかしこけれ共思ひあまり百千の事を憂へつる哉

流く／＼も又誰にかは憂ふへき猶ことはりの驗あらせよ

數ならぬ我は我にそいとはるゝ人とひとしきめをみてし哉

思

佛とも神ともたのむしるしにはならへて思ふをかなへよ
とにかくに思ひ亂れて思ふ哉わくる思ひのひとつならぬに
なそもかく思ひ絶せぬ身なるらん室の八島のこゝならね共
もえ焦れ身をきるはかりわひしきは歎きのなかの思ひけり

心の中をあらはす

忍ふれと心の中にうこかれて猶ことのはにあらはれぬへし
てにとらんと思ふ心はなけれ共ほのみし月の影そこひしき
水もほしあまつ星をもやとしつゝのとけからせよ谷川の底
しつのおになひきなからも身にそしむ位の山の峯のまつ風
あはれひのひろき誓を招くとていはぬをなくしらせつる哉

夢

いかてとく夢の驗をみてし哉語り傳ふるためしにもせん
まとろめはさめぬる夢の世なれ共嬉しき事をみるよしも哉
淺からん夢の限りはしきたへの床のちりとも打拂はなん
ぬるたまの中にあはせしよき事を夢々神よちかへさらなん
いつくしき君か面影あらはれてさたかにつくる夢をみせ南

雜

明くれの心にかけて莒根山ふたとせみとせいてそたちぬる
東路にきてはくやしと思へ共伊豆にむかふそ嬉しかりける
み山ちの音にきゝつるさかゆけは願ひみちぬる心地社すれ
日のもとやこのみかとには數島や倭うたをはいとはさら南
淨めつゝかき社流れ水莖のしるしもはやくあらはれよとて

いかてか見つけゝん四月十五日にかの山にあるそうのもとから權現の御かへりとておこせたりしかはあさましうこそかきつけけれとうるさけれはとゝめつ

身にきけるみそちあまりの玉章をかさゝれぬれは光をそ増

はしめの春

霞たちいてこし時のしるしには千年の春にあふとしらせむ
鶯のなくねの空になかりせは都の人をいかてみましや
思ふことひらかんと思ふ物ならは花の都のゆくすゑを思へ
このめよりおつる雫のつく〳〵と靜かに今は若なつません
下氷けぬくゝならはうちとけて何のつらゝか今はあるへき

仲　春

春雨のふりてつゝきてとひしかは嬉しき方に我そそほつる
中山のふる田あらさす今年より我守りつゝなてゝおほさん
小山田にたねをまきつる物ならはなは代水は我にまかせよ
なにか思ふなにをか歎く春のゝに君より外に菫つませし
都よりたゝ假初にきたる身は雉子のたとひひかすもあら南

はての春

いひかけしもゝことなから桃の花みなひらけぬる人を見哉
我宿の雲井にさける櫻花みる人ことにあかすとそいふ
青柳のいと珍しき人みれは又やくるとそあひまたれける
澤水に蛙なくらん山ふきの花のさかりはつきせさらなん
綠なる松にかゝれる藤なれはむらこの糸とみゆるなるへし

夏のはしめ

我宿の垣根にさけるうの花も雪のふるとそおとろかれぬる
みやまへにこたかくなけは時鳥今そかたらふ聲もきこゆる
五月雨のなへひきうへていもかこし社のもとに又もみえ南
てかしはにひらてをさしてこし人の祈りいてゝし人は見習
皐月まつ人はかりには我宿のゆふたすきしてかけてみよ君

中　夏

心さしふかき入江のあやめ草軒のつまゝてひきかけてみよ

時鳥なくねそらなる物ならははなたち花のかをとかめなん

眞菰草まことに人のかりつめは野飼の駒もなつくとをしれ

うの花のうらみさらなん時鳥人にくからぬよにしすまはは

世中をてらすはかりにおもひなすなにか螢を哀とはみし

はてのなつ

夏の日のあつかはしさは思へとも心にいれていふにつく哉

常夏の花おひ繁るませかきもゆひかためては露ももらさし

なく蟬のなかぬ木蔭はなけれともみ山かくれは涼しかり鳧

下にのみくゆる思ひはかやり火の烟をよそに思はさらなん

みたらしになこしのはらへする人をみるに我さへ頼もしき哉

はつ秋

いつしかと秋の初風ふきぬれは心の中はすゝしかりける

なかことを歎くなるらん七夕のわかれはよその物と社みめ

星合の空に心のうかふまてあまの河へをなかめつるかな

いまはとて扇の風をわするなよ又こん年の夏もこそあれ

我をのみ頼むと聞けはしいすゝき今はほに出て歎くへき哉

なかの秋

宮木野のこはきか原になく鹿の涙の露にしほれしもせし

疑ふな千世の秋まて鈴虫のよにふるしるしありとしらせん

朝貌の花にやとれる露の身はのとけく物をおもふへきかは

雲井まてふるさとこふる秋の夜は鴈の涙や露けかるらん

曇りなき月の光をなけくには思ひくまなき物にそありける

はての秋

年をへてかけをならへてみる人も老せぬ物はきくのしら露

風寒み妹かころもてうつゝちの數しらぬよも過きぬへき哉

衣手は山田のそほつと思共おとろきもなきよにのみそへん

しら露の年をかさねて奥山の紅葉の色はふかくそありける

あかゝりし紅葉の色も散りぬれは秋のわかれも悲しかり鳧

冬のはしめ

こゝにきて衣をかへて行人は千代の褉にあひぬとをしれ

千早振いかきのもとの常盤木も嵐のかせはいとはさりけり

色〻にうつろふ時の折にしもこきかせみたるたまそ亂るゝ

神無月しくるゝ空を歎くなよふるにかひあるよともしらせん

我宿も散ふりしく時はみな玉のうてなになりかへるめり

なかの冬

めもあはてふしかぬる夜は冬川のをしの浮寢に驚かれつゝ

ときはなる山の木陰にすむ人はゆき社花とみえわたりけれ

大原や炭やきゝたるいもをしてをのゝ山なる歎きこらせし

埋火も君にもあらぬあま舟も冬はうきよにこかれてそゆく

はての冬

年をへて煙たてともふしの山きえせぬものは雪としらなん

風さむみはねうちかはし今よりは遠山鳥のひとりねさせし

しろかねにふきかへた覽東やの軒のたるひをゆきみてし哉

春をまつほとはやとなる梅かえに降積雪をなかめてそおる

いたつらにすくす月日は年をへて我身につもる物としら南

さいはひ

思ふこと鳴門の浦に拾ひつゝかひありけりと知らせてし哉

さひはひを朝日にそへて今よりは都のかたにやらんとそ思

我宿のとみ草の花つませてはさかへを開く身とそなるへき

すへらきや神代頼まん人はみなやらん方なきとみを社せめ

今年よりかとを開きて富をまて八十氏人のあともつかせん

いのち

吳竹のこちくの葉を聞しよりよに永らへんふしはそへてき
あちきなくなにかうきよを歎く覽松にかゝれる露も社あれ
たひらかにあらまくほしき物ならは都の方をなかむ計りそ
つの國の難波の事も思はすてなかすに遊ふたつのよをしれ
よもなかく汀に茂る芦のねはむれゐるたつになにかおと覽

子まうす

獨のみある物ならはたきものゝこはえ安しと思ひしらなん
このかひはありぬへらなり浦毎によせくる波の數しらぬ迄
ひかりあらは祈りし事もかなひぬといはせてし哉撫子の花
何かそのわきて賴まん今よりはこの寶をはえつと知らなん
中〳〵にかしてし種はうたかはす今はふたはになりぬ覽かし
何れをもなにか恨むる今よりはこの寶をはえつと知らなん

うれへ

何れをも何かうれふる今よりはあたはぬ事もあらしとそ思
なく〳〵もうれへし君かことはりを樣々に皆かなへてし哉
波のこす松は色社まさりけれあさくたのむな思ひそめてき
いと嬉しよに厭はれし今よりはいや増りなる身とをしらせん
さしなからみなことはりは音にきくたゝすの神と諸心して

おもひ

限りなく思ひこかるゝ身なれとも哀とみれはさめもしぬ覽
なにことかかなはさるへき眞心に神佛にもかけていのらは
ともかくも思ひみたるなひた道に我をたのまん人の心は
やそしまの松の千年を數へつゝ思ふをなき身とはしらすや
いにしへは歎きこりつゝすきに兒今は何かは思ひこかるゝ

心の中

いはねとも賴みをかけはなにとか心の中にかなはさるへき
みそらゆく月の影をも身にそへて心の中にさやけからせん
にこりなく心の中に水すまはのとけきほしのかけもみえ南
松風のいとゝ身にしむ物ならは君か千年そひさしかるへき
あはれひに又あはれひをそへたらは此世彼世に思ひ忘れし

夢

夢ならはとかたさまに誓ひつゝ語りあはせんしるしあらせん
嬉しさは身にあまるまてみちぬ覽夢心地にも思ひあはせよ
あしき事夢にあはせし敷妙のちりゐる床をはらふはかりそ
よき事にあらぬ事をは夢はかりみせしとのみも急かるゝ哉
今は只身をも離れぬ影なれは夢ならすともみえさらめやは

雜

箱根山あけくれ急きこし道のしるしはかりはありとしら南
何事か悔しかるへき伊豆にきて身の榮ゆへき影をみつれは
足引の山より高きさかゆけと君そ□よのためしとはみえ
水莖のあとかきたてしあとみれは深くも我を賴みつる哉
日のもとの山となる迄積るともとのは見れは誰かいとはん
玉くしけふたみなからそ任せつる明暮たけの末のよまてに

とありしかは。またこれよりたゝならんやはとて。さて其年たちのやけにしかは。かゝる事のさうしして。かならすかゝる事なんある。けからはしきほとに。をのつからと人のいひしかは。あやしくほいなくて登るへきほと。ちかくなりて。れいのそうはうにやりし。これよりもしきのやうなることあれと。さかしうにくけれはかゝす

玉章にみかきそめたる光をはゆふしてかけししるしとそ思
うちはへて我くりかへすたく縄をうみもひか南よその蜑人

正　月

行末の遥かなるへきしるしにはまつとしかへる空に霞めよ
はつ花のいのりならねはよそへつゝ身を鶯のね社なかるれ
埋れ木のなかには春もしられねは花のみやこへ急かるゝ哉
春の日のさしてつらしとなけれとも猶とけはてぬ薄氷かな
春日野のの森もなそやと思ふかな年つむ若なかたみなければ

二　月

ふりはへてゆきし心は春雨のあしよりさきにいそかれし哉
すき心ひとにつくれはあらをたの打頼むへきなかやまはては
苗代のみなみなかみにまかせてき思はん方にかつも引ゆとて
もえまさる焼のゝ野への壷重つむ人たえすありと社きけ
假のよを現とみるもはしたかのとりあつめてそ物は悲しき

三　月

桃の花もゝちの願ひひらけなはみなゝりはつる心地社せめ
色ふかく心にしれる山櫻さかすとたれかよそにいふらん
くることも心になひくたよりあらは柳の糸もたえしとそ思
盡きせすはのとかにゐて(て歟)の里乍らかさしにおらん山吹の花
藤の糸をなみやよりきのおりつらん紫地なる錦かゝれり

四　月

しめの中にちる卯花は咲かゝる神のゆふにそあやまたる覧
かたらひしともたかはす時鳥こたかきかけにかくれにし哉
みとしろの苗引連れておりたちしたこの姿よいかにみえ劔
片山の柏のくほてさしなからおひなをるみるさかへとも哉
さつき待つ程ならね共ゆふたすきあやめもわかす祭る比哉

五　月

深からぬよとの汀の菖蒲草ねたきに何かかきてみるへき
古のわすれかたきにいとゝしく花橘のかをやのこさん
野かひにも放ちやせまし眞菰草はなれの駒の長閑からぬを
時鳥人にくからぬよにすまは聲はかりをはおしまさらなん
ほともなき身のみこかるゝ螢をは人しれす社思ひあはすれ

六　月

夏の日を一つにいりて(か歟)いふ事をあつかはしとは思ふへしやは
とこなつにあたなる花の露なれは心をかれぬおりはなき哉
鳴聲もみな月はてゝは空蟬の木にはからをやしはしとゝめん
蚊遣火のふせけと思ふをこその夏煙の中にたちそさりにし
思ふをしけさふもとにみそきするせゝの川風吹きはらは南

七　月

秋風はおきの葉にこそふけはふけ心の中のすゝしきやなそ
織女のとしふるいとはたえぬ共むすほゝれたる物を社思へ
天川わたるあふせはほとなくてへたつる年のとをけなる哉
秋きぬと古き扇をわすれなは又はりかへよゝこめならぬに
ほに出て風のなひかはしのすゝきそよや下葉の露は結はし

八　月

をしかふすこはきか原におく露のこほる許の色をこそませ
鈴虫の聲もたえせすをとつれんよゝふるしるしありと思はゝ
儚さをまつ目のまへにしらするはまかきの上の朝貞の露
故里を雲井になして鴈金の中空にのみなきわたる哉
隈なしとなけくならねと秋のよの月に心はあくかれそする

九　月

露を重みいかはかりかはかゝる覧こかねの玉とみゆる玉哉

夜寒なる風に急きてから衣うちおとろかすねさめをそする
そほつをも何ならし劔秋の田のひたおもむきにあらぬ物故
言のはの色の深さをたのむ哉露もゝらすなみやま木のもと
紅葉ちる秋のわかれの悲しさに物思ふをはむかしこりにき

十月

たちかはる冬の衣のすきまなく千世を重ねんひろまへにして
うらもなきひむろのまへの榊葉はあらき嵐の風もふかしな
秋ことにしもはかくせと菊の花をき所なき心地こそすれ
ともすれはかき曇りつゝ神無月猶そ時雨のひまなかりける
みつかきのかけかゝやける臺にはあられを玉の数と頼みし

十一月

霜こほり冬の川瀬にゐるをしのうへしたものを思はする哉
常葉山ゆきふりかゝる夕暮は名をわすれたる花やさくらん
庭火たくかくらのにはのいちしるく我榊葉のさしはやさ南
やくとのみなけきをこりて炭竈の煙たえせぬ大原の里
うきていゐ沖に別るゝ筵小舟なきさにかちやとゝこほる覧

十二月

けふりして年ふりぬるとこしの山雪ともみえぬみねの白雪
夜を寒み乍らわふなる山鳥のおはにもふれてよそへさら南
思ひやれ雫けの垂氷ひまもなくかつ〳〵注く宿のつゝらを
年ゆきて春のとくへき比なれは梅のたちえにめをつくる哉
はては皆やらひてすくす年月の物おそろしや身にとまる覧

さいはひ

わたつみの底をそ頼む今よりは思はぬ方のうきらからすな
都にてさいはひくれはあさひ山にしさまにとく昇りにし哉
さきのよに種うへをかぬ身なれ共猶つみゝてんとみ草の花
とくもとくめにみすみすもみせよ迚祈しそかしすらへらきの神
九重のやそうち人も人しれすとへと思ふはわきてさりける

いのち

呉竹に嬉しき節をそへたらはまつもこちくも聲をきかせん
松の上にかゝれる露の消えすして碧の海となる迄もみん
たむくるにをくられたらは都より神の心せおもひをこせん
萬代をわれにゆつるか聲たえすなかすの濱になきわたる覧
和歌の浦に汀のたつしはくゝまゝ芦の下ねそよなかゝる(ま)

こをねかふ

たき物のこ計しみて戀ひしかとかひなかりける身を悔る哉
拾ふへきかたも渚にみゆる哉こをやいふらんうつせ貝とは
撫子の花もひらけぬませのうちは露の光もなしと社きけ
これやこの寶の山に入なからたゝにて歸るためしなるらん
ふた葉にもおふるこ草のみゆる哉猶中川のあさきなるへし

うれへ

今も猶うれへかちにそなりぬへきあたはぬをのあらん限は
うかりける身の怠りのことはりに憂へて後もわれのみそする
神乍ら人なからとふうらめしき憂へしをのはしもならねは
そのかみにうれへし事は程へてもわれ片をかにたえす共哉

おもひ

人しれぬ胸の思ひのさめたらはあはれを注く雨とたのまん
思ひわひ思ひしをのしるしあらは□かきみ佛いつか忘れん
ひたみちに思ひ入にし方なれと惑はさるへきしるへをそ待
かすことに思をわけていふとても猶やそ島の松はつきなん
思ふにも叶はぬ世とは知り乍ら猶歎かるゝ身をいかにせん

心の中

いひ出て心の中にくたくれはみつを結ひていしやうつらむ
月影を心の中にまつほとはうはの空なるなかめをそする
みちのくのそてのわたりひ涙川心の中になかれてそすむ
しき涙はたちとまる共ふきこなん心の中にまつかうらしま
あはれひをあらはすとみはなにをか心の中に思ひしもせん

夢

憂事をちかふる夢のみえたらはねても醒めても嬉しと思はん
いさや又賢しき事の見えぬよに夢をはいかゝ思ひとくへき
しきたへのちりは夢にもまさり毘よな／＼積る涙なかれて
憂事を急きもみせんよとゝもに只夢ぬしのかみをおかまむ
現とも夢とも分かす身にそへるかの幻とさらは頼まん

雜

ふたつなき心にいれて箱根山いのる我身をむなしからすな
くやしさも忘られやせん足柄の關のつらさをいつになり南
此度は心もゆかぬさかみちにわたりにしより物をこそ思へ
はしるゆにゆきかよひにし水莖は神の心はゆかさらめやは
曇りなくたてる日の本かすならてあれはや袖の乾かさる覽
願ふ事みちくるをやたまくしけふたみの浦にかひもよす覽

はるかなるほとにありしおり。めにわつらふことありて。ひなたといふ寺にこもりて薬師經なとよませしついてにいてし日はしらにかきつけし

指てこしひなたの山を頼むにはめも明かにみえさらめやは

いし山にまうてたりける人にかはりて

あふことはありかたくても石山にうちつる戀の光みえなん

かもにまうてゝかみしもに書きつけしことみな忘れてきふねはかりにや

みるめかるをのつてより繁からは嬉しきふねの便と思はん

はる

徒然となかき春のみみつくせとあかぬは花の匂ひなりけり
山里にかゝるすまゐは鶯の聲まつきくそとりところなる
さわらひや萠出てぬらん春のゝに燒原あさる人もおほくみゆ
しもかれんほと遠けにもみゆる哉今もえ出る庭の若草
花ならぬなくさめそなき山里は櫻はしはしちらすあら南
吹きよらは亂れもやせん青柳のいとこそ風は後めたけれ
澤水に蛙もなけはさきぬらん井手のわたりの山ふきの花
霞たに山ちにしはしたちとまれすきにし春のかたみ共みむ

夏

山かつのしはのかきねをみ渡せはあなうの花の咲る處や
むかしみし人をそしのふやとちかく花橘のかほるおり／＼
うくてよにふるのゝ沼の菖蒲草ねかくる袖は乾くまもなし
よるをしる螢はおほくとひかへと覺束なしや五月雨のやみ
早苗ひきもすそよこるといふ田子も吾を袖はしほとからしな
あとたえて人もわけこぬ夏草のしけくも物をおもふころ哉
なきかへるしての山ちの時鳥憂世にまよふわれをいさなへ
かやり火は煙のみこそたちまされ下のこかれは我そ侘しき
一重なる夏の衣はうすけれとあつしとのみもいはれぬる哉

秋

ぬるかりし扇の風も秋くれはおもひなしにそ涼しかりける
織女はあまの羽衣おりかけてたつとゐるとや暮をまつらん
色かはる萩の下葉をみるとても人の心そ秋そしらるゝ
荻の葉をなひかす風のをときけは哀みにしむ秋の夕くれ
我をやいねかてにする山田守かりてふ聲にめをさましつる

すきかてに人のやすらふ秋のゝは招く薄のあれはなるへし
淺茅原野わけにあへる露よりも猶有かたき身をいかにせん
秋ふかき夜はのねさめはわりなしとしらせ顔なる虫の聲哉
女郎花さかり過たる色みれは秋はてかたになりそしにける

冬

このはちる嵐の風のふくころは涙さへこそおちまさりけれ
いつも猶ひまなき袖を神無月ぬらしそふるはしくれ乙けり
此頃はをのゝわたりにいそく覽冬まちかほにみえし炭やき
[頭書]獨ぬる我身は霜にあらね共冬のよな／＼をきそゐらるゝ
雪をかぬ人の心もいかなれは草よりさきにかれはてぬらん
冬の池にうきねをしたる水鳥のよ聲をきけは物そかなしき
涙かはみきはにこほるうは氷下にかよひてすくすころかな
埋火をよそにみる社はかなけれきゆれは我も灰となる身を
數ふれは年のおはりに成に覺我身のはてそいとゝかなしき

雑

數ならぬ身の理をしらさらは恨みつへくもみゆる君哉
とひわたる人もやあると人しれすまつに音せぬ都鳥かな
人もうし我身もつらしと思ふには裏うへに社袖はぬれけれ
我をやうきにつけても忘れぬと形見につらくみえまし物を
あふことのかたきになれる人は猶昔のあたとおもほゆる哉
忘れ草たねを心にまかせてやわかためにしも人のしけらす
身にしみて辛しとそ思ふ人にのみうつる心の色にみゆれは
はやくよりしたのうらみは深けれと上そつれなき淀川の水
あかしはまいくらかさねにあらね共恨そつくす人の心を
一時もうたてなけかしと思へ共ならひにけれは忍はれぬ哉
ひまなくそ難波の事も歎かるゝこやつの國の芦のやへふき
世中をうち歎きつゝあふみなる安きをとはねをのみそなく
音に聞くやすのかけはしかけてのみ歎きそ渡る心ひとつに
すかはらやふしみを君かことくさにうち歎かるゝ事や何事
とことはに絶ぬ歎は山しろのくせになりぬる心地こそすれ
思ひきやしらぬ山へをなかむとて都戀しきねをなかむとは
かつきする蜑のたくなはうちはへて物歎かしく思ほゆる哉
いともけに覺束なしや目に近くうきをはみしと思ひし物を
しはしたに慰むやとてさころもの返す／＼もなをそ戀しき
小筵にふしていをたにいもねれは戀にしくもの又なかり覺
くりかへし我はこふれともろかつらもろ心なる人のなき哉
いつとなく戀するかなるうと濱のうとくも人の成まさる哉
命たにあらはと計たのめ共なにかこのころ戀そしぬへき
つれもなき人をしもやはしのふへきねたさもねたき我心哉
下紐のゆふてたゆくや思ふ覽ねてもさめてもわかこふる人
こふれ共ゆきもかへらぬ古に今はいかてかあはんとすらん
身の憂を思はぬ山にゆきしより涙をさこそとゝめさりけれ
くみよ(し歟)り心つくしになけく哉君ゆへものをおもひそめ川
あつまちの淺間の山にあらね共思ひにもゆる胸そ侘しき
思はゝや苦しやなそと思へ共いさや侘ひしやむつかしの世や

これはまことに。いはけなかりしうゐことにかきつけて。人にみせんこそあさましけれ。

秋のすゑつかたとをきほとにくたりにける人のこせちいたすとてのほりたるを恨むることやありけん

秋たちて　過にしのちは　神無月　しくれのみして
とを山を　雲井はるかに　なかめつゝ　思ひいつれは
わか袖の　くちはをなに　かきつめて　あらしのかせに

まかせてん　ちらすところは　なしとのみ　きくにつけても
霜かれて　うつろひはてし　まがきにも　をき所なき
露の身は　さゝのつらゝと　結ほゝれて　きえみきみすみ
まちしまに　山ゐにすれる　おみころも　きみかためとは
きゝなから　きへき物とは　へたてつゝ　とよのあかりも
しられねは　おほつかなしと　なけきしは　さてもありしを
なか〳〵に　くやしさまさる　このたひの　ゆめをはいかて
ちかへまし　よろつにつけて　たけからぬ　ねをのみなけは
とこの浦の　ひるまもみえす　みつしほの　身をうき舟と
こがれつゝ　ゆくゑもしらぬ　心地して　いまはみるめを
かりにたに　かつかむかたも　なきさなる　わすれかひをは
わかために　ひろひをきける　いせの蜑の　いとまもなみに
ことよせて　をとをたにせて　かへるらん　つらきなこりを
かきとめて　ぬるゝしつくの　つく〳〵と　思ふにもなを
あやしきは　池のをしとり　みなれつゝ　したにかよはぬ
ものゆへに　かけ見きとのみ　(あ歟)おさましく　いひもらしける
をのはに　野中の水も　いとゝしき　みくさのみゐて
たえぬれと　よしやかけても　いはしろの　むすひまつなる
なかなれは　そのゆかりをは　かこたねと　しめのほかにて
ひきそめし　下根はかれにし　むらさきに　さしおとろかす
ひさかきの　はひよりもけに　われそくたくる

三十かうのうたあはせにさみたれを

五月雨はみつのみまきの眞菰草かりほす隙もあらしとそ思

ある男御氣色のかはれるはいまはまいるましきとと
ひたるかへりことに

のかはねとあれ行駒をいかゝせんもりの下草盛りならねは

かれ〳〵になりゆく人のもとに夕暮にさしをかする

夕暮はまたれし物を我はたゝゆく覽かたをおもひこそやれ

さきのみちの國のかみより肥後になりてくたるに

たひ〳〵に君が千年やまさゐ覽末のまつよりいきのまつ原

右相摸集以百花庵宗固本挍合了

群書類從卷第二百七十七

和歌部百三十二　家集五十

赤染衞門集

秋法輪にまうてゝさかのゝ花おかしかりしをみて

（詞花）秋の野の花みる程の心をは行とやいはんとまるとやいはん

つとめてかへるに空いみしうきりわたるにひくらし
のなきしに

いとゝしく霧ふる空にひくらしのなくや小倉のわたり成覽

中の關白殿（道隆）の藏人の少將ときこえしころはらか
らのもとにおはして内の御物忌にこもるなり月のい
らぬさきにとて出給にしのちも月の長閑にありしか
はつとめてたてまつれりしにかはりて

（後拾）いりぬとて人のいそきし月影を出てのちも久しくそみし（後集）

同人たのめておはせすなりにしつとめてたてまつれ
る

（同）やすらはてねなましものを小夜更てかたふく迄の月をみし哉

をなし人わりなきものこしをときとり給ひて返し給
ふとて

いくたひの人のときけん下紐をまれにむすひて哀とそ思ふ

返しかはりて

いくたひか人もとくへき下紐の結ひにしぬる心ちする身を

八講する寺にて　大江爲基

おほつかな君しるらめや足引の山下水のむすふこゝろを

返し

けふきくを衣の浦の玉にしてたちはなるをも香をは尋ねん

又　ためもと

昔をもかけてわすれぬ物なれはたもつに玉のかすやまさ覽

返し

かす增る玉とはかけしいたゝきの一つの玉もわろき物かは

今よりはなといひしかとをともせて五月もすきぬ六
月ついたちころに橘につけて

まちくらし五月のほともすきにけり花橘はいかゝなりにし

七月七日說法せさすときゝてやりし

たまさかに浮木よりける天川龜のすみかをつけすや有へき

おなし人わつらひしころ藥王品を手つからかきてこ
れ形見に見よくるしきをねんしてなんかきつる後の
世にかならすみちひけといひたりしに

此世より後の世まてと契りつる契りはさきのよにもして晃

かへし　ためもと

程遠き此世をさしていにしへにたれことてしてまつ契り劍

此人みかはになりてくたりしにあふきしてやりしに
すはまにかきつけし
惜むへきみかはと思へとしかすかの渡りと聞けは只ならぬ哉
そこともいはてさし置かせたれはゑし共をよひてみ
せけれはその人のかくせしといひけれはかくいひけ
る
おしまぬにたゝにもあらぬ心して別をわふる人をしらなん
とあるになをしらす顔にてその比はしめて通ふ人あ
りときゝしかはいひし
只ならぬ別をわふる心をはおしまぬよその人もしれとや
くたるへきほともちかうなりぬるをいかてたいめん
せんといふをさもあらねはくたるとて
人しれす袖は濡つゝわかるとも絶しとそおもふやつ橋の水
返　し
八橋のくもての水の別れなはとひわたりつることや侍れん
くによりいひたる
宮古にてあひみさりしをつらしとは遠き別の後そしりける
返　し
あひみても別の後のつらさをはたゝ我のみや思ひしらまし
老たる人のわつらひしころおなし人とふらひにきて
物語しあかしてかへりて二日はかり有てよへもまい
らんとせしかとみたり心地わりなくてなんとて
なかむらんことを思ひてねぬる夜の月は心も空にてそみし
返　し
君かみし有明の空にあらねともひとりなかむる月はへに覧
ほとへて月のあかきにきたるにかたたかひに人のお
はせしかはひんなうてかへしてつとめてやりし
かへりけん空はいかにそ月影のやとをすきしも哀とそみし
返　し
晨明の月や我身と思ふまてみしにかなしくなりし空哉
しくれいたうふる日おなし人
神無月今はめなれてつけすともしくるゝたにも空にしら南
返　し
よとゝもに詠る空のけしきにてしくるゝ程もしりぬへき哉
文の返事をせねはおなし人
忍へ共慰むかたもなきよりは厭ふもしらぬ身とならはなれ
かへし
いとふへき浮世をたにも厭はねは人をはさしも思はさり覧
かくてのみすきぬへかめることとみたり心地もいまは
にやおもほゆるとて
程をたに人のつけ南きえぬ共よにへましかは今日そと思ん
かへし
定めなき此世のほとをつくすとも後の世まても猶頼めかし
おなし人のもとに葵をやりたりしを年へて祭の日お
こせて
としことにむかしは遠くなりゆけと
といひたりしに
あふひはけふのこゝちこそすれ
此人攝津國とられたりしをとひたりしかはよにあり
へんと思はぬ身に侍れはかゝる事もなけかしうもあ
らぬを母の思ひなけかるゝをみるなんたゝならぬな
と哀なる事ともをかきて

吉野山月の影たにかはらすはありし有明によそへてもみん
かへし
ありし夜の有明の月は曇らめやよしのゝ山に入はてぬとも
又ほとへてあれより
ありはてぬ身たに心にかなはすて思ひの外の世にもふる哉
とあるを見るにみかはのかみなりしほとのありさま
ちゝの左大弁のおほえのほとなとおもひいつるにい
とあはれにて
心にもかなはぬ事はありやせし思ひの外の世こそつらけれ
わつらひしに昔よりもといひたりしに書きつけてお
こせたる
昔より浮世に心とまらぬに昔よりものを思ふへき哉
返し
浮世にはなにゝ心のとまる覧おもひはなれぬ身とも社なれ
わつらふこと重くなりまさりて常もえをとつれてい
ひたる
程へつゝ覺束なきか悲しきは今消えぬともたれかつくへき
とおもふなんあはれなると有返事に
ありてたに覺束なきはある物を消なん後のよはいかゝせん
又ほとへてあやしきみたり心地のなを今はかきりと
思ふにもきこえぬはおほつかなけれはなとあはれな
る事ともをかきて
程遠きしての山路にましりなはおほつかなさも増り社せめ
かへし
かはかりもあらしと思へは死出の山越なん計悲しきはなし
なを心ちおこたらす死ぬへきなめりかならすみちひ
き給へとて
今はとてうき世をよそにみるまても花橘はたのみてをみん
返し
たのむへきいろかはらめや橋のたゝか計りの契りなりとも
心にもあらぬ事出きて久しうをとつれていひたる
跡たえて忘れはつるをつらしとも思はぬ程になりにける哉
かへし
つらしとも思はぬ人や忘るらんわすれぬわれは猶つらき哉
この人のるいなる人なはよろつかくれなしまめやか
になりにたる事の嬉しきことゝて
なをさりの心も今はたえはてゝわれをとはねと哀とそきく
かへし
我ははや忘れはてにき猶さりの心はたへぬ人こそありけれ
親のなくなりたるころ雨のふりたりし日とふとて
人の世はなしときく社悲しけれふるもあはれにみゆる雨哉
かへし
雨雲とつゐになるへき世中はふるとみゆるもけにそ悲しき
この人法師になりてのころ正月七日ひけこに若菜を
いれてやるとて
春日野にけふの若なをつむとても猶みよしのゝ山そ□しき
かへし
小夜更てひとりかへりし袖よりもけふの若葉は露けかり覧
ものへいきし道に雨のふりしかは蓑をかりてかへす
とて
みかさやま麓の露のつゆけさにかり心みし野へのみのくさ
文やるをかなの返事は今これよりといふをいかゝは

ふへきとのたまへりし人にかはりて
篇にきのふ頼めしけふの日を暮れなはあすをまたや待へき
はつせにまうてゝ道にふかをき川といふかいとあさかりしかは
さゝら波空のかけさへかくれぬにふかをき川となに流れ劒
おなし道にはつかしけなる男のいきあひたりしかはわりなき心ちして
うきかけを行かふ人にはつせ川くやしき道にたちにける哉
おもひかけたる人すゝをおこせて
戀わひてしのひにおつる涙社手につらぬける玉とみえけれ
かへし
ちつらなる涙の玉もきこゆるを手につらぬける數は幾らそ
さかなき人思ひかけけりときくにやかていへり
あら波のうちよらぬまに住のえの岸の松陰いかにしてみん
かへし
すみのえの岸のむら松陰とをみ波よするかを人はみきやは
おなし人
岩代の松にかゝれる露の命たえもこそすれむすひとゝめよ
返し
結ひてもたえんを松のはゝかりにかけはにてみる露の命そ
いちこをひわりこにいれておなし人
くれなゐの袖包ぶまてぬける玉何のもるとも數へかねつゝ
かへし
もりつらん物はことにて紅の袖にはなにの玉かとそ見ん
あるきんたち庭をかりてかへるとて
今すこしこしけき森のあたりには人たのめにて雨もらし兇
かへし
こすはこすこしけき森の下なれは雨宿りする人もあるらん
大原の少將入道わらはにおはせしころあきしろき扇をおこせ給ふて
白露のをきてし秋の色かへてくちはにいかて深くそめまし
きくち葉にしてたてまつるとて
秋の色のくちはもしらす白露のをくにまかせて心みやせん
おもひかけたる人のふなをおこせて
さまかへて世を心みんあすか川戀路にえつるふな人そこれ
かへし
飛鳥川淵こそせにはなるときけ戀さへふなになりにける哉
久しうをともせてしはすつこもりに
大江ためもと
賴みつゝとふを待まに春きなはわれ忘るゝになりも社すれ
かへし
春きなはわするゝ數やまさらまし年社せめて嬉しかりけれ
はやうすみしところにかしら洗ひにいきて
古郷の板井のなかはすみなから我みつからそあくかれにける
かたゝかひにきたる人のとのゐ物をいたしたれはつとめていひたる
よやとりのあしたの原の女郎花移りかにてや人はとかめむ
かへし
宿かせは床さへあやな女郎花いかてうつれるかとかこたゝ
雨のふる夜つほねに人のありしつとめて大原少將入道のなてしこにさして
撫子のくれなゐふかき花の色も今宵の雨にこさやまされる

御返し
雨水に色はかへれとくれなゐのこさも増らすなてしこの花
風いたうふく夜ほかにありてつとめてとこなつにさして
霜やをく風にや靡く床夏のよるのうへ社とはまほしけれ
かへし
風におれ霜にかるとも床夏の我世のことはたれか知るへき
秋わつらひしをとひにきたるをうたかひておなし人
かりにくる人にとこよみせけれはよを秋風におもひなる哉
かへし
秋風は雁より先に吹きにしをいとゝ雲井にならはならなん
後拾 津の國にいきていひたる
戀しきに難波のこともおもほえすたれ住よしの松といひ劔
返し
なをきくになかゐしぬへし住吉の松とはとまる人やいひ劔
おほやけところにてはえまいらしなといひて
住のえにはねうちかはす蘆鴨のひとりにならんほとの秋風
かへし
はねかはす程も袖なる葦鴨のうきねなからん思ひ出やせん
おもひうたかふにやかていふ
かたかりし岩にねさせる松の上に儚き露な結ひをかせそ
かへし
種まきて松そ淋しき岩の上にねさしてのみやゝまんとす覽
又いひたる
虫のちをつふして身にはつけす共思ひ染つる色なたかへそ
かへし
むしならぬ心をたにもつふさては何につけてか思ひ染へき
ゆめ〳〵ちひきのいしにてをといひたりしに
まつとせし程にいしとは成にしを又は千引にみせ分かてとや
かへし
松山の石は動かぬけしきにて思ひかけたるなみにこさるな
つねにあふこともかたけれは
我戀はさかさまにこそなりにけれ昔を今になしておもへは
かへし
つらきいまを戀し昔にかへしては思ひ出たにもなくや成南
恨むへきことやありけん今日を限りにて又はまいらしとていぬるか昔つかたをとつれたるにやりし
あすならは忘らるゝ身に成ぬへしけふを過さぬ命ともかな
返し
後れゑて何かあす迄世にもへんけふを我日にまつやなきまし
さてひころをとせぬをこれよりはなにしにかはおとろかさん程へてすまひ草にさして
すまひ草たふるゝ方に成ぬるか心こはしとかつはみえつゝ
返し
何にかは心もとらんすまひ草思うつるにかたこそあるらめ
ことにおもはぬ女のもとに物いみにさしこめられていひたる
身はこゝに心は空にとふ鳥のこにこもりたる心地こそすれ
かへし
空にのみならへる鳥の心にも猶このめにはさはるとそ見る
今はたえにたりといふ所にありときゝてやるみわの山のわたりにや

宿は松にしるしもなかりけり杉むらならは尋ねきなまし

かへし

人をまつ山ちわかれす見えしかは思ひ惑ふにふみすきにけり

人の車にてとのにまいりしをみておなし人

門の戸の車にのりて出しかは思ひにむねの内そこかるる

かへし

門のとの車には病のりぬへし思ひのうちにいらぬ身なれは

兵衛佐なる人を思ひうたかひていひたる

柏木はけしきの森になりにけりなけきを今はいつちやらまし

かへし

かしは木やならはのいかになるとてか［　　　　］

竹なる霜のとけて下草の露とみえしに

詞花
竹の葉に結へる霜のとけぬれはもとの露ともなりにける哉

かへしおなし人

さゝ結ひ解て露とはなりぬれともとにおつれは霜と社みれ

おなしころ物へゆくほとにかたゝかひに人のきたり

しかはといふ物をいたしてほかにわたりてつとめて

やりし

ひとりねのをしの上毛の霜よりもおきては我そ思やりつる

かへし

小莚にそめし羽ころもしきつとも上毛の霜は誰かはらはん

恨むへき事やありけんさうすくせさせし人の久しく

をともせぬにしゝしておひに結ひつけてやりし

結ふ共とく共なくて中たゆるはなたの帯のこひは如何する

かへしあふきなとくしたれはにや

結へとかとくとかおひのゆふかたをまつに扇の風そ涼しき

又かへし

とくとまた扇の風の急かぬにうらをわれなに結ひめやなり

世の常なきをいひて法師にやなりなましとおもへ

ともおもひすてぬことゝいひて

世中をみなむなしとはしりなから浮身の君にさはるへき哉

かへし

続後撰
我もなし人もむなしと思ひなは何か此世のさはりなるへき

恐ろしきめみて外にあるころそら事を人のつけけれ

は

玉ほこの道のそらにて消にせはうき事ありと誰かつけまし

かへし

つけつらん人の誠にあらすとも浮身のとかになり社はせめ

笋をおさなき人におこせて

おやの爲昔の人はぬきけるを竹のこにによりみるもめつらし

かへし

雪をわけてぬくこそ親の爲ならめこは盛なる爲とこそきけ

京極殿の池にかゝり火ともして人〳〵こ舟にのりて

あそふ藏人爲資かかちとりしたるにやる

波さはく風にまかせて行舟の帆かけにみゆるかちとりや誰

かへし

思へ共いはねの浦をこく程は磯のなのりそせられさりける

同殿の池水に業遠が筏のかた作りてうかしたりしを

みて

君か御代流れて澄る水の面に千年をさしてみゆるいかたし

正月に業遠かうつえして大盤所へ入たりしに

いかなりしつえの盛の日影ともたかことたまとみえも分れす

業遠

かへし

わきてこそ思ひかけさす山端に我ことたまの枝もきりしか

殿のうへ(倫子)の春日にまいらせ給し道にて伊與守兼資かむすめの花をおりて

手もたゆく折てそきつる梅の花物みしられは共にみんとて

かへし

山かくれ匂へる花の色よりもおりける人の心をそみる

殿(道長)に侍從といひし人に業遠か物いひてのちとをほとにくたりてかへりてをとつれさりしかはいととほうて業遠にいひし

きてなかはあはれならまし鶯の花によそなる春もありけり

六條の源中將と經房の中將と花みんと契りてにはかに源中將はみたけ精進していかにそ花見にはありき給ふやといひたるをいか丶いふへきとありしにかはりて

我はまた思ひもた丶す花櫻君やみたけの山もこゆらん

御前の花さかりなるころ御物いみにてほかにわたらせ給へるころおりてまいらせし

おりこそあれ匂ふ盛に憧かれてかへりて花のちるを恨むな

一條殿櫻御覽しにわたらせ給ひしに。なやむことありて御供にまいらさりしかは。かへらせ給て。ちりたる花をつ丶みてたまはせたりしに

さそはれぬ身にたになけく櫻花ちるをみつ覽人はいかにそ

帥殿にしたしき人のゆかりなりしは。えまいるましとなんあるとき丶しかは。里にある母上の御前のおほせことにて花のさかりなるを見せまほしくなんあるとおほせられたりしにまいらせたる

(續後撰)もろともにみるよもありし花櫻人つてにき丶春そかなしき

さてまいりたれは庭につもりたるをかきあつめて雪まいらせんとていたされたりしに

雪をのみ花とはみしかうちかへし花も雪かとみゆる春哉

春の月あかき夜きんたちあまたまいりてあそふに內より御物忌にこもりたまへとてきたれはかたき物をとてみちかたの辨

いつる空なき春のよの月

とありしに

古郷にまつらん人をおもひつ丶

櫻おほかる山寺にみんと思ひてまうてたるにみなちりにけりその夜月のあか丶りしに

花の色はちるをたにみて歎に兒なくさめにみん春の夜の月

五月ついたちころゆふくれに時鳥のなくをとの丶御前おなしきほと。かなうたよめとおほせられしに

めつらしくけふきく聲を時鳥とを山里はみ丶なれぬらん

五月五日右大將殿よりさうふあはせしたる扇にくす玉を丶きてこれかかちまけさためさせ給へとありしにとのは左大臣におはしまし丶かは

左にやたもとのたまも結ふ覽右はあやめのねこそあさけれ

との丶御前物かたりつくらせ給て五月五日あやめ草をてまさくりにして。けちかうみるをむなつしをとて

我宿のつまとはみれと菖蒲草ねもみぬほとにけふはきに兒

これか返しせよと仰せられしかは

あやめふく宿のつまともしらさりつねをは袂の玉と社みれ
けちかうなりてあかつきにおとこ
かくからに暫しとつゝむ物乍ら鴫のはかきのつらきけさ哉
返　し
百羽かきかくなる鴫のてもたゆくいかなる數をかゝんとす覽
かゝることきこえて。すけなうもてなされて物なけ
かしけにて女
（新古）いかにねてみえしなるらん曉の夢より後は物をこそ思へ（うたゝねの集）
女院のひめ君ときこえさせしころ。いしなとりのい
しめすを參らすとて
すへらきの後への庭の石そこは拾ふ心ありあゆかさてとれ
御障子の繪に前栽植させて男女のみたる所とのゝ御
前の
ほりうふる草葉に虫の音をそへて千代の秋迄聲をきかせん
とて又よめとおほせられしに
花をみて野へに心をやりつれは宿にて千代の秋はへぬへし
殿のうへ法輪にまうてさせ給へりしに月のいとあか
ゝりしにすけかたの辨
にしへ行月を慕ひてこしほとにふかき山にもいりにける哉
女房この月をみ給ふらんやとありしに
をちにみし山の此方にみる時も月にはあかむよもなかり鳬
なりまさ(經政)つねふさ(經房)の中將なと笛なとふきあ
はせて。とよらのてらのと口すさひたまへる。とこ
ろからにや。いとおかし。こよひのやうなる夜また
ありなんや。いみしきよのさまかなと　相方弁
忘られん身をはおもはす小倉山今宵の月をおもひいてなん
とありしに
君をこそまつはしのはめをくら山月にそ月も戀しかるへき
ほとへてわたくしにまうてたりしに。かの君のもと
にかよふ人のまうてたりしにつけてやりし
君はきて思ひやいてし月みれはおも影さへそそふ心ちする
かへし　すけかた
行かへりみるたひことに戀しくて月なきときも思ひ出そせし
九月晦日業遠かいひたりし
けふをなを同し心におしまなんあきはてぬとは誰も思はし
返　し
暮はつる秋の一日をとゝめてんいくとなかさの心ならまし
同人丹後に通ひしころ。はしたてのすなこをえさせ
たりしに
ゆきかへる道のたよりにうしろめた濱の眞砂の數や知にし
十月に前女院の菊合に
露よりも玉のうてなに菊の花うつろひてこそ色まさりけれ
庚申の夜菊を
月影のしもにや菊はうつる覽よるこそ色のてりまさりけれ
同題を人にかはりて
をきてみる菊の眞垣の露の上にこかねの涙の影そうつれる
もみちみにありきしに。ひとりみるにあかすおほえ
しかは
誰にかはつけにやるへき紅葉はを思ふ計りにみん人もかな
十月に賀茂にまうてたりしに。ほかのもみちはみな
ちりにたるに。なかのみやしろのか。またちらてあ
りしに

しめのうちの風たによらぬ紅葉かな神の心はかしこかり鳧

元輔か昔すみける家のかたはらに清少納言すみしころ雪のいみしくふりて隔ての垣もなくたふれて見わたされしに

あともなく雪ふる里のあれたるをいつれ昔の垣根とかみる

おほやけ所に内にもとにもあまたゐて物語してこよひよりは思ひきこえんあすふみたてまつらんといひし人にほとへてたれとはなくていはせし

あすよりはと宵に頼めしことの葉を明けても待し今も恨めし

人をおもひかけたるを女もその心をえてものこしにこゑをかへていらへをしてつとめてやるにかはりて

我はきみ昔は我ともしらさりき誰と名のりて誰をとひしそ

さぬきのかみこれすけかめのよきかつらもたりとき ゝてかりてといひしかはむつましう語らふなめりかゝることまてにいふはとめなんいふといひしに

疑ふをくるしと思はゝ玉かつらかみをかけても誓ふ計りそ

かへし

思ふ事なきにもあらす玉葛かみをはかけしいなわつらはし

ひさしうをとせぬ人にうりにかきて

とへと思ふ人の音せてうりふ山久しくなるはつらきわさ哉

せいき昔といひし人のかたはらのつほねなるに經よみ給へといひしかはくらし火をともさせ給へといひしかはあふらをやるとて

消ぬへき法の末には成ぬ　みをともしてそきくへかりける

ある寺に八講きゝしにかたはらのつほねに男なくなりたる女のいみしう泣くけはひのせしかは

袖の上にうけしほとけき玉ならは衣のうらもぬれやしぬ覧

とのにはなさくらといふ物語を人のまいらせたる包紙にかいたる

かきつむる心もあるをはな櫻あたなる風にちらさすもかな

返しせよとおほせられしかは

みる程はあたにたにせす花櫻世にちらんたにおしと社思へ

まつりの日あるきんたちの葵にたち花をならしていひたりし

いにしへのはなたち花をたつぬれは

とありしに

けふあふひにもなりにけるかな

おはりへくたりし七月ついたちころにて。わりなうあつかりしかは。相坂の關にて。しみつのもとにすゝむとて

越はては都も遠くなりぬへし關のゆふ風しはしすゝまん

大津にとまりたるに網ひかせてみせんとてまたくらきよりおりたちたるおのこともあはれにみえしに

朝ほらけおろせる網の綱みれは苦しけにひくわさにありける

それより舟にのりぬふくろかけといふ所にて

古に思ひいりけんたよりなき山のふくろの哀なるかな

七日えち川といふ處にいきつきぬきしにかりや作りておりたるにようさり月いとあかう波をとたかうておかしきに人はねにたるにひとりめさめて

彦星はあまのかはらに舟出しぬ旅の空にはたれをまたまし

又の日あまつといふ所にとまるその夜風いたうふき雨いみしうふりてもらむところなし賴光かところな

りけり壁にかきつけし
草まくら露をたに社思ひしかたかふるやとそ雨もとまらぬ
水まさりてそこに二三日あるほとにひをゝえてきたる人ありこのころはいかてあるそとゝふめれは水まさりてはかくなんゐるといへは
網代かと見ゆる入江の水深みひをふるたひの道にもある哉
それよりくひせ川といふところにとまりてよる鵜かふをみて
夕やみのう舟にともすかゝり火を水なる月の影かとそみる
又むまつといふところにとまる夜かりやにしはしおりてすゝむにこ舟にをのこふたりはかりのりてこきわたるを何するそとゝへはひやゝかなるをもひ汲みに沖へまかるそといふ
沖中の水はいとゝやぬるか覧ことはまなゆを人のくめかし
京いてゝ九日にこそなりにけれといひてかみ
宮古いてゝけふこゝぬかになりにけり
とありしかは
とをかの國にいたりにしかな
くにゝて春あつたの宮といふ處にまうてゝみちに鶯のいたうなく森をとはすれはなかのもりとなんもうすといふに
鶯の聲するほとはいそかれすまた道なかのもりといへとも
まうてつきて見れはいと神さひおもしろき處のさまなりあそひしてたてまつるに風にたくひて物のをとゝもいとゝおかし
笛の音に神の心やたよるらん森のこかせもふきまさるなり

そのころ國人はらたつことありて田もつくらし。たねとりあけほしてんといふときゝて。またますたのみ社といふところにまうてたりしに神にまうさせし
賤の男のたねほすといふ春の田を作りますたの神に任せん
かくてのち田みなつくりてきとそ
和泉式部と道貞となかたかひて。そちのみやにまいるときゝてやる
うつろはて暫し信田の森をみよかへりもそする葛のうら風
かへし　しきふ
秋風はすこくふくとも葛のはの恨みかほにはみえしとそ思
みちさたみちの國になりぬときゝて。いつみしきふにやる
ゆく人もとまるもいかゝ思ふ覽別れて後のまたのわかれは
かへし　しきふ
別れても同し都にありしかはいとこのたひの心地やはせし
みちさたくたるとて道なれはおはりにきて物語なとしてかく遙にまかることの心細きことなといひてかへりぬるにさるへき物なとやるとて
こゝをたに行くかたのとは思はなんこれより道のおく遠く共
かへし　みちさた
いささらはなるみの浦に家居せんいと遙なる末のまつとも
一條院にさふらひし左京の命婦いつみのかみのめにてくたるにいひたる
都路の心もしるくしほりして君たにあると思ふみちかな
返し
しほるともたれか思ひし山道に君しもあとをたつねける哉

又これよりいかてみつからなといひて
あはしてふ道にたに祉あふときけ只にてすきん人のつらさよ
かへし　　命婦
山をたに思ひ隔てぬ道なれはこれよりすきん心地やはする
秋の野をあるきしさか野にもおとらすみえしかは
花の色は都の野へにあらね共いつこも秋のさかにさりける
またすゝきのみおほかる野にていたうまねきしに
いつかたにゆきとまらまし花薄をちにも招くこちか共みゆ
野ちかき處による泊りたるに虫のいたうなきしに
一夜たにあかし侘ぬる秋の夜になく〳〵すくす虫そ悲しき
たかちか（擧周）まさむねかむすめに物いひそめて。ほともなう。みたけにまうてゝかへりては京にしてしはしもなくてくたりたりしかはいみしくてやらせし
心にもあらてそ歎くよしの山君をみたけのほとなかりしを
又のちに
出てこし道のまに〳〵花すゝき招く宿のみかへりみそせし
かへしあねの和泉式部
とまるへき心ならねは花すゝき只秋ゆくとまたせてそみし
もとありける所みまさかになりていくともにまかるとて京へいくをほいなうやおもふといひし女房に
契り劔昔はこゝのなかなれはくめのさらやまさらに恨みん
又女房のおとこの京へのほりたるにふみをおこせたるにいはせし
いつくまて思ひ出にしいまはとて忘れゆき劔道そゆかしき
同國にて又女房の人にものいひけるつとめて聞こえてなといひたる返しにかはりて
行違ふ關のこなたそ歎かしきいかになるみの浦そと思へは
三河のかみすけたゝくたる道にてしはしゐてわかき人のかたに扇おこせて
あふきかと猶たのみてそ人しれす心をよせて君にまかする
かへしかはりて
あた人のゆくてにならす扇かな風たつへくもあらぬ所に
任はてゝのほりしかあはれにて
心たにとまらぬかりの宿なれといまはと思ふは哀れなり鳧
尾張よりのほりて殿にまいりたりしに弁内侍まいりあひてところの物語なとしてまかてゝつとめて
昔のと今のといはゝおほかるをまつなに事を我かたりせん
返し
ふる事も新しくのみおもほえて今は昔もきゝやわかれし
たかちかゝ藏人のそみしにならて内記になりしかは左ゑもんの命婦のもとに奏せよとおほしくて
わか歎く心のうちをしるしてもみすへき人のなきそ悲しき
さて藏人になりていとまなうてえいてさりしかおほつかなくて裝束やりしついてに
何事を思はんとこそおもひしかみぬもくるしき思ひなり鳧
白馬日式部亟にてわたりしをみてまたの日まさむねかむすめのいひたりしさりてのちなれは
いつくにかあの留りけん行すくるおほよそ人と且は見なから
返しかはりて
行すくる程をたそとややすらひしおほよそ人の哀なりしに
その人齋院長官かふきみといふ人にあひぬときゝてたかちかにかはりてやりし

千早ふる神のかみとや思ふ覽人はひとゝもきかぬところに

返しあれの和泉式部

そのかみの人をも人と思はねはさしはなれたるしめの榊葉

つかさめしにもれてむつかしく思ふに櫻の花をみて

思ふこと春とも身にはおもはぬに時しりかほにさける花哉

おなし春花みにありきて

我宿のなけきは春もしられねはいてゝそ花の盛りともみる

あまとなるへしときく人にすゝをおこせて一條院左京命婦

羨ましいかなる人かわかさめぬ夢まほろしのよをそむく覽

えたる人にかはりて

つらぬける玉の光をたのむともくらくまとはん道そ悲しき

七月七日めにやらんとたかちかゝいひしにかはりて

うらやましけふをまち出て七夕のいかなる心地して暮す覽

はやうすみしところにいますむ人ほかへなんいぬへきをさらぬ先にこゝにてたいめせん古里のみゆきは猶あらんなんよかるへきといひしに

忘れにし昔や更にこひられんよにふる里のみゆきせりとも

人のもとにとき〳〵くる男のおかしけなるうりもてきてえさせたるをいかにいはましといひしにかはりて

つらけなる景色とみるにうりふ山ならし顔にもうちいたる哉

人のむすめの幼きをけさうしけるにまた手もかゝすとてかへりこともせぬにやらんとたかちかゝいひしにかはりて

雜詞

和歌の浦のしほまに遊ふ濱千鳥ふみすさふ覽跡なおしみそ

おとなになるほとをしはしまてと親のいひたるにやらせし

高砂の松とてやとりすくすとも我をこすへき波もこそあれ

又荻にさしておなし人に

風そよく荻の上葉の露よりもたのもしけなきよをたのむ哉

又

まろねする夜はの白露おきかへりめたにもみえて明す頃哉

又おなし人にゆふくれに

夕暮はくものいとなむすかきかな宿もなきみの心ほそさに

又十月はかりやらんといひし

霜枯の野へに朝吹く風の音の身にしむはかり物をこそ思へ

たかちかゝあきのふかむすめに物いひそめて新藏人にていとまなくてえいかぬにやらんといひしにかはりて

曉のしきのはねかきめをさめてかくらんかすを思ひ社やれ

返し中將の尼

夢にたにみぬよの數や積るらん鴫のはねかき手社たゆけれ

同人に雪のふるひやらんすかへしかは

みよしのゝ山のはつ雪なかむらん春日の里も思ひこそやれ

かへし中將尼

たかめやる山へもみえす思ふより杉の木の葉やゆき隱す覽

此人をこゝにむかへてすみしを。はかなしとゑしてむつかしきことゝもなとありしに。そのころはせにまうてたりしに。もみちをおらせ見せんと思ひしにかうはらたちにしか物にさしてをきたりしかは。かれたりしをみて

苞にとておりし紅葉もかれに凩のいたく吹きしまきれに
春になりてほかへわたりしにそのまへの梅のさきたりしをおりてやりし
いか計なとかはへまし咲花の散ん迄たにまてはまてかし
ちこをこゝにむかへてをきたるに駒のかたをつくりておこせて
わか野へになつかぬ駒と思ふにはてなれにけるを慰めにせん
かへし
其駒は我に草かふ程こそあれ君かもとにはいかにはやれは
この人こと男のもとにやりけるふみをもてたかへてきたりしにたかちかにかきつけさせし
たれとまたふみ通ふらん浮橋のうかりしよひもうき心かな
しりたる人のかもにまうてあひてよきみちをしつゝかくるゝか御前にてはともの人をかくしていたるをしりにけりとしらんと思ひて
たゝならすよき道しつる事社あれ面て並ふるけふは嬉しな
おなし御社にこもりしにくるれは鳥とものかしかましかりしかは
夕暮はこすゑの床やまかふ覽これかかれかとなくからす哉
月のあかゝりしに
あまてらす神の光やそはるらん森のこのまに月そさやけき
正月に長谷寺にまうてし道にて子日なりとてしる人まつひきなとしてみのをの所みしかは
思ふ事みなみちすから子日してみのゝを山のまつをひきみん
くらまにまうてしにきふねにみてくらたてまつらせしほとにいとくろうなりしかは
ともす覽方たにみえす鞍馬山きふねの宮にとまりしぬへし
尾張になりてめつらしけなう物うき心地して十月にくたりしにせき山のもみちの袖にちりかゝりし
あちきなく袂にかゝる紅葉哉錦をきてもゆかしと思ふに
むすめの大津まてきてしはしはこゝにあるへしとき ゝてかへりぬるにこよひなを舟いたしてんとてよもすからこきゆくにかうともしらしかしと思ふにあはれにていもねられぬにかりのなくを
雁もこく舟は雲井になりぬとも都の人はしらすやあるらん
すくなかみといふ所になりにけりとかちとりいふをきゝて
千早振すくなかみてふ神代よりかみかへとはいふにやある覽
叉車にてゆく道に河におち入たるさふらひのあるに哥よみてとらせんと女房とものいひしに
ふからゝぬ水の底にや沈むへきあさしや人もいかにみつ覽
返し左近大夫頼忠といひしものなり
おり立て君に仕ふるけふなれは淵をも知らす惑ふなるへし
國にいきつきたりしにはつ雪のふりしにかみ
初雪とおもほえぬ哉このたひは猶ふる里をおもひいてつゝ
返し
めつらしきをはふるすそおもほゆる行かへりみる處なれ共
送りにきたりし人〳〵京へかへるをみてとまりにし人のおほつかなうおほゆるにうらやましけれはゆきふりし日なり
ゆきかへる人に心をそへたらはわか故里をみてもきなまし
參河守菅原のためよしくたるとてきてはやうはらか

らにすみし人なれは昔の人あらましかは近きはとに
てよはらましなといひてかへりてうさの使にいきた
りけれは丁子ゑんなとさま〳〵つゝみておこせて
唐國の物のしるしのくさ〳〵をやまと心にともしとやみん
返し
始からやまと心にせはく共おはり迄やはかたくみゆへき
又の年の春丹波になりかはりてのほりぬ殿の三十講
にまいりたるにみちまさの君のあはれなるいろにて
つほねのまへにわたりたまひしにきこえし
墨染の袂になるときゝしよりみしにそふちの色はこひしき
秋雨のいみしくふる日はきの花につけて人にやりし
つまこひにしかはしからむ秋萩を雨さへしほるおしき比哉
あさかほの花をとくみんとてつま戸をあけたれは露
いみしうをきたるを
朝顔のとくゆかしさにおきたれは我よりさきに露はゐに鳬
大覺寺のたきとのをみて
あせにける今たにかゝり瀧津せの早くきて社みるへかりけれ
十月にもみちのいとこきと移ろひたる菊とをつゝみ
て人
秋はてゝ今は盛のもみち葉と移ろふ菊といつれまされり
かへし
紅葉はの散をも思ふ菊ならてみるへき花のなきもなけかし
はつせにまうてたりしにならに泊りたる夜月のあか
ゝりしに
いくよへて荒し都のみかきねそみかさの山の月はかはらて
春門のかたをみいたしたれは。さねなりの兵衛督お
りてたち給へるを思ひかけぬ心地して梅のたちえや
とかきて奉りしかは。うちゑみてなんおはしぬると
ありしのち。ほとへて殿にかへり入たりしかは弁内
侍まいりあひて兵衛督なんかゝる事のありしを。そ
の哥をしらさりしかは物もいはてなんやみにしのち
に人にとひてなんきゝし。さはかりのはちなんなか
りし。あふことあらは。かくなんわふるとたにかた
れとなんのたまひしといふを殿の御前きかせ給て。
いみしくわらはせ給き。さてまかてゝ二日はかりあ
りて。しはすのうちに。せちふんしたりしあしたに
弁内侍に一夜の御ものかたりこそ思ひいてらるれと
て
便あらはきてもみよとやかすめましけさ春かけて梅の立枝を
とのゝ御前御覽してみつからおほせられたる
春とにきてもみよといふけきしあらは霞を別て花も尋ねん
たちかへりまいらす
誠にやたつぬるおりはありけろと待心みん花のちるまて
夜ふくるまゝに月のくまなうすみゆくをみな人はね
たるにひとりなかめて
みつるよりか計あかき月はなしこれを驚ろく人のあれかし
おかしきゑふくろを人のかりやりしをみちまさのき
みの道にあひてとり給ふてけれはふたをたて
うせぬ共みはなきならし二ついみは君かとりつるな社惜けれ
くらまにて月のあかゝりしに
鞍馬山月の光のあかけれはいかなりし夜のなにかとそみる
佛法僧となく鳥をきゝて

みつなからたもてる鳥の聲きけは我身一つのつみそ悲しき
はりまよりきたる人のはりをおこせていひたる
山をくる人も昔はある物をちひさきはりとおもはさらなん
かへし
雲ゐよりくたをか□すけつへし海の底なるはりをえつれは
一條院の御そうそうは七月八日にそありしみしにい
とあはれにて
今宵こそ七夕つめもなけくらんけさの別はつねのことにて
冬になりて。ものへいくみちに。一條院に人もなけ
れは。車をひきいれて見れは。前栽の霜枯たるも。
よろつ哀なり。ひたきやをみて
後拾 消にける衛士のたく火の跡をみて烟りとなりし君そ悲しき
ものへまうて道に河に影のうつりたりしをみて
河水に沈めるかけをかつみてもうく社ものは思ひしらるれ
地こくゑにはかりに人をかけたるをみて
罪はよに重き物そときゝしかといとか計りは思はさりしを
丹波守なくなりて。日の誦經にすとて裝束ともとり
いてたるにむつきにきたりしかはねりかさねのした
かさねのあさやかなりしに
かさねてし衣の色のくれなゐは涙にしめるそてとなりけり
夜ふかき月をなかむるに虫の聲のみして人はみなね
しつまりたるに定基僧都のはゝのいひたる
雲ゐにてなかむるたにもある物を袖にやとれる月をみる覽
返し
在明の月は袂になかれつゝかなしきころの虫の聲かな
かりのなくを

別てもかへる秋たにありといはゝ假のよなから嬉しからまし
そのころはりを人のよけれはやるなりといひたりし
に
あしよしのはりめもわかす今はたゝ藤の衣はとちて社きれ
きりいみしくたちたるつとめて人のいひたる
なかむへきかたたにもなき秋霧に哀はかりやまきれさる覽
返し
涙のみ霧ふたかれるころなれは心のそらのはるゝよもなし
まへなる櫻の木もみちしたるに
涙のみしくるゝやとの梢にはほかよりさきにもみちしに鳧
十月にやのうへにこの葉のちりつみたるを風のふき
ちらしたるをみて
つまならてあれ行閨の上とてや木の葉を風のふきちらす覽
しろき杖のをかしき前栽のつゑとかきつけたりける
をみて
獨していかなる道にまよふ覽千年のつゑも身にそはすして
梅の花もさきにけり櫻の花みなさくけしきになりに
たりと人のいふをきゝて
君とこそ春くることもまたれしか梅も櫻もたれとかはみん
花をみて
こその春ちりにし花は咲にけりあはれ別のかゝらましかは
おなしころ花をおこせていひける
我宿の櫻のさきてちるを見はもの思ふ人もなくさみなまし
返し
散花のつねなきよとはみえぬれと猶そむかしの春は戀しき
美作三位花につけて

花の色も宿も昔にたかはしをかはれる物はころもなりけり

かへし

花にたに心もかけすあるしなき宿は昔のこゝちやはする

五月五日同三位

墨染の袂はいとゝこひちにてあやめの草のねやしける覽

返し

あやめ草けふのたもとの玉とては涙をかくるねのみなり凫

同日定基僧都のはゝ

なかめつゝけふ墨染の袂にはあやめにあらぬねやかゝる覽

返し

いつとてもねのみかゝれる袂にはけふの菖蒲も別れさり凫

月のあかき夜

五月雨のそらたにすめる月影に涙の雨ははるゝよもなし

ほとゝきすをきゝて

わかれにし人はいかなる時鳥しての山ちのものかたりせよ

秋石山にまうてゝ鹿の聲をきゝて

つまこふる聲そ悲しき別れては鹿はいかなる心地かはせし

又つとめてかへるに山かけなる露の朝日のさしたるに猶きえてあるを哀なりしおりのこと思ひいてられて

續詞　朝日さす山した露のきゆるまもみし程よりはひさしかり凫

山科のわたりに家のいたく荒れたるを弟に後れて此ふたとせにかうなりにたると人いふをきゝて

後拾　獨こそあれゆく床はなけきつれぬしなき宿はまたもあり凫

ものよりかへるにまちとりいそきし人もなきかあはれなれは

故里をみれはものゝみ悲しきに家をいてぬる身とやならまし

同しころはつせにまうてゝよる泊りたる所に草をゆひて枕のれうとてえさせたり諸共にまうてたりし旅のありさま思ひ出られて

ありしよのたひは旅ともあらさりきひとり露けき草枕哉

かりのゆきかへりなくに

あはれなる旅の空とや思ふ覽かりやをすきすなく聲のする

道にていとくるしけれは野にふして

はかもなき野への露とや消なまし烟とたにも誰かなすへき

きとのといふ處に宿らんといふをたれそと思ひてとへはいはせし

後拾　名乘せは人しりぬへしなのらすはきの丸殿をいかてすきまし

いそのかみにて

行くとては我もめなれぬ石の上便にふるゝなに社ありけれ

かへるにうちの渡りにさき／＼宿りし所のけからはしきことありといひしに

日をへても昔みなれし網代木によせしとなせそうちの川波

雪いみしくふりたりしに石山に涅槃會にまうてしに打出の濱にていと深くつもりたりしに

關こえてあふみちと社思ひつれ雪のしら濱こゝはいつこそ

その日禪林寺僧正にきこえし

別れけん昔のけふをいつくにてさかさもしらて我すくし劔

そう正御返し

稀にてもけふにしあへはすくし劔罪は春邊の雪にけぬらし

又あまてらにて涅槃經とくをきゝて

新後拾　今はとてときける法の悲しさはけふわかれたる心地社すれ

梅の花につけて定基そうつの母
よそへてもみまくほしきを春かけて待こし梅の匂ひ香れる
かへし
みてもかつあはれなる哉梅の花春にはまたやあはんとす覽
また僧都の母
もしもまた春にあらすは梅の花誰みよとかはさくへかる覽
又これよりかへし
忍ふへき人なき身こそ悲しけれ花をあはれとたれかみさ覽
梅の花にかさして人のおこせたりしに香のわろかり
しかは
春毎に櫻たひとそきゝしかと梅をかさせるかそつきにける
五月五日語らふ人のもとよりくす玉をおこすとて
いつ迚も戀ひぬには無し今日はいとゝかくと計の菖蒲にもみよ
かへしとうしみのねにしたるかとになかゝらねは
同しくは永くひけかし菖蒲草ねをかへてさへ短きやなそ
六月つこもりかうしんなりしに
夜もすからおきける露の凉しきは秋のとなりや近くなる覽
せみのもぬけ見て
さえて後我心みるわきも哉かむりしからのあはれなるかと
秋のはしめにとこなつにつけて定基僧都母
とこ夏の花をのみゝてけふまてに秋をもしらて過しける哉
かへし
花はさは床夏にのみにほはなん人の心に秋をしらせし
石山にまうてしにせき山の杉のわつかにみゆるをち
かくなりぬやとゝへはすきのあなたいと遙に侍ると
いひしに
すき〳〵ていくら計かすきてゆくあまねき門のしるしさか南
關山にてしはし休むとて尾張にたひ〳〵くたりしあ
りさま思ひいつるに心ほそけにてあるか哀なれは
昔みし關の關守それならすわれとしらすなのちのなのため
ひころこもりたるに夜たにゝ猿のなきしに
たよりなき旅とは我そ思ひつゝきをはなれたる猿もなく〳〵
かへるへきほと近くなりてかはつのなきしに
歸るへきほとの近さを惜むかとかはつの聲のあはれなる哉
歸るみちにあしおほかる所に水鳥さま〳〵にあそふ
水鳥はをしもたかへもかよひ鳬芦鴨のみはすまぬなるへし
かたふたかりけれはとまりてかへるせたの橋のした
を舟にてすくとて
宮古人まつほとすきて思ふらんせたのはし舟今そこきゆく
あまにならは諸共にと契りし人にさもいはてなりに
たりしかはいひたる
諸共にきんやきゝやといさなひて法の衣を思ひたてかし
かへし
人を社まつはさきにと思ひしか後るゝはかり悲しきはなし
橋造りたるひしりの河原にてはし(橋)のゑ(會)すへし
ときゝていきたれはせいありとてきよ水にてなんす
るといひしかはうちまうつとて
けふ社は嬉しき橋と思ひつれ渡しはてすはいかさまにせん
まうてつきたれはみなことはしまりて花なとちらす
ほとなりしに
春ことに櫻さくやとまつよりは佛にちらす花をこそみめ
女院にけい(啓)すへきをありてまいりたりしに一條

院御をおほせられいてゝまさひら(匡衡)か御文つかうまつりし程の事とも仰せられていみしく泣かせ給ひしかはかなしくおほえてまかてゝつとめてまいらせし

御返し

千載 常よりもまたぬれそひし袂かな昔をかけておちし涙に

同 現とも思ひ別れてすくる世に(な集)みしよの夢をなにかたりけん

正月につかさ召始まる夜同し院に雪いみしうふりしにまいりてたかちか(挙周)か事啓してまかてゝまいらせし

思へたゝかしらの雪をはらひつゝ消ぬさきにといそく心を

いつみをとまうしゝになりて。のちのつとめてそ御かへしはたまはせたりし

拂ひけるしるしもありてみゆる哉雪まをわけて出る泉の

とおほせられたる御かへしに

人よりもわきて嬉しきいつみ哉雪けの水のまさるなるへし

夢かたらぬ日といふ物のありしをかきうつしてをきしついてに

夢にたにみえすなりけん後よりは是や形見にならんとす覽

櫻の花をおらせて定基僧都の母

つれ／＼と物思ふをも忘れ鳧いくかもあらし花をみるまは

かへし人／＼のいと多くなくなりしころにて

みる儘にいとゝものゝみ悲しけれ散行花によをたとへつゝ

ある寺にかねいしかいみしうおそろしけにみえしを

後のよをかねてみる社悲しけれかゝる炎にいるにやある覽

五月はかり草のしけきなかに山吹のさきたりしを

我宿は八重むくらかと見しほとにやへ山吹の花そにほへる

むすめのもとによりきよか文おこせたりけるにまたてもかゝすといはせたれは只鳥のあとをみんといひたるに

浦なれぬ千鳥のあとはありもせし空に翔るを人はみよかし

又おなし人

おきつしまたまもかり舟浦風にしつ心なき物をこそおもへ

かへし

たまもかる沖津島人こち風にいたくもわひしうらなれぬ覽

つねに返事もせねは思ひたえなんと思ふにとゝまらぬ涙とやうにいひたる返し

とゝまらぬ涙計そあはれなる思ひたえなん人はひとにて

さかしらなりといひたれは又の日

さかしらの嬉しかりしを同しくはよきさし出ありと聞はや

返し

よからはそよきさまさるといらふへき引立もなき心地社すれ

夜ことにすのこにゐあかすをみいるゝ事なけれはかへりてつとめて

おきてふしふしてはおきそ明しつる哀やすくや人はねつ覽

返し

歸りつる程はいぬるとみえつるをいつのまにかは起てふしつる

風ふき雨ふる夜れいのすのこにゐあかしてかへりつとめて

綿津海に夜半ともいはす世を過す蜑の舟もかくはこかれし

かへし

こかる覽を舟も波に沈むとてあまよの風のふきもきえつる

けちかくなりてふみおこする返事をむねやみてせね

は
胸ひしけなけく歎きもありふれはあく心地する物としら南
かへしれいのかはりて
程もなくあくときく社ゆゝしけれとてもかくても歎かしのよや
かくてありつきて後なに事にゑするにかよる〳〵の
みきてあか月にいとゝく歸るにすこし日高くなりて
いてぬるつとめて手箱のふたにくた物をいれておこ
せてけさはいとあかくなりつれはしたなくおほえつ
ることゝいひけれはそのふたにかきつけてやりし
あけはなと悔しきことか浦島のこはいつよりの心つかひそ
小鷹狩しになんゆくとてたちとりにおこせたりしに
むすひつけさせし
千載 狩にそといはぬさきより賴まれす立とまるへき心ならねは
この人の車をかりてさかのに花みに出ける人のかへ
すとて色〳〵の花をさしておこせたるをいかゝいふ
へきといひしにかはりて
花の色はゆきて見す共秋の野のおりつるまをそ待へかりける
おなし人のもとにすゑのりかきたるをみていはせし
八月十五夜のことなり
君ならぬ人來りせはとひてましこよひの月はとにみゆやと
法輪にこもりたりしに曉にしとみをゝしあくる人の
鹿のいと近くもありけるかなといひしに
朝ほらけ萩をあくとみえつるはかせきの近くたてるなりけり
雨ふりもの心ほそかりしに
さらてたにとふ人もなき山里に雨にやことをつてんとす覽
大井川に舟のこきわたるをみて
雨やまぬかけをし渡る高瀬舟をちかた人のくるかとそまつ
くつはむしの近くなきしに
秋の野をわけてはかりは誰かこんくつはの聲の近くする哉
あるきんたちのおはしてさかのに花みつるついてに
そこねなん心さしといふたよりとはおもひそとの給
ひしに
便にもこすはいかゝはまたれまし花みつる共いふそ嬉しき
月のあかき夜大井川しろくみえわたりけるに
大井川しろくてらせる月をみてこかねの池をおもひ社やれ
野分したるあしたにおさなき人をいかにともいはぬ
おとこにやる人にかはりて
新古 あらくふく風はいかにと宮城のゝ小萩か上を露も問へかし（ひとの集）
法輪にこもりたりしに風のいみしうふきしに
山おろしの風の聲のみ烈しくて非堰の水はもれとねられす
檀林寺の鐘のつちのしたにきこゆるをいかなるそと
とへは鐘堂はなくなりて御たうの隅にかけられたれ
はかうきこゆるそといひしにききのおほしをきあ
はれにて
ありしにもあらす成ゆく鐘の音つきはてんよそ哀なるへき
入相の聲にもの心ほそかりしかは
儚くてくるゝ入相の聲きけと我世つくとは覺えやはする
いしやまよりかへりしにあはた山にて日くれてまつ
もたる物をくれにけりとて泊りたるに月もいまたい
てぬほとにて
足引の山路はくらくなりぬとも月をまつにてうらむとそ思
大將殿にむすめのさふらひし時あまにとてめを給は

らせたりしに

綿津海の年ふる蜑の身なれ共かゝる嬉しきめそみさりける

おほんかれ〳〵にならせ給へりしころ。さか野に花みになんゆくとの給はせたりしに。むすめにかはりて

わすれ行心の秋のつらけれはわれこそさかの花をたにみね

、おなし人の久しく音つれたまはさりしに。れいのかはりてきこえさせし

忘れなは我もわするゝわさも哉わか心さへつらくもある哉

御返し

片時も忘れぬ物をゝしなへて忘るといふやたか身なるらん

とのたまはせたれはまた

人をのみわすれさるらん心にて昔をたにも思ひ出よかし

おなし人ひさしく音つれ給はてなとうらみぬとのたまはせたりしに

恨むとも今はみえしと思ふ社せめてつらさのあまりこそけれ

又たのめたるにほとへて

頼めつゝこぬよはふとも久方のつきをは人の待といひかし

御返しかはりて

今はなと待とたにやはいはれける頼むる事はつきもせね共

おなし人ある所の五せちのかしつきに。おほしうつりたりしに。れいのかはりて。きこえさせし

天照すとよのひかけに面なれて山井の衣いつれめつらし

そのとのゝ姫君の御乳母ちよはといふによしみちかものをいひそめてやる人にかはりて

よもすからちよはたれとか契りつる我為に社短かゝりけれ

おなし大將とのたえ給ひて後つねにこしさふらひゆきてとのゝおほしいてゝおほせらるゝ事なとかたるをきくにめつらしくおほえて

思ひたにかけぬに聲のきこゆれはさらに昔のこゝち社すれ

ちこを人にとらせておほつかなけにおもひたる人五月五日くすたまをやるにかはりて

いかさまにおひなりぬ覽菖蒲草みぬまはねのみたえぬ袖哉

むすめのかたに夜更けてかとたゝく人のありしをあけねはつとめておとこ

さしてまつ人をはしらて八重葎心かとなくたゝきける哉

かへしかはりて

八重葎さしはへてやは來りけんかとあくからに憎くも有哉

あるやんことなき人このかとより車をひきいれてかたはらなる人の家になか垣のあきたる處よりおはせしにきこえし

人をとふたよりとは見て濡衣きたるかとこそ嬉しかりけれ

かねつねの中將花につけて人に

いとまなみ山への櫻みるほとに春は仇なる名そたちぬへき

かへしかはりて

心こそ野にも山にもあくかれめ花につけては思ひ出よかし

おなし人雪のふりてほとなく消えたるつとめて

みちふりのたより計はまちもせんとけてはみえし雪の下草

あるやんことなき人しのひて物の給ひてほとへてをとつれ給へりける返事にかはりて

人にたに語らさらなんうたゝねの夢計にてたえぬとならは

なしさまなる人夏うす氷なとありける返しかはりて

ひとたにもまたしらぬまの薄氷みわかぬ程にきえねとぞ思
　ゑしたることありなとやきゝ給へらんむすめのもと
　にともたゝの宰相
和田の原たつ白波のいかなれはなごり久しくみゆるなる覧
　かへしかはりて
風はたゝ思はぬ方にふきしかとわたの原たつ波もなかりき
　四月はかりにむかへなる人のこ家に公信中納言のお
　はすときゝし夜うの花につけて車にさゝせし
卯花のかけにしのへとほとゝきす人と語ふ聲さへぞきく
　たかいへの中納言のおはしける女におとこの忍ひて
　文やりたりけるをきゝつけて使をとらへてうちなと
　して文をはとりてやり捨てられたりときゝて女のも
　とにつかはしゝ
いかなりしあふせなり劔天川ふみたかひてもさはきける哉
　かへし中納言
　叉これより
そら言よふみも違へす天川さらはつきてぞかたうたれにし
なみ〳〵の事にも非す天川さてはたせをもかくぞうたまし
　なてしこのすゝきになりたるをみて
おひかはるこや撫子の花薄まねかは人もゆきてみつへし
　くらまにて衣のたきといふところを
秋毎に紅葉の錦きてみるをころものたきといふにぞ有ける
　菊を植て花さくへきほとに遠くいにし人を思ひいて
　ゝ
うつろはんことをたにみて菊の花ゆく[illegible]道の露をこそ思へ
　なる時雨のいとあらゝかにふるにまつ人ありける人
　にいひし
いとゝしくめたにもあはし獨ねにおとろく計ふる時雨哉
　夜ふかき月のいるまてながめて
みれはたゝわかよかと社思はゆれ西へかたふく山のはの月
　人のかうふりするところに人にかはりて
くらゐ山たかくあふけは萬代の雲のうへまてみえのほる哉
　あるあまの袈裟のおろしこひたりしにやるとて
導かん佛のいてんあしたまてこれはかせふの衣とをしれ
　わかき人のあまになるときゝてやりし
浮世とはかつ見乍らも背かぬにいかはかりにて思ひたち劔
　こよみえさせたりける人の心かはりにけれはしはす
　のつこもりに返しやるに人にかはりて
忘らるゝ程もしらてやすくさきまし是に月日のかつなかりせに
　忘れにたる人の常にまへよりわたるをいかにいはん
　といひし人にかはりて
今はかくよそのよそにぞ涙川わたるとみるにぬるゝ袖かな
　とき〳〵わたる所によいこはのあまたあるをひとつ
　こふにおしみしかはいてたるまにとりてかへりたる
　をいかてか消息なくてはといひたりしに
盗む共こは惜からぬ事としれこふにはしらすいかにかせん
　はつせにまうてゝみちに泊りたる家の松の木に杖を
　つかせたりしを見て
老にける我身はなにゝかゝらまし松も千とせの杖はつき見
　のりなかゝ母の春ころいとをこひたりしを。けから
　ひたることとありしころ。いまこのほとすこしてとい
　ひてのち忘れて七月七日思ひいてゝやるとて

なにをしてやなきのまゆをわすれけん

おなじ人ひさしくをとせて物語ゐのおかしきをおこせたりしに

ゐみ乍ら猶社つらき君なれやかきたえてやは音せさるへき

この人の國にたゝといふ所にかうともいはていにけるをきゝてやりし

今とたにいはんはいとや難かりし只に行き劔人のつらさよ

六月ふたつありし年の後の六月七日たゝの源賢法眼のいひたりし

常ならはけふいそかまし七夕のあまの羽衣うるふへき哉

かへし

織女のまつに月日のそふよりはあまり七日のあらはあれかし

四月ついたちまて散らぬ櫻ありしを道明あさりにやりし

續千 またちらぬ花に心をなくさめて春すきぬともおもはさり覺

かへしあさり

春はさは花よりほかのことやなき野への霞のたちも社きけ

またこれより

おしめ共たちやはとまる春霞ねたしのこれる花をおもはん

五月ついたちころあさり

後拾 時鳥まつほとゝこそ思ひつれきゝてのちもねられさり覺

かへし

まことにそうちたにふさてあかしつる山郭公なくや〳〵と

おなしころ山寺にこもりたりときゝしにやりし

續後撰 やま深くなくらん聲を時鳥きくにまさりておもひこそやれ

あさかほゆふかほ植てみしころ

ひるまこそ慰むかたはなかりけれ朝夕かほの花もなきまは

秋の夜ひとりおきあかして

諸共におきゐるよはの露たくは誰とか秋の夜をあかさまし

人のいたく思ふは罪深くなる物をかうおほゆることゝいひたる人にいかにいらへんといひし人にかはりて

續 深からぬ心のしふは何ならしまとをいはぬ罪はありとも

四月一日くらまにまうてたりしに鶯のなきしを

鶯のみゝなれにたる聲よりはやま時鳥けふねなけかし

久しくをとつれぬ人のきてまヽちかき荻にむすひつけていにけるをつとめて見てやりし人にかはりて

後拾 今宵社よにある人はゆかしけれいつこもかくや月をみる覽

きたりん(紫陀林)に八かうきゝしに殿のをむしさうあひて葵にかきておこせたりしその歌は忘れにしかへし

蓮葉の露をはをきてそのかみに人にあふひも嬉しかりけり

つの國に通ふおとこのめのもとに今なんいくといひてのちもまたありときゝし人にかはりて

後拾 ありてやは音せさるへきつの國の今そいく田の森といひしは

花みに俗ひしりのたう(堂)の庭に花いみしうちりつもりて人かけも見えす。ひしりの拂ひつくろひし思ひいてられて

植をきしぬしなきやとの庭櫻ちりつもる共たれかはらはん

いか(五十日)のほとなるちこにくす玉をやるとて

をひたらんほとそゆかしき菖蒲草二葉より社玉とみえけれ

花さかりに雨いみしくふりしころ御前の花いかなら

んと思ひて殿にまいらせし
ちりやすき雨にやうつる櫻花みるまの色をたれにとはまし
との丶御前御かへし
またちらて雨に匂へる花かさをいかてか雨のふりてきつ覽
またおほせられたる
いはね共み丶なれにたる春雨に花のこと葉はふりに社ふれ
花みにありきしに山の井といふ寺の櫻のふたきある
をもろともなる人
山のゐのふた木の櫻さきにけり
といひしに
きみにかたらんこぬ人のため
又いみしくちるところに庭のまもなくおかしくみえ
しに
千載
踏めはおしふますは（て）ゆかん方もなしちりつむ（こゝろつくしのやま集）庭のはな櫻哉
とのにさふらひし女房をかたらひしに久しうをとも
せさりしに
續後撰
契りこし心のほとをみつるかなせめて命のなかきあまりに
法花經の心をよみし
序品
いにしへのたへなる法をときけれは今の光もさかと社みれ
方便品
ときをかていりなましかは二つなく三つなき法を誰廣めまし
譬喩品
もゆるひの家をいて丶そ悟りぬるみつの車はひとつなり覺
信解品
親とたにしらてまとふか悲しさにこの寶をもゆつりつる哉

藥草喩品
法の雨は草木もわかて注け共をのかした社うけまさりけれ
授記品
つき〳〵の佛におほくつかへてそ蓮を開く身とはなるへき
化城喩品
後拾
こしらへて假の宿りにやすめすはさき（まこと）の道には（をいかてしら集）猶惑はまし
五百品
同
ころもなる玉ともかけてしらさりき夢（ゑひ集）覺て社嬉しかりけれ
人記品
諸共にさとりをひらくこれこそは昔契りしるしなりけれ
法師品
すみかたき心しむろにとまらねは法とくこそ稀になるへき
寶塔品
大空に寶のたうのあらはれて法のためにそ身をはわけ丶る
提婆品
わたつみのみやをいてたる程もなくさはりの外になりにける哉
勸持品
身にかへて法をおしまん人にこそ忍ひ難きを忍ひてはみめ
安樂行品
名をあけて褒もそしらし法をた丶多くもとかし少くもせし
涌出品
いかてかは子よりも親のわか丶覽老ては若くなるにや有覽
壽量品
ありなからしぬるけしきは子の爲にとめし藥をすかすなり覺
分別品
佛にてえたるこふすを數へすは塵計たにしらすあらまし

隨喜品

世中にみてし寶をえんよりは法をきくへきことはまされり

功德品

たもちかたき法をかきよむ報にはみそすみきよき鏡之けり

不輕品

みる人を常にかろめぬ心こそ終に佛の身にはなりぬれ

神力品

空までに至れるしたの誠をは法をたもたん人そしるへき

屬累品

流れても仇にすなとそかきなつるうるを難き法をとけとて

藥王品

ともしつる我身ひとつの光にてあまたの國を照しつる哉

妙音品

風雅 こゝにのみありとやは見るいつくにも妙なる聲に法を社とけ（き集）

觀音品

身をわけてあまねく法をとく中にまたわたされぬ我身悲な

陀羅尼品

風雅 法守るちかひを深くたてつれは末の世までもあせしとそ思

嚴王品

佛には逢こと難きゆつるとてこをゆるしてそ親もすゝめし

普賢品

行末の法をひろめにきたりける誓ひをきくかあはれなる哉

維摩經十喩

このみはあつまれる蟻のことし

うきなから身には譬へん水の泡のためしにとらはきえぬへき哉

水のあはのことし

新古 雨ふれは水に（には）うかへるうたかたの久しからぬは我身なり兒

ほのほのことし

夏の夜の火影にまとふ鹿みれは只みつからの事にそ有ける

はせを葉のことし

秋風に碎くる草の葉をみてそ身のかたからぬ事はしらるゝ

まほろしのことし

新古 夢やゆめ現や夢と分かぬ哉いかなる（つれの）世にか醒めんとす覽

かけのことし

水に浮ふ影は中にもあらね共それはありとは賴むへきかは

ひゝきのことし

いつまてか聲もきこえん山彦のよろつにつけて物そ悲しき

うかへる雲のことし

行ゑなく空にたゝよふ浮雲にけふりをそへんほとそ悲しき

いなつまのことし

いなつまの光とゝまる程みれは我身計の物にそありける

かたらひし人の久しくをとせさりしに

心にもあらすうきみの命哉きえなはたゆるほとをみましや

ある寺に入かうせしにひころつほねならひにていひそめたる人つねに文おこせなとしてありしか秋のこひしきことなといひたるに

まことにそ西に心をかけしより秋を忘れぬ身となりぬへき

おなし人のかうする處にまかりあひて歸にあの人の車に後れにしをまたの日しはしまちつけさりしと恨みたりしに

めくり劍はとそ悲しき後れてはひとりや六の道にまとひし

ある所の女房のおもはんと契りしかとたえて昔わす

れにき今よりといひたりしに
續後撰 今よりといふ行末もいかゝあらん（ならん集）昔契りしものわすれせは
またさやうなる人に
忘れしとかたみにいひしとの葉をたか空言になしてよか覽
定基僧都のはゝ家作りて渡らんにはまつせうそこせん池のおかしきもみせんと契りしかと音もせてわたりにけりときゝて七月七日にやりし
天の川けふや〳〵とまちたれは早くわたりて君はすむとか
正月七日いなりのわたりにすむ人すきといふものまうしわたりわかなをおこせたりしに
春日野の若なかとこそ思ひしにいなりの山のすきもつみ覧
おなし子日なりしに
何れにかまつてかけまし子日野に若なもけふはつむ（へかり）覧
子日しにゆきたる人の小松にあをのりをむすひつけてこれをやうみ松といふらんといひたりしに
松山に波のかけたるものみれはあやうかりける子日なり覧
三月卅日に花のちるを
おしむにし花の散すはけふも只春ゆくと社よそにみましゝ
山寺にて逆修せしに四十九日になる日
思ふにそ悲しかりける我ならてけふをは誰かとふへ（かりける）
思ひかけたる人のいひたえて年へて文やらんといひし人にかはりて
年へぬる思ひとたにも思へかし今にわすれぬ心なかさを
しはすに月のあかき夜きゝに雪のふりかゝりたるを
月影は花の色かとみゆれともまたふるとしの雪にさりける
正月七日若な人にやるとて
春日野のけふなゝ草のこれならて君をとふひはいつそ（共なし）
はちすのつほみたるを身にてなすひの恐ろしけにふしつきたるをかほにしてほうしのかたをつくりて人のおこせたりしに
極樂の蓮と身をはなすひにてうきはこの世のかほに（さりける）
さもいひつへき人のあきのかみになりしにつかうへきようありてくれをこひたりしにたゝすこしのくたし文をしたりしかはかきつけてかへしゝ
中々にわかなそおしき杣川のすくなきくれのくたしふみ哉
人に忘られたる人の五月五日枕のうへに菖蒲を人のをきけるをみて
續拾 かはくまもなき獨ねの手枕に菖蒲のねをや（いとしあやめのねをや）いとゝそふへき
かへし
ふたりねしとしかはるまて菖蒲草とはぬを我も哀とそみる
秋くものゐをいみしくかきたるをみて
我宿のあるしも今は歎くまし雲のやへかきひくもなくみゆ
春ためよしかきて物語なとしてへいちうか花のしつくにぬるとみしとよみたるとなんとかとみてかたりてかへりてのち久しくをとせさりしに
春なれと花のしつくやみえさりし涙をかけていふ人もなし
親なくなりたりしそうをとひたりしにいひたる
いかにそととふにそいとゝ紅の涙の色のかすはまされる
とありしかへし
墨染の色は常にてくれなゐの涙やしほのかすはまされる
雪のいたくふりたるにほうりんにまうてゝつとめてかへるに雪に大井川の水まさりけるとておのことも

衣ぬきてこしゝにこしにこそたちけれときゝて
かち人の渡るをみれは雪深み大ゐの川もこしにそありける
三世佛に花たてまつるといふ題をよみてと人のいひしに
おしむには心もけかる同しくは佛にちらすはなとなしてん
二月にくらまにまうてしに岩まの水のしろくわきかへりたるか雪のやうにみえしに
（玉葉）きえはてぬ雪かとそみる谷川の岩まをわける水のしら波（く集）
つとめてかへるにきしのかくれ所もなきをみて
身をかくすかたなき物は我ならてまたは焼野のきゝす乙鳧
人におとろきていとはなやかになきしに
み狩する人も社きけ春の野にたかくるとみてきゝすなく覧
梅の花の折ておさなき人のすひつにさしたるを
うしろめた風ふかすとも埋火のあたりの花はちりやまさ覧
おなしころほうりんにまうてたりしに花はまたさかぬに雨の雫の花のちるとみえしに
つねはたゝちるたにおしき山櫻ふりにふるともみゆる雨哉
花みにありきて
（新千）花にたにあはてやと社思ひしかいまは命にまかせてをみん
いみしうちりまかふを
おしみにときつる心もあるものをみるさへにしもちる櫻哉
庭につもる花を風のふきちらすを
ちりてたにみるへきものを櫻花庭をさもはくかせの心よ
菊の花おかしき所ありとていぬる人のをそうかへるにいひやる
（後拾）きくにたに心はうつる花の色をみにゆく人は歸りしものを（せし集）

春はなみし山寺をみれは庭にもみちのちりつもりたるを
花ちりし庭に紅葉の積れるをいつれまさりておしとみえ劔
ある寺のゆやのまへにしはといふ物を多くをきたるなかに紅葉のましりたりしを
背しはにませてかりけん紅葉はもえぬ計の色もかひなし
人のもとよりくらきほとにひをおこせたるに
網代木によるとはきゝし物なれとひを暮すとはけふ社（はみれ）
ものへゆく道に川におのこともおりたちて棹して水をかきゆるかせは波のたつやうにみゆるをなに業するそとゝはすれはいをせく乙といひしに
白波のよする汀とみえつるはいをの命のたつにそありける
山寺に籠りたるにかるのゝなかに火のみゆるをなき人のことすると人のいひしに
心ほそたれかけふりとなるな覽遥にみゆる野へのともしひ
草の中に蝶のしにたるをみて
浮世には長らへしとそ思へ共しぬてふはかり悲しきはなし
いみしう世のはかなきころ久しくをとせぬ人に
（後拾）きえもあへす儚き頃の露計ありやなしやと人のとへかし（はと集）
とをき程におとこのいきたる人九月はかりに風のいたく吹夕くれにいひたる
まつ人のうちくるこまは音もせて風の聲のみあらきやと哉
かへし
あらく吹風を心にうらみつゝひとりしぬらん袖そ悲しき
同し頃ほうりんに籠りたるに風のいたく吹きしにいもねられて

重出 山嵐に風の聲のみはけしくてゐせきの水はもれとねられす
　十月はかりにはつかしきいまゝいりのあるころもの
　つきて恐ろしけなる聲をし人のありしかははつかし
　うてかくいひし
霜枯の虫もねよはくなるころになにの聲とか人のきくらん
　舉周かちこのいかの物をせさせられたりしに
常葉山こたかき松をはしめにて枝さしそはれちよの春〳〵
時〳〵くるおとこの淵は瀬になるといひたるにいは
せし
後拾 ふちやさは瀬にはなりける飛鳥川淺きを深くなすよなりせは
　年ころ恩ひかけたりけれとえいひいてゝありける人
　のけしきみせてのちにおとこ
忍草しのひし折もありにしをあかぬは人の心なりけり
　女にかはりてかへし
今更になにかは露のもりつ覓しのふの草のさてもやみなて
　きたりんにありしひしりの竹の枝にはちのすくひた
　るをおこせて釋迦佛のゝ給なりとて
我宿の汀に生るなよ竹のはちすとみゆるおりもありけり
　とありし返し
末の世は竹も蓮になりけれは佛にうとき身ともおもはし
　同寺に五月に水まさりてなかれぬへし釋迦佛よかは
　にわたし奉らんとひしりのいひしに
にこりなき横川の水に君すまはこなたの岸はいかゝわた覽
　花みしに皆ちりけれは口おしうて庭なるをかきあつ
　めて
玉葉 花を社ちらさぬさきにとたつねつれ雪を別ても歸りぬる哉
　久しくをとせぬ人におきにつけてやりし
をとつれぬ人の心の秋やなをいかなる荻のはかはそよめく
　ちくせんのかみみちなり國にてなくなりぬときゝて
　まかり中にきたりしか思ひ出られて
風雅 歸るへき程を（と集）たのめし別れこそ今は限りの旅にはありけれ
　むすめのなくなりたりしに服すとて
同 我ためにきよと思ひしふち衣身にかへてこそ悲しかりけれ
　おなしころ源大納言うせさせ給へりしに御むすめの
　みまさかの三位にきこえし
親のためおつる涙やいかならんこは世にしらす悲しかり覧
　年ころつかひし人のひたちへくたるとてすみし方の
　前に菊を植をきしか花さきたるをいまたかくともし
　らしかしと思ふに悲しけれは
東路の人しるらめや植をきし菊の露たになくきえぬとも
　風吹に木のはのちりしを
ちりまかふ紅葉をみてもねをそなく我凩の風のつらさに
　又のとしの秋すみしかたの前栽いろ〳〵に咲みたれ
　たるにのりたゝかか〔か衍歟〕きて哀なることなといひ
　て
植をきし人は露よりあたなれと花の昔の秋にかはらぬ
　といひしに
朝夕にわか撫子のかれしよりかきほの露はあきもわかれす
　大はら少將入道わつらひ給ひしにまうてゝ近きほと
　にあるに月のあかゝりして
すみかまの煙は空にかよへとも大はら山の月そさやけき
をもくなりまさり給ふとありしに物のみ哀なるにき

しのたちゐせしに
山ふかくすまふ雉子のほろ〳〵と立ゐにつけて物そ悲しき
うせ給ひしかは命なかきも心ほそうおほえて
新拾 いとへ共あまり憂身のなからへて人にをくるゝ數も積りぬ（つもるらん集）
御いみに籠りたるそうとものれうにひきほしゝてた
てまつりしに
ひきほして袂（本ノママ）にかはくと思へ共涙そまさるみるめたえては
天王寺にまうてしになからの橋をすくとて
後拾 我はかりなからの橋はくちに鳬なにはのこともふるゝ悲しき（さイ）
すみよしにて
末のよはあせもしぬらん住吉のまつ共神をみたらましかは
西大門にて月のいとあかゝりしに
こゝにして光をまたん極樂にむかふときゝしかとにきに鳬
聖靈院に夜ふけてまうてたりしにみあかしのあかく
見えしに
よを照す法のともしひなかりせは佛の道をいかてしらまし
舍利おかみ奉るとて
續拾 わかち（れ）劔昔にあらぬ涙こそなをさりなから（らず）うす悲しかり鳬
かめ井をみて
こうをへて救ふ心の深けれはかめ井の水はたゆるよも（あらし）あらし
太子の額き給ふとて額にあて給ひけるいしをみて
たちゐける跡を見社悲しけれ石やその世にあへらましかは
塔の露盤のこかね太子ぬり給ひてこの光うせんおり
佛法もうすへしとちかひ給ひけるかくもりて見えし
に
みかきけんこかねの色もくもりつゝ法の光もきえぬへき哉
念佛寺にておきあかすあかつきにしきのなくをきゝ
て
よもすから我とるかすの亂るゝを鴫の羽かきかきやつく覽
かへるに風のいとあらくていしへといふところにと
まりて日ころあるにかりのなきしを
波まゝつ舟は泊りにやすらへと風にはへては雁そきこゆる
水鳥のおほくうかひたる所をみて
水鳥のうきてうき世をすくすまにいくよのせゝを心みる覽
供なりしさふらひのあの寺にてにはかになくなりに
しにかへるに聲もせぬかあはれにて
出てこし日やは限りと思ひ劔歸るにかはるたまたにもなし
よにとく車にのりて京に入ほとに
貝ひろふ浦はなにともみえねとも都のかたみ嬉しかりけり
擧周かいつみはてゝのほる儀にいと重うわつらひし
に住吉の給ふ（たゝりイ）と人のいひしかみてくらたてまつられ
しにかきつけし
後拾 頼みては久しくなりぬ住吉のまつ此度（の）はしるしなんみ（せてよ）（見せなん集）
詞花 千代へよとまたみとりこにありしより（さてもわかれんことそ集）只住吉の松を祈りき
かはらんと祈る命はおしからてわかると思はん程そ悲しき
たてまつりての夜。人の夢に。ひけいとしろき翁。こ
のみてくらをみなからとるとみておこたりにき。
いかのほとなるちこをちゝのむかふるにやゝ人にか
はりて
別れともしらす顏なる俤にこひしとたにもおもはすもかな
うふきぬをとゝめたりけるを守りにする物なゝりと

てこひたりけれはやるにかはりて
みる程の守りと思へはみをころもこたに形見のなきそ悲敷
そのちこの父なくなりていもうとのもとにあるをむ
かへけれはすてはなちてし物はなにしにかやうにと
いひたるかへりことにかはりて
撫子はおなし垣根と思ひしを露さへきえんものとやはみし
山里にゆきたりしに送りの人／＼かへりて二三日を
とせさりしかは心ほそうおほえて
送りをきて人もみえねは古へのしはの舟ともおもほゆる哉
いつへきほとは近く蛙のなきしを
歸るへき程の近きをおしむかと蛙の聲のあはれなるかな
王昭君か胡の國にいきつきての思ひよみてと人のい
ひしに
（後拾）なけきこし道の露にも増りけり馴にし里をこふる涙は
ないしのかうの殿の御さうそうのつとめて
もえつ覽よるの煙のさひしきにけさ浮雲のたつをこそみれ
皇太后宮うせさせ給ひて四十九日の御佛のれうのた
まとて人／＼めしゝにまいらすとて
別れにしたまはかへるにかたけれは涙のみ社袖にかゝれる
入道殿おはしまさて後みたうにまうてたるにいと淋
しく池のうき草しけかりしに
古のかへにたにこそありときけ池にうつれる影もみえなん
かねふさの君春まつ心の哥よみてこれさためよとあ
りしに正月一日きこえし
いつしかと霞める空のけしきかな春まつ人はいかゝみる覽
梅のつくり花にさとのをとりませたるをみて
何れとかわく／＼かる覽梅の花かをたにつくる人のありせは
人のもとより櫻の枝をいとおほきにおりておこせた
りしに
我ためにおれる心はうれしくてはなおしますとみゆる枝哉
櫻おほかる山寺みんとてまうてたりしかとちりにけ
りその夜月のあかゝりしに
（重出）花の色はちるをたにみてちりにけり慰めにみん春のよの月
四條中納言のこゝに花のなきおりおかしき花みえは
おこせよとなんありしといふ人のありしかは花をつ
たへよとてやりし
櫻さへさかりになへて成ぬとも花なき宿はしらすやある覽
返し　中納言
我宿におとらぬ花はありやとも今はたつねしなき名たち覺
さてのち人春つきたる花のおかしきにつけてきこえ
し
（續拾）山かくれ人はたつねす（とひこす集）櫻花はるさへすきぬたれにみせまし
植をかは人もみよとそ思ひしを花さくまてもあれはあり覺
人のもとよりはすのうき葉に露をゝきて蟬のしにた
るをいれておこせて
なにこともうきてうき葉に空蟬の涙は露とをきてきえける
とてありしおりしも子とものいきたる蟬に緒をつけ
てあそふをとりてをきかへてやるとて
空蟬の露の命のけぬへきをたま／＼むすひとゝめ[illegible]る哉
かたらふ人の七月八日のよ物語してあか月にかへり
しにつとめて贈りし

新拾 織女のきのふ別れし空よりも明るはけさそわりなかりける

前栽を植しにくはれたるをみていにし人をのか家の花のをかしきをみせはや殘らすなりぬめりしこそいとおしけれといひたるにいろ〳〵の花をみてやるとて

我宿をせめてみたれは秋の野の花てふ花は秋にしもあらす

人の家うるをみにゆきてかへりてともかうもいはねはあれよりみおとりしたるか音もせぬはといひたるにやる草ふかくはきおほかりしところなり

しけかりし萩のやふ祉戀しけれしかはかりたに我宿はなし

ものへまうつる道にすまひ草の花のいとおほかるを佛に奉覽といへはわかおほうおらんとあらそふをみて

ゆく道の左右なるすまひ草かたわけて祉とるへかりけれ

とのゝうへの八幡よりかへらせ給ふとてかとのまへすきさせ給ふに風いたうふきしに庭の尾花いたくまねきしをおりてをひてまいらせし

我宿の庭の尾花のおれ返りまねくとたにもみてやすきぬる

のちの九月つこもりの日　かねつなの中將

なか月の日かすまされる年たにもあかぬは秋の別之けり

かへし

秋のたゝ日數はそはてけふにかく別れぬ年のある世之けり

もみちみにとなせにゆかんと契りし人のをともせさりしかは

うしろめたとくと急かて紅葉ははとなせの瀧のおちも祉すれ

女院左近の命ふにのりたゝすみしをめいの少納言のないしにうつりたりときゝてのりたゝにやりし

後拾 誠にや姨捨山の月はみなよにさらしなのあたりとおもふに

夜ふくるまて月をみて

千載 もの思はぬ人もやこよひ詠む覽ねられぬまゝに月をみる哉

月夜よりは曇り雨降らん夜はかならすこんと契りける人の雨いみしくふりける夜みえすなりにけれはつとめてやらんといひしにかはりて

曇るともあらしと思ひし空をのあらはれはかりふりし雨哉

なかひらかおのこゝむませたりしにうふきぬぬふほとにおほえし

後拾 雲の上にのほ覽までもみてしかな鶴の毛衣としふとならは

七日夜

同 千代を祈る心の内のすゝしきはたえせぬ家の風にさりける

舉周か殿上して草ふかき庭にておかみしを

新古 草わけてたちゐる袖の嬉しさにたえす涙の露そこほるゝ

これをきゝてかねつなの君のいひたる

こほるらん涙の露もことはりやたえすふく覽いへの風には

かへし

ふき增るいへの風たにたえせすは露こほるとも更に歎かし

いつみはてゝのちみかはになりての年石淸水の祭のつかひをみにいてゝ

色ふかくかさしのふちもみゆる哉嬉しきせゝの涙そはりて

五せちの料とて女院より菊重ねのかさみをようとおもふものなから人にぬはすなとてたまはせたりしぬひてまいらすとて

色〳〵に匂へる菊にてをかけて露にはかゆる心ちこそすれ

道命あさりなくなりてのちほうりんにまうでたりし
にすみしはうの櫻のさきたりしをみて

玉葉 たれみよと猶匂ふらん櫻花ちるをおしみし人もなきよに

かねつなのきみめなくなりていみすきてのほとにい
ひたる

とはぬかな別れて後の悲しきは忘るゝほとになりやしぬ覧

かへし

いかにともいはぬ涙のむせかへり心に嘆くほとをみせはや

前齋院の御さうそうに共夜かゝることをつくしへく
たりにし御めのとのむまこはしらしかしと思ひしに
哀れにてその人をしりたる人にやりし

もえはつる烟をしらてかまと山よその空なる雲とみるらん

女院のあまにならせ給ひし日

續古 歎かしとかねて心をせしかともけふになる社悲しかりけれ

またの日弁内侍のもとに

みちひかんかけにつけては嬉しきをなを悲しきはなにの心ぞ

よかはのかくてうそうついてゝおはせしに四條中納
言經ならひにおはしたりしにきこえし

行方もなく社物は悲しけれいかてみなみをたつねきつらん

かへし中納言

し水をはみなみにとふとみゆれ共心は西にかくとしらなん

秋よりわつらひて十月一日ころによろしくなりてみ
れは庭草も霜かれて薄の花ともさはやかになりにけ
るをしらぬもあはれにて

すきにける秋そ悲しき時雨つゝ一人やしての山をこえまし

なを心ち苦しうて夜ひとよなやみあかしてとをみい
たしたれは下草の露のいとほのかなるか朝日にあた
りてたのもしけなくみえしに

下草のあるかなきかに置露のみゆとも誰かしるへかりける

たかちかゝ住むかたにたてしとみなとせさするをみ
てこなたにもせさせよといひしついてに

またも亦またき方をは作るめり荒はあれたる宿にあれとや

かよふ女のもとにたきものこひたるおこすとてくゆ
る煙なとやうにいひたるかへしゝてといひしに

たき物のくゆるはかりのことやなそ煙にあかぬ心なりけり

五月五日内大臣殿のわか君の菖蒲のいとなかきをた
まはせたりしにたかちかにかはりて

長きねもいつかはみまし菖蒲草君かひくこそ嬉しかりけれ

おなし日菖蒲につけてかねふさの君の

かきたえて問はぬにみえぬ菖蒲草如何なる事の憂にか有覧

かへし

菖蒲草思はぬかたにねをさすは口しかゝこぬに生る之けり

十月に有明の月のいみしうあかきにはかにかき時
雨またうちあかりつゝ哀なるをひとりなかめて

神無月有明の空のしくるゝもまたわれならぬ人やみるらん

たかちかゝ急かしきことありとて久しうみえさりし
かは覺束なうおほえて

あひぬへき此夜にたにも見難くてなかく別ん後そ悲しき

たかつかさ殿のうへの御賀關白殿のせさせたまふと
て御屏風の哥めしゝに

臨時客 かさねイ

後拾 紫の袖をつらねてきたる哉春たつことはこれそ嬉しき

子日

詞花 萬代のためしに君かひかるれは子日の松もうらやみやせん

花見

春毎におしめどちるかつらけれは花の心をうらみにそゆく

山家卯花

山里のうの花かくれ時鳥うしろめたきをしかやなくらん

あやめ

五月雨のいつかすきてもあやめ草軒のしつくは玉とみえ鳧

とこなつ

庭のおもにからの錦ををるものは猶常夏の花にさりける

こひ

後拾 つれもなき人も哀といひてまし戀する程をしらせたにせは

いはひ

數しらぬ濱の眞砂のとしをへて君か數へんよをそみるへき

とをくゆく人に扇をとらすとて

手にならす扇の風をそへたらはあゆく草葉につけて忘るな

むすめの風いたうふきし日ものにまうてしに

風にたにあてしと社は思ひしか吹にさはらて行くか悲しさ

六月にさくら井のひじりのもとにゆきたりしに鶯なきしを

はるめける聲にきこゆる鶯はまたさくらゐの里にすめはか

もろともなる人淀川をみて恨めしき人のにし國へいにしをおもふにやこゝより舟にはのるかなといふけしきの心くるしうて

これよりは舟にのりしと淀川の聲はつれなくこかるめる哉

春より秋になるまて月日のゆくゐもしらぬに虫のこゐをほのかにきゝて

すきかはる程もしらぬにほのかにも秋とは虫の聲にてそ聞

おなしころ鴈のなくをきゝて

後拾 おきもゐぬ我とこよこそ悲しけれ春かへりにし鴈もなく迄(なり)

あまになりたりし人にやりし

古への鴈のかすにも後れにき此世にもまたさきたちぬとか

かや井とのゝふもとにてもみちをみて

秋ゆけとのとけき宿の紅葉哉風たにあらくふかぬなるへし

關白殿に集ともあつめさせたまふとてこゝにもあらんまいらせよとおほせられたれはみな忘れにけるをたゝおほゆる限りかきいてゝまいらするおくに

これならて思ふ事のみ數なきをかき集めてそ君にみせはや

右赤染衛門集以流布印本挍合了

群書類從卷第二百七十八

和歌部百三十三　家集五十一

伊勢大輔集

忍ふるなかにものいひ始めたる男つとめてやらん歌こひしに

正月一日

あしもゆる沼の氷はとけたれとゆくかたもなき谷の下水

同七日子日にゆきふる

（後拾）人はみな野への小松をひきにゆくけさの若菜は雪やつむ覽（ふ集）

かれにける女のもとに紅梅を折ておこせたるに

くれなゐの色に匂へる梅のはな人あく人のいかてをりけん

雲林院の櫻を都のにくらべよとて人のおこせたりしに

しら雲のかゝるやまへの櫻花これはこれそと君にをりける

女院（上東）の中宮と申ける時。内におはしまいしに（し歟）。ならから僧都のやへ櫻を參らせたるに。今年のとりいれ人は。いままゐりそとて紫式部のゆつりしに入道殿（道長）きかせたまひて。たゝにはとりいれぬ物をとおほせられしかば

（詞花）古へのならの都の八重櫻けふこゝのへに匂ひぬるかな

とのゝ御まへ殿上にとりいださせたまひてかむたちめ君達ひきつれてよろこひにおはしたりしに院の御返し

（續後拾）こゝのへに匂ふをみれは櫻かり（おそざくら集）かさねてきたる春かとそ思

月あかきに院の御まへの面白きにとて皇太后宮（妍子）の女房たちむつましき殿上人たちにかくされてまゐりたりしに影のほの〳〵見えしに物いひにやれとおほせられしに

（新古）うき雲はたちかくせともひまもりて空行月の影をみる哉（見えもする集）

返し

（同）うき雲に隱れてと社思ひしかねたくもひまのもりにける哉（つきのひまもりにける集）

人の心なんうらみてまゐりにけるときゝておなし人ふみおこする返事をせねば

身の上にしらすしもあらし人の爲人の辛きはつらき物そと

返し　まさみち

うき身から人のつらさも知りぬれは猶此道にふみゝすも哉

和泉式部院にまゐりて始めたる夜逢てものなといへとおほせられしかば夜ひとよ物語などしあかして年ごろかたみに心がけしほとのことなといひ出てつと

めてつほねよりいひたりし
思はむと思ひし人と思ひしに思ひしかともおもほえしかな
かへし
君を我おもはさりせは我を君思はむとしもおもはましやは
三條院の御時院の里におはしましゝ時こせちに昔おほえて殿上人ひきつれてまゐりたりし中に
後拾 はやくみし山ゐの水のうは氷うちとけさまは變らさりけり
一條殿(雅信)の上勸修寺にて御堂供養せられしにことをかりてかへしおこせたりしに
おく山のたかねの松をふく風に思ひそ出るそのかみのこと
道まさの中將ゆきふるよ御とのゐしてまかてゝつとめて
けさみつる庭の白雪いかならしよゝを積れるけしき成つる
返し
ふりてつる人の心の白雪はつらゝにのみそ思ひきゆめる
紫式部きよみづに籠りたりしにまいりあひて院の御れうにもろともに御あかしたてまつりしをみて樒の葉にかきておこせたりし
新千 心さし君にかゝくるともしひのおなし光にあふかうれしさ
かへし
同 古へのちきりも嬉し君かためおなし光にかけをならへて
松に雪のこほりたりしにつけておなし人
おく山の松はに氷る雪よりも我身よにふる程そはかなき
返し
きえやすき露の命にくらふれはけにとゝこほる松の雪かな
ある人の田舍のかた畵にかきて海のほとりに家有これなん我すむところとありしにかきつく
浦ちかき鹽のいほりの柴の戸は人ならすとて涙やたつらん
雪中竹
枝たはみ雪降つめはなよ竹の末葉も見えすふしかへりつゝ
一條院うせたまてのち。なにはに君をおはしていみしうなきたまひけることなと人の語るに
後拾 思ひやる哀なにはの浦さひて蘆のうきねはさそなかれなむ
(新親)いせにたてたる寺のかひなむうせにたるとて僧のこひにおこせたるにそへてやりし
かすかなる谷のほらをそ思やる風のみや吹しくとふらん
年ころありし人のまたしのふるほとに石山にこもりておとせぬに
後拾 みるめ社あふみの海にかたからめ吹たにかよへしかの浦風
なか月十よかおなし寺からいつるにまゐる人せきにあひたり
なのりしてけふはゆかなむ野も山もきりへたてたる逢坂關
後拾 なき數に思ひなしてやとはさらんきた有明の月まつ物を
世中さはがしきころ久しうおとせぬに
人のもとにゐて人にかはりて
同 けふくるゝ程まつたにも久しきにいかて心をかけてすき劔
月あかき夜右大殿の御たうみに人〳〵おはしたりしにつとめておほ殿
よの常にあらしとまかふ瀧つせのこゑものりとや思なす覽
返し
瀧津せは法の聲にそなみよりし涼しきかせも吹かよひつゝ
まさみちの少將すゝ(珠數)をおきてつとめてとりにお

こせたるやるとて
新拾 人しれぬ思の珠のをとならは（たえなは集）なにしてあはぬ數をとらまし
火佛日同人
諸共にむすひし水はたえにしを何をかそゝくけふの佛に
かへし
涙をそけふは佛にそゝきつる結ひし水のたえし計に
しつかなる有明の月
新古 有明の月はかり社かよひけれくる人なしのやとの庭には（りイ）
そちのゆかりにてつくしへくたりにけるむすめに
千とせまていきの松原いく君を心つくしにこひやわたらん
返し
いきの松いきても君にあふことの久しくならむ程を社思へ
人のふみをとりたかへてもてきたりしにそへて
續後拾 なとて人うきたる雲のかけ橋をふみたかふなと教へさり劔
年ころすみし所をたえてほかにわたりて又の年の五
月五日
後拾 今日もけふ菖蒲もあやめかはらぬに宿社有し宿とおほえね
哥合さみたれ
新古 いか計たこのもすそもそほつ覽雲間も見えぬ頃のさみたれ
六月はらへ
後拾 水上もあらふる心あらしかし波もなこしのみそきしつれは
七月七日
七夕のよるの衣をきたるよはかへすうらをもしらせすも哉
男ある人を年ころ思ひわたりけるにその人なむもの
にまゐりにけると聞てかねてさかにいきゐて木葉に
かきてとらせける
いゐつね
おく山のこの葉かしたの行水は人こそしらねすまぬ物かは
これか返事せさりしなん口惜しかりしといもうとの
君のかたりしかはかの人にかはりて
新續古 落積るこのは隱れの忘れ水すむとも見えすたえ間のみして
又かへし
いし間ゆくしたには通ふ谷水もこのはを茂み上そつれなき
またかへし
山隱れさのみこのはの散つまは石間の水はおとたにもなし
秋來人に
煙こそたつともみえね人しれす戀に焦るゝ秋と知らなむ
かへし
霧まよふ秋の空にはを〳〵にたつとも見えぬ戀のけふりを
こまむかひ
ひきつれてくる秋ことに逢坂の山のは出る望月のこま
つくしにくたりし人にきこえし
いはねとも同し都はたのまれき哀雲ゐをへたてはてつる
ある山里にまかりたりしにいへつねかもと近しとき
ゝていひつかはしゝ
うらさひて葛はひかゝる山里の家ゐたつぬる人もあれかし
返し
葛かつらくる人もなき山里はわれ社人を恨みはてつれ
かへる道にひきいれてみしに難波わたりおほえて處
のさまいとおかしすゝりにおきし
後拾 こも枕かりの旅ねにあかさはや入江のあしの一夜計に（を集）
かへしをおしはかりておこせたりしそおかしかりし
眞菰草假そめにてもあかさなむ長くもあらし夏のしのゝめ

つくしにつねこと云所にあまのしほやくところ

秋は霧春は霞に立まかひしほやくけふりつねことそみる

御住吉詣に

新拾 なからへん世にも忘れしすみよしの岸に波たつ秋の松かせ

後拾 古にふりゆく事そ哀れなるむかしなからの橋をみるにも

院の御菊あはせに左のとうにて

長きよの例しにうゝる菊の花ゆくすゑ遠く君のみそみむ

又

後拾 めもかれすみつゝ暮さむ菊の花さくより後の花しなければ

殿のうた合にさくら

君か世の遙にみゆる山さくら年にそへてそ匂ひましける

郭公

後拾 きゝつともきかすともなき時鳥心まとはすさよの一聲

しか

夕霧に妻まとはせる鹿のねやよるぬる時もおとろかるらん

院の白川殿におはしますころ右大殿もおはすことあるなるにおほとのゐに候たまふつとめてこのはにかきてたまはせたり

續後撰 世中にふきよるかたもなき物はこのは散ぬる木からしの風

かへし

おちつもるこの山里のこの葉をはかへしの風も吹かへさ南

御前にて少納言命ふえをひきしかは同殿

ことのねことにきこゆなるかな

とありしかは

草むらのむしはこゑ／＼すたけとも

かや院の御時うたあはせ月

君みると空にしれはやくもりなく萬世をのみくらす月かけ

まつ

昔より名にたかさこの松なれは雲の上まて枝そさしける

千鳥

新古 行方はさよ深けれと千鳥なくさほの河原はすきうかりけり

いけみつ

新古 池水のよゝに久しくすみぬれはそこの玉もゝ光みえけり

こひ

塵つもり床の枕もさひにけり戀する人のぬるよなければ

れいけい殿の女御の御ゐあはせに鶴

葉かへせぬ松のねくらに群ゐつゝ千歳を君にみなゆつる也

うの花

後拾 うの花のさける垣ねは白波のたつたの川のゐせきとそみる

皇后宮（寛子）のうた合月

續後撰 くもりなき空の鏡とみゆるかな秋のよな／＼照す月かけ

かり

後拾 衣うすみ旅のみそらに鳴雁はおのか羽風やよさむ成らん

山田

後拾 秋の夜は山田のいほに稻妻の光のみこそもりあかしけれ

いはひ

新古 住のえにおひそふ松の枝ことに君か千とせの數そこもれる

おなしみやの東三條の御堂めてたしときゝて舟にてさしわたりしに御まへのかたを見やりて岸のやなきを

青柳のいとをつなてにひく舟は岸ちかく社よらまほしけれ

その御堂に殿の御あふきにむすひつく

後拾 積るらむ塵をもいかてはらはましのりの扇の風のうれしさ

同宮に御むすめの御まへにありつるとてちいさき瓜
をおこせたりしに
葉隱れす立もいてはやこまの瓜の其つらに社ならまほしけれ
大納言殿御覽して御返し
君をのみこまのゝ瓜とまつ物を同しつらにもなりてみよかし
かたしけなく美しうおほせられたりしかはたちかへ
り
夜をつかむ事はさらなり敷島の道をさへ社君は知りけれ
うち殿のさうし(障子)の畫を歌によむへきところ〳〵
をかきうつしてたまはせたりしに人の家あり垣ねに
梅さきて人きてたてり
垣ねにはやつれてさけと梅のはな匂ひは人にしらせ社すれ
ふるき家にもみち散おほひたり
古里はしくれのいたまもるとてや散もみちはを風の吹らむ
しかの大僧正のために九十賀殿のせさせたまふける
につゐの歌めせはまゐらする
萬代を竹のつゐにそちきりつる君し久しくつかんかために
かへし
後拾　君を祈る年の久しくなりぬれはおのか榮ゆくつゐそ嬉しき
院の三條の民部卿の家におはします頃にはかに行幸
ありて近き人〻のいへめされしにそのよしをそうせ
しかは歌をよみてまゐらせよとおほせられしかは
後拾　年つもる頭の雪はおほそらの光にあたるけふそうれしき
いへを返しにすとおほせられたりし
ゆゑありて東宮の若宮みたてまつりしにさうしか
たの鏡をみてたまはせたる
同　君みれはちりもくもらて萬代の千歳をのみもますかゝみ哉（よはひ集）
返し　東宮大夫
同　曇りなき鏡の光ます〳〵もてらさむかけにかくれさらめや
なか月のことにや民部卿うへのたきもの合て心みよ
とてたまはせたりし
あり難きものと社みれはる咲し梅の匂ひの秋もかほるは
かへし　民部卿
梅かえは焦るゝ秋も匂ひけり春とめかたきものと見しかと
皇后宮から昔のやへ櫻をたまはせて女房
これやこのならの都の八重櫻匂ひわかすもしられさりけり
三ゐうせてかやうのことも尋ねまほしうて
あとくれて昔こひしき敷島のみちをとふ〳〵尋つるかな
かへし
玉葉　やへ葎たえぬる道とみつれ（えしかど集）とも忘れぬ人はなほ尋ねけり
これをきゝてさかみ
ふみ通ふ人たになきは敷島の道知ぬ身のうきにそ有ける
又
磯のかみふるのゝ道のしるへには今日ゆく末も君社はせめ
なりのふよをそむきしに麻の衣やるとて
後拾　けふとしも思やはせし麻衣なみたの玉のかゝるへしとは
返し
同　思ふにもいふにもあまる事なれや女の玉のあらはるゝひは
その人なくてのちわさの經の外題四條中納言にかゝ
せきこえしにそへられたりし
極樂の蓮の花のひものうへに露の光をそふるけふかな
かへし

ひものうへに蓮の露を結ひおけはみかける玉の光こそませ

おなしころさかみ

みし月の光なしとや歎くらんへたつる雲にしくれのみして

かへし

月かけの雲かくれにしこの宿にあはれをそふるむら時雨哉

同人二月十五日のひのいりかたに（けふり集）

新古 つねよりもけふの入日の便にやにしを遥に思ひやるらん

かへし

同 けふはいとゝ涙にくれぬにしの山思ひ入日の影をなかめて

同日夜半はかりに人（こよひの集）

後拾 いかなれはけふしも月のさよ中にてらしもはてて入しなる覧

かへし

同 夜を照す月かくれにしさよ中は哀やみにやみなまよひけむ

又のとしきの日に

同 別れにしその日はかりは歸（めぐり）りきといきも歸らぬ人そ悲しき（こひ集）

おもふ人ふたりあるをとこなくなりたるに末の人に

かはりてもとの人のかりやりし

同 ふかさ社ふちのたもとはまさるらめ涙はおなし色に社しめ

むすめのとりこしたるほとひさしうみえさりしに

新千 たらちめの親（ね集）をはすてゝこはいかに人のこをのみ思ふ我社

かへし

同 人のこの親になりてそ我おやの思はいとゝおもひしらるゝ

かれ〳〵なる九月許に菊をうゑてなむいぬると聞き

しに

ことのはのかれゆく人に秋の菊先朝しもにうゑやおきつる

わつらひし頃馬頭と云人のたひ〳〵とひたまひける

をおこたりて後そのよろこひ秋ころいひやりし

新古 うれしさをおもひ（はわすれやはする）おきつゝしのふ草（しのぶる集）わすれぬ物を秋の夕露

かへし

同 秋風のおとせさりせは白露も軒（の）のしのふにかゝるへしやは（らまし集）

御せちにいてたる人のもとにある人のいひたりし

をみ衣かさねし人や誰ならむかみならませは我もしなまし

かへし

ひかけせしをみの姿はみしかとて山井の衣うちもかさねす

正月一日こうみたる處にちこのきぬやるとて

珍らしく春立そむるつるの子は千世のむ月をかさぬへき哉

おなしく七日わかなを人のおこせてこれはおいたる

人のためにつみたるといへりしに

我ために雪間の若菜つみけれは年かへりてそ嬉しかりける

同日うまこのもとから

あら玉の年も若菜も摘人はうつゑつきてやのへにいつらん

返し

後拾 卯つゑつきつまゝほしきをたまさかに君とふ日のゝ若菜成覧（がとふひの集）

ふしみといふ處にて名あるところ〳〵歌によむにあ

しまのいけ

うらわかきあしまの池の水の色は淺みとりにそ波も立ける

かさとり山

ふらはふれ笠とり山のこのしたは秋の時雨もゝらしとそ思

ふしみの里の戀

つきもせす戀する人はねもいらて伏見の里の夜こそ長けれ

かたらむと云人の久しくおとせぬをつゝしにつけて

いひやりし

いふやとていふ程をまつ岩躑躅いはす迚やはいはてやおへき

又

語らはて程のへぬれは時鳥君忍ひねそたゆるよもなき

　五月六日さかみある人に

人しれす□まつ社菖蒲草昨日をたゝにすくすへしやは

　返かはりて

あやめ草ひく人しけきよとのには何かは深きねをも尋ねん

　おなしほとの人のいひたる

人のよも我よもけふかあすか川

　とありしに

水のあはよりけにそはかなき

　山里に侍ほとことものしたひまうてきて所のさまのおかしきに題にて歌よみ集めたりしを哥合にせん定めよといひたりしに

浦〳〵の波にも我はかたよらしなには人社あしよしはみめ

　おなしところ山里の時雨

とふ人もなき山里のむら時雨ふたよりみよりおとろかす哉

　人〻きくの哥よむをきゝて

さま〳〵の色をはすてし身なれとて菊に心をうつろはす哉

　九月盡日すけみちの大貳のもとから

後拾 年つもる人こそいとゝをしまるれけふはかりなる秋の夕暮

　かへし

哀かく暮行あきのをしさには立ならふへき老のなみかは

　思ふことあるころ萩をみて

後拾 おきあかし見つゝ詠むる萩のうへの露吹みたる秋のよの風

　東國へまかりにし人のむすめをまちわひて

いきのをのたえなむをりは君きても哀いつこと我を尋ねん

　かへし

息のをのいきてみるへき君なれはかきる別はあらしとそ思

　院の御堂にて百わかうつまれしになもしらぬ華をみしりたるやとゝはせたまひしに

衣てにをし開きてをみそなはせたうめに咲くほうたくの花

　院のうち殿におはしましける頃人〻きくをもてあそふ

なへてのは霜かるらめと法のうちのきくは盛の色そ常なる

　右大殿まゐりたまふみちに時雨にあひて

宿近くあへる時雨はなになれや山路なりせは濡やまさまし

　京せんりしと云人のおほけさぬはせしにかたなやあるといひたりしおこすとて

にんにくの衣をぬへる君なれは惑をたゝむしるしをそやる

　かへし

西の方猶とくゆかむそうかりの衣をぬへる糸にひかれて

　僧もとからものくむかひにかきたりし

さくししの法を聞つゝ世を救ふほうすのはたと是をいふかひ

　かへし

ふかきしを尺しえさする法のしにもくらのかゆをくみて報はん

　茄子といふものをさかにつくりてかれたる木のえたにつけて人

思はさる事のさま哉もとなすひかからきの枝にならん物とは

　かへし

珍しやかからきの枝のもと茄子つくらさるにはいかてなりけん

　ふちのきの舟ににたるにひらたけをほしてこれを題

にて哥よみてといひたる人に
海士人は鹽木もつみに岩藤のひらたけわたにさしてゆか南
　はかうせし頃つけすといひて人
恨ても猶つらきかな廣めけんのりの衣にかけすと思へは
　返　し
たまさかに廣むる法の衣にも立おくれけんみをやうらみぬ
　よからすや思ふらんと思ふ人のちかうゐたるに
夢よゆめ心へたつな薦かきのまちかきほとに成ぬとならは
　かうろといふあそひところの山とのかみといふ人そ
　すみしそれなくなりてふるき難波の里にかへるとて
　そのころ人々うたよみしに
芦の葉のうらかへりたる難波人ふるの社をかけぬひやなき
　おとせぬ人に冬の末つかた
新勅 忘られてとし暮はつる冬草のかれは〻人もたつねさりけり
　うまこのいかなりし日　　三　位
嬉しきは千世の小松のはる〳〵と榮へはしむるいくか成覧
　挍合了　　從三位行治部卿平朝臣判
右以織部正源乘尹本挍合了

康資王母集　稱伯母集

　いまの世の御時歌の心しれらんをとこ女のなかにいひはしむるふみおの〳〵(にイ)やれとおほせられけれは　　春宮大夫
新勅 としふれといはて朽ぬる埋木の思ふ心はふりぬこひ哉
　返　し
同 深からしみなせの河の埋木はしたの戀路に年ふりぬとも
　おなし人周防の内侍にもつかはすと聞てねたみ侍
みしまえの浦みつ汐にまかふ芦のねたく末葉にかゝる白浪
　返　し　　同大納言
千載 みつ汐の(にイ)末葉を洗ふなかれ芦の君をそ思ふうき沈つゝ(みしつみしイ)
　うらみ哥と侍けるをまつよしときゝ(かイ)たかへて
時鳥まつにかけてもさゝかにの何れのよひかしるきとそみる
　返　し
しるしありて待夜もあれや郭公なか(なイ)〳〵かけし雲のふるまひ
　四條の宮のはいらいに雪のふりし年
立ならふ袖の白妙ゆきふれは鶴の毛衣むれきたるかな
　おなし宮の御住吉まうて
住吉の松と聞ては年ふれとかゝるときはの色をこそみね
　おなし宮の扇合に鹿(イ无)
色にいてし秋しも鹿の鳴なるは花のをりとや妻はたのめし
　殿上人あまた參て梅のかころもにうつるといふ題を
新後拾 梅の花ひもとく春の風にこそ匂ふあたりの袖はしみけれ
　宮の宇治殿におはしますころ殿まゐらせ給ひて女房

さそはせ給ひてをくら見せさせ給それよりやがてか
へらせ給ひて京よりおくられたる
春なれは花のみやこへ帰るまにをくらの里は霞へたてつ
御返し
見すてつる人の心もみゆはかり此里の花ときはならなん
臨時祭の御ものいみなりけれはよひにかんたちめよ
ひにまゐりこもり給ひてこの御かたにてあそひ給歌
あるへしなとさためらるゝほとに歸鴈のなきしをや
かてこれを題にてみすのうちにもよるへきなりとよ
しなかの宰相中將の有しかは、
鴈かねの花のをりしも歸るらん尋てたにも人はをしむに
そのかへしおなし宰相中將
ふる鄉に花の都をとひ過て歸る鴈かね思ひやるかな
此哥を宇治殿きかせ給ひて。つねなかの大納言を御
つかひにて。よへの事ならん。をかしうきかせ給を。お
ろくあるへきとや。やかてかの申さする事をと。お
ほせられたりしかは。いつれの御時か。みつねに月
を弓張といひけるは。なにのゆゑそと。とはせたま
ひけれは。山のはさしていれはなりけりと。まをし
てこそ。ろくは給りてはへりけれは。そのつらにこ
そさふらはすともとそ御かへり申侍りしか。
攝政殿の七番哥合に櫻
詞花 紅のうす花さくらにほはすはみなしら雲とみてや過まし
此哥の持なるよし申て侍りしかは殿
同 白雲にたちまさられねと紅のうす花さくら心にそしむ
御返し
同 白雲はさもたゝはたて櫻色に今一しほを君しそむれは
郭　公
金葉 山ちかく浦こく船はほとゝきす鳴わたりこそとまり之けれ
この哥をきゝてよりつたかおこせて侍りたりける
年へぬるふな木のくちも時鳥鳴わたりにそゆられよりぬる
返しおしはかりてつかはしゝ(イ无)
時鳥きゝ知人はたつねけりひくかたもなき舟のわれをも
雪
新勅 ふみゝけるにほの跡さへをしきかな氷のうへにふれる白雪
いはひ
君か代はまさこの數もあかす共せゝの千鳥も猶そゝふらし
後の二條殿の八月十五夜月の宴せさせ給とて哥めし
ゝかは參らせし水上月
秋の夜も氷むすふとみゆるまて水のおもしろく照す月影
おまへの前裁のおかしきを大殿御覽して人〳〵のね
いりたらん折にをらせにまゐらせんなとあらかはせ
給ふになり(かイ)ふさの少將のおりにまゐりて見つけ
られてにけしうしろてのおかしさ(とイ)まうしゝ
まことにや花はねなからあらはれしまもる人めは雨ならね共
おほとのゝ御返し
人目をは何かつゝまん秋の花色にいてゝ社ひきもうゑしか
かや院とのゝいつみのふたかたに侍をいとみかはし
かいらせ給ひてたて石をいろとり岩のかとにあはせ
てふたをつくらせ給て畫をかき鶴龜を作りてみきは
に立られたり内の御方のすけの命ふ
深きあさきこなたかなたの鶴龜の遊ふ泉はいはゐ之けり

返し

かた〳〵にすむ鶴龜の心をや泉もくみていはゐともなる

菊の花ひさしといふ題をうへの人々參りて讀しに

(新勅)長月に匂ひそめてし菊なれは久しく霜もおける之けり (しもゝひさしく集)

うへわたらせ給ひたる御ともに少將の命ふまゐりて

菊をゝりて色をもかをもといひかけ侍りしに

色わかぬほしとやみまし白菊を雲のうへ人わきてをらすば

月きくをてらすといふ題を

露みたれこゝろ〳〵に咲菊の色わくはかり照す月かけ

殿より母のしふめしゝそへて參らせし

(後拾)尋ねすは昔のつてのをのははこのもとにてや朽果なまし (かきやる方やなかちまし昔のなかれみ草つもりて)

右大臣殿(顯房)の宰相中將ときこえし時五節いたして

まかて給に

(新勅)をみ衣かへらぬ物と思はゝや日影のかつらけふはくるとも

返し又の日

(同)かへりてそ悔しかりけるをみ衣その日影のみ忘れかたくて (さに集)

同じ夜ふりける雪の山ゐにはつもらさりしかは

ふりけれと山ゐに雪のつもらぬは日影さし出し名殘之けり

殿上よりくだ物申たりしに花たち花を折ておくられ

たりしふたかへしまゐらすとて　　　　師賢

(新勅)時鳥こよひいつこにやとるらん花たち花を人にをられて

返し

(同)ほとゝきす花たち花の宿かれて空にや草の枕ゆふらむ

もろ時の中將母の哥合にあかつきのほとゝきす

名にしおはゝこたかくなけや時鳥おとはの山の明仄の聲

わたくし所の哥合に五月雨

五月雨に野原の草もみこもりて影をみつゝや駒はあさらむ

小野宮のみたうおかみ侍りしに御せん(ごイ)法も頓て

きけと仰られしかは所のさま瀧のおとになみよりて

たうとく侍しかはまうさせし

(續後撰)今夜こそ身のうき雲も晴ぬらめ月すむ水に影をやとして

御返し

月のすむ水の心しむすひては曇りなき身と思ふはかりそ

雲林院の菩提講きゝ侍りしにしん殿の御かたより御

車にいひつかはしたる

法のためわれのみぬらす袂かは山時鳥來ても鳴なり

御返し

袖ぬらす雲のはやしのみのりをは時鳥のみ聞てやはなく

山里に冬こもりなから侍しに正月一日猶雪の降侍れ

は

降雪に空は春ともみえねとも竹のよこめて鶯そなく

山里の春の明仄見渡せはみとりのそらに霞たなひく

おなし六日わかな人につかはすとて

身をしれはあしたの原もたのまれてけふは籬の若菜をそ摘

なと若菜をはおこせさりしそといふ人に

竹結ふこのめまとほになりゆけは摘し若菜も其日もりにき

二月雪ころもにおつといふ題を

(新古)梅ちらす風もさえてや吹つ覽かをれる雪のそてにみたるゝ (こ)

岸の柳

さを姫のかさし成らし青柳のしたれる糸に玉そかゝれる

花見にまかれりしにみな散にけり

(新古山さくら)さくら山花のした風吹にけり木のもとをに雪のむらきえ (の集)

わらひはいかゝといふ人に

ふりつみし峯の雪氣の餘波かや物うけにのみ見ゆる早蕨 [にイ]

こしへまかる人に

續後拾 ゆく鴈はかへる山ちの雪をみて花の都をおもひ出なん [みてもイ]

母の山里に侍りしころはらからともいきあひて所のさまにしたかひだる題ともをよみてあはせ侍しいけの柳

新拾 淺緑はるのうすらひとくるより結ひかへたる青柳のいと [はるかぜにいけのこほりのとけしよりイ]

三月つくる日

我をしむ心もつきぬ行春をこさてとゝめよ鶯のせき

四月一日やまふきの散のこれるを [りたるをイ]

春風や衣かへとてたちおきしやへの山吹ひとへ殘れり

ある所に歌よむ人々有てうのはな月に似たりといふ題をよませ侍りし(おこせたりしをイ)

白妙にうの花さけは此ころの月は垣ねにすむかとそみる

とほきたち花

たかつまの花たち花に吹風そよそなる袖のかはかりにしむ

よとの(にイ)あやめひく

あやめひく賤の袂やたゆからん尋かゝらぬぬましなけれは [つイ]

ねさめのほとゝきす(人にかはりてイ)

ねさめして便にきけは時鳥つらき人をも待へかりけり

秋たつ日

初秋の立田の山のこすゑをはけふや一しほ時雨そむらん [けさイ]

たなはた

續古 あふとてもなれすやあ覽ひこほしのま遠にきたる天の羽衣

法性寺といふ所に侍しころぐしたる人と親しくて治部卿七月七日にかたゝかひにおはして八日にかへり給ふに

よそになる今朝の別をたなはたの昨日の暮に返しても哉 [しイ]

月ひるをかこつといふたいを

忘れつゝ晝かとそみる秋の月さやかなるにもおほめかれ皃

となせのたきの紅葉とゝもにおちて(を見はへりて紅葉のともにおち侍しかはイ)いとおもしろく侍りしを

紅葉はにもとの白糸おりませてから錦にもおつる瀧哉 [こきイ]

はつせにまうてゝさほ山の紅葉の散みたれたるに

さほ山の嵐そいとゝぬかせつる紅葉の錦みにきたれとも

そのみちのやまた(のわたりにとゝまりてイ)

遠山田もるいほりには秋の夜の露もいねてやおき明すらん

衣うつ

我か袖の霜はらふまをさよ衣うちたゆむとや人はきくらん

九月つくる日

心ほそ露も霜をやむすひおく秋をゝしかも鳴わたるとて

冬のはしめ

見し人も花も木葉もかれはてゝかきねをあらす冬にきに皃

庭の月(冬イ)

庭もせに水流ねと冬の夜の月の光はうすこほりして [はイ]

山ちのこほり

氷りゐてこし山みちも忘られぬ水の音こそしるへ成しか

さうしのゐに木するゐに殘たる紅葉に雪かゝりたるを

山里のもみち過ぬる冬木には雪の初花咲かへてけり

いけの水とり

なかれ行水のあわとて思ひけるも拂はぬをしのうきねを [はけイ]

正月に雪のあした見わたされて
あたらしくふるやの軒も成に(もけさはイ)皃みな白雪のうはふきをして
佛名
時しまれけふしも雪の降つむは罪をきやせんかこと也けり
年おきて久しく母のもとにまからさりしかはかれよ
り
親子
たらちねの親をはすてゝこはいかに人のこをのみ思ふ我社
かへし
同
人のこの親になりてそ我親のおもひはいとゝ思ひしらるゝ
うまこにくしたりし人のみちのくにゝなりてくたる
へしと聞て
つらけれとうらなくをつる涙哉衣の關もとゝめかたくて
六條院の人ゝかたゝかへて曉にかへらるゝに
月もみし草の枕と思ひ出てちりゐぬほとに又かへりこよ
よしなし事いひたる人の返事に
見る人の心をしらは風ふきて雲なかゝりそ山の端の月
前栽の中にらんのかほりいてたるにほりかはにきこ
ゆる
たれかぬし日も夕くれの藤はかま
ときこえしかは
ふきとく秋の風やしるらん
つねのふの大納言ひんかしおもてに參りたるにとを
やかにていらへし侍るにいますこしきこゆる程にと
いふあかして(やりてイ)たつ(ぬイ)とて
秋の夜はいくたひうきにあけつらん
とありしかは

つゆはかりこそかすはおくらめ
右の大殿のたけのたいに月のもりたりしを
たけのよなかにいつる月かな
とおほえしこれつけよとのたまはせしかは
ふけにけりこやふしまちのほとならん
ひたき屋に雪のつもりたるを　宮の下野
いかてかつもる火たきやの雪
といへは
けむりたつふしのしらねもかゝるにや
山に花のちりしきたるを人
花のころもを山はきたるか
とあれは
淺みとりかすみの空にたちけれは
例ならぬころ前齋院大貳とかたらひあかしてつとめ
てこれより
千載
しぬとても命(こゝろ)をわくる物ならは君にのこして猶戀ましを(やこひなし集)
返し　大貳
思ふにし命かなはゝ殘しおかてもろ戀に社もえはもえなめ
このかへしをむすめなる人
かたこひの苦しかりしも慰めて命しあらはと思ける哉
侍從の宰相よしなし事の給て
冬のよにつかはぬをしの獨ねにあやなく袖のぬれにける哉
かへし
冬の夜の池のみきはにうき寢せしをしの毛(羽イ)衣さもやさえ劔
すけつなの中納言のまつりの日車參らするにした簾
やあると尋ねられしかは物もなみそとにこそはとき

こえ(申たりイ)しかへすとて
玉すたれかるにはあらす葵草下の心にかくとしらなん
返りを
諸人のかさすその日の葵草心のしめはそら(はかイ)にかけなん
哥のころかとをたゝくとはすれはすけなかの弁のい
ひあはすへき事なんあるといへとあけすさらは今有
明のほとにこりすまゐらんとありしかとおともせね
はこれより
あまの戸の有明かたとたのめしをへたつる雲の過も行哉
返し
在明の月もまたれす天の戸にいれねはそれを歎にそする
かゝるほとに帥になりてかれより
君をのみこふる心をいのちにて今まてこそはいきの松原
返し
よそなからいきの松にてつくしては命あり共何にかはせん
とほくまかるに宮よりさうそ(ヂイ)くつかはしたる御
かへり
旅衣はるかにたゝは秋霰におほつかなさをいかゝ詠めん
きしにかりやつくりて月いとちかくみる心ちす
遠けれと雲井の月はみる物をあはれ都のかゝらましかは
ゆふつく夜のいとおもしろきころいつこよりともな
くて京よりふみあり經信の大納言の之
後拾 東路のたひの空をそ思ひやるそなたにいつる月を詠て
返し
同 思ひやれしらぬ雲井(ちイ)もいる方の月よりほかの詠めやはある
かしこにてすまひのつかひにつけて隆綱の宰相中將
同かへるべき あふとのほとをかきり(そへて)て待人は過る月日そ嬉しかりける
返し
同 東ちのかや(やイ)か下にし亂るれはいさや月日の行もしられす
宮の下野かきたえてふみもおこせねは
あつまちのイ しもかれのゝちの冬草しをれして(しけりあひてイ)跡たにみえぬ忘水哉　下野
返し
よそなから心を人につくま川深きに跡はみゆる物かは
待かねてはゝのもとより
伊勢大輔集 いきのをのたえなん後は(をり集)君きても哀いつくと我を尋ねん
返し
同 息のをのいきてみるへき君なれは限り(る集)別はあらしとそ思ふ
ゆゐありし人のあつまにとゝまりて(イ无)侍しにのほ
りにわかれをしみ侍しにあふきとらせはへりし
雲井にて月を詠めんたよりにも思ひし出はあふきてもみよ
そむきぬときゝて大(イ无)殿の宰相中將の母
かけていへは袖のみ濡てそむく世の哀を(はイ)え社とはて過つれ
返し
苔のそてとふに露けさまさり晃したふ泪はかけしと思ふに
その宰相中將家にあはれなる事ありと聞てとむらひ
きこえし
新千 このころの寢覺の風にいかはかり夜深き露を袖にかくらん
返し
同 すみなれし故郷人もなき宿に(とこ集)かたしく袖は露もかはかす
通俊中納言後拾遺つくるに歌こひ侍しかはつかはし
て侍りしかはこれをなんひかりにてとてよめる
年をへて君かかきつむもしほ草玉もをかれ(本ノマヽ)心ちこそすれ

返し

いかはかり光もみえし濱千鳥ふみしたきたるもしほ草には

つねみちの帥のむすめの宮にさふらひしかおとなとなりていひかはし侍しを人にくしきこえてかたみにおほつかなくなりて侍に中垣に櫻いとおもしろくさきて侍るに

まちかきにゝほふとならは山櫻白雲計へたてすも哉

かへしいれす

わつらひしを知さりけるよしいふ人に

思ひ出て誰をか人のとはましなうきにたへせぬ命之せは

物思ひみたれたるに(ころイ)よふこ鳥のなくを

世の中をなそやといふもよふこ鳥我なく聲をこたふとや聞

いてたちたるをしはしゝらせしと思ふ人の云遣したる

こゝのへのおほうち山の時鳥いつか里にはなかんとすらん

返し

忍ひ音をまつさとならは郭公みやまのうちも出すやあらまし

はかなき人にたへたる命哉といふ人に

しはし社磯の泡ともたゆたはめきえときまるへき水の上かは

またおなしといひ(をゆイ)たる人に

山したの日かけの草の朝露はおく物とてもおかれやはせん

かゝる世に(イナシ)我のみそいしかねにてあると申人に

みな人は水のあわにて消ぬるにそこゝそ石の身には有けれ

天王寺まうての舟にまくら(のイ)なくて

舟ちには草の枕もかりえねは袖敷たへにねてあかすかな

住よしに人ゝのまゐりしにつけて參らせし

住のえのうきにおひたる葦よはみ涙ひきたてん折をまつ哉

その神主國基か持ふつ堂たて侍しにつまとをえさせ侍とてかくいひつかはしたる

返し

槇の戸を西にあけてや詠むらんさきたつ月にとつてをして

月のいるそなたをあけて詠むれは君思ひ出る妻となる哉

山さとに(イナシ)哥よむ人のいひて侍し

山さとの淋しきつねは誰かとふ春秋くらん人のなかには

返し

春秋もたゝひとはなそ山さとは峯のあらしそ絶すおとする

とのゝひ(むイ)この家に說經きゝにまかりて紅葉散亂おかしきよのけしきにて(なん侍しイ)

今宵こそ罪も嵐にちりぬらめおつる木の葉ともろ心にて

返しおほえす

神樂をよめる

さかき葉や立まふ袖の追風になひかぬ神もあらしとそ思ふ

基俊の家の說經きゝ侍しにくるまにいひつかはし侍し

たゝひとつ門の外にはたてれとも鬼こもりたる車之けり

返し

御法こそこの車にはこもれるに心のおには我と名のるか

九月十三夜六はらにひと〳〵まうて來集りてふみつくり哥よみ侍しに

名にしおはゝ今夜はかりは心して月のあなたに雲はたゝ南

風ふくに(夜イ)むすめのもとより

雲はらふ風につげても山里の月影いかにさえて住らん

返し

風はや(さむイ)みさえもさえすも山里は都の月そ傍にたつ

山里の五月雨のをかよりおつるを見侍りて

さみたれに高根の雫おちためて麓はいかに淵と成らん

うむこしのひしりのもとに初てまかりて

闇からむしての山路の導へせよみしよの月の照すと思はん

千日の講はしめたるに共ひしりの行はれし日きかて
かへりに(しイ)し人に

中〱にきかて歸るも心あれなわか聞たにもをしき御法を

おなしひしりの雪を丈六の佛につくりたてまつりて
供養しつるよしいはれてかく

いにしへの鶴の林のみゆきかと思ひとく(にイ)こそ哀なりけれ(るイ)

返しほとへて

日をそへて雪の佛は消ぬらんそれも薪のつきぬとやみし

そのひしりのわつらはれしによろしうと聞しかは

うかりしに我命をはかへてしを君いきぬれは生てみまほし

よかはのひしりの弟子になりて侍しかはくとくのを
りよひきこえたりしにおりられさりしかはいひつか
はしゝ

光にて雲の家をも出にしをてらしはてなんおほそらの月

道つねか筑紫よりのほりてからものなとつかはして
かくよめる

山のはの月をわすれてあはれ我そらを人に成やしぬらん

返し

姨捨の山のはの月忘られす思ひ出けりみるそ嬉しき

まさふさの帥のふたゝひなりたるよろこひに

かくしあらは千年の數もそひぬらん二たひみつる箱崎の松

かへし

箱崎の松に千年のしるけれはふたゝひのみか三たひ社みめ

人の扇に手かゝせ侍につかひにつかはしける

かたみとてかけとも手にも結はれす年のやそせの水莖の跡

この衛(ころイ)の關白とのゝ若君をうつくしうみたて
まつりてつくりたる鳥の聲するを奉るとてよめる

新續古 身につもる年に萬代とりそへてけふわか君に奉るかな(なりイ)

殿の御かへり

よろつ代もあかす思ふに取そへてゆつる齢を嬉しとそみる

以下五首一本无 君のみや花の色にもたちかへて袂の露はおなし秋なる(べ集)

後拾 ふきかへすこちの返しは身にしみき都の花のしると思ふに

同 さきかたき御法の花に置露ややかて衣の玉となるらん

同 わしの山へたつる雲やふかゝらんつねに住なる月をみぬ哉

金葉 うかりし(里イ)に秋は盡ぬと思ひしを今年も昔の音こそなかるれ

山川の水の流をかきやるに石まをしけみゆかぬとのは

寛治八年關白前太政大臣馬場院哥合に祝ひ心を

よろつ代をまつのを山の陰茂み君をそ祈るときはかきはに

右伯母集以古寫三本挍合了

弁乳母集

しら川殿の花の水にちるを

白川のちかきわたりにちる花は梢にかゝる波かとそみる

天王寺にまうてゝ龜井の水を

（後拾）萬代をすめる龜井の水やさはとみの小川の流なるらん

弓を

神代より佛もあたはふせきけりこやのり弓の始なるらむ

嵯峨のに花見にいてたる宮よりたまはせたる

（新後撰）露なから折てをかへれ女郎花さかのゝ花も見ぬ人のため

御かへし

松虫のねなからこそは女郎花わか都にはひきてかへらめ

大とのはかまのこしにかゝせ給へる

（千載）うら山し（うらめしや）むすほゝれたる下紐のとけぬや何の心なるらむ

御かへし

（同）下紐は人のこふるにとくなれはたかつらきとか結ほゝる覽

大殿まとかきたる扇にそらこととともをたはふれさせ
給て

まとにのみ心はみえて梓弓もろやにあまる春にも有哉

御返し

まとにみる人しなけれは梓弓かははなれたる心ちこそすれ

又　殿

梓弓ともねも絶て夜もすからかははなれたる事をしそ思ふ

萩の末ををりてかめにさゝせ給へるを

朝ゆふに風のみしけき野へよりも久しかるへき萩のすゑ哉

宮春宮に入せ給へる殿上人こゆみいて宮の御かたに
かけもの申てひはりこの上に的かきたるにふたに花
をちらして書つけて大盤ところには入たる

かちまけの弓のやませに散花をまとゐの外の人もみよかし

とあれはかねのまとを盛なる枝につけて

あつさ弓おなしまとゐのうちなれはちらぬ櫻の花を社みめ

宮の御前に前裁うゑて人々哥よみけるに

庭もせに植たる花は君か代をのへとそみゆる秋の宮人

おなし宮程なくうせさせ給ひての御忌に姫宮の御ま
へ御堂におはしましゝに十さいたうの地こくのゑを
人ゝよむに十八日つるきに人のつらぬかれたるを

いかにせん劔の枝のたはむまておもきはつみのなれる成覽

一品宮枇杷殿に十月にかへらせ給へるに御ちやうな
るさうふを御覽して

（千）菖蒲草なみたの玉にぬきかへて折ならね共ねをそかけつる

かへし　江侍従

（同）玉ぬきしあやめの草は有乍らよとのはあれん物とやはみし

又のとしの春大納言参り給ひてすひつの灰に手習に

花の香の匂ふにものゝかなしきは

とありしに

はるやむかしのかたみなるらん

と聞えけれは大納言との

香をとめて君かかたみに惜まるゝ花のすかたは風もよか南

御かへし

（後拾）形見そと思はて花をみしたにも（世たにイ）風をいとはぬ春はなかりき

大なこんせんやう殿の御まへに花のいみしう散けれ

はいかゝ見給ふとありしかは
ちるこそ花のさかりなりけれといひしかは
咲さかぬ所もわかすふく風は
歸る雁
後拾 折しもあれいかに契りて雁金の花の盛りにかへりそめけん
殿上より郭公を出すけしてむすひて
なてしこにをかたらふは時鳥とて入たれは
花たち花の枝をわすれて
殿上人内に御忌におほくこもりて若宮の御方にくた
ものゝおろし申けれはいたすふたに一にはかうはい
一にはしろき梅をおろ(はイ)しにて色をも香をもとて
結ひつけたれは　つねのふの君
しる人のしるなる花の色なれは君みるらむとおもほえぬ哉
返　し
しれは社しらぬ人をもしらすとは知をしらすといふ人や知
野宮にさふらひしを人のもとよりあたり淋しき旅ね
所にていくその事をおもひてんといひたりしに
續詞 木の葉ちる峯の嵐に夢さめて何事をかは思ひのこさむ
院うせ給ひて三位のもとに
哀君いかなる野へのけふりにてむなしき空の雲となりけん
御かへし
思へ君もえしけふりにまかひなて立おくれたる春の霞を
白川殿にと聞し頃
何故に都のほかに旅ねしてしかのなく音に聲をそふらん
かへし
哀をはしらぬ山路もなかりけり思ひもかけぬ鹿さへそなく

うへうせさせ給ひて五月郭公の鳴けれは
古郷へをつてやせし君獨こえけんしての山ほとゝきす
もとの人はそのかみ忘れにきとありしかは
いその神ふるの社を忘るれはうしろめたなき三輪の山もと(かなイ)
小家に竹をさした(けイ)るをとへ(かイ)ははやしといふに
虎のふすのへならねとも賤のをの宿こそ竹の林なりけれ
松の尾行幸春宮の女房みけるにさか野の荏のうへに
たてゝ花ともをさしてその野を一くるまつゝきたり
すゝきのくるまに　源少将つねなか(くみゆるのへか本集)
續古 打まねくけしきことなる花すゝき行過かたき心ちこそすれ
返　し
同 行過ぬけしきともみす花すゝき招くにとまる人しなけれは
人にかはりて
君たにもねたゆる宿のあやめ草あまりうきには引人もなし
四條の宮に家の紅梅をたてまつりたるに外にわたら
せ給へるにみるにめてたく咲たれは
後拾 かはかりの匂ひなりとも梅の花賤の垣ねをおもひわするな
古郷の遠くなるまゝにいとゝしく秋は露けき草まくら哉
これいせん院うせさせ給ひて女院よりさいゐんの女
房のもとに
こそのけふかくや契し神山につみし葵のかけまくもをし
御かへし
かけまく(もイ)は畏しとこそ祈しをはかなかりける葵草かな
齋院おりゐさせ給ひてこそのあふひを(くちイ)
なつかしきかさへそつらき神垣に今はかれぬる葵と思へは
宮の御四十九日の御そうそくのあまにてありしをみて

花にのみ染したもとを打かへし涙のかゝる色ぞかなしき
春日まつり
ひとゝせに二たひまつる三笠山さして千年のかけと社みれ
時鳥を
まかてたゝあらましもいを郭公み山へかへるけさの一こゑ
残の木ゝに雪のふりかゝりたるか櫻にゝたるを
神無月もみちにふれる初雪はをりたかへたる山さくらかな
むこになりにたるつとめての哥人のこひしに
若代にちよをすく覽程よりもまつはくれこそ久しかりけれ
かくら岡にて子日せし人に(たかつねイ)
舟岡も遠きわたりに子日してつなてにちよの松やひくらん
春宮の御まへに菊をおほく植させ給ひてまうすにあ
やにくにたまはせねは
(下室)星とのみゝてやゝみなん雲のうへに惜(さきつらなれる集)ませ給ふ白菊の花
と申たれは
(同)色ゝにうつろふ菊を雲のうへのほしとはいかゝ人のいふ覽(て集)
大殿たんはの家にわたらせ給ふてこのゐたる家のむ
かひにて荻いとまねくとおほせらるゝとありしかは
あなかしこ招き申せと荻のはのそよと計りのあふせ事なし
いつものうへ荻をこひてをそうとり給ひしかはなと
かとは問へたりしかは
忘れつゝ堀も植なてやみなまし荻ふく風の音なかりせは
御かへし八月なれは
ほに出て秋も半になりぬるをけふしも荻のそよといふらん
九月西の院にいつもの母うへのいみにておはせしに
おなし比故三位のおはせしか思出られて

かきしくれ思ひ社やれ見し夢にかはらぬ宿(そてイ)の秋のけしきを
少將のちこ生れたるにみのゝかみのきぬ(を集)おこすとて
(新拾)鶴の子の巣たち始むる色衣(けころもは)ちよにやちよにかさねてそきん
かへし
いのるめるあまたのつるの色衣にまた萬代を我はかさねむ
六てうにわたりたるになか島の松のいとこたかくめ
てたきに
淺からぬちよのけしきと見ゆるかな此中島の松のみとりは
かみかへし
みとり子の心ちこそすれ中島の姫松えたる宿のあるしは
四月に郭公(はつこゑ集)のなきけれは
(新古)時鳥み山出なるしのひ音はいつれの里のたれかきく覽
五月雨
おほつかな遠方人やいかならむをやみたにせぬ五月雨の比
しか
秋ふかみよはの時雨にね覺して遙にしかの聲をきく哉
年比宮の御祈に石山にまうてつるにみかとにゐさせ
給ひて例には似すこゝちのいとめてたくおほえて
かゝる世にあふさか山は越けるをなとよとみけん走井の水
せきに人のあひたりしかは
走井の水のこゝろも行はてゝうれしき旅の逢坂の關
齋宮のくたらせ給ひしに
ふりすてゝ雲ゐ遙にすゝか山かゝらん物とおもひかけきや
初雪
見渡せは岩まの小さゝうへしろみけさ初雪はふりにける哉
ひたりのかたにこひしかは

あやめ草引かひ有て見ゆるかなみきはにまさる淀の澤水
七月七日たなはた
かた〳〵に心こそえね七夕のいく行あひのはしめちきりし
むら〳〵に見ゆる紅葉のにしき哉霧はたゝてや秋は過にし
正月音つれすとありけるに七日子日なりけれは
いつしかと思ひをまつに鶯のけふめつらしき初音なる哉
春秋の千草の花の色はみな一もと菊にうつろひにけり
いく田の海に身なけたる女のけさう人の二人なから
落入たるを人々よみしに
玉葉 後れては生田の海のかひもなし沈むみくつとともに成なん
内侍あまになり給しにあかそめ
導かん方につけても嬉しきを又悲しきは何のこゝろそ
繪に死出の山に鬼に追れて女のなきてこゆる(えし)あ
りし(あり)
新續古 つくりこし罪をともにてしる人もなく〳〵越るしての山(みち)哉
二條院譜の題をかきて殿上人に出しては(ちイ)りをと
らせ給ひしに大井をとりて
君か代はのとかにすめる大井川流れてみゆる千世のかけ哉
たけくまこひたる女房のこひしかは
昔よりちよの影をもしらぬ迄面なれにけるたけくまのまつ
春宮の御さうふのねめしたるに參らせて
玉葉 谷深き岩ねのあやめ君かためなかき例を引いてつる哉
三井寺よりくしたる人にしの關よりかへるに
名をいみやたのみて越んあふ坂のせきは宮古を隔てつる哉
かへし　ふの殿とそきゝし
逢坂は心のかよふ道なれはへ(かへらイ)たてんせきにさはるへしやは

かたらふ人の懸に申さんとあれは我もさおほすさは
よき事と申たるに御文のうちに荻の葉におもはすな
る事の有けれは
夕風にひき驚かす荻のはのそよとはかりに今はこたへし
とあれは
世の中にふといなる物おほかれと君はかりなる人のなき哉
又かへし
何事もさらはといひしかひありておなし心に思ひける哉
なといひかはして恨てひころありて
つらしとて心のさらにわすれなは
とていかにも〳〵これか末をたに思はんまゝにつけ
てやめとあれは
あはれなからにたえこそはせめ
九月九日おなし人
玉葉 春の日も何になかしと思ひけん秋のくれこそ久しかりけれ(をなかしとなに集)
菊につけて御かへし
同 秋もまた過ける君と聞物を久しきくれはけふのみやしる
かゝる心さしをいかにおもふとありけるに
同 さらてたに露けき比をなそもかく秋しも物を思ひそめけん
ほのかにおなし事いはんとありしに常に恨かちにて
中あしきころ
君はきみ我はわれにて過すへきいまはこんよと契し物を
かへし
御祓して此とのはや八瀨ちの汐のやをあひにさすらはしてよ
と聞えたれはよひとをとねたましたゝひけるに
ましるへき炎のさまを聞しかは思ひけちてはやましとそ思

おなし比ふの大なこんの北方におはすと聞て
我ならてあらしと思へはとはれ鳬けふもや秋の暮は久しき
おなし人おはしたるに門もあけねはされと松虫はな
くめりたけからすあれは（るにイ）
契置し君すきとはす成ぬれは宿にはたえす松虫の鳴
思ひいつ〳〵とあれはそれに
（千葉）思ひいつるをはうつゝか覺束な見はてゝさめし明暮の夢
とあれはかへし
（同）見もはてゝさめ剱夢を思ふにもこれを現といかてしらせん（そ）
櫻を宰相のもとより獨見るかひなしとあれは
遠にみんうしろめたなし山櫻散とまるへき匂ひならねは
雪ふるに人のもとより
羨まし降つむ雪はむらきえぬとけぬは松のつらゝなりけり
かへし
かき暮し降つむ雪は積るとも春のつらゝはうちとけぬへし
おなし人
しのひ音はきく人もあらし郭公猶さよふけて我にかたらへ
おなし人
めもあはて明しつれ共秋のよにねぬと語らんせめて辛くは
また
雨と降なみたに袖はぬるれ共おもひはけたぬ物にそ有ける
青みし人のむかへかうの所にほうしにてありしに
夢のうちにみし俤のかはらねはなほありしよの心ち社すれ
十月晦日かたにこゝちあしうするとほかになしとて
せさいの萩の根をほりたれは
見るからに露そこほるゝ我宿のもとあらの小萩秋そ果ぬる

昔みし人かゝみのみしをおこすとて
（續後拾）形見にと思ひてみれはますかゝみ戀しき人のかけも忘れぬ（うつらす集）
かへし
ますかゝみ明くれみえしうき影を今は限りとともに忘れぬ
又
增鏡かけはなかめる君なれと猶わすられすなれし面かけ
ある人心くらへにて音もせてかくてまけぬへしとあ
れは正月朔日
鶯のこゑならねとも霞むより君かとふ日を待こそはすれ
たえて音せぬ人の今のみかとゐさせたまひてたかう
なをしけうおこすれは
君か代はうれしかりけり吳竹のとのはしけき節をみるとも
しほゆの所にくらけのありしを
（續千）山端をいつるのみこそさやけけれ海なる月のくらけなる哉
右大弁のうへのあまになりたるにすゝやるとて
契ありし昔の友の玉とみて衣のうらにかけてわするな
おなし人つくしへくたるに
（續後拾）惜からぬ命なれとも諸共にいかまほしきはいきの松原
五月はかりに四條宮のうちにおはしますに參りてよ
るとまりて女房の中へ　つねのふの卿
旅ねするひとりふせやに小夜更てかたらひ明す時鳥哉
かへし
時鳥すきかてにのみかたらひて旅ねの床や淋しかるらむ
右弁乳母集以西尾海鷗本校合了

出羽弁集

むこなひに心いりて正月のついたちさとなるにさすかにつれ〳〵に日の過もかそへられて人のかりやりたりし

なからふる我身そつらきさりともと賴し人も問ぬ春まて

かへしかゝのこのかみ(權守)つねあきら

きなくへき鶯たにも春霞立や遲きと音つれやする

すはうのせし(前司)たかゝたこそのしはすに親に後れて勸す寺といふ所にこもりゐて歎くにやりし

山さとに霞の衣きたる人春のけしきをしるやしらすや

返し

限りあれや霞の衣きたれ共たち出ぬ身に春もしられす

宮いあふみ殿へ子のひのたまへる

ひきたえて千年の春はすくれとも松の緑の色はかはらす

かへし

ことに出て誰もいはねの松はさそとしふるまゝに色增り堯

七日ゆきのいみしかりしにやまとのゝたまへりし

いかにしてわかな摘らん雪深きはる共みえぬ空の氣色に

かへし

さかさまにかへらぬ年を積ためて若なはよその物と社みれ

宮のせし(宣旨)とのゝ年たちかへりてしるしも見えす

はれまなきに九重はいふせさもまさりてなとやうによみたまへりし御ふみとも失なひて忘れて御返しのかきりおほゆるそあやしきしはすにせち分してしな

り

年の内にたちにし春の日數にそ咲るつらゝもあらしとそ思

この雪のはれまなきに昔いまのを思出られてもの哀なるほとにしもちくこ弁の御もとにたよりのありしにつけてきこえし

雪もよにふりにしをの戀しきを哀君もや思ひ出らん

御返事もさるやうにありてをなかけれはとゝめす

年月はゆき積れ共もろともにこしちのをはいつかわすれむ

このはつかのほとに經ほとけ供養し奉るに女院のさゐもんのないしちかけれは車なからたちてきゝたまふかかへりかくのたまへりし

嬉くも君かみ法に參りあひて見えしつまきもこらむとそ思

かれたる木の。ひかきといふものにそひてたてりけるを。見たまへるなるへし。

かへし

諸人にひろめしのりも薪こる君にましてそ嬉しかりける

せうとの君からうしてちくこに成たるにさいもの命婦のはらからも此度さかみになりたれはおなし心にうれしからんとにや常におとなひたまへぬ人なれとかくのたまへぬる

この春はいもせの山の埋木もこなたかなたに花そ咲ける

かへし

いもせ山たゝにはあらす埋木の匂ふはかりの花ならねとも

この里はよろつのまちうとあつむるほうしせうといかたはらなれはたよりにはしるもしらぬもうちおこなふにとほたあふみのせしのりしけとか湯あみにき

たるかくいひたる
鶯のこゑをしきかぬわれか身は春の過るもしられさり覧
かへし
埋れきとみえぬ君しもいかなれは今まてきかぬ鶯の聲
いつみのあまうへと聞えつるをはすさか(朱雀)といひ
て山里よりも世はなれたる所にてなくなり給へるに
さきの齋院の君はその人のとりわき睦ましく物した
まひしかはいみにこもりてよろつしたゝめはてゝち
るになんやかてほかへわたるとなとあるふみに
とあるかへし
あるもかくさま〳〵別るなき人は何れの道におもむきぬ覧
悲しきはめのまへよりもなきひとの赴むく道をしらぬ成覧
二月一日宮に参りてあふみ殿に其後かきたえてきこ
えさりしを思ひいてゝ
いつとなき松の緑もこの春はちしほ増れる色をみせはや
あふみ殿
くらふれとちしほの松も限りあるを枝さしかはす契をそ思
おまへに大枝なる櫻を植させたまひける花のいとお
かしう見ゆるをわかおほん心からしもねをのみした
まてへたう殿のたまへる
雲井まて匂ふとみれとともすれは霞隔つるはな櫻哉
御かへし
雲の上に匂ひをちらす櫻花かすみもいかゝへたてやるへき
参りたるすなはちさい院の長官の尋きこえたまへる
ことゝ人のつけたまひしにうちいはれぬる
餘りあれは我たに思ひすつる身をいかなる人の忘れさる覧

これは二月つこもり頭弁参りて人々物かたりなとし
てあしたに哥よみて参らせんに何事を題にせましよ
ろつのことのめなれたるにもてはなれたらんこともかな
なとたこ(丹後)のないしにとりわきてきこえ給めりし
をみしにいとめ出たくそあめりし人と人のおほんこ
なれとおかしけれはなん
春はたゝ柳櫻にあらす共つのくむあしをみてもすきなん
かへしないし
澤水に角くむあしを見るとても雲井の花のいかゝわすれん
いつみの尼君のをりの薄墨をはかなきことゝふらひな
とならはしたる人のとはて過にしかたへおなしほと
のふてに成たるをとひにやりたりし
薄墨のそてをかけてやすくす覧われをも人の思ひすつとて
返し馬のかみつねのふ
問はすとて恨みさらなん中々にかくれは袖のぬれまさり覧
物語なとのついてにかく参らぬなとかはかなき事に
つけてもうち驚かさせ給ふましきいみしうおほしあ
なつりたりとある人に今かならすきこえさせんかう
きゝつれはうるさきまてなといひたるに日ころも久
しう宮にも参らすなとあるにおかしからんこともかな
云ひやらんことなる事なきはよしなしと思ふほとに
このころの櫻よのつねの春よりもいみしきを一枝折
せてあれよりみふのたいふさたなかなり
をちこちの花の匂ひし常ならはたれかはくるゝ春を惜まん
かへし
花ちらす春も盡せぬよなりせは人にとはれぬ身とやならまし

さるはあの契もこれよりとそ思ひきこえつるにさす
かにとて又
よの常のをはいはしと思ふまに覺束なくてすきぬへき哉
となむおもひつるといひたれは又立かへりかれより
人にとはれぬふしなんうちときかたきなといみしう
すかして
たか宿も垣ねの櫻ちりぬれと我そとふらふ人やおとする
また
いか計いふせからましよの常の事を云はしと我もつゝまは
とあるかきねの返しをまた
とふらふと猛き言のはさらはたゝ暮の春のみまちや渡らん
あふみのかみやすのり三井寺につくる山里に櫻の盛
にきてみよとありしをいとよきをそなといひしかと
さかりになるまて思ひもたゝてやみぬるに其頃あし
こにありてみも驚けとやえならすいみしきを一枝折
てたゝものもいはておこせたるに
一枝をみるにもいとゝ山櫻今とてゆかぬ身もなけつへし
かへしあふみ
山櫻きてみる人もあらなくにまつとてしらぬしつえなるへし
ひとゝせもみし櫻もとのさくらまた散殘りてやとれ
いのたこのないしをしるへとしきこえていてたつに
あへきに宮ちかき所にいてゐて山はかすみにとちら
れ空のけしきもまたいとたと／＼しうくらき程に急
きいてたれとあなたのかたよりかへる車のあるをね
たくも先立たる人の有けるかなとてないし
おもひのほかのくるまかな
とのたまふを哥になさんとてかけてたにといひ侍し
かはこさこ(小左近)
われよりほかに花みける人
たといふものゝ手ふれぬを見てこさこ
花みると苗代水にまかせつゝうちすてゝける春の小山田
とあれは
春のたをまかする人はなくはなく返す／＼も花をこそみめ
たつぬる櫻はところ／＼ましりて桃の花のめもあや
におもしろく匂ひたるに
まちもあえぬ櫻かひなし桃の花みちとせの春これを尋ねむ
こさこ
みちとせの花にうつろふ君なれはまたぬ櫻も心ありけり
ないしの御しるへはたひ／＼になりぬるかうれしき
ことなといひ
春ことに花のしるへとなる君ははかなゝからもあはれ契や
ないし
春ことに花なかりせはわれに君なけの衣もかけすやあらまし
盛りすきぬと思ふにいみしうめてたき匂ひとも殘り
たるにまことに心もなくさみてみる
花をこそ惜みにはくれ春ことにいのちをのふる山さくら哉
今は散ぬらんと人のおしはかりたまへるにかく盛り
すきぬといとかなしくて
尋ねつるほとをまちつる櫻はな山の嵐とたれかいひけん
こさこ
はる霞立かくしつゝ君まつと風にしられぬ花とこそみれ
ましてとくいてたゝてなとくち惜けれは

名をきけはちりての後に尋ぬれと猶たのもしき櫻もとかな
　こさこ
ちりかたのをりにしもこそ積りつゝ櫻もとには盛りなり覺
　ないし
ちるをたにみにと行つるかひありて尋ねきにける櫻もと哉
　ないし
またさかりなる花もありけり
　こさこ
山ふかくこゝろのまゝにたつぬれは
　おほむかたゝかへに大宮とのにわたらせたまふこと
六月十よ日いつみの涼しけさ小高き松の年ふりにけ
るこすゑなとたゝにてすくさせたまふ所のさまなら
す七月七日なと必す御あそひありぬへきほとなるを
と〳〵しかるへき程にあらねと其日思ふさまならす
あたり〳〵たるをたゝけしき計とてよき日なりける
權たいふ正のすけなとさるへき人ゝすこし參りたま
て庭の松いくらの年をかゝきれるといふ題をたしま
のかみさねつないたしたるをとの人ゝいとようよみ
あつめたまひいかに女かたも殊更にひとつにいたせ
とにはかにはへしかはせし殿
　大納言きみ
庭の松みとりの色の深けれはみつのそこ迄ちきるなりけり
めつらしき君きまさすはちよ松の契れる數も誰かしらまし
　さいそう(宰相)の君はかり泊りさふらひて山のかたな
　りつるやもたふれてのゝしるをとなるおかしきこと
　やあるへかりつるおほえしてやみぬるをせしとの猶
　人ゝの思ひたまへらんをともゝすこしはかり聞かむ
なとせめたまへはまつさらはいかゝときこえしかは
おほしたることを
天の河あさくもあらは七夕のこの音たかきみつせかさしや
　大納言の君
秋風のすゝしくたゝは七夕の重ねやすらんあまのはころも
　やまと
いかはかりなかき契を結ひけん空にたえせぬ七夕のいと
　しゝうの命婦
たまみたるうはゝの露は七夕の絕せぬ糸にぬきとめてみん
　又例のみないひとられたてまつりて物もおほえすの
みそ
底きよき泉の水にうつしてそ星あひの空もともにみえけり
　風をうらみたまひて源少將
これやさは秋のはつかせ七夕の雲の衣も吹みたるまて
　たふれしや人ゝ二三人なくなりにけりと聞にあさま
しくて
あらき風吹につけてもいとゝしく露の命そかなしかりける
　大納言殿まかてたまひてよろつに水のなかれも月も
　松風のひゝきもこひしきをとのたまて
たちなみし面影をの戀しきにすみうかれぬる宿のみつかけ
　おほむかへし
戀しともいかは賴ますしら波の立かへらはそまことゝ思はん
　やまともまかてたまて猶くち惜くこゝろうくてやみ
　にしかせをうらみて
花ちらす折ならねとも身にしみて恨めしかりし夜半の風哉

かへしを
片數のをりにふく共か計りにさらは身にしむ風はあらしや
かう面白くめてたかなるはなとかみせまほしきなといふきしきとうらみて前さい院のつほねより
みにこともいふ人やあると瀧のいとを心にかけて暮す頃哉
かへし
さ計りに思ひよりては瀧の糸のなとくる事のかたく成へき
これはまとにいひつくすへくもあらぬとのゝありさまのおかしさに思ひあつめし獨を四日によみあつめられたりし松のたいをあるしとゝの御心のうちおもひやられて
年へぬる契はけふやしらる覽かゝるみゆきを松のみとりに
みすのまへちかき松の年ふりいみしきかけに月のあかきにおりて梢を見あけたる心ちあいなうたのもしくて思ひつる心に今そかなひぬる木高き松の陰にかくれていつみのいみしうすゝしきに手をひたしなとして
えに深き泉の水はありなから結はぬ夏のいかてすきけん
心のうちも吹はらはれて思ふをなき心ちすれは
いけるよを此宿にたにすくしては物思ふとは長くたえなむ
うちかへしてあいなけれは
あちきなき宿に成に覺この夜にはとゝめしとのみ思ふ心を
れいせい院にいらせたまふを水の流のたちわかれぬるいとわりなくて
ゆく水の流れあふせはたえすとも戀しかるへき數を社かけ
かやうの事ともゝおなし心にこそゆきていひあはせなとしたまふ宮のすけ七日のことすくしてと思ひつるもかくすさましくなりぬれはいつしかと國へくたりなむとてようさりなんきやうはいてぬへき又はえたちかへり參らしなとまかりまうしゝたまふさていつかのほりたまはんするときこゆれは年かへりて二三月計にやと思ひはへるとあるをきゝていひたまひぬるにたてまつれりし
かへる雁またきくまてと思ふかなつねは惜まぬ命なれとも
そのころおかしきこうりともの御まへにあるをおろしてうしまろ太夫の御もとにかくかきつけてたてまつりし
戀しくもなりにける哉うりふ山きりまを分て立もいてなむ
大夫の御返し
みすのうちにいらぬ我身を恨つゝうりふ山にも出ぬなそへし
またおほむつかひのあれは
たまたれのみすのうちなる光をもちゝの秋には又誰かみん
京極殿にうちのわたらせ給しにこの宮つかさともみな悦ひさはきしたましにたかまさは服にてそのよみせすなりにしをそのほとすくしてすへきに思ひたるかすこし月日の過たるを里よりふみおこせたる次てに身をなきたるけしきにてふみをかきておこせたるまめことの次にかきてやりし
君をのみ思ひしる覽うきことを忍ふにかゝるあしはらのよを
かへし
忍ふれとうきことしけき葦はらに深き恨のいかゝなからむ
あはれと思ひし人のなこりの心はへのかたみ計もな

そほいなきをうらみなとするにいにしへの物語なと
　してかへりにしにやりし
忘られぬ昔かたりの名殘には恨みもはてゝ哀なる哉
　もろもとの少將わつらふをありて久しう參らて有け
　るもたゝ世のさへることとありてこそはなと思ひてあ
　るにかゝるにとはぬをなといみしうなん恨みますと
　きこえよとゝもよりかいひしかはこゝにもさやうな
　るをのみおほかるをかうこそきこゆへかりけれとて
とはすとて君や恨るわれもまた哀いかなることを思へは
　かへし少將
我はかり物思ふ人はなき物をなほさりをそきみかうらみは
　この大宮とのゝほとのことともかき集められたりけ
　るをさゑものないしのつたへてさかみ君にみせたま
　へりけれはれいのいみしきこちたきことはともにな
　むめつるいかはかりなるをともをほめられたまふ物
　とかおほすふみにもかきつゝけてたてまつれとあり
　しかと籬のうへにさし置て失なひてやみにきとかた
　り給しかはたゝあれよりあるをと思ひてかきしふみ
　の次にかたはらいたきことゝものもりにけることな
　いしのうしろめたうものゝたまふなとかきて
　かへしよのつねならぬすかしことはおほくてふたつ
した紅葉あさき心に任せつゝちる言の葉をいかにみるらん
見る人も心にそしむ紅葉はのちるたひことに色のまされは
吹風につけてもちれともつきせぬはこたかき峯の紅葉成けり
　とありし返事にまた
深山木は小高けれ共ことのはゝ谷の底にそおちつもりける
　またあれより
色深きかけあらはるゝことのはに出した水も錦をさして
　とあれはまけしとてきくかに
小山田のうちに任せていふををまをと思ふすきものもなし
　みまさかに宮のさふらひなりともといふかくたりた
　りけるもしらぬになとかかゝるたよりにも音信まし
　きと恨みて宮のすけ
いかにしてかゝる便りにとはさ覽うしとそ思ふ音なしの瀧
　返し
賴みたる心の程をしりぬれは恨みられてそかなしかりける
　うこ(右近)のないしのすけの伊豫にくたり給ふけるみ
　ちによろつの人にみせまほしき所ゝのおほかるにか
　はねしまなん心とまりしかはさすかにその事とする
　しあるをもみえてしろき石のひまなかりし處のめく
　る／＼みしかとなにともなくてこそありしか
　かへし
それとみん跡はかもなしかはね島埋まれぬ名を誰殘しけん
そのはかとみえてそきけむかはね島猶きく人はたゝ(なら)歎
　はきの色こく咲たるをちりなは惜しとてこいよの北
　の方のおこせたまへるかへりことに
色に社猶めてらるれいくちたひ浮世の中にあき萩の花
　かへし
定めなく浮世のなかを秋萩のうつろふ色におとりやはする
　さい院の長官なかふさの君のうちの御まへにて菊の
　哥おかしうよみたりと御まへにもほめさせたまひ／＼
　ゝもいひしかはいひやりし

いとさしも我を思はぬ君なれとたゝ人しれす嬉しとそきく

　かへしなかふさの君

色深く賴む心のしるしにはことのはわきて人のとふらむ

　寬政二年きさらきすゑの一日。巳刻なかはより黃昏に寫をへり。出羽の辨といふ文字をかしらにおきてよめる　　　遠　清

　いそきつゝてに任せたるはしり書

　のこりて年のへむもはつかし

右以加々美遠淸木書寫得一本挍合了

祐子內親王家紀伊集

　かやゐ(高陽院)とのゝ七番の哥合に櫻

詞花 朝またき霞なこめそ山櫻たつねゆくまのよそめにもみむ

　郭公

新勅 聞きてしも猶そまたるゝ郭公なく一こゑにあかぬ心は

　月

金葉 鏡山みねよりいつる月なれは曇る夜もなきかけをこそみれ

　一宮のうた合にくに〳〵のおかしき所〻のなを題にて人〻哥よまれしに秋の湊

續後撰 おとに聞あきの湊は風にちるもみちの舟のわたり也けり

　殿上のけさうふみの哥とした〻の中將のおこせたまへる

金葉 人しれぬ思ひありその浦風に涙のよるこそいはまほしけれ

　かへし

同 音にきくたかしの濱の(うら集)あた涙はかけしや袖のぬれも社すれ

　あきのせちにいる夜つねにくる人のこさりしかはつとめて

袖のうへの露けかりつるこよひかなこれや秋立初なるらむ

　人のもとより

續後撰 人しれす思ひそめてし山河のいはまの水をもらしつるかな

　返しいまはさやうの事思ひはなれたれは

同 かひなしや岩まの水をもらしてもすむへきとの此世ならねは

　人のもとより

玉葉 あふとのかくてたえなは哀我よゝのほたしと成ぬへき(かな集)身そ

かへし

なとやかくはかなき夢を後よの〔の脱歟〕ほたしと迄は思ひたとるそ

みあれのひ人のもとより

千早振あら人かみに事よせつけふの葵をかさゝさらめや

返しおなしところにかたらふ人のありしかは

續千 もろかつらかた〳〵かくる心をは哀ともみしかものみつかき

有大とのゝたいともたまはせたりし中に郭公

續後拾 郭公行へもしらぬ一聲にこゝろそらなる五月やみかな

ほたる

かへるさは篝もかけし藻かり舟〔の脱歟〕澤の螢ひましなければ

ひはなとひきくらしつゝあそひて日くるればかへり

し人に

後拾 わか戀はあまの原なる月なれや暮れはいつる影をのみみこ

かたらふ人いせへくたりたるにさるゆかりありてそ

のわたりのを常にきく

ふりはへてとはん物とは思はねと耳のみとまる鈴鹿山かな

七月八日

つねよりも荻のあき露しけきかなこれやわかれの涙なる覽

ちるをふみかけとありし人に

續後撰 あた涙を君（いふ集）こそこさめ年ふとも我まつ山は色もかはらし

月待女といふものかたりを見て

いにしへの月まつ里をみるにこそ哀うき世はたくひ有けれ

いみしく忍し人に

金葉 恨むなよ影見えかたき夕つくよおほろけならぬ雲間待身そ

何とてか心にかゝりそめにけん神のゆるさぬ中のあふひを

うちとのに渡らせおはしましたりしにさふらひあは

ぬ

を口惜しかりてさぬきより參らせたりしとしつな

新拾 神な月あさひの山もうち時雨いまや紅葉の錦おるらむ

返し

同 きみゝねはあさ日の山も（の）もみち葉もよるの錦の心ちせし哉（こそすれ）

七條宮の四條との右少弁か集をかりてうつみひとい

ふ所に哥はなきにかくかきつけられたりし

もろともに君もはかなくきえにけり埋火いかて燠たてけん

かへし

かけていへは驚かされて埋火のきえにし事はさえて悲しき

宇治とのに日ころありて我ひとりかへりてありしに

うちとのより

續後撰 里なれぬ山ほとゝきすかたらふに都の人のなとかおとせぬ

御かへし

同 都にはいかはかりかはまちわふる（たる集）山時鳥かたらひし音を

宇治とのにわたらせおはしましたりしにうちの里に

すみつきてゐたる宮の女房

あき霧のたちゐにつけて待しかとあふみの海の心せしかな

返し

秋かせにふけの里人音すやとわれも心にかゝる川なみ

月のあかき夜なかすゑか五條の家をみて

玉葉 にこりなき泉にやとる（うつ）月をみてすむらん人の心をそくむ

おもふ事ありて山里にすむころ

同 箸鷹のすゝろにかゝる住居してのへの雉子と音をのみそ鳴

女なとくして山里にゆきたる人のもとにおこせたる

鶯もみやこの人をこふとてやふかき山へに我ことは鳴

とありし人にかはりて
霞わけ思ひこそやれ鶯のはね打かはす花のねくらを
おなし人またよそなりしをり
心からひまもなきまて靑つゝらくる／＼物を思ふころかな
返しまた世になれぬ人にかはりて
山ふかみくる道もなきあをつゝらなにとて人の尋ねそむ覽
東北院のちこかもとに人々ことひくをきく我もひは
ひきなとしてかへりて後にちこかもとより
そらすみて棚引雲もなき夜半は半の月を思ひこそやれ
かへし
思ひ出る半の月をみてしよりほのかにきゝしをはこひしき
七日おかしきふみとも人々のもとにみゆるにさもな
けれは
（千載）春たつときくにつけても春日野の若菜をなとか人の忘るゝ
はるたつとよはるゝなにてなん
人のかへりことをいかにもせねは
かきつむる藻鹽の煙立かへり靡きなひかすきくよしもかな
返しなきまさりてわつらはしきをやありけん
わりなしや藻鹽（なさで）の煙ひと方に靡きもえこそやられさりけり（けん）
（玉葉）戀しさにたふる煙のあらはにこそ哀をかくる折もまちみめ
難波江の芦間分ゆくみなれさをみなれし人のこひらるゝ哉
土御門の右大臣のにかたゝかへに渡らせおはしま
したりしに瀧のいとおかしきを
せきれたる心殊にもみゆる哉おとわの河の流ならねと
駒むかひのうたよめとおほせことありしかは
月影もせきい清水にすめるよはさやかにみゆる駒のかけ哉

左京權大夫百首のうち鶯
我ならぬ人きくらめや珍らしきあしたのはらの鶯のこゑ
わかな
さそはねとかたみそ見ゆる（にぞ見る百首）若菜つむ心はのへに通けりとも
梅
まつ人はおのつからきぬ我宿の梅の匂の色しこけれは
さわらひ
またきにそつみにきにける遙々といま萠出るのへの早蕨
さくら
たくひなくみゆるは春の明ほのに匂ふ櫻の花さかりかな
山ふき
山ふきの花みる人や（し百首）昔よりこゝを井手とはいひなかしけん
三月盡
けふのみと空に暮行春なれはとゝむる關もかひなかりけり
ころもかへ
身にしみて花色ころも惜しけれとけふは單に立そかへつる（ひとへに今日はぬぎぞ百首）
あふひ
（續古）年をへて松のを山のあふひこそ色もかはらぬかさし成けれ
たなはた
（新後拾）七夕の逢瀬のなとか稀ならんけふひくいとの（長き契に百首）たえぬ物から
はき
（新古）置露もしつ心なく秋かせにみたれてさけるまのゝ萩はら
ふちはかま
藤袴たれになれけんなつかしき香に匂ひつゝ色はふりせす
きり
秋きりの立へたてつる麓には遠かた人そうとく成ゆく

月

久かたの月を遥になかむれは八十島めくり見る心ちする

衣うつ

頼めおきし程ふるまゝに小夜衣うらかなしかるつちの音哉（めしけなる百首）

九月盡

續後撰 たまさかに逢て別れし人よりもまさりてをしき秋の暮かな

冬のはしめ

風はやみ冬のはしめは山かつの賤の松かきひまなくそゆふ

霜

をく霜は忍ひの妻にあらねともあした詫しくきえ歸るらん

霰

かきくらし俄にもふる霰かな深山おろしの風にたくひて

雪

白雪のふりしきぬれは苔むしろ青根かみねもみえす成行

千鳥

新古 うら風に吹上のはまの濱千鳥浪たちくらし夜半に鳴なり

戀

新續古 人しれぬ戀にはみをもえそなけぬ留ま覽なをせめて思へは

はしめてあへる

つれなさに思ひこりすと歎しをけさは嬉しき心なりけり

あひてあはぬ戀

續後拾 陽炎のほのみし（人にあひ見ねは集）人の戀しさにあるにもあらす戀そけぬへき

曉

おもふを有明の月のあかつきに（は百首）心すみます物にそ有ける

苔

打ならす人しなけれは君か代はかけしつゝみも苔おひに堯

關

續後拾 越ぬより思ひこそやれみちのくの名に流れたるしら川の關

うみのみち

舟とめてみれともあかぬ（ず）松風の（に百首）波よせかくる天のはし立

おもひをのふ

いくめくりすくしきぬ覽春秋の（に）そむる衣を（こゝろを百首）うつろはしつゝ

のこりおしはかられて。これをまとならねと。おほくはうるさくて。

三月のつこもりいなかへ行人の道よりおこせたりし

春霞みちもほのかになる儘にかへりみまさん逢坂のせき

返し

新千 おもひやる心はかりはかよふらん霞へたつる關路なりとも

齋宮にくたる人霜月はかりに

旅衣うら吹かへす秋風にひとりねさめて戀しかりしを

かへし

神風もか計り身にはしましかし片しく袖のさゆるよな〳〵

右祐子内親王家紀伊集以内山永恭本书合了

群書類從卷第二百七十九

和歌部百三十四　家集五十二

二條大皇太后宮大貳集

年のうちの題百二十はかりかきいたして右近少將師時よませられしみな忘て立春

谷河の氷吹とく風のをとや春立けふのしるし成らむ

臨時客

諸人のまつひきつれてくる宿に春の心はやまにさりける

卯杖

幾度かちとせこもれる卯杖つき君かさかゆく春にあふへきあをむま

霞たつ春の七日にひく駒は野への若菜に色そかよへる

よふことり

我をしもよふこ鳥にはあらねとも聲する方に心をそやる

うくひす

玉葉
春毎にきくとはすれと鶯の聲にはあかぬ物にさりける　なく集

春のあけほの

たとふへきかたなき物はよも山ゝ霞こめたる春の明ほの

歸鴈

櫻花さくをみすてゝ鴈かねの雲路にかへる聲そきこゆる

櫻をうへて

玉葉
いかに又またせ〳〵て櫻花咲ほともなくちらむとすらん　見る集

春つかた熊野へまいらむたむけにぬさすこしと山のひしりのこひにつかはしたりしに

たてぬきに柳櫻をゝりみたる春の錦を手向にはせよ

返し

せきの神をぬす人に思ひなむ山のたむくる春のにしきは

人のもとにまかりてかへるとて

時こそあれ春しも歸かりかねは花に心をかけやとむらむ

山里にまかりたるに竹のかたはらに花おかしう咲たるを風いたくふきて竹の葉も花も程なきしつのやにひまなく散かゝりたるをみるほとにきやうよりなにことそ申たりしに

見せはやなさゝの庵に春風のたくみにおろす花のうはふき

本院にて花盛

榊葉のときはならひに櫻花しめの内にはちらさすもかな

東山わたりに花の咲そむるも散もさま〳〵心のとまるもあはれに思ひしられて

心をは咲散花にたくへつゝわれなにの身にならむとすらん

本院におはしまし丶に人々參りて花見し中に
櫻花この春よりは吹風にちらさぬ物としらせてしかな
かへるほとに花にむすひつけてやり水になかす
散花は水にもしはしよとみけりきてみる人そ風も吹あへぬ
弘徽殿のはそとの丶うちに齋院の花かやおほくちら
されてをしをかれたる
源中納言
思ひいて丶なをさりにたにとへかしな下句闕
返　し
この月に匂ふ櫻をみてもまつみかきの花を思ひこそやれ
おなし人おなし殿のひんかしおもてにきりたてをし
をきて二三日まいらぬ程に花のさきたれはかくなむ
とつけにつかはしたる返事にそれをはいか丶せむす
るとありしに
おりうへし枝に櫻とつけやらは散やちらすやなとか尋ねむ
返　し
ちらすなとおりてあつけし花なれは心靜かに思ふとをしれ
花見にまかるとてこ少將に
君ならてまた誰をかはさそふへき花見にゆかむ春の山道
齋院の花をみてまいらせし
そのかみはなれしみかきの櫻はな梢はるかにあかすみる哉
御かへし
おりてこそ匂ひはみえめしめのうちに霞こめたる花の梢は
仁和寺の一品の宮にまいりて花の夕はへのほかかより
もおかしう見えしかは女房のもとに
めつらしくみるおりからか山櫻いつれの春もかくや匂ひし

花みるとき丶て六條院の女房
尋ぬらむよもの櫻を思ひやる心さへこそ花と散けれ
返　し
諸共にみてもおしまてあやなしや花に心をちらしそふらむ
中宮のたいはむ所より
續古 さきたつるこ丶ろをしらて櫻はな尋ぬ(ね ぬ集)る人に成やしぬらむ
御かへし
心こそさきにたつとも山櫻いとかはかりの匂ひをはみし
花を尋てとをくいたる
花みると春は心のあくかれて山路ふかくそ尋ね來にける
三月つく
年をへてけふに心をつくす哉おしむにとまる春はなけれと
岩戸あけしその神代よりしはし猶過行春をと丶めさりけむ
四月一日
夏衣たちかへりけるけふよりは山時鳥ひとへにそ待
四月一日ころさかりの櫻を人のをこせたる瓶にさし
ておまへにをきたるに三四日散らす源中納言のかり
つかはし丶
雲の上に千とせを契君か世は花もときはの櫻成けむ
をこせたりし人のいか丶申たりしに
めつらしと雲の上まて尋ねみき春よりおち(恐有脫字)して櫻を
との丶(師實)ひこの君にみせたれは
春はいかに契をきてかすきにしと後れて匂ふ花にとは丶や
返　し
とはましを花の物いふ世なりせはあかて過にし春の行衞を
四月はかり初めてつかはしたるたかつな宰相の女

忍ひかね郭公とやなりなましかたらはまくのほしき君ゆへ

返　し

うちとけむおりそまたるゝ時鳥忍ひかねたる聲をきくにも

かきつはた

あた人の宿にはうへし杜若心へたつる名にもこそあれ

うのはな

卯花は垣ねわたりの月なれや咲る盛はやみなかりけり

賀茂のまつり

いかなれはうつきとわけてみつ垣の神の代よりは祝ひ初けむ

ともし

狩人の夏の夜深くいるさ山ともしの影のみえみ見えすみ

さみたれ

五月雨の日かす積れは庭の面に舟出しぬへく見えわたる哉

ほたる

ぬきみたる玉かとそみるきしちかみ草葉に迷ふ夜半の螢は

女院(藤壺)の根あはせに人にかはりて

君か代の長きためしにひけとてや宿に菖蒲の根さしそめけむ

蟬

夏山もとよむはかりにあけたてはまとに蟬の聲そきこゆる

いつみ

(玉葉)夏の日もむすふ泉のすゝしきは人にしられて秋や來ぬらん

みな月二あるとしのゝちの七日に

つねよりも歎やまさる七夕は逢まし暮をよそになかめて

みな月のあまれる年は彦星のこふる歎そ日かすそひぬる

みな月はらへ

思ふとみなつきはつる今宵よりやかてなこしの御禊をそする

すかぬきするほとに七日なむ必すゆくへきと人の申たりしに

夏はつる夕に秋のみそきして七日の空をわれも待かな

七月七日まゆみの葉に書つけて

七夕の梓のま弓かすとはいるかとくに君きませとそ

兩せん(良暹歟)か十二より六十二になるまて年ことに七夕に讀てたてまつりける哥をうせて後いもうとの見せにつかはしたりしに

七夕に心よせけるけふかさはわたりもしなむかさゝきの橋

返　し

いかはかり嬉しからましけふをにたゝ彦星の逢夜なりせは

うるふ七月七日(天永元歟)

暮行を待もやすらんたなはたは過ぬる月のけふのならひに

萩

秋霧のたつにまかせてのへとにをりかけてけり秋の錦は

うつら鳴小萩かもとをうちみれはけふこそ花の盛也けれ

薄

(續後撰)しら露は結ひをけとも花すゝき招く袂(くさのたもとは集)のほころひにけり

鴈

(玉葉)ふるさとの淺茅かすゑ葉色つけは初かりかねそ雲ち分ける(にはなくなりけ)

鹿

色ならて身にしむものは秋のゝに妻こひかぬる小男鹿の聲

鈴虫

秋毎にきゝならせともいかなれはふりせさるらむ鈴虫の聲

霧

朝な〳〵立河霧に道みえすいたゝの橋は名のりしてゆけ

くつはむし
駒なへてくる人もあらしと思へともおとろかれぬる轡虫哉
いなおほせとり
秋くれはいなおほせ鳥の涙かも草の葉ことに露そこほるゝ
夜ふかく衣をうつをきゝて
誰かまた秋の夜深くねさめして衣してうつ音をきくらん
ついたてしやうしのゑに紅葉ひまなく散かゝり瀧お
ちたる山のもとに人〻あまたみたる所色紙かたに物
かけと仰られしかは
落瀧つたきのみなかみ音せすは錦をさらす山路とやみむ
九月のつこもりのひ
いかゝせむ今日はかりなる秋の日はおしむ心そ共に盡ぬる
うるふ九月つこもりの日
つねよりも秋の數そふ月なれと暮行けふはあかすも有かな
紅葉
神無月よもの山邊は色〻にもみちの錦たちそきにける
霰
霰降時にしあれは賤のやも玉のうてなとみえ渡るかな
霜
霜枯と誰かいひけむをくからに千種の花の咲くと見ゆるを
をし
冬の池に住なれにけるをし鳥の霜打拂ひよはに鳴之
みそれするに人久しくをとせすといひたるに
降みたれ我身それともおもほへすある物とてや人の恨むる
ほうりむ(法輪)にまいる道に雪かきくらしふるに
身のうさは消ぬ成けり小倉山ゆきまとひぬる道のそらかな

さらてたにとふ人もなき山里に道みえぬまてふれる白雪
雪のふる日しろいものをふたに入てつかはしたる
かきくらす雪けの雲に埋れてかたはれやらぬ月の影かな
かへし
降きらす雪けの空の雲間よりかたはれ出る月とこそみれ
賀茂にこもりたるに雪のいみしうふるに心ほそう
ちなかむる程に神の御おろしとてくほて(華足)をいれ
たるに
御祓して詠めわひぬる雪もよに神のひほろき(籬)とくは嬉しき
まさなしや春はいてすとよ年のくれ(ぬイ)
わかすつる年はくれねと宿をにやらふは老のおにゝさりける
くれぬるをとりとゝめはやなと人の申たりしに
暮ぬれと年は中〳〵かへりなむとゝめ難きは我身なりけり
木陰にて人〻参りて松の葉水に氷いすといふ心よま
せたまひしに
長閑なる水に移れる松かけは千世をはかは(いイ)とみする也けり
人の祝の哥こひしに
神風や吹そめしより花すゝき君にそたこ〳〵八百萬よと
一日ころ春宮わたりの人こひしに
峯つゝきおひそふ松の枝ことにちとせを契る君か御代かな
右近中將おなし所にゐられたりしに九月つこもりの
ひたゝれしに
命あらは秋のけふにはあひもせむ別るゝ君をいつとまたまし(ぬ集)
(縮擔)をはりに君こそ欲く道ならめおしむ涙はなとかとまらん
おやの思まて十三日になる日
なき玉はかけたに見えすなき玉は人の爲なる名に社有けれ

おなし年のつこもりの日

別れにし年はけふにて限れともこふる涙はつきせさりけり

七月七日ふく(服)ぬくにきしにもまさるこゝちして

ふち衣けふしもなかす泪川あまの河水そひやしぬらん

齋院にてかうしむ(庚申)の夜くしのおまへにて夏の夜の戀をとりて

したもゆる戀の煙に夏の夜は山路ならねと戀しとやいはむ

哥合をせさせ給はんとせしおり

千載
戀そめし人はかくこそつれなけれ我涙しも色かはるらん

人のこひしに夏の戀のこゝろ

泪さへたきりて落る夏の夜の戀こそさむるかたなかりけれ

齋院にてこうしむの夜春のよの月

萬代を霞てなひくしめのうちにおほろけならぬ春のよの月

秋の月をみて

長閑にもなかめつるかな天の河雲ふき拂ふ秋のよの月

八月十五夜

月影はおなし山よりいつれとも秋のなかはゝ照まさりけり

月のあかき夜源中納言

みぬ里もかくやくまなく照すらん月の光にわか心あれ

かへし

尋ねくる人も有やと月かけをおほろけにやは誰もなかむる

ふの院の人はいをのみねて月みすとかや有るとかや

かへし八月廿日よひの月出てのち源中納言より

たれか又有明の月をなかめつゝ旅のそらなる雁金をきく

いつくにもおはせむ所を尋ねてといひしかと今宵は

家にねてときくこそおかしく月あかき夜右少將おは

して急きかへるとてとまりぬへき哥とありしに

よりかけむよさきの葛たゆたひぬ思ひの綱の君にみえねは

ある山里に伯(通資)の母なといきあひて春の月いつる

程に

いつかまためくり逢ふへき足引の山ふところにふし待の月

あらしなそと思ふうき世の思ひ出は月みるほとの心之けり

をはすての慰めかたき月影といとかはかりは詠めさりけむ

いかはかり隈なき夜半の月なれはかゝる涙に曇らさるらむ

いつころの月かすくれてはおほゆると人のとひしに

十月はかりの風うちふき時雨つゝ隈なしとみれと曇

りかちなるこそ見すてゝいりかたき心ちすれと申に

そよ我もしかなむおほゆるといふに

思ひよすはれみはれすみ半なる月を哀と君もみけれは

是をきゝて右近少將月あかき夜よ更てしくれぬよの

月はみていたつらにやとねたるとておはしたりしに

よとゝもに君と有明の月をみは所もわかすおりもさためし

九月十三夜

いつも照月そと思へと長月のこよひは光ことにみゆらむ

長月の今宵の月は晝なれやさやかになるにもおほめかれ凫

時つなかむすめのひこの君かうたをよくよみてつか

はしたりしに

いかて君ふかくしりけむ古へのあとかはりゆく敷島のみち

返しこの院のせむひこ

しるへする人にもあはて敷島の古き道にはまとひこそすれ

かむし(庚申)の夜あやめ草くのかみにて戀

新勅
あな戀し八重の雲路にめもあはす暮るよなくさはく心か

あはせたきものすこし
逢みてもはては涙のせきもあへす立歸れせこきても恨みし
　おなしもしなき哥こゝろ見に
逢とよ今はかきりの旅なれや行末しらてむねそもえける
　なをはしめつをはてにて夏のこゝろ
鳴聲はかはらし物を郭公きくたひことにおとろかれつゝ
　あをはしめきをはてにて
あまの河今やたなはたわたるらむ更行空の風そ涼しき
　四季にありし。みなわすれて。
　人のもとにくしのおまへの黄塵ふみの事おもひもかけす心もえねとも
ありかたき身の程人にみせむとや黄金の色の石に成りけむ
　夢のうちの戀
うたゝねの夢みる程もなき夢の現に戀そぬれまさりける
一　上陽人
燈火のつくるをきはとなかめつゝ哀いくよを歎來ぬらむ
紅にたとへし顏もしも降てうとき人には見えしとそおもふ
すきかへる程もしられぬ窓のうちに春と告つる鶯のこゑ
長き夜は明やしぬらむおほつかな窓うつ雨に驚かれつゝ
　楊貴妃
君とわれこの世のゝちの後も又木とも鳥とも成てちきらむ
道のへに駒引渡す程もなく玉のをたゝむ契りとやみし
淺ちふに秋の夜つらくまとろます虫とゝもにも鳴あかす哉
秋かせに空や（本ノマヽ）は花みたれつゝ涙の玉そ袖に散ける
星合にかけて契しことの葉はなかき恨と成にけるかな
獨寢の床はしところに馴れつゝ鐘より後もあかしわひぬる
　后
さよ中に契しことを忘すは玉のかさしをそれとしらしや
道のへに絶にし玉のをなれともなを後の世はなかく結はむ
思ひきや涙路へたてゝ幻のとつてはかり聞かむものとは
かけていひし星合の空を眺めつゝ心をくたく身とそ成ぬる
　齋院にまいりてつゝましうくやしうのみおほゆるに
　いかにと人の申たりしに
暫しなとあつさの眞弓引みつゝ思ひためらふ程なかりけむ
　かへし
ためしなく歎にやその梓弓おもひの外にひきはなれしを
　身をなきにして思ひしつまれと申たりしに
なき物とさま〳〵みつる身にそひて歎は絶す又いかにせむ
　返し
我かれすさゐたつまとや春日野にのもりの鏡いさ尋みむ
　と申たりしにおかしく
さゐたつま盛ならねは白露のをけりめにせむ事のかたさよ
　久しうをとせすと恨たる人に
玉葉 今よりも君にはつらく成ぬへし恨るからにそふと思へは
　返し
恨むるをとふにしなさはかきたえて忘る計に成やしなまし
　何かと人の申たりしに
新勅 いつとなく海士のかるもの思ひわひ我燒貝に藻汐たれつゝ
風吹は空にたゝよふ雲よりもうきてみたるゝ我こゝろかな
同 あらしかし此よのほかに尋ぬとも涙の袖にかゝるたくひは
かく計うきをもしらて長らふる身より外にはつらき人なし
　ゐ中なりしを人の語らひたりしに

我袖は荒磯浪にぬるれともいきたるかひはまたやひろはぬ
後拾遺きこえしころ。りやうせんか集をいもうとの
をこせて申へきところやいかゝといもうとの申たり
しに
巻こめし黄金の玉の聲なれやとまれる跡も見にそしみける
返し
いかてかは聞もしるらむまきためし黄金の玉の聲はあれ共
かへし
名にたかき黄金の玉のその聲もいかてしらまし君し告すは
源中納言かくら哥なとにしうたひて鳥なきぬとて急
き出られしに
神いますゆふつけ鳥も心あらはあくとな告そ忍ひ音にたつ
このせうそこを左京太夫われつたへむとてふきては
かりまいらむとて出給けるをなとかなときこえたり
けれはたいふ
かへる雁玉章かけて立ぬれは雲の上にはいかゝとまらむ
かへしたはらんとありしほとに過にけれは
旅のそら玉章かけて行雁も契りしほとをすくしやはする
弘徽殿のほそ殿に左京權太夫俊頼もの語して今しは
しも侍へきをいみしうひえ侍れはと申せは女房しき
物をたてまつらはやといらふるに數物はいしたゝみ
侍けりといらへたるに人にかはりて
いしたゝみ有てふ庭を君にまた敷物なしと思ひけるかな
かへし
名にしおはゝ身もさえぬへし石たゝみ片敷袖に衣かさねよ
おなし人春つかた同ほそ殿に參りてすくる人を彼し
はし水かへといひとゝめよとあるを。いらへもせて
たつおり。水かへと申侍しかは。そらことならむと
て行過るに南のえむをいましも見むやうにかゝると
こそあれ。なにの料ならんと申せは。たなはしにも
なれかしといらへたれは。いと情なきことさらは足
おれん馬をあつけまして。しはしありて。さはかちよりかへるはか
りなといひて。たちかへりぬるに
おほつかな侍の夜深きはなれ駒跡を尋ねむかたもしられす
返し又の日をこせたりしふみのとはこそおかしかり
しか
とりつなけみかきか原のはなれ駒うき世に荒て跡も定めす
かねふさの集たつぬとて
木のもとに落つもりけむ言の葉を君計こそ世にはちらさめ
返したかつなの宰相のうへ
木の本に落もつもらぬ言の葉は只風にのみまかせてそ見し
ものに籠りたるに近きはく(本ノ)の母いかりまかりて
かへりたるにをとつれたれは
今よりは菖蒲のこほり宿からむをとむすめゆへ君もとひ塊
返し伯のはゝ
をと娘そのゆへのみか蘆垣もかく間近きをあすもさねこよ
また返し
あすもさね行てこそみめ櫻人とよらの寺の近きわたりに
おなし人みたをくりてをこなはれしを思出て
朧けの契りとそ見むむへ法をふり放したる音をきゝしも
殿の肥後の君三悪のあか月にそあはまほしきと申し
に

曉もよをへたてつれは久　きにけふこそいらめ西の門には
人おもふ心は藤の花なれやとひくる程をまつにかゝれる
　すゝりかめにさうふのねをきりていれたりし生いて
　たりしをまいらすとて
誰かみし世にすみのえの諸への硯の瓶にさすあやめをは
　返しつの君
すみのえの硯の瓶のあやめ草千世のためしにひきて社みめ
　齋院に參りて後ある宮つかへ人おなし所にと思ひし
　かくちおしく身つから思ふにかたふたかりてなと申
　たりしに
逢事のたかひそめにし中なれはふたかる方もいかゝなか覽
　久しうをとせぬ中に
笹蟹のくもてにさ社とはす共かく書たえん物とやはみし
　これをきゝて源大納言のふふさ(イ无)今は左大臣との
　のまぬきとそいふかし
如何にかくたゆとはいふそ笹蟹のくものしるしをみせむと思に
　法花の玄義ありときゝし所にかりにつかはしゝ
覺束なまたふみなれぬ道なれと法の爲には尋ねつるかな
　二三日ありてほかに尋ぬとてつかはしたりし
おほろけの契りならてはありかたき法の道をも尋ねつる哉
　返し
尋ねける契りも嬉しこれやさはまとのこのみ拾ふてふその
　うんこし(雲居寺)のひしりあかゝねのうすときゝてか
　ゝみなとつかはすとて
しるへせよ鏡に移るによりもこはいて難きうみの世なれは
　人のくとく(功徳)つくりし所にはうもち(捧物)つかはす
　とて
消かたき昔の人のともしひに思ふ心はをとりしもせし
　齋院今はうちにのみおはしますに里にいてさせおは
　しましたるに人ゝ參りて神樂してあそはるゝにうち
　(鳥羽院)にて宮人うたはせおはしましゝめてたさ思ひ
　出られて
ゆふしてやかみの宮人たまさかにもり出しよはゝ猶そ戀しき
　かへし源中納言
ゆふしてやかけてないひそ宮人の雲の上にて遊ふけしきに
　本院におはしましゝおり人ゝあまた參りて琴ひき御
　あそひありしにその夜まかりいてゝ又の日まいらせ
　し
友にのみあかてかへりし琴の音はけふに戀しき物にそ有ける
　返し左大將今は左大臣殿
琴の音のつまをとあかす思ひせはしめの内にそ引とゝめまし
　鷹かりにきゝすのうちなきてとひ立しみしあはれに
　こそ
御狩野にとひ立雉子ほろ〳〵となく〳〵我も悲しとそみる
　こ少將はなれぬ人に通ひそめられたるころ
なからいの夜比のほとも白糸や結ひ初けるすちはかはらて
　人のなか〳〵身をはなけすやいかにと申たりしに
かりそめとおもひ絶にし憂身にも猶歎かるゝ折そおほかる
　ある所にたつねらるゝ集たてまつるとて
谷かくれ埋れにけるとの葉も木の本ならて散すあやなさ
　ちらさしと思ひし草子をかくもありけりとて見せに
　人のをこせたりし。さもやとおほゆるわたりの人の

手にてありしかは

いかゝせむなたの鹽燒き風はやみ思はぬかたになひく煙を

賀茂にあらんつるほとにまいりてその夜また參りたる人をとまりてもの申けなるけしきにて夜ふくるほとに獨ことに

千早振神のしるしをみたらしのみつともいかて思ひにし哉

と申しを聞つけたりしこそ哀に

瑞籬の神のしるしを取もみてけふより社はみふねなるらめ

人の哥よみてと申しに

哥めせと心たくみの僂さはをのゝ音してえこそつくらね

人の戀の哥よみてと申しに

我にてはけにたへかたし戀の道人にかはるも苦しかりけり

うちのこせむのおほんをひき遊はせおはしますをきゝたりとて

玉葉　ことの音はむへ松風にかよひ癸千年をふへき君にひかれて

とこそ申さまほしかりしか。

内に人〻の集召しゝにまいらすへきよし一の宮のきの君のかり申につかはすとて

君にこそ尋てもみめわかうらに立へき波の跡はありやと

返し紀伊のきみ

いかてかはわかの浦浪なこりありと雲の上まて立登るらむ

かれ〳〵なりける男のたまさかにみつからなとつてに申てほとふれはまちかねてかやうに社申さましか

淺きより絕やはてなむ山の井のみつからとのみ空たのめして

かやうなしておかしやかなる見ところあらしと人のまうせはあらましことさへかきて人猶ある事なき事の傳へてこよなかる方にもくめるいと片はらいたくてしらぬにはあらて思ふあたりに數のみ多くつもりてかへす〳〵みくるしう

隔ておほうみそち計にもすきやせむ我またしらぬ敷島の道

あなかしこ〳〵百八十四。このうち廿人。

これはかくし題

くつはむし

新勅　數ならぬかゝるみくつは席田の鶴のよはひに何かいのらむ

むらすゝき

紅にみゆる山邊は時雨つゝいくむらすゝきかくる錦そ

ものをおもひによせてたかはかり

いはひ

後拾　君か代の千年をかねて角田川かりにもあたの影はうつらす

とりはゝき

あふ事をいつかとまつのふか綠はゝきの露は色そかはれる

すたれかけ

新勅　風に散雲をあたにも我は見すたれか煙をのかれはつへき

はなかむし

妻こひは苦しかりける秋は唯はなか虫かをよりてとひみむ

かきひたし

小山田に鳴こそきぬれ百羽掻ひたしかけれは音もかくれす

へすゝ

紅葉ゝは杵の森やみなかへすすくれて色の深くみゆれは

うちのこせむにかくし題に。よみにくきものとおほせられしついてにかや。

ほとゝきす

頼めしを待わたるほどときすくしきなれ衣を形見にぞ見る

已上百九拾七首　他人歌

大貳（大宰大貳高階成章女　母大貳三位）

成章卿（春宮亮美遠男　母施薬院使紀重平女）

康平元年正月七日　正三位

同二月十六日薨于任所（大宰大貳　年六十九）

二條太皇太后宮（令子）

白河院御女　御母中宮賢子

寛治三年六月廿八日　卜定

四年四月十五日　入紫野院

承德三年六月廿一日　退之依御病

嘉承二年十二月一日　爲皇后宮

天皇即位日准母儀

長承三年三月十九日　改皇后爲太皇太后宮

大治四年七月廿六日　落飾

天養元年四月廿一日　崩于二條堀川第

御年六十七

待賢門院堀川集

なをさむき

山陰のふせやは春もしらねはや軒端の垂氷とくる間もなき

わかな

山賤のしはの垣ねのうちせはみつめる若菜のほどもなき哉

物のみうくてすゝろにくらして

徒に年をのみつむ身にしあれは若菜はよその物とこそみれ

かきの柳糸に似たり

山かつの道にさほせるあせかきにいとほしけなる玉柳かな

山賤の園生にかこふかきしはの絶間にみゆる青柳のいと

かきしへたてたる花

あかすみる梢の花し中垣のこなたにちらす風もふかなむ

ちりて後花しおもふ

山櫻こすゑみとりになりぬれとかはらぬものは花の面影

なはしろ

苗代はをのかひき〳〵急くとも秋のたのみのさためなき哉

すみれ

（雲葉）行やらて心のとまる春の野にしはし菫の花やつまゝし

古里のあさちか原に所えてすみれの花そあるしかほなる

田のいへの山ふき

（續古）吹にけり苗代水にかけみえて田中のさとの山ふきのはな（西集）

ころもかへ

（玉葉）何とかは急きもたゝむ夏衣憂身をかふるけふにしあらねは

野のほとゝきす

待とは淺からぬともほとゝきす野中の清水たえ〳〵そなく

ふるさとのほとゝきす

(風雅)とふ人もなき古里のたそかれに我のみ名のるほとゝきす哉

新院の御前にて時鳥の哥十たひて御返とく〳〵とめせはやかてかきてまいらせてしかと皆忘れにけりこれひとつそおほゆる

みとり子やふりわけ髪の昔よりあかてやみぬる時鳥かな

とありしおほんかへし

きかてのみ我そやみぬる郭公君は千とせもきかんとすらむ

よるほとゝきすのなきつると人のあれは

いかにして聞かさりつらむ子規物思ふ人はいやはねらるゝ

あやめ

こやの池に生ふる菖蒲のなかきねはひく白糸の心ち社すれ

ひく人もなきみこもりの菖蒲草いつかとたにもまたれさり凫

おひたゝてあらまし物を菖蒲草かゝる汀のうきをしりせは

五月雨

瀬をはやみ駒ひきなへしやす河にふな渡りする五月雨の頃

うへ木のかけ秋に似たり

綠なる梢は色もかはらぬに下ふく風そ秋にかよへる

七月七日かちの葉にかく

たなはたに物思ふをかきたらはけには心もなくさみなまし

たなはたにあまの羽衣かさねても恨やすらむ年のへたてを

はき

露しけみ花色衣かへるともまたもきてみむ野への秋はき

しか

小男鹿の妻こふる音にあちきなく我さへ袖をぬらしつる哉

月

なかき夜の月をおもへは月影のかたふく方にすむ心かな

たひのやとりの月

宮古いてゝとをちの里の旅寢にも面かはりせぬ秋の夜の月

ふねのみちの有明の月

有明の月に心やすみぬらむ聲うち出る沖つ舟ひと

月をみて

うき世にも月に心は慰むをつゐにいかなる闇にまとはむ

ありあけ

山里のかけひの水にかけすみて心ほそきはあり明の月

また月の哥とも(とてか)

ありしにもあらぬうき世にかはらねは月そ昔の形見成ける

のこりなく成行秋をしりかほに光おしますてらす月かけ

ゆふへのむし

風に艸葉かたより夕されは虫の音さへもみたるなるかな

草のなかのむし

淺ちふにをのか聲〻啼虫はこゝろ〳〵をいかてしらまし

きり〳〵す

露しけきのへにならひてきり〳〵すわか手枕の下に鳴なり

きり〳〵す夜深き聲に夢さめて壁のあたりはいこそねられね

遠きむらに衣うつ

から衣いつれの里にうつならむ遙につちの音きこゆなり

田家のかせ

宿ちかきおくての稲葉打なひき哀身にしむ風のをとかな

詠めやるとをちの里のもみち葉は秋とゝもにそふかく成行

秋のはて

かれ〳〵の淺ちに結ふ夕露をかたみにをきて秋の行ぬる

山里の秋の暮

山里の麓の野邊の眞くす原かへる秋こそ恨かほなる（れ續）

しくれ

かき〳〵もり時雨は音もなけれとも名殘にふるは木葉成けり

山里のゆふへのしくれ

人もこぬみやまの里に音するはたそかれ時のしくれ成けり

海のほとりのおつるは

心あらは海士もいかにか思ふらむ紅葉ちりしく松かうら島

旅のやとりの落葉

木の葉散やまかたつきのさゝの庵は埋もれぬへきふし所哉

ちとり

汐のみつ磯邊のちとり涙なれて共に立ぬる聲そきこゆる

水の上の千鳥

あふかくるさほの河瀨に立つ千鳥又いつかたへ鳴渡るらむ

しはすのつこもりの夕くれに物をおもひつゝけて

（玉葉）世をうらみ身をなけきつゝ明暮にとしも（て集）心もつきはてに鳧

新院の百首の中の春

（千載）暮はてゝいつこまて行年なれはよのまにけさは立かはる霞

（千載）雪ふかみ（玉葉）岩（續集）のかけ道あとたゆるよしのゝ里も春は來にけり

（新勅）霜かれてあらはにみえし芦のやのこやのへたては霞なり鳧

（千載）いつかたに花咲ぬらむとおもふより四方の山へにちる心哉

宿ちかきまかきの中に咲をこそつほ菫とはいふへかりけれ

夏

ほとゝきす雲ゐに（をイ）過る一聲は空耳かとそあやまたれける

五月雨の日をふる里の庭の面はみくさもとらぬ池かとそみる

まこも草たかせの淀に茂れとも末葉もみえす五月雨のころ

秋

（新古）たなはたのあふせ絶せぬ天河いかなる秋か契り（わたり集）そめけむ

みやき野に朝たつ鹿も心せよ本あらの小萩花咲にけり

（千載）はかなさを我身のうへによそふれは袂にかゝる秋の夕露

（續詞）水の面にかきなかしたる玉章はと渡る鴈のかけにそ有ける

（千載）さらぬたに夕さひしき山里の霧のまかきにをしか鳴なり

すむかひもなき世中の思いてはうき雲かけぬ秋の（やまのはのイ）よの月

（千載）秋の來るけしきの杜の下風に立そふ物はあはれ成りけり

雲の浪かけてもよるとみえぬ哉あたりを拂ふ月のみふれは

立田姫もろこしまても通へはや秋の梢のからにしきなる

冬

晴くもり時雨の空をなかめても定なき世そおもひしらるゝ

蘆そよく汐風さむみかたしき（きしイ）の入江につたふあちの村鳥

ふる雪に園のなよ竹おれふしてけさは隣のへたてなきかな

昔なと年の終りをいそきけむつもれはうきと成ぬる物を

戀

（新勅）かくとたにいはぬに茂き亂れ蘆のいかなる節にしらせそめまし

（同）袖ぬるゝやま井の清水いかてかは人目もらさて影をみるへき

（千載）あら磯の岩にくたくる波なれ（に集）やつれなき人にかくる心は

（新勅）夢の事みしは人にも語らぬをいかにちかへてあはぬなる覽

（新後撰）頼めすはうき身のとかと歎つゝ人の心をうらみさらまし

（續詞）笹かにのいかさまにかは恨むへきかき絶ぬるも人の咎かは

（新）疑ひし心の裏のまさしさはとはぬにつけてまつそしらるゝ

（千載）戀人を忍ふへしとは思ひきや我心さへなとかはるらむ

（續後撰）忘れにし人はなこりもみえねとも俤のみそ立もはなれぬ（す集）

（千載）あふこなき（との集）歎きの積る苦しさをおへかし人のこりはつるまて

ふかくのみ契りしことを思ひいては（にイ）をとはしてまし山河の水

神

色ゝに憂身をいのるぬさなれは手向る神もいかゝみるへき（らんイ）

ほとけ

（續千）長きよに迷ふさはりの雲はれて月の御かほをみるよしも哉

無常

夢の世をおとろきなからみるほとはたゝ幻の心ちこそすれ

わかれ

行人もおしむ涙もとゝめかね忘るなとたにえこそいはれね

たひ

（千載）道すから心もそらになかめやる宮古の山の雲かくれぬる

（續古）ふるさとにおなし雲ゐの月をみは旅の空をや思ひ出らん

（續詞）忍ふへき都ならねとしかすかのわたりもやらす哀なるかな

旅の空をのかつらとや思ふらむ宿かりかねの近くきこゆる

（續後拾）はかなくそこれを旅ねと思ふ哉いつこも假の宿とこそきけ

いはひ

君か代は枝もうこかぬ松風に久しきことをしらふなる哉

さなへとる人

早苗とるたこのも裾にあらねとも我か戀路に袖そぬれぬる

荻の上の露

萩のうへの露もとまらて行人を花摺衣かへれとそ思ふ

枕のしたの蛬

黒髪の別ををしみきり／＼す枕のしたにみたれ鳴かな

あしまのこほり

蘆ねはふ入江の氷結ほゝれ長からぬよを歎かすもかな

戀

（續千）わきかへり岩間の水のいはゝやと思ふ心をいかてもらさむ

よそふへき方もしられぬ戀なれはいかにいひ（てかもらしそむ一本）

見るめなみかけぬまもなき袖の浦に忘れ貝をは得社拾はね

つゝみあまる涙の色は紅のこそめの袖にかけてしのはむ

今はたゝつれなき人の戀をして我なけきをも思ひしれかし

すたれをへたてたる戀

玉すたれ誰ともしらぬすきかけを見るに心のかゝりぬる哉

かたみにこふ

君と我かよふ心の行もあはてあやしくまとふ戀の道かな

石によせたる

あふ事をとふいしかみのつれなきに我心のみうこきぬる哉

ふみゝぬ

なかれてと頼めしかとも水くきの跡さへ今はかき絶にけり

江によする

（新續古）みさこゐる入江の水は淺けれとたえぬを人の心ともかな

浦によする

かひなくてかへる浪とはしり乍ら猶こりすまの恨みにこそ行

なき名

すゝくへき方もなき名そ老にけるみつたのおひ（元ノマヽ）（うちはとけれに）

たのむる

（續拾）僞にならはさりせは行末と（も集）頼むることになくさみなまし

なけく

山彦の答たにせぬ歎にもこりすそをのゝおとろかしつる

　いつしか人きゝのゝしりけれは音もせさりけるにや

　らんとてこひしに

淺ましや人めもりぬとことよせて絕はてぬるか山の井の水

　たえにける男の口おしき事とも人にいひなとするか

　またをとつれたるにやらんとてこひしに

うしとのみ秋のけしきはきく物をいかに音する荻のは風そ

　ふみをこする人の絕て又音つれたるにいひはなちた

　らん哥と人のこひたるに

玉葉 山の井の淺き心をしりぬれは影みむとは思ひ絕にき

　絕にける男の年頃ありてみつからなといひたりける

　かをとせぬにやらんとて人のこひし

ひたすらに思ひたえにし山河のなとみつからと驚かしけん

跡絕てふるの野中のみつからとかけしにいとゝぬるゝ袖哉

　五月五日絕にける男のかりやらんとて人のこふに

菖蒲草かけても今はとはぬまに浮根計りそたえせさり兒

　はなれたる男の子をむかへたるにそのちこのもとへ

　くす玉やるとて人のよませし

ひきかへて玉ぬきかけよ菖蒲草うきみこもりの慰めにせむ

　男の鏡のかけかはりゐなといひたりける返事にかは

　りて

かはるらん疑はしさそ增かゝみ心もかくやあらんと思へは

　今はあふましきよしと又こへは

恨わひつきせぬものはなみた哉逢見むとは限と思ふに

　(仁和寺)にわし殿に九月行幸ありてくらへ馬有しに新院くら

　ゐの御時きくせんしうをちきる

續古 雲の上の星かとみゆるきくなれは空にそ千世の秋はしらるゝ

　月

同 はかなくも月に心のとまる哉すみはつましき身をは忘れて

　くしたる人のなくなりたるをなけくにおさなき人の

　物語するに

いふかたもなく社物は悲しけれこは何事を語るなるらん

　よろつの人のなくなるをきゝて

玉葉 をくれゐて淚さへ社とゝまらね見しも聞しも殘りなきよに

　さまかへさせおはしましゝ日やかて御供になりてさ

　ふらふにをくれまいらせぬるをを思ひて

諸共に家を出にしかひもなくまことのみちに立をくれぬる

　御前にさし出てもいつかたかと哀にて

これやさは舟流したるあまならむ淚の海によゐ方もなし

　むかひにゐられたる別當の行幸にまいらるゝとて出

　立のひしめかるゝ氣色も聞ゆるに雪うちふりてしつ

　かにあはれなるにさしをかす

續拾 誰も皆けふのみゆきにさそはれて消にし跡をとふ人もなし

　おはしましゝ折にも似す心ほそくあはれに御所のか

　たにも人のをともせす引かへあらぬ世のこゝちして

ちかの浦の君もなきさにかへりきて淚にしつむ里の海士人

　六月十日ころにわしにいてたるに庭も梢もみとり深

　くしけりあひてかすかに人影もせすこれにすへ(みイ)そめ

　給ひしころのとゝ只今の心ちしてあはれつきせぬ(にイ)日く

　らしの聲たえすきこえけれは

玉葉 君こふる歎のしけき山里はたゝ日くらしそともに鳴ける

七日朔日いつしかおきのをとするに
草ふかきあはらの里のすまゐして露の命のほとそしらるゝ
藥草喩品
艸も木もおのかさま／＼生に晃ひとつの雨の注くしつくに
壽量品
月影は世をうき雲にかくれねと鷲の峯にはすむとこそきけ
雲のたゝよひたるを
風雅 それとなき夕の雲にましりなは哀たれかはわきてなかめむ
心かはりたる男の灌佛のつくりものに松に鶴のゐたりけるをゝこせて
新拾 ちとせまて契しふかき中なれは松の梢に鶴そゐにける
といひて返しこひしかは
同 鶴のゐる松とてなにかたのむへき今は梢に浪も越なん
人の年わかき男の物いふ女いたくわかしなといひけるかまさりてわかき男に逢にけるときゝて男のよまするとてこひしに
さゐた妻結ふをたにもわかす逆角くむ野へに閨はみるへき
うみ
わたつ海は底もひとつにみゆれはや風のまに／＼波も立覽
まくら
夢のよの思ひしらるゝねさめには枕の露そともにをきける
むしろ
秋ふかみ風さむしろに袖しきて芦のしのやにいく夜へぬ覽
しかのこゑ
夜もすから妻戀かねて小男鹿のうらめしけなる曉の聲

右是本春二條家爲定以二自筆正本一令二書寫一畢。尤可レ爲二證本一也。
文祿二年臘月中旬　雅敬

待賢門院堀川集補

久安百首歌に

（[illegible]）宿ことのつまに引かるゝ菖蒲草たかよとのにかねはとまる
（千載雜上）殘りなくわかよふけぬと思ふまに（に色集）かたふく月にすむ心哉
（同雜下）秋は霧きりすきぬれは雪ふりてはるゝまもなきみ山への里
（同[illegible]）ときはなる松もや春を知りぬ鶯初音をいはふ人に引かれて
（同）白雲と峯のさくらは見ゆれとも月の光はへたてさりけり
（續後撰春中）花さかぬ梢は春の色なからさくらをわきてふれる白雪
（同夏）待つ程に劣りやはする郭公（たゞひと集）かたらふ聲のあはぬなこりは（つらさ集）
（千載戀三）長からん心も知らす黑髮の亂れて今朝は物をこそ思へ
（[illegible]）重ねてもあかぬ思ひやまさるらん今朝立かへる天の羽衣
（同[illegible]）つれなさをいかに忍ひてすくしけん暮待つ程も堪へぬ心に
（[illegible]）逢坂の關の杉むら霧こめてたつとも見えぬゆふかけの駒
（[illegible]）ふたつなき玉をこめたるとゆひのとく事難き法とこそ聞け

短歌

（千載雜下）時知らぬ。谷のむもれ木朽はてゝ。昔の春の戀しさに。何のあやめもわかすのみ。かはらぬ月の影見ても。時雨にぬるゝ袖の浦に。臓たれまさるあまころも。あはれをかけて訪ふ人も。涙にたゝよふ釣船の。漕き離れにしよなれとも。君に心をかけしより。繁きうれへも忘草。忘れ顔にて住の江の。松の千年のはる〳〵と。梢遙かに榮ゆへき。常盤のかけをたいむにも。なくさの濱の慰みて。ふるのやしろのそのかみに。色深からて忘れにし。紅葉の下葉殘るやと。おいその森に尋ぬれと。今はあかしにたくひつゝ。霜かれ〳〵に衰へて。かき集めたる水莖に。淺き心のかくれなく。流れての名ををし鳥の。うきためしにや。ならんとすらん。

徳大寺左大臣の大將のよろこひ申つかはすとて

（[illegible]）うれしさにつゝみもあへす池水のいひ出難きみくつなれ共

西行法師をよひ待りけるにまかるへきよしは申なからまうてこて月のあかゝりけるに門の前を通ると聞きてよみてつかはしける

（新古今釋教）西へゆくしるへと思ふ月影の空たのめこそかひなかりけれ

返し　　西行法師

（同）立入らて雲間をわけし月影は待たぬけしきや空に見えけん

歳暮の心を

（續後撰冬）白雪のつもれる年を數ふれは我身も共にふりにける哉

戀歌の中に

（同戀一）友こふる遠山鳥の增鏡見るになくさむ袖のはかなさ

洞院攝政家百首歌に不逢戀

（同戀二）思ひやる心つくしのはるけさにいきの松社かひなかりけり

旅の心を

（同旅）旅にして秋さり衣寒けきにいたくな吹きそむこの浦風

待賢門院かくれさせ給ひにける又の年香隆寺に納め奉りけれはよみ侍りける

（續古今哀傷）夕されはわきてなかめん方もなし煙とたにもならぬ別れは

夏の頃西行法師の許へつかはしける
新後撰雜下　此世にて語らひおかん郭公しての山路のしるへともなれ
法性寺入道前關白家歌合に
續後拾遺戀二　つれなしと且は心をみ山木のこりすも斧の音つるゝ哉
子の日にあたりたりける日神祇伯顯仲が許に養ひたりける兒の許へ申つかはしける
新千載雜上　いさ今日は子日の松の引つれて老木の千代を共に祈らん
返し　神祇伯顯仲
同　祈るとも老木の松は朽はてゝいかてか千代をすくへかる覽
待賢門院かくれさせ給ひけるは御忌にこもりて九月盡日申つかはしける按察使公通
新拾遺哀傷　世中にうかりし秋と思へとも暮ゆく今日は惜くやはあらぬ
返し　堀河
同　限りなく今日のくるゝそ惜まるゝ別れし秋の名殘と思へは

二條院讃岐集

内裏に柳垂といふ事を
青柳のなひく下枝にはきてけり吹春風やともの宮つこ
關路霞
我はさそしらせて過は見えさらん霞にまかふ不破の關守
花によろこひの色有
をのか咲雲ゐに君を待つけておもひせきもる花櫻哉
花留客人
つねよりも山の葉しろき曙は夜の間に咲る櫻成けり
二條院(七十八)御時月のあかゝりける夜終夜南殿の花御覽して曉ちかく成てさとへ出て次の日まいらせたりし
暫しとも我はとゝめし春のうちはきとこん人を花に任せて
御返し
花ならす月も見をきし雲の上に心はかりは出すとをしれ
同比雨の降し日南殿の花の庭の水にうつりたりしをみて
出しより空に知にき花の色も月も心に入ぬ君とは
花の盛に心ならす里へ出しにまいらせける
庭たつみうつさゝりせは雲の上に又類ひある花と見ましや
御返し　御製
あかすして雲井の花にめかるれは心空なる春の夕暮
いつとても雲ゐの櫻なかりせは心そらなるとはあらしな
夜ひる花を思

散花の見えぬはかりそ惜みける心はひるにかはらさりけり

賀茂の歌合に

（新續古）春霞分行まゝに尾上なる松の緑そ色まさりける（かはりぬる集）

花

（續後拾）咲初て我世にちらぬ花ならはあかぬ心のほとはみてまし

里にゐて後に花はいかゝなとうちわたりへたつねける次に

おもひきや雲井の花の咲さかす人傳にのみ聞かむ物とは

よふこ鳥

くる人もなき物ゆへによふこ鳥なれとならしの山に鳴らん

つゝし道をはさむ

いつ方もちらさて行む岩つゝし左も右もまくりてにして

雨後躑躅

春雨にしほれ〳〵て岩つゝし晴るけふこそ色まさりけれ

春の暮の哥あまたよみたりし次に

（我のみのイ）身ひとつのなけきならねは暮て行春の別を問人そなき

今はとて別るゝ春の夕霞こよひはかりや夏をへたてむ

いつくにか暮ぬる春はとまる覽年は我身にそふとしりにき

惜みつる春を限と思ふには殘れる花もみるそらそなき

時鳥

鳴捨て雲路過行ほとゝきす今一こゑは遠さかる也

たひのやとりの郭公

諸共に旅ねする夜のほとゝきす梢やなれか庵成らむ

聲ならすしのたの杜の時鳥いつ里なれて宿にきなかん

遠村卯花

里遠みまた咲やらぬ卯花やさらしもやらぬ布とみゆらん

尋てあやめを引

長きねはあかぬ心を知へにてまたしらぬまの菖蒲をそひく

年ヿにあふひをかく

過こし其かみ山の葵草おもへはかけぬ年のなきかな

あめの後のさなへ

名殘なく晴ぬめれとそ早苗取田子の小笠はぬくよしもなし

あかつきのともし

思ひきや鹿にも逢ぬともしすと有明の月を待つへしとは

かやりひつきぬ

さもこそは短き夜半の友ならめふすかともなく消る蚊遣火

ふくるよのう河

さきた河くたす鵜舟にさす竿の音寒るまて夜はふけにけり

古里のたちはな

橘の花吹かせをとめくれは珍らしけなきみきり也けり

たけのうちのほたる

河竹のよヿにともす篝火はやとる螢のひかりなりけり

いつみにむかふてともをまつ

獨のみ岩井の水を結ひつゝそこなる影も君を待らし

月前のなてしこ

照月の光を霜とをきなから盛にみゆる床なつの花

くゐないつれのかたそ

槇の戸をあけぬ音にやしるか覽水鶏はそこを叩きけりとは

風そよくならの木陰に立よれはうすき衣そ先しられける

萩花露おもし

（月清）秋萩にこほるゝ露のしけ（をし）ければ折ふす枝をあくまてそ見る（なはさ集）

薄の風になひくをみて

吹かぬまは靡かぬにこそ花すゝき風に隨こゝろとはみれ

おきのこゑに夢おとろく

軒ちかき荻の上葉の音せすは心とさむる夢にそ有まし

庭前苅萱

契あれや野邊の苅萱うつし植て思ひみたるゝ友となしつる

萩を

しからめは花もちる覽小萩咲く野へには鹿をすませすも哉

寺しつかにして虫の聲をきく

鐘をたにうち忘にし山寺に入あひは虫の聲のみそきく

月

暮ぬとて待つる月の影淸みいつれはひるに又なりにけり

雲間月

さたまらぬ雲の絶間の月かけは消て又ふる雪かとそみる

時雨

音はかり夜半の木のはにたくへとも時雨は庭に積らさり凫

時雨のうちのたかかり

時雨とてとゝめやはするみかりのゝ狩場の小野にあかぬ心は

十月はかりによもすから木のはのちりけれは

明はてはさてたにもみむ木葉ちる庭をは霜の翁かくしそ

（續後拾）難波瀉みきはの芦は霜かれてなたの捨舟あらはれにけり

水鳥の上毛の霜は拂へとも下の氷やとくる間もなき

寄石戀

（千載 我袖は）我戀はしほひに見えぬ奥の石の人社しらねかはく間そなき

あかつきのわかれを

（新古）明ぬれとまたきぬ／＼になりやらて人の袖をも（さへイ）ぬらしつる哉

はしめはおもはて後におもふこひ

（千）今さらに戀しといふも賴まれすこれも心のかはると思へは

（同）一夜とてよかれし床の小筵にやかても塵のつもりぬる哉

（續千）今更にいかゝはすへき新枕年の三年は（を集）待わひぬとも

たのむれは淚の河もよとみけり人の情や井せき成らん

（新勅）めの前にかはる心をしら露の消はともにと何おもひ劔

逢と見る夢をさめつるくやしさに又まとろめと叶はさり凫

（新後撰）夜とゝもに淸水に袖は濡せともこゆるよもなき相坂の關

今はさは何と（は集）命をかけよとて夢にも人の見えすなるらん

雨中歸戀

いたつらに歸るそらより降雨は分て袖こそぬれまさりけれ

みしかきよを恨むるこひ

夏の夜を何なけくらむひたすらに行て逢みぬ時もこそあれ

昔見ける人にあひたる人にかはりて

中絶し野なかの水の行末になかれあひてもぬるゝ袖かた

しのひて心をかよはす戀

人しれす下に行かふ芦のねや君と我とか心なるらん

白地にはるかなる所へまかりたりしに都なる人の許より

かくてのみ絶て命のあらはこそかなはぬまても待心みめ

返し

待かねて絶す成なむ命をも我あらはこそ哀ともみめ

仁和寺の女院にさふらふ人の許より獨ねなと度々申つかはす返事に

女郎花亂るゝのへに入しよりかたしくよはゝ（あらしイ）有しとそ思ふ

返し

女郎花みたるゝのへはめもたゝて我故鄕の花そ（をしそ思イ）戀しき

寄虫戀

我戀はをちのにすたく虫なれや啼とも人のしらはこそ有め

初たる戀のうた讀あひたりしに

思ひかねけふいひそむる玉章に絕ぬ契を結ひつるかな

形見を留て隱たる戀

そことたにしらせていにし我せこか留る笛の音にそなきぬる

歎によりてまさる戀

月詣
うしと思ふ人の心を種とするとの葉をしもみるそかなしき

述懷　賀茂哥合

いはてのみ戀そ渡るよそなからみたらし河のをとに立ねと

内々におもひをのふる心をあまたよみあひたりしに

我も又ふりなむとの近けれは長柄の橋をよそにやはきく

春日山生そふ松の枝ともに木高くならん影をこそまて

遠さかるその古の戀しきに何行末のちかく成らむ

人の袖をもと言哥を御らむして　御製

ぬらさるゝその袂にはあらね共闇にくちなむとそはかなき

御かへし

數ならぬ淚もいかにしられまし人の袂をぬらさゝりせは

中宮の御方にわたらせ給て女房のから衣をとりておはしましたりしを尋る人もなかりしかは二三日はかり有て返しをかせたまうとて結ひつけよとおほせられしかは

思ひかねかへしつる哉から衣夢にもみゆるぬしや有とて

三河内侍の哥をよしなと人〳〵申あひたりしかはつかはしける

花の香の身にしむはかり匂ふ哉いかなる家の風にか有らむ

返し

春の内に匂ひはかりの花の香をいかなる家の風とかはみる

三河内侍人よりはとに頼むなといはれしに

今よりはたのみ渡らん八橋の下の心は我もしらねと

あり所しらねはいはぬなと申ける人につかはさんとて人の申けるにかはりて

わたつ海の底ともなとか知さらむみるめ絕ぬる心なりせは

春のころこむとたのめたる人のさもなかりけれは夢に見えけるしるしもなきこゝちして

春の夜の夢には人の見えしかとまさしからても過にける哉

かへし

春のよの夢にしけにも見えたらはまさしからてはいかゝ有へき

白地に立はなれたる人のもとより

逢みても有ぬへしやと心みに立はなるれはぬるゝ袖かな

かへし

逢みてもあるへき事のあれはこそかねて心を心みるらん

心とも有けるころ忍ひて住所の庭草も打拂ともなかりけれは露のしけくをきたりけるをみて

思ふとしけみの庭の草の葉に淚の露はをきあまりけり

したしき人の年頃うとくて過るにひとつわたりにあひていひつかはしたりし　大殿三川

玉葉
との葉の露はかりたにかけよかし草のゆかりの數ならす共

返し

同
紫の色に出てはいはねとも草のゆかりをわすれやはする

雨中の遠き草といふ事を

雨降は思ひこそやれいつみなるしのたの杜の下の陰くさ

壽量品の心を

けふ聞は光もふるき月かけを出る初と思ひけるかな

淺茅原と成にける所に花の殘て咲て侍りけるをおりて人につかはしたりけれは

思ひきや花も我身もをくれゐてありし昔を忍ふへしとは

よをへたつる水雞

槇の戸をたゝく水雞に驚けはねぬ夜ぬるよそおなし數なる

初の夏郭公を待

年をにまたぬうきのみ先たちてこゝろもとなき時鳥哉

ほとゝきす鳴つる空の五月雨にぬれぬる袖もなつかしき哉

門をあけぬ戀

明やらぬ眞木の戸さしを待ほとに横くもわたる山端そうき

いつみにて（しみつイ）

あかす猶むすふいつみにほとふれは心のうちに秋は來に凫

雨後郭公（新古の集）

五月雨に雲間の月のはれ行をしはし待ける時鳥哉

曉　月（同の集）

大かたに秋のねさめの露けくは又たか袖にあり明の月

二條院讚岐集補

千五百番歌合に

續古今春上 歸りゆく越路の雪や寒からん春は霞の衣かりかね

同春下 今はとて春の有明に散る花や月にも惜しき峯の白雲

玉葉春下 枝に散る花こそあらめ鶯のねさへかれゆく春の暮哉

續古今夏 たをりつゝ花橘に香をしめて我手枕にをしき袖哉

續千載夏 神祭る卯月の花もさきにけり山郭公ゆふかけて鳴け

新續古今夏 夏の夜の月の桂の下紅葉かつ〳〵秋の光をそ待つ

續後撰秋下 よと共に灘の鹽燒いとまなみ涙のよるさへ衣うつなり

玉葉秋上 あはれなる山田の庵のねさめ哉稻葉の風に初雁の聲

續千載秋上 さひしさに秋の哀をそへてけりあれたる宿の荻の上風

新拾遺秋上 女郎花よかれぬ露を置なからあたなる風に何靡くらん

新後撰秋上 人は皆心の外の秋なれや我袖はかりおける白露

新古今冬 世にふるは苦しきものを槇の屋にやすくもすくる初時雨哉

新後撰冬 ふる雪に人こそとはね炭釜の煙はたえぬ大原の里

雲葉冬 霜結ふ冬の夜な〳〵重なりてなれのみ枯れぬ庭の淺茅生

新古今戀二 打はへて苦しきものは人目のみ忍ふの浦のあまのたく繩

新勅戀一 蛙なく神なひ川にさく花の言はぬ色をも人のとへかし

同戀五 ふけに凫是やたのめし夜半ならん月をのみ社待へかりけれ

同 あはれ〳〵はかなかりける契り哉只うたゝねの春の夜の夢

續古今戀二 富士のねも立そふ雲はあるものを戀の煙そまかふ方なき
新古今雜上 身のうさに月やあらぬと泳むれは昔なからの影そもりくる
新勅雜一 さかぬまは花と見よとや三吉野の山の白雪消かてにする
同雜二 影たけてくやしかるへき秋の月闇路近くもなりやしぬらん
同 後の世の身をしる雨のかき曇り苔の袂にふらぬ日そなき
續千載戀四 いその上ふるのはさ田に綱はへて引く人あらは物は思はし
續後拾遺戀四 天雲のよそなからたにいつまてか目に見る程の契なるらん
　百首歌たてまつりし時
新古今夏 なく蟬の聲も涼しき夕暮に秋をかけたる杜の下露
同秋下 散りかゝる紅葉の色は深けれと渡れは濁る山川の水
同冬 折社あれなかめにかゝる浮雲の袖もひとつに打しくれつゝ
同戀三 涙川たきつ心の早き瀨をしからみかけてせく袖そなき
同雜上 昔見し雲井をめくる秋の月今幾年か袖にやとさん
　正治百首歌に
續古今旅 千鳥なくそかの川風身にしみて眞菅片しきあかす夜半哉
續拾遺戀三 露けさは置わかるらん床よりもなかめわひぬる有明の月
玉葉夏 あやめふく軒は涼しき夕風に山郭公近くなりけり
同秋下 秋の夜は尋ぬる宿に人もなし誰も月にやあくかれぬらん
同 長月の有明の月もふけにけり我世の末を思ふのみかは
同賀 あたつ海よせては返る數浪の數限りなき君か御代哉
新後拾遺雜下 今はとて澤へに還る芦たつの猶立いつる和歌の浦浪

新續古今 面影る秋のなこりを留めおきて霜のまかきに花を見る哉
同雜中 都出てゝ深く入りにし奥山に猶殘りける夢の通路
　戀歌とてよめる
新古今戀三 みるめこそ入りぬる磯の草ならめ袖さへ涙の下に朽ぬる
　入道前關白家に十如是歌よませ侍りけるに如是報
同釋教 うきも猶昔の故と思はすはいかに此世を恨みはてまし
　京極前太政大臣家歌合に
續詞花秋上 秋の夜はいとゝ長くそなりぬへきあくるも知らぬ月の光に
　登蓮法師筑紫にまかりけるに歌林苑にて人々餞し侍るとて
月詣別 ゆく人を惜む袂もかはかぬに又おきそふる秋の夕露
　暮春の心を
同第三 身ひとつの歎ならねはくれてゆく春の別をとふ人そなき
　題知らす
千載戀五 君こふる心の闇をわひつゝは此世はかりと思はましかは
　建保四年内裏歌合に
續後撰春中 古への春にもかへる心哉雲井の花に物わすれせて
新拾遺戀四 いかなれは涙の雨はひまなきに阿武隈川の瀨絶しぬらん
　戀歌の中に
續後撰戀三 君待とさゝてやすらふ槇の戸にいかて更ぬる十六夜の月
　土御門内大臣家歌合に海邊歳暮
續古今冬 荒磯の岩たちのほりよる涙の早くもかへる年の暮哉
　題知らす

雲葉春上
春風は更に雪けに吹かへて峯の霞そ雲かくれゆく
　二條院讃岐。伊勢國にしる所侍りけるに。わつらひあるによりて。鎌倉右大臣にうれへんとて。あつまにくたり侍りけるに。ほいの如くなりて。かへりのほり侍りけれは。申つかはしける
　　　　　　　　　　　　　　善信法師
玉葉雜二
をはたゝの板田の橋のとたえしを踏直しても渡る君哉
　返し　　　　　　　　　　　二條院讃岐
同
朽ぬへき板田の橋の橋作り思ふまゝにも渡しつる哉
　前大納言經房家歌合に
新千載春上
風かほる花のあたりに來て見れは雲も紛はす三吉野の山
　題知らす
同戀三
こえて後物思ひける逢坂は關もる神や許さゝるらん
　春の歌とてよめる
新拾遺春下
目にそへて立そ重なる三吉野の吉野の山の花の白雲
　月の歌とて
續拾遺雜秋
もろ共になれし雲井は忘れぬに月は我をそ知らす顏なる

小侍從集

春

　たつ春のこゝろ
春たつとしらてもみはや天の原霞むは今朝の思ひなしかと
あらたまる春はけさかと思ふより出る日影もめつらしき哉
　左大將の家の百首のうち山さとのたつ春
とけぬなる筧の水のをとつれに春しりそむる深山への里
　うくひす
けふとてもうき身は春のよそなれは外に啼也鶯の聲
　むめ
おる袖にしますもある哉梅かゝの思ふ心のふかさはかりは
　さくら
年ふともちらて櫻の花ならはめなれてかくや惜まさらまし
　うみの邊の散花
ちる花を吹上の濱の風ならはまたも梢にかへりさかせよ
　そま人に山の花をたつぬ
とへとこの賤をはすきぬ我身にもおはぬ櫻の花はいさとて
　歸鴈
ともつれにこしその數もたらすしてなく〳〵今や歸鴈かね
　三月盡
新拾遺
身につもる年の暮にもまさり鳬けふ計りなる春のなけきは（おしさは集）

夏

　衣かへ
おしみこし花の袂はそれ乍ら浮身しかふるけふとならはや

うの花

いたつらに咲てやちらむ山賤の身の卯花はおりもしらねは

あふひ

新古 いかなれはそのかみ山の葵草としはふれとも二葉なるらん

曉のほとゝきす

夜もすからまたれ〳〵て時鳥聲はの〳〵と啼わたる哉

早苗

早苗とる山田のぬしそおいにけるこん秋までの命いかにそ

花たちはな

軒ちかき花たちはなはいにしへを忍ふの草のつまと社みれ

うつしうへぬこのくにならは見ましやは花橘はかく匂ふ共

蚊遣火

月詣 夏くれはむろのやしまの里人も猶かやりひや思ひたつらん

とをきむらの蚊遣火

けさみれはをの山かつもあれやこのせれうの里に立る蚊遣火

なこしのはらへ

みそき河なかるゝみをの瀬にはやく身にしむ風は先立に皃

秋

たのいへのたつあき

山田もるすこか麻衣ひとへにてけさたつ秋の風はいかにそ

七夕のゆふへのこゝろ

なか〳〵にこの夕暮やたなはたの思ふ心をつくしはつらむ

萩

萩か花おもけにみゆる露計りちらさむ風はさもあらはあれ

やしろの邊の月

住吉とあとたれそめしそのかみに月や變らぬ今宵なるらん

月前のとをき心（けしき）

新拾 いとふらんくめちの神の心まて思ひやらるゝ（おりかけにたつ集）夜半の月かな

月ゆくみちをゝくる

ふきをくる雲井の月のくもるまは我影たにもそはぬ旅かな

水の邊の月

隈もなき月影うつすこよひこそおほろの清水名そ替りけれ

もみち山にみつ

はゝそはら時雨るまゝに常盤木の稀なりけるも今社はみれ

紅葉

限り有て秋はゆくともみち散龍田の河にしからみもかな

まつ紅葉をへたつ

おりつれは松はわれとや思ふ覽ひまに紅葉の色をみむとて

秋のくれ

新勅（おきてきく） けふ暮る秋のたかみやこれならんをくも（みる集）あたなる露の白玉

冬

はしめの冬

初時雨ねさめの床にをとつれてもらぬに濡るかたしきの袖

旅のとまりの時雨

千載 草枕おなし旅ねの袖に又夜半の時雨も宿はかりけり

雪

新古 かき曇りあまきる雪のふる里をつもらぬさきにとふ人も哉

氷

枝しけきしのたの森の陰のみやけふふる雪のつもらさる覽

みなかみや薄氷ならんさよ更て筧にうつる水まれになる
百首の哥のなかにたきのそこの氷
山隠れ人もとひこぬ瀧水はつらゝにのみそ結はれにける
水鳥
氷しく汀のひまやせはからんむれゐる鳥の飛わかれぬる
山家のあらし
嵐にも尾上の鐘はひゝきけり霜はかりそと何思ひけむ
百首のうちたかゝり日くれぬ
み狩するかたのゝましは折しきて旅ねをすへきこよひ成覧
としの暮
かそふれは物うかるへきけふをしも年暮ぬとて何いそく覧

戀

新古 まつよひに更行かねの聲きけはあかぬわかれの鳥は物かは
千載 君こふとうきぬる玉のさよ更ていかなるつまに結はれぬ覧
朝ことにかはる鏡の影みれは思はぬかけのかひもなきかな
續古 思ひあまりみつのかしはにとふとの沈むにうくは涙成けり
今こそは逢夜にあふと見し夢をいはぬにいむと思ひあはすれ
なからへはさりともとこそ思ひつれけふを我身の限成けり
今こそは絶はてぬとも君ゆへにとまる心は身をもはなれし
たらちめは戀に命をかふへしとしらて我をおほしたてけむ
つれなさは君のみならすかくはかり思ふにたえぬ命有けり
夜まさる戀
新勅 いかにねしときそや夢に見し事はそれさへに社忘られにけれ
雨によりてまさる戀
玉葉めしを集 頼むれはまつ夜の雨の明方にをやむしもこそ辛くきこゆれ
たかひに思ひしらする戀
さてをしれいはて思ひし心をは習はす乍らありしはかりに
かとをすくるにいらぬ戀
すきぬなりもとみし道を忘れねはあゆみとゝまる駒を早めて
身をくはんしていひいてぬ戀
月詣 さる澤の池になひきし玉藻こそかゝる歎のはてときゝしか
夢の中にちきるこひ
千載の集 見し夢をさめぬやかての現にてけふとたのめし暮をまたはや
源氏によする戀
箒木のありしふせやを思ふにもうかりし鳥の音こそ忘れね
神樂によする戀
人こゝろはなたの帯のされはこそかねて思ひしなかた(下闕)
木によする戀
玉葉 いかなれはくちぬる袖そ涙かゝるいはねの松もさて社はあれ
としの暮の戀
恨見むもいつしかなれはあすよりはいはてや門の松と見えまし
道心をおこす戀
嬉しくも戀路にまとふ足柄のうき世をそむくかたへ入ぬる

雜

高倉院位のおほんときてうきんの行幸に御ふえはし
めてあるへしといふさためにて人〻あまたまいりて萬
歳樂一はかりふかせたまふあけかたにかへりて人〻
の御なかにとて　左大將
笛の音の萬代まてときこえしに山もこたふる心ちせし哉

御まへにさふらふにおほんかへしつかふまつれとお
ほせことあれは
萬代とはつねの笛になのらせて末をみかさの山やこたふる
正月七日中宮の御かたへ若菜まいらせさせたまふに
まうけの君いはひまうせと人々ありしかは
生たゝん二葉の末を今年よりこはみくまのゝ若などをしれ
うへおほんかせのけむつかしくおほしめしたるにさ
まく〳〵の物みゆ哥よみたらはなをるへしとおほせこ
とあれは
君か代はこしの里人かすそひてたえすそなふるみつき物哉
建春門院の御かたの詞記三昧に聽聞にまいれとあれ
はまいりたるに一院もおなしおほんかたにおはしま
すほとなりうちへまいりてまたの日これより
泊りゐて歸らぬけふの心をそうらやむ物と我は成ぬる
御返し　中宮權大夫時忠
世のつねの住家をほらのうちにして歸らぬ人と君をなさはや
左大將の三條の家に大宮おはしますころなれはあそ
ひまいらせてかへらせたまひにしかはひさしくをと
なきにこれより
かつまたの池にそたえしみつからをよそなる物と何思ひ劔
おほんかへし
かつまたのいけらむ限り忘れめやまた鳥のゐる世に歸る共
おなし人月おもしろき夜くしてあそひてつとめてあ
れより
新千　ならひにきあかぬ別の曉もかゝる名殘はなかりし物を
おほんかへし

同　これそけにためし（たくひはしらぬ集）はあらめ古のあかぬ別は身をもうらみき
久我のおほいとのしのひて物申ころ五月なかはのほ
とよし程なきにとて久我に二三日あそひて歸りたる
にあれより
はかなさもあふ名なり鳧夏のひもみる程有と覺えやはせし
返し
思ひわひ絶る命もある物をあふ名のみやははかなかるへき
おなしひとのもとへ月をなかめて
風雅　なかむらん同し月をは見る物をかはすに通ふ心なりせは
返し
同　こよひ我とはれましやは月をみてかよふ心の空にしるくは
おなし人久我にて篝なとともしておもしろきあそひ
ありしのち久しくをとなきに
哀いつよかはの篝かけきえて有し思ひのはてときかれん
同し人のもとよりびか事をきゝてうらみつかはして
見くるしかりしふみともかへしたへといひつかはし
たるに
思へたゝこの言の葉をかへしてはなにゝかくへき露の命そ
修理大夫つねもり宮のすけにてつねに申かはすに久
しくをとつれねは
玉葉　忘るゝはおなし浮名のこれはたゝくやしきとのそはぬ計そ
かへし
同　悔しさのそふ計に（たに集）もなれにせは忘るゝ迄にとはさらめやは
左兵衛督しけのりのもとへ七月二あるとしの七月七
日
玉葉　天つ星そらにはいかゝ定むらん思ひたゆへきけふの暮かは

隆信かねてより九月十三夜もろともにみむと契りて
人〴〵にさそはれて外にてあそひて又のひ
人しれぬ心はそらにあくかれて思はぬ里の月をみしかな
かへし
雨ふれとわひつゝねにし月影をいかなる里にさは眺めけむ
さきの左衛督公光ありかしらせすと恨みつかはした
るにみわのやまならすともさふらふらむといひつか
はしたるにほとなくたつねて人つかはして
玉葉 まつらむとなにをしるしの杉にてか心もしらぬ宿を尋ねん
かへし
同 人しらぬ心のうちの松のみそ杉にもまさるしるし成ける
おほいのみかとの右大臣かくれさせたまひて大宮へ
人〴〵の御なかにとて
深山木の頼みし影もかひなくてたまらぬ雨とふる涙かな
おほいのみかとの少將宮へまいりて尋ねさせたまふ
にいてぬと申せはまちかねていつとて局なる硯のふ
たにかきつけたまひし
いとせめてまつは苦しき物そとは昔は君も思ひしりけむ
返しやかてまいりあひて
なをさりにまつとはすとも君はよも更行鐘の聲はなけかし
石清水の行幸の御ともにまいりたるせうとの權別當
成清もよろこひしたるとて人〴〵悦申なかに殿上よ
りとてまたこと宮に御ふみに
嬉しとや神も心に石清水にしきをきつゝかへるけしきを
返し
思ひやれ晉ひし夜はのうきはしを錦たちきてかへる心を

みやの內侍殿のもとより罪深き夢みてわひさせたま
ひしをたうときひしりに語れはまいりてこまかに
うけたまはらんと申すいかゝといひつかはしたれは
誘ふへき人とふならはしるへせよさてや思ひの家を出ると
歌のとくひにて申かはすに定長出家しつときゝて
したひむ同しき和哥の浦千とり思ひ入ける末（ぬイ）たかはすは
源三位賴政もの申ころ二三日をとつれぬにかせさへ
おこりて心ほそけれは
とへかしなうきよの中にあり〳〵て心とつける戀の病を
かへし賴政
いかはいきしなはをくれし君ゆへに我もつきにし同し病を
おなし人はゝかるを有てしはしをとせてしはすのつ
こもりに
とゝこほる春よりさきの山水を絕はてぬとや人はしるらん
年こもりに物にこもりていてゝかへし
とゝこほる程かときゝゝし山河の絕はてけるは春そしらるゝ
おなし人この暮と契つゝあまたすきぬるにそのさは
りともこまかにつゝけて今夜（このくれもさこそ）そかならすと申たるに
玉葉 筏おろす杣山河の淺きせは又もさこそはくれのさはらめ
かへし
きのふより涙落そふ杣河のけふはまされはくれもさはらす
大內にさふらふころ。よりまさもさふらふに五月雨
日かすへて晴間なきに大宮へ參たるに同しく賴政ち
かき程にいてたるに月めつらしくさし出たれは
雨雲の晴間に我もいてたるを月はかりをやめつらしとみる
返し

雨の間に同し雲井をいてに急もりこはなとか月にをとらむ
ともにはゝかり有て久しくまさぬに十月一日につほみたる菊の枝につけて
君をなを秋社はてね色かはる菊もみよかしひらけたにせぬ
かへし
いさやその開けぬ菊もたのまれす人の心のあきはてしより
かくて二三日ありてうつろひたる菊につけてこれより
開けぬを秋はてすとや見し菊の頼むかたなくうつろひに急
かへし
移ろはゝ菊はかりをそ恨むへき我心にはあきしなければ
あはのかみたゝのりになき名たつころ頼政かもとよりときめかさせたまふらんこそ愛てたくと申つかはしたる返事に
よそにこそむやの蛤ふみゝしかあふとは海士の濡衣としれ
中將たかふさ八條のいへに内の女房あまた見にゆきたるに面白くてなるこかけなとしたりみ遊ひてたちかへりこれより
ほのみつる門田の稻にひたはへてしか厭はすは又もゆかはや
返し
いとふまて思ひなかけそ鳴子なは稻葉の風のまねく心を
かく／＼後さまかへてやはたに籠りたるに宮古より人／＼あまた哥をくられたり　五條三位としなり
かの岸へ渡りにけりなあまを舟すまは逢瀬をと思ひし物を
これは返しとはなくて細かなるとともの返とのおくに
すみし世に逢瀬なかりし石清水おりうれしくそ思ひ出たる
新三位よりすけ

玉葉 君はさはあまよの月か雲井より人にしられて山に入（イぬ）ける
返し
同 すむかひもなくて雲井に有明の月は入とも何かしられむ（なにとかいるも集）
かくてこもりゐたるに思はすに宮の御もとより今まて申さぬなとこまやかにおほせられたるに
とふ人も波にたゝよふ海士小舟（ふねのイ）うらみは磯（いまそイ）にこき歸りぬる
おもひをのふ
石清水きよき流の末／＼に我のみにこる名をすゝかはや
續古 そむきにし（にかくてイ）しるしはいつら立歸りうき世にかくて墨染の袖
覺ぬ世の夢にこの世を見るたにもうきは久しき歎ならすや
人命不ㇾ停過ニ於山水一といふ文を
山水は結ふ氷によとみけりすきゆく年そせくかたもなき
心經
新古 色にのみ染し心のくやしきをむなしとゝける法の（そ）うれしさ
いはひ
君か代を何にたとへん二葉なる松もちとせの末をしらねは
宮白川殿の御わたりにいはひ二首。たけ風になる。
月まつをてらす
うち戰く風なかりせはいかにしてよる我友を有としらまし
あけぬとやねくらのたつは思ふ覽月にしもふる松の玉枝を
咲にけり三笠の山の梢まてたのみをかくるふちのしるしは
君か代は菊のした水むすひける人のよはひもなにならぬ哉
右以ニ爲定卿自筆之本一。不ㇾ違ニ一字一令ニ書寫挍合一了。
入撰集此集不見哥
戀の哥とてよめる

千載戀四 戀そめし心の色のいかなれは思ひかへすにかへらさるらん

百首哥たてまつりし時

新古今冬 思ひやれ八十の年の暮なれはいかはかりかは物はかなしき

題しらす

同戀三 つらきをも恨ぬ我にならふなよう き身をしらぬ人も社あれ

百首哥たてまつりし時山家心を

同雜中 しきみつむ山路の露にぬれにけり曉おきの墨染の袖

新勅撰秋上 和歌所哥合に海邊秋月といへるこゝろをよみ侍ける

沖津風ふけ井の浦による波のよるとも見えす秋の夜の月

後京極攝政百首哥よませ侍けるに

同秋下 いくめくり過行秋にあひぬらん變らぬ月の影をなかめて

後京極攝政家百首哥よみ侍けるに

同戀三 雲となり雨と成ても身にそはゝ空しき空をかたみとやみむ

正治百首哥たてまつりける時

續後撰夏 さのみやは山井の清水凉しとてかへさもしらす日を暮すへき

題しらす

同戀三 待も見よあふ夜をたのむ命にて我もしはしの心つよさを

正治二年百首歌に

續古今春 咲にけり遠かた人にことゝひて名をしりそめし夕かほの花

題しらす

同戀三 誰共にあかぬ別の衣〱にいつれの袖かぬれまさるらん

後京極攝政百首哥に

同戀五 何とも夢ときくよにさめやらてうつゝに人を恨つる哉

千五百番哥合哥

同 賴めつゝこぬよを待し古を忍ふへしとは思ひやはせし

千五百番哥合に

續拾冬 をとつれて猶過ぬるかいつくにも心をとめぬ初時雨かな

題しらす

同 霜かれのあさち色つく冬野にはおはなそ秋のかたみ成ける

二月廿日あまりのころ大內の花見せよと小侍從申けれはいまたひらけぬ枝につけてつかはしける

從三位賴政

新後撰春上 おもひやれ君か爲にと待花の咲もはてぬにいそくこゝろを

返し

同 逢事を急かさりせはさきやらぬ花をはしはし待もしてまし

心月輪のこゝろを

同尺教 いさきよく月は心にすむ物としるこそ闇のはるゝ成けれ

千五百番歌合に

同戀二 浪高きゆらのみなとをこく舟のしつめもあへぬ我心かな

戀のうたの中に

同 住吉の神に祈りし逢ことのまつも久しく成にけるかな

平忠度朝臣山里の花見侍けるに家つとはおらすやと申つかはして侍けれは家つともまたおりしらす山櫻ちらて歸りし春しなけれはと申て侍ける返事に

玉葉春下 我爲におれや一枝山櫻家つとにとは思はすもあれ

七夕によみ侍りける

同秋上 稀にあふ秋の七日のくれは鳥あやなくやかて明ぬこのよは

正治二年百首哥たてまつりけるとき秋哥

同秋下
詠めても誰をかまたむ月夜よし夜よしと告む人しなければ

前右近中將資盛家に哥合しはへりけるによみてつかはしける

同戀三
おなし世にあるを頼みの命にて惜むも誰かためとかはしる

正治百首哥たてまつりける時羇旅

續後拾遺旅
今宵もや宿かりかねむ津國のこやとも人のいはぬわたりは

高倉院御時內裏より女房あまたいさなひて上達部殿上人花見侍けるに右京大夫折ふし風の氣ありとてともなひ侍らさりければ花の枝につけてつかはしける

風雅春中
さそはれぬ心の程はつらけれと獨見るへき花の色かは

題しらす

新千載俳諧
思ひこし（しのひこし）夕くれなゐの儘ならてくやしや何のあくにあひ劔

男のつらくあたりけるにつかはさんとてこひける人にかはりて

新拾遺戀一
なひきける我身あさまの心からくゆる思ひに立煙かな

戀哥の中に

同戀二
身のうさを思ひもしらぬ物ならは何をか戀の慰めにせむ

千五百番哥合に

新後拾遺冬
跡つけしその昔こそ戀しけれのとかにつもる雪をみるにも

きさらきはかりに小侍從あつまよりのほりぬとききて法橋顯昭許より今はよし君まちえたりかくてこそ都の花をもろともにみめといひつかはしたりける返事に

新續古今上
あひみむと急きし物を君はさは花ゆへのみや我をまちける（つるイ）

正治二年百首哥に

同
何とに露も心のとまらまし月をなかめぬ此世なりせは

正治百首哥たてまつりける時

同雜中
朝夕の煙はかりをあるしにて人はをとせぬ大はらの里

大皇太后宮小侍從　石淸水別當光淸女　母小大進號大宮小侍從

入選集歌數凡五十四首歟

千載 四　新古今 七　新勅撰 五　續後撰 二
續古今 六　續拾遺 二　新後撰 四　玉葉 十一
續後拾遺 一　風雅 二　新千載 二　新拾遺 四
新後拾遺 二(一イ)　新續古今 三

右小侍從集以屋代弘賢藏本挍合畢

補遺

述懷を

月詣雜下
身にとまる齡計をしるしにて花をはよその物と社見れ

無量義經の心を

今撰和歌集
さま〲に流るゝ法の水なれと共水上はひとつなりけり

千五百番歌合に

雲葉春下
思へとも聲はたてしと忍ふるをうらやましくも呼子鳥哉

群書類從卷第二百八十

建禮門院右京太夫集

和歌部百三十五　家集五十三

家の集なといひて哥よむ人こそかきとゝむるヿなれ
これはゆめ〳〵さにはあらすたゝ哀にも悲しくもな
にとなく忘れかたくおほゆるヿとものそのおり〳〵
ふと心におほえしを思ひ出らるゝ儘に我目ひとつに
みんとて書をくなり

われならて誰か哀と水くきのあともし末の世にのこるとも

高倉の院の御位のころ承安四年なといひしとしにや
正月一日中宮(建禮)の御かたへ内の上わたらせ給へり
し御ひきなをしの御すかた宮の御ものゝくめしたり
し御さまなとのいつと申なからめもあやにみえさせ
給しを物のとをりより見まいらせて心に思ひし事

雲の上にかゝる月日のひかりみる身の契りさへ嬉しとそ思

同じ春なりしにや建春門院たいりに暫しさふらはせ
おはしましゝかこの御かたへいらせおはしまして八
條二位殿御まいりありしも御所にさふらはせ給しを
みくしけ殿の御うしろよりおつ〳〵ちと見まいらせ
しかは女院むらさきの匂の御そ山吹の御うはき櫻の
御こうちきあを色の御唐衣てふを色〳〵にをりたり
しをめしたりしをめしたりしかはいふ方なくめてた
く若くもおはします宮はつほめる色の紅梅の御そか
は櫻の御うはき柳の御こうちきあか色の御から衣み
な櫻を織りたるめしたりし匂ひあひて今更めつらし
くいふ方なく見えさせ給しに大かたの御所の御しつ
らひ人〻の姿ヿにかゝやくはかりみえしおり心にか
くおほえし

春の花秋の月夜をおなしおりみる心地する雲のうへかな

頭中將さねむね常に中宮御方へまゐりて琵琶ひき歌
うたひあそひて時〳〵をひけなといはれしをことさ
ましにこそとのみ申てすきしにあるおりふみのやう
にてたゝかくかきてをこせたり

松風のひゝきもそへぬ獨言はさのみつれなきねをやつくさん

返し

よのつねの松風ならはいか計あかぬ調にねもかはさまし

おなし人の四月みあれの頃藤つほにまいりて物語せ
しおり權のすけ維盛のとをりしをよひとゝめて此程
に何處にてまれ心とけて遊はんと思ふを必す申さん
なといひ契りて少將はとくたゝれにしか少したちの
きて見やらるゝほとにたゝれたりしふたあゐの色こ
き直衣指貫わかゝえてのきぬその比のひとへ常のヿ
なれと色ヿにみえてけいこ姿まヿに繪物語にいひた
てるやうに美しくみえしを中將のあれかやうなるみ
さまと身を思はゝいかに命もおしくてなか〳〵よし
なからんなといひて

羨ましみとみる人のいか計なへてあふひを心かくらん
たゝいまの御心のうちもさそあらんかしといはれは
ものゝはしにかきてさしいつ
なか〳〵に花の姿はよそにみて葵とまてはかけしとそ思ふ
といひたれはおほしめしはなつかしも深きかたにて心きよくやあると笑はれしもさることとおかしくそありし故建春門院の御爲に御てつから御經かゝせおはしまして内裏にて御八講行なはれし五くわんの日女院たち后のみや〳〵三條女御殿白河殿なとみな御ほう物たてまつらせ給しそなたにゐんある殿上人もちてまいりし氣色おもしろくも哀にもありしに中宮の御ほう物は二枝を宮のすけ(しけひら)權亮(これもり)なともたれたりしとおほゆ故女院いらせ給ておはしましゝ御方をとりはらひてたうちやうにしつらはれたりしもあはれにて
九重にみのりの花の匂ふけふや消にし露もひかりそふらん
近衞殿二位中將と申ころたかふさ(隆房)しけひら(重衡)これもり(維盛)すけもり(資盛)なとの殿上人なりしをひきくせさせ給ひて白河殿の女房たちさそひて所〻の花御覽しけるとてまたの日花の枝のなへてならぬを花みける人〻の中よりとて中宮の御方へまいらせられたりしかは
さそはれぬうさも忘れて一枝の花にそめつる雲のうへ人
返し　たかふさの中將
雲のうへに色そへよとて一枝をおりつる花のかひもある哉
すけもりの少將
もろともに尋ねてもみよ一枝の花に心のけにもうつらは
いつの年にか月あかゝりし夜うへの御笛ふかせおはしましゝかことに面白くきこえしをめてまいらすれはかたくなはしきほとなると此御かたにわらはせおはしまして後に語りまいらせさせ給ひたりけるをそれは空ことを申そとおほせ事あるとてありしかは
さもこそは數ならさらめ一筋に心をさへもなきになす哉
とつふやくを大納言の君と申は三條内大臣の御むすめとそ聞えしその人のかく申と申させ給へは笑はせおはしまして御扇のはしにかきつけさせ給たりし
笛竹のうきねをこそは思ひしれ人の心をなきにやはなす
なにとなくよみし哥の中に春たつ日
いつしかと氷とけゆくみかは水ゆく末とをきけさの初春
春きぬと誰うくひすにつけつ覽竹のふるすは春もしらしを
鶯有慶音
長閑なる春にあふ夜のうれしさは竹のうちなる聲の色にも
對月待花
はや匂へ心をわけて夜もすから月をみるにも花をしそ思ふ
往事戀
哀しりてたれか尋ねんつれもなき人を戀わひ(てふイ)いはとなる共
仙家卯花
露深き山路の菊をともにして卯花さへやちよも咲へき
かた思ひをはつる戀
興津波岩うつ磯のあはひかひひろひわひぬる名社おしけれ
くもる夜の月
曇るよをなかめあかして今宵社ち里にさゆる月をなかむれ

夕にすくる野の花

心をは尾花か袖にとゝめをきてこまにまかする野への夕暮

たかひにつねに聞く戀

ありときかれ我もきゝしも辛き哉只一筋になきになしなて

谷のほとりの鹿

谷ふかみ杉のこすゑをふく風に秋のをしかそ聲かはすなる

ねさめのたう衣

うつ音にね覺の袖そぬれまさる衣はなにのゆへとしらねと

名をかへてあふ戀

厭はれしうき名を更に改めてあひみるしもそ辛さそひける

野亭夕の夏草

ゆふされは夏野の草のかた靡きすゝみかてらにやすむ旅人

連夜のくゐな

あれはてゝさす事もなき槇の戸を何とよかれす叩く水鷄そ

夜ふかき春雨

ふくる夜のね覺さひしき袖の上を音にもぬらす春の雨かな

とをき澤の春こま

はるかなる野澤にあるゝはなれ駒かへさや道の程もしる覽

くらき空の歸かり

新後拾 花をこそ思ひもすてめ有明の月をもまたてかへる雁金

曉のよふ子鳥

よをのこすね覺にたれをよふ子鳥人もこたへぬ東雲のそら

山田のなはしろ

山里は門田のをたの苗代にやかてかけひの水まかせつゝ

ふるき池のかきつはた

あせにけるすかたの池の杜若いく昔をかへたてきぬらん

名所のすみれ

おほつかなならひの岡は名のみして獨すみれの花そ露けき

所々のやまふき

我宿のやへ山吹の夕はへに井手のわたりもみる心地して

海のみちの春のくれ

いかりおろす波まに沈む入日よりくれ行春のすかたゑけれ

瀧のへんのこりの雪

氷こそ春をしりけれたきつせのあたりの雪は猶そのこれる

さわらひ

紫のちり計してをのつからところ〳〵にもゆるさわらひ

船のとまりの花

高砂の尾上の春をなかむれは花こそ船のとまりなりけれ

友船もこきはなれ行こゑすなり霞ふきとけよこのうち風

花落衣

さそひつる風は梢をすきぬなり花は袂にちりかゝりつゝ

老人を戀

つくもかみこひぬ人にも古はおも影にさへみえけるものを

雨中草花

すきてゆく人はつらしな花薄まねくま袖に雨はふりきて

月依所明

名にたかき姨捨山のかひなれや月の光のことにみゆらん

關をへたてたる戀

戀わひてかく玉章のもしのせきいつかこゆへき契りなる覽

山家初雪

春の花秋の月にもをとらぬはみ山の里の雪のあけほの

さいはらによする戀

みし人はかれ〲になるあつまやに茂りのみます忘れ草哉

　山家はなをまつ

山里の花をそけなける(け字衍歟)梢よりまたぬ嵐のをとそものうき

　中宮の御かたにさふらふ人をきんひらの中將のせちにいひしころ物をのみ思ふよしを返ゝうれへられしに秋のはしめつかはしゝ

秋きてはいとゝいかにかしくる覧色深けなる人のそのは

　返し

時わかぬ袖の時雨に秋そひていかはかりなる色とかはしる

　小松のおとゝ(宗盛)の菊あはせをし給しに人に代りて

(風雅)移しうふる宿のあるしもこの花も共に老せぬ秋そかさねん

　おなしおとゝの大臣の大將にてよろこひ申給しにおとうとの右大將ともし給へりしいきほひゆゝしくみえしかは

いとゝしく咲そふ花の梢かな三笠の山に枝をつらねて

　いつれの年やらん五せちのほと內裏にちかき火の事ありてすてにあふなかりしかは南殿にようよまうけて大將をはしめ衞府のつかさのけしきとも心ゝにおもしろくみえしに大かたの世のさはきも外にはかゝるをあらしと覺えしも忘れかたし宮は御て車にて行けいあるへしとそきこえし小松のおとゝ大將にてなをしにやをひて中宮の御かたへまいり給へりしことからなといみしくおほえき

雲のうへはもゆる煙に立さはく人の氣色もめにとまる哉

　やしまのおとゝ(宗盛)とかやこのころ人はきこゆめるその人の中納言ときこえしころ五節に櫛こひきこえたりしをたふとて紅のうすやうに薫わけ小舟をむすひたる櫛さしたるかなのめならぬにかきて押つけられたりし

芦分のさはる小舟にくれなゐの深き心をよするとをしれ

　返し白うすやうにて

芦分て心よせける小船ともくれなゐ深き色にてそしる

　なにとなくてみきくをに心うちやりてすくしつゝなへの人のやうにはあらしと思ひしを朝ゆふ女とちのやうにましりゐて見かはす人もあまたありしなかにとりわきとかくいひしをあるましのをやと人のををを見きゝても思ひしかとも契りとかやはのかれかたくてやおもひのほかに物思はしき事そひてさま〲思ひみたれしころさとにてはるかに西のかたをなかめやる木すゑはゆふ日の色しつみてあはれなるにまたかきくらしゝくるゝをみるにも

(玉葉)夕日移る梢の色のしくるゝに心もやかてかきくらす哉

　秋の暮をましのあたりになきしきり〲すの聲なくなりてほかにはきこゆるに

とこなるゝ枕の下をふり捨て秋をはしたふきり〲す哉

　常よりも思ふ事あるころ尾花か袖の露けきをなかめいたして

露のゐるお花か末をなかむれはたくふ涙そやかてこほるゝ

物思へなけゝとなれる詠め哉たのめぬ秋の夕暮の空

　秋月あかき夜

名にたかき二夜の外も秋はたゝいつもみかける月の色哉

　たち花をみつ人のみよとてつかはしゝ返しに

心ありてみつとはなしに橘の匂をあやな袖にしめつる

かけ離れいへはあなかちにつらき限りにしもあらねとなかく\／めに近きはまたくやしうも恨めしくさまく\／思ふ事多くて年もかへりていつしかの春のけしきも浦山しく鶯のをとつるゝにも

玉葉 物思へは心の春もしらぬみに何鶯のつけにきつらん

とにかくに心をさらす思ふ哉さてもと思へはさらに社思へ

うせにしせうとのために阿彌陀經かくにも

まよふへき闇もやかねてはれぬ覽かきをくもしの法の光に

内の御かたの女房宮の御かたの女房車あまたにてきんしゆの上達部殿上人くして花みあはれしになやむ事ありてましらさりしを花の枝に紅のうすやうにかきてつけてこ侍從のとそ

風雅 さそはれぬ心の程はつらけれと獨みるへき花のいろかは

風の氣ありしによりてなれは返しにかく聞えし

同 風を厭ふ花のあたりはいかゝとてよそ乍ら社思ひやりつれ

花をみて

數ならぬ浮身も人におとらぬは花みる春の心之けり

おほゐのみかとのさい院いまた本院におはしましゝ頃かの宮の中將の君のもとより御垣のうちの花とておりてたひて

風雅 しめのうちは身をもくたかす櫻花おしむ心を神にまかせて

返し

同 しめの外も花としいはん花はみな神にまかせて散さすも哉

この中將の君にきよつねの中將の物いふときゝしをほとなくおなし宮のうちなる人に思ひうつりぬときゝしかは文のついてに

袖の露やいかゝこほるゝあしかきを吹渡るなる風の氣色に

返し

吹わたる風につけても袖の露みたれそめにしとそくやしき

とかく物おもはせし人の殿上人なりしころちゝおとゝの御もとに住吉にまうてゝかへりて洲濱のかたの結ひたるに貝ともを色々にいれてうへに忘れ草をゝきてそれに花田のうすやうにかきて結ひつけられたりし

恨みてもかひしなけれは住のえにおふてふ草を尋てそみる

返し秋のことなりしかはもみちのうすやうに

住の江の草をは人の心にて我そかひなき身をうらみぬる

太皇太后宮よりおもしろき御繪ともを中宮の御かたへまいらせさせ給へりしなかに昔ちゝのもとに人の手ならひしてと葉かゝせし繪のましりたるいとあはれにて

めくりきてみるに袂をぬらす哉繪島にとめし水莖の跡

四月はかりしたしき人にくして山里に有しころ時鳥のなきしに

都人まつらん物を時鳥なきふるしつるみやまへの里

花橘の雨はるゝ匂ひしかは

橘の花こそいとゝかほるなれ風ませにふる雨の夕暮

五月五日宮の權太夫時忠のもとより藥玉まきたる箱のふたにしやうふのうすやうしきておなしうすやうにかきてなへてならすなかきねをまいらせて

君か代に引比ふれは菖蒲草なかしてふ根もあかすそ有ける

返し花橘のうすやうにかく

心さし深くそみゆる菖蒲草なかきためしにひけるねなれは

歎く事ありてこもりゐたりしころ。さうふのねをこせたる人に

菖蒲ふく月日も思わかぬまにけふをいつかと君そしらする

なりちか(成親)の大納言のむすめ宮の權のすけのうへなりし人はしるゆかりありしもとよりくす玉をこすとて

君に思ひ深き江に社ひきつれとあやめの草のね社あさけれ

返し

ひく人のなさけも深き江に生る菖蒲そ袖にかけてかひある

すゝりのついてに手ならひに

哀なり身のうきにのみねをとめて袂にかゝる菖蒲と思へは

秋の末つかた建春門院いらせおはしまして久しくおなし御所なり九月つくる日あす還御なるへきに女官して蘆てのしたゐしたるたんしにたてふみ紅のうすやうにて

歸り行秋にさきたつなこりこそおしむ心のかきりゑけれ

返しうへしろき菊のうすやうにかきて誰としらねは女房の中へとも〻りの中將まいられしにをつくまをによのけしきなこりおしかほにうちしくれて物あはれけなれと

立かへり名殘をなにかおしむ覽千年の秋ののとかなるよに

三位中將維盛のうへのもとより紅葉につけてあをもみちのうすやうに

君ゆへは惜き軒端の紅葉は(をイ)もおしからて社かくたをりつれ

返しくれなゐのうすやうに

我ゆへに君か折けるもみちこそなへての色に色そへてみれ

忠度のあそん西山のもみち見たるとてなへてならぬ枝をおらせて結ひつけたる

君に思ひ深きみやまのもみちはを嵐のひまに折そしらする

返し

おほつかな折こそしらね誰に思ひ深きみ山のもみちなる覽

みくしけ殿のさとに久しくおはせしころ弁の殿のその里へまいりて歸りまいられたりしになとか此たよりにもをとつれはせぬとのたまひしかは

なをさりに思ひしもせぬ言の葉を風の便にいかゝ散らさん

春のころ宮の西八條に出させ給へりしほと大かたにまいる人はさるをにて御はらから御をひたちなとみな番におりて二三人はたえすさふらはれしに花のさかりに月あかゝりし夜あたらよをたゝにやあかさんとて權のすけらうゑいし笛吹つねまさ琵琶ひき。みすの内にも琴かきあはせなと面白くあそひしほとに内よりたかふさの少將御つかひにて文もちてまいりたりしをやかてよひてさま〳〵のことゝもつくして後にはむかし今の物語なとして明方まてなかめしに花はちりちらす同し匂ひに見わたされ月もひとつにかすみあひつゝやう〳〵しらむ山きはいつといひなからいふかたなくおもしろかりしを御返を給りてたかふさのいてしに。たゝにやはとて扇のはしをおりてかきてとらす

かくまての情つくさて大方の花と月とをたゝみましたに

少將かたはら痛きまてゐいしすんして硯こひてこの
座なる人ゝなにともみなかけとて我あふきにかく
かた〳〵に忘らるましき今宵をは誰も心にとゝめてそ思へ
權のすけは哥もよまぬ者はいかにといはれしをなを
せめられて
心とむな思ひ出そといはんたに今夜はいかゝやすく忘れん
つねまさのあそん
嬉しくも今夜の友の數に入てしのはれ忍ふつまとなるへき
と申しをわれしもわきて忍はるへきことゝ心やりた
るなとこの人々の笑はれしかはいつかは申たるとち
んせしもおかしかりき又月のまへの戀月のまへの祝
といふ事を人のよませしに
千代の秋すむへき空の月も猶こよひの影やためしなるらん
つれもなき人そ情もしられ(せイ)けるぬれすは袖に月をみましや
ゆかりある人の風のおこりたるをとふらひたりし返
事に
情をくことの葉ことに身にしみて涙の露そいとゝこほるゝ
ふくになりたる人とふらふとて
哀とも思ひしらなん君ゆへによそのなけきの露もふかさを
小松のおとゝうせ給て後北方の御もとへ十月はかり
きこゆる
かきくらす夜の雨にも色かはる袖の時雨を思ひこそやれ
とまるらん古き枕にちりはゐて拂はぬ床を思ひこそやれ
返し
音つるゝ時雨は袖にあらそひてなく〳〵あかす夜はそ悲數
みかきこし玉の夜床にちりつみて古き枕をみるそ悲しき

なりちかの大納言とをき所へくたられにしのち院の
京極殿の御もとへ
いかはかり枕の下の氷るらんなへての袖もさゆるこのころ
旅衣立わかれにし跡の袖にもろき涙の露やひまなき
返し京こく殿
床のうへも袖も涙のつゝらゐて(らゝ歟)あかす思ひのやる方もなし
日にそへてあれ行宿を思ひやれ人をしのふの露にやつれて
安元といひし始の年の冬臨時祭に宮のうへの御つほ
ねへのほらせ給御ともにさはることありてえまいらて
さしも心にしむかへりたちのみ神樂もえ見さりしく
ちおしくて御硯の筥にうすやうのはしにかきつけて
をく
朝倉やかへす〳〵そ恨つるかさしの花のおりしらぬ身を
さとなりし女房のふちつほのおまへのもみちゆかし
きよし申たりしをちり過にしかは結ひたるもみちを
つかはす枝にかきてつく
(新勅)吹風も枝にのとけきみよなれはちらぬ紅葉の色をこそみれ
宮の六條殿にしはし出させ給ていらせ給し行けいの
いたし車にまいりたりし人のその夜の月おもしろか
りしをとう(登)花殿のかたなとにて人〳〵くしてみ
て其曉いてゝつとめてよへの月に心はさなからとま
りてと申たりしかは
雲のうへをいそき出にし月なれは外に心はすむとしりにき
兼光中納言のしきしなりしころむくを六つゝみてを
こせたるにいかゝいふへきとはりまの内侍いはれし
かは

六の道をいとふ心のむくひには佛の國にゆかさらめやは

　雪の深くつもりたりしあした里にてあれたる庭をみいたしてけふこん人をとなかめつゝうす柳の衣こうはいのうすきぬなときてゐたりしに。かれ野のをり物の狩衣すはうのきぬ紫のをり物の指貫きてたゝひきあけていりきたりしおもかけ我ありさまには似すいとなまめかしくみえしなとつねは忘れかたくおほえて年月おほくつもりぬれと心にはちかきも返〱むつかし

年月のつもりはてゝもそのおりの雪の朝は猶そ戀しき

　山里なる所にありしおりえんなる有明におきいてゝまへ近きすいかいに咲たりし朝良をたゝ時のまの盛りこそあはれなれとて見しをもたゝ今の心ちするを人をも花はけにさこそ思ひけめ。なへてはかなきためしにたにあらさりけるなと思ひつゝけけることのみさま〱なり

身の上をけにしらてこそ槿の花をほとなき物といひけめ

有明の月に槿みしおりも忘れかたきをいかてわすれん

　せうとなりしほうしのをに頼みたりしか山深くおこなひて都へも出さりしころ雪の降しに

いか計山路の雪のふかゝらん都の空もかきくらすころ

　冬の夜月あかきに賀茂にまうてゝ

神垣や松のあらしも音さえて霜にしもをく冬のよの月

　人の心の思ふやうにもなかりしかはすへてしれすしらぬ昔になしはてゝあらなと思ひしころ

常よりも面影にたつ夕かな今やかきりと思ひなるにも

よしさらはさてやまはやと思ふより心よはさい又まさる哉

　同しをとかく思ひて月のあかき夜はしつかたになかめいたしたるにむら雲はるゝにやとみゆるにも

みるまゝに雲ははれ行月影も心にかゝる人ゆへになを

　いと久しくをとつれさりしころ夜ふかくね覺てとかく物を思ふにおほえす涙やこほれに劍。つとめてみれは花田のうすやうの枕ことのほかにかへりたれは

移りかもおつる涙にすゝかれて形見にすへき色たにもなし

　心ならす宮にまいらすなりしころ。れいの月をなかめてあかすに見てもあらさりし御面影の淺ましくかくてもへにけりとかきくらし戀しく思ひまいらせて

戀わふる心をやみにくらさせて秋の深山に月はすむらん

　其頃ちりつもりたるをを。いかておほくの月日へにけりとみるにも。あはれにて。みやにてつねはちかくさふらふ人〻の笛にあはせなとあそひしことといみしくこひし

おり〱の其笛竹もをとたえてすさひしをの行衛しられす

　宮の御産なとめてたくきゝまいらせしにもたゝ涙をともにてすくるに皇子むまれさせおはしまして春宮たちなときこえしにも思ひつゝけられし

雲のよそに聞そかなしき昔ならは立ましらまし春の宮こを

　となりに庭火の笛のをとするにもとし〱内侍ところのみかくらに維盛の少將やすみちの中將なとの面白かりしねともまつ思ひ出らる

聞からにいとゝ昔の戀しくて庭火の笛のねにそ啼ぬる

　おほやけの御かしこまりにて。とをく行人そこ〱

にようへはとまりなときゝしかは。そのゆかりある人
のもとへ
ふしなれぬ野路のしの原いかな覽思ひやるたに露けき物を
しりたる人のさまかへたるかこんといひて音もせぬ
に
賴めつゝこぬ僞の積るかなまことの道に入りし人さへ
すひつのはたにこもきに水のいりたるかありけるに
月のさし入てうつりたるわりなくて
めつらしやつきに月社宿りぬれ雲井の空にたちなかくしそ
なに事もへたてなくと申契たりし人のもとへ思ひの
外に身の思ひそひて後さすかにかくこそともまたき
こえにくきをいかにきゝ給ふらんとおほえしかは
夏衣ひとへに賴むかひもなくへたてけりとは思はさらなん
さきのよの契にまくるならひをも君はさりとも思ひしる覽
はしめつかたはなへてあることもおほえすいみしく
ものつゝましくて朝ゆふ見かはすかたへの人ゝも
ましておとこたちもしられなはいかにとのみ悲しく
おほえしかは手習にせられし
ちらすなよちらさはいかにつらか覽信夫の里に忍ふことの葉
こひ路には迷ひいらしと思ひしをうき契にもひかれぬる哉
いくよしもあらしと思ふ方にのみ慰むれとも猶そ戀(悲イ)しき
そのかみ思ひかけぬ所にてよ人よりも色このむときゝ
く人よしあるさ(ゐイ)まとも物語しつゝ夜もふけぬ
るに近くあるけはひしるかりけるにや。ころは卯月
の十日なりけるに。月の光もほの〳〵にて。けしき
も見しなといひて人につたへて。その男はなにかし
の宰相中將とそ
思ひわくかたも渚による波のいとかく袖をぬらすへしやは
と申たりし返事
思ひわかて何と渚の淚ならはぬるらん袖のゆへもあらしを
もしほくむあまの袖にそ沖津淚心をよせてくたくとはみし
また返し
君にのみわきて心のよる波はあまの磯やに立もとまらす
すゝろくさなりしをついてにてまことしく申わたり
しかとよの常の有さまはすへてあらしとのみ思ひし
かは心つよくてすきしを此思ひのほかなることをはや
いとよくきゝにけりさてそのよしほのめかして
うら山しいかなる風の情にかたくもの煙うちなひきけん
返し
消ぬへき煙の末はうら風に靡きもせすてたゝよふ物を
またおなしことをいひて
哀のみ深くかくへき我をゝきて誰に心をかはすなるらん
返し
人わかす哀をかはすあた人に情しりてもみえしとそ思ふ
まつりの日おなし人
行末を神にかけてもいのる哉葵てふ名をあらましにして
返し
諸かつら其名をかけていのるとも神の心にうけしとそ思ふ
かやうにてなにこともさてあらて返〳〵くやしき事
思ひしころ
こえぬれは悔しかりけり逢坂を何ゆへにかはふみはしめ劔
車をこせつゝ人のもとへゆきなとせしにぬしつよく

定まるへしなときゝしころ。なれぬる枕に硯のみえ
しを引よせてかきつくる

たれか香に思ひうつると忘るなよよな〳〵なれし枕計は

かへりて後見つけたりけるとてやかてあれより

心にも袖にもあまるうつりかを枕にのみや契をくへき

おなしよ床にて郭公をきゝたりしに。ひとりねさめにまたかはらぬこゝろにてすきしを。そのつとめてふみのありしを返事のついてに

諸共にことかたらひし曙にかはらさりつる時鳥かな

返しに我しも思ひいてつるをなとさしもあらしとおほゆるをともをいひて

思ひ出てね覺し床の哀をも行きてつけゝる郭公哉

又しはしをとせて文のこま〳〵と有しを返事になにとやらんいたく心のみたれてたゝみえし橘の一枝つゝみてやりたりしにえこそ心えねとて

昔思ふ匂ひかなにそを車にいれしたくひの身にもあらぬに

返　し

侘つゝはかさねし袖の移りかに思ひよそへて折りし橘

たま久しくて思ひ出たるにたゝやあらましと返々思ひしかと心よはくて行たりしに車よりおるゝをみてよには有けるかと申しゝをきく心地にふと覺し

有けるといふに辛さの勝る哉なしになしつゝすくしつる程

夢にいつも〳〵みえしを心のかよふにはあらしをあやしうこそと申たる返事に

玉葉 通ひける心の程はよを重ねみゆらん夢に思ひあはせよ

返　し

同 けにもその心の程や見えつらん夢にもつらきけしきそつる

人の女をいふ人に五月すきてと契けるを心いられして忍ていりにけりときく人のもとへ人にかはりて

みな月をまてと頼めしわか草を結ひそめぬと聞くは誠か

せんなき事をのみ思ふころ。いかてかゝらすもかなと思へと。かひなきも心うくて

思ひかへす道をしらはや戀の山はやましけ山分いりし身の

いつかたにか經の聲ほのかに聞えたるもいたく世の中しみ〳〵と物かなしくおほえて

まよひ入し戀路くやしき折にしもすゝめかほなる法の聲哉

ちゝおとゝの御もとに熊野へ參りたると聞しを待りてもしはしをとなけれは

忘るとはきくともいかゝ三熊のゝ浦の濱ゆふ恨かさねん

と思ふもいと人わろしひとゝせ難波かたより歸りてはやかてをとつれたりし物をなとおほえて

沖つ波かへれはをとはせし物をいかなる袖のうらによる覧

常に向ひたる方はときは木ともこくらく杜のやうにて空もあきらかにみえぬもなくさむかたなし

眺むへき空もさたかに見えぬまて繁きなけきも悲しかり覺

東は長樂寺の山のうへ見やられたるにしたしかりし人とかくせし山のみねそとはのみゆるも哀なるにながめいたせはやかてかきくらして山もみえす雲のおほひたるもいたくものかなし

詠めいつるそなたの山の梢さへたゝともすれはかき曇る覽

雲のうへもかけはなれその後も猶とき〳〵音信し人をも頼むとしはなけれとさすかにむさしあふみとか

やにてすくるになか〳〵あちきなきことのみまされはあらぬよの心ちして心みんとほかへまかるにほうくともとりしたゝむるにいかならん世までもたゆましきよし返〻いひたるとの葉のはしにかきつけし

新續古　流れてとたのめしかとも水茎のかきたえぬへき跡の悲しさ

宮にさふらふ人の常にいひかはすかさてもその人はこのころはいかにといひたる返事のついてに

雲の上をよそになりにしうき身には吹かふ風の音も聞えす

治承なとのころなりしにやとよのあかりのころ上西門院女房ものみに車二はかりにてまいられたりしとり〳〵にみえしなかに小宰相殿といひし人のひん額のかゝりまてことにめとまりしを年ころ心にかけていひける人のみちもり(通盛)のあそんにとられて歎くときゝしけに思ふもことはりとおほえしかはその人のもとへ

さこそけに君なけくらめ心そめし山の紅葉を人におられて

返し

何かけに人の折けるもみち葉を心うつして思ひそめけん

なと申しゝおりは。たゝあたとことこそ思ひしを。それゆへ底のもくつとまてなりにしあはれのためしならさらまし。かへす〳〵ためしなかりける契の深さもはかなさも。いはんかたなし。大かたの身のやうもつくかたなきにそへて心のうちもいつとなく物のみ悲しくて。なかめしころ秋にもやゝなりぬ風の音はさらぬたに身にしむに。たとへんかたなくなけかれて星合の空みるも物のみあはれなり

つく〳〵と詠めすくして星合の空をかはらすまた詠めつる

西山なる所にすみしころ遙なるほと事しけき身のいとまなさにとつけてやゝ久しくをとつれすかれたる花のありしにふと

とはれぬはいくかそとたに數へぬに花の姿そしらせ顔なる

この花は十日あまりかほとにみえしにおりてもたりし枝をすたれにさしていてにしなりけり

哀にもつらくも物そ思はるゝのかれさりけるよゝの契に

まへなるかきほにくすはひかゝり小篠うちなひくに

山里は玉まく葛のうらみにて小篠か原に秋のはつかせ

月の夜れいの思出すもなくて

俤を心にこめてなかむれは忍かたくもすめる月かな

冬になりて枯野のおきに時雨はしたなくすきてぬれ色のすさましきに春よりさきにしためくみたる若葉のろくしやう色なるかとき〳〵見えたるに露は秋思ひ出てをきわたしたり

霜さゆる枯野の荻の露の色秋のなこりをともに忍ふや

なにとなくねやのさむしろうちはらひつゝ思ふことのみあれは

夕されはあらましことの面影に枕のちりをうち拂ひつゝ

あくかるゝ心は人にそひぬ覽身のうさのみそやる方もなき

宮にさふらひしまさより(雅頼)の中納言の娘そち殿といひしか物いひおかしくにくからぬさましてなにことも申かはしなとせしか秋のころ山里にてゆあむるとて久しくこもりゐられたりしにことのついてに申

つかはす
ましはふくねやの板まにもる月を霜とやはらふ秋のやま里
めつらしくわか思ひやる鹿のねをあくまてきくや秋の山里
いとゝしく露やをきそふかきくらし雨ふるころの秋の山里
羨ましほたきりくへていか計みゆわかすらむ秋の山里
椎ひろふ賤も道にや迷ふらん霧たちこむる秋のやま里
くりもゑみおかしかる覧と思にもいてやゆかしや秋の山里
心さしならは定めて我爲にあるらん物をあきのやま里
このころはかうし橘なりましり木葉もみつや秋の山里
鶉ふす門田のなるこ引なれてかへらまうきや秋のやま里
歸りきてそのみるはかり語らなんゆかしかりつる秋の山里

返しもたはれとのやうなりしをほとへて忘れぬ冬ふかきころわつかに霜かれのきくの中にあたしくさきたる花をおりてゆかりある人のつかさめしになけくをありしかいひをこせたりし

霜かれの下枝にましる菊みれはわか行末もたのもしき哉

と申たる返事に

花といへは移ろふ色もあるときく君か匂ひは久しかるへし

上らふたちて近くみし人のとりわきなかよきやうなりしにわか物申人のこのかみなりしは御ゆかりの上にやかて宮人にてことに常にみし人のしのひて心かはしてかたみに思はぬにしもあらしとみえしかと世のならひにて女かたは物おもはしけなりしをまほならねと心えたりしかはちとけしきしらせまほしくて男の許へつかはす

よそにても契哀にみる人をつらきめみせはいかにうからん

立かへる名殘こそとはいはねとも枕もいかに君をまつらん
おきて行人のなこりやをし明の月影しろし道芝の露

返とあいなのさかしらやさるはかやうのこともつきなき身にはことはもなきをとて

我思ふ人の心ををしはかりなにとさま〱君なけくらん
枕にも人にも心思ひつけてなこりやなにと君そいひなす
あけかたの月を袂にやとしつゝかへさの袖はわれそ露けき

宮のまうのほらせ給御ともして歸りたる人〻物かたりせしほとに火も消ぬれとすひつのうつみ火はかりかきおこしておなし心なるとち四人はかりさま〱の心のうちともかたへは殘さすなといひしかと思ひ〱にしたむせふことはまほにもいひやらぬしも我心にもしられつゝ哀にそおほえし

思ふとちよはの埋火掻おこし闇のうつゝにまとゐをそする
誰もその心の底は數〻にいひいてねともしるくそ有ける

なと思ひつゝくるほとに宮のすけ(重衡)の内の御方の番にさふらひけるとていりきてれいのあたこともまことしきともさま〱おかしきやうにいひて我も人もなのめならすわらひつゝはては恐ろしき物かたりともをしてをとされしかはまめやかにみな汗になりつゝ今はきかし後にといひしかとなを〱いはれしかははては衣をひきかつきてきかしとてねてのち心に思ひし事

あたとにたゝいふ人の物語それたに心まとひぬるかな
鬼をけにみぬたにいたく恐ろしき後の世を社思ひしりぬる

この人もよしなしとをいひてくさのゆかりをなにか

思ひはなつたゝおなしことゝ思へとつねにいはれしかは

玉葉　濡そめし袖たにあるを同しのゝ露をはゐのみいかゝわくへき

とそ思ひしを大かたにはにくからすいひかはしていつまてもかやうにたにあらんといはれしかは

新勅　忘れしの契たかはぬ世なりせは頼みやせまし君か一こと

いへは同しことをのみ返ゝ思ひてあはれ／＼わか心に物を忘れはやとつねは思ふかかひなけれはさる事の有しかとたに思はしと思ひかけてもはたれさり覺なにとなき事を我も人もいひしおり思はぬ物のいひはつしをしてそれをとかくいはれしも後に思へはあはれにかなしくて

なにとなきことの葉ことに耳とめて恨し事も忘られぬ哉

母なりし人の樣かへてうせにしかことに心さし深くと人にもいひをきなとせられし五月のはしめなくなりにし後はよろつ思ふ計りなくてあかしくらしゝに四十九日にもなりてきられたりしきぬ衣なととりいてゝこもり僧にとらせあせう上人にたてまつりなとせしにきぬのしはまてもきられたりしおりにかはらて面影いとゝすゝむ悲しさに

きなれける衣の袖のおりまてもたゝその人をみる心地して

思ひなしもいとゝかなしき事のみ申まさりて

哀てふ人もなき世に殘り居ていかになるへき我身なるらん

高倉院かくれさせ給ぬときゝしころみなれまいらせしよの事かす／＼覺てをよはぬ御ことなから限りなくかなしくなに事もけにするゐの世にあまりたる御ことやなと人の申にも

新續古　雲の上に行末とをく見し月のひかり消ぬと聞くそ悲しき

中宮の御心のうちをしはかりまいらするいかはかりとかなし

かけならへ照日の光かくれつゝひとりや月のかきくらす覽

壽永元暦のころの世のさはきは夢ともまほろしとも哀ともなにともすへて／＼いふへききはにゐなりしかは。よろついかなりしとたにおもひわかれす。なか／＼思ひもいてしとのみそ。いまゝてもおほゆる。見し人／＼の都わかるときゝし秋さまのこと。とかくいひても思ひてもこゝろもことはもをよはれす。まことのきはゝわれも人もかねていつとしる人なかりしかは。たゝいはんかたなき夢とのみそ。ちかくもとをくも見聞く人みなまよはれし。大かたの世さはかしくて心ほそきやうにきこえたりしころなとは藏人頭にて。ことに心のひまなかりしうへ。あたりなりし人も。あいなきことなりなといふこともありて。さらにまた有しよりけにしのひなとして。をのつからとかくためらひてそ物いひなとせしおり／＼も。たゝおほかたのことくさにも。かゝる世のさはきになりぬれは。はかなきかすにたゝいまにてもならんとは。うたかひなき事なり。さらはさすかにつゆはかりの哀はかけてんや。たとひなにと思はすとも。かやうにきこえなれても年月といふはかりにしもなりぬる情にみちのひかりをかならす思ひやれ。もし命たとひいましはしなとありとも。すへていまは心をむか

しの身とおもはしと思ひしたゝめてあるなん。そのゆへは物をあはれともなにのなこり。その人の事なと思ひたちなは。思ふかきりもをよふまし。心よはさもいかなるへしとも身ながらおほえねは。なに事もおもひ捨て人のもとへ。さてもなといひて文やる事なとも。いつこの浦よりもせしと思ひとりたるを。なをさりにてきこえぬにとなおほしそ。よろつたゝいまより身をかへたる身と思ひなりぬるを。猶ともすればもとの心になりぬへきなん。いとくちおしきといひしとの。けにさることゝきゝしも。なにとかいはれん。たゝ涙のほかはことの葉もなかりしを。つゐに秋のはしめつかた夢のうちのゆめをきゝし心地なにかたとへん。さすか心あるかきりこの哀をいひおもはぬ人なけれと。かつみる人ゝもわか心のともは。たれかあらんとおほえしかは。人にもいはれす。つく〳〵と思ひつゝけて。むねにもあまれは。佛にむかひたてまつりて。なきくらすより外のことなし。されとけに命はかきりあるのみにあらす。さまかふる事たにも身を思ふやうに心にまかせて。ひとりはしり出なとは。たえせぬまゝに。さてあらる

ゝ返ゝ心うくて

又例したくひもしらぬ憂事をみても扨あるみそうとましきいはんかたなき心地にて秋ふかく成行けしきにましてたへて有へき心ちもせす月のあかき夜空のけしき雲のたゝすまゐ風のをとことにかなしきをなかめつゝ行衞もなき旅の空いかなる心地ならんとのみかき

くらさる

玉葉 いつこにていかなる事を思ひつゝ今宵の月に袖しほるらん

夜のあけ日のくれなに事をかあらんされはいかにしてかたゆむ事はいかにしてかあらんされはいかにしてかせめては今一たひかく思ふことをもいはんなと思ふもかなふましきかなしさこゝかしことうきたるさまなとつたへきくもすへていはんかたなし

いはゝやと思ふ事のみ多かるもさて空しくやつゐになり南

おそろしきものゝふともいくらもくたるなにかときくにもいかなる事をいつきかんとかなしく心うくなく〳〵ねたる夢につねにみしまゝのなをしすかたにて風のおひたゝしくふく時にいとものおもはしけにうちなかめてあると見てさはく心にやかてさめたる心地いふへきかたなしたゝいまもけにさてやあらんとおもひやられて

波風のあらききさはきに漂ひてさこそはやすき空なかるらめ

あまりさはかしき心地のなこりにや身もぬるみて心地もわひしけれはさらはなくなりなはやとおほゆ

うき上の猶うきはてをきかぬ先に此世の外によしならはなれ

と思へとさもなきつれなさも心うし

あらるへき心地もせぬに猶たへてけふ迄ふるそ悲かりける

かへる年の春ゆかりある人の物まいりすとてさそひしかは何事も物うけれとたうときかたのことなればおもひおこしてまいりぬかへさに梅の花なのめならすおもしろき所あるとて人の立入しかはくせられてゆきたるにまことに世のつねならぬ花のけしきなり

その所のあるしなるひしりの人に物いふをきけはとし〳〵此花をしめゆひてこひ給へし人なくてことしはいたつらにさきちり侍るあはれにといふをたれそととふめれはその人としもたしかなる名をいふにかきみたりかなしき心のうちに

思ふとも心のともに語らはんなれける人を花もしのはゝ

そのころあさましくおそろしくきこえしことゝもにちかくみし人〳〵むなしくなりたるかすおほくてあらぬ姿にてわたさるゝなにかと心うくいはんかたなきことゝもきこえてたれ〳〵なと人のいひしもためしなくて

哀さは是は誠か猶もたゝ夢にやあらんとこそおほゆれ

しけひらの三位中將のうき身になりて都にしはしときゝしころとに〳〵昔ちかゝりし人〳〵のなかにも朝ゆふなれておかしきことをいひ又はかなきことゝも人のためはひんきに心しらひ有なとしてありかたかりしをいかなりけるむくひそと心うし見たる人の御かほはかはらてめもあてられぬなといふか心うくかなしさいはんかたなし

朝夕にみなれすくしゝその昔かゝるへしとは思ひてもみす

返〳〵心のうちをしはかられて

またしなぬ此世のうちに身をかへて何心地してあけ暮す覽

またこれもりの三位中將くま野にて身をなけてとて人のいひあはれかりし。いつれもいまの世をみきくにも。けにすくれたりしなと思ひ出らるゝあたりなれと。きはことにありかたかりしかたちようい誠にむかしいまみるなかに。ためしもなかりしそかし。されはおり〳〵にはめてぬ人やはありし。ほうちう寺とのゝ御賀に青海波まひての折なとは。ひかる源氏のためしもおもひ出らるゝなとこそ人〳〵いひしか。花も匂ひもけにけをされぬへくなと聞えしそかし。そのおり〳〵のおもかけはさることにて。みなれしあはれいつれもといひなから。なをことにおほゆ。おなし事と思へと。おり〳〵はいはれしを。さこそといらへしかは。されとさやはあるといはれし事なと。かす〳〵悲しともいふばかりなし

春の花色によそへし俤のむなしき波のしたにくちぬる

(風雅)悲しくもかゝるうきめをみ熊のゝ浦はの波に身を沈めける

ことにおなしゆかりは思ひとるかたのつよかりけるうき事はさなれとも。此三位中將ときよつね中將と心よくなりぬるなときま〳〵人のいひあつかふにものこりて。いかに心よはくやいとゝおほゆらんなと。さま〳〵思へと。かねていひしことにてや。またなにとか思ふらん。たよりにつけてことの葉一もきかす。たゝ都いてゝの冬わつかなるたよりにつけて申しやうに今は身をかへたると思ふを。たれもさ思ひて後の世をとへとはかり有しかは。たしかなるたよりもしらす。わさとは又かなはて。これよりもゆ(い歟)ふかたなく思ひやらるゝ心のうちをも。えいひやらぬに此ゆかりのくさは。かくのみみなきゝしころ。あたならぬたよりにて。つたふへき事有しかは返〳〵かくまてもきこえしと思へとなといひて

さま〳〵に心亂れてもしほ草かきあつむへき心地たにせす
おなしよと猶思ふ社悲しけれあるかあるにもあらぬ此世に
　此はらからたちのもとなといひて
思ふ事を思ひやるにそ思ひくたく思ひにそへていとゝ悲敷
　なと申たりし返事さすかうれしきよしいひていまは
たゝ身のうへもけふあすのことなれは返〳〵思ひと
ちめぬる心地にてなんまめやかにこのたひはかりそ
　申もすへきとて
思ひたらめ思ひきりても立歸さすかに思ふことそおほかる
今はすへて何の情も哀をもみもせしきゝもせしとこそ思へ
　さきたちぬる人この事いひて
あるほとりあるにもあらぬうちに猶かく憂事をみるそ悲敷
とありしをみし心ちまして又いふかたなし。またの
年春そまことにこの世のほかにきゝはてにしそのほと
のことは。ましてなにとかはいはん。みなかねて思ひし
ことなれと。たゝほれ〳〵とのみおほゆ。あまりに
せきやらぬ涙も。かつはみる人〳〵にもつゝましけ
れは。なにとか人は思ふらめと。心ちのわひしきと
て引かつきて。ねくらしてのみそ心のまゝになきす
くす。いかて物をわすれんと思へと。あやにくに面
影は身にそひ。ことのはことにきく心地して身をせ
めて悲しきこといひつくすへきかたなし。たゝかきり
ある命にて。はかなくなときくをたにこそ悲しき
事にいひおもへ。これはなにをかためしにせんと返
　〳〵おほえて
なへてよのはかなき事を悲しとはかゝる夢みぬ人やいひ劔
　ほとへて人のもとよりさてもこのあはれいかはかり
　といひたれはなへてのことのやうにとおほえて
悲しとも又哀ともよの常にいふへきことにあらは社あらめ
　さてもけふまてなからふる世のならひ心うく。明ぬ
くれぬとしつゝ。さすかにうつし心もましり。物をと
かく思ひつゝくるまゝには。かなしさもなをまさる
心地す。はかなく哀なりける契のほとも我身ひとつ
の事にはあらす。同しゆかりの夢みる人は。しるも
しらぬもさすかおほくこそなれと。さしあたりては
ためしなくのみおほゆ。昔も今もたゝのとかなるか
きりある別こそあれ。かくうきことはいつかはありけ
るとのみおもふさることにて。たゝとかくさすか思ひ
なれにしことのみわすれかたさ。いかて〳〵いまわす
れんとのみ思へと。かなはぬもかなしうて
ためしなくかゝる別に猶とまる面影はかり身にそふそうき
いかて今はかひなき事を歎かすてもの忘れする心にも哉
忘れんと思ひても又立歸なこりなからんことも悲しき
　たゝむねにせき涙にあまる思ひのみなるも何のかひ
そとかなしうて。後の世をはかならす思ひやれとい
ひし物を。さこそそのきはも心あはたゝしかりけめ。
またをのつからのこりて跡とふ人もさすかあるらめ
と。よろつあたりの人も世にかくろへて。なに事も
道ひろからしなと身ひとつのことに思ひなされて悲
しけれは。おもひおこして。ほくえりいたして。れ
うしにすかせて經かき。又さなからうたせて。もし
のみゆるかまはゆけれは。うらに物おしかくして手

つから地藏六たい。すみかきにかきまいらせなと。さま〳〵心さしはかりとふらふも。また人めつゝましけれは。うとき人にもしらせす。心ひとつにいとなむかなしさも猶たへかたし

すくふなか誓ひ頼みてうつしをくかならす六の道導へせよ

なとなく〳〵思ひねんして。あせう上人の御許へ申つけてくやうせさせ奉る。さすか積りにけるほうくなれは。おほくて。そんせうたらになにくれさらぬ事も多くかゝせなとするに。なか〳〵みしと思へと。さすかにみゆる筆の跡ことの葉もかゝらてたに昔の跡は涙のかゝるならひなるを。めもくれ心も消つゝいはんかたなし。そのおりとありし。かゝりしおりわかいひしことのあひしらひなにかとみゆるか。かきかへすやうにおほゆれは。ひとつものこさす。みなさやうにしたゝむるにも。みるもかひなしとかや源氏の物かたりにあることおもひ出らるゝも。なにの心ありてとつれなくおほゆ

悲しさはいとゝもよほす水莖の跡は中〳〵きえねとそ思ふ

か計の思ひにたへてつれもなく猶なからふる玉のをもうし

　夏ふかきころつねにゐたるかたのやりとはたにのかたにてみおろしたれは竹の葉はつよき日によられたるやうにてまことに土さへさけてみゆるよのけしきにもわか袖ひめやとまたかきくらさるゝひくらしはしけき木するゑにかしかましきまて鳴くらすもともなる心地して

ことゝはんなれもや物を思ふらん諸共になく夏の日くらし

なくさむ事もなきまゝには佛にのみむかひ奉るもさすかおさなくより頼みきこえしかとうき身思ひしる事のみありてまたかくためしなきものを思ふもいかなるゆへそと神も佛もうらめしくさへなりて

さりともと頼む佛もめくまねは後の世までを思ふ悲しさ

行衞なく我身もさらはあくかれん跡止むへき浮世ならぬに

　北山のへんによしある所のありしを。はかなくなりにし人のりやうする所にて。花のさかり秋の野へなと見にはつねにかよひしかは。たれもみしおりもありしを。あるひしりの物になりてときゝしを。ゆかりある事有しかは。せめての事にしのひてわたりてみれは。おも影はさきたちて。またかきくらさるゝさまそいふかたなき。みかきつくろはれし庭も淺ちかはらよもきかそまになりて。むくらもこけもしけりつゝ。ありしけしきにもあらぬに。うへしこはきはしけりあひて北南の庭にみたれふしたり。藤はかまうちかほり。ひとむらすゝきもまことに虫のねしけき野へとみえしに。車よせておりしつまとのもとにて。たゝひとりなかむるに。さま〳〵おもひいつることなといふもなか〳〵なり。れいの物もおほえぬやうに。かきみたる心のうちなから

露きえし跡は野原となりはてゝ有しにも似すあれはてにけり

跡をだに形みにみんと思しをさてしもいとゝ悲しさそそふ

　東の庭に柳さくらのおなしたけなるをまぜてあまたうへならへたりしを一年の春もろともにみし事もたゝ今の心ちするに木するゑはかりはさなからあるも心

うくかなしくて

うへてみし人は枯ぬる跡に猶殘る梢をみるも露けし

我身もし存まてあらは尋みん花もその世の事なわすれそ

また物へまかりし道に昔のあとの煙になりにしか。いしすへはかりのこりたるに草ふかくて秋の花ところ〳〵にさき出て露うちこほれつゝ。むしのこゑ〳〵みたれあひてきこゆるも行すくへき心地もせねは。しはしくるまをとゝめてみるも。いつをかきりにかとおほえて

又さらにうき故郷を歸りみて心とゝむる事もはかなし

たゝおなしことをのみはるゝよもなく思ひつゝたえぬ命はさすかにありふるにうきことのみきゝかさぬるさまいふかたなし

定なき世とはいへ共かく計りうきためしこそ又なかりけれ

女院大原におはしますとはかりは。きゝまいらすれと。さるへき人にしられては。まいるへきやうもなかりしを。ふかき心をしるへにて。わりなくたつねまいるに。やう〳〵ちかつくまゝに山みちのけしきより。まつ涙はさきたちて。いふかたなき御いほりのさま御すまゐことからすへてめもみあけられす。昔の御ありさま見まいらせさらんたに大かたのことから。いかゝともなのめならん。まして夢うつゝともいふかたなし。秋ふかきやまおろしちかき梢にひゝきあひて。かけひの水の音つれ鹿のこゑ虫のねいつくものことなれと。ためしなきかなしさなり。都そ春のにしきをたちかさねてし人〻六十よ人有しかと。みわするゝさまにおとろへはてたる。すみ染のすかたにて。わつかに三四人はかりそさふらはるゝ。その人〻にもさてもやとはかりそ我も人もいひ出たりし。むせふ涙におほれて。すへてこともつゝけられす

（風雅）今や夢昔やゆめと迷はれ（たとら集）ていかに思へとうつゝとそなき

あふきみし昔の雲の上の月かゝるみ山の陰そかなしき

花の匂ひ月のひかりにたとへても。ひとかたにはあかさりし御おもかけあらぬかとのみたとらるゝに。かゝる御ことをみなから。なにの思出なき都へされはなにとて歸るらんと。うとましく心うし

山深くとゝめをきぬる我心やかて住へきしるへとをしれ

何事につけても世にたゝなくもならはやとのみおほえて

歎きわひなからましかはと思ふ迄の身そ我乍ら悲しかり鳬

なくさむことはいかにしてかあらんなれはあらぬところ尋かてら遠く思ひたつことあるにもまつおもひいつること有て

歸へき道は心にまかせても旅たつほとはなをあはれ之

都をはいとひても又なこりあるをましてと物を思ひ出つる

心さしの所はひえ坂もとのわたりなり雪はかきくらしふりたるに都ははるかにへたゝりぬる心地してなにの思ひ出にかと心ほそし夜ふくるほとにかりの一つらこのゐたるうへをすくるをとのするもまつあはれとのみきゝてすゝろにしほ〳〵とそなかるゝ

うきかた（事イ）は所からかとのかるれといつくも假の宿と聞ゆる

關一こそこえぬるはいくほとならしを梢にひゝくあ

らしのをとも都よりはことのほかにはけしきに

關こえていく雲井まてへたてねと都には似ぬ山おろし哉

つく／＼とおこなひてたゝ一すしに見し人の後のよとのみいのらるゝにも猶かひなきことのみ思はしとてもまたいかゝはそともを立出てみれは橘の木に雪の深く積りたるをみるにもいつのとしそや大内にて雪のいとたかく積りたりしあしたとのゐすかたのなへはめるなをしにてこの木にふりかゝりたりし雪をさなからおりてもちたりしをなとそれをしもおられけるにかと申しかは我たちならすかたの木なれは契りなつかしくてといひしおりたゝ今とおほえてかなしきこそいふかたなき

立なれしみかきのうちの橘も雪ときえにし人やこふらん

とまつおもひやるこのみる木は葉のみしけりて色もさひし

ことゝはんさ月ならても橘に昔の袖のかは殘るやと

風にしたかひてなるこのをとのするもすゝろにものかなし

有しよにあらす鳴子の音きけは過にしことそいとゝ悲しき

はるかに都のかたをなかむれははる／＼とへたゝりたる雲井にも

我心うきたつまゝに詠むれはいつくを雲のはてともなし

十二月一日ころなりしやらん。夜に入て雨とも雪ともなくうちゝりて。むら雲さはかしく。ひとへにくもりはてぬ物から。むら／＼星うちきえしたり。ひきかつき臥したるきぬをふけぬるほと。うし二はかりにやとおもふほとに。ひきのけて空を見あけたれは。ことにはれてあさき色なるに。ひかりこと／＼しき星のおほきなるか。むらもなくいてたる。なのめならすおもしろく花のかみに。はくをうちゝらしたるによう似たり。こよひはしめてみそめたる心ちす。さき／＼もほし月よ見なれたるをなれと。是はおりからにや。ことなる心地するにつけても。たゝ物のみ覺ゆ

玉葉 月をこそ詠めなれしかほしのよの深き哀をこよひしりぬる

ひよしへまいるに雪はかきくらし。こしのまへいたにこちたく積りて。つやしたるあけほのにゝやとへいつる道すから。すたれをあけたれは。袖にもふところにも。よこ雪にていりて。そてのうへははらへとも。やかてむら／＼こほるか面白にも。なにこともみせはやとおもふ人のなきあはれなり

何事を祈かすへき我袖の氷はとけんかたもあらしを

いたく心ほそきたひのすまゐにともまつ雪きえやらてかつ／＼あまきる空をなかめつゝ

さらてたに降にしことの悲しきに雪かきくらす空はなかめし

夜もすからなかむるにかきくもりまたはれのき一方ならぬ雲のけしきにも

大空ははれも曇りも定なきを身のうき事そいつもかはらぬ

そとものなるこのをとなひもさひしさそふ心地して大かたのよものこすゑ野へのけしきも年のくれなれはみなかれ野にて吹はらひたるなにとなくなこりなきよのけしきも思ひよそへらるゝことおほし

秋すきてなるこは風に殘りけり何のなりこも人のよそなき

わつかなる谷川のこほりはむすひなからさすか心ほそきをとはたえ〲きこゆるにおもふことのみありて

谷川はこの葉とちませ氷れともしたには絶ぬ水の音哉

また夜をこめて都へいつる道はしかのうらなるにいり江にこほりしつゝよせくるなみのかへらぬ心地して雪つもりて見わたしたれは白妙なり

うら山し志賀の浦ちの氷とちかへらぬ波も又かへりなん

海のおもてはふかみとりくろ〲とおそろしけにあれたるにほとなきみわたしのむかひにうるはしきふなちにて空はあなたのはたにひとつにて雲路にこききゆるをふねのよそめに波風あらくなつかしからぬけしきにて木草もなき濱へにたへかたく風はつよきにいかにそ波にいりにし人のかゝるわたりにもあると思ひのほかにきゝたらはいかにすみうきわたりなりともとゝまりこそせめとさへあんせられて

玉葉 戀しのふ人にあふみの海ならはあらき波にも立ましらまし

む月のなかはすくるころ何となく春のけしきうらうらとかすみわたりたるに高倉院の中納言典侍といひし人はまのうちにさふらはるゝかあはんとありしかは昔のことしれる人もなつかしくてその日をまつほとにさしあふことありてとゝまりぬこよひにてあらましと思ふよあれたる家の軒はより月さし入て梅かほりつゝえんなりなかめあかしてつとめて申やる

哀いかにけさはなこりを詠めまし昨日のくれの誠なりせは

返し

思へたゝさそあらましのなこりたに昨日もけふも有明の空

ことなる事なき物かたりを人のするにおもひいてらるゝ事有てすゝろに涙のこほれそめてとゝめかたくなかるれは

玉葉 うき事のいつもそふみは何としも思ひあへても涙おちけり

二月十五日ねはんゑとて人のまいりしに。さそはれてまいりぬ。おこなひうちしておもひつゝくれば。釋迦佛の入滅せさせ給けんおりのこと僧なとのかたるをきくにも。なにもたゝ物の哀のことにおほえて涙とゝめかたくおほゆるも。さほとのことはいつもきゝしかと。此ころきくは。いたくしみ〲とおほえて物かなしく涙のとまらぬも。なからふましきわか世のほとにやと。それはなけかしからすおほゆ

世中の常なきことのためしとて空かくれせし月にそ有ける

殷富門院皇后宮と申しころ。その御方にさふらふ上らふのしるよしありて聞えかはしゝか行あひて。ひくらし物語して歸給ぬるなこり雨うちふりて物あはれゝ。この人もことにわかおもふおなしすちなることをおもふ人なりしかは。なつかしくもあり。さま〲それもこひしくおもひいてられて申やる

いかにせん詠めかねぬる名殘かなさらぬたにこそ雨の夕暮

返し

詠めわふる雨の夕に哀またふりにし事をいひあはせはや

四月廿三日あけはなるゝほとに雨すこしふりたるに東のかたの空に郭公の初音なきわたるめつらしくあ

はれにきくにも

明かたに初音聞つる時鳥しての山路のことをとはゝや

玉葉 あらすなるうき世のはてに時鳥いかて鳴ねのかはらさる覽

五月二日むかしの母のき日なり心地なやましかりしかとてなとあらひて念佛申經よむ法師よひて經よませてちやうもんするにも又こん年のいとなみはえせぬこともやと思ふもさすがあはれにて袖もまたぬれぬ

別にし年月日にはあふことも是はかりやと思ふ悲しさ

やよひの廿日あまりのころ。はかなかりし人の水のあはとなりける日なれば。れいの心ひとつに。とかく思ひいとなむにも。わかなからん後たれかこれほとも思ひやらん。かくおもひしをとて思ひいつへき人もなきかたへかたくかなしくて。しく／＼となくよりほかのことそなき。我身のなくならんよりもこれがおほゆるに

玉葉 いかにせん我後の世はさても猶昔のけふをとふ人もかな

よもの梢も庭のけしきもみなこゝちよけにて。あをみとりなるに。なにとなき小鳥とものさえつる聲／＼も思ふことなけなるにも。まつ涙にかきくらされて

晴わたる空のけしきも鳥のねもうら山しくそ心ゆくめる

つきもせす憂事をのみ思ふ身は晴たる空もかきくらしつゝ

とし／＼七夕に哥よみてまいらせしをおもひいつるはかりせう／＼これもかきつく

七夕のけふは嬉しさつゝむらんあすの袖社かねてしらるれ

鐘のねもやこゑの鳥も心あれな今宵はかりはもの忘れして

契けんゆへはしらねと七夕の年の一夜そなをもとかしき

聲のあやは音はかりして促織露のきぬをや星にかすらん

さま／＼に思ひやりつゝよそなから詠かねぬる星合のそら

天河漕はなれ行船のうちのあかぬ涙の色をしそおもふ

きかはやなふたつの星の物語たらゐの水にうつらましかは

よゝふとも絶んものかは七夕にあさひく糸のなかき契りは

をしなへて草村ことにをく露のいもの葉の霜けふにあふ覽

人かすにけふはかさましから衣涙にくちぬ袂なりせは

ひこ星の行合の空を眺てもまつこともなき我そ悲しき

年をまたぬ袖たにぬれし東雲に思ひこそやれあまの羽衣

哀とや思ひもすると七夕に身のなけきをも愁へつるかな

七夕のいはの枕はこよひこそ涙かゝらぬたえまなるらめ

いく返り行かへるらん七夕のくれいそくまの心つかひは

ひこほしのあひみるけふは何ゆへに鳥のわたらぬ水結ふ覽

哀とや七夕つめも思らん逢瀬もまたぬわか契りをは

七夕にけふやかす覽野へことに亂れをるなるむしのころもは

いとふらん心もしらす七夕に涙の袖を人なみにかす

何事をまつかたるらん彦星の天河原に岩まくらして

七夕のあかぬ別の涙にや雲の衣の露けかるらん

何事もかはりはてぬる世中に契りたかへぬほし合のそら

けふくれは草葉にかくる糸よりも長き契は絶ん物かは

心こそ稀に契し中なれは恨もせしなあはぬたえまを

哀ともかつはみよとて七夕に涙さなからぬきてかしつる

天川けふの逢瀬はよそなれと暮行空を猶もまつかな

うらやまし戀にたへたる星なれや年に一よと契る心は

あひに逢てまたむつ事もつきしよにうたて明行天の戸そうき

打はらふ袖や露けき岩枕苔のちりのみふかくつもりて
曇るさへうれしかるらん彦星の心のうちをおもひこそやれ
よひのまに入ぬる月の影までもあかぬ恨やふかき七夕
七夕の契り歎きし身のはては逢瀬をよそときゝわたりつゝ
なかむれは心もつきて星合の空にみちぬる身のおもひかな
露けさは秋の野へにもまさるらし立わかれ行天のはころも
彦星の思ふ心はよふかくていかに明ぬる天の戸ならん
七夕のあひみる宵の秋風に物思ふ袖の露はらはなん
秋ことに別しころと思出る心のうちを星はみるらん
七夕に心かはしてなけくともかゝる思ひをえしもかたらぬ
世中はみしにもあらすなりぬるにおもかはりせぬ星合の空
かさねても猶や露けき程もなく袖わかるへき天のはころも
思ふ事かけとつきせぬ梶の葉のけふにあひける故をしらはや
よしかさしかゝる浮身の衣手は七夕つめにいまれもそする
かく計かきて手向るうたかたをふたつの星のいかゝみる覧
何となくよはの哀に袖ぬれて詠かねぬる星あひのそら
えそしらぬ忍ふゆへなき彦星も稀に契りてなけく心を
なけきても逢瀬をたのむ天川此わたりこそ悲しかりけれ
かきつけは猶もつゝまし思ひなけく心の内を星よ知らなん
引糸のたゝ一筋にこひ〳〵てこよひ逢せもうらやまれつゝ
類ひなき歎きに沈む人そとて此ことのはを星やいまはん
よしやまた慰めかはせ七夕よかゝる思ひに迷ふこゝろを

このたひはかりもやと思ひてもまたかくかすつもれは

いつまてか七の哥を書つけんしらはやつけよあまつ彦ほし

わかゝりしほとより身をようなきものに思ひとりにしかば只心より外の命のあらるゝたにも。いとはしきにまして人にしらるへきこととは。かけてもおもはさりしを。さるへき人〳〵さりかたくいひはからふことありで。おもひのほかにとしへてのち。また九重のうちをみし身の契りかへす〳〵定めなく。わか心のうちもつれなくすそろはし。藤つほのかたさまなとみるにも。むかしすみなれしとのみ思ひ出られてかなしきに。御しつらひも。よのけしきもかはりたることもなきに。たゝわか心のうちはかり。くだけまさるかなしさ。月のくまなきをなかめて。おほえぬこともなくかきくらさる。昔かろらかなるうへ人なとにて見し人〳〵おも〳〵しき上達部にて。みなあるにも。とそあらまし。かくそあらましなと思ひつゝけられて有しよりもけに。心のうちは。やらんかたもなくかなしきを。なにゝかはにん。高倉院の御氣色にいとようにまいらせさせおはしましたる上の御さまにも。かすならぬ心のうちひとつたへがたく。きしかたこひしく月をみて

今はたゝしゐてわするゝ古を思ひいてよとすめる月かな

五節のころ霜夜の有明に宮の御かたのゐんすいにて白うすやうのこゑなとのきこゆるにもとし〳〵きゝなれし事まつおほえさらんや

霜に沍る白うすやうの聲きけは有し雲ゐそまつおほえける

とにかくに物のみおもひつゝけられて見出したるにまたらなる犬の竹のたいのもとなとしありくか昔内の御かたにおりしが御使なとにまいりたるおり〳〵

よびて袖うちきせなとせしかは見しりてなれむつれ
尾をはたらかしなとせしにいとようおほえたる見る
もすゝろにあはれなり

犬は猶姿もみしにかよひけり人のけしきそ有しにもにぬ

その世の事みし人しりたるをのつからありもやすら
めとかたらふよしもなしたゝ心のうちはかり思ひつ
ゝけらるゝかはるゝかたなくかなしくて

我思ふ心ににたる友もかなそよやとたにもかたりあはせん

五月五日さうふのみこしたかみはしのあたりのきの
けしきもみしよにかはらぬにも

菖蒲ふく軒はもみしにかはらぬにうきねのかゝる袖そ悲敷

人のうれへ申事のあるをさるへき人の申さたするを
きけは後白河院の御時おほせくたされけるなとして
さめやらぬ夢とおもふ人の藏人頭にてかきたりける
とてその名をきくにいかゝあはれのこともなのめな
らん

水の泡と消にし人の名はかりをさすかにとめてきくも悲敷
面影もその名もさらは消もせて聞みることに心まとはす
うかりける夢の契の身をさらてさむるよもなき歎のみする

隆房の中納言のなけくこと有てこもりゐたるもとへ
これはかりは昔のこともをのつからいひなとする人
なれはとふらひ申とて五月五日

つきもせぬうきねは袖にかけなからよその涙を思ひやる哉

返　し

かけなからうきねにつけて思ひやれ菖蒲もしらて暮す心を

大宮入道内大臣うせられたりしころ公經の中納言も
かきこもりて五節なともまいられさりしにしろきう
すやうの色〳〵のくしをかきたるにかきて人のつか
はせしにかはりて

迷ふらん心の闇を歎くかなとよのあかりのさやかなるころ

返しうすにひのうすやうに

かきこもる闇もよそにそ成ぬへき豊の明りにほのめかされて

親宗の中納言うせてのち昔もちかくみし人にて哀な
れは親長のもとへ九月つくるころ申やる空のけしき
もうちしくれてさま〳〵のあはれもことにしのひか
たけれは色なる人の袖のうへもをしはかられて

くらき雨の窓うつ音にねさめして人の思ひを思ひこそやれ
露けさのなけける姿にまかふらん花のうへまて思ひこそやれ
露きえし庭の草原うら枯てしけきなけきを思ひ社やれ
わひしらにましらたになくよるの雨に人の心を思ひ社やれ
君かこと歎き〳〵のはて〳〵はうち詠めつゝ思ひこそやれ
又もこん秋のくれをはおしましなかへらぬ道の別たにこそ

返　し　　親　長

板ひさし時雨はかりは音つれて人め稀なる宿そかなしき
うへ置し主はかれつゝ色〳〵の花咲庭をみるそかなしき
はれまなきうれへの雲にいつとなく涙の雨のふるそ悲しき
秋の庭はらはぬ宿に跡絶て苔のみふかくなるそかなしき
夜もすから歎きあかせる曉にきしの一聲きくそかなしき
くちなしの花色衣ぬきかへてふちの袂になるそかなしき
思ふらんよその歎きも有物をとふ言の葉をみるそかなしき
くれぬとも又も逢へき秋にたに人の別をなすよしもかな

九月の十三夜とはりのまゝにはれたりしに。親長の

ものゝさたなとひまなくして。うちあんしたるけしきもなくて。きとひきそはめ。はかなきものゝはしにかきて。わかき人〳〵大はん所にありし中をかきわけ〳〵。うしろのかたによりて。ふところよりとりいてゝたひたりし

名にしあふよを長月の十日あまり君みよとてや月も沍けき

返しこれも物のはしに

なに高きよを長月の月はよしうき身にみえは曇りもそする

みちむねの宰相中將の。つねにまいりて女官なと尋るも。はるかにえしもふとまいらす。つねに女房にけさんせまほしき。いかゝすへきといはれしかは。此みすのまへにてうちしはふかせ給へ。いつもきゝつけんするよし申せは。まことしからすといはるれは。たゝこゝもとにたちさらて。よるひるさふらふそといひて後。つゆもまたひぬほとにまいりてたゝれにけりときけは。めしつきしていつくへもをいつけとてはしらかす

荻の葉にあらぬみなれは音もせてみるをもみぬと思なるへし

久我へいかれにけるを。やかて尋てふみはさしをきて歸にけるに。さふらひしてをはせけれは。あなかしこ返事とるなとをしへたれは。鳥羽殿のみなみの門まてをひけれと。むはらからたちにかゝりて。やふにけてちからくるまのありけるにまきれぬるといへは。よしとてありし後さるふみ見すとあらかひ。またまいりしかとも。人なきみすのうちは。しるかりしかは。たちにきといへは。またはたらかでみしかども。あまりものさはかしくこそ。たち給しかなといひしろひつゝ。五節のほとにもなりぬ。その後もこのことをのみいひあらそふ人〻あるに。とよのあかりのせちゑの夜さえかへりたる有明に。まいられたりしけしき。いうなりしを。ほとなくはかなくなられにし。あはれさあへなくて。その夜の有明雲のけしきまて。かたみなるよし人〳〵つねに申いつるに

思ひ出る心もけにそつきはつる名殘とゝめし有明の月

なとおもひてもまた

限りありてつくる命はいかゝせん昔の夢そ猶たくひなき

霞と消煙ともなる人は猶はかなき跡をなかめもすらん

思ひ出るそのみそ只例しなきなへてはかなき人をきくにも

建仁三年のとし霜月の廿日あまり幾かの日やらん五條三位俊成入道の九十にみつときかせおはしまして院より賀たまはするにをくり物の法服の裝束のけさに歌をかゝるへしとて師光入道女宮内卿殿に歌はめされて紫の糸にて院のおほすことにてをきてまいらせたりし

新拾　なからへてけさそ（や）嬉しき老の波八千代をかけて君に仕へん　上集

とありしか給はりたらん。人の歌にてや。今すこしよからんと心のうちはかりにおほえしかとも。そのまゝにをくへき事なれは。をきてしを。けさそのそ文字。つかへんのむもしを。やとよとになるへかりけるとて。にわかに其夜になりて。二條殿へきとまいるへきよしおほせことして。範光中納言の車とてあれは。まいりて文字ふたつをきなをして。やかて

賀もゆかしくて。夜もすからさふらひて見しに。昔の事おほえて。いみしく道のめんぼく。なのめならすおほえしかはつとめて入道のもとへ申つかはすとて

新拾　君そ猶今日よりも又數ふへきこゝのかへりの十の行末

返しにかたしけなきめしに候へは。はう／＼まいりて。人目いかはかり見苦しくと思ひしに。かやうによろこひいはれたる。猶昔の事も物のゆへも知ると知らぬとは。まことに同しからすこそとて

同　龜山の（やイ）こゝの返りの千年をも君か御代にてそへ讓るへき

返す／＼うきより外の思出なき身なから。年はつもりていたつらにあかしくらすほとに。思ひ出でらるゝ事どもを。すこしつゝ書つけたるなり。をのつから人のさることやなといふには。いたく思ふまゝのことかはゆくもおほえて。せう／＼をそかきて見せし。是はたゝ我眼ひとつに見んとて書つけたるを後に見て

碎きける思ひの外の悲しさも書あつめてそ更に知らるゝ

老の後。民部卿定家の歌を集むることありとて。書をきたるものやと尋ねられたるにも。人數に思ひ出ていはれたるなさけ。あり難くおほゆるに。いつの名をとか思ふと問はれたる思ひやりの。いみしうおほえて。猶只へたてはてにし昔の事の忘れ難けれは。その世のまゝになと申とて

言の葉のもし世に散らは忍はしき昔の名社とめまほしけれ

返し　民部卿定家

同しくは心とめける古への其名をさらはよゝに殘さん

とありしなん。うれしくおほえし

伊尹一條攝政　義孝少將　行成權大納言
行經參議從三位　伊房中納言太宰帥　定實左京大夫
定信宮內大輔　伊行宮內權大輔一切經官夜鶴抄作　伊經皇后宮亮
行能　建禮門院右京太夫

右京大夫集以古寫本併印本挍合畢

補遺

なき名たつことを歎きけるに人の許より思ひやる袖も露けしと申たりけれは

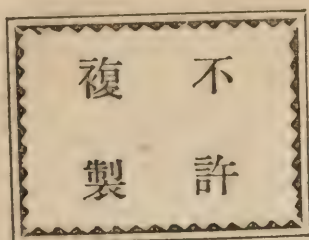
月詣雜下　何か思ふ露けかるらん袂にてわかぬれきぬの程は知るらん

歎く事侍りける頃よみ侍りける

新千載雜中　いささらは行方も知らすあくかれん跡留むれは悲しかり鳬

（第十五輯奥附）

昭和六年十二月二十日印刷
昭和六年十二月廿五日發行
昭和十三年七月二十日再版
昭和十六年十月二十日三版發行

不許複製

發行者　東京市豊島區池袋二丁目一〇〇八
續群書類從完成會代表者
太田藤四郎

印刷者　東京市淀橋區戸塚町一丁目一〇九
永島喜代次郎

印刷所　東京市淀橋區戸塚町一丁目一〇九
新英社印刷所

發行所　東京市豊島區池袋二丁目一〇〇八
續群書類從完成會
振替東京六二六〇七　電話大塚七一一八

配給元　日本出版配給株式會社